

多紀郡西紀町

# 板井寺ヶ谷遺跡

— 旧石器時代の調査 —

近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書XIV-1

考古学編

1991年3月

兵庫県教育委員会

## 例 言

1. 本書は、兵庫県多紀郡西紀町上板井寺ヶ谷坪に所在する、板井寺ヶ谷遺跡の発掘調査報告書（旧石器時代編）である。弥生・古墳時代、中世期の調査の成果は、巻を改めて刊行する予定である。
2. 遺跡の発掘調査は、近畿自動車道舞鶴線建設に伴い、日本道路公団の委託を受け、兵庫県教育委員会が実施した。
3. 本遺跡の呼称は、板井寺ヶ谷遺跡とする。本来統一を計るべきであるが、今までの文献では遺跡名を板井・寺ヶ谷や板井としたものがあり、引用等では混在して表記することがある。
4. 本書は、本編3分冊、別添図から構成されている。第1分冊（考古学的調査編、第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ章）、第2分冊（自然科学編、第Ⅶ章）、第3分冊（図版編）に分けて収録した。本編は、考古学的調査の成果を中心に収録した第1分冊に当たる。
5. 遺物番号は、遺物そのものに記入されたものと同一である。現物との照合は、これによって成すことができる。遺物番号は、出土した区画に、その区画での通し番号が付されたもので、上・下位文化層・遊離資料すべてが固有番号として有している。出土遺物は、兵庫県教育委員会、兵庫県埋蔵文化財調査事務所に保管される。
6. 報文中にしばしば用いられる特殊な用語については、本編・別添図の文・挿図・表中において、注釈無しに以下のような略式表記を行なうことがある。また、別添図および挿図・表中で器種名などを特に断りなく英語表記した部分もある。

石器（定型石器＋加工痕・使用痕有剥片）=TOOLS 石器類（石器＋剥片＋碎片＋石核等）=ARTIFACTS 礫石器類（礫器＋敲石＋磨石＋台石＋局部磨製石斧）=PEBBLE TOOLS サヌカイト=SANUKITE,S チャート=CHERT,C 礫石類=P ナイフ形石器=KN 角錐状石器=Kaku 角錐状石器未成品=Kaku-i 搔器=EN 削器=SC 錐状石器=DR 彫器=GR 楔形石器=P 加工痕有剥片=RF 使用痕有剥片=UF 剥片=F 碎片=C 石核=CORE 斧形石器=AX 原石破砕片=DEB 礫器=CH 敲石=HS 磨石=PS 台石=AN 局部磨製石斧=EGAX 礫ブロック=SB 配石=P 配石群=GP 土壙=PD 炭化物密集部=CC
7. 南北方向の基準線は磁北から東に3度40分傾いている。
8. 遺構の位置は、平面実測図中に発掘区境界杭が存在する場合には、杭を十字印に表示し、杭名を写植で示してある。境界杭がない場合は、遺構近隣の杭からの位置を十字印に付してある。杭からの距離を、近隣杭名・西方向距離・南方向距離の順で読みとることができる。F4-2-1の場合、F4の杭から西に2m、南に1mの場所が十字印の位置となる。
9. 石器類ブロックの名称は、アルファベットを付して識別したが、統廃合の結果、小ブロック単位の表記を持つものがある。また、小ブロックでは、散漫分布の一部に独立番号ではなく、近隣小ブロックの外縁にあることを示す“outside”の略、outを付したものがある。
10. 考古学分野での参考文献は、本文中に著者・発行年度を示し、文献目録は、参考文献も併せて第1分冊巻末に示した。
11. 執筆者については、考古学分野は担当箇所の末尾に（ ）内に付し、自然科学分野は節毎の冒頭に明記した。

12. 前田保夫氏（現山形大学）には、自然科学分野での分析項目の設定、各執筆者へのコーディネートをお願いしたほか、自然科学と考古学との関係で、多くの指導・教示を受けた。
13. 考古学分野は、全体を通して編集し、挿図・表番号は通し番号となっている。特に内容に関わる用語・表記方法については、統一を計ってはいない。
14. 発掘調査時の遺構の写真撮影は、調査員・調査補助員が行った。遺物写真の撮影は、写真家、森昭氏に委託して撮影して頂いた。遺跡遠景の航空写真は、神戸新聞社に提供をお願いした。記して感謝を表す。
15. 発掘調査から報告書作成に至る間、下記の方々ほか、多くの方々からご教示・指導を頂いた。  
Henry de Lumley、Sergei. Astakhov、相田薫、阿部祥人、安斉正人、稲田孝司、岡村道雄、奥村吉信、小田静夫、小林博昭、織笠明、加藤晋平、鈴木義昌、来村多加史、栗島義明、斎野裕彦、佐藤宏之、佐藤良二、鈴木忠司、諏訪間順、千葉寛、早川正一、春成秀爾、平井勝、藤野次史、松沢亜生、松藤和人、山下秀樹、山中一郎
16. 本書の編集は、山口卓也が岸本一宏の指導と援助を受けて行った。
17. 本書の作成は兵庫県埋蔵文化財調査事務所で行なった。

## 執筆者一覧

### 考古学的調査編

第I章	市橋重喜・山口卓也	第V章	
第II章	水口富夫・岸本一宏	第1節	山口・水嶋正稔
第III章	山口	第2節	國井・山口・佐田・久保
第IV章		第3節	山口
第1節	工藤敏久・山口・進藤喜和子	第VI章	山口
第2節	山口・工藤・國井和也・瀧川友子 佐田千織・進藤・久保勝正	英文要旨	山口
第3節	山口・渡辺裕子・細川美千子 河田有子		

### 自然科学編

第VII章			
第1節	竹村恵二・壇原徹	第5節	青木哲哉
第2節	山田治	第6節	野村亮太郎
第3節	大井信夫・南木陸彦・能城修一	第7節	田中真吾
第4節	佐藤裕司	第8節	藁科哲男・東村武信

# 目 次

例言	I
目次	III
挿図目次	VII
表目次	XII
図版目次	XV
別添図目次	XV
第I章 遺跡の立地と環境	
第1節 遺跡の立地と地理的環境	(山口) 1
第2節 歴史的環境	(市橋・山口) 4
第II章 発掘調査の経過	
第1節 近畿自動車道舞鶴線の埋蔵文化財調査	(水口) 9
第2節 調査の経過	(岸本) 11
第III章 層位と遺構・遺物の検出状態	
第1節 土層	(山口) 17
第2節 土層の成因	(山口) 25
第3節 遺構・遺物の検出層準と年代	(山口) 31
第4節 遺跡の遺存と攪乱・破壊深度	(山口) 34
第IV章 下位文化層の調査	
第1節 下位文化層の遺構	35
1. 下層の微地形	(山口) 35
2. 配石・配石群・礫ブロック	(工藤) 39
a. 下層出土礫の検討 39	b. 配石・配石群・礫ブロックの設定 40
c. 配石・配石群・礫ブロックの内容 41	d. 配石・配石群・礫ブロックの検討 56
3. 土壌	(進藤・工藤) 61
a. 土壌の分布 61	b. 土壌の内容 61
c. 土壌の検討 65	
4. 炭化物密集部	(工藤) 74
a. 炭化物の検出 74	b. 炭化物密集部の分布 74
c. 炭化物密集部の内容 75	d. 炭化物密集部の検討 79
5. 小結	(山口) 80

第2節 下位文化層の遺物	84
1、石器	(山口・工藤・進藤・國井・久保・瀧川) 84
a、ナイフ形石器	85
b、局部磨製石斧・斧形石器	92
c、搔器	92
d、削器	101
e、錐状石器	111
f、楔形石器・彫器	111
g、加工痕有剥片	114
h、使用痕有剥片	122
i、底面付着のサヌカイト製使用痕有剥片と剥片	150
j、剥片	151
k、碎片	177
l、石核・石核素材・原石破砕片	177
m、礫石器類	208
2、石材と個別別資料・接合資料	(山口) 220
a、下位文化層の石材	220
b、接合資料と個別別資料の識別	222
c、個別別資料組成	223
d、チャート等製個別別資料の内容	223
e、サヌカイト製接合資料の内容	314
3、剥片剥離技術	(山口) 338
a、サヌカイト	338
b、チャート等	340
4、接合資料・個別別資料と石器類の作業工程遺存状況	(山口) 342
a、サヌカイト製接合資料・石器類の作業工程依存状況	342
b、チャート等製個別別資料の作業工程遺存状況	344
5、小結	(山口) 346
第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布	350
1、微地形と遺構・遺物の分布	(山口) 350
2、遺物の分布	(山口・渡辺・河田・細川) 350
a、石器の分布と同時性	350
b、ブロックの設定	351
c、遺物の分布	391
d、石器類の重量組成と分布	425
3、石器分布における器種間分布関係	(渡辺・山口) 431
a、分析の目的	431
b、操作対象の資料について	432
c、操作手順	432
d、分析	434
e、考察	458
4、接合資料・個別別資料の分布	(山口) 463
a、チャート等製個別別資料	464
b、サヌカイト製接合資料	480
c、チャート製の石器と接合資料の分布	485
d、個別別資料のブロック間共有関係	486
e、単独個体石器の組成と分布	487
5、ブロック間の接合資料・個別別資料の共有関係	(山口) 489
a、接合資料からみた石器類ブロック間の関係	489
石器類ブロック間の関係	489
石器類小ブロック間の関係	493
境界を改変した石器類ブロック間の関係	506
b、個別別資料からみた石器類ブロック間の関係	520
6、ブロック群の評価とユニットの設定	(山口) 523
a、各石器類ブロックを構成する小ブロックの石器組成	523
b、下位文化層の南北構造と同時性	528
c、石器類ブロックの性格とユニットの設定	530
d、ユニット間の関係	533
e、世帯ユニット内での空間配置	535
7、小結	(山口) 546

## 第V章 上位文化層の調査

第1節 上位文化層の遺構	547
1, 上層の層位と微地形・遺構の分布	(山口) 547
a、層位と微地形	547
b、遺構の分布	549
2, 礫群	(山口) 549
a、礫の分布と礫群	549
b、礫群	550
c、礫群の構成礫	553
3, 土壌	(水嶋) 564
4, 小結	(山口) 564
第2節 上位文化層の遺物	565
1, 石器	(山口・國井・久保・佐田) 565
a、角錐状石器	565
b、ナイフ形石器	571
c、搔器	571
d、削器	573
e、楔形石器	576
f、加工痕有剥片	576
g、使用痕有剥片	579
h、剥片	584
i、碎片	589
j、石核	589
k、礫器	589
2, 剥片剥離技術	(山口) 594
a、サマカイト製接合資料と剥片剥離技術・石器製作	594
b、チャート等製個体別資料・接合資料と剥片剥離技術・石器製作	596
c、剥片剥離・石器製作作業遺存状況	596
3, 小結	(國井・山口) 598
第3節 上位文化層の遺構と遺物の分布	(山口) 604
1, 遺構・遺物の分布と同時性	604
2, 石器類ブロックの設定	606
3, 石器類の種類別分布	608
4, 接合資料の分布	611
5, 石器類ブロック別の石器・石器類組成	620
6, ユニットの設定	622
7, 小結	628

## 第VI章 板井寺ヶ谷遺跡をめぐる諸問題

第1節 板井寺ヶ谷遺跡の石器群	(山口) 629
1, 板井寺ヶ谷遺跡の2時期の石器群	629
2, 下位文化層の石器群	630
a、石器群の組成	630
b、剥片剥離技術	631
c、下位文化層の2つの石器群	632
d、石器生産技術体系と石材	632
e、下位文化層の編年的・系統的位置	633
3, 上位文化層の石器群	638
第2節 板井寺ヶ谷遺跡の自然環境	(山口) 639
1, 古地理的背景	639

2, 古植生 .....	641
3, 遺跡の立地点 .....	642
第3節 集落としての板井寺ヶ谷遺跡..... (山口)	646
1, 下位文化層の遺跡構造 .....	646
a、遺物・遺構の分布 646	
b、集落構造 651	
c、集落と古民族学的動態 657	
2, 上位文化層の遺跡構造 .....	669
英文要旨 ITAI-TERAGATANI SITE	
-A Research of The Palaeolithic Campsite	
at Tanba District, Hyogo Prefecture- .....	(山口) 671
引用・参考文献 .....	680

## 挿図目次

第1図	板井寺ヶ谷遺跡位置図	1	第49図	第3土壌完掘実測図	66
第2図	篠山盆地周辺俯瞰地形図	2	第50図	土壌出土礫 石材別出現頻度	67
第3図	調査範囲図	3	第51図	土壌出土礫 赤化・非赤化別出現頻度	68
第4図	周辺遺跡分布図	5	第52図	土壌出土礫 破碎度別出現頻度	69
第5図	周辺地形図	8	第53図	土壌出土礫 石材・赤化・破碎度別出現頻度	70
第6図	調査区域地形図	13	第54図	第4土壌実測図	71
第7図	基本土層柱状図	18	第55図	第5土壌実測図	72
第8図	土層柱状図	19	第56図	第6土壌検出面 炭化物密集部5 および礫ブロック10実測図	73
第9図	尖頭器実測図	20	第57図	第6土壌実測図	73
第10図	土層断面図1	21	第58図	第1炭化物密集部実測図	75
第11図	土層断面図2	22	第59図	第2炭化物密集部実測図	76
第12図	土層断面図3	23	第60図	第3炭化物密集部実測図	77
第13図	土層断面図4	24	第61図	第4炭化物密集部実測図	78
第14図	パネルダイアグラム	26	第62図	下位文化層出土石器類組成比グラフ	84
第15図	中世遺構検出面等高線図	27	第63図	下位文化層 ナイフ形石器実測図1	87
第16図	泥炭I直上・相当面等高線図	28	第64図	下位文化層 ナイフ形石器実測図2	88
第17図	泥炭I分布範囲図	29	第65図	下位文化層 ナイフ形石器実測図3	89
第18図	泥炭II上部分布範囲図	30	第66図	下位文化層 ナイフ形石器実測図4	90
第19図	遺物垂直投影図	32	第67図	ナイフ形石器長幅グラフ	91
第20図	攪乱・破壊深度範囲図	34	第68図	ナイフ形石器重量分布	91
第21図	泥炭III直上・相当面等高線図	36	第69図	ナイフ形石器刃角グラフ	91
第22図	A T層直下の微地形	37	第70図	ナイフ形石器先端角グラフ	92
第23図	泥炭III上部範囲図	37	第71図	下位文化層 局部磨製石斧・斧形石器実測図	93
第24図	泥炭III直上出土埋木実測図	38	第72図	下位文化層 搔器実測図1	95
第25図	A T層の浸透部	39	第73図	下位文化層 搔器実測図2	96
第26図	配石実測図1	42	第74図	下位文化層 搔器実測図3	97
第27図	配石実測図2	43	第75図	下位文化層 搔器実測図4	98
第28図	配石礫 石材・赤化・破碎度別出現頻度	43	第76図	下位文化層 搔器実測図5	99
第29図	配石群実測図1	44	第77図	下位文化層 削器実測図1	102
第30図	配石群実測図2	45	第78図	下位文化層 削器実測図2	103
第31図	配石群実測図3	46	第79図	下位文化層 削器実測図3	104
第32図	配石群出土礫 石材別出現頻度	47	第80図	下位文化層 削器実測図4	105
第33図	配石群出土礫 赤化・非赤化別出現頻度	48	第81図	下位文化層 削器実測図5	106
第34図	配石群出土礫 破碎度別出現頻度	49	第82図	下位文化層 削器実測図6	107
第35図	礫ブロック実測図1	51	第83図	下位文化層 削器実測図7	108
第36図	礫ブロック実測図2	52	第84図	下位文化層 削器実測図8	109
第37図	礫ブロック実測図3	53	第85図	下位文化層 削器実測図9	110
第38図	礫ブロック実測図4	54	第86図	削器加工部位別刃部角	110
第39図	礫ブロック出土礫 石材別出現頻度	55	第87図	下位文化層 彫器・錐状石器・楔形石器 実測図1	112
第40図	礫ブロック出土礫 赤化・非赤化別出現頻度	55	第88図	下位文化層 彫器・錐状石器・楔形石器 実測図2	113
第41図	礫ブロック出土礫 破碎度別出現頻度	55	第89図	下位文化層 加工痕有剥片実測図1	116
第42図	下位文化層出土礫 石材別出現頻度	57	第90図	下位文化層 加工痕有剥片実測図2	117
第43図	下位文化層出土礫 赤化・破碎度別出現頻度	58	第91図	下位文化層 加工痕有剥片実測図3	118
第44図	第1土壌実測図	62	第92図	下位文化層 加工痕有剥片実測図4	119
第45図	第1土壌完掘実測図	63	第93図	下位文化層 加工痕有剥片実測図5	120
第46図	第2土壌実測図	64	第94図	下位文化層 加工痕有剥片実測図6	121
第47図	第2土壌完掘実測図	64			
第48図	第3土壌実測図	65			



第95図	下位文化層	使用痕有剥片実測図 1	—123	第144図	下位文化層	剥片実測図21	—173
第96図	下位文化層	使用痕有剥片実測図 2	—124	第145図	下位文化層	剥片実測図22	—174
第97図	下位文化層	使用痕有剥片実測図 3	—125	第146図	下位文化層	剥片実測図23	—175
第98図	下位文化層	使用痕有剥片実測図 4	—126	第147図	下位文化層	剥片実測図24	—176
第99図	下位文化層	使用痕有剥片実測図 5	—127	第148図	下位文化層	石核実測図 1	—180
第100図	下位文化層	使用痕有剥片実測図 6	—128	第149図	下位文化層	石核実測図 2	—181
第101図	下位文化層	使用痕有剥片実測図 7	—129	第150図	下位文化層	石核実測図 3	—182
第102図	下位文化層	使用痕有剥片実測図 8	—130	第151図	下位文化層	石核実測図 4	—183
第103図	下位文化層	使用痕有剥片実測図 9	—131	第152図	下位文化層	石核実測図 5	—184
第104図	下位文化層	使用痕有剥片実測図10	—132	第153図	下位文化層	石核実測図 6	—185
第105図	下位文化層	使用痕有剥片実測図11	—133	第154図	下位文化層	石核実測図 7	—186
第106図	下位文化層	使用痕有剥片実測図12	—134	第155図	下位文化層	石核実測図 8	—187
第107図	下位文化層	使用痕有剥片実測図13	—135	第156図	下位文化層	石核実測図 9	—188
第108図	下位文化層	使用痕有剥片実測図14	—136	第157図	下位文化層	石核実測図10	—190
第109図	下位文化層	使用痕有剥片実測図15	—137	第158図	下位文化層	石核実測図11	—191
第110図	下位文化層	使用痕有剥片実測図16	—138	第159図	下位文化層	石核実測図12	—192
第111図	下位文化層	使用痕有剥片実測図17	—139	第160図	下位文化層	石核実測図13	—193
第112図	下位文化層	使用痕有剥片実測図18	—140	第161図	下位文化層	石核実測図14	—194
第113図	下位文化層	使用痕有剥片実測図19	—141	第162図	下位文化層	石核実測図15	—195
第114図	下位文化層	使用痕有剥片実測図20	—142	第163図	下位文化層	石核実測図16	—196
第115図	下位文化層	使用痕有剥片実測図21	—143	第164図	下位文化層	石核実測図17	—197
第116図	下位文化層	使用痕有剥片実測図22	—144	第165図	下位文化層	石核実測図18	—198
第117図	使用痕有剥片長幅比		—145	第166図	下位文化層	石核実測図19	—199
第118図	使用痕有剥片重量分布図		—146	第167図	下位文化層	石核実測図20	—200
第119図	使用痕有剥片形態別剝離角		—147	第168図	下位文化層	石核実測図21	—201
第120図	使用痕有剥片			第169図	下位文化層	石核実測図22	—202
	形態別・部位別刃部角		—148	第170図	下位文化層	石核実測図23	—203
第121図	底面付着剥片・使用痕有剥片			第171図	下位文化層	石核実測図24	—204
	部位別刃部角・剝離角		—149	第172図	下位文化層	石核実測図25	—205
第122図	底面付着剥片・使用痕有剥片			第173図	下位文化層	石核実測図26	—206
	長幅比		—152	第174図	石核重量分布グラフ		—207
第123図	底面付着剥片・使用痕有剥片			第175図	石核打面角分布グラフ		—207
	重量分布		—152	第176図	下位文化層	礫石器類実測図 1	—209
第124図	下位文化層	剥片実測図 1	—153	第177図	下位文化層	礫石器類実測図 2	—210
第125図	下位文化層	剥片実測図 2	—154	第178図	下位文化層	礫石器類実測図 3	—211
第126図	下位文化層	剥片実測図 3	—155	第179図	下位文化層	礫石器類実測図 4	—212
第127図	下位文化層	剥片実測図 4	—156	第180図	下位文化層	礫石器類実測図 5	—213
第128図	下位文化層	剥片実測図 5	—157	第181図	下位文化層	礫石器類実測図 6	—214
第129図	下位文化層	剥片実測図 6	—158	第182図	個体別資料No.1 実測図		—237
第130図	下位文化層	剥片実測図 7	—159	第183図	個体別資料No.2 実測図 1		—238
第131図	下位文化層	剥片実測図 8	—160	第184図	個体別資料No.2 実測図 2		—239
第132図	下位文化層	剥片実測図 9	—161	第185図	個体別資料No.3 実測図		—241
第133図	下位文化層	剥片実測図10	—162	第186図	個体別資料No.5 実測図		—242
第134図	下位文化層	剥片実測図11	—163	第187図	個体別資料No.13 実測図		—242
第135図	下位文化層	剥片実測図12	—164	第188図	個体別資料No.18 実測図		—243
第136図	下位文化層	剥片実測図13	—165	第189図	個体別資料No.20 実測図		—243
第137図	下位文化層	剥片実測図14	—166	第190図	個体別資料No.21 実測図		—245
第138図	下位文化層	剥片実測図15	—167	第191図	個体別資料No.22 実測図		—246
第139図	下位文化層	剥片実測図16	—168	第192図	個体別資料No.23 実測図 1		—247
第140図	下位文化層	剥片実測図17	—169	第193図	個体別資料No.23 実測図 2		—248
第141図	下位文化層	剥片実測図18	—170	第194図	個体別資料No.24 実測図 1		—249
第142図	下位文化層	剥片実測図19	—171	第195図	個体別資料No.24 実測図 2		—250
第143図	下位文化層	剥片実測図20	—172	第196図	個体別資料No.24 実測図 3		—251

第197図	個体別資料No.24実測図 4	252	第250図	個体別資料No.130実測図	302
第198図	個体別資料No.24実測図 5	253	第251図	個体別資料No.131実測図 1	303
第199図	個体別資料No.37実測図	254	第252図	個体別資料No.131実測図 2	304
第200図	個体別資料No.39実測図	255	第253図	個体別資料No.131実測図 3	305
第201図	個体別資料No.40実測図	256	第254図	個体別資料No.131実測図 4	306
第202図	個体別資料No.41実測図	256	第255図	個体別資料No.132実測図 1	307
第203図	個体別資料No.44実測図	258	第256図	個体別資料No.132実測図 2	308
第204図	個体別資料No.45実測図 1	259	第257図	個体別資料No.132実測図 3	309
第205図	個体別資料No.45実測図 2	260	第258図	個体別資料No.133実測図 1	310
第206図	個体別資料No.48実測図	261	第259図	個体別資料No.133実測図 2	311
第207図	個体別資料No.52実測図	261	第260図	個体別資料No.135実測図 1	311
第208図	個体別資料No.57実測図	263	第261図	個体別資料No.135実測図 2	312
第209図	個体別資料No.59実測図 1	264	第262図	個体別資料No.136実測図	313
第210図	個体別資料No.59実測図 2	265	第263図	接合資料(サヌカイト)実測図 1	316
第211図	個体別資料No.60実測図	267	第264図	接合資料(サヌカイト)実測図 2	316
第212図	個体別資料No.61実測図 1	268	第265図	接合資料(サヌカイト)実測図 3	317
第213図	個体別資料No.61実測図 2	269	第266図	接合資料(サヌカイト)実測図 4	317
第214図	個体別資料No.62実測図 1	270	第267図	接合資料(サヌカイト)実測図 5	318
第215図	個体別資料No.62実測図 2	271	第268図	接合資料(サヌカイト)実測図 6	318
第216図	個体別資料No.70実測図	272	第269図	接合資料(サヌカイト)実測図 7	320
第217図	個体別資料No.71実測図	272	第270図	接合資料(サヌカイト)実測図 8	320
第218図	個体別資料No.72実測図	272	第271図	接合資料(サヌカイト)実測図 9	321
第219図	個体別資料No.83実測図	273	第272図	接合資料(サヌカイト)実測図10	322
第220図	個体別資料No.88実測図 1	275	第273図	接合資料(サヌカイト)実測図11	323
第221図	個体別資料No.88実測図 2	276	第274図	接合資料(サヌカイト)実測図12	324
第222図	個体別資料No.88実測図 3	277	第275図	接合資料(サヌカイト)実測図13	325
第223図	個体別資料No.89実測図	278	第276図	接合資料(サヌカイト)実測図14	327
第224図	個体別資料No.92実測図	279	第277図	接合資料(サヌカイト)実測図15	328
第225図	個体別資料No.96実測図	280	第278図	接合資料(サヌカイト)実測図16	329
第226図	個体別資料No.97実測図 1	281	第279図	接合資料(サヌカイト)実測図17	331
第227図	個体別資料No.97実測図 2	282	第280図	接合資料(サヌカイト)実測図18	332
第228図	個体別資料No.97実測図 3	283	第281図	接合資料(サヌカイト)実測図19	333
第229図	個体別資料No.97実測図 4	284	第282図	接合資料(サヌカイト)実測図20	334
第230図	個体別資料No.98実測図	284	第283図	接合資料(サヌカイト)実測図21	335
第231図	個体別資料No.99実測図	285	第284図	接合資料(サヌカイト)実測図22	336
第232図	個体別資料No.100実測図 1	286	第285図	接合資料(サヌカイト)実測図23	337
第233図	個体別資料No.100実測図 2	287	第286図	サヌカイトとチャート等の 器種別占有率	347
第234図	個体別資料No.100実測図 3	288	第287図	石器類重量占有率	348
第235図	個体別資料No.101実測図	288	第288図	下位文化層石器類垂直投影位置図	352
第236図	個体別資料No.103実測図	289	第289図	下位文化層遺物垂直投影図 1	353
第237図	個体別資料No.106実測図 1	290	第290図	下位文化層遺物垂直投影図 2	353
第238図	個体別資料No.106実測図 2	291	第291図	下位文化層遺物垂直投影図 3	354
第239図	個体別資料No.106実測図 3	292	第292図	下位文化層遺物垂直投影図 4	354
第240図	個体別資料No.106実測図 4	293	第293図	Aブロック礫出土状況	357
第241図	個体別資料No.106実測図 5	294	第294図	Bブロック礫出土状況	357
第242図	個体別資料No.110実測図 1	295	第295図	Aブロック石器類組成グラフ	358
第243図	個体別資料No.110実測図 2	296	第296図	Bブロック石器類組成グラフ	358
第244図	個体別資料No.111実測図	297	第297図	Cブロック礫出土状況	359
第245図	個体別資料No.117実測図	297	第298図	Dブロック礫出土状況	359
第246図	個体別資料No.118実測図	299	第299図	Cブロック石器類組成グラフ	360
第247図	個体別資料No.119実測図	299	第300図	Dブロック石器類組成グラフ	360
第248図	個体別資料No.127実測図 1	300	第301図	Eブロック礫出土状況	362
第249図	個体別資料No.127実測図 2	301			

第302図	Fブロック礫出土状況	362	礫石器類分布	418	
第303図	E a ブロック石器類組成グラフ	363	第348図	地形の傾き	419
第304図	E b ブロック石器類組成グラフ	363	第349図	石器類の石材別分布状況	420
第305図	Fブロック石器類組成グラフ	364	第350図	石器類の石材別分布状況	
第306図	Gブロック石器類組成グラフ	364		主分布域	422
第307図	Gブロック礫出土状況	365	第351図	石器類のブロック別分布状況	422
第308図	Hブロック礫出土状況	365	第352図	礫石の分布状況	422
第309図	Hブロック石器類組成グラフ	366	第353図	ブロック別出土石器類	
第310図	Iブロック石器類組成グラフ	366		重量平均グラフ1	426
第311図	Iブロック礫出土状況	367	第354図	ブロック別出土石器類	
第312図	Jブロック礫出土状況	368		重量平均グラフ2	426
第313図	J a ブロック石器類組成グラフ	369	第355図	石器類器種石材別重量占有率グラフ	428
第314図	J b ブロック石器類組成グラフ	369	第356図	ブロック別石器類重量占有率グラフ	429
第315図	Kブロック礫出土状況	370	第357図	石器分布模式図	433
第316図	Kブロック石器類組成グラフ	370	第358図	石器器種間相互強度樹状図	440
第317図	B+C 2・3ブロック		第359図	石器器種間相互強度図	441
	石器類組成グラフ	371	第360図	チャート等製石器	
第318図	D+C 1・1 outブロック			器種間相互強度樹状図	442
	石器類組成グラフ	371	第361図	チャート等製石器器種間相互強度図	443
第319図	ブロック別離水距離グラフ	376	第362図	サヌカイト製石器器種間	
第320図	北群石器類組成グラフ	378		相互強度樹状図	444
第321図	南群石器類組成グラフ	378	第363図	サヌカイト製石器器種間相互強度図	445
第322図	石器累積グラフ1 a	380	第364図	石材別石器器種間相互強度樹状図	446
第323図	石器累積グラフ1 b	380	第365図	石材別石器器種間相互強度図	447
第324図	石器累積グラフ2 a	381	第366図	石器器種間強度図1	450
第325図	石器累積グラフ2 b	381	第367図	石器器種間強度図2	451
第326図	石器累積グラフ3 a	382	第368図	北群石器器種間相互強度樹状図	452
第327図	石器累積グラフ3 b	382	第369図	北群石器器種間相互強度図	453
第328図	ナイフ形石器ブロック間分布グラフ	392	第370図	南群石器器種間相互強度樹状図	455
第329図	搔器ブロック間分布グラフ	393	第371図	南群石器器種間相互強度図	455
第330図	削器ブロック間分布グラフ	393	第372図	北群サヌカイト製石器器種間	
第331図	加工痕有剥片ブロック間分布グラフ	395		相互強度樹状図	456
第332図	使用痕有剥片ブロック間分布グラフ	395	第373図	北群サヌカイト製石器器種間	
第333図	剥片ブロック間分布グラフ	397		相互強度図	456
第334図	碎片ブロック間分布グラフ	397	第374図	南群サヌカイト製石器器種間	
第335図	石核ブロック間分布グラフ	399		相互強度樹状図	457
第336図	石器類器種別分布グラフ	401	第375図	南群サヌカイト製石器器種間	
第337図	全石器類ブロック間分布グラフ	402		相互強度図	457
第338図	石器ブロック間分布グラフ	402	第376図	石器クラスター別組成	459
第339図	ゾーン別占有率相関グラフ1	411	第377図	個別別資料No.1分布図	464
第340図	ゾーン別占有率相関グラフ2	412	第378図	個別別資料No.2分布図	464
第341図	小ブロック ゾーン別		第379図	個別別資料No.3分布図	464
	占有率相関グラフ1	413	第380図	個別別資料No.23分布図	466
第342図	小ブロック ゾーン別		第381図	個別別資料No.24分布図	467
	占有率相関グラフ2	414	第382図	個別別資料No.45分布図	468
第343図	ゾーン別礫占有率	415	第383図	個別別資料No.59分布図	469
第344図	ゾーン別礫占有率		第384図	個別別資料No.61分布図	469
	ブロックゾーン	416	第385図	個別別資料No.62分布図	470
第345図	ゾーン別礫占有率		第386図	個別別資料No.88分布図	471
	小ブロックゾーン	416	第387図	個別別資料No.89分布図	472
第346図	配石・配石群・礫ブロックと		第388図	個別別資料No.97分布図	473
	石器分布	418	第389図	個別別資料No.100分布図	474・475
第347図	配石・配石群・礫ブロックと		第390図	個別別資料No.106分布図	476

第391図	個体別資料No.110分布図	477	第424図	小ブロック別石器累積グラフ2	526
第392図	個体別資料No.111分布図	478	第425図	Aブロック遺物傾向面図	536
第393図	個体別資料No.131分布図	479	第426図	Aブロック定型的石器分布図	536
第394図	個体別資料No.132分布図	480	第427図	Aブロック加工痕 ・使用痕有剥片分布図	537
第395図	個体別資料No.133分布図	481	第428図	Aブロック石核分布図	537
第396図	サヌカイト製接合資料分布図1	482	第429図	Aブロック接合資料分布図	538
第397図	サヌカイト製接合資料分布図2	482	第430図	Aブロック配石・礫分布図	538
第398図	サヌカイト製接合資料分布図3	483	第431図	Aブロック空間配置概念図	539
第399図	サヌカイト製接合資料分布図4	484	第432図	B+C2・3ブロック遺物傾向面図	540
第400図	サヌカイト製接合資料分布図5	484	第433図	B+C2・3ブロック 定型的石器分布図	542
第401図	ブロック間接合資料 共有関係図(修正前)	490	第434図	B+C2・3ブロック 加工痕・使用痕有剥片分布図	542
第402図	ブロック間接合資料 相互強度図(修正前)	491	第435図	B+C2・3ブロック石核分布図	543
第403図	北群小ブロック間 接合資料共有関係図	494	第436図	B+C2・3ブロック接合資料分布図	543
第404図	北群サヌカイト小ブロック間 接合資料共有関係図	495	第437図	B+C2・3ブロック配石・礫分布図	544
第405図	北群チャート等小ブロック間 接合資料共有関係図	496	第438図	B+C2・3ブロック 空間配置概念図	544
第406図	北群小ブロック間 接合資料相互強度図	497	第439図	泥炭II下部分布範囲	547
第407図	北群サヌカイト小ブロック間 接合資料相互強度図	498	第440図	泥炭II上部・相当面等高線図	548
第408図	北群チャート等小ブロック間 接合資料相互強度図	499	第441図	泥炭II下部出土埋木実測図	549
第409図	南群小ブロック間 接合資料共有関係図	507	第442図	礫群配置図	551
第410図	南群サヌカイト小ブロック間 接合資料共有関係図	507	第443図	礫接合状況図	552
第411図	南群チャート等小ブロック間 接合資料共有関係図	508	第444図	礫群A1実測図	554
第412図	南群小ブロック間 接合資料相互強度図	508	第445図	礫群A2・3実測図	555
第413図	南群サヌカイト小ブロック間 接合資料相互強度図	509	第446図	礫群B1a実測図	555
第414図	南群チャート等小ブロック間 接合資料相互強度図	509	第447図	礫群B1b実測図	555
第415図	ブロック間接合資料共有関係図	513	第448図	礫群B2実測図	556
第416図	ブロック間サヌカイト接合資料 共有関係図	514	第449図	礫群C1a実測図	557
第417図	ブロック間チャート等接合資料 共有関係図	515	第450図	礫群C1b・C2・C4実測図	558
第418図	ブロック間接合資料相互強度図	516	第451図	礫群C3実測図	559
第419図	ブロック間サヌカイト接合資料 相互強度図	517	第452図	礫群C5実測図	559
第420図	ブロック間チャート等接合資料 相互強度図	518	第453図	上位文化層礫群群別石材組成	560
第421図	ブロック間個体別資料 共有関係図(修正前)	519	第454図	上位文化層礫群石材組成1	561
第422図	ブロック間個体別資料 共有関係図(修正後)	520	第455図	上位文化層礫群石材組成2	562
第423図	小ブロック別石器累積グラフ1	523	第456図	上位文化層礫 赤化・破砕度重量分布	563
			第457図	土壌実測図	564
			第458図	上位文化層 角錐状石器実測図	567
			第459図	上位文化層 角錐状石器 ・ナイフ形石器実測図	568
			第460図	上位文化層 角錐状石器 未製品実測図	569
			第461図	上位文化層 角錐状石器 ・未製品接合図	569
			第462図	上位文化層 角錐状石器計測値	570
			第463図	上位文化層 搔器実測図	572
			第464図	上位文化層削器 加工部位別刃部角	573
			第465図	上位文化層 削器実測図1	574
			第466図	上位文化層 削器実測図2	575
			第467図	上位文化層 楔形石器実測図	576

第468図	上位文化層 加工痕有剥片実測図1	—577
第469図	上位文化層 加工痕有剥片実測図2	—578
第470図	加工痕有剥片長幅比	—579
第471図	加工痕有剥片計測グラフ	—579
第472図	上位文化層 使用痕有剥片実測図1	—580
第473図	上位文化層 使用痕有剥片実測図2	—581
第474図	使用痕有剥片長幅比	—581
第475図	上位文化層 使用痕有剥片実測図3	—582
第476図	上位文化層 使用痕有剥片実測図4	—583
第477図	使用痕有剥片計測グラフ	—584
第478図	上位文化層 剥片実測図1	—585
第479図	上位文化層 剥片実測図2	—586
第480図	上位文化層 剥片実測図3	—587
第481図	上位文化層 剥片実測図4	—588
第482図	上位文化層 剥片実測図5	—589
第483図	上位文化層 剥片実測図6	—590
第484図	上位文化層 石核実測図1	—591
第485図	上位文化層 石核実測図2	—592
第486図	上位文化層 石核実測図3	—593
第487図	上位文化層 礫器実測図	—594
第488図	上位文化層 接合資料実測図1	—595
第489図	上位文化層 接合資料実測図2	—597
第490図	上位文化層 接合資料実測図3	—598
第491図	上層遺物垂直投影図	—604
第492図	上位文化層遺物分布図	—605
第493図	上位文化層ブロック範囲図	—607
第494図	上位文化層石器種類	
	石器類ブロック間分布比	—609
第495図	角錐状石器・ナイフ形石器 ・楔形石器・礫器分布図	—612
第496図	搔器・削器分布図	—613
第497図	加工痕有剥片分布図	—614
第498図	使用痕有剥片分布図	—615
第499図	剥片分布図	—616
第500図	碎片分布図	—617
第501図	石核分布図	—618
第502図	チャート等製単独石器分布図	—619
第503図	上位文化層 石器類ブロック石器組成比	—621
第504図	上位文化層 石器類ブロック石器類組成比	—622
第505図	サヌカイト製接合資料分布図	—623
第506図	チャート等製接合資料分布図	—624
第507図	周辺地形ゾーン図	—643
第508図	周辺環境推定図	—644
第509図	遺跡北方の視界と景観	—645
第510図	遺跡南方の視界と景観	—645
第511図	下位文化層ユニット配置俯瞰図	—655
第512図	西南日本の遺跡分布と サヌカイト原産地	—665
第513図	板井寺ヶ谷遺跡 下位文化層の集落景観推定図	—666
第514図	上位文化層ユニット配置俯瞰図	—669

## 表 目 次

第1表	近畿自動車道舞鶴線 遺跡一覧表	—10
第2表	整理作業工程表	—16
第3表	下位文化層出土石器類組成表	—84
第4表	ナイフ形石器の形態と素材	—92
第5表	削器石材別加工部位	—111
第6表	加工部位別調整剝離方向	—111
第7表	下位文化層石器一覧表	—215
第8表	チャート等製石器類・礫石器類 石材内容組成表	—221
第9表	サヌカイトB類一覧表	—222
第10表	器種別接合数	—222
第11表	個別別資料組成表	—224
第12表	単独個体石器組成表	—225
第13表	礫石器類・単独個体石器一覧表	—225
第14表	非識別資料組成表	—225
第15表	非識別資料ブロック別組成表	—225
第16表	個別別資料遺物番号一覧表	—226
第17表	サヌカイト製接合資料一覧表	—315
第18表	サヌカイト剥片剝離作業 工程遺存状況	—343
第19表	チャート等剥片剝離作業 工程遺存状況	—344
第20表	石器類ブロック別遺物集積度一覧表	—373
第21表	石器類ブロックの遺物平均座標	—375
第22表	石器類ブロックの石器・石器類・石材組成 —	—383
第23表	下位文化層全石器類ブロックの組成	—384
第24表	下位文化層全石器類 ブロックの組成比率	—384
第25表	下位文化層サヌカイト製石器類 ブロックの組成	—385
第26表	下位文化層サヌカイト製石器類 ブロックの組成比率	—385
第27表	下位文化層チャート等製石器類 ブロックの組成	—386
第28表	下位文化層チャート等製石器類 ブロックの組成比率	—386
第29表	下位文化層全石器類 (B資料) ブロックの組成	—387
第30表	下位文化層サヌカイト製石器類 (B資料) ブロックの組成	—387
第31表	下位文化層チャート等製石器類 (B資料) ブロックの組成	—387
第32表	下位文化層全石器類 小ブロックの組成	—388
第33表	下位文化層サヌカイト製石器類	

	小ブロックの組成	389	第62表	下位文化層北群小ブロック間接合資料による相互強度(全石器類)	503
第34表	下位文化層チャート等製石器類		第63表	下位文化層北群小ブロック間接合資料による相互強度(サヌカイト製石器類)	504
	小ブロックの組成	390	第64表	下位文化層北群小ブロック間接合資料による相互強度(チャート等製石器類)	505
第35表	下位文化層全石器種類別		第65表	下位文化層南群小ブロック間接合資料による共有関係(全石器類)	510
	ブロック間分布表	403	第66表	下位文化層南群小ブロック間接合資料による共有関係(サヌカイト製石器類)	510
第36表	下位文化層サヌカイト製石器類		第67表	下位文化層南群小ブロック間接合資料による共有関係(チャート等製石器類)	510
	種類別ブロック間分布表	404	第68表	下位文化層南群小ブロック間接合資料による相互強度(全石器類)	511
第37表	下位文化層チャート等製石器類		第69表	下位文化層南群小ブロック間接合資料による相互強度(サヌカイト製石器類)	511
	種類別ブロック間分布表	405	第70表	下位文化層南群小ブロック間接合資料による相互強度(チャート等製石器類)	511
第38表	受熱石器類一覧表	424	第71表	下位文化層ブロック間接合資料による共有関係(全石器類)	513
第39表	下位文化層石器類重量分布表	430	第72表	下位文化層ブロック間接合資料による共有関係(サヌカイト製石器類)	514
第40表	下位文化層石器分布密度一覧表	433	第73表	下位文化層ブロック間接合資料による共有関係(チャート等製石器類)	515
第41表	下位文化層全石器器種間共伴数	434	第74表	下位文化層ブロック間接合資料による相互強度(全石器類)	516
第42表	下位文化層チャート等製石器		第75表	下位文化層ブロック間接合資料による相互強度(サヌカイト製石器類)	517
	器種間共伴数	434	第76表	下位文化層ブロック間接合資料による相互強度(チャート等製石器類)	518
第43表	下位文化層サヌカイト製石器		第77表	下位文化層ブロック間個別別資料による共有関係(チャート等製石器類)	521
	器種間共伴数	434	第78表	下位文化層小ブロック間個別別資料による共有関係(チャート等製石器類)	521・522
第44表	下位文化層全石器器種間相互強度	435	第79表	個別別資料小ブロック別分布範囲表	524
第45表	下位文化層チャート等製石器		第80表	第3土壌上の石器組成	545
	器種間相互強度	435	第81表	上位文化層礫石の完形度	553
第46表	下位文化層サヌカイト製石器		第82表	上位文化層礫石の受熱・赤化	553
	器種間相互強度	436	第83表	上位文化層石器類組成表	565
第47表	下位文化層石材別石器器種間共伴数	436	第84表	上位文化層の削器素材剥片の打面	576
第48表	下位文化層石材別石器器種間相互強度	437	第85表	上位文化層の削器加工部位	576
第49表	下位文化層北群全石器器種間相互強度	437	第86表	上位文化層の削器加工部位	
第50表	下位文化層北群全石器器種間共伴数	438		別調整剝離方向	576
第51表	下位文化層南群全石器器種間共伴数	438	第87表	上位文化層ブロック別石器組成表	625
第52表	下位文化層北群サヌカイト製石器		第88表	上位文化層ブロック別石器類組成表	625
	器種間共伴数	438	第89表	上位文化層ブロック別石器類組成表	626
第53表	下位文化層南群サヌカイト製石器		第90表	板井寺ヶ谷遺跡周辺地形要素比率	643
	器種間共伴数	438			
第54表	下位文化層南群全石器				
	器種間相互強度	439			
第55表	下位文化層北群サヌカイト製石器				
	器種間相互強度	439			
第56表	下位文化層南群サヌカイト製石器				
	器種間相互強度	439			
第57表	下位文化層ブロック間(修正前)接合資料による共有関係(全石器類)	490			
第58表	下位文化層ブロック間(修正前)接合資料による相互強度(全石器類)	491			
第59表	下位文化層北群小ブロック間接合資料による共有関係(全石器類)	500			
第60表	下位文化層北群小ブロック間接合資料による共有関係(サヌカイト製石器類)	501			
第61表	下位文化層北群小ブロック間接合資料による共有関係(チャート等製石器類)	502			

# 図 版 目 次

## 原色図版

- |                  |                |
|------------------|----------------|
| 1 板井寺ヶ谷遺跡全景      | 3 下位文化層 ナイフ形石器 |
| 2 泥炭層断面 泥炭Ⅲ中の埋れ木 | 挿器・削器・局部磨製石斧   |
| 下位文化層 第1土壙       | 4 上位文化層 角錐状石器  |

## 白黒図版

- |                           |                           |
|---------------------------|---------------------------|
| 1 板井寺ヶ谷遺跡航空写真             | 30 泥炭Ⅲ 埋れ木検出状況            |
| 2 板井寺ヶ谷遺跡遠景 板井寺ヶ谷遺跡全景     | 灰色粘土層理面A T浸透部             |
| 3 板井寺ヶ谷遺跡全景 板井寺ヶ谷遺跡近景     | 31 H14・15埋れ木出土状況          |
| 4 板井寺ヶ谷遺跡土層断面             | L14・15・16埋れ木出土状況          |
| 5 近景                      | 32 泥炭Ⅱ 埋れ木出土状況            |
| 6 下位文化層 第1・第2土壙検出状況       | 33 東地区 始良Tn火山灰直下 土層断面     |
| 第1・第2土壙内礫出土状況             | 34 調査風景                   |
| 7 下位文化層 第1土壙検出状況          | 35 調査風景                   |
| 第1土壙内礫出土状況                | 36 下位文化層 ナイフ形石器 (サヌカイト)   |
| 8 下位文化層 第1土壙断面 第1土壙完掘状況   | 37 下位文化層 ナイフ形石器 (チャート) 1  |
| 9 下位文化層 第2土壙検出状況          | 38 下位文化層 ナイフ形石器 (チャート) 2  |
| 第2土壙内礫出土状況                | 39 下位文化層 鋳器、錐状石器、楔形石器     |
| 10 下位文化層 第3土壙検出状況         | 40 下位文化層 挿器 (サヌカイト)       |
| 第3土壙内礫出土状況                | 41 下位文化層 挿器 (チャート) 1      |
| 11 下位文化層 第4土壙検出状況         | 42 下位文化層 挿器 (チャート) 2      |
| 第4土壙完掘状況                  | 43 下位文化層 削器 (サヌカイト) 1     |
| 12 下位文化層 第5土壙検出状況         | 44 下位文化層 削器 (サヌカイト) 2     |
| 第5土壙内礫出土状況                | 45 下位文化層 削器 (チャート・凝灰岩) 1  |
| 13 下位文化層 第6土壙検出面炭化物分布状況   | 46 下位文化層 削器 (頁岩) 2        |
| 第6土壙断面炭化物分布状況             | 47 下位文化層 加工痕有剥片           |
| 14 下位文化層 第6土壙完掘状況         | 48 下位文化層 使用痕有剥片 (サヌカイト) 1 |
| 第6土壙完掘状況                  | 49 下位文化層 使用痕有剥片 (サヌカイト) 2 |
| 15 下位文化層 第1炭化物密集部         | 50 下位文化層 使用痕有剥片 (サヌカイト) 3 |
| 第2炭化物密集部                  | 51 下位文化層 使用痕有剥片 (サヌカイト) 4 |
| 16 下位文化層 第4炭化物密集部         | 52 下位文化層 使用痕有剥片 (チャート) 1  |
| 17 下位文化層 遺物集中部A遺物・礫出土状況   | 53 下位文化層 使用痕有剥片 (チャート) 2  |
| 遺物集中部K遺物・礫出土状況            | 54 下位文化層 局部磨製石斧 (凝灰岩)     |
| 18 下位文化層 遺物集中部A周辺配石・礫出土状況 | 斧形石器 (サヌカイト)              |
| F0・1周辺配石・礫出土状況            | 55 下位文化層 礫石器 1            |
| 19 下位文化層 E6周辺配石・礫出土状況     | 56 下位文化層 礫石器 2            |
| F7周辺配石・礫出土状況              | 57 下位文化層 礫石器 3            |
| 20 下位文化層 G・H6周辺配石・礫出土状況   | 58 下位文化層 剥片 (サヌカイト) 1     |
| I6周辺配石・礫出土状況              | 59 下位文化層 剥片 (サヌカイト) 2     |
| 21 下位文化層 K7周辺配石・礫出土状況     | 60 下位文化層 剥片 (サヌカイト) 3     |
| K11周辺配石・礫出土状況             | 61 下位文化層 剥片 (チャート・凝灰岩) 1  |
| 22 下位文化層 単独配石・礫出土状況       | 62 下位文化層 剥片 (チャート・凝灰岩) 2  |
| 23 下位文化層 遺物出土状況           | 63 下位文化層 石核 (サヌカイト) 1     |
| 24 上位文化層 礫群分布状況           | 64 下位文化層 石核 (サヌカイト) 2     |
| 25 上位文化層 礫群分布状況           | 65 下位文化層 石核 (チャート) 1      |
| 26 上位文化層 礫群A1 礫群B1b       | 66 下位文化層 石核 (チャート) 2      |
| 27 上位文化層 礫群C1 礫群C3        | 67 下位文化層 石核 (チャート) 3      |
| 28 上位文化層 土壙検出状況 土壙完掘状況    | 68 下位文化層 接合資料 (サヌカイト) 1   |
| 29 泥炭Ⅲ 埋れ木検出状況            | 69 下位文化層 接合資料 (サヌカイト) 2   |





## 第I章 遺跡の立地と環境

### 第1節 遺跡の立地と地理的環境

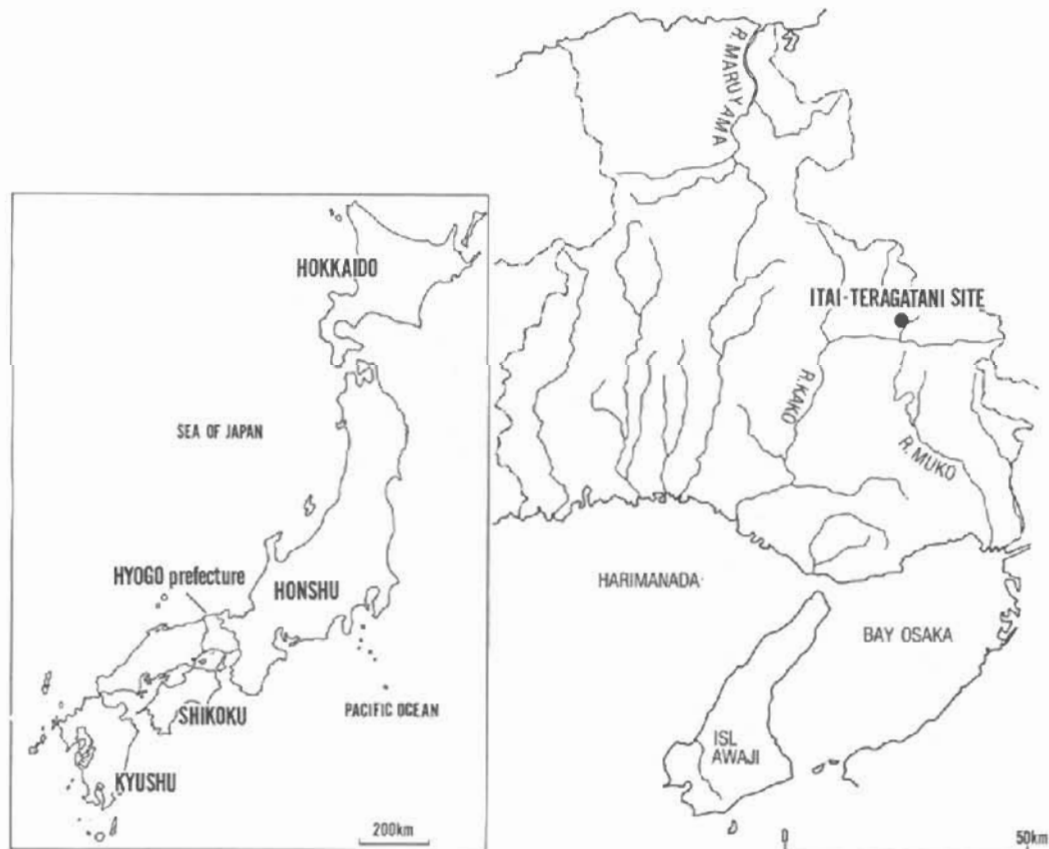
#### a, 遺跡の立地

板井寺ヶ谷遺跡は兵庫県北東部と京都府との府県境に近い篠山盆地の北西隅に位置する。篠山盆地は、中国山地東端近くの丹波高地の一角を占める東西約15km、南北約4kmの東西に細長い盆地である。周囲を三獄、三尾山、三国岳、白髪岳、黒頭峰等、標高600~700m前後の山々に囲まれており、特に北縁は多紀連山と通称される険しい山塊に限られている。したがって盆地内から他地域へ出ようとすれば、河川沿いに下るか、あるいは鐘ヶ坂峠・栗柄峠・天引峠等の峠越えによらねばならない。

しかし一方、河川沿いや峠越えの道は他地域へと続き、篠山盆地は古来、京都・大阪・播磨方面あるいは山陰地方からの交通路が交錯する山陰道の要衝であった。このように、篠山盆地は歴史的にみて、その地形的・地理的条件から閉鎖性と解放性の両面を併せもつといえる。

盆地平野部は標高200~250mで東から西にゆるやかに傾斜している。盆地の中央部には篠山川が蛇行して流れており、同川は川代溪谷を抜けて佐治川と合流し、加古川となってやがて瀬戸内海へと至る。

篠山川には、周囲の山間から流れ出てきた幾本もの中小河川が注ぎ込む。その一つである宮田川は鼓峠に源を発して狭い山あいを縫い、小坂川と合流してやや流域を拡げ、東西約1km、南北約3kmの小平



第1図 板井寺ヶ谷遺跡位置図

野を形成している。小平野は、宮田川流域の中では最も可耕地の広い地域であるが、篠山盆地中央部とは下板井から川北にかけての低丘陵によって遮られ、隔絶した小地域になっている。

板井寺ヶ谷遺跡は、小平野の北端に近く、宮田川と小坂川の合流地点に向かうように黒頭峰(標高621m)から南東にのびた尾根の南麓斜面に立地している。本遺跡の東側を通り、尾根の北側を小坂川沿いに北上する道は、佐仲峠(標高440m)を越えて水上郡春日町へ抜け、宮田川に沿ってさかのぼる道は、栗柄峠を経て京都府天田・船井両郡へと至る。すなわち本遺跡は、篠山盆地の北西の奥端であるのと同時に北西の出入口にあたる地域に位置していることになる。

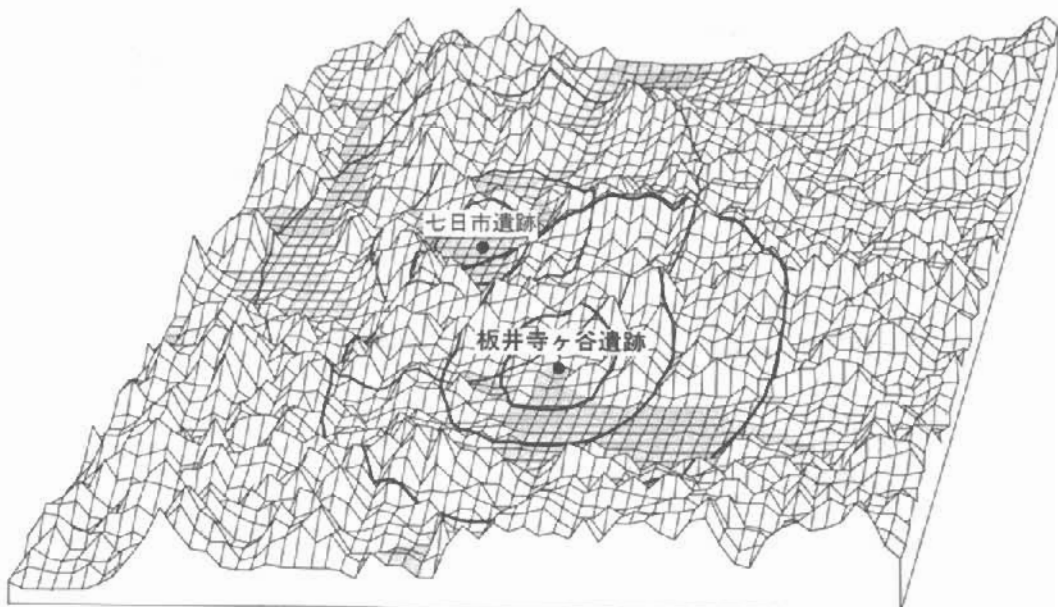
なお、板井寺ヶ谷遺跡の座標は、北緯35度5分50秒、東経135度10分30秒である。

#### b、古地理学的環境

板井寺ヶ谷遺跡周辺の地理的環境について、旧石器時代遺跡の地理的背景に限定して一般的な記述を行なう。大地形の変遷を田中・野村が、板井寺ヶ谷遺跡周辺の小地形変遷を青木が本書中で論ずるので、子細については第七章を参照されたい。

篠山盆地周辺の地質には、北部には中・古生層からなる東西に走る丹波層群、盆地中央の篠山層群、南部の中生層からなる丹波層群とこれを覆う中生代～古第三紀の流紋岩類を主とする有馬層群が見られる。これらは現在、山地の露頭面で観察される。北部の多紀連山中の露頭で観察されるチャートは灰・赤・暗黒色で、南部のチャートは灰色を呈するという(野村、第七章第6節)。現河床には、これらの基盤から供給された砂岩・頁岩・チャート・泥岩などの転石が見られる。

篠山盆地には、武庫川と加古川の水系が及び、篠山盆地南部の田松川は武庫川方向へ、中央から北部の篠山川は加古川方向へと流下している。南部の武庫川水系域では無能河川状態で、盆地内に段丘地形の発達はない。篠山川水系域では、段丘形成が認められ、川代溪谷から盆地中央へ進む段丘形成作用がみられ、いくつかの面に区別できる。標高200m前後の盆地底には大山面と宮田面の2つがある。大山面は最終氷期後半期までの堆積物からなり、最終氷期末期に段丘化したと考えられている。宮田面は侵食段丘で、晩氷期から後氷期の形成であるとされている。(山口)



第2図 篠山盆地周辺俯瞰地形図



第 3 図 調査範囲図 (確認調査時)

## 第2節 歴史的環境

### a, 縄文・弥生～歴史時代

篠山盆地における遺跡の発掘調査件数は、他地域と同様、開発事業に伴って近年ますます増加の一途をたどっている。特に、昭和40年代に始まる農業基盤整備事業や、昭和57年度以降の近畿自動車道舞鶴線建設事業等の大規模工事は、従来遺跡の分布が希薄であった地域でも重要な発見が相次ぐ契機となった。

その中で注目されるのは、農業基盤整備事業に伴う集落遺跡調査例の増加である。同事業が水田部分で押し進められるにしたがって、従来山麓における古墳の確認に偏りがちであった調査状況が一変し、低地に立地する集落遺跡が数多く発見されてきた。また近畿自動車道舞鶴線建設に伴う発掘調査は、遺跡の面的な調査を余儀なくするとともに、かえて遺跡の構造的な把握を可能にしている。このような発掘調査例の増加によって、地域史を構築するための資料は徐々に蓄積されつつある。

以下では、最近の発掘調査の成果を加えながら、篠山盆地の古墳時代遺跡を中心に板井寺ヶ谷遺跡をとりまく縄文時代以降の歴史的環境について概観してみたい。

縄文時代遺跡も篠山盆地ではこれまで確認例が少なく、藤岡山遺跡で後期中津式土器・石鏃・敲石や晩期後半の土器棺、下篠見遺跡（篠山町）で晩期後半の土器群、また他の数遺跡で草創期の有舌尖頭器が採集された程度であった。最近では、板井寺ヶ谷遺跡で草創期の尖頭器や後期の宮滝式土器・石鏃・石匙、西木之部遺跡で石鏃や切目石錘等が少量出土している。

弥生時代になると篠山盆地ではようやく遺跡数が増加する。その大半は遺物の表面採集のみによって発見されたものであるが、近年では発掘調査による遺構の確認事例も増えつつある。

前期にさかのぼる例は岩崎四の坪遺跡（同）で土器・木器が出土しているのみであるが、中・後期になると、盆地の周縁部全域に遺跡の分布が拡がるようになる。中期では、藤岡山遺跡で後半代の方形周溝墓、雲部車塚古墳周堤帯（同）で土壌墓群、出谷遺跡（丹南町）や住吉川岸遺跡（同）で土壇状遺構が検出された他、龍円寺遺跡（同）、庄境1号墳下層（同）等で竪穴住居跡が確認された。後期では、内場山城跡（西紀町）で竪穴住居跡と木棺墓群、細工所遺跡（篠山町）・北野遺跡（丹南町）で竪穴住居跡が検出されている。

これら集落遺跡のほとんどは、中・後期を通じて連続する大集落遺跡ではない。

しかし、弥生時代末期～古墳時代前期になると、前代から続く遺跡の他に新たに集落遺跡が出現する。前述の西木之部遺跡では庄内式～布留式併行期の竪穴住居跡6軒と大量の土器群が検出され、板井寺ヶ谷遺跡では同時期の約100基の土壇から良好な資料が得られた。また寺内遺跡（同）で古墳時代前期の隅丸方形住居跡、池北遺跡（同）・上板井遺跡（西紀町）・口阪本遺跡（同）では同時期の旧河道から大量の土器・木器が検出された。

西木之部遺跡や口阪本遺跡では、畿内や瀬戸内地方と山陰地方の両要素を持つ土器群が混在しており、稲角遺跡（丹南町）や東城山遺跡（篠山町）で出土したとされる石剣の存在とともに、両地域の文化が交錯する篠山盆地の特徴をよく表している。

また、弥生時代～古墳時代にかけての集落遺跡は、盆地周縁部に比較的偏在している。このことは、盆地中央を西流する篠山川の激しい氾濫が低地部の開発に採って大きな支障となり、同時代においては盆地周縁部中小河川流域から開発が始まったことを容易に推測される。

ところで、古墳時代前期の集落遺跡は前述したように年々その数が増えつつあるが、同時期の墳墓は現在、前山1号墳（篠山町）と内場山2号墳（西紀町）の2例を数えるのみである。前者は丘陵上に築かれた顕著な墳丘をもたない円墳で、埋葬施設は竪穴式石室とその近くには布留式併行期の壺棺が検出された。後者は、溝で区画した尾根先端の墳丘上に組合式木棺墓7基、土塚墓3基、壺棺墓4基が埋葬されたもので、墳丘中央の最も大きい木棺墓から素環頭大刀が一口出土した。墳形は、室町時代の山城構築のために削られ不明であるが、墳丘墓の範疇に含めてよいと考えられ、供献土器から弥生時代終末～古墳時代初頭の時期が与えられる。この両遺跡は、墳丘、外部施設、埋葬施設、副葬品の組合せ等が貧弱で、典型的な畿内型古墳とは対照をなす。特に内場山2号墳は多数埋葬という点で弥生時代の葬制の特徴を色濃く残しており、在地的な要素を強く持つ墳墓といえる。

中期になると、盆地北東部に雲部車塚古墳（篠山町）が築かれる。同墳は、周濠を有し、全長約140mの丹波最大規模を誇る前方後円墳で石室内に長持形石棺を納め、甲冑や武器類を副葬していた。同墳の周辺地域には一辺約30～35mの方墳である北条古墳や姫塚古墳等大型古墳が点在し、当地域が古墳時代



- 1、板井ヶ谷 2、上板井古墳群 3、箱塚古墳群 4、沢ノ浦古墳群 5、河内多々奴比神社 6、内場山城跡 7、西木之部 8、小坂古墳群 9、四王寺谷古墳群 10、東山古墳群 11、乗竹古墳群 12、杭谷古墳群 13、安養寺古墳群 14、乗竹 15、板井城跡 16、上板井 17、向井古墳 18、大師山古墳群 19、宮田1号墳 20、岡野北 21、口阪本 22、八幡山古墳 23、東浜谷 24、遊谷1号墳 25、層籠塚古墳 26、新宮古墳 27、谷山 28、山ノ越 29、岩崎四ノ坪 30、綱掛城跡 31、庄境古墳群 32、船角 33、初田館跡 34、西山古墳群 35、味間南 36、諏訪腰経塚 37、高仙寺城跡 38、三釈迦寺跡 39、里見山1号墳 40、阪訪山古墳 41、阿弥陀古墳 42、桂谷古墳 43、出谷 44、大山 45、山田古墳群 46、大山谷 47、小丸山古墳群 48、半鐘塚古墳群 49、金倉山 50、九ノ瀬 51、三ツ子塚1号墳 52、峠尻古墳群 53、名残古墳群 54、大芝原1号墳 55、大滝2号墳 56、見釈迦山古墳 57、小峠山古墳 58、丸山古墳

第4図 周辺遺跡分布図（縄文時代以降）

中期の篠山盆地においてきわめて重要な位置を占めていたことは明らかであろう。また、篠山町曾地口から日置にかけての篠山川南岸地域には宝地山1号墳や鞍塚古墳といった中期の前方後円墳が比較的集中して築造され、さらに盆地の北縁ほぼ中央部には新宮古墳を盟主墳とする郡家古墳群がある。同墳は周濠をもつ直径約56mの円墳で、円筒埴輪が出土しており、雲部車塚古墳よりやや後出の中期後半頃の築造と想定されている。

雲部車塚古墳や新宮古墳等、典型的な畿内の要素の強い大型古墳が盆地中央部に存在する一方、盆地北西隅の宮田川流域では、在地的な要素の強い中小規模の上板井古墳群（西紀町）や内場山1号墳（同）、大師山古墳群（同）、宮田1号墳（同）が築かれている。いずれも尾根上に築かれており、割竹形木棺や箱形木棺等を埋葬主体としたもので、鉄製工具類や武器・装飾品が出土している。また、小型仿製鏡や玉類が出土しており、大師山6号墳では鉄鋸らしきものが出土している。被葬者は、いずれも宮田川流域の比較的狭い地域に政治・経済・軍事的な基盤をもつ在地的な首長層であろう。

以上のように、古墳時代中期には、篠山盆地内で小地域ごとのまとまりがある程度明確になり、盆地内いくつかの地域集団が存在した可能性が考えられる。しかし、地域ごとあるいは地域相互の変遷等、現時点で明らかにできない問題が多く残されている。

古墳時代後期になると中期からの小地域的まとまりを継承しつつ、盆地内に数多くの古墳群が展開する。盆地の中心地域には中期に引き続き有力な古墳（群）が立地し、新宮古墳に近接した篠山町熊谷には大型横穴式石室墳の石くど古墳、同町曾地には前方後円墳を含む洞中古墳群や宝地山5号墳等が存在している。宝地山5号墳は七鈴鏡を出土した前方後円墳で四神四獣境や環鈴等を出土したよせわ1号墳（篠山町）とともに6世紀初頭頃の築造である。

また、丹南町域にあたる盆地北西部の大山川流域は、小丸山1号墳、半鐘塚古墳等、前方後円墳を含む多数の古墳群が分布しており、盆地内で最も後期古墳群の密集度が高い地域として注目される。その中で発掘調査が行われた大滝2号墳は、全長約20mの前方後円墳で、埴輪と木棺直葬の埋葬施設をもち、5世紀後半代の築造とされている。

これらに続く6世紀後半～7世紀にかけての古墳群は、数基以内の古墳で構成されるものが多く、岩井山古墳群（篠山町）のように10基以上に及ぶような例はきわめて少ない。このことは篠山盆地の特徴としてよく取り上げられてきた。また同時期には、盆地の出入口にあたる縁辺地域に金銅製の単鳳式環頭大刀の柄頭を出土した庄境1号墳（同）が確認されている。これらは小型の円墳ながら軍事・交通の要衝に位置し、装飾大刀を副葬している点で後述の沢の浦2号墳と共通の特徴を持ち、同墳の被葬者の性格を考える上で重要な内容を持つと言える。

板井寺ヶ谷遺跡が位置する宮田川流域では、西岸にいくつかの古墳群が点在している。中でも同川支流の小坂川が形成する最大幅約0.4km、奥行き約1.3kmの小さな谷の中は、古墳群が比較的集中する地域である。谷の入口にあたる地点は沢の浦古墳群が占め、その奥に箱塚古墳群、東山古墳、四王寺谷古墳群、小坂古墳群等が分布する。これらの多くは小型の横穴式石室をもつ円墳が2～3基集まったものである。沢の浦古墳群は発掘調査の結果、2基の古墳で構成されており、斜面下側の2号墳からは、前述の庄境1号墳と同様の銀象嵌を施した刀装具が出土した。また、最終埋葬面には須恵質の砲弾形陶棺が安置されていた。箱塚古墳群は5基の円墳からなり、うち3～5号墳が発掘調査された。4号墳は直径約20mで2重の埴輪列をもち、両袖型横穴式石室から装飾付脚付子持壺や多量の玉類等が出土した。同墳はこの谷中では最も有力な古墳と言える。

以上、古墳群については盆地内の分布状況がある程度明確になりつつあるが、一方同時期の集落遺跡では、内場山城跡で丘陵上から6世紀末～7世紀初頭の方形竪穴住居跡3棟、また出谷遺跡（丹南町）では7世紀後半の掘立柱建物跡が検出され、注目される。

奈良・平安時代の遺跡としては、これまで東浜谷遺跡（篠山町）、寺内廃寺（同）、王寺瓦窯、龍円寺遺跡（丹南町）等が知られていた。東浜谷遺跡からは「郡」の刻印や「厨」の墨書をもつ須恵器が出土し、付近にある「郡家」の地名と併せて多紀郡衙との関連が注目されている。同遺跡の近辺には複弁八葉蓮華文軒丸瓦を出土する寺内廃寺もあり、この一体は古墳時代中期から奈良・平安時代に至るまで、篠山盆地の中核的な役割を果たした地域と言える。

その他、龍円寺遺跡は延喜式記載の山陰道「長柄駅」に比定説がある丹南町野中の地に所在する。同遺跡は近年の計4次にわたる発掘調査で、掘立柱建物跡群や溝、瓦窯跡等が検出され、複弁八葉蓮華文軒丸瓦、重圏文軒丸瓦等が出土し、奈良時代中頃～平安時代末まで存続した遺跡と考えられている。また同遺跡の東方約1.2kmにある王地瓦窯遺跡は、龍円寺遺跡と同系統の瓦を出土し、同遺跡に瓦を供給した生産地とされている。

盆地北西部では、最近、西木之部遺跡や板井寺ヶ谷遺跡で、奈良時代末～鎌倉時代に至る掘立柱建物跡群が検出され、多量の緑釉陶器や墨書土器、鈔帯、円面硯等が出土した。両遺跡は、平安時代中期には成立したとされる近衛家領宮田荘の荘域にあたり、同荘に先行あるいは重複する時期の有力な集落と言える。なお、両遺跡の周辺では上板井経塚と中世墓群や内場山城跡等の中世遺跡が調査されている。

また、宮田荘に隣接する東寺領大山荘の荘域内にあたる丹南町大山地区でも大山谷遺跡をはじめ、多くの古代～中世にかけての遺跡が発掘調査されている。その中で、石住、高倉窯跡群の調査は、篠山盆地における8世紀後半から9世紀初頭の須恵器生産の一端を明らかにした。（市橋）

## b, 旧石器時代

近年、丹波山地を東限とする中国山地で、始良Tn火山灰の層順が明らかな旧石器時代の遺跡が相次いで発見され、中国山地や瀬戸内地域東部の旧石器の実像が解明されつつある。板井寺ヶ谷遺跡も、まさにその1つである。周辺の当該期の遺跡のあり方について、ここで簡単に見ておきたい。

篠山盆地は、大阪湾北方約50kmの丹波山地帯内の小盆地である。由良川水系と加古川水系が氷上低地で低い分水界を形成し、丹波山地は中国山地帯から分断されているが、南の瀬戸内地域の「低地」帯と対比して、北に広がる一連の「山地」帯と見なして良からう。従来から、瀬戸内地域にはもっぱらサヌカイト製の瀬戸内系旧石器が分布することが知られてきた。瀬戸内系旧石器は、剥片素材の石核から横長剥片を生産する技術に基盤がある。一方、中国山地帯では、始良Tn火山灰層のある層位条件の良好な遺跡から縦長指向の剥片剥離技術を持った石器群が近年あいついで発見されている。岡山県・兵庫県下の標高600m以上の高原地には、板井寺ヶ谷遺跡に前後する時期の遺跡が散見される。始良Tn火山灰降灰以前の遺跡数が依然少なく、遺跡毎の内容差も大きい、在地石材を主体とし、縦長指向の剥片剥離技術が技術母胎となっている遺跡が多い。低地と山地で、石材の嗜好、石器製作技術伝統上の相違など、大きく石器群が2分されることが理解できよう。

篠山盆地周辺に視野を転じれば、氷上郡春日町七日市遺跡と三田市溝口遺跡が挙げられる。

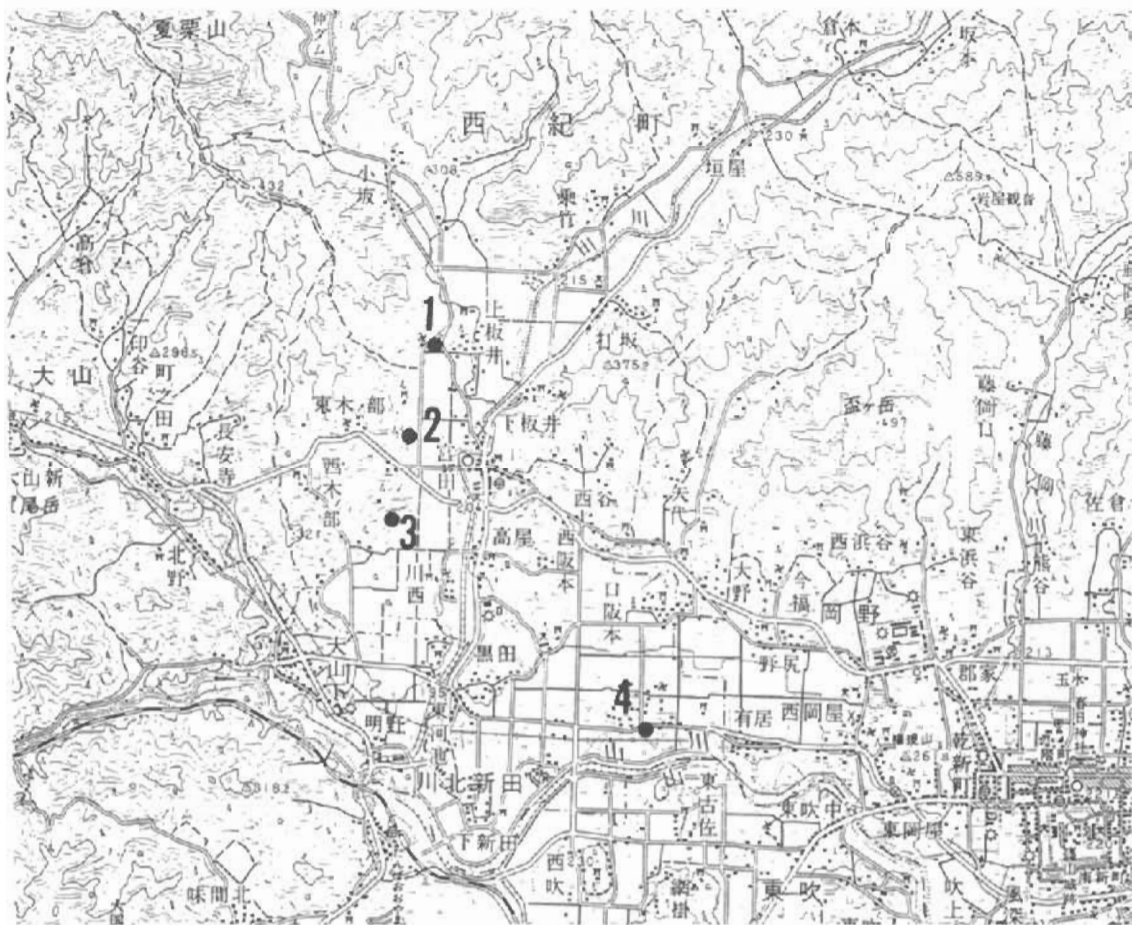
七日市遺跡は、日本海側に注ぐ由良川と瀬戸内海側に注ぐ加古川の分水嶺である氷上低地にあり、標高約100mの平坦地に位置する。当時は、氾濫原に面した極めて低位な段丘上に位置したらしい。始良Tn

火山灰下の灰色粘土層中からチャート製ナイフ形石器・台形様石器などを持つ石器群が少なくとも三層順で出土している。局部磨製石斧が伴う。溝口遺跡は、三田盆地北部の、丹波山地の南に広がる丘陵地帯の北縁辺にあり、標高は約210mである。始良Tn火山灰の確認はされていないが、鉄石英・チャートなどのナイフ形石器や局部磨製石斧を含む古相の石器群が検出されている。

篠山盆地で、板井寺ヶ谷遺跡以外に旧石器時代の遺物が出土した遺跡は、西木之部遺跡と内場山遺跡があるに留まる。西木之部遺跡と内場山遺跡は、いずれも板井寺ヶ谷遺跡の南方、篠山盆地西北の宮田川西岸の山裾にある。両遺跡とも水田面が山地に立ち上がる変換点に位置し、篠山盆地西北部での旧石器時代遺跡の立地選択に一定の特徴があることを示唆している。

板井寺ヶ谷遺跡南方600mの西木之部遺跡は、標高210mの山裾に位置し、板井寺ヶ谷遺跡と同様に始良Tn火山灰下の泥炭層中からチャート製の2側縁加工ナイフ形石器が出土した。泥炭層は、始良Tn火山灰の上下に存在し、板井寺ヶ谷遺跡当該期の形成であろう。内場山遺跡は、南方1,500mにあり、標高205mの山裾に位置し、火山灰との層位的関係は不明であるが、チャート製石器類が出土している。両遺跡とも泥炭層が遺跡周辺を囲んでいるらしく、立地環境に板井寺ヶ谷遺跡との共通点が多い。

東部瀬戸内地域・中国山地東部の旧石器時代遺跡群を低地の瀬戸内系、山地の中国山地系の2つに区別した場合、板井寺ヶ谷遺跡の周辺の遺跡は、中国山地内の立地環境内にあることを示している。板井寺ヶ谷遺跡は、中国山地の領域に含まれることが知れよう。 (山口)



第5図 周辺地形図(5万分の1)「篠山」

- 1 板井寺ヶ谷遺跡 2 内場山遺跡 3 西木之部遺跡 4 川北柱状資料サンプリング地点



## 第II章 発掘調査の経過

### 第1節 近畿自動車道舞鶴線の埋蔵文化財調査(氷上郡・多紀郡)

近畿自動車道舞鶴線(以下近舞線)は、中国自動車道吉川JCと舞鶴インターチェンジに至る高速自動車道で、阪神間と丹波・丹後を結ぶ幹線道路として計画された。総延長76.5kmであり、そのうち南半部の福知山～三田間(53.8km)は、兵庫県側が大半を占める。

工事は、福知山～三田間の施工命令が昭和48年10月に出され、この間の路線決定は、昭和52年9月に福知山～丹南間(41.2km)、昭和54年3月に三田～吉川間(12.6km)がなされた。

路線内の埋蔵文化財調査は、路線決定後に行われ、昭和53年度には路線中心杭に沿って第一回目の踏査を実施した。その後、遺跡分布状況を正確に把握するため、昭和54年度には市島町～今田町、昭和55年度には今田町～吉川町までを路線幅に広げて踏査した。これらの分布調査は、道路センターのみが伐採された段階のもので、特に山林部の地形把握には適当な調査と言えず、伐採後再度分布調査が必要と考えられたものの、市島町～吉川町間で合計53ヶ所の遺跡または散布地を確認した。これは、路線が切り土と盛り土の関係から丘陵末端部を通過するよう設定されるため、多くの古墳と集落跡が路線内に所在するという結果となった。

この調査成果に基づき、日本道路公団と兵庫県教育委員会は遺跡の取扱について協議を行った。発掘調査は、用地買収の進捗状況や公団の工事計画に併せて計画され、協議のうえ実施したものである。

氷上郡と多紀郡管内での調査の状況は第1表のとおりである。

発掘調査は昭和56年度から開始したが、この段階は丹南町での1パーティのみであり、本格的に調査が開始されたのは、翌年度からであった。以後、昭和61年度の初田館跡まで継続的に複数箇所での調査が実施された。

発掘調査が氷上郡(福知山工事事務所)・多紀郡(三田工事事務所)で先行して行われたのは、さきに述べたように用地買収の進捗状況によるものであった。調査は、原則として平野部の遺跡ないし散布地の範囲確認調査から実施した。昭和57～58年度の発掘調査の多くは、この確認調査であった。

遺跡範囲のしほりこみの結果、氷上郡内では9ヶ所、多紀郡内では7ヶ所の全面調査が必要な遺跡が判明した。いっぽう、伐採後新たに確認された遺跡も多く、最終的には両郡内で合計8ヶ所の全面調査が追加された。

全面調査は、遺跡範囲の確定している古墳・古窯跡が早くから開始された。昭和56年度1ヶ所、昭和57年度からは平野部においても開始され以後継続して実施された。初期の頃の全面調査は、比較的小面積のものが対象とされ、確認調査の間隙を縫って実施されたものである。

平野部の全面調査については、昭和57年度の西木之部遺跡B地点が最も早い時期のものであるが、この遺跡も全体は、昭和58～59年度にかけて大規模な調査が実施された。昭和59年度からは、この遺跡のほかにも大規模な発掘調査が相次いだ。初田館跡(丹南町)、板井寺ヶ谷遺跡、内場山城跡(西紀町)、河津館跡、国領遺跡、山垣遺跡、野村遺跡、七日市遺跡(春日町)等があげられる。いずれも調査面積が数千㎡に及ぶものであるが、特に西木之部遺跡と七日市遺跡は、調査面積が膨大であり、サービスエリア、インターチェンジに位置するところから、当初から他遺跡に先行して調査を終了する必要に迫ら

第1節 本調査に至る経過

れており、いずれも昭和59年度に調査を完了したものである。おおむね、水上郡内は昭和59年度、多紀郡内は昭和60年度に調査のピークがあり、三田市内に比べて早い時期に調査を終了している。

このような経過のもとに両郡内の発掘調査は昭和61年度の初田館跡の調査を最後として終了した。

(水口)

第1表 近畿自動車道舞鶴線 遺跡一覧表(水上郡・多紀郡)

遺跡番号	遺跡名	所在地	調査期間
1 2 3	篠山城採石場	多紀郡丹南町当野ほか	確認 60.1.16~60.3.8 60 61
2 2 4	古墳(?)	多紀郡丹南町	再分布調査により調査不要
3 2 5	真南条南遺跡	多紀郡丹南町真南条	確認 58.10.5~58.10.6
4 2 6	初田遺跡	多紀郡丹南町初田	確認 58.10.6~58.10.11
5 2 7	初田館跡	多紀郡丹南町初田	確認 59.10.1~59.10.4 61.9.18~62.2.20
6 2 8	庄境古墳群	多紀郡丹南町大沢新	1号墳 60.1.16~60.2.26 2号墳 57.1.12~57.2.20
7 2 9	杉遺跡	多紀郡丹南町杉	確認 56.11.4~56.11.10
8 3 0	西吹遺跡	多紀郡丹南町西吹	確認 56.11.14~56.12.3
9 3 1	西木之部散布地	多紀郡西紀町西木之部	確認 57.11.8~57.11.25
10 3 2	西木之部遺跡	多紀郡西紀町東木之部	確認 57.4.12~57.8.18 全面B 57.8.19~57.12.17 全面B 58.4.12~58.10.20 全面A 60.1.6~60.3.27 全面C 59.12.17~60.3.30
11 3 3	古墳(?)	多紀郡西紀町東木之部	確認 57.5.10~57.5.17
12 3 4-1	古墳(?)	多紀郡西紀町東木之部	再分布調査により調査不要
13 3 4-2	内場山城跡	多紀郡西紀町	確認 60.4.23~60.4.30 全面 60.7.16~61.1.10
14 3 5	板井寺ヶ谷遺跡	多紀郡西紀町上板井	確認 57.11.26~57.12.7 全面 58.10.1~59.3.31 全面 59.4.13~59.12.25
15 3 6	上板井古墳群	多紀郡西紀町上板井	確認 57.12.21~57.12.24 全面 58.11.1~59.3.31
16 3 7-1	箱塚古墳群	多紀郡西紀町小坂	全面 60.5.8~60.7.30
17 3 7-2	沢ノ浦坪古墳群	多紀郡西紀町上板井	全面 58.10.23~59.3.31
18 3 8	小坂遺跡	多紀郡西紀町小坂	再分布調査により調査不要
19 3 9	小坂古墳群	多紀郡西紀町小坂	確認 57.12.21~57.12.24
20 4 0	河津館跡	水上郡春日町東中	全面 59.1.17~59.3.30 全面 59.4.16~59.6.16
21 4 1	国領遺跡	水上郡春日町国領	確認 59.3.4~59.3.30 全面 59.6.18~59.11.7 全面 60.4.27~60.9.30
22 4 2	棚原散布地	水上郡春日町棚原新	再分布調査により調査不要
23 4 3-1	山垣遺跡	水上郡春日町野村	確認 57.12.13~57.12.24 全面 58.4.19~58.9.10
24 4 3-2	野村B、C遺跡	水上郡春日町野村	確認 57.12.13~57.12.24 全面 58.4.19~58.9.10
25 4 4	七日市遺跡	水上郡春日町七日市	確認 57.11.29~57.12.10 確認 58.11.14~59.1.25 確認 59.2.3~59.2.14 全面 59.6.4~60.3.29
26 4 5	多利七日市遺跡	水上郡春日町七日市	確認 57.11.26~57.11.29
27 4 6-1	多利古墳群	水上郡春日町多利	全面 58.9.8~58.11.30 全面 59.11.5~59.11.8
28 4 6-4	多利向山古墳群	水上郡春日町多利	全面 57.4.17~57.10.29 全面 60.7.16~60.8.30
29 4 7-1	多利遺跡	水上郡春日町多利	確認 57.11.1~57.11.25 全面 58.9.13~59.2.22
30 4 7-2	松ノ本古墳群	水上郡春日町多利	全面 58.10.24~59.3.30
31 4 8	南遺跡	水上郡市島町南	確認 57.11.8~57.12.3
32 4 9	南1号窯跡	水上郡市島町南	全面 57.8.2~57.9.22
33 4 9-2	元最明寺跡	水上郡市島町南	確認 57.10.4~57.10.29
34 5 0	南古窯跡	水上郡市島町南	確認 58.8.6~58.8.26
35 5 1	喜多中世墓	水上郡市島町喜多	確認 57.12.13~58.1.11
36 5 2	上牧古窯跡群	水上郡市島町上牧	全面 57.4.12~57.7.30

## 第2節 調査経過

### 1 調査の経過

板井寺ヶ谷遺跡の発掘調査は、昭和57年度から昭和59年度にかけて実施した。当初、平安時代～鎌倉時代の集落跡の検出を目的として実施したが、昭和59年度の南地区の調査で弥生時代後期～古墳時代前期の土壌群を検出した。旧石器の剥片は、昭和58年度に北調査区で遺構検出の際に小量を採集していたのであるが、旧石器の存在がほぼ確実視できたのは昭和59年度の調査で火山灰や製品を確認してからであった。弥生時代以降の調査については平成3年度刊行予定の報告書、弥生～中世編に譲ることとし、以下、旧石器の調査の契機と経過、調査の方法を述べる。

昭和59年5月初旬に、調査区の中央を東西に横切る農道を掘削・撤去し、仮設用水路を掘削した際に中世の遺構面下に火山灰が堆積していることが判明した。次いで、5月中旬、南調査区の中世包含層を掘削中に角錐状石器が出土した。また、調査員による表面採集の石器剥片が100点以上を数えた。

以上のことから、下層に旧石器が存在する可能性が非常に高くなってきたため、関西大学大学院、山口卓也氏の協力・助言をふまえ、今後の調査の方法について日本道路公団と協議を行った。その結果、北調査区については、写真・実測が終了した7月初旬から7月下旬にかけて人力による旧石器範囲確認調査を実施した。確認調査の結果、北調査区のうち東北隅部分を除いたほぼ全面の約1,125㎡について旧石器の出土が認められ、さらに火山灰土中と火山灰直下の黄褐色土上半部に石器が含まれていることが判明した。また、同時に火山灰の分析を同志社大学非常勤講師（当時）の竹村恵二氏にお願いし、始良Tn火山灰であることがほぼ確実となった。

旧石器時代の調査は、弥生～中世の調査の関係から、北調査区、南調査区、東調査区の順に調査を実施し、北・南調査区は最終的に始良Tn火山灰下層の面で同時調査が実施できたが、東調査区は工事の関係から単独で実施せざるを得なかった。

北調査区の全面調査は、確認調査終了直後の7月末から実施し、10月下旬に終了した。その結果、旧石器は始良Tn火山灰の上下に分かれて出土することが判明し、数群のブロック・礫群・配石・土壌といった遺構を検出することができ、遺物量もかなりの点数にのぼった。

一方、南調査区では、弥生時代後期～古墳時代前期の土壌壁や底に火山灰が認められ、旧石器の出土範囲が広がっていることは当然予想できた。したがって、それらの写真・実測終了後の9月末より10月中旬にかけて重機による確認調査（トレンチ掘削）を行った。トレンチは「井」字形に設定して掘削した結果、北方では旧石器出土範囲が広がることが確認され、南・東方では始良Tn火山灰を挟むように泥炭層が上下に堆積しており、沼地と陸地の接点部分にあたるということが判明した。

南調査区の全面調査は、南西隅部分が礫層が高く盛り上がっているため範囲から除外し、約1,620㎡について10月下旬より開始した。掘削は、泥炭層までは重機で行い、泥炭層以下は人力で掘削し、翌年1月中旬に終了した。全面調査範囲から南側の泥炭層が厚く堆積している部分は、1月下旬に人力によるトレンチ調査を行い、土層の堆積状況の観察を行った。

東調査区は、古代～中世の全面調査が終了した2月中旬より人力掘削を実施した。面積は約1,050㎡で、3月中旬に調査を終了した。始良Tn火山灰および泥炭層はほぼ全域で検出できたが、旧石器は西方で少量検出したのみであった。東調査区のほぼ中央は南北方向の谷状地形を呈しており、始良Tn火山灰

および泥炭層は厚く堆積していた。

## 2 調査の方法

旧石器時代の調査の地区割りは弥生～中世面での調査杭を継承し、調査区全域を5m単位の柵目に区分して、これに東西A～Q列、南北03～17区までの名称を付け、この柵目単位で発掘記録を行った。

この地区割りは日本道路公団が設置した杭（上り車線STA140）から杭（下り車線STA140+6）を直線で結んだ線を南北方向の基準線とし、F列としている。また、G列の杭（STA141+6）から40m南の位置で東西方向に直角に基準線を設け、18列とした。南北方向の基準線は磁北から3度40分東にずれている。

北調査区の確認調査は各グリッドの4分の1に相当する、南東隅の一辺2.5m四方の掘削を行った。出土した旧石器は剥片も含めすべて平面位置、レベルを記入し採集した。

北調査区の全面調査はすべて人力で掘削し、グリッド間は土層観察用の畦を残して掘削を行った。火山灰上層まではスコップと鍬で掘り進め、火山灰からはネジリ鎌と移植ゴテを使って精査を行い、旧石器などの遺物を肉眼レベルで回収した。火山灰除去後の旧石器時代相当層のほとんどは固く締まった粘土であったことから、ジョレンによる水平掘削を行うことは不可能であったため、手鍬によって土を細かく碎きながら行った。また、土壌内の埋土はすべてフルイにかけ、微細な遺物の回収に努めた。

南調査区は火山灰上層の泥炭層まで重機掘削を行い、以下は人力で掘削した。人力掘削は陸地部分から行い、北調査区と同様の方法で行ったが、泥炭層が発達した湿地部分は旧石器の出土が見られないため、スコップ、ジョレンによる掘削を行った。また同時に、<sup>14</sup>C年代測定、火山灰分析、植物遺体分析、花粉分析、ケイ藻分析といった自然科学分野のサンプル採取も行い、古環境復元のための情報の回収に努めた。また、南調査区の調査が終了した時点で北調査区とあわせて気球による空中写真撮影を行った。

東調査区は、そのほとんどが湿地部分であり、泥炭層も発達していたことから、南調査区と同様の方法で掘削を行った。

発掘調査は以上のような方法によって、慎重に行ったが、いくつかの点で十分な情報の回収が果たせなかった。

陸地部分の調査のうち、上位文化層では中世面からのひび割れや細根によって落ち込んだ炭化物が多量にあり、さらに中世期の土壌・柱穴などが文化層に及んでおり、微細炭化物の分布状況の平面観察に困難があった。一方、下位文化層では調査を冬季に行ったため、悪天候による降水・霜柱・冠水・凍結といった寒冷期の悪条件により、微細炭化物の分布状況の検討を断念せざるを得なかった。

また、冬季に行った下位文化層の調査では、調査地の土壌凍結・溶解の繰り返しと霜柱によって、記録を行う前に若干の礫石類が原位置を失うこととなった。

湿地部の調査では、泥炭層中に多量の植物遺体などが包含されていることが判明したが、調査が冬季に行われたこと、調査期間が限定されたことから、旧石器包含層相当面の精査に目的を限定し、遺物が分布する範囲を広く発掘することを意図して、速やかに調査を進めざるを得なかった。

炭化物密集箇所周辺の泥炭は、炭化物回収のために水洗選別作業を行ったが、泥炭すべてを水洗することは断念し、埋もれ木の分布状況図を作成するにとどめた。

結果として、泥炭層中の自然遺物の採集は、自然科学的検討用の柱状資料中のものに限定されることとなった。



第6図 調査区域地形図

## 3 調査の体制

発掘調査とその後の整理作業は、ともに兵庫県教育委員会が日本道路公団大阪建設局の委託を受け、実施した。旧石器時代の発掘調査は昭和59年度に実施し、整理作業は弥生～中世の土器などとともに昭和60年度から平成2年度の6年間を費やして実施した。途中、組織改革に伴い、平成元年度からは兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。

発掘調査・整理作業は地元参加の調査補助員・現場作業員・整理作業員・現場事務員や遠方から参加の調査補助員、自然科学分野の多くの方々の御協力をいただいた。

発掘調査と整理作業の体制は以下の通りであり、整理作業の工程は第2表に示した。 (岸本)

## 発掘調査－昭和59年度－

兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課

(事務担当) 課長 西澤 良之

参事 大西 章夫

副課長 森崎 理一

課長補佐 和田 富男

埋蔵文化財調査係長 檀本 誠一

技術職員 大平 茂

(調査担当) 技術職員 水口 富夫

技術職員 市橋 重喜

技術職員 岸本 一宏

(調査補助員) 山口卓也、西村 守、森本長成、水嶋正稔、中川 貴、佐藤美和、東浦竜也、畑 昭、村岡和夫、岸本宏昭、後藤浩之、杉野和則、畑 智幸、泉本さとみ、大下 明、山口慶一、奥野和宏、赤井利也、村上穰司、古井知克、綿貫俊一、工藤敏久、進藤貴和子、本荘芳成、原田育敏、国井和哉、佐野康雄

(現場作業員) 片山三農、石川捨三郎、谷後嘉斉、西田 強、高見茂雄、明山 勝、片山夏雄、斉藤礼市郎、明山忠夫、片山まさる、溝端みち子、柳沢重子、石川つた子、谷後幸子、河南和子、若狭松子、酒井笑子、近成みさを、近成きよ子、青木節子、藤本恵美子、畑 和子、和田頼子、赤井とし子、水畑ふみ子、溝端富子、高橋信雄、井上清次、織田哲男、北川茂雄、岡部 進、細見慶三郎、松原武司、阪下五郎、小林耕一、若狭文子、西田富子、久下富美子、野垣光子、羽馬真知子、池田千代子、平野和男、谷後忠二、

(整理作業員) 青野美香、大前みのり、山田まする、三谷真弓、利根真由美、酒井恵美子、酒井典子、足立佳代子、高橋としる、川崎てる子、市嶋真貴子

(現場事務員) 飯田あゆみ、橋本智子

整理作業

—昭和60年度—

兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課

(事務担当) 課長 北村 幸久  
 参事 森崎 理一  
 副課長 黒田賢一郎  
 課長補佐 和田 富男

埋蔵文化財調査係長 権本 誠一  
 技術職員 森内 秀造

(整理担当) 技術職員 市橋 重喜  
 技術職員 岸本 一宏

(補助員) 山口 卓也、垣内 千世  
 勝原 香織、田中 博子  
 富士原賢子、松下 智子  
 本藤 美紀

—昭和62年度—

兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課

(事務担当) 課長 北村 幸久  
 参事 森崎 理一  
 副課長 黒田賢一郎  
 課長補佐 福田 至宏

課長補佐兼  
 埋蔵文化財調査係長 大村 敬通  
 主査 小川 良太  
 主任 岡田 章一

(整理担当) 技術職員 市橋 重喜  
 技術職員 岸本 一宏

(補助員) 山口 卓也、久保 勝正  
 大下 明、河田 有子  
 佐田 千織、瀧川 友子  
 渡辺 裕子

—昭和61年度—

兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課

(事務担当) 課長 北村 幸久  
 参事 森崎 理一  
 副課長 黒田賢一郎  
 課長補佐 福田 至宏

課長補佐兼  
 埋蔵文化財調査係長 大村 敬通  
 主査 小川 良太  
 技術職員 渡辺 昇

(整理担当) 技術職員 市橋 重喜  
 技術職員 岸本 一宏

(補助員) 山口 卓也、大下 明  
 石井あゆみ、垣内 千世  
 勝原 香織、田中 博子  
 富士原賢子、松下 智子  
 本藤 美紀

—昭和63年度—

兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課

(事務担当) 課長 中根 孝司  
 参事 森崎 理一  
 参事 日野 和広  
 副課長 高坂 隆  
 課長補佐 福田 至宏  
 課長補佐 松下 勝

主査 小川 良太  
 主任 岡田 章一

(整理担当) 技術職員 市橋 重喜  
 技術職員 岸本 一宏

(補助員) 山口 卓也、来村多加史  
 久保 勝正、河田 有子  
 戸田 ゆみ、脇田 光子  
 渡辺 裕子

第2節 調査の経過

－平成元年度－

兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所  
 (事務担当) 所 長 大江 剛  
 副 所 長 村上 絃揚  
 総務課長 小池 英隆  
 整理普及課長 松下 勝  
 技術職員 岸本 一宏  
 (整理担当) 技術職員 岸本 一宏  
 (嘱託職員) 主任技術員 山口 卓也  
 図化技術員 久保 勝正  
 日々雇用 渡辺 裕子

－平成2年度－

兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所  
 (事務担当) 所 長 内田 隆義  
 副 所 長 村上 絃揚  
 総務課長 小池 英隆  
 整理普及課長 松下 勝  
 技術職員 岸本 一宏  
 (整理担当) 技術職員 岸本 一宏  
 (嘱託職員) 主任技術員 山口 卓也  
 日々雇用 渡辺 裕子

第2表 整理作業工程表

整理年度	水 洗	ネーミング	接 合	実 測	写 真	トレース	図面作成	分析・鑑定	レイアウト
昭和60年度									
昭和61年度									
昭和62年度									
昭和63年度									
平成元年度									
平成2年度									



## 第三章 層位と遺構・遺物の検出状態

### 第1節 土層

板井寺ヶ谷遺跡の発掘区に、南北・東西の2方向にはほぼ20m間隔で設定した土層観察用の発掘溝によって、層序の概要が知られる。板井寺ヶ谷遺跡周辺の基盤は、丹波層群と称される中・古世層の堆積岩盤であるが、板井寺ヶ谷遺跡の立地点は山地から平野に形成された扇状地上にあり、人力掘削による発掘調査では基盤を確認できなかった。基盤に代わるものとして灰色粘土層が認められた。灰色粘土層までの深度は、H6区では現地表から約80cm、P11区では2m50cmである。発掘区の北側ほど浅く、南側ほど深いという傾向がある。また、西よりも東が深くなっている。

板井寺ヶ谷遺跡は、篠山盆地西北端、篠山川支流の宮田川西岸にあり、篠山盆地平坦面が山地に立ち上がる変換点に位置していることから、山地寄りと平地寄りでは堆積状況に大きな違いが存在している。異なる土壌の堆積環境を遺跡内に抱えていたことから、遺跡内がすべて同じ層相を示しているわけではない。堆積環境の違いを考慮すれば、調査区の南北で土層を代表する必要がある。以下に、最も土層の観察が丁寧に行なわれたH6区とP11区の土層柱状図(第7図)に従って、遺跡の南北を代表する土層の特徴を説明する。

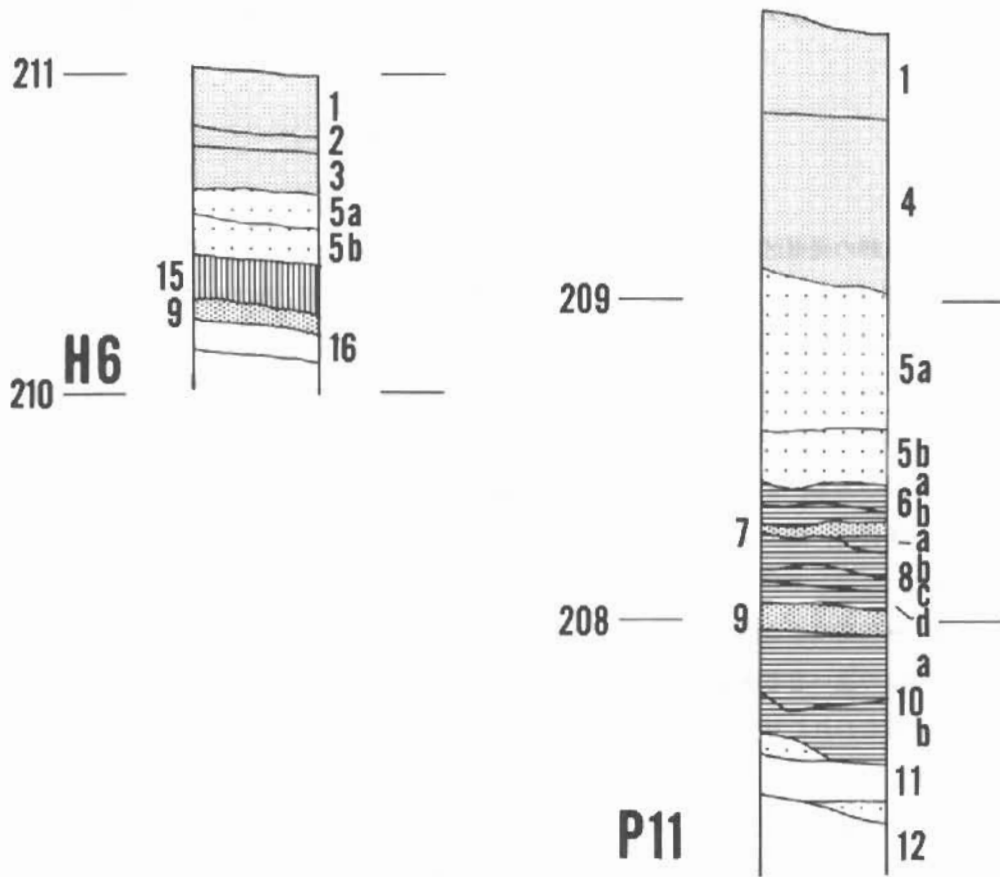
H6区では、灰色粘土の上に約80cmの土層の堆積がある。上から耕作土、床土、造成土、砂礫、暗灰色火山灰、下位火山灰、黄色粘土、灰色粘土の順となる。砂礫は、層相によって2つに区分される。

P11区では、上から耕作土、茶褐色土(中世包含層)、砂礫、泥炭Ⅰ、上位火山灰、泥炭Ⅱ、下位火山灰、泥炭Ⅲ、暗灰色粘土、灰色粘土の順であり、灰色粘土上に約250cmの土層堆積がある。砂礫層はここでも2つに区分され、泥炭Ⅰは2つに、泥炭Ⅱは4つに、泥炭Ⅲは2つに細分できる。

扇状地高所を代表するH6区と低所を代表するP11区では、泥炭層の有無が異なり、下位火山灰と砂礫が共通の土層として認められる。各土層は全体として、高所では層が薄く、低所では層が厚い。

板井寺ヶ谷遺跡では、竹村・檀原の分析によって3枚の火山灰層が確認されている(竹村・檀原、第VII章第1節)。P11区の泥炭Ⅰと泥炭Ⅱの間の上位火山灰、泥炭Ⅱ下部の8d層から検出された中位火山灰、泥炭Ⅱと泥炭Ⅲの間の下位火山灰である。下位火山灰はH6区にも純粹層として存在する。上位火山灰はH6区の砂礫5b層下部に包含されていることが判明している。上位火山灰は大山ホーキ火山灰、中位火山灰は大山系、下位火山灰は始良Tn火山灰に同定できるという。H6区に認められた暗灰色火山灰は始良Tn火山灰の風化・汚染され土壌化の始まった部分である可能性が高いという。板井寺ヶ谷遺跡の低所と高所の土層比較の鍵層として利用可能である。

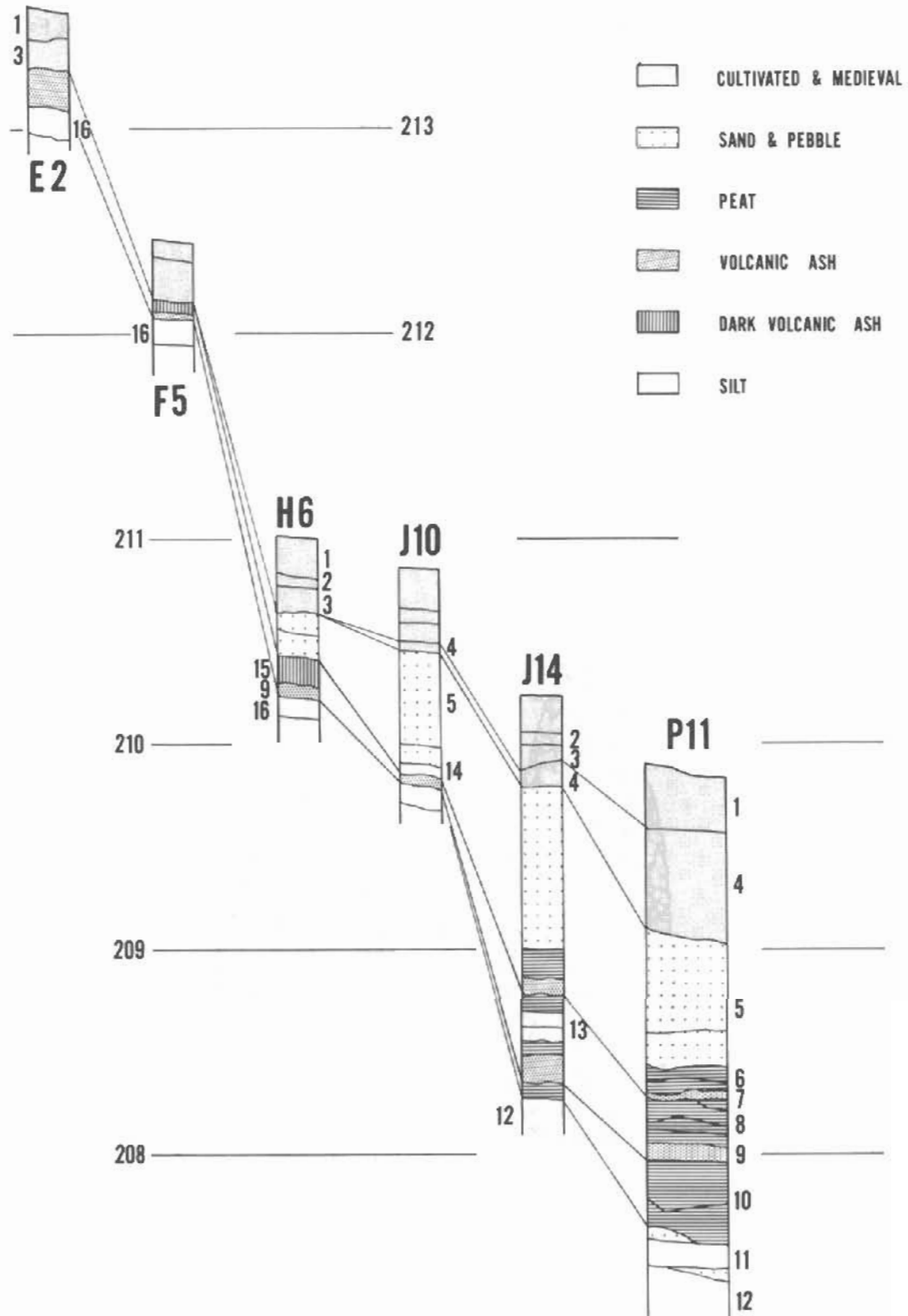
板井寺ヶ谷遺跡の高所から低所への土層の連続を観察してみよう(第8図)。高所から下るにしたがって土層が増え、層厚も増大している。調査区北半では、堆積が薄いのに加えて、耕作面造成の掘削が深く行なわれ、一部では黄色粘土面にまでおよんでいる。始良Tn火山灰は、削平された部分を除き北半全体に分布するが、暗灰色火山灰は北半の南部にしか認められない。南半では耕作面造成土が盛られ、中世包含層を厚く保護する。泥炭層は深いところほど発達し、層相の細分化が進んでいる。上位と中位火山灰の2枚は、泥炭層の発達著しい部分で純粹層として認められる。下位火山灰は、南半全域の泥炭層



第7図 基本土層柱状図

基本土層柱状図凡例

1. 耕作土
2. 床土
3. 造成土（水田面造成時の盛り土）
4. 茶褐色土（中世期遺物包含層）
- 5 a. 砂礫（拳大よりもやや小さい礫を含む砂礫、部分的に鉄分の沈澱によって赤くなる、礫分の多いところと砂分の多い部分は、次第に遷移し、一部ラミナ状に砂を取り込む。調査区南半から北半まで連続するが、標高の高いところほど礫は小振りになる）
- 5 b. 砂礫（5 aと同様の特徴があるが、5 aよりも包含する礫が小さく、2～3cm直径が多い。標高の高いところではほとんど礫を含まない）
- 6 a. 泥炭Ⅰ上部（黒褐色腐植、肉眼でみて草本類遺体が多い）
- 6 b. 泥炭Ⅰ下部（黒褐色腐植、6 aと同様の特徴があるが、6 aよりも色調が暗い）
7. 板井寺ヶ谷遺跡上位火山灰（褐色火山灰層、大山系火山灰）
- 8 a. 泥炭Ⅱ最上部（暗灰色粘質土、多量の腐植を含む、材化石多い）
- 8 b. 泥炭Ⅱ上部（黒色腐植、）
- 8 c. 泥炭Ⅱ中部（黒褐色腐植、材化石含む）
- 8 d. 泥炭Ⅱ下部（黒色腐植、やや砂質感がある、間に板井・寺ヶ谷遺跡中位火山灰層を挟む、材化石多い）
9. 板井寺ヶ谷遺跡下位火山灰（始良Tn火山灰層）
- 10 a. 泥炭Ⅲ上部（黒色腐植、多量の材化石を含む）
- 10 b. 泥炭Ⅲ下部（黒色腐植）
11. 暗灰色粘土（腐植含む、粘性強い）
12. 灰色粘土（粒子の細かい粘土、標高の高い所で砂質、低い所で粘質になる、ラミナ状に砂や礫を含む部分がある）
13. 暗灰色土（泥炭Ⅱの間層、腐植含む）
14. 褐色土（やや粘性あり）
15. 暗灰色火山灰（始良Tn火山灰の風化・汚染したもの、上位文化層包含層）
16. 黄色粘土（上部ほど黄色強い、下位文化層包含層）



第8図 土層柱状図

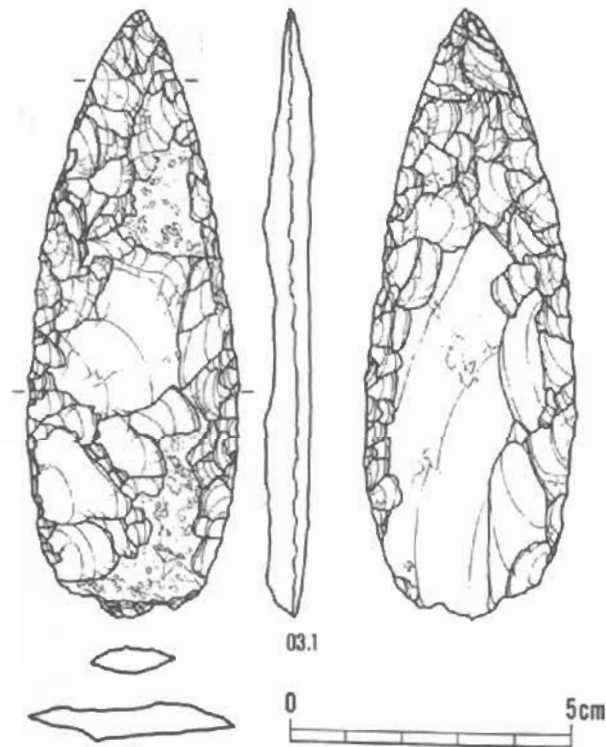
第1節 土層

層中にあり、これを挟んで泥炭層の発達が顕著な点が低所での最大の特徴であろう。

土層断面図を掲げる（第10～13図）。

板井寺ヶ谷遺跡全体の土層堆積状況を勘案すれば、H6区とP11区の土層の堆積段階は、以下のよう  
に整理できる。

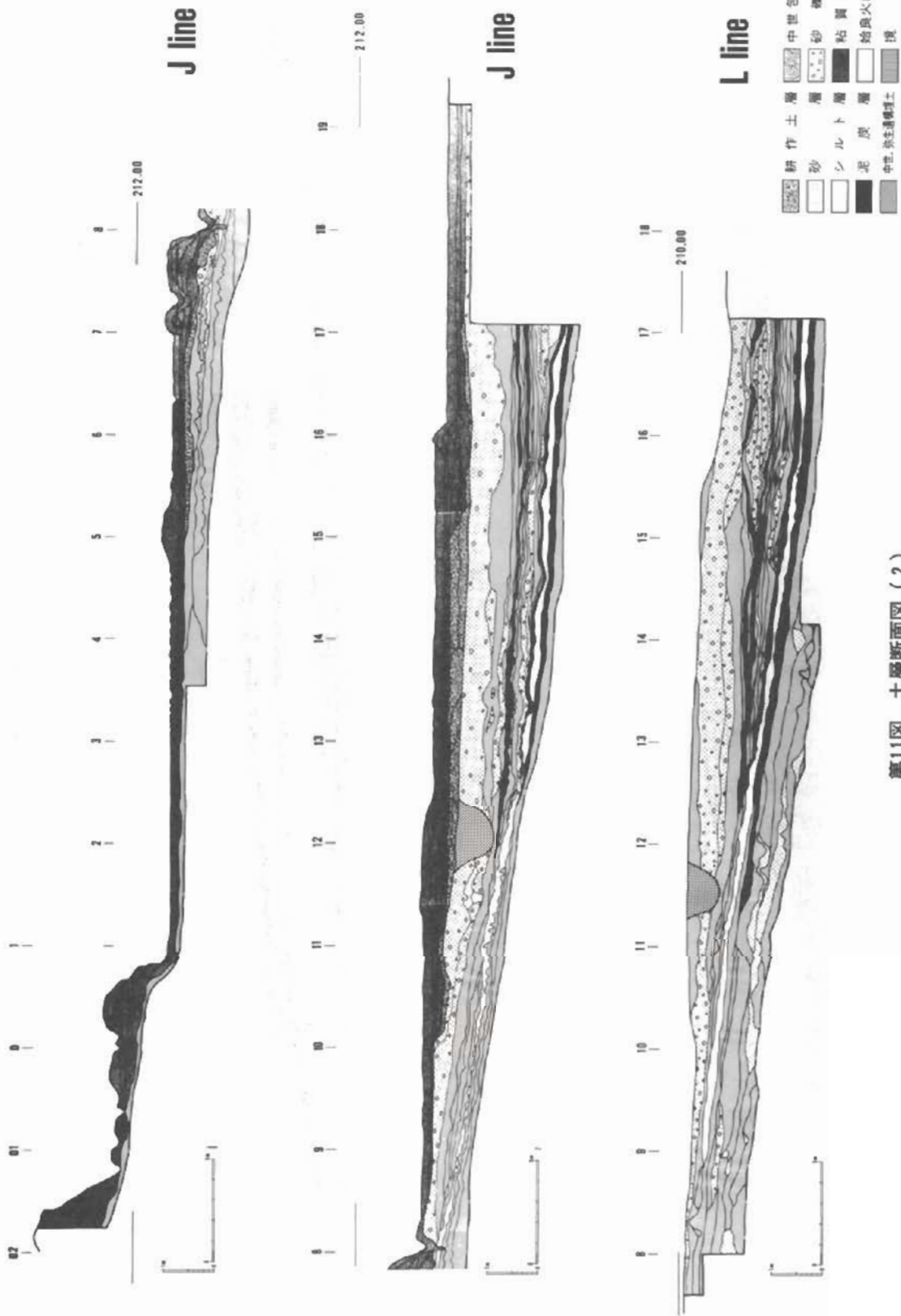
	H6区	共通層	P11区
1	耕作土（1）・床土（2）・造成土（3）		
2			中世包含層（4）
3	砂礫（5a・5b上部）		砂礫（5）・泥炭I（6）
4	砂礫（5b下部、上位火山灰包含）		上位火山灰（7）
5	暗灰色火山灰（15）		泥炭II（8）
6	下位火山灰（9）		
7			泥炭III（10）
8	黄色粘土（16）		泥炭III（10b）下部・暗灰色粘土上面（11）
9	灰色粘土（12）		



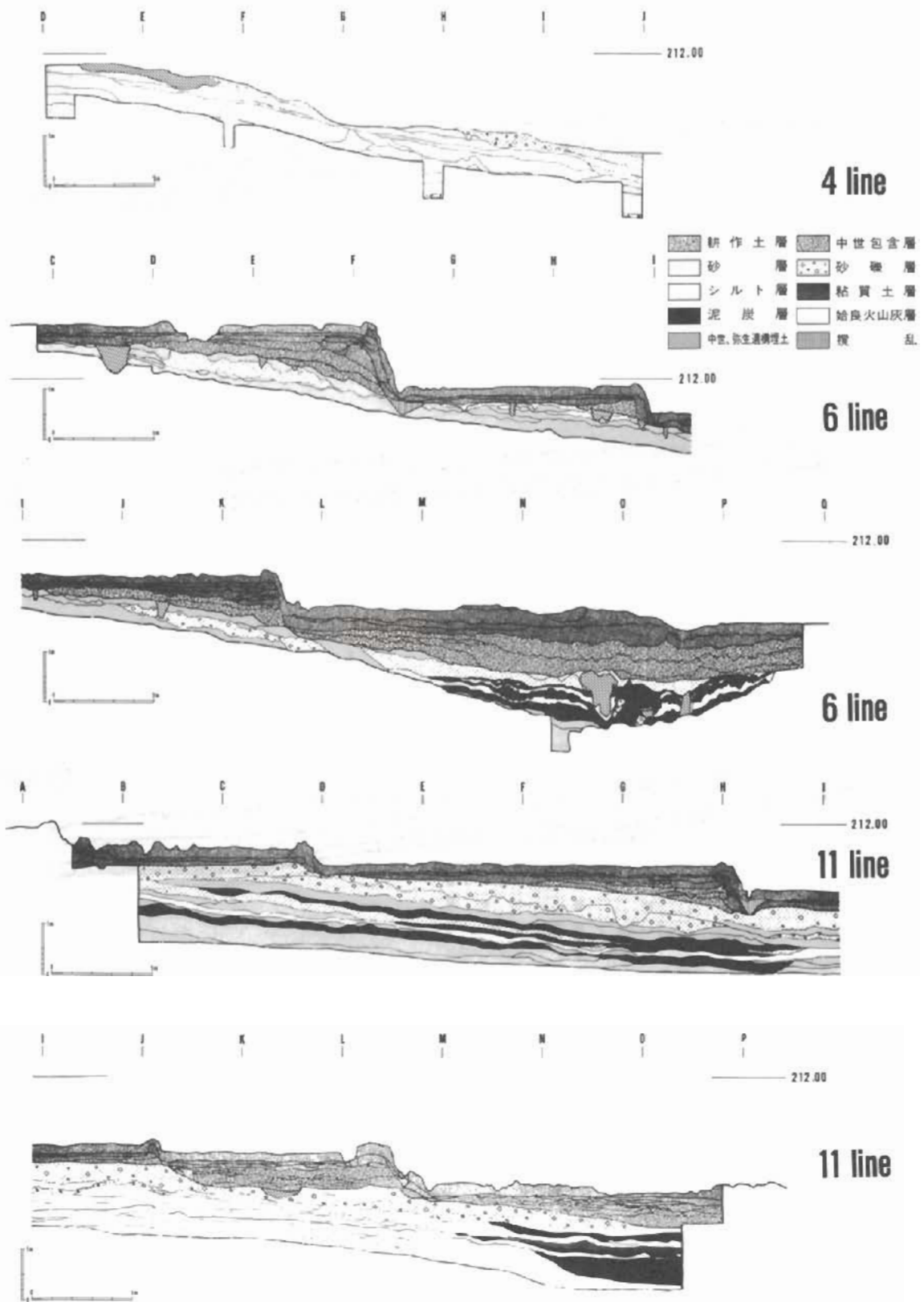
第9図 尖頭器実測図



第10図 土層断面図 1

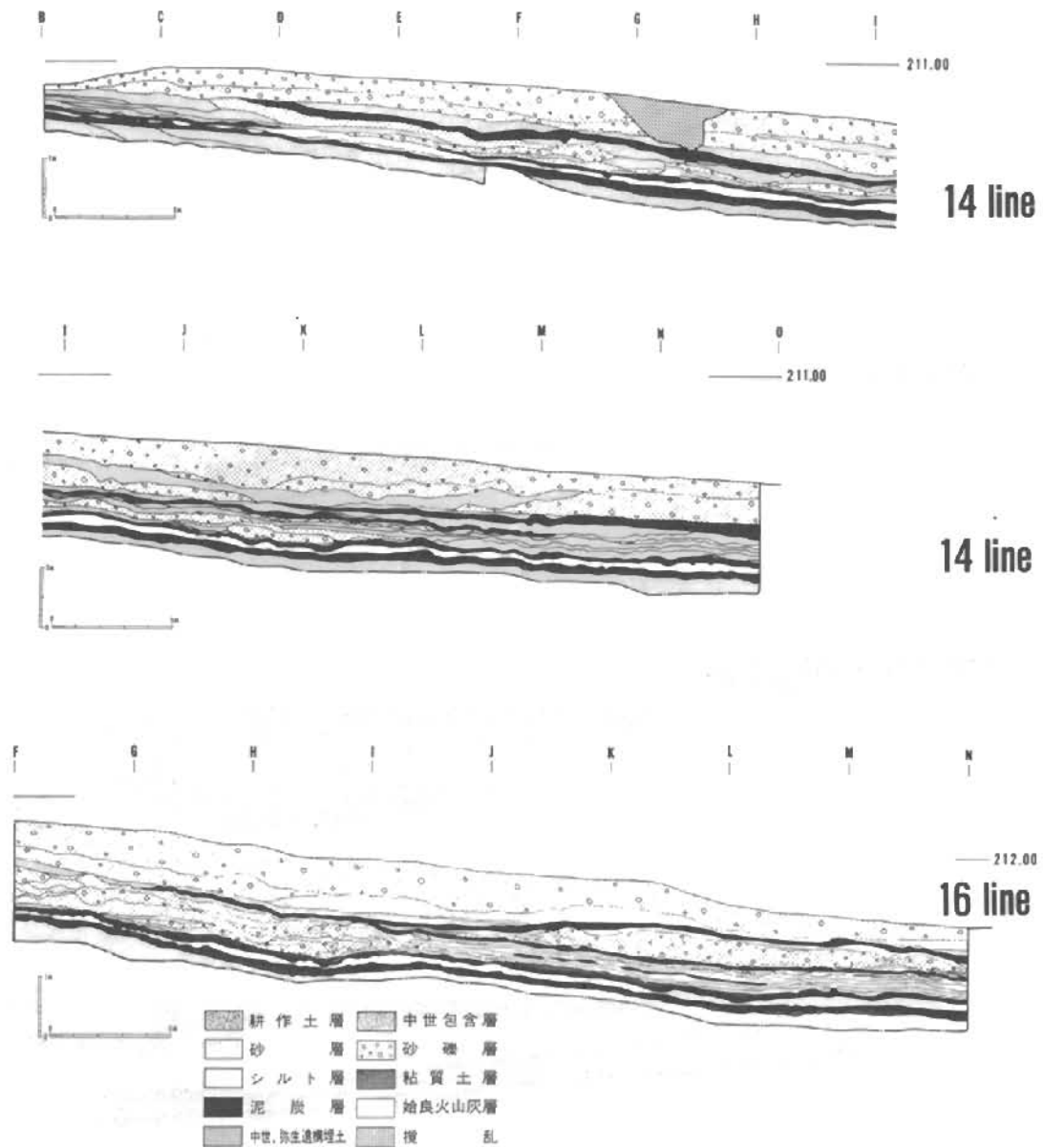


第11図 土層断面図 (2)



第12図 土層断面図 3

第1節 土層



第13図 土層断面図 4



## 第2節 土層の成因

ここでは、まず遺跡全体の土層の成因について概観し、南北の堆積環境の相違をつくった過程を検討しておきたい。

板井寺ヶ谷遺跡は、山地部から平野部へ延びる扇状地形にあり、本来の基盤である中・古生岩盤が調査範囲には認められなかった。発掘深度最下底で認められる灰色粘土の山地近くの断ち割り部には、ラミナ状に砂が含まれる部分が散見される。灰色粘土は、遺跡の立地する扇状地形成時の堆積物であると考えられる。調査地北の道路を隔てた山切り通しには岩盤が露頭しているの、調査地直前で基底岩盤は深く埋没しているものと推定できよう。

板井寺ヶ谷遺跡では前述のように発掘調査範囲の灰色粘土より上位に、低地・高地の2つの堆積環境を有している。それぞれの堆積背景を見てみたい。

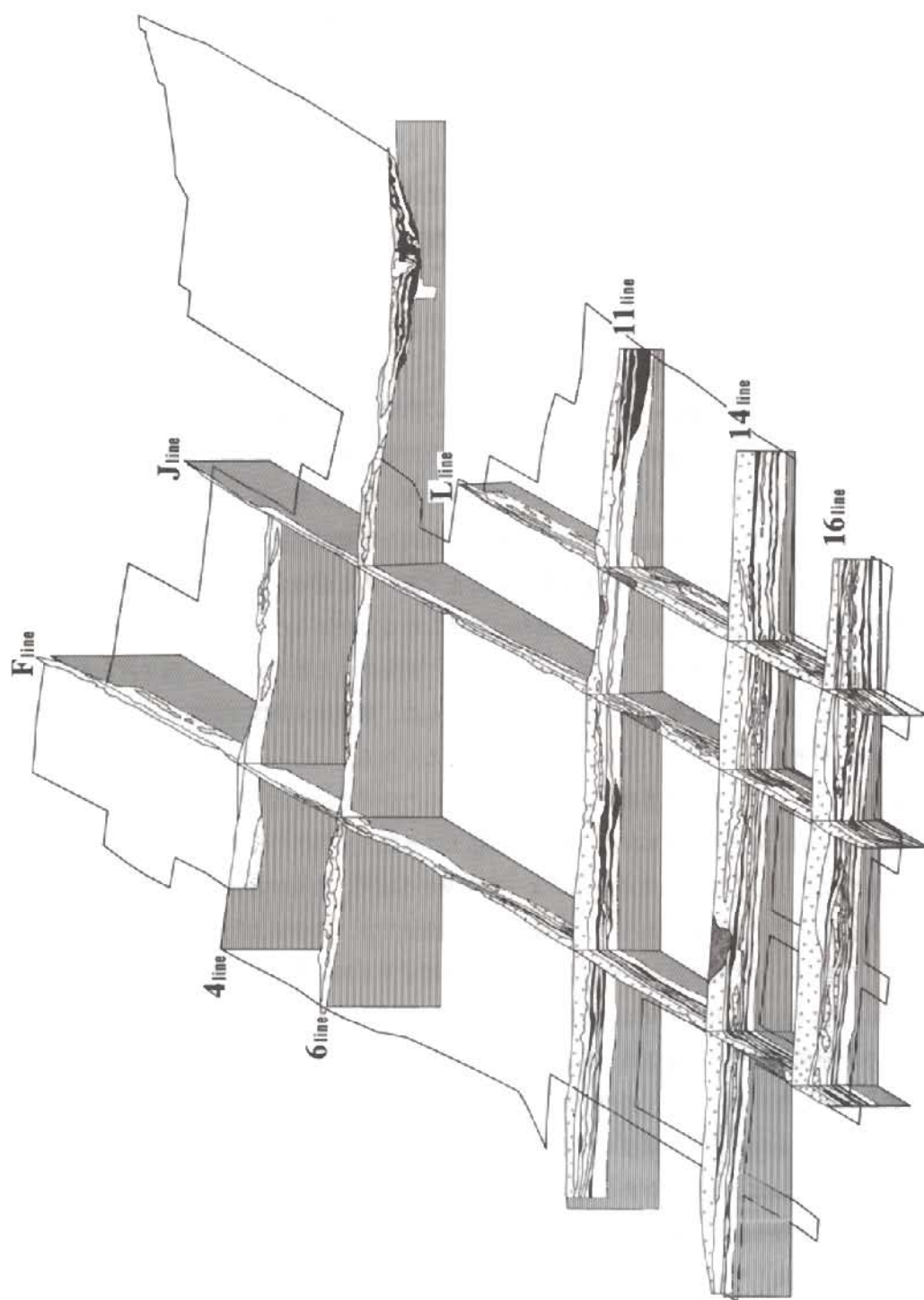
低地の泥炭層には、未分解の腐植が多量に含まれ、泥炭の形成が湿潤な環境下で行なわれたことを示している。板井寺ヶ谷遺跡の泥炭層中の珪藻化石を分析した佐藤と堆積環境を分析した青木は、泥炭層形成期から埋没・平坦化の状況を以下のように説明した（佐藤、第七章第4節、青木、第七章第5節）。

泥炭Ⅲの形成期には調査区南半で表面に水はないものの湿潤な環境が出現し、泥炭Ⅱの上半が堆積する頃から流水があり水位が上昇、泥炭Ⅰ下底堆積の頃に止水面のある環境が出現した。南半は、一時水没した可能性もある湿潤な環境が泥炭Ⅰ～Ⅲの時期に継続したことが知られた。3枚の火山灰は、泥炭堆積中の一時期の表面に一斉に降灰した結果、純粹層として面を持つこととなった。南半は、泥炭の堆積と遺跡西方から流下する扇状地堆積物により次第に埋められ、最後は大規模な氾濫・洪水の度に西の谷から供給された砂礫によって埋没・平坦化したものと考えられる。

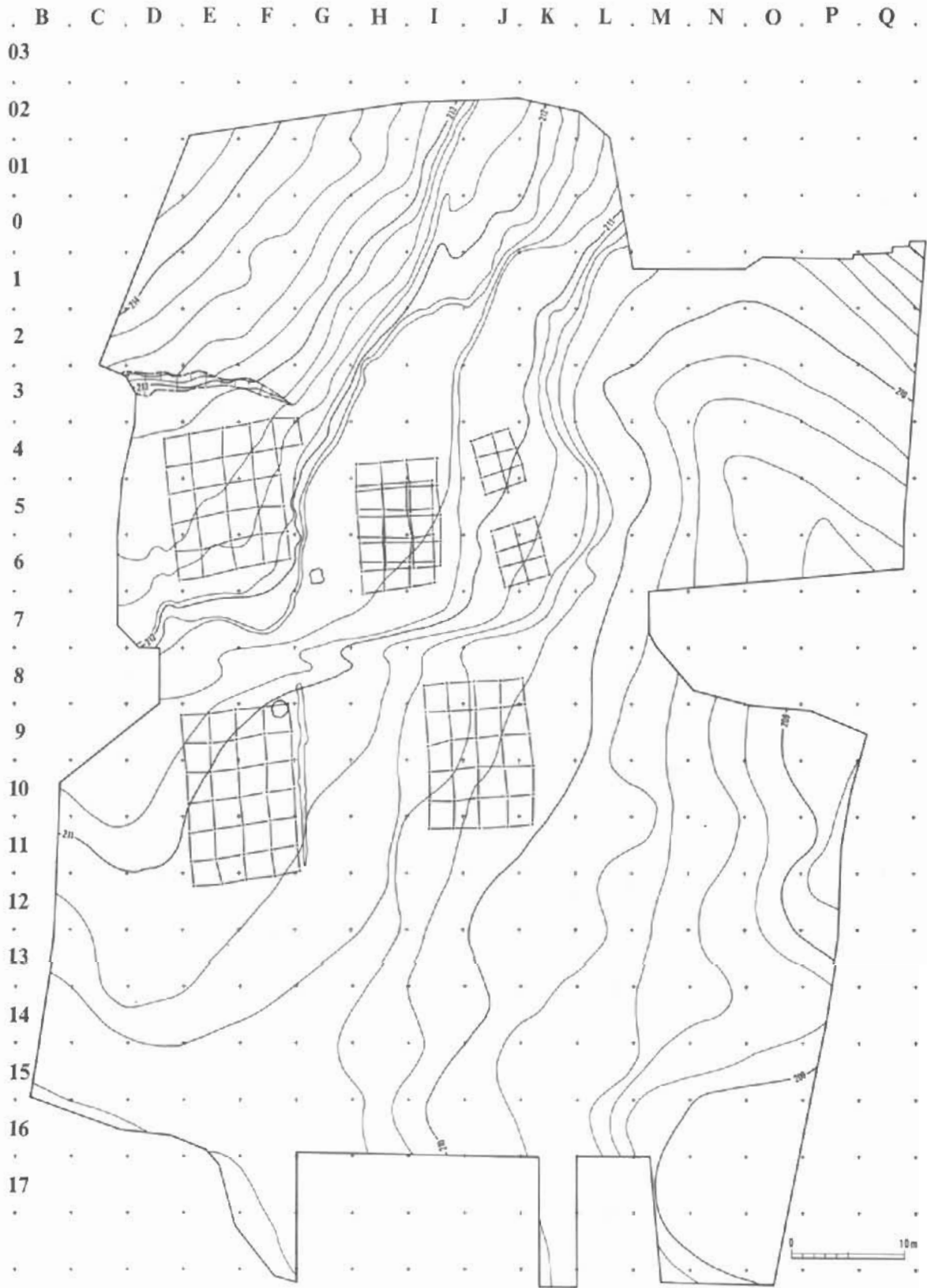
北半では、南半のような泥炭層の堆積はなく、また西からの砂礫堆積は活発ではない。灰色粘土の上にある黄色粘土は、扇状地形成時の堆積物である灰色粘土の風化・土壌化の始まった部分であると推定される。扇状地形成から始良Tn火山灰の降灰によって埋没するまで、堆積が活発でない部分で灰色粘土表面が長い年月露出していた結果であろう。発掘作業中の感覚では、黄色粘土と灰色粘土の触感に大きな差異はなく、色調のみが区別された。始良Tn火山灰はほぼ北半全域を覆うが、その上部が暗灰色火山灰になっている。暗灰色火山灰の生成は、始良Tn火山灰が降灰した後すぐに埋没しなかったため、露頭状態が続き、その上部が風化・汚染された結果であると竹村は示唆している。北半の砂礫はおそらく遺跡後背の山地から供給されたもので、岩盤の破碎礫を含んでいる。南半の砂礫供給時期とはほぼ前後した堆積である。北半は、全体に土層の堆積が不活発で、黄色粘土や暗灰色火山灰のような風化・土壌化層の形成が認められる点に大きな特徴がある。

第14図は、土層断面図を配した鳥瞰図である。

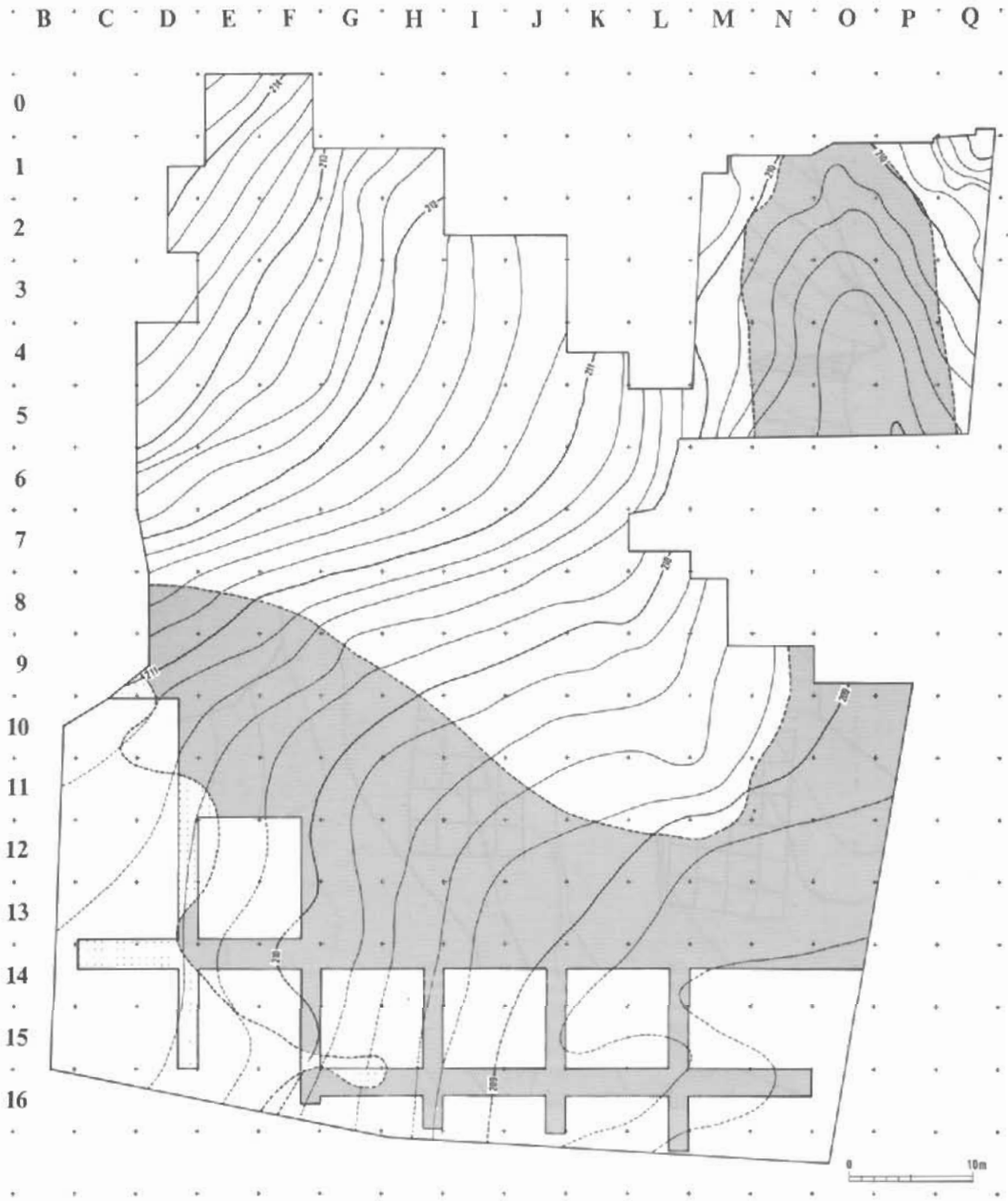
板井寺ヶ谷遺跡が埋没していく各段階のうち、旧石器文化層相当期のもので後で記載する上・下文化層相当のものを除いて、第15図に中世遺構検出面相当期の等高線図を、第16図に泥炭Ⅰ直上・相当面等高線図を、第17図に泥炭Ⅰ分布範囲図を、第18図に泥炭Ⅱ上部分布範囲図を示す。（山口）



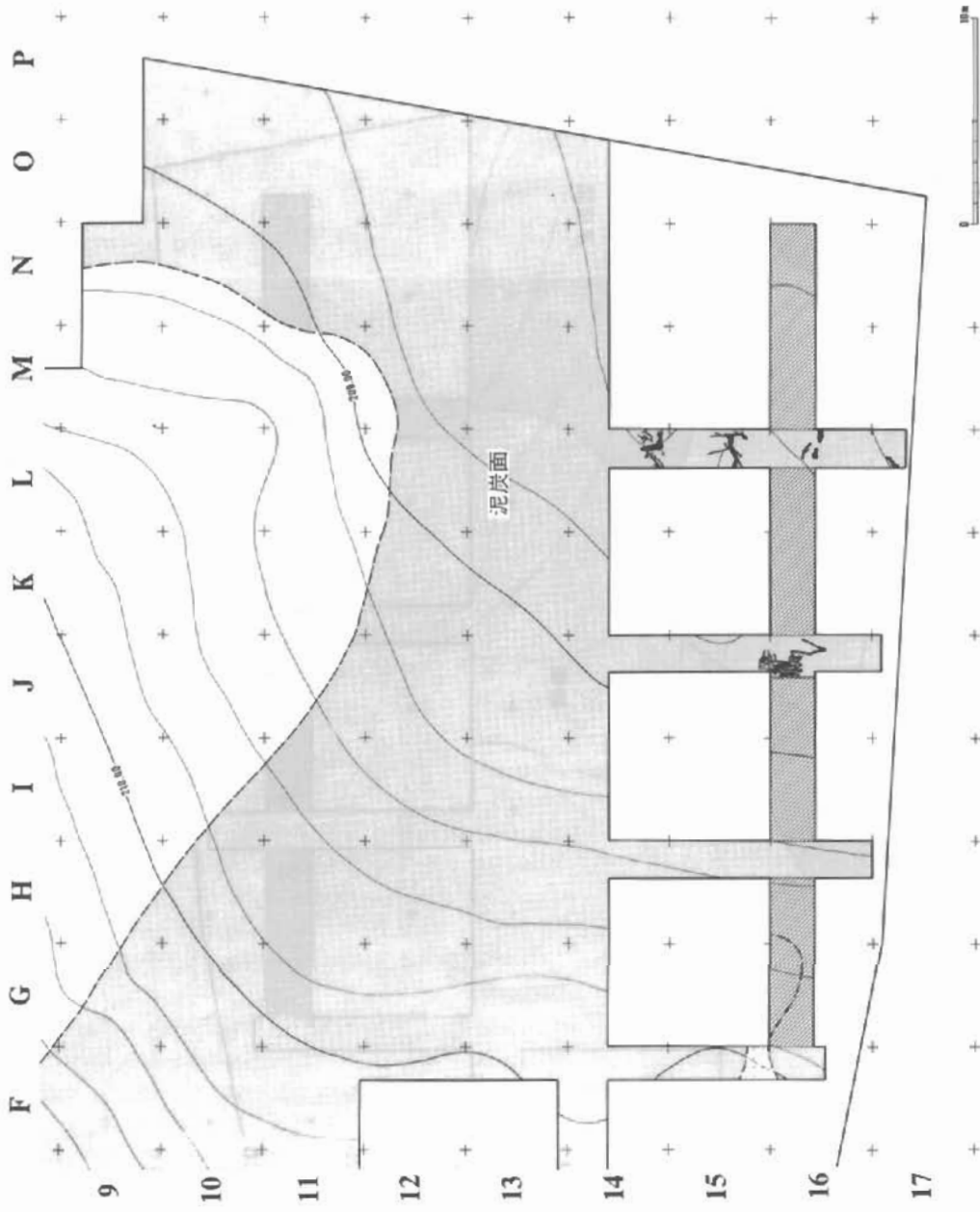
第14図 パネルダイアグラム



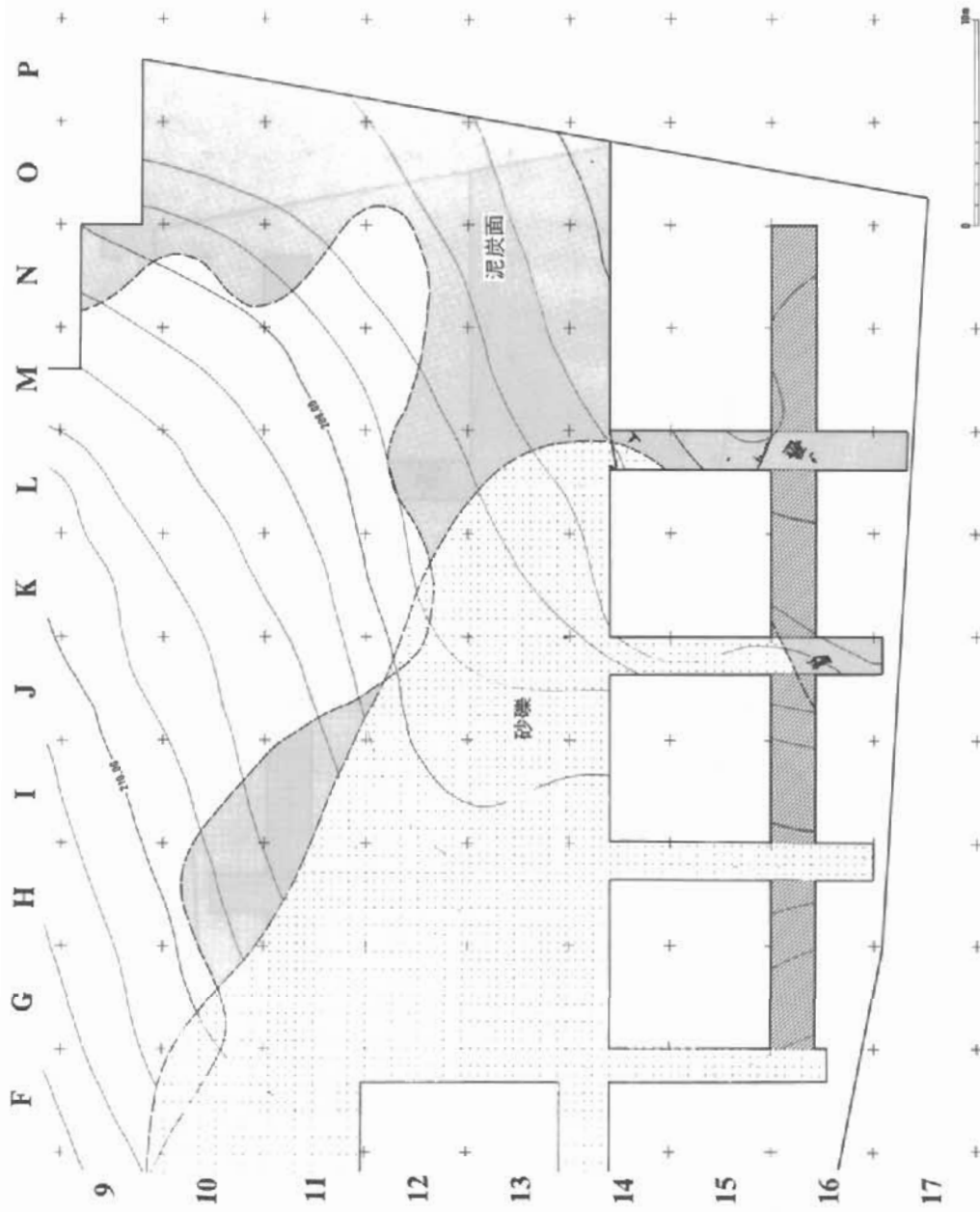
第15図 中世遺構検出面等高線図



第16図 泥炭I直上・相当面等高線図



第17図 泥炭 I 分布範囲図



第18図 泥炭面上部分布範囲図

### 第3節 遺構・遺物の検出層準と年代

#### 1. 遺構・遺物の検出層準

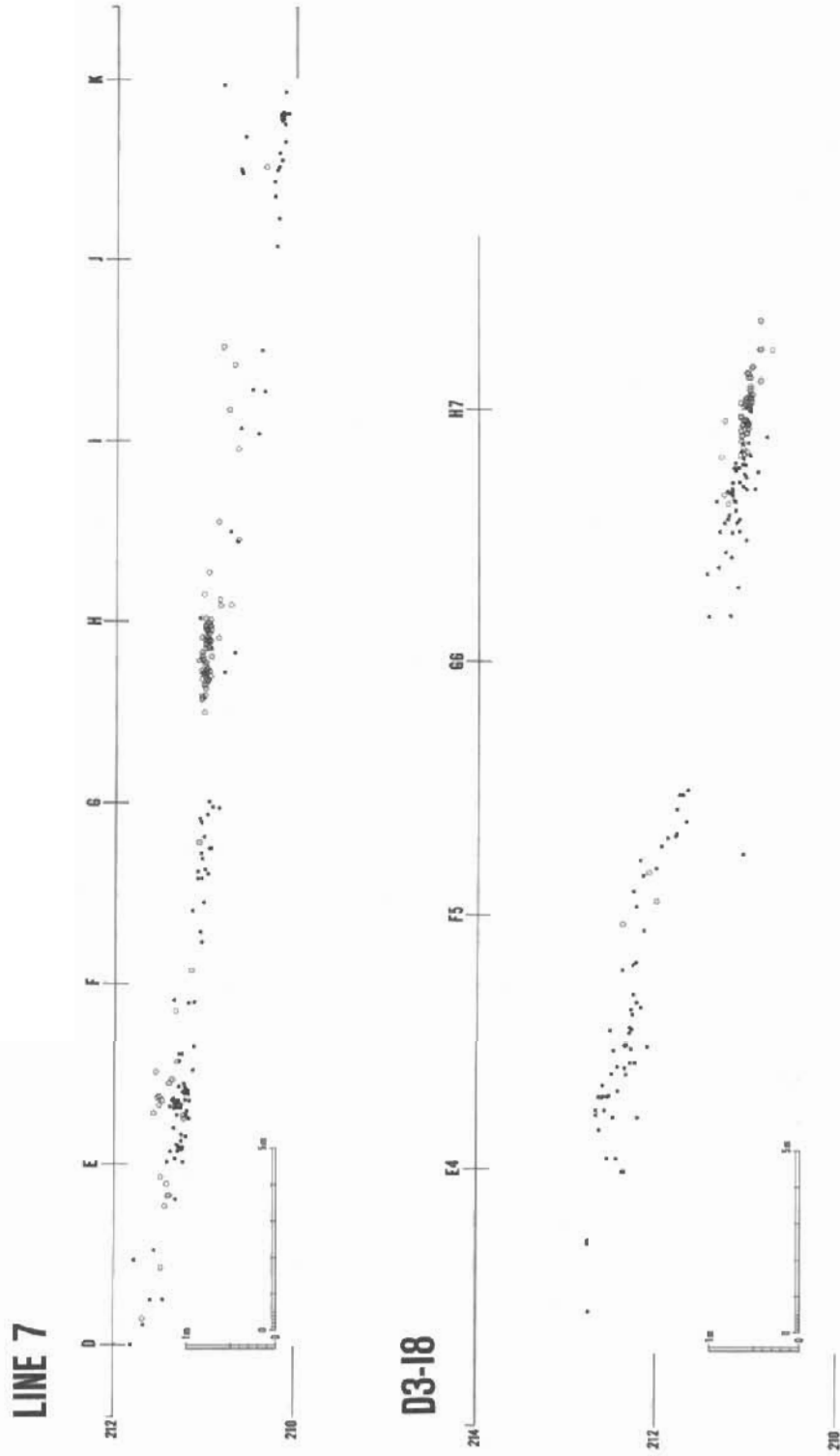
遺構・遺物は、2つの層準から出土した。一つは、始良Tn火山灰上部の暗灰色火山灰層中で、その上部に包含される。もう一つは、北半で始良Tn火山灰下の黄色粘土、南半で泥炭Ⅲ最下部と暗灰色粘土上面である。それぞれを上層・下層、上位文化層・下位文化層とする。

上層・上位文化層の遺構は、調査区北半の暗灰色火山灰の上半に包含され、礫群の下面が揃う。土壌は、その堀込み面の確認が困難であったことから、下位火山灰(始良Tn火山灰)を除去した後、黄色粘土層上面になって発見された。暗灰色火山灰層は本来始良Tn火山灰そのものであり、始良Tn火山灰が風化・土壌化を始めて後、上層・上位文化層の遺構と遺物はその表面に残され、その中に巻き込まれるように埋没したものと考えられる。始良Tn火山灰の風化・汚染の行なわれた時期には、始良Tn火山灰の上半部はかなり動かされる環境にあったといえよう。遺物は、暗灰色火山灰層全体に包含されている。遺構下面よりも下から出土する遺物があり、始良Tn火山灰の純粹層がわずかしかない部分では、下位文化層の遺物の浮き上がりがある可能性がある。

下層・下位文化層の遺構は、調査区北半で黄色粘土層中に包含され、配石・配石群・礫ブロックなどの下面が揃う。土壌は、本来黄色粘土層中に堀込み面を持つが、その堀込み面の確認が困難であることから、黄色粘土を除去した後、灰色粘土上面になって確認されたものが多い。南半の湿地部では、泥炭Ⅲと暗灰色粘土の層理面上に配石が下面を揃える。北半の黄色粘土は、灰色粘土が土砂の供給に乏しいまま長期間露頭したために風化・土壌化したものと考えられるが、配石などがほぼ完全に埋没した状態で発見されるのは、始良Tn火山灰降灰以前かなり先行する時期に残されたからであろう。土壌の堀込み面が黄色粘土層中で確認しにくいのは、露頭期間が長期にわたった場合土壌の上部がすでに破壊されているためである可能性もあろう。黄色粘土は、北から南に行くにしたがって層厚を減じるが、遺構遺物の埋没程度も北の方が深く南が浅い。湿地部では、配石は暗灰色粘土上面に置かれている。南半の湿地部で配石の下面が揃う暗灰色粘土は、腐植質を混じらせ、下の灰色粘土が再堆積した可能性が考えられる。層理面上に配石があることは、泥炭Ⅲの形成が始まるのとほぼ同時に遺構が残された証拠であると考えられる。

第19図に調査区北西端から南東方向への上位・下位文化層の遺物垂直投影図を掲げる。上位と下位の文化層の遺物は、断面上ではほとんど接して投影される。地形の傾きによって両者が交錯する部分があるが、陸地部での上層と下層の間層として、始良Tn火山灰純粹層が薄くしか存在しない事による。発掘時には、暗灰色火山灰と始良Tn火山灰純粹層、始良Tn火山灰と黄色粘土は色調・土質が異なり、層位別掘り下げが容易であったことから、取り上げ層位の混乱はない。ほぼ発掘区9列より以南の南半の湿地部に突出する陸地上では、下位文化層遺物の埋没程度が浅く、一部の遺物は黄色粘土面上で始良Tn火山灰に巻かれるように出土した。この上の暗灰色火山灰中には、上位文化層遺物の分布は広がらず、土層を基にした区分は困難があるが、遺物分布の平面的範囲によって下位文化層所属の識別が可能である。

発掘区中央に広がる上位文化層遺物分布は、暗灰色火山灰中にあり、下位文化層とは始良Tn火山灰によって隔てられている。ところが、上層から出土した石器類遺物の中に、技術形態学的に下層のものとの差異のないものが多く含まれ、チャート製石器類を中心として個体識別・接合作業によって下位文化層



第19図 遺物垂直投影図



の遺物が上層に浮かび上がっていると考えられた資料が存在する。個体の資料数と分布が圧倒的に下位文化層に比重がある場合など、個体識別と接合作業の結果、下層から上層への浮かび上がり資料と考えられるものが認められた。確かな上層から下層への沈み込みは認められない。この遺物の層間移動現象の原因はよく分からないが、下位文化層の遺物が残されてから始良Tn火山灰が降灰するまで長期間露頭していた可能性が高いこと、始良Tn火山灰も風化・汚染され、純粋層が僅かしか残らないほど動きがあった可能性がある点などに関係があるものと考えられよう。

個体識別と接合によって下位文化層所属遺物であると認められたものは、上位文化層の組成から外して記述・分析の対象から除外し、下位文化層所属のものとして扱う。下位文化層での扱いは、これらが原位置から遊離していることが明らかのため、石器の形態記述・技術的考察など個別的観察をするに止め、遺物分布分析の検討対象からは除外する。また、層位の判別がつく状態で表面採集された遺物についても、文化層毎に個別的形態記述をするに留めておく。

## 2. 文化層の年代

板井寺ヶ谷遺跡の南半に認められた泥炭層は、山田により放射性炭素年代測定が行なわれ、上位・下位文化層を挟んで長期間にわたって形成されたものであることが明らかになった（山田、第Ⅶ章第2節）。この放射性炭素年代測定結果と火山灰の同定結果（竹村・檀原、第Ⅶ章第1節）、層序を総合化して上位・下位両文化層の年代を考察してみよう。

板井寺ヶ谷遺跡泥炭層Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの放射性炭素年代測定結果は、19,600～26,000年前までの間に分布している（山田、第Ⅶ章第2節第1表）。泥炭層に大きな不整合面がないことから、連続した形成が行なわれたことが知られる。測定年代は、ほぼ上から下に次第に大きくなるように並んでいるが、いくつかの部分で順序に混乱がある。周りの数値に比べて大きい数字を出したのが泥炭Ⅱb・泥炭Ⅲa下部で、小さく出たのが始良Tn火山灰中である。大きく出た部分は、木材をサンプルにした部分で、泥炭そのものをサンプルにしていない。木材は、土層の崩壊時などに再流木化する事が考えられ、数値には信を置きにくい。始良Tn火山灰層中には、本来炭化物が含まれず、上位からの浸透・汚染である可能性が高い。問題のある測定結果を排除すれば、測定結果は上下に整列する。始良Tn火山灰の上下の測定値は、上で $21,500 \pm 230\text{BP}$ 、下で $23,600 \pm 200\text{BP}$ で、ほぼ23,000年前の降灰推定と矛盾しない。

上層・上位文化層は北半の暗灰色火山灰に包含される。この暗灰色火山灰を南北の層序関係を対照させれば、南の始良Tn火山灰降灰以後、泥炭Ⅱの堆積時期のいずれかに相当することが知れる。放射性炭素年代測定結果で $20,400\text{BP} \sim 22,700\text{BP}$ の測定結果がある。

下層・下位文化層は、北半の黄色粘土、南半の泥炭Ⅲ下部と暗灰色粘土層上面に包含される。南の泥炭Ⅲ下部の放射性炭素年代測定結果で $24,900 \pm 320\text{BP}$ と $26,000 \pm 340\text{BP}$ 、暗灰色粘土の $25,800 \pm 440\text{BP}$ があるので、ほぼ25,000～26,000年前の年代を考慮できよう。泥炭層中から発見された炭化物密集箇所  
の炭化物の年代測定結果も、ほぼこの前後の数値を示す。 (山口)

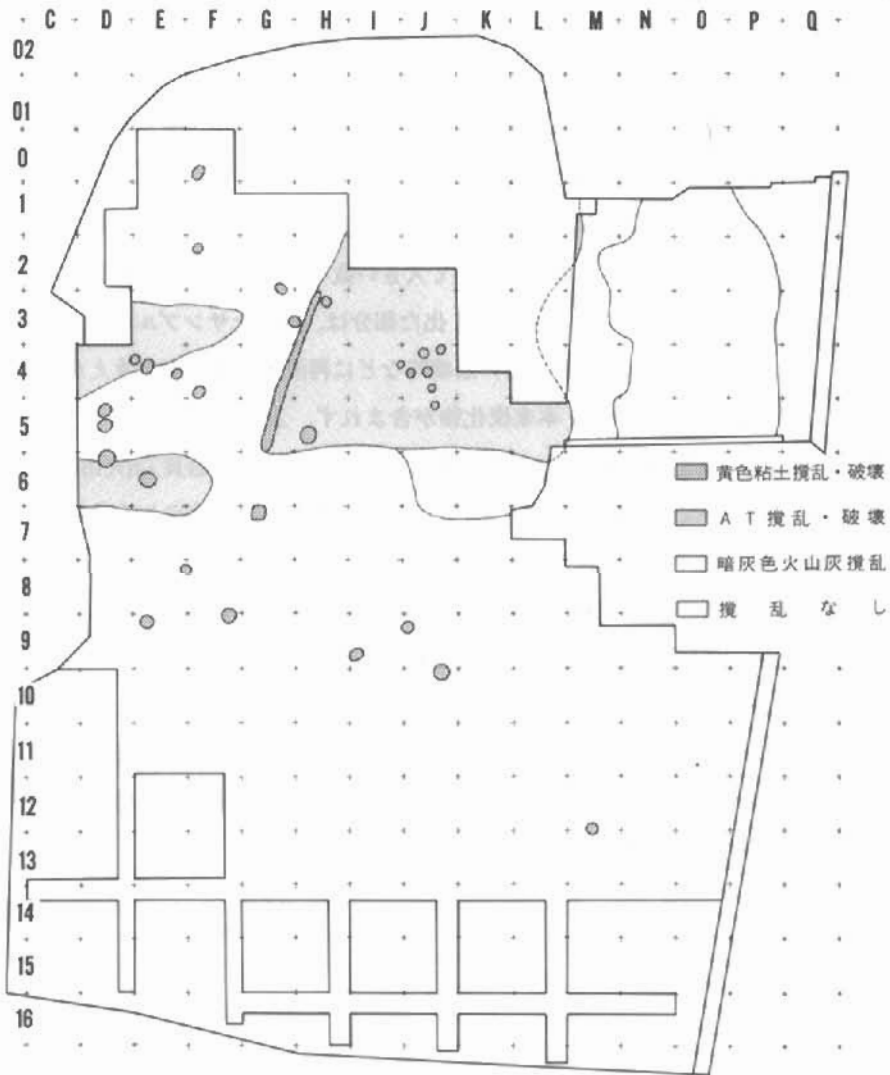
### 第4節 遺跡の遺存と攪乱・破壊深度

板井寺ヶ谷遺跡の上位・下位の両文化層が残された後、上に堆積層が形成されて保存されたが、後の弥生・中世期に破壊されたり攪乱されたりした部分があるので、第20図を示して記述しておく。

弥生期には、砂礫（5）の上面付近に生活面があり、ここから多数の土壙が南地区を中心に掘られた。南地区の砂礫は厚く、旧石器時代相当の層序まで破壊したところは僅かである。中世期には、南半で砂礫上、北半では斜面地を削平した造成面に生活面があり、掘立柱の建物などが配される。南半では井戸が旧石器時代相当層まで破壊している。北半では、旧石器相当層上の堆積土が薄いため、G5区から北東方向とD・E3・4区が居館造成で始良Tn火山灰を削平されたほか、柱穴と土壙・井戸が黄色粘土層にまで及んでいる。

東地区とJ～L6区は、原因がよく分からないが、暗灰色火山灰が攪乱されている。この周辺の暗灰色火山灰は、粒子が細かく粘質で、一見さらに土壤化が進行した状態であるかのように観察される。また、陸地部分での始良Tn火山灰純粋層層厚は薄く、暗灰色火山灰下の遺存は僅かで、局地的に認められるに過ぎない。

(山口)



第20図 攪乱・破壊深度範囲図

## 第IV章 下位文化層の調査

### 第1節 下位文化層の遺構

#### 1. 下層の微地形

板井寺ヶ谷遺跡下位文化層の遺構・遺物は、調査区北半の陸地部で黄色粘土層、南半の湿地部で泥炭Ⅲ最下部と灰色粘土上面から検出された。黄色粘土は陸地部であった部分に形成された風化層であり、下位文化層の遺構・遺物は風化土壌形成時に残されたものであることが知れる。湿地部では、泥炭Ⅲの最下部から灰色粘土上面に遺構・遺物の検出層準があることから、泥炭Ⅲ形成開始直後に残されたものであると考えることができる。ここではまず、遺構の配置される調査区内の微地形について記述しておきたい。

調査区内の微地形の成因・環境を検討するための珪藻・火山灰・植物遺体などの自然科学的分析は、第VII章で行なった。子細は後章で検討することにして、ここでは調査区内の微地形特徴を簡単に記述したい。

始良Tn火山灰は、発掘区ほぼ全域に降灰が認められる。ほとんどの場所で純粋層が認められることから、始良Tn火山灰は降灰時直前の地形を直下に覆っていることになる。特徴のある始良Tn火山灰の層を取り去ることによって剥ぎ出される面が、発掘調査時に最も容易に調査区南北全体で同時面を確認できた旧地形面であった。

下位文化層の遺構は、黄色粘土と泥炭Ⅲ最下部・灰色粘土上面に位置している。黄色粘土は約20～30cmの層厚を持つ。泥炭Ⅲは、調査区南東の厚い部分では、70cmを越えるが、ほとんどの部分では、20cm前後となっている。下位文化層期の地形と始良Tn火山灰降灰直前の微地形では、ほとんど差異が無いことが知れよう。下位文化層相当期の微地形を始良Tn火山灰直下の埋没地形によって置き換えて、説明したい(第21図)。

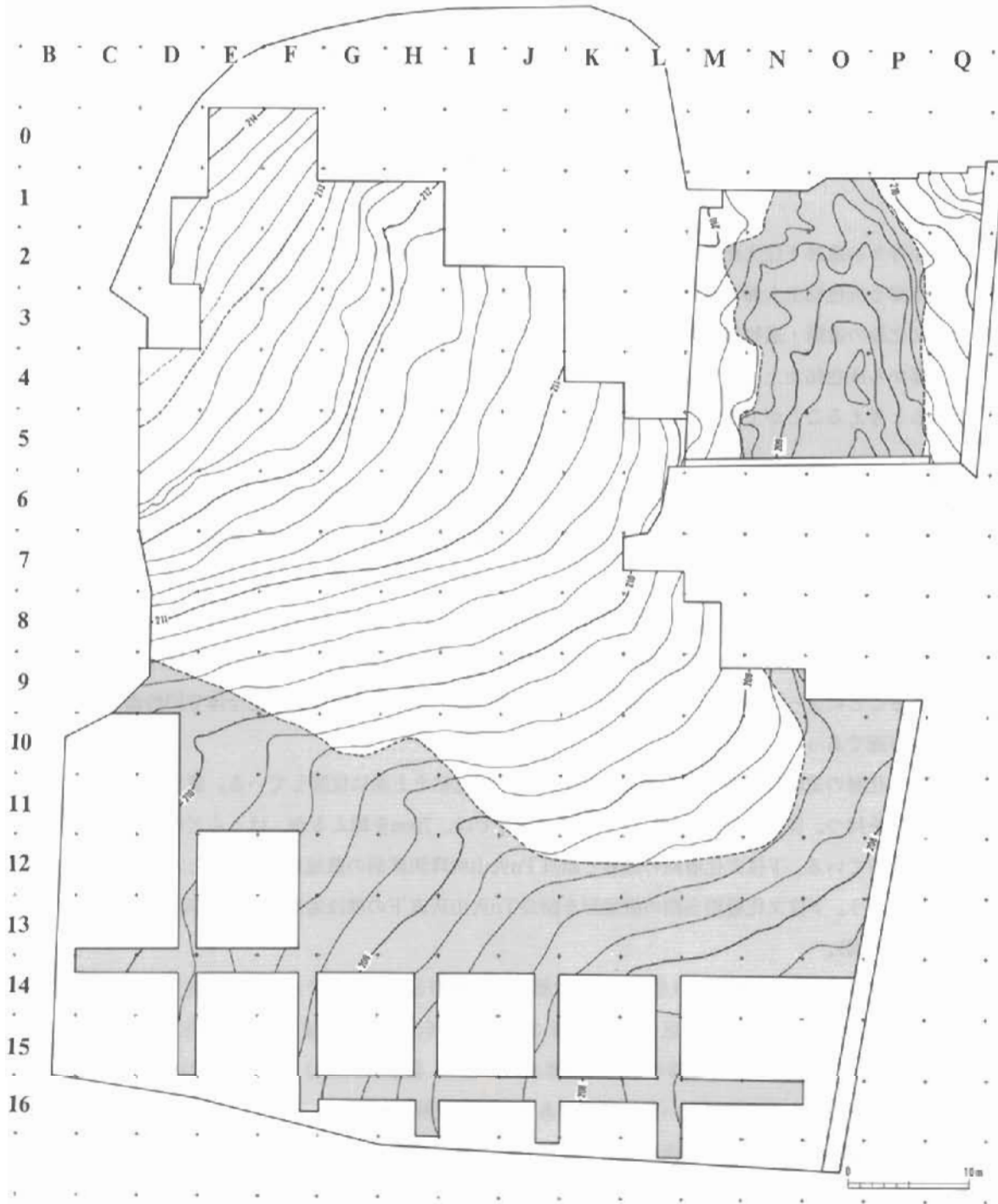
始良Tn火山灰直下の埋没地形を、下位文化層期の微地形とほぼ同様であったと推定すれば、調査区の最高所は調査区北端西隅のE0区で、標高214.20m、最低所は調査区南端東隅のN16区で、標高207.40mである。また、調査区の南端西隅のC14区は標高210.10m、北端東隅のQ1区は標高210.90mとなる。基本的に、北西から南東方向に傾いた傾斜面であることが理解される。

調査区の傾斜面は、北西から南東方向へ隆起した部分があり、等高線は調査区中央で舌状に流れる。E4区からN9区にいたる部分に僅かな稜線の形成があり、稜線の北側では東に、南側では南への分水が行なわれる。E6区周辺にやや傾斜のきつい部分があるほか、傾斜は均等で、5m毎に約50cmの傾斜となっている。

G列からL列の2区から5区までの範囲に非常に緩やかな部分があるが、中世期の削平によって始良Tn火山灰層以上が失われた部分に当たる。H列では黄色粘土層上部の一部も失われた可能性がある。

始良Tn火山灰直下で泥炭Ⅲが広がっていた部分は、西から東へD9区の標高210.60mからK12区をへてN12区の標高208.40m、ここから北にN9区の標高208.80m、N5区の標高209.40mをへてN1区の標高209.70mの範囲である。P1区の標高209.80mから4区の209.10mの東側には泥炭Ⅲは分布していない。始良Tn火山灰降灰直前の湿地部は、舌状の微高地を囲むように広がっていたことが知れる。

第1節 下位文化層の遺構



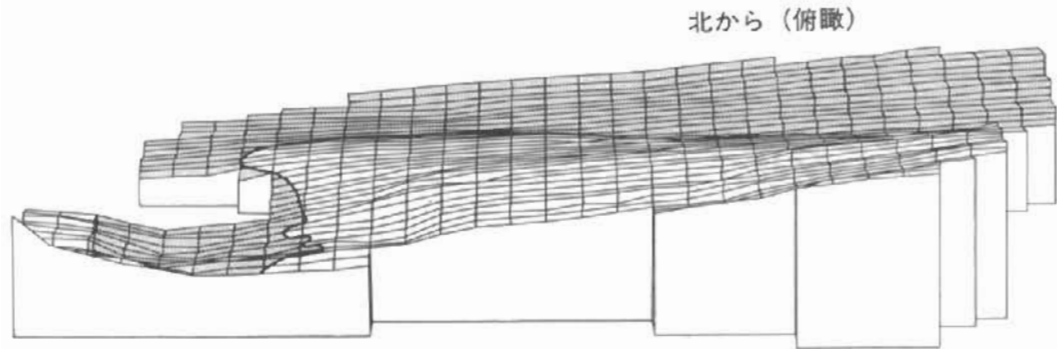
第21図 泥炭Ⅲ直上・相当面等高線図

始良Tn火山灰直下の泥炭面は、陸地部と比べてより平坦ではあるが、水平ではない。調査区内の泥炭Ⅲの及ぶ最高所で標高210.60m、N16区の最低所で標高207.40mである。落差は3.20mにも及ぶ。泥炭Ⅲの形成は、安定水面下で行なわれたとは考えにくい。

泥炭Ⅲ上部には、多数の埋もれ木が存在した(第23図)。埋もれ木は、流木状態のものと根株が座った状態のもの2群があり、根株の座ったものは、始良Tn火山灰直下の泥炭Ⅲとの層理面上に根を降ろしていることから、始良Tn火山灰降灰によって萎死した可能性も考えられる。J13区では、始良Tn火山

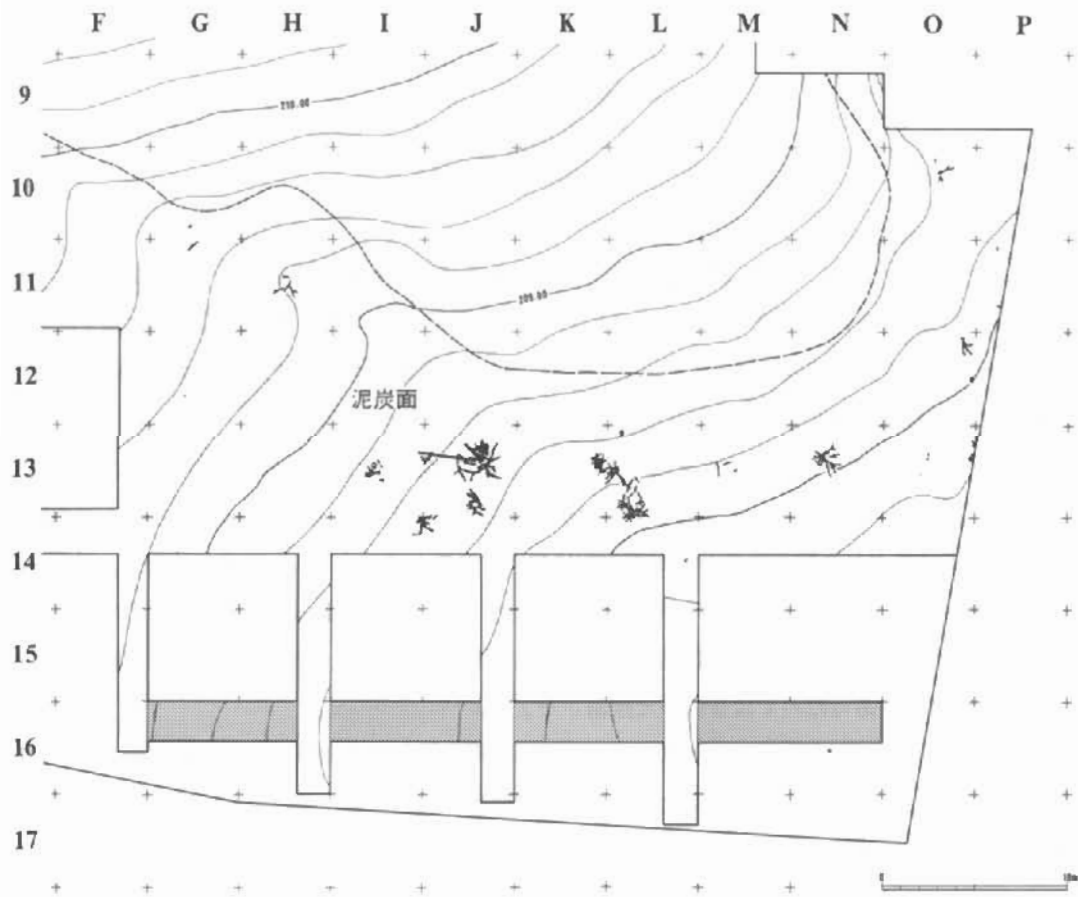


南から (水平)

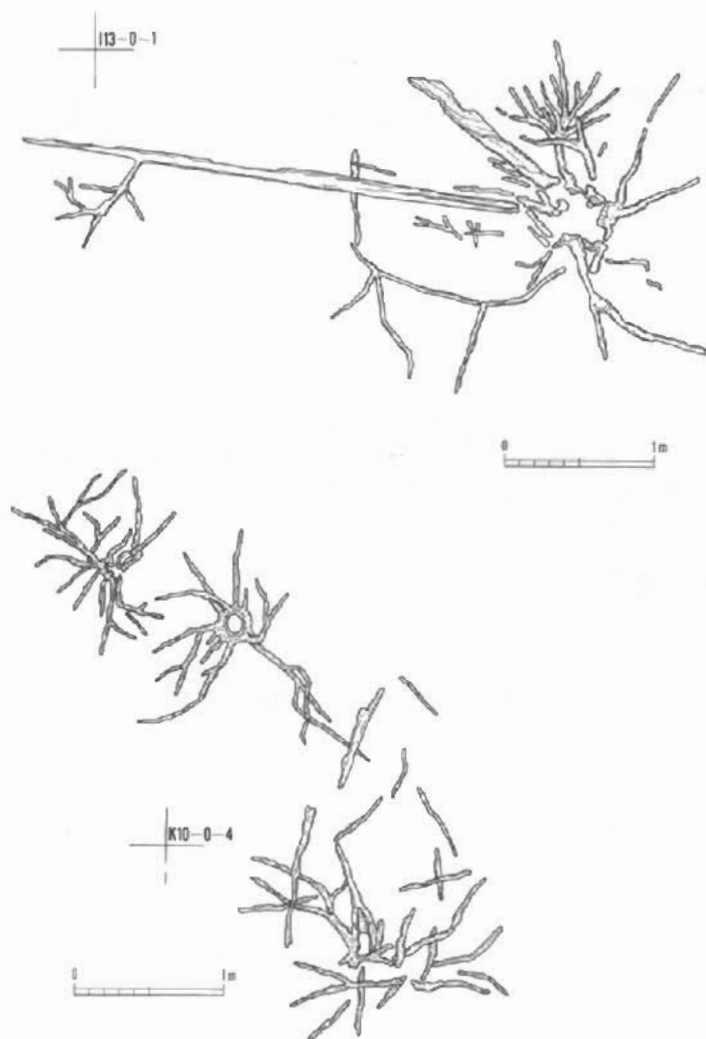


北から (俯瞰)

第22図 A T層直下の微地形



第23図 泥炭Ⅲ上部範囲図

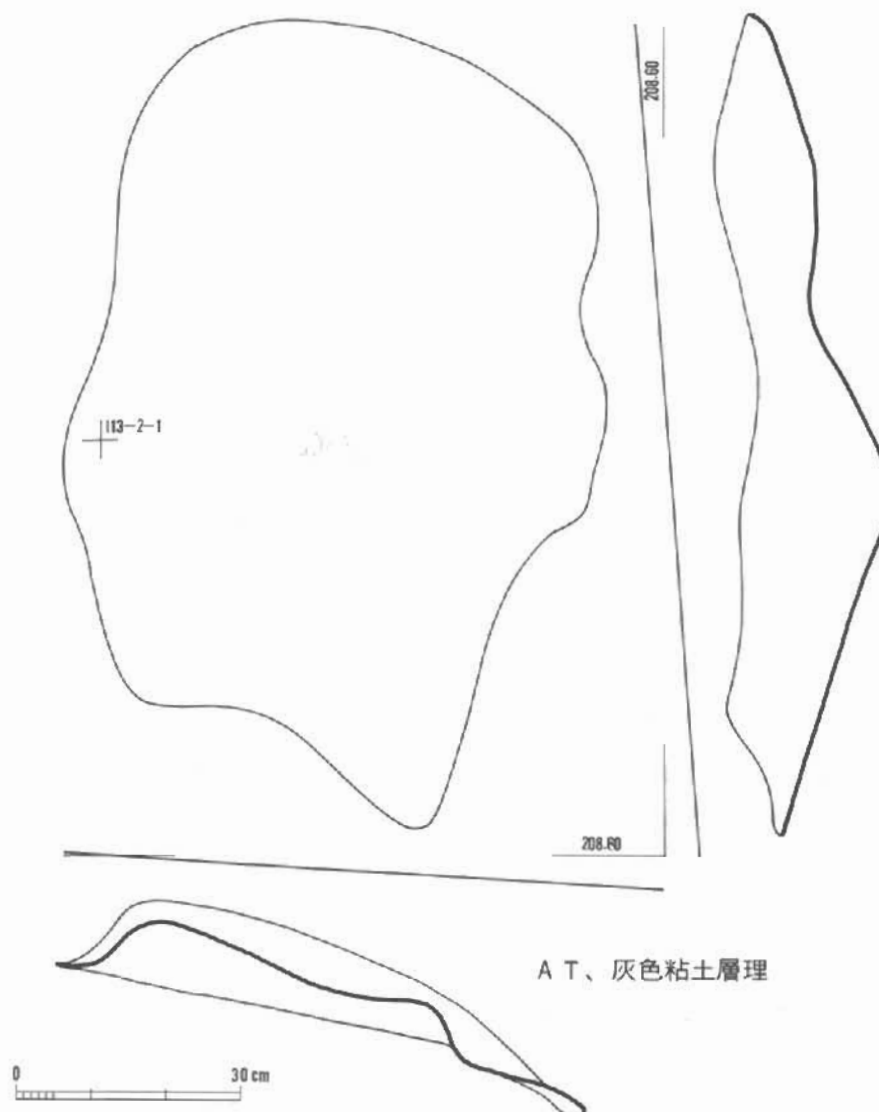


第24図 泥炭Ⅲ直上出土埋木実測図

灰直下に根株を持った倒木状態の埋もれ木が発見された。樹種はハンノキ類で、幹を西に倒す。L13区でも、3本の根株が並んで発見されている。いずれもハンノキ類である。始良Tn火山灰降灰直前には、泥炭Ⅲ面には低湿地を好む植生が繁茂できる環境があったことが知れる。

始良Tn火山灰の浸透が、I13区で発見された。浸透は、始良Tn火山灰の純粹層から泥炭Ⅲ・灰色粘土層にまで貫入していることが認められた(第25図)。浸透部は幅120cm、長さ80cm、厚さ約5mmの範囲で、始良Tn火山灰純粹ガラス粒が北西から南東方向に傾いて浸透している。人為遺構ではなく、泥炭Ⅲ及び灰色粘土が始良Tn火山灰降灰時にひび割れを生じており、その隙間に始良Tn火山灰ガラス粒が大量に流れ込んだように観察された。始良Tn火山灰降灰期の泥炭Ⅲの状態は、一時的にせよひび割れを起こすほど乾燥する場合があったのではないかと推測させよう。

下位文化層期の泥炭形成範囲は、層厚のある一部の場所を除いて泥炭層の細分が困難であるため確定できない。ただ、人為と考えられる炭化物密集部が泥炭Ⅲと灰色粘土の層理面上に泥炭に巻かれるように発見されたので、下位文化層相当期には泥炭Ⅲの形成は始まっていたことが知れる。炭化物密集部の位置は、始良Tn火山灰降灰直前の陸地と湿地の境近くにあるものがある。このような不安定な遺構が良好に遺存するためには、速やかに埋没する必要があると推定できる。泥炭Ⅲの範囲は下位文化層期と始



第25図 A T層の浸透部

良Tn火山灰降灰直前とで、ほとんど変化していない可能性が有ろう。

(山口)

## 2. 配石・配石群・礫ブロック

### a. 下層出土礫の検討

当遺跡下層より出土した礫は総計1084点（観察数）である。これらの出土状況は多様で、比較的狭い空間に複数の資料が密集するものをはじめ、土壌の掘り込みを充填する状態のものがある一方で、少数の礫が散漫に分布した地域も認められる。礫に関しては、単独の遺物として考古学的な情報を引き出すのが難しいという一面があり、資料群として分布上の特徴を評価しながら分析を進める手法も有効と考えられる。そこで「分布上のまとまり」を把握する作業を次の方法により行った。すなわち、まず礫の平面分布図において、個々の出土地点を中心として半径1mの円を描く。次に周辺の礫出土地点についても同様の操作を行ったのち、この円相互が接したり、重複部分を有する場合に、相互の礫は分布上の「まとまり」を形成すると解釈した。

他方、各々の礫について観察した結果、資料サイズや属性等についても、バリエーションに富む内容

が明らかになった。この検討にあたっては、以下の項目を設定して分析を行っている。

- (1) 石材：チャート・砂岩・花崗岩・泥岩・粘板岩・凝灰岩
- (2) 資料サイズ：最大長・最大幅・最大厚・重量を記録した（計測単位：mm, g/小数点以下第1位まで）。本稿の記載にあたっては、そのうちの代表として「重量」を採用した。そして便宜上「大形礫（重量1000g以上）」「中形礫（同300g以上1000g未満）」「小形礫（同300g未満）」の3つに区分して検討している。
- (3) 赤化：観察資料の表面の色調が、一部でも赤く変色しているものを「赤化」と認定した。なお、自然礫の状態ですべてが赤褐色を呈するチャート石材については判定が困難なため、「非赤化」に含める。
- (4) 破砕度：破砕の生じる前の状態、すなわち「完形」礫をもってAとし、以下3/4～過半程度をB、1/2～1/4程度をC、1/4未満をDと区分する。接合関係の認められないものや角礫の場合など、資料によっては若干評価が変わる余地を残している。
- (5) 黒色付着物：礫表面に黒色物の付着が認められる資料の有無を検討した。当遺跡出土の礫については、検出されたものは皆無である。

さらに、各資料は石材別、母岩別に分類した上で接合作業を進め、接合個体が得られる場合はその関係を記録した。接合資料の分布状況は、第IV章第3節2bで、石器類ブロックに対応する範囲毎に図示した。ブロックA周辺は第293図、ブロックB周辺は第294図、ブロックC周辺は第297図、ブロックD周辺は第298図、ブロックE周辺は第301図、ブロックF周辺は第302図、ブロックG周辺は第307図、ブロックH周辺は第308図、ブロックI周辺は第311図、ブロックJ周辺は第312図、ブロックK周辺は第315図である。

#### b、配石・配石群・礫ブロックの設定

前述のように、礫の分布状況や個々の資料の性状に関して検討を行った結果、礫資料を把握するための当面の単位を次のように設定した。

配石：大形礫1点のみで構成される単位。

配石群：大形礫を少なくとも1点以上含み、複数の礫により構成されるまとまり。

礫ブロック：中形ないし小形礫、3点以上により構成されるまとまり。大形礫は全く含まない。

上記の「まとまり」の認定にあたっては、先に述べた「遺物出土地点を中心とする半径1mの円の重複」に拠っているが、周囲の状況により例外的に設定することがある。例えば、周辺に全く礫が出土していない場所などでは若干の許容を認め、2つの円が接していなくとも距離が僅かなケースではこれをまとまりと見なす。また、これとは逆に円が重なっていても分離する場合もあり、この時は、礫サイズや属性に関する傾向の相違、出土位置の比高その他の情報等を勘案している。

配石群については、その内容を「大形礫が主体となるもの」として捉えており、中・小形礫の比率が相対的に高くなる場合はこれらを礫ブロックとして分離している。礫ブロックの中に大形礫が混じる場合も、同様に操作して配石・配石群を遊離する。したがって、このようなケースでは配石・配石群と礫ブロックとが分布図上では重複して存在することになる。

こうして検討した結果、配石16ヶ所、配石群8ヶ所、礫ブロック10ヶ所が認定された。なお、3ヶ所の土壌内でまとまって検出された礫944点については、分類上は礫ブロックに関連する内容を持つ可能性があるが、明確な掘り込みに伴うもので、かつ出土数量が極端に多く、密度も高い。礫の属性やサイズ



の細目では差異も認められるため、資料観察結果も含めて次項「土壌」で報告する。以上のいずれの単位にも属さない礫は、僅かに28点のみであった。

本稿では、配石・配石群・礫ブロックについては、暫定的に「遺構」として取り扱っていくが、この礫の出土状況がいかなる目的のために、どのような過程を経て形成されたものなのか、必ずしも詳細に解明されているわけではない。したがって、この3者の内容が単なる遺物出土状態データのレベルに留まる可能性も考えられ、その場合は遺構とは異なる、遺物の集中部として評価すべき余地があることを断っておきたい。

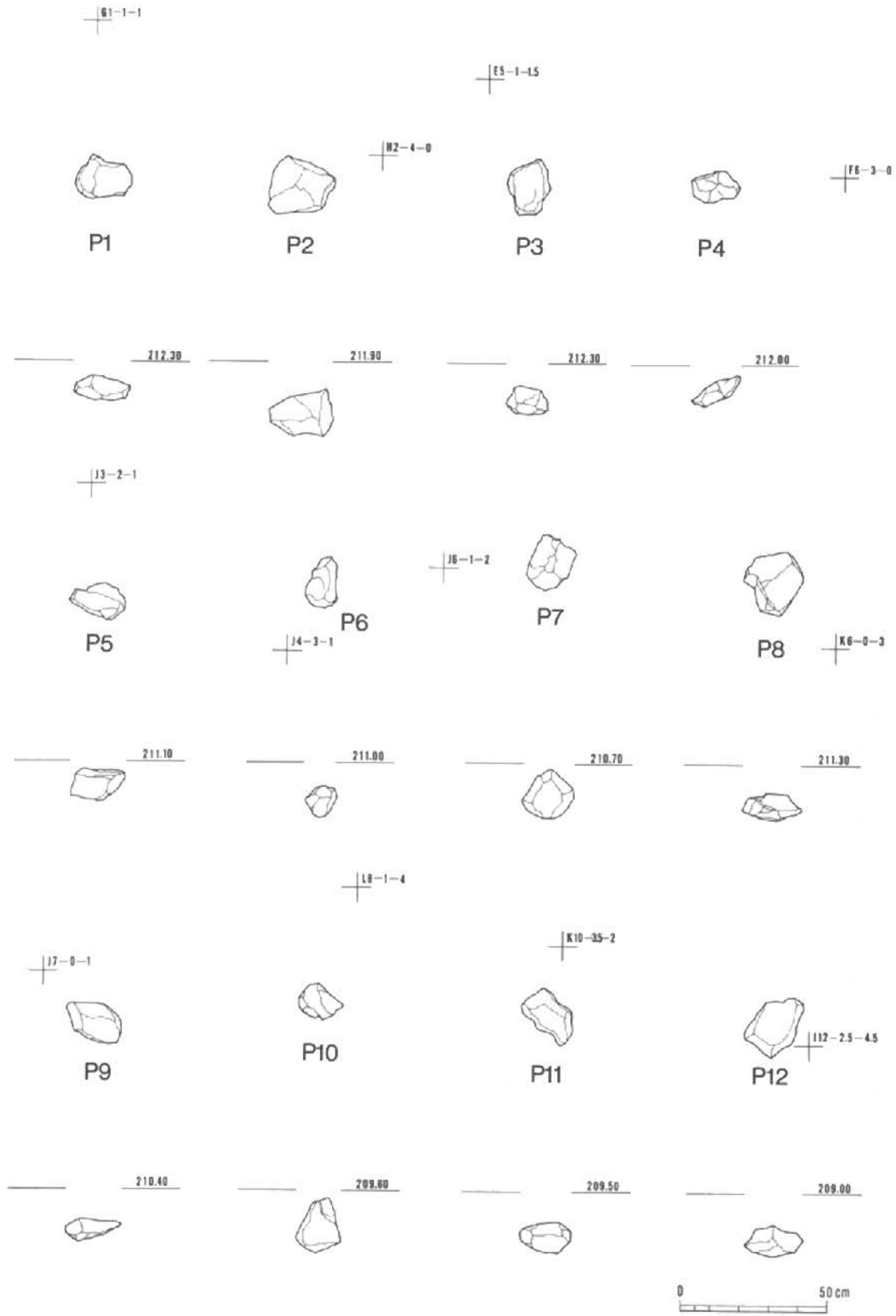
#### c. 配石・配石群・礫ブロックの内容

大形礫1点により構成される配石は16ヶ所認められた。各々の平面および垂直分布図を第26～27図に示す。礫の重量（100gごとに累計）と、石材・赤化・破砕度の関連はグラフを作成して現わす（第28図）。

- 配石1 (P1) G1区北東部で出土した約1.9kgの砂岩、非赤化、破砕度B。
- 配石2 (P2) H2区北西部で出土した約4.8kgの非赤化、盤状完形礫。配石構成礫中最大の砂岩資料。
- 配石3 (P3) E5区東部で出土した約2.6kgの砂岩、非赤化、完形亜角礫。
- 配石4 (P4) F6区北部で出土した約1.6kgの砂岩、非赤化、破砕度C。礫の長軸が水平面に斜交した状態で発見された。
- 配石5 (P5) J3区中央やや北寄り出土した約2.4kgの砂岩、非赤化、完形亜角礫。
- 配石6 (P6) J4区北部で出土した約2.1kgの砂岩、非赤化、破砕度B。
- 配石7 (P7) J6区東部で出土した約4.2kgのチャート、非赤化、完形。
- 配石8 (P8) K6区東部で出土した約2.7kgの砂岩、非赤化、破砕度C。亜角礫で凹部や平坦面を有する。配石群7に近い位置にある。
- 配石9 (P9) K7区北西部で出土した約1.9kgの花崗岩、非赤化。風化が進み、出土位置で3つに割れており、接合して完形となる。礫ブロック7に近接。
- 配石10 (P10) L8区南東部より長軸が直立状態で出土した約3.0kgの砂岩、非赤化、完形。盤状亜円礫で、表裏に平坦面をもつ。
- 配石11 (P11) K10区中央西寄り出土した約2.0kgの砂岩、非赤化、完形亜角礫。
- 配石12 (P12) I12区南部の泥炭層より出土。約3.0kgの砂岩、非赤化。出土位置で砕けているが完形に復元できる。
- 配石13 (P13) I13区南東部泥炭層出土。約2.4kgのチャート、非赤化、完形。節理面を有する盤状資料である。
- 配石14 (P14) H14区北東部泥炭層出土。約1.2kgの花崗岩、非赤化、完形。表裏に平坦面を有す。
- 配石15 (P15) G13区南東部泥炭層出土。約2.4kgのチャート、非赤化、完形。節理面のある盤状礫。
- 配石16 (P16) K11区東部より出土。約2.3kgのチャート、非赤化、完形。礫ブロック8と重複している。

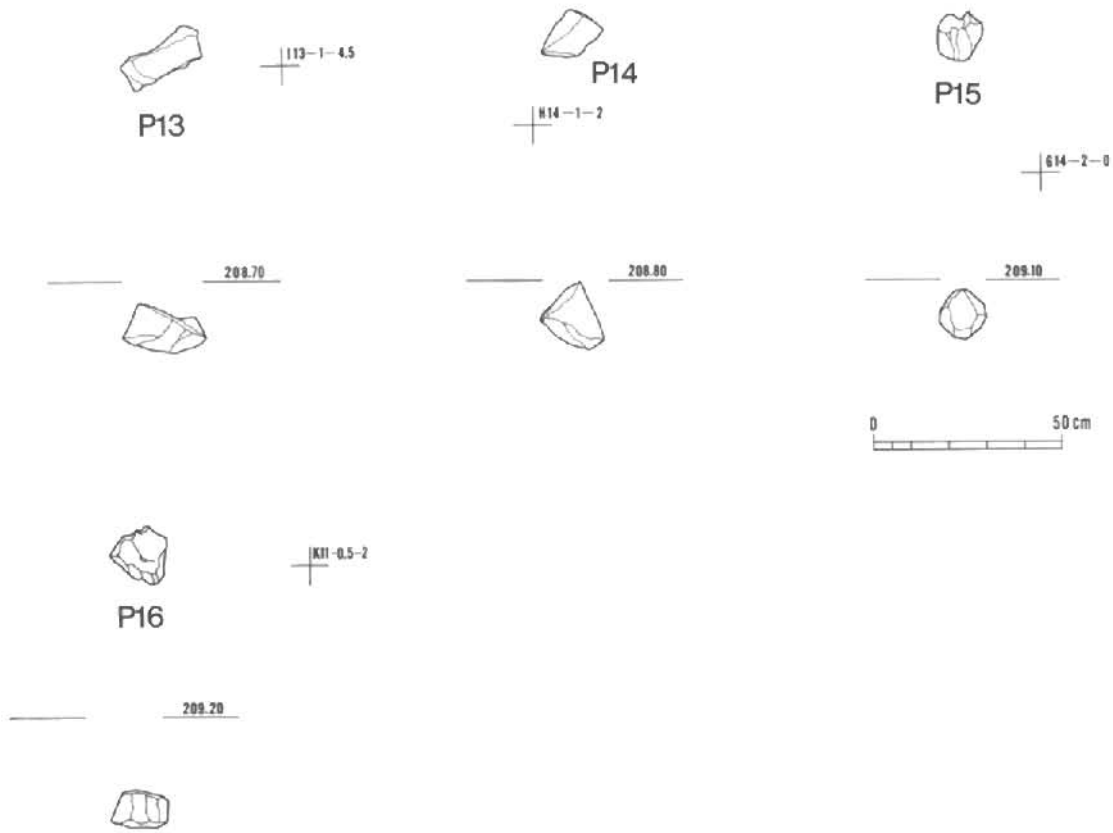
少なくとも1点以上の大形礫を含む、複数の礫がまとまって形成している配石群は、8ヶ所認められた。分布状態は第29～31図に図示する。礫の重量（100gまで10gごと、以上100gごとに累計して示す）と、石材・赤化・破砕度との関係はグラフにして第32～34図に示す。

第1節 下位文化層の遺構

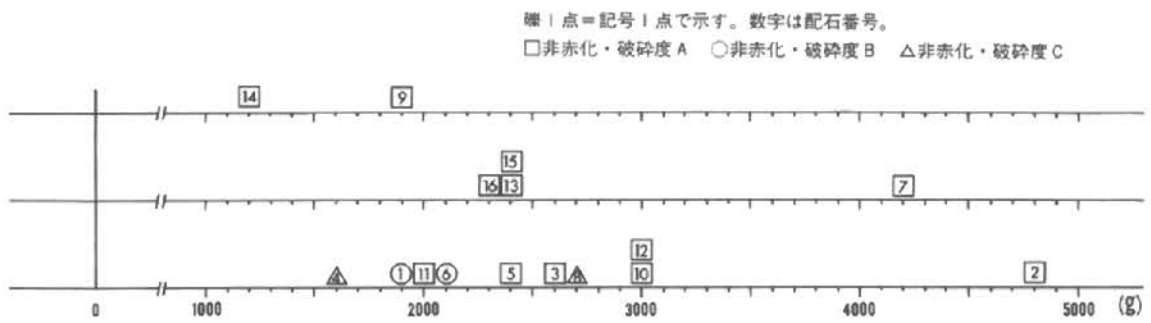


第26図 配石実測図1

第IV章 下位文化層の調査

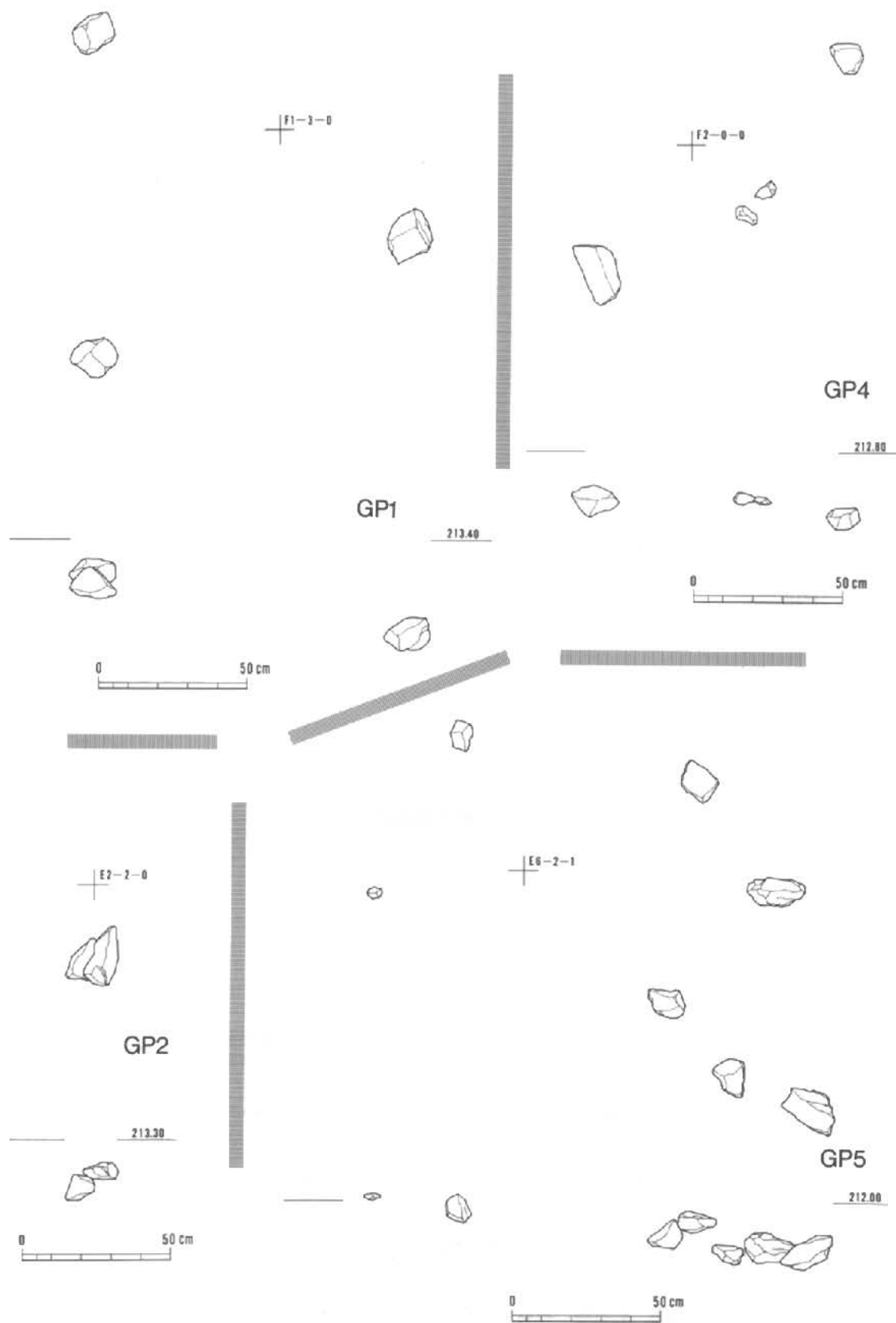


第27図 配石実測図 2



第28図 配石礫 石材・赤化・破砕度別出現頻度 (点数/重量)

第1節 下位文化層の遺構

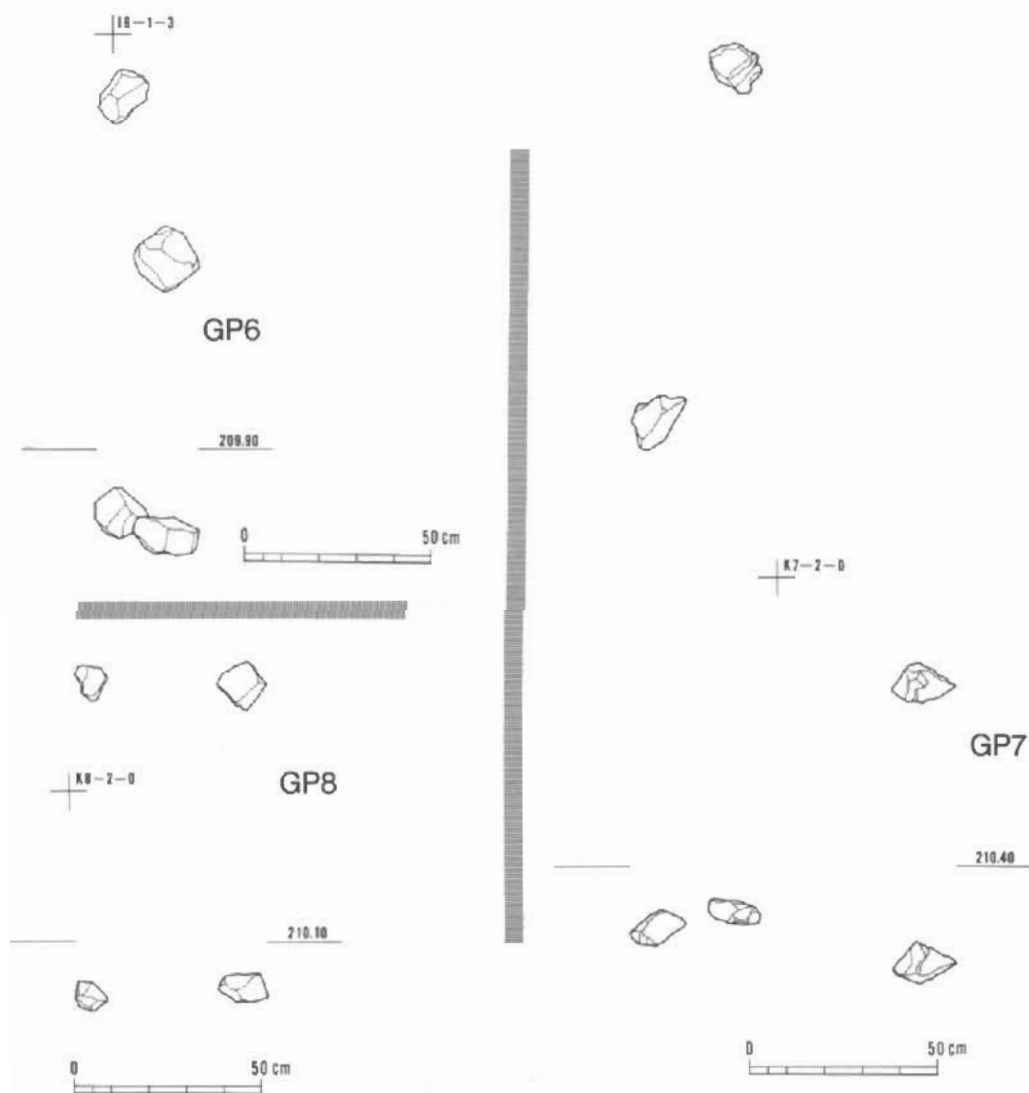


第29図 配石群実測図1

**配石群1 (GP1)** F0・1区にまたがり、直径1m、垂直方向への上下幅0.3mの範囲内の構成礫3点よりなる。資料構成は次の通りである。石材：砂岩1点、チャート2点。サイズ：大形礫3点。非赤化：3点。破碎度：A1点、C3点。礫ブロック1、配石群3と隣接する。砂岩1点は配石群2・3の礫6点と接合する（重量9960g）。

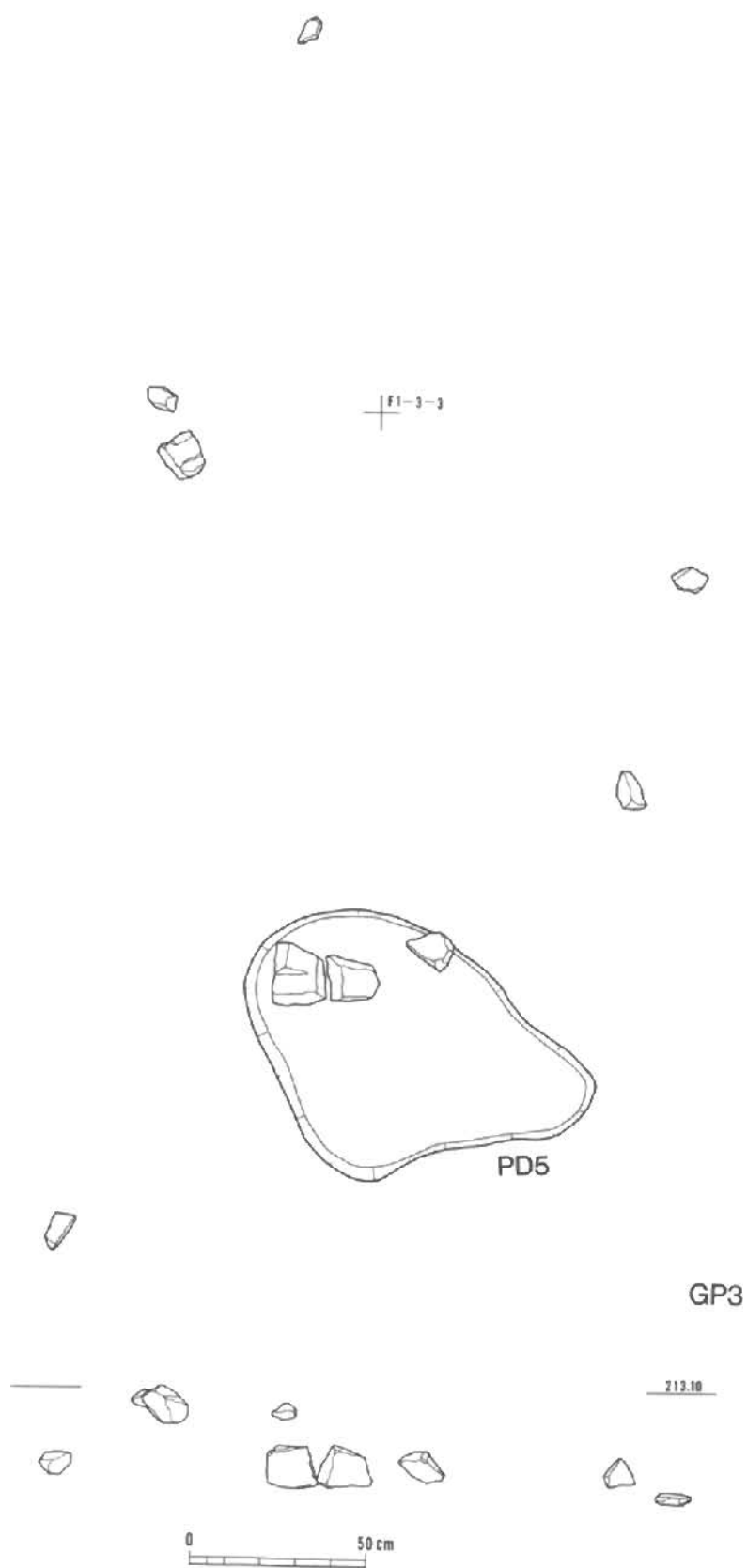
**配石群2 (GP2)** E2区北部で近接して出土した礫2点よりなる。構成内容は次の通り。石材：砂岩1点、チャート1点。サイズ：大形礫2点。非赤化2点。破碎度：A1点、C1点。砂岩資料は配石群1・3と接合関係を有する。

**配石群3 (GP3)** F1・2区にかけて、南北3.5m、東西2mに広がる9点の礫により構成される。上下幅は0.4mと大きい、これは旧地形の傾斜を反映したと思われる。石材：砂岩7点、チャート2点。サイズ：大形礫3点、中形礫6点。赤化：3点、非赤化：6点。破碎度：B・C・D各3点。砂岩・チャートのいずれにも赤化資料がみられ、また配石群中最大の3.9kgの砂岩が得られた。砂岩5点は配石群1・2とも接合して角柱状の特大礫となる(前述)。この他に、類似の母岩である砂岩の残り2点も別の接合個体（重量2660g）を形成する。配石群1に隣接し、土壌5のやや上位に位置している。

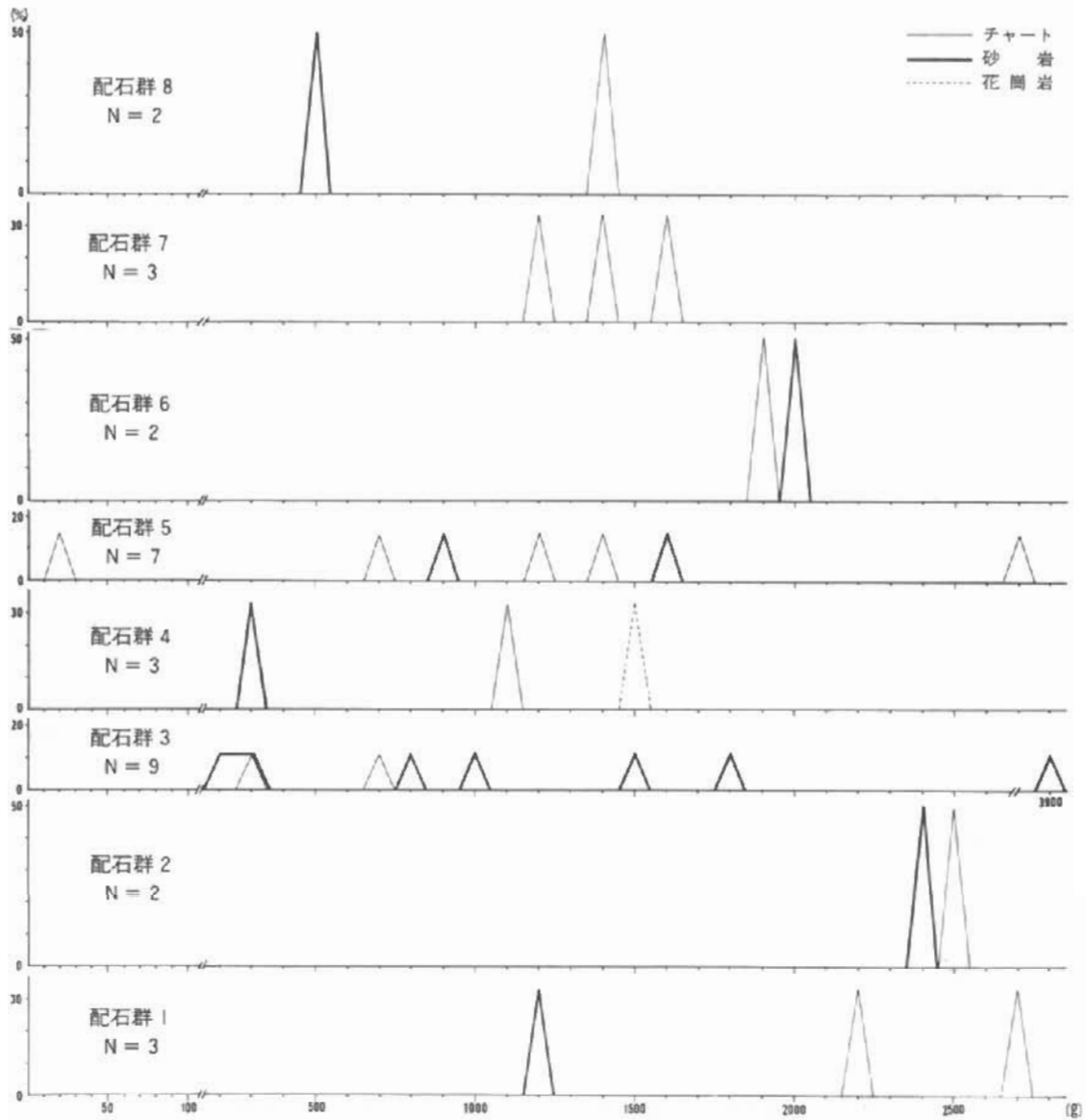


第30図 配石群実測図2

第1節 下位文化層の遺構



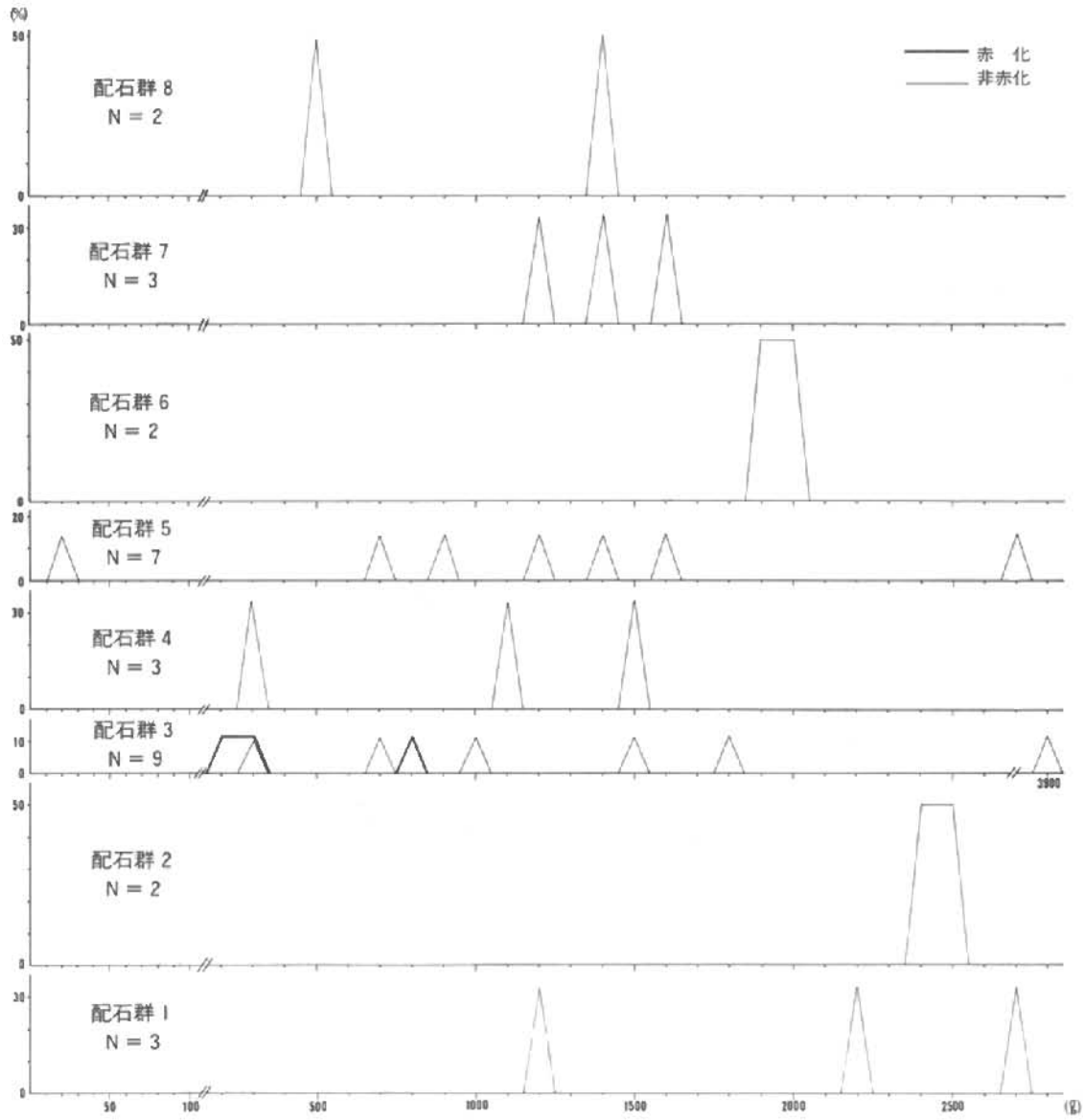
第31図 配石群実測図3



第32図 配石群出土礫 石材別出現頻度 (点数/重量).

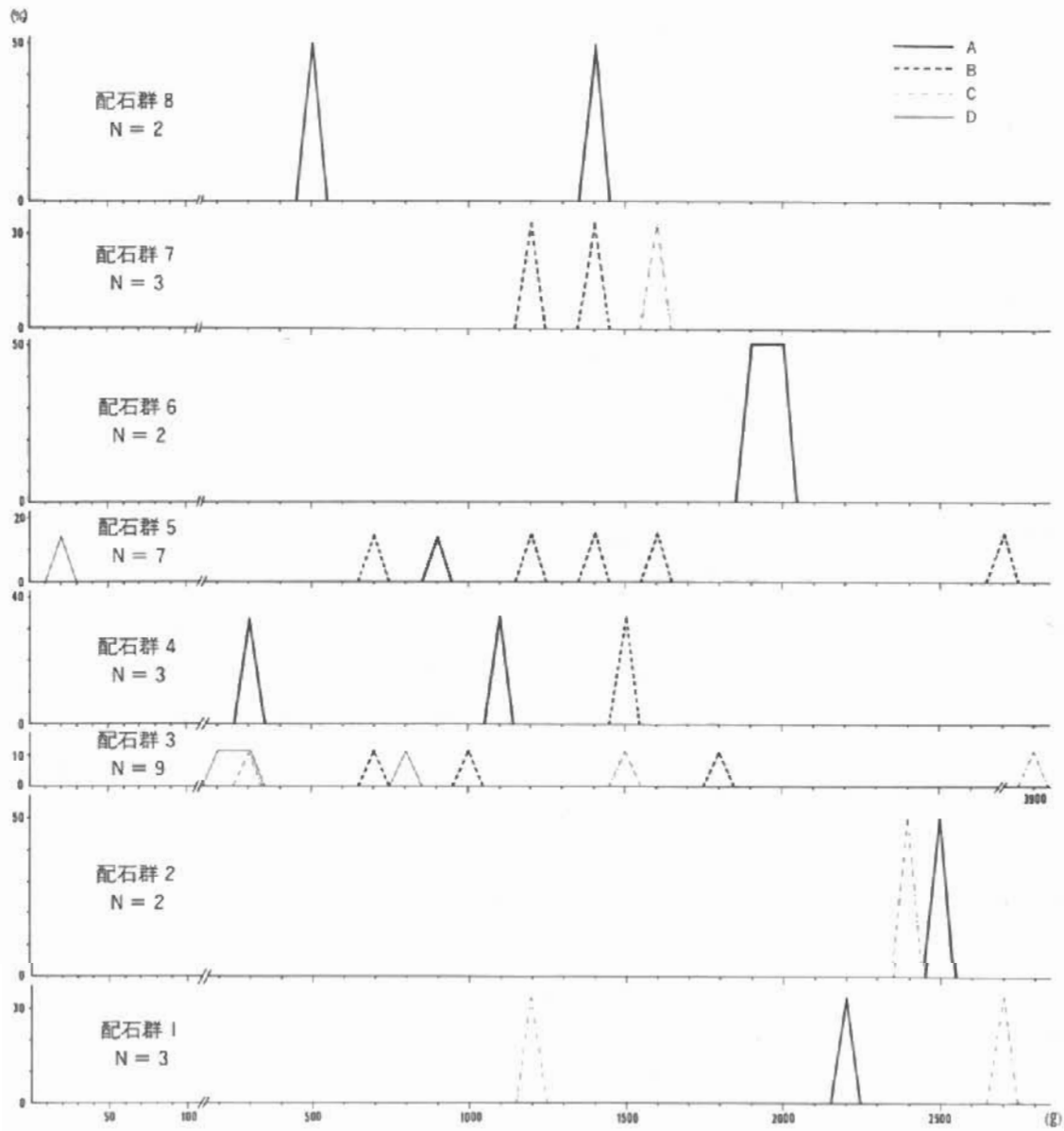
配石群 4 (GP 4) F 2、G 1・2 区にかけて 2m にわたり、4 点の礫が直線上に並ぶ。観察可能資料 3 点の内訳は次の通り。石材：砂岩 1 点、チャート 1 点、花崗岩 1 点。サイズ：大形礫 2 点、中形礫 1 点。非赤化：3 点。破砕度：A 2 点、B 1 点。接合資料なし。

第1節 下位文化層の遺構



第33図 配石群出土礫 赤化・非赤化別出現頻度 (点数/重量)





第34図 配石群出土礫 破碎度別出現頻度 (点数/重量)

**配石群5 (GP5)** E6区北部で検出され、平面的には1.5m×2m、上下幅0.3mの範囲内の7点の構成礫よりなる。石材：砂岩2点、チャート5点。サイズ：大形礫4点、中形礫2点、小形礫1点。非赤化：全7点。破碎度：A1点、B5点、D1点。チャート製資料のサイズのバラツキが大きく、破碎度Dの小形礫から当群の最大資料(2.7kg)まで幅がある。チャートの礫2点が接合して1個体が得られている(重量2020g)。

**配石群6 (GP6)** I6区南東部に位置し、近接した2点の礫よりなる。石材：砂岩1点、チャート1点。サイズ：大形礫2点。非赤化：2点。破碎度：A2点。大形礫2点はいずれも2kgほどの完形礫で、接合資料はない。

**配石群7 (GP7)** K6・7区にわたり、2m×0.5m×上下幅0.2mの範囲に、3点の礫が分布する。石材：チャート3点。サイズ：大形礫3点。非赤化：3点。破碎度：B2点、C1点。1.5kg前後の礫3点よりなり、うち2点が接合する。この資料は重複する礫ブロック7の内の礫とも接合関係がある(重量3290g)。

**配石群8 (GP8)** K7区南部の近接して出土した礫2点よりなる。石材：砂岩1点、チャート1点。サイズ：大形礫1点、中形礫1点。非赤化：2点。破碎度：A2点。接合資料なし。

中・小形礫により構成される礫ブロックは、10ヶ所に認められた。これらの分布図は第35～38図に、礫重量(100gまで10gごと、以上は100gごとに累計して示す)と、石材・赤化・破碎度との関連を第39～41図のグラフに現わす。このうち1ヶ所(礫ブロック2)は調査中に、流水により資料が失われたため、分布図のみが記録されたものの、個別の礫観察を行い得なかった。また、小形礫の中には著しく風化の進んだ資料も散見され、構成礫全てを検討できなかったブロックも存在する。

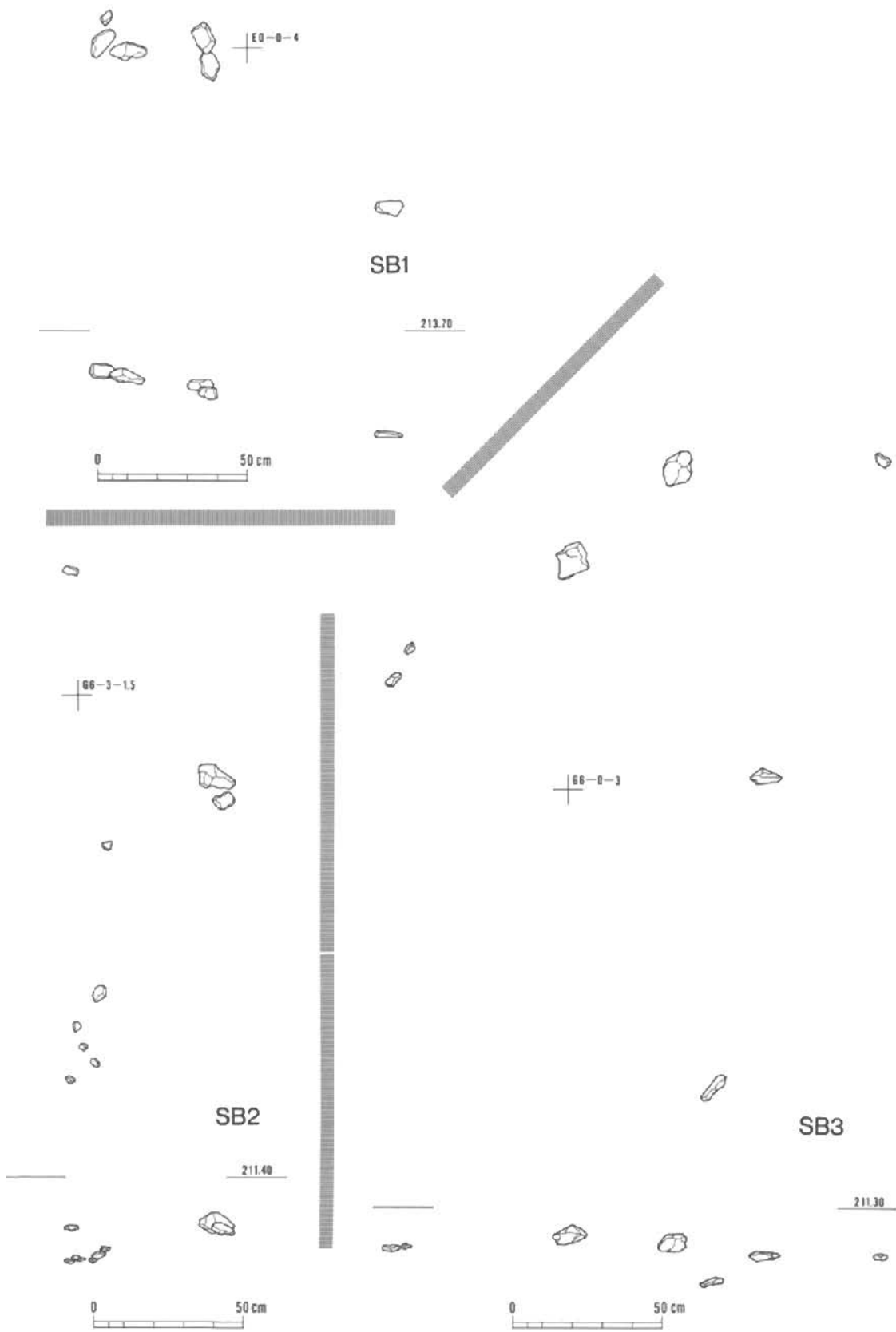
**礫ブロック1 (SB1)** E0, F0・1区で検出されたもので、1m×0.5mの範囲内に6点の礫が分布する。垂直的には南東へ向けて下降する地形を反映して0.3mの出土幅をもつ。石材：砂岩2点、チャート4点。サイズ：中形礫3点、小形礫3点。赤化：5点、非赤化：1点。破碎度：A1点、B1点、C3点、D1点。これらの中で、砂岩2点とチャート2点が接合して各々1個体ずつを形成している(重量：砂岩360g、チャート410g)。ブロックの南東側に配石群1が隣接する。

**礫ブロック2 (SB2)** G6区中央の2m×1mの範囲で、小形礫を中心に9点の資料により形成されている。上下幅は0.2mあり、地形を反映している可能性もある。このブロック出土資料は、前述のような事情により観察データが得られていない。

**礫ブロック3 (SB3)** G6, H6区にまたがる、2m×2m×(垂直幅)0.2mの範囲で7点の礫が出土した。このうち観察資料は3点ある。石材：砂岩1点、チャート2点。サイズ：中形礫1点、小形礫2点。赤化：1点、非赤化：2点。破碎度：B1点、D2点。接合関係はみられなかった。

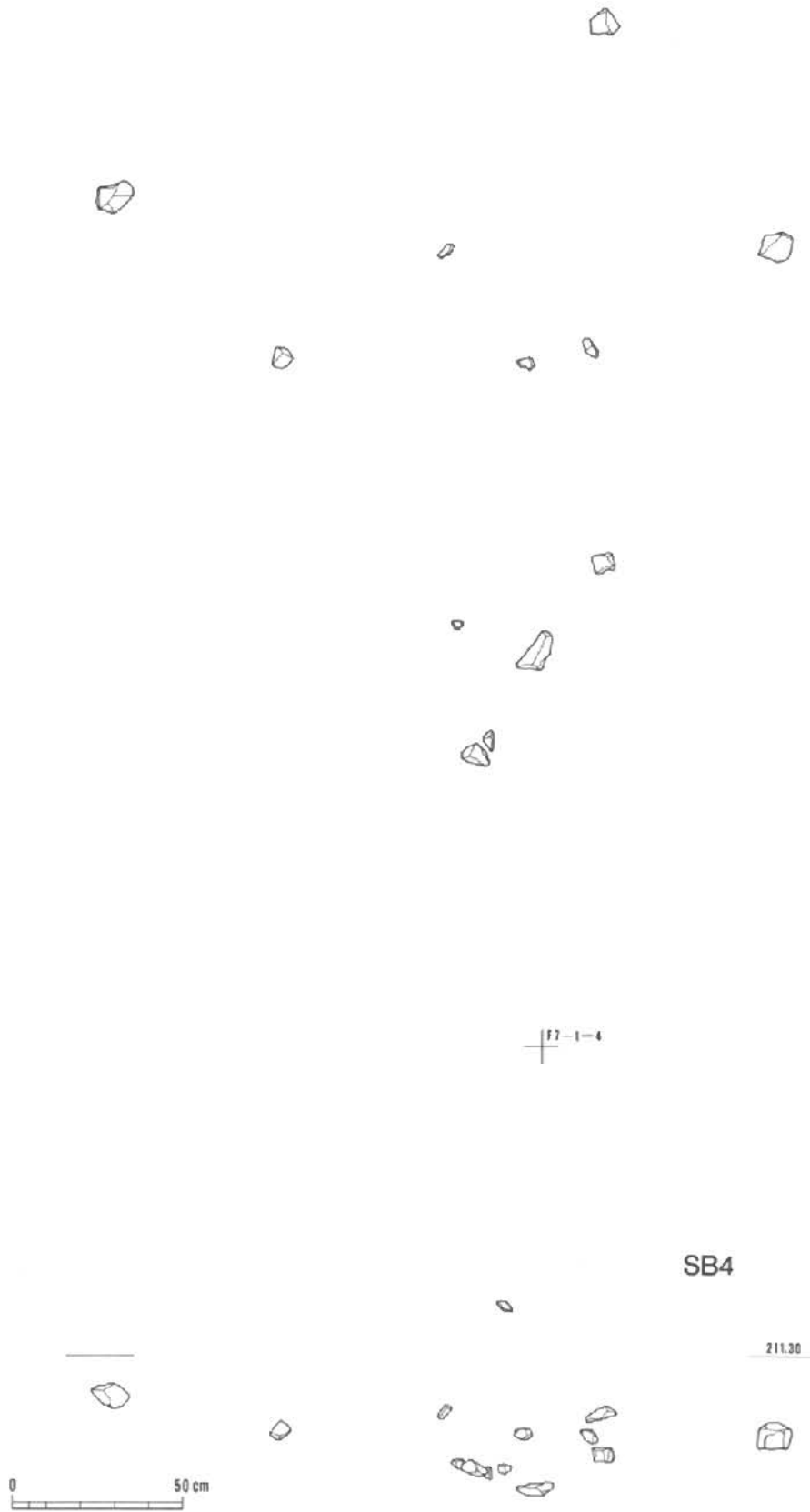
**礫ブロック4 (SB4)** F7区東半部で南北に長くのびた分布を示し、2m×3.5m×(垂直幅)0.3mの範囲に13点の礫が散在する。観察可能な10点の内容は次の通り。石材：砂岩4点、チャート6点。サイズ：中形礫3点、小形礫7点。赤化：7点、非赤化：3点。破碎度：A1点、B3点、C3点、D3点。当群は礫ブロック5の東に隣接する。両群の砂岩各1点が接合関係(重量230g)を有す。

**礫ブロック5 (SB5)** F7区南西部に位置する。直径0.5mの内に4点の礫が存在し、垂直的にはほ

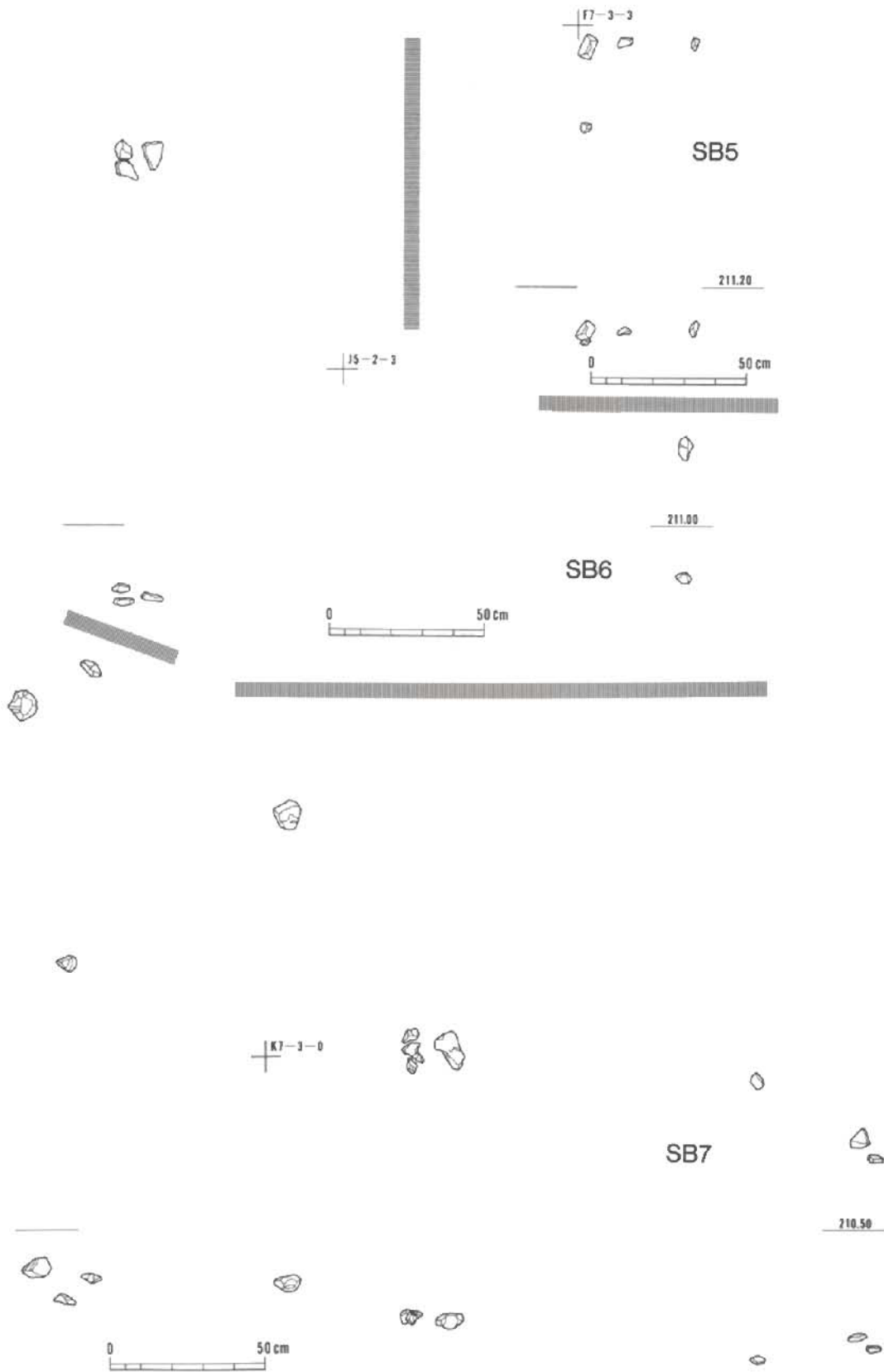


第35図 礫ブロック実測図1

第1節 下位文化層の遺構

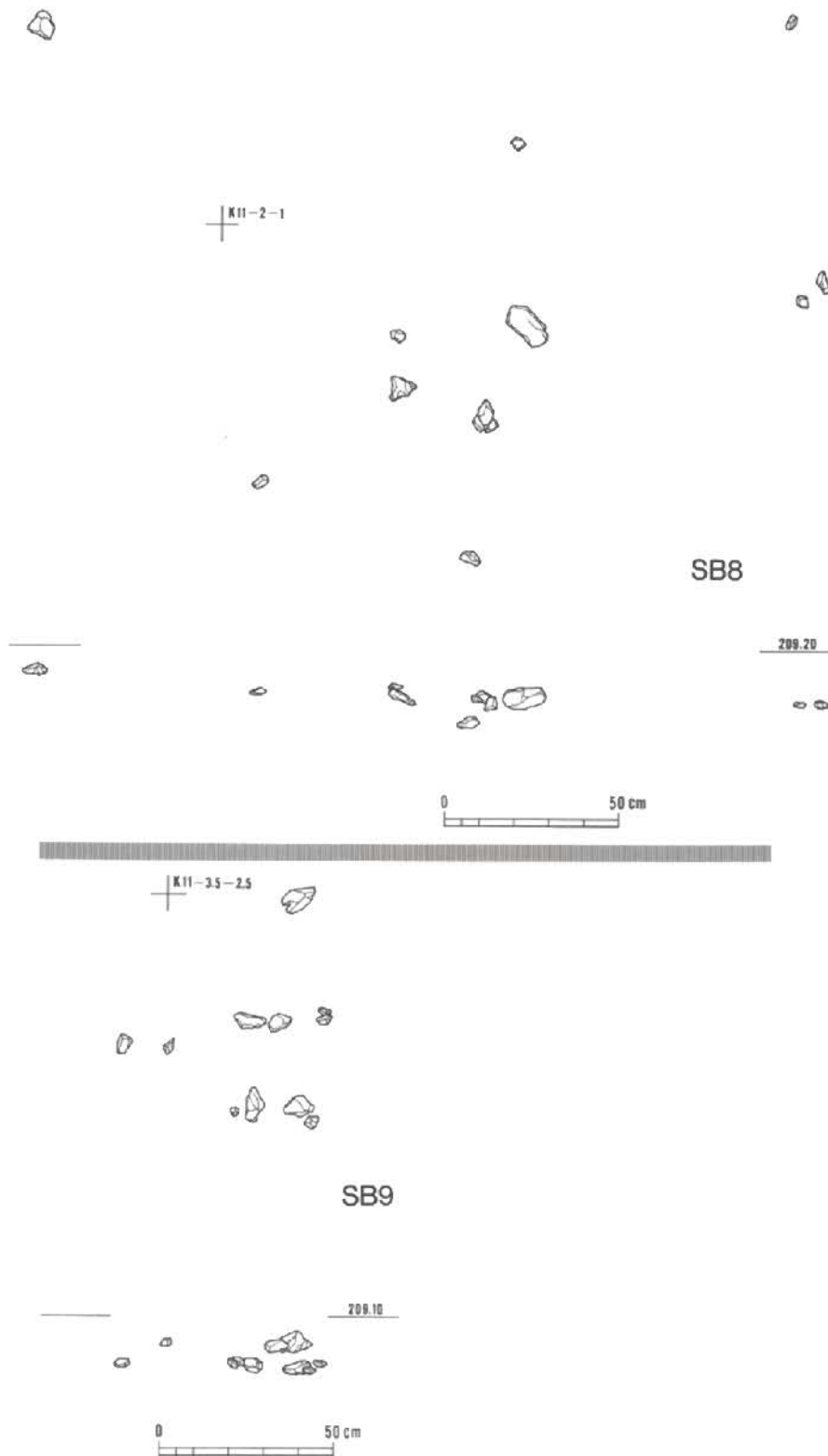


第36図 礫ブロック実測図 2

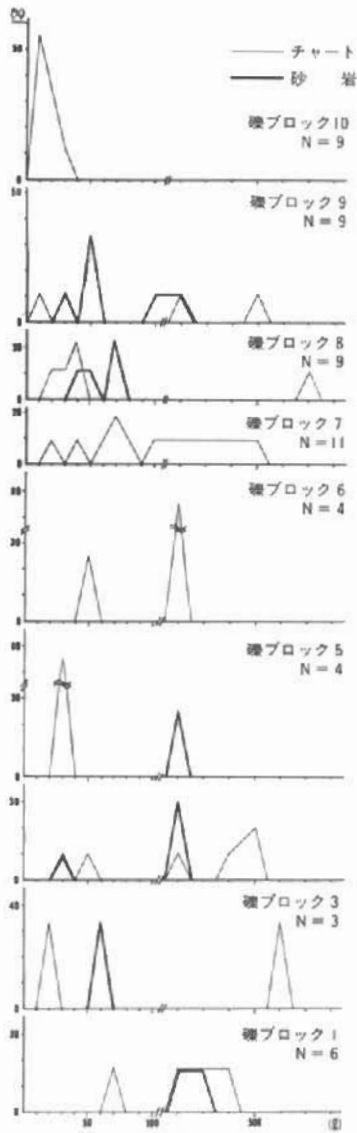


第37図 礫ブロック実測図3

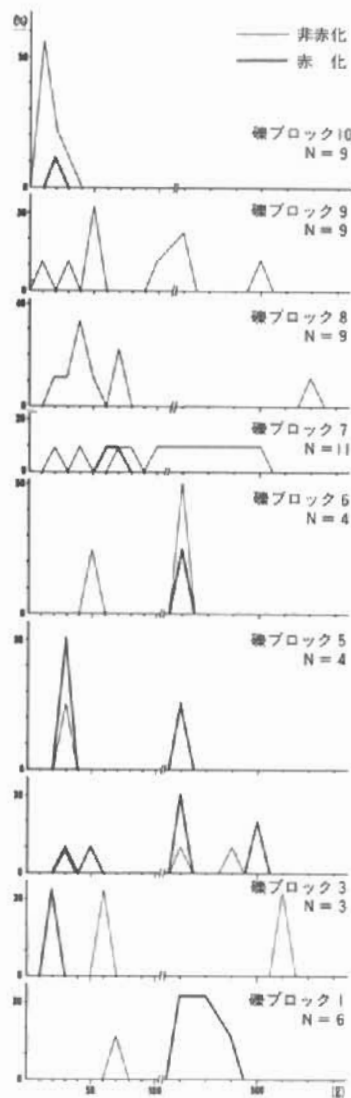
第1節 下位文化層の遺構



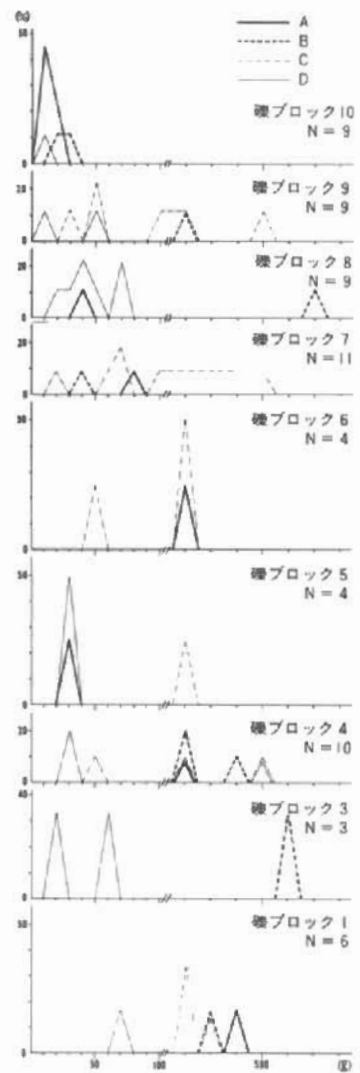
第38図 礫ブロック実測図4



第39図 礫ブロック出土  
石材別出現頻度(点数/重量)



第40図 礫ブロック出土  
赤化・非赤化別出現頻度(点数/重量)



第41図 礫ブロック出土  
破砕度別出現頻度(点数/重量)

は平坦である。石材：砂岩1点、チャート3点。サイズ：小形礫全4点。赤化：3点、非赤化：1点。破砕度：A1点、C1点、D2点。礫ブロック4の西側に隣接し、砂岩1点が前述の通り接合資料を構成する。

**礫ブロック6 (SB6)** J5区に分布する4点の礫により構成されるが、2m×0.2mの範囲の内で1点のみが南東のやや離れた地点にあり、出土標高も0.2mほど高い。石材：チャート4点。サイズ：小形礫4点。赤化：1点、非赤化：3点。破砕度：A1点、C3点。ブロック内で近接した位置にある2点が接合して1個体(重量155g)を形成している。

**礫ブロック7 (SB7)** K6・7区にまたがる、3.5m×1.5mの範囲にあり、11点の礫により構成される。垂直的には地形を反映して0.4mの上下幅をもつ。石材：チャート全11点。サイズ：中形礫3点、小形礫8点。赤化：2点、非赤化：9点。破砕度：A1点、B1点、C9点。当群は配石群7と重なる位置にあり、礫3点が配石群資料と接合関係をもつ。また、これとは別の礫2点が接合資料1個体(125g)を形成する。

**礫ブロック8 (SB8)** K11区北東部の2m×2m×(垂直幅)0.2mの範囲に11点の礫が分布する。観察資料はこのうちの9点である。石材：砂岩4点、チャート5点。サイズ：中形礫1点、小形礫8点。非赤化：全9点。破砕度：A1点、B1点、D7点。この群は配石16と重なり、標高からみるとそのやや上位に位置する。また、南西側の礫ブロック9に隣接し、当群のチャート1点が接合関係をもつ(1250g)。

**礫ブロック9 (SB9)** K11区南西部の1m×1.5mの範囲にあり、11点の礫により構成される。上下幅は0.2m程度で比較的小さく、分布密度は高い。観察総数は9点である。石材：砂岩6点、チャート3点。サイズ：中形礫1点、小形礫8点。非赤化：9点。破砕度：B1点、C7点、D1点。ブロック内では砂岩4点と、同2点が接合して別の2個体(220g、205g)を成すほか、チャート2点が隣接する礫ブロック8の資料と接合関係を有している。

**礫ブロック10 (SB10)** L11区東部で、1.5m×2mの範囲から9点の礫が出土した(分布図は土壌6の項を参照)。石材：チャート全9点。サイズ：小形礫9点。赤化：1点、非赤化：8点。破砕度：A6点、B2点、D1点。このブロック中では接合資料は得られなかった。土壌6および炭化物密集箇所5と重複し、特に両者の周囲を取り巻くような礫の出土状況が特徴的である。

#### d. 配石・配石群・礫ブロックの検討

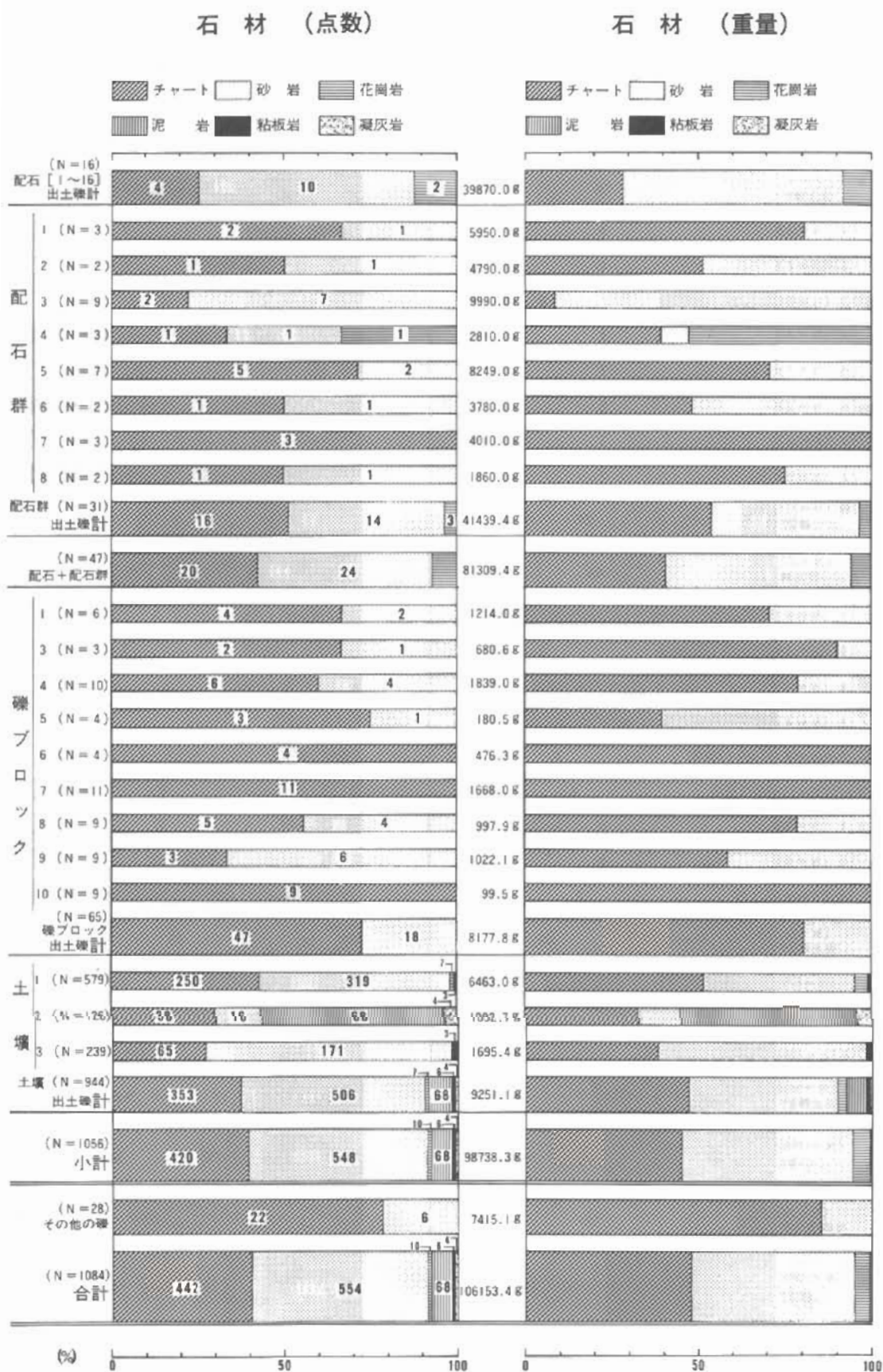
この項では、礫を把握するに際して設定した3種類の単位について、各々のもつ特徴や傾向をまとめる。あわせて、それらの性格について詳しく検討を試みる。考察するにあたり、観察可能資料総体に占める出現頻度をグラフ化して第42～43図に現わす。

**配石** 16ヶ所の配石は、発掘範囲北側の黄色粘土層と、南側の泥炭層いずれにもみられたが、出土場所により分布傾向は若干異なる。後者の場合、周辺に全く礫の検出されない場所に、単独で存在する様相を見せる(配石12～15)のに対し、前者では他の礫が構成する配石群、あるいは礫ブロックに比較的近い位置に出土する例が多く、重複するものもある。黄色粘土層から得られた礫全体を概観すると、出土位置から凡そ次のように分けられる。すなわち、北部(グリッド0～2列)・中部西(同5～7、E～H列)、中部東(同3～8、I～L列)、南部(同10～11、K～L列)の4つの大グループである。配石はこの4つのグループすべてに含まれるが、各グループの中では周縁部に偏って出土する傾向がみられるようである(別添第2図参照)。

配石として認定された礫は、その設定条件から1kgを超え、最大5kg近くにまで及ぶ大形資料で、この中でも特に2～3kgの間で出現頻度が高い。石材は砂岩が多く過半数を占め、チャート・花崗岩は少ない。礫の形状は角礫～亜角礫が主体で、盤状資料も含まれ、円礫はほとんどない。全点が非赤化資料で、破砕度については3/4が完形(チャート・花崗岩では全点)という特徴的な傾向をみせる。こうした内容と、炭化物密集箇所と分布範囲を同じくしないことから、配石の礫は受熱による変化を被っていないと推測することが可能である。つまり、火の使用とは切り離された何らかの用途があり、少なくとも「礫群」とは異質な機能を有していたと考えられる。

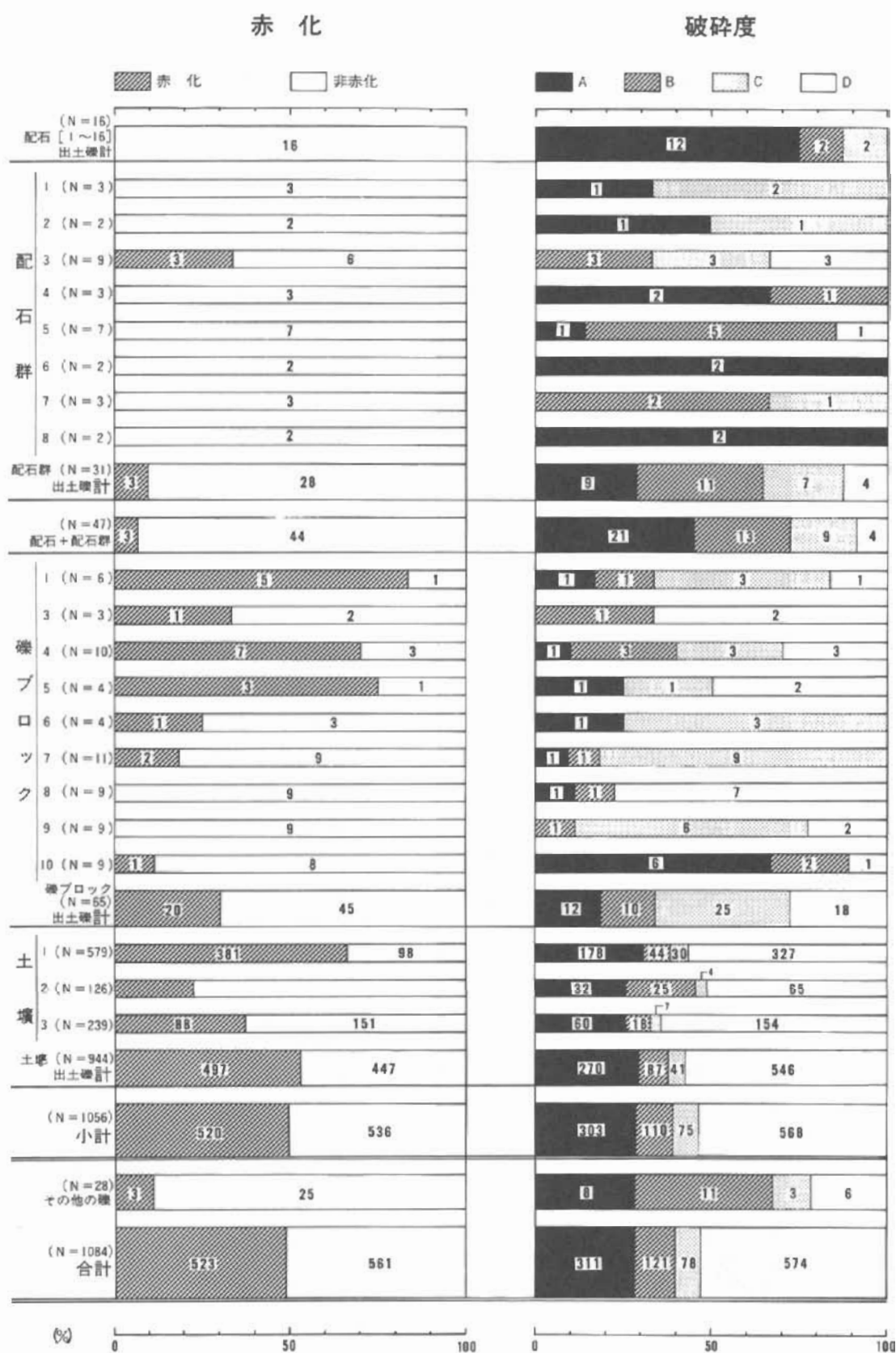
一方、大形礫の中には平坦面をもち、石器製作の台石とも受け取れる形状の資料が散見された。ひとつの解釈として、石器製作作業との関わりが考慮されることになる。しかしながら、現状では台石と特定するための明瞭な痕跡が、礫表面で十分に看取されていない。ちなみに、出土位置についてみると、





第42図 下位文化層出土礫 石材別出現頻度

第1節 下位文化層の遺構



第43図 下位文化層出土燵 赤化・破碎度別出現頻度

石器の密集範囲内に包含されるケースもあれば、それらの間隙である疎の部分埋めるようにして発見されたものもある。このような状況証拠を基に判断するのは相当に難しいと思われる。

以上のように、現在のところ配石の性格を限定するための材料は乏しいといえる。しかし、遺跡内に合計40kg近い大量の礫が搬入された事実のもつ意義は文字通り「重い」。この解釈を巡っては、今後、類似資料の蓄積を待つとともに、石と人類との関わりを広く総合的に捉える中で、あらゆる可能性にも言及していく姿勢が必要であろう。

**配石群** 配石群8ヶ所は、全て黄色粘土層検出範囲で認められた。前述の、礫の大グループ4ヶ所のうち、北部ではその中心的な場所を占めており（配石群1～4）、中部西では西端（同5）、中部東のグループでは中心（同7）と周辺（同6・8）で出土している。配石群は礫のまとまりであるが、今回得られた資料の密集度は低く、間隙なく一面に遺物が分布する状況にはなっていない。この点で、後述の土壌出土礫の傾向とは好対照をなしている。

配石群を構成する礫は、総計重量40kgを越す。最小20gから最大3.9kgにまでおよび、総点数の2/3は1kg以上の大形礫である。石材は1点の花崗岩を除くと、砂岩とチャートが拮抗してほぼ半数ずつを占め、ともに大形礫から小形のものまで網羅している。赤化礫は稀少で、配石群3の中～小形礫に3点みられたのみで、残り28点は非赤化資料である。破砕度は、配石に比較するとCやDランクが増加しているが、それでも全体の半数強がA・Bランクの資料である。形状は角～垂角礫で、破砕の著しいDランク資料においては角礫が目立つ。

配石群には接合関係のみられるものがあり、一部は他の配石群や礫ブロックとも関わる内容をもっている。配石群1～3にまたがる接合資料は、合計重量約10kgと特大の礫であり、この数字は礫が遺跡に搬入された際の大きさを暗示しているとも考えられ、極めて興味深い。配石群3・5・7において得られた接合個体は、各々重量が2～3kg前後に復元され、配石の大形礫においてみられる出現のピークと一致している。接合データが提示されたことにより、隣接位置や重複位置にある配石群や礫ブロックとは密接な関連が予想され、今後さらに包摂をめぐって検討すべき必要が生じた。とりわけ同種の礫資料を含んでいる配石群1～4の場合は、一群として取り扱う方法が有効とも思われる。

配石群の性格については、配石と同様に、特定するのは非常に困難である。しかしながら特に大形礫の性状と、炭化物密集箇所とは離れた出現状態とを鑑みると、火の使用との関わりは想定しにくく、全体的な傾向として配石との共通点を読み取れそうである。また、石器の集中分布域と比較した場合でも、出土地点はその内外いずれにも認められる。石器製作作業との関連を積極的に推す材料がない現在、この方面からの議論も難しいものがある。

構成礫の内容に絡み、もうひとつ触れておきたいことがある。この検討にあたり、資料サイズから礫を大形・中形・小形の3者に分類したが、観察の過程で、大形礫と中形・小形礫では性格を異にする可能性もあるという見通しが浮上してきた。具体的には、前者と後者の間で接合関係が希薄なこと、赤化資料の出現頻度や破砕度に若干の偏りが見られること、などである。資料数が少ないという難点もあるが、空間分布上ではひとつにまとめられた一群の中に、出自の異なる資料が混在しているという見方も留意しておきたい。この点については、後述する礫ブロックの解釈とも関連するので、当該資料の検討後に、あらためて言及したい。

**礫ブロック** 礫ブロックも全て黄色粘土検出範囲に存在し、10ヶ所にまとめられた。礫の大グループ4ヶ所のうち、北部では北西端に（礫ブロック1）、中部西では東～南側を取り巻き（同2～5）、中部

東では中央(同7)と北端(同6)、南部ではほぼ中心域(同8~10)に認められた。配石群と同じく密集度は低く、一面に遺物が広がる状態ではないことから、いわゆる「礫群」とは異なる傾向もみせる。

礫は最小10gから最大700gまでで、総重量約8kgある。設定条件にしたがい、中・小形礫のみで構成されており、中でも300g未満の小形礫が観察数65点中53点と高率である。石材はチャートが卓越して数量で7割を占め、残りが砂岩となる。石材ごとにみた重量組成でも、全体的には同様の傾向がみられるが、チャートのみで構成される礫ブロックが3ヶ所存在した。赤化礫は両石材ともに現われ、全体のおよそ1/3に認められる。まとめりにバラツキがあり、礫ブロック1・4・5が高い出現頻度を有している。破碎度に関しては全体の2/3がC・Dランクとなり、破碎の進んだ角礫が目立つ。礫ブロック10のみが、例外的に小形の完形礫を比較的多く含んでいる。

礫ブロック中の接合資料は概ね自ブロック内で、または近距離の隣接ブロックとの中で接合関係を収束するものが多い。配石群との関わりをもつものは1点だけで、これを除く接合個体は8点得られた。この8点の個体重量は125g~1250gで、最大資料1点を除外すると中形礫2点、小形礫5点となり、礫ブロック構成礫のサイズの範疇に収まる。接合線の直線距離は割合短く、遠いものでも3m程度である。近接する礫ブロック相互の間に接合資料の発見された礫ブロック4-5、同8-9は包括して捉えても支障がないと思われる。

礫ブロックの性格を論じるにあたっては、いくつかの興味深いデータが得られた。まず、およそ1/3の資料が赤化している事実から、これらの礫が受熱している可能性が指摘される。破碎が進み、Dランクの礫が相対的に高率となっている傾向とも一応符合している。したがって、これらの資料群は、火の使用と何らかの相関を有していたとみることができる。1ヶ所ながら、礫ブロック10のように土壌や炭化物密集箇所と重複する位置にある資料が得られたことから、そうした蓋然性は高くなる。

反面で、次の点も考慮しておく必要がある。それはまず、赤化率が通常の「礫群」にみられる出現頻度よりもかなり低い点である。これには、1. 受熱した場合の石材ごとに変質する速度の差、2. 受熱頻度の多寡、3. 受熱温度の高低および受熱時の状況(空気の供給など) 4. 当遺跡資料に多く含まれる全面が赤褐色を呈するチャートの赤化識別が困難で「非赤化」と判定したことのバイアス、等の理由が想定され、解決すべき問題が残されていることを示す。また、資料数が少なく分布密度が低いこと、大多数の礫ブロックが炭化物密集箇所や土壌と空間上の分布範囲を別にしていること、礫表面に黒色付着物が遺存していないこと、なども、今後解明していかなければならない課題である。そうした検討を経た上で、火の燃焼空間が特定されたり、そこに礫が散布している実態が明らかになれば、遺跡の解釈に新たな一項目を加えることができる。

以上のように礫ブロックについては、前述の配石や、配石群を構成する内の大形礫とは相当に異なった傾向が明らかになった。そこで最後に、配石群内の中形・小形礫の性格に関して再び想起しておきたい。配石群に含まれる中形・小形礫は数量的には1/3と少ないが、その中には破碎面をもつ資料が高い割合で含まれる。ところが、この資料には同じ群内の重量1kg以上の礫と接合関係をもつものはほとんどなく、大形礫とは独立した別個の様相をみせる。重量については、100g未満では1点と少なく、礫ブロックよりもやや大きなサイズのものが得られてはいる。しかし、赤化礫の存在や、破碎の進行度を見る限り両者にはむしろ共通点が多く、配石群の中形・小形礫はより「礫ブロック」的な様相を呈しているとみることができる。

本稿では、分布データを基に資料を把握するに際して、「配石・配石群・礫ブロック」という3種の呼

称による単位を用いた。これには各々の単位を構成する礫の性状が多様なため、従来の分類である「礫群・配石」と同一視することのできない部分があったからである。3者の定義や方法には、むしろ問題点が残っており、特に単位認定の作業には、恣意的な操作が加わっていることは否めない。また、結果として、「大形礫」対「中形・小形礫」という図式を想定した場合に、両者のもつ異なる様相が浮き彫りにされてきた。したがって今後、従前の検討方法との整合を図りつつ、より合理的な礫資料区分の方法を模索する必要性が認められる。(工藤)

### 3, 土 壌

#### a, 土壌の分布

土壌は合計6基確認された。いずれも黄色粘土の検出範囲内にあり、そのうち4基(第1～4土壌)はE～F4区にまとまる。第1と第2土壌、第3と第4土壌は、各々隣接し、さらに両者の間は3mほどの距離を置いている。この4基は、北西から南東に向けて低くなる緩斜面の傾斜方向に対し、直交する方向に一列に並んでいる。周辺には礫の関係する「遺構」がなく、前述した礫の大グループ(2-d, 「配石・配石群・礫ブロックの検討」を参照)との位置関係をみると、北部のものとは10m以上離れ、中部西のグループに含まれる至近のもの(配石3)とも距離にして4m近くの間を置く。

これとは対照的に、近辺に土壌が分布せず、むしろ他の種類の「遺構」との関わりをより深くもつものも2基ある。第5土壌はF1～2区で、配石群3の直下において検出されている。配石群の大形構成礫には、一部ではあるが、その下端がほぼ土壌底面と一致した状態で出土したものがある。また、L11区のやや北東側部分にある土壌6は、礫ブロック10の中央の間隙部分を埋める位置にあって、空間的には炭化物密集部第5と重複している。こちらの検出位置は、泥炭層分布範囲との境界からわずかに数m北に寄ったところである。(進藤・工藤)

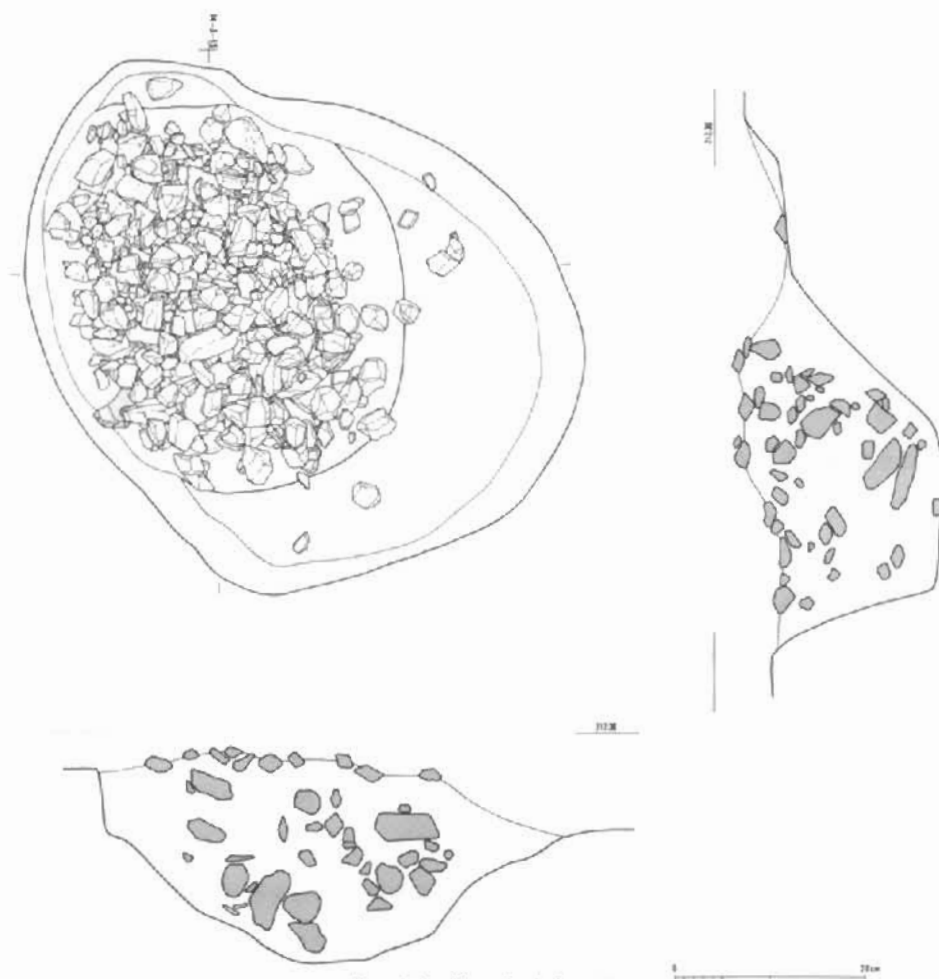
#### b, 土壌の内容

6基確認された土壌について、各々の検出状況を第44～49図、第54～57図に示す。第1～3土壌においては、多数の礫が出土していて、それらの検討を配石・配石群・礫ブロック構成礫に対するのと同様の方法で行った。礫の重量(50gまで2gごと、100gまでは10gごと、以上は100gごとに累計して示す)と、石材・赤化・破砕度との関連については、結果を第50～53図のグラフに現わす。

**第1土壌(PD1)** F4区中央やや北東寄りで検出された。形態は、確認面ではほぼ北東～南西方向を長軸とする楕円形で、東側へは若干の張り出し部分を持ち、規模はおよそ0.6m(長径)×0.5m(短径)である。南東側に偏って土壌底部があり、0.3m×0.2mの楕円形を呈する。断面形は基本的にはU字形だが、南側で急な立ち上がりを見せるのに対し、北に向けては緩やかに上昇し、北～東側にテラス状の段を有する。確認面からの深度は約0.2mである。覆土は灰黄褐色を呈する、やや砂質の粘土で、周囲の黄色粘土に比較すると砂粒が増加しているが、総じて粘性は相当に高い。

土壌内の遺物は、テラス状部分を除く土壌の南半で頁岩製削器1点、サヌカイト製剥片5点、チャート製石核1点の合計6点と礫580点が出土している。これらは土壌中央部を中心に、極めて高い密集度で検出されており、逆に掘り込みに沿った周辺部分では少なく、1～2cmの幅の間隙も有している。礫構成(総計重量約6.5kg)は次の通りである。石材：チャート250点、砂岩319点、花崗岩・粘板岩等11点。サイズ：全点小形礫(最大200g、出現ピークは10g以下の級)。赤化：381点、非赤化：198点。破砕度：A178点、B44点、C30点、D327点。極小の細礫が全体に分布するのに対し、やや大きめのものは中央

第1節 下位文化層の遺構

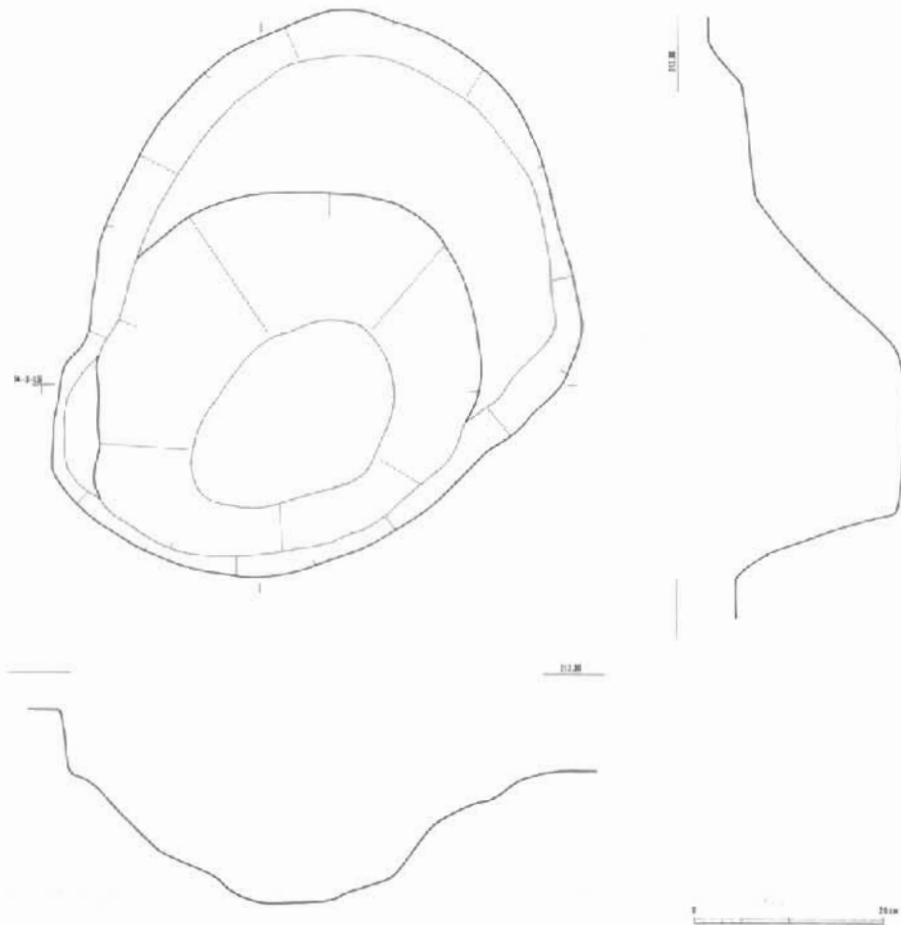


第44図 第1土壌実測図

に偏在する。組成上、点数では砂岩が卓越するが、より細礫が多いために全体重量では逆転してチャートが過半を占める。接合作業は困難を極め、わずかに3個体（7点）のチャート資料が接合したに過ぎない。数点の石器については、石塊として礫とともに一括されて含まれている様相とも考えることができ、出土内容に関しての特徴的な傾向は見いだせない。

**第2土壌（PD2）** F4区北東部、第1土壌の東0.3mの場所にある。先行して掘削したトレンチにより東側部分が失われ、当該範囲では底部付近のみが観察可能であった。推定される確認面の形状は0.6m×0.5mの、北西に向けて張り出し部のある楕円形と思われる。土壌底部は不整形で、北東～南西向きに長軸があり、規模は0.3m×0.2m程度である。断面形態は上方に開いたU字形で、観察時の深度は0.2mにおよぶ。このうち、確認面から数cmのところを有しているものと考えられる。覆土は灰黄褐色を呈する砂質の粘土で、土壌1と同じ様相をもつ。

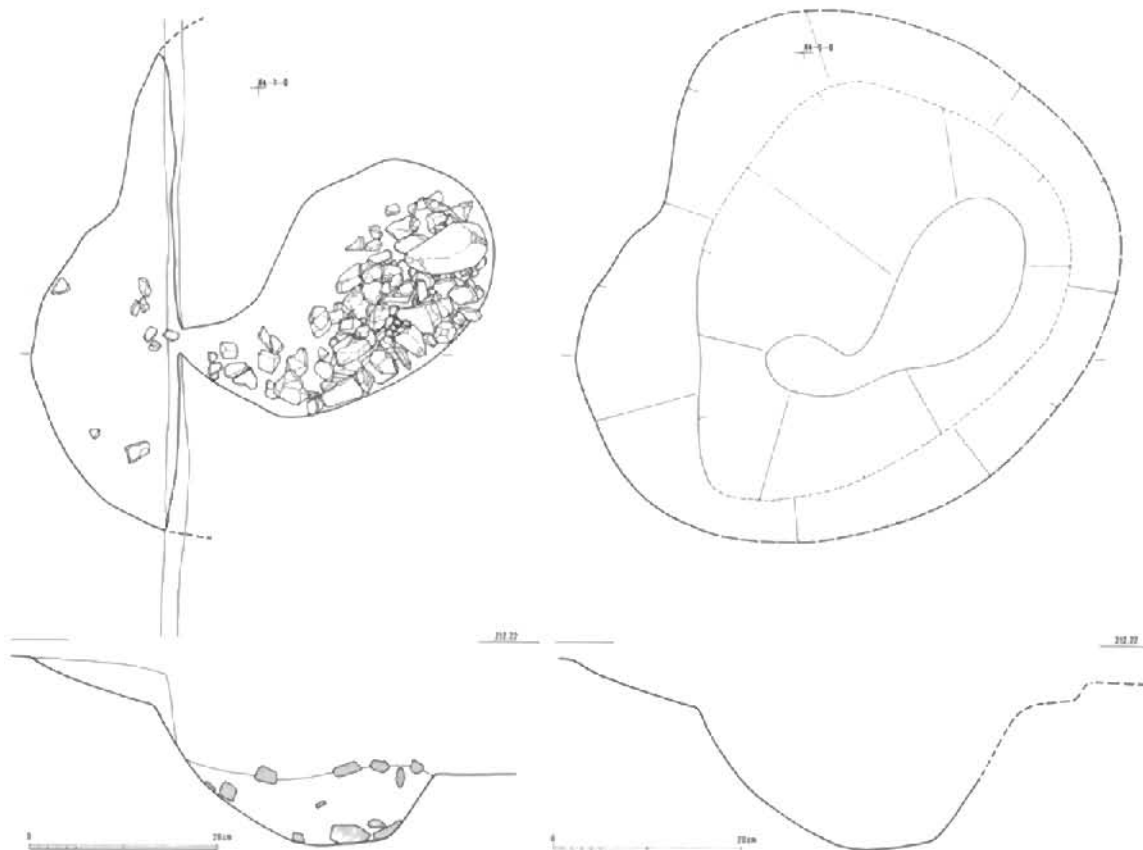
土壌内の遺物としてチャート製石核素材1点と礫129点が出土している。石器1点は最初の確認面で得られており、たまたま混入した可能性も考慮される。礫は段よりも下位に集中し、特に底部から南寄りの壁にかけて多くが出土している。礫構成（重量合計約1.1kg）は次の通り。石材：チャート38点、砂岩16点、泥岩68点、凝灰岩等7点。サイズ：中形礫1点（300g）、他は全て小形礫（10g以下の級が全体点数の8割）。赤化：28点、非赤化：98点。破砕度：A32点、B25点、C4点、D65点。石材については、組成に占める泥岩の割合が高く、点数・重量ともに過半を占めて特徴的である。一方、赤化礫の頻度は2割をわずかに超える程度と、やや低い。接合資料は得られていない。



第45図 第1土壌完掘実測図

**第3土壌 (PD3)** E4区東部で検出された不整形の遺構で、確認面における規模は2.5m×1.3m、南西へ向けて1mほどの突出部分をもっている。確認面からの深度は約0.1mで、北東部ではさらに数cm低くなった、1.2m×1mの不整形の底部が認められ、断面は段のある浅い皿状の形態を呈す。上位の遺構構築（中世の柱穴等）により、遺存状態は芳しくない。覆土は砂質の灰黄褐色粘土で、前述の第1・2土壌と同質のものとなっている。東南方向にゆるやかに傾く地形のため、土壌南半が流失している可能性が考えられる。柱穴・炉址等の施設は土壌内には認められない。

土壌内出土遺物として、チャート製剥片1点と礫244点が得られた。また、土壌検出以前に上面で石器17点を含む合計41点の石器類を検出している(第80表)。礫の平面分布状況は大きく2つに分けられ、ひとつは西寄りの高位の段にある密集度の高い一群であり(平面規模0.8m×0.5m)、他方は北東側の底部全面に広がる、やや散漫なまとまりである。両者の垂直分布図をみると、0.1mほどの間隔を置く、2つの水平な面に集約して捉えることが可能である。このような分布状態は、既述の土壌1・2のように掘り込みを充填した様相のものとは性格を異にし、むしろ他遺跡で検出されている礫の集中分布域における出現状態に酷似した傾向をもっていると言える。礫構成(重量合計1.7kg)は以下の通りである。石材：チャート65点、砂岩171点、粘板岩等8点。サイズ：全点小形礫(最大200g、点数では10g以下の級に8割が集まる)。赤化：88点、非赤化：151点。破砕度：A60点、B18点、C7点、D154点。砂岩資料よりもチャートの方が一まわり大きく、重量組成ではやや比率を増している。接合作業を行ったものの、接合個体はみつかってない。



第46図 第2土壌実測図

第47図 第2土壌完掘実測図

**第4土壌 (PD 4)** E 4区南東部で、第3土壌の南西に隣接して認められた。確認面は1.3m×0.9mの不整形で、西側への突出部を有する。断面形状は2段に分かれる浅い皿形で、南東部が深度数cmの比較的平坦な高位の段をなし、突出部も含めた北～西部に一段低い底部(平面規模0.9m×0.3m、確認面からの深さ0.1m)が存在している。覆土は砂質の灰黄褐色粘土である。覆土中からの出土遺物はフルイによって石英製碎片1点が出土した。

**第5土壌 (PD 5)** F 1～2区にまたがって検出された不整楕円形の土壌で、確認面における規模は1.1m×0.8m、南と東へやや張り出した形状をなす。底部もほぼ相似形を呈し、1.0m×0.7mである。確認面とともに、旧地形に合わせるかのように、土壌底部も南東方向に向けて若干下降していて、底面は数～10cmにわたる傾斜をみせる(断面図参照。A-A'セクションには北半の上端・下端ラインも投影合成して図示)。砂質の灰黄褐色粘土が覆土として堆積している。フルイによりチャート製碎片4点が出土した。

この土壌の直上には、配石群3が分布しており、計4点の礫が平面的に重複した位置にある。そのうち大形礫2点は、下面が土壌底部に接しているが、残りの大形礫・中形礫各1点ずつは覆土中に浮いた状態にあった。そこで、本報告では、一応両者を分離した形で取り扱っておく。

**第6土壌 (PD 6)** 泥炭層の検出域に近いL11区東部で発見された。確認面は不整形で、0.8m×0.5mの規模をもち、底部は不規則な凹凸をみせる。西壁ではオーバーハングしていて、この部分が最深部となり、深度およそ0.2mである。覆土は砂質の灰黄褐色粘土で、多量の炭化物片を含んだ灰土である。焼土は認められない。





第48図 第3土壌実測図

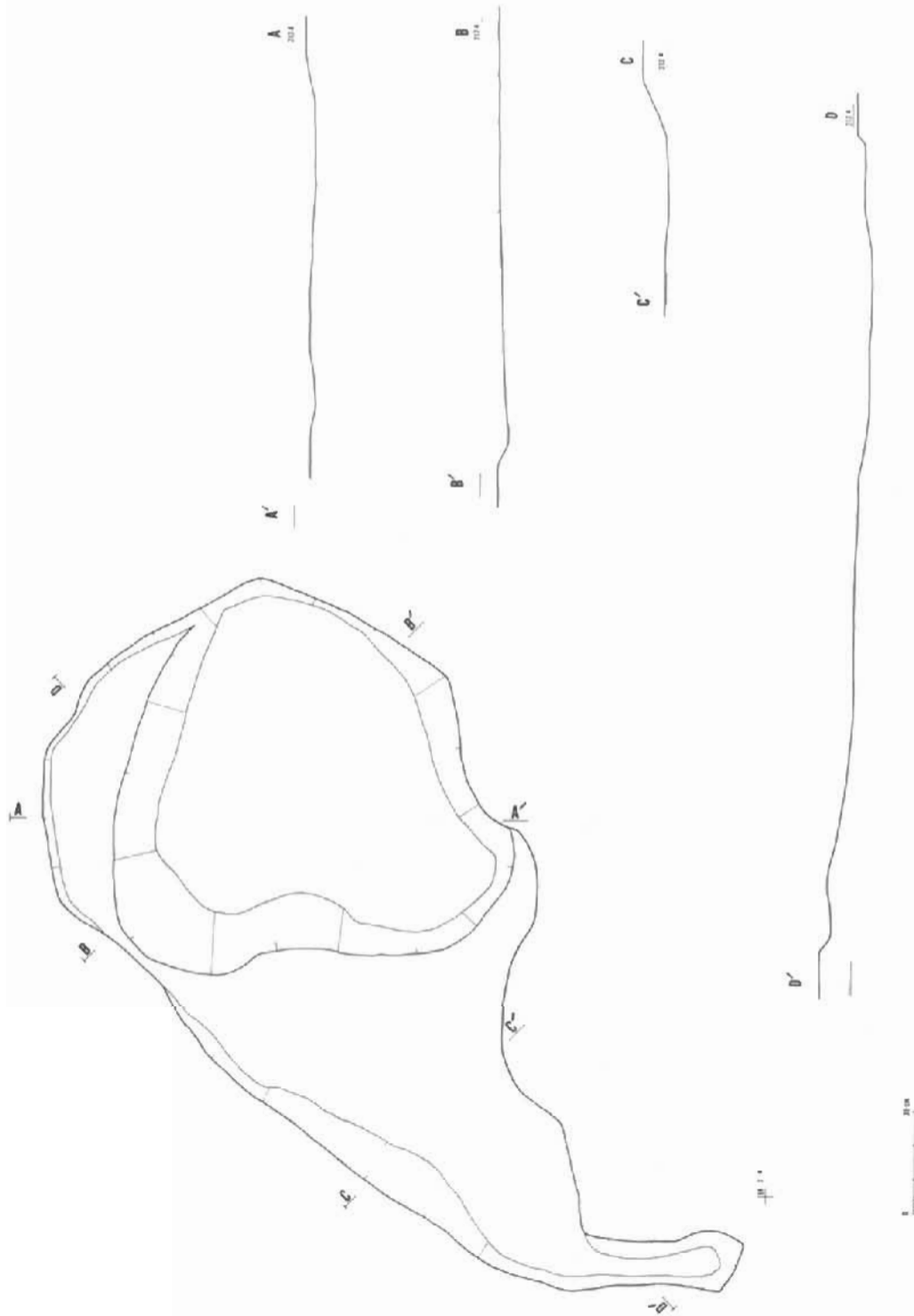
当土壌は礫ブロック10と重複しており、その構成礫は土壌の周囲0.3m~0.7mの範囲に散在している。また、土壌の周辺には、最大長数mm~2cmの炭化物片が集中している(検出数:数百点)。炭化物片は土壌覆土中にもあって、かつ、高密度で分布するので、この土壌が核にあたる部分と想定される。礫ブロックの赤化礫出現と併せてみても、土壌の性格を考える上で有力な手がかりとなる。(進藤・工藤)

#### c. 土壌の検討

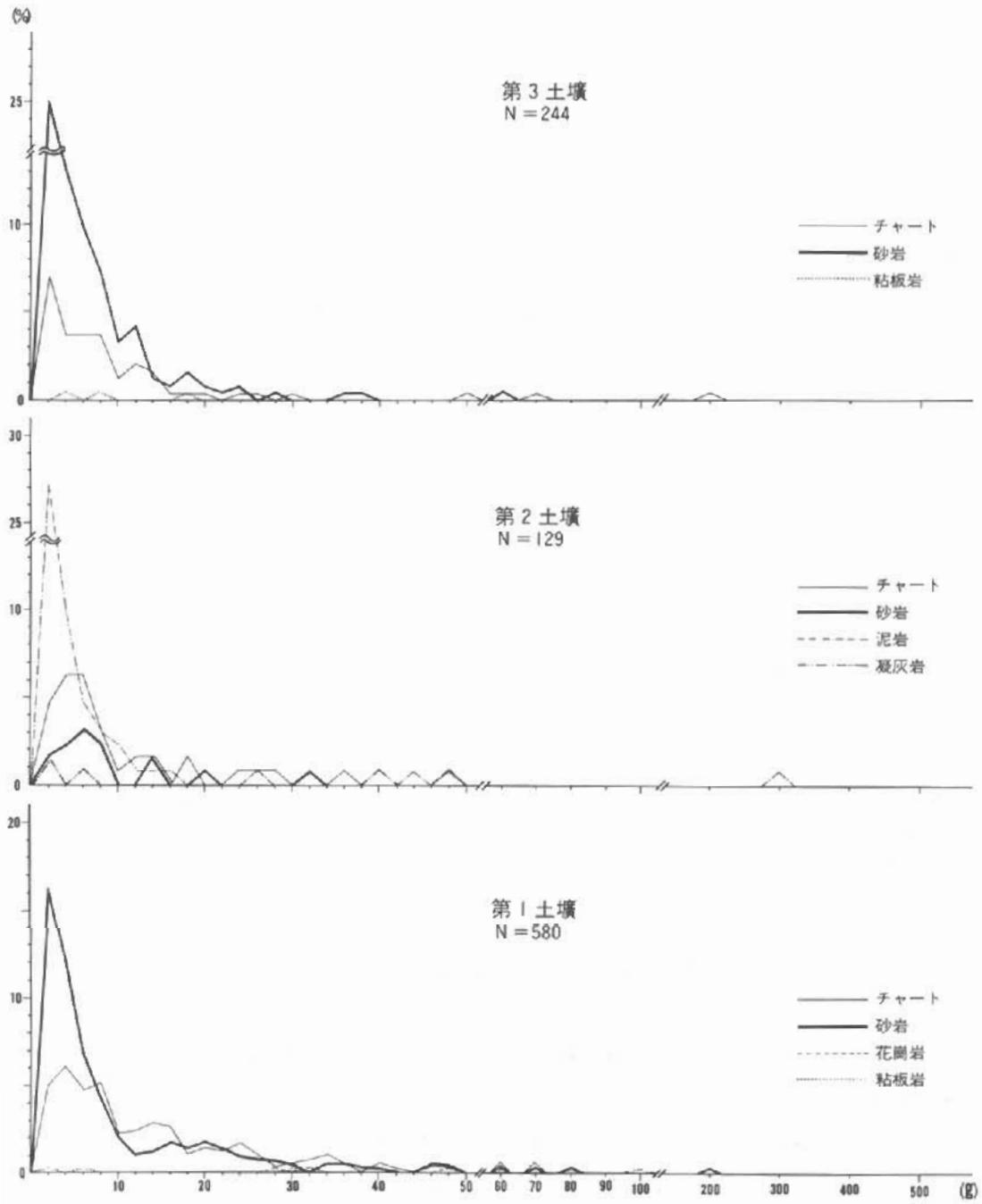
土壌は、その用途や機能を明らかにする情報が相対的に乏しく、遺構の中でも判定の困難な、いわば扱いにくい部類に属するものである。加えて、当該時代における報告例は極めて少ないことから、判断は慎重に行われなければならない。しかしながら、当調査では興味深い、いくつかの資料が得られたので、本項でそれらをまとめた上で、土壌の性格に関して若干言及してみたい。

まず、土壌の規模についてみると、概ね小形で径1m前後のものが多く、確認面からの深度も小さい。平面形状では楕円形や不整形を呈する例があり、こうした結果だけで土壌の性格を論ずるには難がある。ただし、第3土壌は面積がやや広く、南半が流失した可能性もあることから、通常の土壌よりも規模の大きい竪穴状遺構とみることが可能ではあろう。黄色粘土層中の覆土は層相の差がわずかで、区分が難しいという事情があったが、各土壌ともに砂質の粘土が埋積している。

今回、土壌を解釈するにあたって有意な手がかりとなったのは、礫や炭化物の共伴関係であり、6基

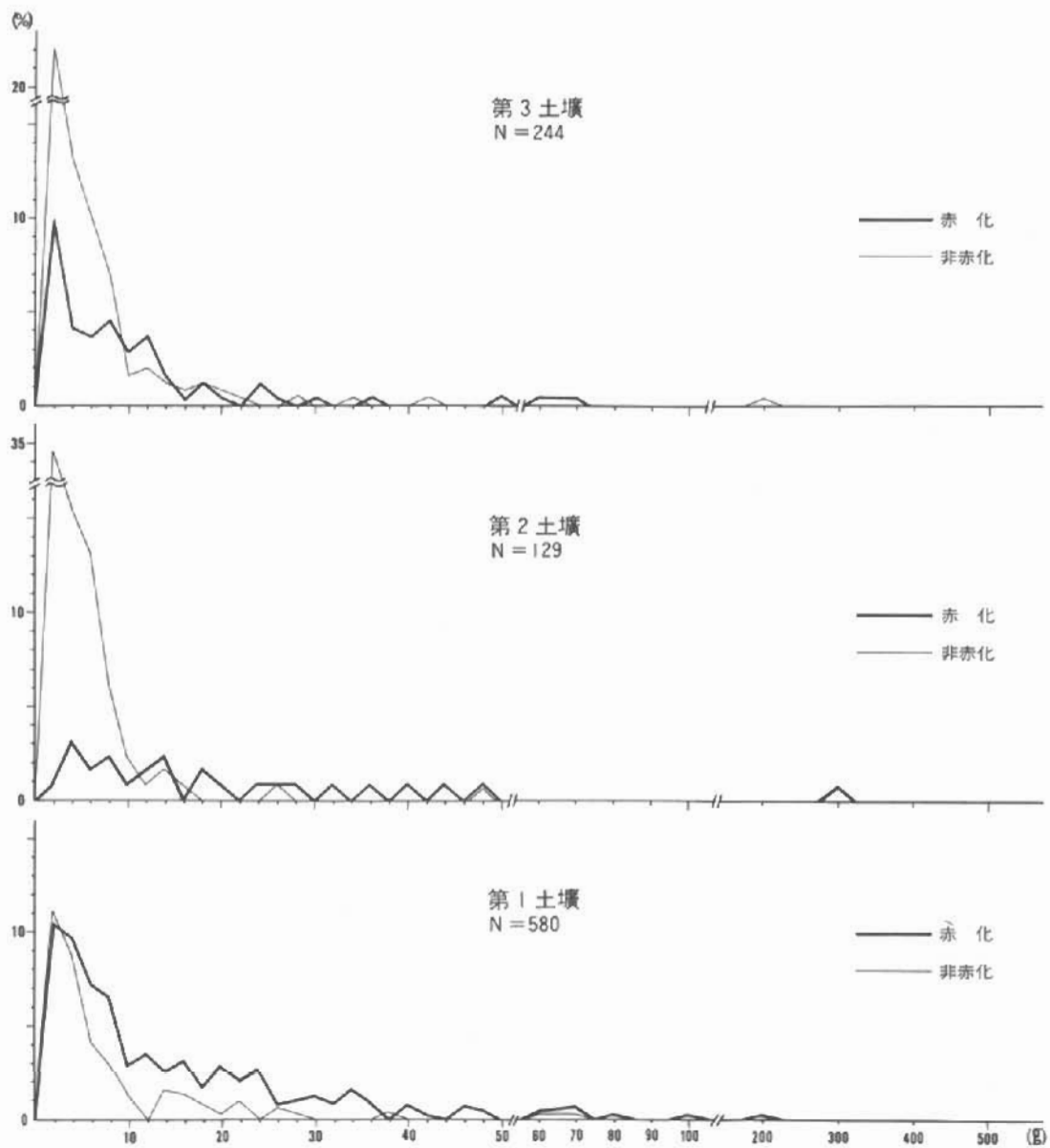


第49図 第3土壇完掘実測図



第50図 土壤出土礫 石材別出現頻度 (点数/重量)

第1節 下位文化層の遺構

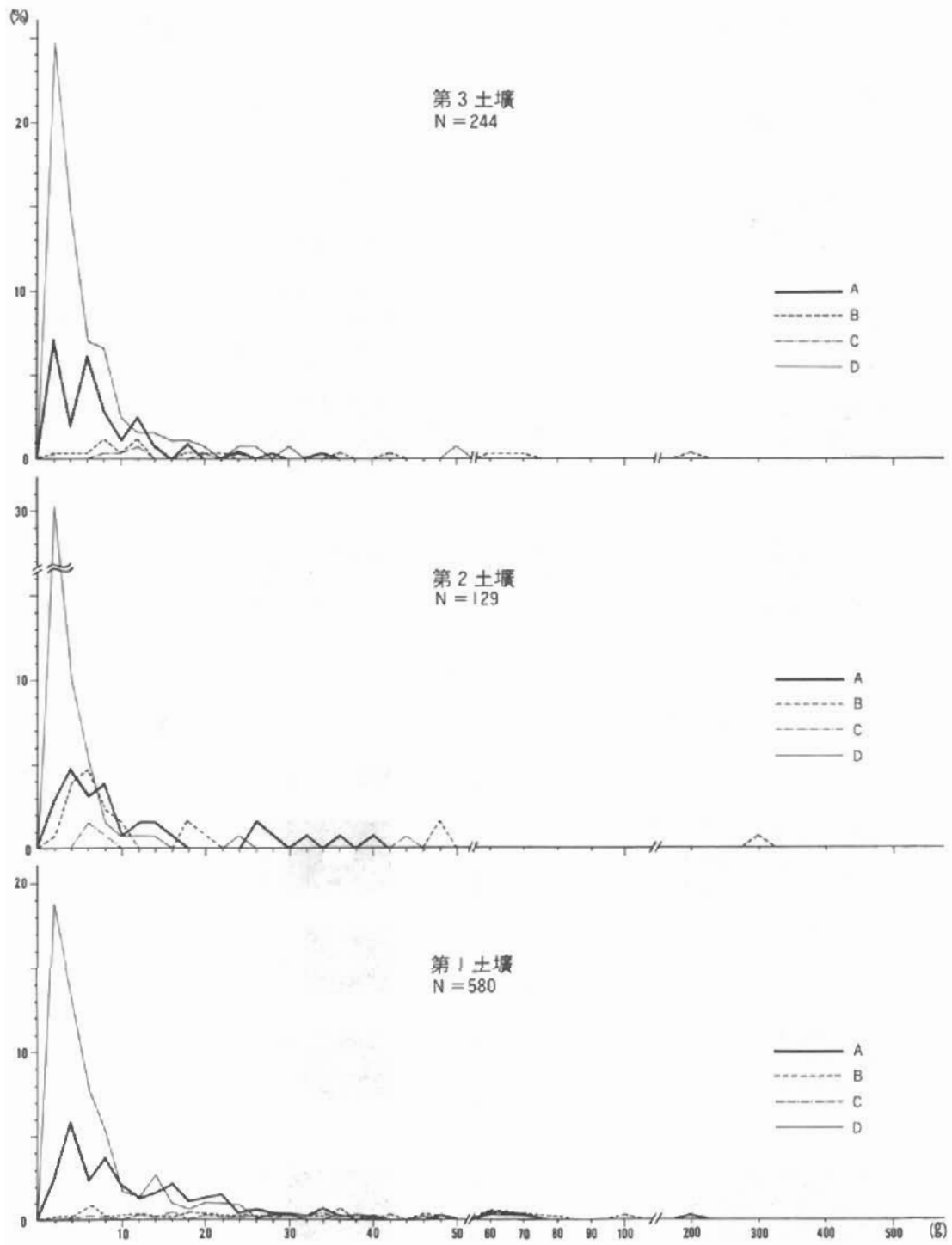


第51図 土壤出土礫 赤化・非赤化別出現頻度（点数/重量）

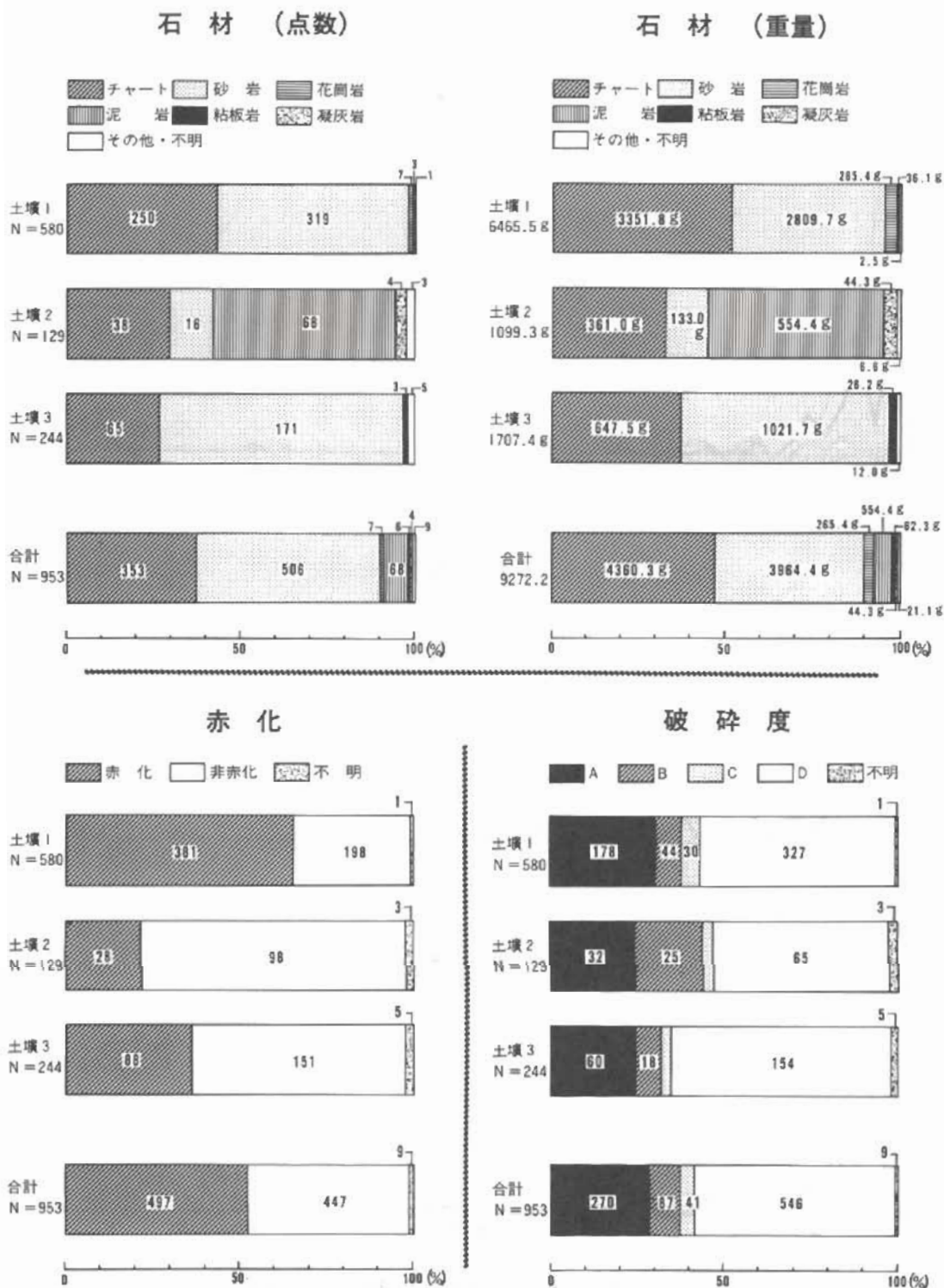
中5基で具体的に検討を行ってみた。共伴資料の提供する情報には差があり、結果的に依然として実体のつかめないものも残っている。第5土壤は、配石群3との関連が考慮されたが、礫の出土位置が土層底部よりも高い例があり、また、配石群自体の内容も、今のところ見通しが明確になっていないため、判断は留保したい。第6土壤は比較的実体に迫ることのできる一例で、炭化物片の集中分布域の中央にあり、赤化礫が周辺に散在する状況証拠から燃焼空間であろうとの見通しを立てることができる。ただし、断定するには焼土の検出などの、より確固としたデータが待たれることは言うまでもない。

第1～3土壤は礫を伴う遺構で、合計953点（観察数944点）もの資料が出土している。ここでは土壤の解釈に先立ち、まず礫について考慮してみる。検討するにあたっては、既に触れた礫の分析と同一の

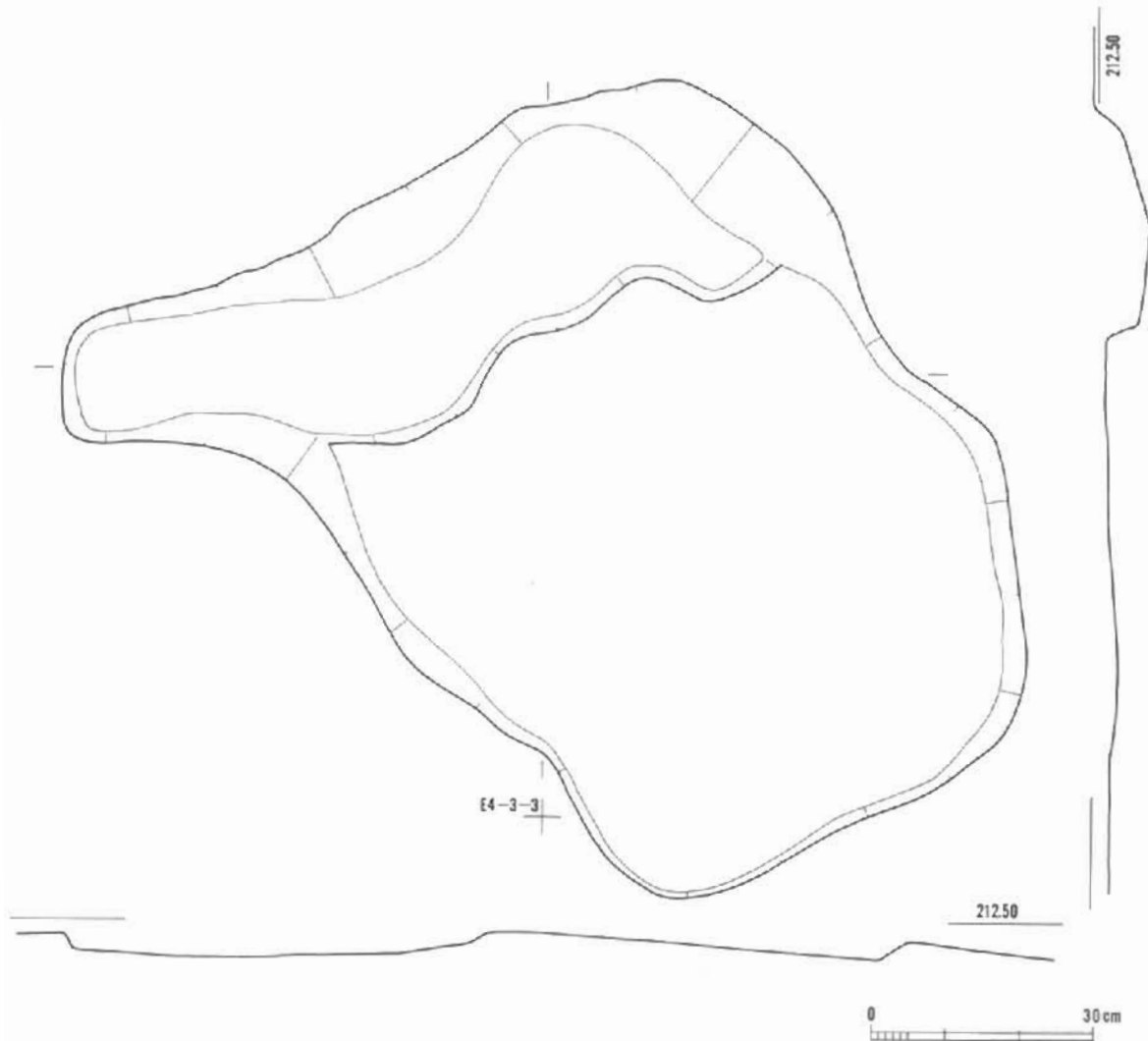
第IV章 下位文化層の調査



第52図 土壌出土礫 破砕度別出現頻度 (点数/重量)



第53図 土壌出土礫 石材・赤化・破碎度別出現頻度

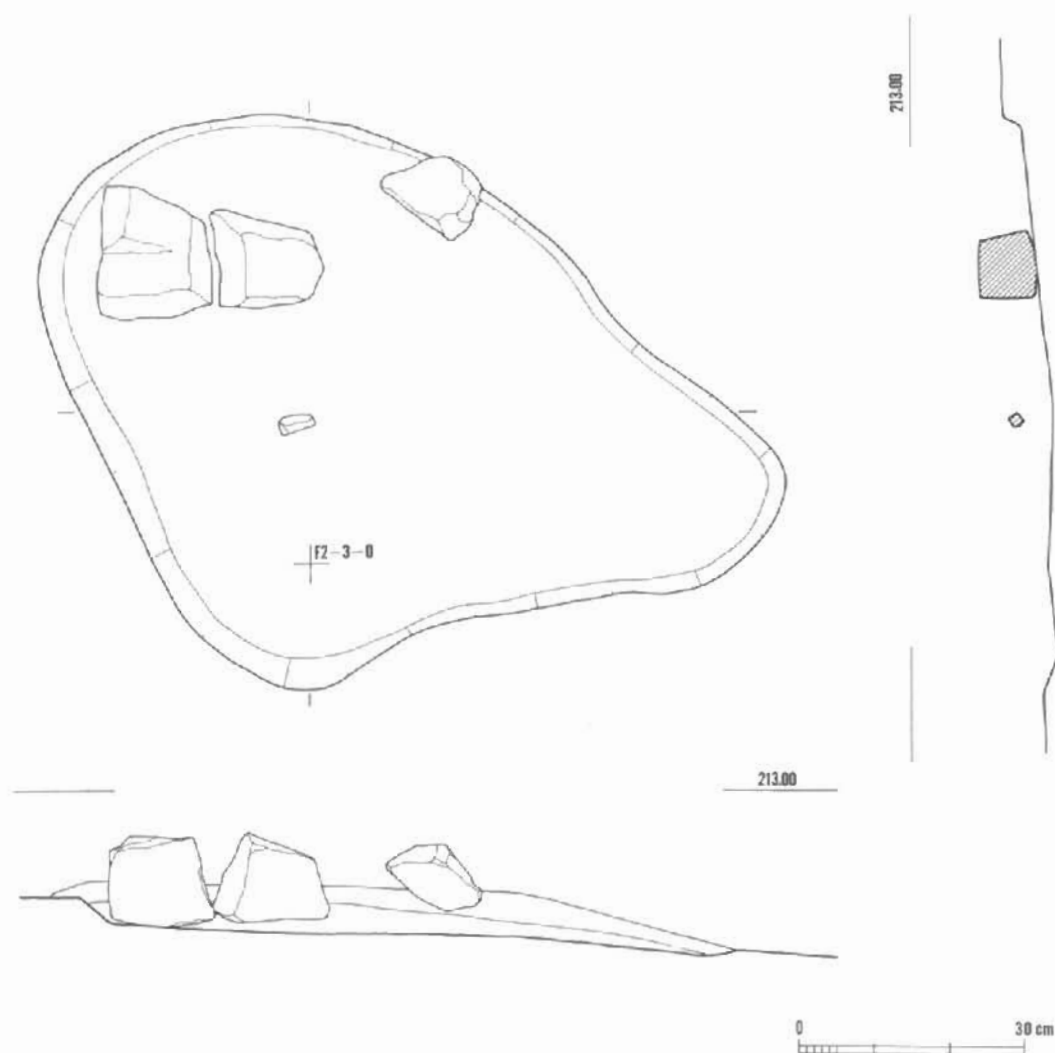


第54図 第4土壌実測図

方法で出現頻度をグラフ化した(第50～53図)。

3基の土壌における出土数は、第1土壌に580点と偏るものの、第2土壌(129点)、第3土壌(244点)ともに決して少ない数ではない。石材別組成については、砂岩・チャートが主体となる第1～3土壌と、泥岩の混じる第2土壌とは異なるが、後者は砂岩の大多数が泥岩に置き換えられたケースとみることもできる。花崗岩・粘板岩・凝灰岩は、いずれも少数しか得られていない。

資料サイズをみると、構成礫の主体をなす砂岩・チャート・泥岩のいずれも10g未満の級にピークをもち、2gまでの最小グレードに最大頻度をもつものも少なくない。これは、土壌に含まれる礫が、当遺跡では最も細かい極小礫により構成されていることを示し、礫ブロック構成礫よりもさらに小さい資料であることが判明した。そして、20g未満のサイズの礫が、どの土壌内でもほぼ8～9割を占めていることも分かった。なお、石材ごとではサイズに差がみられ、第1～3土壌では数量的に砂岩が勝るものの、



第55図 第5土壌実測図

重量組成ではチャートの比率が相対的に高くなるという微細な差異も捉えられた。

赤化礫は極小のものから100g以上級にまでみられ、その出現割合は2/3（第1土壌）～1/4（第2土壌）と、遺構により頻度の差が顕著である。しかし、全体を併せみると過半数が赤化資料に該当し、礫ブロックよりも高率となる。

破碎度に関しては、Dランクが極小資料を中心に各土坑で過半～2/3をおさえ、他方で、Aランクの完形資料も極小から100g以上級の範囲で1/4～1/3程度得られている。破碎の進んだ礫が出土する一方で、多様なサイズの完形礫がそのまま破碎せずに相当数含まれている点は、留意されるべき特徴と言える。全体では、C・Dランク合わせて約60%となり、比率としては礫ブロックの場合と近似した内容を呈示している。なお、接合資料については、必ずしも十分な検討を行い得たわけではない。極小資料が多いため作業は難行し、結果は第1土壌で若干の接合個体が得られたのみであった。

以上のように、個別の細目では、一部で非赤化資料や完形礫の比率が高かったり、黒色付着物が検出されないなど、若干の問題点があり、将来に向けては、石材属性、受熱頻度・埋没後変化等の視点から検討していくべき課題として残されている。しかし、包括的に土壌内出土礫の性状を鑑みた結果、礫に





第56図 第6土壌検出面 炭化物密集部5および礫ブロック10実測図

第57図 第6土壌実測図

関しては概ね「被熱資料が多い」とみてよさそうである。

ところで、これまで、土壌内の礫は火の使用との関連が深いとの見通しを述べてきたが、土壌そのものと燃焼空間との関わりというレベルの議論には、未だ至っていない。それは当資料の周辺で焼土や炭化物等が肉眼的に捉えられないため、この事実の説明は、例えば次のようになされる。

1. 礫の受熱は他の場所で起こり、二次的に移動した礫のみが土壌内にある。
2. 礫の受熱は土壌内で起こったが、その結果生じた焼土・灰・炭化物（礫表面の黒色付着物＝炭化残渣を含む）は何らかの事由により消失した、または肉眼的に捕捉できなくなった。

この問題点を解決するためには、今後の、より精緻な調査手法の開発が望まれる。また、肉眼で捉えきれない事象を自然科学的手法でおさえるなど、方法の転換も必要となるであろう。

最後に、第1～3土壌の礫出土状態にも触れておきたい。それは、同一遺跡の中でも至近の位置にある、類似した傾向をもつ礫の集合が、異なる2つの分布パターンを提示していることである。ひとつは第1・2土壌におけるように、掘り込みを充填した状態のものであり、その構造は縄文時代の集石土壌にも近似している。構成礫の検討結果を加味すると、類似した内容をもっているともみられる。他方は平面的に拡散して広がったかのような状況を呈する、第3土壌の例である。後者の垂直分布の傾向は、他遺跡で報告される「礫群」等の様相に近い。そして、仮にこの両者の内容の相違が、土壌の構築から使用、遺棄・廃棄に至る一連の過程の中における段階の差を背景としたものとする、礫の出土状態が人間活動の階次を示唆する可能性があるわけで、事実とすれば、遺跡の解釈をめぐる重要なアプローチとなり得る。

(工藤)

#### 4. 炭化物密集部

##### a. 炭化物の検出

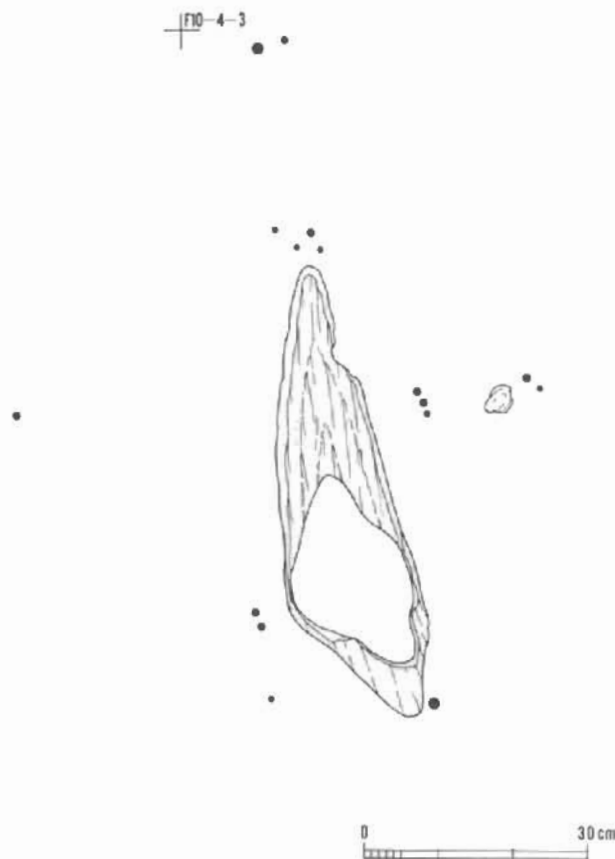
当遺跡の調査では炭化物が検出され、それらが密集した空間が複数ヶ所捉えられた。微小な炭化物片自体は、遺跡内の遺物包含層中にある程度散在しているものとも予想されるが、主に木材起源と考えられる炭化物が、高密度にまとまって、あるいはブロック状に検出される例が認められたことから、これらは「火の使用」に関連したものとも解釈できる。そこで本項では、炭化物が自然の要因による結果生じたものではなく、また、遺跡形成の過程で大きく移動・変化はしてはいない、との見通しのもと、意図的に形成された燃焼空間である可能性を鑑みて、「遺構」に含めて報告する。なお、当該の資料解釈をめぐっては、単に遺物の分布域とする評価に留め置く考え方もあることを、確認しておきたい。

##### b. 炭化物密集部の分布

炭化物密集部は合計5ヶ所確認された。検出されたのは、遺跡の中でも標高の低い南～東部で、具体的にはM列以東、10例以南の場所である。また、この他にも調査中、湧水により包含層の遺存状態が悪化して記録できなかったもの1ヶ所（G11区）があった。

炭化物密集部の出現傾向として特徴的なのは、黄色粘土層と泥炭層（泥炭Ⅲ）の検出境界域付近にその多くの分布がみられることである。すなわち、密集部4ヶ所は境界線から数m以内の場所にあり、泥炭層側において検出されたもの2ヶ所（第1・4炭化物密集部、G11区の流出資料も同じ状況の位置に立地する）、黄色粘土層側において発見されたもの1ヶ所（同5）と、両者にまたがるもの1ヶ所（同3）とに分けられる。第2炭化物密集部のみが隔絶していて、前述の境界線から20m南に離れたI15区にある。

炭化物密集部について、いまひとつ指摘できる特徴は、一例を除き、比較的個々に独立した様相で現



第58図 第1炭化物密集部実測図

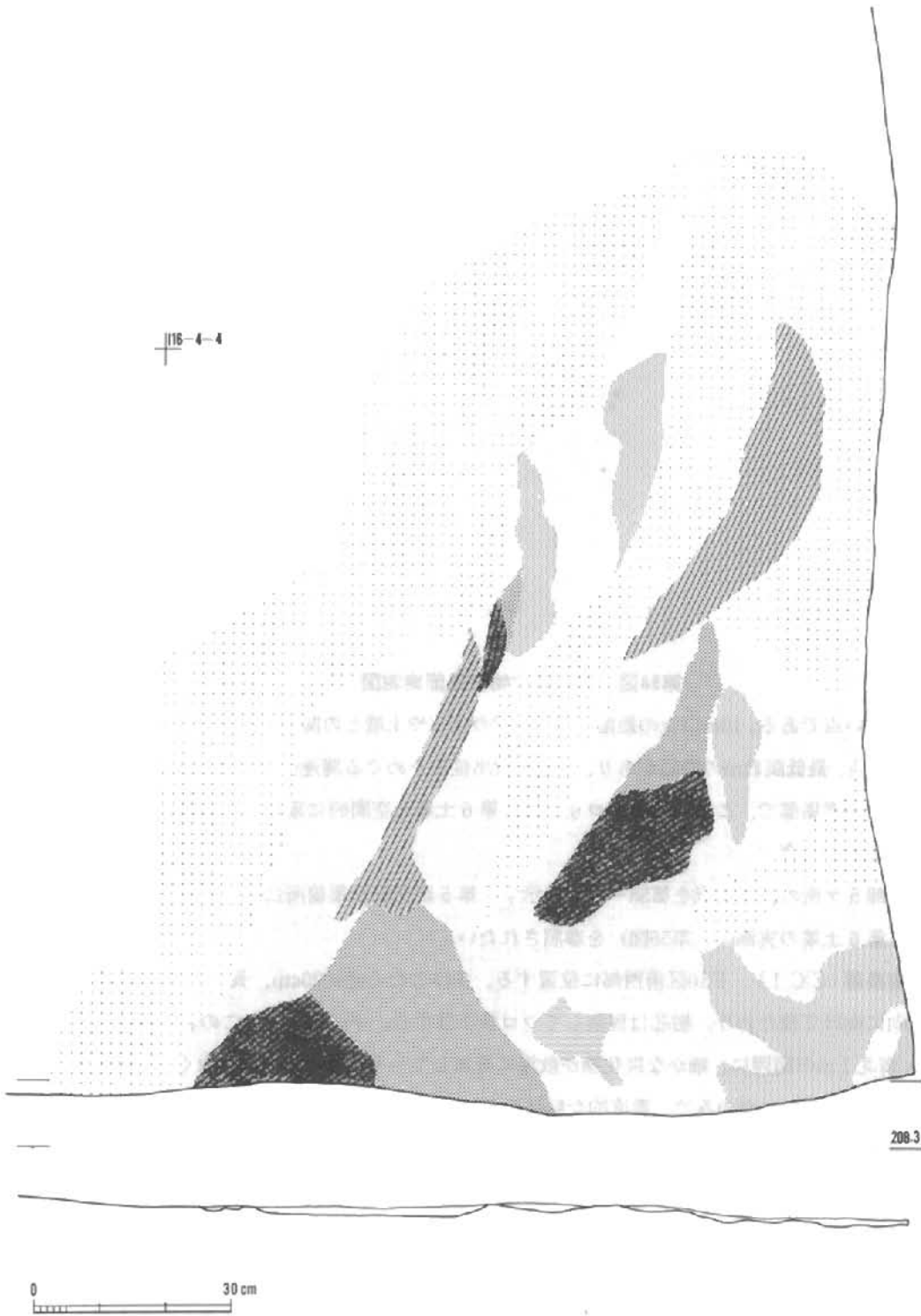
われる傾向が強い点である。10m以上の距離を置く、礫の分布や土壌との関わりの場合のもとより、炭化物密集部相互でも、最低限数mの間隔があり、総じて検出位置をめぐる関連性は希薄である。唯一例外的なのが第5炭化物密集部で、ここでは礫ブロック10、第6土壌と空間的に重複している。

c, 炭化物密集部の内容

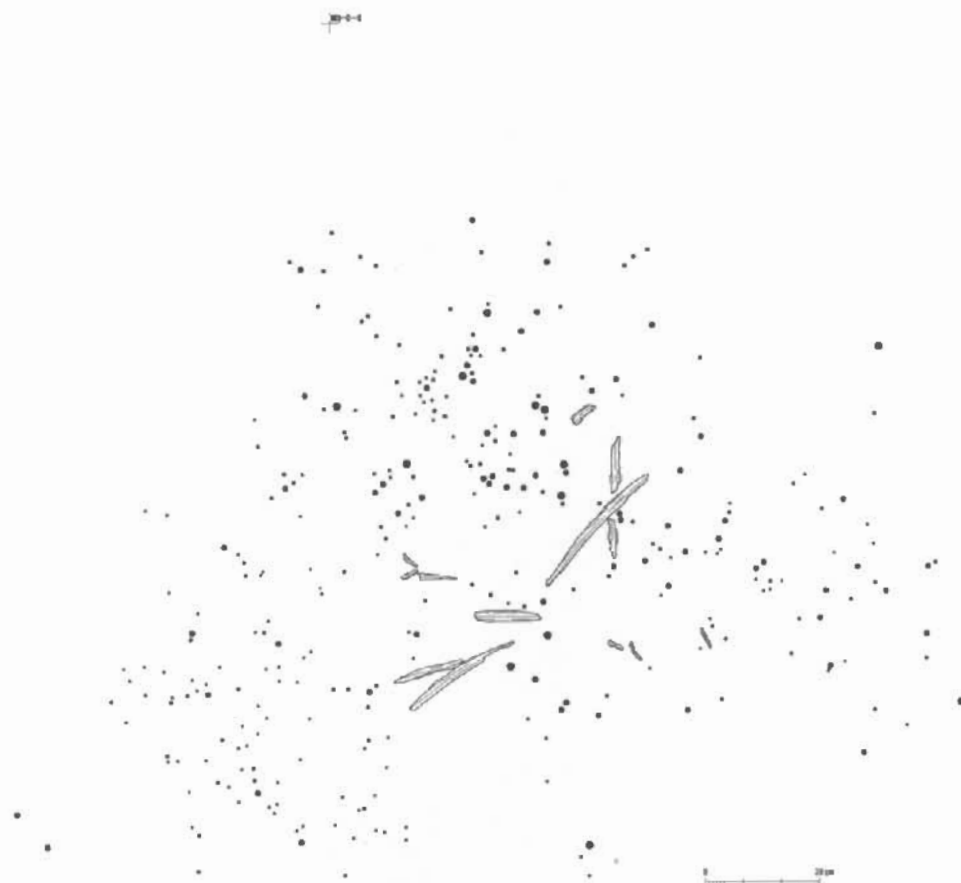
炭化物密集部5ヶ所の検出状況を第58～61図に示す。第5炭化物密集箇所については、検出位置が重複するため、第6土壌の実測図（第56図）を参照されたい。

**第1炭化物密集部（CC1）** F10区南西部に位置する。主体となる径約20cm、長さ約60cmの炭化木材は、南北方向に向けて横たわり、樹芯は脱落してウロ状を呈する。平面的には、この材を中心にして、東西0.8m×南北1mの範囲に、細かな炭化物が散漫に分布している。中心部の材を除くと、検出されたのは標高209.80m付近の一面のみで、垂直的な幅は小さい。

**第2炭化物密集部（CC2）** I15区南西端で東西1.5m×南北1.3mにわたって検出された。南・西側は2本のトレンチによって切られているため、実際の分布域はこれよりも広いものと推定される。標高208.20m付近で上下幅数cmの厚みを有する。全面で相当多数の炭化物が検出されたため、分布図は模式的に示し、ドットの密な範囲ほど高密度の状態となっている。図中の斜線は木材の繊維方向を表しており、比較的方向の揃った部分については、同一木材起源とみることができる。10b層とシルト層との層理面におけるサンプル8点を実体顕微鏡下で観察した結果、中型の管孔が均一に散在する散孔材と判定された。これにより広葉樹の材と判明したが、より詳しい同定は不可能であった。



第59図 第2炭化物密集部実測図



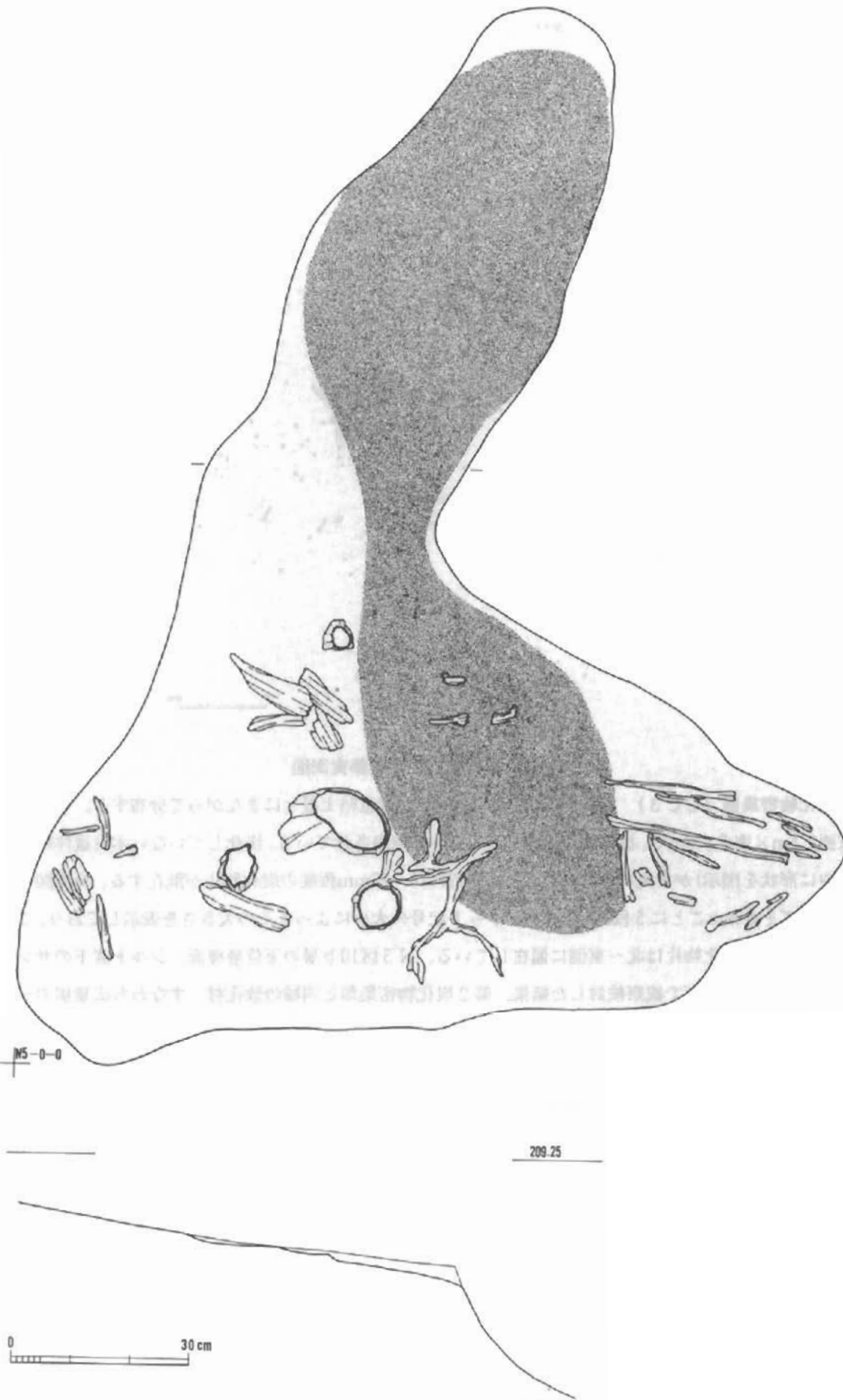
第60図 第3炭化物密集部実測図

**第3炭化物密集部 (CC 3)** M～N 5区で、泥炭層と黄色粘土層とにまたがって分布する。平面規模は東西2.5m×南北1.8mで、標高209.40m付近において検出されている。炭化していない木材遺体約10片（図中に形状を図示）が中央に認められ、その周辺に10～25mm程度の炭化物片が散在する。分布図では資料サイズを5mmごとに3段階に分けて、ドット記号の大小によってその大きさを表示しており、これによると大形の炭化物片は北～東側に偏在している。N 5区10b層の下位層理面、シルト直下のサンプル8点を実体顕微鏡下で観察検討した結果、第2炭化物密集部と同様の散孔材、すなわち広葉樹の一種と同定された。

**第4炭化物密集部 (CC 4)** O 4区南西部で検出された密集部で、東西1.4m×南北1.7mを測る。標高209.00m付近に厚さ5cmほどの堆積がみられ、垂直分布は東に向けてやや下降していく。東端は掘削により失われている。内側の、分布上の高密度部分は南北に分かれて広がり、南側に認められた、炭化していない大形の木材遺体（図中に形状を図示）とは分布域を異にする。

**第5炭化物密集部 (CC 5)** L 11区東側において確認された集中部で、東西2m×南北2mにおよぶ範囲に炭化物片数百点が検出された。礫ブロック10・第6土壌と空間的に重複し、特に、第6土壌の覆土中に分布域が広がって、この部分では標高208.80mの確認面から下方へ0.2mの上下幅をもっている。平面的にも土壌の内側で密度が高く、この部分が分布の核になっていることが理解される。炭化物片のサイズは数mm～20mmの範囲で、当遺跡内の炭化物としては粒径の小さいもの（最大長10mmまでの資料）の割合が高い。他の密集部にみられる、ブロック状資料の出土に比較すると、若干、間隙が目立つが、

第1節 下位文化層の遺構



第61図 第4炭化物密集部実測図

検出点数は多く、分布範囲は決して小さくない。礫ブロックの礫の出土レベルと、土壌確認面、それに炭化物片検出の第1面の標高がほぼ等しい。

#### d, 炭化物密集部の検討

ここでは、本遺跡下層で検出された炭化物密集部についてまとめ、その性格を探るため詳しく検討してみる。5つの密集部に対しては、必ずしも、統一的な尺度で比較・検討が行われたわけではないが、解釈に新たな見通しを与え得る成果が上がってきている。

炭化物密集部の分布傾向としては、標高の低い、泥炭層検出範囲またはそれに近い場所への偏りが認められたが、これは同時に石器や礫などの遺物の主要分布域とも「占有場所を異にする」ことを意味する。分布図を見る限りでも、他種遺物との関連が薄く、比較的「孤立」した内容をもつという特徴がある。また、ただ1ヶ所の例外的な検出状況を提示した第5炭化物密集部においては、土壌の掘り込みとの関わりが捉えられ、礫ブロックを形成する少数の赤化礫に、共伴しているともみられる出土状況を呈している。

平面規模は径1m~2.5m程度で収束し、形状は様々だが、閉じた状態をみせている。垂直的には層厚数cmの密なものから、上下に拡散して20cmほどにおよんでいるものがある。前者は大形のブロック状資料のケース、後者は小形の細粒資料の場合に顕著となる。微地形を反映して斜面下位に向かって緩く下っていくものも認められた。

炭化物の内容は破砕した炭化木材で、密度の高いブロック状資料例の中には、起源となった材の繊維の方向を識別できるものがある。泥炭層中の資料には生の木材遺体も含まれていて、ちょうど焼け残りの材がそのまま封じ込まれたかのような雰囲気の部分もある。厳密に両者の繊維方向を検証したり、樹種同定を行っているわけではないが、泥炭層が形成されるような環境下で、早い時期に埋土中に取り込まれれば遺存し得るものである。

以上の結果を踏まえて、炭化物密集部の性格について考えると、ひとつ推測できるのは、集中的に火が燃やされた「燃焼空間」そのものではないか、ということである。そして、当遺跡資料から得られた情報より、可能性として、①平地で木材が燃焼したもの ②土壌に絡むもの の2つのパターンが考えられ、さらに、③礫を伴うもの など、非常に多様なあり方が想定される。

炭化物密集部に対しては上記のような見通しを得たが、それでも若干の問題点を抱えている。第1に、炭化物自体が軽量で、脆いという性質を有し、そのために容易に二次的な移動（特に自然の要因に基づくもの）を起こしやすいという点である。燃焼空間である蓋然性を高める証拠として、焼土や灰を検出したたり、自然科学サイドからの接近を試みるのが不可欠であろう。そうした傍証が得られない事情がある場合は、その理由も明らかにしたいものである。

2つめは、炭化物の遺存するプロセスが未解明な点である。単体の炭素は、確かに化学的には安定している、とは言うものの、長い時間幅の中では物理的に破砕が進んで散逸したり、生物的作用を受けることも考えられる。現時点ではいかなる条件下で炭化物の形を残すのか、具体的に明らかににはなっていないが、燃料材の樹種・量、燃焼度合、埋没環境等の影響を総合的に把握する必要がある。例えば当調査では、黄色粘土層の広がる微高地では炭化物密集部がほとんど発見されていないが、これは逆に、当該範囲に炭化物が残りにくい事情があるため、とも考えられ、「肉眼で捉えられないから、すなわち、もとより存在しない」とは断言できないのである。 (工藤)

## 5、小 結

板井寺ヶ谷遺跡下位文化層の遺構遺存状況は、火山性堆積物や風性堆積物など土壌堆積速度の極めて遅い近畿地方にあって、最も多くの遺構が遺存していた良好なものであった。この調査が、旧石器時代遺構研究にもたらした成果は、大きいものがあつたと考えている。本報告書では遺構個々を記述するのみならず、第3節で遺構と石器類分布の構造的関係を分析し、その有機的関係を解明したいと考えている。ここでは、遺構と遺構相互の関係について、機能と分布を中心に簡単に纏めておこう。

下位文化層の遺構には、配石・配石群・礫ブロック、土壙、炭化物密集部がある。これらの遺構は、その性格と機能を個別に検討することに併せて、同種の遺構間、または他の遺構との関係で考える必要がある。遺構の残存状況は、遺構の種類によって大きく異なっている。

配石、配石群、礫ブロックは、礫石によって構築された遺構である。礫石だけに、風化・腐敗して遺存しないということはなく、攪乱などで失われぬ限り全てが遺存していると見なせる。旧石器時代遺跡において、最も一般的な遺構構成要素である。

配石は1kg以上の大形礫、礫石は1kg未満のものとして分離した。単独配石は配石を単基で配置されるもの、配石群は1kg以上の配石を中心とした複数の配石・礫石、礫ブロックは1kg未満の礫石複数が半径1mの距離を基準として一定範囲に固まって分布するものとして識別した。下位文化層において、配石と礫石の分析結果は、1kgを境として明瞭な違いがあることが確認され、破碎度と受熱の可能性を示す赤化度と合わせ、発掘調査時の単独配石・配石群・礫ブロックの識別に一定の根拠があることを示した。破碎面のある中形の礫石や一部の配石は、相互に接合し、本来1kg以上の配石であることが判明するものもあり、配石などの破碎がしばしば起こり得る利用方法が配石や礫石の一部に行われていたことが知られる。しかし、これらのほとんどに赤化は認められず、受熱する環境になかったものと考えられる。また、受熱や明瞭な使用痕、油脂の付着などは認められない。一方、300g以下の礫石は、約20%に赤化が認められ、また一部に破碎面があることから、受熱・破碎がしばしば起こり得る環境にあつたものであろう。ただ、油脂状付着物・使用痕などは認められない。

配石は、遺構としてはただ単に大型の礫石が出土したものである。配石の遺構としての機能は、石器製作用石材原石である場合、食料調理や石器製作時の台石や槌石、占有領域の境界石、建築物の基部などが仮想されるが、明瞭な機能にまつわる痕跡を伴わない限り、ただの礫石であるだけに決定しがたい。礫石器として、石器製作によると考えられる敲打痕や線条痕を有する台石1点(F3.133)を分離して認めたのみである。配石の機能の一部は、配石や礫石が相互に接合して1kg以上の配石として復元される場合もあり、配石の破碎がしばしば発生していることが知られる。配石の機能に配石を破碎するような物理的力が働くものがあつたと考えられよう。

単独配石の機能は、独立したひとつの1kg以上の礫石で、配石の利用が単独で行われた場所と考えるおこう。

配石群は、配石と礫石複数が一定空間に分布するものである。配石独自の機能と礫ブロックの機能が複合した場合があるであろう。配石・礫石間に相互に接合関係が認められる場合もあるが、配石が破碎する場所でもあつた可能性が考えられる。接合関係の認められる配石群は、配石を中心として接合する礫石の分布範囲が、破碎過程による配石の機能空間範囲を示している。

礫ブロックは、1kg未満の礫石複数が一定空間に分布するもので、内部に配石を含まない。礫ブロック内の礫石は、赤化したものが含まれ、受熱する場合のあつたことを示しているが、油脂状付着物など



は認められなかった。また、礫石の一部が破碎している。礫ブロック中の礫石は受熱し、破碎する場合が多々あったことを示している。礫ブロックと火の結びつきは他よりも強いと考えられる。礫石が接合し、配石とはほぼ等しくなる場合は、配石の破碎が行われた可能性が考えられ、配石が破碎するほどの打撃をしばしば被っていた可能性を示唆する。

配石・配石群・礫ブロックは、遺跡内にまんべんなく分布しているわけではない。配石群・礫ブロックは1mを集中判定距離として一定の範囲での複数礫石が集中したものであり、単独配石は周辺に他の礫石を伴わないものであるが、集中判定を4～5mの距離で行うと、遺構としての配石・配石群・礫ブロックの群集としての単位が判明する。配石・配石群・礫ブロックの群集部は、やや陸地部北側に片寄って分布する傾向があり、E2区・F1～3区・G1～2区、E5～6区・F5～6区、G6区・H6区、K6～7区、K10～11区などに認められる。

土壌は、わずかに6基を検出したに留まるが、それぞれ異なった属性を有し、積極的に構築された遺構として、重要な知見を提供した。土壌は、当時の地表面から地中に構築される遺構であり、近畿地方のような土壌堆積速度の遅い地域での遺存の可能性は少ない。土壌は陸地部の北半に集中して発見され、山麓からの砂礫の供給が及び易かった部分に多く遺存していたことが知れる。当時の地表面が始良Tn火山灰降灰時まで長く露頭していれば、種々の自然的攪乱作用によって浅い土壌などは消滅してしまう可能性が高い。発掘調査によって検出した土壌は、合計6基であったが、本来もっと多くの基数が構築されたものと考えても良からう。土壌の分布を検討する場合、消滅した土壌の存在も考慮する必要がある。

第1・2土壌は、内部に多量の礫石を持つ小型の土壌で、礫石の密度と内部の礫石に赤化や破碎したものが認められる点から、人為的に充填されたものと考えられる。内部に焦土や炭化物が認められなかったことから、この土壌自体が炉跡である可能性は少ない。また、周辺の肉眼的観察では、炭化物片の特異な集中は認められなかった。この様な土壌は、受熱した礫石との関係から調理施設であると考え、焼け石料理の調理用焼け石を内部に充填したまま放棄された希有の事例となる。妥当な推論であろうが、内部に調理中の食料を入れたまま調理土壌を放棄したことになり、遺棄・放棄の形態としてやや不自然を感じる。礫石の接合はほとんど無く、土壌周辺に同様の礫石の散布も認められない点から考えると、加熱した礫石を全て土壌内へ充填したか、土壌内礫石の受熱・破碎は、土壌周辺で生じておらず、加熱が発掘調査外で行われた可能性もある。第1・2土壌とも礫石を充填したまま埋没しているのは、礫石は、最初から土壌の充填・埋め戻し材として使用されたと解することも出来よう。土壌内部に削器や石器類を有する土壌があることから、埋葬施設や祭祀施設である可能性は、当然排除しきれない。

第3・4土壌は大型の浅い土壌である。第3土壌は大型で弧状を呈するが、地形傾斜によって南半が失われている可能性がある。内部には散漫に礫石が存在する。第3・4土壌は隣接して位置するが、大型の皿状土壌であったとすれば、まず考慮されるのが住居施設としての機能であろう。本来の形状を失い、柱穴や火処の検出もなかったこと、上屋構造の有無を判断できないことから、第3・4土壌の発掘知見だけで即断する事は出来ない。このような場合、周辺遺構や遺物分布との有機的な関係を検討し、「場の機能」を示す潜在構造を解明するなかで、状況に照らして評価する必要がある。第3節6eで検討する。

第1～4土壌は、E・F4区にまとまって位置し、土壌として群集を形成している。特に第1～3土壌は、内部に礫石を有する点で共通し、土壌構築時に何らかの連続した意図があったことを示唆してい

る。

第5土壌は、E1区にある浅く小型の土壌で、配石群の一部が内部に配されている。このような土壌の機能の一部が、配石群とつながりを有することを示している可能性がある。

第6土壌は、内部に微細炭化物片を大量に含む灰土を充填したものである。焼土は認められない。土壌周辺には多量の炭化物微細片の分布と礫ブロック10との複合がある。遺構としての構築度に乏しいが、灰土の存在と周辺の炭化物微細片の分布は、近傍での火処の存在を示唆する。

炭化物密集部は、4ヶ所が泥炭層の広がる湿地部に、1ヶ所が陸地部南端に存在する。炭化物密集部は、大型の炭化物が一定範囲に密集して遺存したもので、植物の繊維方向が揃ったもの、樹木の表皮部分が炭化したもの、大型の炭化物が散乱するものなどが認められる。炭化物の樹種同定を行ったものは、全てが広葉樹であるとの結果が得られ、ハンノキ・カバ・ヤナギなどの当時湿地部周辺に繁茂していた植物が燃えている可能性が高い。樹皮部分が炭化したもの、植物繊維の方向が一方に向かっているものなどは、材が原位置で燃え、灰になる前に消火し、消炭状態で速やかに埋没したものと考えられる。当時すでに泥炭の形成が開始されている湿地面であったためであろう。消炭は、水流や風等によって飛散し易いが、このような遺存状態は原位置で燃えたことの証拠であると考えられる。

このような構築性のない炭化物密集部が、個々の観察だけですべて人為的なものかどうか判断することはできない。自然発火の山火事や水流・風による吹き寄せも考えられる。しかし、遺跡周辺の湿地部にあること、炭化物の<sup>14</sup>C年代測定結果が接近すること(第VII章第2節)から、意図的かどうかは別として、板井寺ヶ谷遺跡下位文化層相当期の人的行為の結果であろうとする推定を完全に否定することは出来ない。炭化物の集積状況は、火処としての焚火の消炭や消炭廃棄の可能性の考えられるもの、湿地部に繁茂した立木に延焼して燃え落ちたともできるものが含まれる。後者の場合、失火の延焼や野焼きの存在を想像することが出来ようか。炭化物密集部は本来人的活動の行われた陸地部でも存在したのであろうが、遺存したのは湿地部周辺に留まったのであろう。下位文化層での活発な火の利用を裏付けるものである。

それぞれの遺構の分布状況は、個々の遺構として推定可能なもの、特定できず周辺の他遺構・遺物分布との関係で判断が必要なものなど、機能的検討を経て必ずしも同じ段階で相互に検討することは出来ない。また、遺存状態には大きな隔りがある。遺構の遺跡内での空間配置は、最も豊富にある礫石を中心に観察するのが妥当であろう。

礫石の分布にその他の遺構を加味し、遺構の集中して位置する場所を観察すると、礫石の分布でE・F列の4区にあった間隙が第1～4土壌で埋められる。周辺の散漫な礫石分布もあわせて観察すると、北半の礫石と土壌は、EとF列の0区から5・6区、GとH・I列の6区をへて、JとK列の5・6区からJ3区へと抜ける分布を呈し、G・H・I列の3～5区の範囲の遺構の無い空白部を囲むように分布していることが知れる。J・K列の3～5区の範囲の礫石は少なく、単独配石が散漫に配されているだけで、E・F・G列0～6区の群集と異なった様相を示している。発掘調査区の関係から礫石分布の外側を十分な面積を調査した訳ではないが、発掘区端の状況から考えて礫石の分布が調査区外へ大きく伸延するとは考えられない。北半の遺構は、外縁南北約30m、東西約30m、内縁南北20m、東西20mの環状に分布するものと考えられる。やや離れた東地区の湿地部付近に炭化物集中部2ヶ所がある。南半では、K6～7区、K10～11区にややまとまった群集があり、さらにG13区・H14区・I列12～13区に単独配石のみの粗放な集中がある。また、湿地部には炭化物密集部2ヶ所が点在する。南半では、G・H

列8～12区、H・I・J列7～12区に遺構の無い空白部があり、D9区からJ12区以北が礫石・土壌といった遺構の主に分布する陸地部、以南が炭化物密集部の点在する湿地部となることから、外縁南北約35m、東西約40m、内縁南北約25m、東西約27mの、西南方向に開く弧状の遺構分布が認められる。泥炭の発達する湿地部中には炭化物密集部以外に、散漫な単独配石の群集部が認められ、配石の設置が陸地部に限定されるものではないことを示している。泥炭層中の単独配石群集は、陸地部の配石・配石群と立地場所・設置のされかたで異なっている点は、注意される。

複数の遺構が明らかに集中する部分として、E・F・G列の0～3区の直径16m程の部分と4～6区の南北16m東西18m程の部分がある。前者は、配石・配石群・礫ブロックが中央部に密に周辺に粗に分布し、中心には土壌1基が配石群と重なりあって存在するという星団状を呈している。後者では、北部に土壌4基が、南部に配石・配石群・礫ブロックが対局的に配置されている。前者の求心構造、後者の対局構造は、遺構から構成されるものでありながら、一見大きく異なった分布状況を呈している。この両者を表すこととなった潜在的構造を問題とする必要がある。さらに、全体的な遺構の位置関係を南北で観察すると、北半には環状の、南半には弧状の遺構の分布が認められた。両者はD～L列の6区を境として接しているが、土壌や礫石の数や大きさ、集中度などで微妙な相違を見せている。土壌は、構築性の高い第1～3土壌が全て北半に配置されている。礫石の北半での集中度は高い。また、南半での礫ブロック構成礫の赤化度の低さは明らかである。遺構を残すような活動の内容と頻度が、南北で異なっていたとも考えることができるが、この様な問題は、遺構のみの検討では答を出すことは出来ない。

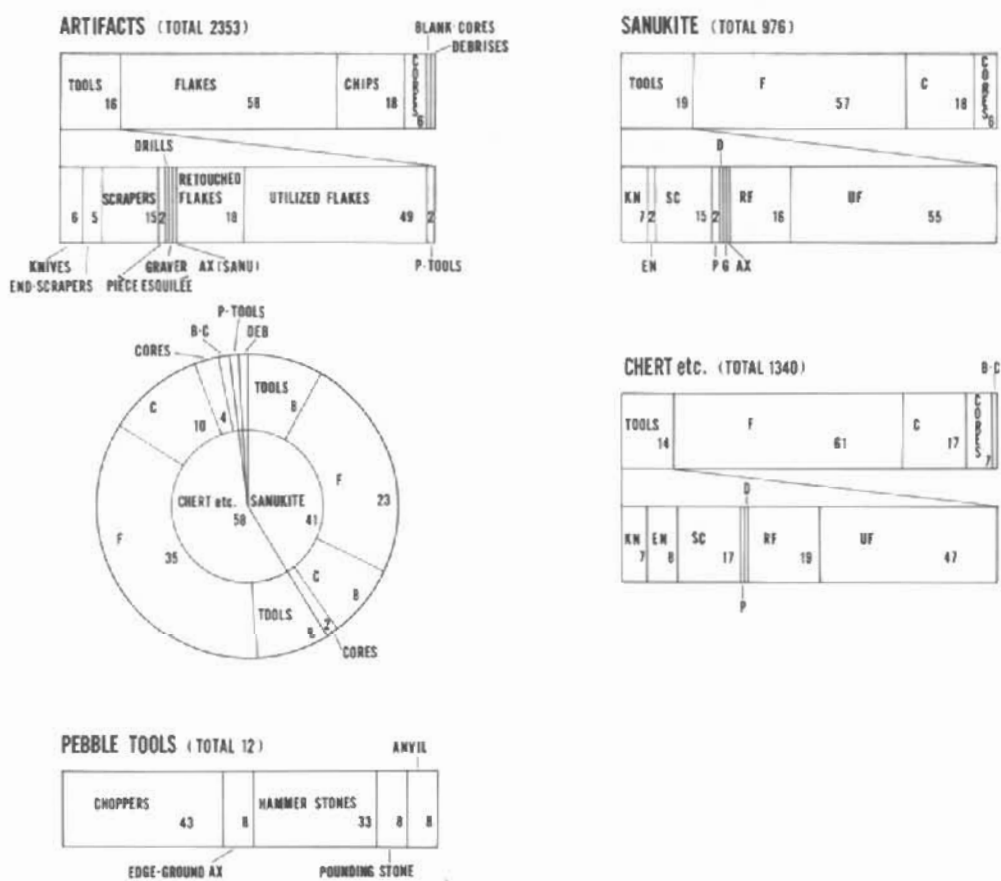
石器群の分布状況と遺構の配置を関係づける作業は、本章第3節で行い、総合的な解釈を第VI章第3節で行いたい。

(山口)

## 第2節 下位文化層の遺物

### 1. 石器

下位文化層の石器類には、原位置を保って発掘された石器類、合計2,353点がある(第3表)。この他に、本来下位文化層の所属でありながら上層に遊離していたものが合計279点、廃土中などで採集され、本来の上層は推定できるものの位置の確認ができないものが約200点ある。内訳は、ナイフ形石器(KN)・斧形石器(AX)・搔器(EN)・削器(SC)・楔形石器(P)・錐状石器(DR)・彫器(GR)などの定型石器、加工痕有剥片(RF)・使用痕有剥片(UF)、局部磨製石斧(EG-AX)・礫器(CH)・敲石(HS)・磨石(PS)・台石(AN)などの礫石器類、剥片(F)、碎片(C)、石核(CORE)・石核素材(B, C)、原石破碎片(DEB)からなっている。第62図と第3表に原位置を保って発掘された石器類の内訳をグラフと組成表にして提示する。遊離して上層から出土したものは、第29表に点数の内訳を掲げる。



第62図 下位文化層出土石器類組成比グラフ(%) 器種名略号は、例言参照

第3表 下位文化層出土石器類組成表(A資料) 器種名略号は、例言参照

	合計	TOOLS	KN	EN	SC	P	DR	GR	AX	RF	UF	CH	EG-AX	HS	PS	AN	F	C	CORES	B.C	DEB
石器類	2353	376	24	19	58	6	4	1	1	66	185	5	1	4	1	1	1376	412	160	4	25
サヌカイト	976	183	12	4	28	4	2	1	1	31	100	0	0	0	0	0	558	179	56	0	0
チャート等	1340	181	12	15	30	2	2	0	0	35	85	0	0	0	0	0	818	233	104	4	0

まず、資料の扱いの基準を決めておく。

下層に原位置を保って発掘された資料は最も信頼の置けるものである（A資料）。本来の層から遊離し、個体識別と接合作業で下位文化層所属であることが判明したものがこれに次ぐ（B資料）。下位文化層に所属すると推定できる表採品は資料として劣る（C資料）。下層に原位置を保ったものと個体識別・接合作業の結果下位文化層所属であることが判明した資料を中心として、個々の石器器種の記述を進める。表採品については、図示するに止める。なお、遺物の分布構造を検討する資料としては、原位置を保った合計2,353点の資料をもとに分析を進めたい。

板井寺ヶ谷遺跡下位文化層の石器類は、チャート・サヌカイト・鉄石英・凝灰岩・頁岩・黒水晶などの石材が使用されている。これらの石材の背景については第2節2aで検討するが、量的にはチャートとサヌカイトが圧倒的である。点数比率では、ほぼ6：4となっている。チャートは堆積岩でサヌカイトは火成岩であり、産出条件が大きく異なる。後で順次検討して行くが、サヌカイトとチャートなど他の石材を分けて観察した場合、岩石学的相違にとどまらず、考古学的にも大きな違いが存在する。記述と論点を鮮明にするために、個々の石器器種を記述する場合、両石材製の石器を分離して記載する場合があることを断わっておきたい。

(山口)

#### a, ナイフ形石器（第63図～第66図）

ナイフ形石器は、原位置を保って発見したA資料合計24点と原位置を遊離したB資料合計5点、上層の単独個体資料であるが形態的に下位文化層と見なせるもの1点、表面採集などのC資料合計4点の総計34点がある。

AとB資料合計29点は、サヌカイト製が13点、チャート製が16点からなり、多様な形態を含んでいる。ナイフ形石器は旧石器時代の最も代表的な器種であり、その形態差は意識的にもたらされた部分が大きいと推測できる。ナイフ形石器の記述はこの形態上の区分を明確にする必要があるが、なにぶんにもナイフ形石器の資料数は少ない。まず、一般的な分類に従い個々の特徴を示し、重量・長幅厚の法量的傾向を検当してみたい。

ナイフ形石器を正位に置いた場合の加工部位・調整方法によって6類に分類する。

- A類、 石器左右のうち一側縁を全部か、大半を背部加工するもの、
- B 1類、 石器左右のうち一側縁全部と反対側縁の一部にも背部加工するもの、
- B 2類、 左右両側縁の大半を背部加工をし、刃部が小さく残るもの、
- B 3類、 台形様を呈するもの、
- C類、 石器左右のうち一側縁の一部に背部加工をするもの、
- D類、 素材剥片の一部を切断するように背部加工するもの、

#### A類

A類には、E0.1 E7.11 F3.7 F7.145 H6.197 I3.2 I4.40 I6.21 K9.14、合計9点がある。このうち5点がサヌカイト製、4点がチャート製である。

E7.11は、サヌカイト製横長剥片素材で、表面には石核底面（ポジティブ）が付着する。上半を欠くが、素材剥片の打面部を背部加工しており、本類に含めておく。刃部には刃こぼれ状小剥離がある。E0.1は、サヌカイト製横長剥片素材で、素材剥片の打面部に背部加工を施す。先端には刃こぼれ状小剥離が認められる。K9.14、I6.21は、小型のサヌカイト製横長剥片を素材とし、打面部に脊部加工を施す。F7.145は、下半を欠損するが、やはりサヌカイト製小型剥片の打面部を加工している。

I3.2、I4.40は、チャート製縦長剥片素材で、その一側縁全体に背部加工を施す。もう一方は風化の激しい自然面となり、刃角は直角に近い。素材剥片の打面部を基部に当てており、打面を残存させる先端は鋭い。H6.197は、チャート製横長剥片を素材とし、素材剥片の打面部に背部加工を施している。先端は鋭いが、一枚の槌状剥離がある。基部には加工はなく、僅かに刃こぼれ状小剥離が観察される。尖った方を先端として図示したが、逆であれば、自然面と素材剥片打面部の脊部に挟まれたベン先形ナイフ形石器となる。現状から推測できる素材剥片は、石核底面が風化の激しい節理面ではあるが、表面に大きくネガティブな副面のある翼状を呈する横長剥片と考えられる。F3.7は上半を欠くが、不定形な剥片の一側縁を加工したものであろう。

他にC資料の表採品が一点ある（第65図 F4.SE）。

### B1類

B1類には、E4.11 G7.21 I4.89 J10.5 L10.16、合計5点がある。このうち2点がサヌカイト製、3点がチャート製である。

L10.16は、サヌカイト製小型剥片の打面部全体に脊部加工、素材剥片末端の下半分に調整を施す。J10.5は、素材剥片の打面側を基部に配し、左側縁と右側縁下半分に脊部加工を施したものである。右側縁の脊部加工と刃部は、はっきりした角をなしており、切り出し形に近い形状を示す。基部には小さく素材剥片の打面が残る。

E4.11は、チャート製縦長剥片素材で、素材剥片打面部を基部に配し、左側縁には表面から裏面に向けての脊部加工、右側縁下半部には裏面から表面に向けての脊部加工と、側面毎に加工方向を替えている。先端は鋭く、基部に素材剥片の自然面打面を残す。G7.21は、チャート製横長剥片の打面部と素材剥片末端下半分に表面から裏面に向けて脊部加工を施したものである。先端を欠損させる。I4.89は、チャート製小型剥片を素材とし、素材剥片の打面部を基部に配し、右側縁と左側縁下半分に脊部加工を施したものである。節理面の打面を残す。

上層所属のD5.3が形態的にこの類に含まれる。上層・下層ともに単独個体石器で所属文化層を決め難いが、上位文化層にはこの類のナイフ形石器組成にないことから、D5.3は本来下位文化層の所属である可能性が高い。

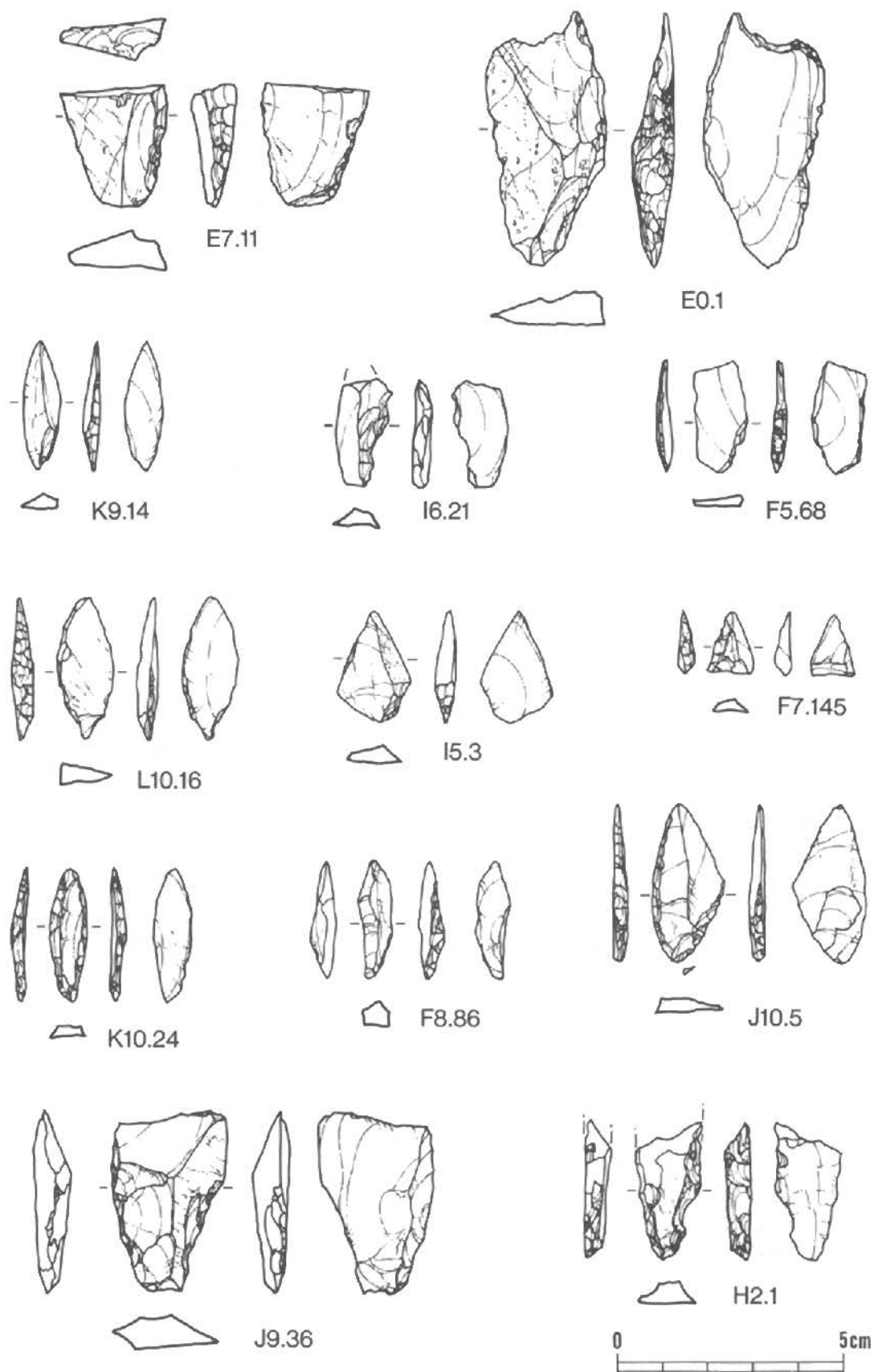
C資料では、SE1点（第65図右下）にB1類がある。

### B2類

B2類は、E6.7 F5.68 H2.1 I4.42 J2.1 K10.24、合計6点がある。サヌカイト製は3点、チャート製は3点である。

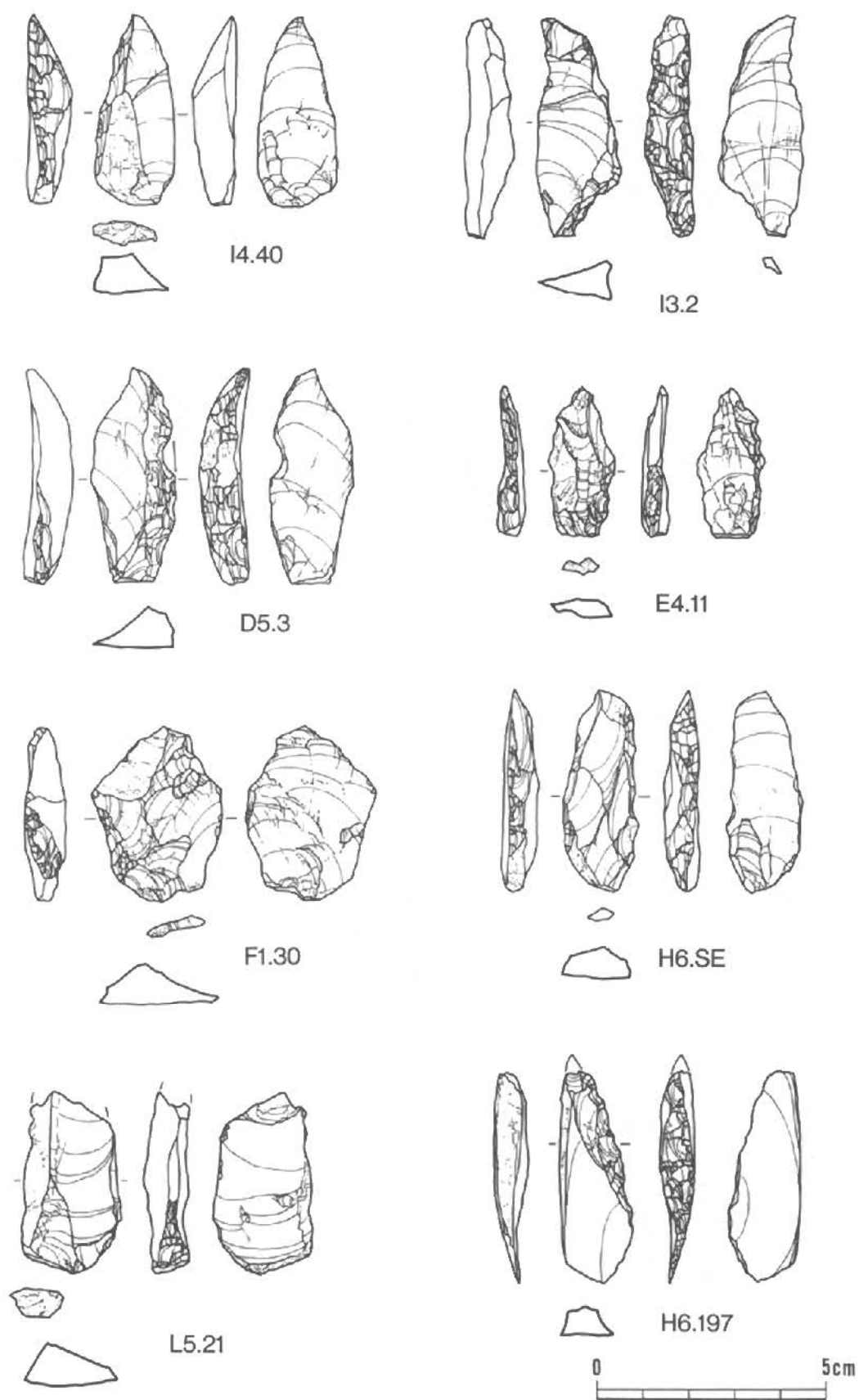
F5.68は、サヌカイト製小型横長剥片素材で、素材剥片の打面部に脊部加工、素材剥片末端全面に微細な調整を施したものである。上端が欠損している。K10.24は、サヌカイト製小型横長剥片を素材とし、素材剥片打面部と末端の全部に脊部加工を施すものである。先端に僅かに刃部を残す。H2.1は、サヌカイト製横長剥片素材で、素材剥片打面部と末端の全部に脊部加工を施したものである。上半を欠くため定かではないが、台形様石器基部であるかもしれない。だが、このように脊部加工のみで台形様石器を整形した類例は遺跡内にない。

J2.1は、チャート製の厚い横長剥片素材で、素材剥片打面部と末端の大半に脊部加工を施したものである。先端は、欠損している。素材剥片の打面は自然面で、大きく左側縁に付着している。E6.7は、チャート製横長剥片の左右側縁上半に脊部加工を施したもので、素材剥片の自然面打面が左側縁下半に残



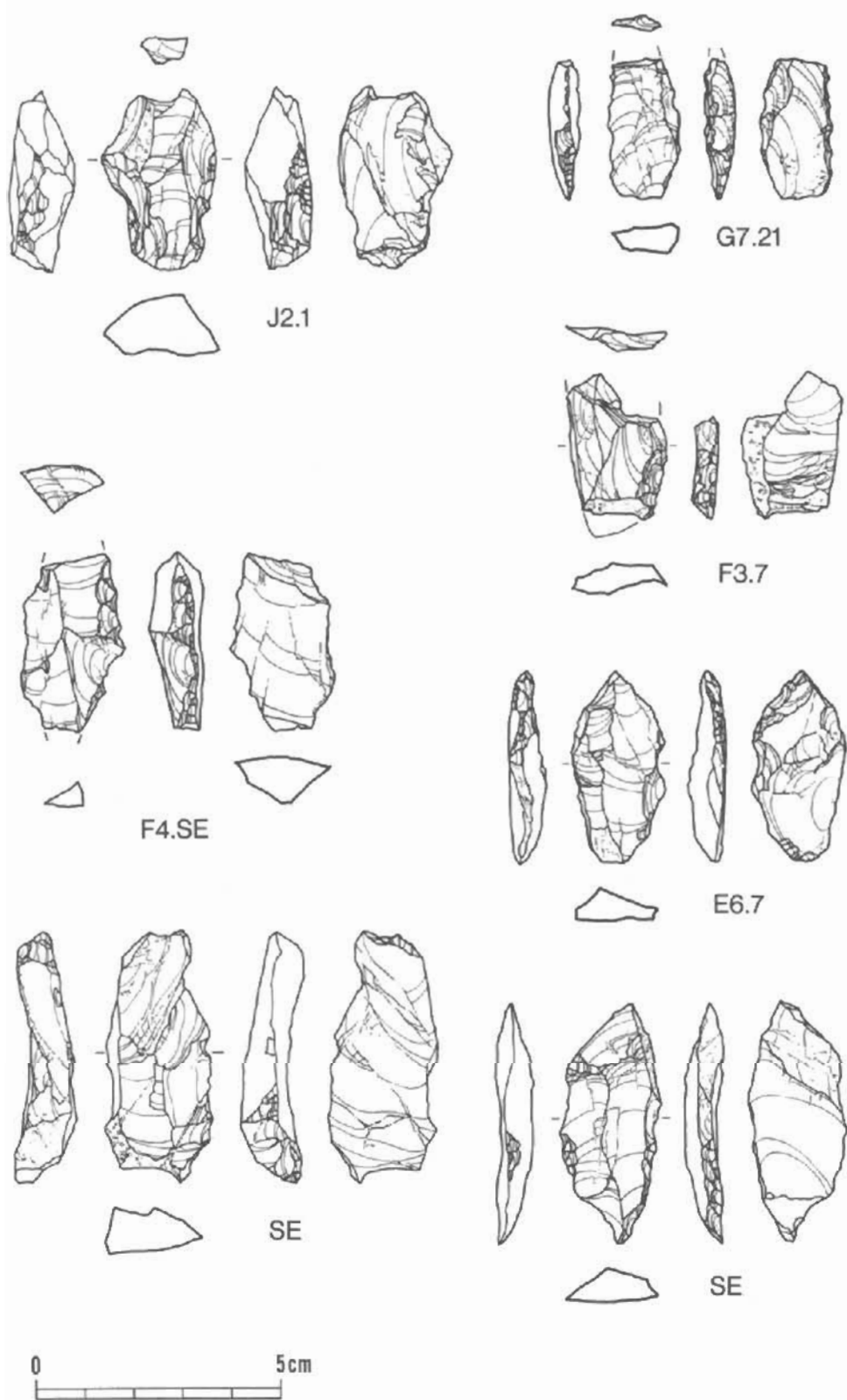
第63図 下位文化層ナイフ形石器実測図1

第2節 下位文化層の遺物

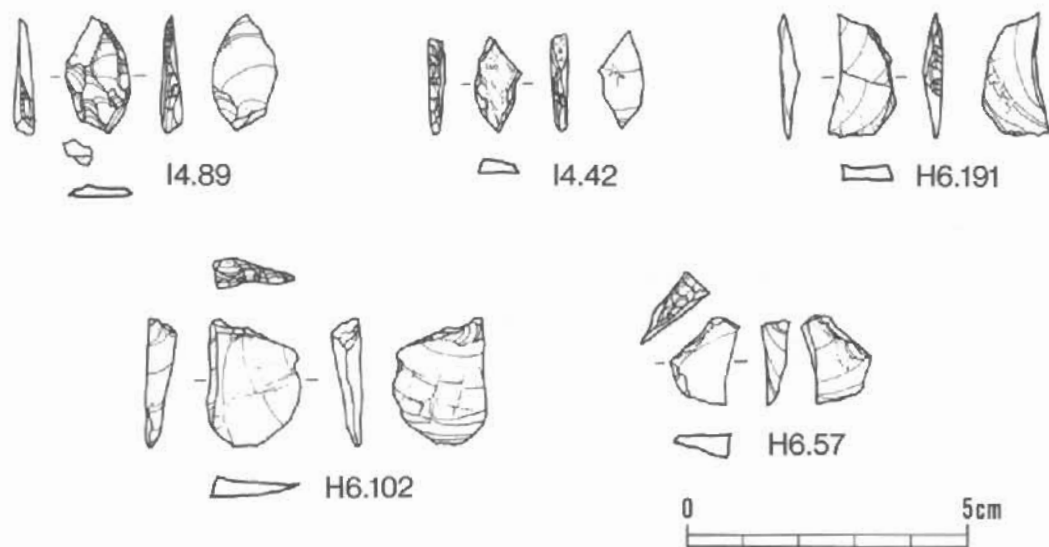


第64図 下位文化層ナイフ形石器実測図2





第65図 下位文化層ナイフ形石器実測図3



第66図 下位文化層ナイフ形石器実測図4

っている。先端は鋭く、本来錐状石器である可能性も考えられる。I4.42は、チャート製の表面が自然面を残す剥片素材で、素材剥片の打面を上配している。左右両側縁が脊部加工され、素材剥片の形状は失われている。上半が欠損している。

他にC資料として、第64図 H6.SEがあり、チャート製縦長剥片素材の打面を基部に配し、両側縁のほとんどを脊部加工したものである。刃部は僅かに先端にある。

### B3類

B3類は、J9.36の1点のみがある。J9.36は、サヌカイト製の表面にポジティブな底面が付着した横長剥片を素材としている。素材剥片の打面部は折り取られ、折断面から表面への調整が施される。剥片末端下部にも調整が施され、ほぼ主軸に直交する刃部を持つ台形様を呈している。一点のみの単独で、同様の加工手順を踏んだ斉一性のある形態を持つ資料が乏しい。これのみで台形様石器として、単独の器種認定をするには困難があると考え、削器や加工痕有剥片・使用痕有剥片中には、台形様を呈するものも散見され、総体としての扱いについて注意が必要である。

### C類

C類は、F1.30 F8.86 H6.191 I5.3 L5.21、合計5点がある。サヌカイト製が2点、チャート製が3点ある。

I5.3は、サヌカイト製小剥片素材で、右側縁下半に位置した素材剥片打面部のみを数枚の調整剥離で除去している。F8.86は、サヌカイト製小型横長剥片を素材とし、素材剥片末端を脊部加工したものである。素材剥片の打面は、そのまま残存している。

F1.30は、チャート製の縦長剥片素材で、素材剥片打面を基部に配している。左側縁の下半を角度の緩い脊部加工で整形する。右側縁は素刃であるが、機能部は先端から左側縁上半であろう。L5.21は、チャート製縦長剥片素材で、素材剥片の右側縁下部に脊部加工が施されたもので、素材剥片の末端を基部に配している。先端は欠損している。H6.191は、チャート製の薄い剥片素材で、素材剥片末端に脊部加工を施す。素材剥片の上半は折損されているが、これが調整としてなされているなら、B2～3類に分類できる。また、台形様石器としての位置付けも考えられる資料である。

C資料には、縦長剥片の末端近い右側縁の一部に脊部加工を施したものがあ (第65図左下)。

D類

D類には、H6.57 H6.102、合計2点がある。いずれもチャート製である。

H6.102は、チャート製縦長剥片を素材としており、素材剥片上半の打面のある方を脊部加工によって切断する。H6.57は、チャート製小剥片の打面部近くの側縁の一部を脊部加工したもので台形様を呈し、剥片主軸で折損している。

計測値

(長さ・幅・厚)

第67図が石材別、A・B1・B2・B3・C・D類の長幅関係グラフである。

サヌカイト製では、長3.5~2.3cm、幅2.3~0.8cmほどの小型品が目立つ。長さ4cm以上は2点しか存在しない。A類に2点、B2・B3類の各1点の計4点を除けば、サヌカイト製ナイフ形石器は、小型または極小型であると表現できよう。厚さについては、大型より小型が、不定型なものより整った横長剥片素材の方が薄い傾向がある。特に長さ・幅の比率において特定の類が集中せず、素材剥片の大きさと形状に応じて加工部位と度合が選択されているように看取される。

チャート製では、長2.1~0.5cm、幅2.2~0.8cmの極小型と、長3.5~2.8cm、幅2.1~1.5cmの小型、長3.8~5.0cm、幅2.8~1.6cmの中型の3群に分けられる。D類が極小型にまとまり、A類に中型品が多い。チャート製のA類とB類は、素材剥片の加工度と加工部位の関係で、長さに対して幅が狭い。厚さは、ほぼ長さ・幅の大きさに比例しているようである。

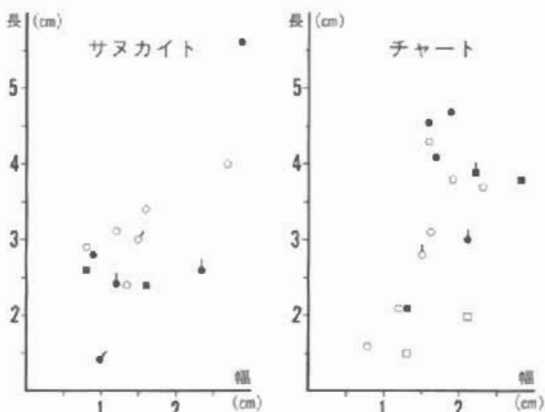
(重さ)

第68図が石材別・類別重量分布グラフである。サヌカイト製は、長幅グラフで、中型と判別された4点を除けば、すべて2g以下であり、やはり中型と極小・小型の2つに区別できる。

チャート製は、9g以下に散漫に分布するが、A類が4g以上、D類が2g以下にまとまる。ほぼ長幅の中型・小型・極小型の区別を受けた重量分布を示す。

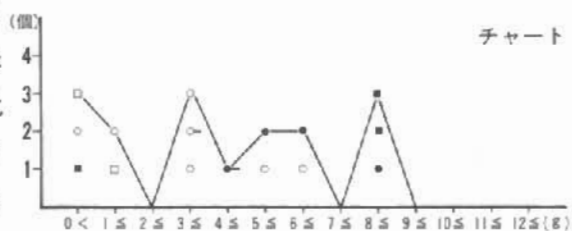
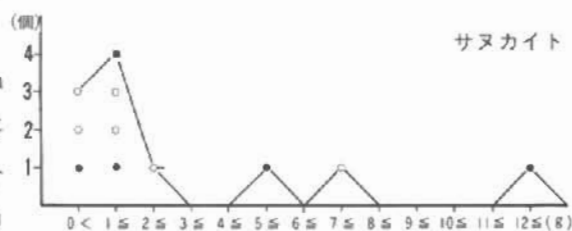
(素材)

ナイフ形石器がどのような素材から作成されたかを観察してみよう(第4表)。素材剥片を、ナイフ形石器の現形から推定し、推定素材剥片の縦と幅が1.5:1以上を縦長、1:1.5以下を横長、中間の1:1前後を不定形として区分した。



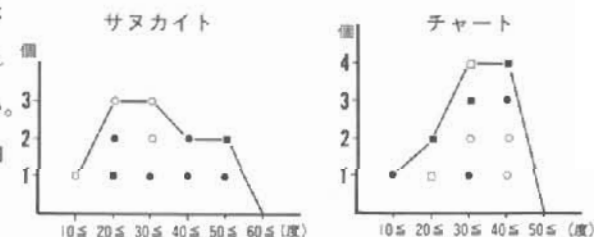
第67図 ナイフ形石器長幅グラフ

● A類、○ B類、■ C類、□ D類



第68図 ナイフ形石器重量分布

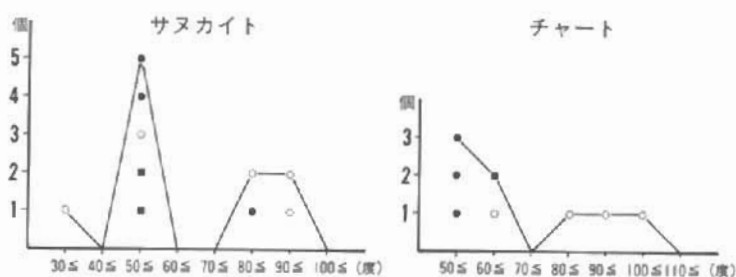
● A類、○ B類、■ C類、□ D類



第69図 ナイフ形石器刃角グラフ

● A類、○ B類、■ C類、□ D類

第2節 下位文化層の遺物



第70図 ナイフ形石器先端角グラフ ● A類、○ B類、■ C類、□ D類

第4表 ナイフ形石器の形態と素材

	サヌカイト			チャート			計
	縦長	不定形	横長	縦長	不定形	横長	
A類			4	3		1	8
B1類	1		1	2		1	5
B2類			1	1	1	1	4
B3類			1				1
C類		1	2	2			5
D類					2		2
計	1	1	9	8	3	3	25

サヌカイト製は、1点が縦長、1点が不定形である以外、他はすべて横長剥片素材である。ナイフ形石器の大小には関係がない。チャート製は、8点が縦長、3点が不定形、3点が横長となり、縦長主体であることが理解できる。(山口)

b, 局部磨製石斧・斧形石器 (第71図)

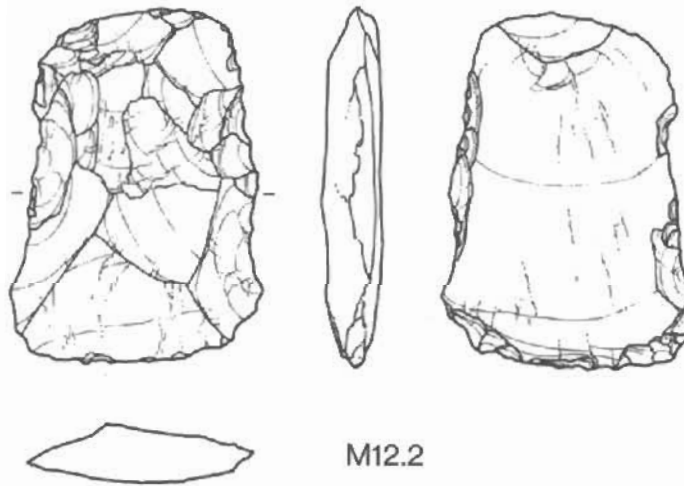
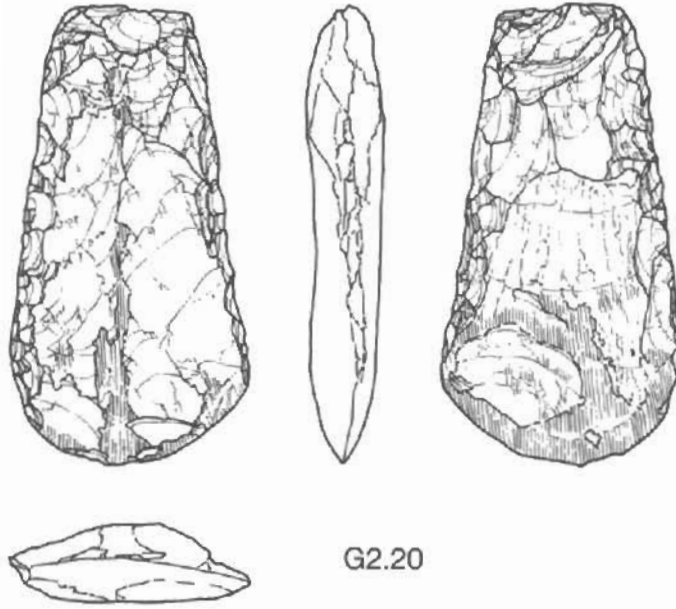
斧形石器類は、2点出土している。1点は凝灰岩製の局部磨製石斧で、1点はサヌカイト製の斧形石器である。

局部磨製石斧(G2.20)は、凝灰岩製大型剥片を素材としている。素材剥片の打面部を基部側に、刃部を素材末端に配し、素材のほぼ全周に表裏両面の浅い調整を加えてバチ形に整形し、その後に刃部をU字形に磨製したものである。素材打面部は除去されている。素材剥片形状の変更は周縁のみにとどまり、表面の主稜上と裏面下半全体に研磨が認められるに過ぎない。推定できる素材は凝灰岩製の大型縦長剥片であるが、凝灰岩製であること、同一母岩が認められないことから、その他の剥片石器が有するのとは異なった素材供給技術の存在が考えられる。石器器種の大別では、一般の剥片石器ではなく、礫石器類に含める。重量50.1g。

斧形石器(M12.2)は、サヌカイト製の大型剥片を素材としている。素材剥片の打面部を基部側に、刃部を素材末端に配し、素材の刃部以外の表面ほぼ全周囲に緩く深い剥離によって整形加工を施したものである。裏面の整形加工は、両側縁に着柄痕かと思える幅広の剥離があるだけである。打面部は石器裏面に残り、除去されていない。刃部は本来の素材末端素刃であるが、表面から裏面方向への使用痕が調整がよく判別できない小剥離が連続している。重量35.4g。サヌカイト製であるので、剥片石器一般に含める。(山口)

c, 掻器 (第72図～第76図)

下層の掻器は、合計24点出土しており、うちサヌカイト製が4点、残りがチャートその他の石材を用いた資料である。出土状況の内訳はA資料19点、B資料5点で、他にC資料(SE)5点が得られている。



第71図 下位文化層局部磨製石斧・斧形石器実測図

第72図の4点はサヌカイト製の搔器である。E4.76は横長剥片のおよそ1/2が製品に利用されたもので、表面図上部右側では背面からの剥離により一部を欠く。裏面右側には主要剥離面を平坦にするための調整剥離が施される。また、同じく裏面の下端にも比較的細かい剥離が認められるが、これは刃部角度を大きく作出するための加工と考えられ、末端から表面へ向けての調整（剥離角度約60度）と合わせて刃部角度約80度に仕上げている。E5.14の形状は、整形が粗いが円形に近く、表面図右側を除く他の部分すべてに細部加工が行われ、そのうち打面部に認められるものは背面側から腹面に向けて施される。縁辺の剥離は比較的横幅が大きく、規則的に並ぶ。上記2点のエッジ部分には微少な剥離痕も観察された。

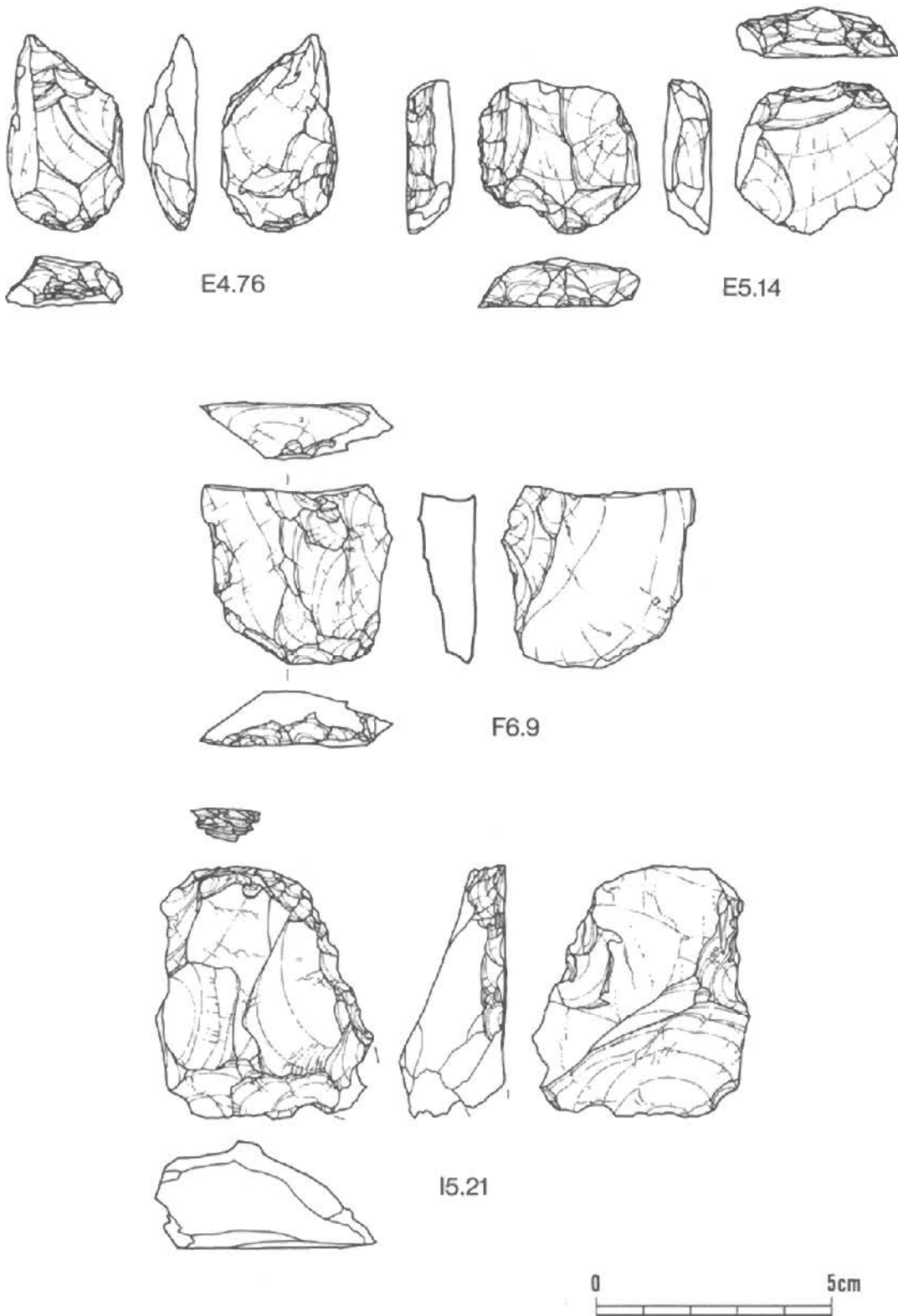
F6.9は横長素材の半分からなるもので、表面図上部には背面からの力による剥離面が認められる。刃部の左側半分はオーバーハングし、また、裏面左側はバルブ削除を目的としたと推定される新しい剥離もみられる。I5.21では3方向からの剥離が施された石核を転用しており、スクレイパーの刃部は正面上部から右側面に認められる。正面上部では数段にわたる連続的な調整で約80度の刃部角度を呈し、右側面では裏面側への剥離を合わせ70度程度に仕上げる。

第73図以降は特に記載する他はチャート素材として用いている。G1.5の作業刃部は左側で奥行きが深く、右へ寄るにしたがって浅くなり、ややオーバーハング気味である。素材剥片の打面部側は背面からの剥離で失われている。F5.15も縦長剥片の上半部を欠失するが、これは節理面に伴うものである。また腹面は平坦な主要剥離面よりなる。刃部角はやや小さい（65度）ながらも、精緻な調整が施される。

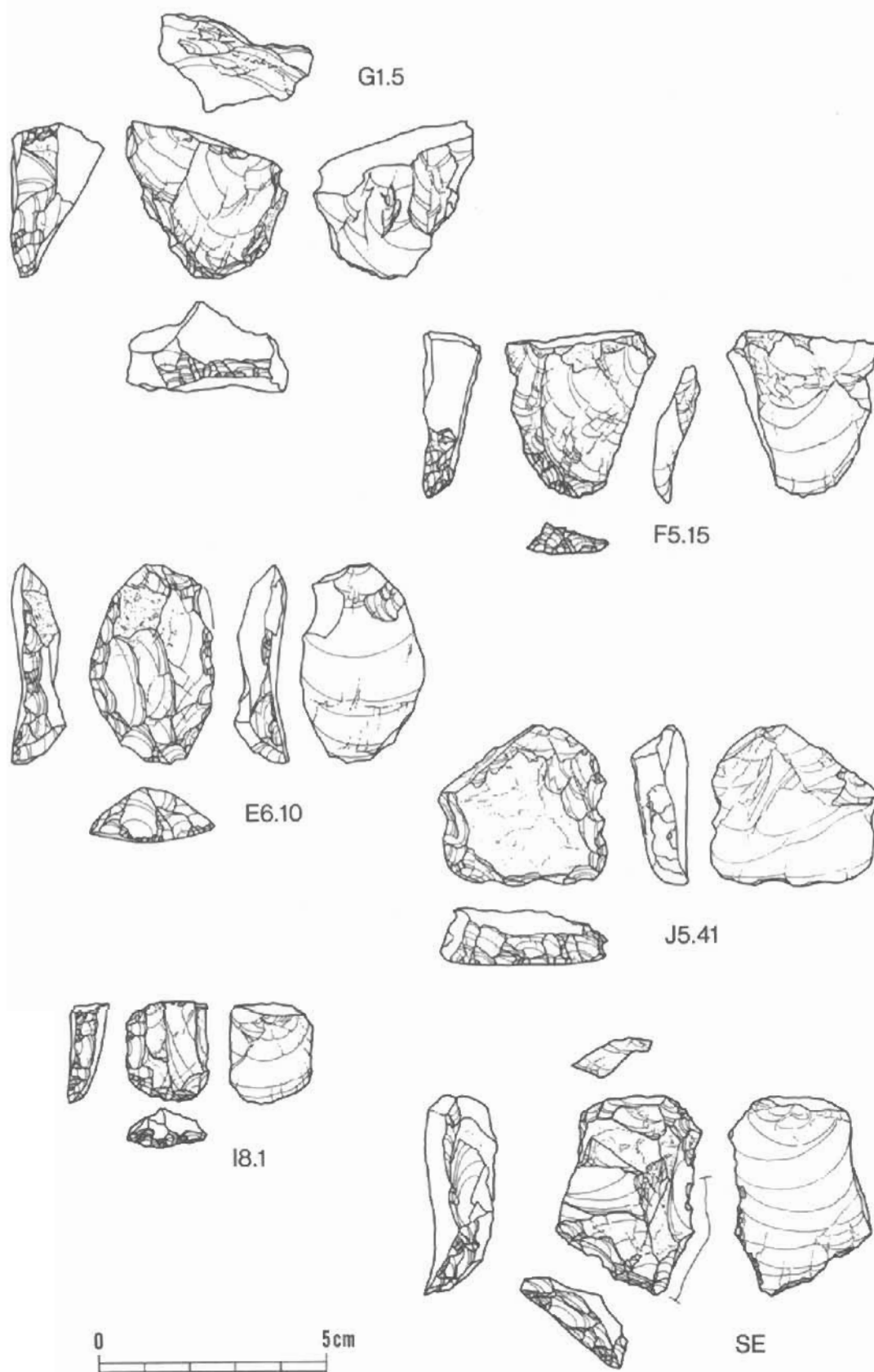
次の4点は素材の打点部分を基部に留める資料である。E6.10は鉄石英製で、円弧状の末端から左右両側縁に細部調整がみられる。端部の剥離作業が特に入念に行われており、細部調整の前段で生じた稜を削除するための、奥行きのある細長い剥離面が看取できる。J5.41は、縦横の長さがほぼ等しく、現稜面を正面に大きく残す。前資料と同様、左右の側縁にも調整が施され、末端ではオーバーハングしている。I8.1は薄手で小型のスクレイパーである。裏面の平坦な小剥片の端部と左側縁に加工が施されるが、末端の刃部角度が80度であるのに対し、側縁の剥離角度は60度前後と鋭角的である。第73図右下SEでは平行な左右両側縁を斜めに切る、直線状の刃部が特徴的である。以上6点は成形度の高い一群で、裏面においては末端部を中心に、両側縁にかけて微少な剥離痕も観察される。

第74図から第75図上段にかけての7点は、比較的厚手の剥片を素材とするものであるが、加工部位の選定が多様で、剥離作業の密度、整形の度合などにばらつきがみられる。G1.6は剥片の打面付近に階段状の調整がみられ、一部オーバーハングする。正面中央に右手から加えられた剥離は、石核段階での調整もしくは剥片の厚みを減ずるのを目的としたものと考えられるが、右側面との角度は70度で、両者の接する縁辺に微小剥離が連続している点から搔器刃部として利用された可能性もある。F4.45は素材剥片の打点寄り部分を欠く。末端の左で75度ある刃部は右寄り部分でやや角度が小さく、60度程度になる。裏面の末端部から左側縁にかけては、きわめて多くの微小剥離痕が連続する。E4.20は原稜面を大きく残した断面三角形の剥片基部に作業刃部を設定しているが、細部調整の作業頻度は低い。裏面の左右からはバルブの削除を目的とした剥離も認められる。

D4.17は、楔形石器に類似した、周縁からの剥離の施された素材の正面下部と右側縁に、一部でオーバーハングするスクレイピングエッジが作出される。下端では自然面も取り込んで約85度の角度をなし、下端～右側縁にかけての作業刃部ともに微細な剥離痕がみられる。また、裏面上部には素材剥片の打面も残されている。G5.1は正面側上半が剥片の主要剥離面で、その下半部は節理となる。刃部は80度前後で、部分的にステップ状になっている。J5.33の右側面に認められる剥離は、平面形状整形のためのものと考えられる。

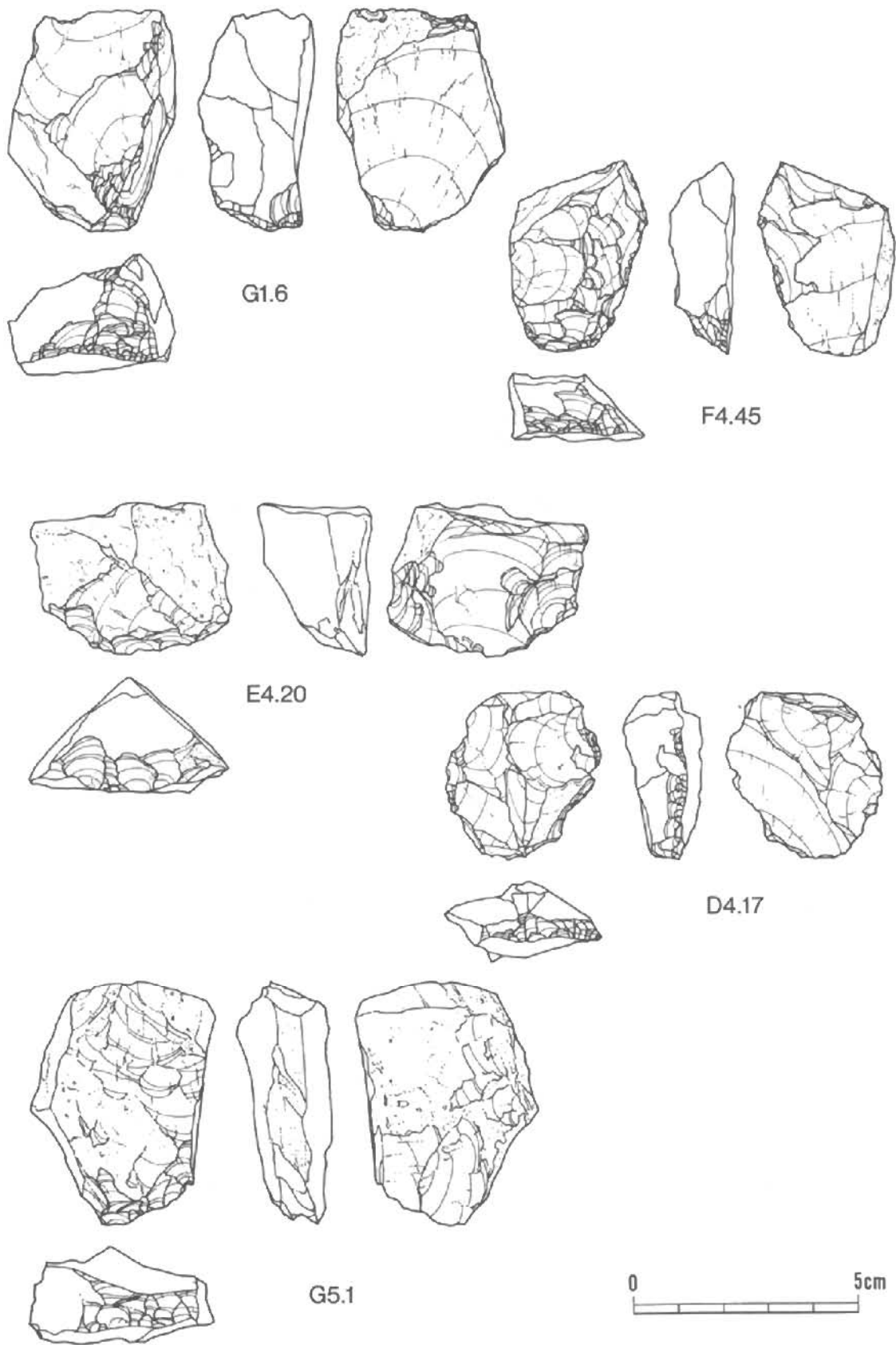


第72図 下位文化層撿器実測図1



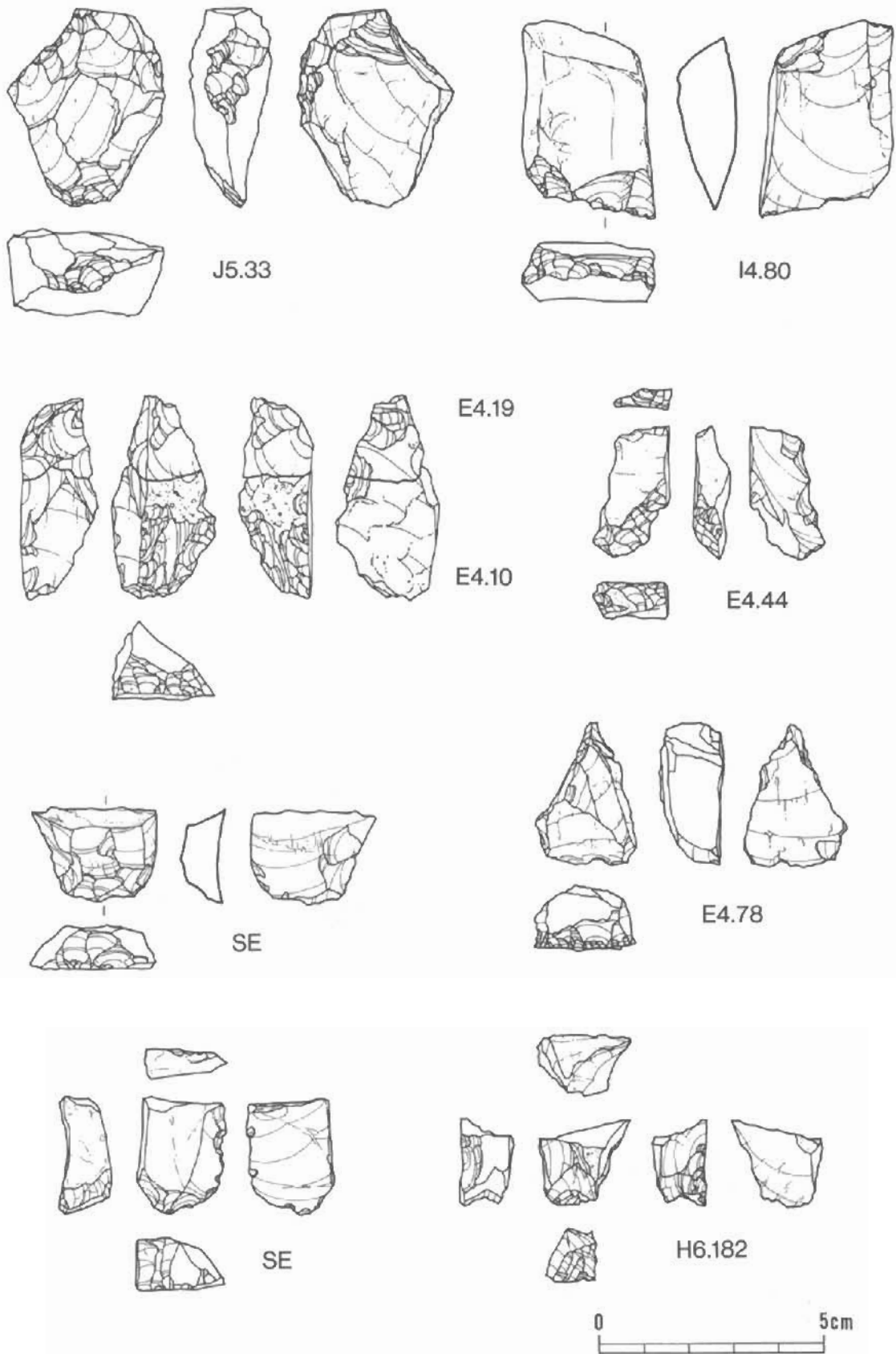
第73図 下位文化層石器実測図2



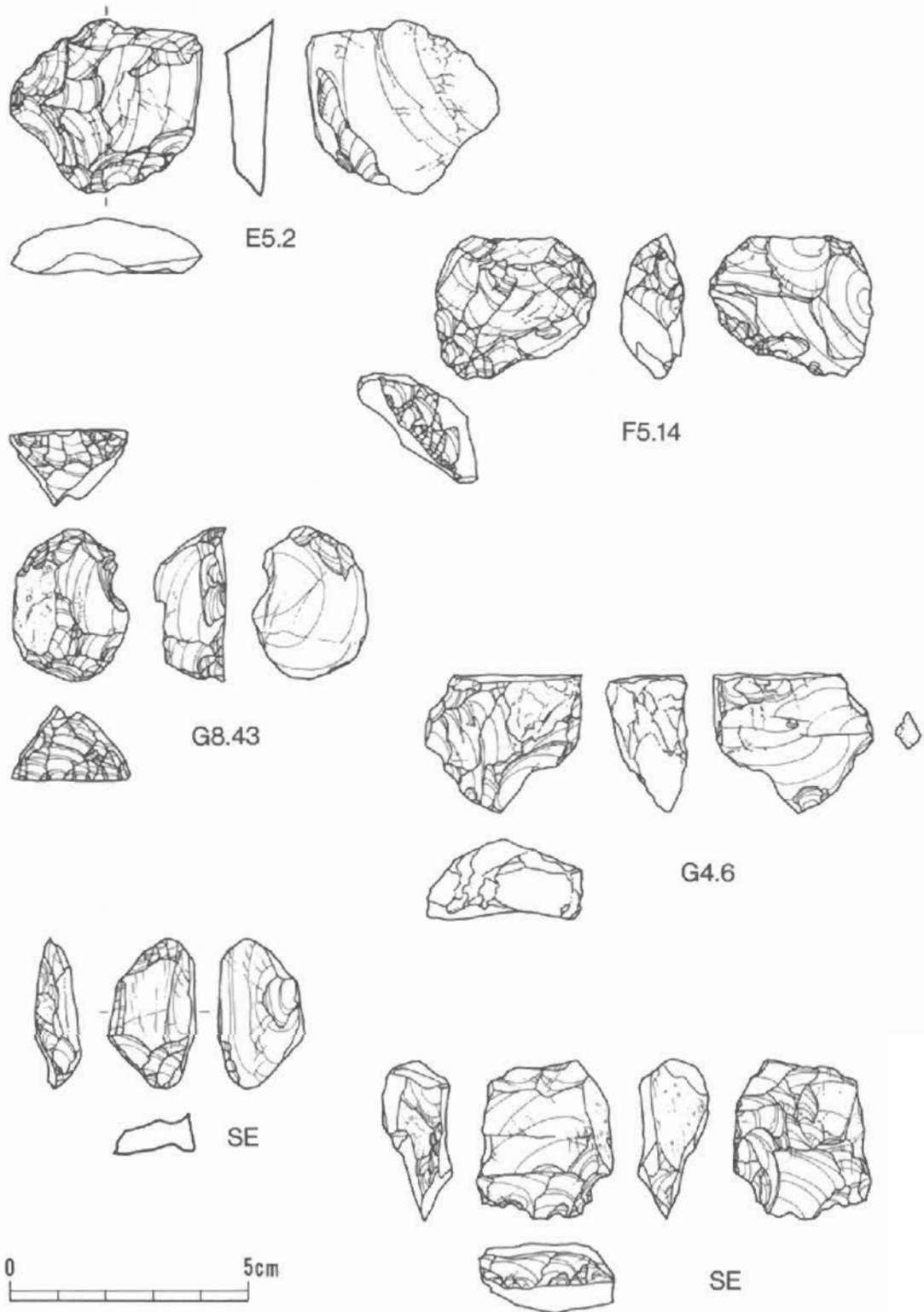


第74図 下位文化層撿器実測図 3

第2節 下位文化層の遺物



第75図 下位文化層掘器実測図4



第76図 下位文化層石器実測図 5

末端の刃部調整は剥離痕数が少ないが、70度ほどに仕上げられている。I4.80はバルブの湾曲の著しい素材の端部に、直線的な刃部を作る調整が施されるが、角度は60度程度で搔器としてはやや鋭角的となっている。

以下の資料は総じて小型の製品であるが、一部に破損品も含んでいる。第75図E4.10+E4.19は接合資料である。前者は表面の下端に約80度の作業刃部が認められ、右側縁まで巡っている。また、表面の中央にみられる稜上で、左から右に向けて剥離が連続しているが、これも搔器刃部としての機能を有していたと解釈することが可能である。一方、接合した状態では、左側面図で後者の尖端部を挟む二辺が内湾して錐状になることから、複合した機能を持っているものとみられる。

E4.44は正面図左半と打面寄り部分を欠き、その欠失部には裏面からの剥離が連続している。刃部角度は70～80度ある。第75図左下のSE2点は剥片基部に節理面または原礫面が認められる。上は幅広の、下では細長い平行な細部調整が刃部でみられる。E4.78では、表面左上部分を背面からの剥離により欠く。主要剥離面は平坦で、末端に施された細部調整は二段に及び、角度は75～90度ある。H6.182は右側面図に現された部分で、剥離角が最大（85度）となる。基部寄り部分を失った破損資料である。

第76図E5.2は表面下部と左側に調整剥離が密集する。素材剥片の打点付近を切る位置に当たる左端のところで最も大きい刃部角80度を呈する。F5.14の素材の主要剥離面は裏側中央下にわずかに残り、バルブや末端のヒンジフラクチャー削除を意図したネガティブな剥離面により大きく切られている。表面左下部の刃部は精緻なつくりで、二列にわたる調整の後段では稜削除を行う。右側面にみられる剥離も同様の作業刃部と思われるが、加工はやや粗い。

G8.43は横長剥片の左右に円弧状に細部調整を施した、上下両端に複刃を有するタイプである。いずれのエッジも75度を越し、階段状になっている。第76図左下SEも似たつくりであるが、全体が薄手で剥離痕数も少なく、刃部に尖端をやや残している。G4.6は素材剥片の打点を裏面右端の原礫面に残す。表面下部に約70度のエッジをもっていたものであるが、その右半分は折れてしまったようである。第76図右下SEは素材剥片基部側の主要剥離面に細部調整を加えた資料で、縁辺はノッチ状に凹凸を残す。

当遺跡出土の搔器29点について概観すると、次のような傾向を指摘することができる。

素材は、サヌカイト製資料については横長剥片、チャートその他の石材を用いた場合には概ね縦長剥片が卓越していると思われるが、前者では石核を起源とするケース、後者では横長剥片を用いた例も散見される。チャートその他の石材よりなる資料について、使用された剥片類の傾向を若干検討してみる。すなわち、主要剥離面の剥離軸を基準に長幅比を算出し、3:2または2:3で区分して三分類すると、製品類の最終的な遺存状況からみる限りでは、75%の資料が「中間」に含まれる。この結果は、製品製作の過程で形状が大きく変えられる資料も存在する一方で、長幅比の1に近い素材も盛んに活用されたことを予想させ、当地における石器材料をめぐる事情を反映していると受け取れる。例えば厚手の不定形剥片を利用した資料の出現も、同じ理由をもって説明することができる。

資料サイズについては、石材全体を通じ、総じて小振りである。比較的厚手の剥片を用いたものでも最大長数cm程度であり、一方で3cm前後の小型搔器も多数を占める。このような構成内容を呈する理由については、機能・用途による作り分け、「石材」側の事情など、いくつかの解釈が可能である。

細部調整により特徴的なスクレイピング・エッジを作出する部位は、一般的には縦長剥片の末端、または横長剥片ならば左右いずれかの端部となるが、当遺跡の資料中にはそれ以外の場所に認められる例が少ない。数量的には29点中で、長軸の末端一ヶ所のみ調整が施されたものが17点（通常とは逆に、剥片基部位置で、打点を切るように施された例2点を含む）と多いものの、これに続いて一側縁または両側縁へ向け

で、連続的に剥離が巡るものが7点出土している。興味深い例として、稜上に作業刃部を設定したと思われるもの(2点)、上下両端に加工を施した複刃のケース(3点)もあり、実に多様な資料が得られている。

主要な、末端の刃部形態に関しては、弧刃が25点と圧倒的に多いが、チャート製資料中には直刃のものが4点認められている。調整方向については、少数ながら背面から腹面に向かうものも含まれていて、サヌカイト・チャート製各1点に看することができる。サヌカイト製搔器2点では、末端位置の刃部の裏面にも調整剥離痕と推定される剥離面が観察されているのが特徴的で、可能性として、チャート製の資料にはみられない、刃部作出時の角度調節の方法とも考えられる。調整剥離痕の形状や、加撃頻度はさまざまで、刃部に凹凸を残す粗い作りのものがある一方で、稜削除のための細長い剥離痕までみられる資料も出土している(E6.10, F5.14)。こうした技術上の差は、刃部角度の大きさにも現れ、70~80度を中心に60~90度の間で開きがある。

以上のように、当資料群はバリエーション豊かな内容を持っていることが理解される。(工藤)

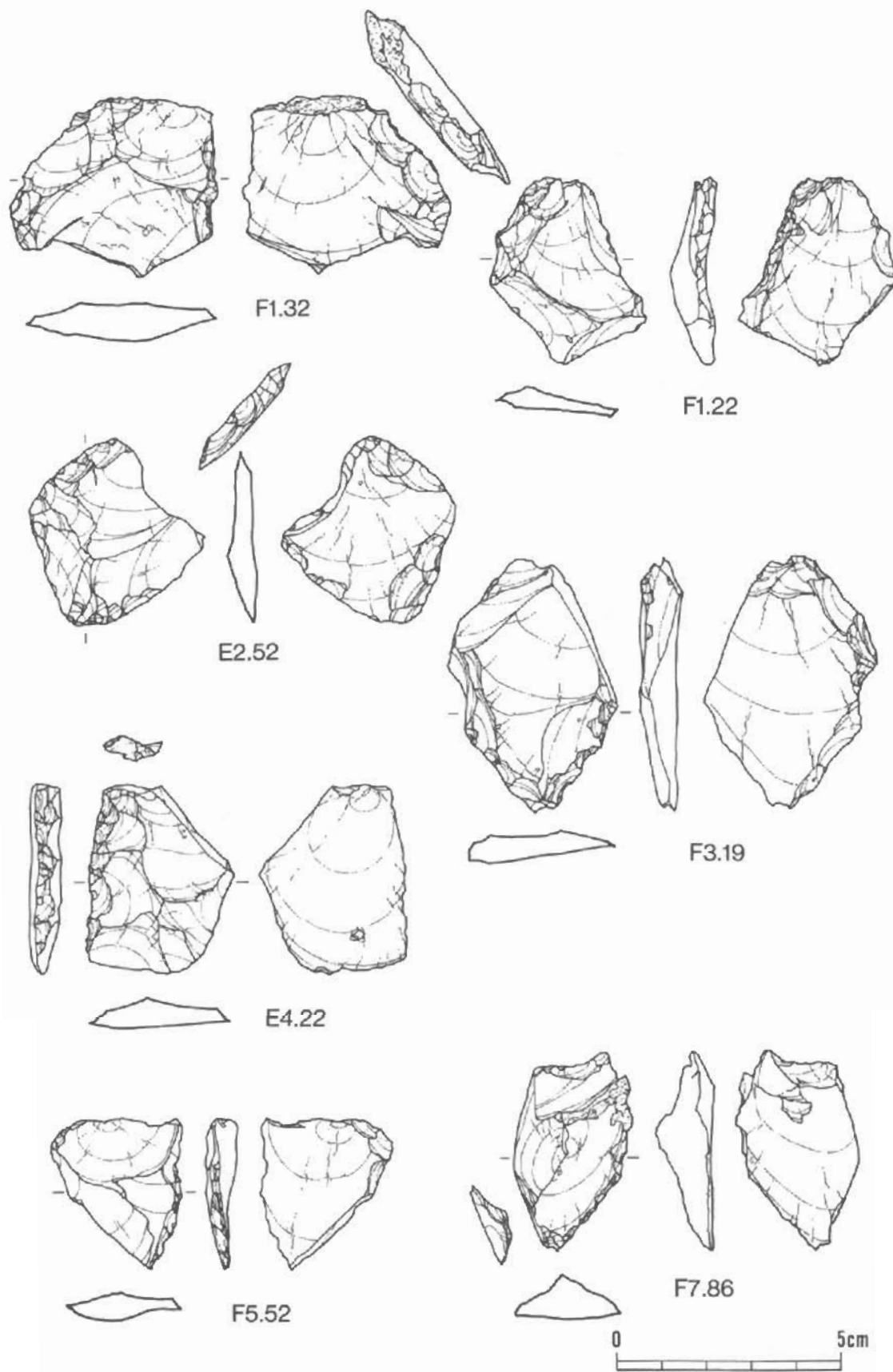
#### d, 削器(第77図~・第85図)

削器は、合計65点が出土している。サヌカイト製30点、チャート製27点、凝灰岩製2点、頁岩製1点で、サヌカイトとチャートの両石材がほぼ同数使用されており、また僅かではあるが凝灰岩と頁岩の使用が認められる。このうち、60点を図示した。

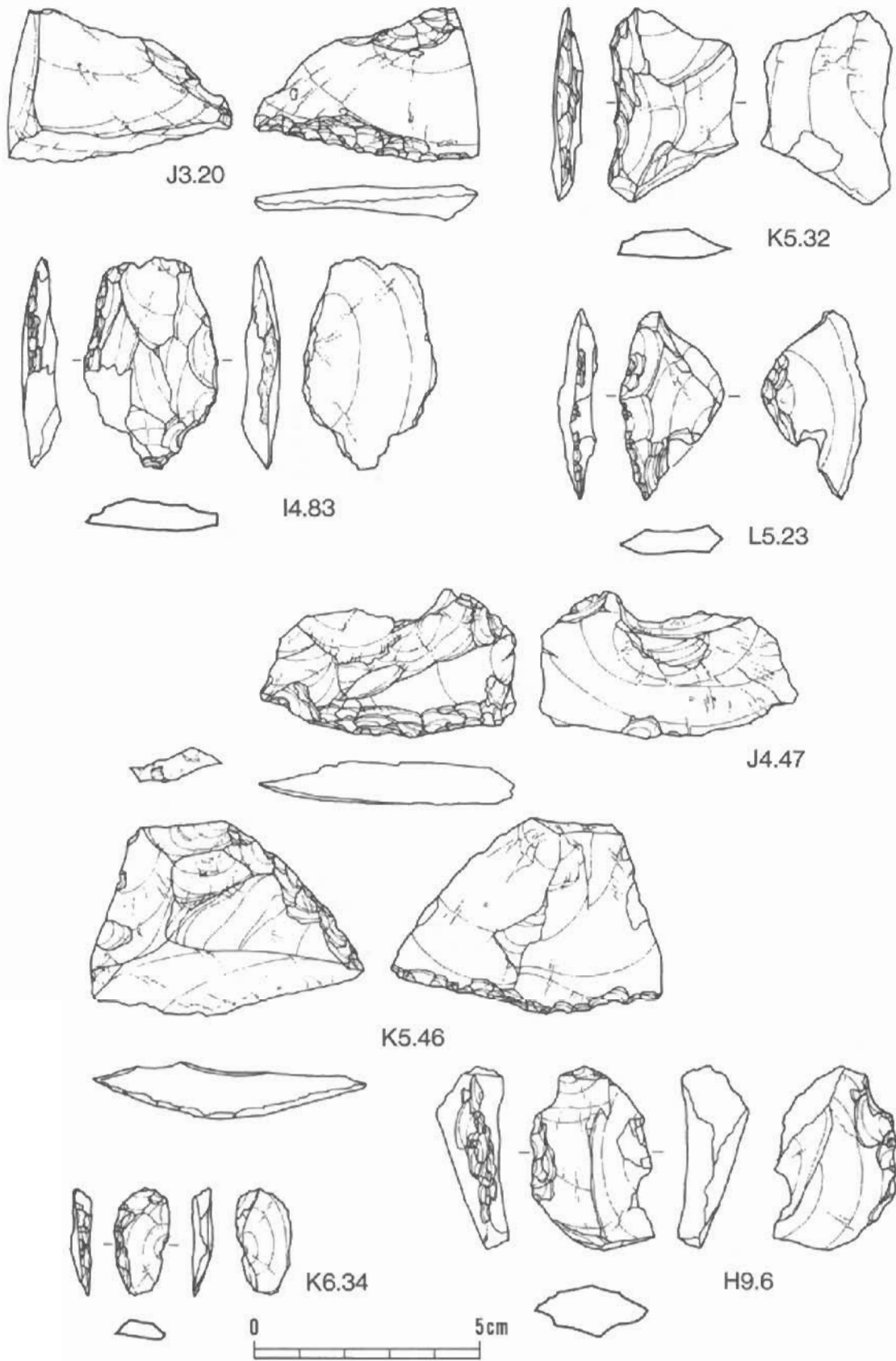
器形態を観察すると、その長幅比率から1対2~2対1の範囲内にはほぼ収まる傾向にある。チャート製は縦長、凝灰岩製は中間のものが多い。サヌカイトでは、やや縦長のものが含まれるが、ほぼ均等なばらつきを示している。素材剥片の形状が整形によって大きく改変される場合を考慮する必要がある。長幅数値は、全体として最大長59mm、最小長12mm、平均長36.3mm、最大幅75mm、最小幅16mm、平均幅35.8mmとなる。幅75mmの突出する1点を除いて、ほぼ共に大差ない範囲に収まる。石材別に観察すると、サヌカイトの平均長と幅は35.7mmと37.5mm、チャートでは35.8mmと28.7mm、凝灰岩では33.6mmと35.3mm、頁岩41.7mmと40.7mmとなる。

加工部位では、素材剥片の右側縁または左側縁の一方を加工するもの(F1.22, E4.22, F5.52, F7.86, E8.32, K7.46, J3.19, K10.30, F1.66, G1.9, G6.3, J8.2, J3.17, E4.72, I4.93, J4.42, J5.16, H6.59, J8.3)、左右両側縁を加工するもの(F1.32, L5.23, H9.6, F9.2, K7.33, E4.35, E4.57, J3.14, H8.9)、右または左側縁と末端を加工するもの(M11.6, F0.3, F4.55, H3.9, I4.12, H6.26, I8.7, I11.1, K5.2)、右または左側縁と打面を加工するもの(I4.50, L10.19)、左右両側縁と末端部を加工するもの(K5.46, I3.26, F3.54, E5.8, H3.13)、右または左側縁と末端部及び打面を加工するもの(F3.19, D8.17, G6.17)、左右両側縁と末端部及び打面を加工するもの(E2.52)、末端のみ加工するもの(J3.20, I4.83, J4.47, K6.24, D4.4, I3.23, F5.38, E4.60, PD1.2, E4.6, K10.33, K4.2, H6.195)、打面のみ加工するもの(K5.32, J4.22, G6.1)、末端と打面を加工するもの(F4.42)の10類に分類することができる。

これら65点の加工部位の合計は102箇所となるので、1点あたりの加工は、1.5部位に施されていることになる。個々の加工部位の加工剥離方向を観察してみると、腹面から背面に向かって加工が行なわれたもの、背面から腹面に向かって加工が行なわれたもの、表裏両方向の加工が行なわれたものがある。側縁部では、それぞれ33点、12点、18点となる。末端部では、それぞれ18点、7点、6点となる。打面部では4点、2点、2点である。各部位とも、腹面から背面方向への加工が多い。加工剥離角度の範囲は、側縁部では片面加工で42~83度、両面加工で34~87度、末端部では片面加工で45~91度、両面加工で41~86度、打面部では片面加工で51~79度、両面加工では58~81度となっている。

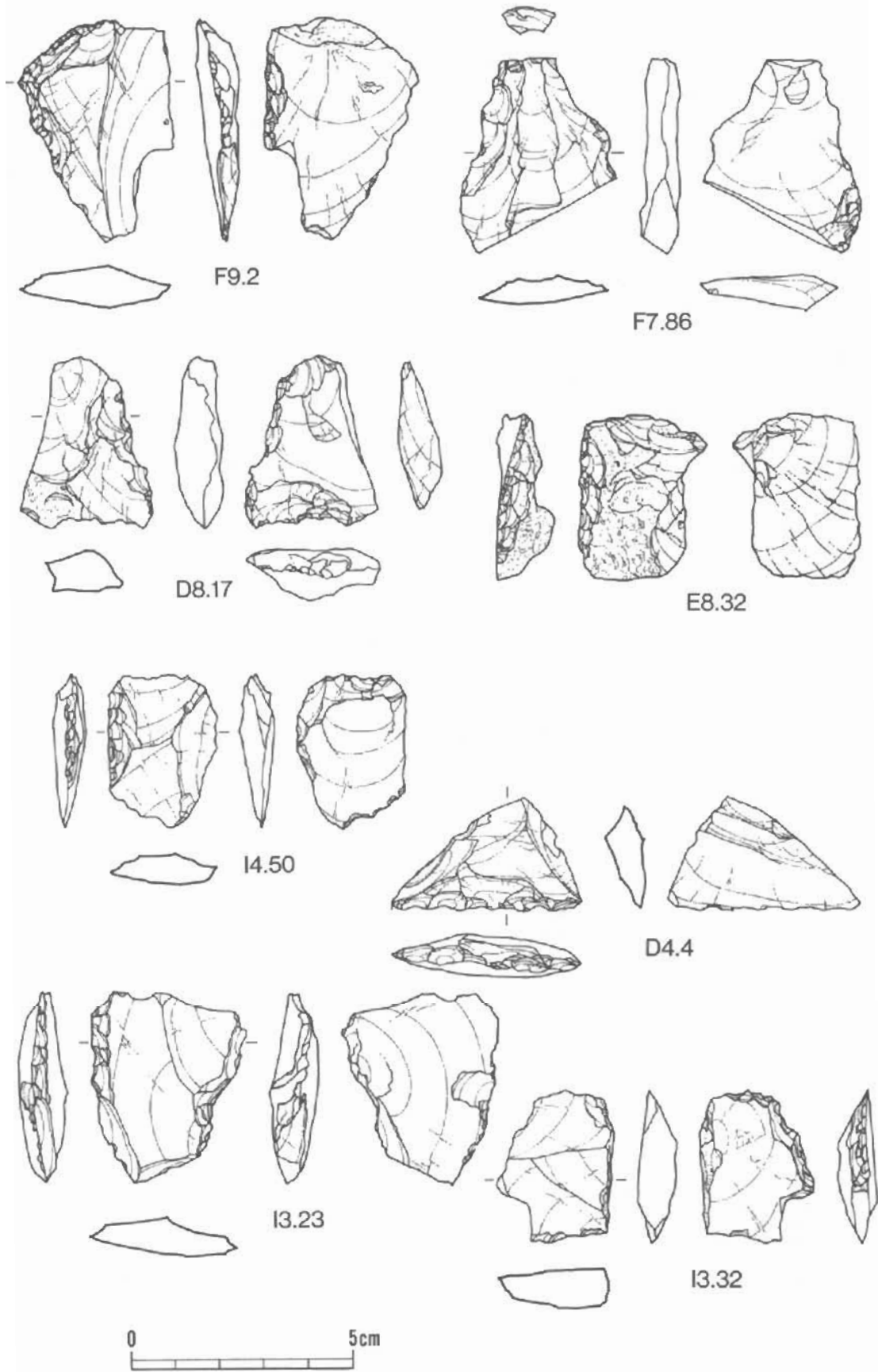


第77図 下位文化層削器実測図1



第78図 下位文化層削器実測図2

第2節 下位文化層の遺物

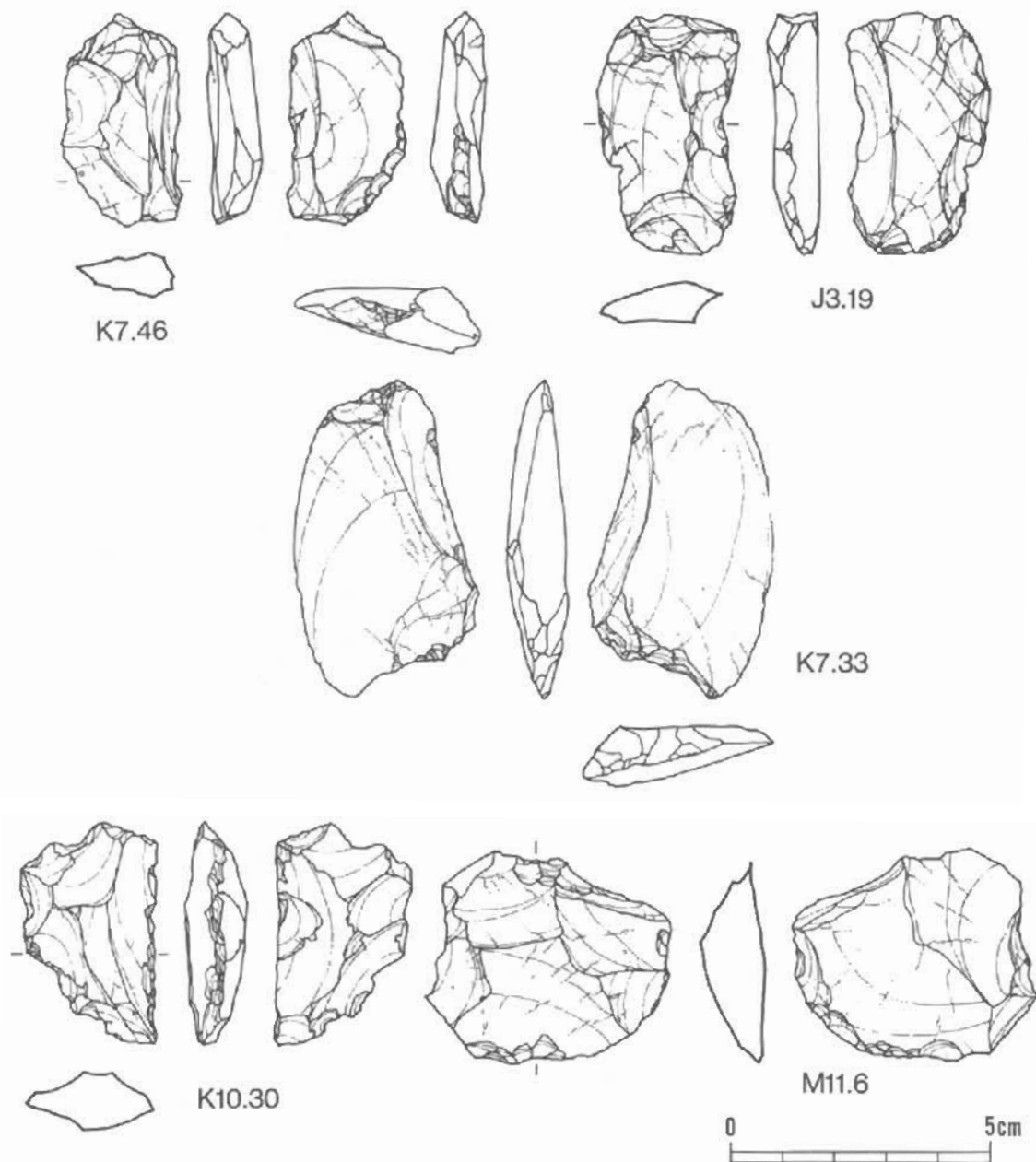


第79図下位文化層削器実測図3

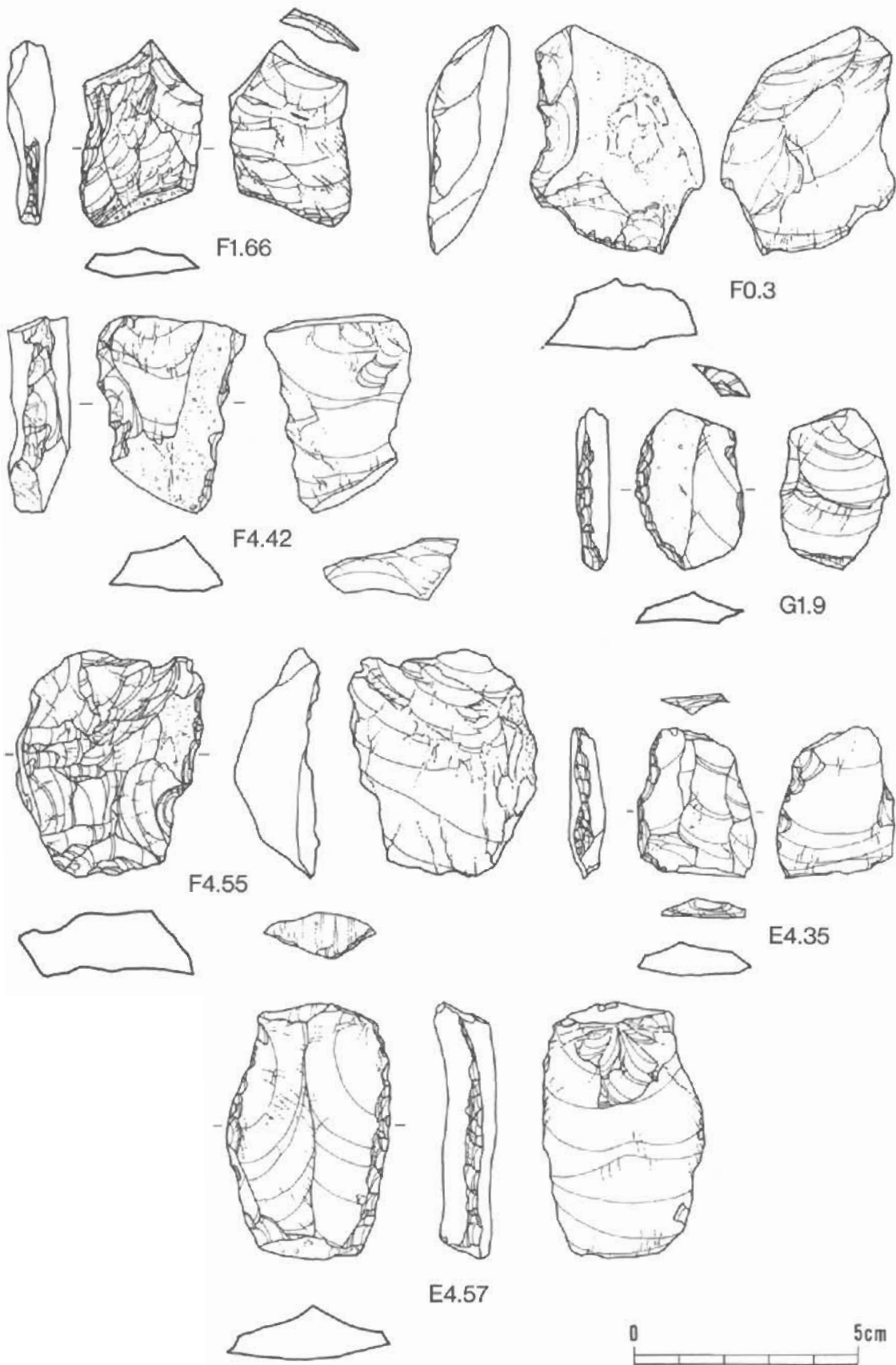


第IV章 下位文化層の調査

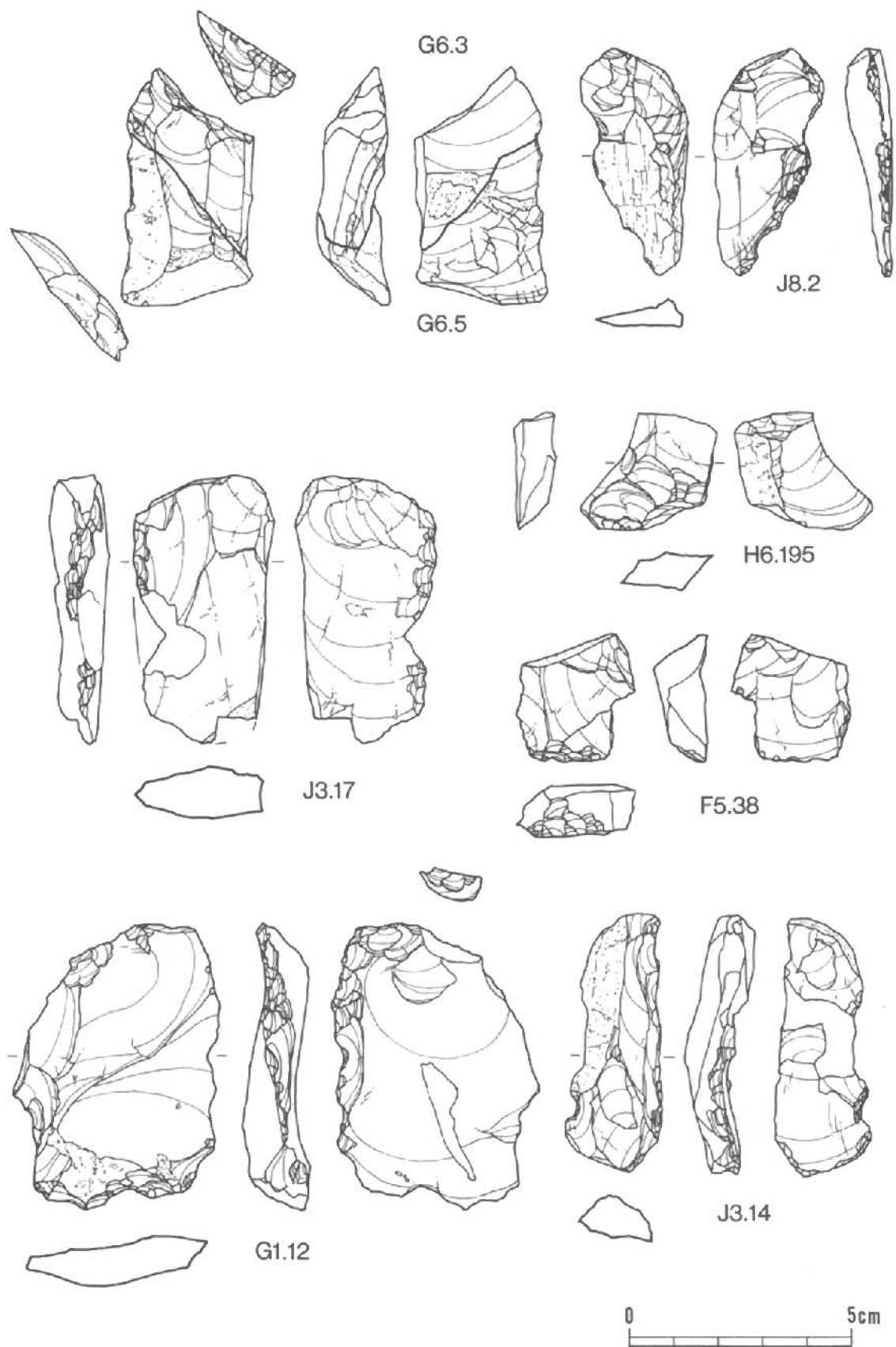
サヌカイト製削器の一部には、形状が台形様を呈する一群がある。I3.23・I3.32・I4.83・K6.34の4点は横長剥片の末端を調整したもので、I4.50は打面部を平坦剥離で除去し、左側縁を調整したもの、K5.32は打面部側縁を調整したものである。形態の斉一性には乏しいが合計6点が認められ、加工痕有剥片中の類品などと合わせ、台形様石器との関係を注意する必要がある。



第80図 下位文化層削器実測図4

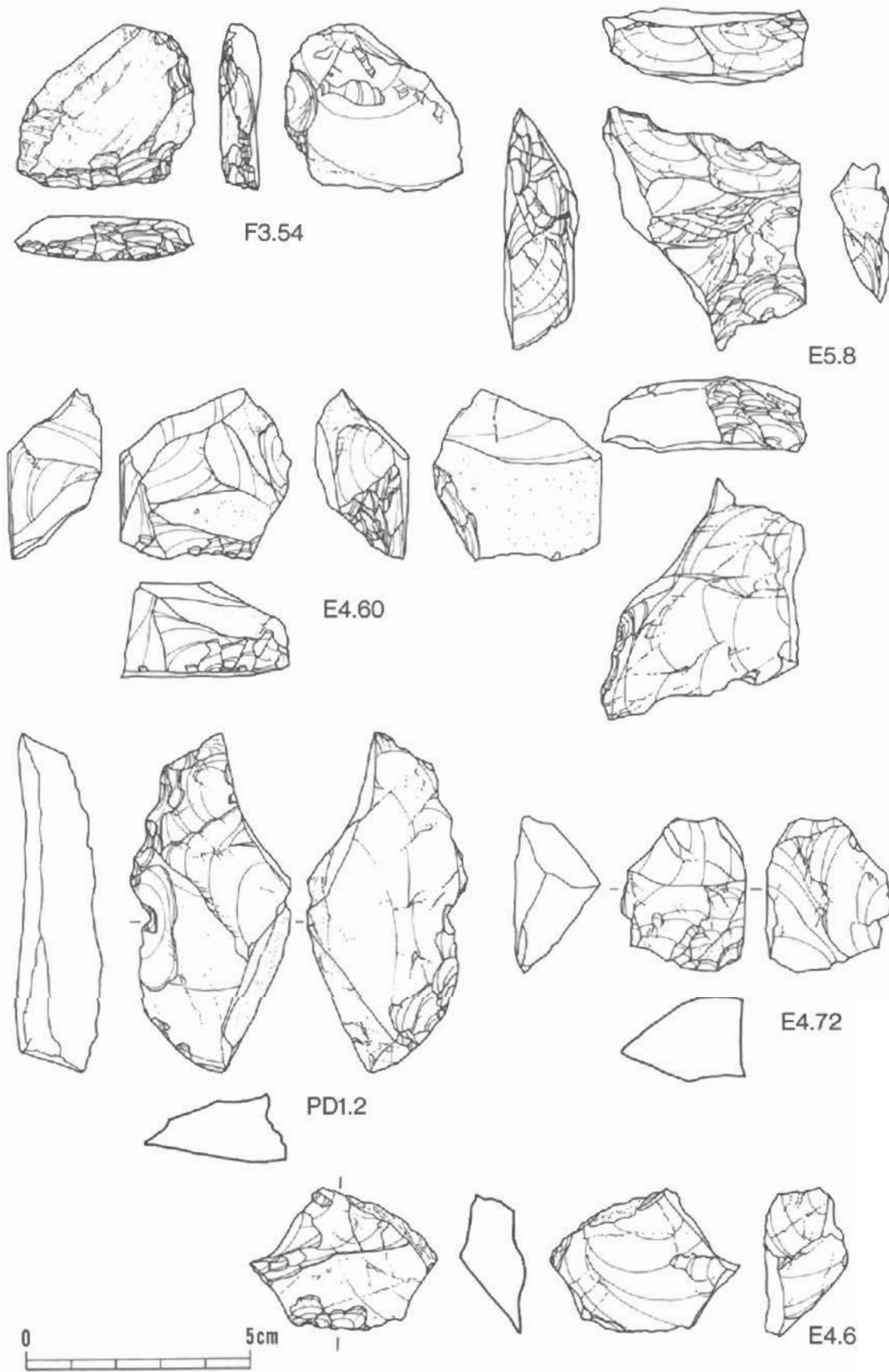


第81図 下位文化層削器実測図5

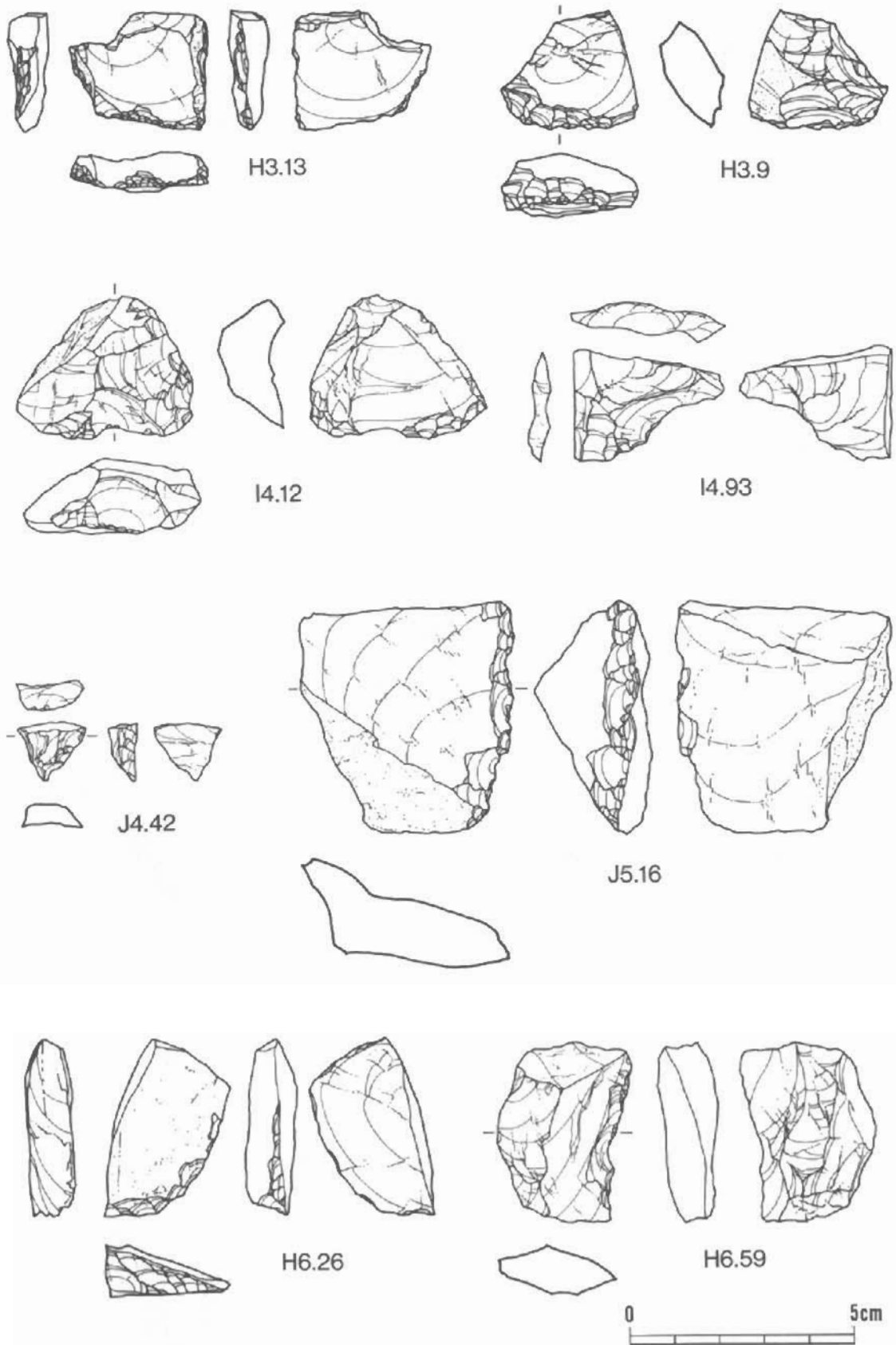


第82図 下位文化層削器実測図6

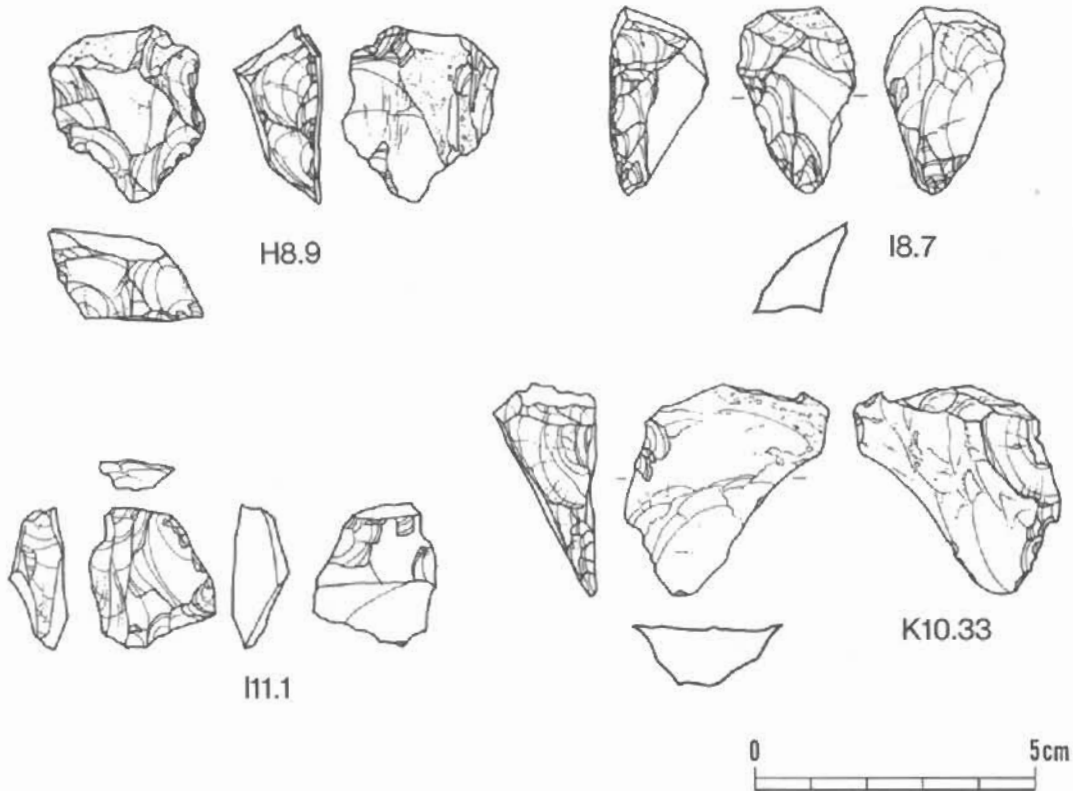
第2節 下位文化層の遺物



第83図 下位文化層削器実測図7



第84図 下位文化層削器実測図 8

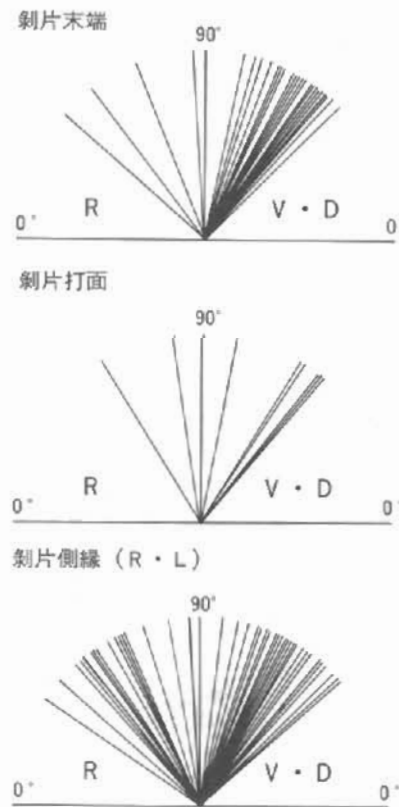


第85図 下位文化層削器実測図9

剥片素材以外の削器、特に石核などの他の器種の転用は、その素材形状に大きく制約される。以下に、図示したものうち石核素材の4点について説明しておこう。石材はすべてサヌカイトである。K7.46は、横長剥片石核を素材とし、作業面に2枚の目的剥片剥離痕をとどめている。削器の刃部は、作業面に対する末端部に打面側からの調整加工で作り出されており、刃部角72度を測る。J3.19は、横長剥片石核を素材とし、打面部に4枚の剥離痕をとどめている。石核作業面幅一杯の横長剥片が剥離されている。

削器は、剥離作業面に対する末端部から側縁にかけて石核打面側からの調整加工によって粗い刃部を形成している。刃部角は、60度である。K7.33は、横長剥片石核を素材とし、1枚の剥離によって作出された打面部から石核作業面幅一杯の横長剥片を剥離している。削器刃部は、剥離作業面の左右と素材剥片の左右に設定され、右刃部は底面(裏)から、左刃部は打面側(表)からの調整加工によって作り出されている。右刃部角43度、左刃部角65度を測る。K10.30は、不定形な剥片石核を素材とし、表裏とも求心的な剥片剥離が行なわれたもので、削器刃部は、右側縁に表裏両方向からの調整加工で作り出されている。刃角87度を測る。

(国井)



第86図 削器加工部位別刃部角

第5表 削器石材別加工部位

	R.L	R&L	R&E.L&E	R&P.L&P	R&LE	R.L&E&P	R&L&E&P	E	P	E&P	合計
サヌカイト	9	5	1	1	2	3	1	7	1	0	30
チャート等	10	4	8	1	3	0	0	6	2	1	35
チャート	9	3	5	1	3	0	0	6	2	1	32
凝灰岩	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	2
頁岩	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
合計	19	9	9	2	5	3	1	13	3	1	65

R = 右側縁 L = 左側縁 P = 打面部 E = 末端部

第6表 加工部位別調整剝離方向

	R.L	E	P
V	33	18	4
D	12	7	2
R	18	6	2

R.L = 右または左側縁、E = 末端部、P = 打面部、

V = 腹面から背面方向、D = 背面から腹面方向、R = 両方向、

e, 錐状石器 (第87図・第88図)

錐状石器は、サヌカイト製が3点、チャート製が2点の合計5点が出土している。

K11.23は、先細りの縦長剥片末端部の両側縁に調整加工を施して機能部を作出する。幅広・厚手のものである。全周はしなないものの最大幅を計る位置より末端にかけてが調整されているが、素材剥片自体の改変度は低い。I4.66は、極めて小型の両面加工品で、断面三角形に表裏・全周囲を調整する。形態的に異質で、異時期の資料の混入の可能性が考慮される。E4.87は、横長剥片の左翼側を機能部として調整したもので、断面三角形に表面から加工されている。右翼側は、折断的に調整された部分が認められる。

E4.19+E4.10は、2点が接合して断面三角形の素材となるが、この一端に細かい調整加工を施して錐状の機能部とし、もう一端には搔器状の機能部が作出されている。両機能部の整形と素材の分割または破損の前後関係は不明であるが、複合機能石器であった可能性は高い。E4.9は、残核と考えられる素材の一端に断面三角形の錐状機能部を整形する。

錐状石器については、サヌカイトとチャートの両方で、素材が異なっていることが知れる。(進藤)

f, 楔形石器・彫器 (第87図・第88図)

彫器は、原位置を保ってサヌカイト製のもの1点が出土しているが、他に遊離してチャート製1点があり、両方を図示する。

K7.29は、サヌカイト製の剥片の中間部分を折断したものを素材とし、その小口部に槌状剝離を少なくとも3枚行なったものである。H6.76は、チャート製の縦長傾向の剥片の打面部側から少なくとも2枚の槌状剝離が行なわれている。

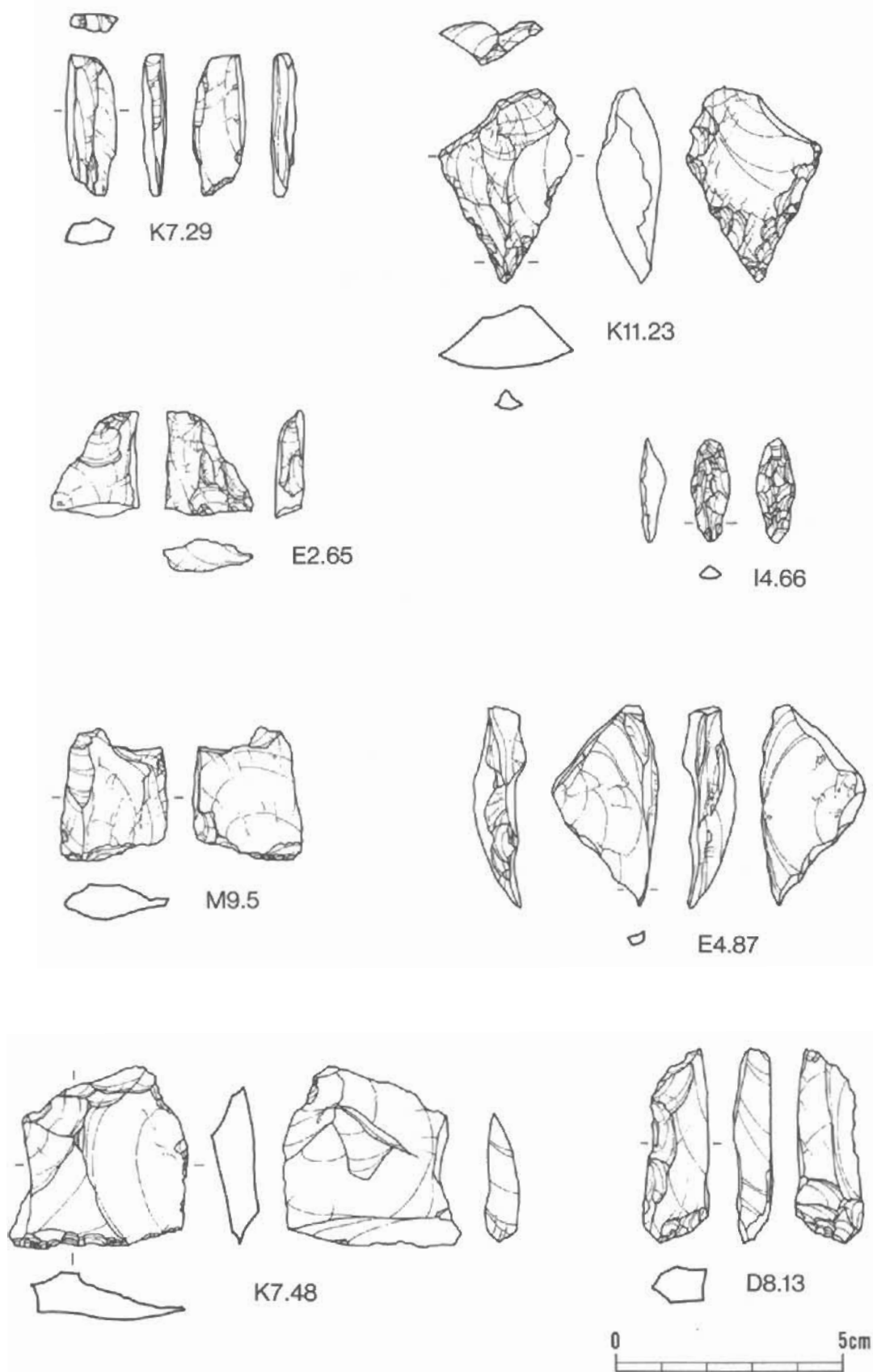
楔形石器は、サヌカイト製のもの4点、チャート製のもの1点が出土している。形態的に、削器・加工痕有剥片・一部の石核との区別困難なものがある。

サヌカイト製のE2.65は折断剥片の一側縁に、M9.5は剥片一側縁に末端から、裁断面を形成する。K7.48は剥片素材の石核の一端に裁断面、一側縁には鈍い調整側縁を形成する。D8.13は楔形石器の削片であろう。

チャート製のE0.3は、両面加工で裁断面の形成はない。側縁は鈍い。

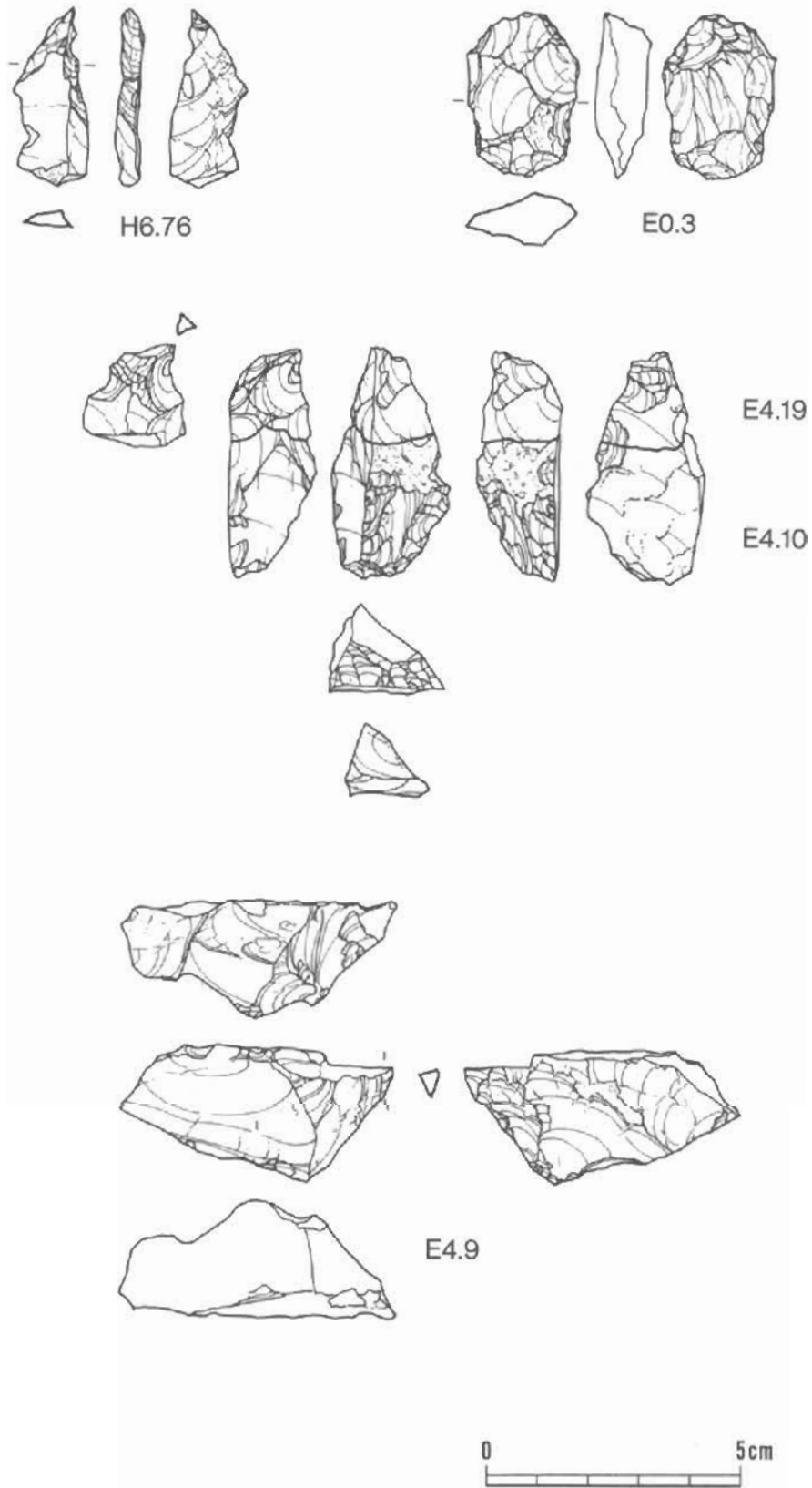
(進藤)

第2節 下位文化層の遺物



第87図 下位文化層彫器・錐状石器・楔形石器実測図1





第88図 下位文化層彫器・錐状石器・楔形石器実測図 2

## E, 加工痕有剥片 (第89図～第94図)

剥片の縁辺に打点を有する、二次的な剥離面が観察される資料についてここで記述する。二次的な剥離については、製作者の加工意図が反映されていると予想されるもの、すなわち連続的な剥離作業が認められるものや、規格性(剥離の大きさ・形状の類似、剥離方向の一定、等)を看取できるものについて「加工痕」、それ以外を「使用痕」として便宜的に分けたが、両者の間に厳密な一線を画すことは困難で、境界域付近の資料では判定が変更される可能性もある。また、より正確を期すためには、「加工」・「使用」といった表現についても議論の余地が残っていることを断わっておく。

加工痕有剥片は、A資料サヌカイト製31点、チャート等製35点、B資料12点、C資料数10点がある。資料の一部を図示する。図示した79点のうち、サヌカイト製が32点、チャート製などその他の石材からなるものが47点あり、前者を第89～91図に、後者を第92～94図に示す。

比較的急角度の、二次的な剥離が認められる資料を4点図示する。このうちサヌカイト製は1点(第90図)で、チャートその他によるものは3点(第92図)ある。

サヌカイト製のE8.33は実測図両側面にブランディング様の、剥離角度の大きい調整がみられる。各々背腹両面から剥離が施され、方向が異なるものの、未成品・破損品の可能性も含めて、ナイフ形石器との関連が考えられる資料である。

チャート製J4.8は、縦長剥片素材の打点側を斜めに切るように、背面からの調整が施される。剥離痕は大振りで、調整頻度も低いが、整形を意図したもののようである。H7.61は、上半部を欠損により失う。断面三角形の剥片で、その左側縁に連続的な剥離痕がみられ、一部はブランディングの様相も呈する。F4.111は薄手の横長剥片で、実測図左側面には背腹両面から、右側面には背面からの、剥離角約85度の加工が認められる。資料の上半が失われているが、ナイフ形石器に類した傾向をみせる。

加工痕有剥片の内、台形様石器とも見なし得るものは、サヌカイト製のもので10点(第89・90図)、チャート等製のもので7点(第92図)の合計17点がある。

サヌカイト製のF1.57は、横長剥片の左半を基部として調整したもの。F7.153は、横長剥片の打面部を背面に向かって折断した後、全周囲に調整を加えたもの。H7.68は、横長剥片の打面部を折断し、剥片末端に調整を加えたもの。J4.36は、先端しか遺存しないが、薄い剥片の背面全体に調整を加えたもの。J9.32は、横長剥片を分割したものの打面部側を加工したもの。K7.58は、剥片の打面部側からK7.49を折断して調整し、また先端腹面側にも調整を施したもの。K9.5は、横長剥片の末端腹面を調整したもの。L8.6は、打面部側の側縁をすべて折断と調整で整形し、剥片末端にもナイフ形石器様の加工を施したもの。M8.3+M8.4は、剥片の左右に折断と調整加工を施したもので、打面部を残すもの。M8.6は、小剥片の左右両端を調整したものである。

チャート等製のF1.77は、縦長剥片の打面周辺の左右に調整を施して基部としている。F5.61は、先端を欠くが、素材剥片の打面部側と末端側の両側縁を丁寧に調整する。H6.79は、剥片の打面部側を折断して除去し、末端側に調整を施したものである。H7.22は、剥片の打面部を折断で除去し、調整を加えたもの。I5.16+I5.22は、厚手の剥片の打面部側と末端側から徹底的に調整を加えたもので、先端が再調整されたか、欠損する。I6.16は、小剥片の末端に調整を加えている。L5.26は、剥片の打面部側を折断で除去し、剥片末端側に僅かに調整を加えたものである。

サヌカイト・チャート等製いずれの群も、大きさ、形態的に斉一性に乏しく、規則的な整形技術が駆使されている印象も乏しい。あえて台形様石器として独立した器種としては扱わないが、下位文化層の性格を考

える上で、注意すべき一群であるだろう。削器、使用痕有剥片にも同様のものが散見される。

搔器に類似した傾向をもつ、二次的な加工部分のみられる資料は合計7点あり、内訳はサヌカイト製1点(第90図)、チャート製6点(第93図)である。

サヌカイト製F2.48は、原礫面を大きく残す背面下部に70~80度で剥離が施されることから、スクレイパーとの関係が予想される。チャート製F3.17、E4.7、G6.2は、いずれも搔器刃部に類似した特徴を有し、末端付近が製作途上で破損したものとみられる。調整を受けた部位の角度はともに70度前後と大きい。F4.66は基部側を欠失した剥片で、末端のオーバーハングした部分に二次的な剥離がみられる。F5.41は下端に剥離が認められるが、縁辺の角度は50度と、やや小さい。H6.141は薄手ではあるが、下端から剥離角度65度で連続した調整が背面に向けて施されている。

縦長剥片の側縁に細部調整が加えられたものにはチャート製の資料4点があり、(第93図)、削器との関連も考慮できる。E4.13は基部寄りの背面に剥離が加えられて、最大70度ほどの縁辺をなす。I4.20は中央部両側がノッチ状に調整され、ともに65度の角度を呈する。D4.15はやや大型の資料で背面の左下部が70度前後に調整され、この部分の裏面には使用痕と推定される小剥離もみられる。E5.26では、右側面図の中央から末端にかけて約50度の縁辺がつけられる。

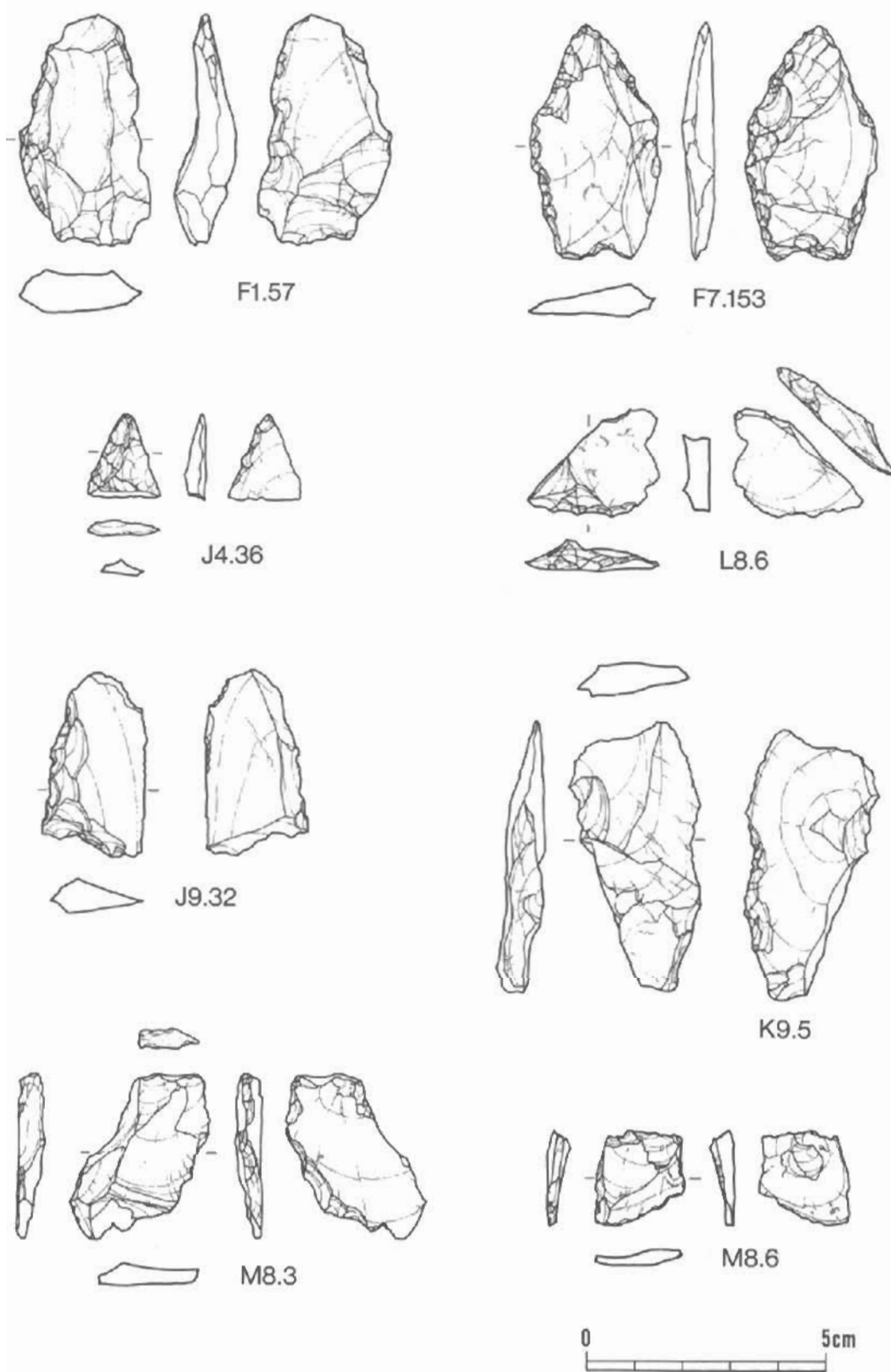
以上の資料は、比較的整った調整が施されており、製品と認定するまでには至らないが、遺物によっては定型的な製品類との関わりも予想され、未成品や破損品等が含まれている可能性がある。

これに対し、二次的な剥離が認められるものの、定型的な石器との関連が捉えにくい資料も多く、それらの一部も記述する。図示するのはサヌカイト製14点(第90・91図)、チャートその他製14点(第94図)で、縁辺の一部分に小規模の剥離が観察される一群である。

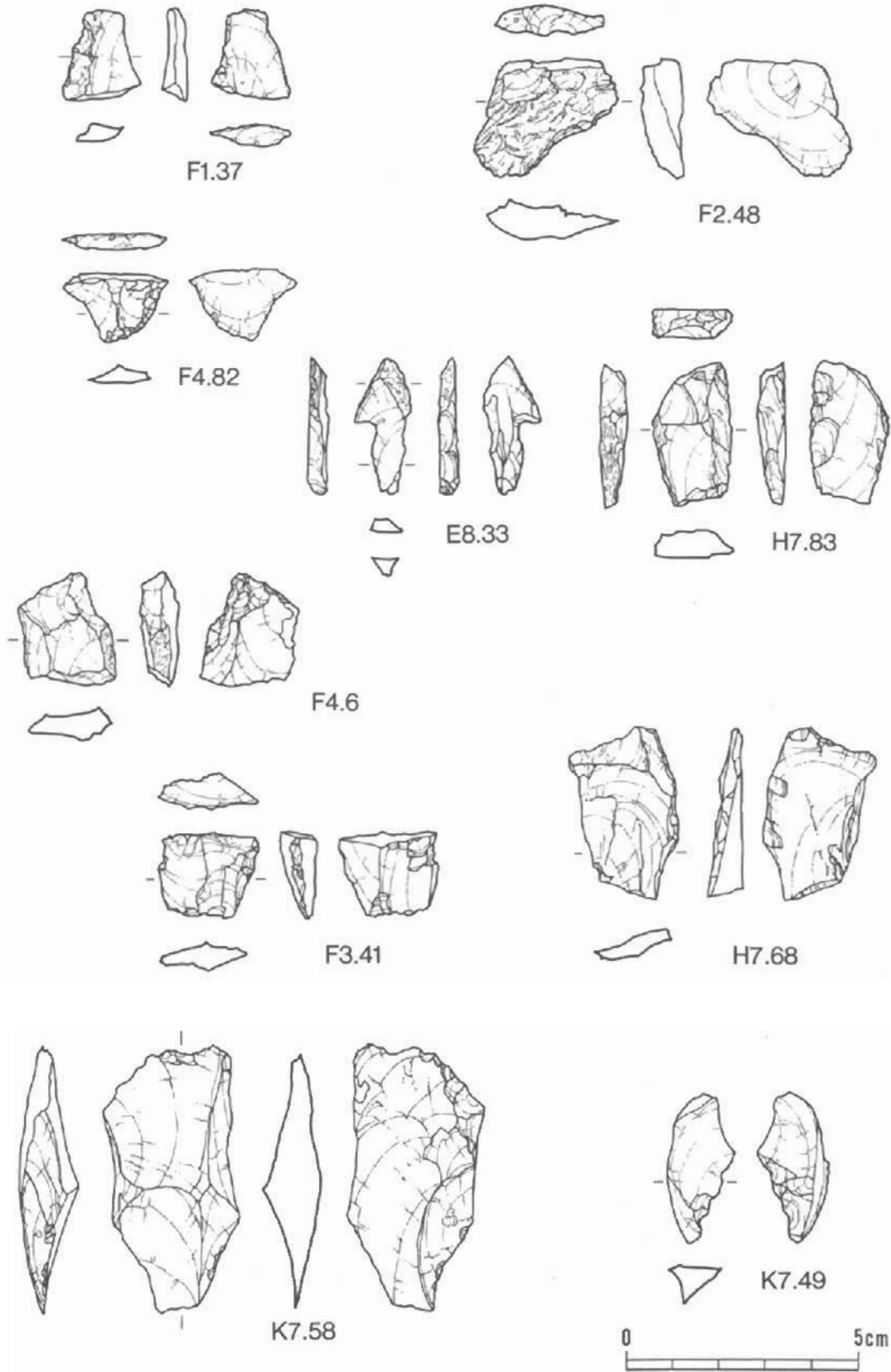
サヌカイト製J7.20は打面付近に裏面からの剥離が施され、打点部分を欠く。K7.39は横長剥片で表面左側縁にリタッチがみられる。K9.9は斜めに折れた剥片の裏面に、比較的大きな剥離が認められる。K11.53は原礫面の打面を残す資料で、腹面右側縁末端に若干の調整が認められる。K11.32の素材は打面調整の施された横長剥片で、裏面末端に細かい剥離が連続する。N11.1も打面部分は複数の剥離面により構成されており、背面左側縁から末端にかけて同様の細かい剥離がみられる。N9.6は、背面の右側において打点を有する剥離が観察され、この縁辺に接する裏面には刃こぼれ状の小剥離も散見される。M8.1は表面左側縁に直角に近い角度になるような剥離がみられる。N9.4では表裏とも右側に若干の剥離が連続する。F1.37は、横長の資料が折れたもので、剥片末端にあたる表面左側縁の原礫面に接して、小剥離が観察される。F4.82は打面部を欠く剥片で、下半部表面に調整と思われる剥離が連続している。H7.83、F4.6は、ともに主要剥離面の打面側に薄手の連続的な調整が認められる資料で、バルブの削除を意図したものと考えられる。なお、後者の主要剥離面は、右上方からの剥離面により切られている。F3.41は楔形の形状を呈しており、正面右の側面に剥離痕が続いている。

チャート等製F1.68、F5.13、E2.34は、それぞれ左下・下端部・下部に二次的な剥離面が認められる。F4.71では、左側面から下端にかけて幅が大きく奥行き短い剥離がみられる。F5.20は剥片右側縁に比較的薄い調整が施され、厚みを減じている。F6.32は横長剥片を素材とし、右側縁に背面からの、80度近い角度の大きな剥離が認められる。D8.19は下端の凸部を囲むように調整が施されるが、錐状に仕上げられるまでには至っていない。左右の側面縁には微小剥離痕もみられる。F5.201は左右平行な側縁をもつ縦長剥片で表面の右側では角度75度に調整され、左側には刃こぼれ状に小剥離が連続する。J4.8は、剥片末端に若干の剥離が加えられてはいるものの、断続的で、ノッチ状に凹凸をなす。E7.5は横長資料

第2節 下位文化層の遺物

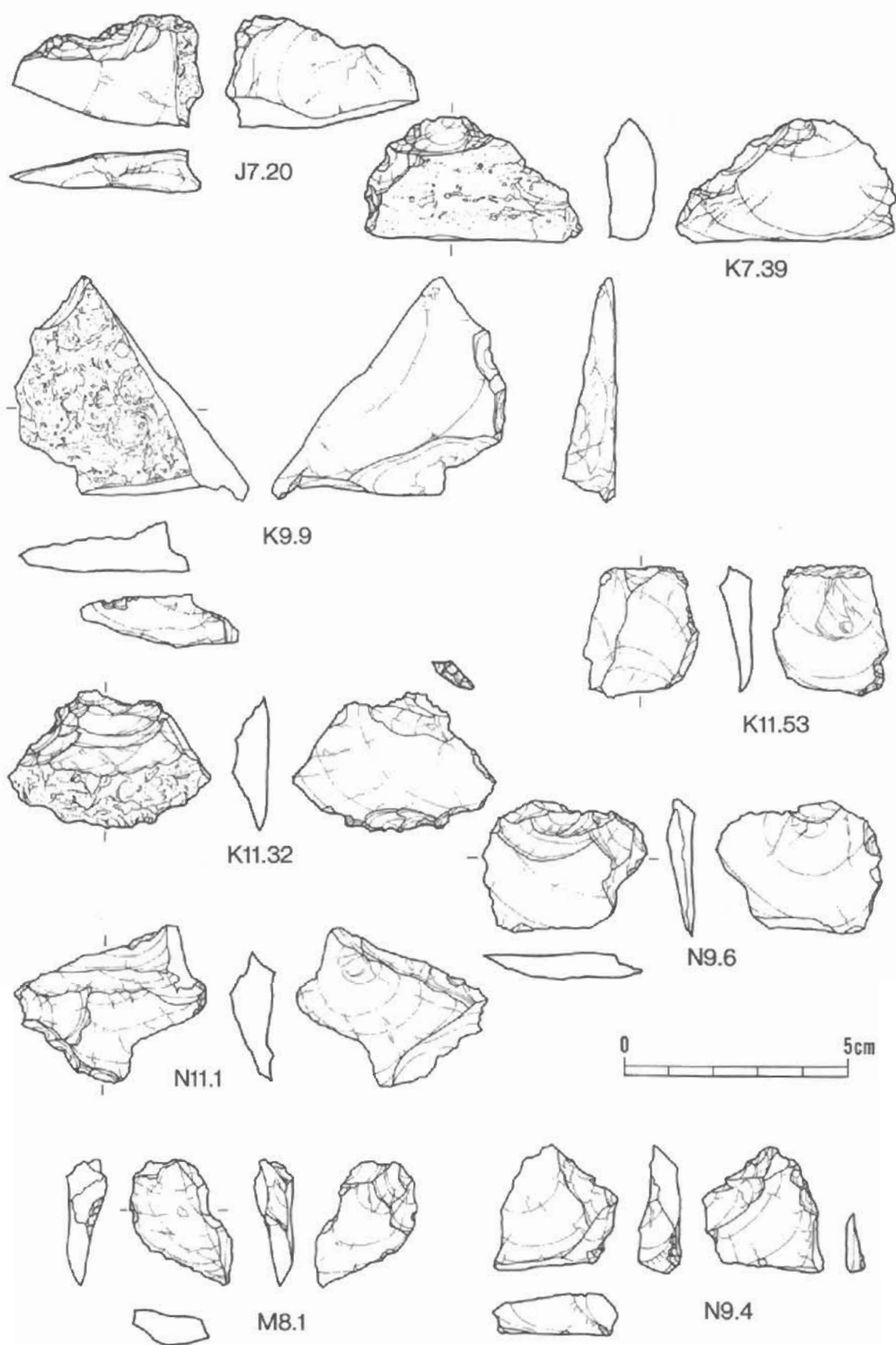


第89図 下位文化層加工痕有剥片実測図1

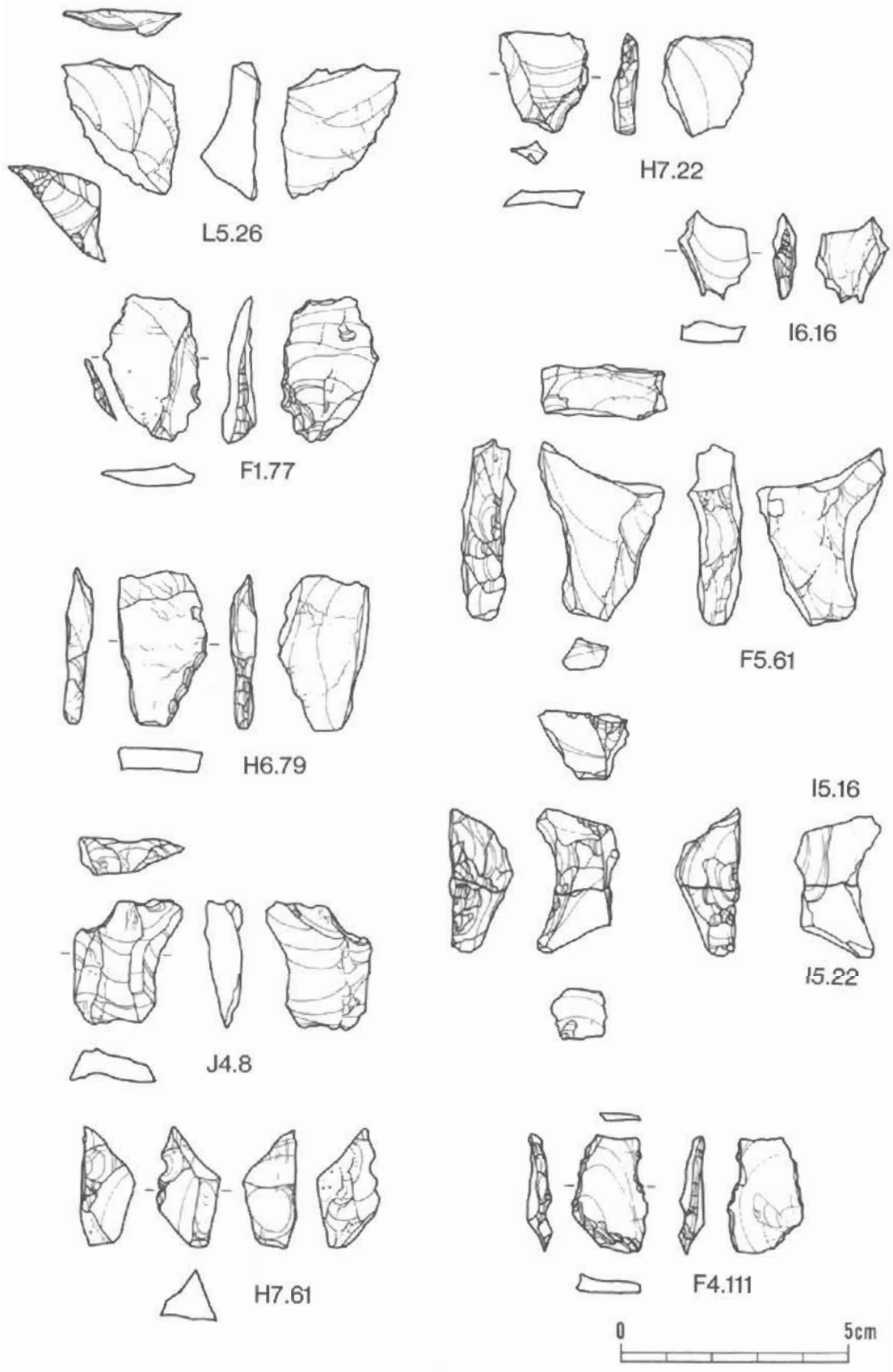


第90図 下位文化層加工痕有剥片実測図2

第2節 下位文化層の遺物

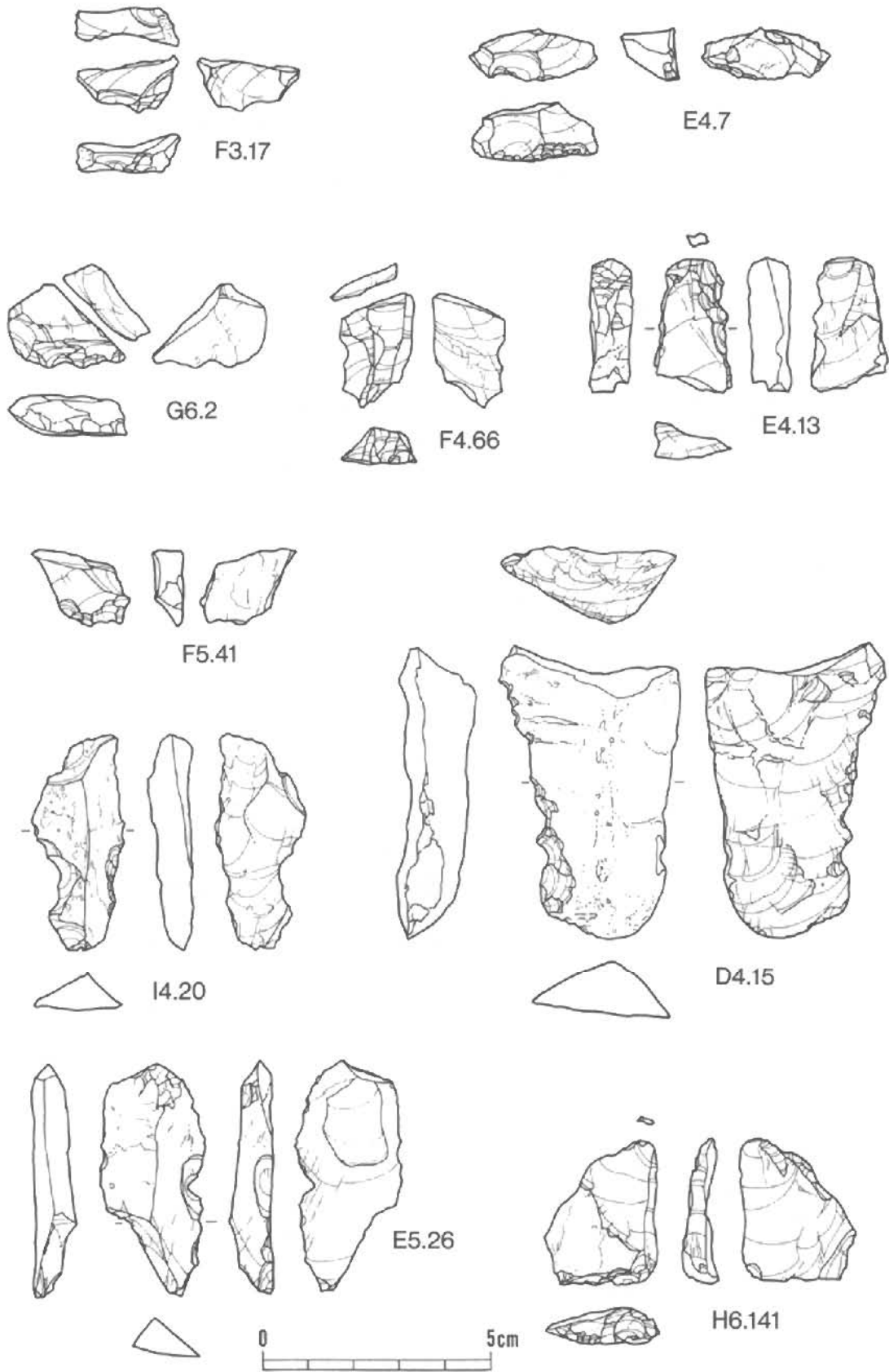


第91図 下位文化層加工痕有剥片実測図3



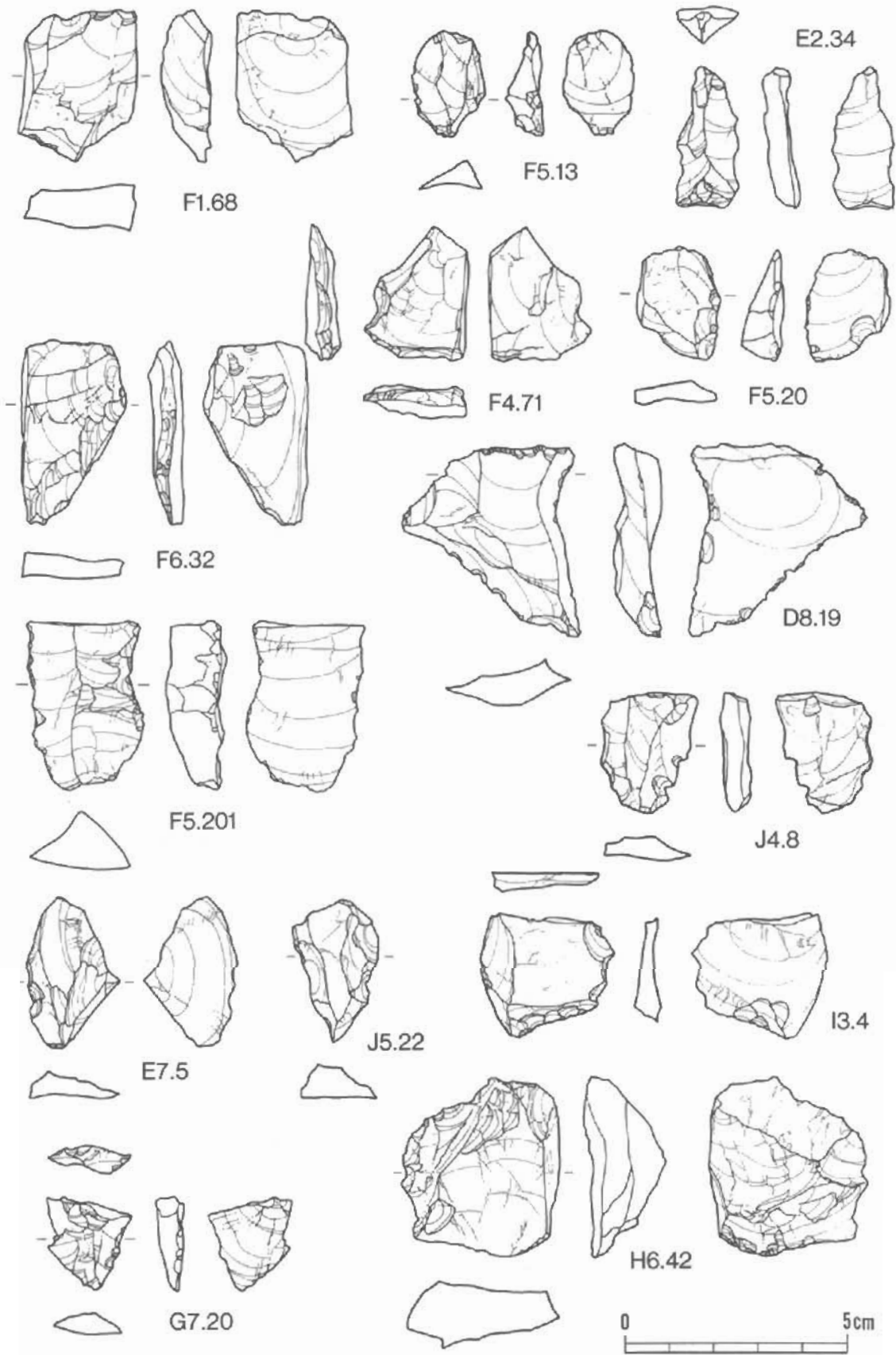
第92図 下位文化層加工痕有剥片実測図4

第2節 下位文化層の遺物



第93図 下位文化層加工痕有剥片実測図 5





第94図 下位文化層加工痕有剥片実測図6

で、剥片末端にわずかながら二次的な剥離面がみられる。J5.22の裏面は節理面によりなるが、ほぼ縦長剥片の一部と思われ、背面は左右からの剥離で両側縁が60度ほどの角度をなす。I3.4は表面の原礫面を切るように末端に連続的な調整が認められ、角度は60度前後である。G7.20は、右側縁に小さな剥離が続く。H6.42は打点側を折損により欠く。剥片裏面末端の左側に若干の剥離がみられる。(工藤・山口)

#### h. 使用痕有剥片(第95図～第116図)

サヌカイト製が100点、チャート製が85点の計185点が出土した。B資料を加えると、109点、108点、合計217点となる。このうち、サヌカイト製で2点、チャート製で3点の計5点は素材が剥片ではなく、石核や石核分割材を用いたものである。ここでは両石材における属性のあり方、属性にみられる選択性について検討していく。さきにあげた5点と計測不能なサヌカイト製の1点の計6点を分析の対象外とした。よって、分析の対象となるのはサヌカイト製106点、チャート製105点の計211点となる。

ここで取り扱う属性は、素材剥片形態、長さ・幅(長幅関係)、重量、使用痕部位、刃部角、剥離角、背面状況である。これらの属性を単独あるいは組合せで用いることで、石器自体の特徴・傾向を概ね捉えることが可能と思われる。更に一器種の特徴・傾向は、技術的・形態的・機能的な面で、有効であると思われる他の器種の属性と比較検討することで、より詳細化するであろう。そうしたことから、使用痕有剥片の特徴・傾向を読み取ろうとする場合、自明の特徴である①二次加工が施されないこと(技術的特徴)、②素材をほとんど変形しないこと(形態的特徴)と共通する特徴をもつ器種、すなわち剥片の属性分析を行ない、比較検討する必要がある。しかしながら、ここでは剥片の属性分析を行なっていないため、石器群全体からみた場合の使用痕有剥片の特徴・傾向を把握し得なかった。

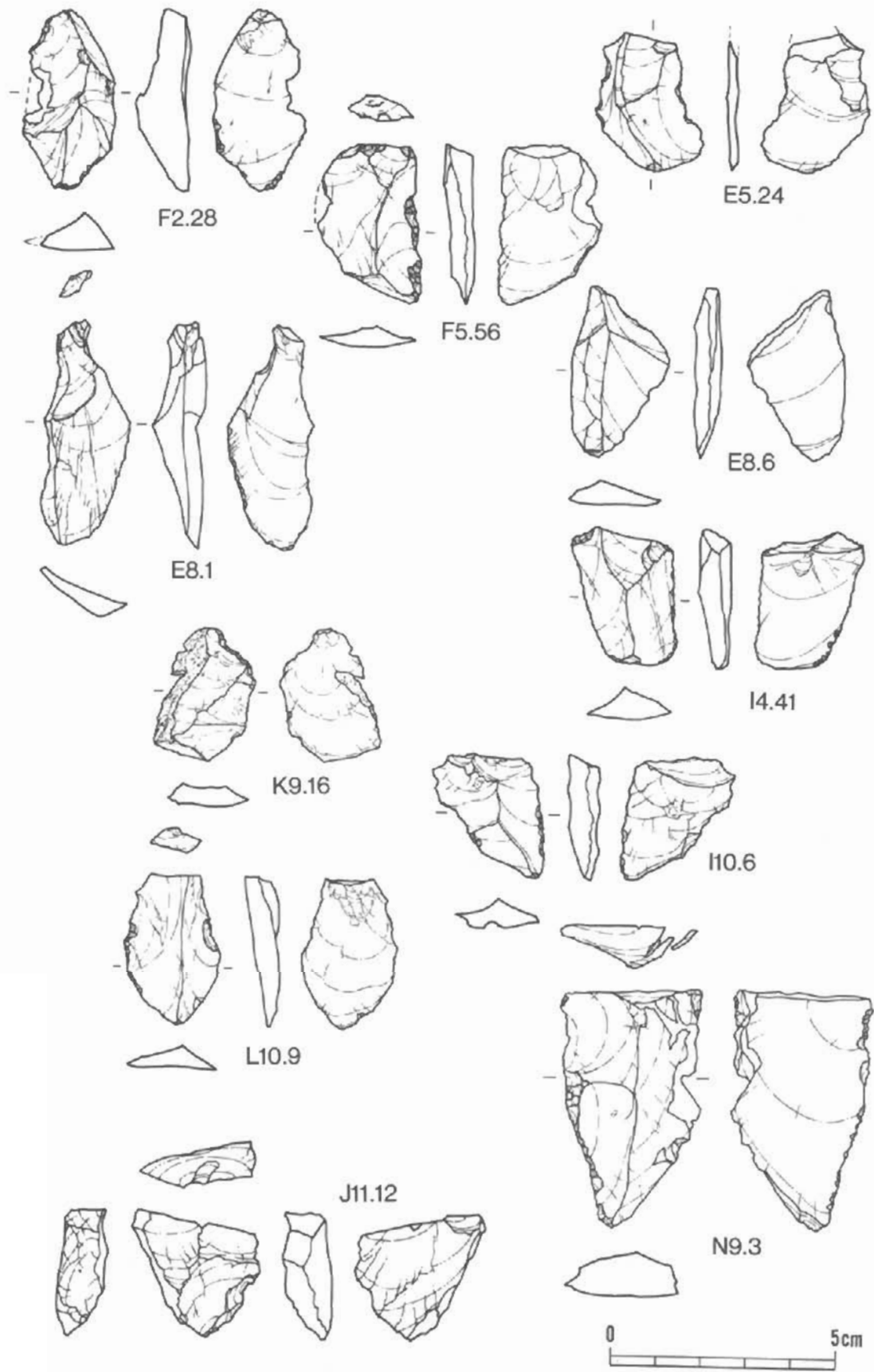
以下、先にあげた属性について分析検討して行く。属性の観察・分析方法については、上層出土の使用痕有剥片の項を参照していただきたい。

#### 素材剥片形態

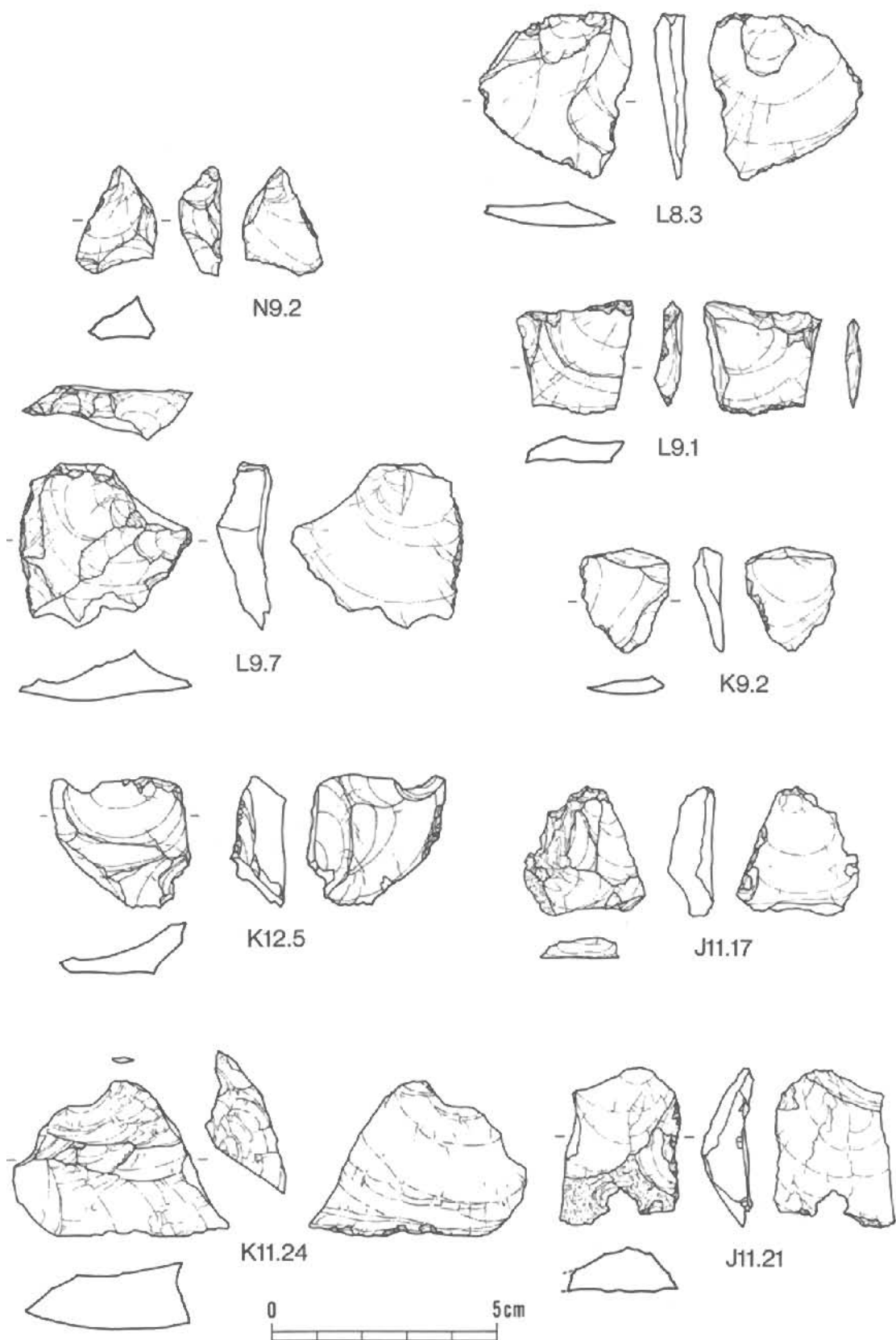
サヌカイト製は縦長剥片が12点(12%)、中間剥片が37点(35%)、横長剥片が41点(37%)、判定不能が16点(15%)と、中間剥片と横長剥片の比率が拮抗する。サヌカイト製の縦長剥片には、均整のとれたものが僅かしかなく、背面構成も個々ばらばらである。中間剥片もおおかた縦長剥片と同じく、背面構成は多種多様であるが、剥片の背面下部に石核素材となった剥片の腹面(主要剥離面)の一部を残すものが目立つ点で異なる。E0.2、D4.8、G5.11(第97図)、E4.96(第103図)、F8.87(第104図)、H8.40(第105図)などが例である。横長剥片は中間剥片以上に、石核素材となった剥片の腹面の一部をとどめる割合が高く、60%に達する。K7.70(第98図)はいわゆるファースト・フレイクで、背面に石核素材となった剥片のポジティブ・バルブの残る部分をとどめ、旧打面には弧状のクラックがみられる。N9.5(第98図)、I9.21(第101図)F7.101(第102図)などは細かな剥離面を除けば、背面が1枚のネガティブ面と1枚のポジティブ面で構成されるものである。しかし、大部分は数枚のネガティブ面と1枚のポジティブ面で構成される。このような背面にポジティブ面をもつ剥片については後段で述べる。

チャート製は縦長剥片が21点(20%)、中間剥片が74点(70%)、横長剥片が4点(4%)、判定不能が6点(6%)となり、中間剥片が圧倒的多数を占める。

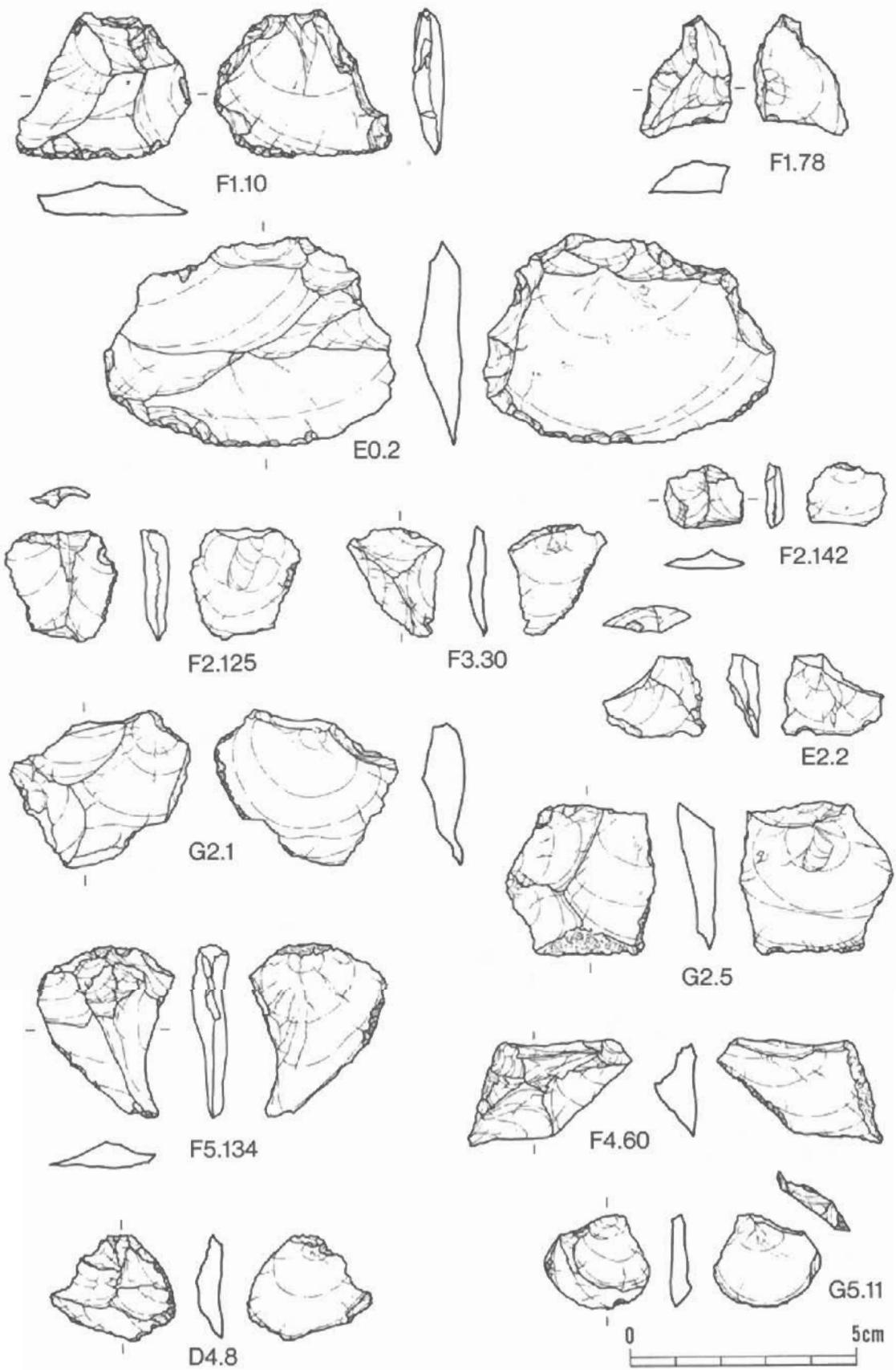
全体として、形態的に整ったものは極めて少ない。また打面、背面に原礫面や節理面を残す剥片が多い。F7.154+G6.21(第113図)は横長剥片であるが、これは板状の石核素材を使ったため偶発的に生産されたものであろう。



第95図 下位文化層使用痕有剥片実測図1

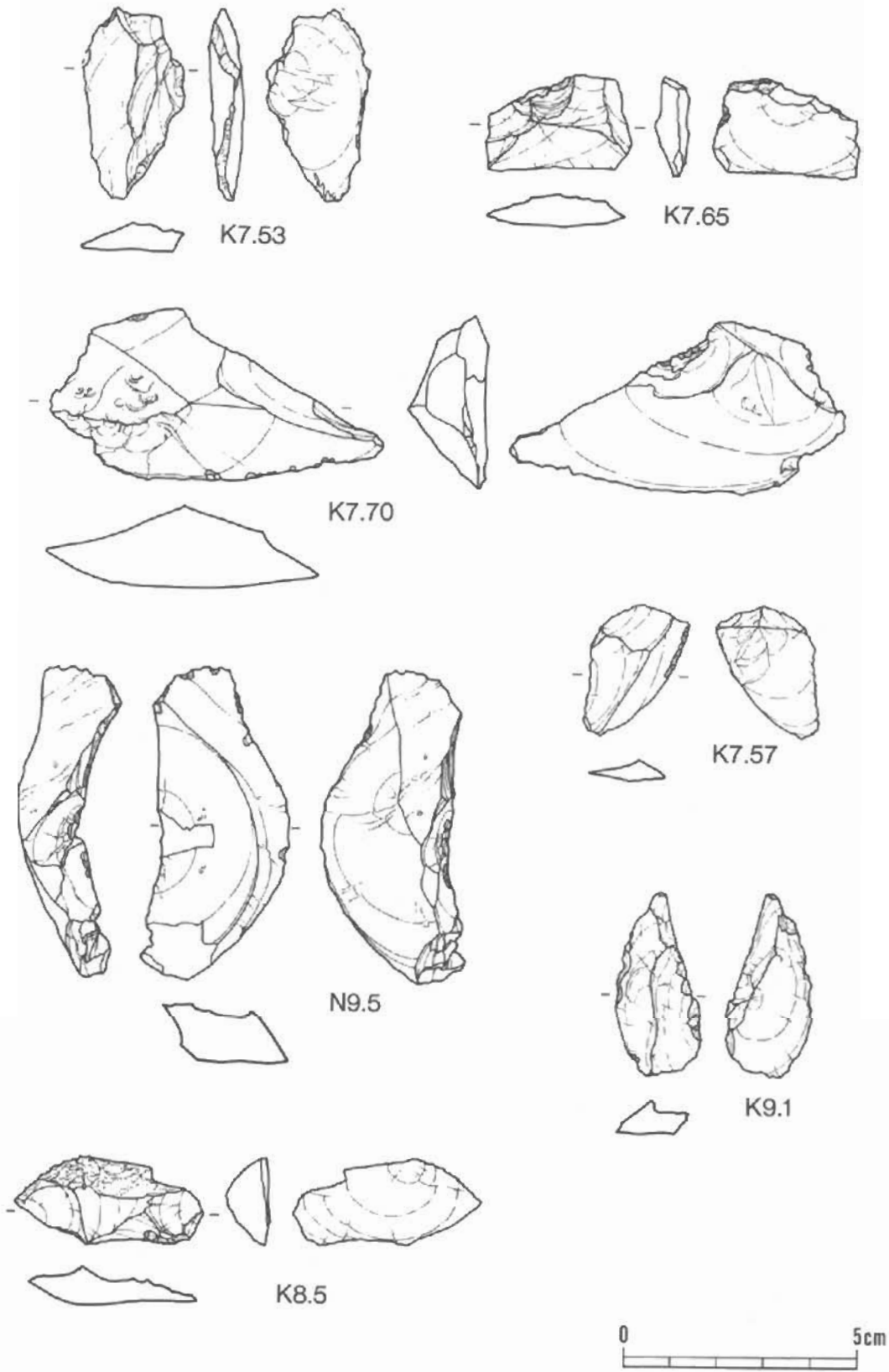


第96図 下位文化層使用痕有剥片実測図2

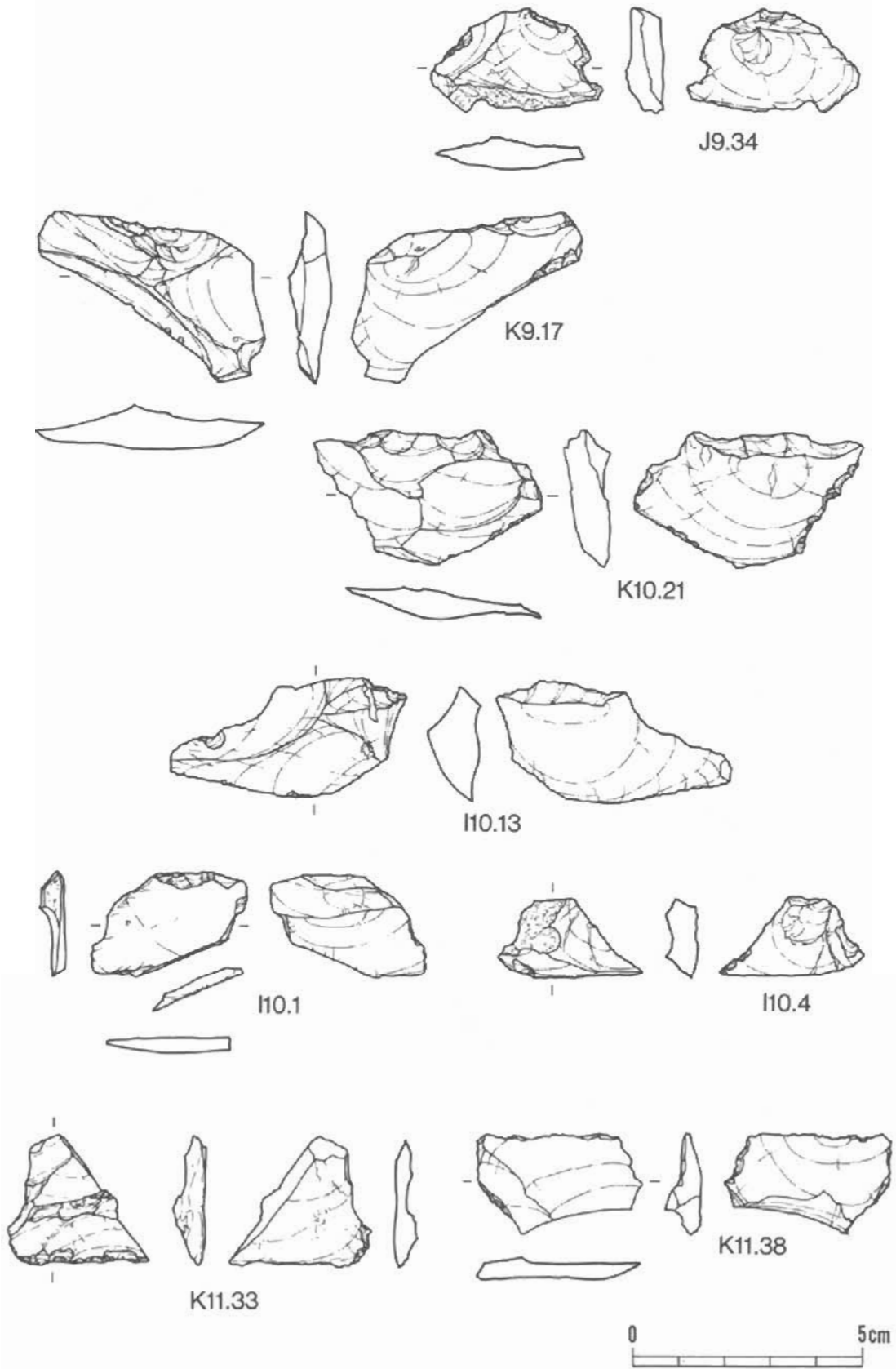


第97図 下位文化層使用痕有剥片実測図3

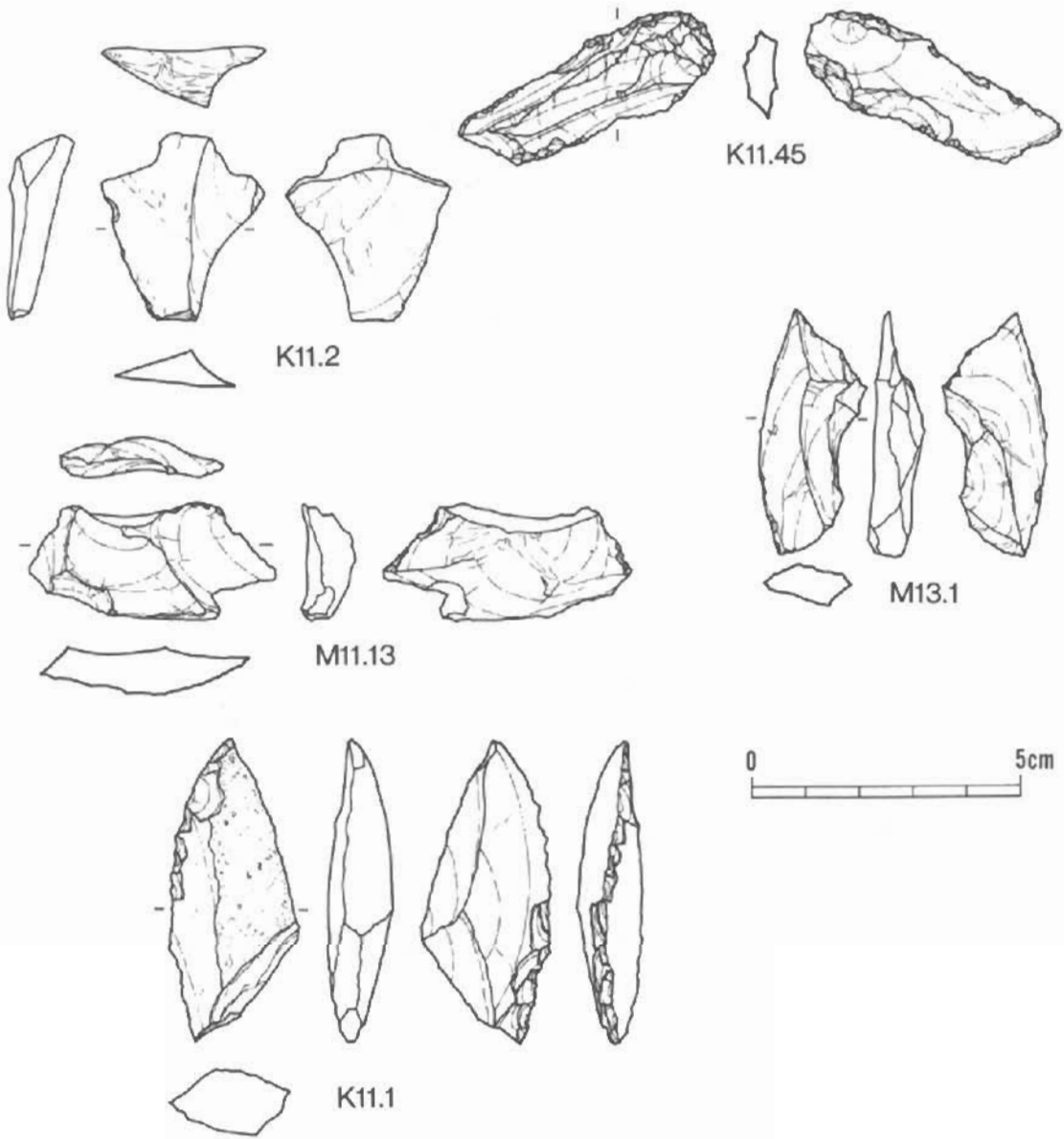
第2節 下位文化層の遺物



第98図 下位文化層使用痕有剥片実測図4

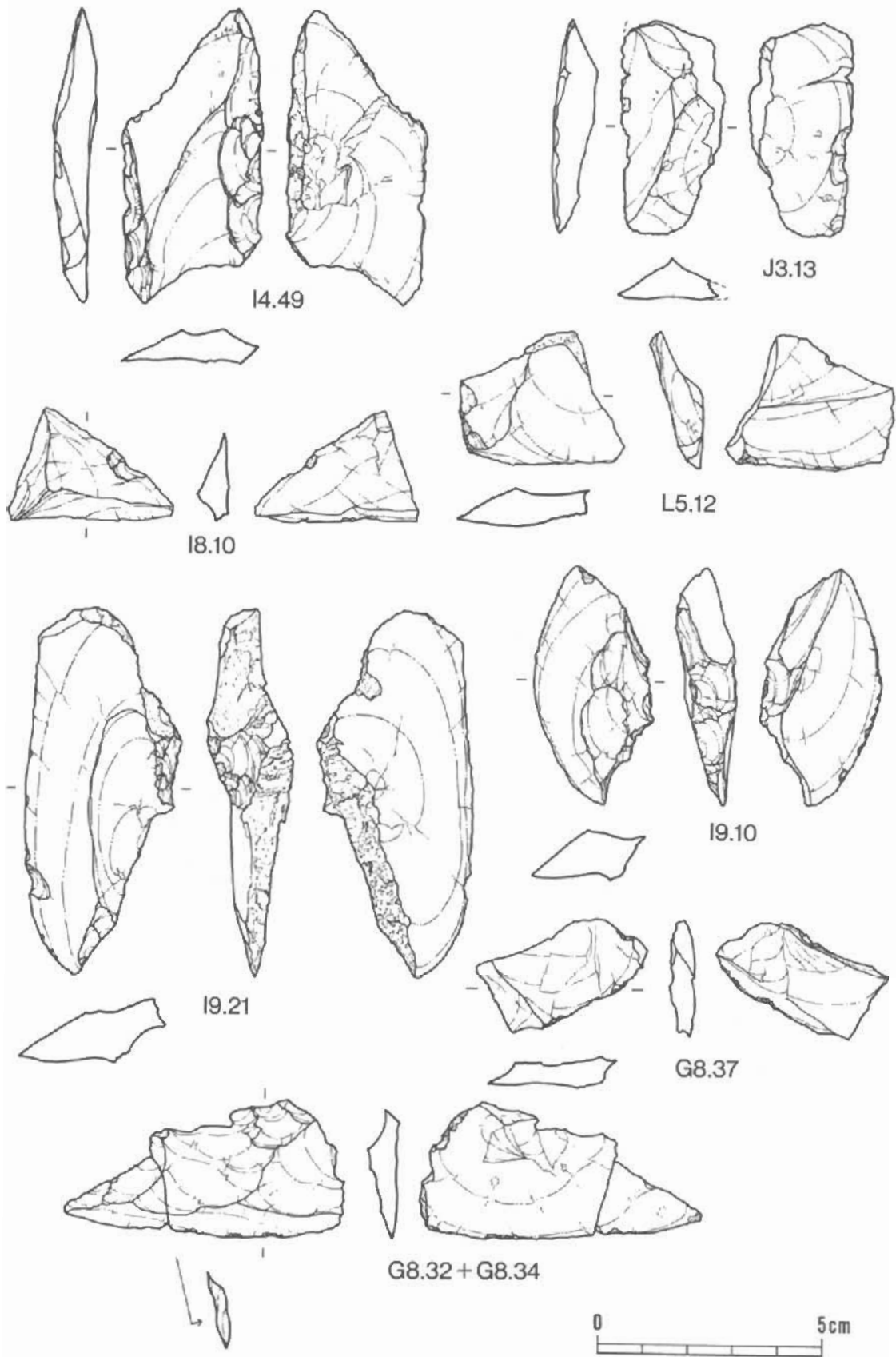


第99図 下位文化層使用痕有剥片実測図5

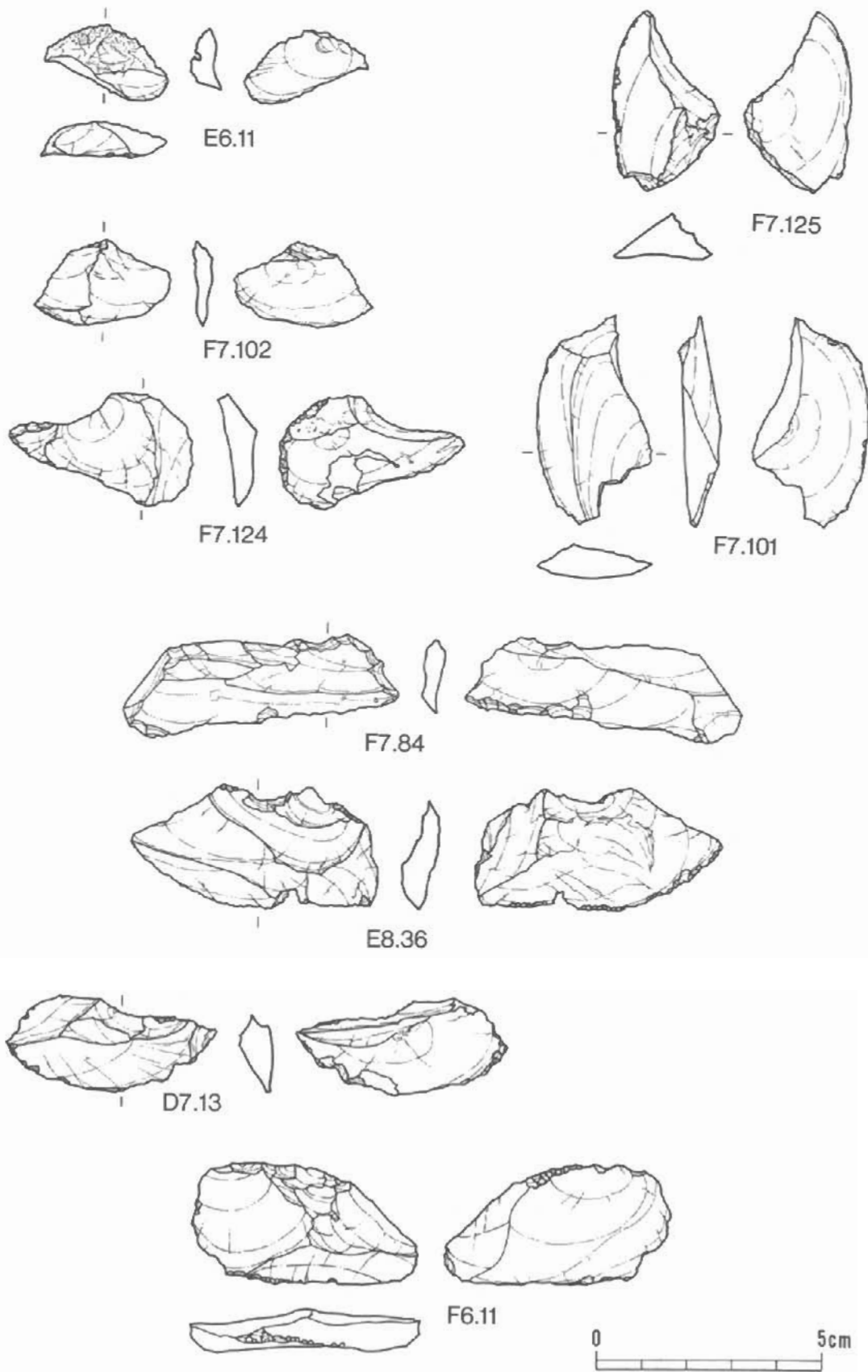


第100図 下位文化層使用痕有剥片実測図6

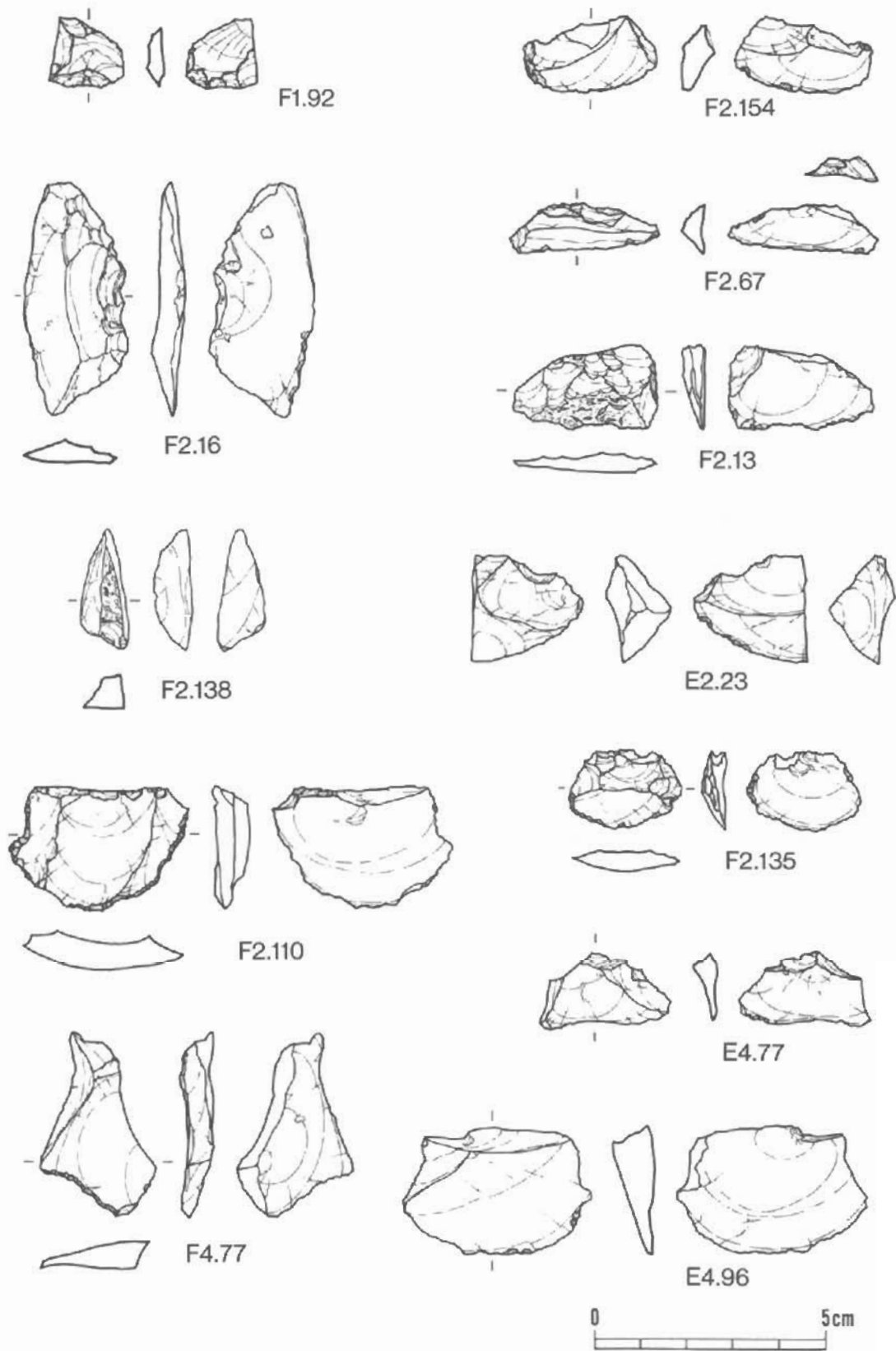




第101図 下位文化層使用痕有剥片実測図 7

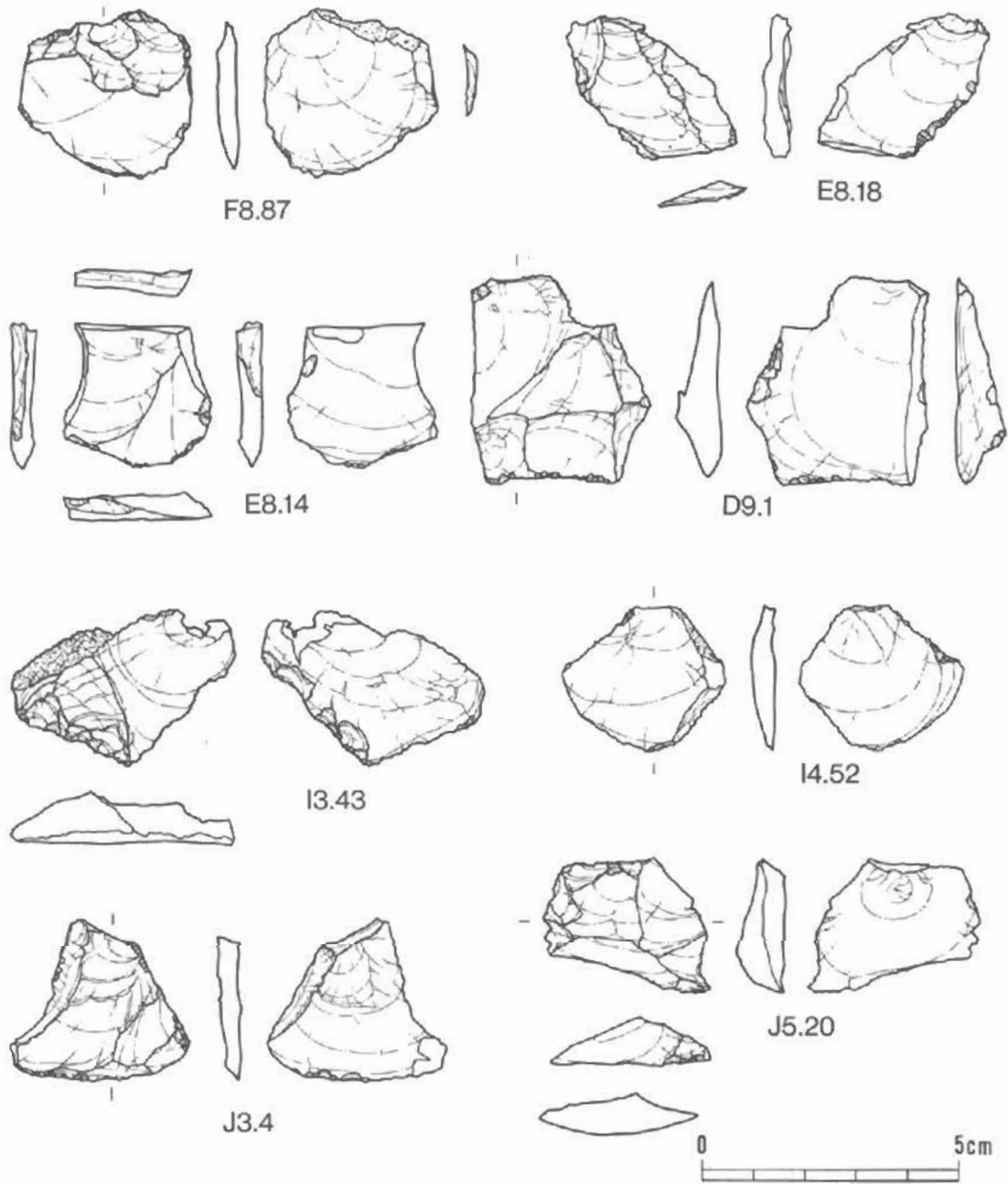


第102図 下位文化層使用痕有剥片実測図 8

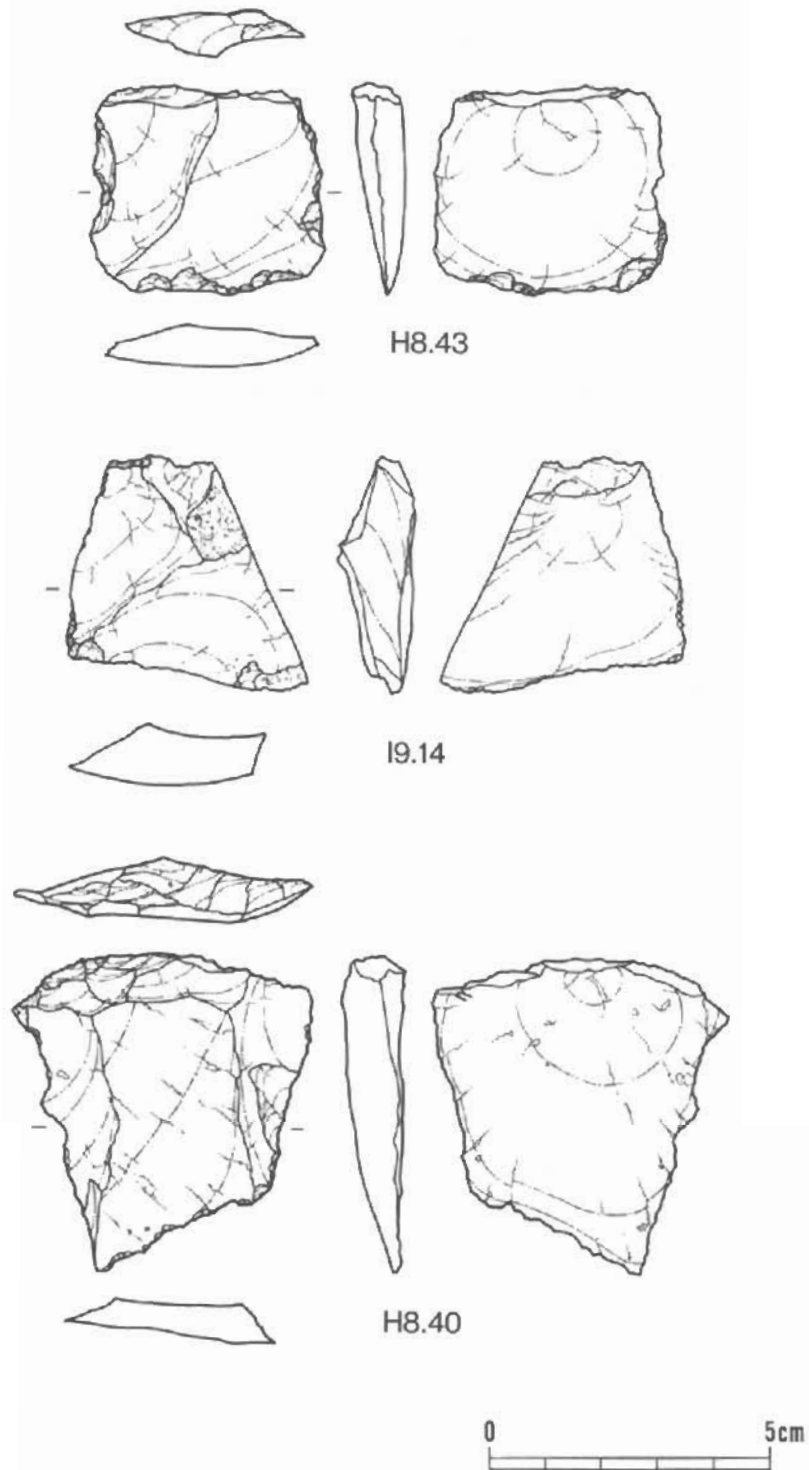


第103図 下位文化層使用痕有剥片実測図 9

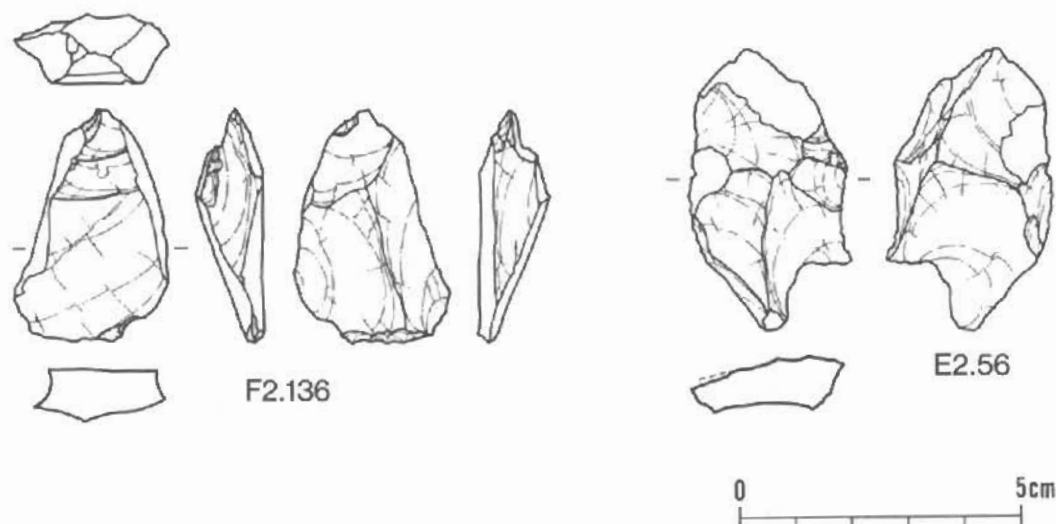
第2節 下位文化層の遺物



第104図 下位文化層使用痕有剥片実測図10



第105図 下位文化層使用痕有剥片実測図11



第106図 下位文化層使用痕有剥片実測図12

**長幅関係 (第117図)**

サヌカイト製 (図上) の全体の平均値 (図の○印) は長さ27.2mm、幅34.2mmである。図から分かるように、平均値は中間剥片の範囲にあるものの、横長剥片の範囲に近いところに存在する。一方、チャート製 (図下) の全体の平均値 (図の○印) は長さ32.6mm、幅28.7mmとなり、サヌカイト製の平均値の長さとお幅を逆にした数値に似ている。平均値は縦長剥片の範囲に近い。

**重量分布 (第118図)**

2g単位で個数をグラフ化した。サヌカイト製 (図上) は2g以上4g未満の27点、4g以上6g未満の26点をピークに、2g未満が15点、6g以上8g未満が14点となる。12g以上になると、どこも0-2点の範囲に収まる。平均重量は6.4gである。チャート製 (図下) もサヌカイト製と同様に、2g以上4g未満が最も多く23点を数える。2g未満は9点、4g以上6g未満は17点、6g以上8g未満は14点となる。平均重量は9.5gと重い。サヌカイト製にみられない32g以上の5点を除いて、平均値を計算すると7.6gになる。サヌカイト製とチャート製のグラフの傾きは、かなり似かよっている。

**形態別剝離角 (第119図)**

打面を残す剥片について、1度単位の計測を行ない、測定誤差を考慮して2度単位でグラフ化した。

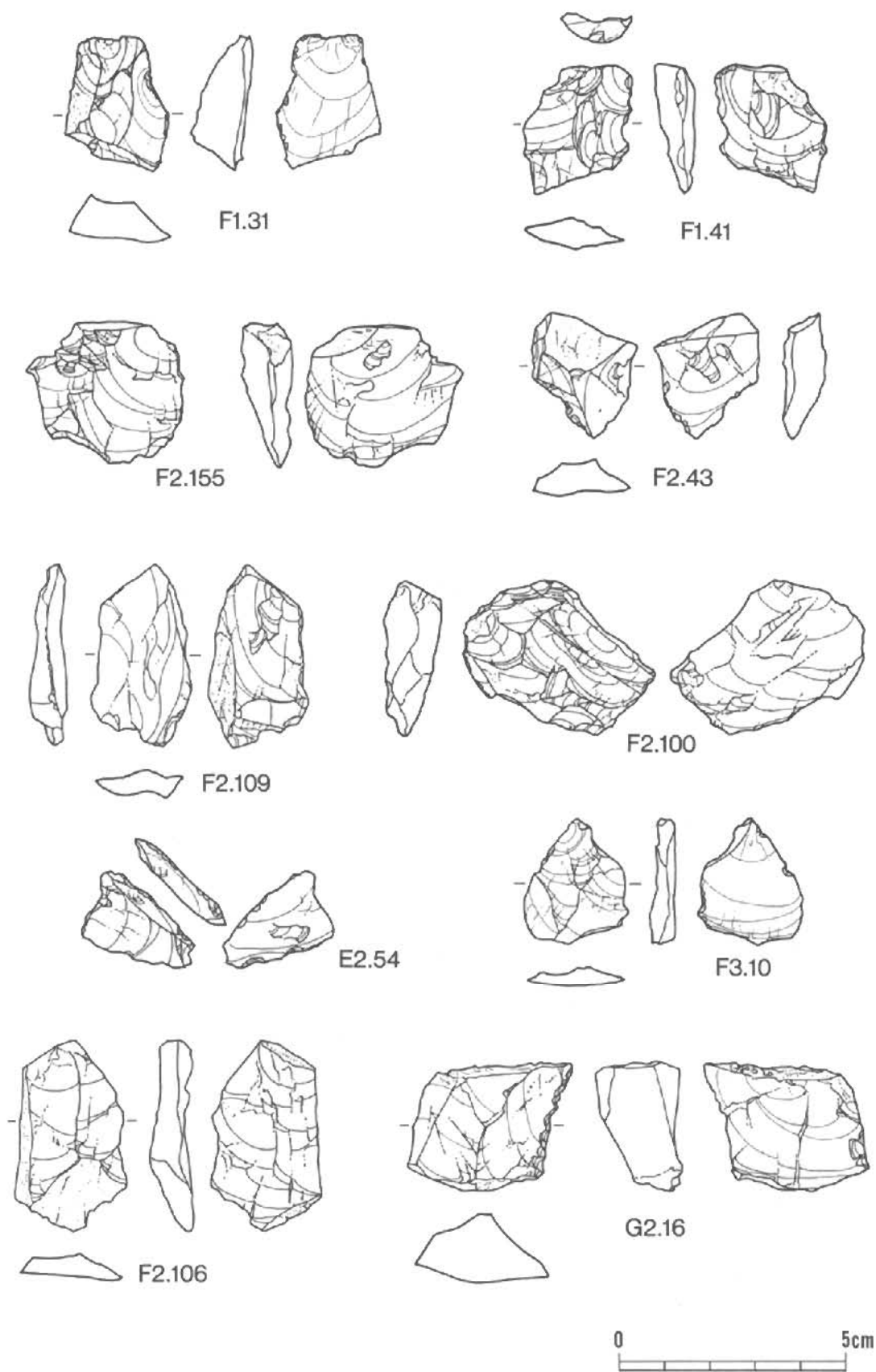
サヌカイト製 (図左) は計57点ある。縦長剥片は6点で平均値111.3度、中間値110度、中間剥片は24点で平均値114.6度、中間値119度となる。横長剥片は27点で平均値131.2度、中間値127度である。縦長剥片と中間剥片の平均値の差は約3度と小さいが、双方と横長剥片には大きな差がみられる。

チャート製 (図右) は計71点で、サヌカイト製に比して打面の残存率が高い。縦長剥片は12点で平均値108.5度、中間値107度となる。中間剥片は56点と多く、約80%を占める。平均値101.5度、中間値104.5度である。横長剥片は3点のみで、平均値112.7度、中間値119度となる。チャート製では縦長剥片が中間剥片より平均値、中間値において上回る。

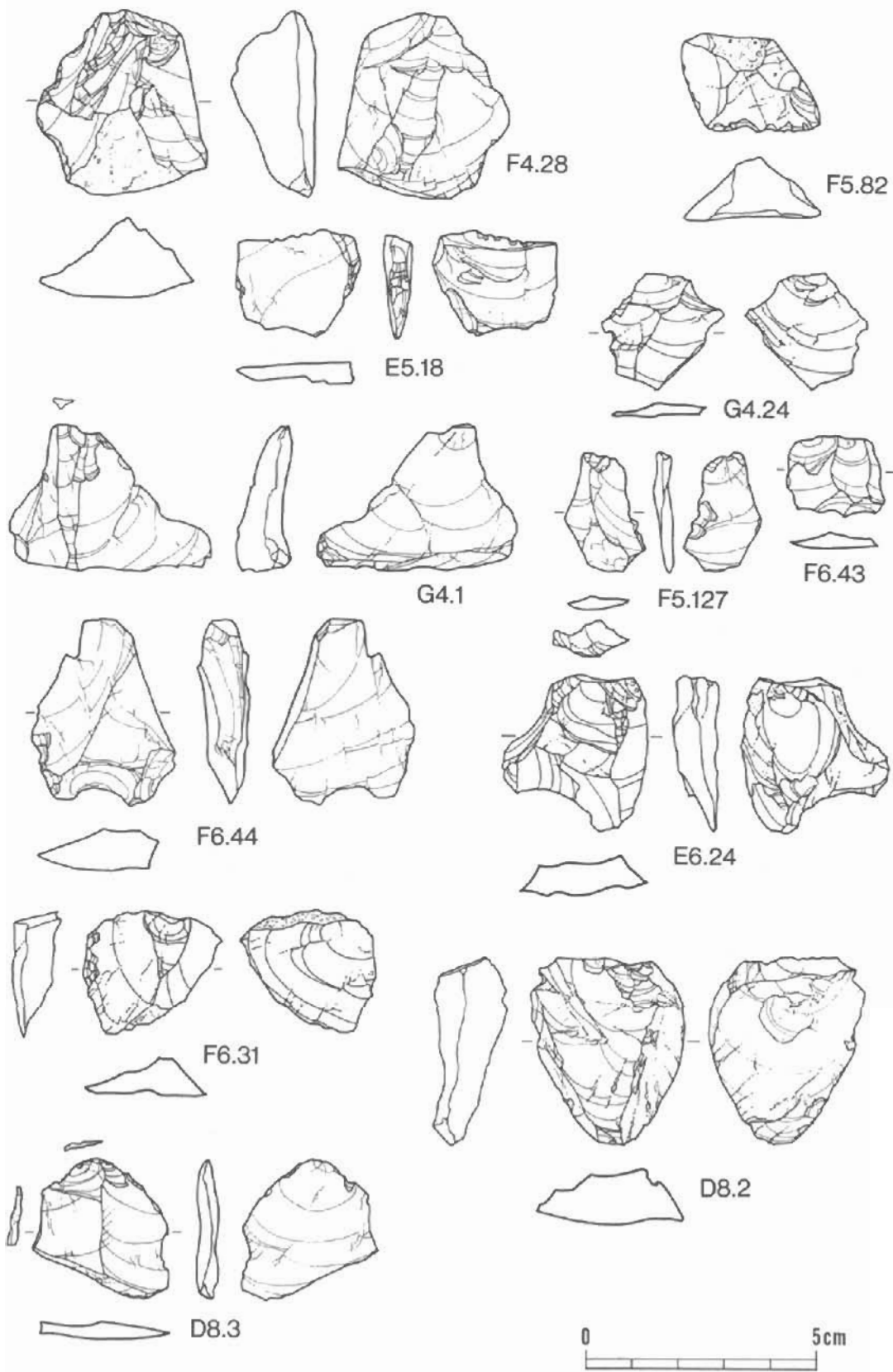
なお、判定不能の剥片はサヌカイト製3点、チャート製1点存在するが、グラフ化していない。

**形態・部位別刃部角 (第120図)**

使用痕の残る部位を左側縁、右側縁、末端縁、「その他」に分類し、形態ごとにグラフ化した。各グラフの左側は末端縁の刃部角、右側は左右両側縁、「その他」を合わせた刃部角の分布を表す。なお、形態の判定不能な剥片に関しては、グラフ化するものの記述はしない。

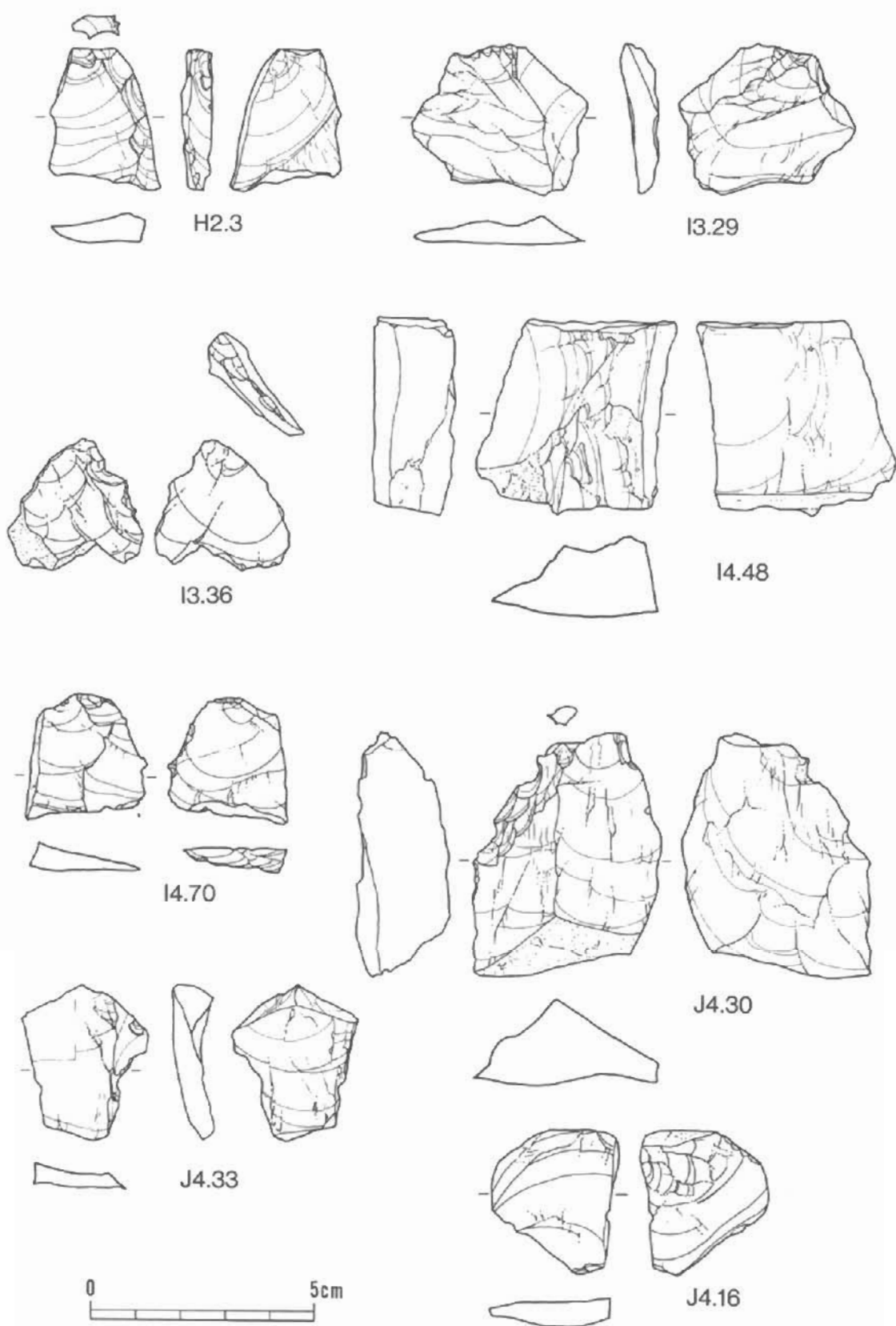


第107図 下位文化層使用痕有剥片実測図13



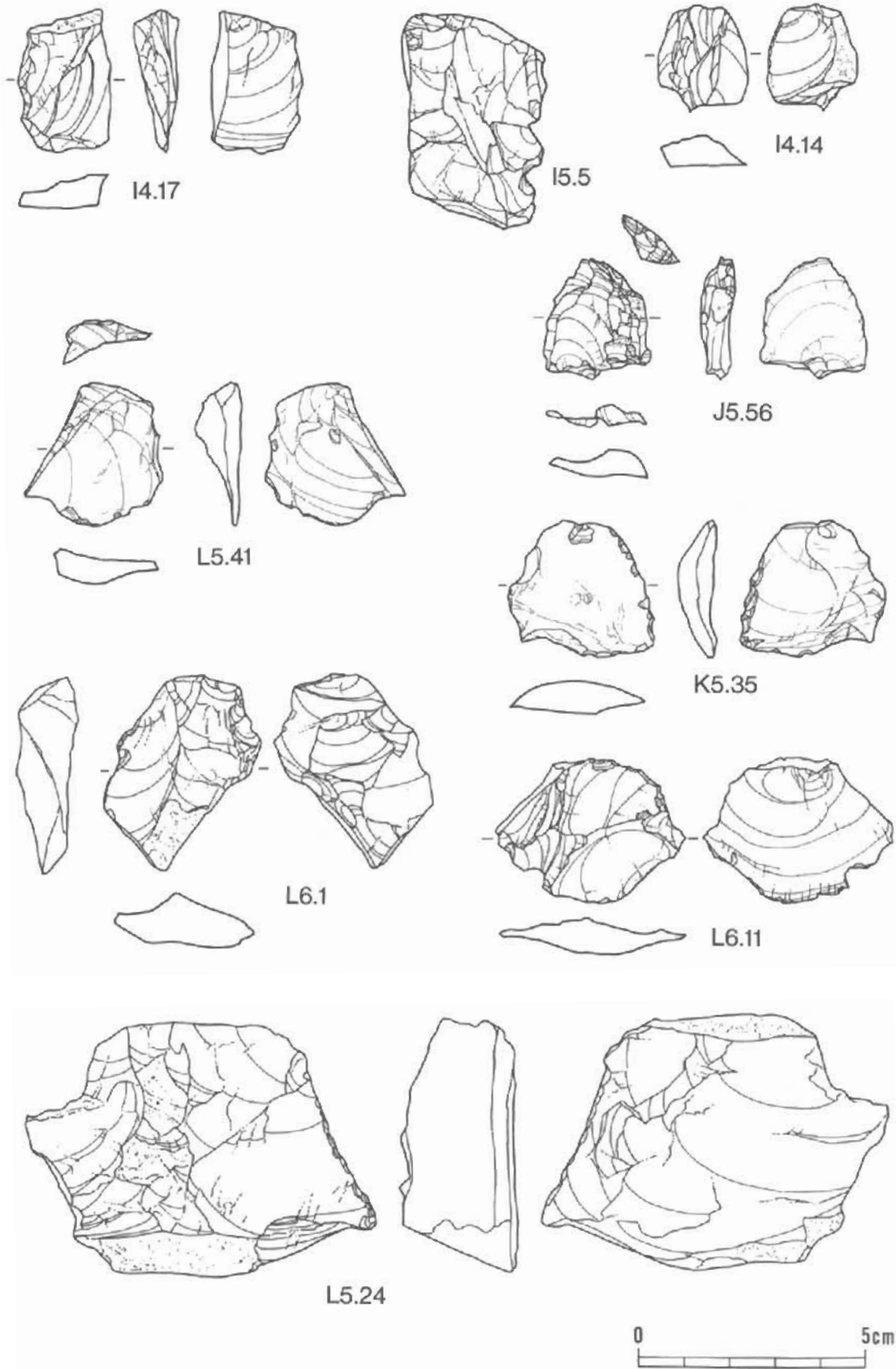
第108図 下位文化層使用痕有剝片実測図14



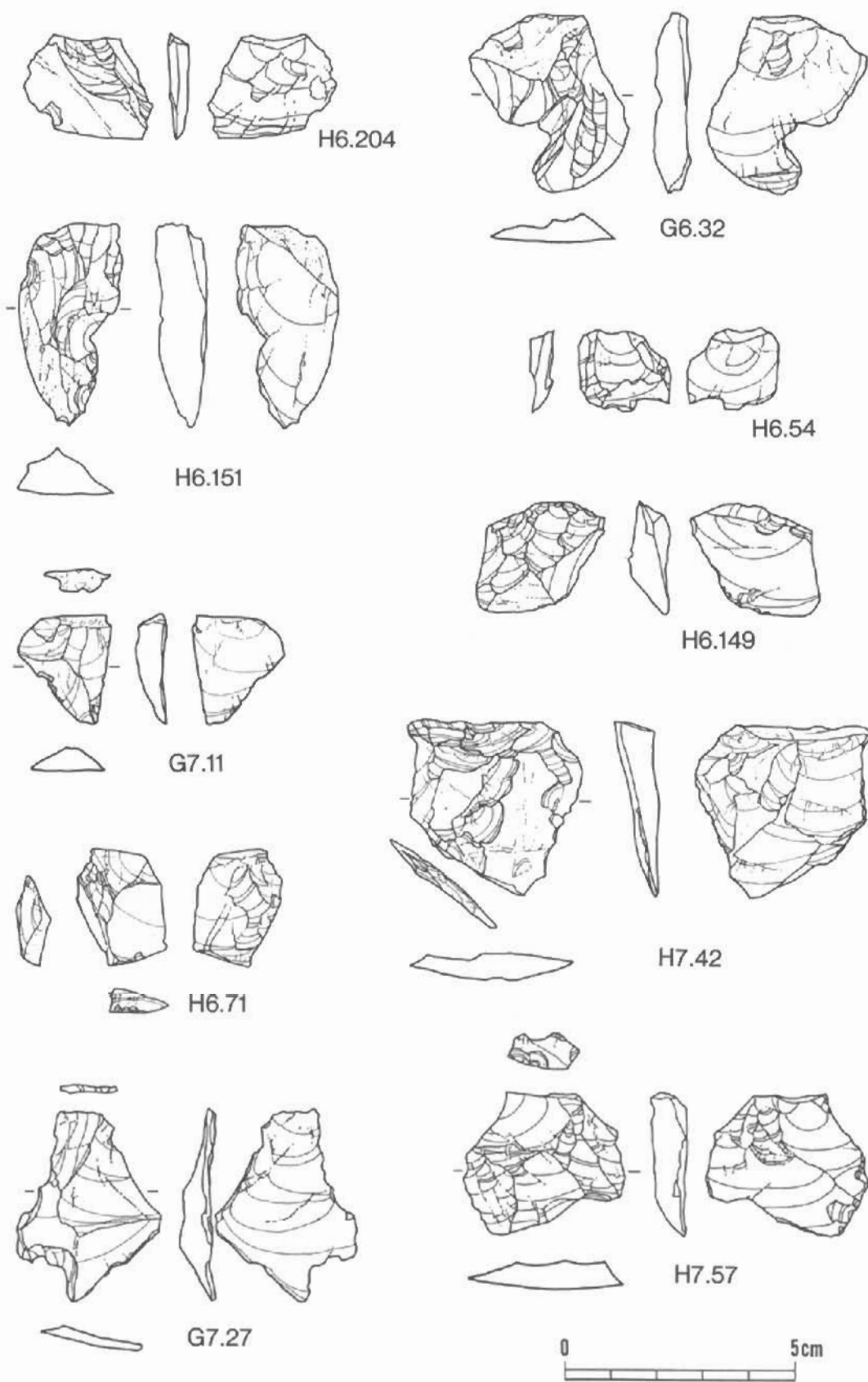


第109図 下位文化層使用痕有剥片実測図15

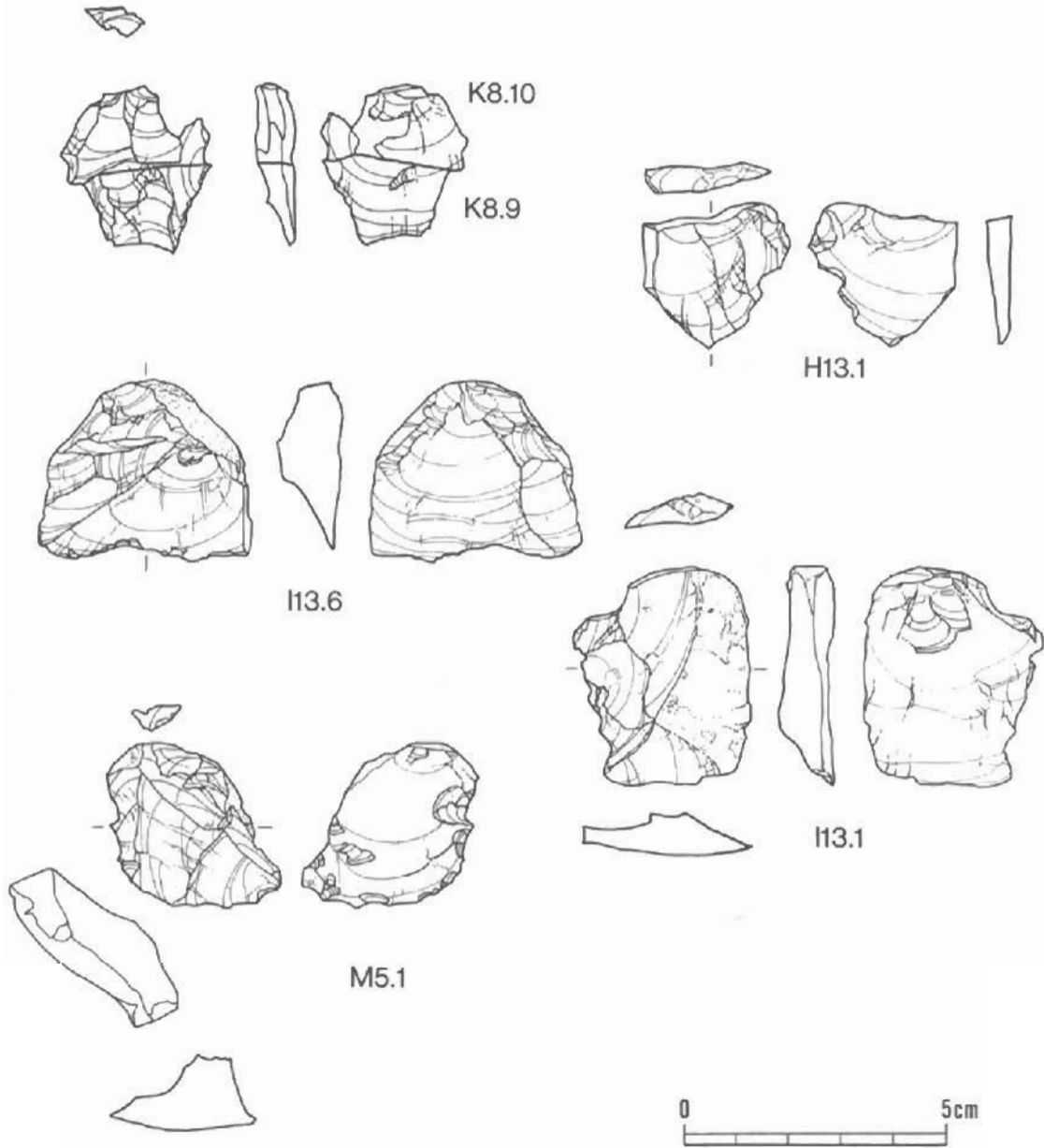
第2節 下位文化層の遺物



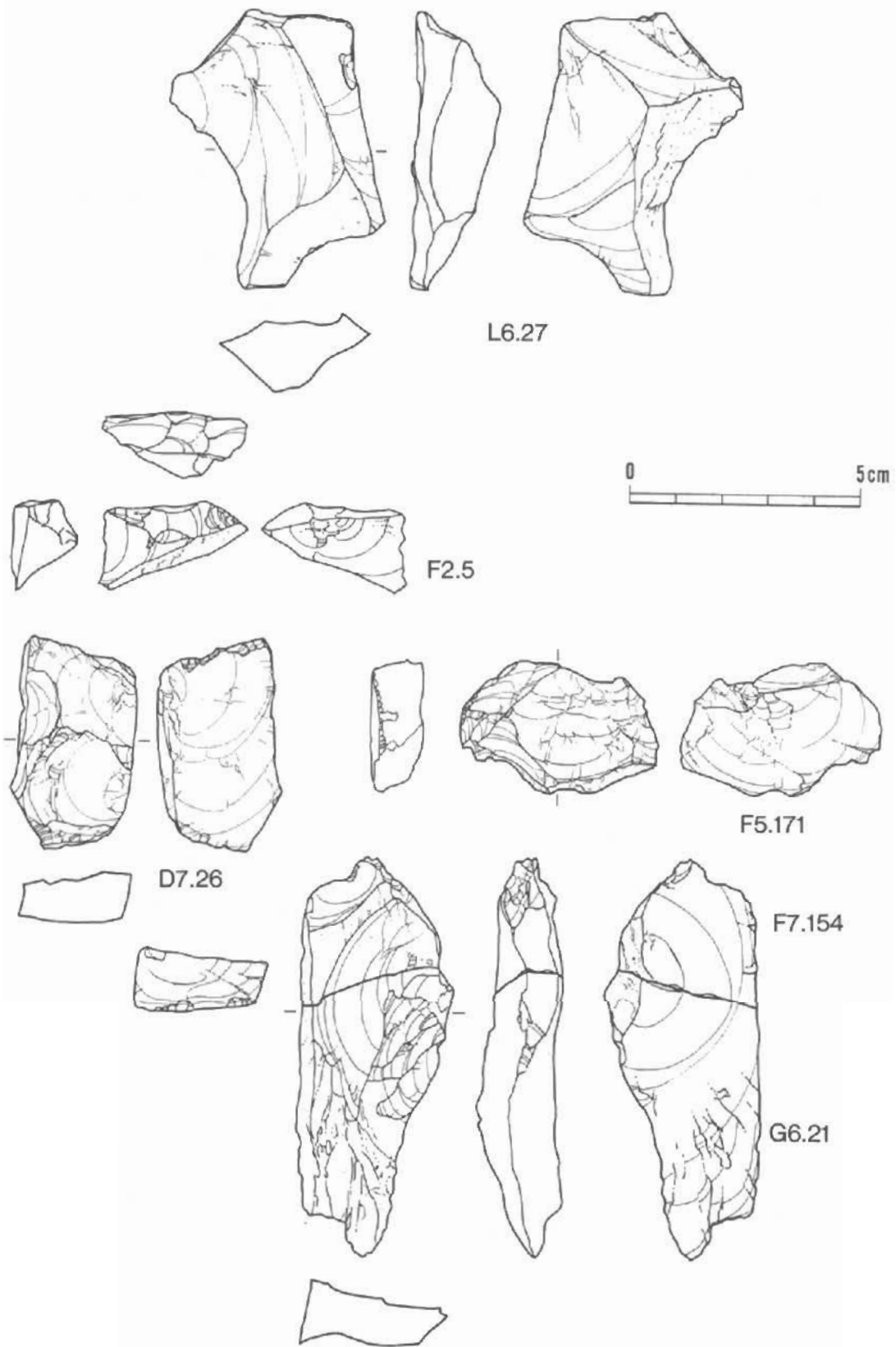
第110図 下位文化層使用痕有剥片実測図16



第111図 下位文化層使用痕有剥片実測図17

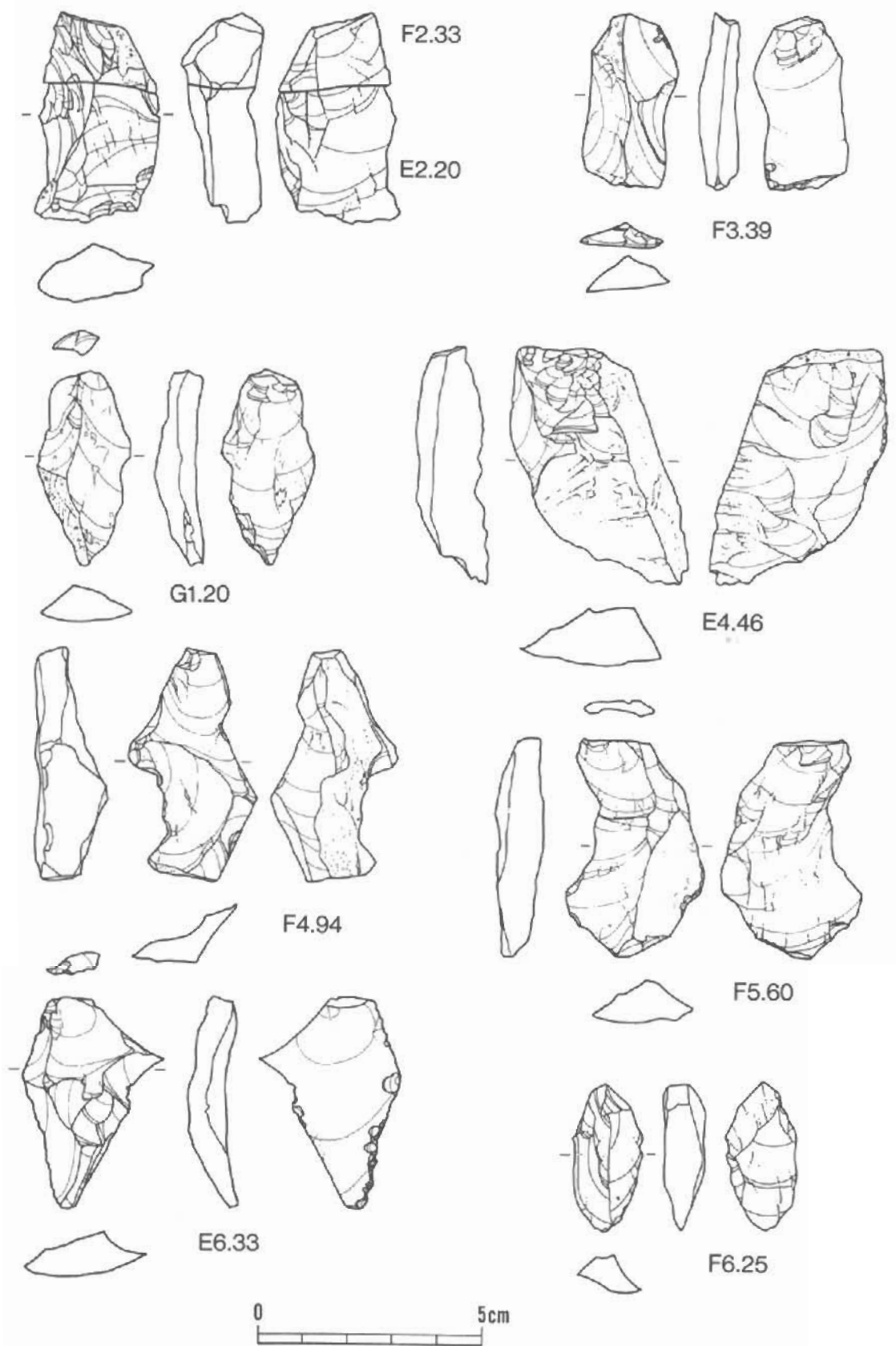


第112図 下位文化層使用痕有剥片実測図18

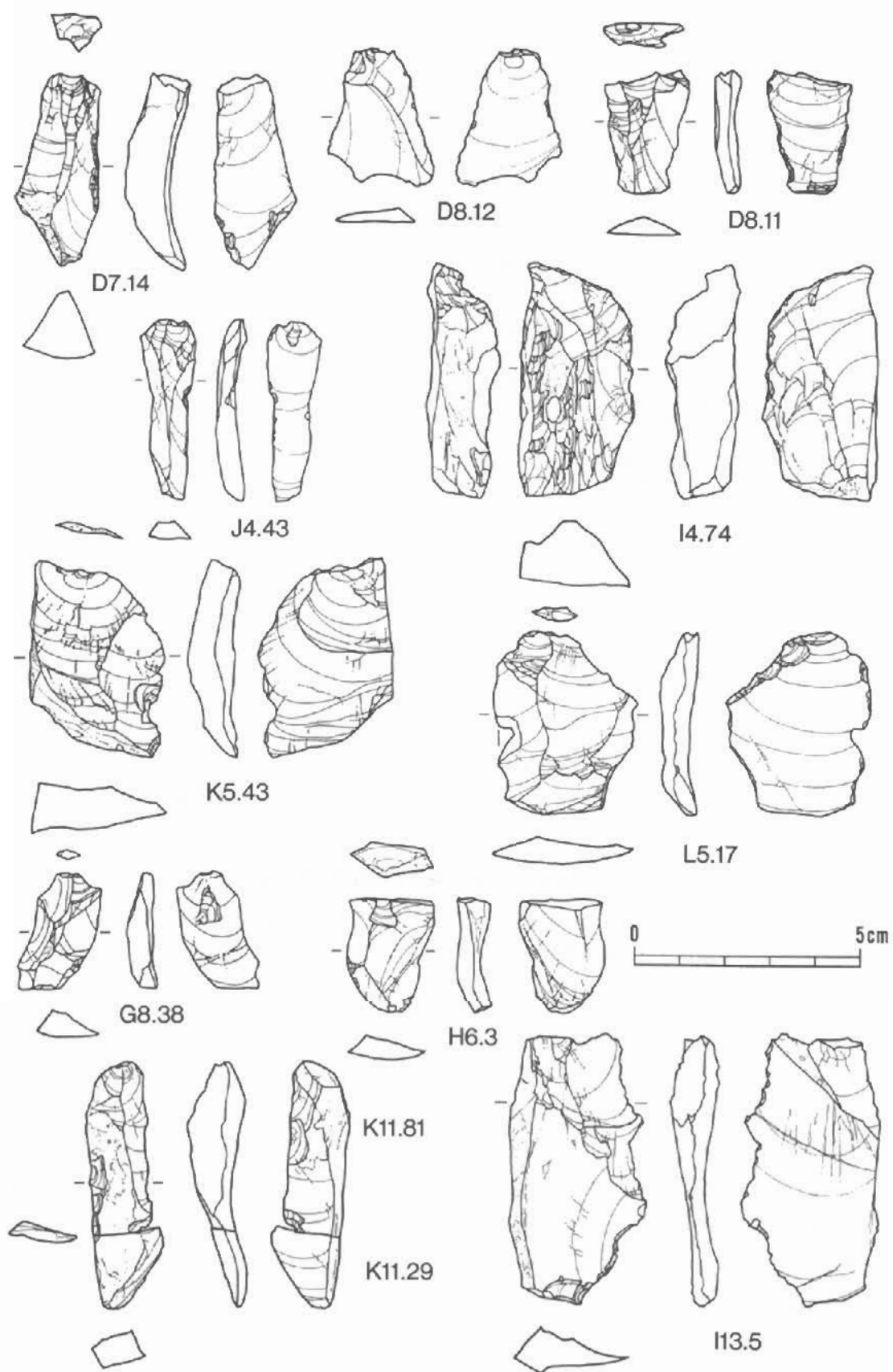


第113図 下位文化層使用痕有剥片実測図19

第2節 下位文化層の遺物

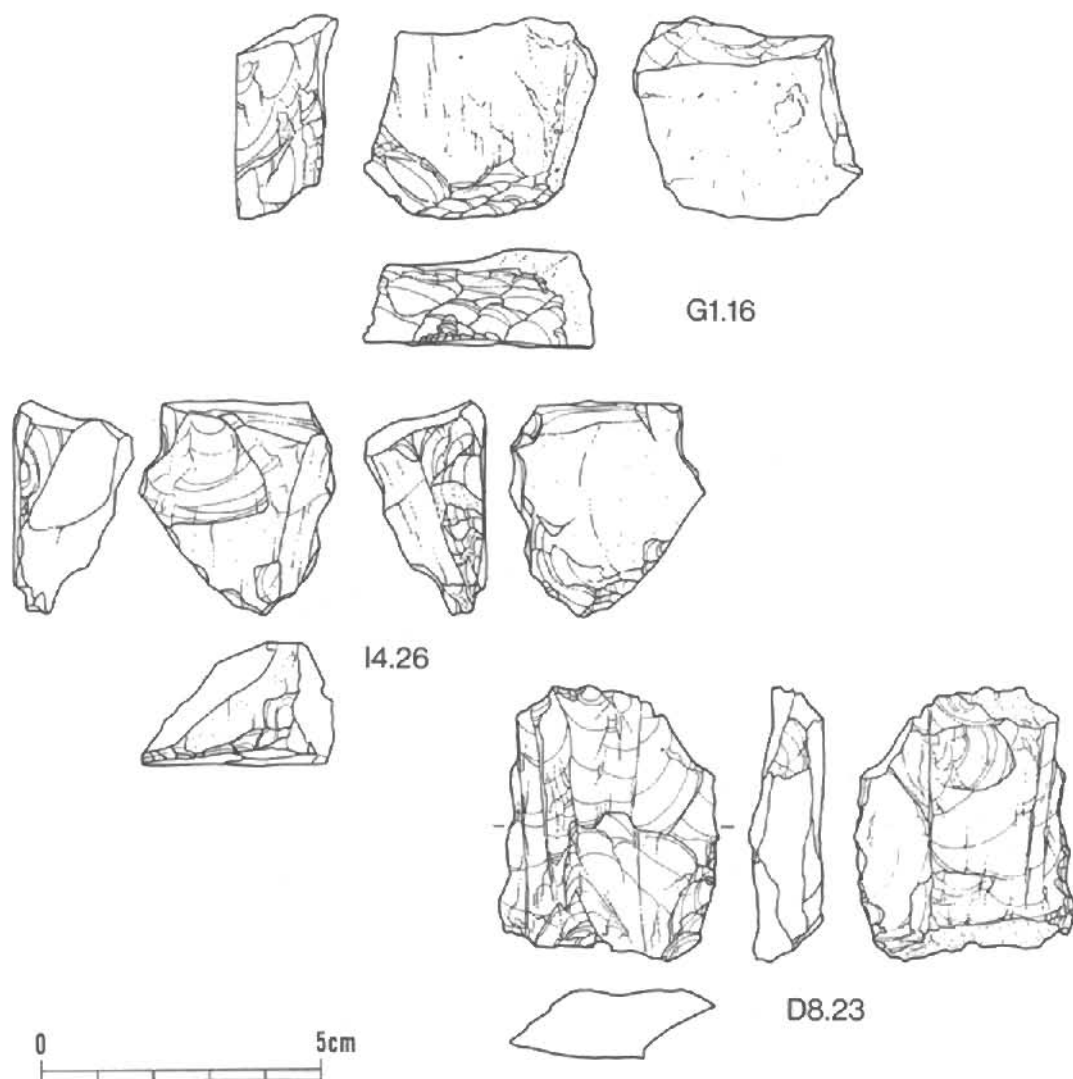


第114図 下位文化層使用痕有剥片実測図20



第115図 下位文化層使用痕有剥片実測図21

第2節 下位文化層の遺物



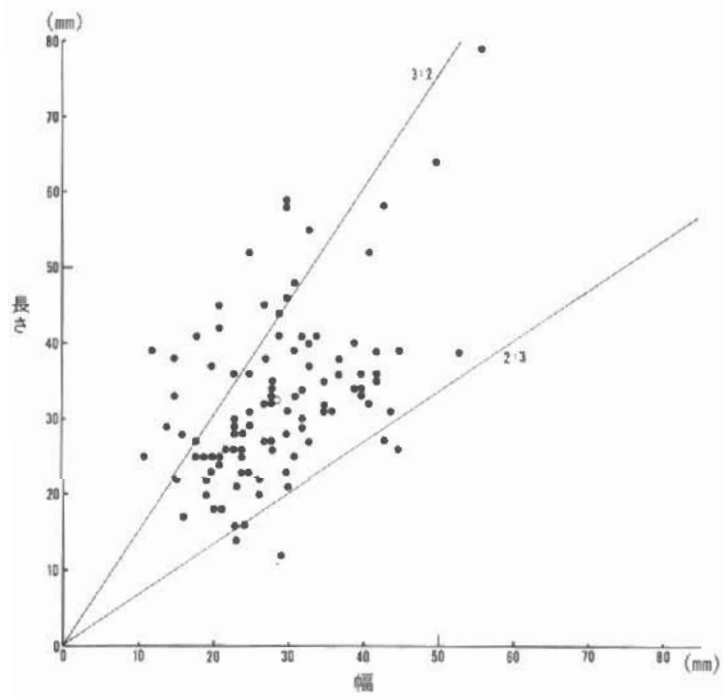
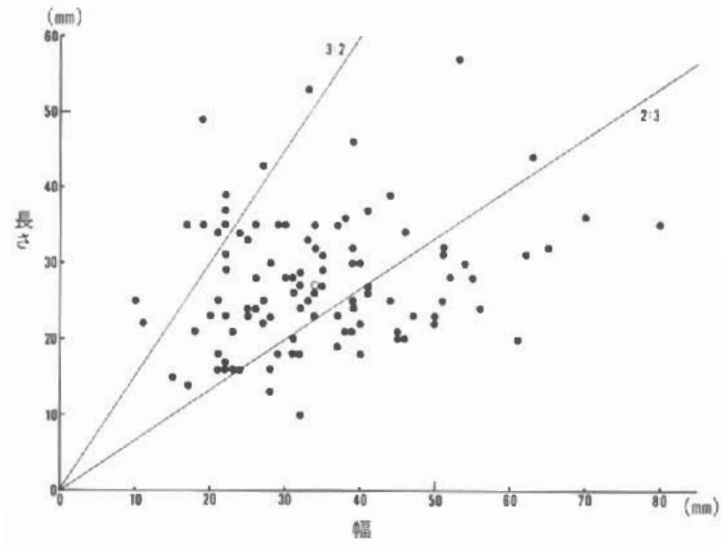
第116図 下位文化層使用痕有剥片実測図22

ここでの目的は、一体どれくらいの角度をもつ刃部が、意図的無意図的に選択されているのか、また剥片の形態により使用部位が選択され得るのかを少しでも知ることにある。前者に関して刃部角の分布にまとまりやばらつきがある場合、①機能・用途の違いを反映している、②角度が一定範囲内に収まる刃部であるなら、機能・用途の違いに関係なく使用した結果を表している、と理解できよう。後者については、具体例を示せば“縦長剥片なら刃部の安定している左右両側縁を選択して使用する”傾向があるかどうかの答えを得ることが可能である。

サヌカイト製の縦長剥片では、左右両側縁18辺に使用痕を残し、平均値35.9度、中間値34度である。ピークは46度にあるが、特にある角度に集中するということはなく、約20-60度に万遍なく存在する。末端縁に使用痕を残すのは、1辺のみで何とも言えない。中間剥片は左右両側縁45辺で平均値39.8度、中間値37度となる。ピークは48度に存在するものの、20度と60度にも小ピークがある。しかし、縦長剥片同様極端な集中を示さず、約20-70度に収まる。10度単位では19-28度と29-38度が11辺と最も多い。末端縁は23辺あり、平均値42.2度、中間値35度をはかる。約20-92度の広範囲に分布するが、92度の1辺を除けば、平均値40度、分布範囲は約20-70度になる。2度単位のグラフでは分布に目立った傾向はみられないが、10度単位でグラフを読みとれば、21-30度に集中することが分かる。横長剥片は左右両



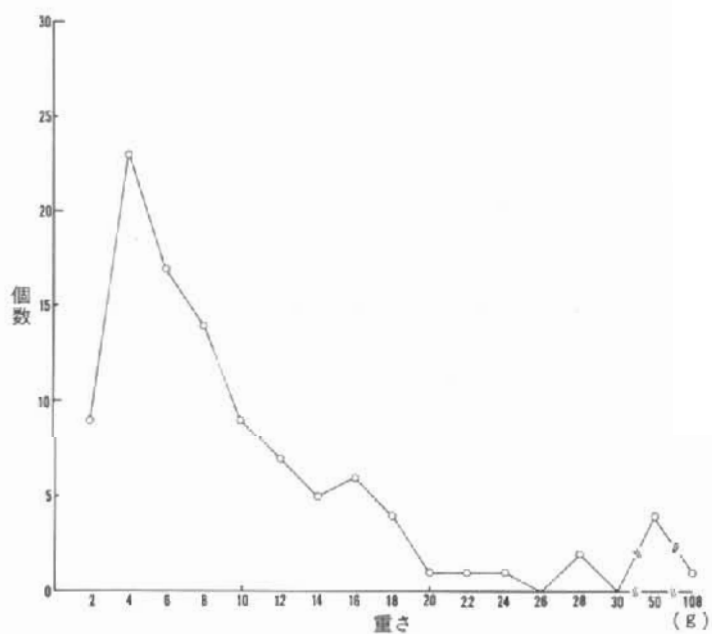
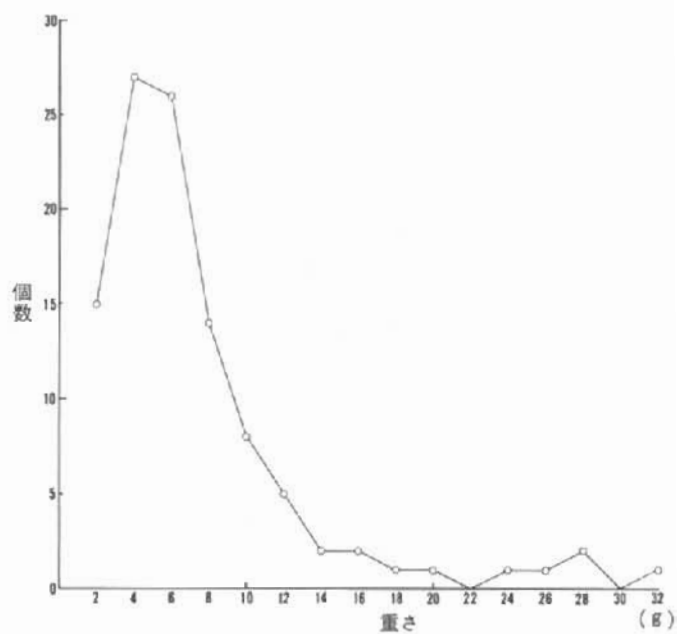
第IV章 下位文化層の調査



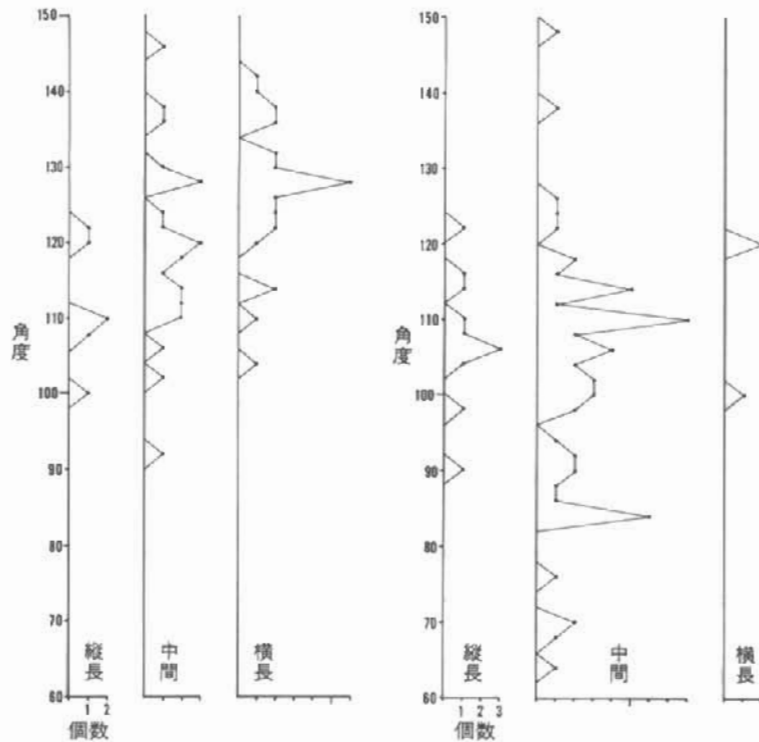
第117図 使用痕有剥片長幅比 サヌカイト(上)、チャート(下)

○ = 平均値

第2節 下位文化層の遺物



第118図 使用痕有剥片重量分布図 サヌカイト(上)、チャート(下)



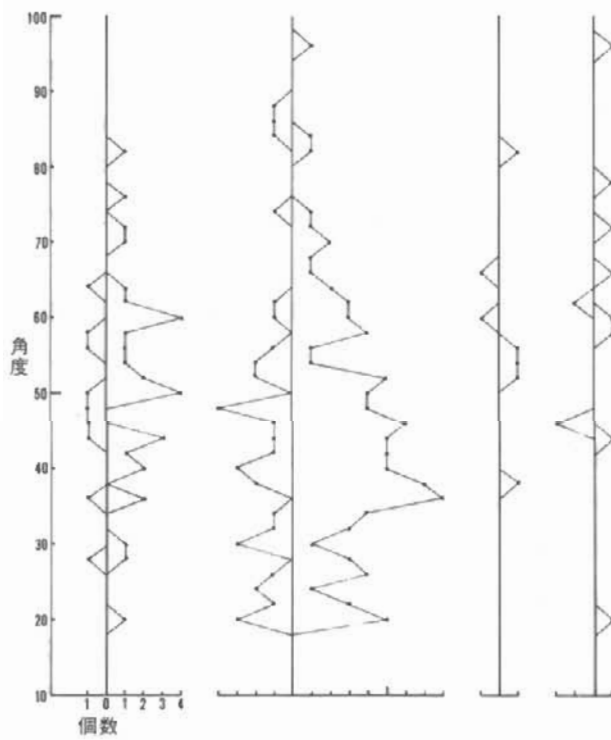
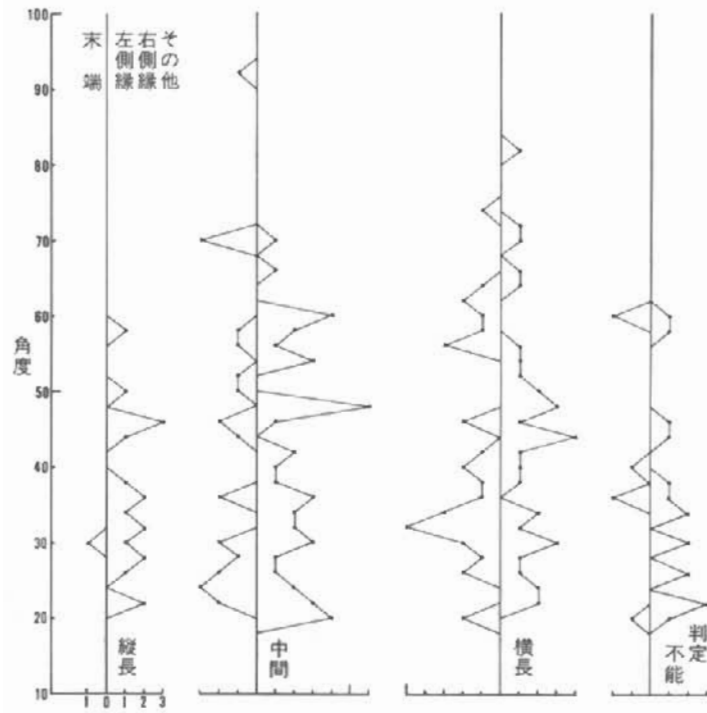
第119図 使用痕有剥片形態別剝離角 サムカイト(左)、チャート(右)

側縁、「その他」合わせて31辺に使用痕が認められ、平均値45.9度、中間値43度である。「その他」5辺を除外すると平均値は43.8度となる。分布範囲は約20—80度で、これといった集中はみられないが、概ね50度以下に分布の中心があり、その範囲で10度単位で辺数を計算すると、21~30度が9辺、31~40度が5辺、41~50度が11辺となる。次に末端縁は辺数31で、平均値40.8度、中間値36度を示す。分布範囲は約20~70度で、辺数を10度単位でみると25~34度が13辺、55~64度が8辺となり、25~34度にある程度集中している。

チャート製の縦長剥片の左右両側縁に使用痕をとどめるのは30辺で、平均値50.8度、中間値50.5度を示し、双方の数値がほぼ等しい。ピークは50度と60度に、小ピークが44度に存在する。10度単位で分布をみると、41~50度が8辺、51~60度が9辺、他の範囲では4辺以下で41~60度の範囲が分布の中心であることが理解できる。末端縁は9辺で平均値47.6度、中間値48度ををはかる。分布に偏りはみられない。中間剥片の左右両側縁、「その他」は96辺にのぼる。平均値44度、中間値42度で、「その他」5辺を除いても平均値43.8度である。分布のピークは36度のところにあり、しかも比較的広範囲に小ピークが存在することから、分布の集中範囲は視覚的に捉えにくい。10度単位でみると24度以下が9辺、25~34度が15辺、35~44度が30辺、45~54度が20辺、55~64度が13辺、65~74度が9辺となり35~44度に最も集中する。末端縁は辺数35で平均値43.9度、中間値42度を示す。これといった集中部はなく、10度単位でも同じであった。横長剥片の左右両側縁は辺数5で平均値56.2度、中間値44度で、双方の値に約10度の開きがあるが、これは資料数に換るものであろう。末端縁は2点のみで平均値、中間値とも63度である。

以上、形態・部位別刃部角について述べてきたが、刃部角の分布において明瞭な集中部はみられなかった。ただし、10度単位でみた場合サムカイト製では中間剥片の末端縁、チャート製では中間剥片の左

第2節 下位文化層の遺物



第120図 使用痕有剥片形態別・部位別刃部角 サヌカイト(上)、チャート(下)

右両側縁に明瞭な集中部が存在する。こうした刃部角の分布状況の理解としては、先に示したように①、②が複雑に組み入っていると考えられよう。また、チャート製が各形態の部位の平均値、中間値においてサヌカイト製を上回る。双方にみられる刃部角の違いは、同一器種内では石材によって対象物、機能・用途が異なることがない可能性が高いと考えるならば、両石材の剥片剥離技術の違いに起因すると思われる。

次に、剥片の形態によって部位が選択され得るかという問題がある。これは使用痕の残る左側縁、右側縁の合計と末端縁の比率が2：1の状態を選択の意志が働いていないとするなら、サヌカイト製では縦長剥片（18：1）が左右両側縁、横長剥片（26：31）が末端縁を、チャート製では縦長剥片（10：3）、中間剥片（91：35）がともに左右両側縁を、意図的無意図的に関わらず選択していることになる。

石核や石核分割材を利用したものについて若干の記述をしておく。

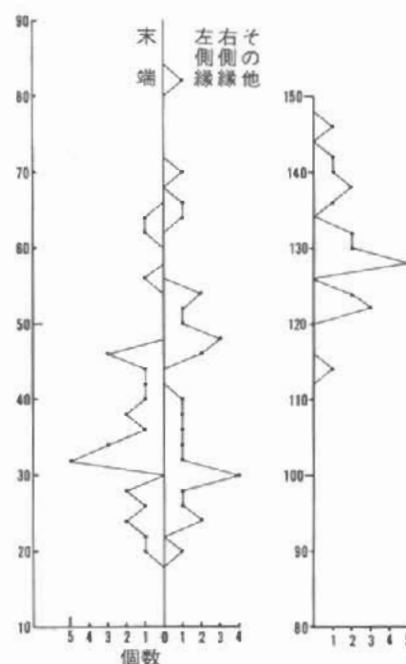
サヌカイト製のF2.136（第106図）は石核分割材に残るポジティブ面の一端に使用痕をとどめる。E2.56（第106図）は裏面の右側に使用痕を残す。チャート製のG1.16（第116図）は数枚の剥離面上に微小な使用痕を、I4.26（第116図）は節理面上に使用痕をそれぞれ残す。D8.23（第116図）は裏面の右側に連続的に使用痕をとどめる。

ところで、使用痕有剥片はその名の通り剥片が素材であるが、目的剥片にとどまらず非目的剥片が使用されているのは周知のことである。しかし、石核（残核）や石核分割材に使用痕を残すものについては、あまり注意されていない。この点は、加工痕有剥片でも同様である。土生池遺跡（吉備町教育委員会、85）では加工痕を残す石核、匂坂上4遺跡（磐田市教育委員会、89）では使用痕をとどめる石核が報告されている。再利用される石核や石核分割材は、本来のその器種の役割とは違う役割を果たすのであり、そこには使用痕有剥片と何らかの共通点があるといえ、今後注意せねばならない。

以上、使用痕有剥片の諸属性を検討してきた。最後に、使用痕有剥片全体のまとめを行なっておきたい。

まず、サヌカイト製とチャート製では、素材剥片の形態、平均重量、剥離角（中間剥片で顕著）において相違がみられた。これは、サヌカイトとチャートの間にみられる剥片剥離技術の違いを反映するものであり、使用痕有剥片の観察から一方的に剥片剥離技術全体を純粹に表すことはできないものの、その生産物である剥片の属性の違いが剥片剥離技術の相違を決定、保証することになる。

次に、使用痕有剥片の属性から使用に際して一体如何なる選択がなされたのかを前の分析と重複する部分もあるがまとめておく。形態部位別刃部は、どれくらいの角度が選択されたか、素材剥片の形態・特徴によって使用部位が選択されたのか、それとも特に意図的な選択はなされなかったのかを知るために2度単位で刃部角の分布をグラフ化した。しかしながら、2度単位のグラフでは明瞭なまとまりを見いだせず、10度単位にまとめなおしたところ、サヌカイト製では中間剥片の左右両側縁および末端縁、チャート製では中間剥片の左右両側縁に明瞭な集中部の存在することが分った。両石材の左右両側縁の



第121図 底面付着剥片・使用痕有剥片  
部位別刃部角(左)・剥離角(右)

集中部は10度以上にわたって形成されるものである。既に刃部角と操作の間には相関のあることが知られているが、梶原氏は座散乱木遺跡8層上面の資料を分析する中で、折断(Cutting)、削り(Whitting)、掻き取り(Scraping)の刃部角の分布・集中の範囲を導き出している(梶原、81)。その結果によれば、折断と掻き取りの刃部角の差は明瞭である。また削りと掻き取りの集中範囲は共に10°以上にまたがる。

こうしたことから、前段でも述べたように、①機能・用途の違い、②角度が一定範囲内に収まる刃部であるなら機能・用途の違いに関係なく使用した結果、が複雑に刃部角の分布に反映していると考えられる。

部位の選択性については、サヌカイト製、チャート製とも選択の意志が働いている。サヌカイト製では縦長剥片が左右両側縁、横長剥片が末端縁を、チャート製では縦長剥片、中間剥片とも末端部を選択していることから、刃部の長さや安定度が関連していると思われる。

大きさ(重さ)の選択性については、底面付着使用痕有剥片と底面付着剥片の長幅関係、重量分布をみる限り、それぞれの分布範囲が異なり、大きさ(重量)が素材剥片を選択する際の一基準となっていることが認識できる。

よって、本遺跡での使用痕有剥片から看取できる選択性は、①刃部角、②使用部位、③大きさ(重量)に大きくまとめられる。この結果は、藤野氏が寺谷遺跡(鈴木編、80)の使用痕有剥片を分析した結果に符合するものである。また、今回行なった属性観察は、“使用痕の残る剥片・石器類”を対象としたものであり、“剥片・石器類に残る使用痕”を対象とする使用痕分析とは異なり、最初から限定のある分析であった。しかし、石器全体に占める割合が高い以上、使用痕有剥片は重要な役割を担った石器であったことは忘れてはならないと考える。

サヌカイト製使用痕有剥片の内、背面に底面を付着させるものについては、剥片と合わせて、形態的特徴を検討したい。(久保)

#### i、底面付着のサヌカイト製使用痕有剥片と剥片

サヌカイト製の使用痕有剥片と剥片の中から背面に素材剥片の腹面をとどめるものを抽出した。底面が付着した剥片は、横長剥片剥離技術によって、形態的に、数量的に最も安定して生産されると考えられる。横長剥片剥離技術によって生産される目的剥片の大半を代表すると見なせよう。ここでは、剥片の形状を保っている使用痕有剥片と合わせて、底面付着の剥片について、形態的検討を行ないたい。

本来、「底面」という用語は瀬戸内技法によって得られる(翼状)剥片やその(翼状)剥片を加工して作られた製品の背面に残るポジティブ面(稀にネガティブ面)に対して用いられるが、ここでは以下のものを「底面」として扱った。

①瀬戸内技法あるいはそれに近い技法によって得られた(翼状)剥片の背面の下部に残るポジティブ面(稀にネガティブ面)。横長剥片であるのが原則である。

②盤(板)状の剥片ではなく、比較的薄めの剥片を石核素材とした剥片剥離技術によって得られた剥片の背面に残るポジティブ面(石核素材である剥片の腹面)。大部分が中間剥片である。

この①と②の区別は形態、「底面」と他の剥離面との関係を観察することで、おおかた可能である。

底面付着使用痕有剥片は、106点中34点(32%)確認された。素材剥片形態をみると、縦長剥片1点(3%)、中間剥片8点(24%)、横長剥片25点(73%)となり、圧倒的に横長剥片が多い。底面付着剥片は143点で縦長剥片2点(1.4%)、中間剥片52点(36%)、横長剥片83点(58%)、判定不能な剥片6点(4%)となり、底面付着使用痕有剥片ほどでないにしろ横長剥片が多い。

長幅関係(第122図)については底面付着剥片(●印)との比較を行なった。図をみる限り、明らかに底面付着使用痕有剥片(□印)と底面付着剥片の中心分布域は異なっている。このことは使用に関して、“大きさ”が選択の一基準となっていることを意味しよう。なお、底面付着使用痕有剥片の平均値は長さ26.7mm、幅43.1mmで、使用痕有剥片の中では大型に属する。底面付着剥片の平均値(図の○印)は長さ19.1mm、幅27.9mmである。

重量の分布に関しても、長幅関係同様に底面付着剥片と比較してみた(第123図)。底面付着使用痕有剥片(●印)は、4g以上6g未満、6g以上8g未満にピークが存在し、2g未満、2g以上4g未満がその次に多い。そして10g以上のものが11点(32%)ある。平均重量は8.9gで、底面付着使用痕有剥片を含む使用痕有剥片の平均重量6.4gに対し2g重い。また、使用痕有剥片106点から底面付着使用痕有剥片を除外した72点の平均重量は5.3gで、実に3.6gの違いをみせる。一方、底面付着剥片(○印)は143点確認された。底面付着剥片のグラフの傾きは、底面付着使用痕有剥片と異なり、2g未満に82点(57%)、2g以上4g未満に31点(22%)が存在する。10g以上のものは14点(10%)と底面付着使用痕有剥片に比して少ない。底面付着剥片の平均重量は3.1gで、底面付着使用痕有剥片の約3分の1である。

剥離角について、すべての形態をまとめてグラフ化した(第121図右)。打面を残置する22点が対象である。平均値は129.7度、中間値128度で112度以下は存在しない。これらの数値は使用痕有剥片の横長剥片の数値に近いが、このことは底面付着剥片に占める横長剥片の数からも納得できるものである。ちなみに、底面付着剥片の平均値は116.2度となり、使用痕有剥片の中間剥片の数値に近く、底面付着使用痕有剥片とは約13度の開きをもつ。

刃部角は部位別でグラフ化した(第121図左)。左右両側縁、「その他」に使用痕を残すのは27辺で、平均値41.9度、中間値39度となり、「その他」3辺を除くと平均値は40.6度である。しかし、実際には40度付近に刃部角の分布はほとんどみられず、30度以下、45度以上のところに分布の中心がある。末端縁も27辺あり平均値、中間値とも34度となる。使用痕の残る左右両側縁の合計と末端縁の比率は拮抗しており、前段で述べたように、これは末端縁を意図的無意図的に関わらず選択していることを意味する。

(久保)

## j, 剥片

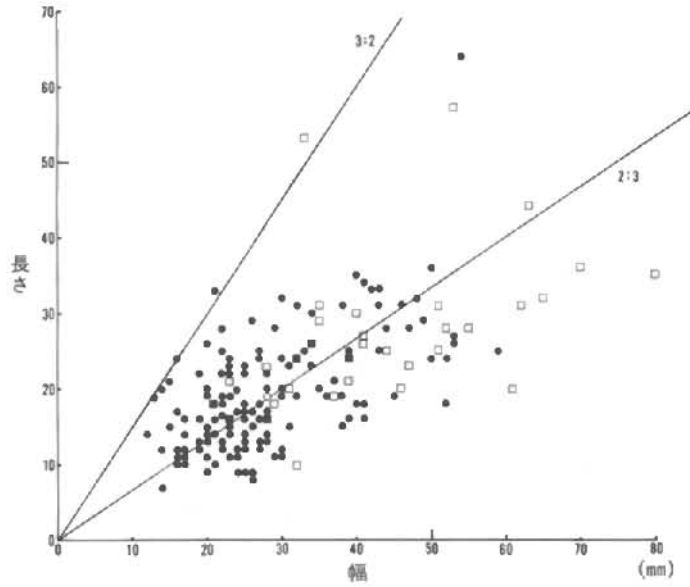
剥片は、合計1376点発見されている。この中には、長幅1cm以上の未加工・未使用の石片すべてを含んでいる。形態的には、剥片剥離技術の特徴とよく一致し、目的剥片と調整剥片(非目的剥片)とに分けて考えることができる。剥片剥離技術には、剥片素材の石核から横長の剥片を剥離する技術と塊状や板状材から縦長・貝殻状剥片を剥離する技術の2群が存在し、剥片の多くは、これらの目的剥片と調整剥片である。

本章の冒頭で述べたように、剥片剥離技術と石器製作技術は、石材とよく対応しており、サヌカイト製のものとチャート等の在地石材と考えられるものとに分離して記述する方が、特徴を把握しやすいと考えられる。まず、両石材群のうち、「目的」的と推定できる剥片を中心に観察しよう。

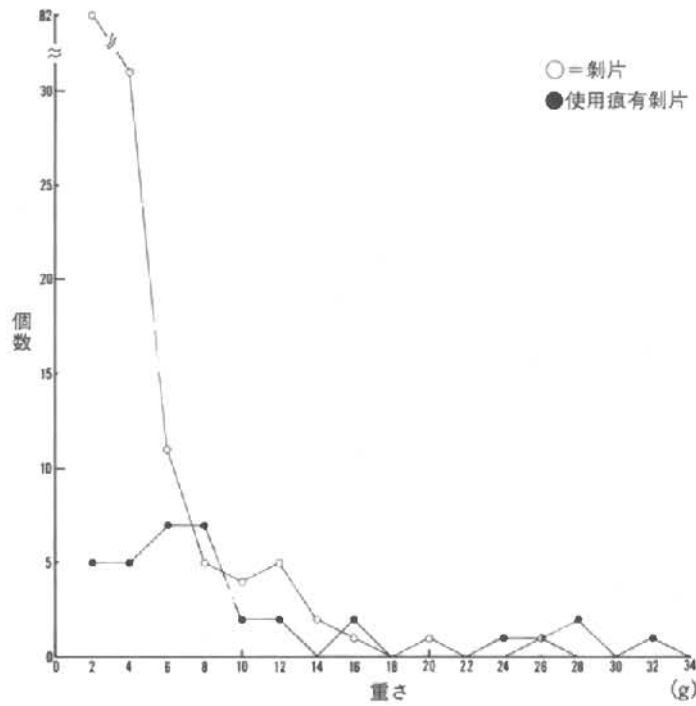
### サヌカイト製剥片(第124図～第136図)

サヌカイト製剥片は、合計558点がある。サヌカイト製剥片では、横長剥片剥離技術によって剥離された底面を有する横長剥片が目を引きのに対し、縦長剥片は僅かしかない。全体としては、貝殻状剥片や不定形剥片が大半を占めるものの、サヌカイト製剥片と横長剥片剥離技術は密接な関係にあると考えられる。横長剥片と貝殻状剥片・不定形剥片の形態差は明確でなく、ほぼ同様の剥片剥離技術を有したも

第2節 下位文化層の遺物

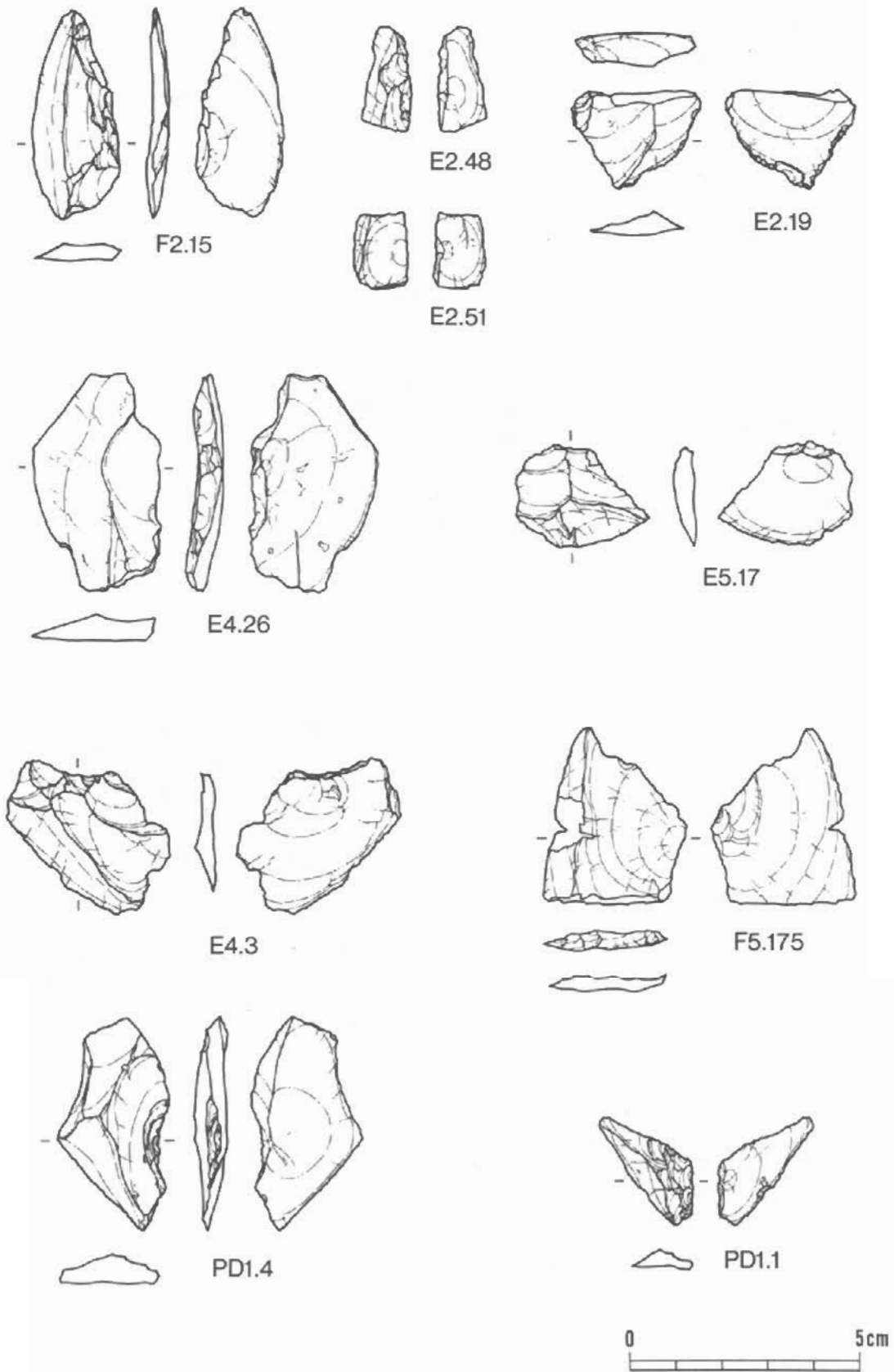


第122図 底面付着剥片・使用痕有剥片長幅比  
● = 剥片、○ = 剥片平均値、□ = 使用痕有剥片

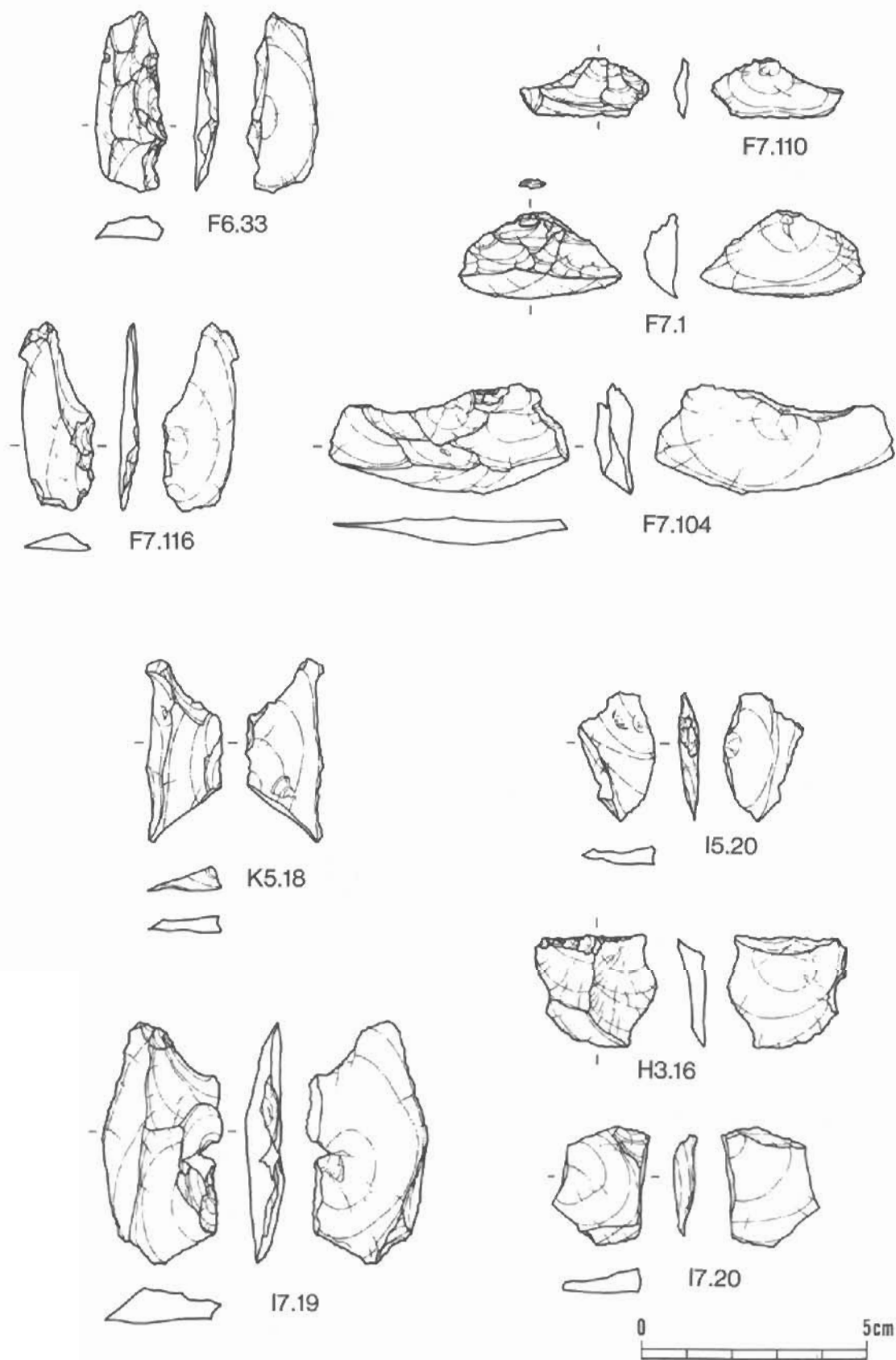


第123図 底面付着剥片・使用痕有剥片重量分布

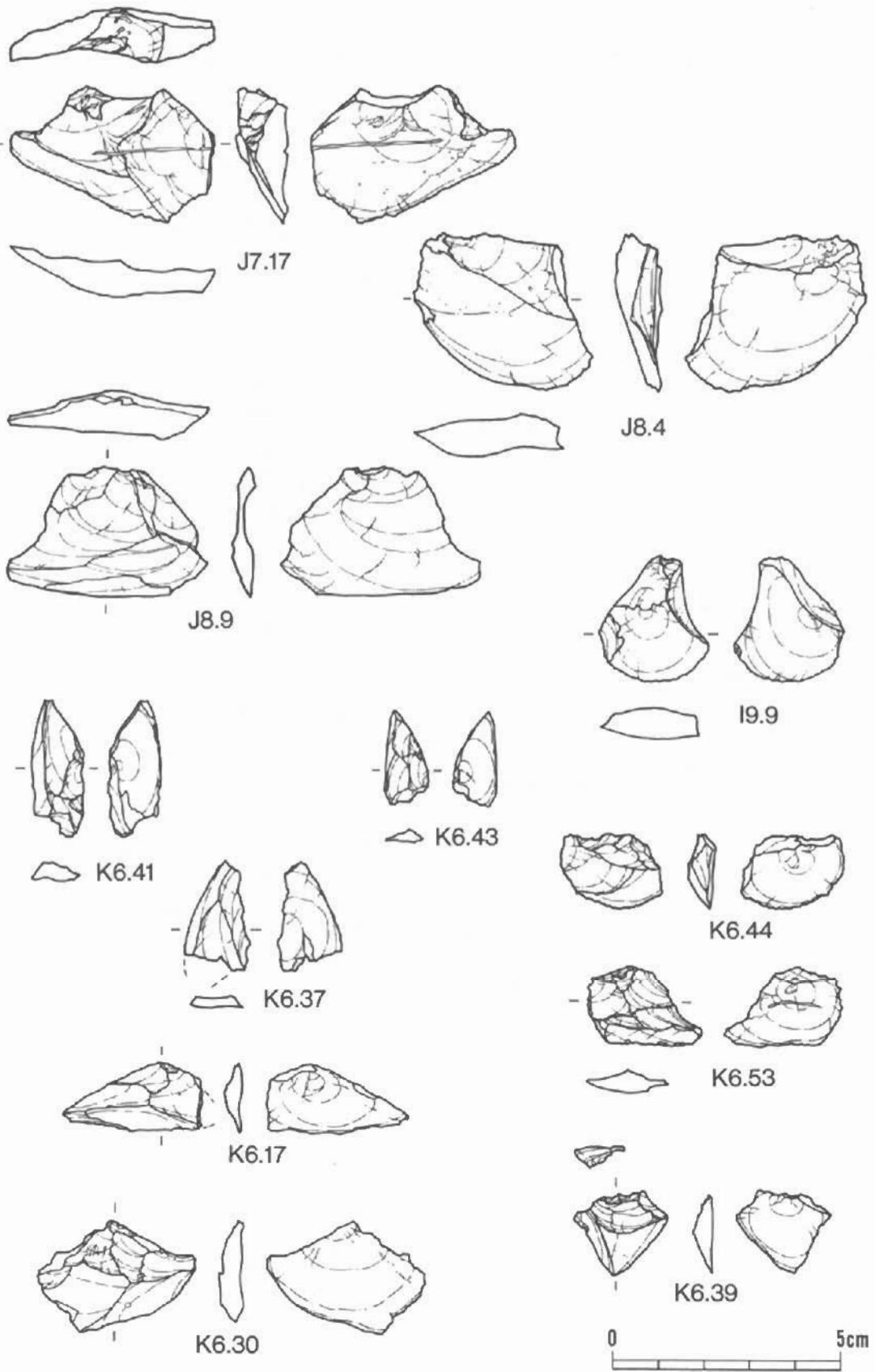




第124図 下位文化層剥片実測図1

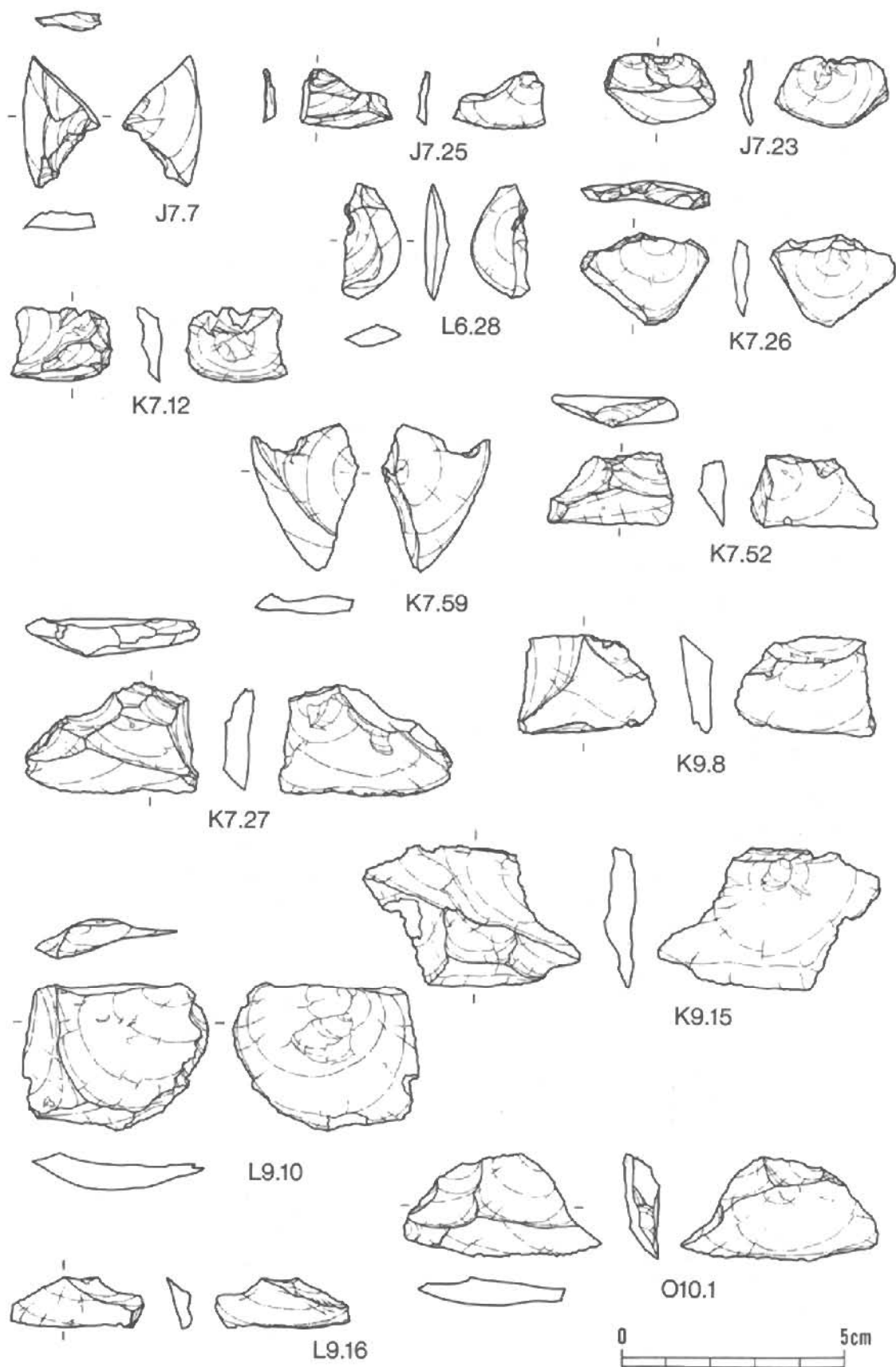


第125図 下位文化層剥片実測図2

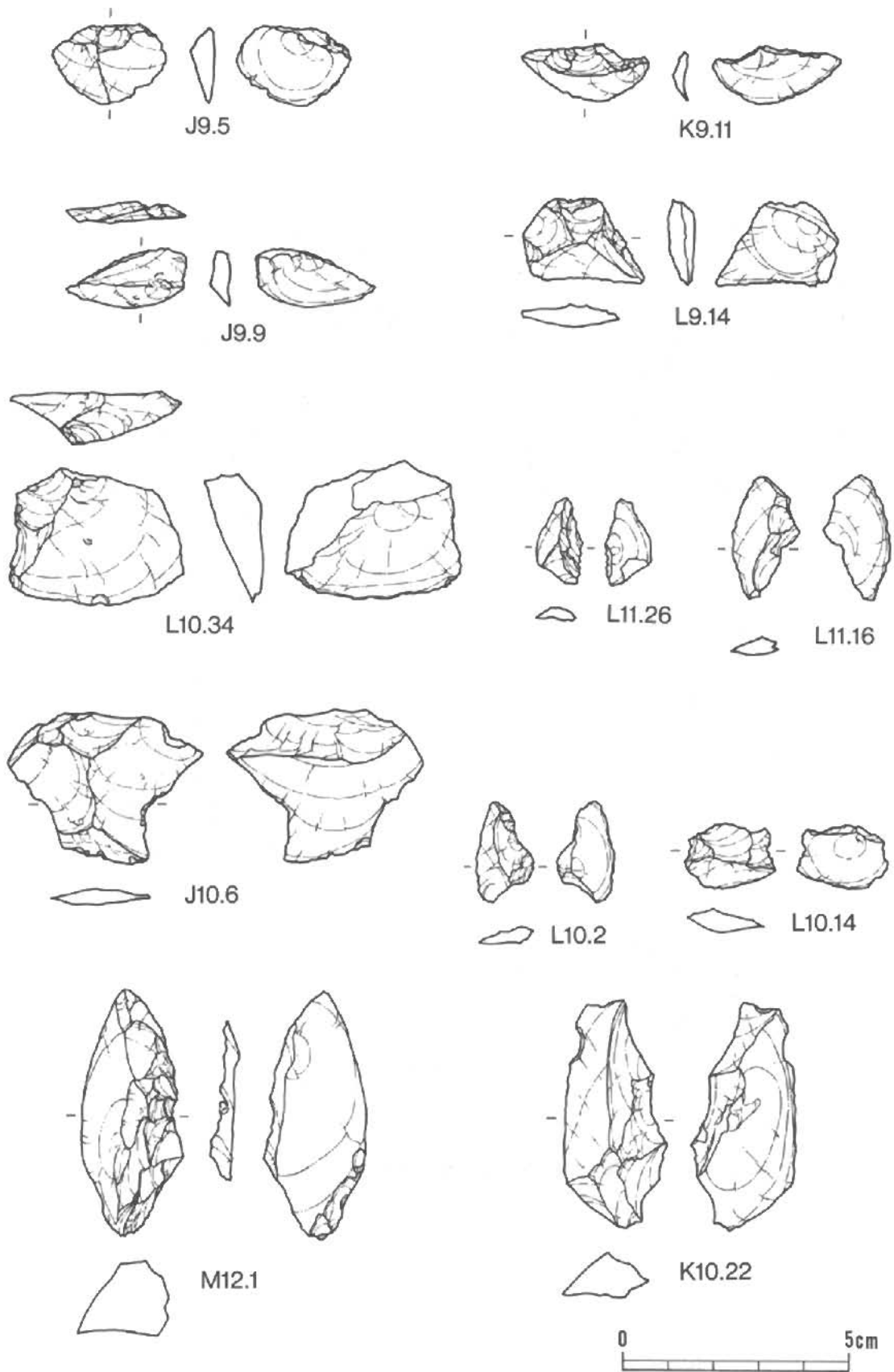


第126図 下位文化層剥片実測図3

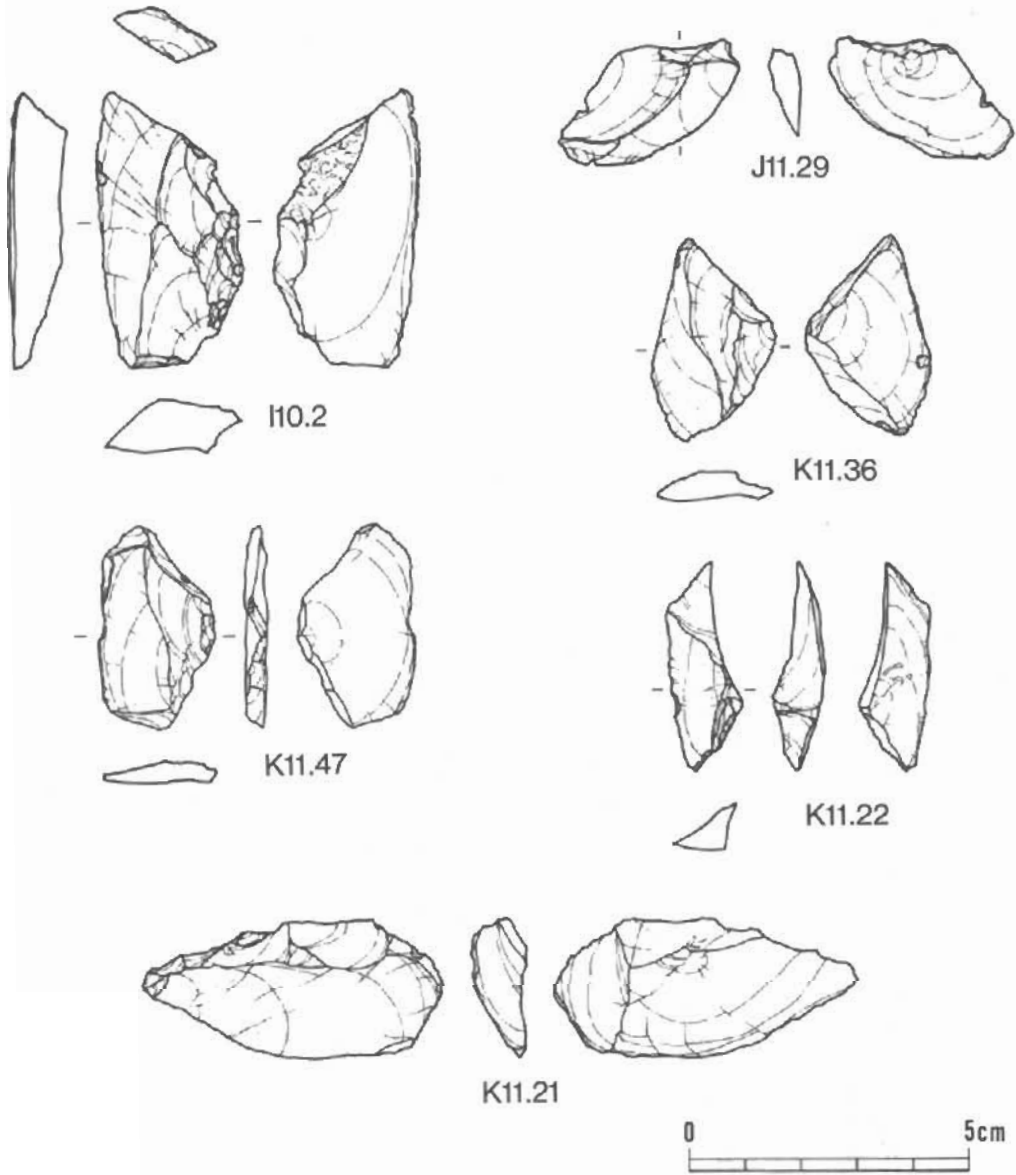
第2節 下位文化層の遺物



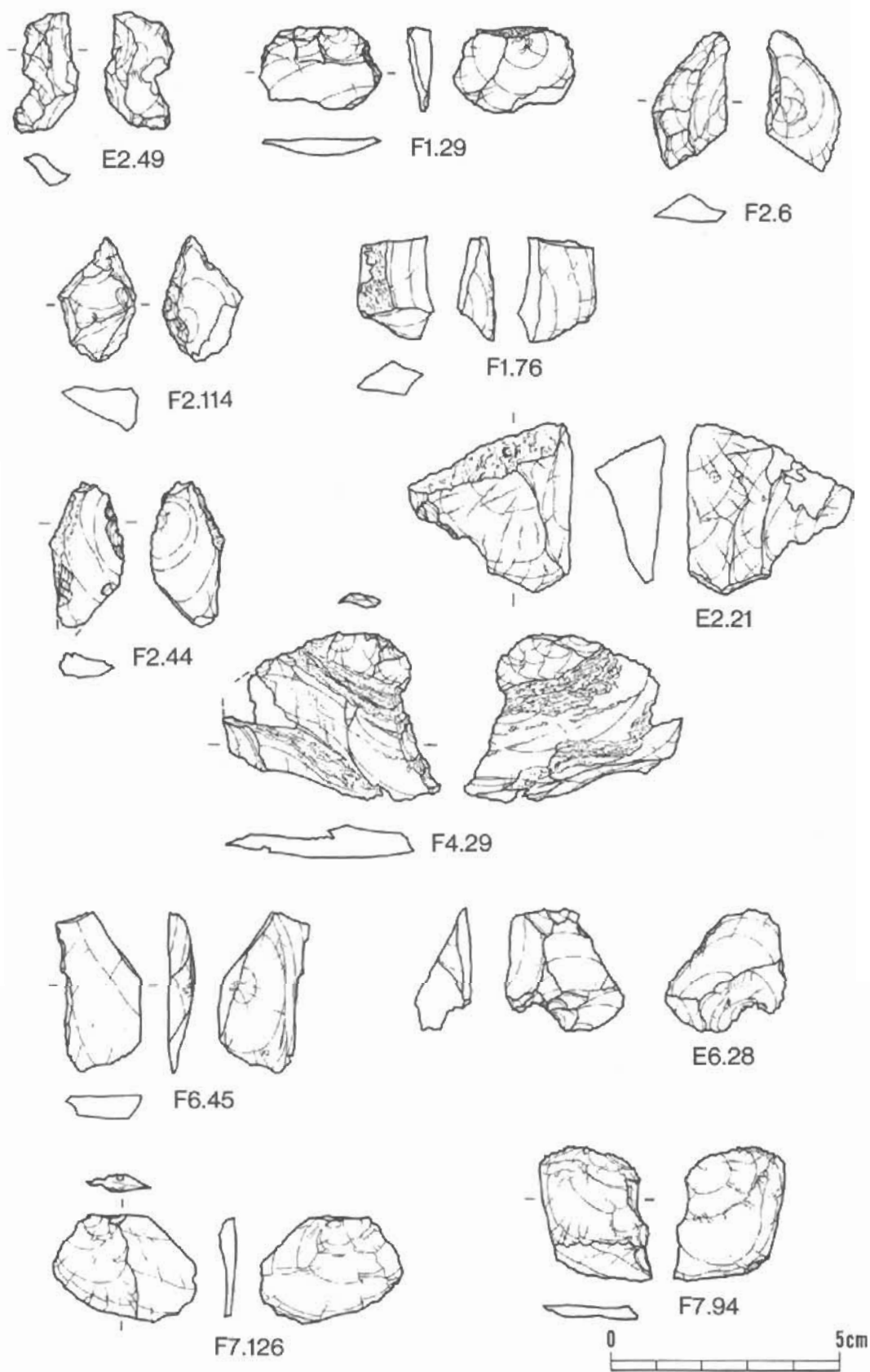
第127図 下位文化層剥片実測図4



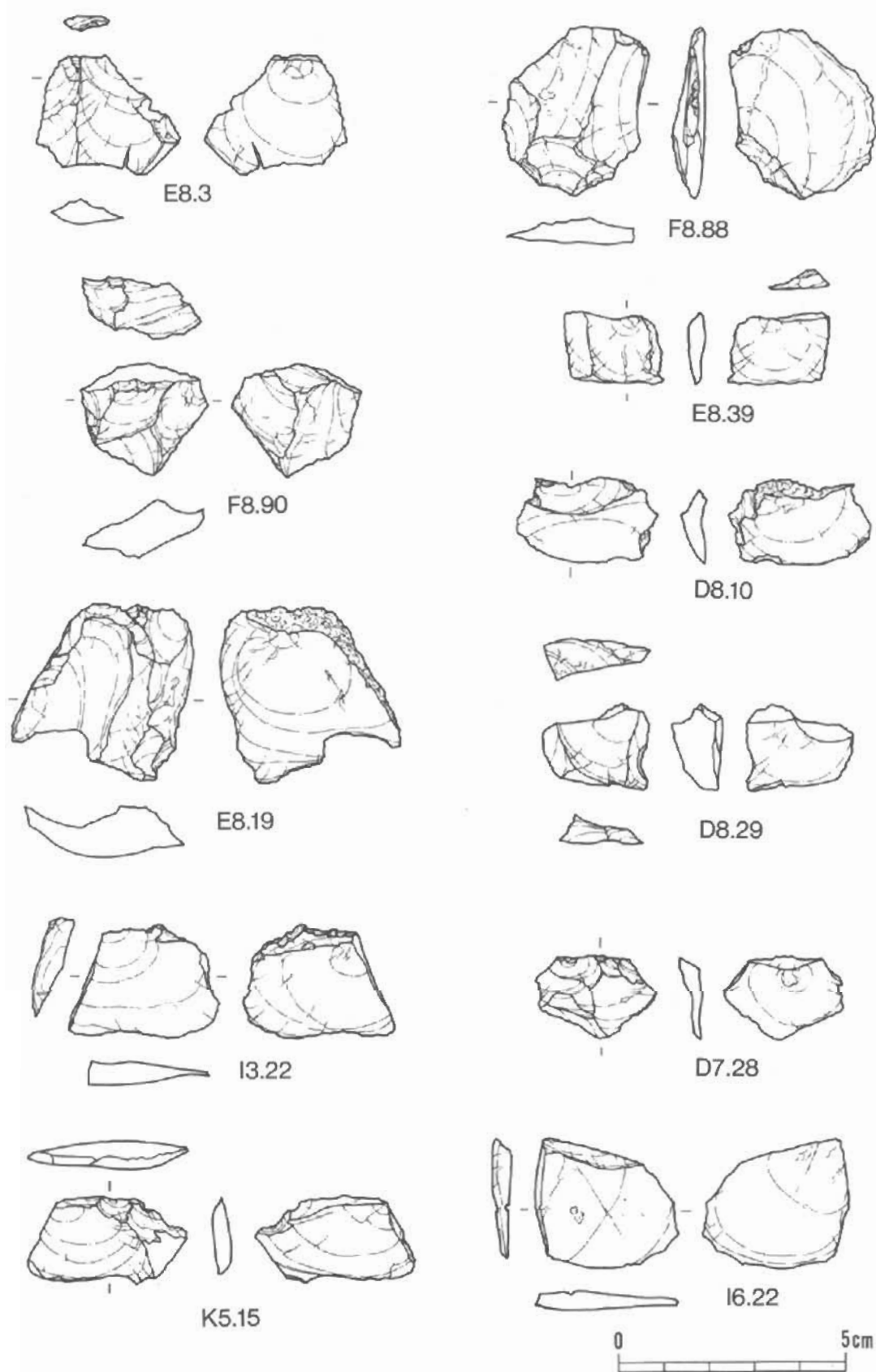
第128図 下位文化層剥片実測図 5



第129図 下位文化層文化層剥片実測図6

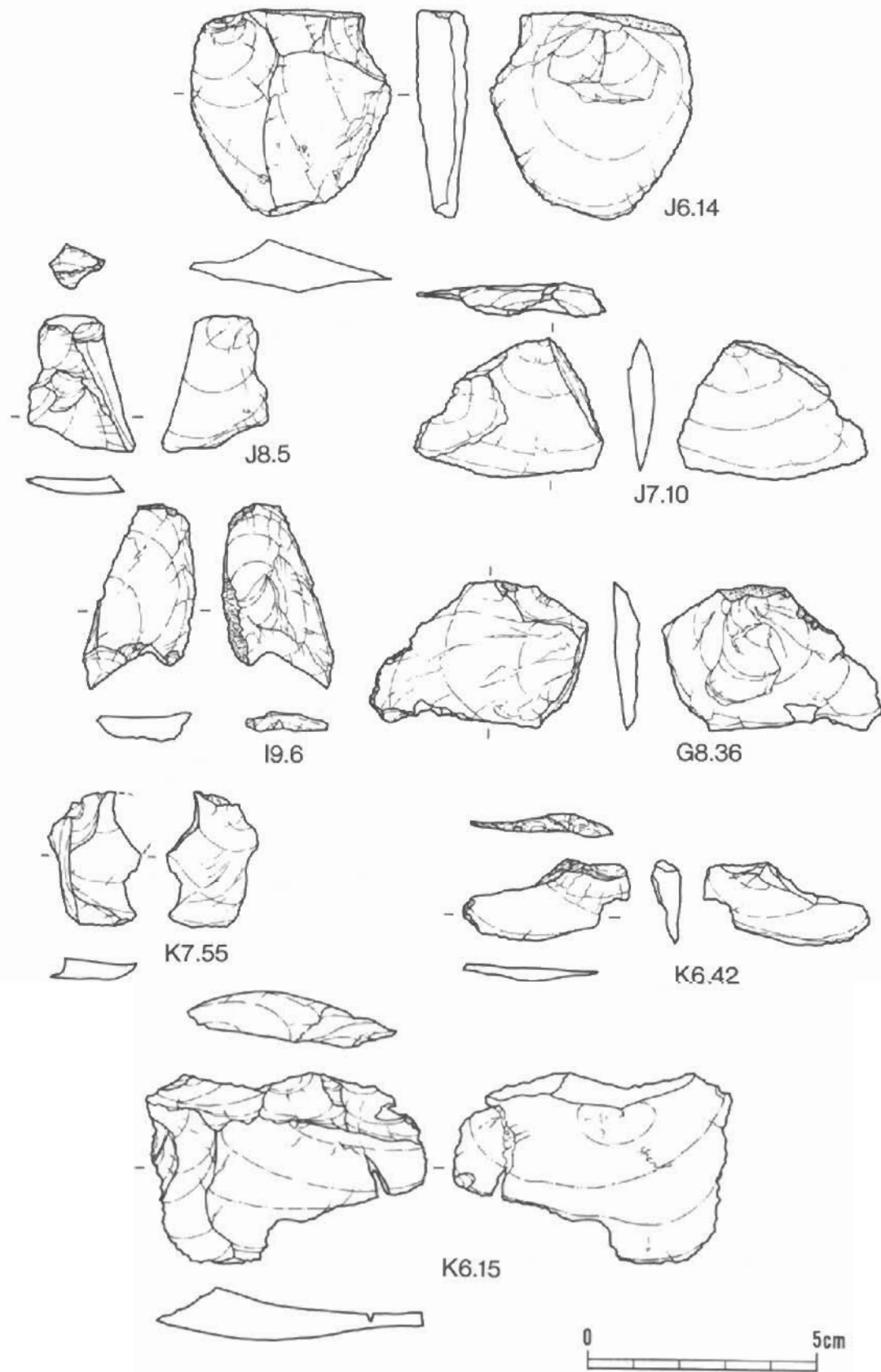


第130図 下位文化層剥片実測図7

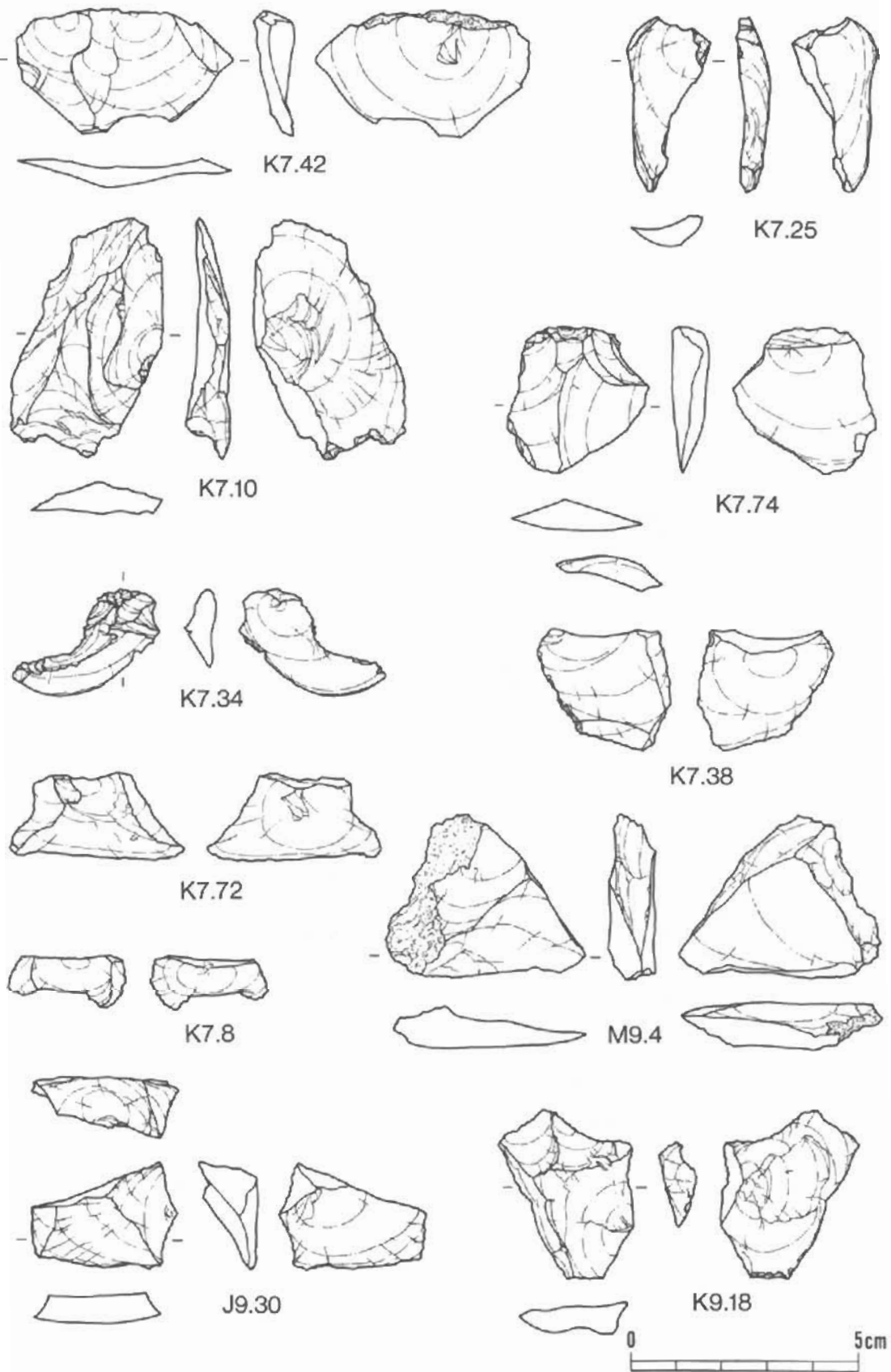


第131図 下位文化層剥片実測図 8

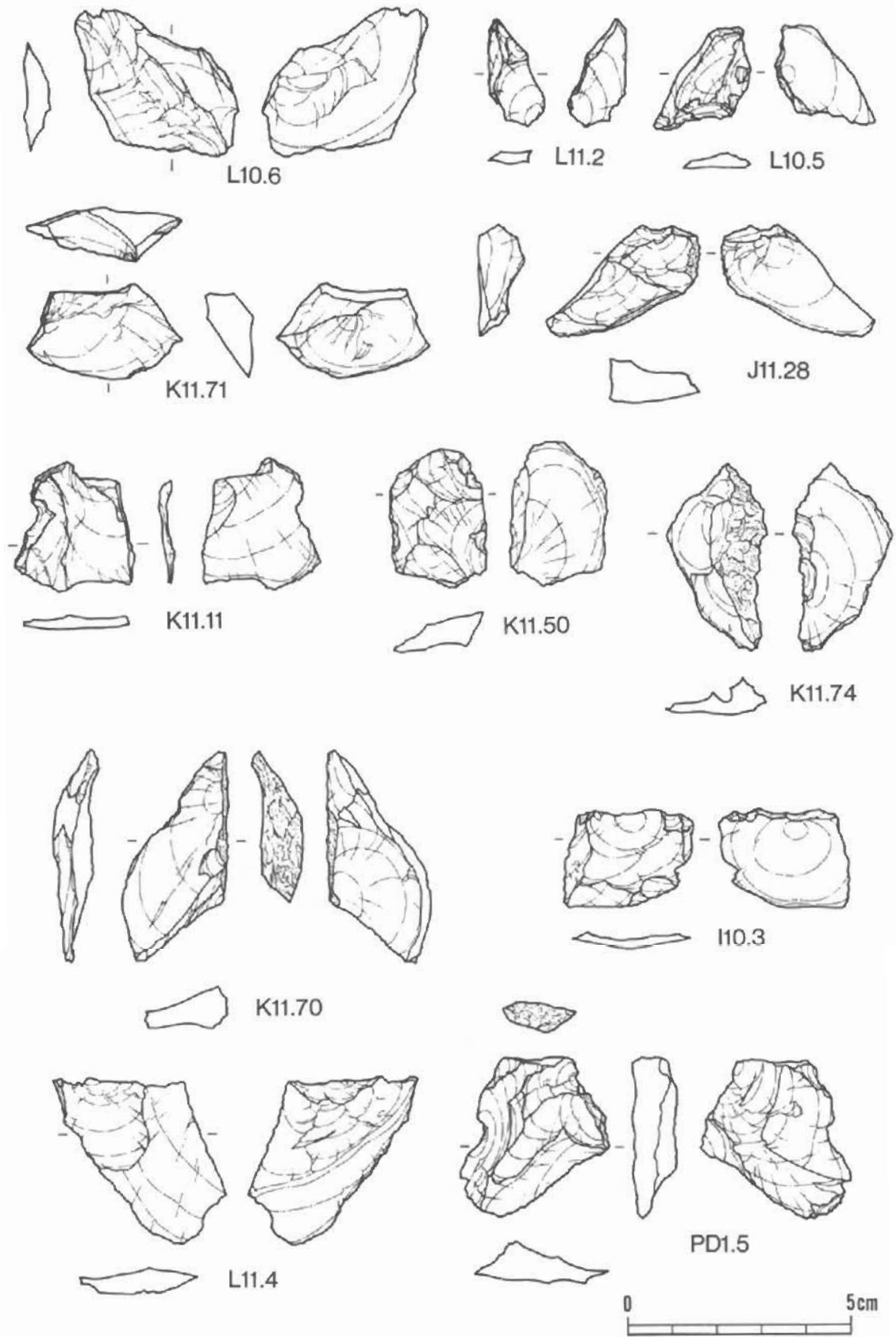




第132図 下位文化層剥片実測図9

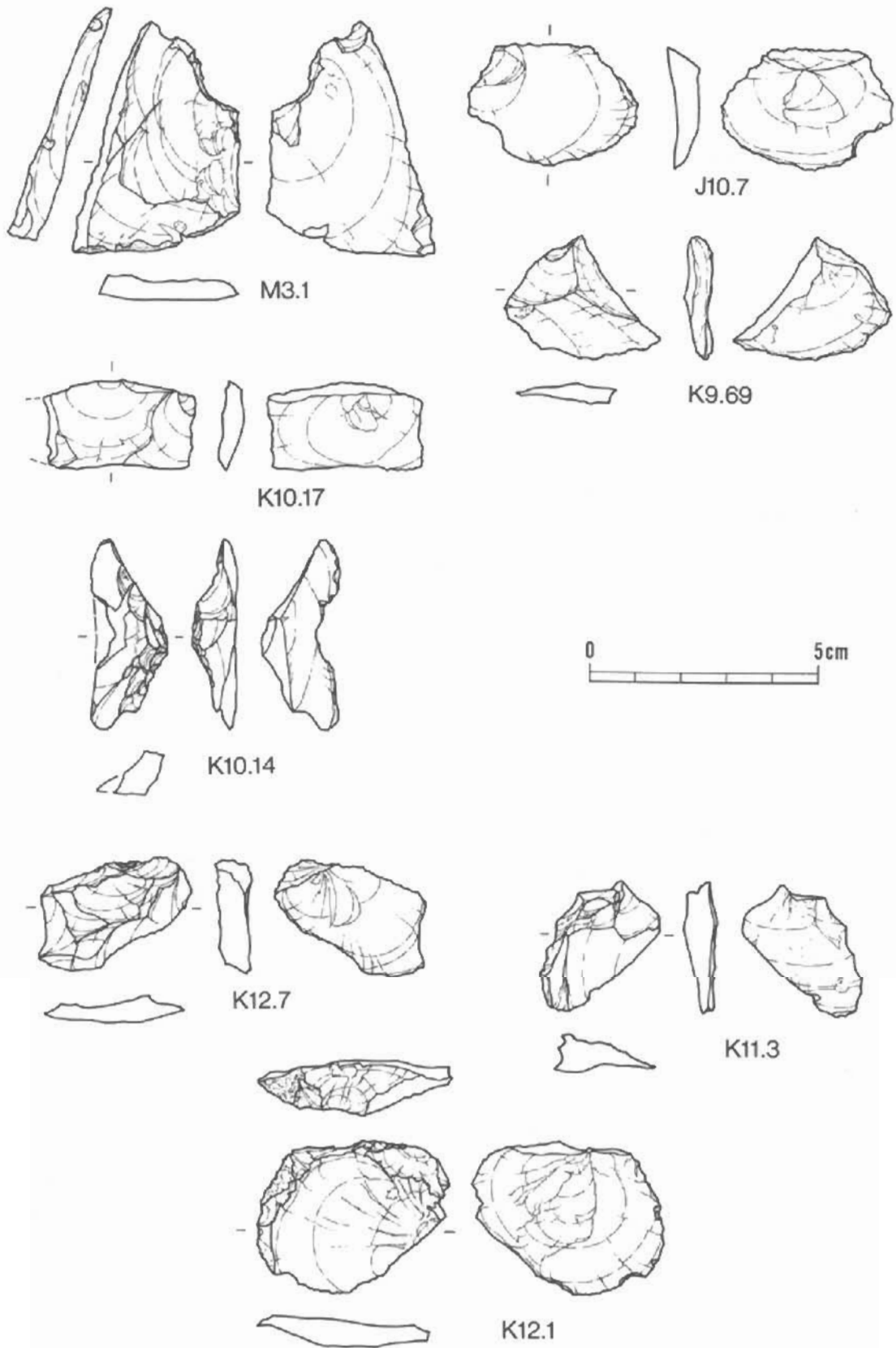


第133図 下位文化層剥片実測図10

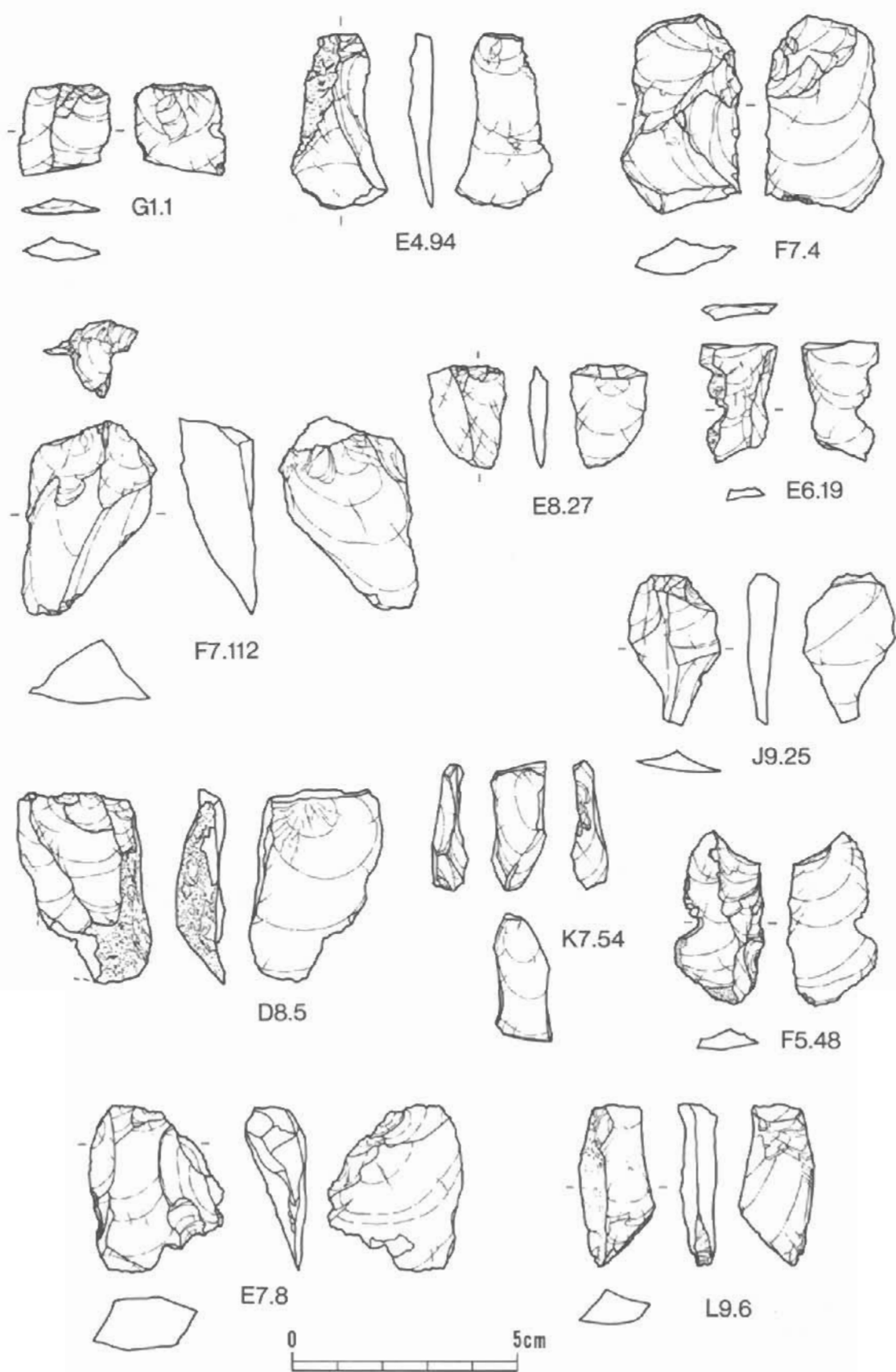


第134図 下位文化層剥片実測図11

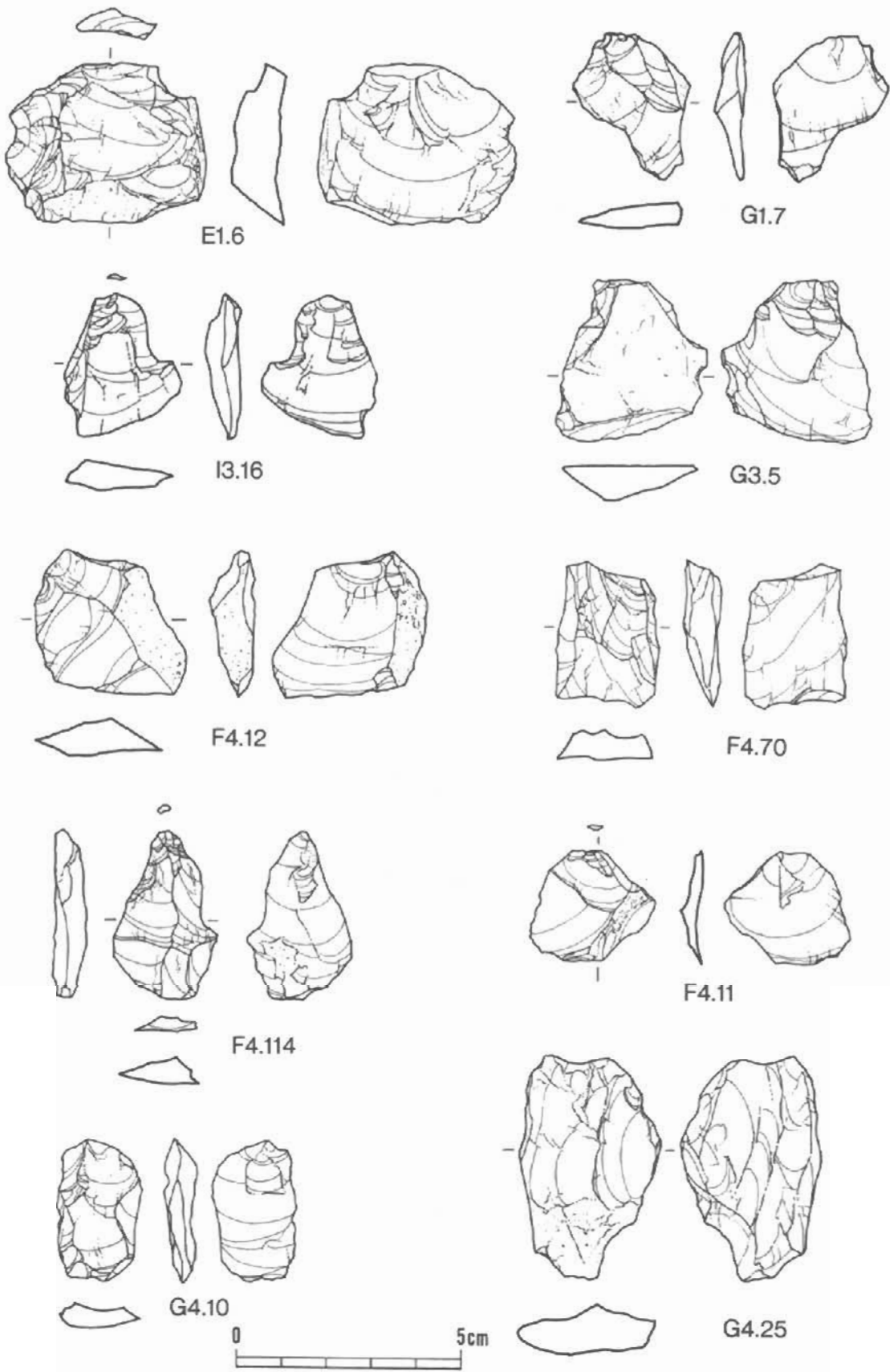
第2節 下位文化層の遺物



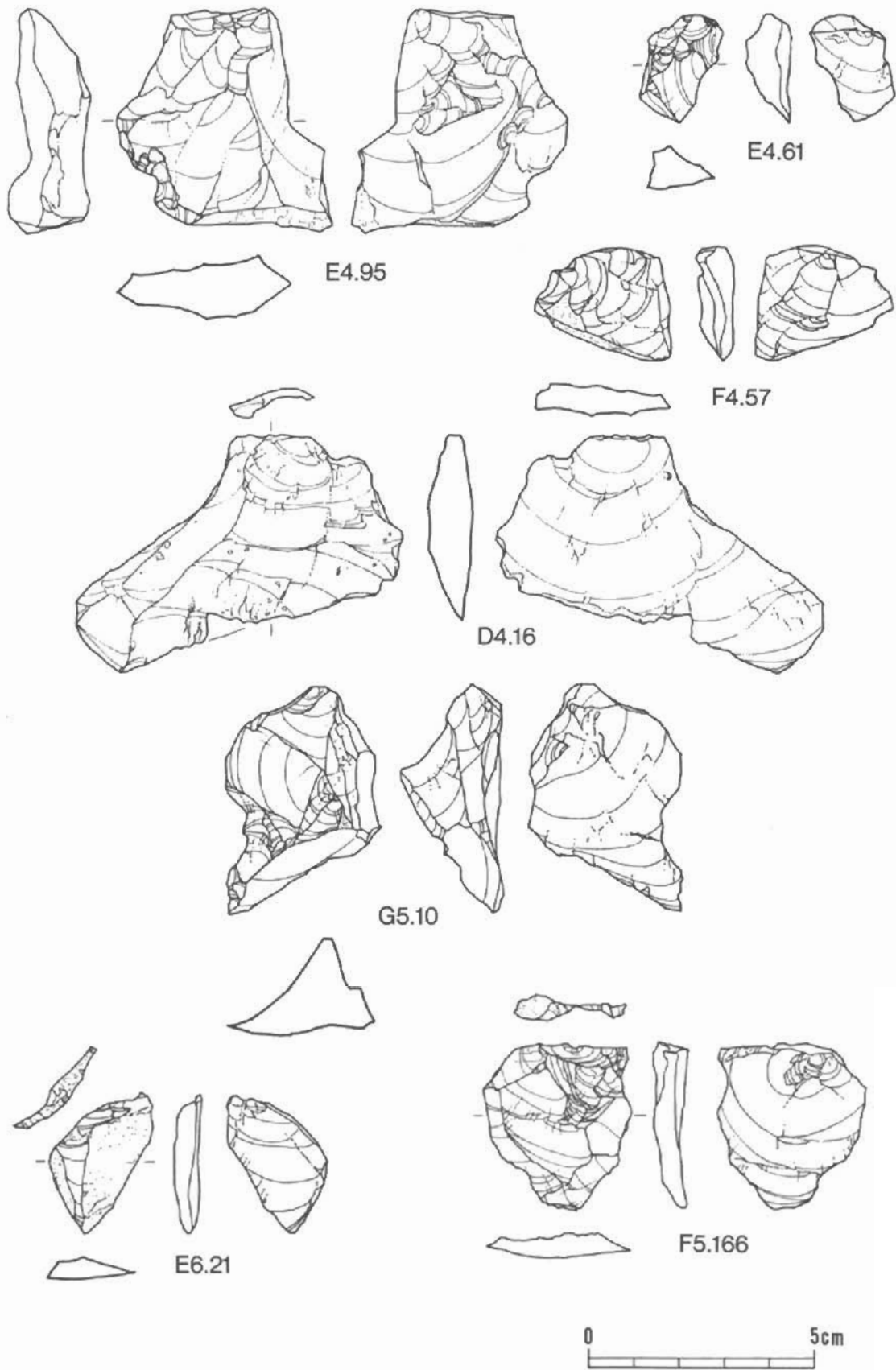
第135図 下位文化層剥片実測図12



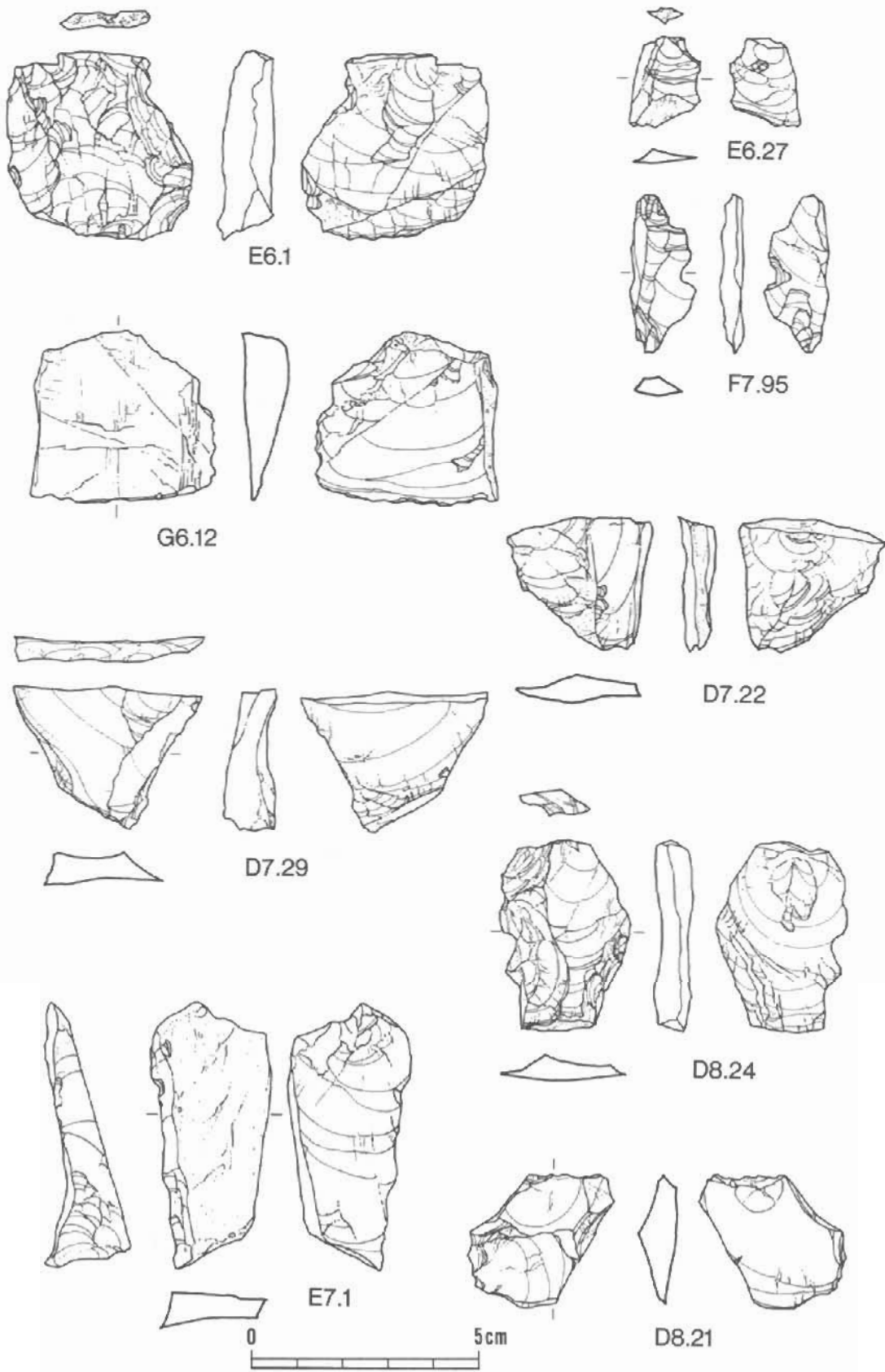
第136図 下位文化層剥片実測図13



第137図 下位文化層剥片実測図14

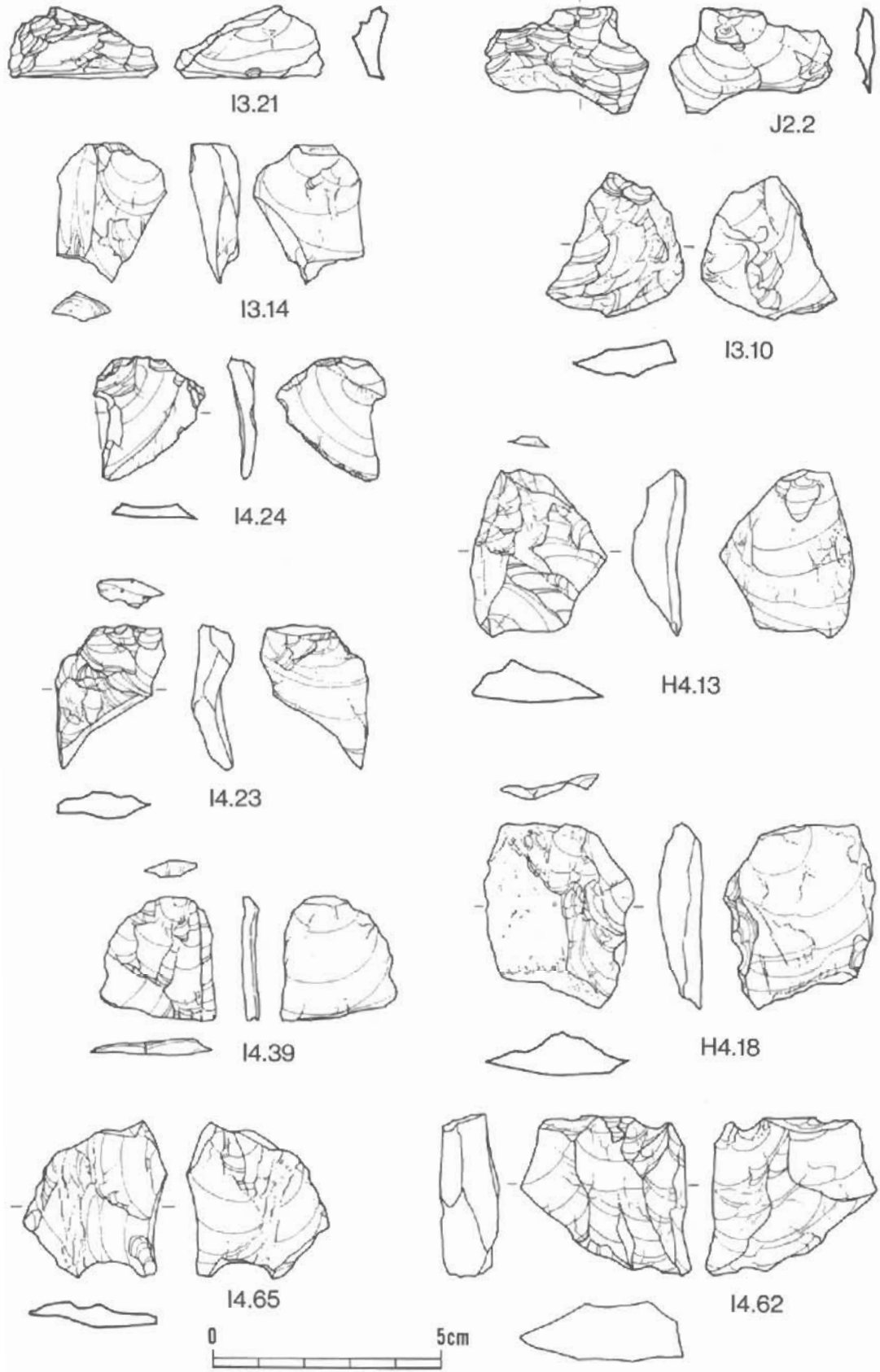


第138図 下位文化層剥片実測図15



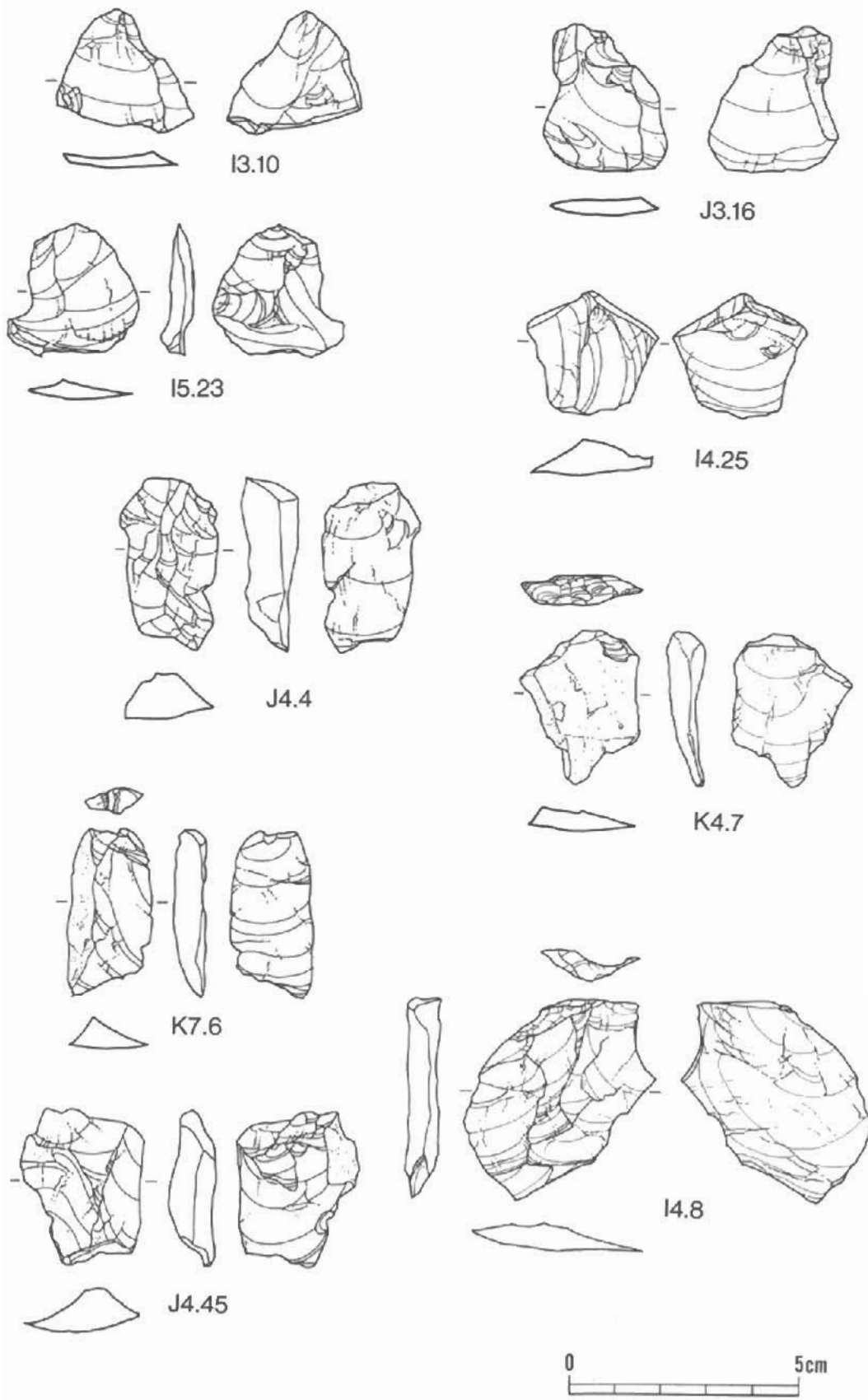
第139図 下位文化層剥片実測図16



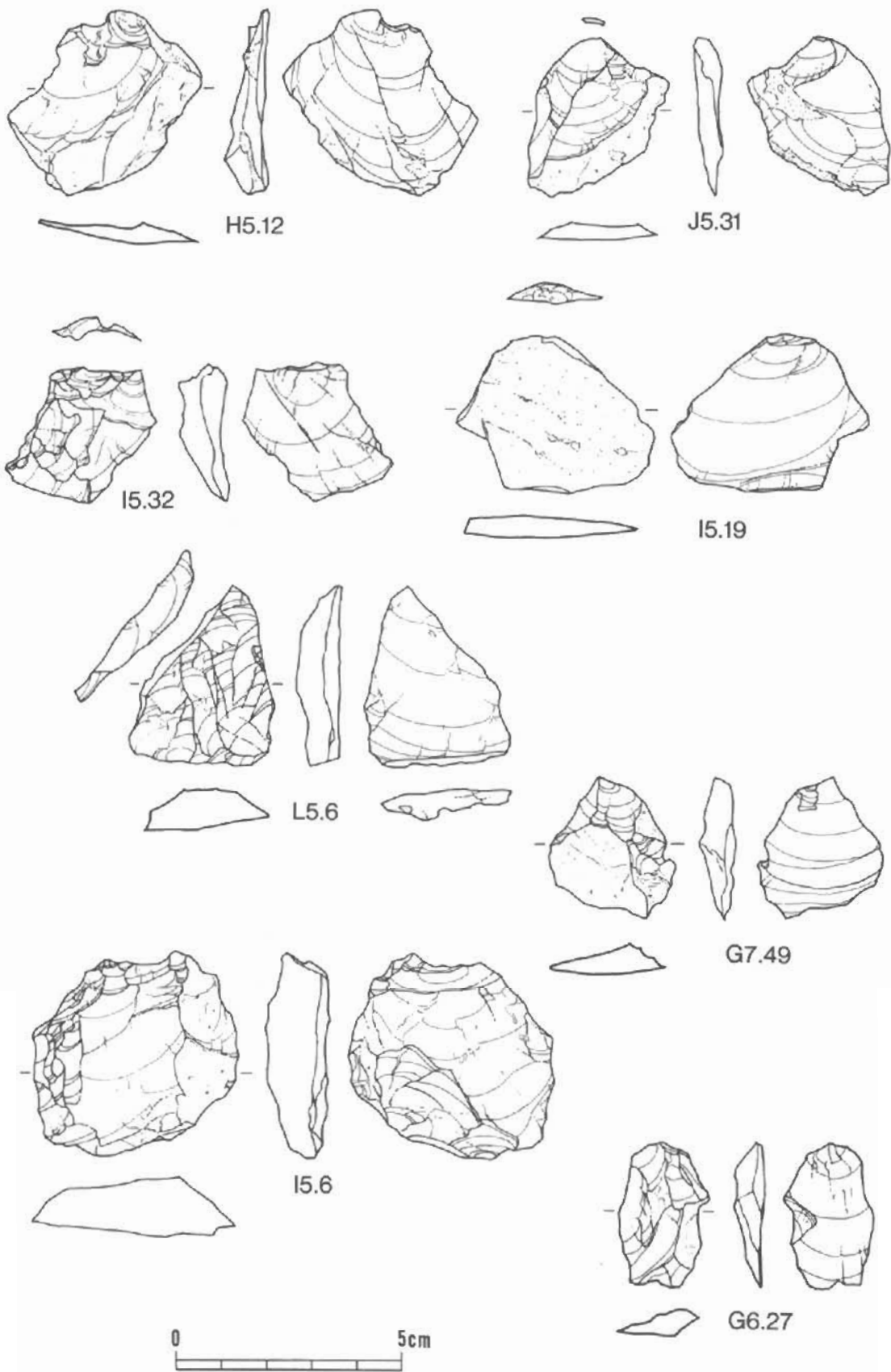


第140図 下位文化層剥片実測図17

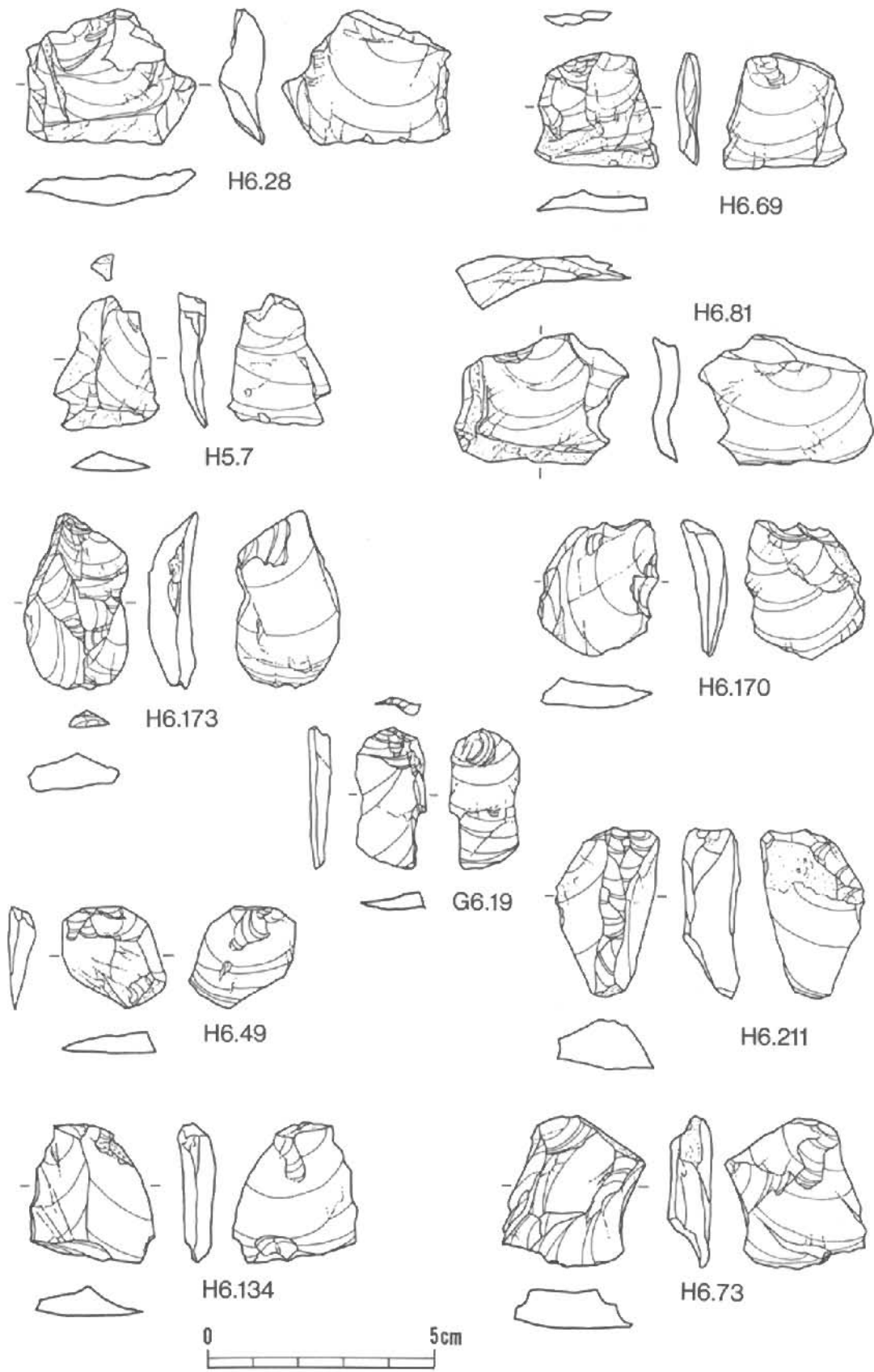
第2節 下位文化層の遺物



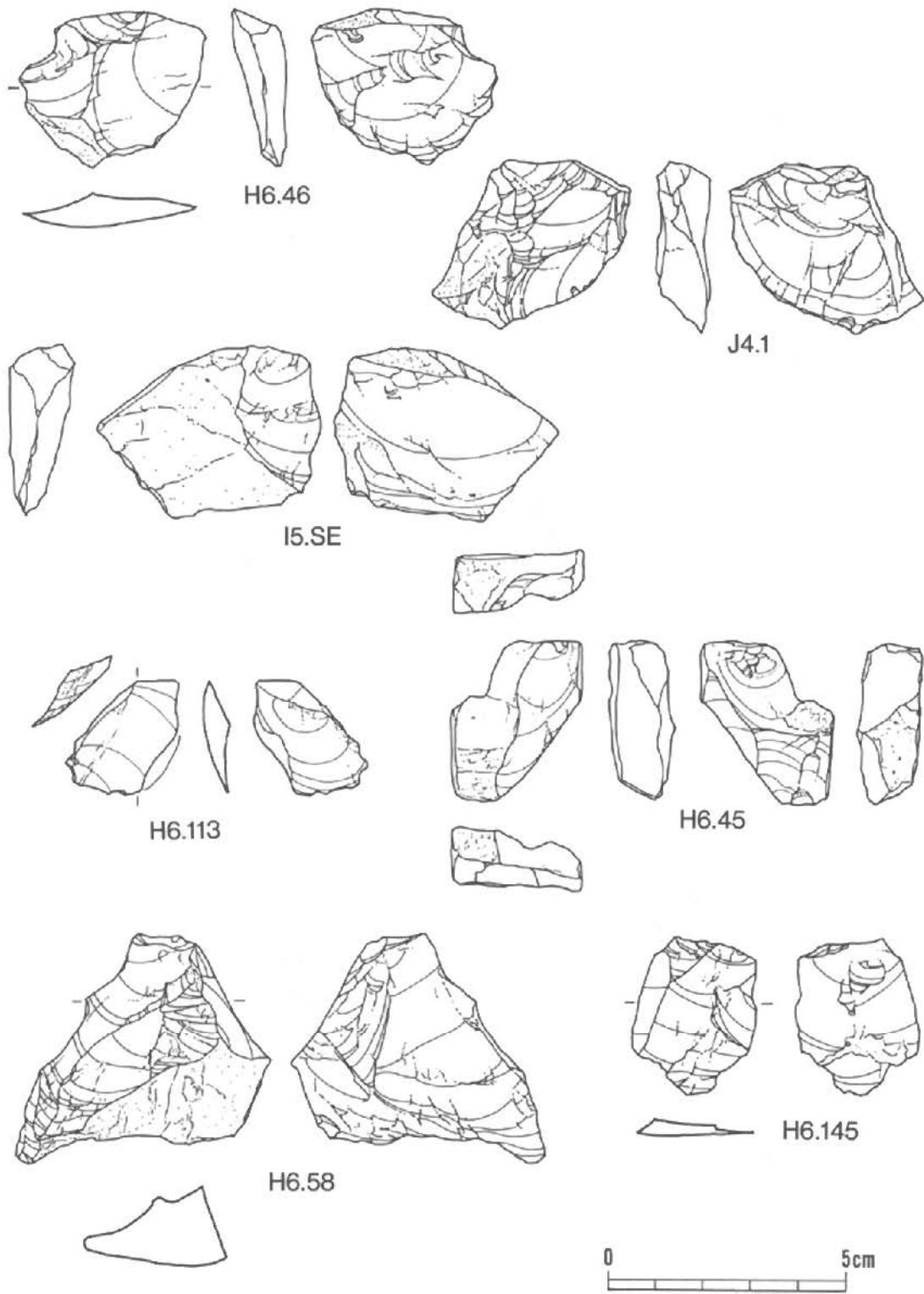
第141図 下位文化層剥片実測図16



第142図 下位文化層剥片実測図19

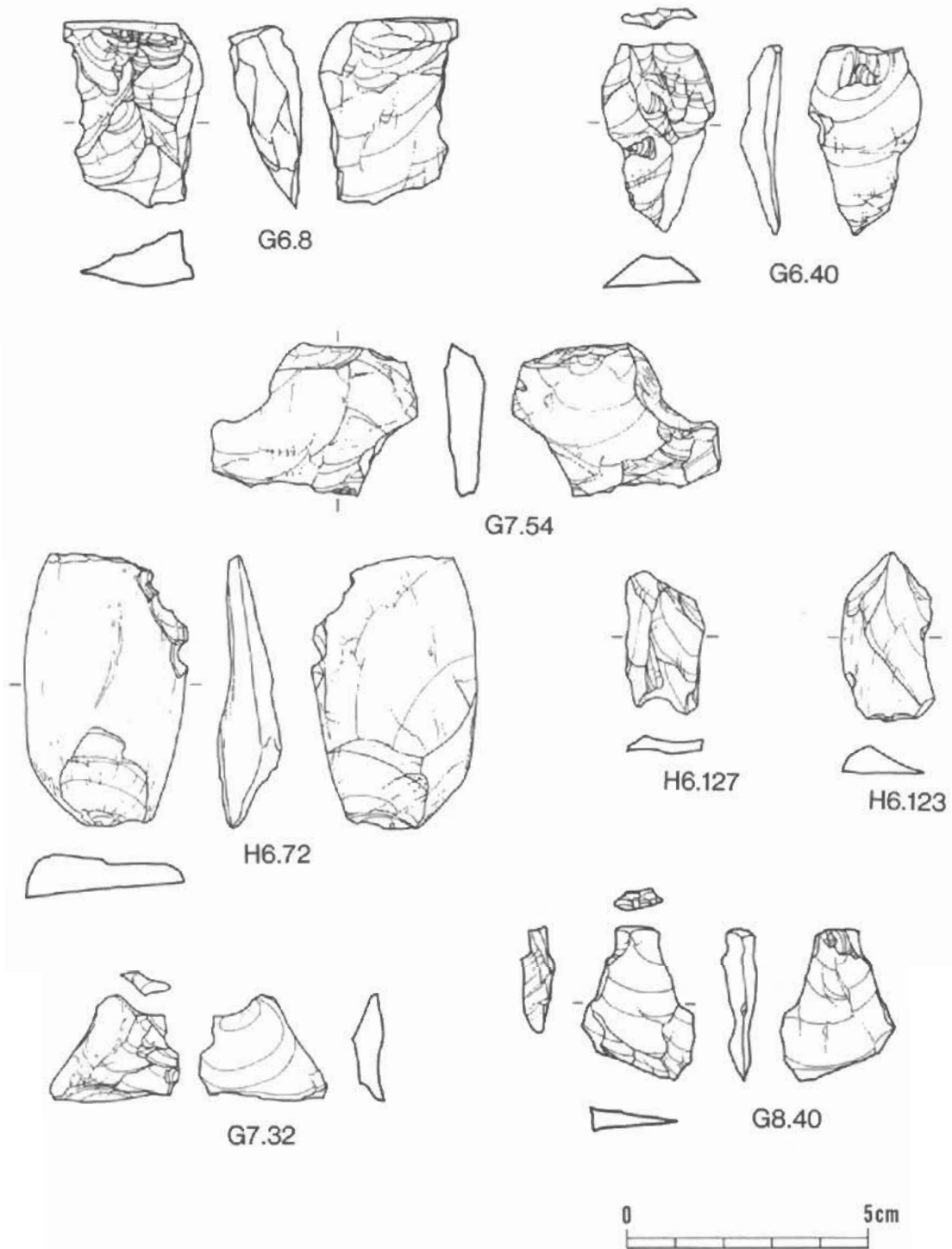


第143図 下位文化層剥片実測図20

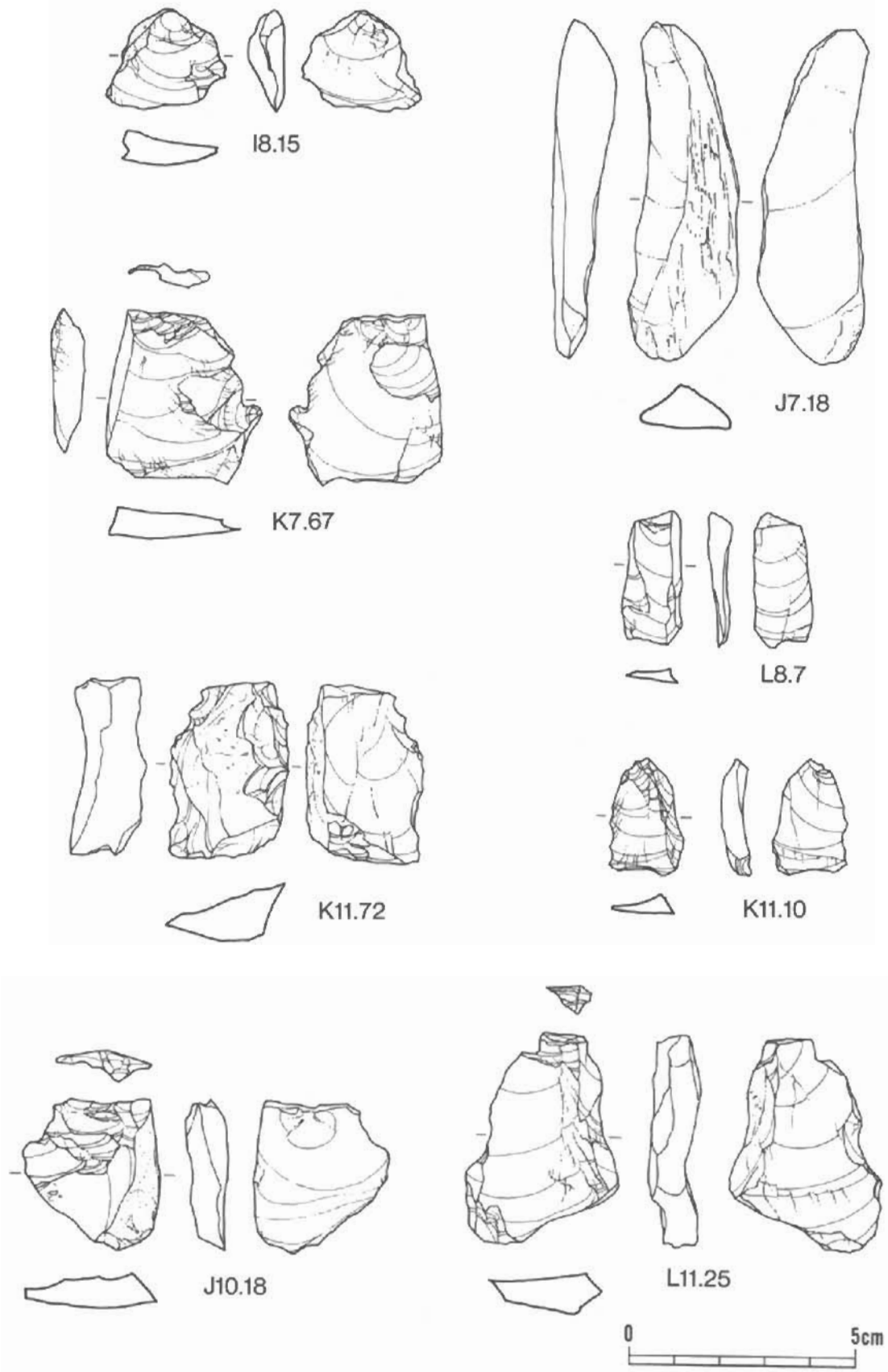


第144図 下位文化層剥片実測図21

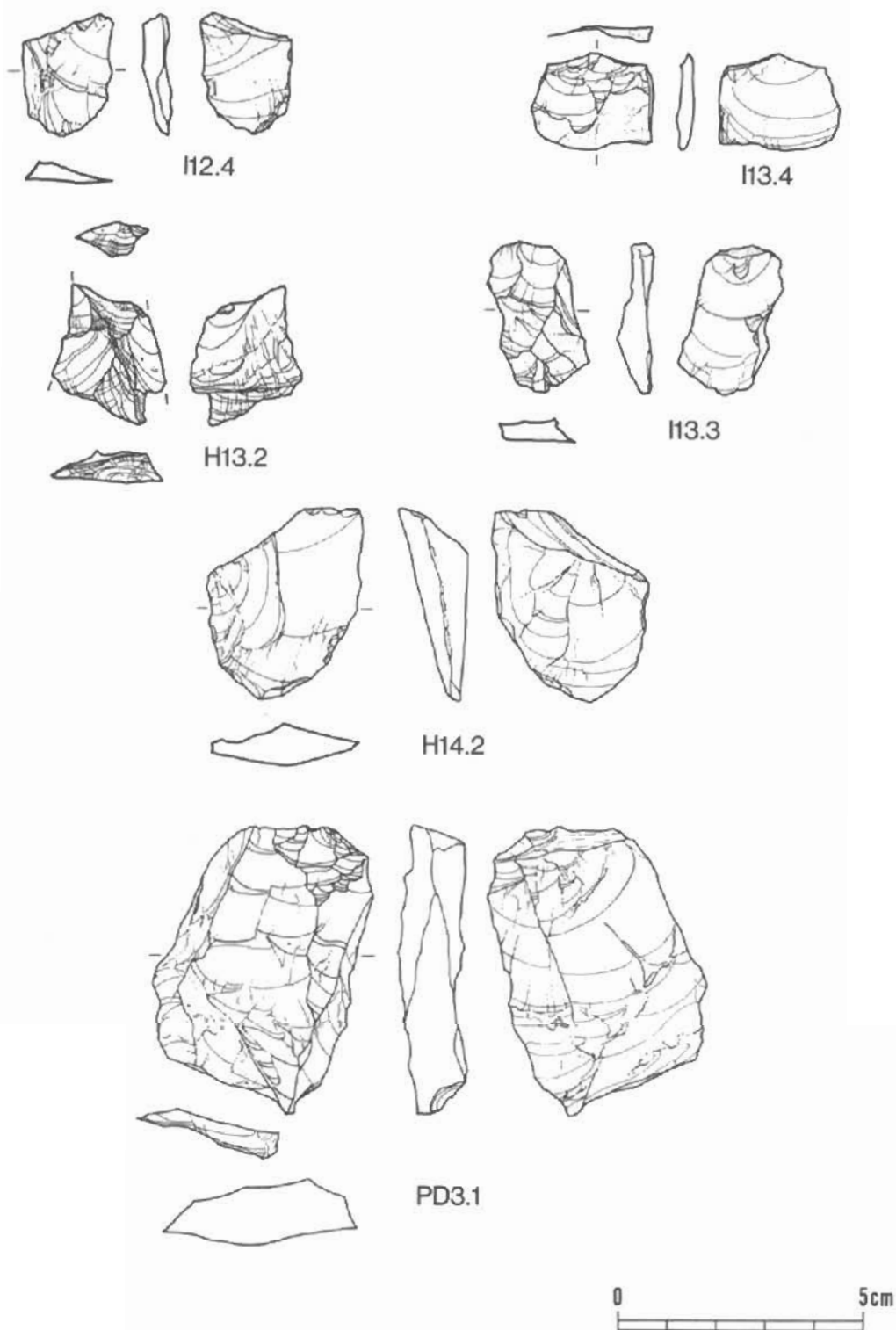
第2節 下位文化層の遺物



第145図 下位文化層剥片実測図22



第146図 下位文化層剥片実測図23



第147図 下位文化層剥片実測図24



のであろうと考えられる。縦長剥片剥離技術の所産であると考えられる整った縦長剥片は僅かである。横長剥片（第124図～第133図）、貝殻状・不定形剥片（第134図～第135図）、縦長剥片（第136図）の3つに分類して図示しておく。

長幅比が1:1.5以下の横長剥片は、合計62点を図示した。横長剥片は、剥片素材の横長剥片石核から剥離されたもので、多くに底面を付着させている。打面部は、E4.26に丁寧な打面調整が認められる以外、ほとんどが平坦打面で、一部の横長剥片は、打面上の大きな剥離面の切り合い稜線上加撃点としている。打面調整は僅かだが、打面縁調整は広く認められる。剥片に付着する底面のほとんどはポジ面で、剥片の背面側には、剥片剥離作業時に先行する同一打面からの剥離跡が1枚から2・3枚認められ、横長剥片剥離技術の一端を窺わせる。横長剥片の内、形態的に整ったものを観察すると、大・中型のものと小型のもの、極小型のものの3群があることが知れる。大・中型の横長剥片は、図示した剥片中の20点を占める。小・極小型の横長剥片は、図示した剥片中の22点を占める。

長幅比が1:1.5以上、1.5:1以下の貝殻状・不定形剥片は、合計62点を図示した。横長剥片・縦長剥片を除いた多様な形態の剥片すべてが含まれる。大型の剥片が折断し、もとの形態を失ったものも含まれる。形態的に横長剥片との差異に乏しいことから、横長剥片剥離作業中に剥離されたものが多く含まれる可能性がある。

長幅比が1.5:1以上の縦長剥片は、合計12点を図示した。縦長剥片は、点数は少ないものの、いずれも縦長剥片剥離技術の所産である。自然面を背面に大きく付着させるものもあり、円礫状態での石材を石核としたものがあることが知れる。打面調整には乏しい。

サヌカイト製剥片の内、背面に底面を有するものについては、後で使用痕有剥片と合わせて形態的特徴について、検討したい。

#### チャート等製剥片（第137図～第147図）

チャート等製剥片は、合計818点がある。

チャート等製剥片は、縦長剥片、貝殻状・不定形剥片が多く、横長剥片は極めて僅かに存在するに留まる。このうち、A資料合計90点、B資料若干を図示する。個体別資料中の接合資料の検討で、剥片剥離との関係は示されるので、ここでは細述しない。

チャート等製剥片の形状は、結果として剥片剥離技術とよく符合しており、縦長と貝殻状・不定形剥片が主に目的的に生産された剥片であることを示している。横長を呈する剥片は、背面に底面を付着させるものではなく、サヌカイトの様に横長剥片剥離技術によるものではなく、厚手の板状材または分割材から剥片剥離作業中に偶然生産されたと考えられる。チャート等製剥片には、打面縁調整が行なわれたものは散見されるが、打面調整はほとんど認められない。（瀧川・山口）

#### k, 碎片

碎片は、合計412点が出土している。定型的石器や加工痕・使用痕有剥片・石核などを除いた石器類の中から、長幅ともに1cm未満のものを抽出し、碎片とした。総資料数の17.5%を占める碎片には、剥片剥離作業の際の打面調整中に生じたもの、剥片剥離作業にともなって副次的に生じたもの、石器の2次加工によって生じるものなどが含まれるであろう。しかし、これらの識別は、資料が小さいせいもあって、一部を除いて不可能である。実測図の提示は行なわない。（山口）

#### l, 石核・石核素材・原石破碎片

石核は、合計160点がある。下位文化層の石器類の6.8%を占める。

再三、サヌカイト製の石器類とチャート等製の石器類の剥片剥離技術には大差があることは、言及を重ねてきたが、石核もやはり両者に大きな形態差が認められた。サヌカイト製石核類は横長剥片剥離技術の、チャート等製石核は縦長剥片剥離技術と貝殻状・不定形剥片剥離技術である。石核の形状を観察することで推定できる技術には限界があり、接合資料から復元される剥片剥離技術の分類に当てはめながら、両者を分離して、形態を説明していこう。

他に石核の素材と考えられるチャート製の塊状材が合計4個ある。なんらかの事情で剥片剥離作業に供されなかったものと推定される。また、チャート材で、石器製作に供されるのと同様の石材でありながら、特に剥片剥離痕や加工痕はなく、すべての面が節理面でおおわれる直径2cm以下の小さな原石破砕片があり、これも人為的なものである可能性が残る。石核素材や原石破砕片は、以下の検討の対象から外し、また図示はしない。

#### サヌカイト製石核（第148図～第156図）

サヌカイト製石核は、合計56点のうち53点を図示した。サヌカイト製石核を観察して推定できる剥片剥離技術によって石核を区別すると、剥片素材の石核の表裏の片面から横長剥片または貝殻状・不定形な剥片を剥離するもの、表裏両面から横長または貝殻状・不定形剥片を剥離したもの、縦長または貝殻状・不定形な剥片を剥離したもの、その他の手順が認められるもの、の4群に分けられる。なお、母岩を分割・剥片剥離して、製品素材剥片剥離作業用の石核素材となる大型剥片や分割材を剥離するものは、存在しなかった。それぞれの群には、さらに細別も可能なので、群別に形態を観察していこう。

**A類** 剥片を石核素材とし、その打面または側縁に作業面を設定、表裏の片面を打面として、剥片剥離を行なったもので、横長剥片や貝殻状・不定形剥片が剥離される。剥離作業面で、作業面幅いっぱい目的剥片を一方に後退しながら剥片剥離が行なわれるもの(A1類)、作業面幅よりも幅狭の目的剥片を左右に移動しながら剥片剥離作業が行なわれるもの(A2類)、の2類に細分できる。

**B類** 剥片を石核素材とし、その打面または側縁に作業面を設定するが、表裏両面を打面と作業面として剥片剥離作業を行なったもので、貝殻状・不定形剥片や横長剥片が剥離される。剥片剥離作業は、作業面上を左右しながら、適時表裏逆転して進行するもので、剥離作業面の設定部位によって、素材剥片の打面部側縁にのみ剥離作業面を設定するもの(B1類)、打面部側縁と併せて他の側縁にも剥離作業面を設定するもの(B2類)、の2類に分類できる。

**C類** 厚手の板状剥片または分割材を石核素材とし、高さのある1面に作業面、小口部などに打面を配して剥片剥離を行なったもので、縦長または不定形剥片が剥離される。

**D類** その他の剥片剥離技術の類別が難しいが、剥片剥離作業が行なわれた一群。

A類には、E2.55, E6.3, F3.55, I8.14, J8.7, K7.71などがある。必ずしも点数は多くない。

A1類のE2.55は、剥片素材の石核で、素材剥片の打面部に剥離作業面、背面側に打面部を設定し、主軸方向に後退しながら少なくとも2枚の横長剥片を剥離したものである。打面部右半には打面調整が認められる。剥離作業面いっぱいの横長剥片が剥離され、先行する横長剥片は翼状を呈した可能性がある。E6.3は、素材の形状は不明であるが、一側縁に打面部を設定、打面調整を施して、作業面幅いっぱいに1枚の剥片剥離を行なっている。厚手のF3.55は、厚手剥片素材の石核で、素材剥片の打面部に剥片剥離作業面、背面側に打面部を設定したものである。打面調整は認められない。石核の左半は折断されている。J8.7は、板状の剥片の打面部に作業面、背面に打面部を設定、打面調整を施した後、1枚の横長剥片を剥離したものであるが、剥離された横長剥片は、いわゆる「ファーストフレイク」であろう。作業

面幅よりも剥離痕は狭い。K7.71は、大型剥片の打面部に作業面、背面を打面部として、打面調整無しに貝殻状剥片を剥離したもので、おそらく「ファーストフレイク」1枚のみの剥離であろう。剥離作業面の幅と位置が安定していない。

A 2類にI8.14は、剥片素材の石核で、素材剥片の打面部に作業面、背面側に打面部を設定、作業面の左右から少なくとも2枚の極小横長剥片を剥離したものである。打面調整は認められない。

A 1類に含めたJ8.7とK7.71は、作業面の幅と剥離剥片の幅が対応せず、もし剥片剥離作業が継続していたら打面縁調整か、左右への剥離作業の移動は必然となったと考えられる資料である。両方とも、企画性に乏しい横長または貝殻状剥片が剥離されている。A類全体では、基本的には作業面が素材剥片の打面部に設定され、まれにその他の側縁にも作業面のあるものが認められる。多くは、作業面幅と剥離剥片幅が対応せず、作業面上を左右に移動しながら剥片剥離が進行している。

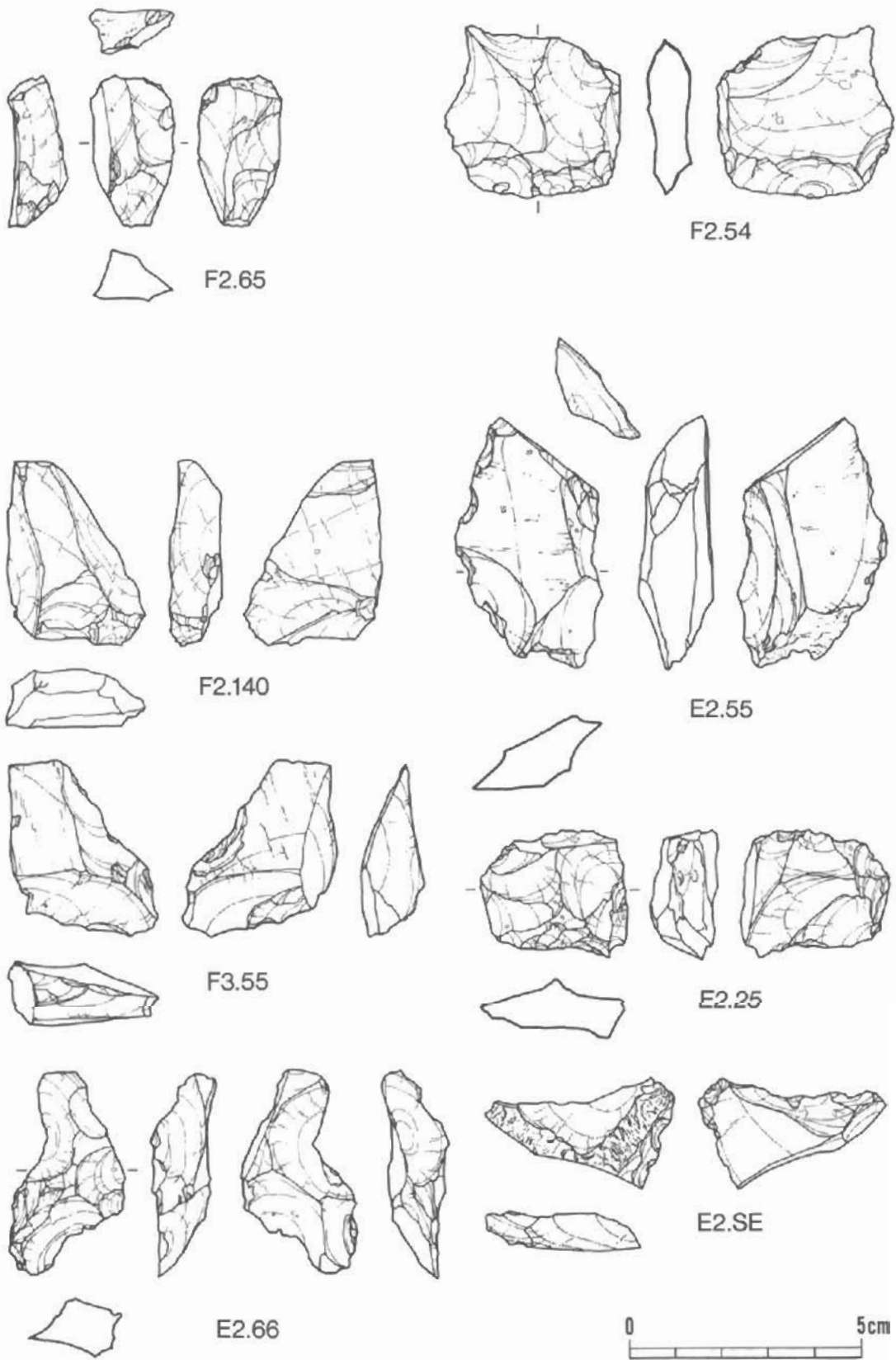
B類には、その他の石核のほとんどが含まれる。F2.54, F2.140, E2.66, F4.35, F8.89, F7.151, D8.22, J4.13, I5.30, L6.4, L5.29, J7.14, K7.40, K7.62, M9.3, L9.15, L10.1, L10.12, K11.25, L10.24, L11.1, M11.8, K12.3, K11.9, K11.26, K10.35, K11.20などである。石核には、作業面の剥離痕と、なんらかの調整痕との識別に困難があるものが多いので、特徴的なもののみ記述・図示するにとどめる。

B 1類のD8.22は、板状材の一側縁を剥離作業面とし、表裏から剥片剥離作業を行なったものであるが、左右両端が折断されている。F2.140は、板状剥片の一側縁に作業面打面を設定した石核であるが、他の側縁は折断されている。F7.151は、薄い剥片の打面部側に剥離作業面を設定、左右に移動しながら極小型の横長剥片剥離が行なわれたものである。J7.14は、表裏両面から極小型の横長剥片を剥離したものである。K7.62は、剥片素材の石核表裏から剥片剥離を行なったもので、腹面側から1枚、打面側から2枚の剥片剥離が行なわれている。打面調整はない。M9.3は、厚手の剥片を石核素材とし、その表裏両面から剥片剥離を行なう。腹面側には、打面調整が認められる。K11.9は、石核素材剥片の打面部側に剥離作業面を配し、表裏から剥片剥離を行なったものであるが、左右が折断されている。K11.25は、薄手の剥片素材の石核で、素材剥片の打面部側両面から、左右に移動しながら剥片剥離作業が行なわれ、横長剥片が剥離されている。反対側の側縁には、刃こぼれ状の剥離痕がある。

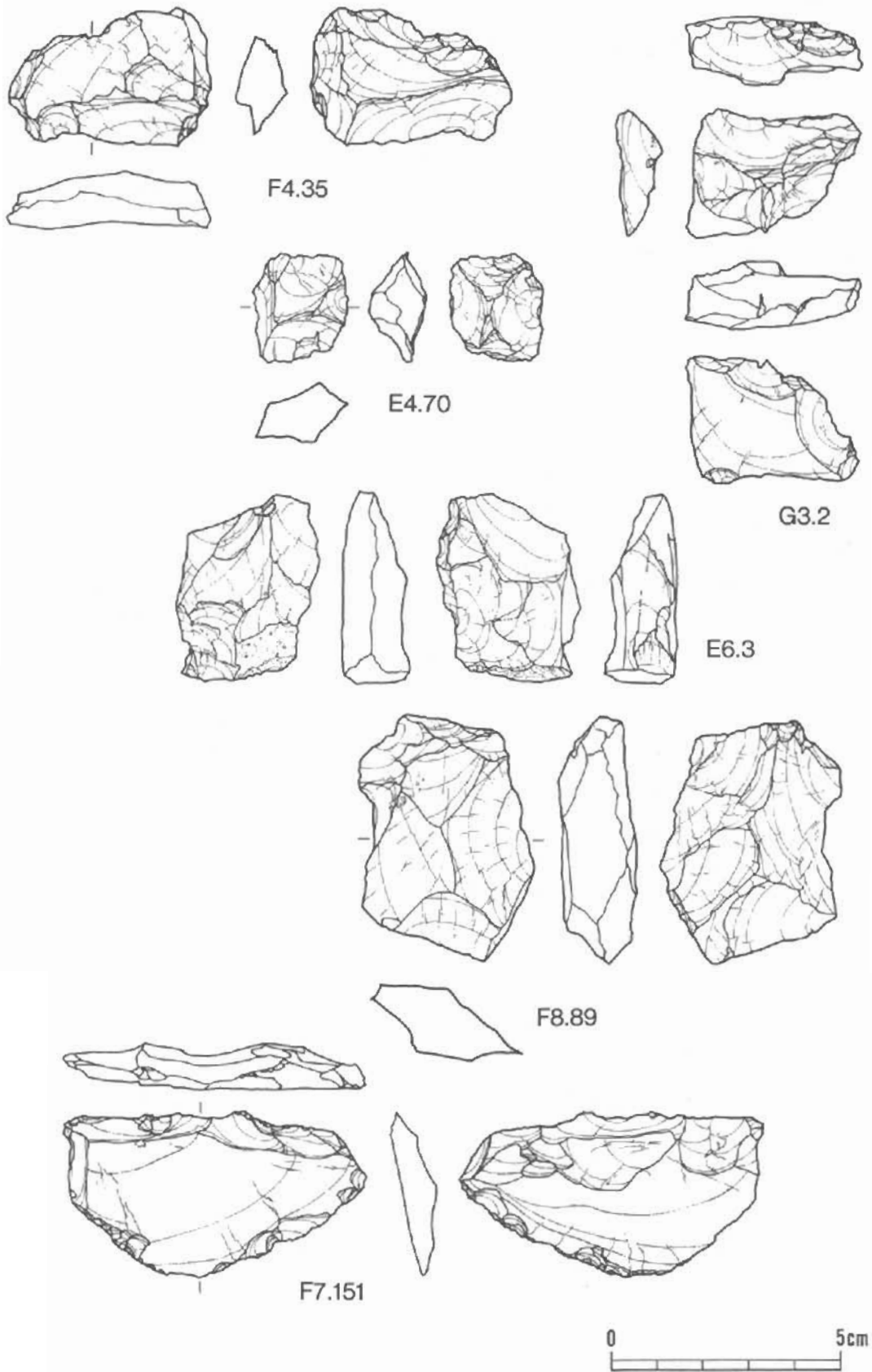
B 2類の E2.66は、石核の表裏・全周囲に剥片剥離作業が進行し、残核状態となったもので、前面・後面に作業部が認められる。終末段階で、貝殻状剥片が剥離されている。石核素材の形状は不明である。F2.54は、石核素材の一側縁に作業面を設定し、表裏から剥片剥離を行なったものである。F4.35は、剥片素材の石核の前面で表裏両面、後面で裏面から剥片剥離を行なったものである。F8.89は、分割材または大型剥片を石核素材とし、その全周囲から表裏両面に剥片剥離作業を行なったもので、大型の不定形剥片が剥離されている。K7.40は、剥片素材の表裏両面からの剥片剥離作業面が、2側縁に設定されたもので、極小型剥片が剥離されている。L6.4は、石核剥片素材の打面部側縁には表裏の、反対側の側縁には背面側に、剥離作業面を設定したもので、横長剥片が剥離されている。L10.1は、大型の剥片の打面部側に主剥離作業面を配し、左右に移動し、適時表裏を入れ替えながら貝殻状剥片を剥離したものである。反対側には、浅い剥離痕いくらかが認められる。L10.12は、大型の剥片の左右両側縁に剥離作業面を設定したものである。L10.24は、厚手の剥片の左右両側縁に剥離作業面を設定したもので、両側縁とも表裏両面で剥片剥離作業が行なわれ、極小剥片が剥離されている。

A類・B類には、A 1類・A 2類、B 1類・B 2類全部に共通する技術的属性が多く認められる。い

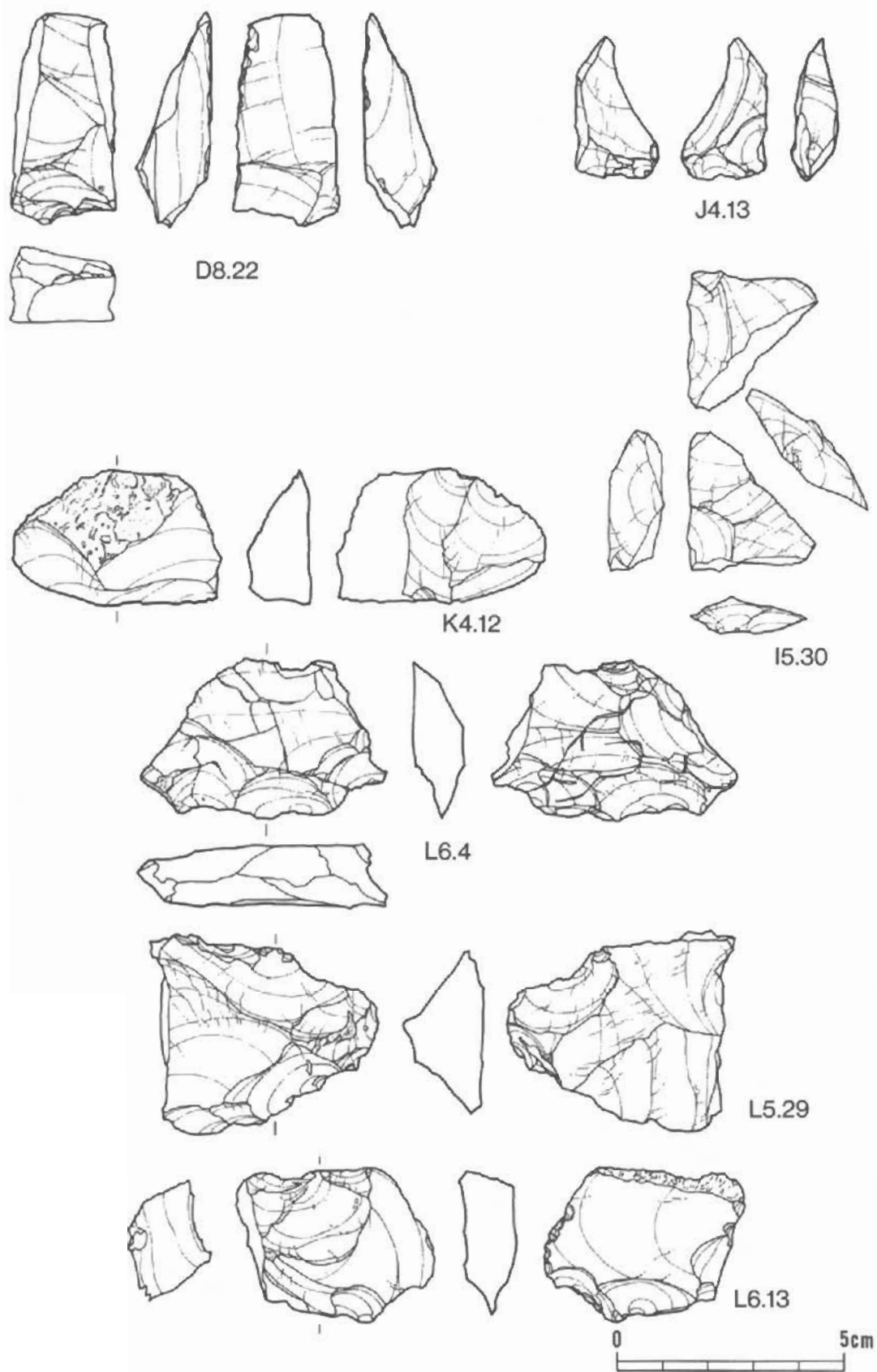
第2節 下位文化層の遺物



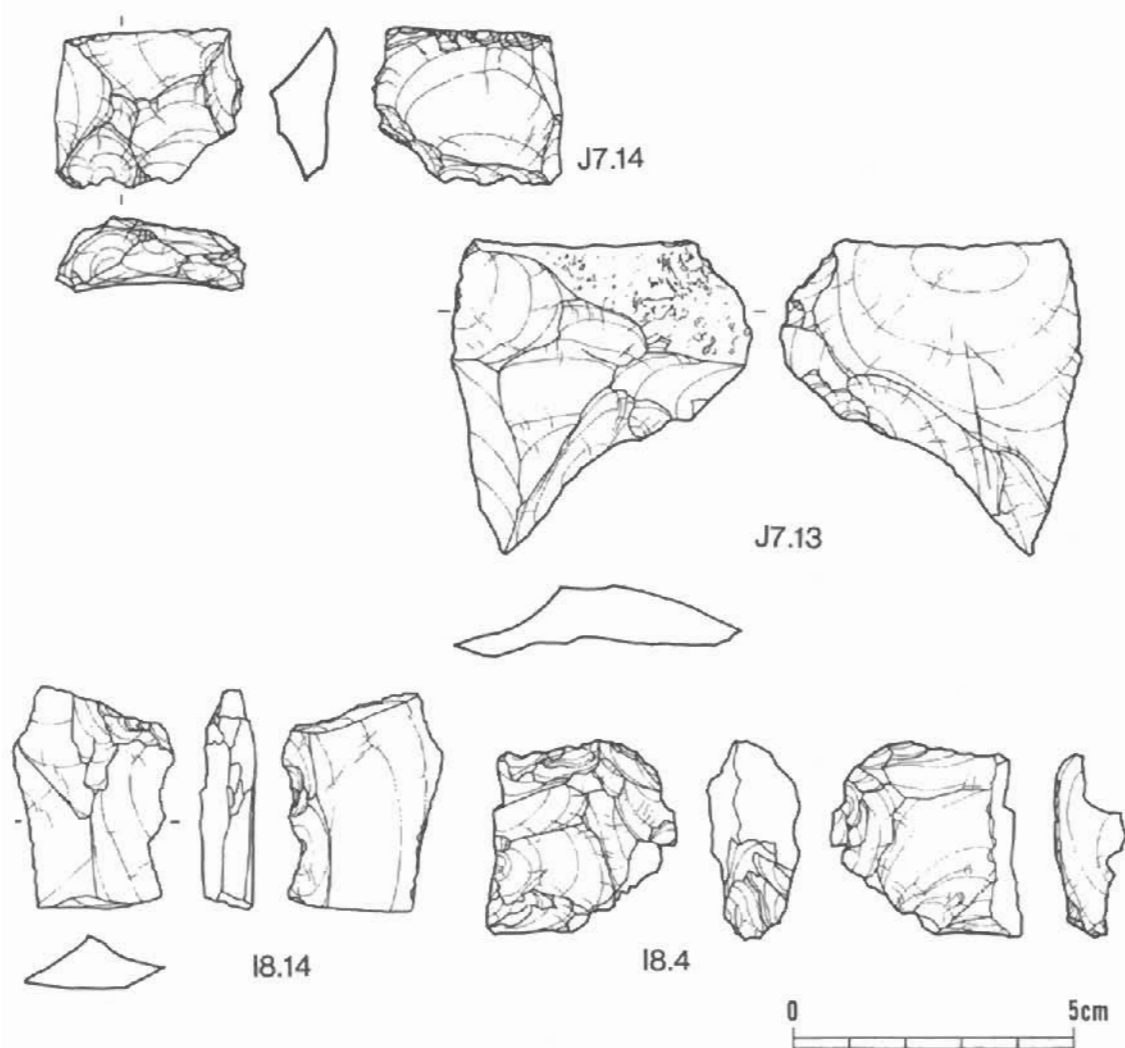
第148図 下位文化層石核実測図1



第149図 下位文化層石核実測図 2



第150図 下位文化層石核実測図3



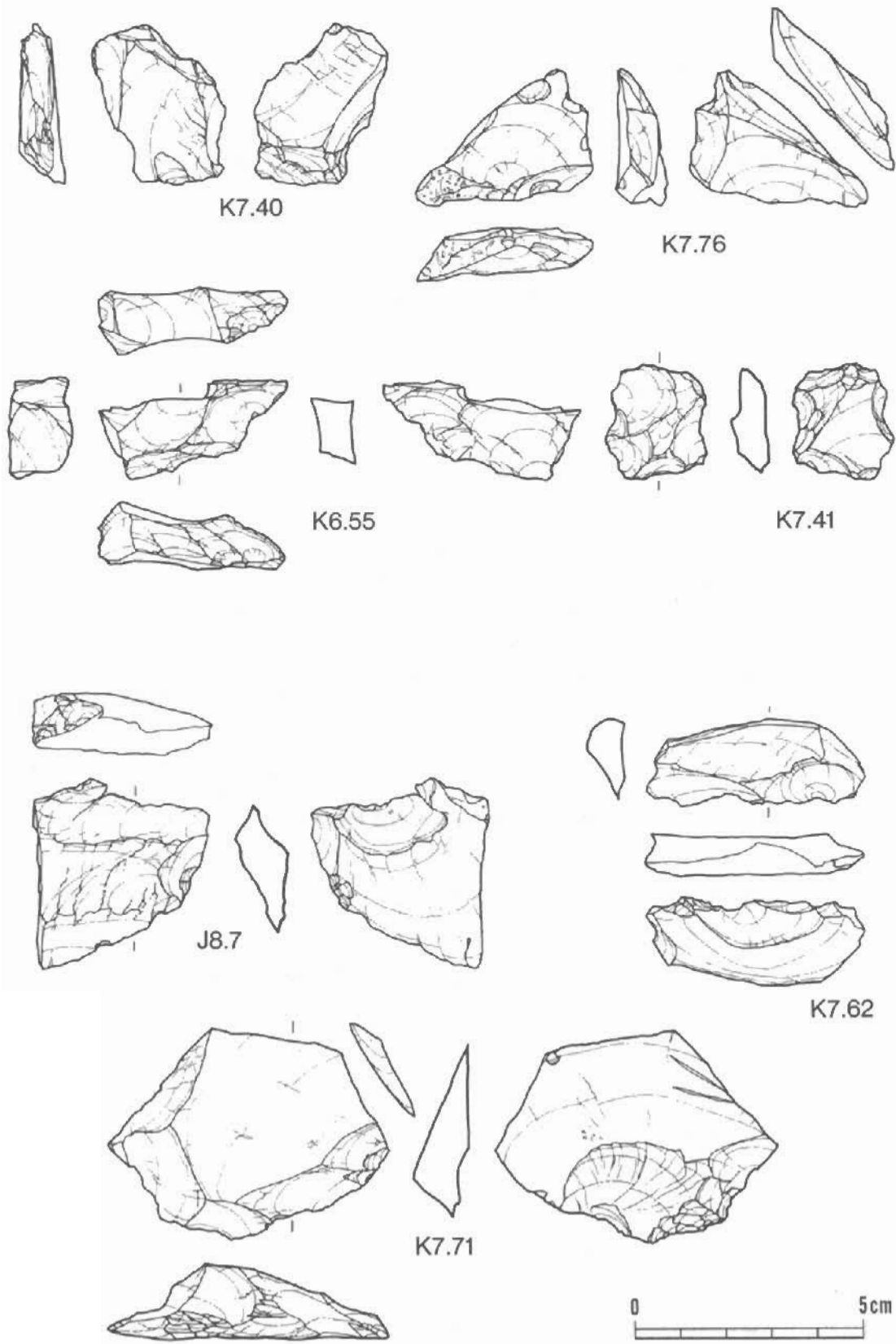
第151図 下位文化層石核実測図4

ずれの場合も、一部の石核を除いて素材剥片の大きさ・形状に大差ないこと、打面調整が施されるものが少なく、打面縁調整の方が盛んであること、石核が小さく残核状態のものには複数の作業面が設定され、初期の石核には作業面は打面部のみに設定されるものが多く認められること、などである。A1類の一部を除いて、A類とB類の石核に見られる剥片剥離技術の構成属性は、相互に互換性を有しているといえよう。一連の作業の選択としてA・B両類になるとも推定できる。

C類には、F2.65, I8.4, J7.13, J9.19, J9.35, K4.12, K6.55, K11.46, L6.13, L10.15, M10.1などがある。分割材を素材とするものと剥片素材のもの2類があるが、それぞれを組成する工程的技術属性には大差ない。縦長剥片を目的とした石核は認められない。適時、貝殻状剥片の剥片剥離に供されたと考えられる多様な石核類が認められる。

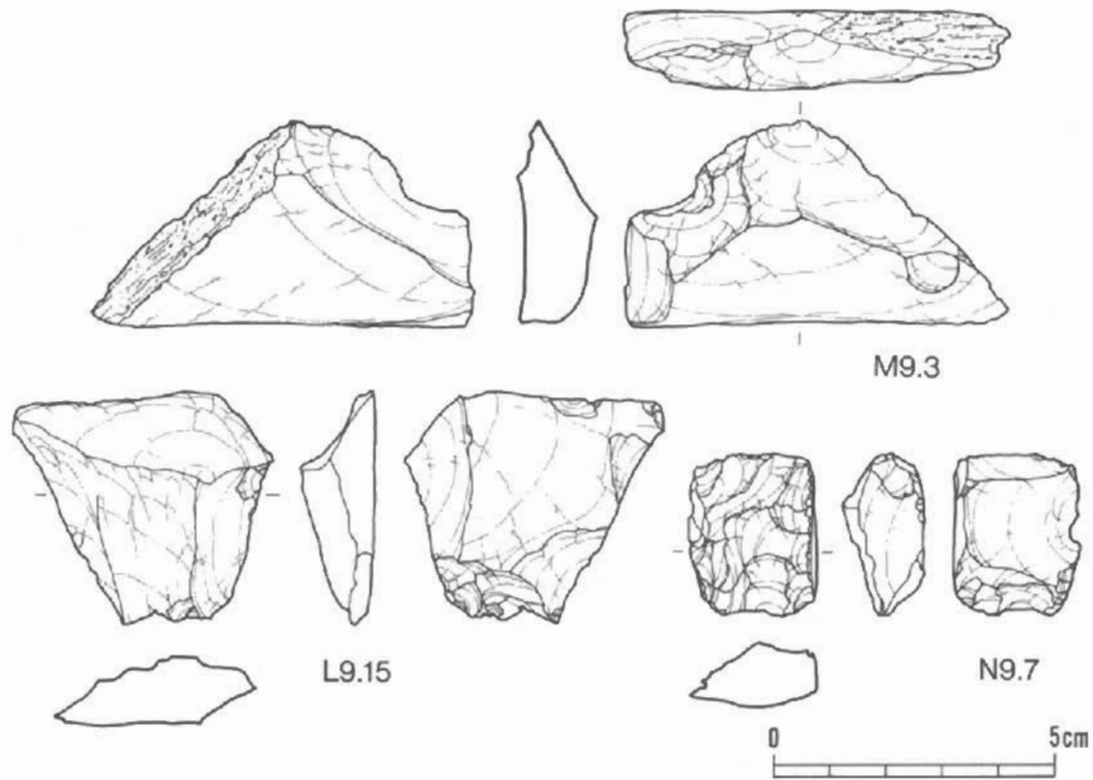
L6.13は、厚手の剥片の腹面側を作業面として、自然面を打面として貝殻状剥片を剥離したものである。J7.13は、自然面を打面として大型の貝殻状剥片を剥離したもので、ほぼ残核状態であるが、その側縁から横長剥片剥離が始められている。I8.4は、折断された大型剥片または分割材の分割面を打面として貝殻状剥片を剥離したものである。K6.55は、本来横長剥片石核であったと考えられるものを折断して、その分割面を打面として寸詰まりな縦長剥片を剥離したものである。J9.19は、自然面の付着した剥片の打面部周辺から貝殻状剥片を剥離したものである。J9.35は、おそらく分割された大型剥片の分割面を打

第2節 下位文化層の遺物



第152図 下位文化層石核実測図5





第153図 下位文化層石核実測図6

面として、貝殻状剥片を剥離したもので、表裏・左右からも剥片剥離されている。L10.15は、自然面のついた大型剥片を分割したものを素材とし、その分割面や小口部を打面、腹面を作業面として、貝殻状剥片を剥離するものである。M10.1は、自然面のついた剥片の腹面側全周から貝殻状剥片を剥離するものである。

D類には、E2.25、E2.SE、E4.70、K7.41、M10.2、N9.7などがある。一見、楔形石器などの全面調整された定型石器の形状に類似するものが含まれるが、側縁のつぶれない場合、小剥片の剥離痕がある場合は、石核D類とした。

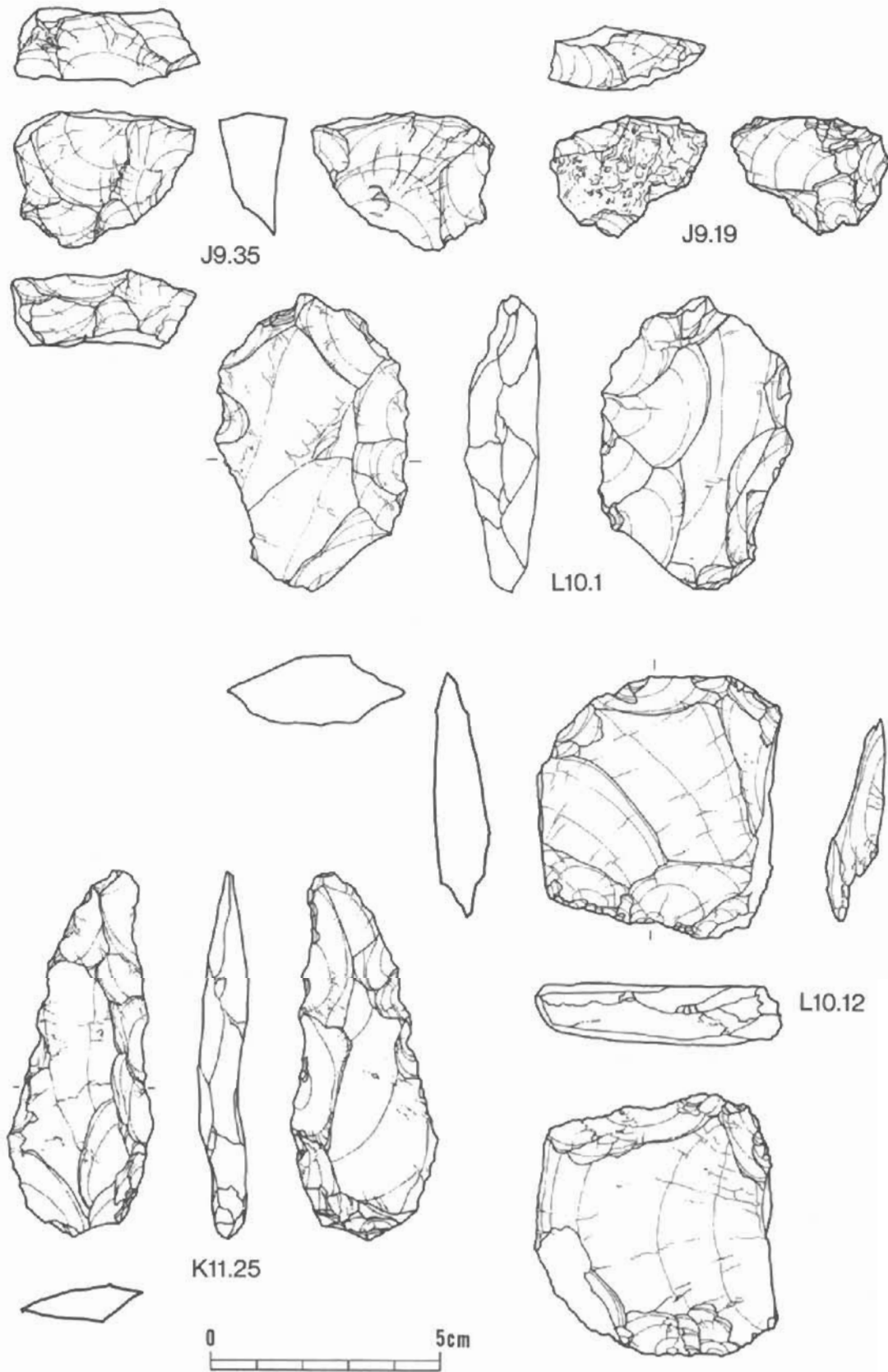
E2.25、E4.70、K7.41、N9.7は、楔形石器に類した石核で、その側縁全周囲から微小剥片が剥離されている。M10.2は、一見左右を折断によって整形し、基部裏面を調整する台形様石器に類似する。E2.SEは、削器等の調整と類似する剥離痕を有する。

#### チャート等製石核（第157図～第173図）

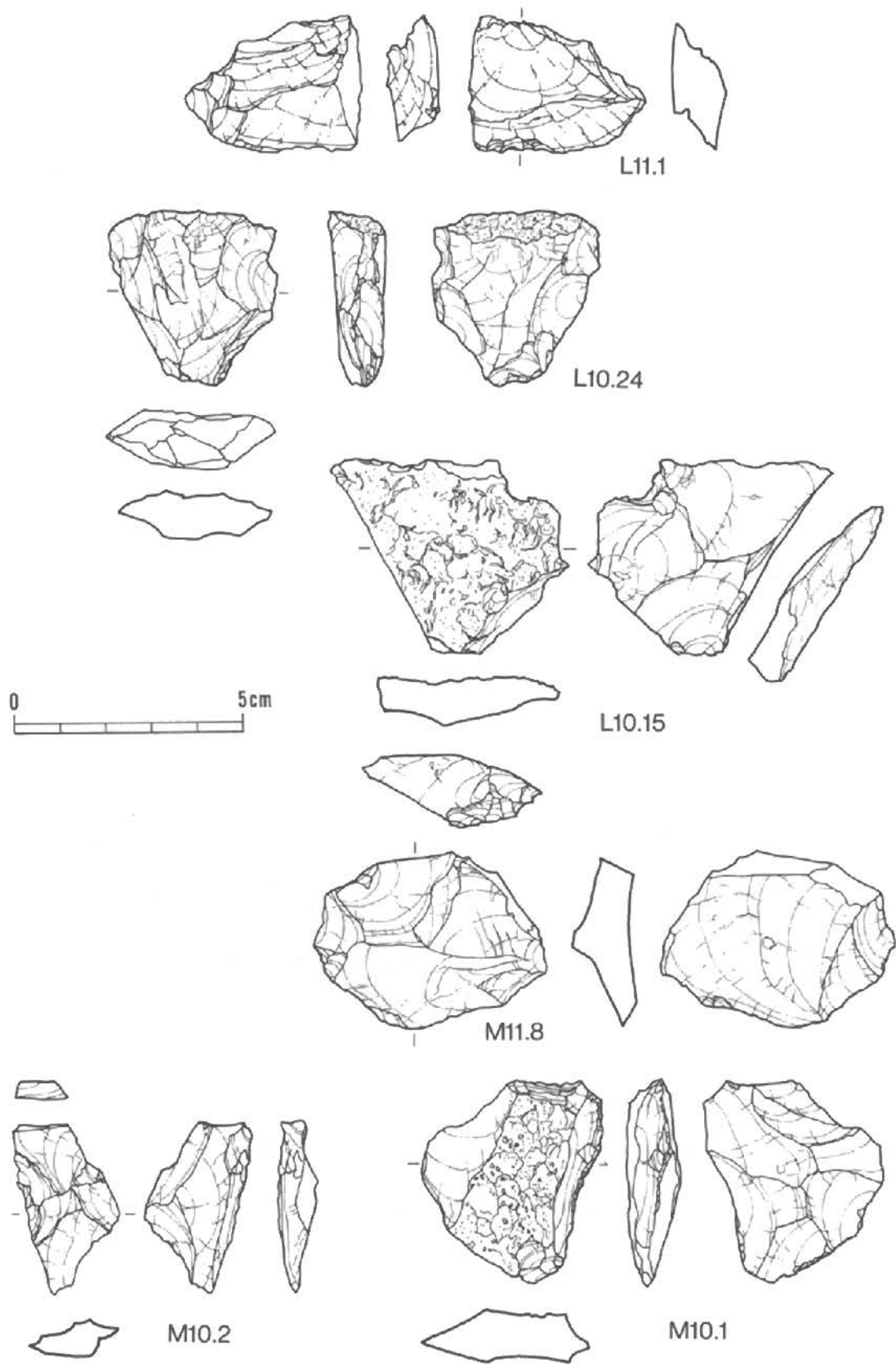
チャート等製の石核は、合計104点のうち76点を図示した。チャート等製石核を観察して推定できる剥片剥離技術によって石核を区別すると、塊状や高さのある板状材の素材の石核から縦長剥片を剥離するもの、塊状や高さのある板状材の素材の石核から貝殻状・不定形な剥片を剥離するもの、板状の石核の側面から横長または貝殻状・不定形剥片を剥離したもの、母岩を分割して、大型剥片や分割材を作るもの、の4群に分けられる。それぞれの群には、さらに細別も可能なので、群別に形態を観察していこう。

**A類** 塊状または高さのある板状材の1面を剥離作業面として、縦長剥片を剥離する石核。打面が固定されているもの（A1類）と、上下・左右に打面を移動させるもの（A2類）に細分することができる。剥離作業面を複数持つものも含める。

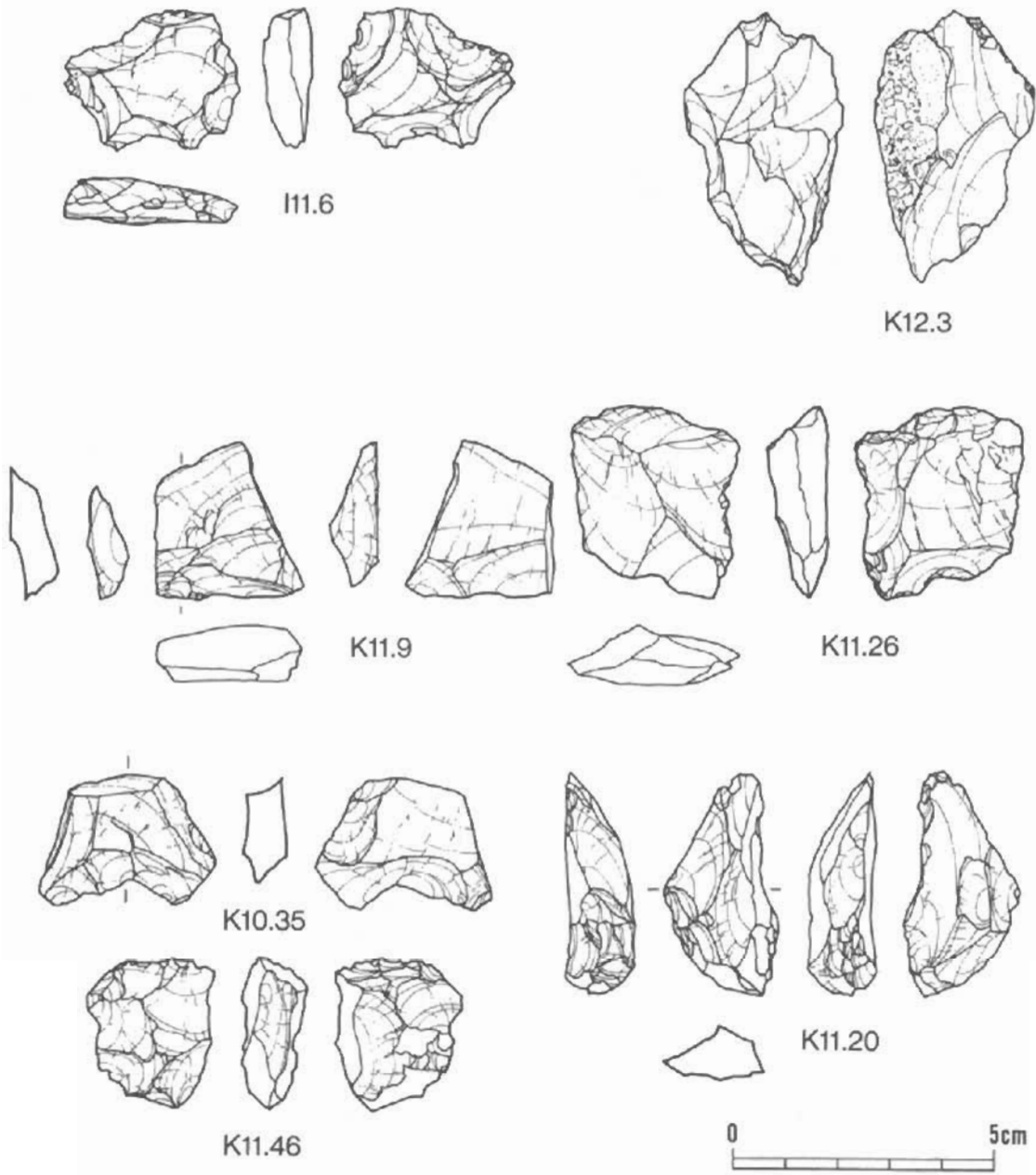
**B類** 塊状または高さのある板状材の1面または複数面を作業面として、貝殻状または不定形剥片を剥



第154図 下位文化層石核実測図7



第155図 下位文化層石核実測図 8



第156図 下位文化層石核実測図9

離するもの。A類に類似した資料も含まれるが、比較した目的剥片剥離痕がより寸詰まりである。全体として、打面の移動が激しい。剥離作業面が固定的なもの（B1類）と、剥離作業面も適時移動し、石核がサイコロ状に作業面で覆われるもの（B2類）に細分できる。

C類 板状材または剥片素材の石核で、その側面に剥離作業面を設定し、貝殻状または不定形剥片を剥離したもの。

D類 大型の円礫・亜角礫から、大型剥片・分割材を剥離したもの。

A類は、必ずしも主体となる剥片剥離技術ではなく、石核数も僅かに留まる。石核の大きいほど、作業面と打面が固定的で、小さいほど移動性が高いように観察されるが、点数も少なく、技術的な差異としてあえて細分する根拠に乏しい。

A1類としては、以下のものが認められる。F3.12は、亜角礫の3側面を剥片剥離作業面とし、自然面を打面にして剥片剥離作業を行なったものである。F3.52は分割材の分割面を打面としたもの、G4.14は一面から打面調整を施して作業面いっぱい目的剥片剥離が行なわれている。I4.19は小亜角礫の自然面から1方向に剥片剥離がなされている。K10.6は、分割された小円礫の分割面を打面としたものである。

A2類としては、以下のものがある。F5.173は上下2方向から作業面を変更して縦長剥片が剥離されている。L5.19は3側面に剥離作業面が設定されている。

B類は、実質的に剥片剥離技術の主体となっているもので、多くの石核が含まれる。図示するにとどめる。

B1類には、D7.1, D8.26, E2.62, F5.75, J11.26, I13.7などがある。作業面と打面が固定的であるが、剥離される剥片は小不定形剥片で、石核自体もA類より縮小した傾向がある。

B2類は、E4.42, E4.71, F1.SE, F2.63, F2.111, F2.117, F2.127, F2.132, F2.139, F2.145, F3.20, F4.26, F4.31, F4.102, F4.117, F5.58, F5.156, F5.69, F6.28, F6.37, F7.2, F7.114, F7.129, G3.10, G4.8, G4.9, G6.6, G6.SE, H4.17, G6.25, G6.24, H5.2, H6.126+I6.10, H6.174, I4.33, I7.11, J4.19, J4.31, J4.40, J5.11, J5.13, J5.39, J11.34, K4.6, K5.12, K5.16, K5.28, K10.4, L5.40, L6.10など多数が含まれる。打面と作業面の転移が激しく、サイコロ状を呈するものが多く認められる。一部には、剥片の一面を作業面とし、その周囲を巡って剥片剥離を行なう円盤状の剥片剥離石核も含まれる。

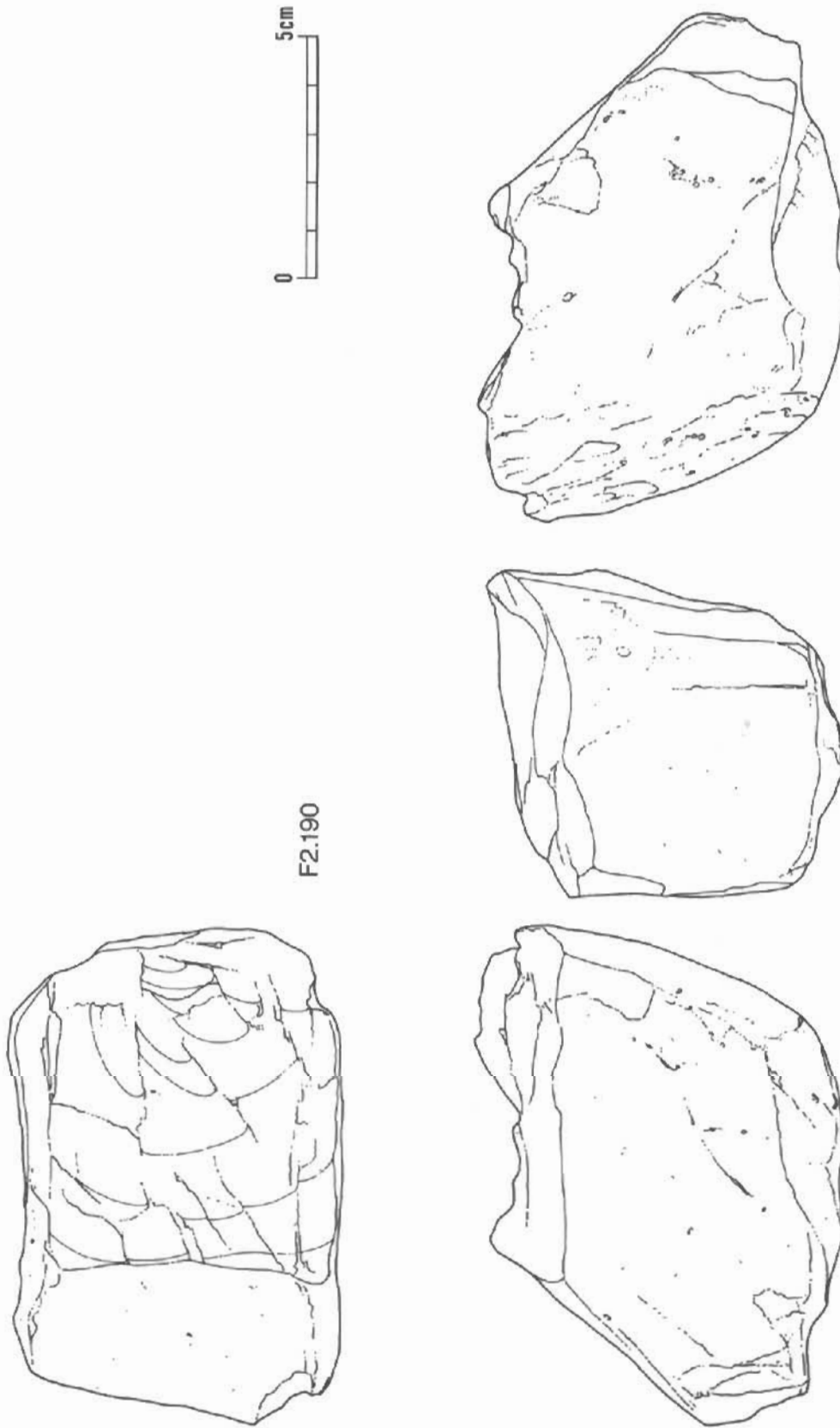
C類には、E7.7, F2.76, F5.33, G7.7, H6.35, H6.105, H6.88, H6.118+I6.18, I5.40, K4.4などがある。基本的には、B類の板状材の一面に作業面を持つものより薄手のものが該当するが、画然とした区別はできない。剥片剥離される目的剥片は、貝殻状を呈するものが多い。

A類・B類・C類は、石核の形状、剥片剥離工程の進行の仕方、個々の技術で、ほとんど差異はない。石材の形状によって技術的選択が強制されたり、剥片剥離作業の進行によって石核が縮小し、それぞれの類の状態に到達していると考えた方が妥当である。通常は、B類の状態で石核が廃棄される場合が多かったことを示しているといえよう。

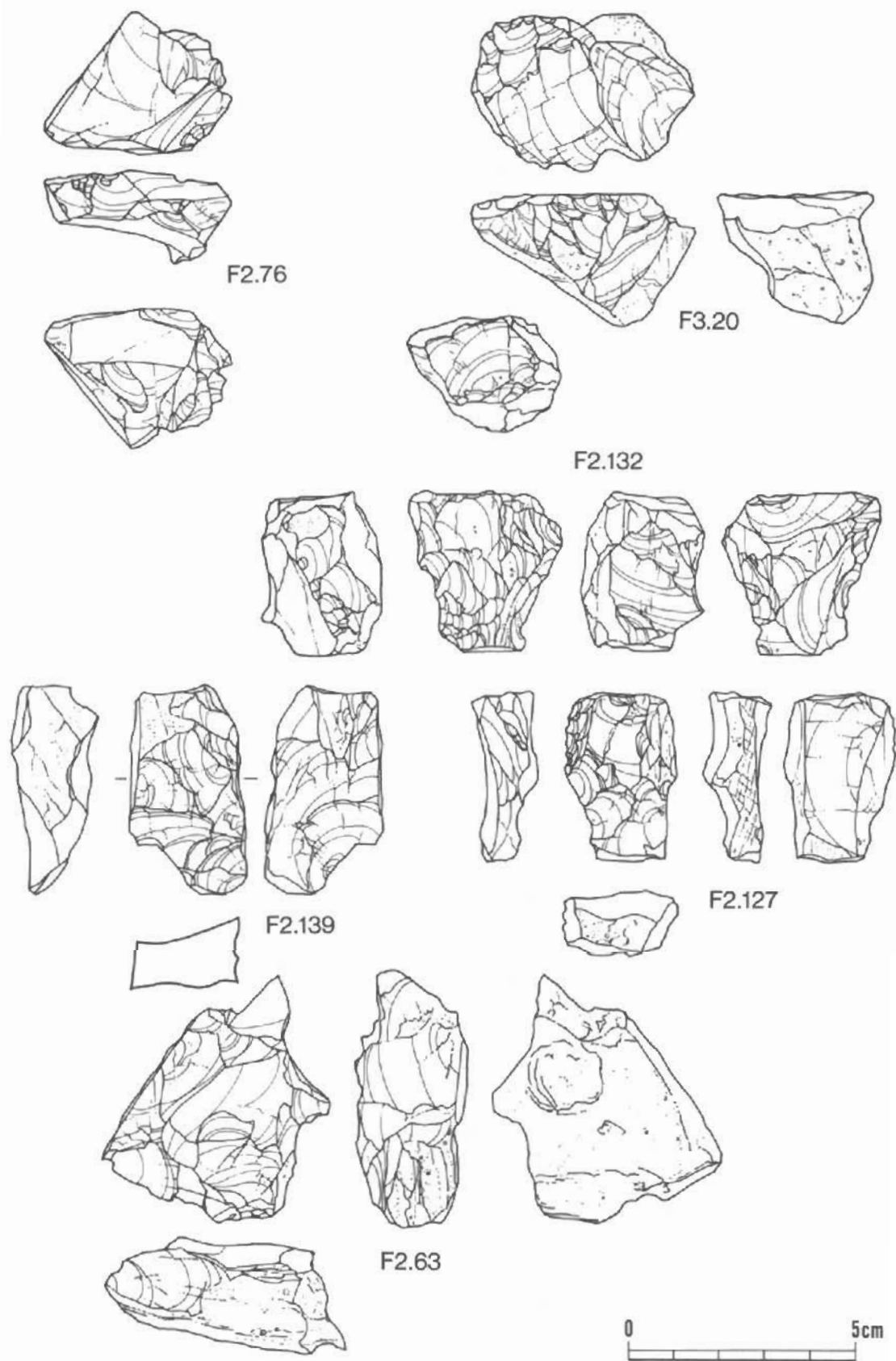
D類には、F2.190とK10.20の2点があるに留まる。

F2.190は、直径15cmほどの亜円礫の一部が、自然面を打面にして除去された状態の、最初期の石核である。剥離されたのは、帽子状剥片に当たる。K10.20は、材質の悪い亜円礫を分割して、廃棄された「芯」の部分に当たる。

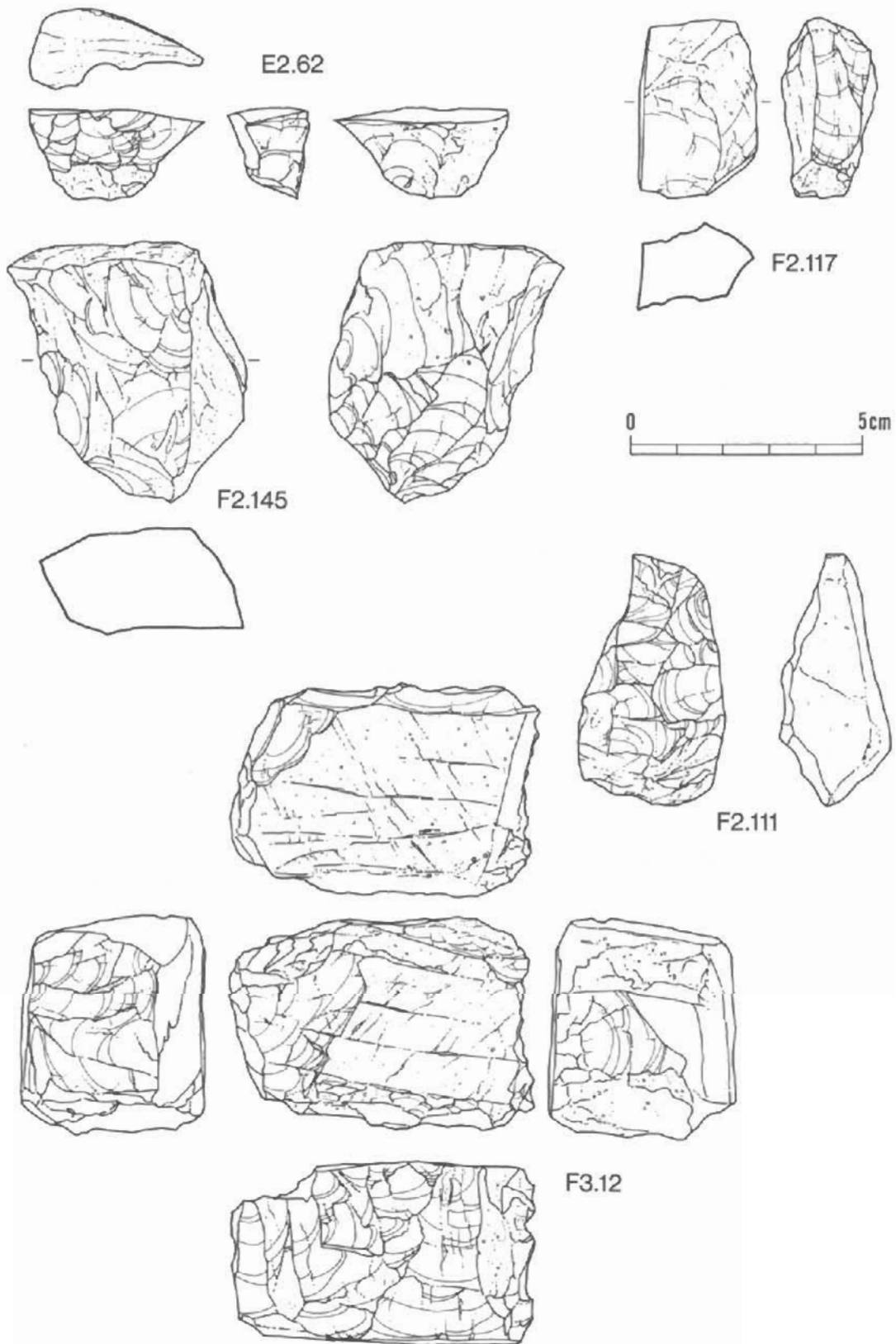
この類の石核は、剥片剥離を進める上で、最初期の工程が有れば、一定比率で出現すると予測できる



第157図 下位文化層石核実測図10

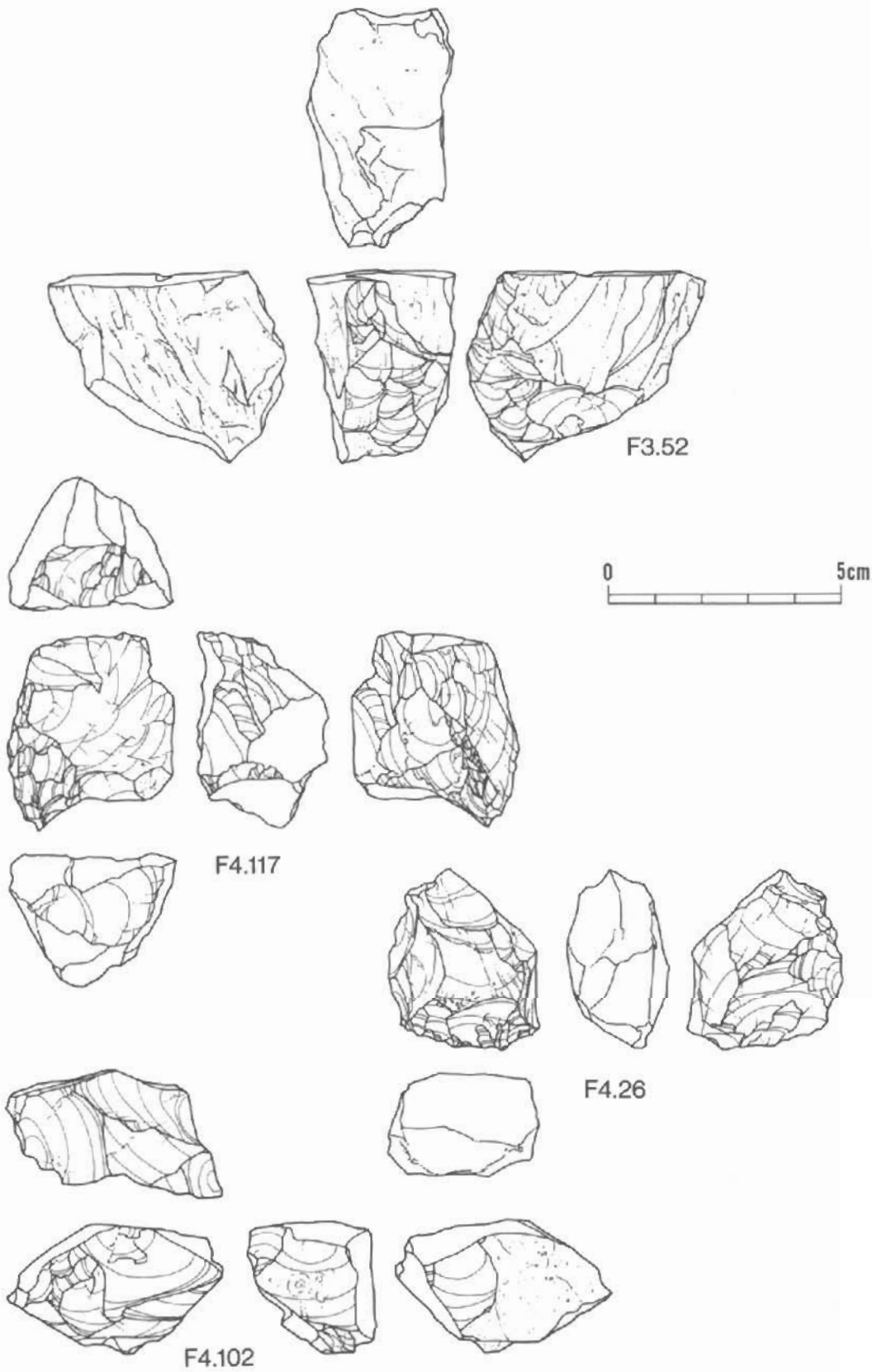


第158図 下位文化層石核実測図11

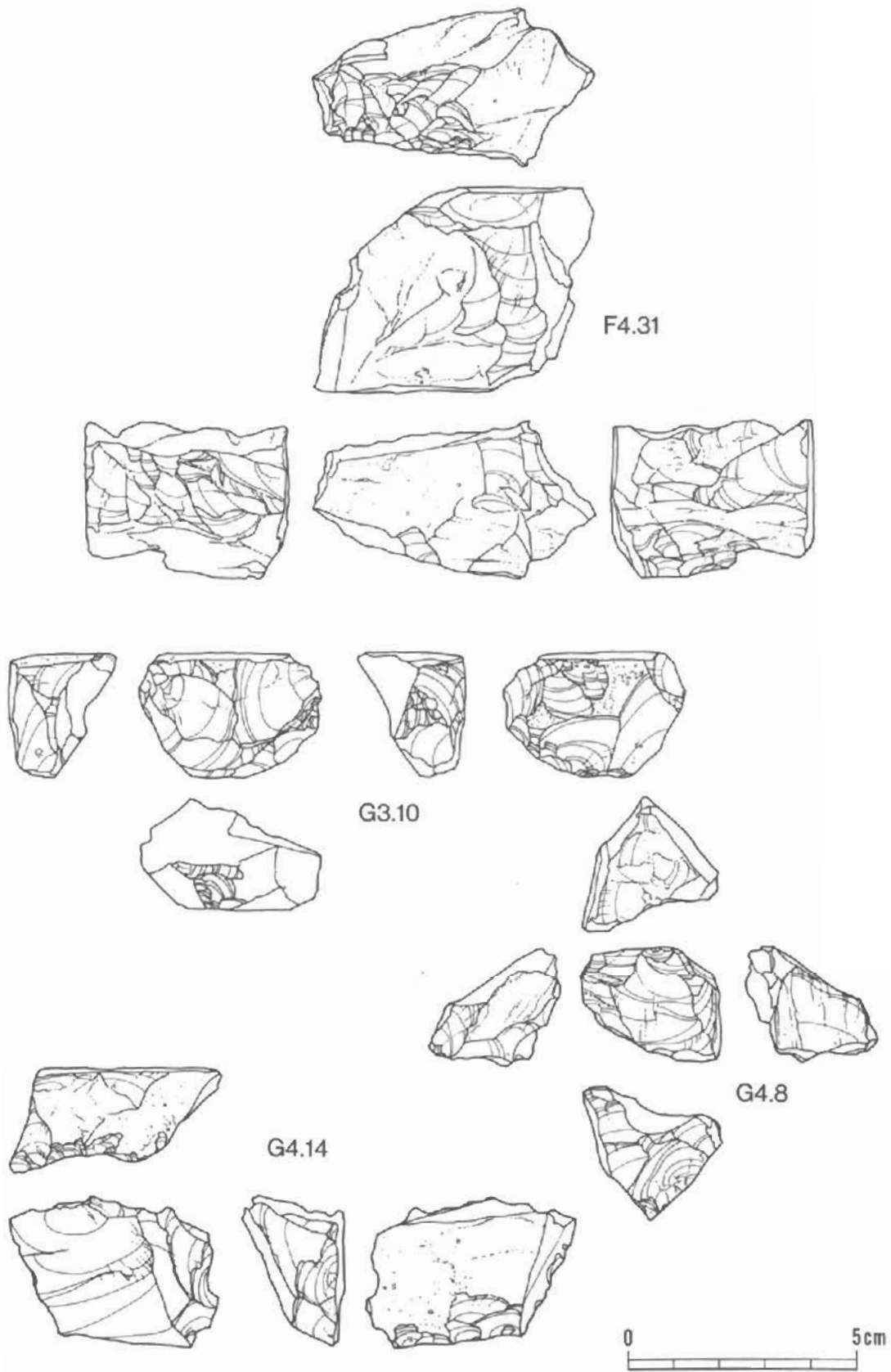


第159図 下位文化層石核実測図12

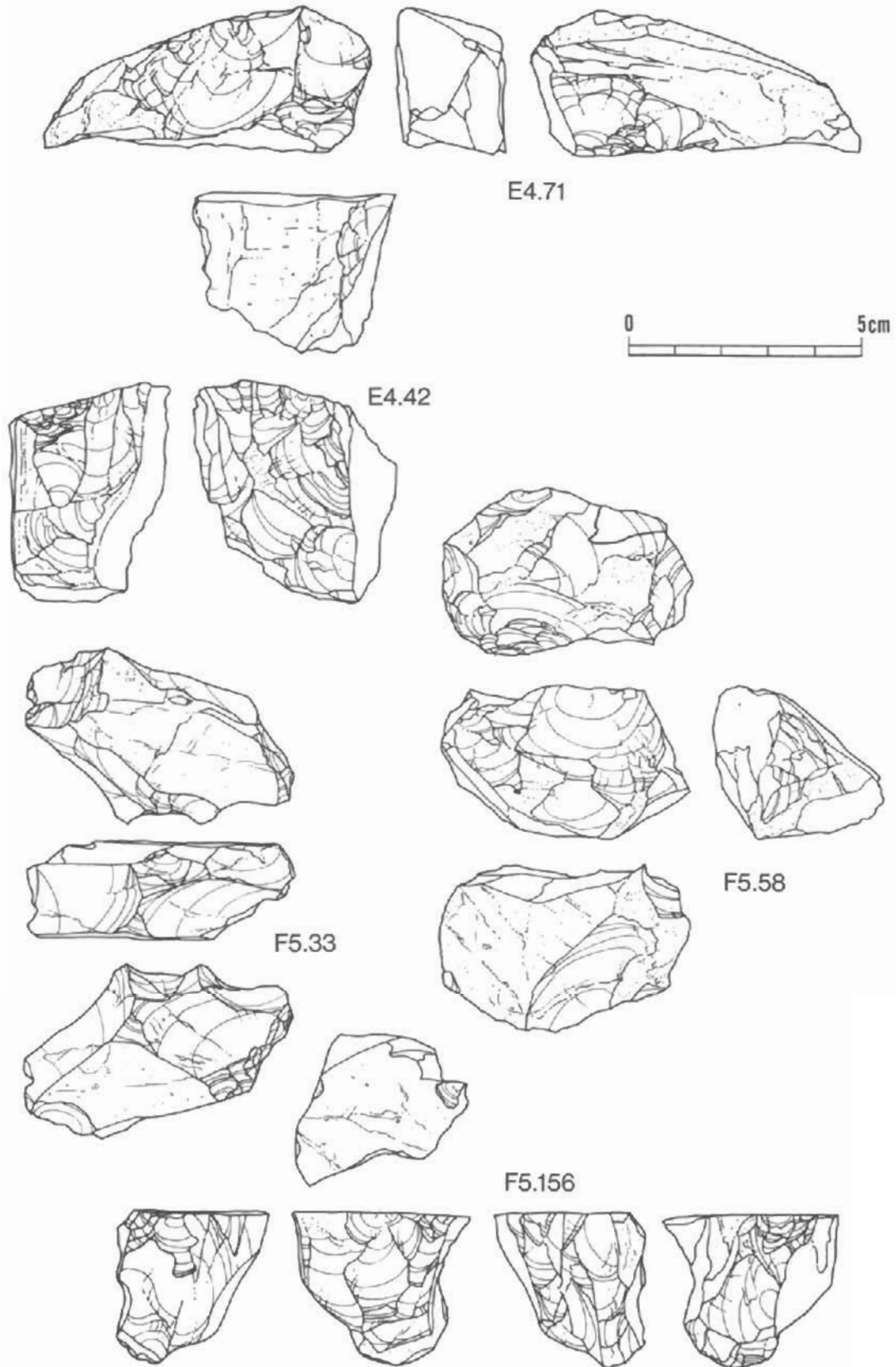




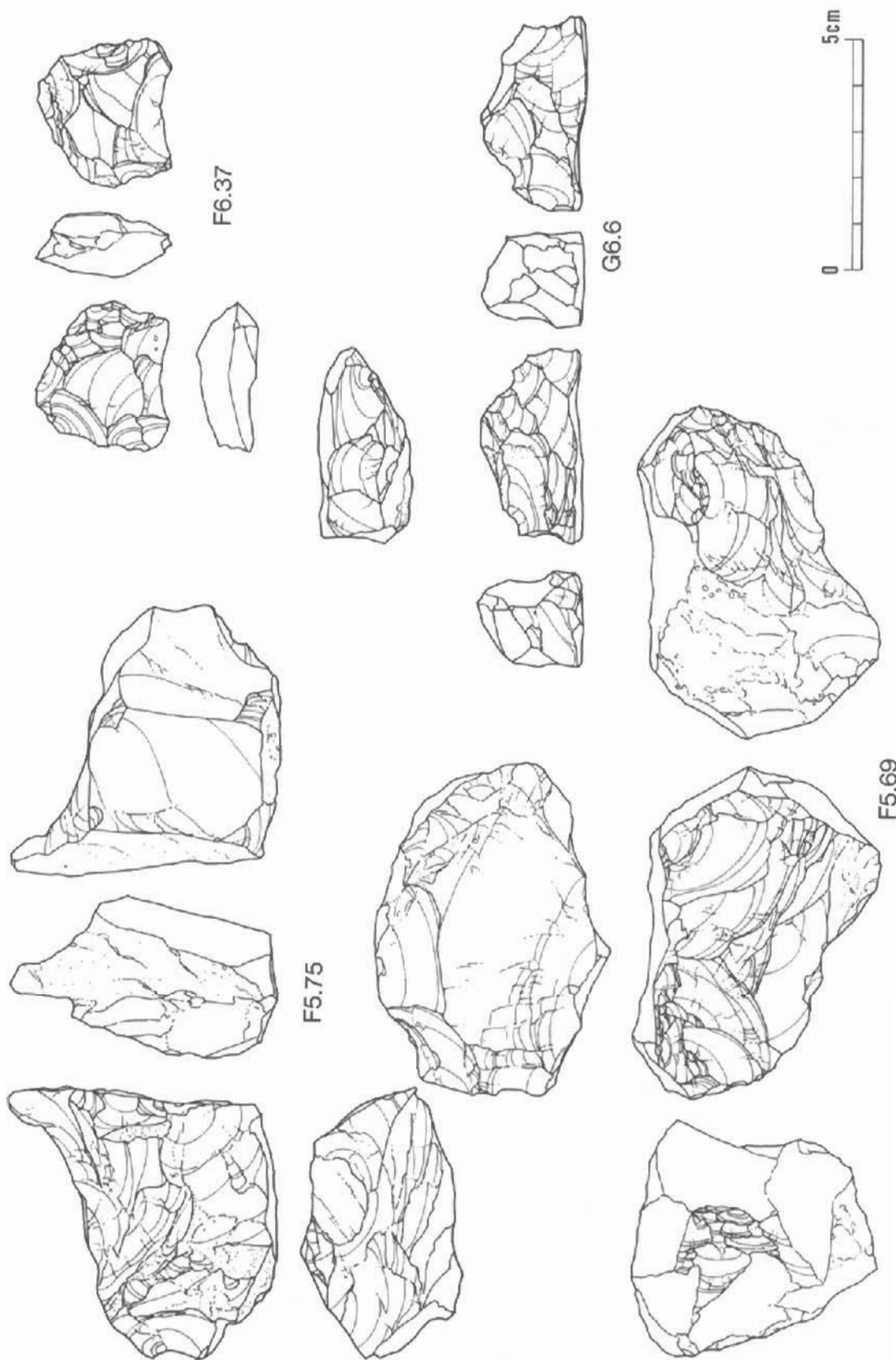
第160図 下位文化層石核実測図13



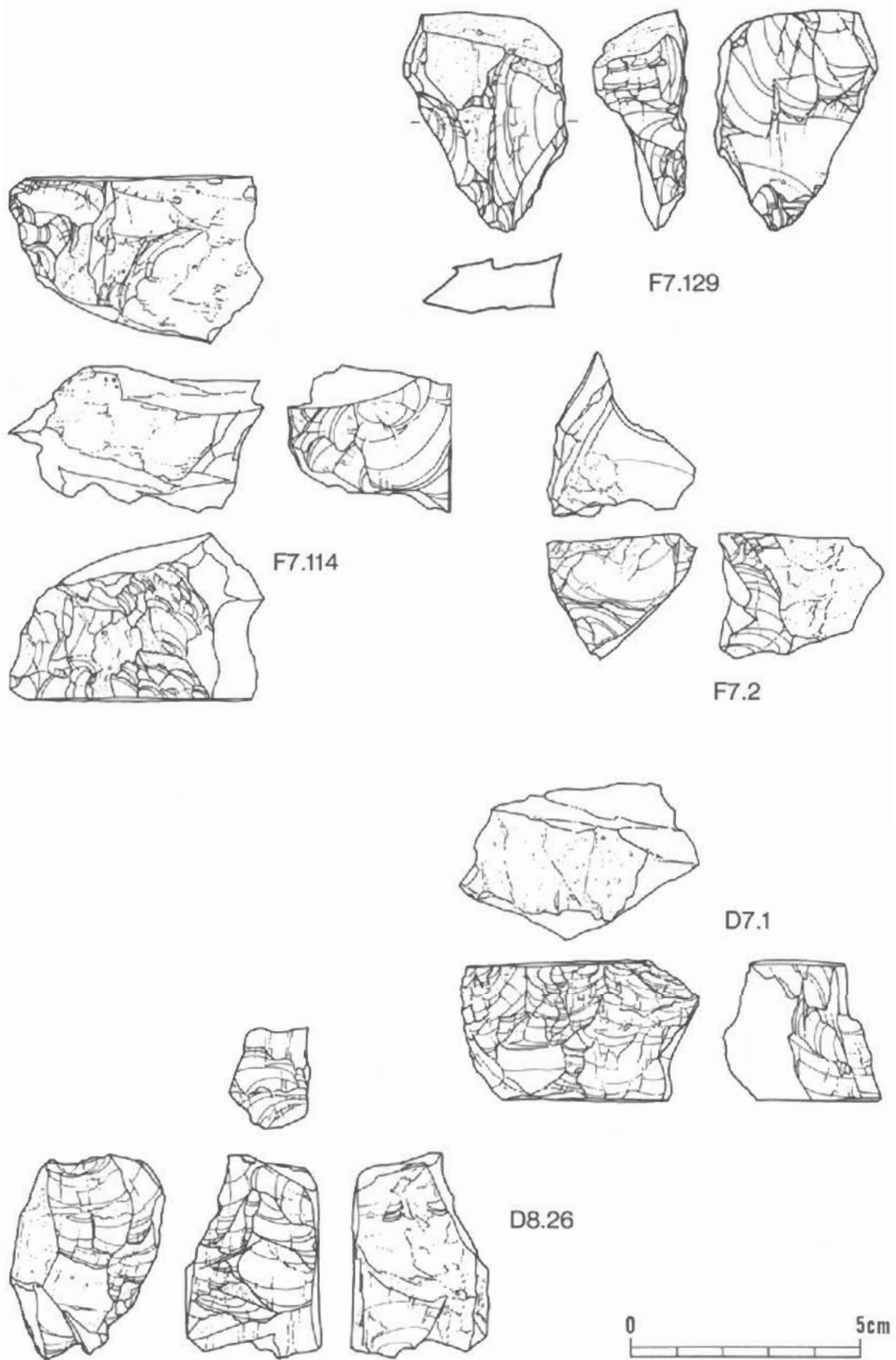
第161図 下位文化層石核実測図14



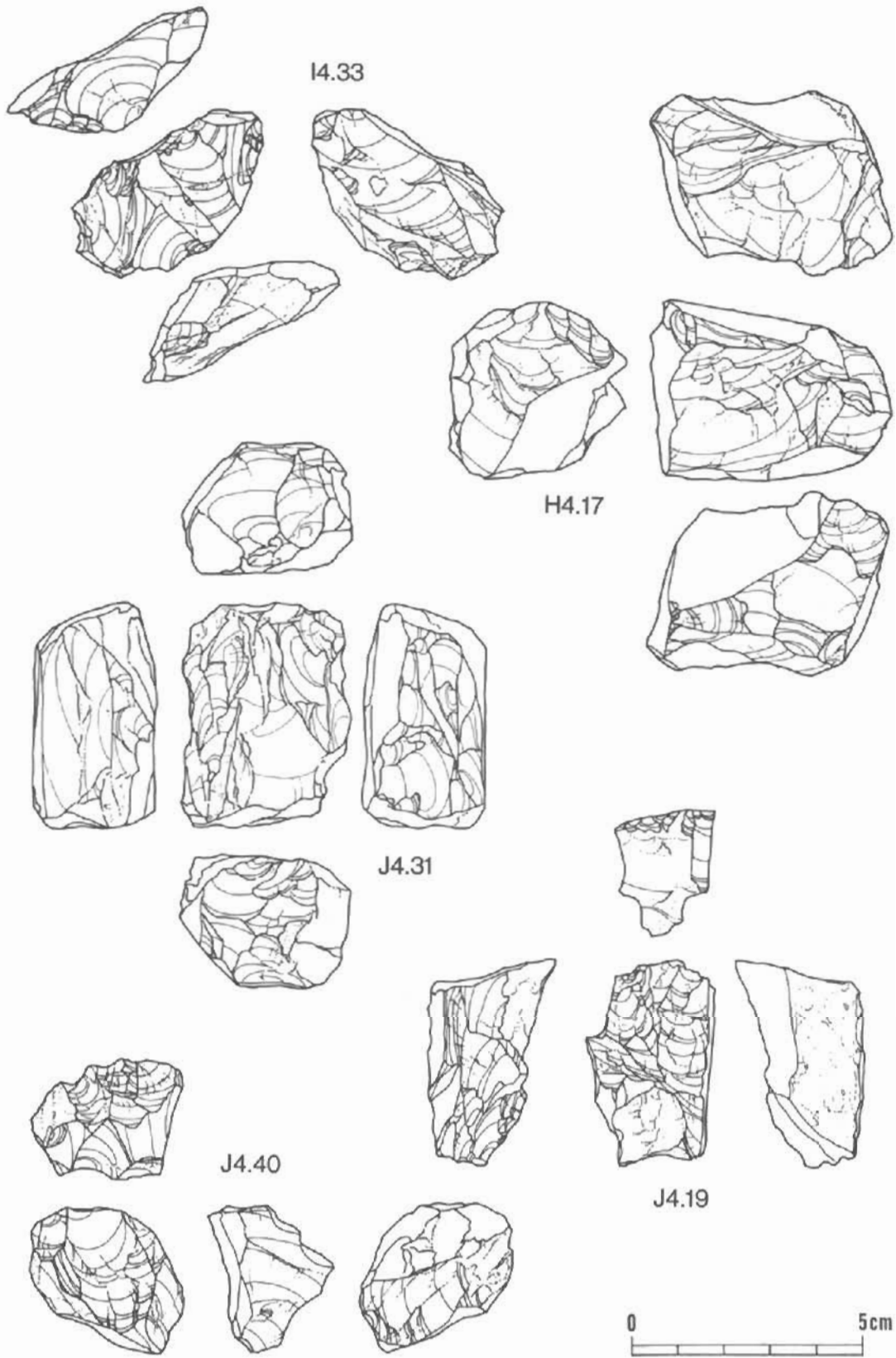
第162図 下位文化層石核実測図15



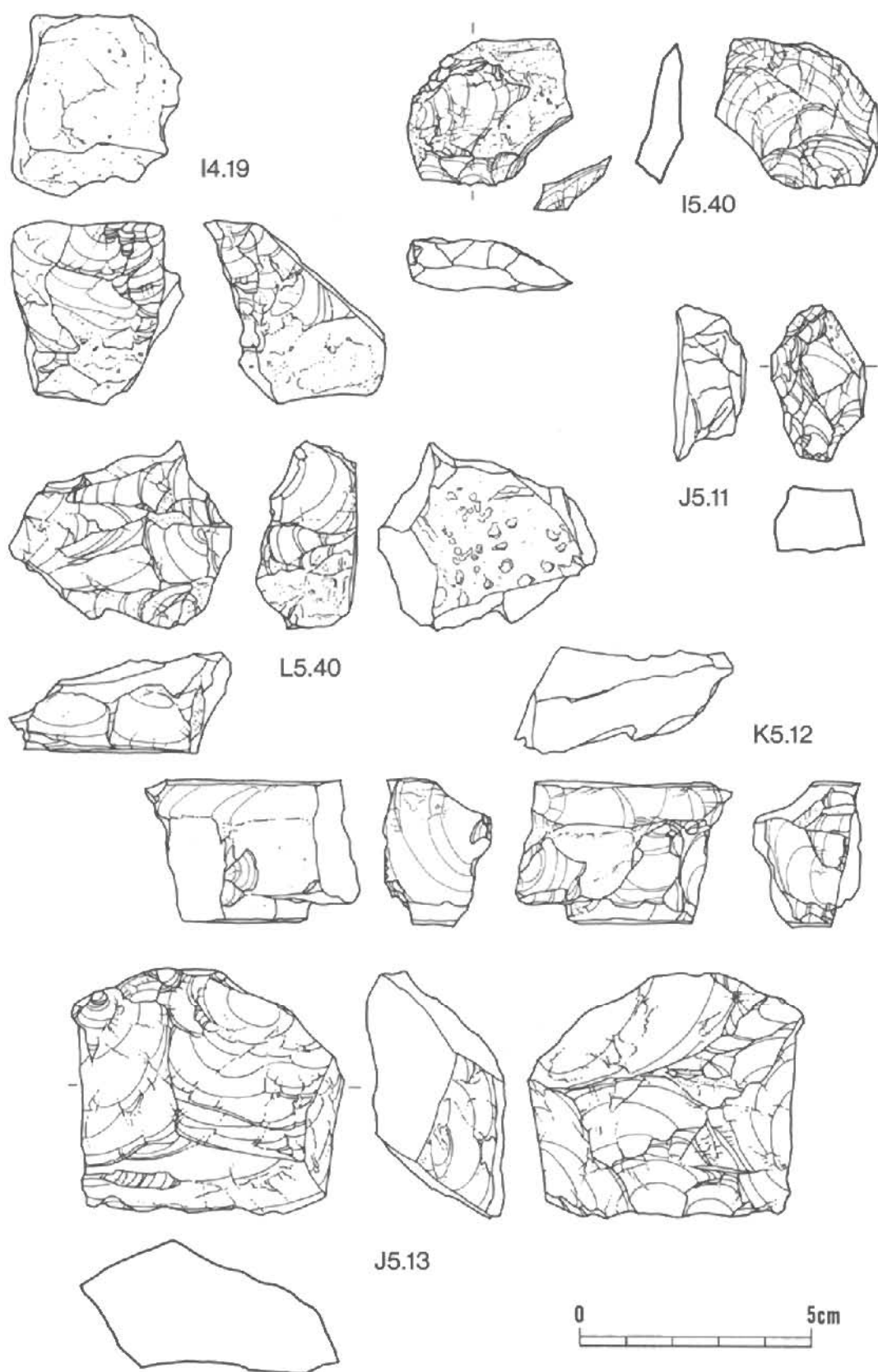
第163図 下位文化層石核実測図16



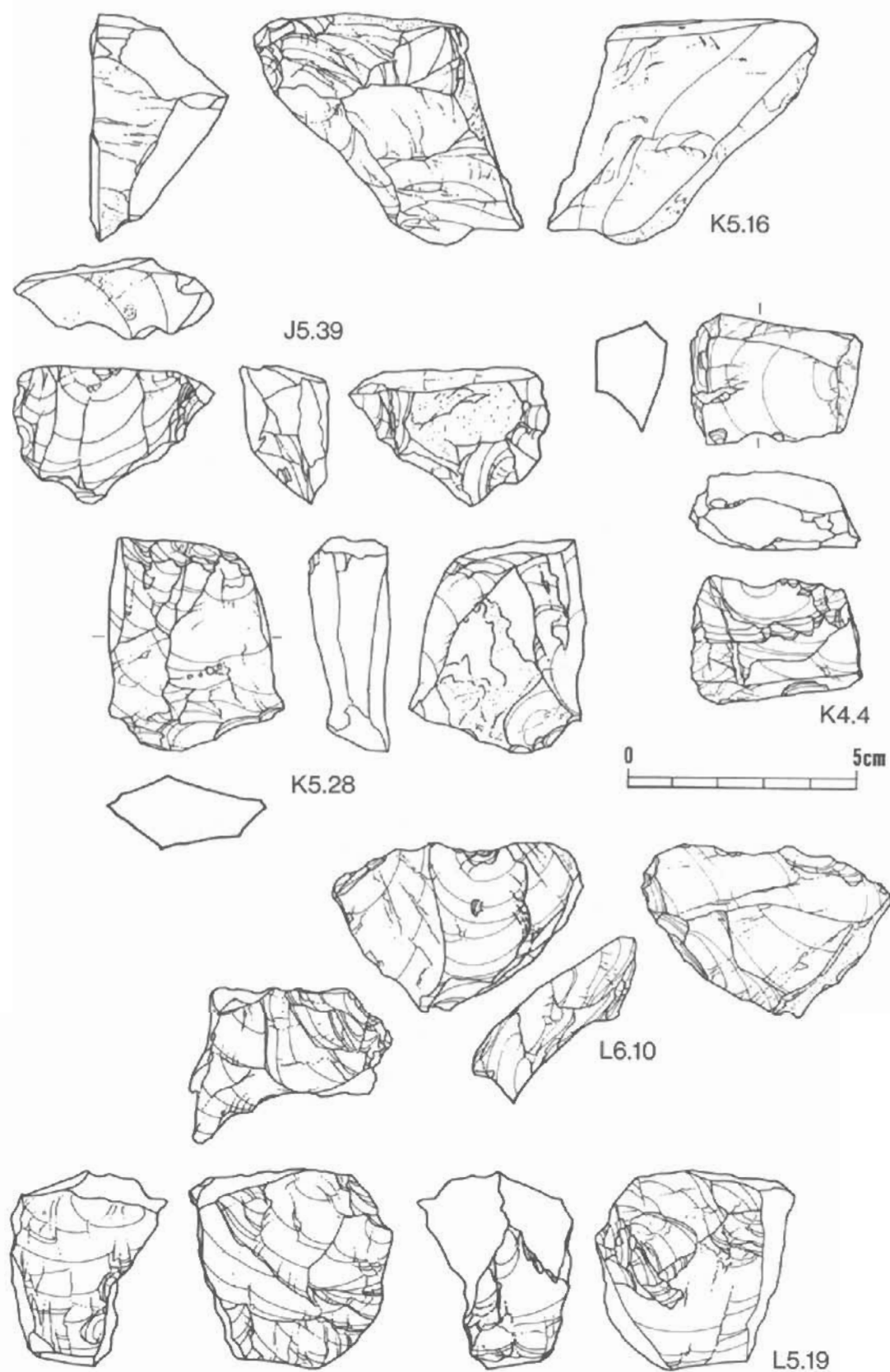
第164図 下位文化層石核実測図17



第165図 下位文化層石核実測図18

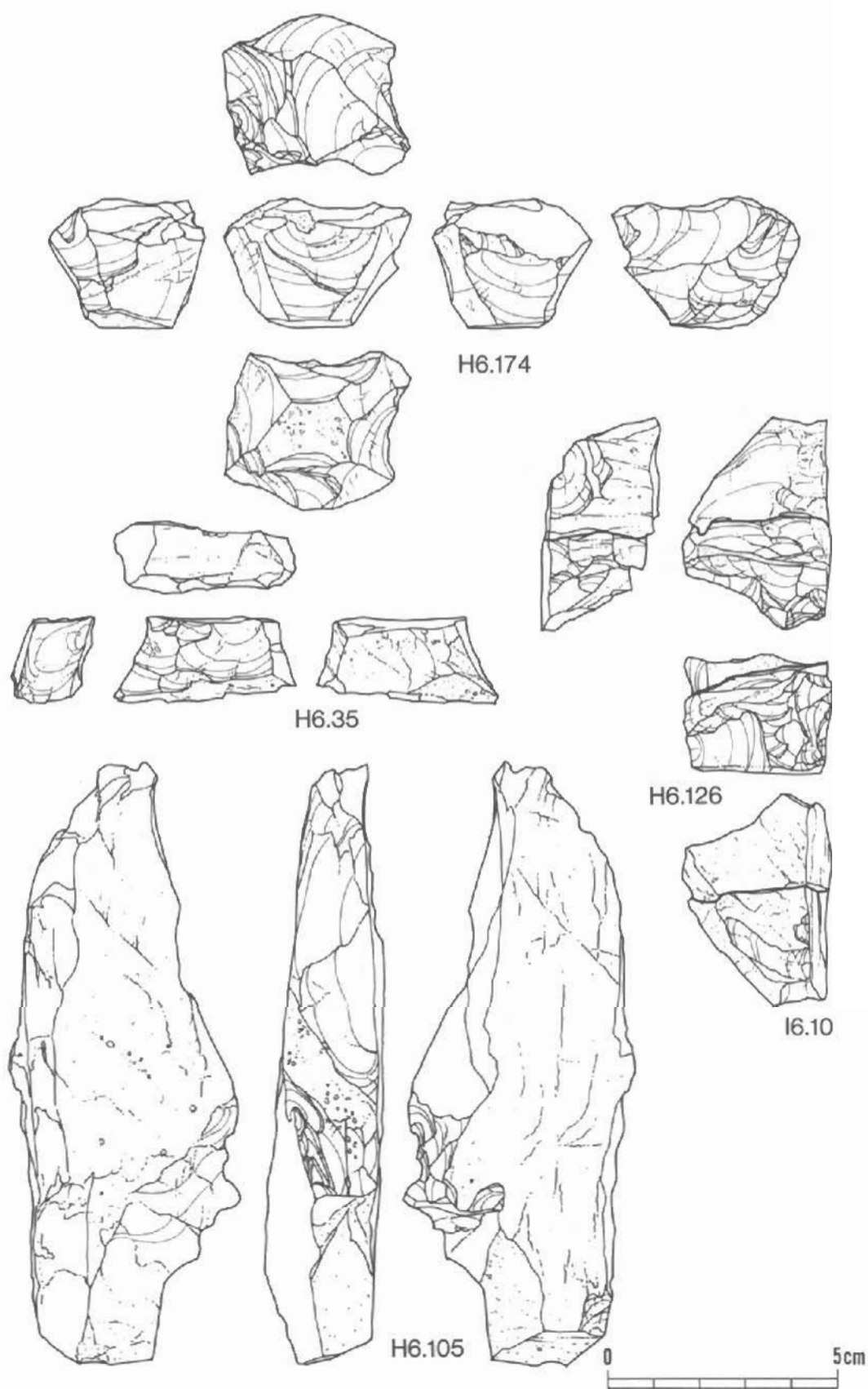


第166図 下位文化層石核実測図19



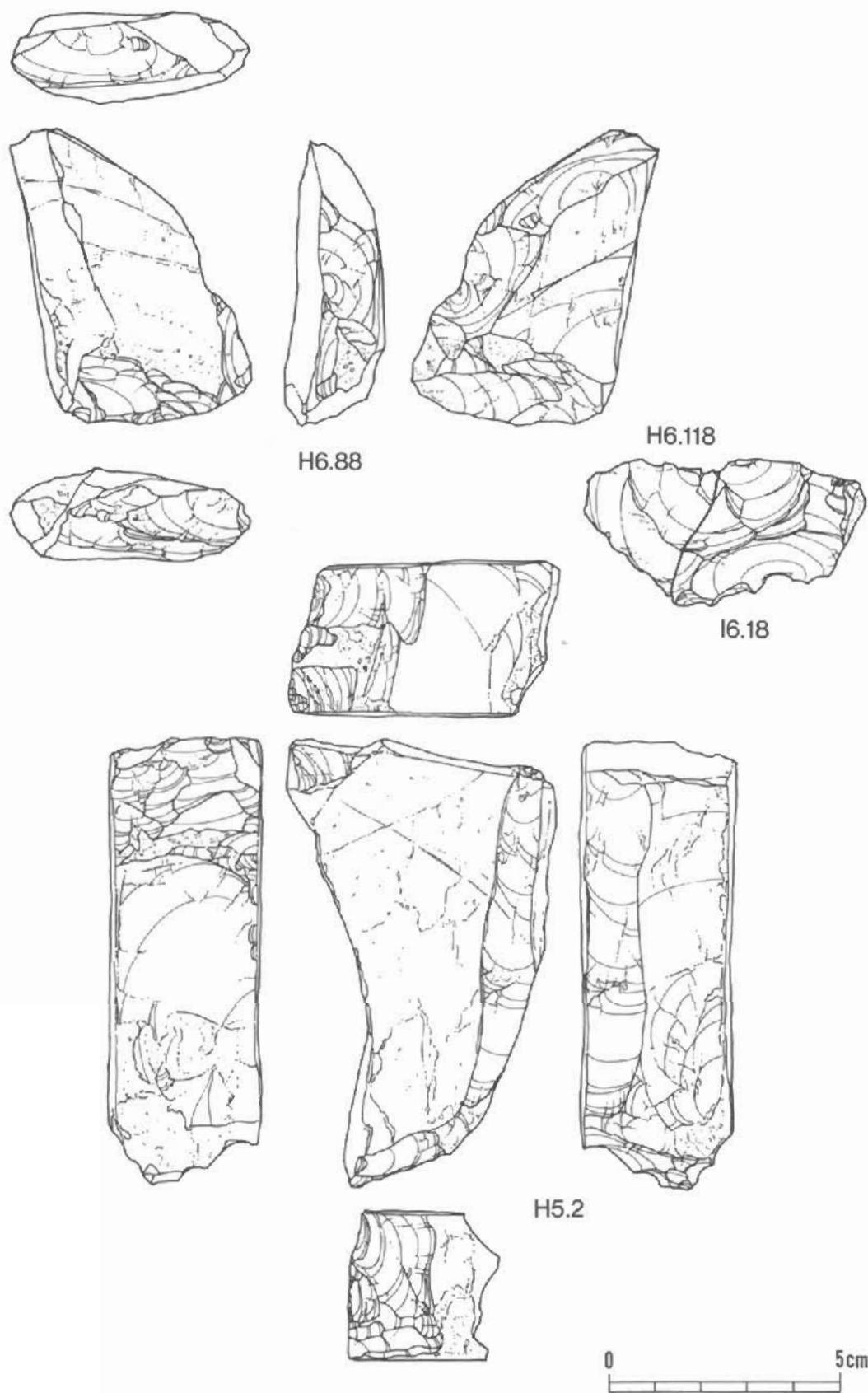
第167図 下位文化層石核実測図20



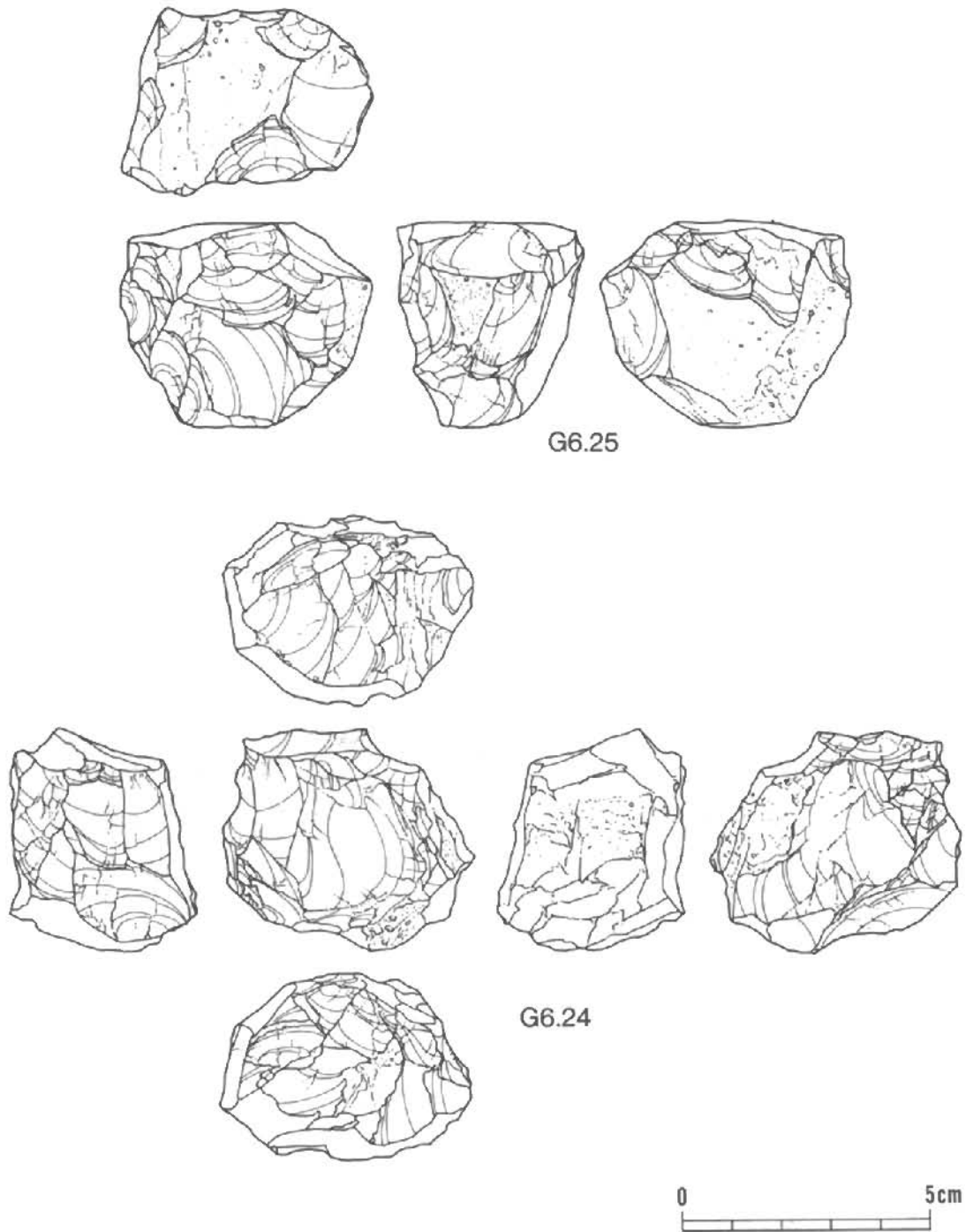


第168図 下位文化層石核実測図21

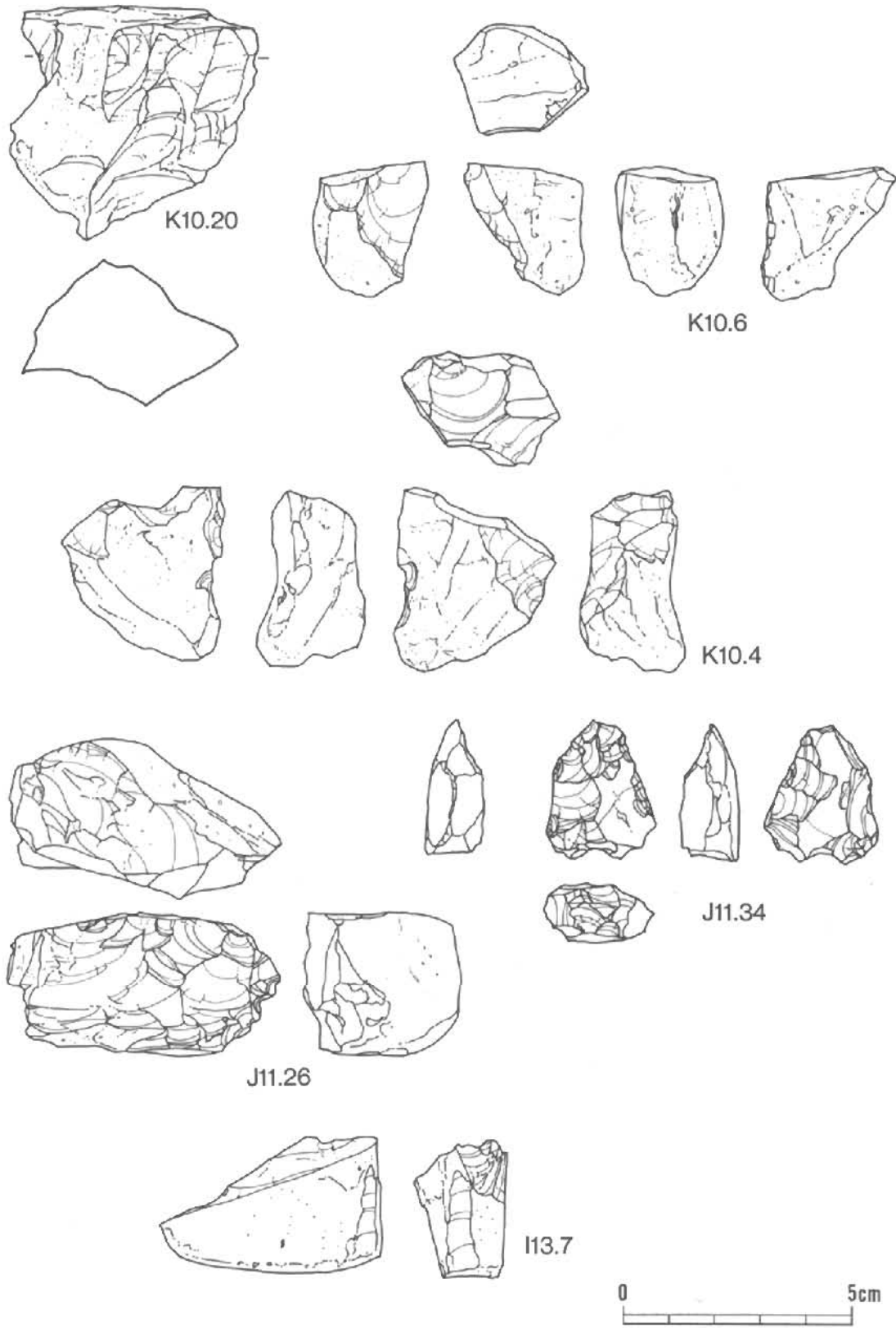
第2節 下位文化層の遺物



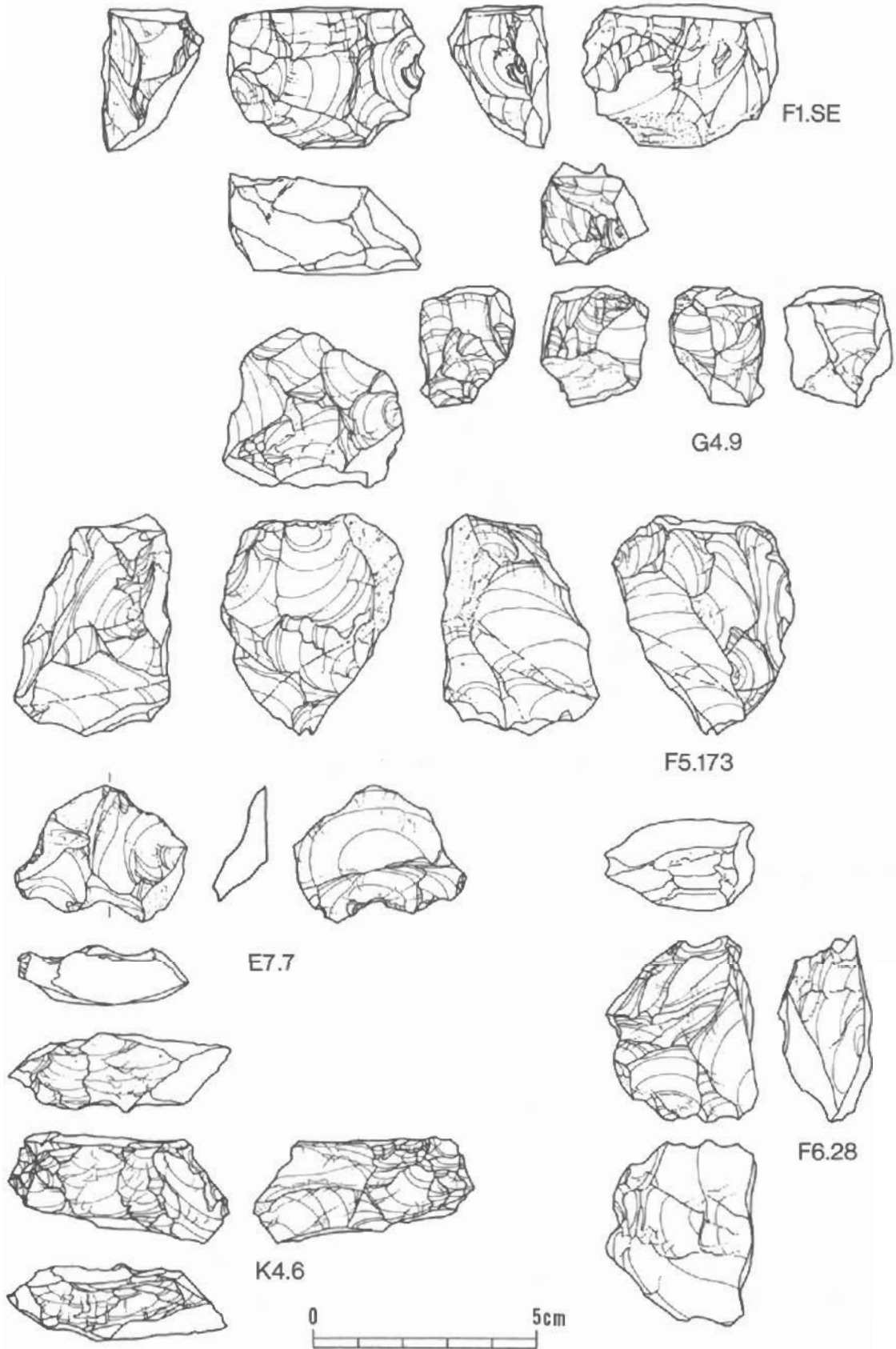
第169図 下位文化層石核実測図22



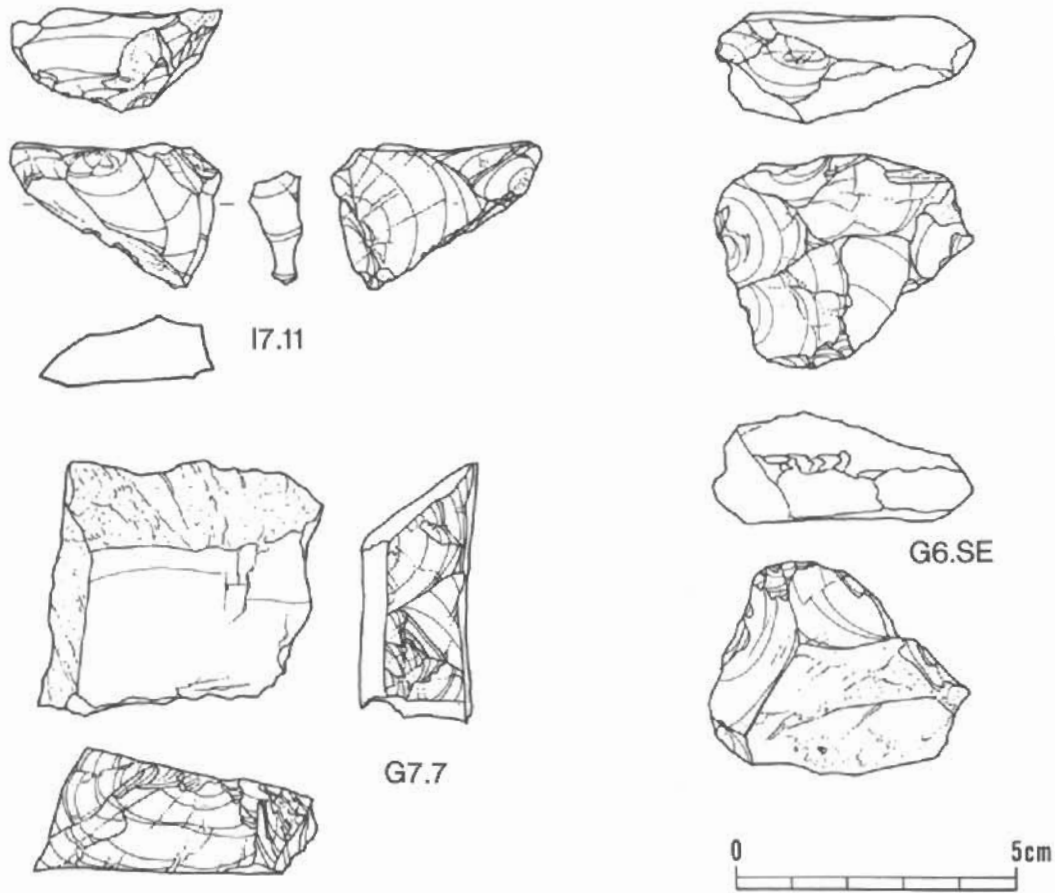
第170図 下位文化層石核実測図23



第171図 下位文化層石核実測図24



第172図 下位文化層石核実測図25



第173図 下位文化層石核実測図26

が、実際には僅かしか存在しない。石核が著しく消費し尽くされた可能性とともに、最初期の工程が行なわれる場所が分けられている可能性も考慮できよう。

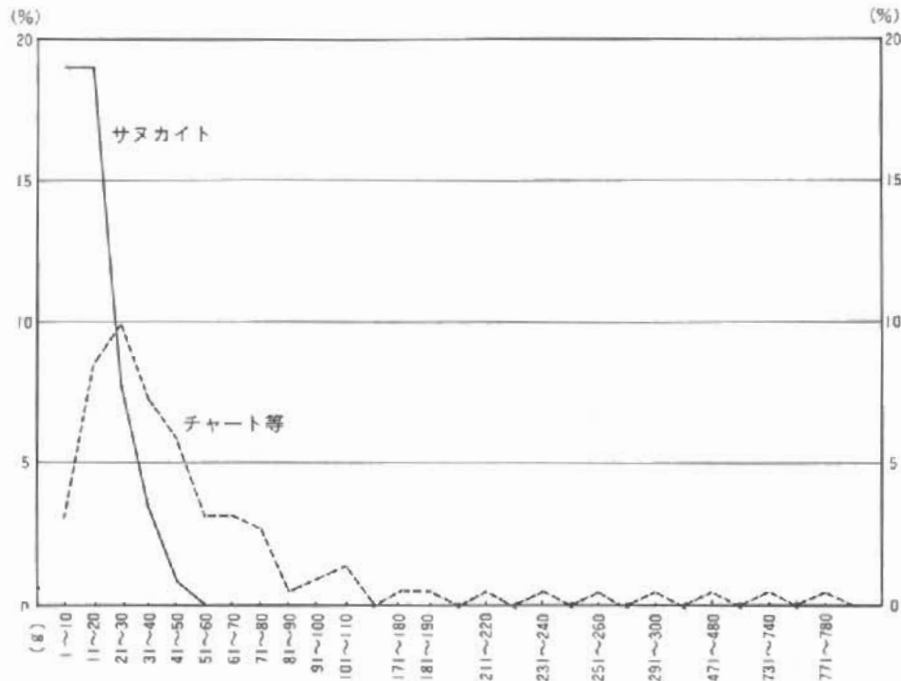
#### 石核の形態的屬性

両石材群の石核には、形態的に大きな違いがあり、その背景には剥片剥離技術が異なることが考えられる。ここでは、その形態的屬性の一部の内容を検討したい。石核重量と打面角を比較する。

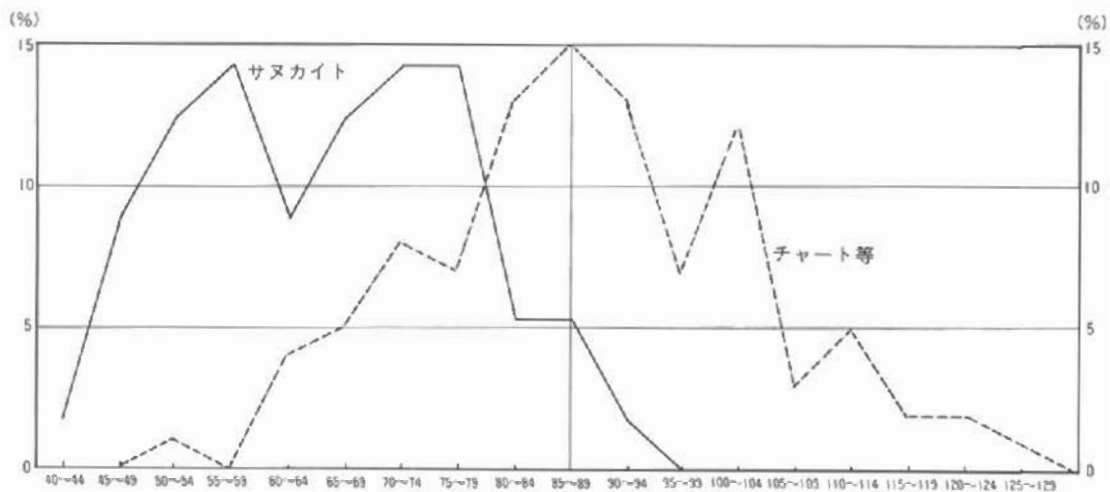
#### 重量 (第174図)

サヌカイト製石核の素材は、ほぼすべてが板状または大型不定形剥片を素材とする。判別不能の石核も器厚から考えて剥片素材と考えられる。石核素材剥片を生産するサヌカイトD類の石核は、当然塊状材を素材とするのであろうが、未発見である。すべての石核は、素材剥片を別の遺跡からの搬入に頼っている事になる。サヌカイト製石核の重量は多くが20g以下で、50gを越えない。剥片剥離作業が進行した結果本来の重量を減じていたとしても、剥片素材の石核である傾向を示している。

チャート製石核の素材は、多くが塊状材または分割材で、板状または剥片素材が伴う。剥片剥離作業は石核素材の形状に規制されて進行し、残された石核の形状に個々の技術的屬性を発現させている。チャート製石核の重量は、10g以下のものが僅かで、逆に80gを越える重量のものが多く認められ、在地石材である性格から、大重量の石核が持ち込まれて剥片剥離作業に供され、20g前後にまで縮小して廃棄されることが一般的であったことが知れる。重量差がサヌカイトよりもはるかに大きい。



第174図 石核重量分布グラフ



第175図 石核打面角分布グラフ

打面角 (第175図)

打面と剥片剥離作業面の剥離面との打面角(内角)は、サヌカイト製石核で40度以上95度未満に分布し、55～59度の範囲と70～79度の範囲に2箇所のピークを持つ。剥片素材の石核の側縁に作業面を設定することから、打面角の角度は鋭い。

チャート等製石核の打面角は、45以上125度未満までの間に分布し、70～105度前後に集中し、85～89度の部分にピークを持つ。チャート等製石核の素材が塊状で、面的な作業面から剥片剥離作業を行なうことから、サヌカイトと比べて打面角は緩やかである。

両者の形態は、剥片剥離作業によって規制されたものであることが理解できよう。(瀧川・山口)

## m, 礫石器類 (第176図～第181図)

礫石器類には、局部磨製石斧を除いて、礫器・敲石・磨石・台石などがある。

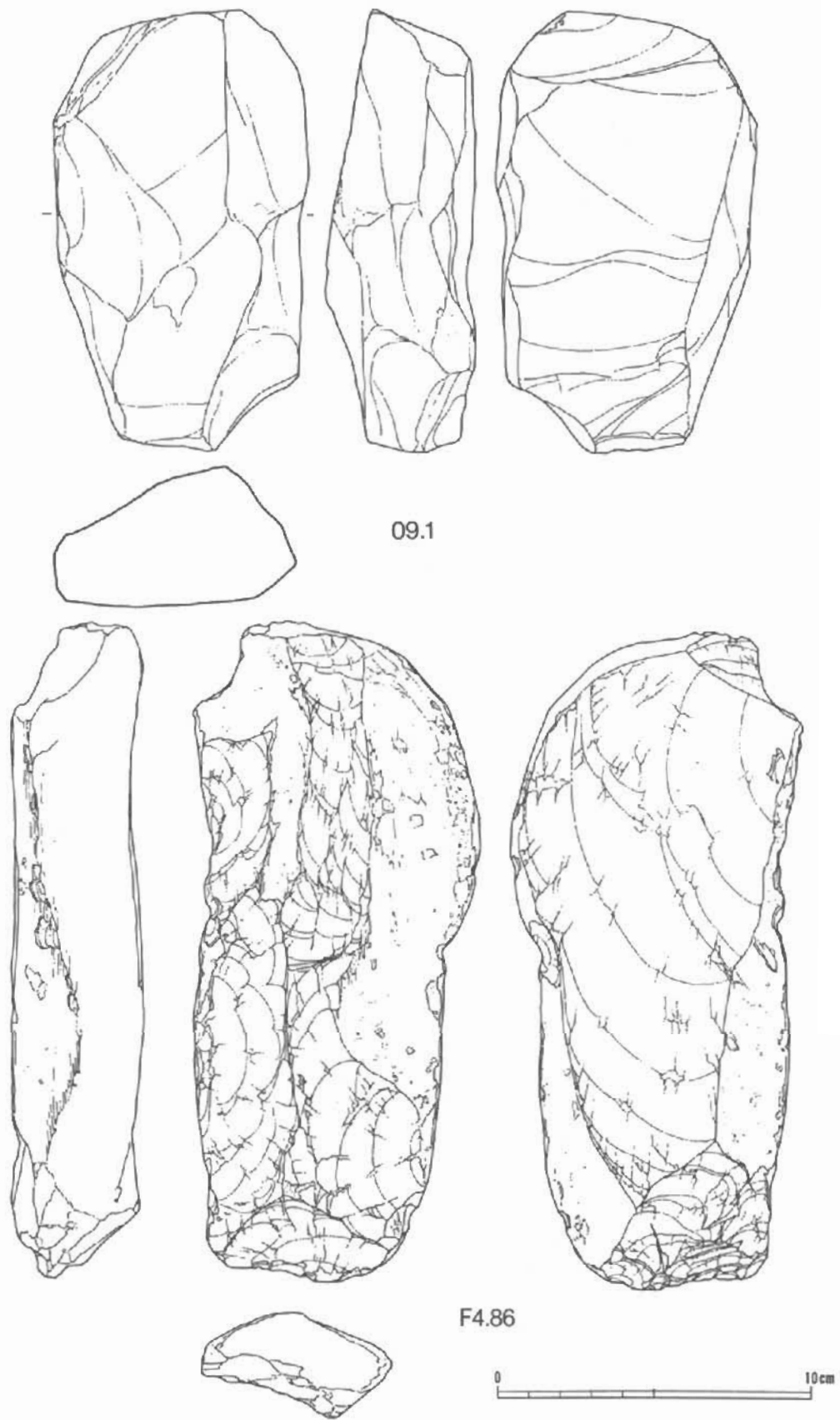
礫器は、5点が出土している。F6.47は凝灰岩製厚手の剥片素材で、周辺部に加工痕をとどめる。K8.13は風化の激しい泥岩製で、器面観察に困難がある。K8.26は砂岩製で、棒状を呈する。下端は折断により刃部が形成されている。先端には微かな敲打痕が認められる。O9.1は風化の激しい凝灰岩製で、器面の観察には困難があるが、一端に作業部が形成されている。F4.86は砂岩製で、表裏両面に自然面が付着することから、もともと扁平円礫を素材としたものであろう。表面に調整加工、背面には主軸方向を縦断する大剥離を施し、全体の器形と厚さを調節している。機能部は、特に裏面に丁寧な加工が行なわれている。表面右側縁上半部の自然面には、磨痕・敲打痕が認められる。両側縁中央には、僅かではあるがくぼみ部が形成されており、若干摩滅していることから、装着痕である可能性も考えられる。

敲石は、4点が原位置を保って出土している。また、C資料1点がある。J4.27は風化の激しい凝灰岩製で、側面器面のほとんどが剥脱していることから、十分な観察は困難であるが、頂部には僅かに敲打痕が認められるが、側縁にはほとんど認められない。表裏両面の平坦な部分には、敲打痕とともに磨痕が認められる。K6.40は風化の激しい凝灰岩製で、ほぼ全器面が剥落しており、正確な観察は不可能であるが、上下両端に敲打による平坦なつぶれ面が認められる。G2.23は、受熱した砂岩製で、受熱に先行して破碎されているが、本来は偏平な円礫であったと考えられる。縁辺下端には、敲打によるつぶれ面が形成されている。F1.98は砂岩製で、一面は節理面で、垂円礫の分割片を素材としていると考えられる。下端部には、広い範囲に敲打痕が認められる。表面中央の稜上にも、連続しないものの敲打痕が認められる。第179図は、C資料の図示である。

磨石は、1点が出土している。K6.47は風化の激しい砂岩製で、表裏両面の平坦面には磨痕が認められる。

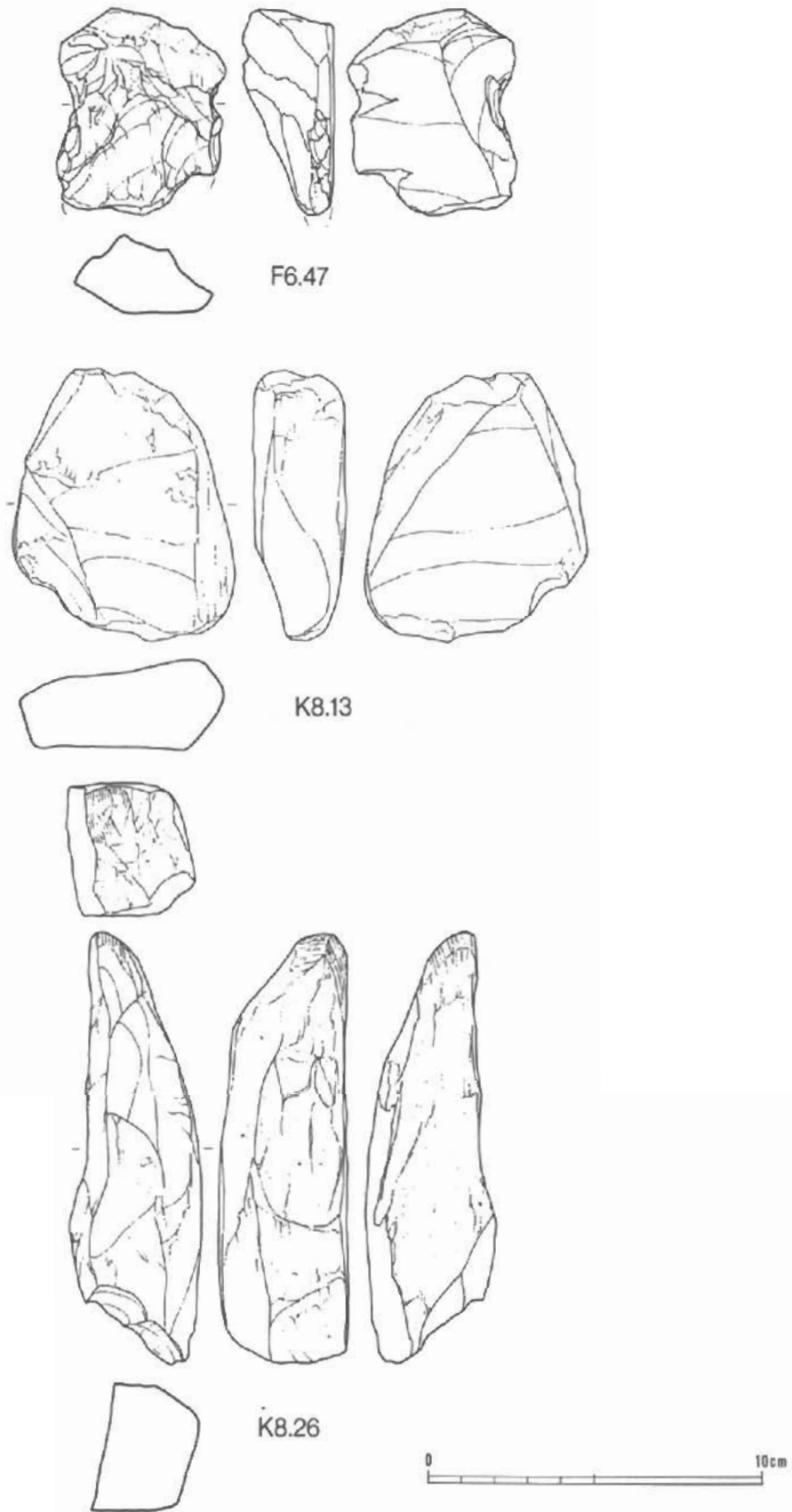
台石は、1点が出土している。F5.205は、大型の砂岩製角礫を使用し、その表には敲打によるくぼみ部が認められる。周辺には、長い傷状の擦痕があり、敲打または石器製作の台石的な機能が考えられる。平坦な裏面にも、僅かに敲打痕が認められる。 (進藤)



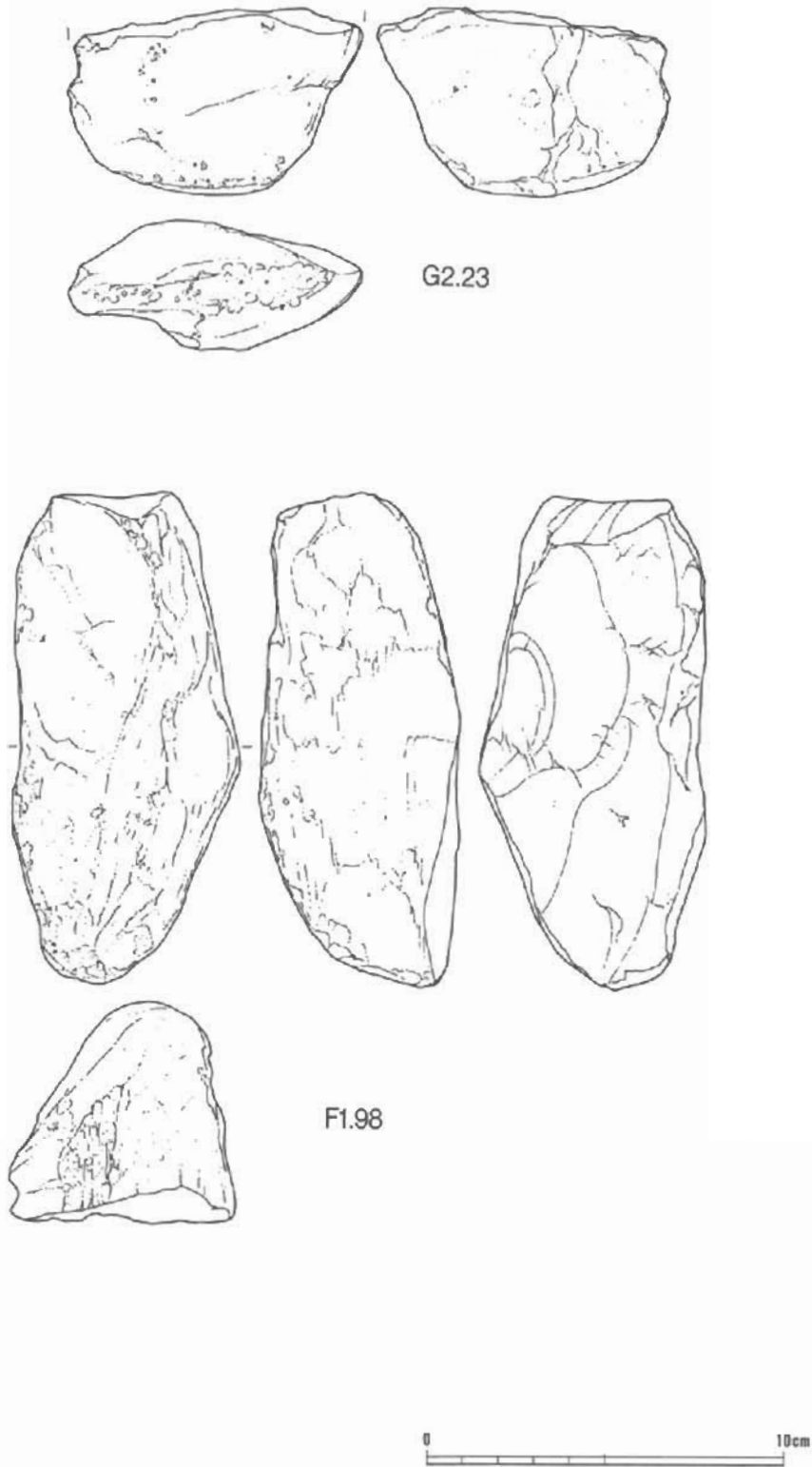


第176図 下位文化層礫石器類実測図1

第2節 下位文化層の遺物

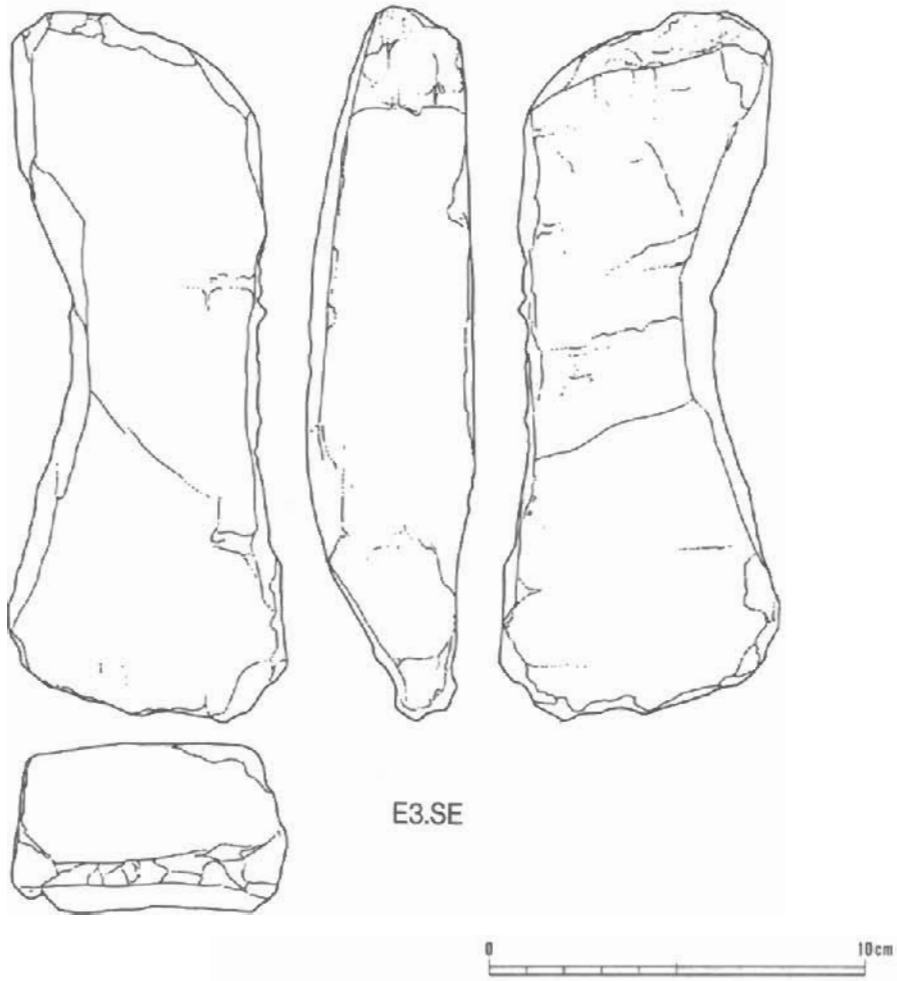


第177図 下位文化層礫石器類実測図 2

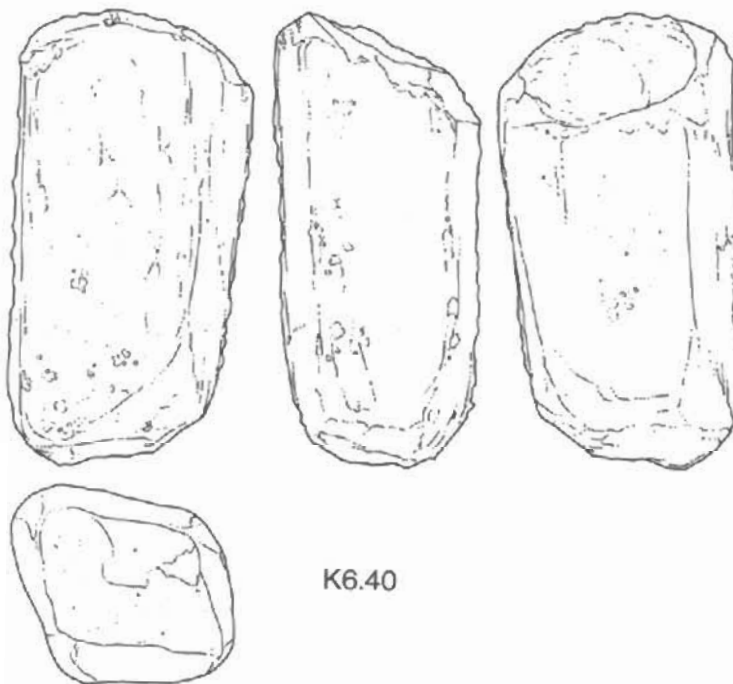
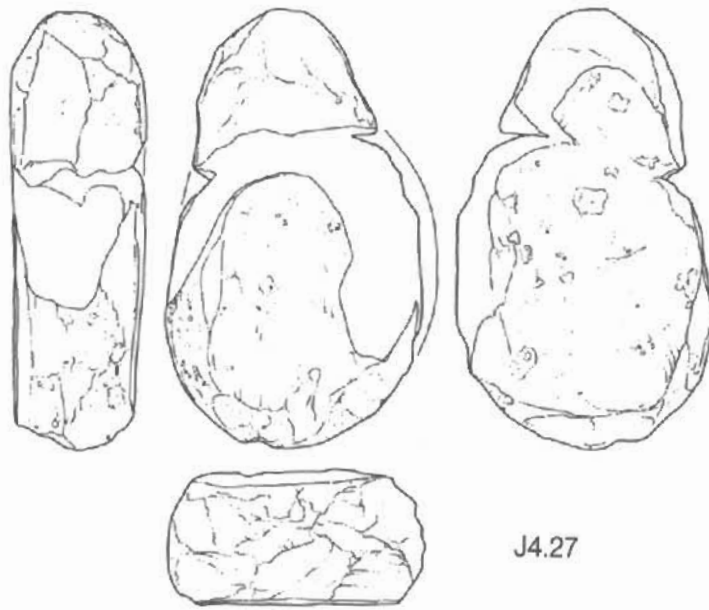


第178図 下位文化層礫石器類実測図3

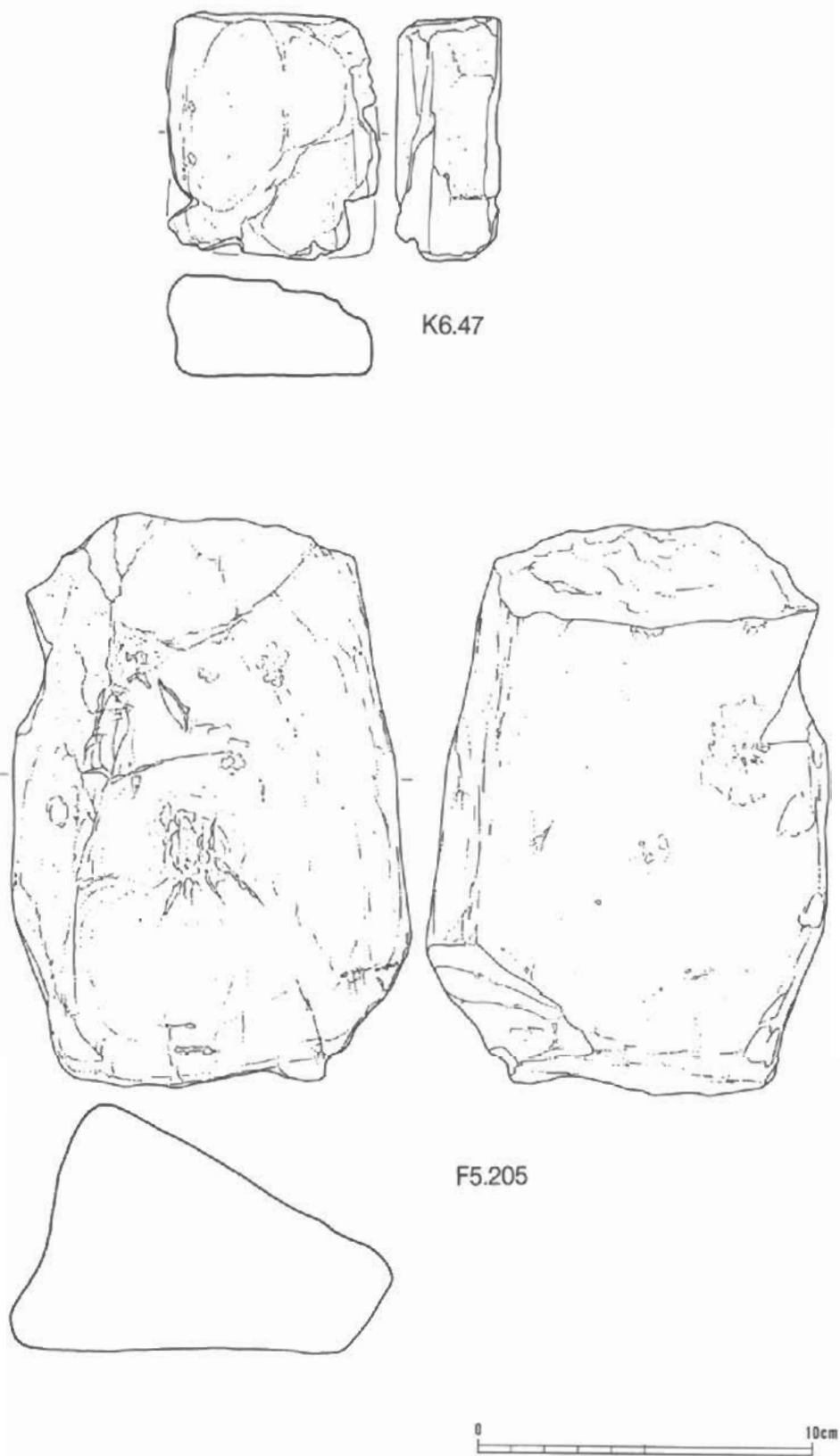
第2節 下位文化層の遺物



第179図 下位文化層礫石器類実測図 4



第180図 下位文化層礫石器類実測図 5



第181図 下位文化層礫石器類実測図6

第7表 下位文化層石器一覧表(1)

チャート等製ナイフ形石器					サマカイト製ナイフ形石器				
No.	重量(g)	個体番号	接合番号	ブロック	No.	重量(g)	個体番号	接合番号	ブロック
E4.11	3.1	単独個体		B2	E4.57	21.6	単独個体		B2
E6.7	5.2	76		C3	E4.60	32.3	40	E4C4	B2
F1.30	8.70	123		A1	E4.72	15.1	92		B2
F3.7	4.3	77		B1out	E5.8	37.0	47		B2
G7.21	3.0	106		(F)	F0.3	28.6	単独個体		A1out
H6.57	0.8	48		(F)	F1.66	10.9	単独個体		A1
H6.102	1.8	114		(F)	F3.54	14.8	100		B1out
H6.197	5.4	12		F1	F4.42	21.0	20	F4C3	B1
H6.SE	6.5	106	H6C18	(F)	F4.55	36.6	110		B1
I3.2	8.0	39		Ea2	F5.38	7.4	76		(B)
I4.40	6.9	29		Ea2	G1.9	7.0	単独個体		A4
I4.42	0.5	113		Ea2	G6.3	11.1	100	G6C1	C2
I4.89	1.0	113		Ea2	H3.9	10.3	77		Ea1
J2.1	3.7	64		Ea1	H3.13	5.4	113		Ea1
L5.21	8.9	100		Eb3	H6.26	11.0	103	H6C24	F1
					H6.59	15.0	110		(F)
					H6.195	6.3	106	H6C10	F2
					H8.9	1.5	100	H8C1	(G)
					I4.12	16.3	92	I4C3	Ea2
					I4.93	7.0	95		Ea2
					I8.7	8.9	28		G2
					I11.1	5.1	41		Jb1
					J3.14	5.0	133		Ea1
					J3.17	25.3	単独個体		Ea2
					J4.22	23.5	75		Ea3
					J4.42	1.0	単独個体		Ea3
					J5.16	47.3	単独個体		Eb2
					J8.2	8.3	100		(B)
					K5.2	3.5			Eb2
					K10.33	15.0	2	K10C2	Jb2
					L10.19	4.0	単独個体		Jb2
					PD1.2	35.5	単独個体		PD1
チャート等製搔器					サマカイト製削器				
No.	重量(g)	個体番号	接合番号	ブロック	No.	重量(g)	個体番号	接合番号	ブロック
D4.17	18.2	80		B2out	D4.4	7.9			B2
E4.10	10.1	69	E4C1	B2	D8.17	10.7			D1
E4.20	36.5	117	E4C6	B2	E2.52	9.6			A2
E4.44	3.8	71	H6C21	B2	E4.22	10.4			B2
E4.78	9.4	単独個体		B2	E8.32	10.6		E6S2	D1
E5.2	16.7	110		(C)	F1.22	7.0			A1
E6.10	13.9	単独個体		(C)	F1.32	16.0		F1S1	A1
F4.45	18.1			B1	F3.19	16.5			A3
F5.14	13.0	100		(B)	F5.52	4.7			B3
F5.15	14.7	130		(B)	F7.86	11.7			C1
G1.5	16.7	130		A4	F9.2	13.0			C1out
G1.6	46.1	58		A4	G6.17	9.6			C2
G4.6	15.2	28		B1out	H9.6	12.1			G3
G5.1	46.4	32		B3	I3.23	12.9			Ea1
G8.43	12.7	100		G3	I3.32	7.4			Ea1
H6.182	4.4	103	H6C24	F1	I4.50	5.7			Ea2
I4.80	20.9	単独個体		Ea2	I4.83	9.9			Ea2
I8.1	3.2	100	I7C1	(G)	J3.19	13.1			Ea2
J5.33	25.9	93		Eb2	J3.20	11.2			Ea2
J5.41	18.1	単独個体		Eb2	J4.47	17.3			Eb1
					J8.3	4.0			(Ja)
					K4.2	5.5		H7S2	(Eb)
					K5.32	6.6			Eb2
					K5.46	31.6			Eb2
					K6.34	1.3			Eb2
					K7.33	22.6			H2
					K7.46	9.6			H1
					K10.30	11.3			Ja2
					L5.23	4.8			Eb3
					M11.6	21.6			Ja3
サマカイト製搔器					チャート等製削器				
No.	重量(g)	個体番号	接合番号	ブロック	No.	重量(g)	個体番号	接合番号	ブロック
E4.76	10.8			B2	E4.6	21.2			B2
E5.14	14.2			B2	E4.35	8.0	30		B2
F6.9	19.1			C2					
I5.21	38.4			Eb1					

## 第2節 下位文化層の遺物

第7表 下位文化層石器一覧表(2)

チャート等製彫器					E4.13	4.9	117		B2
No.	重 量(g)	個体番号	接合番号	ブロック	E4.97	4.4			B2
H6.76	2.2	68		(F)	E5.26	8.1	単独個体		C3
サヌカイト製彫器					E5.31	10.9	98		B3
No.	重 量(g)	個体番号	接合番号	ブロック	E7.5	4.0	100		D2
K7.29	2.4			H2	E7.12	11.5	22		(C-D)
チャート等製錐状石器					F1.68	11.0	43		A1
No.	重 量(g)	個体番号	接合番号	ブロック	F1.77	3.3	59	E2C2	A1
E4.9	24.1	28		B2	F2.52	2.3	107		A1
E4.19	4.2	69	E4C1	B2	F3.17	1.7			A2
サヌカイト製錐状石器					F4.3	1.3	74		B1
No.	重 量(g)	個体番号	接合番号	ブロック	F4.66	2.8	133		B1
E4.87	9.4			B2	F4.71	5.6	51		B1
I4.66	1.0			Ea2	F4.111	1.9	100		B1
K11.23	11.5			(Jb)	F5.13	2.1	83	G6C6	(B)
チャート等製楔形石器					F5.20	3.4	74		(B)
No.	重 量(g)	個体番号	接合番号	ブロック	F5.41	2.0	110		(B)
D7.5	5.9			D2	F5.61	11.6	92		(B)
E0.3	9.0	30		A1out	F5.201	11.9	41		B3
サヌカイト製楔形石器					F6.1	4.0	46		C2
No.	重 量(g)	個体番号	接合番号	ブロック	F6.32	7.9	51		C2
D8.13	5.8			D1	G6.2	4.4	56		C2
E2.65	2.8			A2	G7.2	0.9	21		(F)
K7.48	14.0			H1	G7.20	1.9	25		(F)
M9.5	6.0			I2	G7.40	3.3	121		G3
局部磨製石斧					H6.42	24.1	106		(F)
No.	重 量(g)	個体番号	接合番号	ブロック	H6.79	4.4	52		(F)
G2.20	50.1	単独個体		A1	H6.141	5.3	85		(F)
サヌカイト製斧形石器					H7.22	2.4	106	H6C10	(F)
No.	重 量(g)	個体番号	接合番号	ブロック	H7.61	3.3	31		(G)
M12.2	35.4			Ja3out	I3.4	5.8	132		Ea2
敲石					I4.20	6.5	7		Ea2
No.	重 量(g)	個体番号	接合番号	ブロック	I5.16	4.3	39	15C1	Eb1
F1.98	560.0	単独個体		A1	I5.22	2.8	39	15C1	Eb1
G2.23	160.0	単独個体		A1	I5.36	2.8	39	15C1	Eb1
J4.27	350.0	単独個体		Ea2	I5.39	1.5	63		Eb1
K6.40	520.0	単独個体		H1	I6.16	1.2	106	H6C10	F1
礫器					I12.2	2.8	11		K
No.	重 量(g)	個体番号	接合番号	ブロック	J3.15	3.5	78		Ea1
F4.86	795.0	単独個体		B1	J4.8	4.0	63		Ea3
F6.47	66.7	単独個体		C2	J4.11	18.0	91		Ea2
K8.13	165.0	単独個体		I1	J5.22	4.4	88		Eb2
K8.26	260.0	単独個体		H2	L5.26	6.2	39		Eb3
O9.1	740.0	単独個体		I3	サヌカイト製加工痕有剥片				
磨石					No.	重 量(g)	個体番号	接合番号	ブロック
No.	重 量(g)	個体番号	接合番号	ブロック	E8.33	0.9			D1
K6.47	200.0	単独個体		H1	F1.37	1.3			A1
台石					F1.57	13.2			A1
No.	重 量(g)	個体番号	接合番号	ブロック	F2.14	4.5		F2S3	A1
F5.205	1640.0	単独個体		B3	F2.34	4.9		F2S3	A1
チャート等製加工痕有剥片					F2.48	4.5			A1
No.	重 量(g)	個体番号	接合番号	ブロック	F3.41	2.8			A3
D4.15	37.4	46		B2	F4.6	3.7			B1
D8.19	2.9	22		D1	F4.82	1.0			B1
E2.34	2.4	59	E2C3	A2	F7.87	0.7			C1
E4.7	3.1	80		B2	F7.153	8.1			C1
					H7.83	3.7			F1out
					I9.12	1.2			G2
					J4.36	0.8			Ea2
					J7.20	10.4		J7S1	H2
					J9.32	4.9			G2
					K7.39	16.1			H1
					K7.49	1.9		K7S6	H1
					K7.58	16.1		K7S6	H2
					K9.5	9.9			Ja1
					K9.9	19.9		K9S2	I1
					K11.32	10.5			Jb2





第2節 下位文化層の遺物

第7表 下位文化層石器一覧表(4)

E8.1	5.1	C1	K6.19	3.1		H1
E8.6	3.6	D1	K7.53	4.2		H1
E8.14	4.6	D1	K7.57	2.5	K7S2	H2
E8.18	3.0	D1	K7.65	3.6		H2
E8.24	1.2	D1	K7.70	26.1		H2
E8.36	9.7	D1	K8.5	4.5		(I)
F1.4	0.7	A1	K9.1	3.5		I1
F1.10	8.7	A1	K9.2	1.7		(Ja)
F1.78	3.3	A1	K9.17	9.2		Ja2
F1.92	1.0	A1out	K10.21	7.3		Ja2
F2.13	2.7	A1	K11.1	12.9		(Jb)
F2.16	5.8	A1	K11.2	5.7		(Jb)
F2.28	5.4	A1	K11.24	19.3		(Jb)
F2.67	1.4	A1	K11.33	4.2		Jb2
F2.110	5.7	A2	K11.38	3.6		Jb2
F2.122	6.9	A2	K11.45	7.6		Jb2
F2.125	2.8	A2	K12.5	7.1	K12S1	Jb2out
F2.135	1.6	A2	L5.12	7.3		Eb3
F2.136	10.6	F2S5	L8.3	6.1		I1
F2.138	1.6	F2S1	L9.1	4.0		(I)
F2.142	0.7	A2	L9.7	9.5	L9S1	(I)
F2.154	2.4	A1	L10.9	3.2	L9S1	Ja2
F3.30	1.5	A3	M11.13	6.9		Ja3out
F4.60	5.6	B1	M13.1	5.7		Jb2out
F4.77	3.8	B1	N9.2	2.5		I3
F5.56	4.8	B3	N9.3	14.7		I3
F5.134	5.7	B3	N9.5	23.2	L7S1	I3
F6.8	2.2	C2				
F6.11	11.0	F6S1	(C)			
F7.84	7.6	C1	チャート等製石核			
F7.101	6.4	C1	No.			
F7.102	2.1	C1	重	量(g)	個体番号	接合番号
F7.124	5.2	C1	PD1.7	27.0	125	E4C5
F7.125	5.6	C1	D4.1	7.7	125	
F8.87	4.7	C1	D7.1	58.6	10	D7C1
G2.1	8.8	G2S1	D8.26	53.4	10	
G2.5	8.5	G2S1	E2.62	10.7	59	E2C2
G3.13	2.0	Ea1out	E2.63	62.6	61	F2C2
G5.11	1.7	G5S1	E4.33	45.9	37	
G8.32	8.0	G8S1	E4.40	11.5	125	
G8.34	1.2	G8S1	E4.42	78.7	単独個体	B2
G8.37	3.7	G3	E4.71	61.3	単独個体	B2
H3.21	2.3	Ea1	E4.86	40.7	67	I4C1
H8.40	25.0	G3	E5.10	7.7	125	E5C2
H8.43	12.4	G3	E7.7	11.5	53	
H9.1	4.5	G3	E7.14	12.0	53	(C-D)
I3.17	9.4	Ea2	F1.7	6.5	43	
I3.43	7.7	Ea1	F1.86	38.8	124	A1
I4.41	4.8	Ea2	F1.87	23.8	128	A1
I4.49	14.7	Ea2	F1.SE	35.6	18	I2C2
I4.52	3.9	Ea2	F2.12	46.2	124	
I8.10	5.2	G2	F2.72	23.9	126	G2C2
I9.5	1.2	G2	F2.76	22.5	119	F2C5
I9.10	11.1	G2	F2.91	43.0	124	
I9.14	17.3	G2	F2.97	17.6	119	
I9.21	31.0	G2	F2.111	40.8	61	F2C7
I10.1	3.2	(Jb)	F2C117	24.8	45	
I10.4	2.8	Jb1	F2.127	14.6	59	F2C13
I10.6	3.6	Jb1	F2.132	30.7	62	F2C6
I10.13	10.8	Jb1	F2.139	24.5	45	F2C6
J3.4	4.3	Ea3	F2.145	75.4	136	F2C16
J3.13	7.9	Ea1	F2.151	43.8	89	F2C1
J5.20	5.2	Eb2	F2.190	740.0	135	F2C15
J9.34	5.6	Ja1	F2.191	480.0	136	F3C1
J11.12	7.5	J11S2	F2.192	780.0	136	F3C1
J11.17	5.8	Jb1	F3.1	300.0	136	F3C1
J11.21	9.3	Jb1	F3.4	49.6	単独個体	
K4.5	8.5	Eb2	F3.12	220.0	60	F1C1
			F3.13	87.1	89	F2C1
			F3.20	42.2	49	

第7表 下位文化層石器一覧表(5)

F3.26	27.4	84		A3	K10.4	26.7	1	K10C1	Ja2	
F3.50	237.3	136	F3C1	A3	K10.6	17.1	1	K10C1	Ja2	
F3.52	67.1	89	F1C2	A3	K10.20	65.8	2	K10C2	Ja2	
F4.26	29.9	92		B1	K10.39	19.0	17	K10C3	Ja2	
F4.31	102.3	37		B1	L5.16	21.1	127		Eb3	
F4.102	34.4	132	F4C2	B1	L5.19	56.1	57	L5C1	Eb3	
F4.117	42.6	47		B1	L5.40	42.0	7		Eb2	
F5.33	45.1	131	H6C3	B3	L6.10	41.1	単独個体		Eb3	
F5.58	56.9	23	F5C8	B3						
F5.59	5.7	125		B1						
F5.65	13.6	38	F5C2	B3	サヌカイト製石核					
F5.69	190.0	単独個体		B3	No.	重	量(g)	個体番号	接合番号	ブロック
F5.75	94.9	37		B3	D8.22	15.6		E2S3	D1	
F5.156	36.8	97	H4C2	B3	E2.8	7.9			A2	
F5.173	61.4	133	F5C4	(B)	E2.25	11.7			A2	
F6.18	31.3	単独個体		C2	E2.55	18.1			A2	
F6.28	31.2	97	H4C2	(C)	E2.66	9.1		E2S1	A2	
F6.37	13.0	22		C2	E2.SE	6.1		F2S1	(A)	
F7.2	21.2	33		C1	E4.70	4.6			B2	
F7.114	69.4	99		C1	E6.3	17.6		E6S1	C3	
F7.129	29.8	46		C1	E6.26	3.8			C3	
G1.2	9.9	単独個体		A4	F2.54	14.3			A1	
G2.9	76.6	6		A3	F2.65	7.0			A1	
G3.9	22.1	79		A3	F2.140	14.4			A2	
G3.10	27.8	100	G3C2	Blout	F3.55	12.4		F2S4	A2	
G4.8	17.6	単独個体		Blout	F4.35	13.2			B1	
G4.9	16.2	112		(B)	F7.151	18.7			C1	
G4.14	31.7	100		Blout	F8.89	30.5		F8S1	Clout	
G4.15	27.1	56		Blout	G3.2	11.7			Blout	
G6.6	22.9	83	G6C6	C2	I5.30	8.5			Eb1	
G6.24	102.2	単独個体		F2	I8.4	17.8			G2	
G6.25	91.6	83		F2	I8.14	9.9			G2	
G6.48	32.2	108	G6C4	F2	I11.6	7.0			Jb1	
G6.SE	30.2	44	H6C22	(C-F)	J4.13	4.3			Ea2	
G7.7	59.5	21		(F)	J5.25	12.8			Eb2	
H4.17	77.1	97	H4C2	Ea2	J7.13	30.9			G1	
H5.2	260.0	77		F1	J7.14	12.5			G1	
H6.35	16.2	23		F1	J8.7	18.6		J9S1	H2	
H6.88	53.7	24	H6C2	F1	J9.19	9.2			Ja1	
H6.93	24.0	50		F1	J9.35	16.9			Ja1	
H6.105	173.10	131	H6C3	F1	K4.12	18.7			Eb2	
H6.118	8.5	48	H6C11	F1	K6.55	11.5		K6S1	H1	
H6.126	1.6	88	H6C1	F1	K7.40	8.3		K6S2	H1	
H6.147	34.5	単独個体		F1	K7.41	4.4			H1	
H6.174	39.9	106	H6C10	F1	K7.62	7.1			H2	
H6.190	51.3	24	H6C2	F1	K7.71	29.2			H2	
I3.48	35.3	89	Ea1		K7.76	8.7			H1	
I4.19	49.4	単独個体		Eb1	K8.4	5.5			I1	
I4.33	23.5	113		Ea2	K10.35	7.5			Jb2	
I4.88	16.9	93		Ea2	K11.9	8.3			Jb2	
I5.40	11.6	113		Eb1	K11.20	9.3			Jb2	
I6.10	18.6	88	H6C1	F1	K11.25	21.2			Jb2	
I6.18	18.9	48	H6C11	F1	K11.26	11.4			Jb2	
I7.11	12.0	100	I7C1	(F)	K11.46	7.3			Jb2	
I13.7	30.6	16		K	K12.3	12.2		K12S2	Jb2out	
J4.19	34.5	54		Ea2	L5.29	38.7			Eb3	
J4.31	72.5	単独個体		Ea2	L6.4	22.7			Eb3	
J4.40	23.8	96		Ea3	L6.13	23.3			Eb3	
J5.11	11.7	101	J5C1	Eb2	L9.15	21.5			I2	
J5.13	103.8	94		Eb2	L10.1	39.3		L11S1	Ja2	
J5.39	20.7	104		Eb2	L10.12	43.2			Ja2	
J11.26	74.7	2	K10C2	Jb1	L10.15	21.1		K9S2	Ja2	
J11.34	8.5	41	J11C2	Jb1	L10.24	17.2		L10S2	Ja2	
K4.4	18.3	100		Eb2	L11.1	13.5			Ja2	
K4.6	21.8	127		(Eb)	M9.3	32.3			I2	
K5.12	38.3	77		Eb2	M10.1	17.0		K8S1	Ja3out	
K5.16	64.9	127		Eb2	M10.2	5.2			Ja3out	
K5.28	31.2	127		Eb2	M11.8	25.5			Ja3	
					N9.7	9.7			I3	
					チャート等製石核素材					
					No.	重	量(g)	個体番号	接合番号	ブロック
					PD2.1	101.0	単独個体		PD2	
					E4.48	160.0			B2	
					E5.27	72.2	単独個体		B1	
					L10.41	84.9			Ja2	

## 2. 石材と個体別資料・接合資料

## a. 下位文化層の石材

## —下位文化層の石材産地—

下位文化層で、石器石材として用いられているのは、サヌカイト・チャート・頁岩・鉄石英・黒水晶・石英・凝灰岩・砂岩などである。このうち、サヌカイトとチャートが大半を占め、その他の石材は僅少である。凝灰岩と砂岩は、礫石器類に多く使用されているので、剥片石器類は、主にサヌカイトとチャートを素材としていることになる。第8表に石材別点数組成を掲げる。

これらの石材は、直接的、間接的にそれぞれの産地から遺跡内へ持ち込まれたものであり、その由来を明らかにする必要がある。

サヌカイトは、火成岩である安山岩の一種で、黒色緻密な岩石である。本来は漆黒色であるが、通常遺跡から発見される時には、風化が進行して石器器面が灰白色化し、微細な盲孔が無数に開いている場合が多い。材質・色調によって、個体を識別して分類することは難しい。

サヌカイトは火成岩であるので、原石産地は限定される。西南日本では、現在合計25箇所の産地が知られている。板井寺ヶ谷遺跡に近い原石産地として、武庫川を南に下った甲山、六甲・有馬で隔てた淡路島岩屋周辺・五色浜、南南東にやや離れて二上山の4箇所、西南に離れて讃岐の諸産地がある。このうち、甲山のサヌカイトは粗質でほとんど石器素材に使われまいといわれることから、淡路島岩屋周辺・五色浜と二上山が有力な産地として考えられる。淡路島岩屋までは直線距離で約50km、二上山までは直線距離約85km、岩屋と二上山間は約70kmである。讃岐は遠く、約200kmである。

チャートは、堆積岩の一種で、青色、白色や赤色、緑色など色彩が多様な緻密な岩石である。表面に光沢を伴う透明感あるものが多く、堆積環境によって模様や粗密、緻密さ、色調などが変化する。板井寺ヶ谷遺跡のチャートは、緻密で光沢のあるものから、荒く砂粒感のあるものまで、大きな個体差を有している。肉眼的には特に風化は認められない。

チャートは極めて一般的な堆積岩であるので、産地の特定は難しい。板井寺ヶ谷遺跡周辺は、中・古生代層の岩盤を基底としており、チャートを産する地域となっている。篠山盆地の篠山川・宮田川などの現河床には、多量のチャート垂角礫が転がっており、また遺跡北東約4kmの宮田川河崖には、チャート岩盤の露頭が観察できる。石器材料になりうる良質なチャート材を現河床や露頭で、現在容易には発見できないが、遺跡周辺のさほど遠からぬ地域で、採集したと考えてよいであろう。発掘された石器類には、垂角礫面を留めるもの、岩盤から直接採集された可能性のある板材などがあり、特に遠距離での採集・搬入を考えなければいけない資料はない。また、発掘された配石・礫にもチャート材が多く含まれていた。

頁岩・砂岩・凝灰岩は、いずれも堆積岩である。本報告では、これらがどの地方、どの地層に由来するか、どの様な場所で直接採取できるかについては、十分な追求はできていない。板井寺ヶ谷遺跡の頁岩は、やや凝灰質のものを含むが、この石材は遺跡周辺に有力な産地は知られておらず、地域限定も困難である。砂岩は、遺跡周辺の岩盤にチャートと互層になって観察され、遺跡周辺の現河床でも垂角礫状態の砂岩転石を認めることができる。遺跡周辺で容易に入手可能な石材であるが、遺跡で発掘された砂岩製遺物が、点数の少ない礫石器類であることは考慮する必要がある。

凝灰岩は、比較的硬く粒子の細かい灰白色のもの、白色か青白色の粒子の荒い軟質のもの2類が、発掘されている。前者は局部磨製石斧に使用され、後者は礫器・敲石・磨石に使用されている場合が多

第8表 チャート等製石器類・礫石器類石材内容組成表(A資料)

	KN	EN	SC	PE	DR	RF	UF	F	C	CORE	B.C	DEB	CH	EGAX	HS	PS	AN	合計
チャート	12	15	27	2	2	34	82	791	228	101	4	24						1320
鉄石英						1	2	5	2			1						11
泥岩								9					1					10
頁岩			1					5	2	1								9
凝灰岩			2					3		2			2	1	2			12
流紋岩							1	3										4
砂岩								1					2		2	1	1	7
黒水晶								1										1
石英									1									1
合計	12	15	30	2	2	35	85	818	333	104	4	25	5	1	4	1	1	1377

い。遺跡周辺の岩盤や河床には、硬質の凝灰岩層が希に観察されるが、軟質のものは認められない。軟質のものは、南約20kmの三田盆地以南の神戸層群中に産出することが知られている。特に産地を特定できないが、礫器類に使用される柔らかいものが、少し離れた地域の所産である可能性は高い。

黒水晶・石英については、遺跡周辺に産出する地層はなく、原産地は不明である。

#### ーサヌカイト製原石群の産地分析ー

板井寺ヶ谷遺跡下位文化層の原位置を確認して発掘したサヌカイト製石器類976点の原石は、二上山・淡路島岩屋・讃岐等瀬戸内海東部周辺のサヌカイト噴出原産または瀬戸内海沿岸等の転石であると推定される。全てのサヌカイトが一つのサヌカイト原産地から供給されているとは限らず、複数地から運ばれた可能性も考えられたので、その由来を明らかにすべく、サヌカイトの原産地分析を行なった(藁科・東村、本書第七章第8節)。

サヌカイト原産地分析の結果は、下位文化層に所属する合計976点から抽出した40点の分析結果であるが、下位文化層のサヌカイトの内、約78%が二上山産、約22%が岩屋産であるとされた(第七章第8節第6表)。その入手方法はともかく、板井寺ヶ谷遺跡と二上山・淡路島岩屋周辺の両者の関係が確認されたことになる。

サヌカイトには、その風化面が自然面のパターンや石材の目・流状構造を鮮明にする結果、群として分離できそうな原石群が認められる場合がある。板井寺ヶ谷遺跡でも、サヌカイトの剥離面と自然面の状態を肉眼的観察を行なうことにより、特徴的な一群を識別する事ができる。板井寺ヶ谷遺跡下層のサヌカイトのほとんどは、均質で石目の目立たないもので、自然面には渦巻状の風化紋に覆われるものであるが、一部には風化が他よりも明らかに進行し剥離面の観察が困難、結晶が大きく、石目が浮かび上がっている等の特徴を持ったものが含まれている。この特徴あるサヌカイトの一群をB類、一般的なサヌカイトをA類として、肉眼観察によって区別した。第9表に内訳を示す。合計976点の資料の内A類は合計869点89%、B類は合計107点11%であった。重量はA類合計3,206g、B類合計481gである。

先のサヌカイト原産地分析と肉眼による原石群分類結果を対照してみると、岩屋産と分析された9点全てがB類に含まれることが注目された。このことは、二上山産と分析されたものがA類、岩屋産と分析されたものがB類に対応する可能性を示唆し、肉眼観察によってある程度の原産地識別が可能なのではないかと考えられた。また、サヌカイト原産地分析では二上山産78%に対して、肉眼分類では89%で、少し比率に差がある点も問題を含む。

そこで、B類と肉眼識別した合計107点の中から31点を選んで、再度原石産地分析を行なった(第七章第8節第5表)。結果は、岩屋産60%、二上山産40%で、B類に肉眼観察された一群の岩屋産占有率は格段に増大していることが判明したが、二上山産を依然多く含んでいることも明らかになった。肉眼分析のみで原産地を決定するには困難があるが、参考的な判断材料としてなら考慮できよう。

第9表 サヌカイトB類一覧表 (肉眼識別)

ナイフ形石器	搔器	削器	RF	UF	F	C	CORE	合計
4	1	5	1	9	64	16	7	107
小ブロック								
A1	F1.12(F)	F2.15(F)	F2.54(CORE)	F2.16(UF)				
A1out	E0.1(KN)							
A2	E2.19(F)	E3.8(F)	E2.67(F)	F2.140(CORE)	E2.55(CORE)	F2.125(UF)	E2.68(F)	
A3	F3.19(SC)							
B1	F4.29(F)	F4.44(F)	F4.35(CORE)					
B2	E5.17(F)	E4.22(SC)						
B3	G5.4(C)							
C1	F7.107(F)	F7.94(F)	F7.104(F)	F7.116(F)	F7.9(F)	F7.106(F)	F7.115(F)	F7.118(F)
	F7.131(F)	F7.148(F)	F6.10(F)	F8.91(C)	F7.117(F)	F7.121(C)	F7.122(C)	F7.123(F)
	F7.22(F)	F7.26(F)	F7.110(F)	F7.147(C)	F7.4(F)	F7.97(F)	F7.126(F)	F7.119(F)
	F7.145(KN)	F7.101(UF)	F7.124(UF)	F7.102(UF)	F7.111(C)			F7.99(F)
C2	F6.9(EN)							
C3	E6.15(F)	E6.14(F)						
(C)	F6.11(UF)							
D1	E8.31(C)							
Ea1	J3.13(UF)							
Ea2	J3.20(SC)	J3.19(SC)						
Eb1	I6.22(F)	I5.4(C)						
Eb2	K5.25(F)							
Eb3	L5.18(F)	L5.29(CORE)						
F1out	I7.20(F)	H7.81(F)	I7.19(F)					
G2	I8.19(F)	H9.4(F)	J8.11(C)					
G3	G8.25(F)	G8.35(F)	G8.32(UF)	G8.34(UF)	H8.52(F)	H8.50(F)		
H1	K6.15(F)	K7.53(UF)						
H2	K8.23(F)	K8.2(F)	K8.11(F)					
I1	K8.3(F)	L9.10(F)	K8.12(F)	L9.5(F)				
I2	M9.2(F)	M9.4(F)						
Ja1	J9.16(C)							
Ja2	K10.22(F)	K10.32(F)	L10.22(C)	K10.24(KN)	K9.14(KN)	K9.16(C)		
Ja3	L11.4(F)	M11.7(RF)	M11.6(SC)	L11.14(C)	L11.15(C)	L11.7(C)		
(Ja)	J8.3(SC)	J9.1(F)						
Jb1	J10.6(F)	I11.12(F)	J10.19(F)	I11.5(F)				
Jb2	K10.34(F)	K10.35(CORE)	K11.9(CORE)	K11.44(C)				
不明	F4.46(F)	G5.7(CORE)	K6.5(F)					

肉眼区別と原産地分析の比率のばらつきは、原石産地分析のサンプリング数が少ないからである可能性がある。この肉眼識別と原産地分析の結果を統合して判断するなら、岩屋産は両者のパーセンテージの中間、約15%が本来の占有率に近い数値として考慮できるであろう。

板井寺ヶ谷遺跡下位文化層のサヌカイトの由来は、二上山産が主体で、岩屋産が少量ともなうとして、理解された。

#### b. 接合資料と個体別資料の識別

個体別資料の認定は、遺物群の技術的構造と石器使用実態、遺跡の潜在構造を解明していく上で、現

第10表 器種別接合数

	A資料		B資料		合計
	サヌカイト	チャート等	サヌカイト	チャート等	
ナイフ形石器	0	0	0	1	1
搔器	0	4	0	1	5
削器	2	7	1	1	11
錐状石器	0	1	0	0	1
加工痕有剥片	7	6	2	2	17
使用痕有剥片	12	21	2	10	45
剥片	77	226	6	62	371
砕片	4	15	0	3	22
石核	14	47	1	6	65
合計	116	327	12	86	541
	443		98		

在、極めて重要な役割を果たす分析視点となってきた。遺跡と遺物群の内容を正確に把握するために、すべての石材が個体識別できることが望ましい。ところが、板井寺ヶ谷遺跡で発掘された石器類は、さきに記述したように、多様な石材が使用され、その由来も一様ではない。発掘調査の整理作業では、発掘石材全てを等しく個体識別しようと試みたが、石材によって個体識別程度が大きく異なることになった。

板井寺ヶ谷遺跡の剥片石器の主要石材は、サヌカイトとチャートであるが、両者には、識別の難易に大きな差がある。サヌカイトは、その石材の性質によって、個体差に乏しく、個体識別が事実上不可能である。僅かに、風化が進行することによって石材の目が認められる場合、ある程度の石材群を判別できるに留まる。一方のチャートは、極めて個性豊かな石材であるため、個体識別は容易であり、約78.5%の識別率となっている。

板井寺ヶ谷遺跡での個体別資料の認定は、石材間での、同一基準・水準の分析視点を提供するものにはならなかった。個体別資料の認定によってえられる考古学的情報は、個々の石材毎に活用できるに留まる。結果として、個体段階の分析は、識別の困難なサヌカイトを除いたチャート材他の石材を巡る問題に限定して活用することになる。

一方、サヌカイトとチャート両石材には、個体識別度に大きな隔りがあるものの、両者とも遺跡内で石器類の生産・使用・遺棄廃棄が行なわれた結果、接合資料が豊富に発見された。接合資料は、独立した一つの個体そのものではなく、いくつかの接合資料が一つの個体に含まれる場合があるが、まさに接合することで、一つの石材から確実に生産された石器群を識別することが可能である。

板井寺ヶ谷遺跡で発掘されたサヌカイトの場合、遺跡内でのサヌカイト製剥片生産は活発ではなく、多くの石核や剥片が搬入品であると考えられる。複数の接合資料が遺跡内で一つの母岩から生産されたものとして、統合される可能性は少ない。接合資料を一つの単位として考えることが可能である。

チャートは、肉眼的に識別された個体別資料内に接合資料が含まれる場合、その個体の識別信頼度は高いと考えてよい。ほとんどの工程を遺跡内で行なった個体が多くあり、複数の接合資料を含むものも多い。

その他の石材は、いずれも点数が少なく、ほとんどが単独個体であり、接合資料にも乏しい。

サヌカイトとチャート・凝灰岩・頁岩などの石材は、個体別分類の可能・不可能という問題点によって、2つに分けて取り扱う必要がある。また、個体別資料の段階と接合資料の段階の2段階でも区別を行なう必要がある。検討しようとする事柄に合わせて、以上の資料的選択を行ないたい。

#### c, 個体別資料組成

ここでは、チャート等製個体別資料の組成について記述する。

チャート等製剥片石器類は、原位置を保って発掘されたA資料合計1340点の内、986点73.5%が個体識別され、B資料合計279点と合わせて、総計1,265点が136個体に分類された。この他に、単独個体石器類合計67点がある。実質識別率は78.5%となる。

第11表に個体別資料組成表を示す。第13表に単独個体剥片石器類・礫石器類遺物番号一覧表を示す。

#### d, チャート等製個体別資料の内容

チャート製石器類の内に判別された個体別資料136個体の内、内容が豊富で後の剥片生産技術や個体別

第11表 個別別資料組成表

No.	Total	Refitted	Suit	Tools	RF	UF	F	CCores	Type	Stage	No.	Total	Refitted	Suit	Tools	RF	UF	F	CCores	Type	Stage		
1	6	6	5	0	0	0	4	0	2	F	A+B+C	70	4	3	4	0	0	0	4	0	F	B	
2	11	9	10	1	0	0	8	0	2	F	A+B+C	71	2	2	2	1	0	0	1	0	F	B	
3	12	7	12	0	0	0	12	0	0	F	A+B	72	7	0	5	0	0	2	0	5	0	-	
4	2	2	2	0	0	0	2	0	0	-	-	73	3	0	2	0	0	1	2	0	-	-	
5	5	2	5	0	0	1	4	0	0	F	B?	74	15	0	10	0	2	1	9	3	0	F	B
6	7	0	6	0	0	0	5	1	1	F	A	75	3	0	3	1	0	2	0	0	0	T	-
7	5	0	1	0	1	0	3	0	1	F	B?	76	4	0	3	2	0	0	2	0	0	-	-
8	4	0	4	0	0	0	2	1	1	F	A?	77	6	0	6	2	0	0	2	0	2	F	?
9	5	2	5	0	0	0	5	0	0	-	-	78	16	2	14	0	1	0	10	5	0	F	B
10	12	2	12	0	0	1	8	1	2	F	A+B	79	11	0	10	0	0	0	7	3	1	F	B
11	2	0	2	0	0	1	0	1	0	-	-	80	5	0	4	1	1	0	3	0	0	F	B
12	3	0	1	1	0	0	2	0	0	-	-	81	6	0	5	0	0	3	3	0	0	F	B
13	3	3	3	0	0	2	1	0	0	-	-	82	5	0	5	0	0	0	4	1	0	F	B
14	2	0	2	0	0	1	1	0	0	-	-	83	11	4	10	0	1	0	8	0	2	F	B+C
15	4	0	4	0	0	2	2	0	0	-	-	84	4	0	4	0	0	0	3	0	1	F	C
16	4	0	4	0	0	0	3	0	1	F	?	85	7	0	5	0	1	0	5	1	0	F	B
17	4	3	4	0	0	0	3	0	1	F	C	86	4	0	4	0	0	0	4	0	0	-	-
18	4	3	2	0	0	0	3	0	1	F	C	87	2	0	2	0	0	0	2	0	0	-	-
19	2	0	2	0	0	0	2	0	0	-	-	88	33	23	20	0	1	0	30	0	2	F	B+C
20	2	2	2	1	0	0	1	0	0	-	-	89	14	12	13	0	0	1	9	0	4	F	B+C
21	11	6	6	0	0	4	4	2	1	F	B	90	4	0	4	0	0	0	4	0	0	-	-
22	10	0	8	0	1	4	4	0	1	F	?	91	6	0	6	0	1	1	4	0	0	F	B
23	28	9	22	0	0	3	21	2	2	F	B+C	92	10	2	8	2	1	0	6	0	1	F	B+C
24	40	23	32	0	0	2	32	4	2	F	B	93	9	2	8	1	0	0	6	1	1	F	?
25	18	10	10	0	1	1	15	1	0	F	B	94	6	0	5	0	0	0	3	2	1	F	C
26	3	0	3	0	0	0	3	0	0	-	-	95	3	0	3	1	0	0	2	0	0	-	-
27	3	0	3	0	0	0	3	0	0	-	-	96	8	2	7	0	0	0	7	0	1	F	B
28	5	0	5	3	0	0	2	0	0	-	-	97	15	9	9	0	0	1	11	0	3	F	B+C
29	2	0	2	1	0	0	1	0	0	-	-	98	10	2	8	0	1	2	7	0	0	F	B
30	4	0	3	3	0	0	1	0	0	-	-	99	21	2	16	0	0	1	17	2	1	F	?
31	4	0	1	0	1	0	2	1	0	-	-	100	35	11	24	8	2	1	17	3	4	F	B+C
32	4	0	3	1	0	0	3	0	0	-	-	101	4	0	4	0	0	0	3	0	1	F	C
33	10	0	6	0	0	0	7	2	1	F	?	102	3	0	2	0	0	0	3	0	0	-	-
34	2	0	1	0	0	0	2	0	0	-	-	103	3	2	2	2	0	0	1	0	0	-	-
35	3	0	2	0	0	0	3	0	0	-	-	104	6	2	6	0	0	0	5	0	1	F	C
36	3	0	1	0	0	2	1	0	0	-	-	105	5	0	4	0	0	1	4	0	0	F	B
37	8	5	4	0	0	0	5	0	3	F	B+C	106	26	19	14	5	2	0	16	2	1	F	B+C
38	3	2	2	0	0	0	2	0	1	F	C	107	7	2	7	0	1	0	4	2	0	F	B
39	7	3	7	1	4	2	0	0	0	T	-	108	3	2	3	0	0	0	2	0	1	F	C
40	4	2	4	1	0	1	2	0	0	-	-	109	6	0	4	0	0	1	5	0	0	F	B
41	7	2	7	1	0	1	3	1	1	F	B	110	41	6	9	4	1	2	29	5	0	F	B
42	-	-	欠番	-	-	-	-	-	-	-	-	111	20	8	18	0	0	1	19	0	0	F	B
43	16	2	16	0	1	0	11	3	1	F	B+C	112	5	0	4	0	0	0	2	2	1	F	C
44	9	3	4	0	0	3	3	2	1	F	B+C	113	17	0	16	3	0	0	10	2	2	F	?
45	71	28	70	1	0	2	54	12	2	F	B+C	114	5	0	2	1	0	2	2	0	0	-	-
46	10	0	9	0	2	2	5	0	1	F	B	115	2	2	2	0	0	0	2	0	0	F	B
47	6	0	5	1	0	1	3	0	1	F	?	116	2	2	2	0	0	0	2	0	0	F	A+B+C
48	7	3	3	0	0	0	4	1	2	F	C	117	3	2	3	1	1	0	0	1	0	-	-
49	9	0	9	0	0	0	5	3	1	F	C	118	3	2	0	0	0	1	2	0	0	-	-
50	4	0	3	0	0	0	3	0	1	F	C	119	6	4	6	0	0	1	3	0	2	F	B+C
51	3	0	3	0	2	0	1	0	0	-	-	120	3	0	3	0	0	3	0	0	0	T	-
52	10	5	5	0	1	0	8	1	0	F	B	121	2	0	2	0	1	0	1	0	0	-	-
53	15	4	8	0	0	2	11	0	2	F	?	122	2	0	2	0	0	1	1	0	0	-	-
54	2	0	1	0	0	0	1	0	1	F	C	123	2	0	2	1	0	0	0	1	0	-	-
55	2	0	2	0	0	0	2	0	0	F	C	124	5	0	5	0	0	0	2	0	3	F	A+B+C
56	6	0	2	0	1	2	2	0	1	F	C	125	11	7	10	0	0	0	6	0	5	F	?
57	3	2	2	0	0	1	1	0	1	F	C	126	13	4	12	0	0	0	12	0	1	F	B+C
58	2	0	2	1	0	0	1	0	0	-	-	127	23	4	21	0	0	3	16	0	4	F	B+C
59	31	14	31	0	2	6	17	4	2	F	B+C	128	10	6	9	0	0	0	9	0	1	F	A+B+C
60	15	4	14	0	0	0	14	0	1	F	A+B+C	129	5	2	1	0	0	2	3	0	0	F	B
61	23	17	22	0	0	0	16	5	2	F	B+C	130	7	3	6	1	0	0	6	0	0	F	B
62	25	8	22	0	0	2	18	4	1	F	B+C	131	15	14	10	0	0	0	13	0	2	F	A+B+C
63	27	0	26	0	2	2	22	1	0	F	B	132	19	10	13	0	1	1	15	1	1	F	B+C
64	12	4	12	1	0	1	8	2	0	F	B	133	23	10	20	1	1	1	18	1	1	F	B+C
65	4	0	4	0	0	0	4	0	0	-	-	134	3	3	3	0	0	0	3	0	0	F	B
66	2	0	1	0	0	0	2	0	0	-	-	135	6	5	5	0	0	0	5	0	1	F	A+B+C
67	5	2	5	0	0	0	4	0	1	F	C	136	15	9	15	0	0	0	10	0	5	F	B+C
68	10	2	3	1	0	2	5	2	0	F	B	137	3	0	3	0	0	0	3	0	0	F	A+B
69	3	2	3	2	0	0	1	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	



第12表 単独個体石器組成表（剥片石器・A資料）

器種	KN	EN	SC	RF	UF	F	CORE	CORE-B	合計
点数	1	3	10	1	12	27	12	2	67
%	1.5	4.5	14.9	1.5	17.9	40.3	17.9	3.0	

第13表 礫石器類・単独個体石器一覧表（A資料）

礫石器類
E3.SE(HS ?) F1.98(HS A1) F4.86(CH B1) F5.205(AN B3) F6.47(CH B1) G2.23(HS A1) J4.27(HS Ea2) K6.40(HS H1) K6.47(PS H1) K8.13(CH H2) K8.26(CH H2) O9.1(CH I3)
チャート等製単独個体石器
D4.16(F B2) D6.9(UF B2out) D7.26(UF D2) E5.5(UF B2) E4.11(KN B2) E4.42(CORE B2) E4.43(F B2) E4.57(SC B2) E4.71(CORE B2) E4.78(EN B2) E5.26(RF C3) E5.27(BLANK - CORE B1) E6.10(SC (C)) E7.2(F D2) F0.1(F A1) F0.3(SC A1out) F1.31(UF A1) F1.66(SC A1) F2.1(F A1) F2.29(F A1) F3.4(CORE A3) F4.12(F B1) F4.114(F B1) F5.69(CORE B3) F6.18(CORE C2) G1.2(CORE A4) G1.7(F A4) G1.9(SC A4) G1.10(UF A4) G1.18(F A4) G1.20(UF A4) G2.20(EG - AX A1) G4.8(CORE B1out) G6.24(CORE F2) G6.36(F F2) H2.3(UF Ea1) H6.147(CORE F1) H13.1(UF K) H13.2(F K) H14.2(F F2) I3.10(F Ea1) I3.21(F Ea1) I3.35(F Ea1) I3.37(UF Ea1) I4.9(F Eb1) I4.19(CORE Eb1) I4.80(EN Ea2) I5.33(F Eb1) I9.22(F G2) I13.5(UF K) J3.17(SC Ea2) J4.31(CORE Ea2) J4.42(SC Ea3) J5.16(SC Eb2) J5.41(EN Eb2) J7.18(F G1) J9.31(F G2) J10.18(F Jb1) K6.3(F H1) K7.67(F H2) L5.13(F Eb3) L5.17(UF Eb3) L6.10(CORE Eb3) L10.19(SC Ja2) L11.20(F JA3) M5.1(UF L) M8.2(F I2) PD1.2(SC PD1) PD2.1(BLANK-CORE B1)

第14表 非識別資料組成表（A資料）

	搔器	削器	楔形石器	加工痕有剥片	使用痕有剥片	剥片	碎片	石核
点数	1	2	1	2	6	88	13	1
%	0.8	1.7	0.8	1.7	5.3	77.2	11.4	0.8

第15表 非識別資料ブロック別組成表（A資料）

	A	B	C	D	Ea	Eb	F	G	H	I	Ja	Jb	K	L	PD	TOTAL
TOOLS	0	2	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
RF	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
UF	1	2	0	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	6
F	19	21	4	5	16	14	3	1	0	0	5	0	0	0	0	88
C	1	4	2	0	1	3	1	1	0	0	0	0	0	0	0	13
CORES	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
合計	22	31	6	7	17	19	5	2	0	0	5	0	0	0	0	114

TOOLS=EN(B) SC(B.Eb) PE(D)

第16表 個別別資料（チャート製等）遺物番号一覧表(1)

<b>MATERIAL No.1</b>
CLASS A
K10C1-K10.4(CORE Ja2) K10.6(CORE Ja2) K10.7(F Ja2) K10.8(F Ja2) K10.13(F (Ja)) K10.25(F Ja2)
<b>MATERIAL No.2</b>
CLASS A
K10C2-J11.26(CORE Jb1) K10.2(F Ja2) K10.9(F Ja2) K10.12(F Ja2) K10.15(F (Ja)) K10.20(CORE Ja2)
K10.26(F Ja2) K10.33(SC Jb2) L10.3(F Ja2)
CLASS B
K10.3(F Ja2) L10.26(F Ja2)
<b>MATERIAL No.3</b>
CLASS A
M11C1-L11.8(F Ja3) L11.10(F Ja3) L11.13(F Ja3) M11.5(F Ja3) M11.9(F Ja3) M11.15(F Ja3) M11.19(F Ja3)
CLASS B
L11.9(F Ja3) L11.18(F Ja3) L11.23(F Ja3) M11.1(F Ja3) M11.2(F Ja3)
<b>MATERIAL No.4</b>
CLASS A
F2C4-F2.53(F A1) F2.77(F A1)
<b>MATERIAL No.5</b>
CLASS A
I2C1-I2.10(F Ea1) J3.16(F Ea3)
CLASS B
J4.5(F Eb2) J5.37(F Eb2) L6.25(UF Eb3)
<b>MATERIAL No.6</b>
CLASS B
D5.2(F (B-C)) E5.23(F C3) E6.29(F C3) G2.9(CORE A3) I3.6(F Ea1) I3.13(F Ea1) I4.13(C Ea2)
<b>MATERIAL No.7</b>
CLASS B
D4.13(F B2) I2.2(F Ea1) I4.20(RF Ea2) L5.9(F Eb3) L5.40(CORE Eb2)
<b>MATERIAL No.8</b>
CLASS B
L10.33(F Ja3) L10.35(C Ja2) L10.41(CORE-BLANK Ja2) L11.3(F Ja3)
<b>MATERIAL No.9</b>
CLASS A
F2C3-F2.134(F A2) F2.189(F A2)
CLASS B
E2.53(F A2) F2.165(F A2) F2.170(F A1)
<b>MATERIAL No.10</b>
CLASS A
D7C1-D7.1(CORE D2) D7.8(C D2)
CLASS B
D7.22(F D2) D8.8(F D1) D8.23(UF D1) D8.24(F D1) E6.17(F C3) F5.193(F B3) F6.41(F C29) G4.20(F Blout)
<b>MATERIAL No.11</b>
CLASS B
I12.2(RF K) I12.3(F K)
<b>MATERIAL No.12</b>
CLASS B
F6.30(F (C)) H6.197(KN F1) H7.56(F (F))
<b>MATERIAL No.13</b>
CLASS A
K8C1-K8.9(UF H2) K8.10(UF H2) K9.7(F Ja1)
<b>MATERIAL NO.14</b>
CLASS B
I12.1(F K) I13.1(UF K)
<b>MATERIAL No.15</b>
CLASS B
D8.3(UF D1) I13.6(UF K) L11.25(F Ja3) M11.16(F Ja3)
<b>MATERIAL No.16</b>
CLASS B
I12.4(F K) I13.3(F K) I3.4(F K) I13.7(CORE K)

第16表 個体別資料（チャート製等）遺物番号一覧表(2)

<b>MATERIAL No.17</b>
CLASS A
K10C3-K10.10(F Ja2) K10.23(F Ja2) K10.39(CORE Ja2)
CLASS B
K10.19(F Ja2)
<b>MATERIAL No.18</b>
CLASS A
I2C2-F1.SE(CORE (A)) I2.7(F Ea1) I4.29(F Ea2)
CLASS B
G1.13(F (A))
<b>MATERIAL No.19</b>
CLASS B
E4.4(F B2) F4.37(F B1)
<b>MATERIAL No.20</b>
CLASS A
F4C3-F4.23(F B1) F4.42(SC B1)
<b>MATERIAL No.21</b>
CLASS A
F7C1-F7.137(UF C1) G6.32(UF F2) G7.27(UF (G)) G8.38(UF G3)
G7C4-G7.7(CORE (F)) G7.12(F (F))
CLASS B
F7.93(C C1) G6.41(C F2) G6.43(F F2) G7.2(F (F)) G7.22(F (F))
<b>MATERIAL No.22</b>
CLASS B
D7.25(F D2) D8.12(UF D1) D8.19(RF D1) D9.3(F D1out) E6.24(UF (C)) E6.33(UF C3) E7.12(F (C-D))
F6.37(CORE C2) H4.4(F Ea2) J5.56(UF Eb2)
<b>MATERIAL No.23</b>
CLASS A
E6C1-E6.31(F C3) F4.125(F B1) F6.43(UF C2)
F5C8-F5.58(CORE B3) F6.15(C C2)
H6C5-H6.58(F (F)) H6.145(F F1)
H6C15-H6.50(F (F)) H6.68(F (F))
CLASS B
E4.47(F B2) E6.21(F C3) E6.22(F C3) F4.98(F B1) F4.108(F B1) F4.113(F B1) F4.116(F B1) F4.128(F B1)
F4.129(F B1) F5.111(F (B)) F6.31(UF C2) F6.38(F C2) G4.24(UF (B)) H6.31(F F1) H6.35(CORE F1) H6.78(C
(F)) H6.205(F F1) H6.208 (F F1) I5.23(F Eb1)
<b>MATERIAL No.24</b>
CLASS A
H6C2-H6.46(F F1) H6.66(F (F)) H6.74(F (F)) H6.86(F F1) H6.88(CORE F1) H6.107(F F1) H6.179(F F1)
H6.190(CORE F1) H6.193(F F1) H6.200(F F1) H6.204(UF F1) H6.209(F F1) H6.212(F F1) H6.214(C F1) I5.SE
(F (Eb-F)) I6.1(F F1) I6.11(F F1) I6.20(F (F)) J4.1(F Eb2)
H6C7-H6.171(F F1) I6.5(F (F))
H6C9-H6.109(F (F)) H6.117(F F1)
CLASS B
E5.22(F C3) G6.19(F F2) G6.35(UF F2) G6.39(F F2) H5.1(F F1) H5.5(F Eb1) H5.6(C Eb1) H5.10(F F1) H6.62(F
(F)) H6.183(F F1) H6.187(F F1) H6.188(C F1) H6.192(C F1) H6.207(F F1) H7.84(F F2) I5.13(F Eb1) I6.6(F
(F))
<b>MATERIAL No.25</b>
CLASS A
G6C2-G6.38(F F2) G7.17(F F2)
G7C3-G7.3(F (F)) G7.4(C (F)) G7.5(F (F))
H6C6-H6.18(F (F)) H6.56(F (F)) H6.122(F F1)
H6C13-H6.119(F F1) H6.144(F F1)
CLASS B
E4.75(F B2) F7.108(F C1) F7.142(F C1) G7.11(UF (F)) G7.20(RF (F)) G7.24(F F2) G7.55(F F2) H6.24(F (F))
<b>MATERIAL No.26</b>
CLASS B
I4.71(F Ea2) J4.25(F Ea3) K5.40(F Eb2)
<b>MATERIAL No.27</b>
CLASS B
D5.4(F B2out) E4.1(F B2) E6.1(F C3)
<b>MATERIAL No.28</b>
CLASS B
E4.9(DR B2) E4.61(F B2) G4.6(EN B1out) I8.7(SC G2) J5.19(F Eb2)

第16表 個別別資料（チャート製等）遺物番号一覧表(3)

<b>MATERIAL No.29</b>
CLASS B
I4.40(KN Ea2) I4.94(F Ea2)
<b>MATERIAL No.30</b>
CLASS B
E0.3(PE A1out) E4.35(SC B2) F2.141(F A2) SE(KN ?)
<b>MATERIAL No.31</b>
CLASS B
G7.9(C (F)) H6.97(F F1) H7.23(F (F)) H7.61(RF (G))
<b>MATERIAL No.32</b>
CLASS B
F6.14(F C2) F6.27(F (C)) G4.21(F B1out) G5.1(EN B3)
<b>MATERIAL No.33</b>
CLASS B
D4.9(F B2) E7.22(F (C)) E7.28(C (C)) F4.4(F B1) F7.2(CORE C1) F7.3(F C1) F7.5 (F (C)) F7.27(F (C)) I3.14(F Ea1) J4.9(C Ea3)
<b>MATERIAL No.34</b>
CLASS B
F4.34(F B1) F7.46(F (C))
<b>MATERIAL No.35</b>
CLASS B
E5.29(F B2) G7.13(F (F)) I4.87(F Ea2)
<b>MATERIAL No.36</b>
CLASS B
F3.5(F A3) G2.16(UF A4) I4.48(UF Ea2)
<b>MATERIAL No.37</b>
CLASS A
G7C1-G6.7(F (F)) G7.16(F (F))
CLASS B
E4.33(CORE B2out) F4.31(CORE B1) F5.75(CORE B3)
<b>MATERIAL No.38</b>
CLASS A
F5C2-F4.106(F B1) F5.65(CORE B3)
CLASS B
F5.35(F (B))
<b>MATERIAL No.39</b>
CLASS A
I5C1-I5.16(RF Eb1) I5.22(RF Eb1) I5.36(RF Eb1)
CLASS B
I3.2(KN Ea2) I4.70(UF Ea2) L5.26(RF Eb3) L6.11(UF Eb3)
<b>MATERIAL No.40</b>
CLASS A
E4C4-E4.60(SC B2) L6.27(UF)
CLASS B
F5.64(F B3) K5.3(F Eb2)
<b>MATERIAL No.41</b>
CLASS A
J11C2-J11.34(CORE Jb1) L11.5(F Jb2)
CLASS B
I10.9(F Jb1) I10.10(C Jb1) I11.1(SC Jb1) J11.1(UF Jb1) J11.20(F Jb1)
<b>MATERIAL No.42</b> 欠番
<b>MATERIAL No.43</b>
CLASS A
F2C14-F1.65(F A1) F2.180(F A1)
CLASS B
E2.71(F A2) F1.7(CORE A1) F1.19(C A1) F1.40(F A1) F1.49(C A1) F1.55(F A1) F1.68(RF A1) F1.71(C A1) F2.44(F A1) F2.102(F A3) F3.16(F A3) F3.47(F A3) G4.17(F B1out) L6.8(F Eb3)
<b>MATERIAL No.44</b>
CLASS A
H6C22-G6.SE(CORE (C-F)) H6.54(UF (F)) H6.149(UF (F))
CLASS B
G6.29(F F2) G7.52(F F2) H6.70 (C (F)) H6.151(UF F1) H6.155(C F1) H6.173(F (F))

第16表 個別別資料（チャート製等）遺物番号一覧表(4)

**MATERIAL No.45**

CLASS A

E2C4-E2.20(UF A2) F2.33(F A1)  
 F2C9-F2.19(C A1) F2.23(C A1) F2.58(F A1) F2.187(F A3)  
 F2C10-F2.61(F A1) F2.130.(F A2)  
 F2C11-F2.139(CORE A2) G3.11(F A3)  
 F2C12-F2.88(F A1) F2.166(F A2)  
 F2C17-F2.137(F A2) F2.162(F A1)  
 F3C3-E2.35(F A2) F3.40(F A) G2.6(F A3) G3.14(F A3)  
 F3C4-F3.28(F A3) F3.53(F A3) F3.58(F A3)  
 J3C1-F2.30(C A1) F2.37(F A1) F2.101(F A3) F2.113(F A3) J3.11(F Ea3)  
 K4C1-F2.3(F A2) K4.3(F Eb2)

CLASS B

E2.16(F A2) E2.18(C A2) E2.22(F A2) E2.32(F A2) E2.37(F A2) E2.42(F A2) E2.58(F A2) E2.60(F A2) E2.61(F A2) E2.61(F A2) E2.64(C A2) E2.87(F A2) E3.7(F A2out) F1.13(C A1) F1.48(F A1) F1.58(F A1) F1.88(F A1) F1.97(C A1) F2.4(F A1) F2.27(F A1) F2.32(C A1) F2.39(C A1) F2.47(UF A1) F2.66(F A1) F2.69(F A1) F2.80(F A1) F2.90(F A1) F2.95(F A1) F2.103(C A3) F2.117(CORE A2) F2.123(F A2) F2.161(F A1) F2.163(C A1) F2.182(C A1) F3.8(F A3) F3.31(F A3) F3.33(F A3) H3.1(F Ea1) H3.3(F Ea1) I2.5(F Ea1) I3.5(F Ea2) I4.68(F Ea2) J5.34(F Eb2)

**MATERIAL No.46**

CLASS B

D4.15(RF B2) D7.11(F D2) D7.14(UF D2) D7.29(F D2) D8.1(F D1) D8.2(UF D1) E1.2(F A1out) E5.21(F (B-C)) F6.1(RF C2) F7.129(CORE C1)

**MATERIAL No.47**

CLASS B

E5.8(SC B2) F4.117(CORE B1) G4.1(UF B1out) H6.172(F (F)) I5.6(F F1) PD3.1(F PD3)

**MATERIAL No.48**

CLASS A

H6C11-H6.90(C (F)) H6.118(CORE F1) I6.18(CORE F1)

CLASS B

E5.7(F (C)) F5.198(F B3) H6.57(F (F)) H6.113(F (F))

**MATERIAL No.49**

CLASS B

E2.9(C A2) E2.78(F A2) F1.46(C A1) F2.87(F A1) F2.96(C A1) F2.98(F A1) F2.144(F A2) F3.20(CORE A2) G2.13(F A4)

**MATERIAL No.50**

CLASS B

H6.67(F (F)) H6.93(CORE F1) H6.159(F F1) H6.202(F F1)

**MATERIAL No.51**

CLASS B

E6.25(F C3) F4.71(RF B1) F6.32(RF C2)

**MATERIAL No.52**

CLASS A

H6C4-H6.43(F (F)) H6.47(F F1) H6.53(F (F)) H6.65(F (F)) H6.154(F F1)

CLASS B

G5.19(F Ea1out) H6.30(F F1) H6.44(F F1) H6.52(C (F)) H6.79(RF (F))

**MATERIAL No.53**

CLASS A

G5C1-G5.16(F B3) G5.17(F B3)  
 H6C12-H6.103(F F1) H6.108(UF (F))

CLASS B

E7.7(CORE (C-D)) E7.14(CORE (C-D)) F4.100(F B1) F5.176(F (B)) G6.15(UF (C-F)) G7.6(F (F)) G7.14(F (F)) G7.18(F F2) G7.51(F F2) H5.8(F Eb1) I5.12(F Eb1)

**MATERIAL No.54**

CLASS B

F5.160(F (B)) J4.19(CORE Ea2)

**MATERIAL No.55**

CLASS B

E0.4(F A1out) E0.5(F A1out)

**MATERIAL No.56**

CLASS B

E7.25(F (C)) F4.47(UF (B)) F5.112(F (B)) F5.171(UF (B)) G4.15(CORE B1out) G6.2(RF C2)

第16表 個別別資料(チャート製等)遺物番号一覧表(5)

**MATERIAL No.57**

CLASS A

L5C1-K2,SE(UF ?) L5.19(CORE Eb3)

CLASS B

L5.10(F Eb3)

**MATERIAL No.58**

CLASS B

F2.35(F A1) G1.6(EN A4)

**MATERIAL No.59**

CLASS A

E2C2-E2.4(F A2) E2.45(C A2) E2.62(CORE A2) F2.5(UF A1) F1.77(RF A1) F1.94(F A1)

E2C3-E2.34(RF A2) E2.82(F A2)

F2C8-E2.54(UF A2) F2.155(UF A1)

F2C13-F2.127(CORE A2) F2.175(C A1)

H3C1-H3.14(F Ea1) I3.36(UF Ea1)

CLASS B

E2.3(F A2) E2.36(F A2) E2.46(F A2) E2.75(C A1) E2.89(F A2) F1.24(F A1) F1.27(F A1) F1.28(F A1) F1.41(UF A1) F1.50(F A1) F2.10(C A1) F2.25(F A1) F2.43(UF A1) F2.104(F A3) F2.120(F A2) F2.143(F A2) H3.6(F Ea1)

**MATERIAL No.60**

CLASS A

F1C1-F1.1(F A1) F1.63(F A1) F2.60(F A1) F3.12(CORE A3)

CLASS B

F1.2(F A) F1.52(F A1) F1.90(F A1) F2.8(F A1) F2.49(F A1) F2.56(F A1) F2.84(F A1) F2.86(F A1) F2.146(F A2) F2.160(F A2) F3.9(F A3)

**MATERIAL No.61**

CLASS A

E2C1-E2.44(F A2) F1.51(C A1) F2.64(F A1)

F2C2-E2.6(F A2) E2.63(CORE A2) F1.89(F A1) F2.7(F A1) F2.171(F A1) I4.26(F (Ea))

F2C7-F1.47(F A1) F2.111(CORE A3) F2.168(F A1)

G2C1-F1.21(F A1) F2.46(C A1) F2.89(F A1) G2.4(F A3) G2.8(F A3)

CLASS B

E2.39(F A1) F1.20(C A1) F1.42(C A1) F2.17(F A1) F2.38(C A1) F2.167(F A1)

**MATERIAL No.62**

CLASS A

F1C4-F1.8(C A1) F1.9(C A1)

F2C6-E2.15(F A2) E2.31(F A2) E2.40(F A2) F2.126(F A2) F2.132(CORE A2) F3.27(UF A3)

CLASS B

E1.3(F A2out) E2.1(F A2out) E2.5(F A2) E2.24(F A2) E2.50(F A2) E2.57(F A2) F1.38(C A1) F2.100(UF A3) F2.116(F A3) F2.158(C A3) F2.176(F A1) F3.36(F (A)) F5.62(F (B)) I2.8(F Ea1) I3.16(F Ea1) J4.26(F (Ea)) K5.42(F Eb2)

**MATERIAL No.63**

CLASS B

H4.6(F Ea2) I3.29(UF Ea1) I4.6(F Eb1) I4.8(F Eb1) I4.16(F Eb1) I4.18(F Eb1) I4.62(F Ea2) I5.26(F Eb1) I5.31(F Eb1) I5.32(F Eb1) I5.39(RF Eb1) I6.24(F Eb1) J4.8(RF Ea3) J4.30(UF Ea2) J4.50(F Ea2) J4.51(C Ea2) J4.52(F Ea2) J5.26(F Eb2) J5.31(F Eb2) J5.42(F Eb2) J6.12(F Eb2) K4.9(F (Eb)) K6.32(F H1) L5.6(F Eb3) L5.6(F Eb3) L5.7(F Eb3) L5.15(F Eb3) L6.26(F H1)

**MATERIAL No.64**

CLASS A

E2C5-E2.80(C A2) E2.81(F A2)

F2C18-F2.115(F A3) J3.18(F Ea2)

CLASS B

F1.11(UF A1) F2.42(C A1) F4.112(F B1) H3.12(F Ea1) I2.9(F Ea1) I4.84(F Ea2) I5.19(F Eb1) J2.1(KN Ea1)

**MATERIAL No.65**

CLASS B

F4.15(F B1) G5.9(F B3) G5.15(F B3) G5.18(F B3)

**MATERIAL No.66**

CLASS A

F5C3-F5.114(F B3) F5.118(F (B))

**MATERIAL No.67**

CLASS A

H4C1-E4.86(CORE B2) I4.58(F Ea2)

CLASS B

E4.66(F B2) H3.8(F (Ea1) I4.60(F Ea2)

第16表 個別別資料（チャート製等）遺物番号一覧表(6)

**MATERIAL No.68**

CLASS A

H6C23-H6.3(UF (F)) H6.71(UF (F))

CLASS B

F7.7(F (C)) G6.40(F F2) G7.54(F F2) H5.13(F Eb1) H6.17(F (F)) H6.76(GR (F)) H7.32(C (F)) H7.39(C (F))

**MATERIAL No.69**

CLASS A

E4C1-E4.10(EN B2) E4.19(DR B2)

CLASS B

E5.12(F B2)

**MATERIAL No.70**

CLASS A

F5C7-F4.95(F B1) F4.97(F B1) F5.72(F B3)

CLASS B

F4.115(F B1)

**MATERIAL No.71**

CLASS A

H6C21-E4.44(EN B2) H6.45(F1)

**MATERIAL No.72**

CLASS B

E4.27(C B2) E4.28(C B2) E4.32(C (B)) E4.55(C B2) E4.64(C B1) F4.87(UF B1) F5.82(UF (B))

**MATERIAL No.73**

CLASS B

F4.17(UF B1) F7.16(F C1) F7.23(F (C))

**MATERIAL No.74**

CLASS B

E4.17(F B2) E4.37(F B2) E4.93(F B1) E7.33(F (C)) F4.3(RF B1) F5.17(F (B)) F5.18(C (B)) F5.20(RF (B)) F5.36(C B3) F5.122(F (B)) H3.5(C Ea1) H3.18(F Ea1out) H4.14(F Ea2) I4.74(UF Ea2) I4.92(F Ea2)

**MATERIAL No.75**

CLASS B

J4.22(SC) K5.35(UF Eb2) L5.41(UF Eb2)

**MATERIAL No.76**

CLASS B

E4.98(F B2) E6.7(KN C3) F5.38(SC (B)) G6.33(F F2)

**MATERIAL No.77**

CLASS B

F3.7(KN B1out) H3.9(CORE Ea1) H5.2(CORE F1) H6.153(F F1) H6.201(F F1) K5.12(CORE Eb2)

**MATERIAL No.78**

CLASS A

H4C2-I4.81(F Ea2) J4.20(F Ea2)

CLASS B

E5.19(C (B-C)) E5.30(C B2) F4.8(F B1) G4.7(C B1out) I4.59(F Ea2) J3.7(F Ea3) J3.15(RF Ea2) J4.18(C Ea2) J4.23(F Eb2) J4.46(F Eb1) J4.58(C Eb2) K4.8(F (Eb)) K5.1(F Eb2)

**MATERIAL No.79**

CLASS B

E2.13(F A2) E3.2(F (B)) E4.99(F B2) F1.43(C A1) F2.41(F A1) F2.57(F A1) F2.71(F A1) F2.181(C A2) F3.32(F A3) G1.23(C A4) G3.9(CORE A3)

**MATERIAL No.80**

CLASS B

D4.3(F B2) D4.17(EN B2out) E4.7(RF B2) E4.62(F B2) L8.2(F (I))

**MATERIAL No.81**

CLASS B

F4.28(UF B1) F4.73(F B1) F4.107(F B1) F5.60(UF (B)) F6.44(UF C2) I4.63(F Ea2)

**MATERIAL No.82**

CLASS B

E7.1(F D2) F6.12(F C2) F6.13(F C2) G7.32(F G3) K6.35(C H1)

**MATERIAL No.83**

CLASS A

G6C6-G6.6(CORE C2) F6.34(F C2) F5.13(RF (B)) F6.29(F C2)

CLASS B

E7.4(F D2) F5.179(F B3) F6.6(F C2) F7.21(F C1) G6.13(F C2) G6.25(CORE F2) G6.46(F C2)

第16表 個別別資料(チャート製等)遺物番号一覧表(7)

**MATERIAL No.84**  
CLASS B  
E4.68(F B2) F3.14(F A3) F3.26(CORE A3) F4.53(F B1)

**MATERIAL No.85**  
CLASS B  
F5.157(F (B)) G6.34(F F2) H5.12(F Eb1) H6.98(F F1) H6.138(C F1) H6.141(RF (F)) J5.52(F Eb2)

**MATERIAL No.86**  
CLASS B  
E4.95(F B2) F3.11(F A3) G3.1(F Blout) G3.5(F Blout)

**MATERIAL No.87**  
CLASS B  
H6.150(F F1) H6.178(F F1)

**MATERIAL No.88**  
CLASS A  
H5C2-H5.4(F Eb1) H6.114(F (F))  
H6C1-H6.9(F (F)) H6.21(F (F)) H6.29(F F1) H6.77(F (F)) H6.95(F (F)) H6.112(F F1) H6.126(CORE F1)  
H6.143(F F1) H6.180(F F1) H6.189(F F1) H7.41(F (F)) H7.55(F (F)) I6.10(CORE F1)  
H6C16-H5.3(F Eb1) H6.73(F (F)) H6.85(F F1) H6.134(F (F)) H6.139(F (F)) H6.152(F F1)  
H6C17-H6.94(F F1) H6.132(F (F))  
CLASS B  
H6.64(F (F)) H6.92(F (F)) H6.125(F F1) H6.129(F F1) H6.168(F F1) H6.184(F F1) H6.196(F F1) H6.210(F F1) H6.213(F F1) J5.22(RF Eb2)

**MATERIAL No.89**  
CLASS A  
F1C2-F1.61(F A1) F1.62(F A1) F2.81(F A1) F2.106(UF A3) F3.52(CORE A3) I3.26(F Ea1) J4.17(F Ea2)  
F2C1-F2.151(CORE A2) F3.13(CORE A3)  
F3C2-F1.93(F A1) F2.85(F A1) F3.38(F (A))  
CLASS B  
F3.46(F A3) I3.48(CORE Ea1)

**MATERIAL No.90**  
CLASS B  
F4.70(F B1) G4.10(F Blout) H3.7(F Ea1) I4.39(F Ea2)

**MATERIAL No.91**  
CLASS B  
I3.34(F Ea1) J4.11(RF Ea2) J4.33(UF Ea2) J4.41(F Ea3) J5.50(F Eb2) K5.45(F Eb2)

**MATERIAL No.92**  
CLASS A  
I4C3-E4.51(F (B)) I4.12(SC Ea2)  
CLASS B  
E4.50(F B2) E4.72(SC B2) F4.26(CORE B1) F4.85(F B1) F5.61(RF (B)) J3.12(F Ea3) J4.21(F Ea2) L5.8(F Eb3)

**MATERIAL No.93**  
CLASS A  
I3C1-I3.40(F Ea1) J4.48(F Eb2)  
CLASS B  
I4.46(F Ea2) I4.88(CORE Ea2) J5.6(F Eb2) J5.10(F Eb2) J5.33(EN Eb2) J5.38(C Eb2) J6.13(F (Eb))

**MATERIAL No.94**  
CLASS B  
J4.24(F (Eb)) J5.8(C Eb2) J5.13(CORE Eb2) J5.15(F Eb2) J5.17(C Eb2) J5.36(F Eb2)

**MATERIAL No.95**  
CLASS B  
F4.41(F B1) I3.51(F Ea1) I4.93(SC Ea2)

**MATERIAL No.96**  
CLASS A  
I5C3-I4.95(F Ea2) I5.29(F Eb1)  
CLASS B  
F4.1(F B1) H4.13(F Ea2) I5.28(F Ea2) J4.40(CORE Ea3) K4.7(F Eb2) L6.29(F (Eb))

**MATERIAL No.97**  
CLASS A  
F6C1-F5.53(F B3) F6.3(F C2)  
H4C2-E5.5(F (C)) E5.6(FC3) F5.156(CORE B3) F6.28(CORE (C)) F6.39(F C2) G5.10(F B3) H4.17(CORE Ea2)  
CLASS B  
E5.9(F B2) F4.92(F B1) F5.19(F (B)) F5.67(F (B)) F6.23(F (C)) F6.25(UF (C))



第16表 個体別資料（チャート製等）遺物番号一覧表(8)

**MATERIAL No.98**  
 CLASS A  
 K11C1-K11.29(UF Jb2) K11.81(UF Jb2)  
 CLASS B  
 D4.6(F B2) E5.31(RF B3) F7.11(F (C)) J9.3(F Ja1) K11.10(F (Jb)) K11.63(F Jb2) K11.72(F Jb2) L8.7(F H2out)

**MATERIAL No.99**  
 CLASS A  
 F7C3-F7.154(UF C1) G6.21(F F2)  
 CLASS B  
 E5.4(C (C)) E5.15(F B2) F5.26(F (B)) F5.177(F B3) F5.195(F B3) F5.197(F B3) F6.19(F (C)) F6.22(F (C))  
 F6.40(F C2) F6.46(F C1) F7.95(F C1) F7.114(CORE C1) G6.8(F F2) G6.11(F C2) G6.12(F C2) G6.27(F F2)  
 G6.28(F F2) G7.49(F F2) H6.40(C (F))

**MATERIAL No.100**  
 CLASS A  
 G3C2-G3.10(CORE B1out) J5.28(F Eb2)  
 G6C1-G6.3(SC C2) G6.5(F (C))  
 H8C1-H8.9(SC (G)) H8.54(C (G))  
 I7C1-F7.62(F (C)) I7.11(CORE (F)) I8.1(EN (G))  
 J3C2-G4.27(F (B)) J3.8(F Ea3)  
 CLASS B  
 E5.11(F B2) E7.5(RF D2) E7.6(F D2) F3.6(F B1out) F3.44(C A3) F3.54(SC B1out) F4.111(RF B1) F5.14(EN (B)) F5.49(F (B)) G2.17(F (A)) G3.4(F B1out) G4.14(CORE B1out) G8.43(EN G3) H3.19(F Ea1out) I3.44(F Ea1) J4.38(F Ea2) J8.2(SC (G)) K4.4(CORE Eb2) K6.24(F H1) K7.2(F H1) K7.3(F H1) K7.4(C H1) L5.21(KN Eb3) L6.1(UF Eb3)

**MATERIAL No.101**  
 CLASS A  
 J5C1-J5.4(F Eb2) J5.5(F Eb2) J5.11(CORE Eb2) J5.48(F Eb2)

**MATERIAL No.102**  
 CLASS B  
 F7.14(F (C)) G4.13(F Ea1out) J4.28(F Ea2)

**MATERIAL No.103**  
 CLASS A  
 H6C24-H6.26(SC F1) H6.182(EN F1)  
 CLASS B  
 H6.135(F (F9))

**MATERIAL No.104**  
 CLASS A  
 J6C1-J6.11(F Eb2) K5.41(F Eb2)  
 CLASS B  
 I5.44(F Eb1) J5.39(CORE Eb2) K5.38(F Eb2) L5.31(F Eb3)

**MATERIAL No.105**  
 CLASS B  
 G4.23(F (B)) I4.26(UF Ea2) I4.36(F Ea2) I4.90(F Ea2) I5.18(F Eb1)

**MATERIAL No.106**  
 CLASS A  
 G7C2-G7.8(F (F)) H4.2(F Ea2)  
 H6C18-H6.206(F F1) H6.5E(KN (F))  
 K5C1-K5.20(F Eb2) K5.21(C Eb2)  
 H6C10-H6.49(F (F)) H6.82(F (F)) H6.83(F (F)) H6.87(F F1) H6.89(F (F)) H6.99(F (F)) H6.170(F F1)  
 H6.174(CORE F1) H6.176(F F1) H6.195(SC F2) H6.211(F F1) H7.22(RF (F)) I6.16(RF F1)  
 CLASS B  
 E6.30(F C3) H6.1(F (F)) H6.42(RF (F)) H6.84(F (F)) H6.191(KN F1) I4.15(C Eb1) G7.21(KN (F))

**MATERIAL No.107**  
 CLASS A  
 H6C8-H6.185(F F1) H6.186(F F1)  
 CLASS B  
 F2.52(RF A1) G7.19(C F2) G7.50(C F2) H6.175(F F1) J5.57(F Eb2)

**MATERIAL No.108**  
 CLASS A  
 G6C4-G6.30(F F2) G6.48(CORE F2)  
 CLASS B  
 H6.177(F F1)

**MATERIAL No.109**  
 CLASS B  
 E4.65(F B2) F4.11(F B1) F4.94(UF B1) F5.79(F (B)) F5.139(F (B)) J5.40(F Eb2)

第16表 個別別資料（チャート製等）遺物番号一覧表(9)

**MATERIAL No.110**

CLASS A

F5C9-F5.110(F (B)) F5.170(F (B))

F5C10-F5.99(F (B)) F5.107(F (B))

I5C2-I5.5(UF Eb1) SE (UF ?)

CLASS B

E5.2(EN (C)) F4.30(F B1) F4.55(SC B1) F4.68(F B1) F5.15(EN (B)) F5.41(RF (B)) F5.42(F (B)) F5.81(F (B))  
F5.83(F (B)) F5.91(F (B)) F5.93(F (B)) F5.95(F (B)) F5.96(C (B)) F5.97(F (B)) F5.102(F (B)) F5.103(F (B))  
F5.104(F (B)) F5.106(F (B)) F5.108(F (B)) F5.119(F (B)) F5.168(F (B)) F5.169(C (B)) F5.181(F (B)) F5.184(F  
(B)) F5.199(F B3) F5.204(C (B)) F6.35(F C2) G4.16(F (B)) G4.28(C (B)) G5.3(C B3) G5.5(F (B)) H6.59(SC  
(F)) H6.61(F (F)) I5.43(F Eb1) J7.6(F G1)

**MATERIAL No.111**

CLASS A

G6C3-G6.23(F F2) H6.203(F F1)

G6C5-F7.100(F C1) G6.22(F F2)

H6C19-H6.194(F F2) H7.57(UF (G))

H6C20-G6.37(F F2) H6.198(F F2)

CLASS B

E5.13(F B2) F4.101(F B1) F7.132(F C1) F7.134(F C1) F7.138(F C1) F7.152(F C1) G6.26(F F2) G6.31(F F2)  
G6.45(F C2) G7.46(F F2) G7.47(F F2) K6.26(F (H))

**MATERIAL No.112**

CLASS B

G3.3(F B1out) G3.12(F Ea1out) G4.4(C B1out) G4.9(CORE (B)) G4.18(C B1out)

**MATERIAL No.113**

CLASS B

H3.11(F Ea1) H3.13(SC Ea1) H4.7(F Ea2) I3.24(C Ea1) I3.27(F Ea1) I4.23(F Ea2) I4.24(F Ea2) I4.33(CORE Ea2)  
I4.34(F Ea2) I4.42(KN Ea2) I4.47(C Ea2) I4.78(F Ea2) I4.85(F Ea2) I4.89(KN Ea2)

**MATERIAL No.114**

CLASS B

D6.4(F (B)) E5.18(UF (B)) F6.7(UF C2) H6.91(F F1) H6.102(KN (F))

**MATERIAL No.115**

CLASS A

F1C3-F1.15(F A1) F2.40(F A1)

**MATERIAL No.116**

CLASS A

H4C1-H4.9(F Ea2) H4.10(F Ea2)

**MATERIAL No.117**

CLASS A

E4C8-E4.20(EN B2) F4.50(C B1)

CLASS B

E4.13(RF B2)

**MATERIAL No.118**

CLASS A

G1C1-G1.16(UF (A)) G1.25(F (A))

CLASS B

D7.30(F (D))

**MATERIAL No.119**

CLASS A

F2C5-F1.14(F A1) F1.80(F A1) F2.76(CORE A1) F2.109(UF A2)

CLASS B

F1.16(F A1) F2.97(CORE A1)

**MATERIAL No.120**

CLASS B

F3.10(UF A3) F3.39(UF A3) J4.43(UF Ea3)

**MATERIAL No.121**

CLASS B

G7.40(RF G3) I8.15(F G2)

**MATERIAL No.122**

CLASS B

F4.7(UF B1) H4.12(F Ea1out)

**MATERIAL No.123**

CLASS B

F1.30(KN A1) F1.73(C A1)

第16表 個別別資料（チャート製等）遺物番号一覧表(10)

**MATERIAL No.124**

CLASS B

F1.86(CORE A1) F2.12(CORE a1) F2.91(CORE A1) F4.22(F B1) F4.64(F B1)

**MATERIAL No.125**

CLASS A

E4C5-E4.40(CORE B2) PD1.7(CORE PD1)

E5C2-E5.10(CORE B2) F5.74(F (B))

F4C4-E4.103(F B1) F4.49(F B1) F4.127(F B1)

CLASS B

D4.1(CORE B2) F4.14(F B1) F4.90(F B1) F5.59(CORE B1)

**MATERIAL No.126**

CLASS A

G2C2-F2.55(F A1) F2.72(CORE A1) G2.7(F A3) G2.21(F (A))

CLASS B

F1.44(F A19) F2.31(F A1) G2.2(F A3) G2.3(F A3) H4.18(F Ea1out) I3.47(F Ea1) I4.10(F Eb1) I4.22(F Ea2) J3.9(F Ea3)

**MATERIAL No.127**

CLASS A

K5C2-K5.16(CORE Eb2) I4.96(F Eb1)

I5C4-J3.1(F Ea3) I5.17(F Eb1)

CLASS B

H2.2(F Ea1) I3.41(F Ea1) I4.11(F Eb1) I4.14(UF Eb1) I4.57(F Ea2) I4.61(F Eb1) I4.77(F Ea2) I5.15(F Eb1)

J4.4(F Eb2) J4.16(UF Ea2) J4.45(F Ea3) J5.7(F Eb2) K4.6(CORE (Eb)) K5.28(CORE Eb2) K7.6(F (H))

L5.16(CORE Eb3) L5.24(UF Eb3) L6.14(F Eb3)

**MATERIAL No.128**

CLASS A

E4C3-E4.14(F (B)) E4.69(F B2)

F4C5-F4.83(F B1) F4.84(F B1)

G3C1-F2.173(F A1) G3.8(F A3)

CLASS B

E4.73(F B2) F1.87(CORE A1) F2.164(F A2) F3.35(F A3)

**MATERIAL No.129**

CLASS A

F5C6-F5.143(F (B)) F5.166(F B3)

CLASS B

F5.7(F (B)) F5.127(UF (B)) H7.42(UF (F))

**MATERIAL No.130**

CLASS A

H6C14-H6.6(F F1) H6.116(F F1) H6.124(F F1)

CLASS B

G1.5(EN A4) H6.75(F (F)) H6.181(F F1) I5.25(F Eb1)

**MATERIAL No.131**

CLASS A

H6C3-F5.33(CORE B3) F5.115(F B3) H5.7(F Eb1) H6.28(F F1) H6.69(F (F)) H6.81(F (F)) H6.105(CORE F1)

H6.110(F (F)) H6.120(F F1) H6.133(F (F)) H6.140(F F1) H6.142(F F1) H6.169(F (F)) I5.14(F Eb1)

CLASS B

G6.18(F F2)

**MATERIAL No.132**

CLASS A

F4C2-F4.39(F B1) F4.102(CORE B1) F4.118(F B1) F4.120(F B1) F4.124(F B1) F5.73(F (B)) F5.163(F B3)

F7.133(F C1) I4.25(F Ea2) K5.43(UF (Eb))

CLASS B

E4.18(F B2) E4.85(F B1) F4.48(F (B)) F4.121(F B1) F5.23(F (B)) F5.29(C (B)) F5.43(F B3) F5.46(F (B))

I3.4(RF Ea2)

**MATERIAL No.133**

CLASS A

F4C1-F4.33(F B1) F4.62(F B1) F4.63(F B1) F4.74(F B1)

F5C4-F4.18(F B1) F4.57(F B1) F4.65(F B1) F4.110(F B1) F5.76(F (B)) F5.173(CORE (B))

CLASS B

F4.61(F B1) F4.66(RF B1) F4.69(C B1) F4.119(F B1) F4.126(F B1) F5.66(F (B)) G4.2(F Blout) I4.17(UF Eb1)

I4.82(F Ea2) I5.27(F Eb1) I5.34(F Eb1) I5.38(F Eb1) J3.14(SC Ea1)

**MATERIAL No.134**

CLASS A

L10C1-K10.5(F Ja2) L10.27(F Ja2) L10.28(F Ja2)

第2節 下位文化層の遺物

第16表 個別別資料（チャート製等）遺物番号一覧表(1)

**MATERIAL No.135**

CLASS A

F2C15-F1.34(F A1) F1.36(F A1) F2.63(F A1) F2.79(F A1) F2.190(CORE A1)

CLASS B

I3.20(F (Ea))

**MATERIAL No.136**

CLASS A

F2C16-F2.112(F A3) F2.145(CORE A2) F3.57(F A3)

F3C1-F2.191(CORE A1) F2.192(CORE A2) F3.1(CORE A3) F3.50(CORE A3) F3.51(F A3) G2.10(F A4)

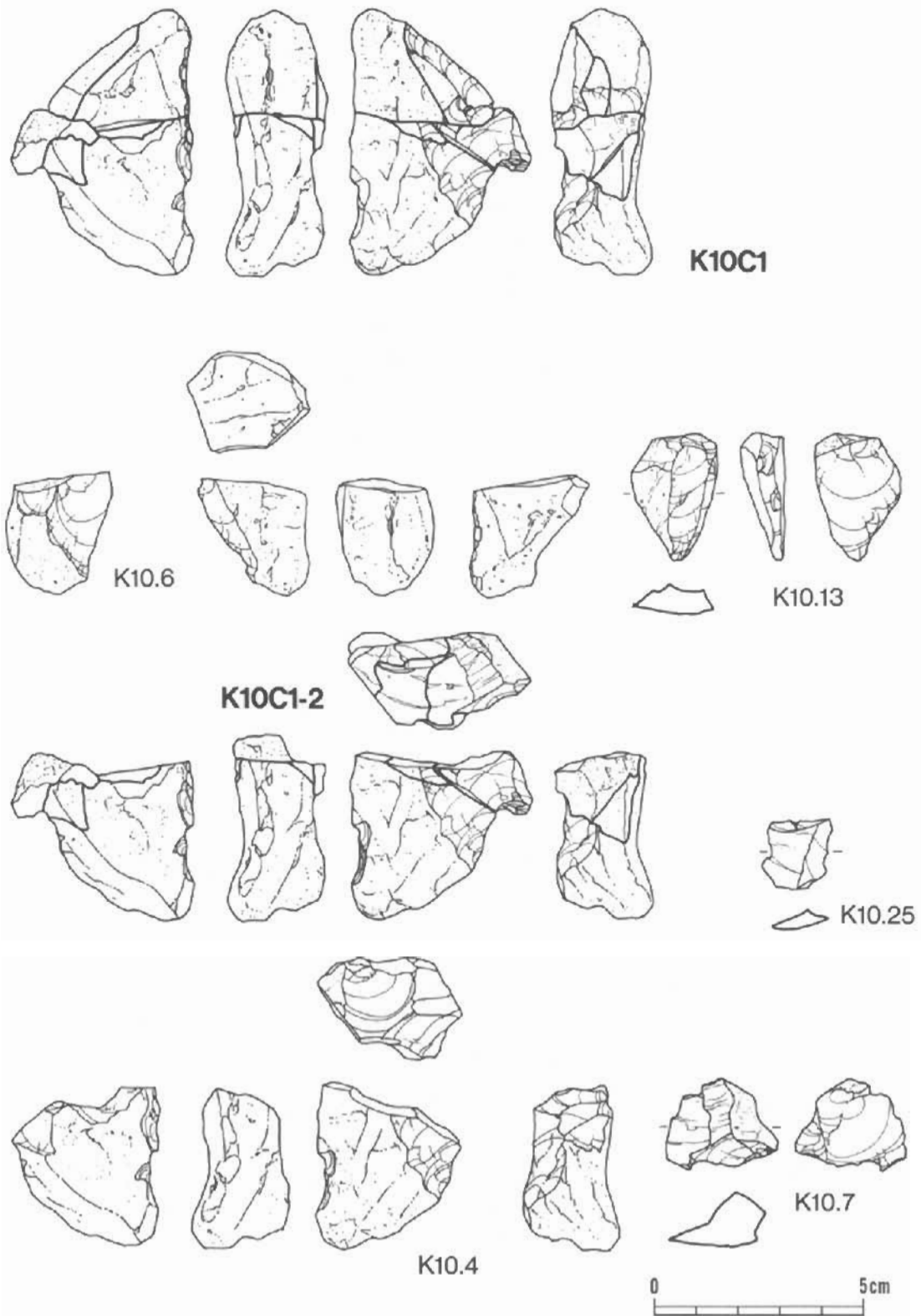
CLASS B

F2.78(F A1) F2.92(F A1) F2.99(F A3) F2.107(F A3) F2.119(F A2) F2.159(F A2)

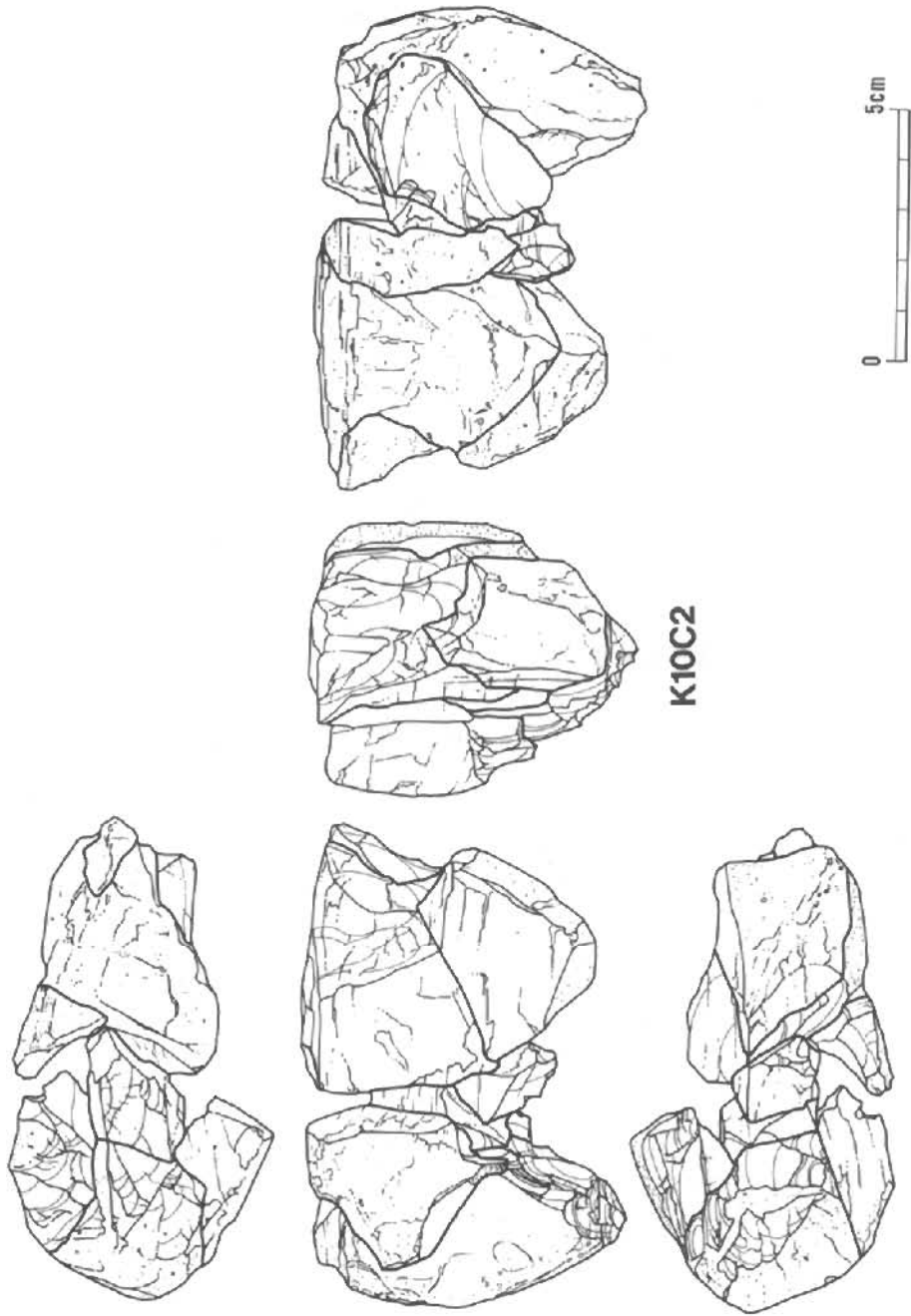
**MATERIAL No.137**

CLASS B

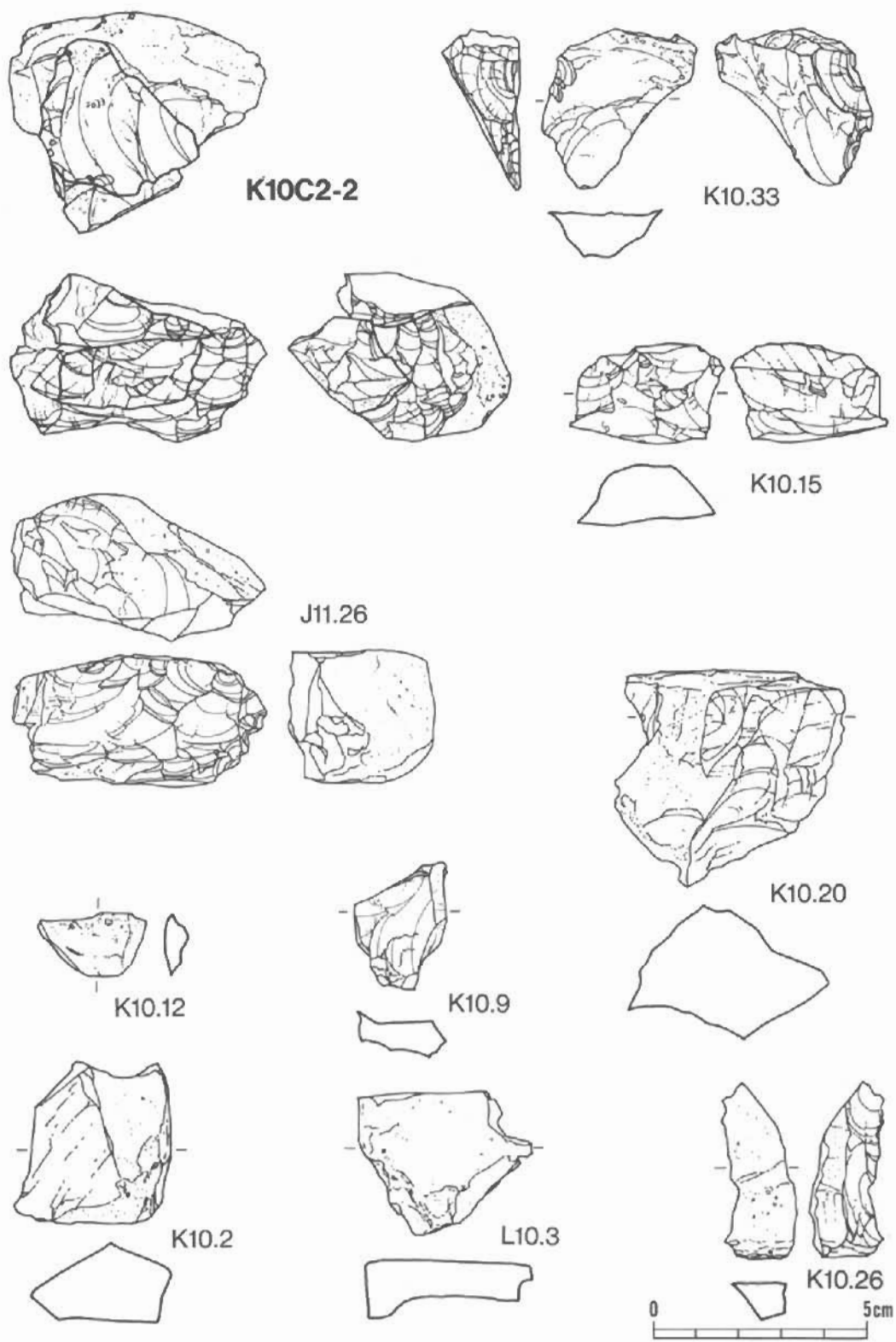
H6.72(F F1) H6.123(F F1) H6.127(F1)



第182図 個体別資料No.1 実測図



第183図 個別別資料No.2 実測図1



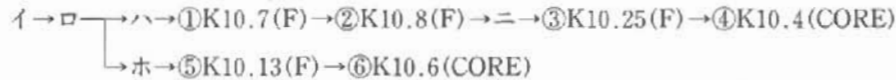
第184図 個別別資料No. 2 実測図 2

資料分布状況の分析などに関係してくる主要な個体について、母岩の形状・展開した剥片生産工程・遺存状況について簡潔に記述と図示を行なう。剥片剥離工程の中の遺物番号に、器種分類を附す。

**個体番号 1**

暗灰色、光沢のあるチャート製。縦横に節理面を縦横に有する。接合資料一群合計6点からなる。内訳は、剥片4点、石核2点である。

K10C1



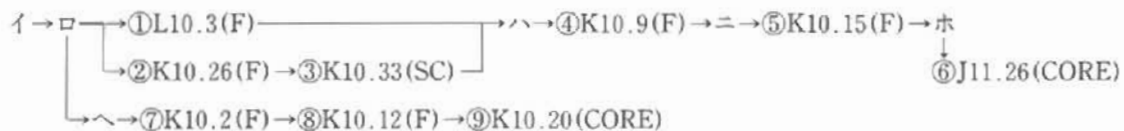
イ、小垂円礫（完形）を原石として、その側縁全周にダメージが与えられ、ロ、その中央で節理にそって2分割される。ハ、第1群では、円礫側縁から自然面を除去するよう不定形剥片を剥離する。①K10.7を、原石分割面である節理面を剥離作業面にするように剥離する。②K10.8は、節理による破碎の可能性はある。ニ、打面を約90度移動し、再びハと同じ打面に変更、不定形剥片を剥離する。③自然面を打面としてK10.25を剥離し、④K10.4を石核に残す。ホ、第2群では、分割面である節理面を打面として縦長剥片を剥離する。⑤K10.13を剥離する。⑥K10.6を石核として残す。

小円礫を2分割して若干の剥片を生産するが、いずれも不定形であり、その有効性には疑問がある。未検出の剥片も同様であろう。本個体は、小円礫のまま搬入され、最初期の段階から最終末までの全ての工程を残している。

**個体番号 2**

原石は、褐色・光沢のあるチャート製。節理がよく発達し、良質部が少ない。接合群1つ合計9点と非接合資料2点を含む。内訳は、削器1点、剥片8点、石核2点である。

K10C2



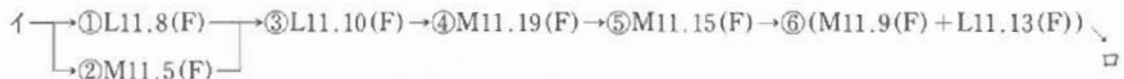
イ、垂円礫を素材とし、ロ、2分割するが、石質はよくない。①第1群からは、表皮を大きく付着させたL10.3を節理面から剥離する。②表皮を大きく付着させるK10.26を剥離する。③K10.33が節理面から剥離される。ハ、K10.33を剥離した節理面を打面として不定形剥片が剥離される。④節理からK10.9が剥離される。ニ、不定形剥片が節理から剥離される。⑤K10.15が剥離される。ホ、この石材のもっとも良質な部分から不定形剥片1点が剥離される。⑥石核J11.26が残される。ヘ、第2群からは、不規則に節理面からの剥離が行なわれる。⑦K10.2が節理面から剥離される。⑧K10.12が剥離される。⑨K10.20が石核として残される。

10×7×6.5cm程の垂角礫は、ほぼ完全なまま持ち込まれたと思われるが、剥片生産作業にはふさわしくなく、ほとんど有為な剥片生産は行なわれておらず、節理面での破碎が多い。

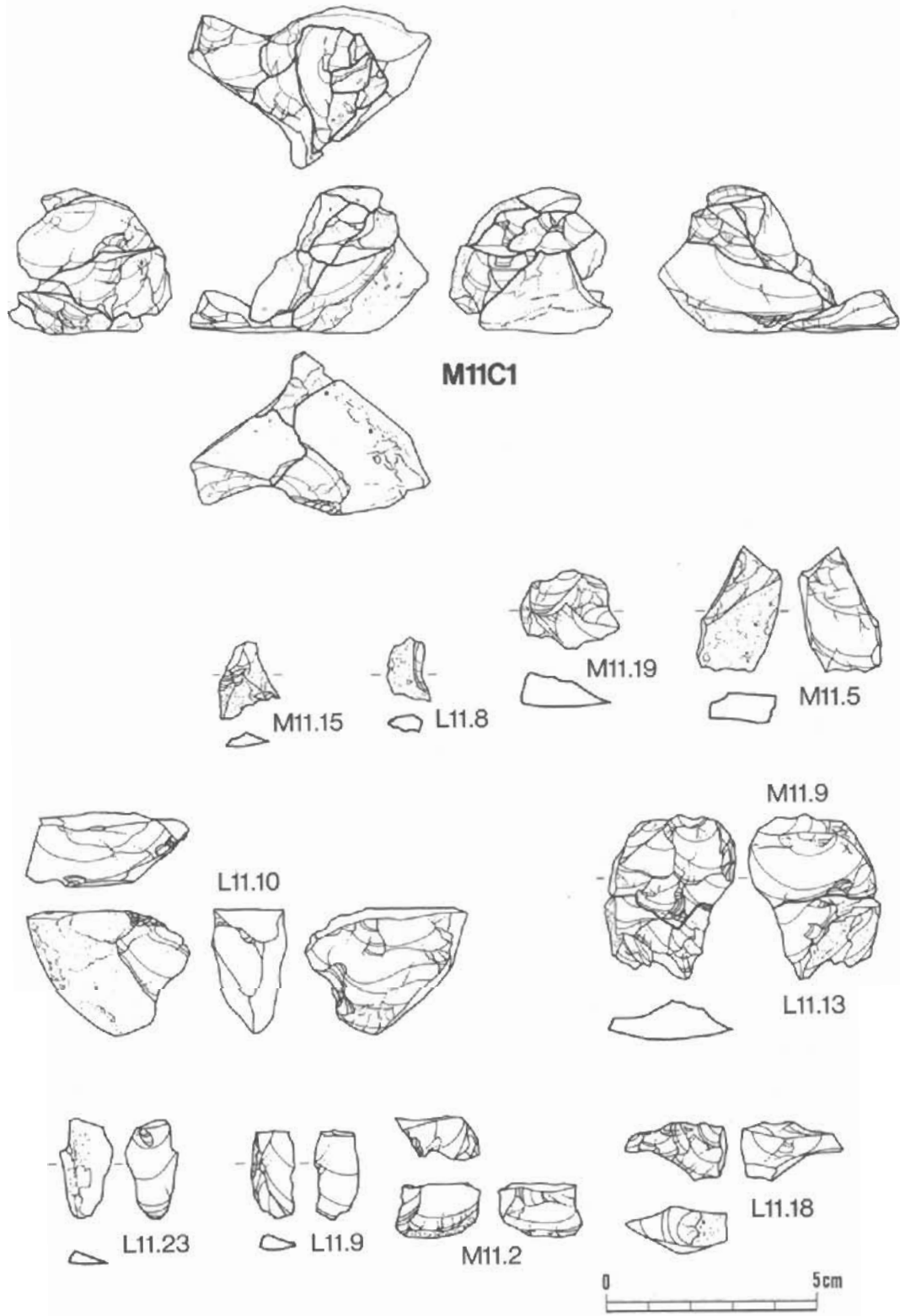
**個体番号 3**

濃緑色の良質な石質。接合群1つ合計7点と非接合資料5点を有する。内訳は、剥片12点からなる。

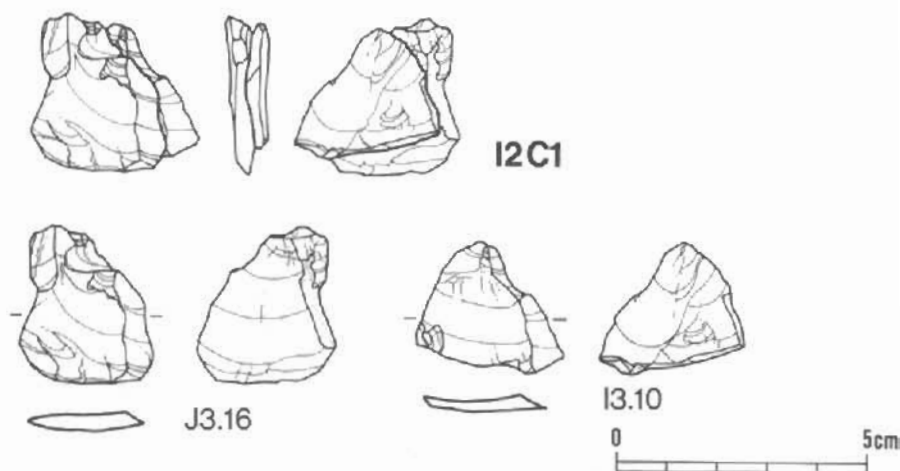
M11C1



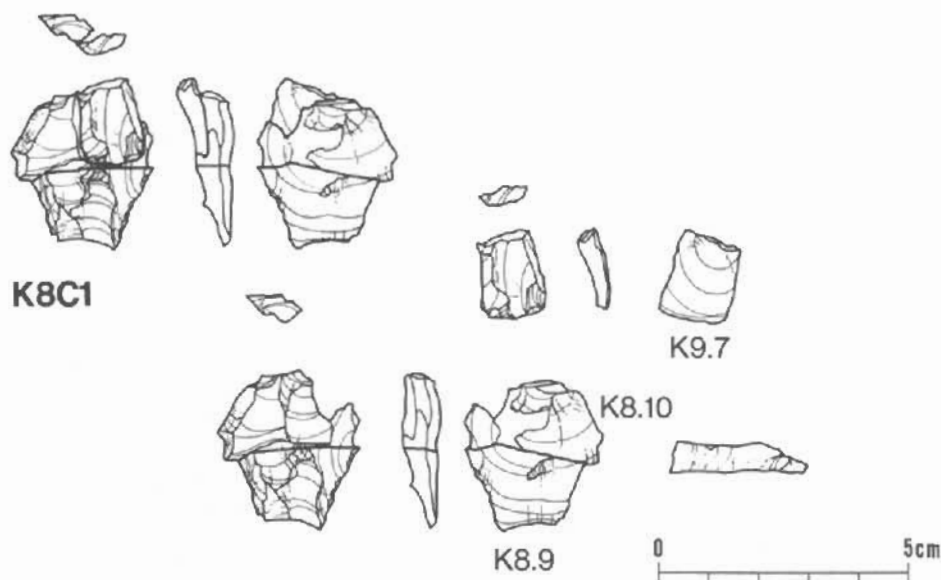




第185図 個体別資料No. 3 実測図



第186図 個別別資料No.5 実測図

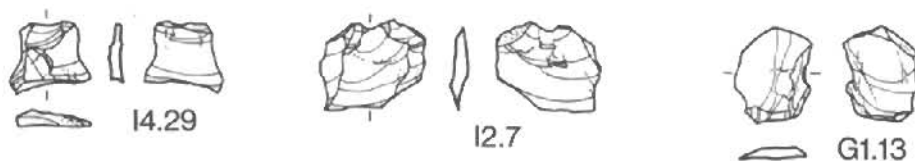
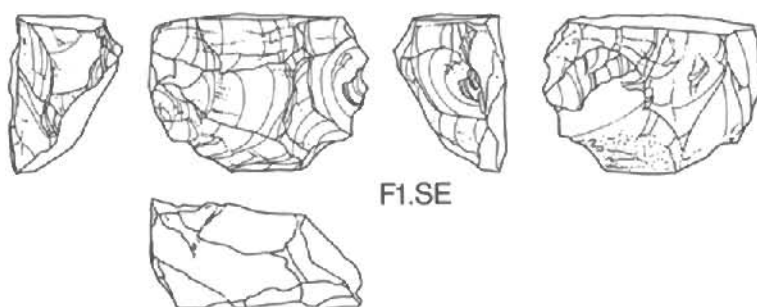
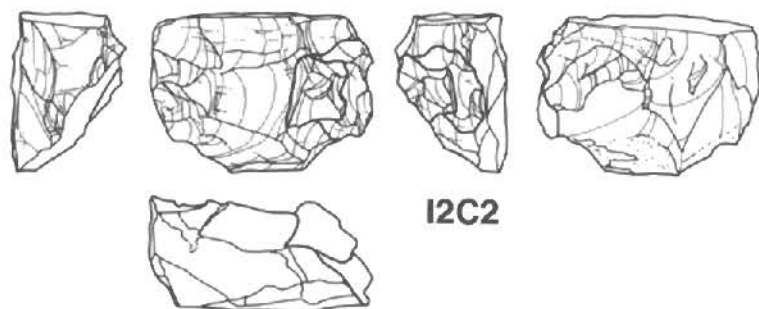


第187図 個別別資料No.13実測図

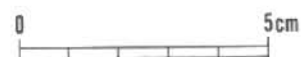
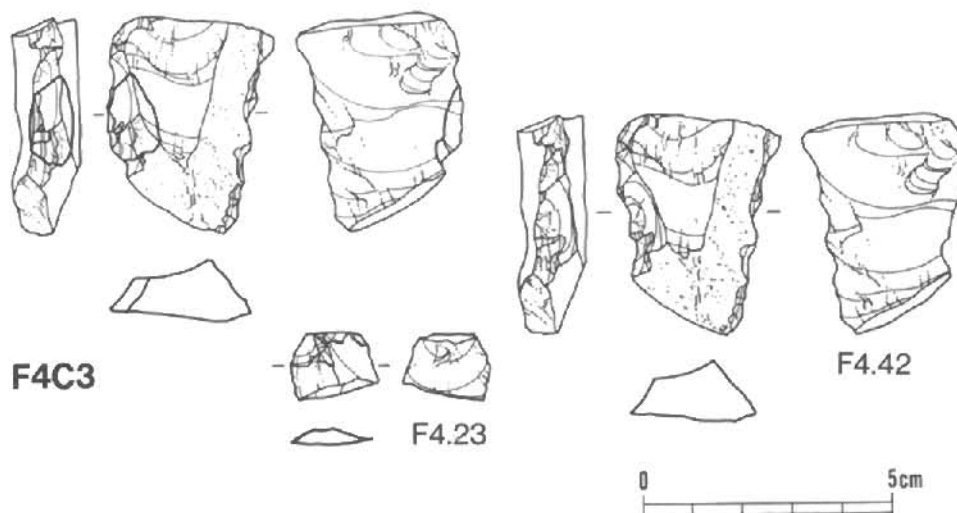
イ、拳大の円礫を素材として、①表皮付き剥片L11.8を剥離して、表皮除去と主要打面の作出が行なわれる。②表皮の付着するM11.5を剥離、原石の表皮を除去するための工程か。③L11.10を①で作出した打面から剥離する。打面調整は認められない。剥片上半は折損し、未検出。④M11.19を剥離する。⑤M11.15を剥離する。剥片下半は節理により未検出。⑥(M11.9+L11.13)を剥離する。M11.9+L11.13は、おそらく剥離時の折損。口、円礫の約3分の1を消費したあと若干の剥片生産が行なわれている。石核は未検出である。

7×10×4 cm程度の拳大円礫を素材とし、帽子状剥片は存在しないものの、ほぼ最初期から中期までの剥片生産工程が認められる。接合資料には不定形なものが多く、有効性に乏しいが、非接合資料中には石材良質部から生産された目的的なものがある。石核は未検出で、遺跡外に持ち出されたものと考えられる。

第2節 下位文化層の遺物



第188図 個体別資料No.18実測図



第189図 個体別資料No.20実測図

**個体番号 5**

やや透明感ある光沢の褐色チャート材。黒い縞模様がある。接合資料1群合計2点と非接合資料3点からなり、内訳は、加工痕有剥片1点、剥片4点である。ある程度の剥片生産は行なわれているが、工程の判断はできない。

**個体番号13**

濃緑色のチャート製剥片の破損接合資料1群、合計3点からなる。K8.9(UF)+K8.10(UF)の使用痕有剥片2点と剥片1点K9.7(F)からなる。

**個体番号17**

厚さ2.5cmほどのチャート製亜角礫を母岩とする。暗灰色で細い縞模様がある。接合資料1群合計3点と非接合資料1点からなる。内訳は、剥片3点、石核1点を含む。

K10C3

イ→①K10.10(F)→ロ→③K10.39(CORE)  
       ↳ハ→②K10.23(F)

イ、厚さ2.5cmほどの亜角礫の分割材を素材とし、①一方の面からK10.10(F)を節理より剥離、ロ、更に風化面を加撃して、1枚を剥離する。ハ、打面を変更して、小剥片を剥離し、②K10.23(F)を続いて剥離する。③K10.39(CORE)が残核として残される。

打面転移のある剥片剥離作業終末期の行なわれた個体である。

**個体番号18**

3cm程の厚さのチャート製石材。緑色で、ベージュ色の淡い縞模様が多数入っている。接合資料1群合計3点と非接合資料1点を含む。内訳は、剥片3点、石核1点である。

I2C2

イ→ロ→①I4.29(F)→②I2.7(F)→③F1.SE(CORE)

イ、3cm前後の板状材または亜角礫を素材とし、小口部からの剥片剥離を行なう。1枚の幅広剥片が剥離され、ロ、打面転移を180度行なった後、1枚を剥片剥離し、①I4.29(F)を続いて剥離する。②I2.7(F)を剥離し、③F1.SE(CORE)が残される。

不定形・貝殻状剥片の生産された個体。4～5枚以上の剥片が生産されている。中～終末期の剥片生産工程が認められる。

**個体番号20**

光沢の少ない緑色チャート材で、3～5cm間隔に一部節理が発達する。接合資料1群合計2点よりなる。

F4C3

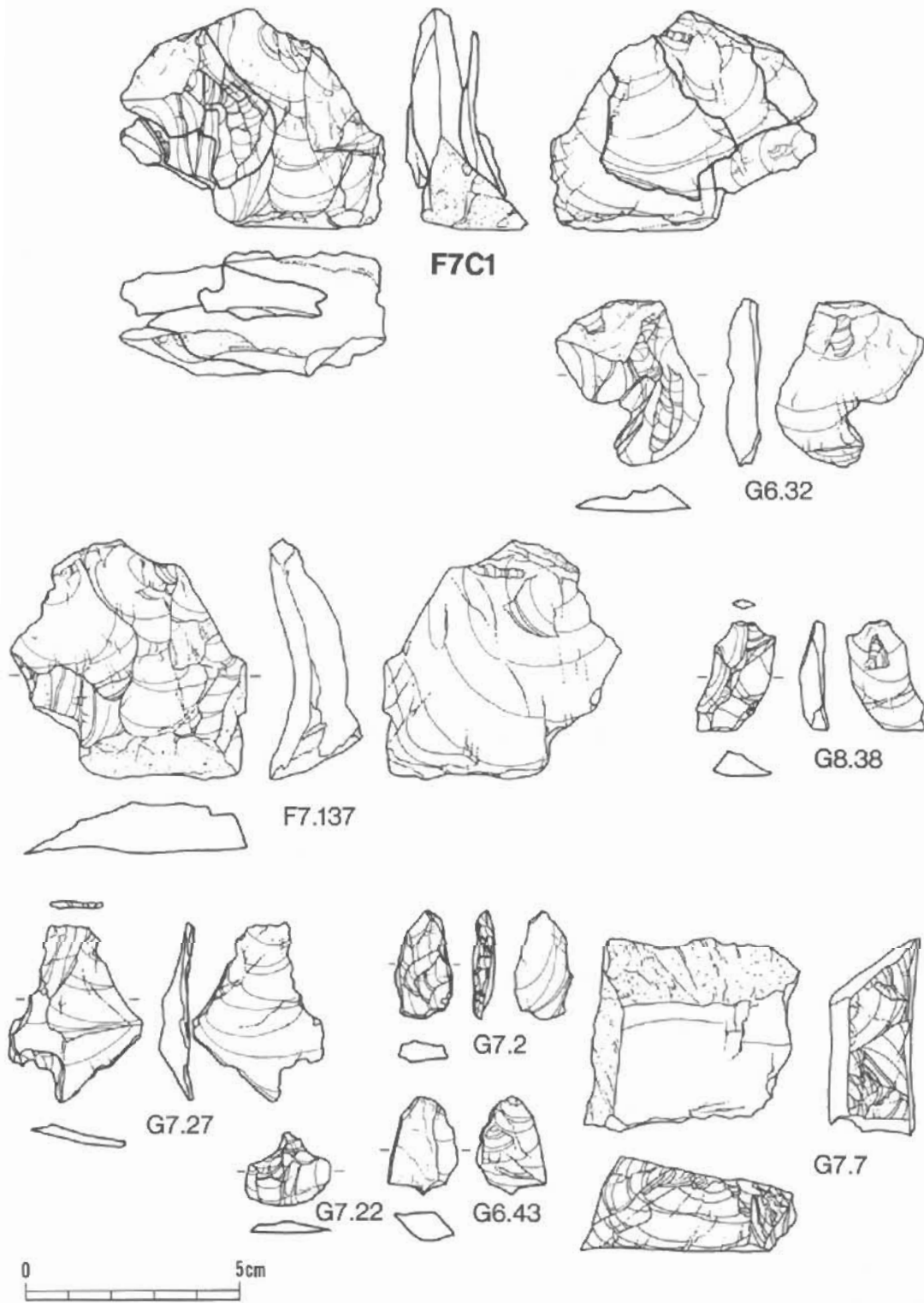
イ→①F4.23(F)→②F4.42(SC)

イ、厚手の縦長剥片の両側縁に削器調整を施す。①F4.23(F)が左側縁から剥離される。②F4.42(SC)が残される。

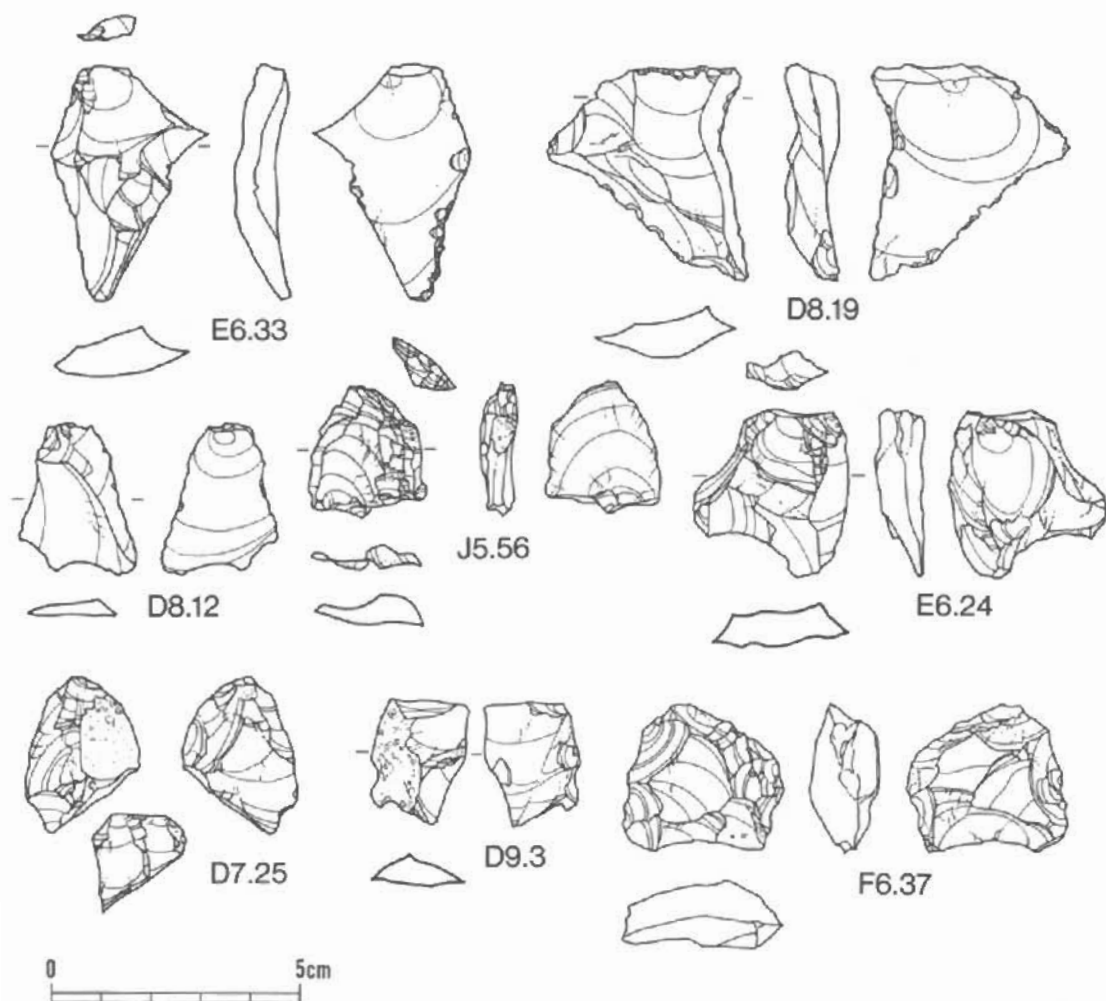
削器の調整過程。

**個体番号21**

厚さ6cmほどのチャート製板状亜角礫。灰色で良質。濃淡の斑がある。接合資料2群合計4点と2点、非接合資料5点を含む。その内、1群を記述する。内訳は、使用痕有剥片4点、剥片4点、碎片2点、



第190図 個体別資料No.21実測図



第191図 個体別資料No.22実測図

石核1点である。

F7C1

イ→①G6.32(UF)→②F7.137(UF)→ロ→③G8.38(UF)→④G7.27(UF)

イ、厚さ6cmほどの板状垂角礫を分割し、分割面を作業面としてすでに3～5枚程度の剥片生産が行なわれる。①自然面を打面としてG6.32(UF)②F7.137(UF)が剥離される。F7.137は底面まで抜けるように剥離されている。ロ、更に若干の剥片を剥離した後、③打面を左側面に移してG8.38(UF)を剥離、④打面を元に戻してG7.27(UF)を剥離する。

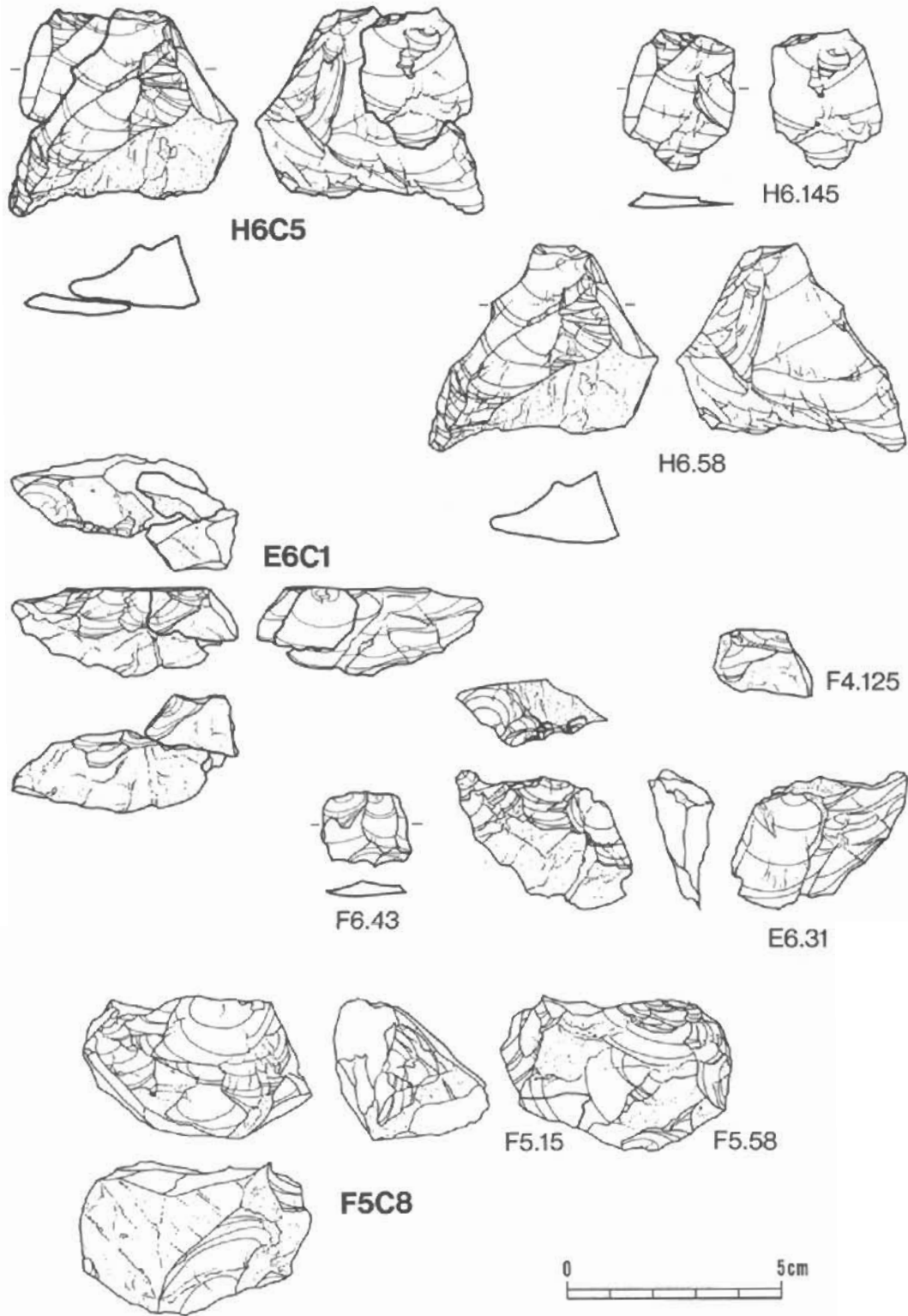
板状の石核の一面に作業面と打面をほぼ固定し、左右に移動しながら剥片を生産した個体。中期段階の工程が行なわれたものと考えられる。

**個体別資料22**

光沢のある良質の灰色チャート材。細かく黒い筋が入る。接合資料はないが、遺跡内である程度の剥片生産が行なわれたようである。非接合資料10点よりなる。内訳は、加工痕有剥片1点、使用痕有剥片4点、剥片4点、石核1点である。

**個体番号23**

厚さ3cm程度の板状材。薄い青色、鈍い光沢で、白い節理のチャート材。接合群4群を含むが、このうち1つを説明する。接合資料4群、合計3点と2点、2点、2点、非接合資料は、19点である。

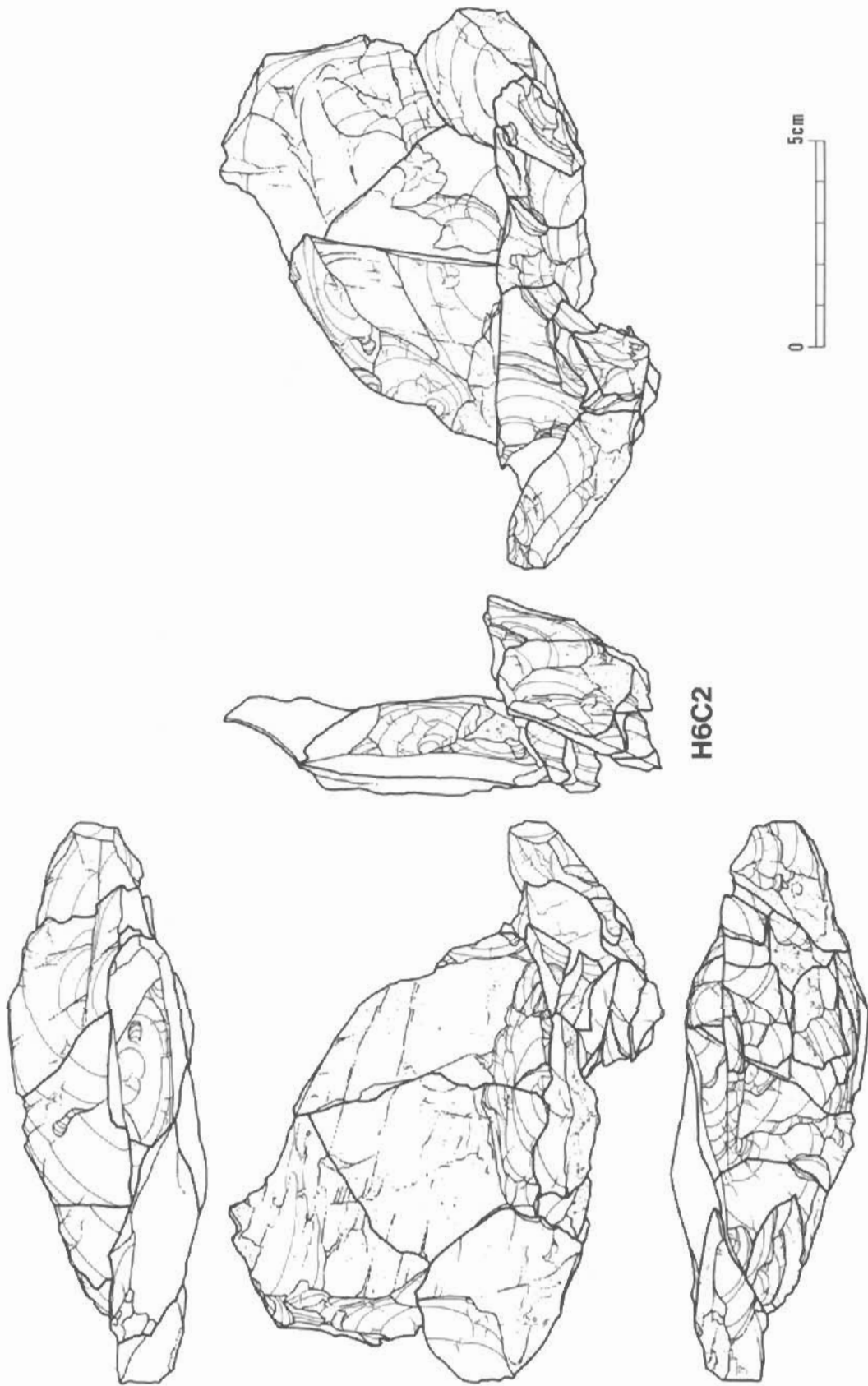


第192図 個体別資料No.23実測図1

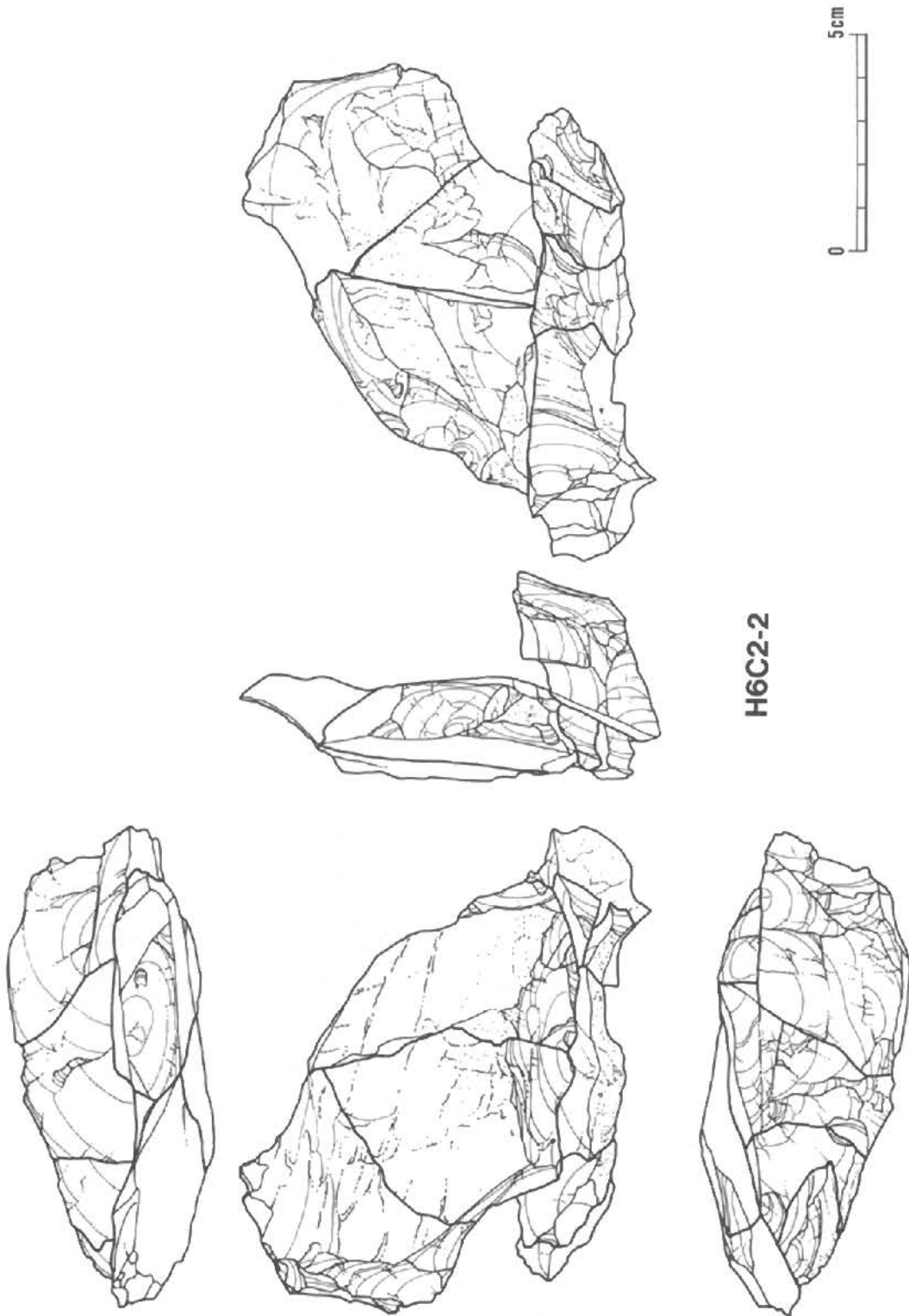




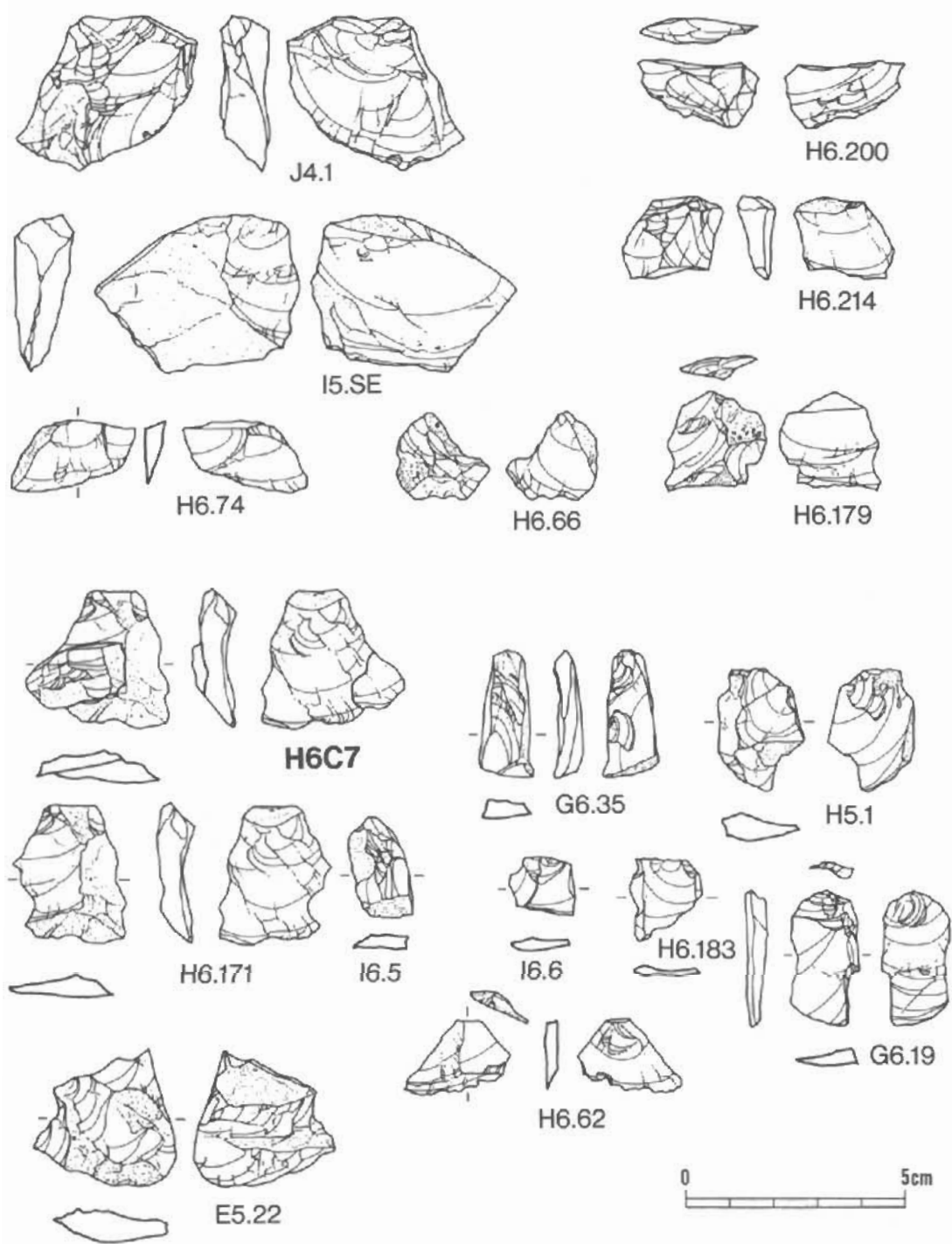
第2節 下位文化層の遺物



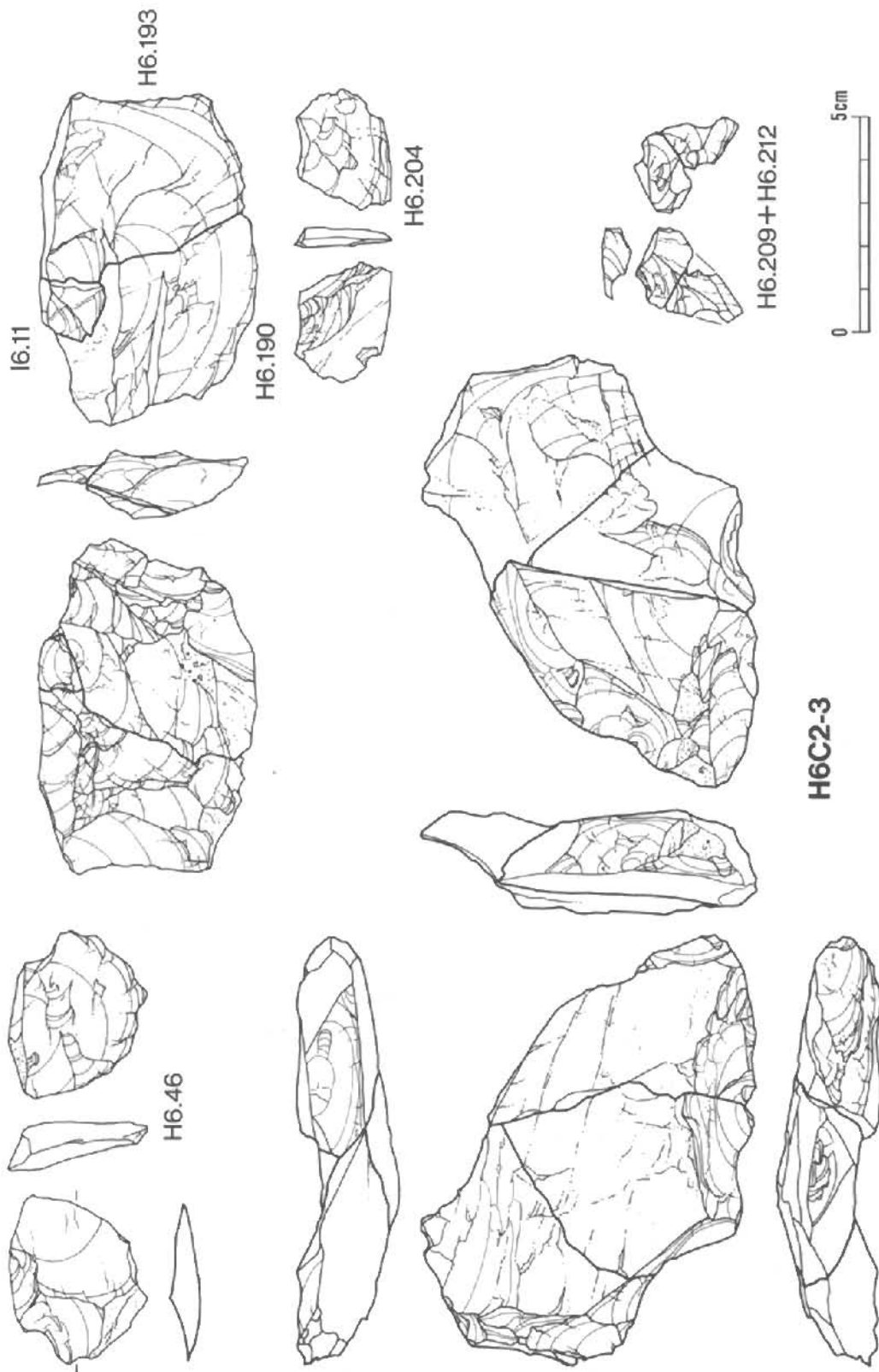
第194図 個別別資料No.24実測図1



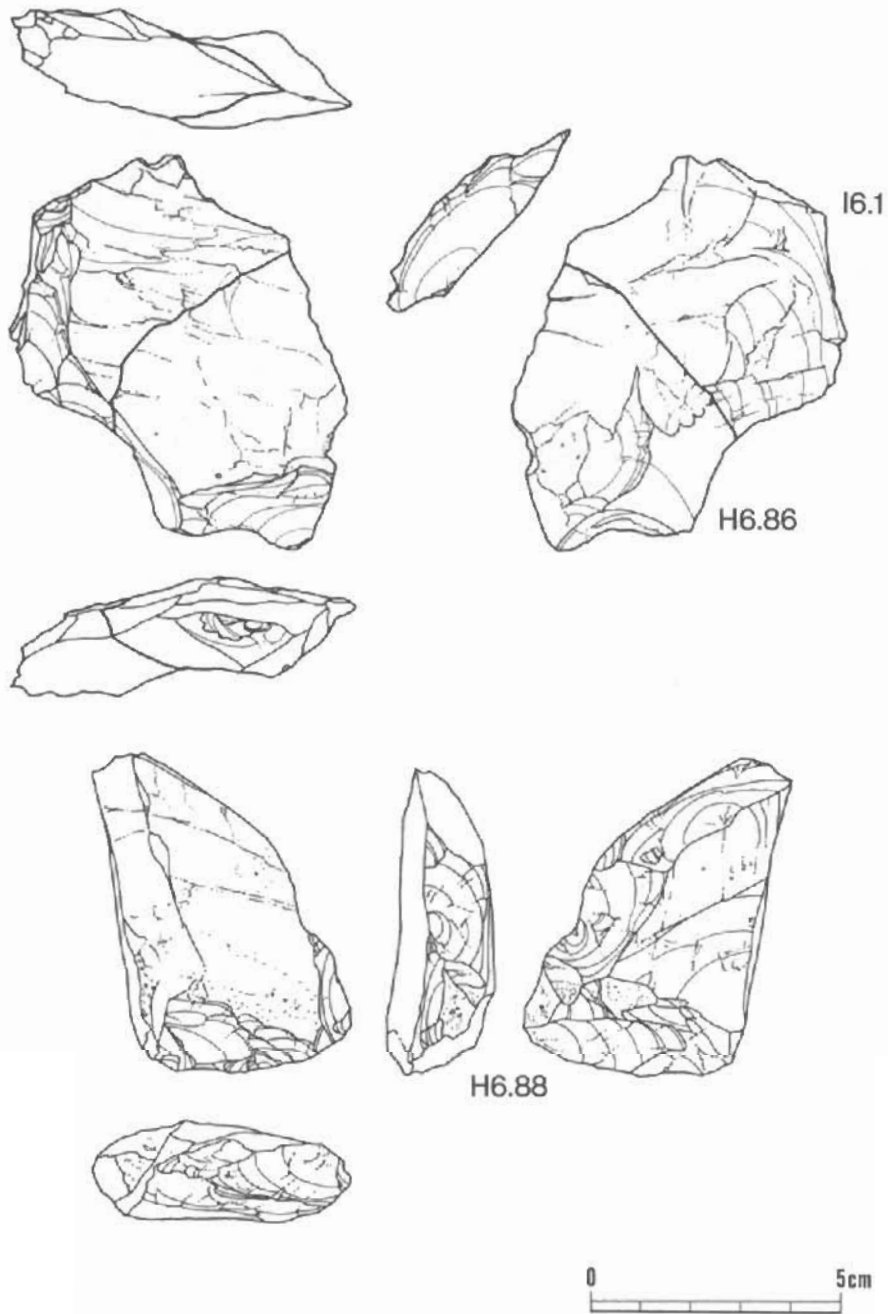
第195図 個別別資料No.24実測図 2



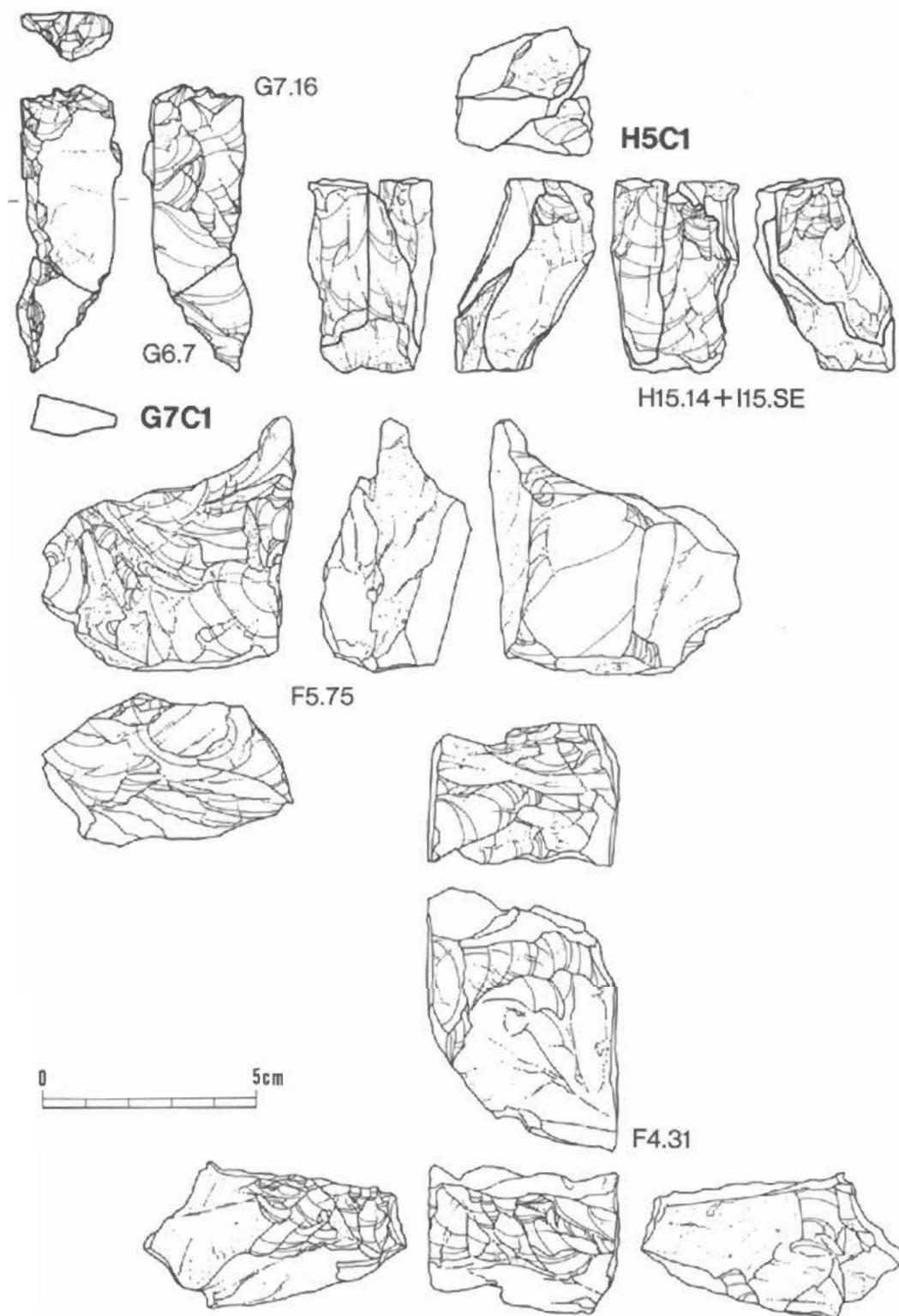
第196図 個体別資料No.24実測図3



第197図 個別別資料No.24実測図 4



第198図 個体別資料No.24実測図5

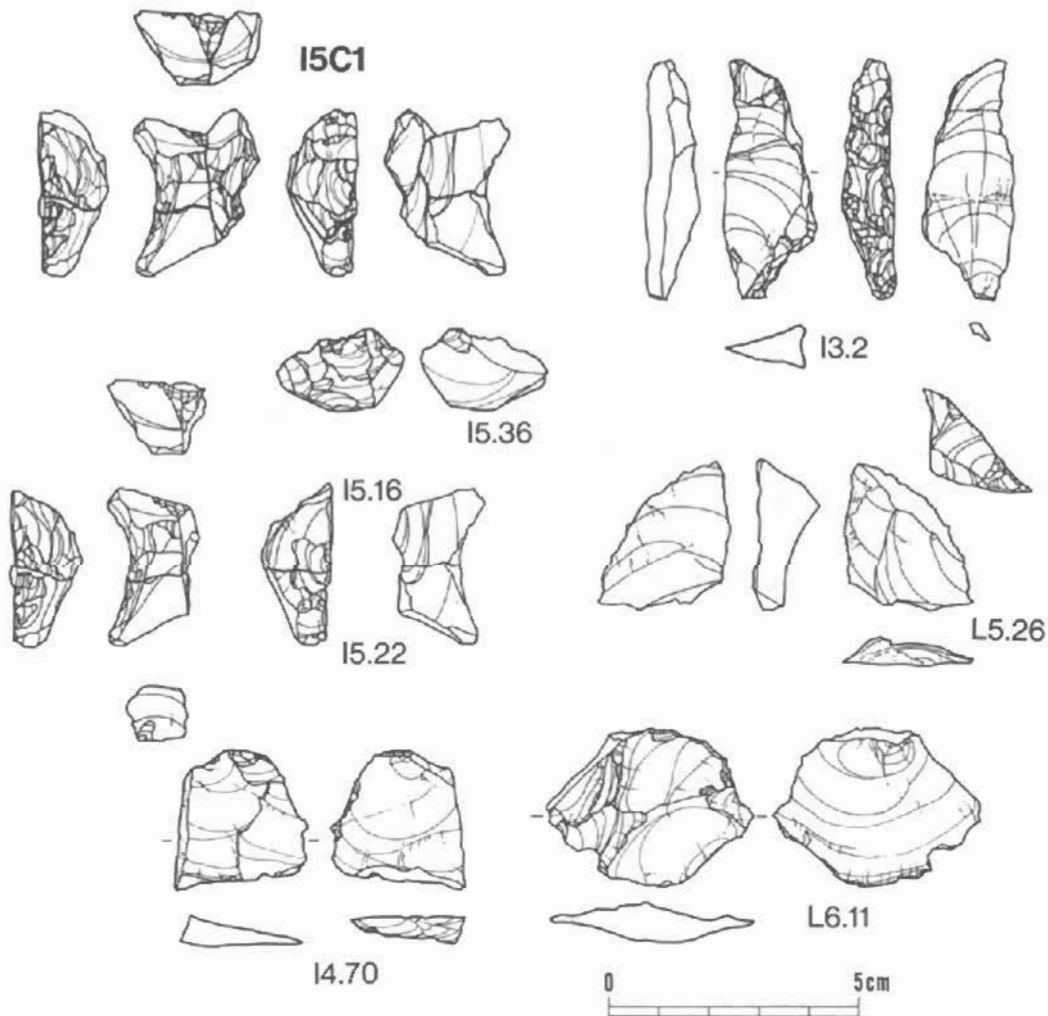


第199図 個体別資料No.37実測図

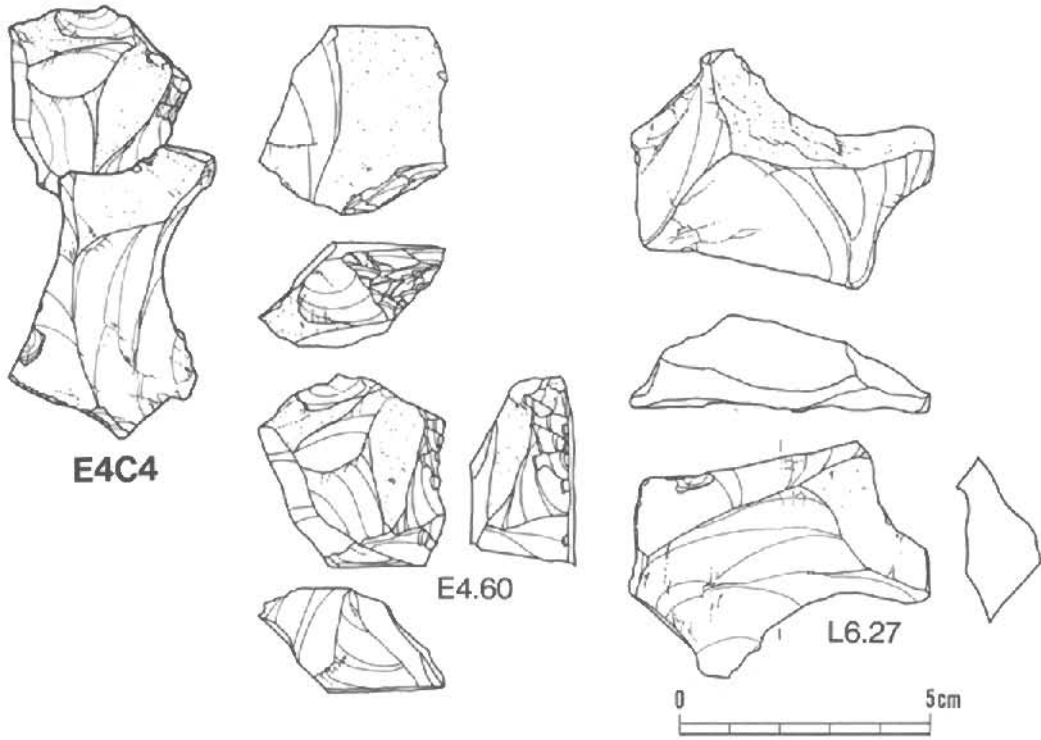
第2節 下位文化層の遺物

イ、厚さ4cm、幅12~14cm程度の板状材を素材とする。ロ、材の厚い右側正面から剥離作業面から自然面を除去するためか、一部打面を変更しながら推定長4cm、幅3~4cm程の2~3枚の大型剥片が剥離される。①板状材の上面を打面としてJ4.1が、打面調整無しに剥離される。ハ、少なくとも1枚の剥片が正面から剥離される。②H6.179、③H6.66が連続して剥離されるが、上半部を欠く。④I6.20とニを打面調整無しに剥離する。⑤H6.107が剥離される。⑥H6.204が、打面調整を施した後、剥離される。⑦H6.200が剥離されるが、上半部を欠損する。⑧H6.74が打面調整なく、剥離される。⑨少なくとも②に先だつて一部の剥片剥離が作業面を変更して行なわれている。石核左側縁から自然面を剥ぐようにI5. SEが剥離される。⑩作業面からH6.214、ホが剥離されるが、これらは⑦H6.200に先行する。続いて⑪H6.46が打面調整なく剥離される。⑫剥離作業面いっぱいから(H6.190+H6.193+I6.11)が剥離され、その後に3分割される。⑬⑫を剥離した作業面を打面にしてここから大型剥片1枚(H6.212+H6.209)を剥離するが、これは、2分割される。ト、では横長剥片が剥離される。⑭H6.88が残される。分割された一方は、⑮(H6.86+I6.1)に折断されている。チ、残核は残されていない。

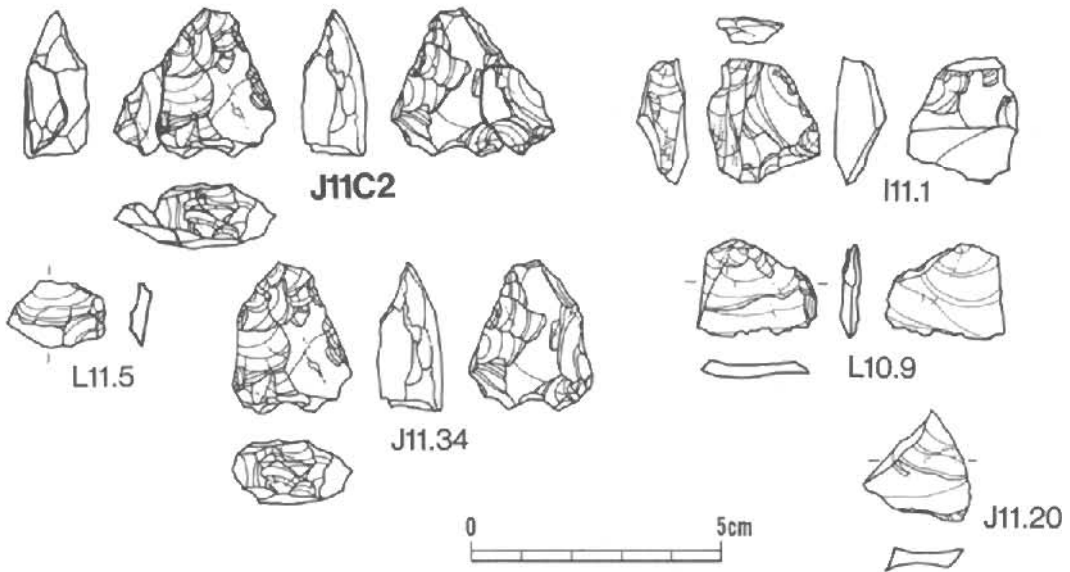
接合して、工程に位置づけられた資料数15の多量接合例である。大型の板状材を素材とし、その側面



第200図 個体別資料No.39実測図



第201図 個体別資料No.40実測図



第202図 個体別資料No.41実測図



を作業面とし、左右に移動しながら剥片を生産する。比較的はやい段階で打面と側面の自然面を除去している。残核の存在のない終末期欠落・初期工程不明の個体である。

#### 個体番号37

厚さ4.5cm、長さ・幅少なくとも10cm以上のチャート製板状材。やや緑がかった灰色で、暗い青の縞模様が入る。やや節理が多い。接合資料2群を含む。接合資料2点、3点、非接合資料3点である。剥片5点、石核3点からなる。個体には、石核が3つ含まれており、もともと4.5cm厚程の板状材を分割して、それぞれで剥片生産を行なったものと考えられる。後半から最終末までの工程が残されている。

#### 個体番号39

石材の本来の形状は分からない。緑がかった灰色の良質チャート材。接合資料1群を含む。接合資料は3点、非接合資料は4点である。内訳は、ナイフ形石器1点、加工痕有剥片4点、使用痕有剥片1点、剥片1点である。

#### I5C1

イ→①I5.36(F)→②(I5.16(RF)+I5.22(RF))

イ、台形様石器とも考えられる加工痕有剥片から、①I5.36(F)が右側縁から剥離される。②(I5.16(RF)+I5.22(RF))が残される。

接合資料は、台形様石器とも考えられる加工痕有剥片の再調整工程であろう。その他の個体所属資料も、ナイフ形石器・RF・UFからなっている。剥片生産工程は認められない。

#### 個体番号40

厚さ2.5cm程のチャート製板状材。暗灰色に緑のラインが走る良質材。接合資料1群があり、素材を分割してL6.27(UF)とE4.60(SC)の2点を製作している。他に非接合資料剥片2点がある。

#### 個体番号41

緑灰色で、暗茶色の縞模様混じる良質のチャート材。接合資料1群を含む。接合資料2点、非接合資料5点である。内訳は、削器1点、使用痕有剥片1点、剥片3点、碎片1点、石核1点である。

#### J11C2

イ→①L11.5(F)→ロ→②J11.34(CORE)

イ、剥片素材の石核で、数枚の横長剥片が剥離されている。①L11.5(F)を続いて剥離した後、ロ、石核の小口部からの加撃で縦長剥片1枚が剥離されている。②J11.34(CORE)が残る。

接合資料は、剥片生産が目的か、本来楔形石器の整形加工であるのか、判別できない。

#### 個体番号44

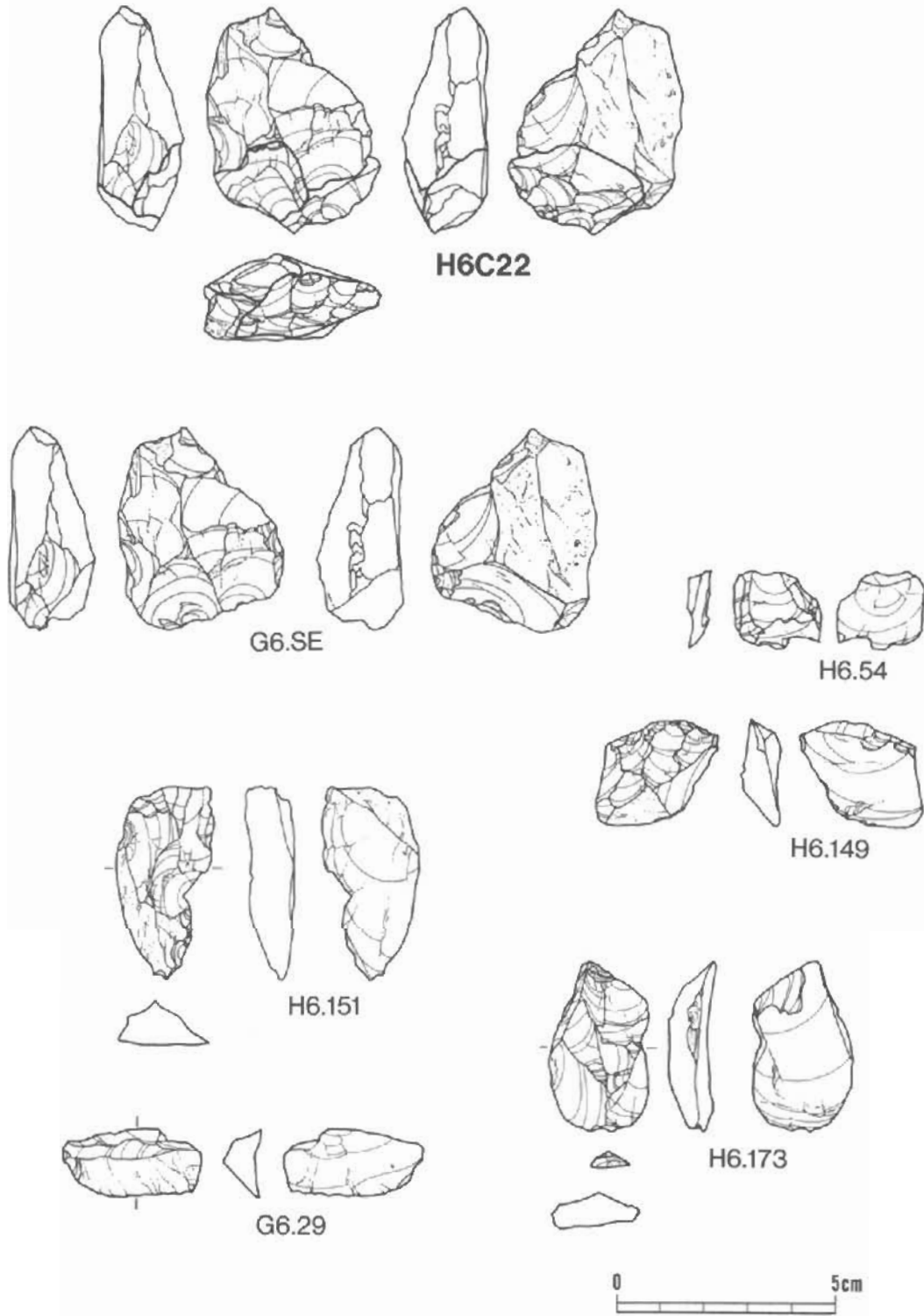
茶色がかった暗い灰色、光沢のあるチャート材。大型の剥片か。接合資料1群を含む。接合資料3点、非接合資料6点からなる。内訳は、使用痕有剥片3点、剥片3点、碎片2点、石核1点である。

#### H6C22

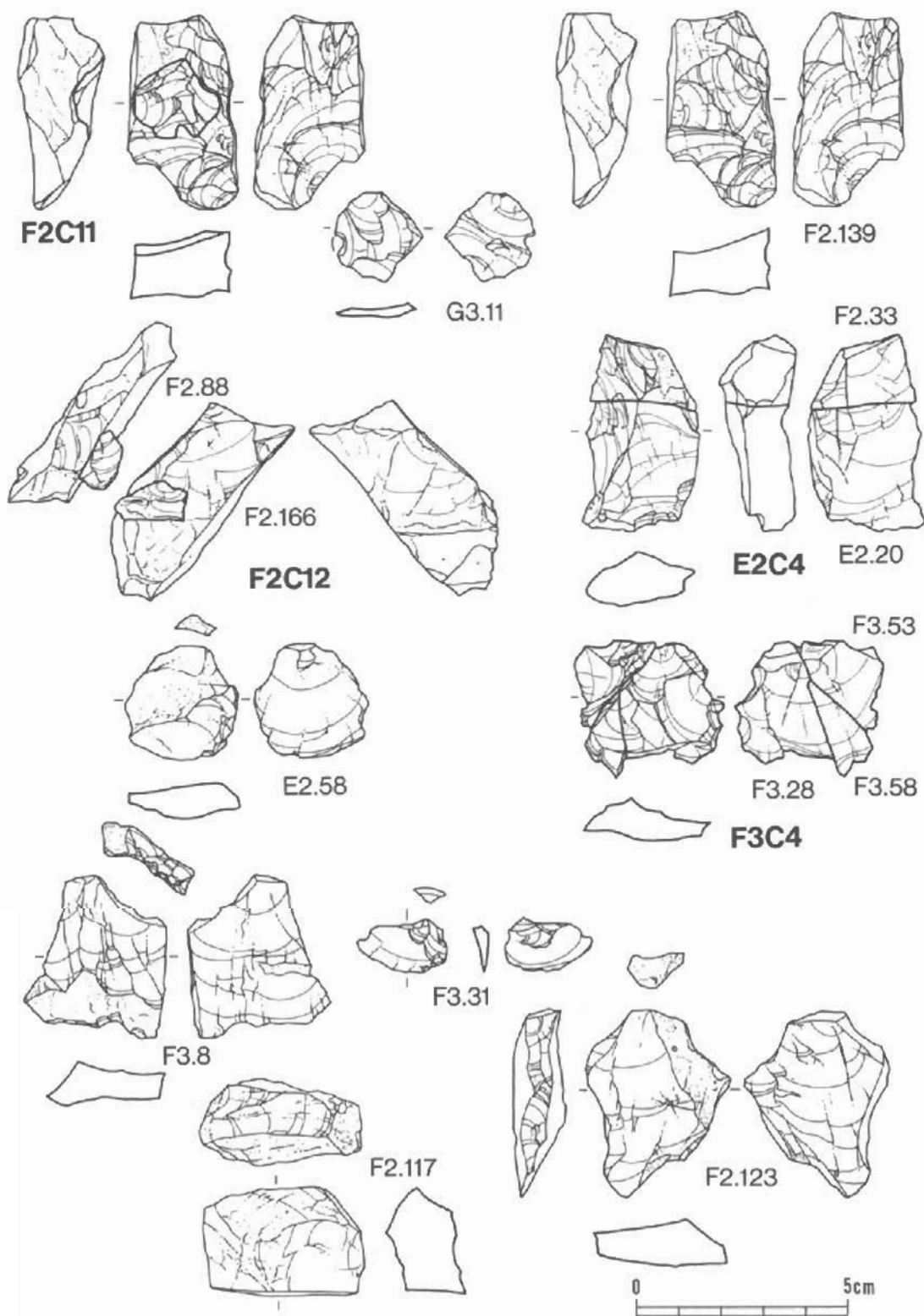
イ→ロ→①H6.149(UF)→②H6.54(UF)→ハ→③G6.SE(CORE)

イ、大型の剥片を寝かせて、石核上面からの加撃で幅広の貝殻状剥片を剥離。ロ、打面を石核底面に移動、貝殻上剥片1枚を剥離、①打面調整を施してから、H6.149(UF)を剥離するが、底面が付着する。②打面を転移した後、打面調整を施してH6.54(UF)を剥離、ハ、同一面から小貝殻状剥片1枚を剥離して、③G6.SE(CORE)が残される。

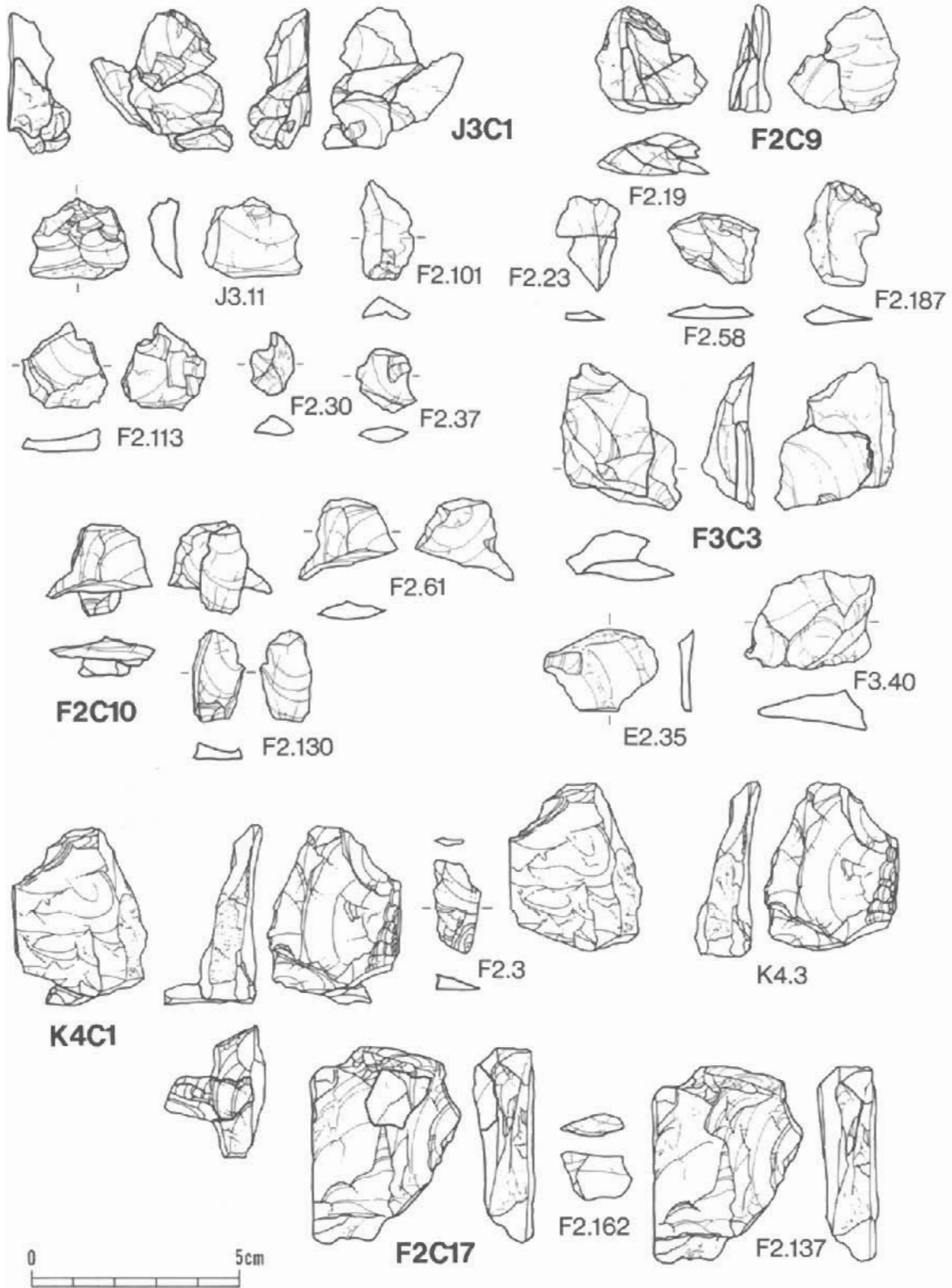
石核素材の形状は不明であるが、おそらく盤状大型剥片を横位に寝かせて、貝殻状剥片を打面と作業



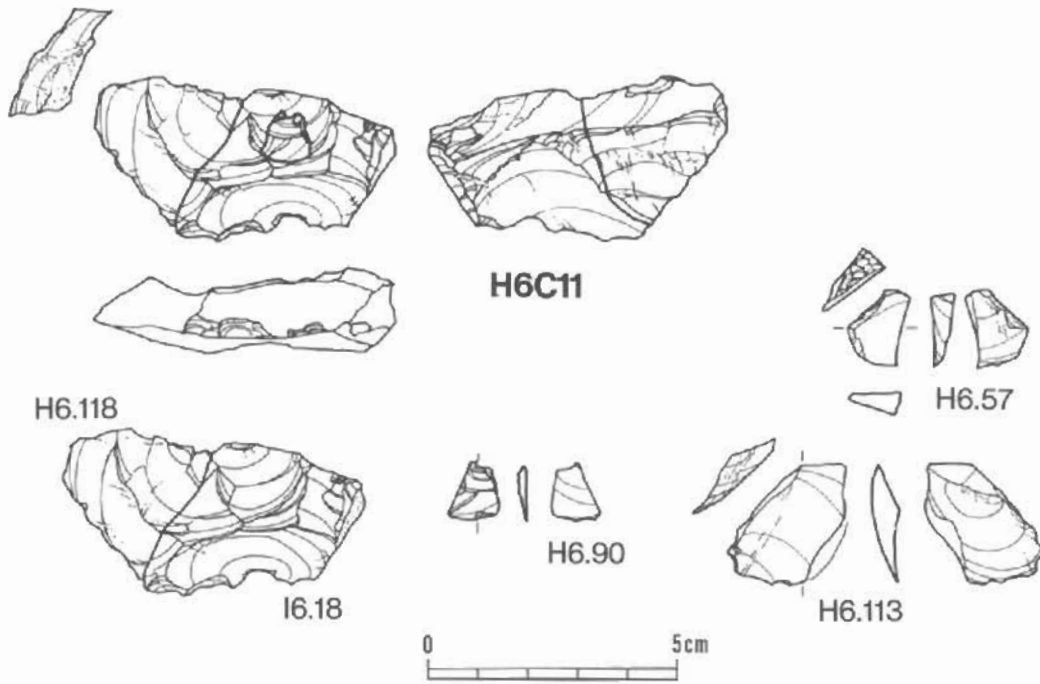
第203図 個体別資料No.44実測図



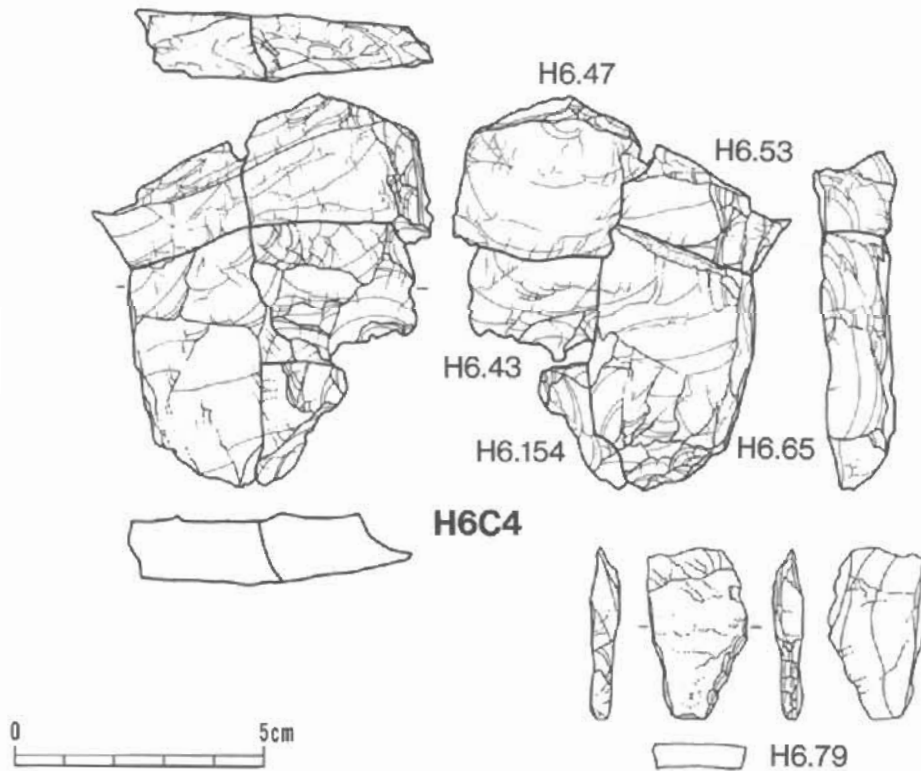
第204図 個体別資料No.45実測図1



第205図 個体別資料No.45実測図2



第206図 個体別資料No.48実測図



第207図 個体別資料No.52実測図

面の転移を行いながら生産するものである。中期～終末期までの工程が残されている。

**個体番号45**

厚さ2～3cmのチャート製板状材と推定される。赤と黒の縞模様のある灰色。

接合資料10群を含む。接合資料合計28点、非接合資料43点で、内訳は、削器1点、使用痕有剥片2点、剥片54点、碎片12点、石核2点である。接合資料の内、2群を記述する。

**F2C11**

イ→①G3.11(F)→ロ→ハ→②F2.139(CORE)

イ、22mm厚の板状材を節理面から分割して石核とし、その分割面から若干の貝殻状剥片を剥離する。①G3.11を剥離する。ロ、小口部から貝殻状剥片を剥離する。ハ、打面を石核表面に移動し、小口部から貝殻状剥片を数枚剥離する。②F2.139(CORE)を残す。

**J3C1**

イ→①F2.37(F)→②F2.30(C)→③F2.101(F)→④J3.11(F)→ロ→⑤F2.113(F)→ハ

イ、石核の本来の大きさ、形状は、不明。節理による角部に作業面を設定。①F2.37(F) ②F2.30(C) ③F2.101(F) ④J3.11(F)を連続して剥離。この間、自然面を打面として打面縁調整が僅かに施される。ロ、少なくとも1枚の剥片を剥離する。⑤F2.113(F)を剥離する。ここまで、いずれも寸詰まり、幅広の剥片である。ハ、石核は未検出である。

本個体には、小単位の接合資料が多数含まれるが、いずれも2～3cm厚の板状材を分割したものを石核としたものである。工程の遺存状況は、石材の分割から剥片生産まで、断片的な資料内容である。

**個体番号48**

透明感ある灰色のチャート製大型剥片を素材とする。白と黒の縞模様がある。良質である。接合資料1群が含まれる。接合資料3点、非接合資料4点からなり、内訳は剥片4点、碎片1点、石核2点がある。

**H6C11**

イ→ロ→①H6.90(C)→②(H6.118(CORE)+I6.18(CORE))

イ、厚さ2cm程の大型剥片を素材として、ボジ面に剥離作業面を設定して石核とし、数枚の剥片が剥離される。ロ、1枚の横長剥片が、底面を付着させて、石核下半部から剥離される。更に、作業面を上半部に移動させて打面調整・打面縁調整を施さずに、横長剥片を1枚剥離する。①続いてH6.90(C)を剥離する。②(H6.118(CORE)+I6.18(CORE))が残核として残る。

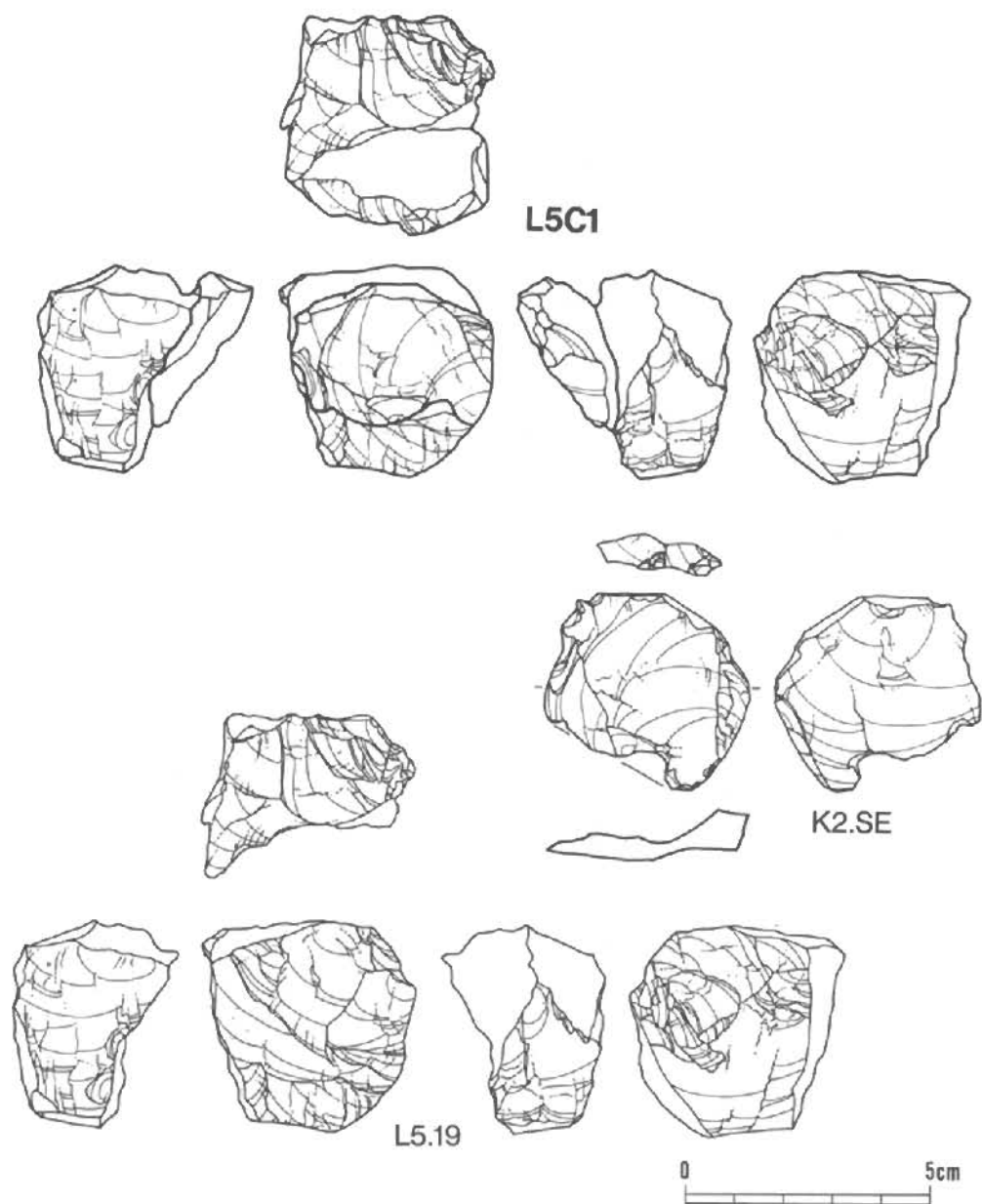
剥片素材の石核を横位にして、一端から横長剥片を剥離し、ボジ面を作業面にしている。打面・打面縁調整はない。終末期の工程を残す。

**個体別資料No.52**

暗灰色の紫がかった細かい節理が多数走る板状のチャート材。接合資料1群を含む。接合資料5点と非接合資料5点からなる。内訳は加工痕有剥片1点、剥片8点、碎片1点の、合計10点で構成される。

接合資料H6C4は、H6.43(F(F)), H6.47(F(F1)), H6.53(F(F)), H6.65(F(F)), H6.154(F(F1))の5点が接合するが、本来1枚の剥片を破碎したもので、剥片剥離による所産ではないが、分割的な工程かも知れない。接合面は節理に沿っている。

非接合資料中には台形様石器状の加工痕有剥片があり、石器製作が行われている。



第208図 個体別資料No.57実測図

個体番号57

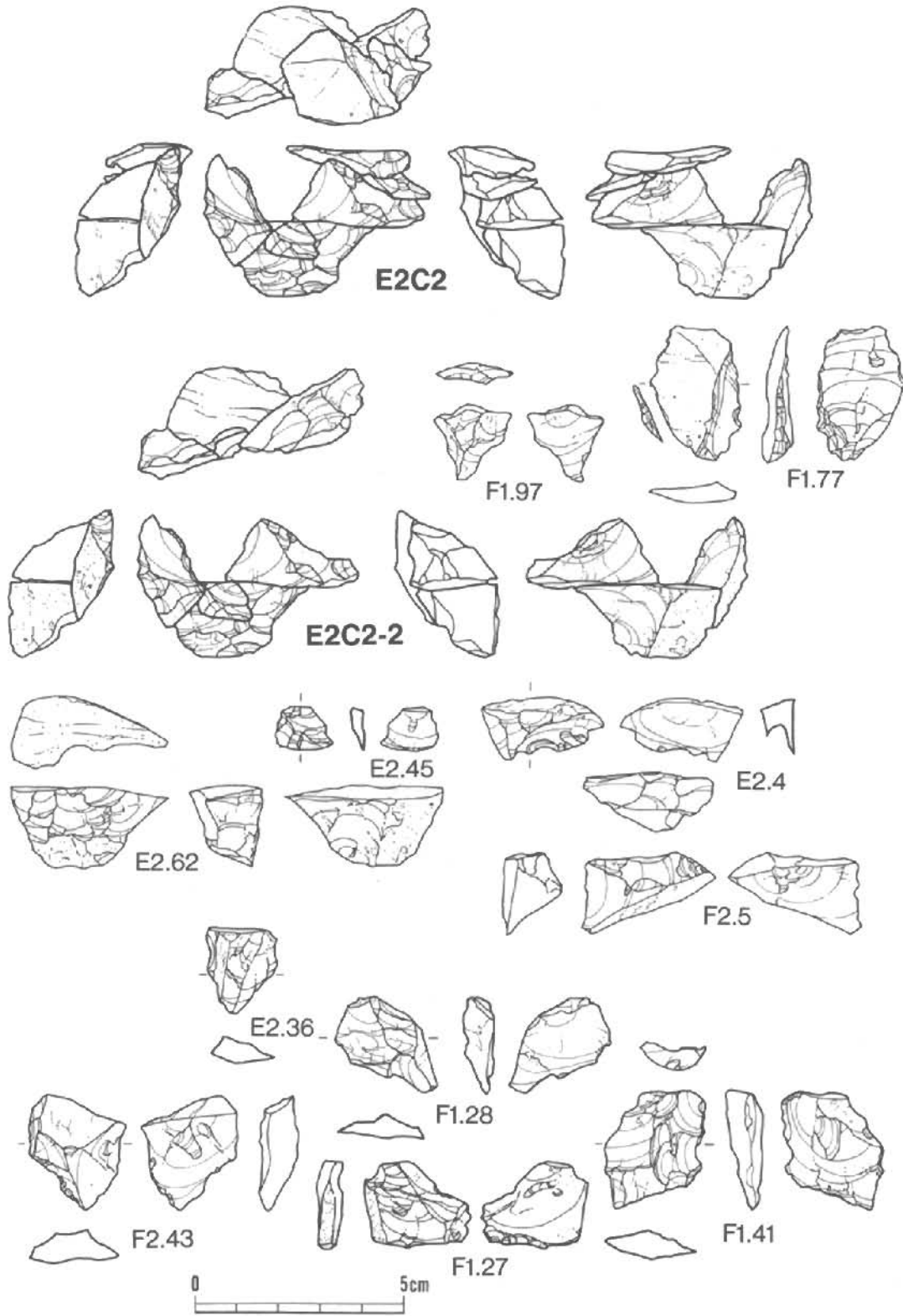
良質の、光沢の少ない黒色チャート製塊状材。接合資料1群を含む。接合資料2点、非接合資料1点  
 となり、内訳は使用痕有剥片1点、剥片1点、石核1点である。

L5C1

イ→ロ→①K2.SE(UF)→ハ→②L5.19(CORE)

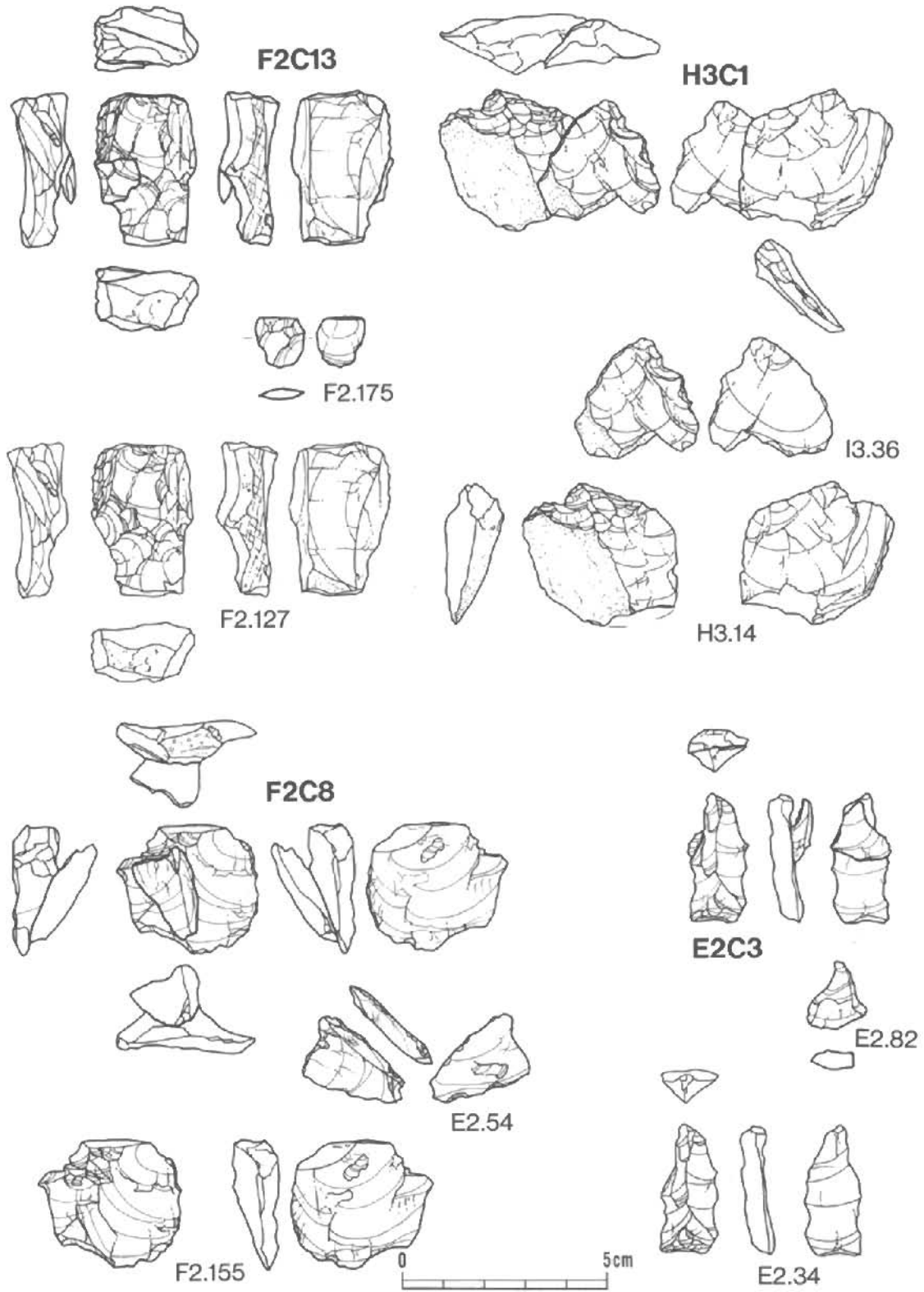
イ、既に全周囲の原石面・節理面が除去された石核。サイコロ状に打面転移しながら作業が進行したも  
 のと考えられる。ロ、石核右側からの加撃で正面から2枚の幅広剥片が打面調整無しに剥離される。①  
 K2.SE(UF)が剥離される。ハ、少なくとも2枚の剥片が剥離される。②L5.19(CORE)が残される。

残核がサイコロ状になっていくように、各作業面からわずか2・3枚の剥片を生産して、打面・作業  
 面を大体90度移動していくものである。終末期の剥片生産工程を残す。



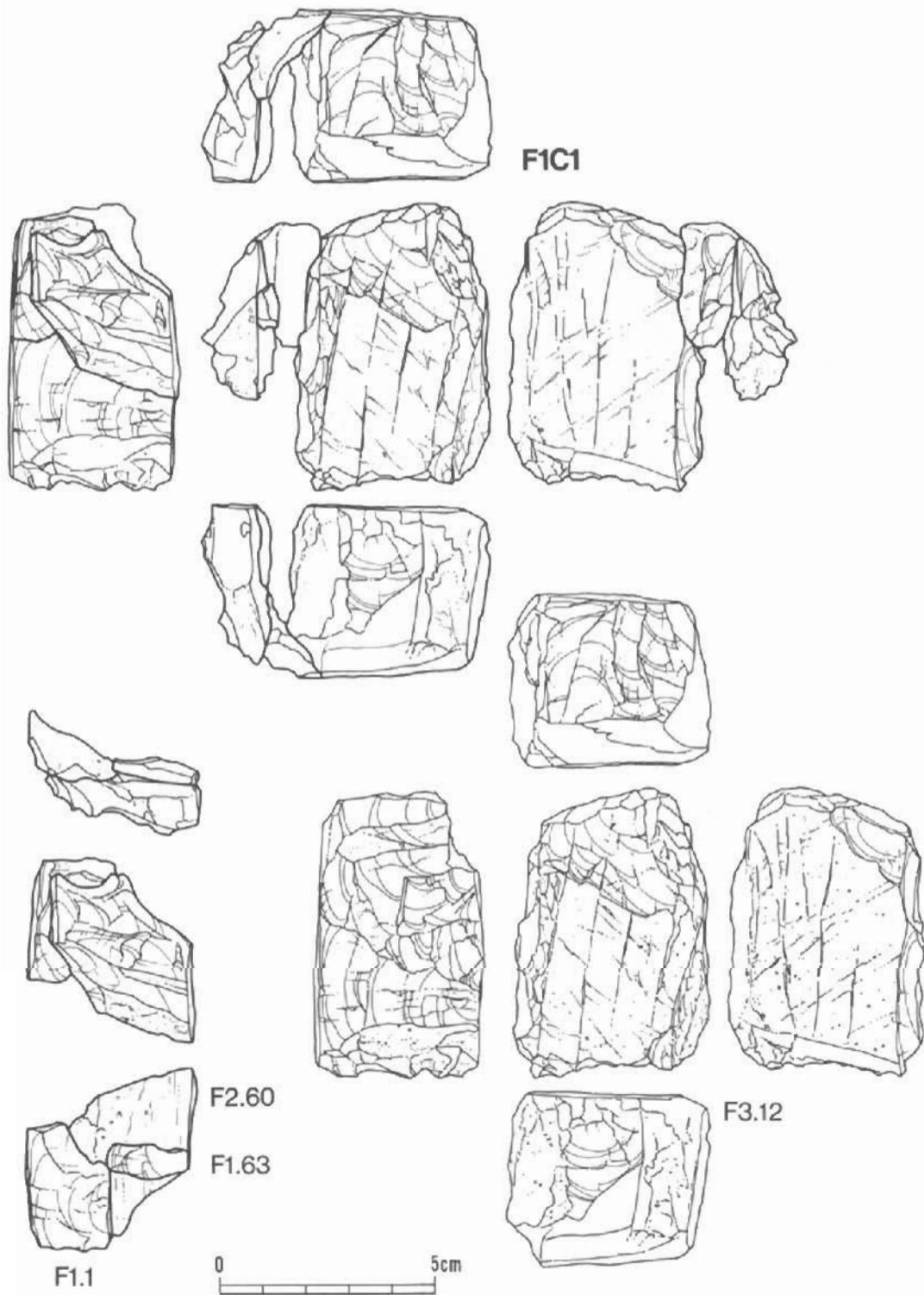
第209図 個体別資料No.59実測図1



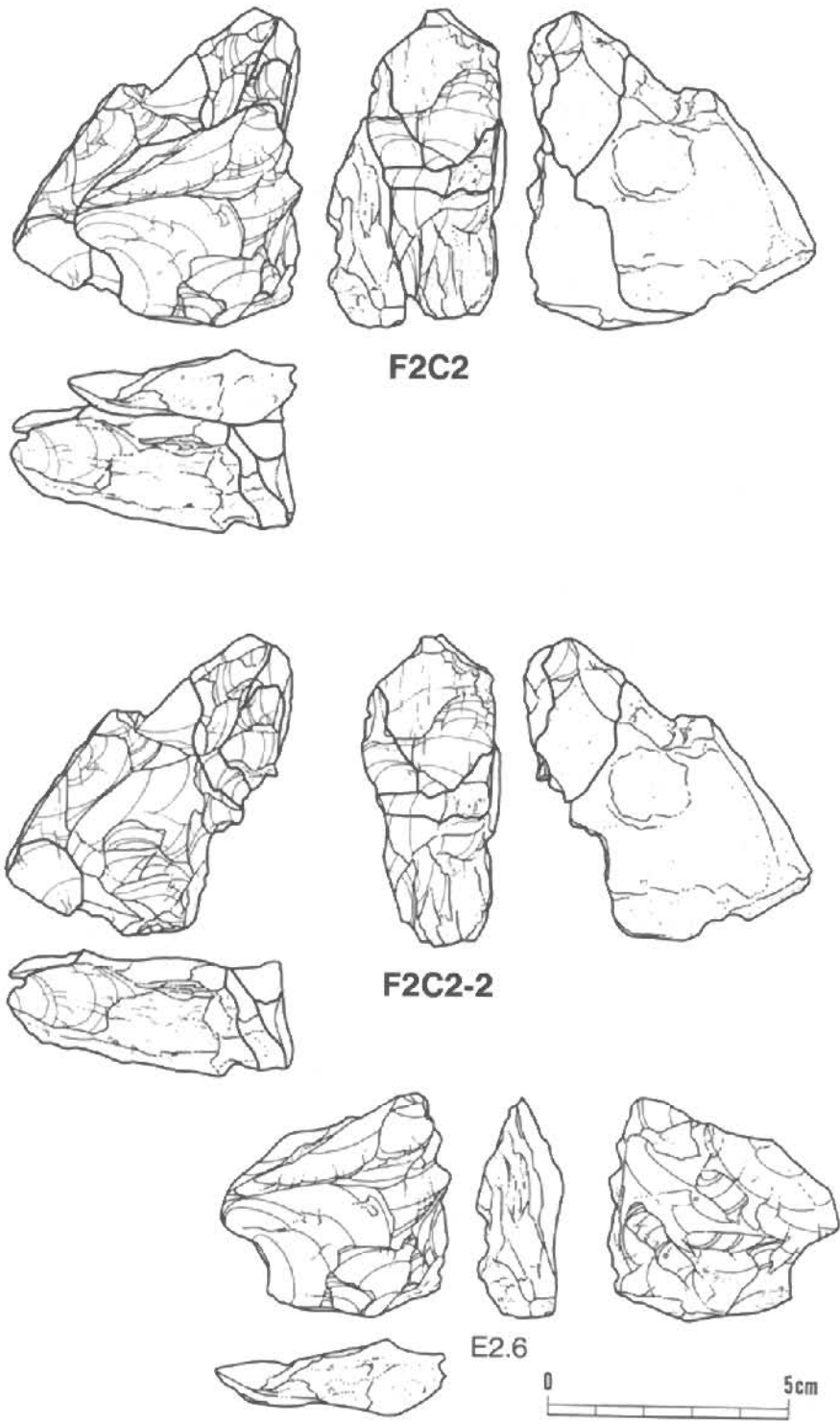


第210図 個別別資料No.59実測図2

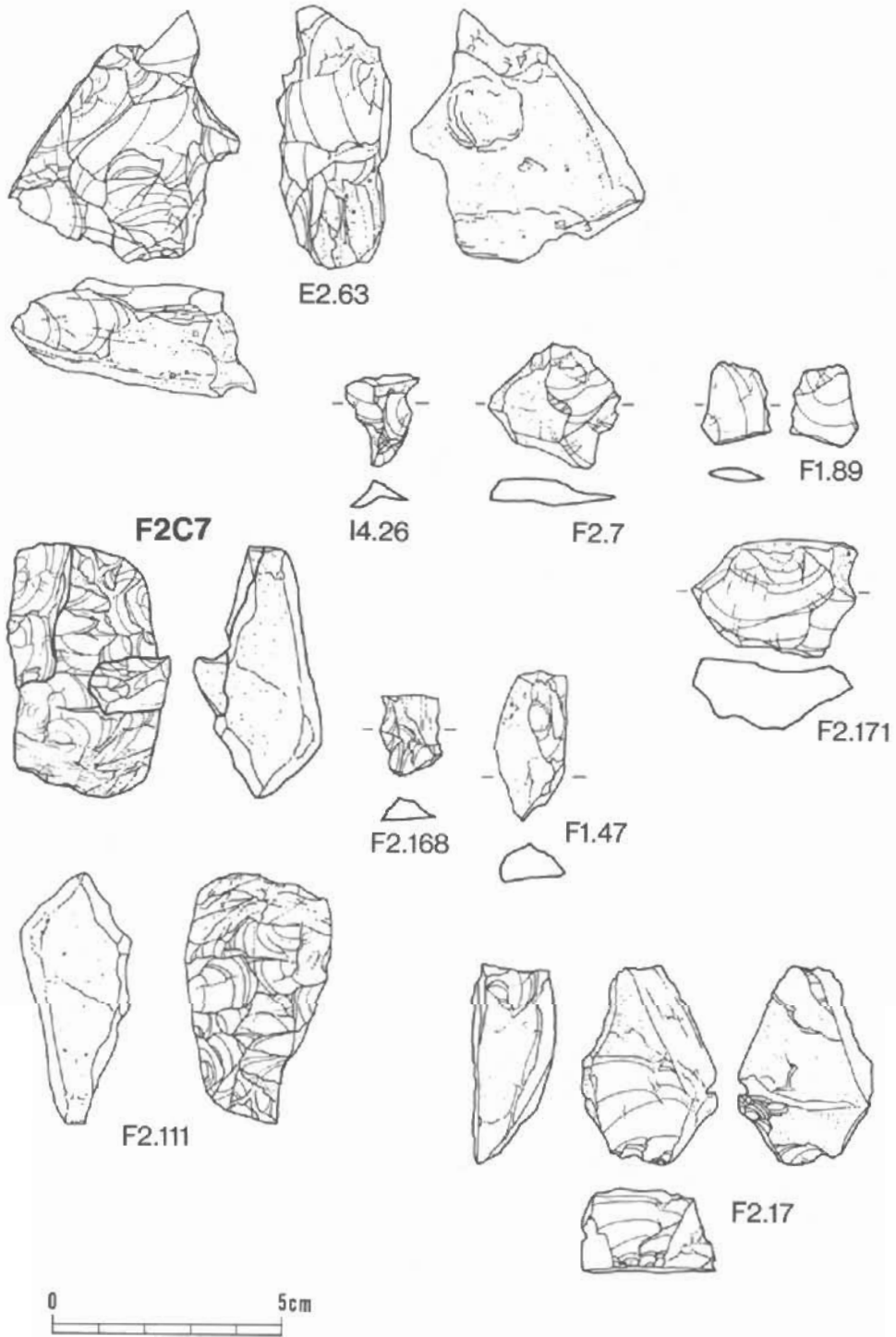




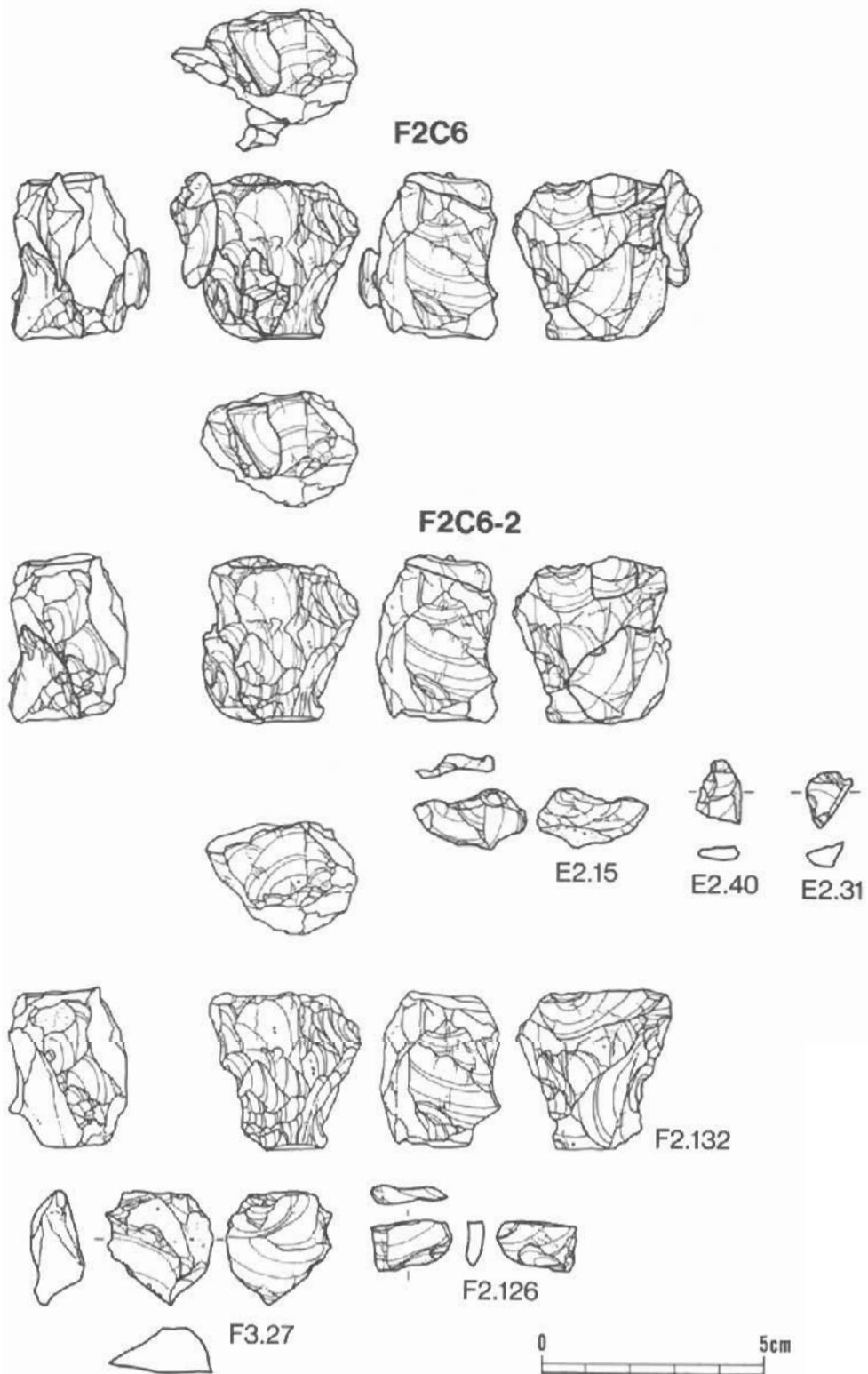
第211図 個体別資料No.60実測図



第212図 個別別資料No.61実測図1



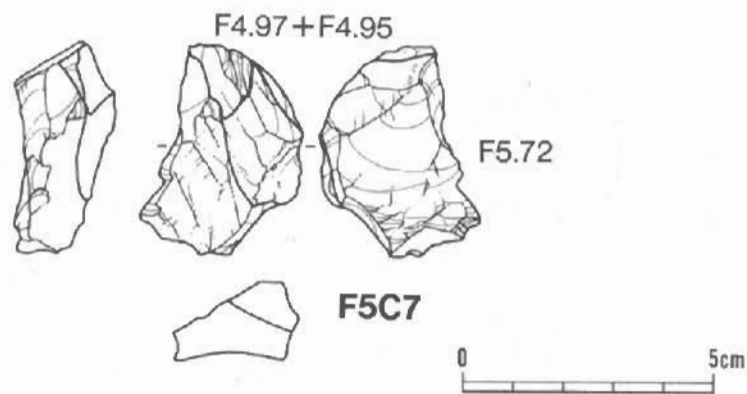
第213図 個体別資料No.61実測図2



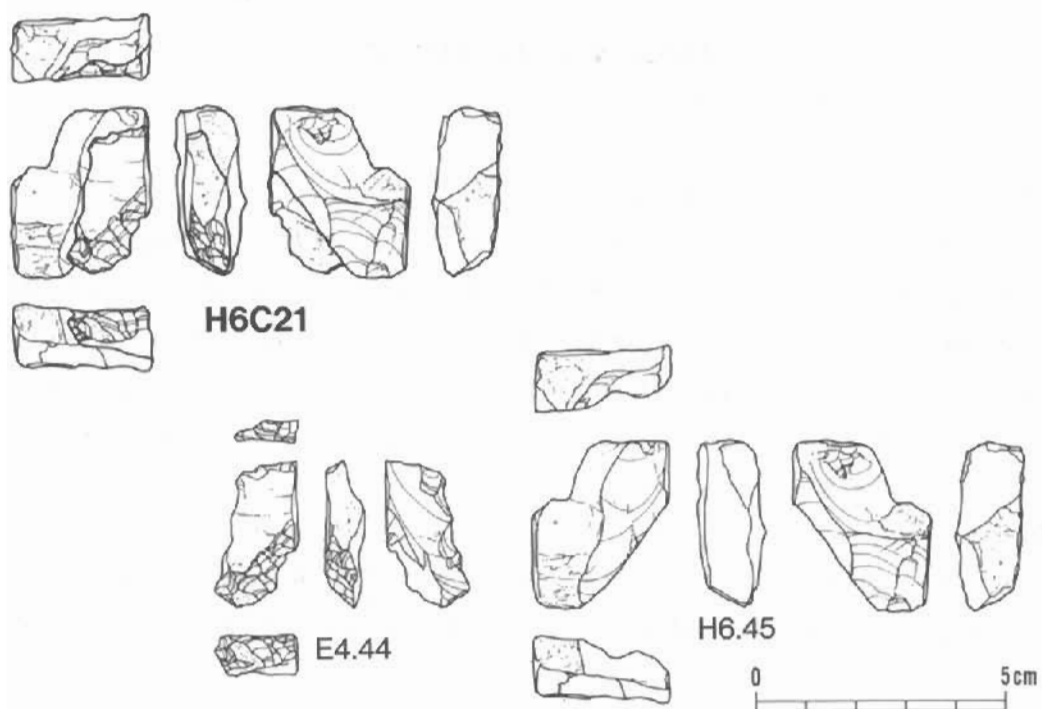
第214図 個体別資料No.62実測図1



第2節 下位文化層の遺物



第216図 個体別資料No.70実測図

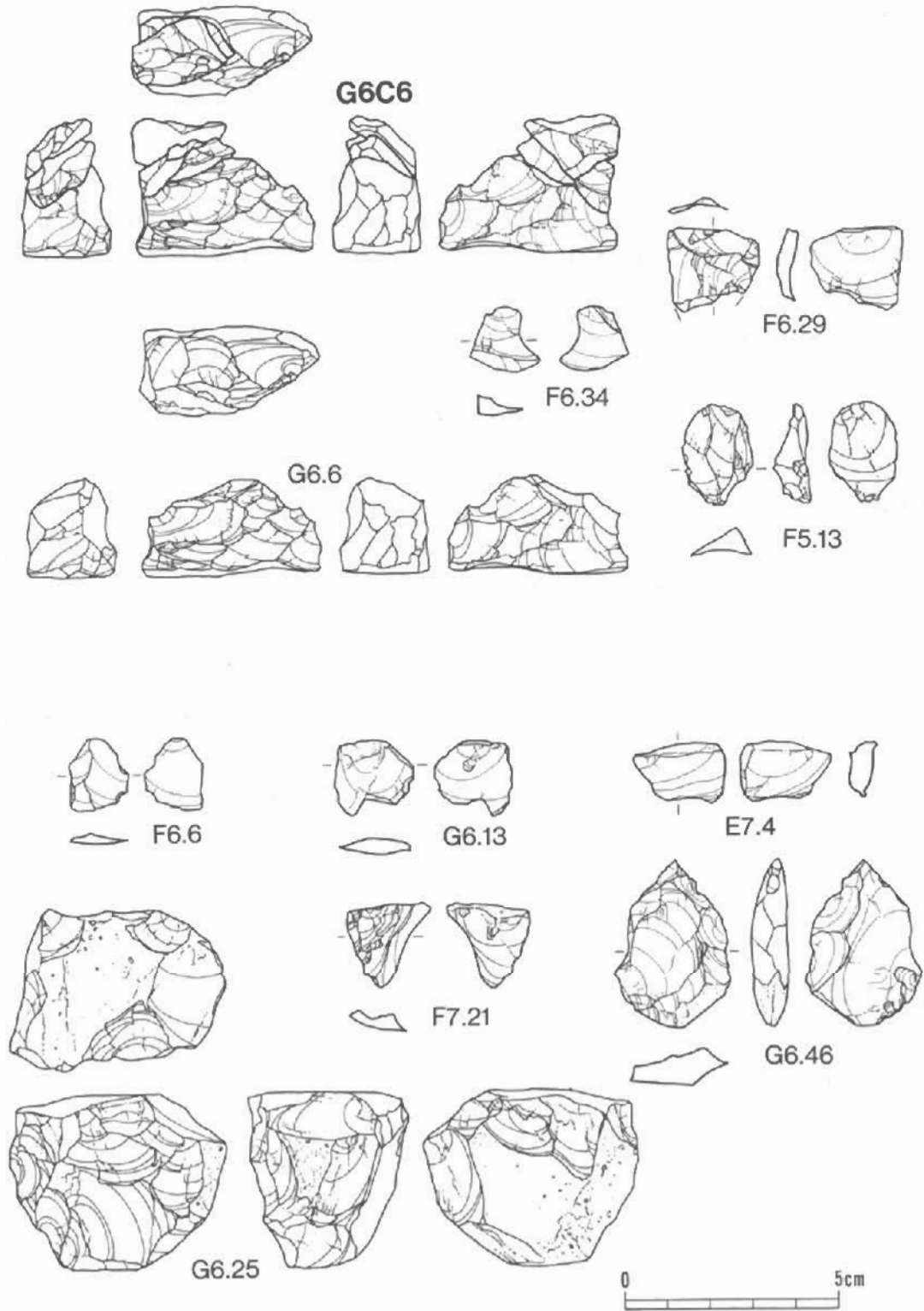


第217図 個体別資料No.71実測図



第218図 個体別資料No.72実測図





第219図 個体別資料No.83実測図

**個体番号70**

灰色チャート材。節理は強いが良質。接合資料1群からなる。接合資料3点、非接合資料1点で、内訳は剥片4点である。剥片生産の中期でも比較的早い段階であろう。

**個体番号71**

厚さ3cmほどの明灰色チャート材。接合資料1群を含む。接合資料は2点で、搔器1点、剥片1点からなる。

H6C21

イ→①E4.44(EN)→②H6.45(F)→ロ

イ、厚さ2.7cmの板状材の両小口部に打面を持つ石核から、まず下部から少なくとも3枚の小剥片が剝離される。①打面を上部に転じてE4.44(EN)と②しの字状剥片H6.45(F)が剝離される。ロ、石核は未発見。

両設の打面には打面調整はない。点数は少ないが、剥片生産中期の工程が行なわれたようである。

**個体番号72**

暗灰色のチャート材で、1mm以下の黒点がある。接合資料を含まない。非接合資料7点で、内訳は使用痕有剥片2点、碎片5点である。僅かの石器類からなり、内容判断ができない。

**個体番号83**

灰緑色チャート材。良質だが、表皮の風化は強い。接合資料1群を含む。接合資料4点、非接合資料7点からなる。内訳は加工痕有剥片1点、剥片8点、石核2点である。

G6C6

イ→①F6.29(F)→ロ→ハ→②F5.13(RF)→③F6.34(F)→ニ→④G6.6(CORE)

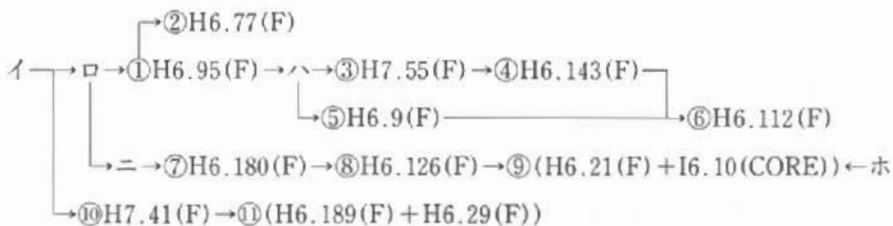
イ、拳大ほどの重円礫を分割したものを素材とし、一面に自然面を残して、全周囲から剥片剝離作業が進行している。①F6.29(F)を剝離する。ロ、打面を90度移動して剥片を少なくとも2枚剝離する。ハ、打面を旧に復して1枚剥片を剝離する。②F5.13(RF)、③F6.34(F)を連続して剝離する。ニ、打面を90度移動して剥片1枚を剝離する。④G6.6(CORE)が残される。

打面調整・打面縁調整とも認められず、寸詰まりな剥片を生産している。中期～終末期の剥片剝離工程が行なわれている。同一母岩から分割されたG6.25(CORE)があり、その方がより大型で形状の整った剥片が生産されている。

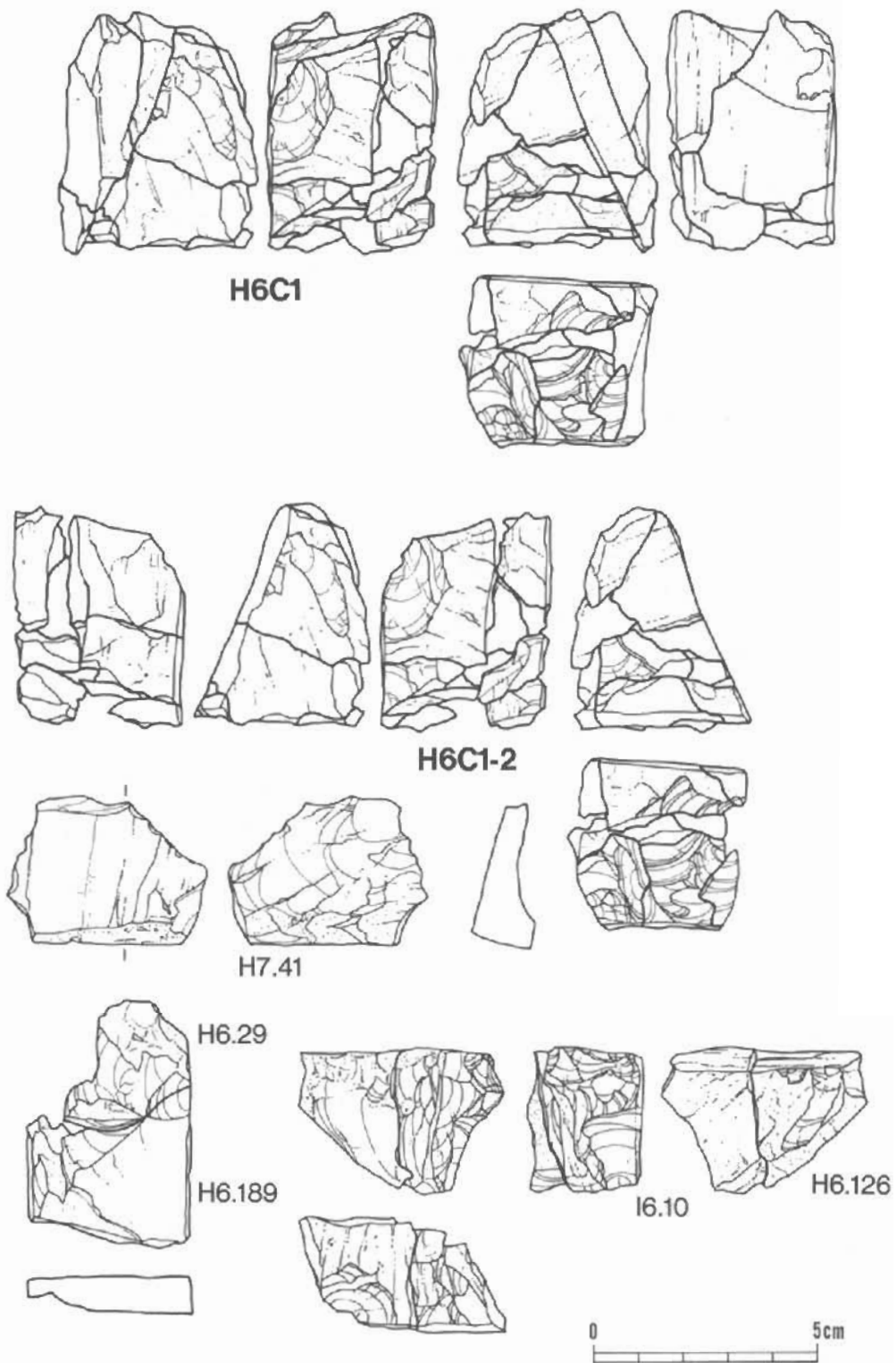
**個体番号88**

厚さ4cm程のチャート製板状材を母岩とする。やや透明感有る灰色チャートで、良質であるが節理が強い。接合資料4群がある。接合資料23点、非接合資料10点で、内訳は加工痕有剥片1点、剥片30点、石核2点である。接合資料2群を記述する。

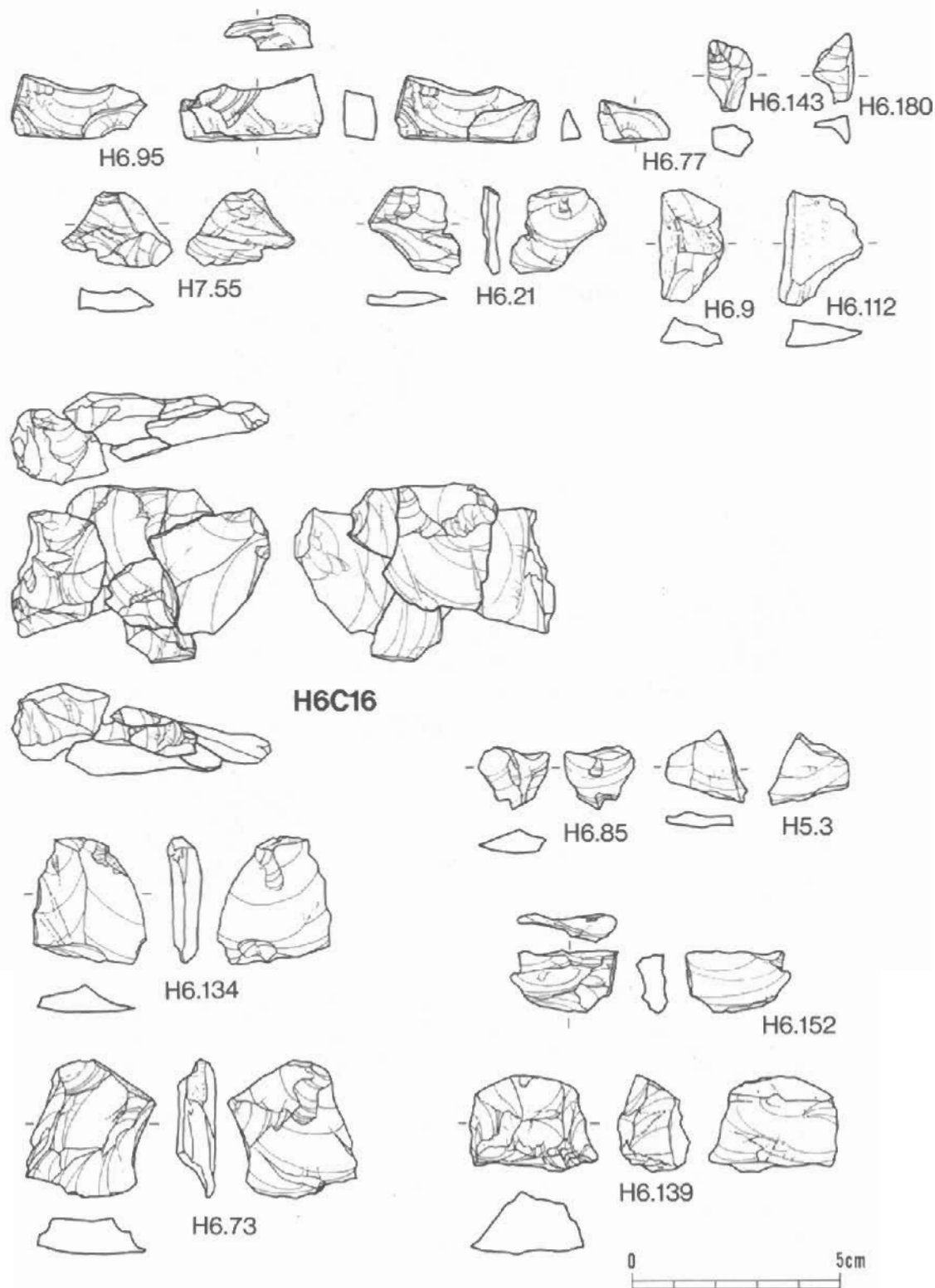
H6C1



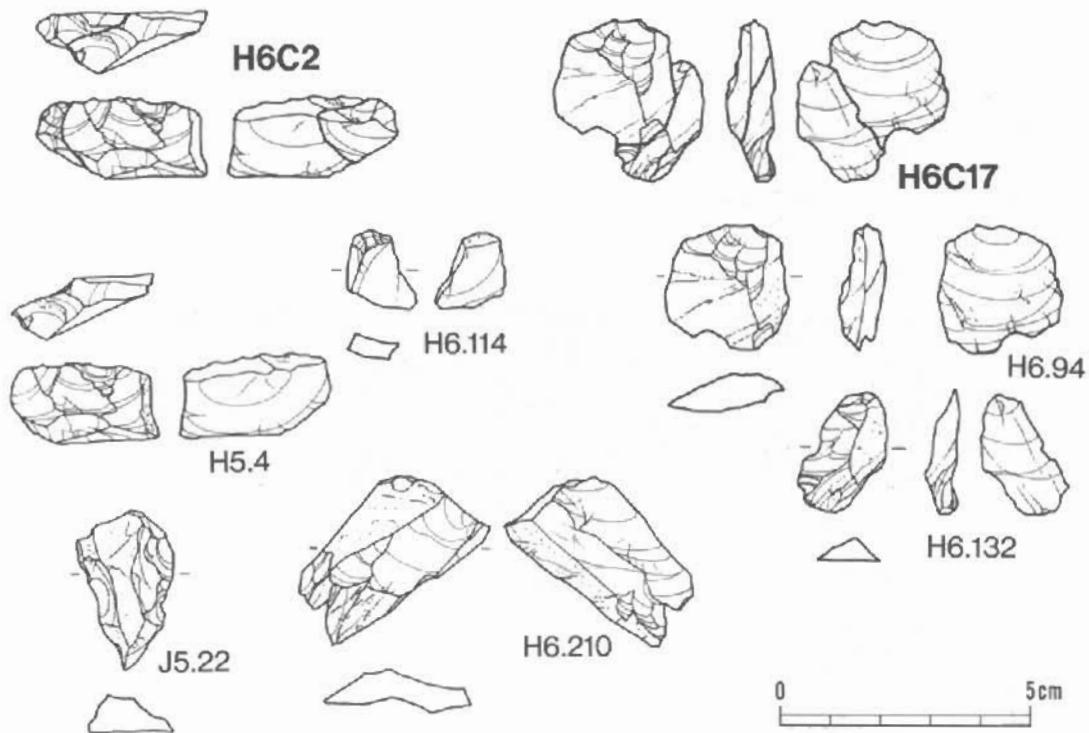
イ、板状材を分割した厚さ4cm、長さ、幅6cm程の素材を更に厚さ2cm程に節理面から板状に分割する。



第220図 個体別資料No.88実測図1



第221図 個体別資料No.88実測図2



第222図 個体別資料No.88実測図3

ロ、大きい方を加撃によって2つに分割する。①分割面を打面にしてH6.95(F)を剥離する。②①の剥離面から、H6.77(F)を剥離する。ハ、2枚の剥片が剥離される。③打面を自然面に転じてH7.55(F)④H6.143(F)を剥離する。⑤一方の節理面からH6.9(F)を剥離する。⑥H6.112(F)が剥離される。ニ、一端から、上下方向に剥離が行なわれる。⑦H6.180(F)が下から、⑧H6.21(F)が上から剥離される。⑨石核は、砕かれて、H6.126(F)+I6.10(CORE)に分割される。ホ、I6.10(CORE)を石核として若干の剥片が剥離される。⑩H7.41(F)が剥離され、⑪H6.189(F)+H6.29(F)が破碎されている。

H6C16

イ→①H6.139(F)→②(H6.134(F)+H6.85(F))→③(H6.152(F)+H5.3(F))→④H6.73(F)

イ、3.5cm厚の板状材の分割面を作業面とする石核で、先行して少なくとも4枚の剥片が剥離されている。①H6.139(F)が剥離され、②(H6.134(F)+H6.85(F))③(H6.152(F)+H5.3(F))が続く、④打面を変更してH6.73(F)を剥離する。

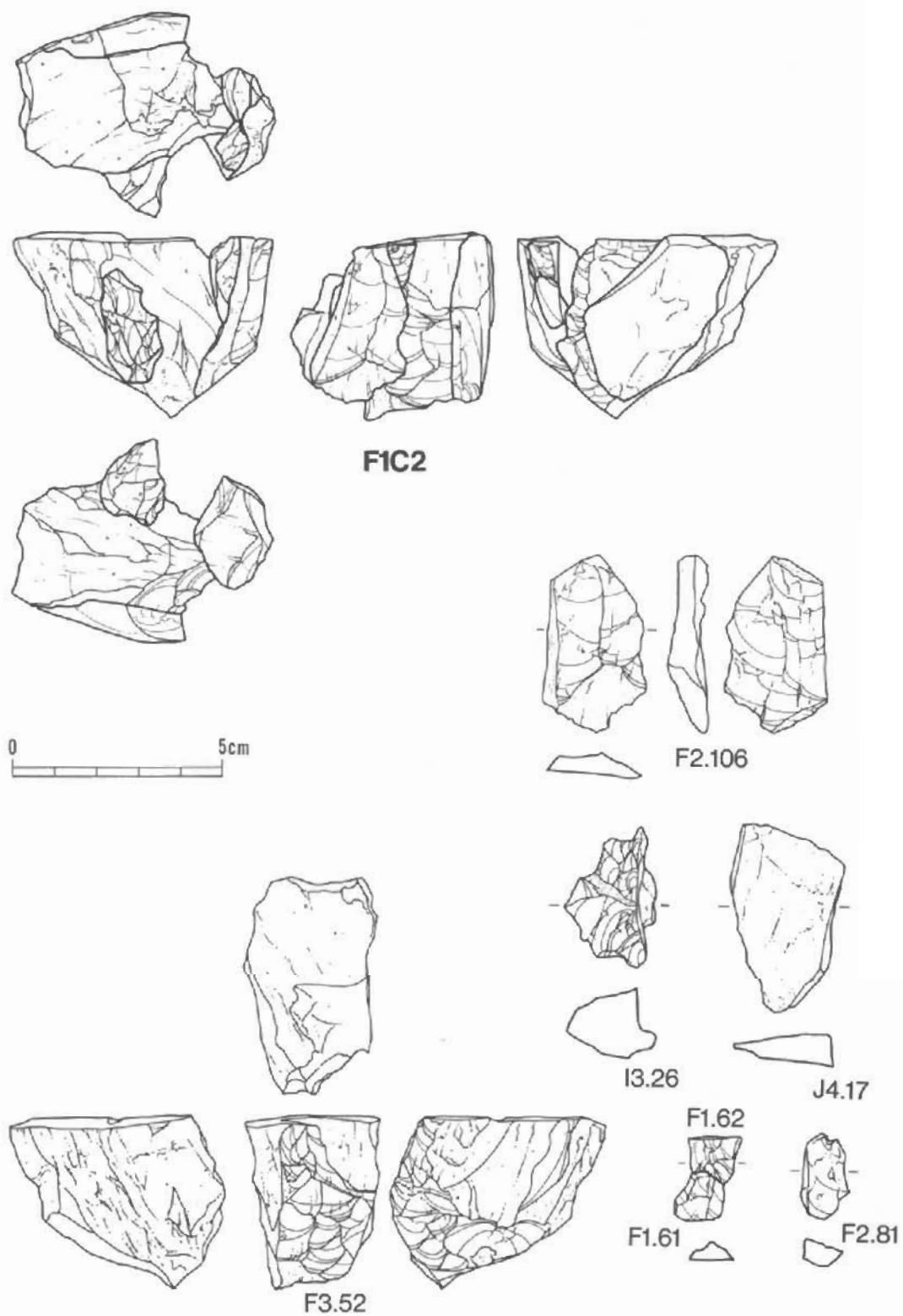
全体として、板状材を分割したものから、打面調整等を施さずに剥片を剥離するもので、打面転移が頻繁である。表皮・節理面を嫌って、分割面を作業面としている。

個体番号89

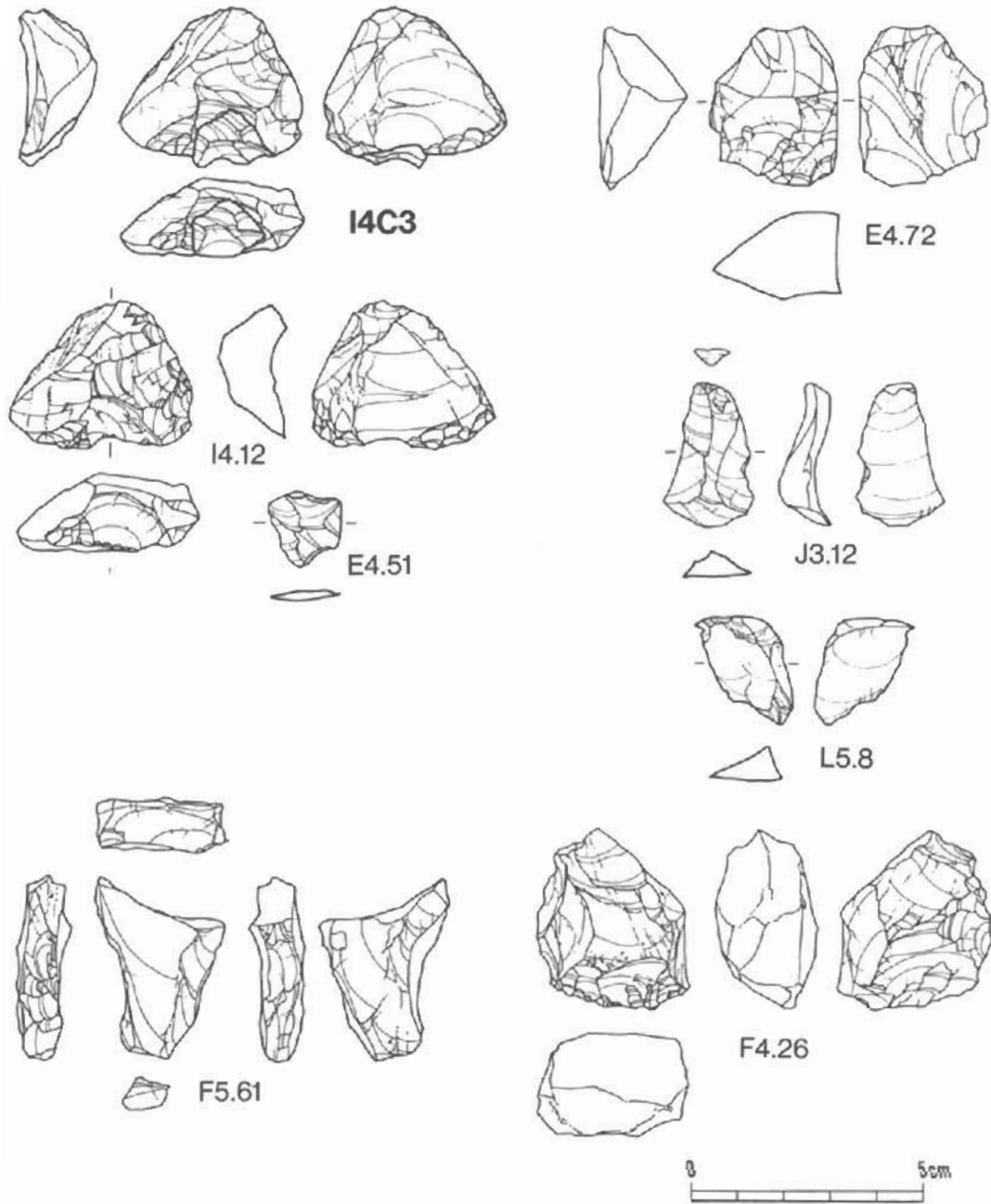
10cm程のチャート製亜円礫または亜角礫を分割した母岩。灰色チャートで、節理多く、良質ではない。接合資料3群を含む。接合資料12点、非接合資料2点で、内訳は使用痕有剥片1点、剥片9点、石核4点である。接合資料の内、2群を記述する。

F1C2

イ→①J4.17(F)→ロ→②F2.106(UF)→ハ→③(F1.61(F)+F1.62(F))→④F2.81(F)→⑤(F3.52



第223図 個体別資料No.89実測図

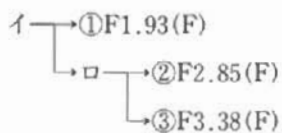


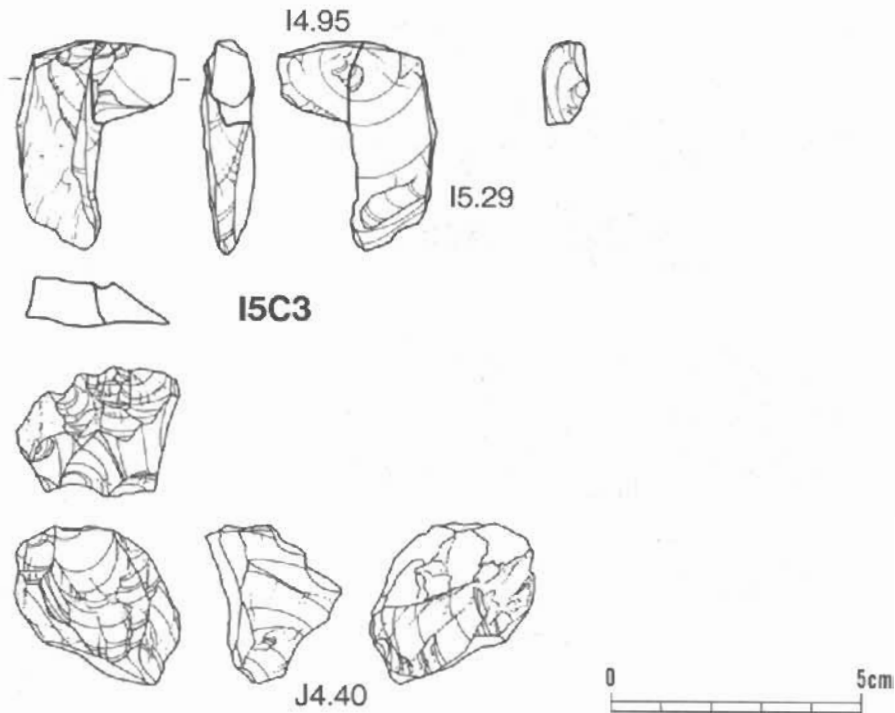
第224図 個別別資料No.92実測図

(CORE) + I3.26 (F))

イ、7 cm直径程の亜円礫分割材を素材として、最初期の工程が行なわれる。①石核の側面から、節理面剥離でJ4.17(F)が剥離される。ロ、自然面を打面として少なくとも2枚の縦長剥片が剥離される。② F2.106(UF)が続いて剥離される。ハ、連続して少なくとも2枚の剥片が剥離される。③(F1.61(F) + F1.62(F)) ④F2.81(F)が連続して剥離され、⑤(F3.52(CORE) + I3.26(F))が残される。

F3C2





第225図 個体別資料No.96実測図

イ、6～8 cm程の亜円礫の頭頂部から最初期に分割された帽子状材で、試し割り状の小剝離があるものと、残りの板状材の2つに分割する。①大型板状材からF1.93(F)が剝離される。ロ、帽子状材を分割する。②F2.85(F)③F3.38(F)を分割する。

本来、大型の亜角礫・亜円礫と思われるが、接合群は相互の位置関係はよく分からない。F1C2の接合群では、縦長剝片の生産が認められる。最初期の分割工程は不明だが、ほとんど全ての工程を残す。

**個体番号92**

暗灰色のチャート材。良質だが節理が多い。接合資料1群を含む。接合資料2点、非接合資料8点からなり、内訳は削器2点、加工痕有剝片1点、剝片6点、石核1点である。

I4C3

イ→①E4.51(F)→②I4.12(SC)

イ、削器の製品、①E4.51(F)が再調整剝片として剝離される。②I4.12(SC)が残る。

削器の再調整過程が認められる。非接合資料中には、小型石核・大型剝片等があり、剝片生産作業の展開もあったのだろうが、内容は不明。

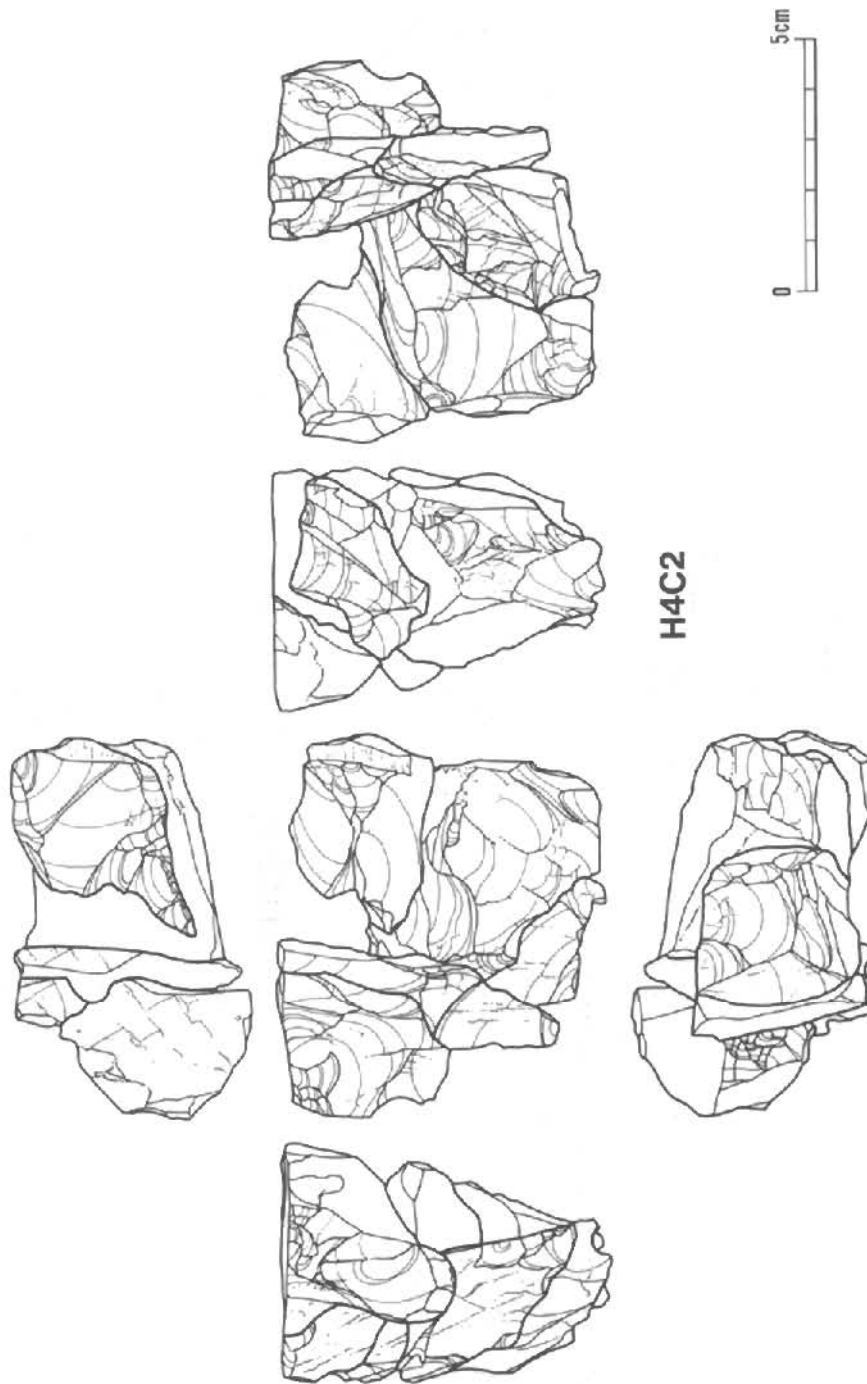
**個体番号96**

青灰白色チャート材。黒縞・白縞節理混じる。接合資料1群を含む。接合資料は、剝片の折断接合資料2点、非接合資料6点で、剝片5点と剝離が進行して残核状態になった石核1点が伴う。

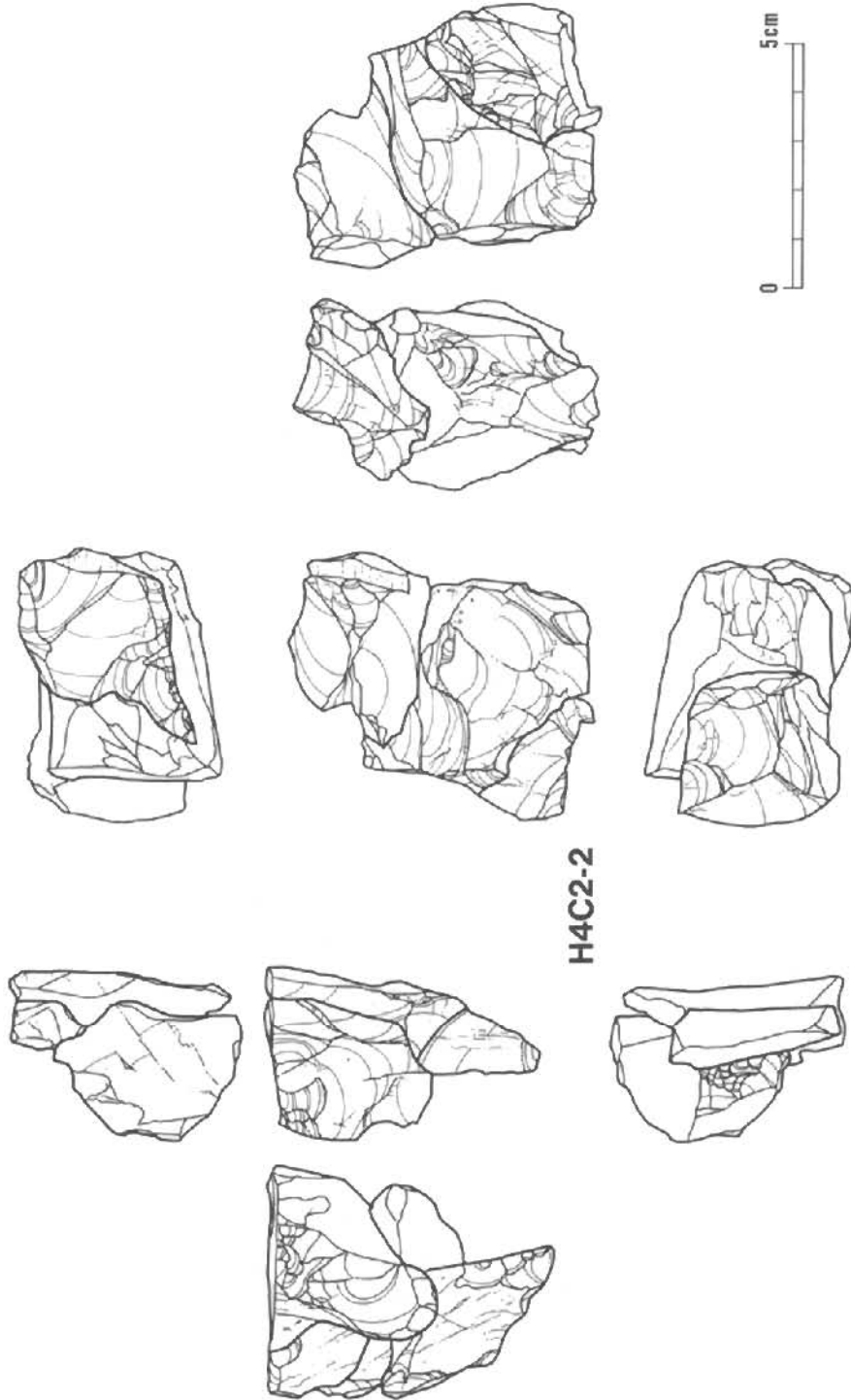
**個体番号97**

少なくとも10cm以上の厚さのある板状チャートで、暗灰色良質の母岩。接合資料2群を含む。接合資料9点、非接合資料6点で、内訳は使用痕有剝片1点、剝片11点、石核3点である。接合資料の内1群を記述する。

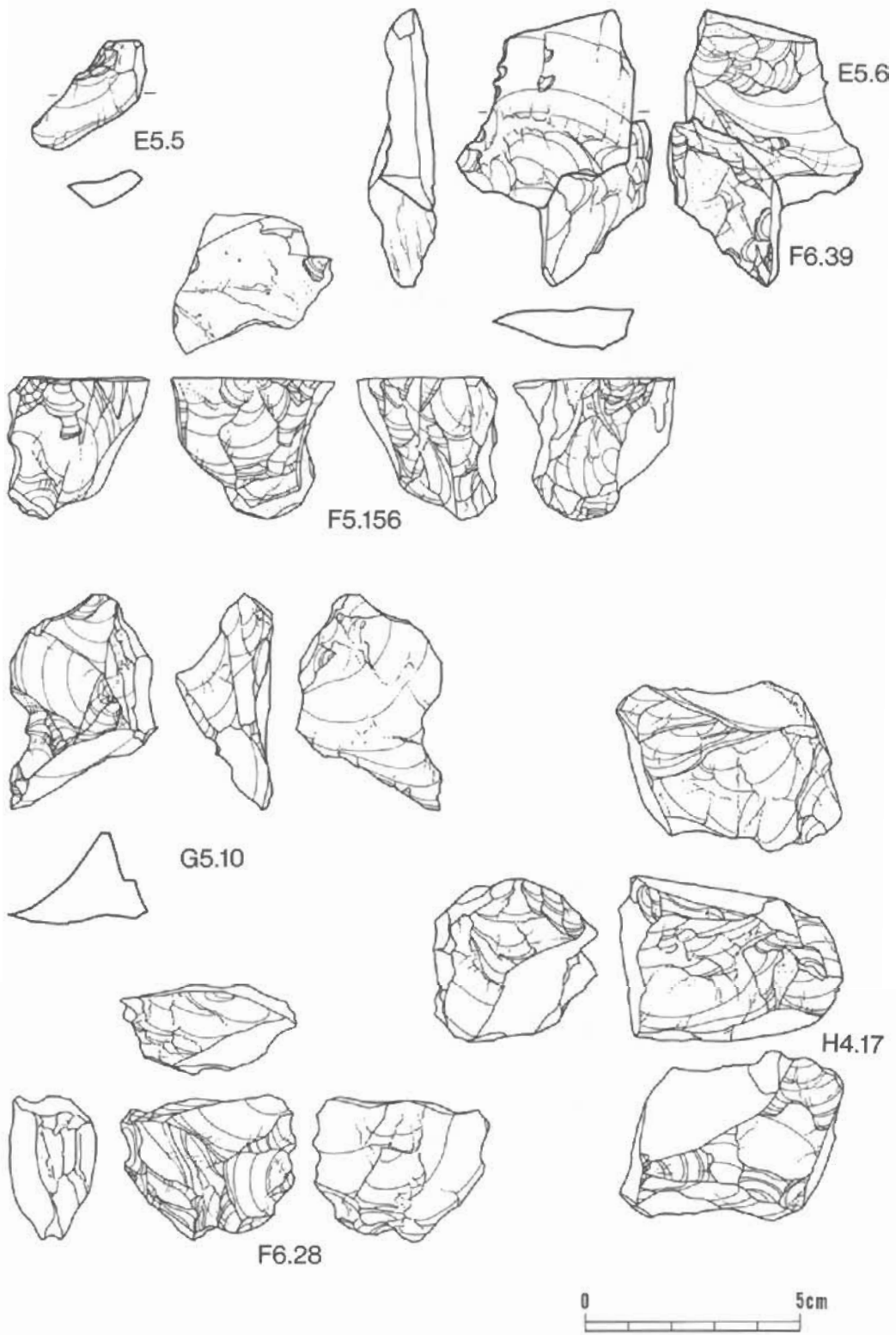




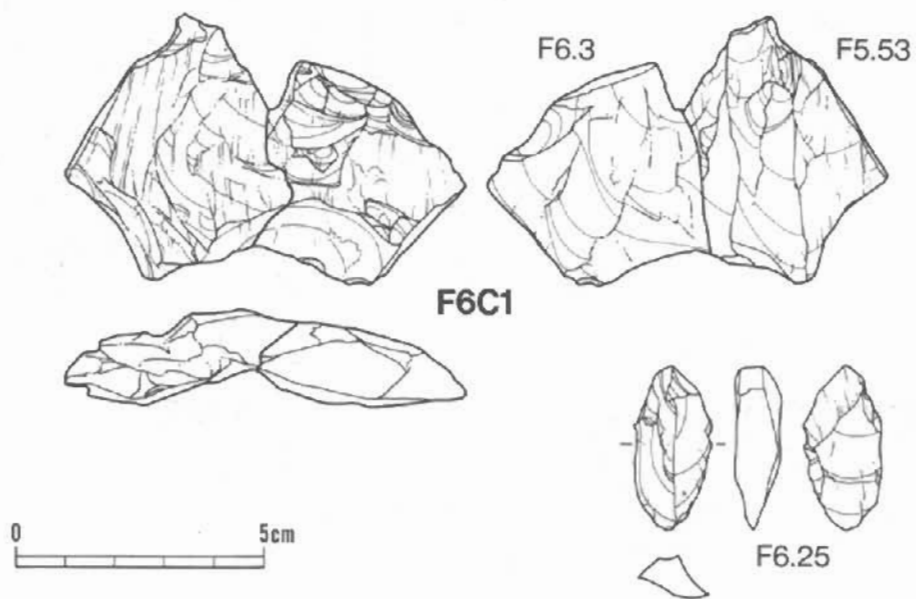
第226図 個別別資料No.97実測図1



第227図 個別別資料No.97実測図 2



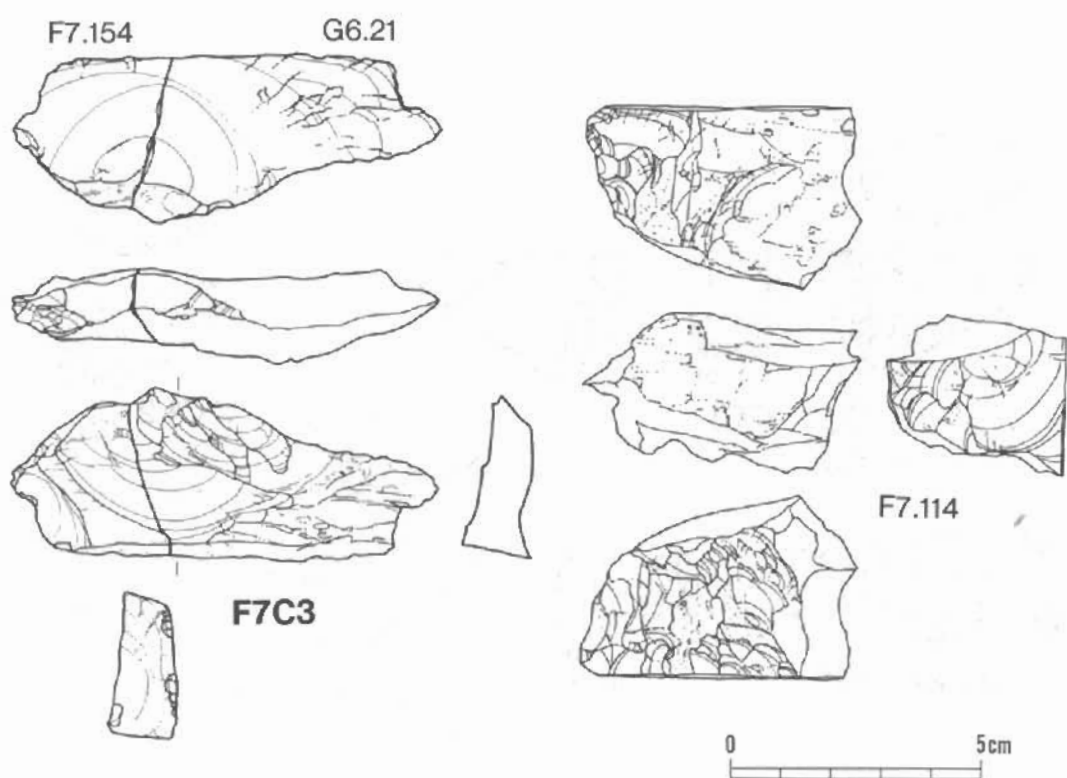
第228図 個体別資料No.97実測図3



第229図 個体別資料No.97実測図4

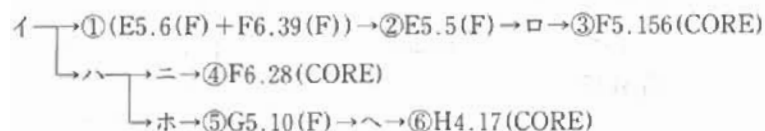


第230図 個体別資料No.98実測図



第231図 個体別資料No.99実測図

H4C2



イ、自然面一面を残して全周囲を除去した母岩を2分割する。①その一方から自然面を打面として(E5.6(F) + F6.39(F)) ②E5.5(F)を剥離する。ロ、打面を移動させて4~5枚の剥片を剥離、③F5.156(CORE)が残る。ハ、一方の母岩は、更に2分割される。ニ、一方は、少なくとも2枚の剥片を剥離した後、④F6.28(CORE)を残す。ホ、もう一方は、やはり数枚の剥片を剥離した後、⑤G5.10(F)を剥離、ヘ、更に若干の剥片を剥離した後、⑥H4.17(CORE)を残す。

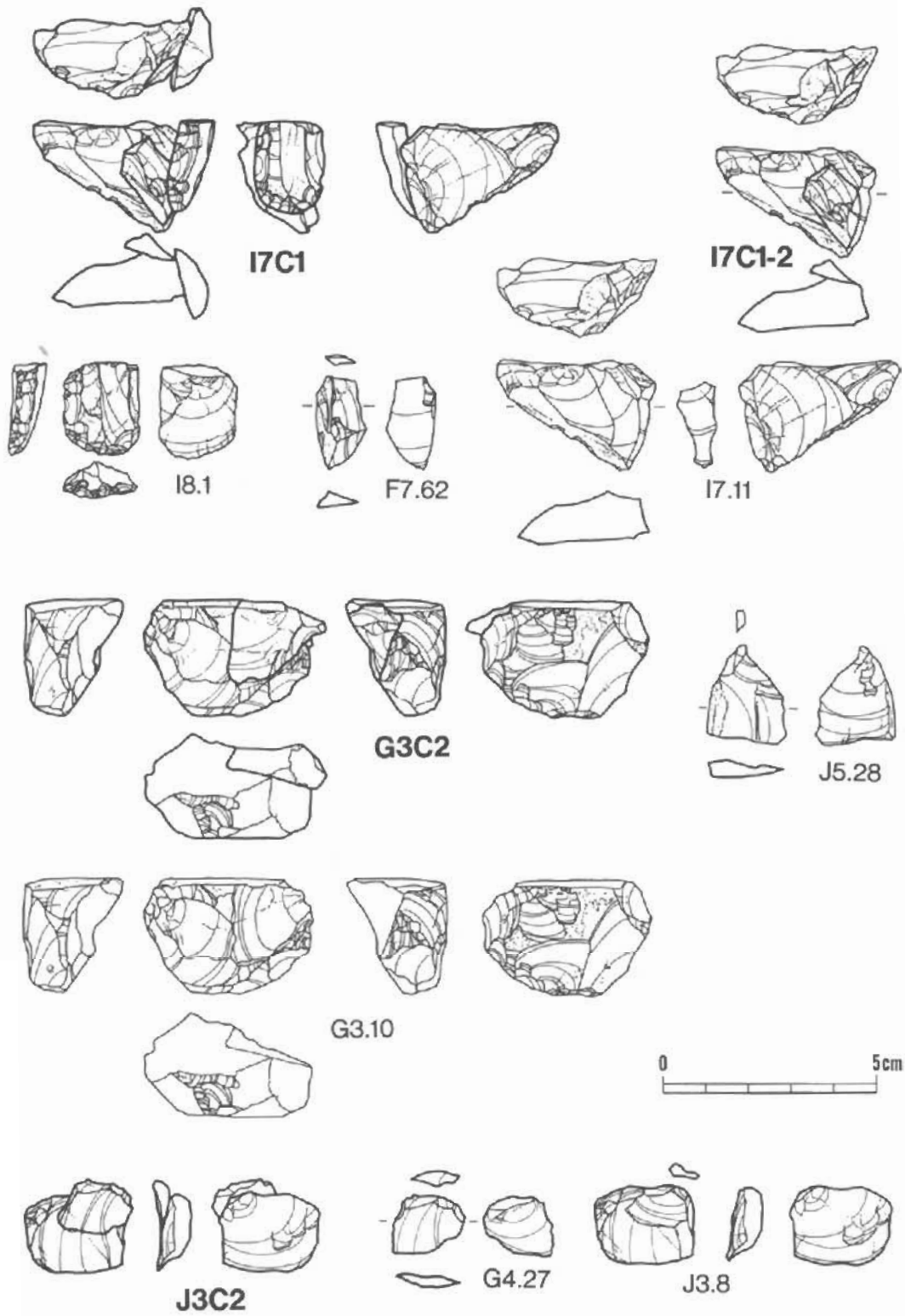
打面転移などはなく、石材の分割面に剥離作業面を設定し、打面転移を繰り返しながら幅広の剥片を生産した個体。

**個体番号98**

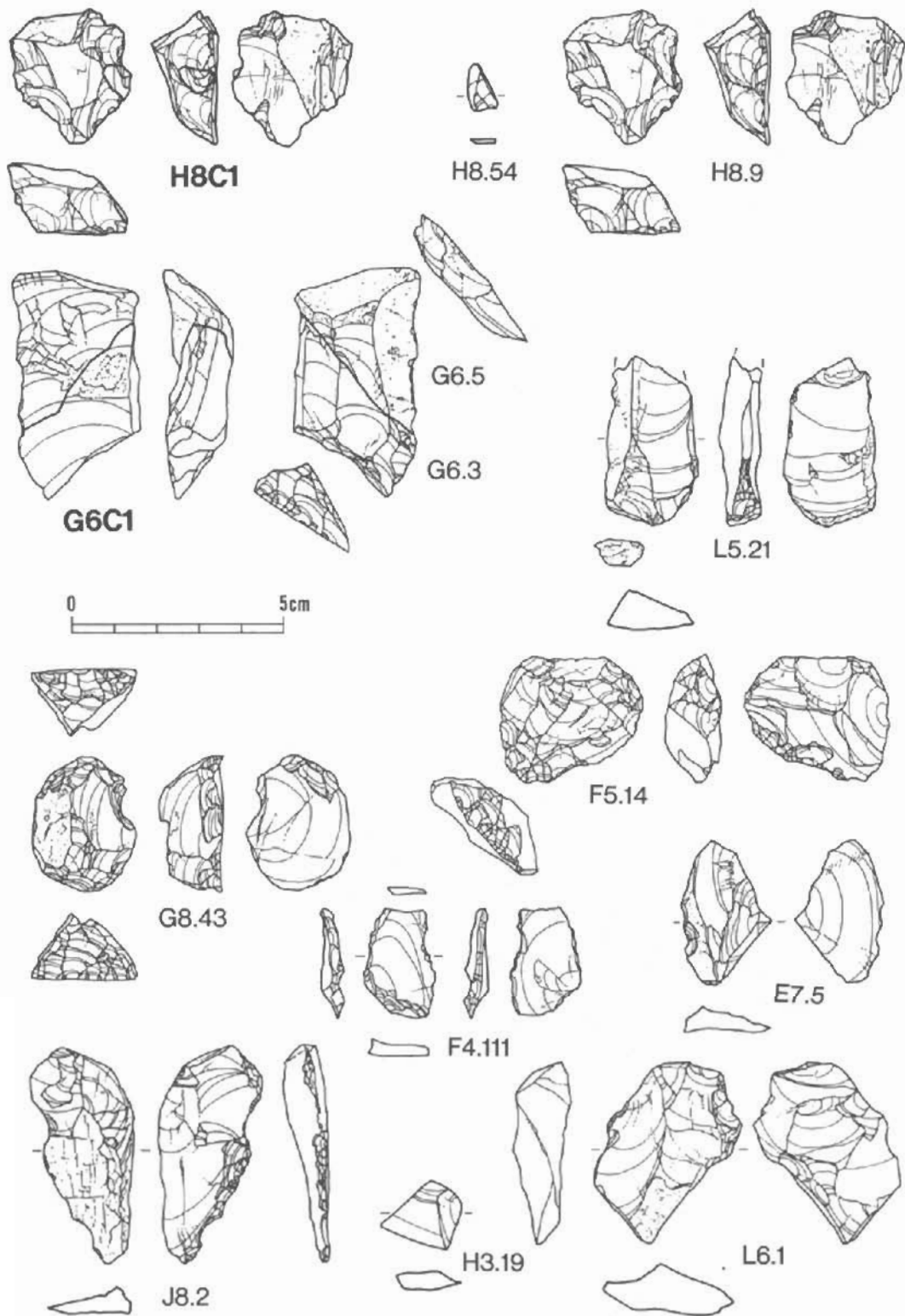
透明感ある良質の黒色チャート材。接合資料1群からなり、縦長の使用痕有剥片の折損接合2点である。他に非接合資料8点、加工痕有剥片1点、剥片7点からなる。

**個体番号99**

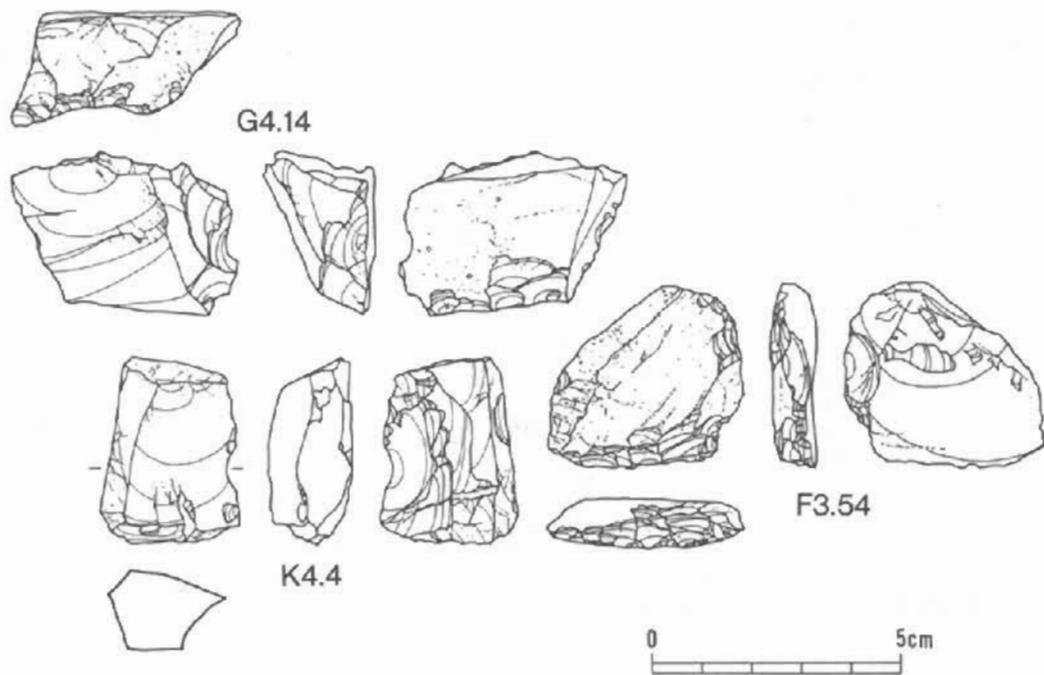
良質の透明感ある黒色チャート材で、厚さ4cm程の板状材を分割したものを素材とする。接合資料1群を含む。接合資料2点、非接合資料19点である。内訳は、使用痕有剥片1点、剥片17点、碎片2点、石核1点である。ある程度の剥片生産が行なわれたと思われるが、内容は不明である。



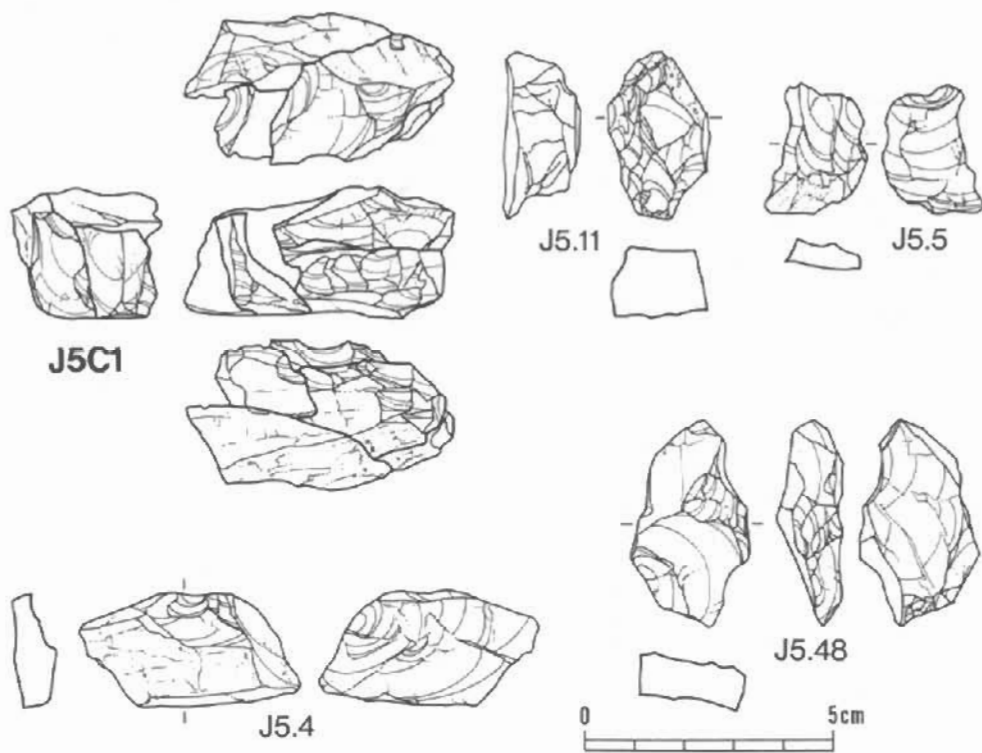
第232図 個体別資料No.100実測図1



第233図 個体別資料No.100実測図2



第234図 個体別資料No.100実測図3



第235図 個体別資料No.101実測図



個体番号100

おそらく厚さ5 cm以上のチャート製板状材を母岩とする。青緑色の良質な石材。接合資料5群を含む。接合資料11点、非接合資料24点、内訳はナイフ形石器1点、搔器3点、削器4点、加工痕有剥片2点、使用痕有剥片1点、剥片17点、碎片3点、石核4点である。接合資料の内、3群を記述する。

G3C2

イ→①J5.28(F)→ロ→②G3.10(CORE)

イ、板状材の分割したものから、分割面を作業面とし表皮の付着した部分を除去した後、剥片剥離が展開する。打面・作業面の転移が激しい。①J5.28(F)が、剥離される。ロ、打面を反対側に転移して1枚の剥片が剥離される。②G3.10(CORE)が残される。

H8C1

イ→①H8.54(C)→②H8.9(SC)

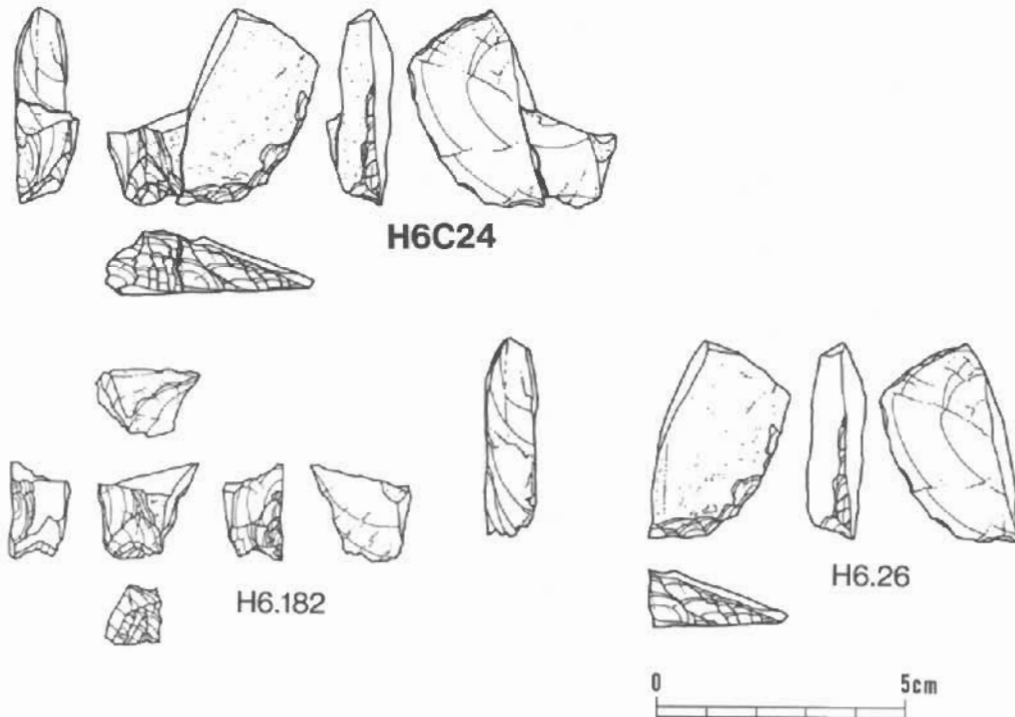
イ、削器の素材剥片は節理面ある厚手のもの。刃部を加工する。①H8.54(C)が調整碎片として剥離される。②H8.9(SC)が、製品として残る。

I7C1

イ→①I8.1(EN)→ロ→②F7.62(F)→ハ→③I7.11(CORE)

イ、剥離作業のかなり進行した石核で、本来は分割材であろう。先行して少なくとも3～4枚の剥片が生産されている。①I8.1(EN)が同一の作業面と同一分割面利用打面から剥離される。ロ、打面を作業面に転じて石核右側面から一枚、下底分割面に打面を転じて左側縁から1枚の剥片を剥離する。②打面を元に戻して、左側面からF7.62(F)を剥離する。ハ、更に剥片一枚を剥離する。③I7.11(CORE)が残る。

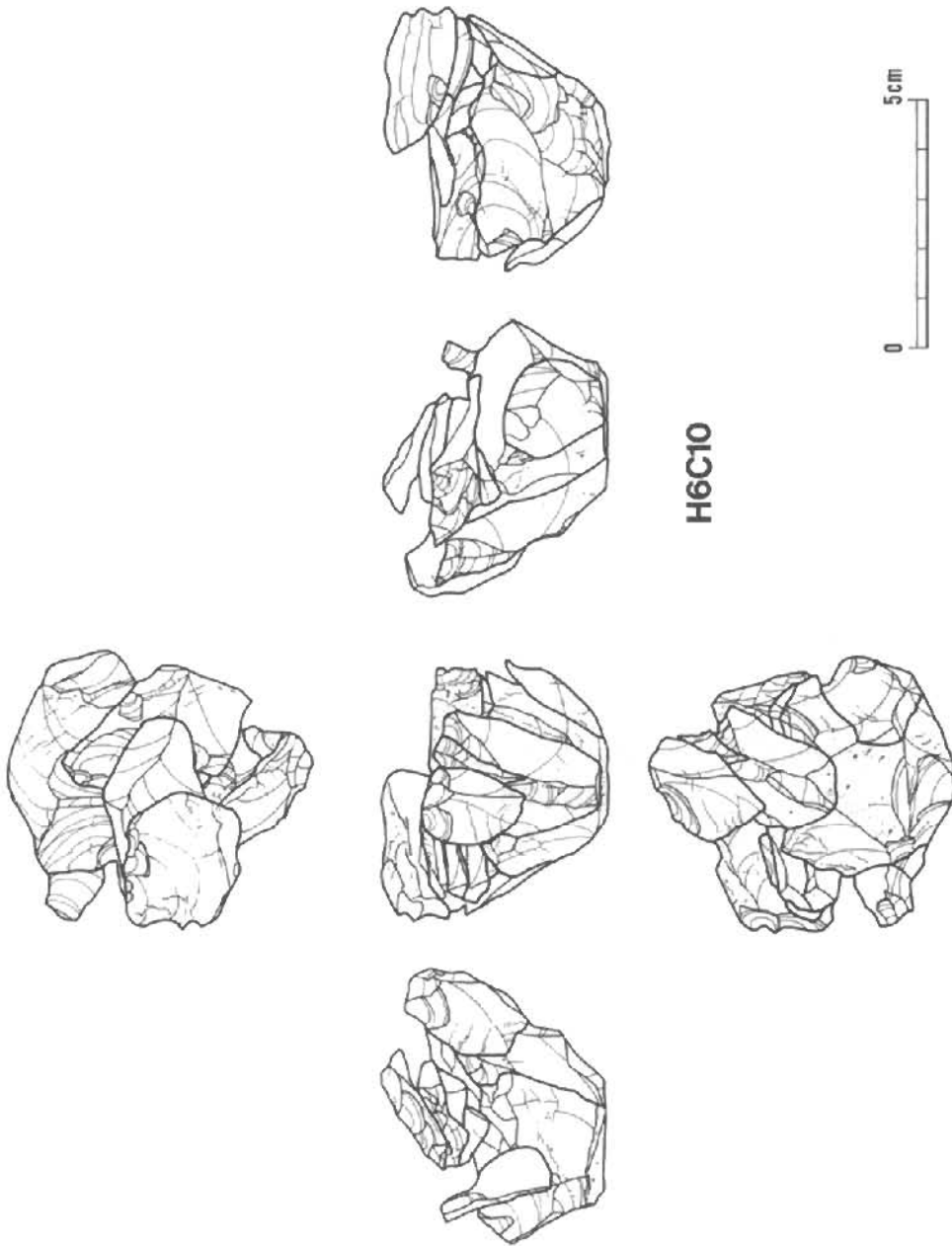
接合資料が母岩中にどの様な位置関係で占めるのか、良く分からないが、石核・剥片・石器など多数



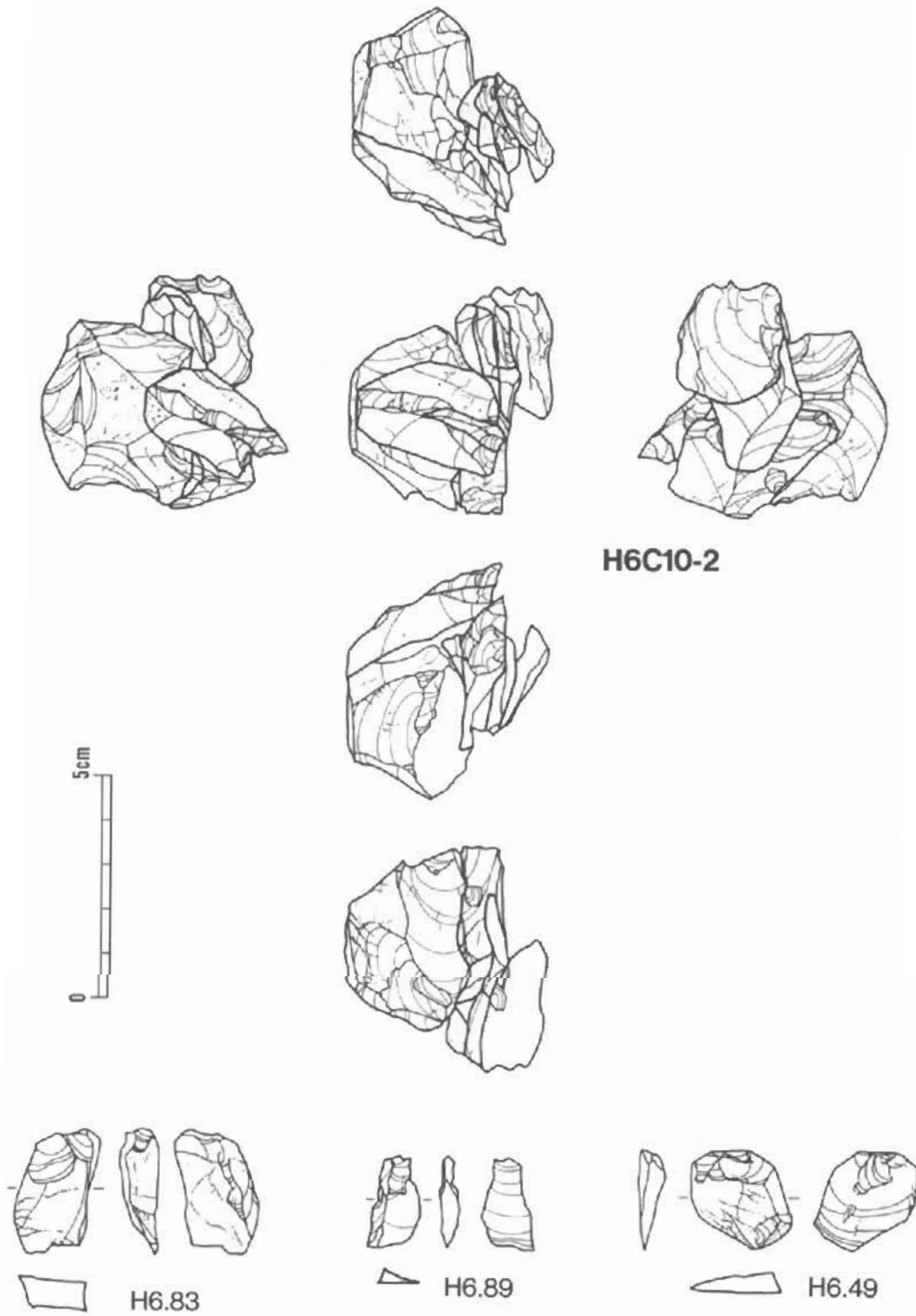
第236図 個体別資料No.103実測図

第2節 下位文化層の遺物

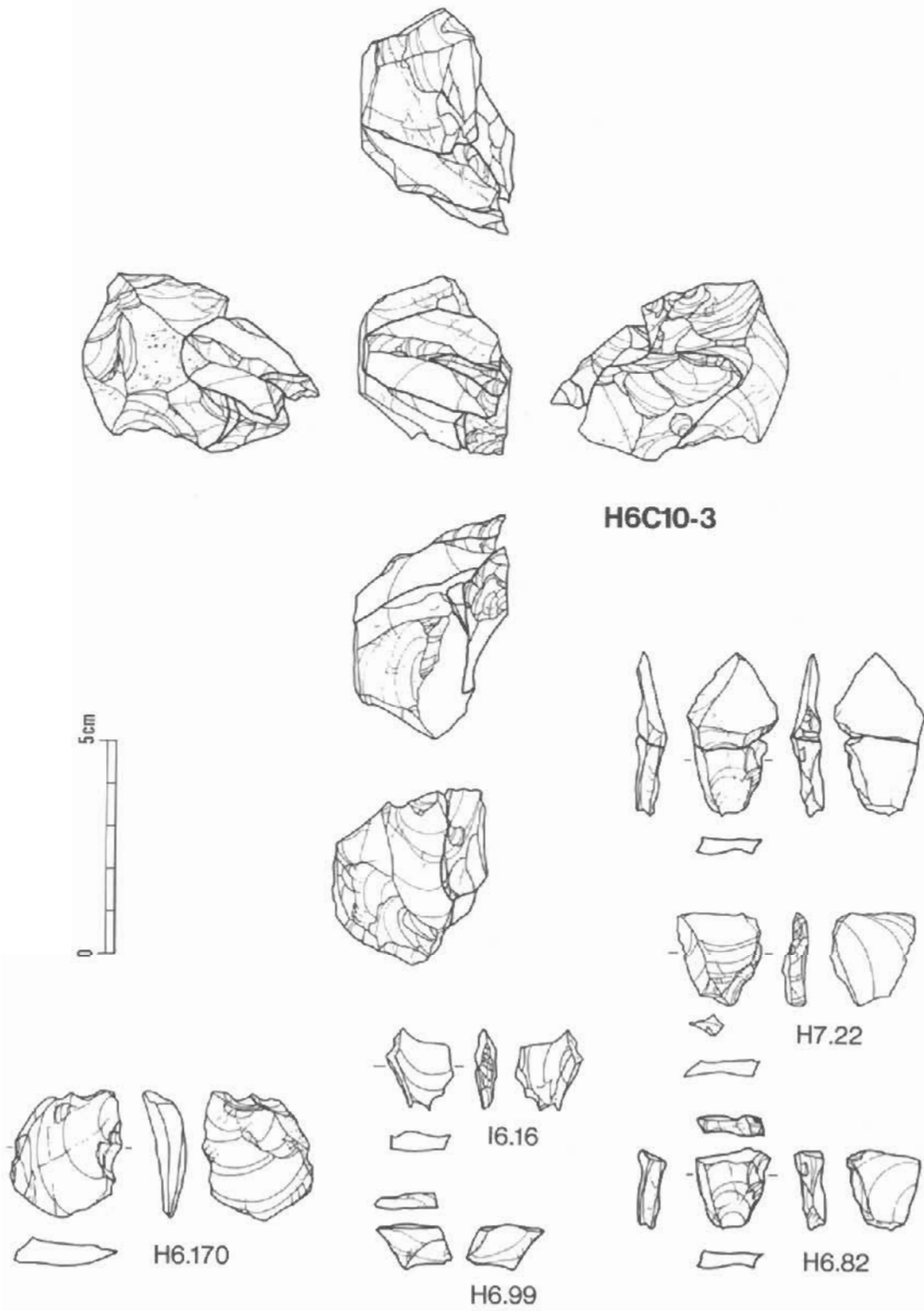
を含み、豊富な剥片剥離作業が行なわれたことは确实である。ただ、点数が多いことから、母岩は早期に分割され、それぞれが独自に作業を進めた個体であろうと思われる。自然面を嫌い、分割面に剥離作業面を配置する。打面・打面縁とも調整が施されることは少ない。打面転移が頻繁で、石核はサイコロ状を呈するものが多い。剥離される剥片は、次第に小型・寸詰まりになる。



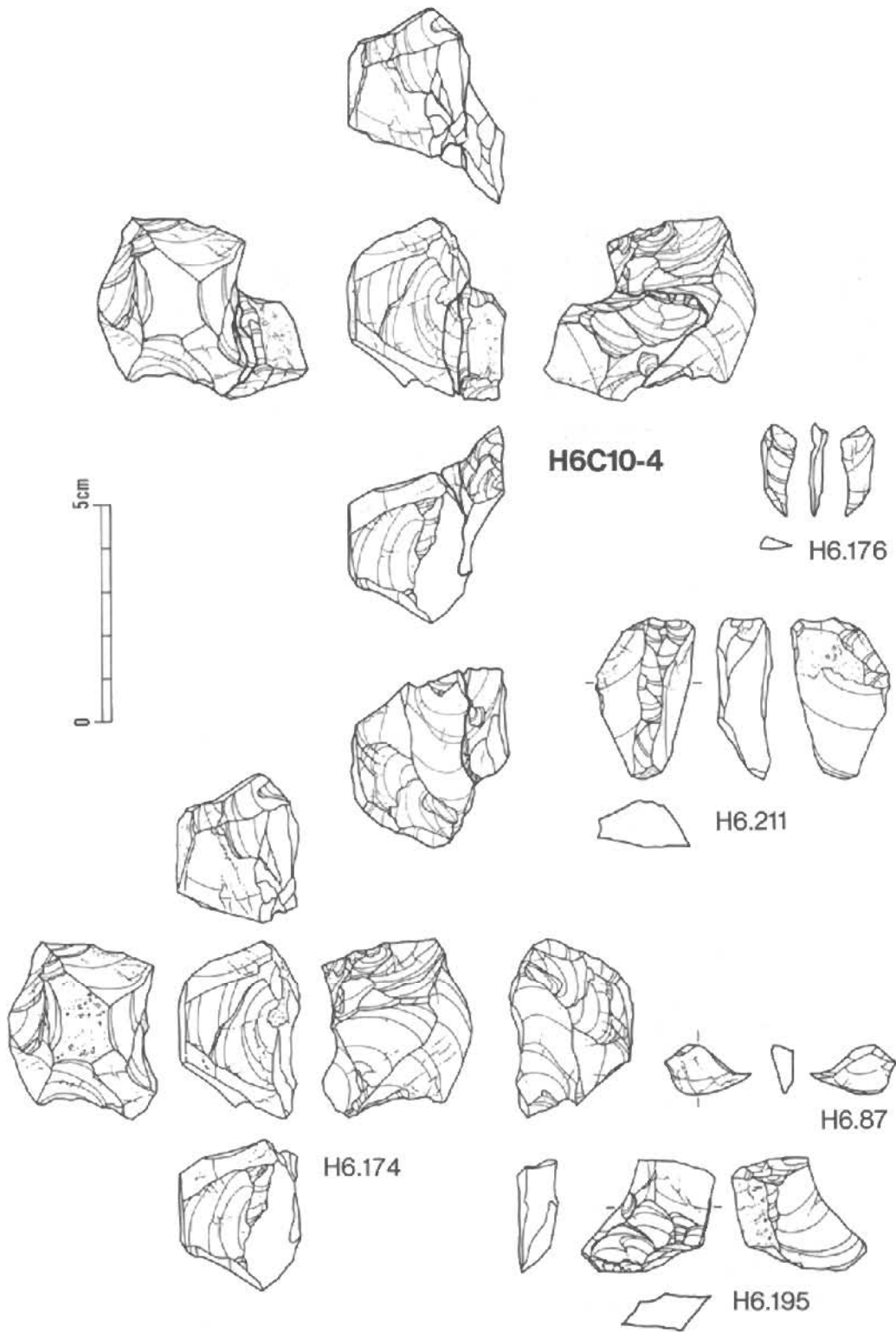
第237図 個体別資料No.106実測図1



第238図 個体別資料No.106実測図2



第239図 個別別資料No.106実測図3



第240図 個体別資料No.106実測図4

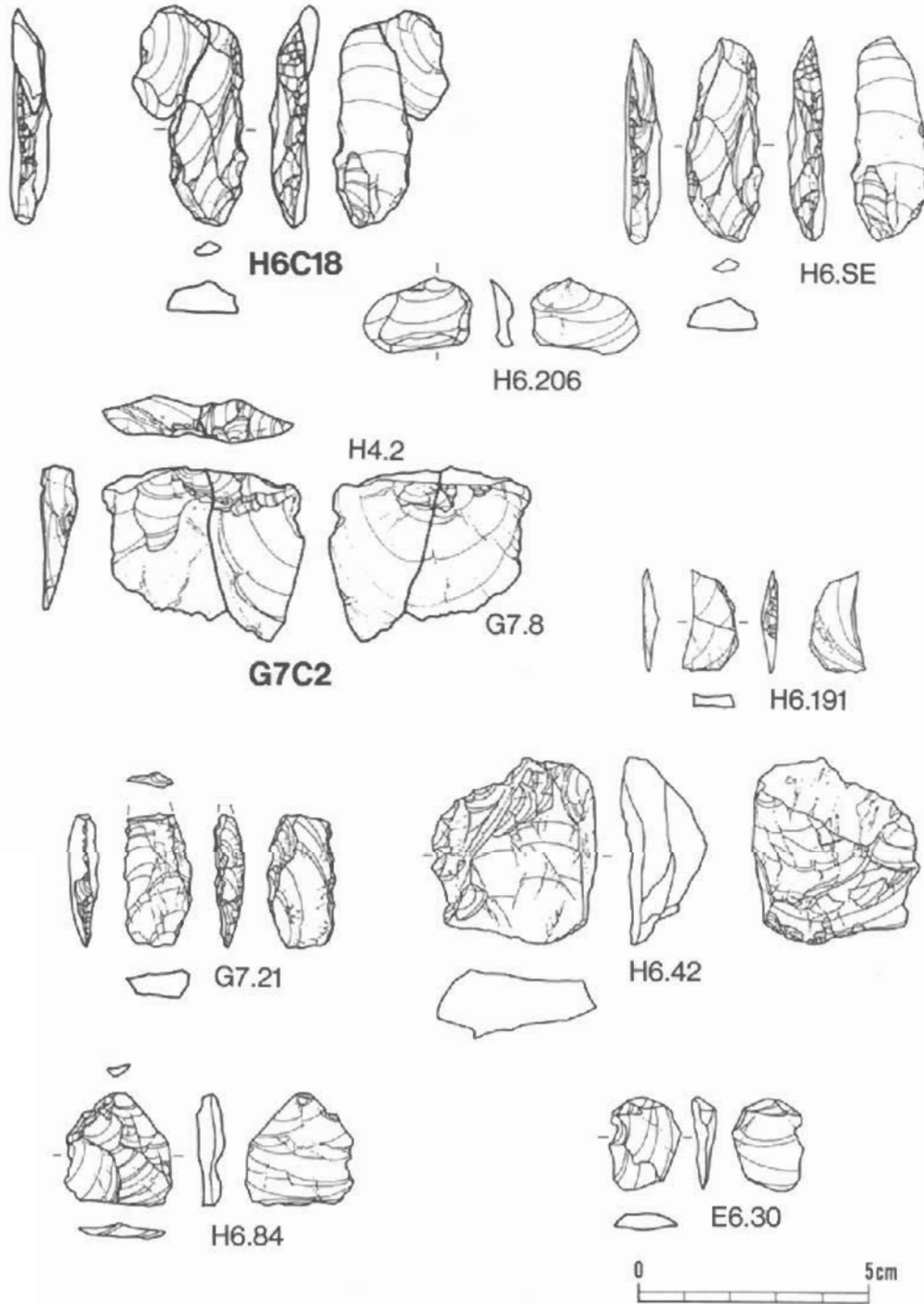
個体番号101

厚さ3cmほどの明灰色チャート製板状材。赤い斑があり、節理が強い。接合資料1群を含む。接合資料4点、剥片3点、石核1点で構成される。

J5C1

イ→①J5.4(F)→ロ→②J5.5(F)→ハ→③J5.48(F)→④J5.11(CORE)

イ、分割された板状材で、左側面に風化面が付着する。少なくとも1枚の剥片剥離が先行する。①左側縁を除去するようにJ5.4(F)を剥離する。ロ、石核正面から少なくとも2枚の剥片を剥離する。②続いて



第241図 個体別資料No.106実測図5

J5.5(F)を剥離する。ハ、少なくとも2枚の剥片を剥離する。③打面を作業面に転じてJ5.48(F)を剥離し、④J5.11(CORE)が残る。

板状材の分割を素材として、やや縦長傾向の剥片を剥離するものである。中期～終末期の工程であろうか。

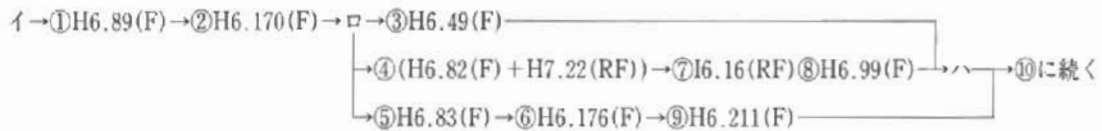
個体番号103

明灰色チャート材。接合資料1群2点と非接合の剥片1点からなる。接合資料は、本来1点の削器を2分割して、H6.26(SC)とH6.182(EN)の2点に再生したものである。

個体番号106

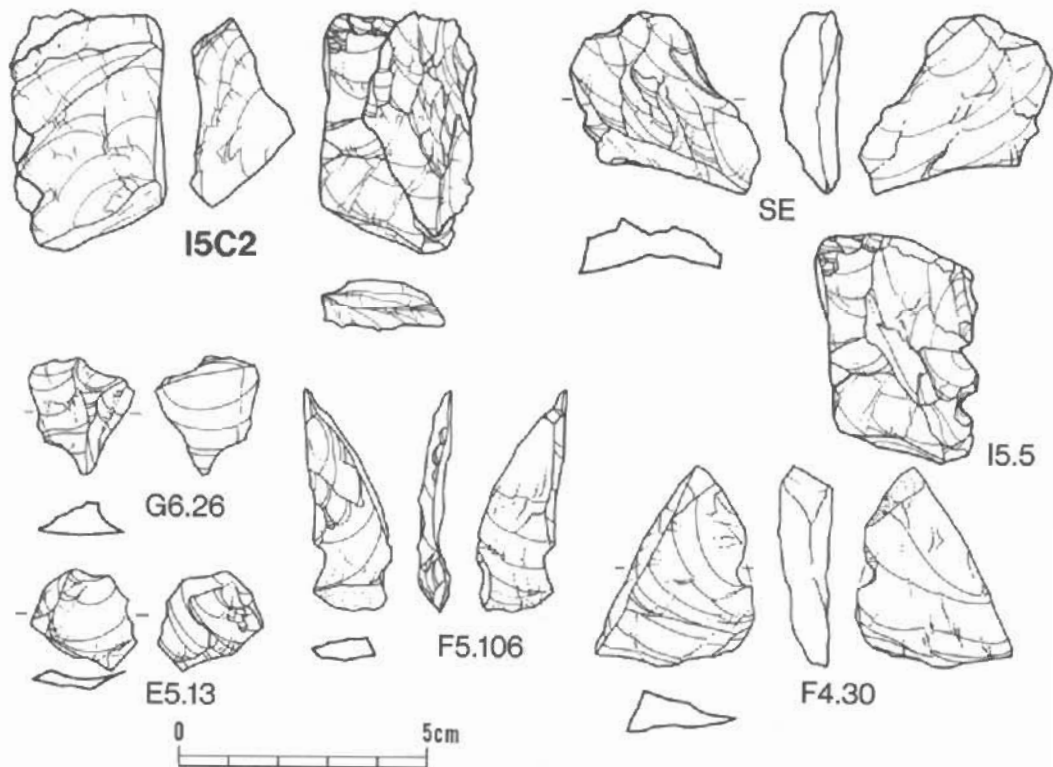
5～6cmのチャート製板状分割礫。極めて良質の透明感有る灰色チャート。接合資料4群を含む。接合資料19点、非接合資料7点、内訳ナイフ形石器3点、削器1点、加工痕有剥片3点、剥片16点、破片2点、石核1点である。接合資料の内、1群を記述する。

H6C10



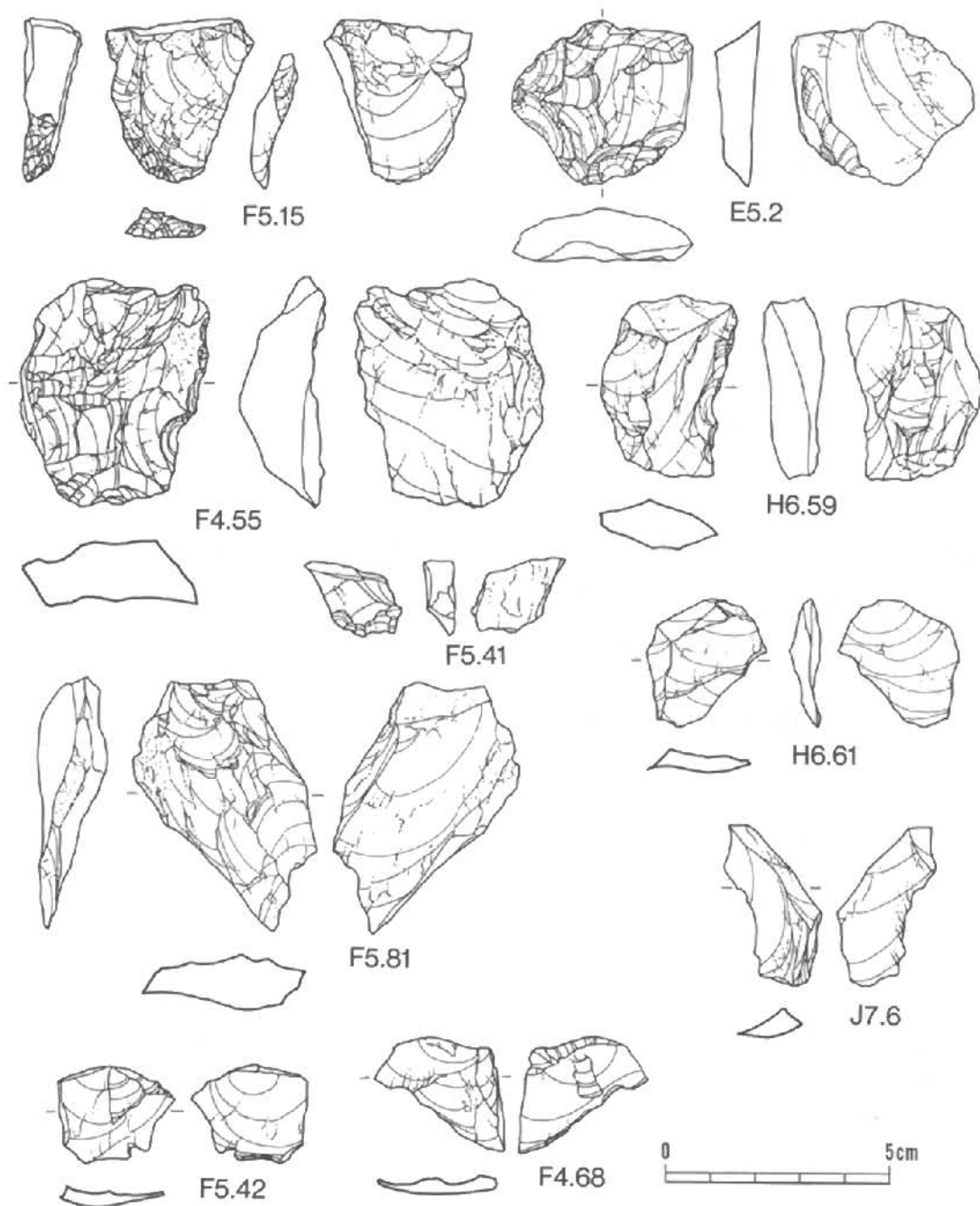
⑩H6.195(SC)→ニ→⑪H6.87(F)→⑫H6.174(CORE)

イ、厚さ5cmほどの分割礫を素材とする。本来は、板状の垂円礫であったと思われるが、初期の工程は認められない。分割面の一面を作業面として、少なくとも2枚の剥片が剥離される。①H6.89(F)が、分割面を作業面として続いて剥離される。②H6.170(F)が、打面を分割面の一つに移して剥離される。



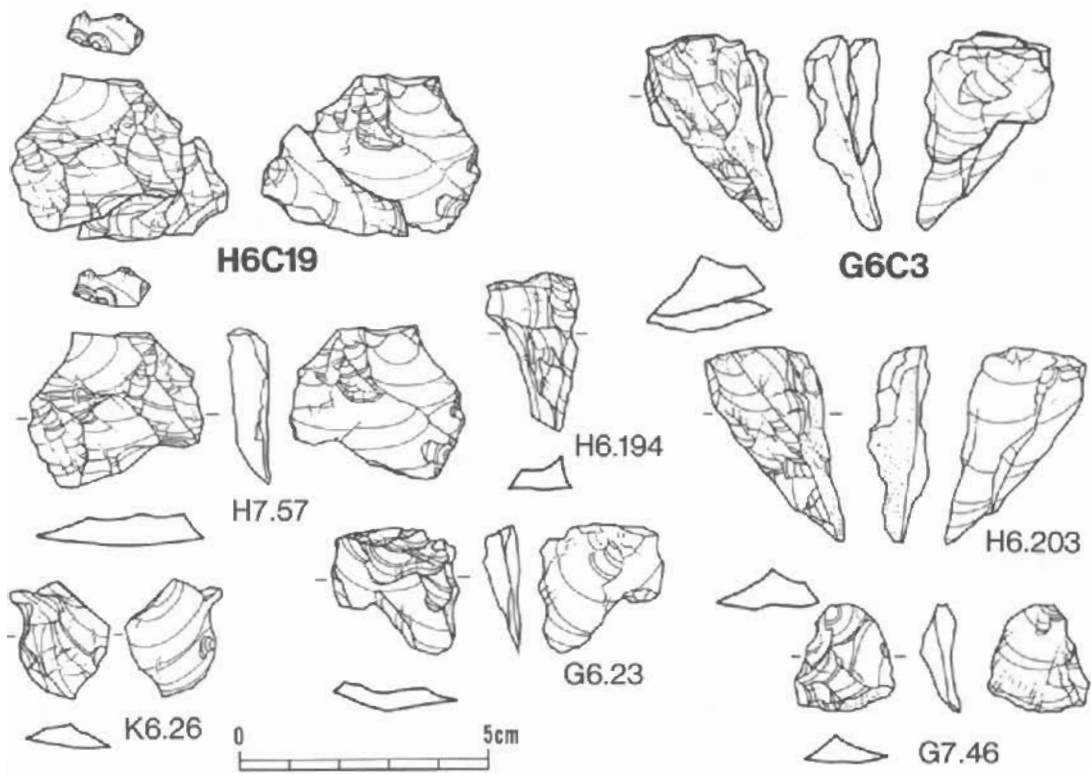
第242図 個体別資料No.110実測図1

ロ、打面を反対側の分割面に移動させ、少なくとも1枚の厚手剥片を剥離する。この後、剥片生産作業は3箇所に分離して行なわれる。③H6.49(F)が以前の作業面を打面として直行方向に剥離され、④(H6.82(F)+H7.22(RF))が、本来の作業面上で、反対側に打面を転移してから剥離される。⑤H6.83(F)は、④とほぼ前後して石核の一端から剥離される。⑥続いてH6.176(F)が石核の角を殺ぐように剥離され、⑨H6.211(F)も続く。⑦一方、④に続いてI6.16(RF)、⑧H6.99(F)が剥離される。ハ、③の剥離痕を打面として主作業面から大型剥片が剥離される。⑩続いて、打点を少し移動させてH6.195(SC)が剥離される。ニ、⑩の剥離痕を打面にして石核側面から1枚の剥片剥離が行なわれる。⑪、⑩に続いてH6.87

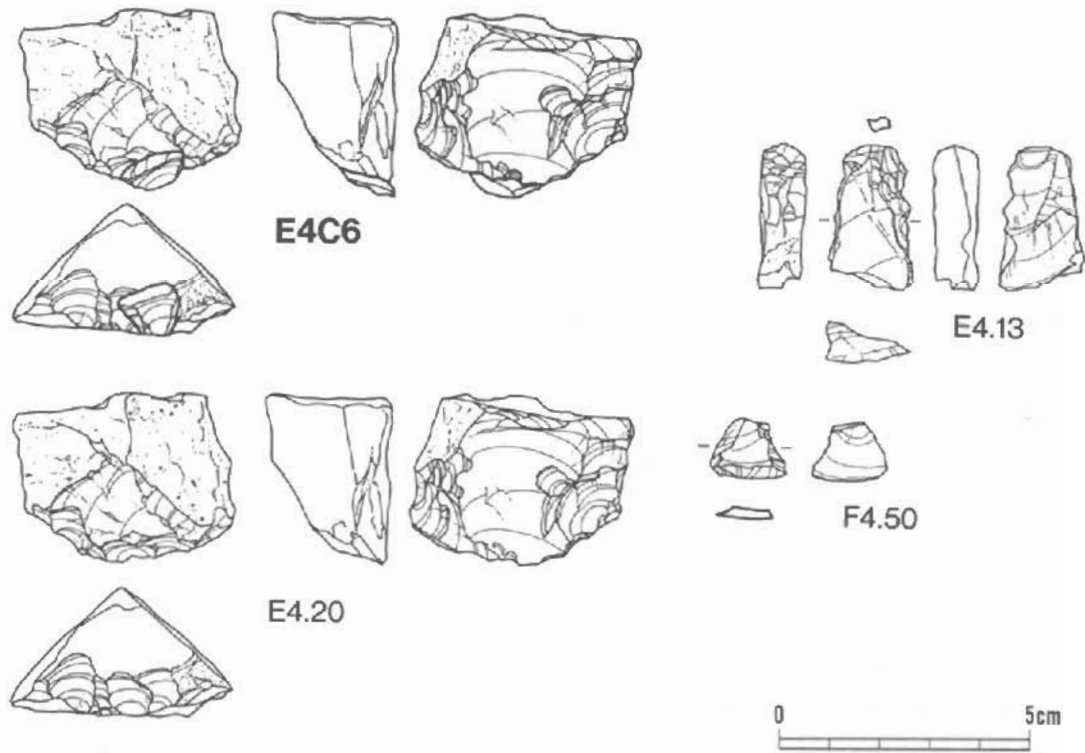


第243図 個別別資料No.110実測図2





第244図 個別別資料No.111実測図



第245図 個別別資料No.117実測図

(F)が剥離され、②H6.174(CORE)が残る。

良質の5～6cm大の板状亜角礫の分割材を素材とする個体。ナイフ形石器・削器・台形椀石器類の加工痕有剥片等を多数含む。風化面1面を除去しきった面に主作業面を配置するが、分割面にも剥片剥離が認められる。打面調整・打面縁調整はほとんどない。打面転移が激しい。

#### 個体番号110

暗灰色のチャート製石材。均質ではなく、むらのある細かい節理が縦横に認められる。接合資料3群が含まれる。接合資料6点、非接合資料35点、内訳は、搔器2点、削器2点、加工痕有剥片1点、使用痕有剥片2点、剥片29点、碎片5点である。

個体中には、大型剥片が多数含まれ、接合資料も存在することから、剥片生産が行なわれたようであるが、内容は分からない。特に接合資料中に石核が含まれないことから、中期段階の剥片生産作業に位置づけることができるかも知れない。なお、本個体は、所属資料のかなりの部分が上層出土のB資料で、所属文化層判定に不安が残る。

#### 個体番号111

灰色のチャート製石材。細かい節理多いが、良質である。接合資料4群を含む。接合資料8点、非接合資料12点、内訳は使用痕有剥片1点、剥片19点である。

個体中には、剥片が多く、接合資料もあることから、剥片生産が行なわれたようである。内容は明かではないが、中期工程か。

#### 個体番号117

厚さ3cm程の板状材を分割した灰色チャート材。接合資料1群2点、搔器と碎片と非接合資料1点、加工痕有剥片1点を含む。

#### E4C6

イ→①F4.50(C)→ロ→②E4.20(EN)

イ、三面が自然面・節理面でおおわれた厚さ約3cmの板状材。本来は石核だったかも知れない。作業面の一端を搔器作業部として整形する。①F4.50(C)を調整剥片として剥離、ロ、更に調整を続けて、②E4.20(EN)ができる。

搔器の調整工程が認められる。

#### 個体番号118

暗灰色の良質なチャート材。本来は厚さ4cm前後の板状材の分割材。接合資料は、節理によって2分してG1.25(F) G1.16(UF)の2点になる。ほかに非接合資料剥片1点がある。

#### 個体番号119

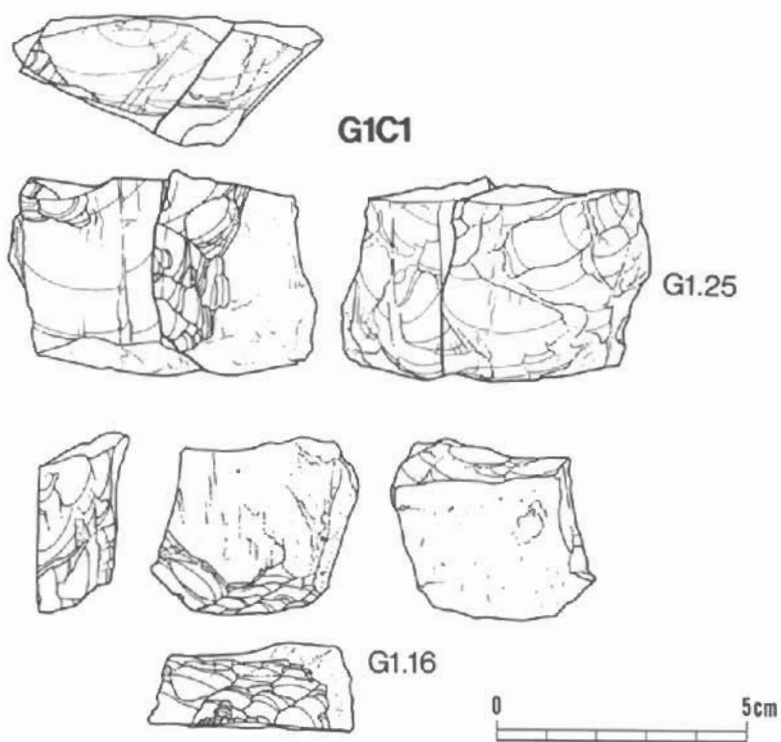
良質の赤色チャート材。接合資料1群を含む。接合資料4点、非接合資料2点で、内訳は使用痕有剥片1点、剥片3点、石核2点である。

#### F2C5

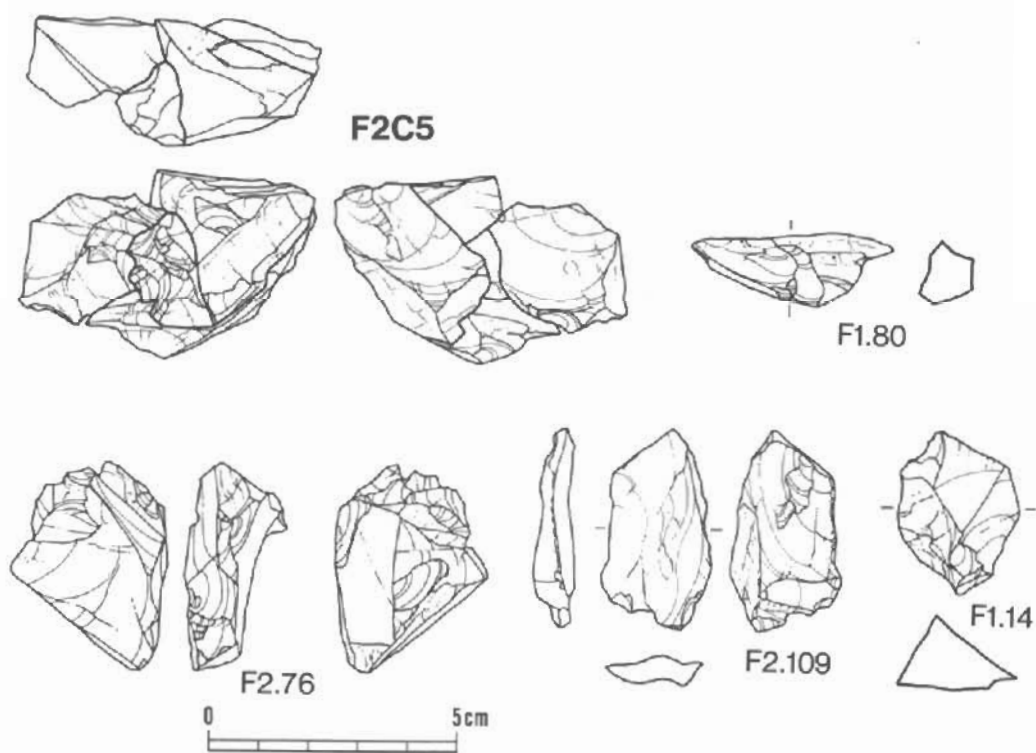
イ→①(F1.14(F)+F1.80(F)+F2.76(CORE))←ロ  
→②F2.109(UF)

イ、形状の不明な分割材を、2分割して、①一方は(F1.14(F)+F1.80(F)+F2.76(CORE))となり、ロ、この内のF2.76(CORE)から1枚の剥片が剥離される。②一方の分割からF2.109(UF)が剥離される。

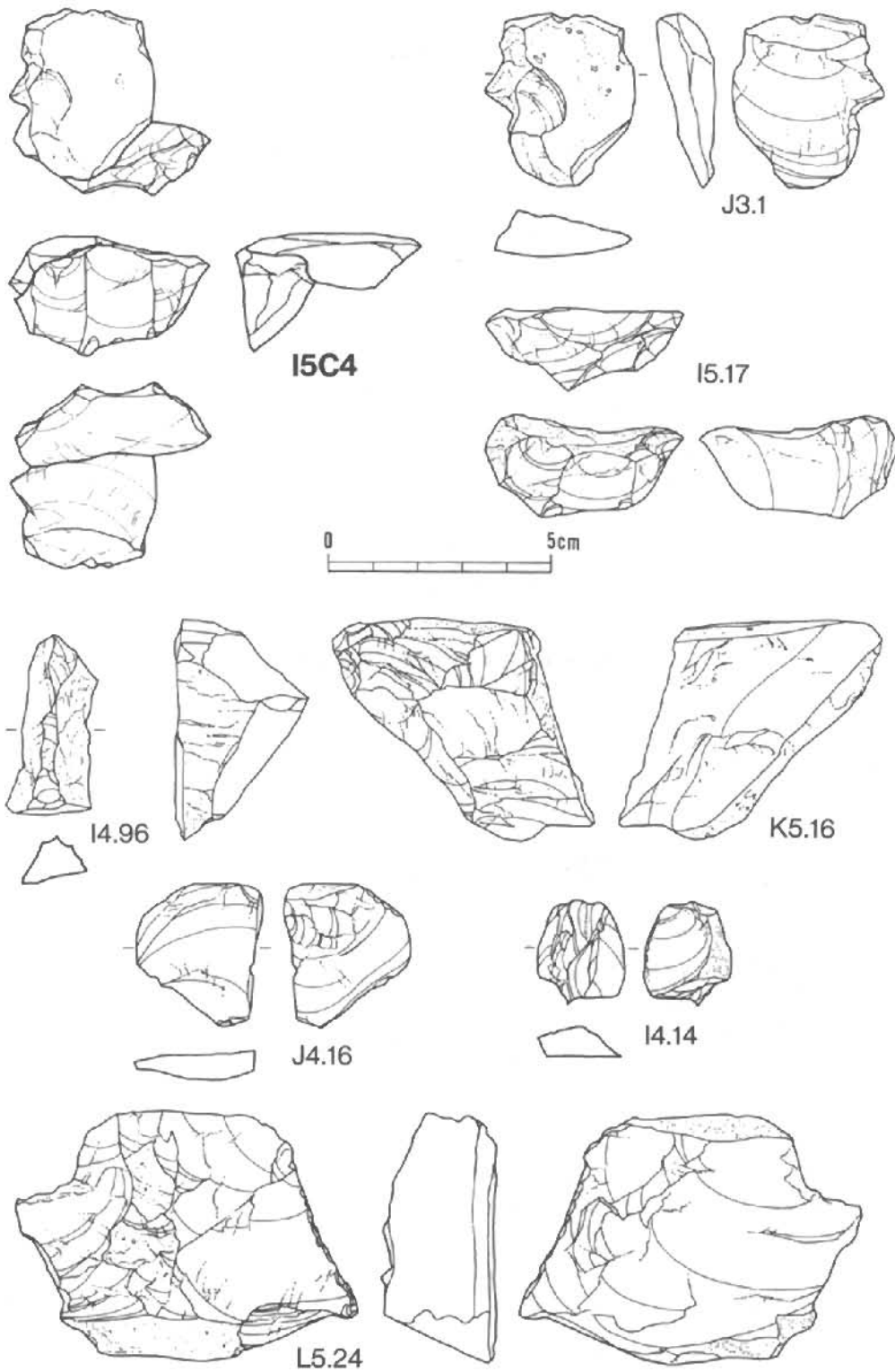
内容は貧弱であるが、剥片剥離工程中～後期の工程であろうか。石核が無いので、最終末期とはなら



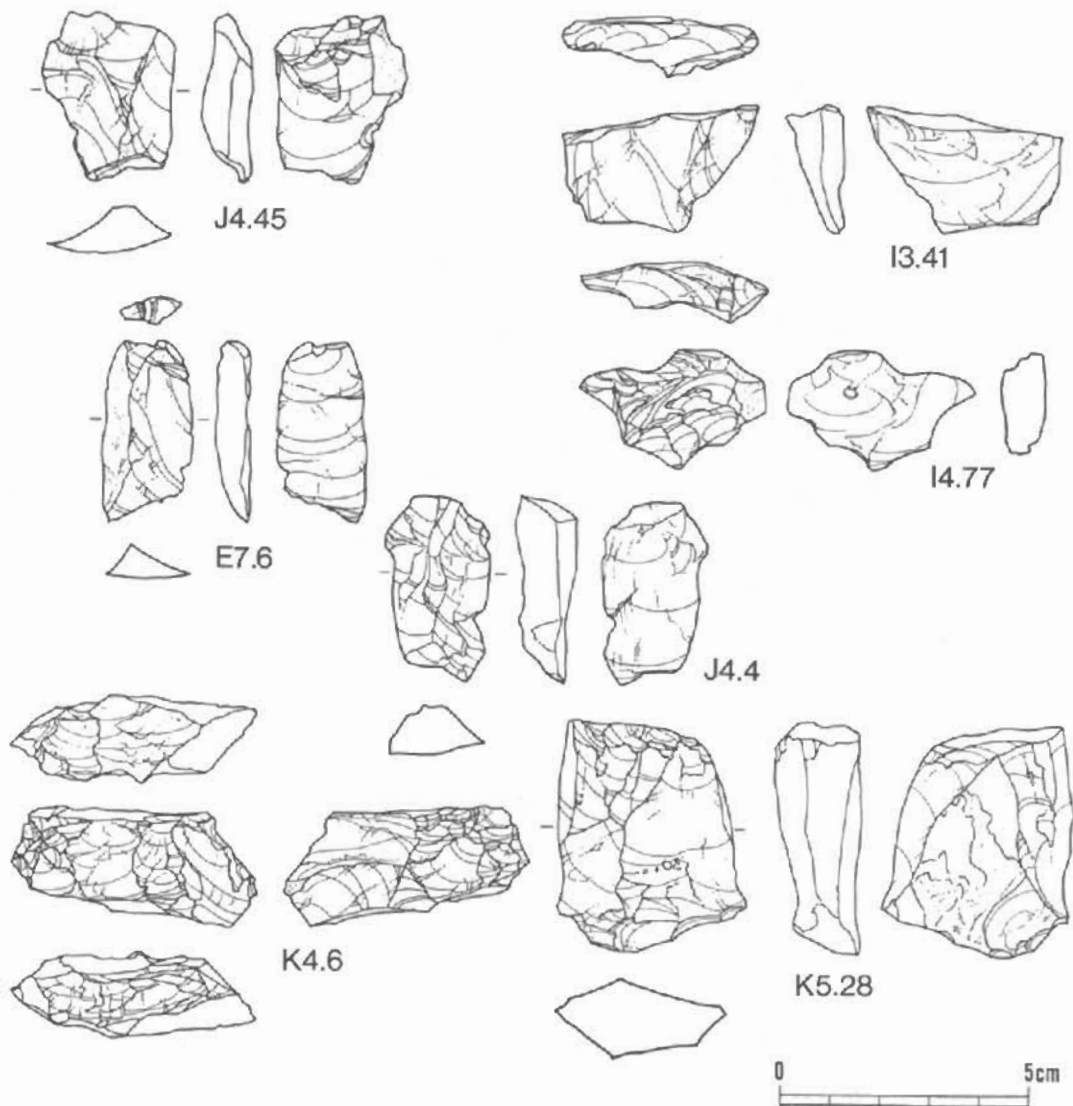
第246図 個別別資料No.118実測図



第247図 個別別資料No.119実測図



第248図 個別別資料No.127実測図1



第249図 個体別資料No.127実測図 2

ない。

個体番号127

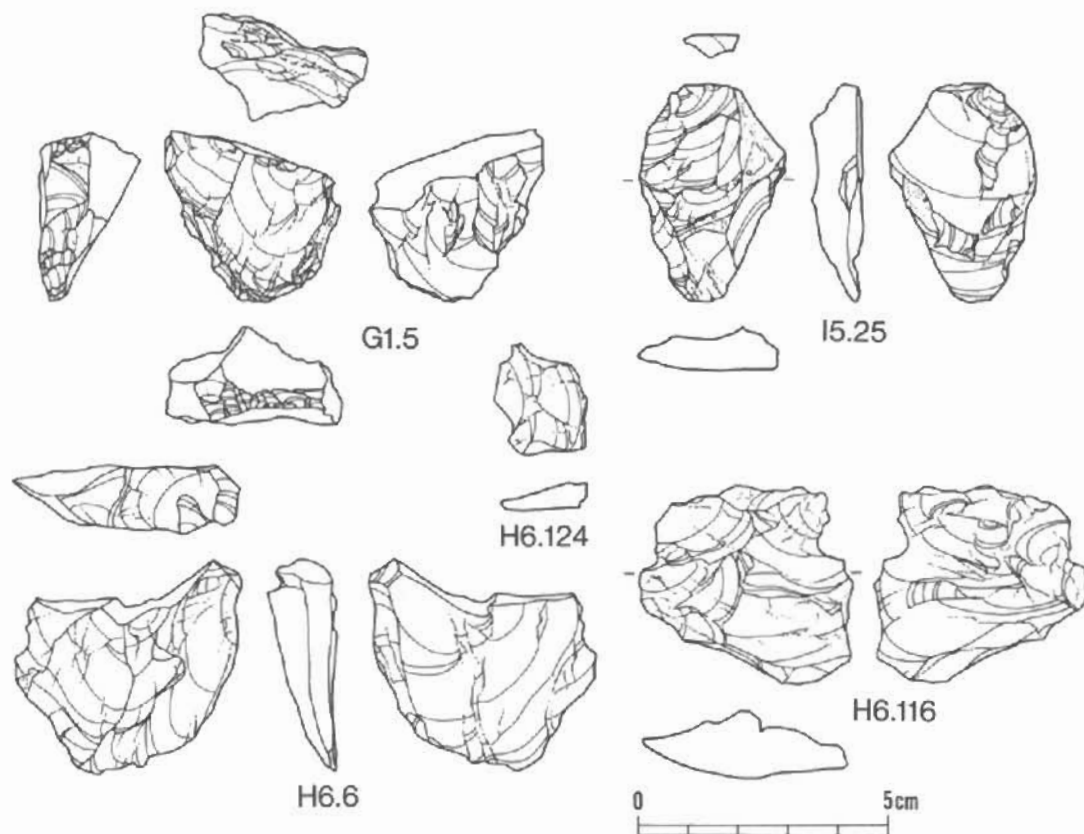
ほぼ5 cm厚のチャート製板状材を分割したもの。褐色で、赤斑を有する。接合資料2群を有する。接合資料4点、非接合資料19点、内訳は使用痕有剥片3点、剥片16点、石核4点である。接合資料の内、1群を記述する。

I5C4

イ→①J3.1(F)→ロ→②I5.17(F)

イ、石核の形状は分からないが、自然面を打面にして少なくとも3枚の剥片を剝離、①打面を節理面に転じてJ3.1(F)と、ロ、もう1枚を剝離する。②石核は、節理によって破碎して、I5.17(F)を残す。

5 cm厚ほどの板状材を複数に分割したため、接合資料以外にも点数の多い個体になっている。工程としては、一部で終末、一部で中期といった様相を見せるが、全体としては、中期段階であろう。



第250図 個体別資料No.130実測図

個体番号130

透明感のある青灰色チャート材。細かい石目が多く走る。接合資料が1群含まれる。接合資料3点、非接合資料4点、内訳は播器1点、剥片6点である。

個体番号131

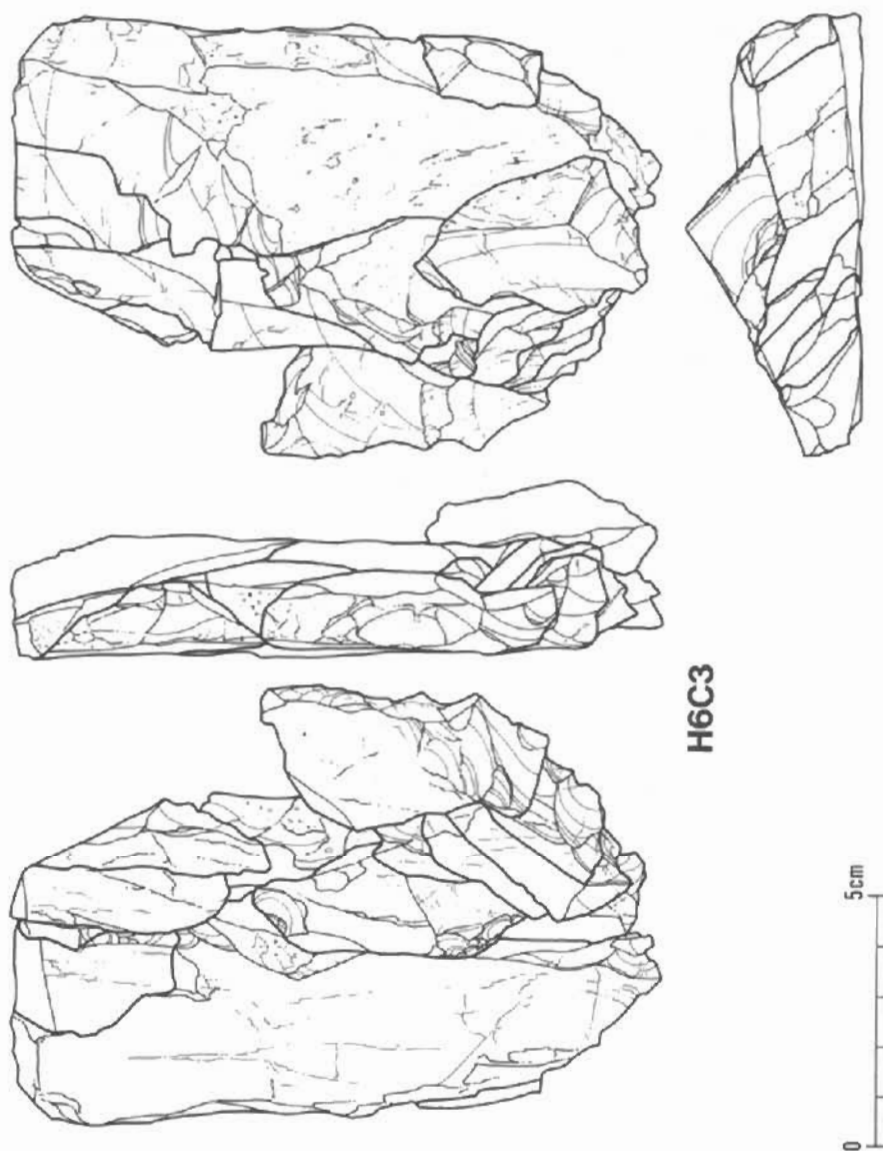
厚さ4cm、長さ9cm、幅13cm程の灰色のチャート製板状材を素材とする。接合資料1群14点と非接合資料剥片1点からなる。内訳は、剥片13点、石核2点である。

H6C3

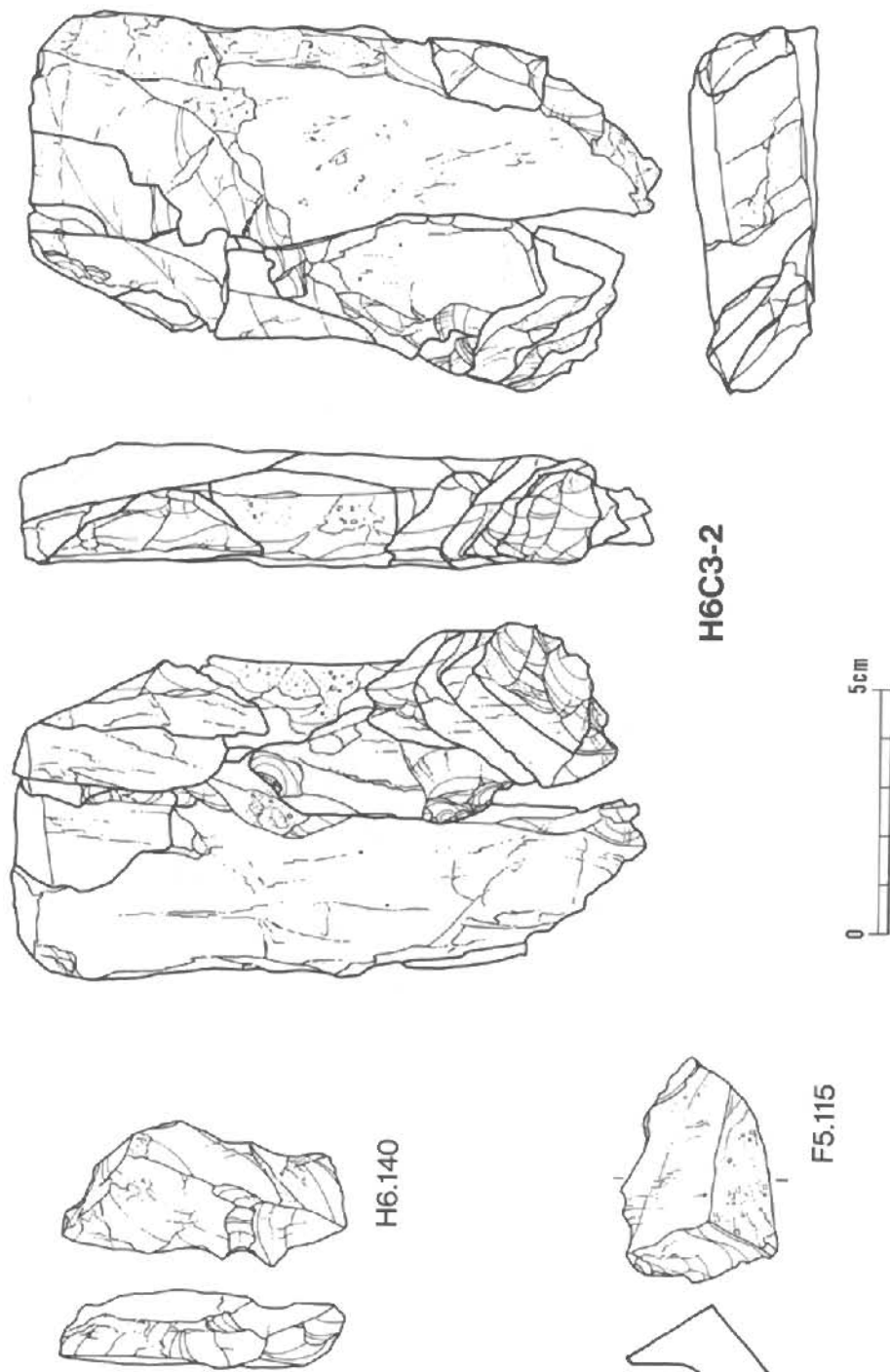
イ→①H6.140(F)→ロ→②H6.69(F)→③H6.28(F)→④H6.81(F)→⑤H5.7(F)→⑥H6.120(F)→⑦(H6.169(F)+I5.14(F))→⑧H6.142(F)→⑨F5.115(F)→⑩F5.33(CORE)→ニ→⑪H6.133(F)→⑬H6.105(CORE)←⑫H6.110(F)

イ、厚さ4cm、長さ9cm、幅13cm程の板状材を素材とする。①節理に影響されつつ正面からH6.140(F)が剥離される。ロ、打点を左に移動させて剥片2枚が剥離される。②H6.69(F)③H6.28(F)④H6.81(F)が連続して剥離される。⑤打点を中央に戻してH5.7(F)が剥離される。⑥打点を左に振ってH6.120(F)⑦(H6.169(F)+I5.14(F))が剥離され、⑧H6.142(F)が続く。⑨石核上面から節理を利用してF5.115(F)が剥離され、⑩続いてF5.33(CORE)が分割される。ハ、F5.33(CORE)は、石核として数点の剥片剥離が行なわれる。ニ、打面左半で数点の剥片剥離が行なわれ、⑪H6.133(F)が剥離される。⑫H6.110(F)が、石核の反対面で節理によって剥離される。⑬H6.105(CORE)が残される。

板状材を石核とし、初期から終末期までの全ての工程を残す。打面を板状材の上面に固定し、打面調整を施さず、左右に打点を移動させながら、幅広剥片を生産する個体である。

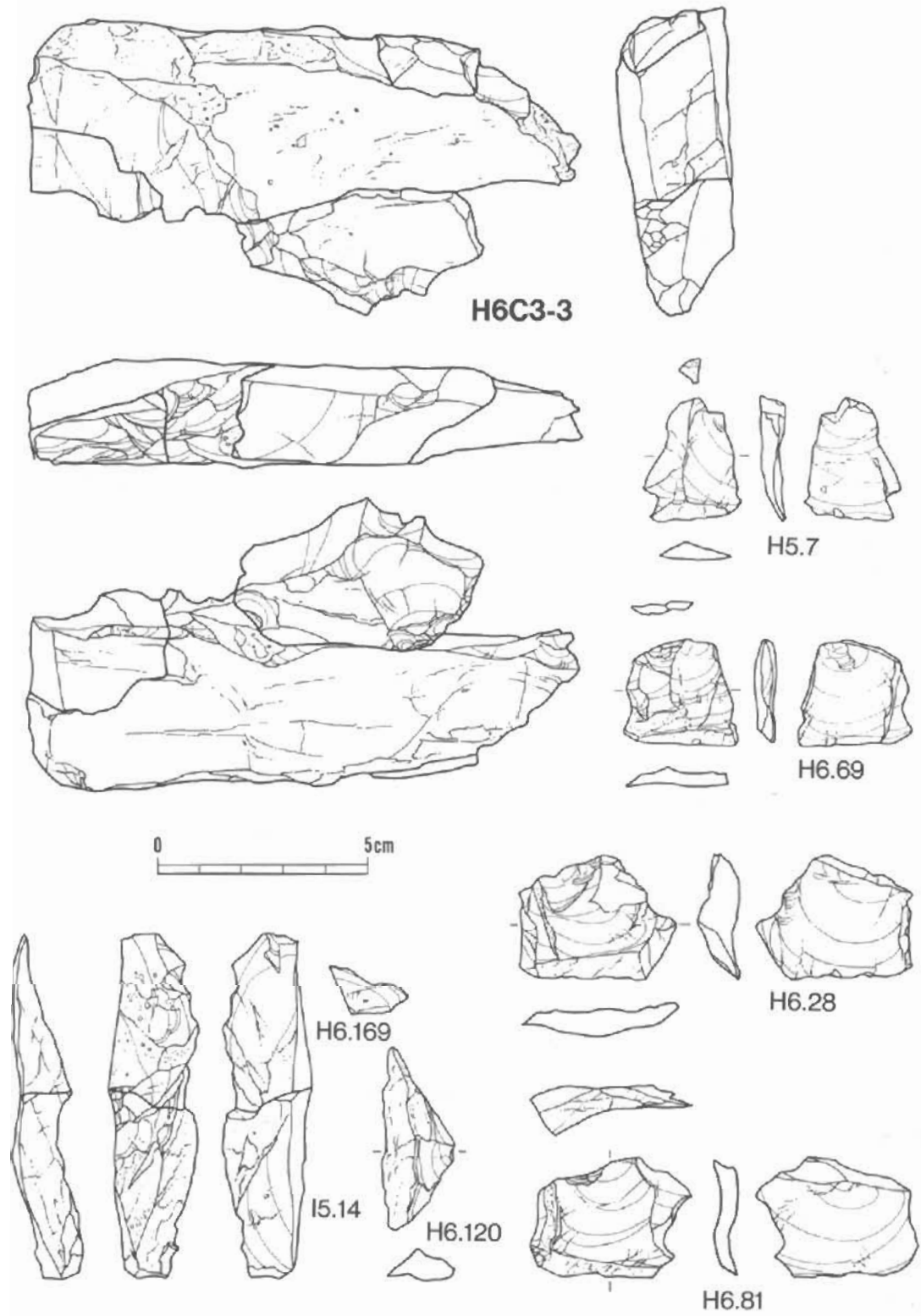


第251図 個体別資料No.131実測図1

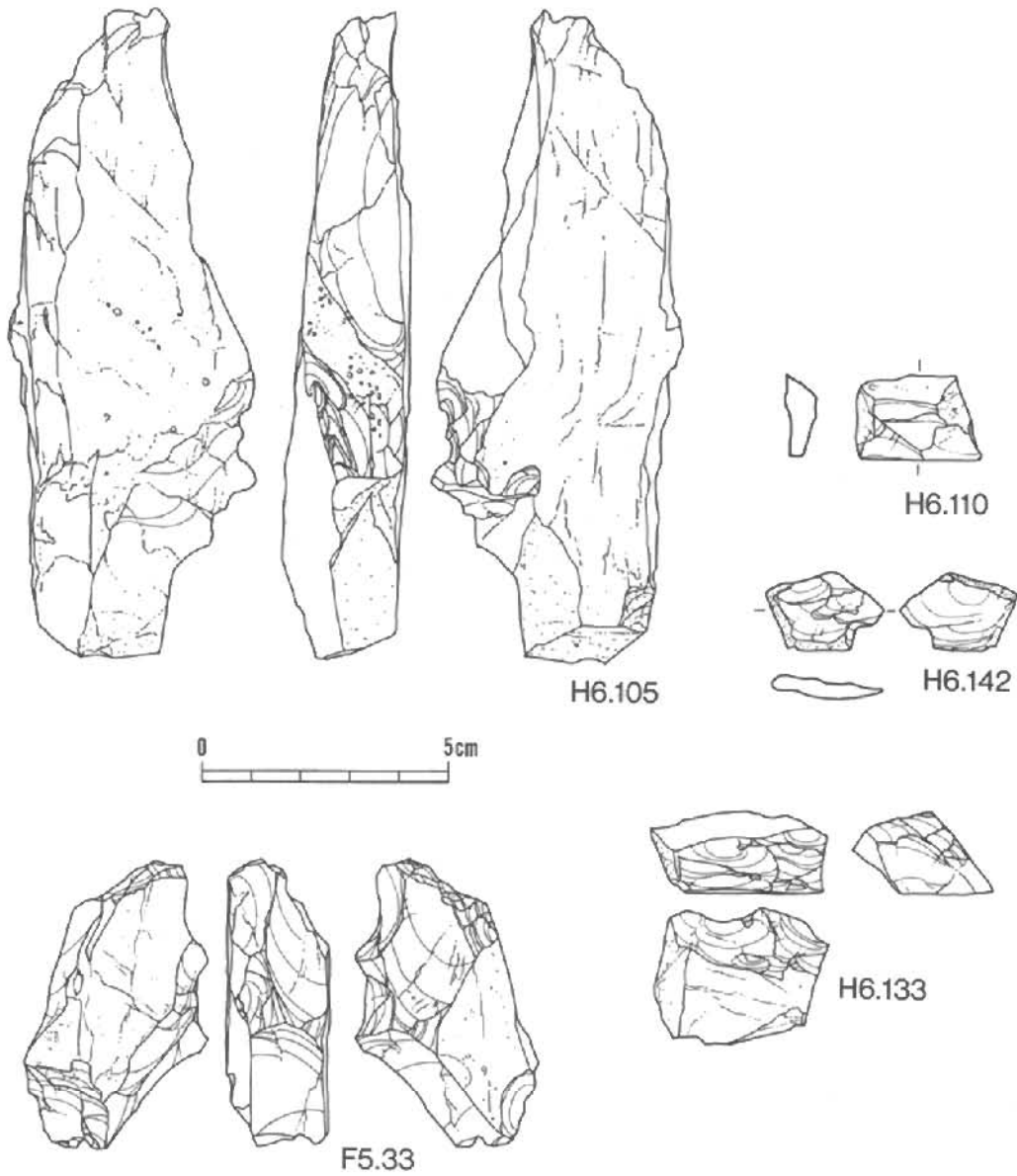


第252図 個別別資料No.131実測図2





第253図 個体別資料No.131実測図3



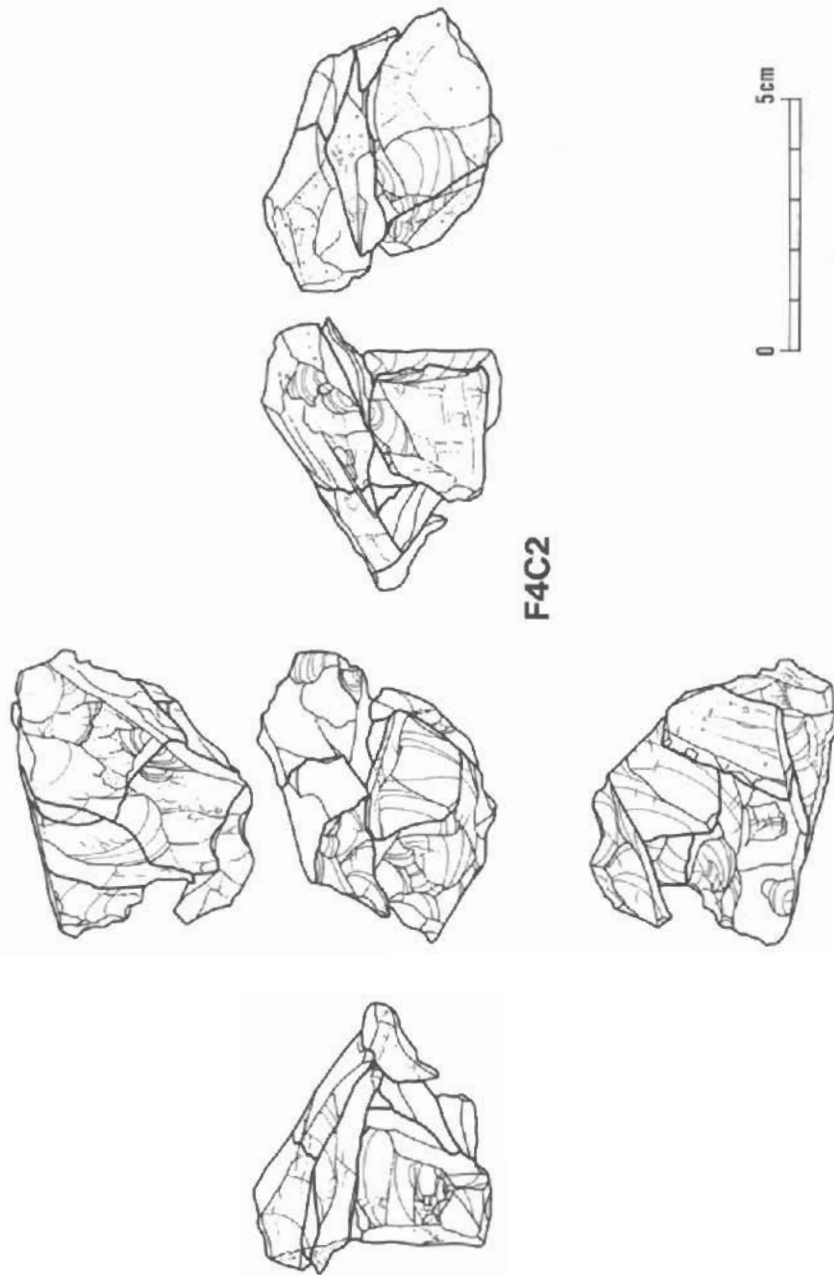
第254図 個別別資料No.131実測図4

個体番号132

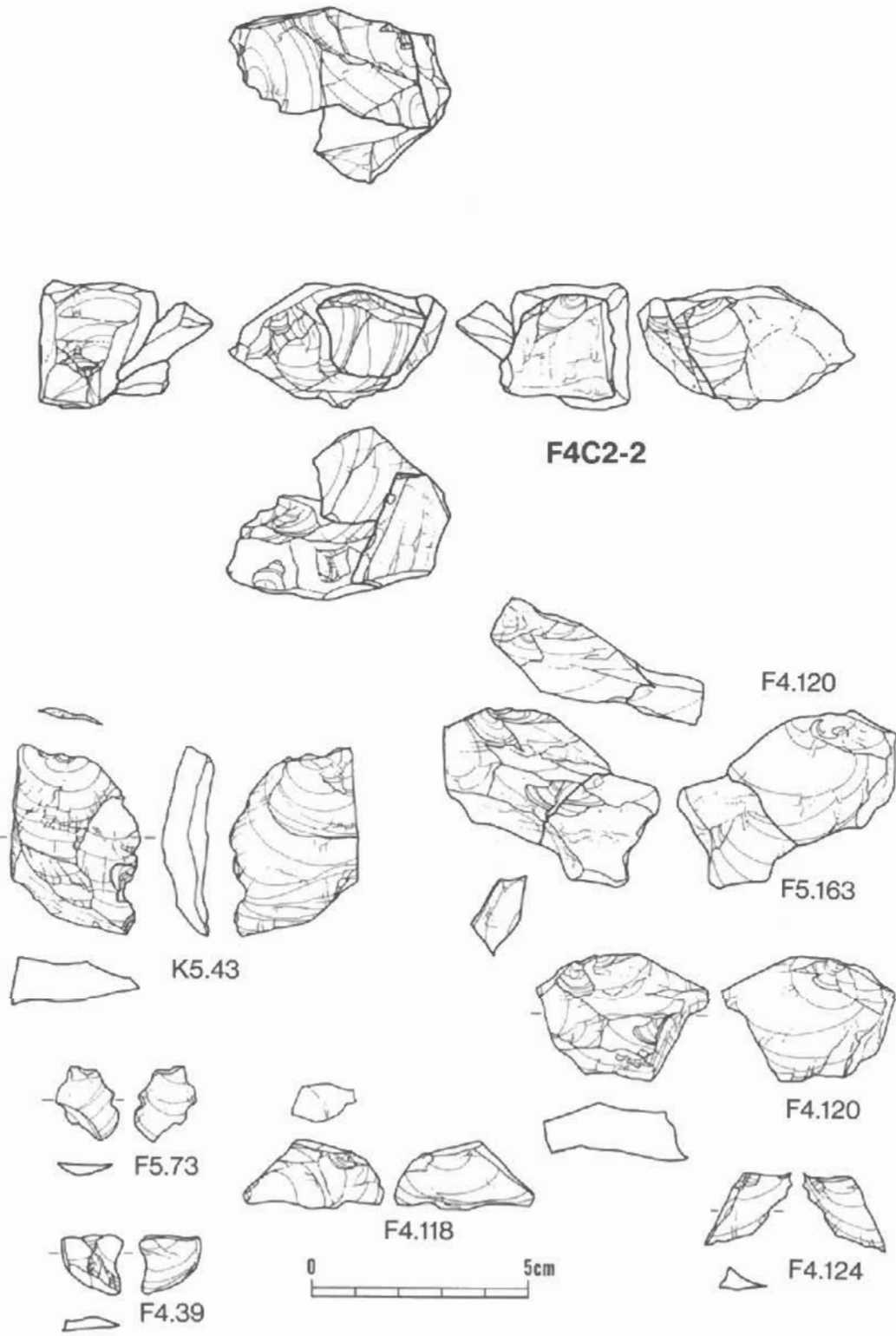
本来は、直径7cmほどのチャート製分割材。灰色の良質材である。接合資料1群を含む。接合資料10点、非接合資料9点、内訳加工痕有剥片1点、使用痕有剥片1点、剥片15点、碎片1点、石核1点よりなる。

F4C2

イ→①F4.118(F)→②(F4.120(F)+F5.163(F))→③F4.39(F)→④(K5.43(UF)+F5.73(F))→ロ→⑤  
 F7.133(F)→ハ→⑥I4.25(F)→ニ→⑧F4.102(CORE)  
 ↳⑦F4.124(F)→ホ

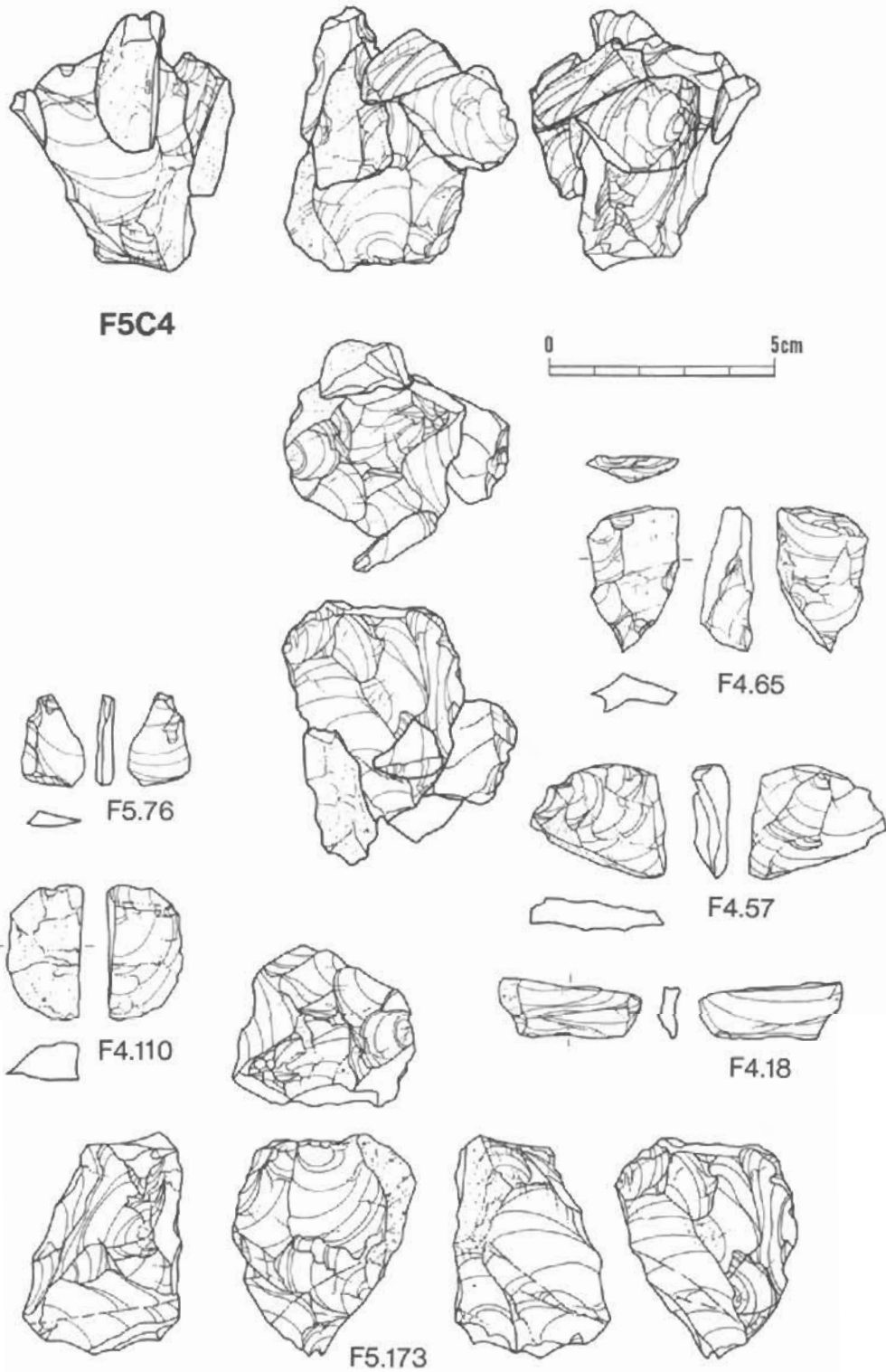


第255図 個別別資料No.132実測図1



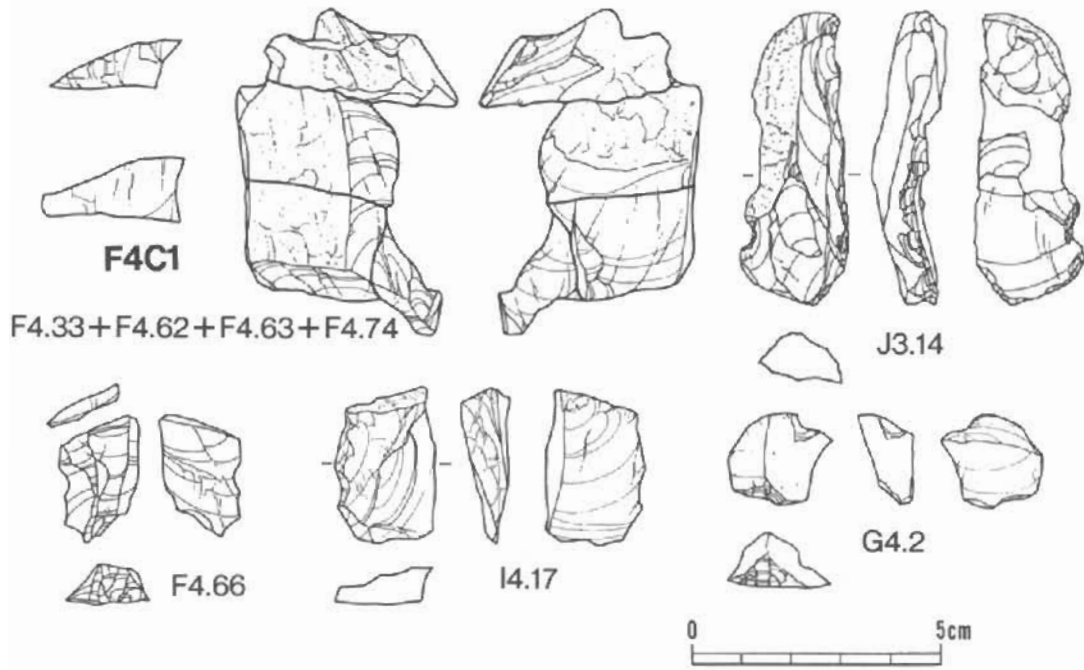
第256図 個体別資料No.132実測図 2



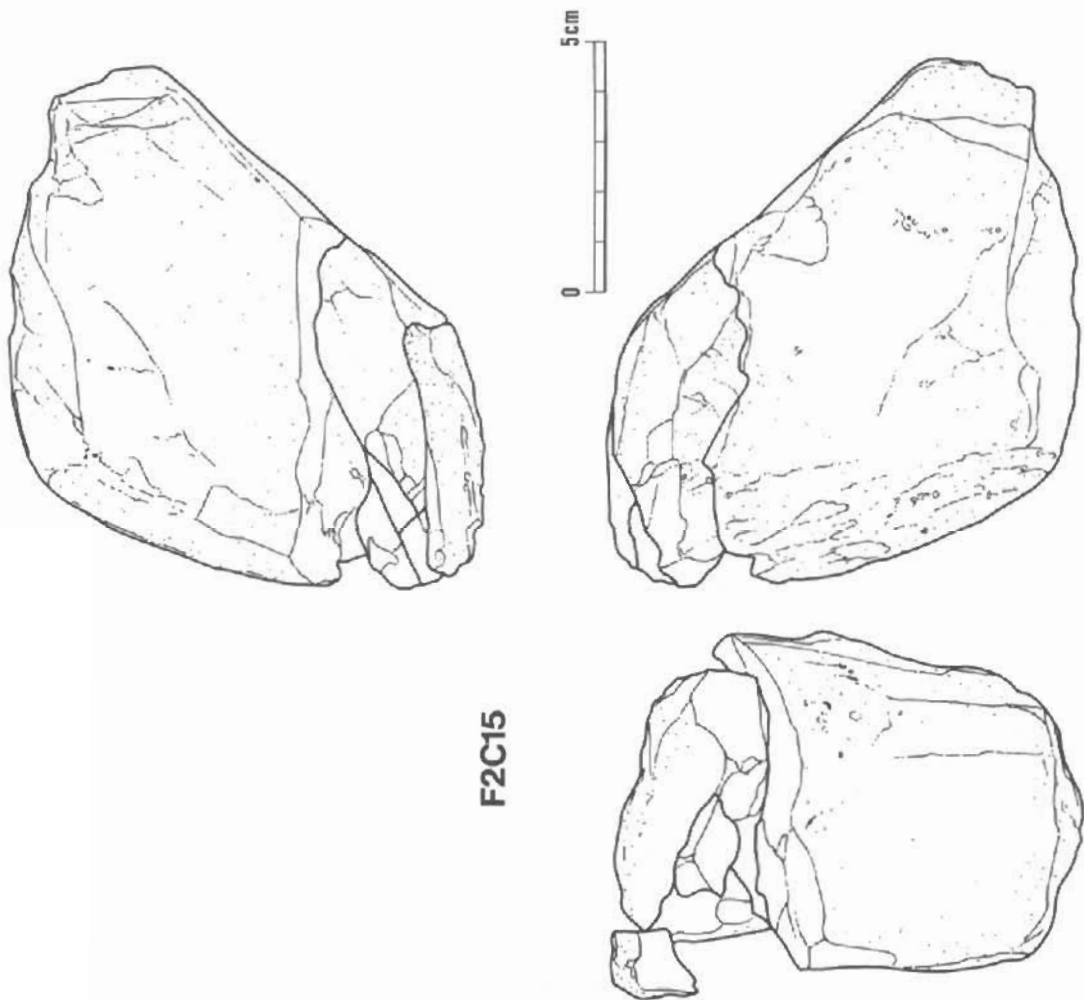


第258図 個別別資料No.133実測図1

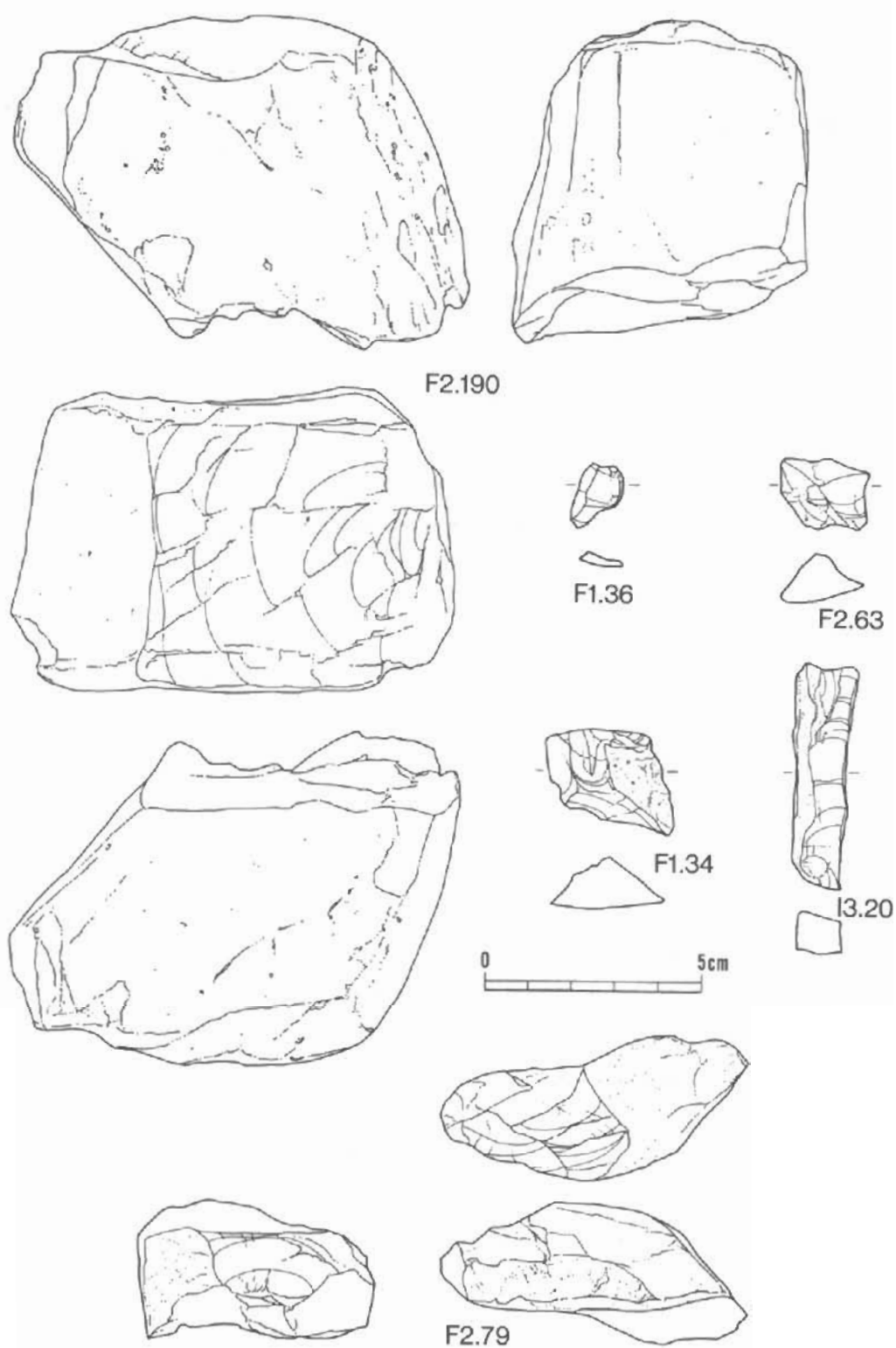
第2節 下位文化層の調査



第259図 個別別資料No.133実測図2

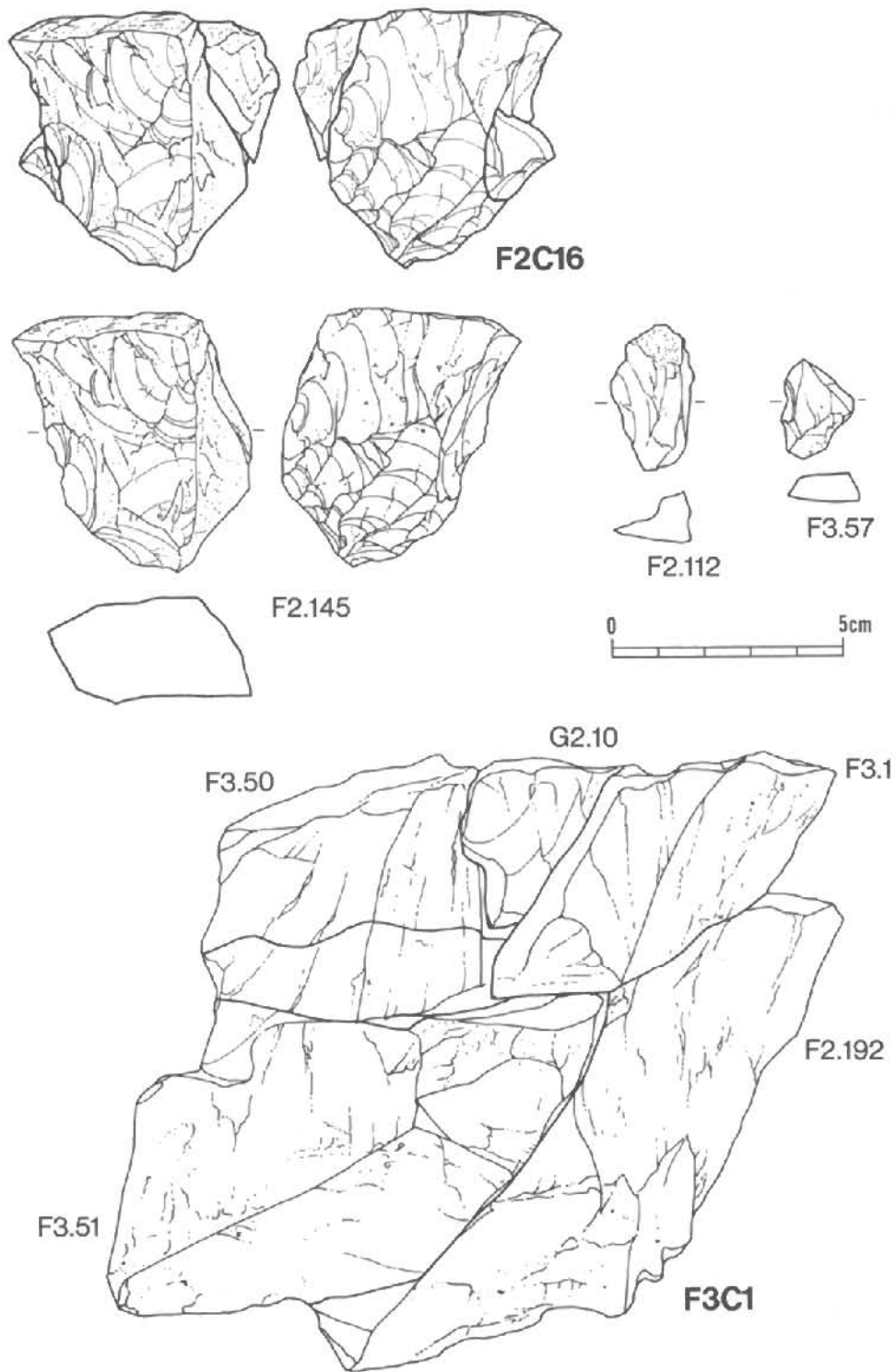


第260図 個別別資料No.135実測図1



第261図 個別別資料No.135実測図2





第262図 個別別資料No.136実測図

イ、既に数カ所を作業面にして剥片剥離が開始されている。①(F4.57(F)+F4.18(F))が打面調整を僅かに行なって後、剥離される。ロ、打面を約150度移動させ、剥片2枚を剥離する。②作業面に打面を移動させ、F4.110(F)を剥離する。③打面・作業面とも移動してF4.65(F)を剥離する。ハ、一方、大型剥片を剥離した後、④F5.76(F)が剥離され、ニ、打面を対抗面に移動して1枚の幅広剥片を剥離、ホ、更に大型剥片1枚を剥離し、⑤F5.173(CORE)が残される。

亜角礫素材で、中期～後期の工程を残す。打面調整は僅かで、打面・作業面の転移が激しい個体である。

#### 個体番号135

直径8～10cmのチャート製亜円礫。灰褐色で、節理が多くて良質とは言えない。接合資料1群5点、剥片4点と石核1点、非接合資料の剥片1点を含む。

#### F2C15

イ → ①F2.63(F) → ②F1.34(F) → ③F1.36(F) → ④F2.79(F)  
           ↳ ⑤F2.190(CORE)

イ、直径8～10cmの亜円礫の頂部を帽子状に分割。①帽子状剥片からF2.63(F)をまず剥離し、②F1.34(F) ③F1.36(F)を打面と作業面を移動しながら剥離し、④F2.79(F)が残る。一種の試し割りか。⑤亜円礫の残りはF2.190(CORE)として残される。

目的的な剥片生産はないが、手順の上で最初期からの工程を残す。早期に放棄された個体であろう。

#### 個体番号136

白灰褐色の大型材。細かい節理が走る。接合資料2群を含む。接合資料9点と非接合資料6点、内訳剥片10点、石核5点からなる。岩盤からの採取礫なのか、いくつか分割される工程、分割材から剥片を生産する工程などが認められるが、断片的で、剥片生産工程の位置づけには不明点が多い。

#### e, サヌカイト製接合資料の内容

サヌカイト製石器類の内に判別された接合資料51個体の内、内容が豊富で後の剥片生産技術や接合資料分布状況の分析などに関係してくる主要な個体について、素材の形状・展開した剥片生産工程・遺存状況についての簡潔な記述と図示を行なう。

**E2S1** 剥片2点、石核1点からなる接合資料。

イ → ①E2.49(F) → ③E2.66(CORE)  
           ↳ ②F2.114(F) → ロ

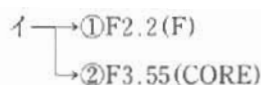
イ、おそらく剥片素材の横長剥片石核。ほぼ前後の表裏すべてから剥片剥離作業が行なわれている。先行して少なくとも4～6枚の剥片が剥離されている。石核底面側中央から貝殻状剥片が剥離された後、①その剥離痕上に打面を転じて、作業面と交換してE2.49(F)を剥離する。②もう一方の石核後面からF2.114(F)を剥離し、ロ、F2.114(F)の剥離面に打面を移動させて打面調整を施しつつ剥片剥離を行なう。③残核としてE2.66(CORE)が残る。

打面と作業面の入れ替え、打点の左右移動が激しい。やや寸詰まりな貝殻状剥片、横長剥片を剥離するものである。横長剥片剥離技術として、工程後半の接合資料である。

**F2S4** 剥片1点、石核1点からなる接合資料。

第17表 接合資料（サヌカイト製）遺物番号一覧

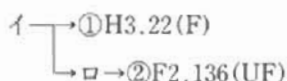
D7S1-D7.16(F D2) D8.29(F D1) E7.8(RF (D))
D8S1-D8.5(F D1) E6.5E(RF (C-D)) E8.10(E D1)
E2S1-E2.49(F A2) E2.66(CORE A2) F2.114(F A3)
E2S2-E2.48(E A2) E2.51(F A2)
E2S3-E2.8(CORE A2) E2.33(C A2)
E6S1-E6.3(CORE C3) E6.28(F C3)
E6S2-E6.19(F C3) E8.32(SC D1) F5.48(F (B))
E8S1-E8.15(E D1) E8.28(F D1)
F1S1-F1.29(F A1) F1.32(SC A1)
F1S2-F1.37(RF A1) F1.76(F A1)
F2S1-E2.5E(CORE (A)) F2.22(F A1) F2.131(F A2) F2.138(UF A2) F3.18(F A2)
F2S2-F2.6(F A2) F2.11(F A1)
F2S3-F2.14(RF A1) F2.34(RF A1)
F2S4-F2.2(F A2) F3.55(CORE A2)
F2S5-F2.136(UF A2) H3.22(F Ea1)
F6S1-F6.11(UF (C)) F7.4(F C1)
F8S1-F8.88(F C1out) F8.89(CORE C1out) F8.90(F C1out)
G2S1-G2.1(UF A3) G2.5(UF A3)
G5S1-G5.11(UF B3) G6.16(F C2)
G5S1-G8.32(UF G3) G8.34(UF G3)
I6S1-I6.2(F Eb1) I6.3(F Eb1)
J7S1-J7.11(F H2) J7.20(RF H2) J7.21(F H2)
J7S2-J7.5(F G1) J7.14(CORE G1) J8.6(F G1) J8.8(F G1)
J9S1-J9.2(F Ja1) J9.19(CORE Ja1)
J11S1-J11.7(F Jb1) J11.10(F Jb1)
J11S2-J11.12(UF Jb1) J11.25(F Jb1)
K6S1-K6.17(F H1) K6.45(F H1) K6.55(CORE H1) K7.54(F H1)
K6S2-K6.41(F H1) K6.43(F H1) K7.40(CORE H1) K7.43(C H1) K7.44(F H1)
K7S1-K7.8(F H2) K7.18(F H2) K7.72(F H2)
K7S2-J7.7(F H2) K6.37(F H1) K7.57(UF H2) K7.59(F H2)
K7S3-K7.38(F H2) K7.77(F H1)
K7S4-K7.16(F H2) K7.19(F H2)
K7S6-K7.49(RF H1) K7.58(RF H2)
K7S7-K7.55(F H1) K7.69(F H2)
K8S1-K8.22(F I1) M10.1(CORE Ja3)
K8S2-K8.3(F I1) K8.23(F H2)
K9S1-K9.15(F I1) K10.17(F (Jb))
K9S2-K9.9(RF I1) L10.15(CORE Ja2)
K11S1-K11.7(F (Jb)) K11.12(F Jb2)
K11S2-K11.49(F Jb2) K11.54(F Jb2)
K11S3-K11.11(F Jb2) K11.61(F Jb2)
K11S4-K11.4(F (Jb)) K11.50(F Jb2)
K12S1-K11.30(F Jb2) K12.5(UF Jb2out)
K12S2-K9.12(F Ja1) K12.3(CORE Jb2out)
L7S1-L7.2(F H2out) N9.5(UF I3)
L9S1-L9.7(UF (I)) L10.9(UF Ja2)
L10S1-L10.17(F Ja2) L10.18(F Ja2)
L10S2-L10.2(F (Ja)) L10.5(F Ja2) L10.14(F Ja2) L10.24(CORE Ja2) L11.2(C Ja2)
L11S1-L10.1(CORE Ja2) L11.19(F Ja3) L11.24(F Ja2)
L11S2-L11.16(F Ja3) L11.26(F Ja3)
M11S1-M10.3(F Ja3) M11.10(F Ja3)

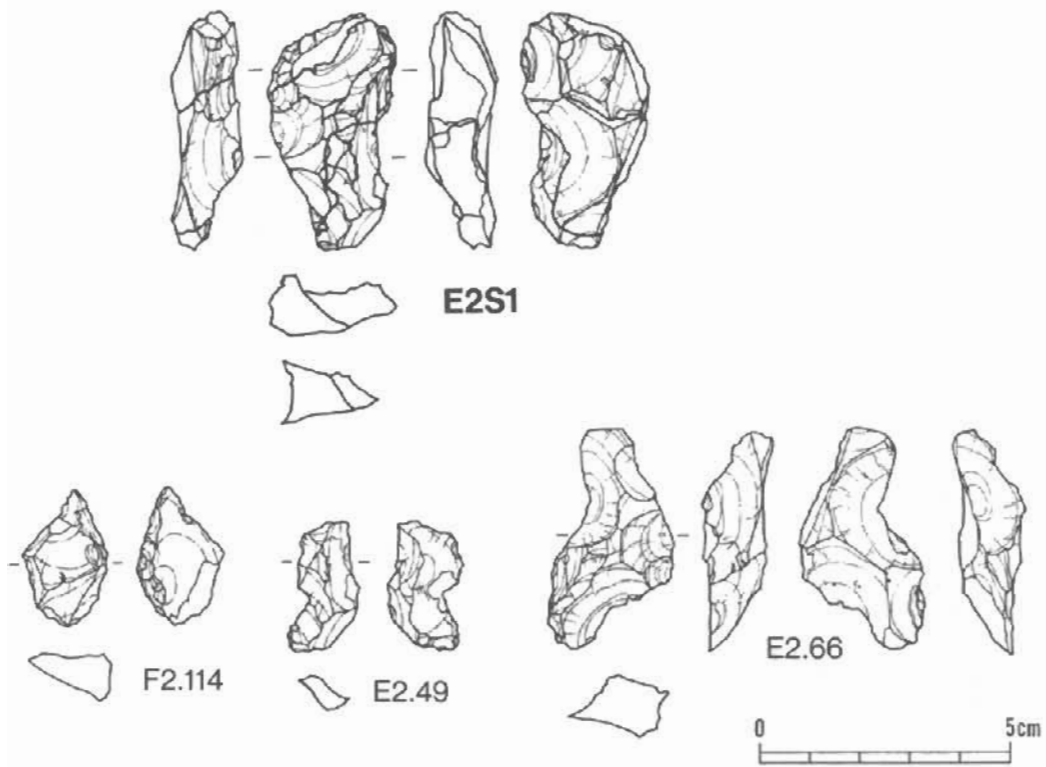


イ、本来、幅6cm、長さ約3.8cm、厚さ1cmの横長剥片石核。先行して既に少なくとも2～3枚の横長剥片が剥離されている。打面縁調整が認められる。これが、石核の主軸で2分割される。①分割された一方は、それを石核としてF2.2(F)を剥離する。石核は未発見である。②もう一方は、とくに剥片剥離は行なわれず、F3.55(CORE)が残される。

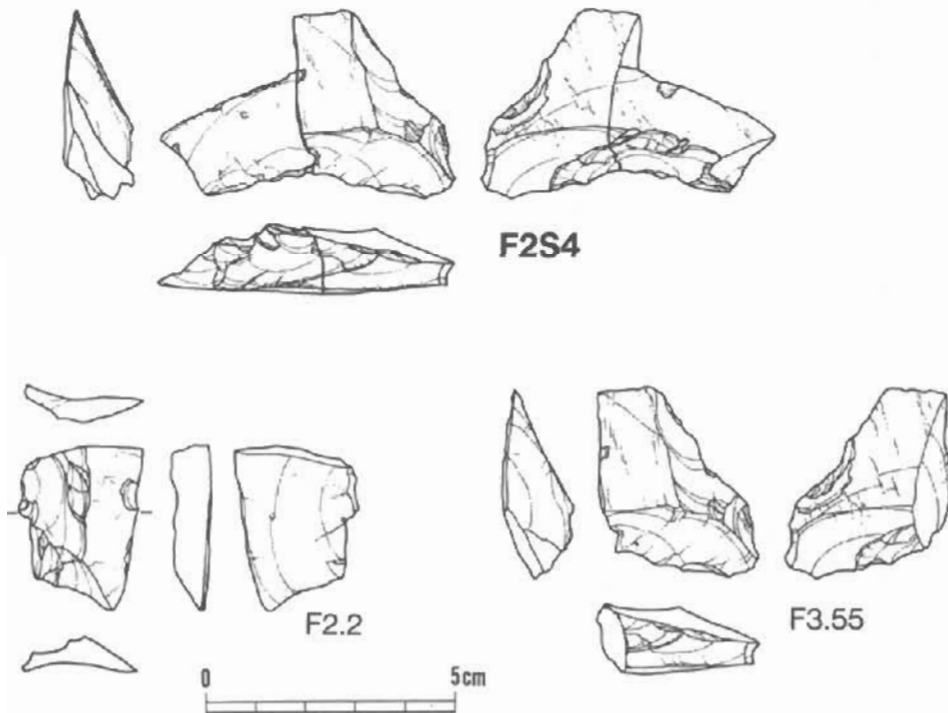
横長剥片剥離技術として工程終末の接合資料で、打面調整はないが、作業面・打面縁の調整がある。ほぼ作業面と目的剥片の幅が対応する。

**F2S5** 使用痕有剥片1点、剥片1点からなる接合資料。

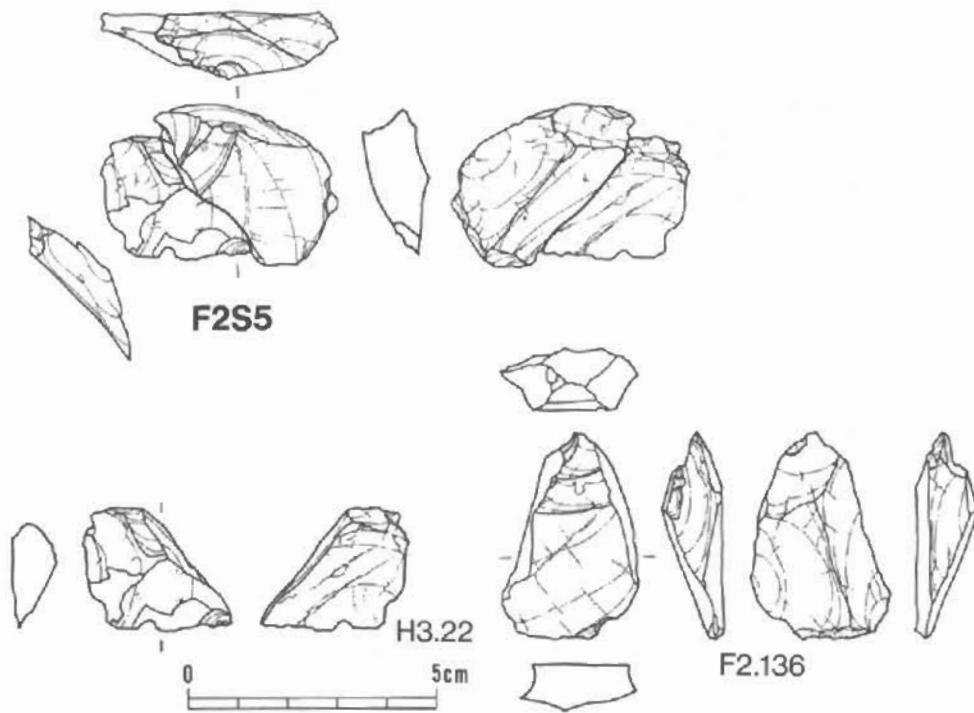




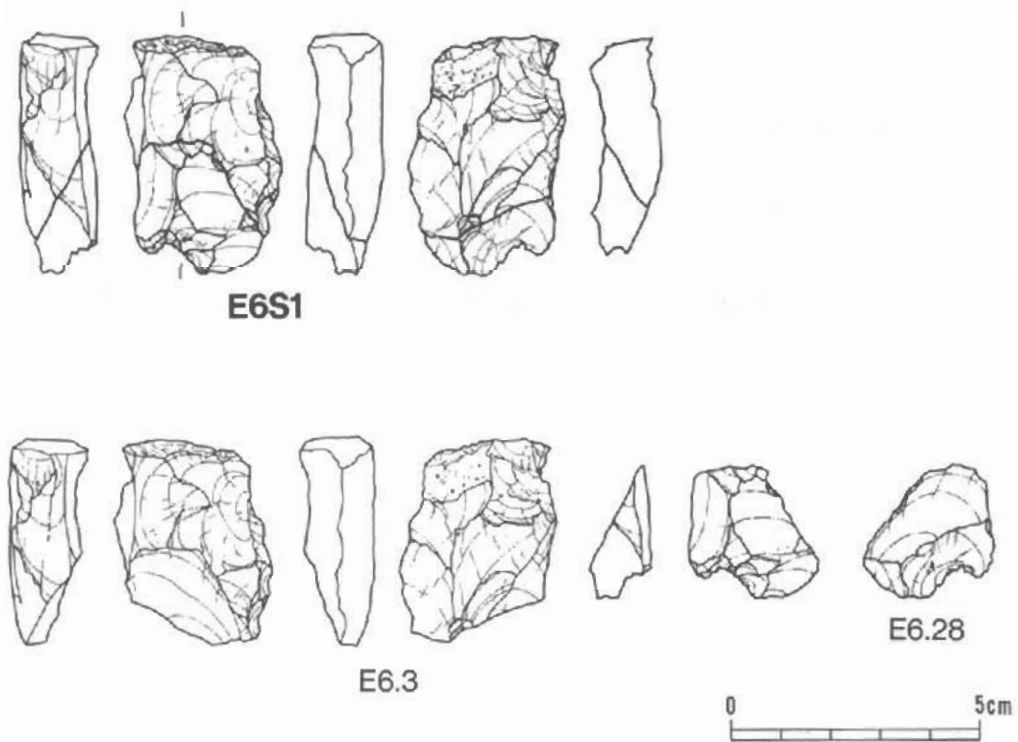
第263図 接合資料 (サヌカイト) 実測図1



第264図 接合資料 (サヌカイト) 実測図2

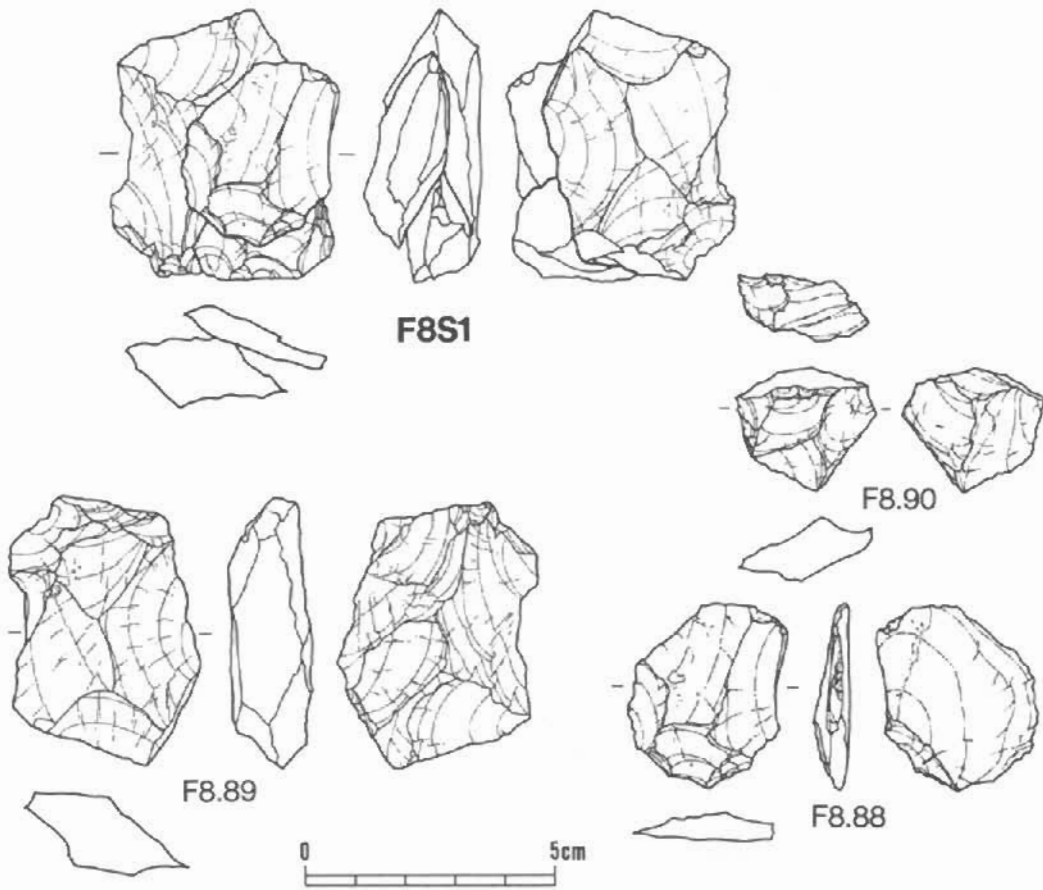


第265図 接合資料（サヌカイト）実測図3

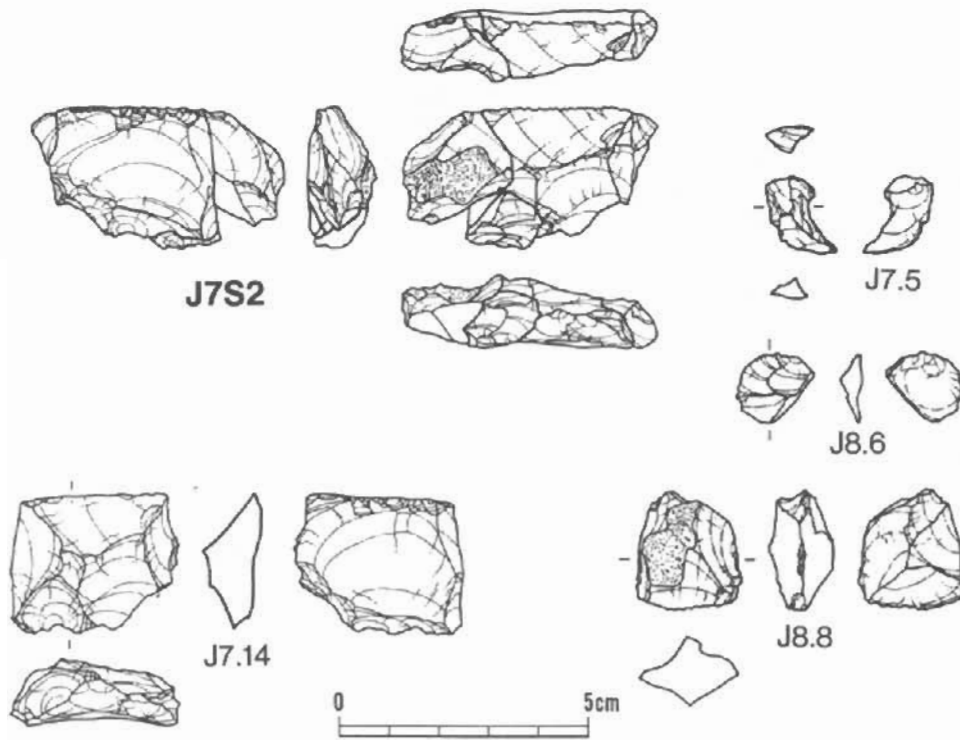


第266図 接合資料（サヌカイト）実測図4

第2節 下位文化層の遺物



第267図 接合資料（サヌカイト）実測図5



第268図 接合資料（サヌカイト）実測図6

イ、幅約3.5cmの横長剥片石核の残核。これを石核の中軸で2分割する。①一方はH3.22(F)となる。  
ロ、一方は、さらに作業面から若干の剥片剥離を行い、②残核はF2.136(UF)に転用される。

横長剥片剥離技術の工程終末の接合資料である。底面がポジ面で構成されている。

**E6S1** 剥片1点、石核1点からなる接合資料。

イ→①E6.28(F)→②E6.3(CORE)

イ、幅3cm、長さ5cm、厚さ2cm程の石核。左側縁裏側と前面に剥片剥離が行なわれている。前面の打面部には打面調整が施されている。①前面の剥離作業面いっばいにE6.28(F)が剥離される。②E6.3(CORE)が残る。

剥片素材の打面調整のある横長剥片石核から行なわれた工程終末である。

**F8S1** 剥片2点、石核1点からなる接合資料。

イ、①F8.88(F)→ロ→②F8.90(F)→ハ→③F8.89(CORE)

イ、厚手剥片素材の横長剥片石核で、既に前・後面から剥片剥離が進行し、少なくとも7枚以上の剥片が剥離されている。①F8.88(F)が石核底面を付着させながら剥離される。打面調整は無い。ロ、後面の作業面から剥片を少なくとも2枚、右側縁から1枚剥離する。②前面作業面右側からF8.90(F)を剥離する。ハ、作業面を石核上面に転じて、少なくとも1枚の底面付き剥片を剥離する。③F8.89(CORE)が残される。

本例では、底面の付着した横長剥片が少なくとも4～6枚は剥離されたと考えられる。打面・打面縁の調整は認められない。作業面と目的剥片の幅は大体一致するが、左右に対するブレは大きい。横長剥片剥離技術の工程後半に当たる接合資料である。

**J7S2** 剥片3点、石核1点からなる接合資料。

イ→①J8.8(F)→②J8.6(F)→ロ→④J7.14(CORE)  
→③J7.5(F)

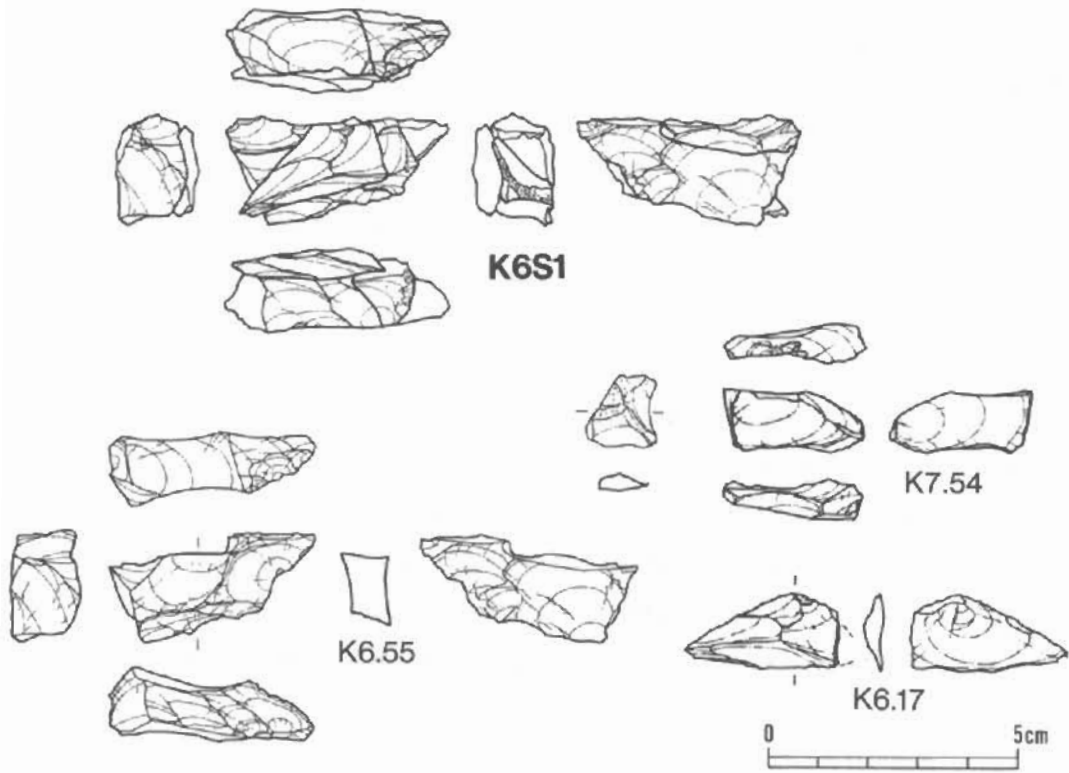
イ、底面がポジ面の剥片素材の横長剥片石核。素材剥片の打面部に剥離作業面を設定する。すでに作業面と打面を交換しながら3枚ほど小型剥片の剥離が行なわれている。①J8.8(F)が石核底面からの加撃によって、石核左側縁を斜めに切断する。②で、打面と作業面を入れ換えて左半部からJ8.6(F)を剥離する。ロ、打面・作業面を元に戻して小剥片を2枚ほど剥離する。③一方、右側縁からは底面を打面としてJ7.5(F)が剥離される。④J7.14(CORE)が残る。

剥片素材の底面がポジ面で、前面に作業面を設定する。注目されるのは①J8.8(F)と③J7.5(F)の剥離が底面からの加撃で行なわれている点で、これによって石核正面形が台形状を呈するようになっている。本来横長剥片剥離技術の打面調整は作業面を打面とする場合が多いが、本例は「殿山技法」(織笠、88)に類似した工程が認められる。横長剥片剥離技術工程後半の接合資料である。

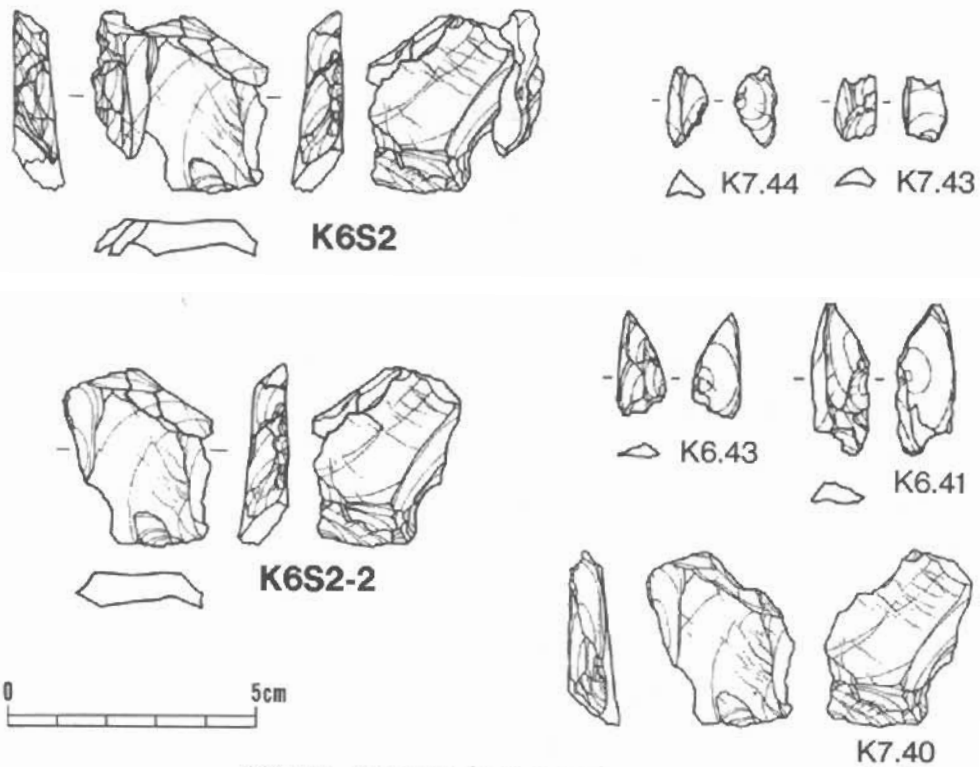
**K6S1** 剥片3点、石核1点により構成される接合資料。

イ→①K6.17(F)→②K6.45(F)→④K6.55(CORE)  
→ロ→③K7.54(F)

イ、厚手の剥片素材の石核で、ほぼ全面から剥片生産が行なわれており、石核素材剥片の腹面・背面の区別にも困難がある。①K6.17(F)が剥離されるが、ネガティブな底面が付着している。②作業面と打面両方を対向する位置に移動、K6.45(F)を剥離する。ロ、石核の一端が折られるように剥離され、③その小口面を打面にして縦長剥片K7.54(F)が剥離される。④K6.55(CORE)が残る。

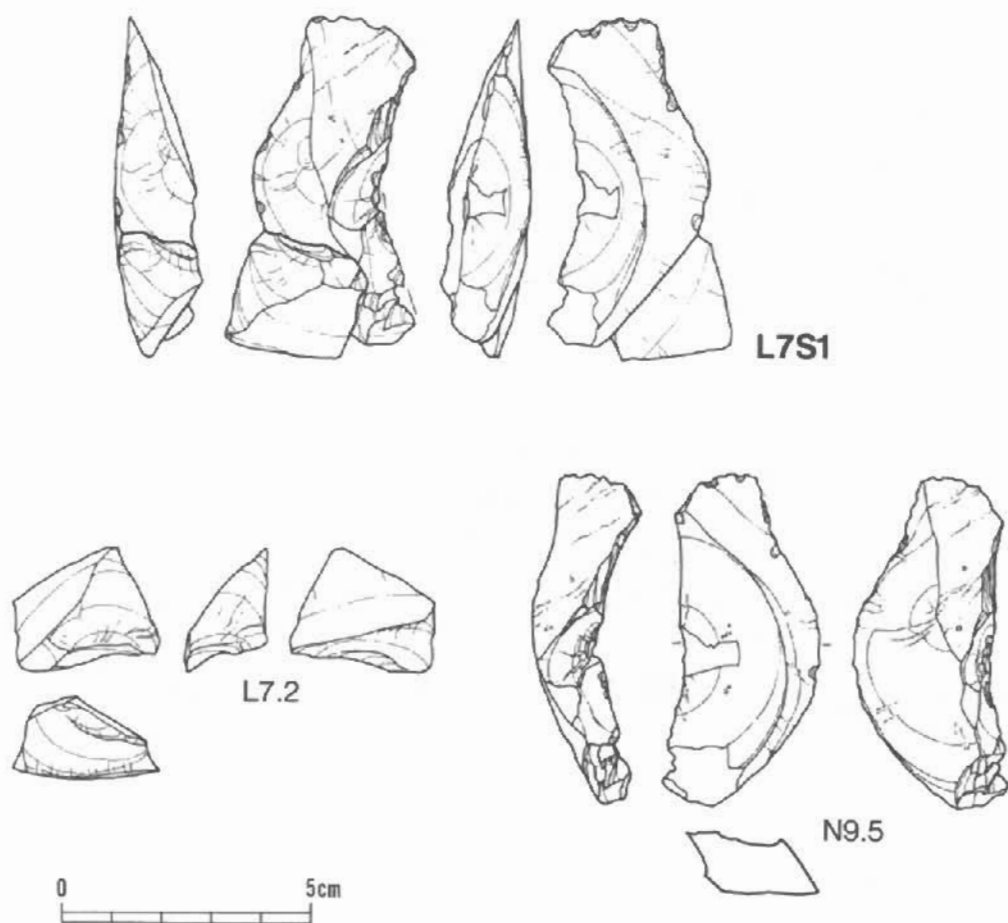


第269図 接合資料（サヌカイト）実測図7



第270図 接合資料（サヌカイト）実測図8





第271図 接合資料（サヌカイト）実測図9

残核には底面が遺存せず、最終段階で縦長剥片が小口部からの加撃で剥離されている。1枚の底面付き横長剥片が接合することから、本来は横長剥片剥離技術工程後半の展開があったのであろう。打面・打面縁の調整は認められない。

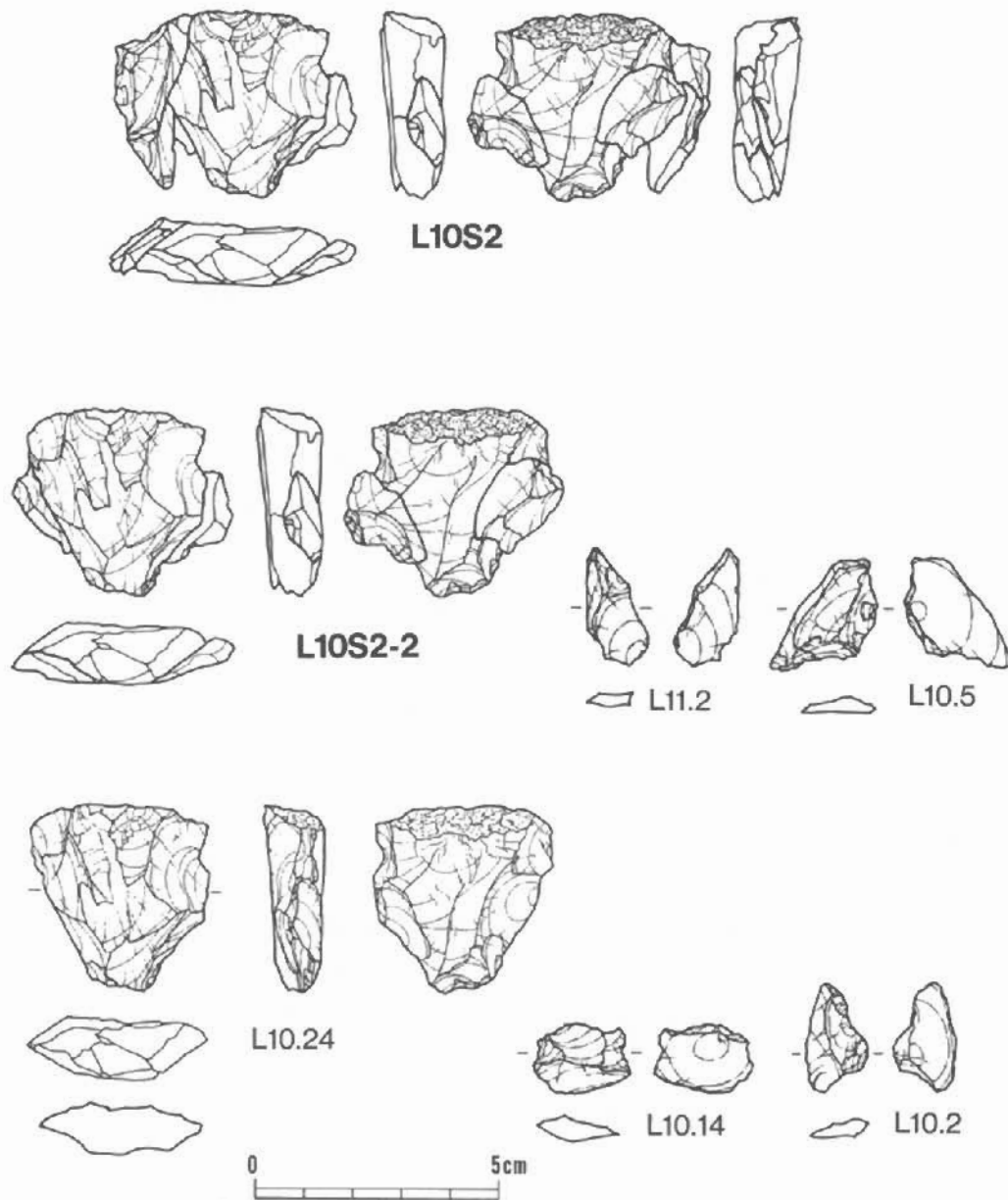
K6S2 剥片3点、碎片1点、石核1点で構成される。

イ → ①K6.43(F) → ②K6.41(F) → ロ → ⑤K7.40(CORE)  
           ③K7.44(F) → ④K7.43(F) → ハ

イ、剥片素材の石核で、底面にボジ面、石核上面にネガ面を当てている。既に前面から数枚の剥片剥離が行なわれている。①前面からK6.43(F)が剥離され、②打面縁の調整の後、K6.41(F)が剥離される。①②とも打面調整はない。ロ、打面と作業面を逆転させて左半部で剥片1点を剥離する。最後に若干の打面調整が行なわれる。③もう一方の後面では、K7.44(F)と④K7.43(F)が連続して剥離され、ハ、右半部に移動して少なくとも2枚の剥離が行なわれる。⑤最後に打面調整が行なわれるが、剥片は剥離されず、K7.40(CORE)が残される。

剥片素材の石核の前後から剥片剥離を行なうもので、打面・作業面が前後とも転移している。作業面と目的剥片の幅は一致せず、左右に移動しながら剥片剥離が行なわれる。剥離された剥片が小さく、矮小化した印象が強い。横長剥片剥離技術工程中～後期の接合資料である。

L7S1 使用痕有剥片1点、剥片1点からなる。



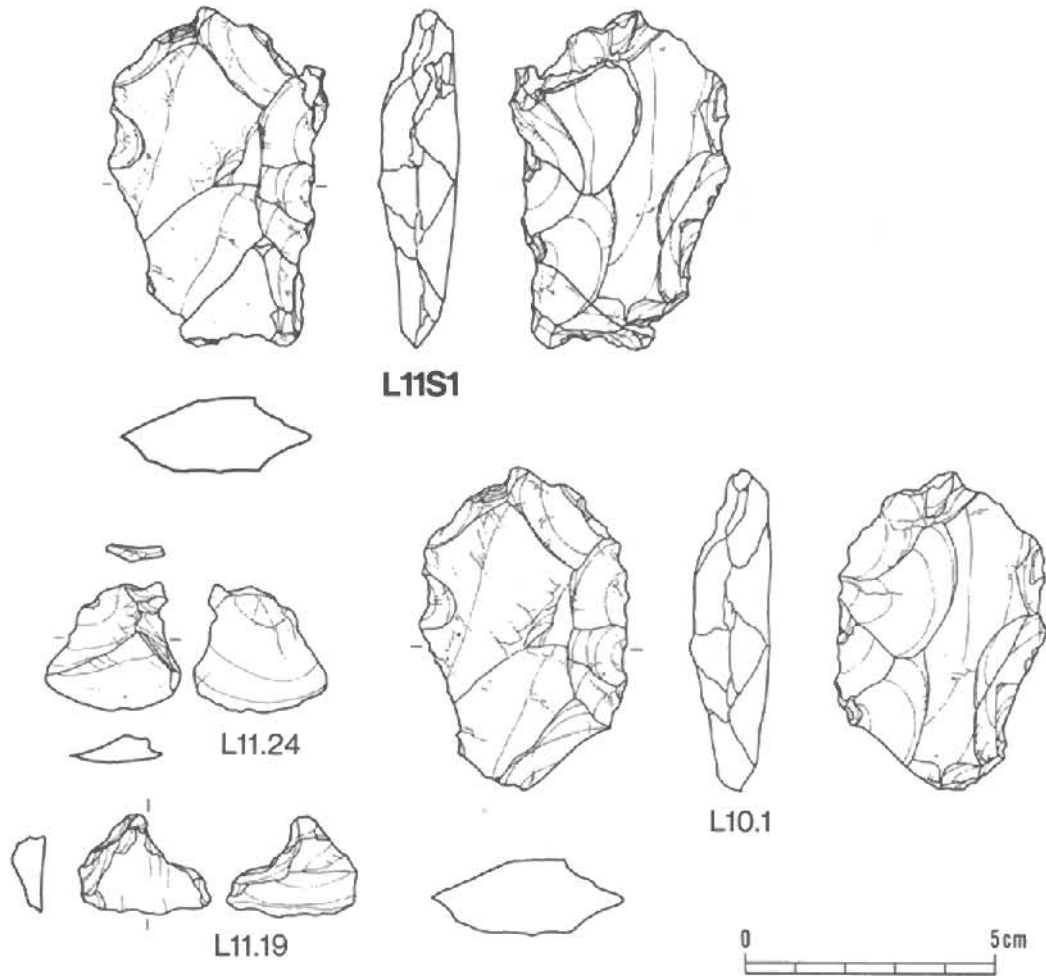
第272図 接合資料（サヌカイト）実測図10

イ→①N9.5(UF)→②L7.2(F)

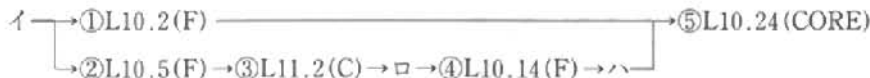
イ、幅7cmの横長剥片石核。打面調整と思われる剥離面が打面部にある。先行して少なくとも1枚の目的剥片剥離がある。①N9.5(UF)が翼状を呈する剥片として剥離される。前の剥片と同様、石核作業面と剥片の幅は一致し、石核の主軸に直交するように剥離されている。②石核が残され、分割されてL7.2(F)が残る。他の部分は未検出である。

大型盤状剥片を素材とした石核で、底面にポジ面、剥離作業面に打面部を配する。石核の主軸を直行するように剥離作業面が後退しており、瀬戸内技法と同様の属性が認められる。打面部には数面の打面調整が認められる。瀬戸内技法・横長剥片剥離技術工程終末の接合資料である。

L10S2 剥片3点と碎片1点、石核1点からなる。



第273図 接合資料（サヌカイト）実測図11



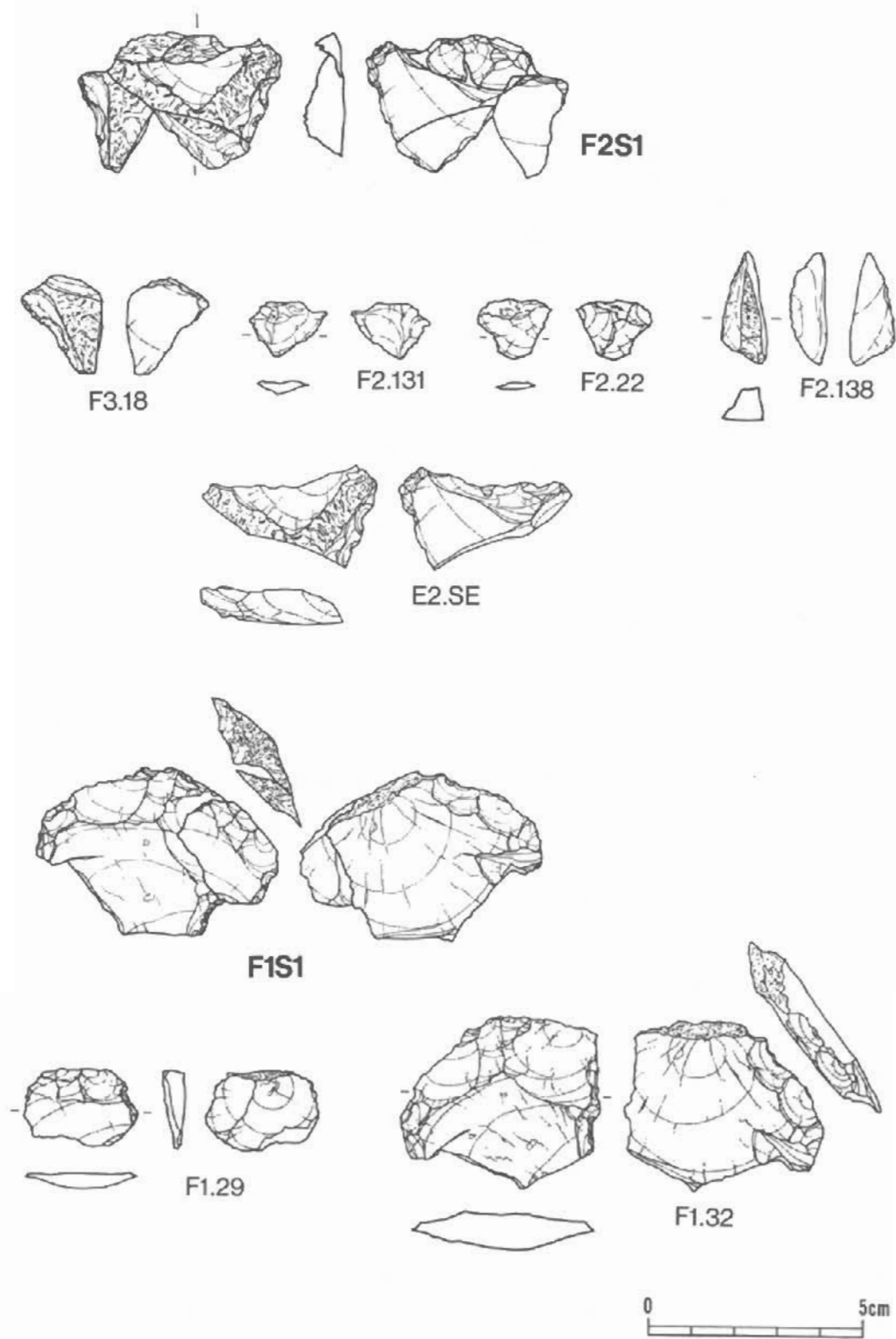
イ、幅5cm、長さ4.5cm、厚さ1.5cm程の剥片素材の石核。素材剥片の左右両側縁の表裏に作業面・打面を転移させるもの。既に小剥片5～6枚が剥離されている。①右側縁からL10.2(F)が剥離される。②左側縁から、石核底面からの加撃でL10.5(F)、③続いてL11.2(C)が剥離される。ロ、作業面を底面側に移動させて剥片数枚を剥離、④続いてL10.14(F)、ハ、更に1枚の剥片を剥離する。⑤打面縁に調整を施すが、剥片剥離は継続されず、L10.24(CORE)が残される。

打面調整は認められないが、打面縁調整はある。横長剥片剥離技術工程後半の接合資料である。

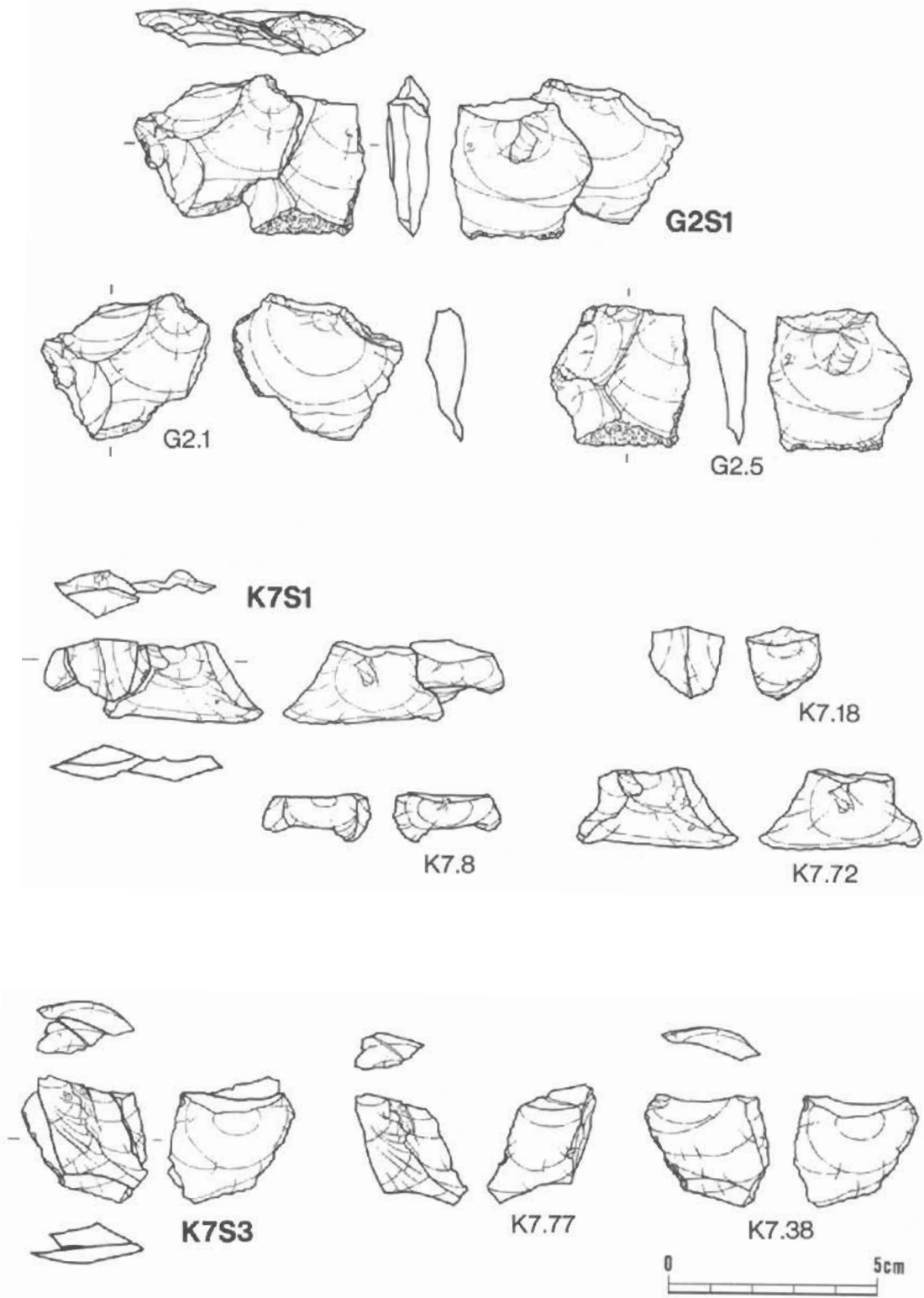
L11S1 剥片2点、石核1点からなる。



イ、幅約7cm、長さ約5cm、厚さ1.7cm程の大型横長剥片素材の石核で、打面部に主要作業面を設定して、表裏逆転、左右に移動しつつ、数枚の剥片を剥離するもので、既に5～6枚の剥片剥離が行なわれている。素材剥片末端腹面にも剥離痕数枚が認められる。①石核底面から貝殻状剥片L11.24(F)が剥離される。ロ、続いて作業面左から剥片1枚が剥離される。②打面を転移して、ロの剥離稜線上加撃してL11.19(F)を剥離する。ハ、①のすぐ右側から剥片1枚を剥離する。③L10.1(CORE)が残される。



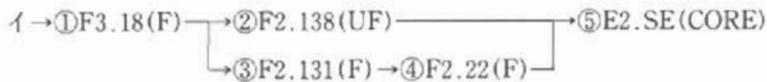
第274図 接合資料（サヌカイト）実測図12



第275図 接合資料（サヌカイト）実測図13

打面調整はないが打面縁調整はある。横長剥片剥離技術工程後半の接合資料である。

**F2S1** 使用痕有剥片1点、剥片3点、石核1点で構成される接合資料である。



イ、幅4.5cm、長さ3cm、厚さ1cm程の大型剥片。側縁に加工がみられる。①右側縁からF3.18(F)が折り取られる。②更にF2.138(UF)が折り取られる。③左側縁ではF2.131(F)と④F2.22(F)が剥離され、⑤E2.SE(CORE)が残る。

全体として素材剥片の形状が薄すぎることから、剥片剥離工程の接合ではなく、石器の整形段階である可能性がある。⑤E2.SE(CORE)からは極小剥片が剥離されている。

**F1S1** 削器1点、剥片1点からなる接合資料。

イ→①F1.29(F)→ロ→②F1.32(SC)

イ、大型剥片製の削器。→①腹面からの加撃で右半からF1.29(F)を剥離、ロ、その側縁を調整して、②F1.32(SC)が残される。

剥片剥離技術の内容は良く分からないが、大型剥片剥離作業の中期段階の遺存を示す。

**G2S1** 使用痕有剥片2点からなる接合資料。

イ→①G2.1(UF)→ロ→②G2.5(UF)

イ、石核底面が自然面からなる石核。貝殻状～幅広剥片を先行して剥離させる。①G2.1(UF)が平坦面から剥離される。ロ、同一作業面から少なくとも1枚が剥離され、打面を作業面に転じて数枚の剥片剥離が行なわれる。②①よりも4cmほど下がった打面からG2.5(UF)が剥離される。

剥片素材の石核で、打面・剥離作業面を入れ換えて剥片剥離を続けるもの、貝殻状剥片も生産されたようだが、横長剥片剥離技術工程中期の接合資料であろう。

**K7S1** 剥片3点からなる接合資料。

イ→①K7.18(F)→②K7.8(F)→ロ→③K7.72(F)

イ、石核の形状不明。先行して少なくとも1枚の剥片剥離がある。①平坦な打面からK7.18(F)が剥離される。②続いてK7.8(F)が剥離される。ロ、石核の打面縁右を調整して、③石核左半からK7.72(F)を剥離する。

石核の形状は良く分からないが、底面を安定して持たないようである。大型剥片の縁辺に作業面を配したもので、横長から寸詰まりな剥片までを剥離する。剥片剥離工程の初期を示す接合資料である。

**K7S3** 剥片2点からなる接合資料。

イ→①K7.77(F)→②K7.38(F)

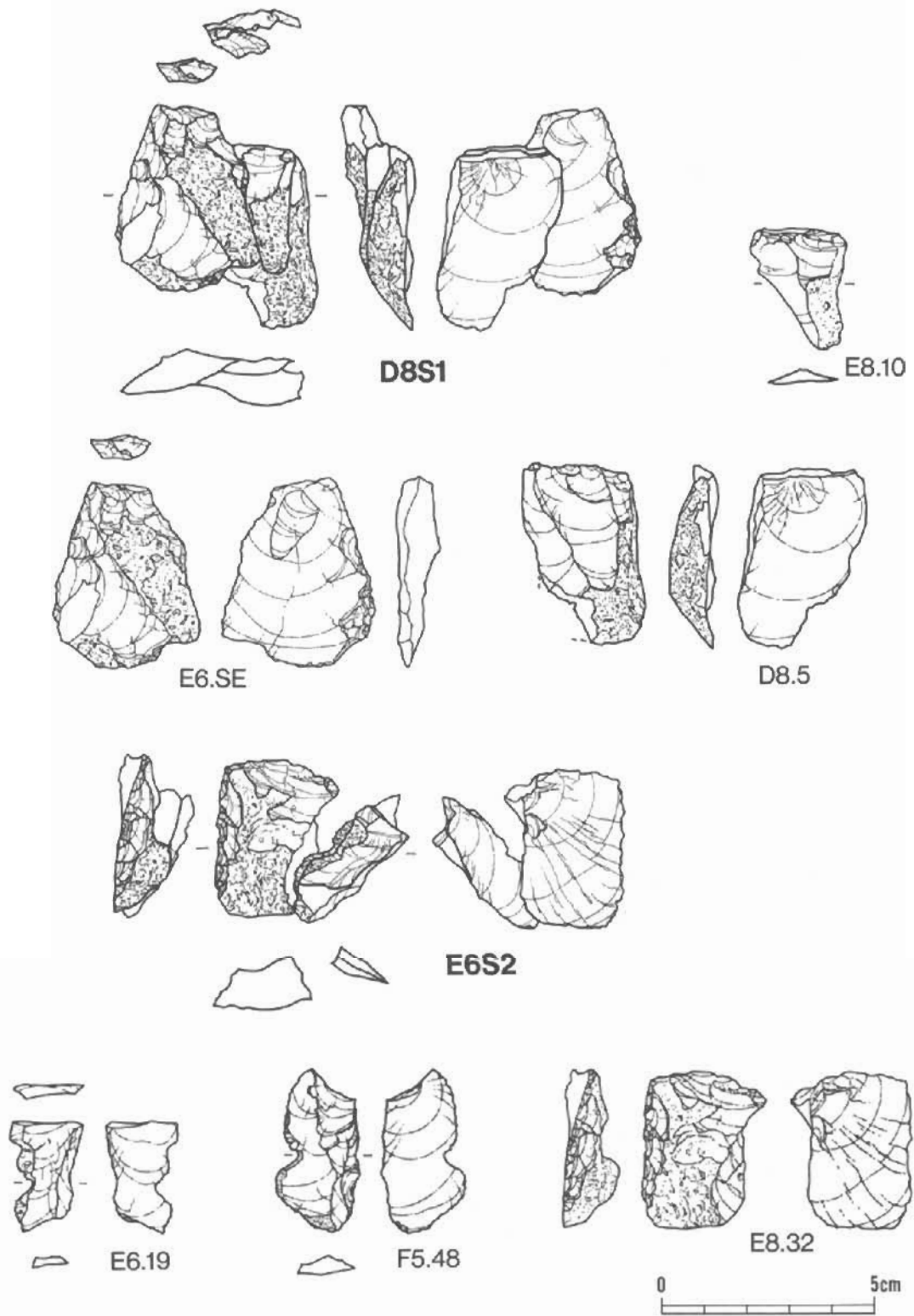
イ、石核の形状はよく分からないが、縦長、貝殻状剥片を少なくとも2枚先行して剥離している。①K7.77(F)、②K7.38(F)の2枚を打面・打面縁の調整なく連続剥離する。

縦長傾向の剥片を剥離したもので、その工程の中頃の接合資料であろう。

**D8S1** 加工痕有剥片1点、剥片2点で構成される接合資料。

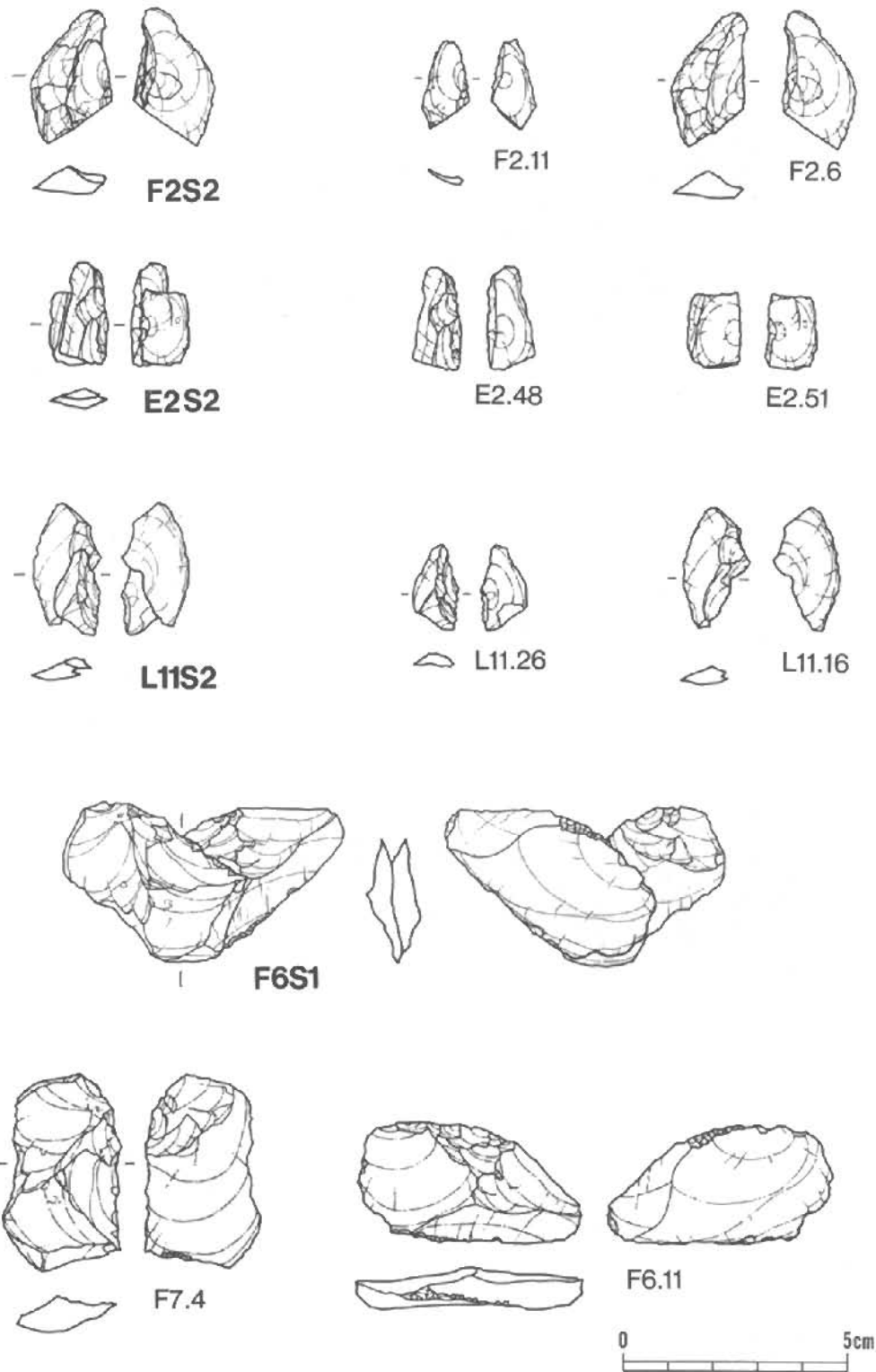
イ→①E6.SE(RF)→ロ→②E8.10(F)→③D8.5(F)

イ、円礫素材の石核、作業面は自然面を一部除去して設定される。打面は平坦である。①打面調整なくE6.SE(RF)が剥離される。→ロ、①の剥離面に打面を転じて数枚の剥片を剥離、打面再生の工程か。②打面・作業面を元に復してE8.10(F)、③D8.5(F)を剥離する。打面調整はない。



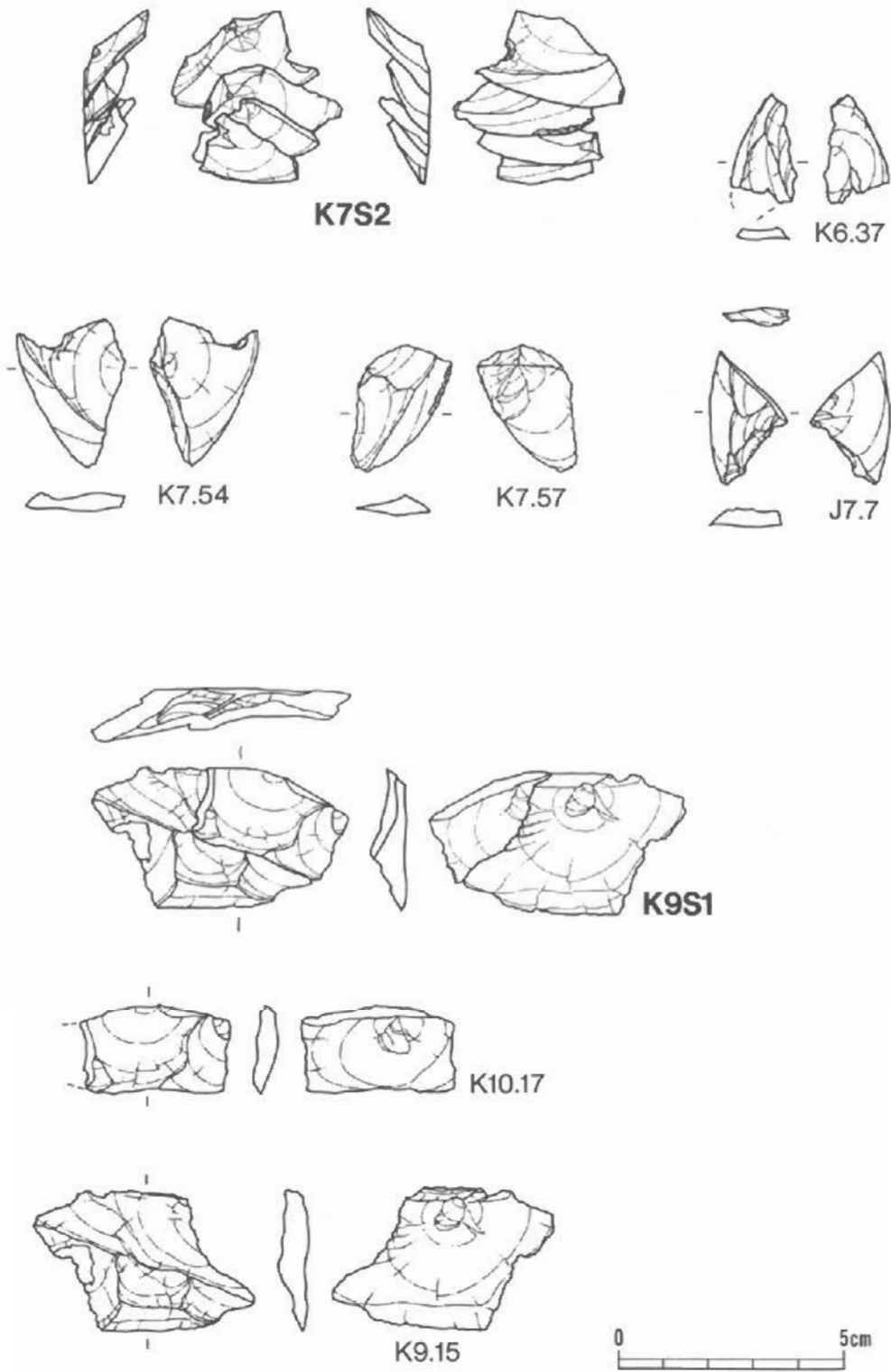
第276図 接合資料（サヌカイト）実測図14

第2節 下位文化層の遺物



第277図 接合資料（サヌカイト）実測図15





第278図 接合資料（サマカイト）実測図16

サヌカイト製円礫素材と推定される縦長剥片石核から、同一打面を更新しながら縦長剥片剥離を続けたもので、縦長剥片剥離技術工程初期の接合資料であろう。石核素材の形状は良く分からない。

**E6S2** 削器1点、剥片2点から構成される接合資料。

イ→①E6.19(F)→ロ→②F5.48(F)→ハ→ニ→③E8.32(SC)

イ、円礫素材の石核、作業面は自然面の一部を除去している。縦長剥片数枚を先行して剥離している。

①E6.19(F)に続いて、ロ、縦長剥片1枚、②F5.48(F)が連続して剥離される。ハ、自然面を除去、ニ、作業面を元に戻して縦長剥片を1枚剥離、③打面を左に移動してE8.32(SC)を剥離する。

サヌカイト製円礫素材の縦長剥片石核で、打面調整はないが打面縁調整を施して縦長剥片を剥離する。打面は1面である。縦長剥片剥離技術工程の中期段階であろう。石核素材の形状は不明である。

**F2S2** 剥片2点で構成される接合資料。

イ→①F2.11(F)→②F2.6(F)

イ、ポジティブな底面を持つ横長剥片石核から、先だて1枚の底面つき横長剥片を剥離し、①F2.11(F)と②F2.6(F)が、僅かの打面縁調整のみで剥離される。打面調整はない。

接合資料の右側縁は、石核段階で分割された面である。剥片素材の石核で、ポジ面が底面となっている。横長剥片剥離技術工程中期であろうか。

**E2S2** 剥片2点で構成される接合資料。

イ→①E2.48(F)→②E2.51(F)

イ、底面がポジ面の剥片素材横長剥片石核から剥片剥離が行なわれる。①E2.48(F)と②E2.51(F)が連続して剥離される。横長剥片剥離技術工程中期の接合資料であろう。

**F6S1** 使用痕有剥片1点、剥片1点よりなる接合資料。

イ→①F7.4(F)→②F6.11(F)

イ、厚手の石核で、底面はポジ面。先行して剥片3枚以上が剥離されている。先行した剥片は、貝殻状のものが多く、①F7.4(F)が剥離される。②打面調整を施した後、F6.11(F)が剥離される。

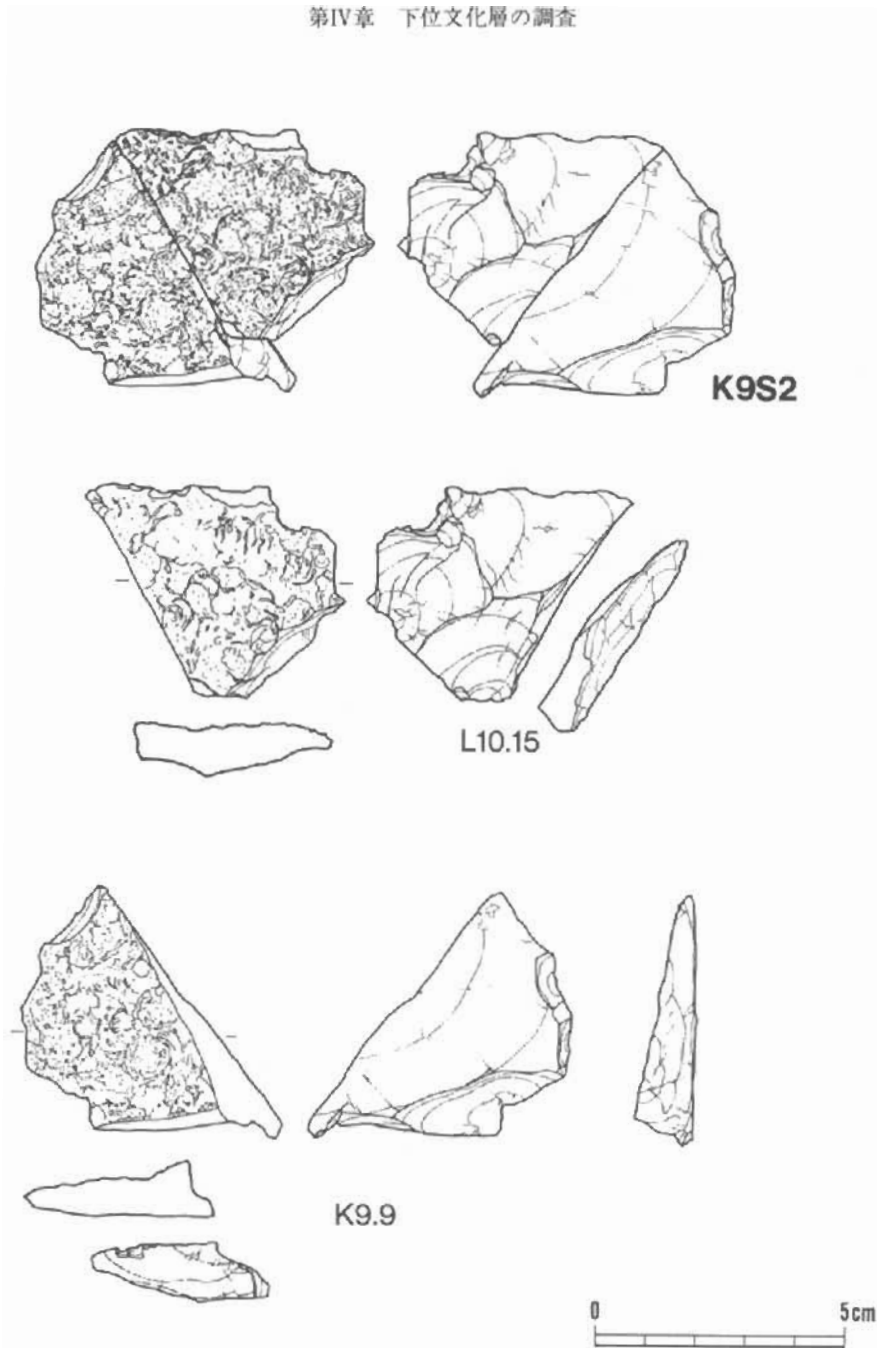
石核は、厚さ3cm程ある大型剥片素材のもので、ポジティブな底面を有する。必ずしも横長剥片のみを剥離したものではなく、貝殻状剥片も剥離している。打面縁調整が認められる。一応、横長剥片剥離技術工程中期の接合資料として評価したい。

**K7S2**

イ→①K7.54(F)→ロ→ハ→②K7.57(UF)→ニ→③J7.7(F)→ホ→④K6.37(F)

イ、素材剥片の打面部に作業面を設定した石核で、底面がポジ面である。少なくとも1枚の剥片剥離が行なわれる。打面部も数枚の剥離面によって構成されることから、表裏逆転する剥片剥離作業が行なわれたことが理解される。①K7.54(F)は、打面調整無しに剥離される。ロ、剥片1枚が剥離される。ハ、打面を作業面上に移動させ、剥片を数枚剥離する。②打面・作業面を元に復し、K7.57(UF)を剥離する。ニ、小剥片を剥離する。③J7.7(F)が剥離され、ホ、打面縁調整が施された後、④K6.37(F)が剥離される。

剥片素材の横長剥片石核で、素材剥片の打面部に剥離作業面を配し、打面と作業面を交互に交換しながら剥片剥離を続けたもので、やや左右に移動しながらも直線的に後退したものである。打面調整はない。接合資料は、ポジティブな底面を持つものが接合し、石核底面側から剥離したものだけで構成されている。石核上面から剥離された剥片は含まれない。横長剥片剥離技術工程中期の接合資料である。



第279図 接合資料（サヌカイト）実測図17

**K9S1** 剥片2点よりなる接合資料。

イ→①K10.17(F)→②K9.15(F)

イ、底面がボシ面の横長剥片石核から、先行して2枚以上の横長剥片剥離が行なわれる。①打面調整なく、K10.17(F)が剥離され、②打点を左に移動させてK9.15(F)が剥離される。

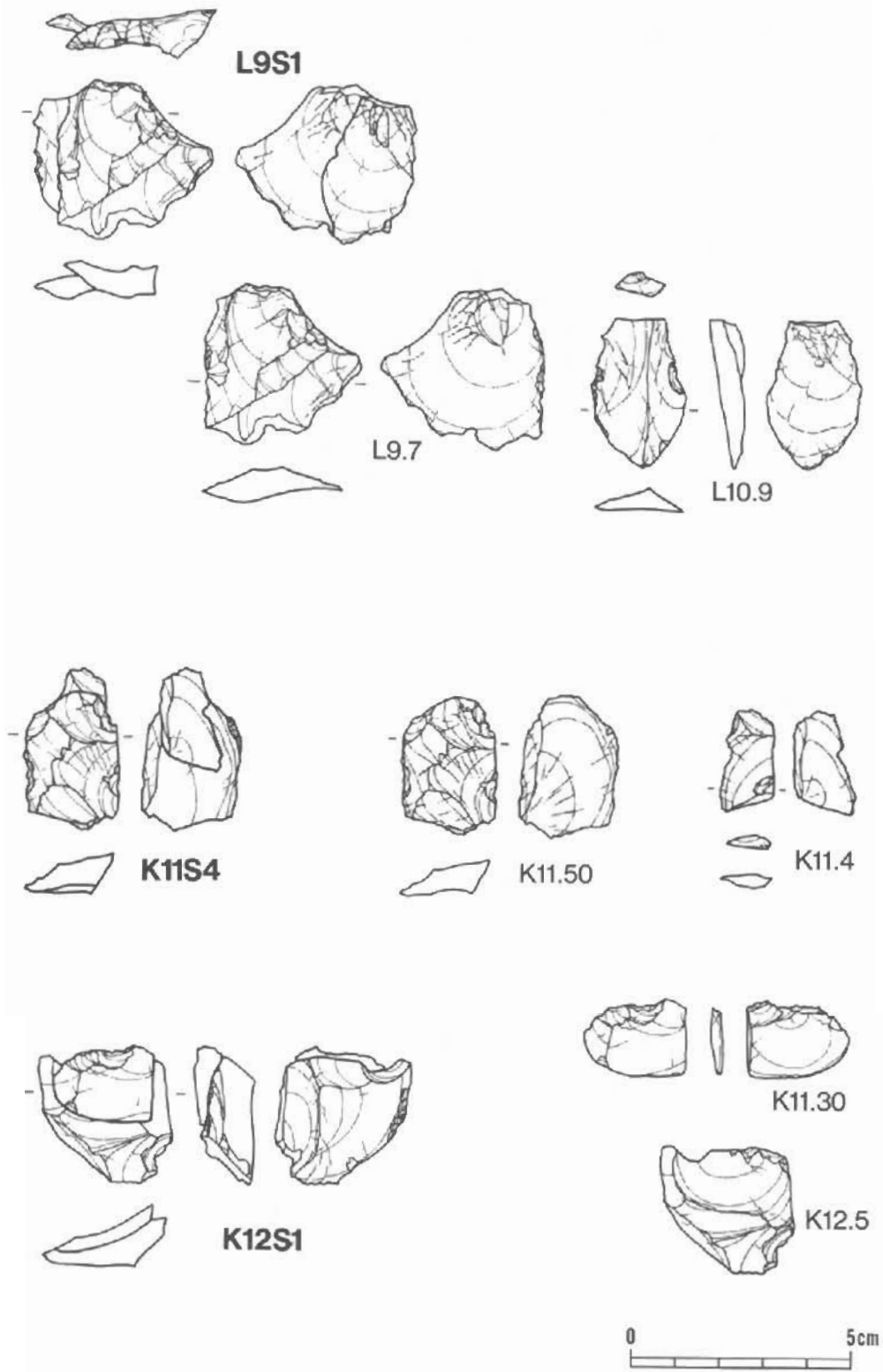
厚さ2cmほどの剥片素材の石核で、底面はボシ面のものから、打面上を左右に移動しながら剥片剥離を続けたもので、横長剥片剥離技術工程中期の接合資料である。

**K9S2** 加工痕有剥片1点、石核1点からなる接合資料。

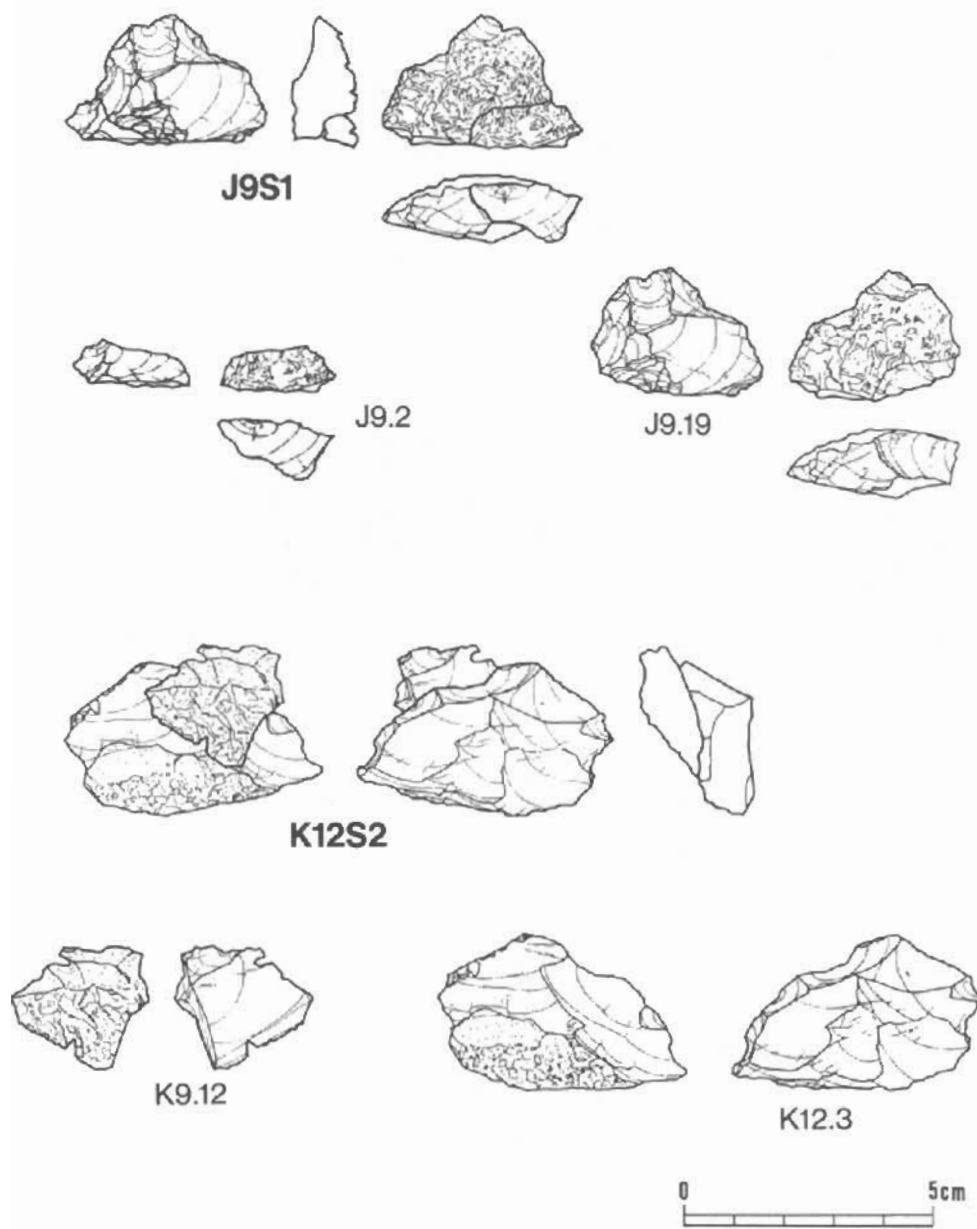
イ→ロ→①L10.15(CORE)

↳②K9.9(RF)

イ、本来、幅7.5cm、長さ6cm、厚さ1.3cmの大型剥片で、自然面が背面に大きく残っている。打面部は



第280図 接合資料(サヌカイト) 実測図18



第281図 接合資料（サヌカイト）実測図19

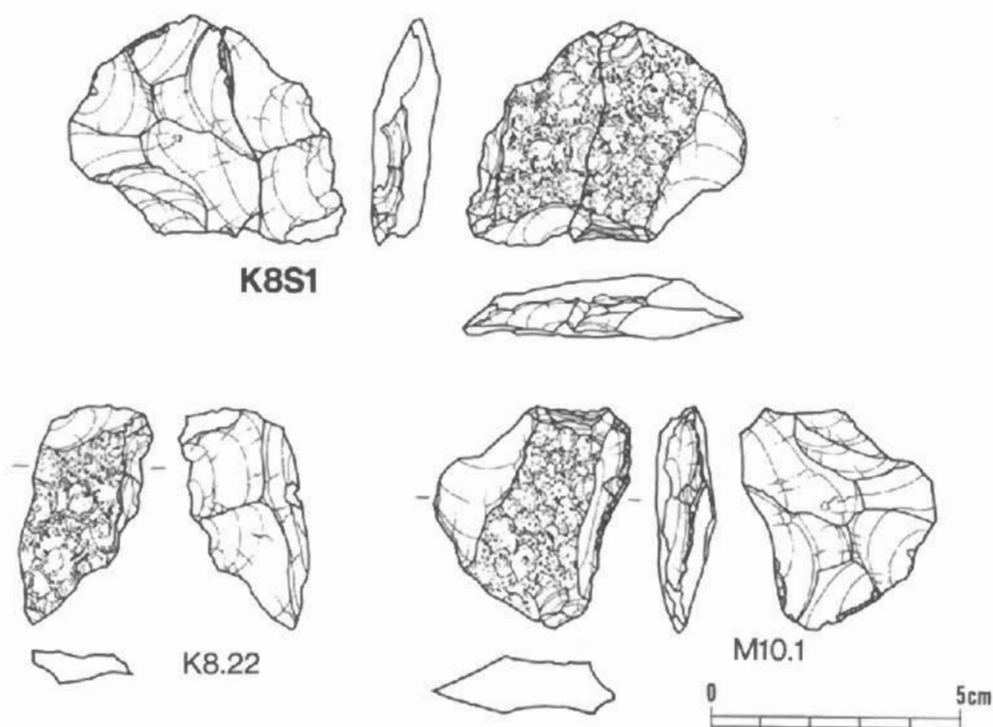
折断されて無い。これを剥片中軸で2分している。ロ、一方の分割は石核として利用され、折断面を打面として腹面から少なくとも3枚の剥片を剥離し、①L10.15(CORE)が残される。②一方は、剥片末端に加工が施され、K9.9(RF)となる。

L10.15(CORE)は、剥片を切断した小口部に打面を設定して、比較的縦長指向の剥片を剥離したものである。工程終末段階の接合資料である。

L9S1 使用痕有剥片2点よりなる接合資料。

イ→①L9.7(UF)→ロ→②L10.9(UF)

イ、打面と作業面を移動しながら縦長剥片を剥離する石核から、①旧作業面を打面として、打面調整を行なって後L9.7(UF)が剥離される。ロ、打面を左に移動させて剥片1枚が剥離される。②L10.9(UF)が続いて剥離される。



第282図 接合資料（サヌカイト）実測図20

**K11S4** 剥片2点よりなる接合資料。

イ→①K11.50(F)→②K11.4(F)

イ、幅広剥片が数枚先行して剥離された剥片素材の石核。①K11.50(F)が剥離され、②K11.4(F)が続く。

**K12S1** 使用痕有剥片1点、剥片1点よりなる接合資料。

イ→①K11.30(F)→②K12.5(UF)←ロ

イ、石核の形状はよく分からないが、貝殻状剥片を打面転移しながら多方向で剥離するもの。先行して少なくとも2枚が剥離されている。①打面縁の調整を施してK11.30(F)を剥離する。②K12.5(UF)が剥離されるが、ロ、②を石核に転用して打面部から剥片1枚が剥離される。

使用痕有剥片が転用された石核が認められる。

**J9S1** 剥片1点、石核1点からなる接合資料。

イ→①J9.2(F)→ロ→②J9.19(CORE)

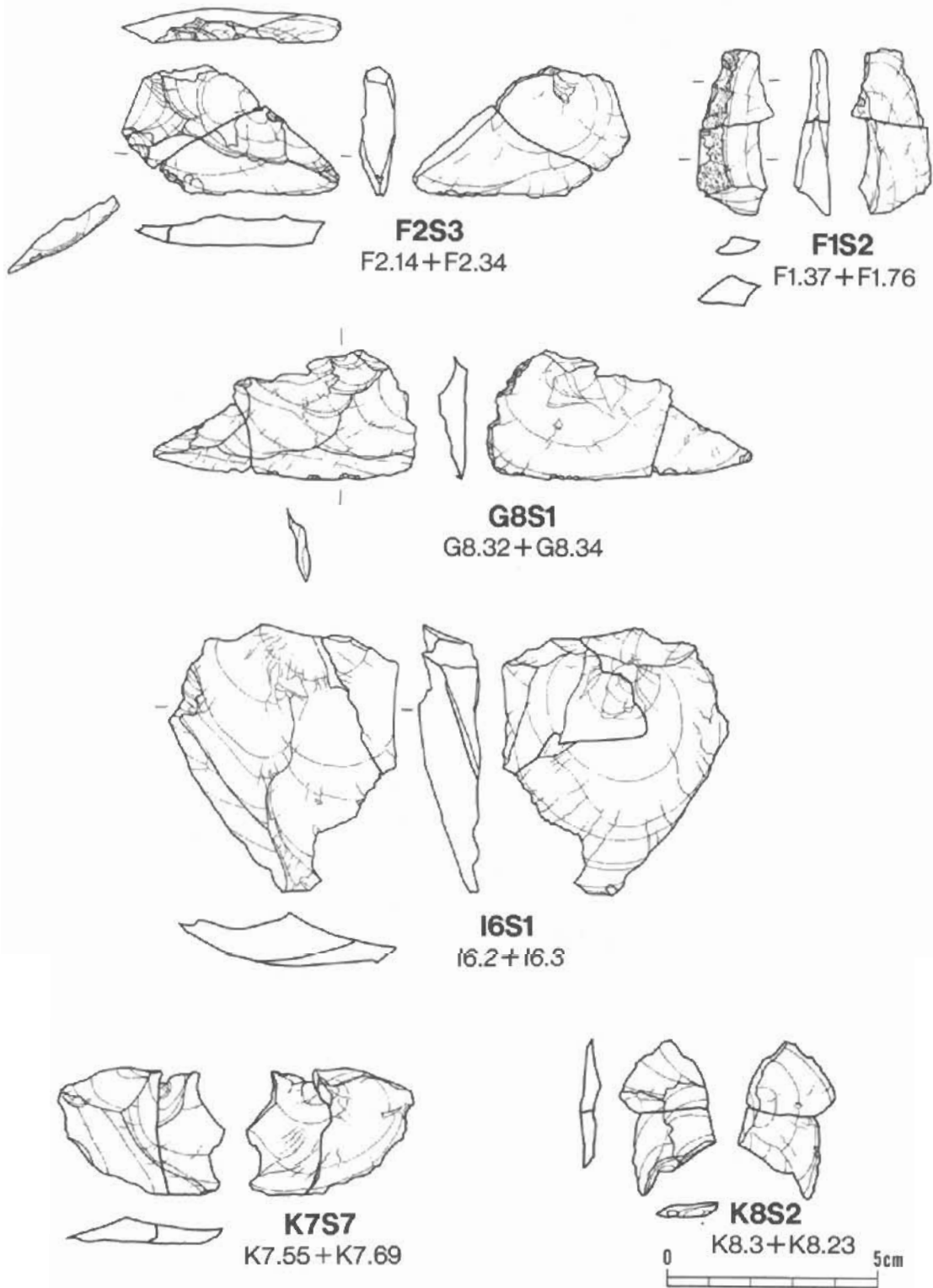
イ、自然面を背面に残した剥片素材の石核。素材剥片の打面部を剥離作業面にして少なくとも2枚の剥片を剥離する。①打面を作業面に転じてJ9.2(F)を剥離、ロ、作業面側縁を調整するが、剥片剥離作業を終了して、②J9.19(CORE)が残る。

全体として、矮小化された横長剥片剥離技術である印象が強く、工程後期の接合資料である。

**K12S2** 剥片1点、石核1点からなる接合資料。

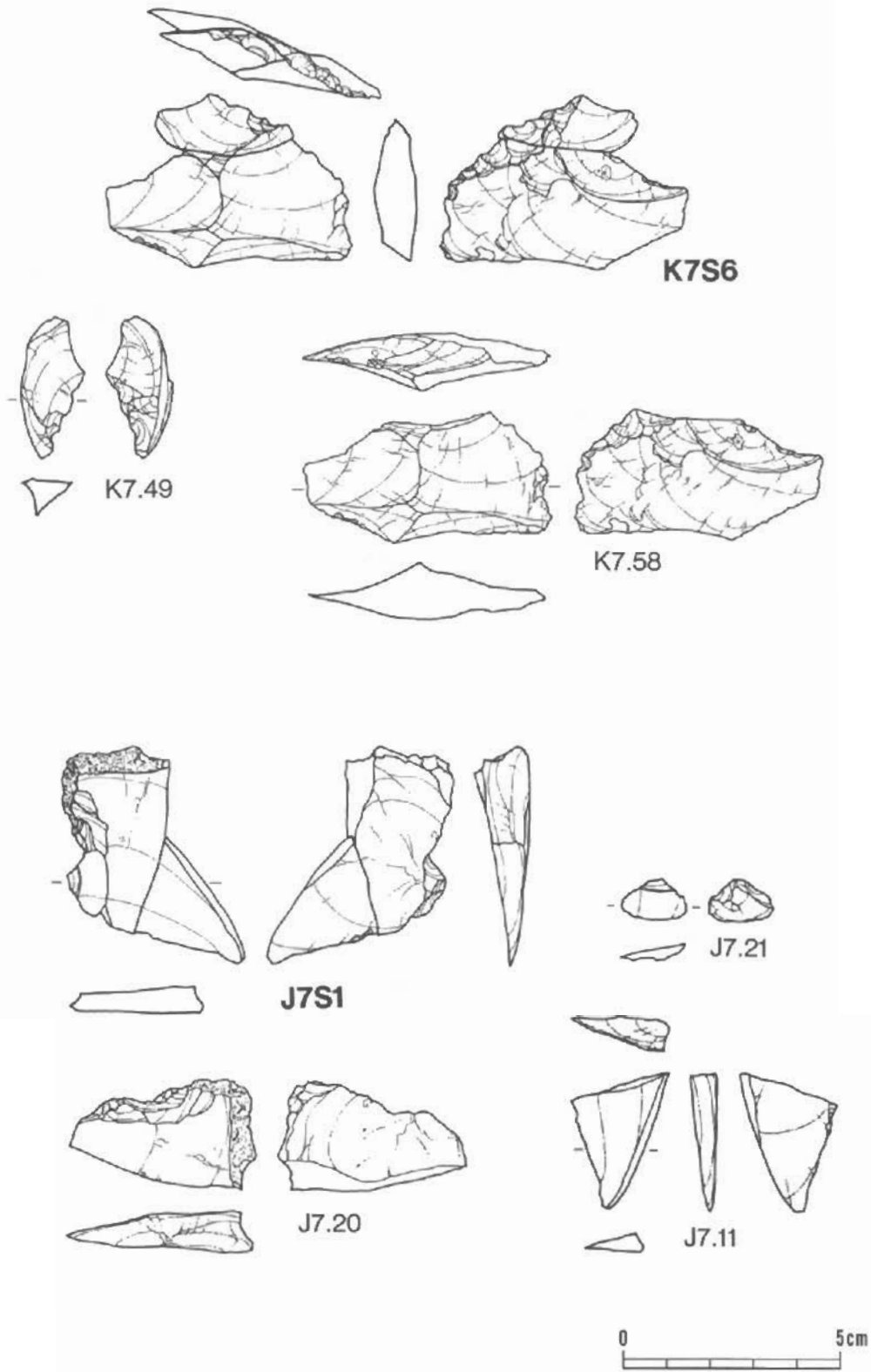
イ→①K9.12(F)→ロ→ハ→②K12.3(CORE)

イ、背面に大きく自然面を付着させる大型剥片を素材として、自然面と腹面の両面から剥片剥離を開始する。①K9.12(F)が自然面側から剥離される。ロ、続いて右側縁から剥片1枚が剥離される。ハ、打面を背面側に転じて1枚の剥片が剥離される。②K12.3(CORE)が残される。



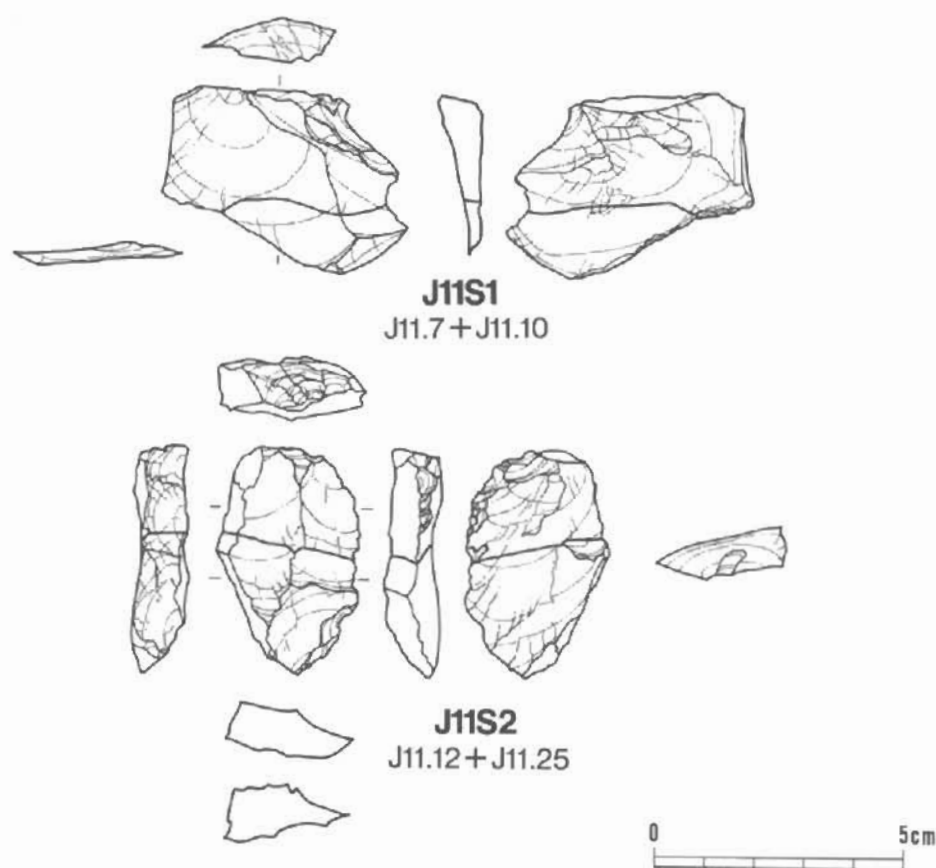
第283図 接合資料（サヌカイト）実測図21

第2節 下位文化層の遺物



第284図 接合資料（サヌカイト）実測図22





第285図 接合資料（サヌカイト）実測図23

剥片素材の石核から底面の付着した剥片を剥離しているが、打面・打面縁の調整は認められない。工程後半の接合資料である。

**K8S1** 剥片1点、石核1点からなる接合資料。

イ→①K8.22(F)→②M10.1(CORE)

イ、既に剥片剥離が進行して残核状態になった石核。自然面の付いた大型剥片の腹面に作業面を設定し、その周辺から求心的に剥片を剥離したもの。少なくとも5枚の剥片が剥離されている。①石核の右半からK8.22(F)を腹面からの加撃で割取る。②M10.1(CORE)が残る。

剥片剥離工程終末の接合資料である。

**F2S3** 加工痕有剥片2点からなるB種接合資料。F2.14(RF)+F2.34(RF)

**F1S2** 加工痕有剥片1点、剥片1点からなる接合資料。

イ→ロ→①F1.76(F)  
②F1.37(RF)

イ、幅5cm程の剥片を中央から2分。ロ、一方の上半を更に分割。①F1.76(F)が残る。②一方はF1.37(RF)となる。

**G8S1** 使用痕有剥片2点からなるB種接合資料。G8.32(UF)+G8.34(UF)

**I6S1** 剥片2点からなるB種接合資料。I6.2(F)+I6.3(F)

**K7S7** 剥片2点からなるB種接合資料。

①(K7.69(F)+K7.55(F))

↳イ

①(K7.69(F)+K7.55(F))が剥片の中軸で分割される。イ、K7.55(F)から碎片1点が剥離される。

**K8S2** 剥片2点からなるB種接合資料。K8.3(F)+K8.23(F)

**K7S6** 加工痕有剥片2点からなる接合資料。

イ→①K7.49(RF)→ロ→②K7.58(RF)

イ、削器状に整形された加工痕有剥片。①その刃部の一端を底面からの加撃でK7.49(RF)を剥離、ロ、打面を入れ換えて剥片1枚を剥離、②K7.58(RF)が残る。

削器の再調整過程もしくは、台形様石器の折断加工工程の可能性のある接合資料である。

**J7S1** 加工痕有剥片1点、剥片2点からなる接合資料。

イ→①J7.21(F)→ロ→③J7.20(F)

↳②J7.11(F)

イ、幅6cm、厚さ1.3cmの大型剥片。剥片の上下に分割。①上半のボジ面を打面としてJ7.21(F)を剥離する。ロ、若干の側縁に調整を施す。③J7.20(F)が残る。②一方の下半では、更に分割されてJ7.11(F)が残る。

素材剥片の打面部除去と過半部の分割工程が認められる。

**J11S1** 剥片2点からなるB種接合資料。J11.7(F)+J11.10(F)

**J11S2** 使用痕有剥片1点、剥片1点からなるB種接合資料。J11.12(UF)+J11.25(F) (山口)

### 3. 剥片剥離技術

ここでは、石核や剥片、接合資料・個体別資料のあり方から、剥片剥離技術を検討する。石核と接合資料および個体別資料の観察から、結果として剥片剥離技術が5類に大別できた。サヌカイトとチャート等の石器群には、剥片剥離技術の構成に大きな違いがあると考えられるので、サヌカイトとチャート等を分離して記述する。板井寺ヶ谷遺跡下位文化層の石器群の剥片供給が、どの様な剥片剥離技術から行なわれたかを検討する。さらに剥離・生産された剥片が石器製作上どの様に特定の器種と関連するかについても、考慮したい。

#### a. サヌカイト

サヌカイト製石器類の観察と接合資料の分析は、下位文化層の剥片剥離技術が大きく3つに区別できることを示している。一つは剥片素材の石核の側縁に設定した剥離作業面から横長または貝殻状・不定形剥片を剥離するもの(S1類)、一つはある程度の高さのある石核から縦長剥片・貝殻状・不定形剥片を剥離するもの(S2類)、もう一つは両者の中間的な様相をもつものなど判断に苦しむ一群(S3類)である。剥片剥離技術上の個々の属性は、それぞれの類型にも共有されるものが多いことから、厳密に区分できないものが多い。本来、S1類等の石核素材剥片を供給する工程資料等(S4類)が存在するはずであるが、板井寺ヶ谷遺跡下位文化層のサヌカイト製石器群にはS4類に相当する良好な接合資料、石核・剥片類は認められない。

下位文化層の一般的な技術基盤を把握するために剥片剥離技術の類型判別が可能なサヌカイト製接合資料40群を観察したところ、各類別群数はS1類が接合資料21群、S2類が接合資料4群、S3類が接合資

料14群を持つことが判明した。S1類が主体となる技術基盤を提供する剥片剥離技術であることが判明した。3類それぞれは、更に細分が可能であるので、石核・剥片などの観察結果も参考にしつつ、各類別に記述を進める。

**S1類** (E2S1, E2S2, E2S3, E6S1, F2S2, F2S4, F2S5, F6S1, F8S1, J7S2, K6S1, K6S2, K7S1, K7S2, K7S4, K9S1, L7S1, L10S2, L11S1, L11S2, M11S1)

サヌカイト製石器群の剥片剥離技術S1類は、大型剥片を横に寝かせて、腹面・背面を打面として、その側縁に剥離作業面を設定、横長・貝殻状の剥片を剥離するものである。この類に含まれると考えられる接合資料は、21群ある。打面・作業面の設定部位によって、更に3つに細分できる。内容判断の可能な接合資料10群は、S1a類が接合資料3群、S1b類が接合資料なし、S1c類が接合資料7群を含む。S1c類が主体であることが理解される。

S1a類は、大型剥片の打面部に剥離作業面を設定、背面側を打面として、作業面幅いっぱいに横長剥片を剥離するもので、打面調整が施される場合が多いもの。打面縁調整も認められる。石核との対応は、A1類の一部が考えられる。剥片類では翼状を呈する横長剥片や大型横長剥片の一部がこの剥片剥離技術の所産である可能性が高い。接合資料では、F2S4, E6S1, L7S1の3群がある。

S1b類は、大型剥片の打面部や末端に剥離作業面を設定、おもに背面側を打面として、作業面より剥片の幅が狭いため作業面上を左右に移動しながら横長剥片を剥離するもので、打面縁調整の施される場合が多く、打面調整が施されることは少ない。石核との対応では、A2類が考えられる。剥片類では、打面部に反りのない横長剥片・貝殻状・不定形剥片の一部がこの剥片剥離技術の所産である可能性が高い。接合資料には認められない。

S1c類は、大型剥片の打面部や両側縁・末端に剥離作業面を設定、素材剥片の表裏両面を打面として交換し、作業面より剥片の幅が狭いため作業面上を左右に移動しながら横長または貝殻状の剥片を剥離するもので、打面縁調整が一部に認められる他、打面調整が施される場合はまれである。非接合資料の検討では、石核ではB1・2類が考えられる。剥片類では、貝殻状・不定形剥片のほとんどと横長剥片の一部がこの剥片剥離技術の所産である可能性が高い。接合資料では、E2S1, F2S5, F8S1, J7S2, K6S2, L10S2, L11S1の7群がある。

S1類全体を通して、調整技術の未発達を観察され、打面縁調整は散見されるが、一部を除いて打面調整は希である。S1a類が少なく、S1c類が多く存在する理由は、打面調整・打面縁調整技術の未発達の結果、打面と作業面の位置を固定し続けることは困難で、打面と作業面の移動・転移が激しくならざるを得なかったためであろう。S1類全体での技術的様相は、これらが技術的に独立性のあるものではなく、一連のものであることを示している。

**S2類** (D7S1, D8S1, E6S2, E8S1)

第2類は、縦長剥片を比較的背の高い石核から剥離するものである。石核では、検出されたものはない。剥片では、縦長剥片や貝殻状・不定形剥片の一部がこの剥片剥離技術の所産である可能性が高い。接合資料では4群がある。S2類の所産であると考えられる資料は点数が少なく、内容が不明な点が多い。接合資料D8S1・E6S2は、剥片類の背面が大きく自然面に覆われており、本来サヌカイト製円礫を素材としたものであることが知れる。サヌカイト円礫から打面の更新を繰り返しつつ縦長剥片を生産し、打面調整は認められないもので、S2類の剥片剥離技術の一端が窺われる。石核類は乏しく、接合資料中に含まれないため、S2類の剥片剥離技術の細部工程は不明である。打面調整は認められない。

**S3類** (F2S1, G2S1, G5S1, J9S1, K7S3, K8S1, K9S2, K11S2, K11S3, K11S4, K12S1, K12S2, L9S1, L10S1)

S3類は、下位文化層のサヌカイト製石器群で行なわれた剥片剥離作業の内、S1類、S2類、S4類に位置づけることが困難な資料すべてが含まれる。接合資料には14群がある。S1類・S2類の剥片剥離作業中に生じたものでも、調整剥片のみの接合資料などは、本類に含まれてしまう場合が考えられる。S3類には、サヌカイト円礫や剥片を石核の素材とするものが認められる。剥片剥離も、打面を一面に固定して左右に移動しつつ貝殻状・不定形な剥片を剥離するもの、剥片素材の石核の周囲から求心的に剥片剥離をするものがある。全体として、下位文化層の定型的な手続きを踏まない剥片剥離技術が一括されたものである。ある程度活発な剥片剥離作業が行なわれれば、付随的に生産されるような接合資料であると評価できるかも知れない。

#### **S4類**

S4類は、S1類等の剥片素材の石核を使う剥片剥離技術の石核素材を供給する技術であるが、接合資料・石核等に本類に当てはめられる資料はなかった。一般的に考えると、S1～3類の石核の素材剥片は本類の剥片剥離作業の製品であり、また下位文化層中の大型剥片など石核素材として利用可能なものの内、S1～3類の所産と考えられるものを除いたものも、その可能性がある。下位文化層中でのS4類の剥片剥離技術の実態は不明であるが、他の遺跡でのS4類剥片剥離作業の所産が搬入されていることになろう。

S1類から生産されたと考えられる剥片は、横長剥片や貝殻状・不定形剥片で、石核を含む接合資料中には見いだせなかったが、サヌカイト製ナイフ形石器や削器等に利用されている。注目すべきは、下位文化層でS1類の石核と接合した剥片類の大きさが極小型のものばかりで、大量に存在する中・大型の横長剥片は全くの非接合である点である。下位文化層でS1類の剥片剥離作業の結果生産されたのは極小剥片に限定され、中・小型の剥片は搬入品である可能性も考慮できるであろう。中・大型剥片の接合は、B種接合や剥片同志の接合であった。連続した剥離作業の剥片が搬入された場合、搬入先での接合例ともなり得るので、必ずしも遺跡内での剥片剥離作業の展開を示すわけではない。S1類で遺跡内で生産された剥片は、選択的であった可能性がある。接合資料中に認められる極小剥片は、サヌカイト製極小型ナイフ形石器とはほぼ対応する大きさである。

S2類の縦長指向の剥片は、削器や加工痕・使用痕有剥片となっている。

下位文化層のサヌカイト製石器群の剥片剥離技術は、まとめてみると、S1類を主体とし、その他の剥片剥離技術が補完的に構成されることが理解されよう。細分されたS1a類とS1b類、S1c類は、いずれも横長剥片・貝殻状剥片を目的とした剥片剥離技術で、いずれも剥片素材の石核の側縁に作業部を設定する。S4類は、サヌカイト製横長剥片剥離技術が、基本的に剥片素材の石核に依存する事から、両者が組み合わせて存在しなければいけないが、発見されなかった。また、S4類の石核となるべき原石塊等は発見されず、当然板井寺ヶ谷遺跡の周辺にも原石産地は存在していない。剥片剥離技術S4類とS1類を一貫した工程として見なした場合、その工程の遺跡内での完結性には欠陥があることになる。剥片生産の選択性ととも、次の項にて再論したい。

#### **b. チャート等**

チャート等製石器類の観察と接合資料・個別別資料の分析は、下位文化層の剥片剥離技術が大きく2

つに区別できることを示している。一つはチャート等の亜円礫か塊状の分割材を石核とし、ある程度剥片剥離が進行して打面・作業面の変更が必要な場合、打面と作業面を多面的に転移して、縦長剥片・貝殻状剥片を剥離するもので(C1類)、一つは分割材や板状材の側縁に作業面を設定し、上面一面を打面として、左右に移動しながら縦長・貝殻状剥片を剥離するもの(C2類)である。他に、両者の石核素材を供給する円礫や角礫を分割する段階(C3類)がある。ある程度剥片剥離工程が復元できるような接合資料を含む個別別資料30個体を観察してみれば、個別別資料数でC1類が23個体、C2類で5個体、C3類では2個体が含まれ、C1類が主体であることが知れる。各類別に記述を進める。

**C1類** (個別別資料番号 1・2・3・18・21・41・44・45・48・57・59・61・62・83・88・96・97・100・101・106・119・132・133)

C1類は、亜円礫か塊状の分割材を石核とし、打面と作業面を多面的に転移して、縦長剥片・貝殻状剥片を剥離するものである。個別別資料23個体が分類できる。チャート製石核との対応では、B1類、B2類が該当すると考えられる。C1類は、生産された剥片の形状や打面・作業面の転移の仕方などによって、さらに細分は可能である。C1a類は、その中でも縦長傾向の強い剥片を生産したもの、C1b類は、貝殻状・不定形剥片を主に剥離したもの、としよう。また、作業面の固定的なものと同様に作業面転移の激しいものの2つにも細分が可能である。

C1a類には、個別別資料No21・44・57・96・100・106・132・133の8個体があり、個別別資料中には縦長剥片が認められたり、接合したりする。縦長剥片以外の貝殻状剥片・不定形剥片とも含む個体がほとんどで、剥片剥離作業中に、両者が区別なく生産されていたようである。これらの内、同一剥離作業面上での打面が固定的なのは、No21・57・132の個別別資料で、同一作業面上での打面転移の激しいものには、No44・96・100・106・133の個別別資料が挙げられよう。しかし、両者の剥片剥離技術の構成属性、生産される剥片や残核の形状には大差ない。

C1b類には、個別別資料No1・2・3・18・41・45・48・59・61・62・83・88・97・101・119の15個体があり、C1a類よりも寸詰まりな剥片が接合したり、個体の非接合資料中に含まれている。ここでも、同一の剥離作業面上での打面が固定的なもの、No2・18などと、打面が作業面の周囲を移動するもの、No45・59・61・62・88・97などの2者が認められる。両者の中間的な個体も多く認められ、両者の間には特に技術的な構成属性、生産される剥片や残核の形状にも大差はない。

C類全体では、ほとんどの個体も拳大前後の亜角礫または板状材を素材としているが、表皮及び節理面の除去が、剥片剥離作業の前に徹底して行なわれた個体は乏しい。打面調整はほとんど認められず、僅かに打面部側縁に調整を施したものが認められるに過ぎない。調整技術はきわめて未発達である。打面の転移の激しさは、目的剥片と調整剥片との区別のない剥片剥離技術が、調整作業をかねていた証拠であろう。

**C2類** (個体番号23・24・37・60・131)

C2類は、分割材や板状材の側縁に作業面を設定し、上面一面を打面として、左右に移動しながら縦長・貝殻状剥片を剥離するものである。打面と作業面の転移は認められない。個別別資料5個体が分類できる。

C2類には、塊状を保つ分割材の正面に剥離作業面を設定し、連続して縦長・不定形剥片を剥離したものの(C2a類、23・37)、亜角礫の側面から縦長剥片を剥離したものの(C2b類、60)、板状材の側面から貝殻状・不定形剥片を剥離したものの(C2c類、24・131)の3つに細分が可能である。石核との対応で

は、チャート等製のA1類、C1類がほぼ該当し、B1類の1部も形状的に近いものがある。打面や打面縁の調整は、ほとんど認められない。

全体として、石核の厚みが薄いほど生産される剥片の形状が不定形・幅広傾向になっているようである。特に縦長剥片のみを目的とした技術ではなく、石核素材の形状に大きく左右されているように見える。また、本類の母岩・石核はC1類のものよりも大型で、剥片剥離作業の進展にしたがって、剥片剥離技術が変移する場合が多かったと考えられるが、事実、C2a類の個別別資料No23には打面と作業面の転移の始まった石核があり、個体としてはC1類へと変移し、C2c類の個別別資料No24は、剥片剥離作業途中で石核を分割し、剥片素材の石核数個に細分され、各種の石核となっている。本類の遺存数の少なさは、剥片剥離作業の進行にしたがって石核が縮小していくのに合わせ、打面と作業面の転移が行なわれ、C2類～C1類に変更される個体が多かったことを示すのであろう。

本類は、拳大以上の垂角礫または分割材を素材とし、自然面や節理面上に打面を設定するものが目立つ。打面調整はほとんど認められない。

#### C3類 (個体番号135・136)

C3類は、大型円礫や塊状材を石核などの素材として利用できるよう、分割していく工程である。本来、この後にC1類、C2類等の様に剥片剥離が行なわれるはずであったものが、なんらかの事情で剥片生産にまで至らなかった個体を含んでいる。いわば剥片剥離作業最初期の放棄個体であるとも言えよう。個別別資料2個体が含まれる。

チャート製石器群のC1・2・3類の技術には、個々の段階で共通の様相が強く、相互に互換性の無い手順として成立した類型ではない様相が看取される。C3類は、C1・2類の目的剥片剥離作業に先立つ最初期の工程で中断した個体・石核などであり、C1・2類と比較できる剥片剥離工程ではない。また、C1・2類では、打面や打面縁の調整の貧弱さ、剥片剥離に際して打面・作業面の転移を行なう段階の決定などに共通する要素が認められる。母岩の形状・材質によって、適時手順が選択された場合が多かったものと推定できる。技術的に、各類型間には、技術的互換性を失うほどの差異が無いとみなして良からう。すべては共通の技術体系の中にあると評価できよう。

チャート製石器群の技術基盤であるC1・2類は、縦長剥片や貝殻状・不定形剥片を生産する。チャート製石器群の個々の器種は、剥片剥離作業の進展で生産される各種の剥片の中で形状がふさわしいものを適時選択するようである。ナイフ形石器では、縦長傾向の中・大型剥片がおもに使用されている。挿器・削器は、個々の石器の大きさに差異があるものの、厚手の大型剥片が多く使用されている。それぞれの素材剥片は、個別に目的的に剥離されたのではなく、任意に生産物から選択された可能性が高い。

石器素材剥片は、基本的に、遺跡内の剥片剥離作業によって生産されたと考えて、大過なからう。

### 4. 接合資料・個別別資料と石器類の作業工程遺存状況

#### a. サヌカイト製接合資料・石器類の作業工程遺存状況

サヌカイト製石器類の剥片剥離作業上の工程段階を正確に判別するのは、個別別分類が事実上不可能で、接合作業に不向きという石材特性により多大の困難がある。ここでは、接合資料と石器類の組成・形状から、サヌカイト製石器群が、接合資料を中心として、どの様な遺存状況をしているかを分析したい。

サヌカイト製石器群の剥片剥離技術の展開で、技術の分類が可能であったのは、合計40群の接合資料

第18表 サヌカイト剥片剥離作業工程遺存状況

サヌカイト	横長剥片剥離技術	縦長剥片剥離技術	貝殻状・不定形剥片剥離技術
I			
IIa	K7S1 K7S4	D7S1 D8S1	G5S1
IIb	E2S2 F2S2 F6S1 K7S2 K9S1 L11S2 M11S1	E6S2 E8S1	F1S1 G2S1 K7S3 K11S2 K11S3 K11S4 K12S1 L9S1 L10S1
IIc	E2S1 E2S3 E6S1 F2S4 F2S5 F8S1 J7S2 K6S1 L7S1		F2S1 J9S1 K8S1 K9S2 K12S2
IIb+c	K6S2 L10S2 L11S1		

で、S1類は、接合資料で21群が認められた。S2類は、接合資料で4群が認められた。S3群は、接合資料で15群が認められた。

接合資料には、その他に剥片から石器の整形をする工程や、本来一つの石器類が破損・折断したものが接合しただけの接合資料がある。石器の整形段階の接合資料は、4群（F1S2, F2S1, J7S1, K7S6）、破損・折断接合（B種接合）は8群（F2S3, G8S1, I6S1, J11S1, J11S2, K7S7, K8S2, K11S）がある。なお、破損・折断接合（B種接合）は、他の接合群中にも含まれる。

まず、接合資料51群の内、剥片剥離技術の判別できる40群について、作業工程を判別してみる。板井寺ヶ谷遺跡下層のサヌカイト製剥片剥離技術の主体であるS1類剥片剥離作業には、1. 原石から大型剥片を生産する工程、2. 大型剥片を石核として目的剥片剥離を行なう工程の2工程があり、後半の工程は、前・中・後期の3段階に細分が可能である。その他の剥片剥離技術類型も、1. の工程を石核の準備段階として読み替えば、2区分、4細別で対応する事ができる。それらを、原石から石核素材の大型剥片を生産したり、石核の準備を行なう工程を第I段階、準備された石核から目的剥片を剥離する第II段階、前期をIIa、中期をIIb、後期をIIcとする。もとより、サヌカイト製接合資料の剥片剥離工程の作業の意味の判別には、良好な接合資料に乏しく個体識別のできない状況であり、判然としない資料が多いことを断っておく。一応一つの目安として、断片的な接合資料が、どの工程段階で残されたかを判断したに過ぎない。従って、この分析結果を用いた分析を通しての解釈は、個体の搬出・入を含めて消極的にならざるを得ない。

接合資料40群を分類すれば、第18表になる。

第I段階は、接合資料群中には認められず、40群すべてが、第II段階の接合資料であることが判別される。このことは、石核の素材となる大型剥片の生産や石核の準備が、板井寺ヶ谷遺跡内で行なわれなかったことを示す。

剥片剥離技術S1類21群では、IIc段階が最も多く9群、中～後期のIIb+cが3群あることから、合計12群、57%が第II段階後半を含んでいる事が理解される。前期、中期の資料は9群43%に留まり、S1類では、第II段階後半の工程に比重があることが知れる。全般に接合資料の接合数は少なく、中～後半期などの比較的長く剥片剥離作業が持続した接合資料は21群中3群14%に留まるなど、全体として短期間の剥片剥離作業が行なわれた接合資料が多いことが知れよう。遺跡内での剥片剥離作業の終了率は、57%と高率である。

S2類では、第II段階前期・中期に各2群がある。後半の工程は認められず、剥片剥離を行なった石核が遺跡外へ持ち出されたか、接合資料自体が搬入品である場合も有り得るのか、判断も付けにくい。

S3類15群では、第II段階中期が最も多く9群60%、前期1群、後期5群33%となる。約3分の1が遺

跡内で剥片剥離作業を終了していることになる。長期間の剥片剥離作業が行なわれた接合資料は存在しない。

S4類の目的剥片剥離作業を行なうための石核素材を供給する石核または接合資料は存在せず、搬入された大型剥片や石核に頼っていることが知れた。

全体で観察すれば、第I段階0群0%、第II段階前期5群13%、中期18群45%、中～後期3群8%、後期14群35%となる。遺跡内で40群の内17群43%が剥片剥離作業を終了させていることになる。中期・前期を含むのは26群65%であるが、2期にわたる接合資料は、中～後期の3群14%のみで、全体としてサヌカイト製接合資料は、遺跡内で長期間の剥片剥離作業を行なったものに乏しいことが理解されよう。

さて、前項で指摘したS1類の剥片剥離作業が極小剥片を目的としているという点についても、併せて考えてみよう。

S1類が目的とするのは、横長剥片を主体としたもので、サヌカイト製石器群の技術的基盤となっている。極小剥片は、極小ナイフ形石器の素材となりうる形状を有する以外、他の素材剥片としての利用は認められない。他の中・大型の石器類は、少なくとも石核との接合資料を見いだすことはできなかった。中・大型の横長剥片などは、実は搬入品を主体としており、遺跡内で生産されたのは極小剥片に限定されている可能性も推定できよう。遺跡内で素材剥片を供給できたのは、極小ナイフ形石器や縦長剥片素材の一部の削器、加工痕・使用痕有剥片で、その他の石器の素材剥片は、搬入品が主体になる。

剥片剥離工程の遺存状況の分析から知れた剥片剥離作業の段階的分離と目的剥片の選択的生産と搬入がある背景には、板井寺ヶ谷遺跡の石器群の性格と構造の問題が深く関わっていると推測することができる。通常行なわれるように石器群を技術的・編年的に記述するのみでは、さきに指摘したような下位文化層の剥片剥離工程の遺存状況のいびつさと生産剥片の選択性を把握し、また、この背景を説明することはできないであろう。第VI章第3節で、この石器群の性格と構造について考えてみたい。

#### b. チャート等製個体別資料の作業工程遺存状況

チャート製石器群の場合個体識別・接合作業は、サヌカイトに比べてはるかに容易である。このため、個体別に作業工程遺存状況を検討することが可能である。ただ、先の剥片剥離技術の検討の項で分析したように、剥片剥離技術類型間の技術的共通性が強く、類型別に遺存工程判別をする根拠に乏しい部分がある。また、板井寺ヶ谷遺跡下位文化層のチャート製石器群の剥片剥離技術は、石刃技法や瀬戸内技法のような確固とした手順を踏むものではなく、打面作出・体部調整・目的剥片剥離・打面の更新といった工程の意図を判別しにくい技術である。生産された剥片は、目的剥片として剥離されたものも、調

第19表 チャート等剥片剥離作業工程遺存状況

遺存状況	個体番号
A	6・8?
B	5?・7?・21・24・25・41・46・52・63・64・68・70・74・78・79・80・81・82・85・91・96・98・105・107・109・110・111・115・129・130・134
C	17・18・38・48・49・50・54・56・57・67・84・94・101・104・108・112
A+B	3・10・137
B+C	16・22・23・33・37・43・44・45・47・53・59・61・62・77・83・88・89・92・93・97・99・100・106・113・119・125・126・127・132・133・136
A+B+C	1・2・60・116・124・128・131・135



整剥片として付随的に剥離されたものも、形態的に区別が困難でもある。このような資料の技術的判別限界、実資料の多様性から、個体の搬出・搬入といった分析結果を基にした解釈は、慎重でなければならない。チャート製石器群の作業工程遺存状況分析は、特に明らかな点を除いて全体を評価するにとどめたい。

チャート製石器群の剥片剥離技術は、前期（A）・中期（B）・後期（C）の工程に3区分して考え得る。前期は、塊状材か板状材に打面作出・体部調整して、剥片剥離作業が開始された初期工程をいう。打面作出や石核体部調整が既に行なわれていても、最初期の剥片剥離が認められれば、前期工程とした。中期は、剥片剥離作業が活発に行なわれる段階で、その個体の中心となる石核が残っていないものである。なお、剥片素材の石核があっても中心石核が認められない場合はここに含めている。後期は、石核の存在が指標となる、剥片剥離作業の終末が行なわれる段階である。この3つの剥片剥離工程の組合せから、A・B・C・A+B・B+C・A+B+Cの6分類が設けられる。A+C類は、類型設定は可能であるが、板井ヶ谷遺跡下位文化層のチャート製石器群の剥片剥離技術作業工程判別状況には、実態としてそぐわない。

チャート製石器群は、合計で135個体（1～136、欠番42）がある。このうち、剥片剥離技術の作業工程が判別できたのは計91個体で、判別不能は計44個体であった。

全体91個体での判別は、第19表に示す。

A類は2個体2.2%、B類は32個体31.2%、C類は16個体17.6%、A+B類は3個体3.3%、B+C類は31個体34%、A+B+C類8個体8.7%となる。

Aの工程を含む比率が14.2%に対し、Bが81.2%、Cの工程を含む比率は60.3%に達する。Aの工程が僅かしか存在せず、剥片剥離を開始した個体と終了する個体の数差的差異が強調されるが、これには原石産地等で母岩の荒削りや打面作出などが行なわれた可能性や、遺跡内に搬入された時点で板状材となっているものがかなりあることも影響していよう。Aの工程の判断には、問題があることが明らかとなっている。Bの工程が最も良く認められるが、Bの工程を有する合計73個体の内、42個体56.8%が工程の継続する作業量の多い個体である。また、39個体52%がCの工程まで剥片剥離作業が展開し、作業が終了している。Cの工程を含み、剥片剥離作業が終了する個体比率は約6割で、極めて遺跡内終了率が高いということが理解されよう。また、Cの工程を含む個体は、55個体中39個体70.9%がAないしBから作業が開始されており、一貫工程の継続する作業量の多い個体が大半であることが知れよう。

A類・B類・A+B類は、本来AとBの区別が困難であるが、Cの工程を含む個体と比べて所属資料数の少ない個体が多い。石核を欠く個体数が、次の遺跡に持ち出された量を示すものであるなら、36個体40.6%が搬出されたことになる。54個体59.4%は剥片剥離作業を終了して遺跡に残される。ほぼ2対3の比率である。

剥片剥離技術工程の判別不能の個体は、44個体ある。これらも、所属点数の少ない個体がほとんどであり、剥片剥離作業が不活発で石核が持ち出されたか、個体自体が搬入石器類のみで成り立っているのか判別がつかないものである。これを加えたパーセンテージは、全135個体でA類1.5%、B類23.7%、C類11.9%、A+B類2.2%、B+C類23%、A+B+C類6%、判別不能32.6%となる。判別不能の44個体をA・B工程のものとして考慮するなら、81個体60%が次の遺跡に搬出され、54個体40%が遺跡内に剥片剥離作業を終了して残される。ほぼ3対2の比率となる。

旧石器時代の集団が、地点地点を石器と石材を持って移動し、石材を消費すれば適時補給しつつ、生

活していたと一般的に考えられる。このことは、遺跡に搬入された単独個体石器や活発な石器生産の行なわれた個体など、多様な個体が残されることで知れる。板井寺ヶ谷遺跡の居住期間がどれくらいの長さだったかを絶対的時間で示すことは不可能であるが、他の地点でも板井寺ヶ谷遺跡と同一絶対時間の居住と同一量の石器生産が行なわれると仮定できるなら、前の計算では、移動毎に保有個体の1.5倍を補給しないと、石器生産量を同一水準に維持できないことになる。後の判別不能個体を含んだ計算では、移動毎に保有個体の0.67倍を新規に補給しないと、石器生産量を同一水準に維持できないことになる。

遺跡内で消費される石材個体の総数が多いことは、遺跡内での石器生産が活発であることを示す一方、その遺跡での居住期間が長かったともみなし得る。日常的に保有された個体数が、ある程度一定であったのなら、携帯個体数に対して遺跡内消費の多寡が変化する事は、一方で居住期間の長短を示すことになる。携帯個体の不足が生じれば、次の地点への移動を待たずに新規に石器石材の入手が必要になろう。板井寺ヶ谷遺跡の石材消費量が大きい小さいかは、当時の旧石器時代社会の石材供給のあり方と関連付けて判断されなければならない。

基本的に、石器の素材剥片は遺跡内の剥片剥離作業によって確保できたと考えられるが、単独個体石器がかなりの個数で存在し、石器個々のレベルでは搬入石器がかなりあったことを示している。搬入石器の存在は、遺跡外へと持ち出された搬出石器の存在をも示唆することになる。剥片剥離作業の遺跡内での完結度の高さは、板井寺ヶ谷遺跡での相対的な居住期間の長さを示すのかどうか、搬出石器・搬入石器による遺跡間移動・回帰運動の実態について、視野にいった分析が必要であろう。（山口）

## 5. 小 結

### —石器群の内容と編年的位置—

板井寺ヶ谷遺跡下位文化層の石器群総数2,353点について、本節では形態学的記載と剥片剥離技術、個体別資料の遺存状況について、検討・記述を行なった。層位的条件によって、基本的に考古学的同時期と判断できる石器群として捉える場合、今までの検討・記述を総括し、明示しておくべきいくつかの問題がある。

定型的石器や加工痕・使用痕有剥片は、合計で376点あり、その内訳はナイフ形石器・搔器・削器・彫器・楔形石器・錐状石器、加工痕有剥片・使用痕有剥片、斧形石器となっている。また、礫石器類として、局部磨製石斧・礫器・敲石・磨石・台石がある。点数的には、使用痕有剥片、加工痕有剥片、削器、搔器、ナイフ形石器の順に多く、その他の器種は20点以下、ほとんどが数点に留まっているのが実状である。

「主生産用具」として考慮される場合が多く、また後期旧石器時代の最も普遍的な器種でもあるナイフ形石器は、必ずしも主たる器種ではないことに、注意する必要がある。逆に、使用痕有剥片が定型石器、加工痕・使用痕有剥片合計の49.2%を占めるという事実は、石器組成の意味を考える上で留意すべき特徴であろう。

定型石器の内搔器と削器は、点数の上でナイフ形石器を上回り、下位文化層での重要な組成要素となっている。これらは、錐状石器・彫器・楔形石器と共に「加工用具」として考慮される場合が多い。このような器種が、組成上重要な位置を占める遺跡は、西南日本であまり知られておらず、今後、このような器種が優先する組成を示す遺跡の性格について、解明していく必要がある。

加工痕有剥片は、明確な加工が施されたものの、一般的な器種分類基準の内に入らなかったものが、

型式分類上の一種の吹き溜まりとして、集合したものである。形態上、ナイフ形石器・搔器・削器に類似するが、調整に足りない部分があり除外されたもの、台形椽石器として観察が可能であるもの等がある。折断技術や調整加工の部位など、個別に観察すれば台形椽石器として見なし得る加工痕有剥片は、全体として見ると加工方法に斉一性がなく、あまりに技術的・形態的差異が大きいことから、一つの器種として独立させることを躊躇した。このような台形椽石器のあり方が、板井寺ヶ谷遺跡周辺の当該期、西南日本の遺跡で認められるなら、積極的な評価が可能となろう。

局部磨製石斧は、刃部をU字形に研磨した小型のバチ形石斧である。西南日本の始良Tn火山灰下の石器群として、編年作業上の一つの指標となろう。サヌカイト製斧形石器は、やはり小型バチ形を呈する。サヌカイト製の斧形石器は、既知の遺跡の石器群中には認められておらず、注目すべき器種として認められた。このような形態の器種は、瀬戸内・近畿地方中央部で、場合によっては石核として一括されている可能性があり、今後、類品の存在の有無に注目する必要があるであろう。機能的には、局部磨製石斧、斧形石器とも云々できる段階ではないが、積極的開墾用具としての伐採にあるとは考えられず、加工用具であろうことは、漠然とではあるが、その丁寧で小造りな形態が示唆していよう。

礫器・敲石・磨石・台石などの礫石器は、すべての器種を併せて12点しか出土していない。礫器には、伐採具・掘り棒など、一般に推定されるものだけでも多岐なものが含まれる。敲石や台石は石器製作や植物質食料の調理との関わりが考慮される。磨石は、植物質食料の調理との関係が示唆されている。近年、敲石、磨石類が植物質食料の積極的評価を行なう意味で、注目されるようになっている。板井寺ヶ谷遺跡下位文化層での敲石・磨石の点数が僅かに留まったことは、どの様に解釈されるであろうか、今後の問題であろう。

豊富な個別別資料・接合資料から、下位文化層の剥片剝離・石器製作技術の実態が明らかになった。大きく分けると剥片素材の石核の側縁から横長剥片を生産する技術と、塊状を呈する石核から縦長傾向の剥片を生産する技術の2つである。それぞれは、素材の形状、打面転移や作業面の位置、目的剥片の



第206図 サヌカイトとチャート等の器種別占有率（点数、重量）

形状から、さらに細分される。

下位文化層石器群の編年的位置は、まず遺跡内の層位と放射性炭素年代測定結果から座標を与える事ができる。下位文化層の上には、始良Tn火山灰純粋層が存在し、下位文化層の時期の下限が確認された。始良Tn火山灰は、約23,000年前とされ、近年西南日本であいついで確認されつつある始良Tn火山灰下の遺跡の一つであることが知れた。比較の対象としてふさわしいかどうかは別として、南関東武蔵野台地編年のフェイズI、相模野台地の第I・II期に大まかに対応することができる。泥炭層と炭化物密集箇所での放射性炭素年代測定結果は、下位文化層に推定年代25,000年前を与えた。1遺跡での放射性炭素年代を、すぐさま西南日本の編年網中に組み入れることはできないが、始良Tn火山灰降灰以前の石器群の内でも、やや古い位置を占めることは間違いないと考えられる根拠となる。時間的位置付として、この座標はとりあえず十分なものであろう。

ARTIFACTS		CHIPS	
TOOLS	20	FLAKES	35
		CORES	45
(weight 18,038.5g)			

SANUKITE		CHIPS	
TOOLS	36	FLAKES	40
		CORES	23
(weight 3,687.74g)			

CHERT etc.		CHIPS	
TOOLS	16	FLAKES	34
		CORES	49
(weight 14,350.76g)			

第287 石器類重量占有率(%)

一下位文化層における2つの石器群一

下位文化層には、主石材、石器組成、剥片剥離技術など、構造的に全く異なった2つの石器群が存在する。いくつかの技術的錯綜はあるが、最も簡単な分離方法は、石材による分離、具体的には、サヌカイトとその他の石材の区別である。

下位文化層での2つの主要石材であるサヌカイトとチャートは、数量的に4:6と拮抗する。前者は、二上山または淡路島岩屋周辺に認められる火成岩であり、板井寺ヶ谷遺跡から考えて遠隔地の石材である。後者は、篠山盆地でありふれた在地の石材で、供給源の異なる2つの石材である。このような石材差によって区別されたサヌカイト製石器群とチャート等製石器群の両者には、ナイフ形石器・搔器・削器・錐状石器・加工痕有剥片・使用痕有剥片が組成するが、数量的比重の位置が異なっている。サヌカイト製石器群で組成的特徴となるのは、定型石器でのナイフ形石器と削器の優越と他定型石器の組成が貧弱なこと、使用痕有剥片と加工痕有剥片の点数的充実である。チャート等製石器群の組成的特徴には、削器・搔器の量的充実であり、使用痕有剥片の比率は相対的に低下する。また、定型の石器や加工痕・使用痕有剥片の素材剥片の形状は、個々の器種で適当な素材剥片の選択が行なわれるため、それぞれに違いがあるが、総体として、サヌカイト製石器群に限り横長剥片素材が、チャート等製石器群には縦長・不定形剥片を素材とするように両者に大きな偏りが認められる。

剥片剥離技術においても、サヌカイト製石器群の場合、ほとんどに剥片素材の石核の側縁から横長剥片や貝殻状・不定形剥片を剥離する技術が認められ、チャート等製石器群の場合、塊状を呈する分割材や板状材から縦長・不定形剥片を剥離する技術が認められた。両石材の石器群は、全く異なる技術基盤を背景としていることが理解された。

両石器群は、このように構造的に多くの段階で相違している。両石器群が下位文化層で共存するにいたる経緯を考察する前に、両石器群の系統的な位置付けを考えてみよう。

従来より、サヌカイト製石器群は瀬戸内地域東部・近畿地方中央部で多数の遺跡から発見されてきた。これらは、瀬戸内技法を代表とした瀬戸内系横長剥片剥離技術を技術基盤とし、横長剥片を素材とする

ナイフ形石器に特徴がある。板井寺ヶ谷遺跡の横長剥片剥離技術は、広義の瀬戸内系横長剥片剥離技術伝統の中に含まれるものであり、伴出したナイフ形石器や横長剥片も、その所産であった。下位文化層のサヌカイト製石器群の出自・系統については、瀬戸内地域東部・近畿地方中央部の「瀬戸内系旧石器」との関係を描きしなげなければいけないが、瀬戸内系旧石器が火山灰がらみで層位的に出土した遺跡は未だ無く、その変遷が明らかでない。特に、始良Tn火山灰下で瀬戸内系旧石器が確実に出土した遺跡はなく、板井寺ヶ谷遺跡と直接比較できる石器群は知られていない。現状では、瀬戸内地域東部・近畿地方中央部での同様な石器群を組成する遺跡の存在を想定するとともに、その母胎となった瀬戸内系旧石器が、さらに先行して成立していたであろうことを、推定することができるに留まっている。

チャート等製石器群に類似または関連のあると考えられる遺跡は、近年、中国山地帯内で始良Tn火山灰下で相次いで発見されている。中国山地帯内の遺跡は、基本的に在地石材を多用し、縦長指向の剥片剥離技術を有し、ナイフ形石器等石器の形状も板井寺ヶ谷遺跡のチャート等製石器群に近いものが認められる。板井寺ヶ谷遺跡周辺では、氷上郡春日町七日市遺跡（久保・藤田他、90）、三田市溝口遺跡（山下・南他、86）等がある。下位文化層のチャート等製は、いわば在地系石器群または「中国山地系」と呼称することができよう（山口・久保・藤田、89、藤田、89）。

板井寺ヶ谷遺跡下位文化層のサヌカイト製石器群は瀬戸内系旧石器、チャート等製石器群は中国山地系旧石器であるなら、両者が板井寺ヶ谷遺跡で共存するという状況は、まず両石器群の時間的平行を証明したことになる。西南日本で、系統の異なる2つの石器群が、分布域のみならず時間的關係でも把握できた編年的意義は大きいであろう。さらに、瀬戸内地域での瀬戸内系旧石器に、初めて層位的根拠に裏打ちされた編年的座標を与えた点も重要である。

ところで、このような成果とともに、新たな課題が提示されている。すなわち、一遺跡での両石器群の共存を、どの様に考えることができるであろうか、という問題である。編年網の整備、石器形態や剥片剥離技術の技術的分析のみでは明らかにできない問題である。

石器群を理解する上で、従来、石器群の組成比と石器生産技術上の特徴を抽出し、それを他の遺跡と相互に比較することによって、石器群の位置付けを行なうことが一般的であった。従来の編年的・技術的研究は、この一面的な観察・記述の方法から一歩も出るものではなかったことは言うまでも無かろう。一定の基盤を共有する石器群を扱う場合、このような方法で一定の成果が期待できたのであろう。

ところが、板井寺ヶ谷遺跡のように一元的ではない要素から構成される石器群を理解しようとする場合、そのような一面的な評価では、本来遺跡が有している動態としての状況が十分把握できないであろう事は想像に難くない。このような事例に必要な十分な検討を加えるには、従前の方法に捕らわれず、新しい解釈方法が必要となってくるはずである。遺跡の構造や、そのおかれている状況から当時の動態を読み解くという作業を本章第3節の分析で行い、その成果を受ける形で、板井寺ヶ谷遺跡下位文化層の石器群を西南日本の旧石器の中に位置付ける作業を、第VI章第3節で行なってみよう。（山口）

## 第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布

### 1, 微地形と遺構・遺物の分布

発掘調査区は、興法寺山と呼ばれる標高350mの山から派生して東南に延びる尾根の南東斜面が、平坦な水田面に埋没する変換点にちょうど位置する。調査区の北西は、5m程で山地の立ち上がりを迎え、ほとんど平坦面の延長はない。東は板井城との間の浅谷で区切られる。北は、調査区端が山地の立ち上がり部である。調査区の南と東の浅谷には、下位文化層相当期の湿地面が広がるのが発掘の結果判明した。板井寺ヶ谷遺跡の位置する地形単位は、南向きの緩やかな微高地であるが、発掘区周辺すぐに地形の変換点を向かえることから、南方向の湿地面での境界が不明瞭な点以外、発掘区がほぼ遺跡全域を発掘していることが知れる。

発掘区内部に目を転じてみると、下位文化層期の発掘区内微地形は、陸地面と湿地面の2つに区別できる。発掘調査範囲南部と東部に泥炭面の形成が認められた。陸地面は、東南方向に湿地面に突出する舌状の微高地として認められる。IからL列の3列の270㎡ほどが未発掘であるが、山裾以南の陸地面のほぼ全域を発掘調査区の中に取り込むことができている。発掘面積は3,666㎡で、このうち2,280㎡、62%が陸地面、1,386㎡、38%が湿地面である。

遺物は、発掘調査区の標高208.0~214.0mの範囲で、陸地面全体と湿地面の一部にも広がって検出された。発掘調査区は、ほぼ一つの地形単位を取り込んでいることから、陸地面に分布する遺物分布のほとんどすべてを発掘することができたと見なせよう。また、発掘区外に大規模に遺物分布が拡大するとは考えにくい。湿地面は、調査区の南部から南方向に地形単位の変更無しに連続していると考えられる。泥炭面中の遺物分布は、疎らではあるが存在し、発掘調査区外にも広がる可能性が高いと考えられる。

遺構には、土壌6基、配石16基、配石群8群、礫ブロック10群と炭化物密集部5箇所がある。土壌6基は、いずれも当時の陸地面に位置する。配石16基の内、4基が当時の湿地面で検出され、残りの12基が陸地面で発見された。配石群と礫ブロックは、8群と10群のすべてが陸地面で、炭化物密集部は、4箇所すべてが泥炭面中での検出である。遺構も、ほとんどが陸地面に配置されるが、一部は当時の湿地面である泥炭面に配されている。遺物の分布が泥炭面中にも及ぶのと呼応し、人間活動が当時の湿地部にまで及んでいたことを示す。遺物同様、未発掘の泥炭面中にも遺構が広がる可能性は高い。

以上をまとめると、下位文化層期の遺跡は、南向きの緩やかな傾斜面が、泥炭面中に突出する陸地面に主要部分があり、ほぼ発掘区内に含まれる。湿地部では、僅かながら遺構・遺物の分布が認められるが、南方向では遺跡の範囲特定は困難である。 (山口)

### 2, 遺物の分布

#### a, 石器の分布と同時性

ここでは、板井寺ヶ谷遺跡下層に平面的に分布する石器群が、同一時期に残されたものであるか否かを中心に、土層図と石器群の垂直分布図を参考にしながら検討したい。

下層の遺物は、調査区北半では黄色粘土層中に、南半では泥炭III下部から灰色粘土上面に包含される。北半の黄色粘土層の層厚は20~30cm程度で、石器類はすべてこの幅の中に包含される。第1・2土層で、土壌内部から出土した石器類の出土高度が、黄色粘土層下面を下回るのみである。下層石器類垂直

投影図（第288図～第292図）を見ると、調査区の南北・東西方向にほぼ20～30cmの幅で、ほとんどの石器類が含まれることが理解される。東西垂直投影図では、やや遺物分布幅が広がる部分が認められるが、これは地形が東西方向で陸地面の微尾根を跨いだ結果であろう。石器類の垂直投影は、遺物集中部では石器類が群集し、その分布の中心軸をまっすぐに疎らな部分を越えて延長すると、他の遺物集中部に行き当たる。石器類の垂直分布は、自然層堆積であると考えられる黄色粘土層と非常によく一致することが知れよう。

黄色粘土の形成は、灰色粘土の風化・土壌化したものであると考えられる。この中に包含される下層の石器群は、黄色粘土の形成時に残され、時間をかけて埋没したものと考えられるので、考古学的には同時判定しても瞬間的には微妙な時間差を許容する可能性も残る。しかし、後の項で記述・検討するように、陸地面の広い範囲に豊富な接合資料分布があり、特にチャート等を石材とする石器群では、頻繁な接合関係が認められたことと、堆積状況に合わせて考えるなら、これらの石器群は同時性を有して残されたものであると表現して大過無いものと考えられる。

南半の泥炭面では、泥炭Ⅲの下半から灰色粘土上面に包含される。湿地部の灰色粘土は陸地面の黄色粘土下にまで連続し、その上部が風化・土壌化して黄色粘土層となっている。泥炭Ⅲの形成は、始良Tn火山灰直下まで連続し、黄色粘土層と泥炭Ⅲの形成期は、少なくともその後半で平行したことは間違いない。湿地部では、泥炭Ⅲ下部から灰色粘土層上面の遺物の垂直分布幅は5cm以下で、きわめて安定している。泥炭Ⅲ形成初期に石器類が残されたものと思われる。事実上、泥炭Ⅲと灰色粘土層の層理面上に残され、泥炭Ⅲが覆い尽くすまでの短い間の所産であることが知れよう。

北半の陸地面と南半の湿地部の石器類分布の同時性は、その断面投影分布が連続すること、層位的な先後関係が一致することから、同時期と判断して大過無かろう。

板井寺ヶ谷遺跡下層で出土したサヌカイトを石材とする石器群と、チャート等を石材とする石器群の2つの同時性はどうか。さきに検討したように、両者とも下層の包含層順に混在して発見され、特に両者を分離しなければいけない層位的根拠に乏しい。ただ、サヌカイト製石器群とチャート等製石器群の平面分布図を観察すれば、両者の分布傾向に差異があることが理解される。サヌカイト製石器類は、調査区の陸地面ほぼ全域で検出された（別添第4図）のに対し、チャート等製石器類は、調査区北半に大半が偏って検出された（別添第5図）のである。土壌堆積の不活発な地域では、複数時期の石器群があたかも同一平面上で検出される遺跡はしばしば観察される所であり、本遺跡のサヌカイト製石器群とチャート等製石器群の偏った分布も、微妙な時間差を有する例である可能性も考慮されよう。この点については、接合関係や石器分布の相互関係、石器群のブロック別組成などの検討を進めながら、解明していくこととする。

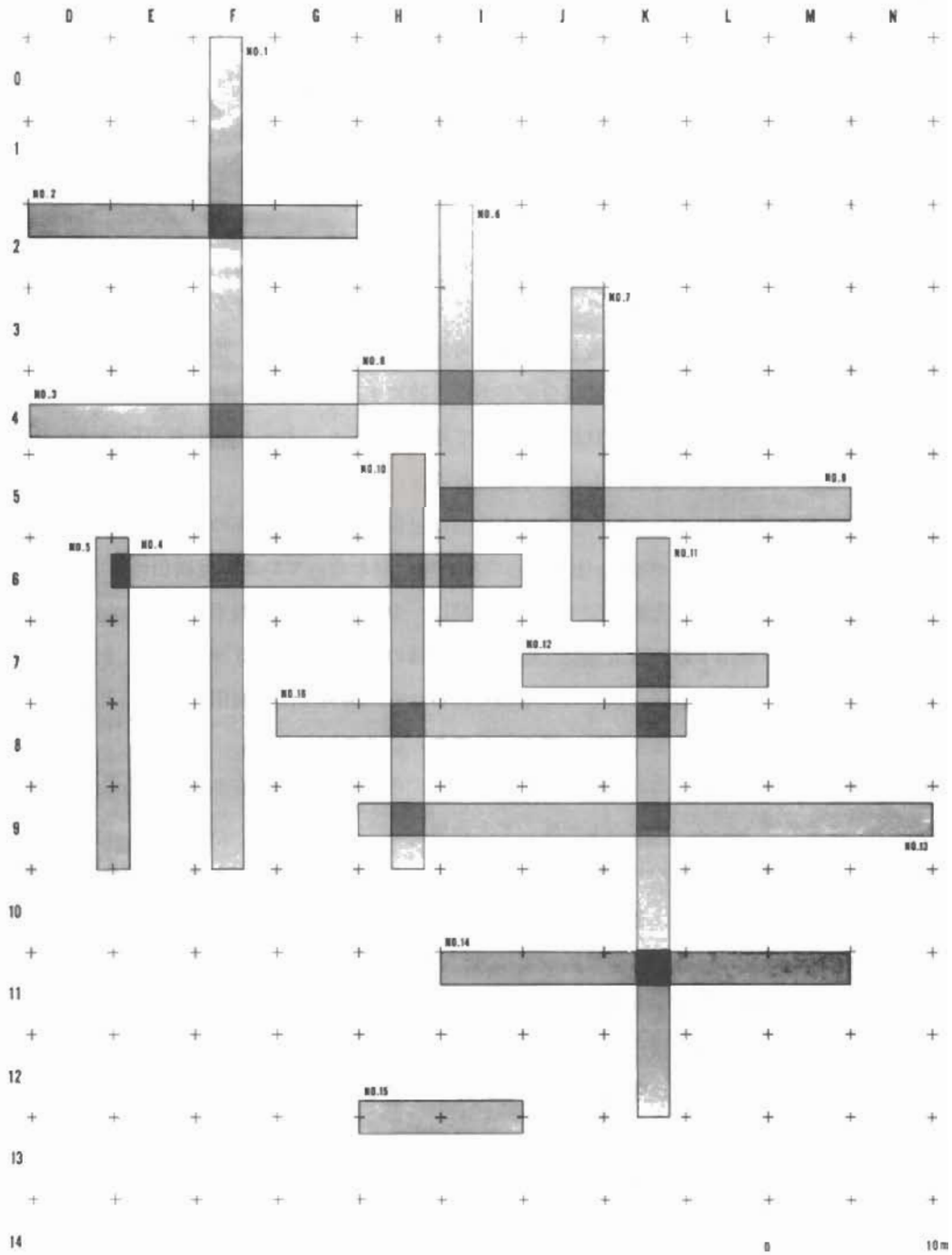
（山口）

## b, ブロックの設定

### ブロックの設定

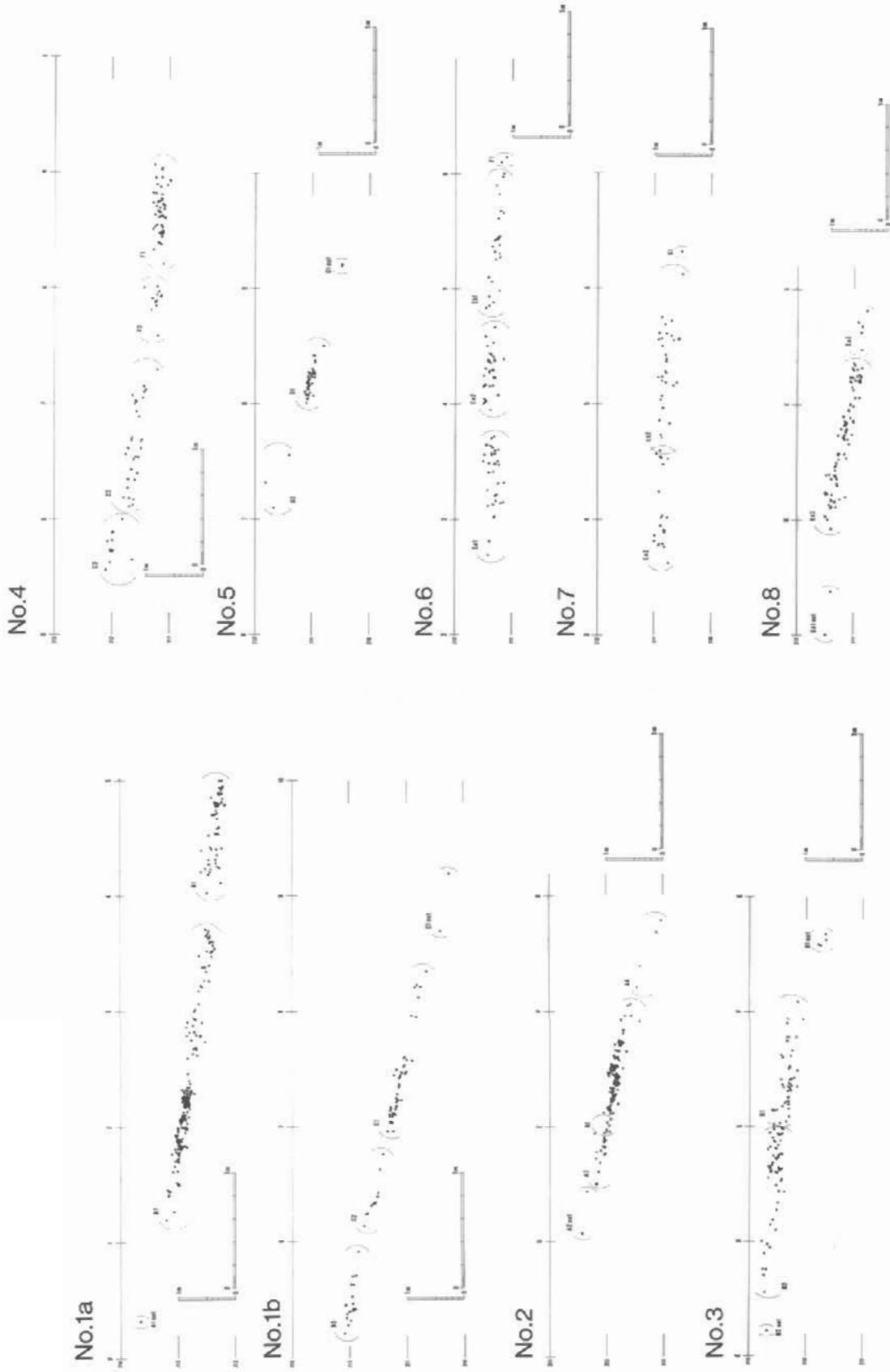
発掘調査区の陸地面や泥炭面中に広がる石器類の分布は、ただ単にまんべんなく分布するのではない。遺物分布図を検討してみると、ある程度集中する部分と散漫な部分の存在が、視覚的にも認められる。陸地面には10数群の石器類分布のまとまりが認められ、まとまりの間には散漫な石器分布がある。石器類の集中部は、直径10数mの大きさで、求心的な集中部と疎らな周辺部に統廃合できそうである。遺物分布のまとまりをより適確に観察するために、原位置を保持して検出した2200点の石器類の50cm四角での出土数を数えて、階級値1・2・3・5・10の遺物分布等量線図を作成した（別添第6図）。

第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布



第288図 下位文化層石器類垂直投影位置図

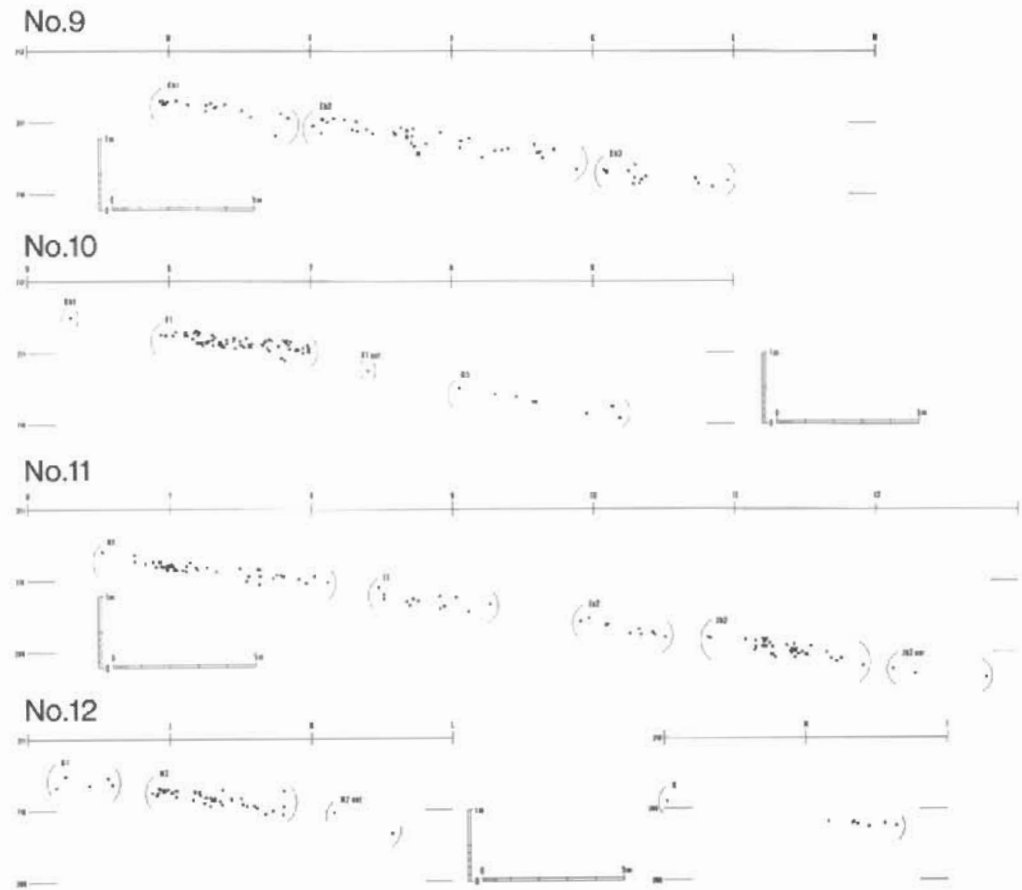




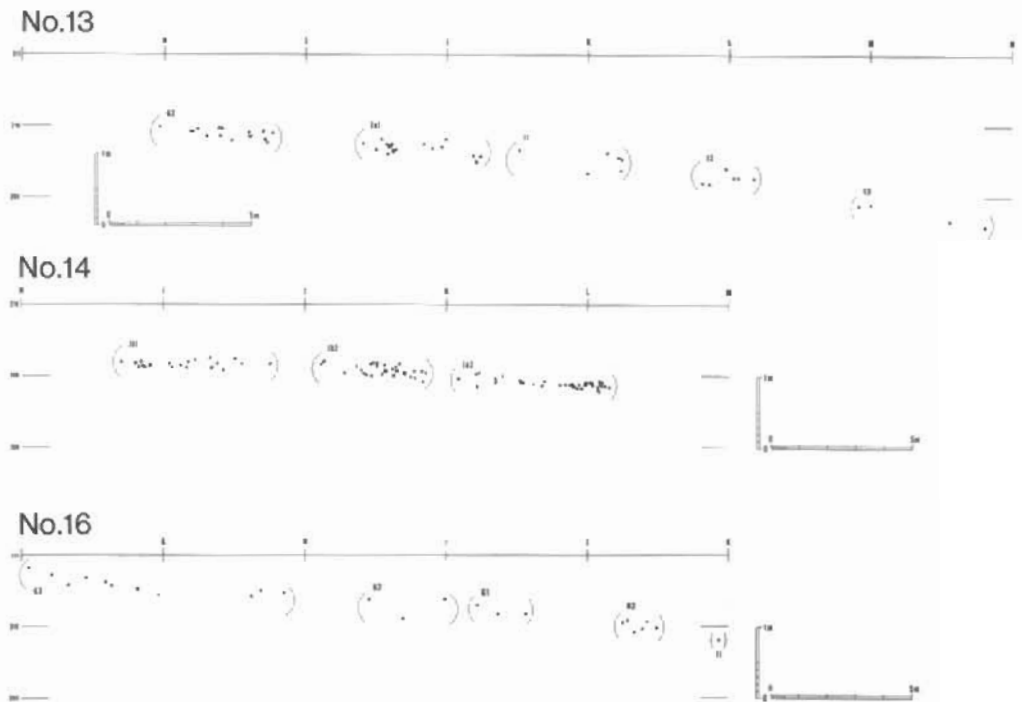
第289図 下位文化層遺物垂直投影図1

第290図 下位文化層遺物垂直投影図2

第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布



第291図 下位文化層遺物垂直投影図3



第292図 下位文化層遺物垂直投影図4

遺物分布等量線図を観察すると、遺物が集中して求心性を有する遺物集中部と、求心性の乏しい小さな島状分布が集合する部分が集まっているように見える。求心性ある遺物集中部は、調査区の北半に多く、EFG列の1・2・3区と4・5・6区、H6区などに認められる。求心性に乏しい島状分布の集合は、DEF列の7・8区、IJKL列の3・4・5区、K列の6・7区、HからL列の8区、J9区からL10区、J10区とK11区に認められる。それらの集中の間には、散漫に石器類が分布する。

湿地部では、HI列の12・13区に散漫な遺物集中部が有るほか、陸地部周辺に疎らに石器類が散らばる。

求心性に乏しい島状分布は、それぞれが漫然と分布しているわけではない。いくつかの「島」が集まって、あたかも「群島」を呈する部分がある。この部分の面積は、求心的な集中を示す遺物集中部とその周辺の散漫分布範囲の面積にはほぼ等しく見える。「群島」または求心的遺物分布範囲の直径は、ほぼ10～15mといったところである。この単位をひとつのまとまりとして、把握したい。

以上の作業の結果、このような単位9箇所が識別できる。また、これらの遺物集中の単位の狭間に散漫分布として取り残された場所2箇所も同等に扱うと、合計で11箇所が識別できる。これらを、板井寺ヶ谷遺跡下位文化層の分析を進めていく上での基本的な単位として、石器類ブロックと認定する。陸地面から泥炭面まで、すべての原位置を保った遺物が、いずれかの石器類ブロックに所属することになる。この石器類ブロックに、A～Kの名称を与える。また、M列3～5区にも遺物分布があるが、この部分は未掘部分に広がる可能性が高く、仮にLとしておく。ブロックEとJは、他と比較してあまりに広範囲に及ぶため、2分して判断する必要があることを断わっておく。

平面分布の連続から石器類ブロックを認定しようとした作業での重要な問題として、ブロックの分離境界が曖昧な場合がある。ブロックBは、ブロックCとの境界が曖昧で、ブロックC北半と統合できる可能性も考えられる。この場合、ブロックC南半はブロックDと合併する方が、面積的にも自然である。ブロックB・C・Dの問題は、分析過程で繰り返し取り上げ、解決したい。

「群島」状遺物集中は、ある程度の小集中が集まったもので、その小単元に細分することが容易に可能である。島状の遺物分布が、石器ブロックの構成要素となっている。求心的な集中を示す遺物集中部でも、それぞれの群を子細に観察すれば、必ずしも遺物集中が同心円状に粗密を配しているわけではなく、境界が曖昧ではあるが、やはり島状の小集中部を見分けることができる。基本単位として、ブロックを呼称することにしたので、この単位を小ブロックと呼びたい。個々の小ブロックは、ブロック名と小ブロックの番号を併せて呼ぶこととする。小ブロックにはかなりの遺物量・集中の粗密の差があるので、あまりに散漫な部分には、最近隣の小ブロック名に(out)を付して示し、固有の番号は付けない。

このようにして区分したブロック・小ブロックを、別添第11図に示す。

以下、各ブロックの位置、遺構・遺物分布の特徴について示す。

#### ブロックA (第293図・第295図)

EFG列の1・2・3区に南北18m、東西15mの石器類分布を見せる。ブロック最高所の標高は213.9m、最低所の標高は212.2mである。求心的集中をする遺物集中部の典型で、F2区に中心がある。A1・A1out・A2・A2out・A3・A4の6小ブロックに細分できる。遺物分布範囲の面積は、A全体で約200㎡である。内部には、遺構として第5土壌の1基、配石1・2の2基、配石群1・2・3・4の4群、礫ブロック1の1群がある。石器類は、ナイフ形石器2点、搔器2点、削器7点、楔形石器2点、局部磨製石斧1点、加工痕有剥片11点、使用痕有剥片45点、敲石2点、剥片261点、碎片107点、石核39

点、原石破砕片2点の合計481点が出土している。この石材内訳は、サヌカイト143点、チャート325点、鉄石英2点、泥岩1点、頁岩2点、凝灰岩3点、流紋岩2点、砂岩2点である。小ブロック単位では、A1が220点、A1outが11点、A2が141点、A2outが8点、A3が77点、A4が24点となる。A1が圧倒的に点数が多く、A2が続く。

**ブロックB (第294図・第296図)**

DEFG列の3・4・5区に南北12m、東西18mの石器類分布を見せる。ブロック最高所の標高は213.2m、最低所の標高は211.8mである。北半は求心的集中、南半は島状の遺物集中が認められる。南半の境界はブロックCとの間で不明瞭である。B1・B1out・B2・B2out・B3の5小ブロックに細分できる。遺物分布範囲の面積は、B全体で約170㎡である。内部には、遺構として第1～第4土壌の4基、配石3の1基があり、また配石4がB3とC2の間にある。石器類は、ナイフ形石器3点、搔器10点、削器12点、錐状石器3点、加工痕有剥片12点、使用痕有剥片18点、礫器1点、台石1点、剥片187点、碎片45点、石核25点、石核素材2点、原石破砕片3点の合計322点が出土した。石材の内訳は、サヌカイト58点、チャート253点、凝灰岩3点、鉄石英4点、頁岩1点、砂岩2点となる。小ブロックでは、B1小ブロックで128点、B1outで28点、B2で100点、B2outで5点、B3で61点となる。

**ブロックC (第297図・第299図)**

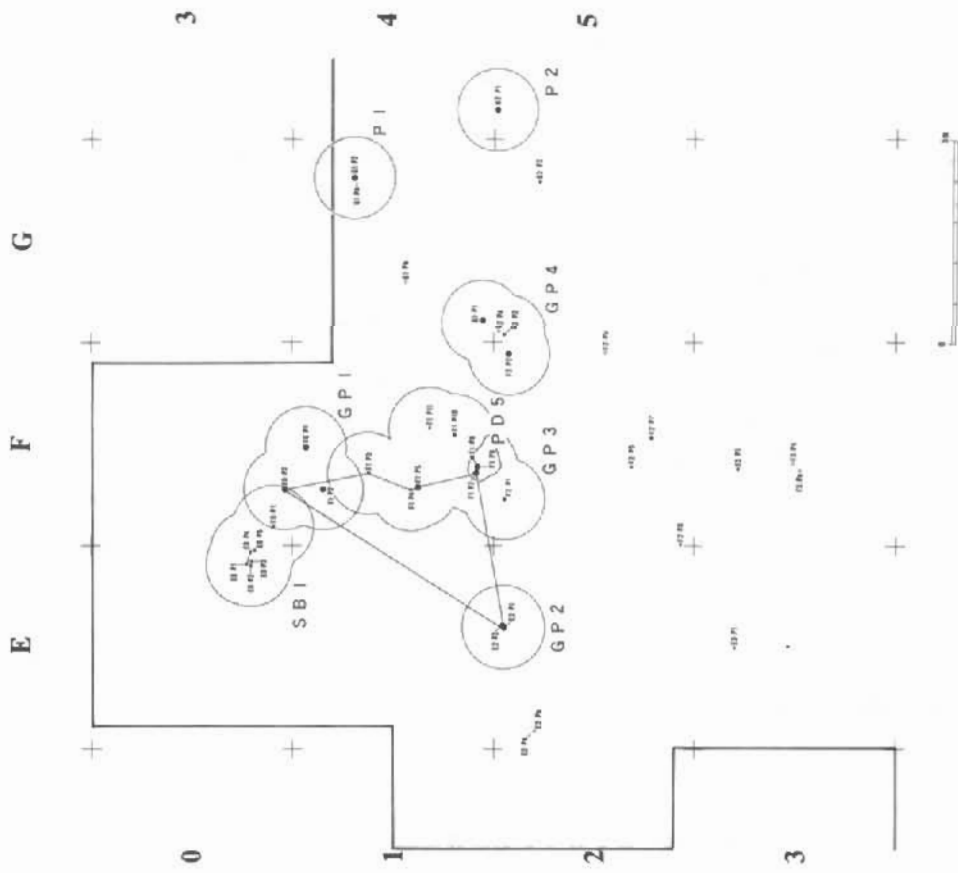
DEFG列の5・6・7・8区に南北17m、東西18mの石器類分布を見せる。ブロック最高所の標高は212.6m、最低所の標高は210.3mである。C1・C1out・C2・C3の4小ブロックに細分できる。C1がややまとまった遺物集中を見せる他、島状の遺物集中部が散在する。C2・C3は、B南半との境界が曖昧である。遺物分布範囲の面積は、C全体で約125㎡である。内部には、遺構として配石群5の1群、礫ブロック4・5の2群がある。石器類は、ナイフ形石器4点、搔器1点、削器4点、加工痕有剥片6点、使用痕有剥片18点、礫器1点、剥片96点、碎片42点、石核10点の合計182点が出土した。石材の内訳は、サヌカイト102点、チャート78点、流紋岩1点、凝灰岩1点である。小ブロックでは、C1で97点、C1outで5点、C2で46点、C3で34点である。注意されるのは、小ブロックC1ではサヌカイト69点に対してチャート28点、C2ではサヌカイト12点に対してチャート33点、C3ではサヌカイト16点に対してチャート17点と、C1小ブロックとC2・3小ブロックで石器石材組成比が異なる点である。小ブロックの位置関係を考慮するなら、C2・3小ブロックとB石器類ブロックとの親和性を示すものと見なせよう。

**ブロックD (第298図・第300図)**

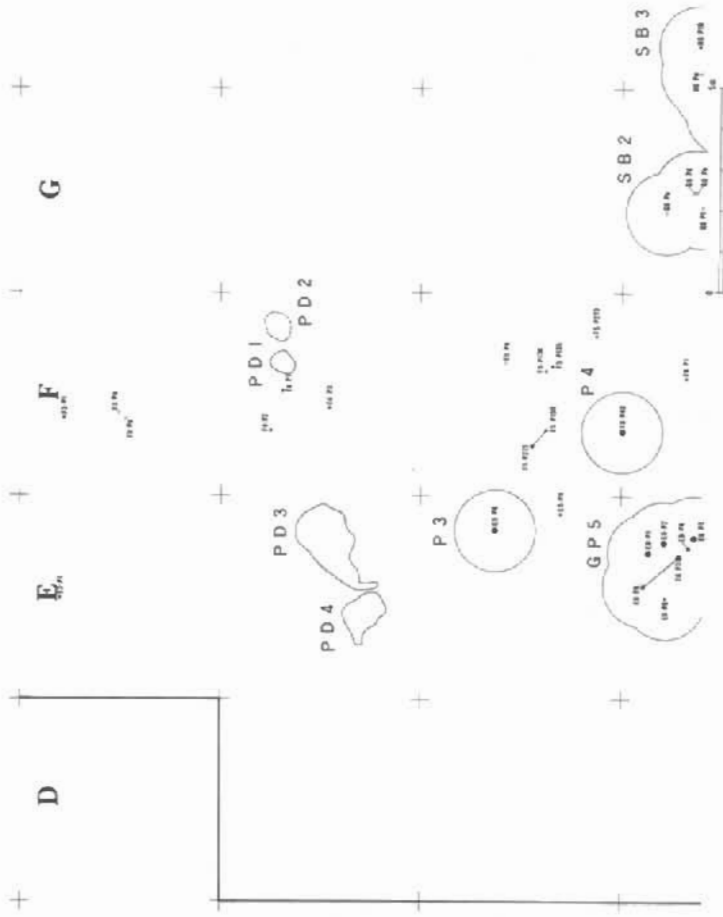
DE列の7・8・9区に南北12m、東西8mの石器類分布を見せる。ブロック最高所の標高は212.05m、最低所の標高は210.5mである。小さな島状集中の分布により構成される。本ブロックは、西の発掘区外へ遺物分布が延びる可能性があり、分布の完結性・石器類組成の回復には問題を残す。D1・D1out・D2の3小ブロックに細分される。発掘された範囲での遺物分布面積は、D全体で約75㎡である。内部には、遺構として目立ったものはなく、若干量の礫石が出土したに留まる。石器類は、削器2点、楔形石器2点、加工痕有剥片3点、使用痕有剥片14点、剥片58点、碎片18点、石核3点の合計100点が出土した。石材の内訳はサヌカイト62点、チャート37点、流紋岩1点である。小ブロックでは、D1で64点、D1outで4点、D2で32点がある。

**ブロックE (第301図・第303図・第304図)**

GHIJKL列の2・3・4・5・6区に南北20m、東西25mの石器類分布を見せる。ブロック最高所

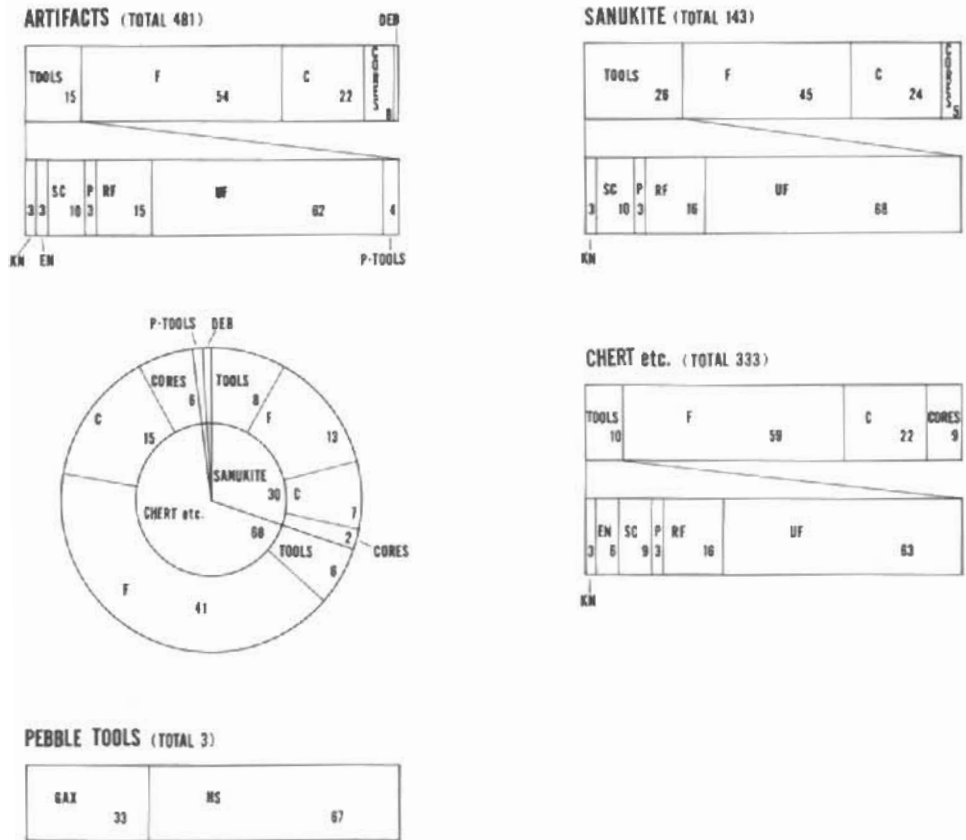


第293図 Aブロック礫出土状況 (PDは土壌)

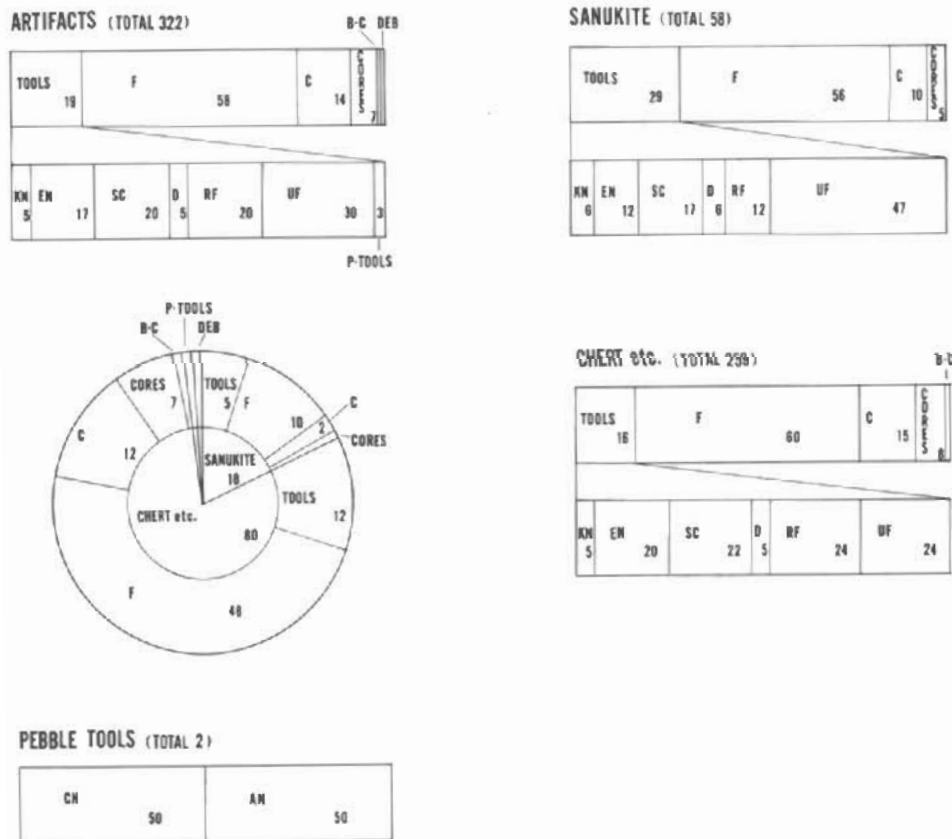


第294図 Bブロック礫出土状況 (PDは土壌)

第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布

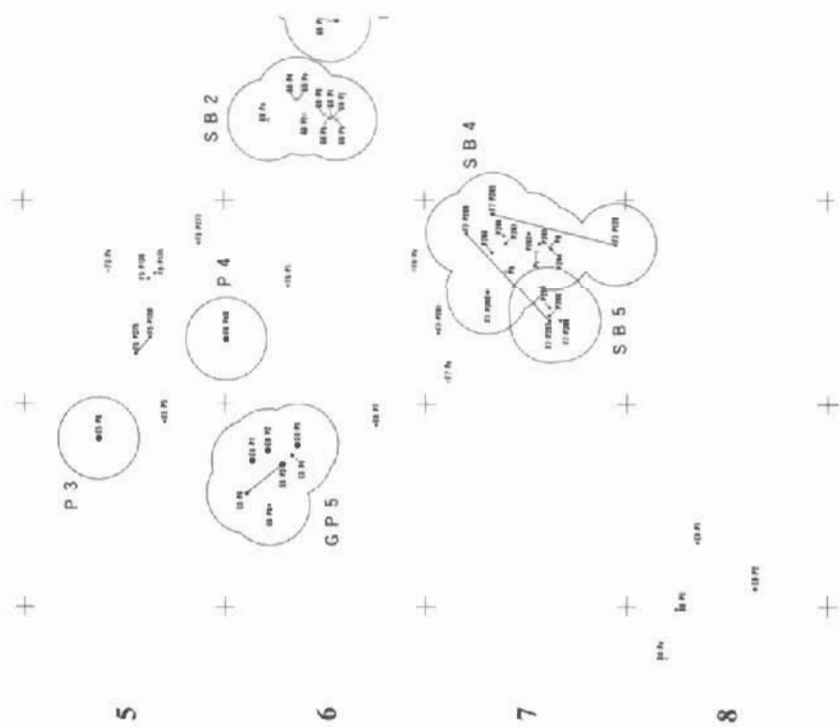


第295図 Aブロック石器類組成グラフ (%)



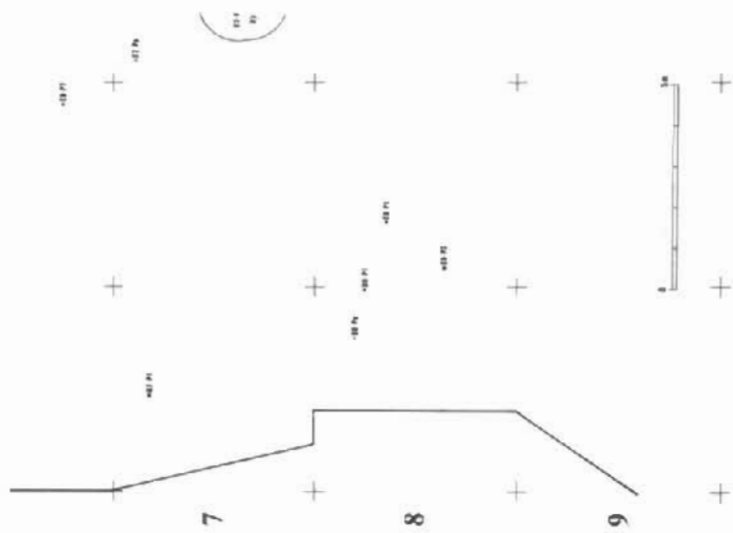
第296図 Bブロック石器類組成グラフ (%)

E F G



第297図 Cブロック発出土状況

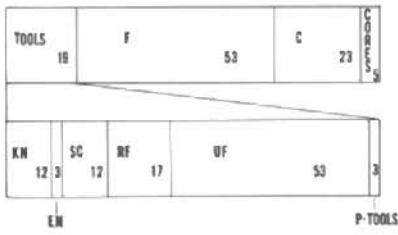
D E



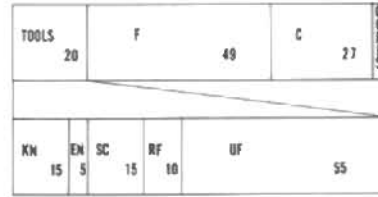
第298図 Dブロック発出土状況

第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布

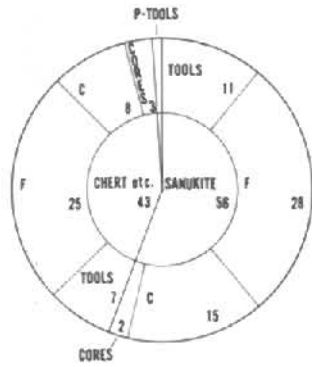
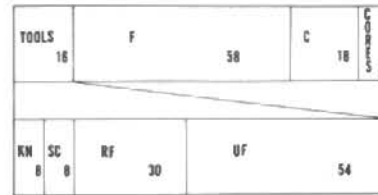
ARTIFACTS (TOTAL 182)



SANUKITE (TOTAL 102)



CHERT etc. (TOTAL 79)

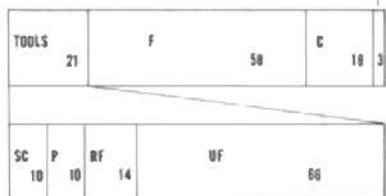


PEBBLE TOOLS (TOTAL 1)

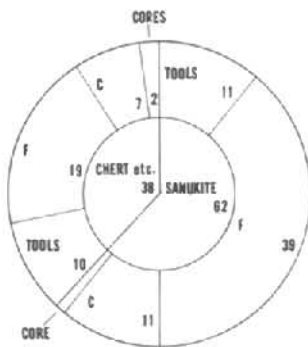
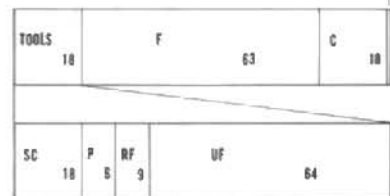


第299図 Cブロック石器類組成グラフ (%)

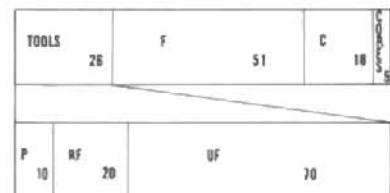
ARTIFACTS (TOTAL 100)



SANUKITE (TOTAL 62)



CHERT etc. (TOTAL 38)



第300図 Dブロック石器類組成グラフ (%)



の標高は212.1m、最低所の標高は209.8mである。広範囲に散漫な遺物分布が広がる。分布の求心性、単位性に乏しい。小ブロック7つからなる遺物分布範囲の面積は、E全体で約315㎡である。本ブロックの東には泥炭面までの間に約100㎡の未発掘部があり、多少でも東に拡大することを考慮すれば、極めて大型のブロックとなる事が理解できる。本ブロックは散漫分布部の連続で形成され、地形や遺構などの特徴にも乏しい。本ブロック全体での構造的まとまりがあるかどうかの判断は、小ブロック単位で行なわれるのが適切であろうが、分析目的によっては大づかみに、J5区にある分布の間隙を区分境として、南北に分離し、北をE a、南をE bとして今後検討する場合がある。面積は、北が155㎡、南が160㎡となる。内部には、遺構として北半に配石5・6の2基、南半に礫ブロック6の1群がある。ブロックEを構成する7小ブロックは、北が、E a 1・E a 1 out・E a 2・E a 3の4小ブロック、南がE b 1・E b 2・E b 3の3小ブロックに分けられる。石器類は、北半のE aでナイフ形石器5点、搔器1点、削器14点、錐状石器1点、加工痕有剥片6点、使用痕有剥片21点、敲石1点、剥片140点、碎片31点、石核8点、原石破碎片12点の合計240点がある。石材の内訳は、サヌカイト49点、チャート186点、鉄石英3点、頁岩1点、凝灰岩1点である。小ブロックでは、E a 1で76点、E a 1 outで11点、E a 2で128点、E a 3で25点である。南半のE bでナイフ形石器2点、搔器3点、削器7点、加工痕有剥片6点、使用痕有剥片16点、剥片124点、碎片36点、石核19点、原石破碎片6点の合計219点が出土した。石材の内訳は、サヌカイト45点、チャート173点、泥岩1点である。小ブロックでは、E b 1で68点、E b 2で106点、E b 3で45点である。

#### ブロックF (第302図・第305図)

G H I列の5・6・7区に南北9m、東西14mの石器類分布を見せる。ブロック最高所の標高は211.5m、最低所の標高は210.9mである。求心的集中を見せる遺物分布で、H6区に中心がある。遺物分布範囲の面積は、約80㎡である。内部には、遺構として礫ブロック3の1群がある。F1・F1 out・F2の3小ブロックに細分する。石器類は、ナイフ形石器2点、搔器1点、削器2点、加工痕有剥片2点、使用痕有剥片5点、剥片122点、碎片24点、石核15点、原石破碎片1点の合計174点が出土した。石材の内訳は、サヌカイト14点、チャート153点、泥岩3点、頁岩3点、凝灰岩1点がある。小ブロックでは、F1で122点、F1 outで4点、F2で48点が出土した。

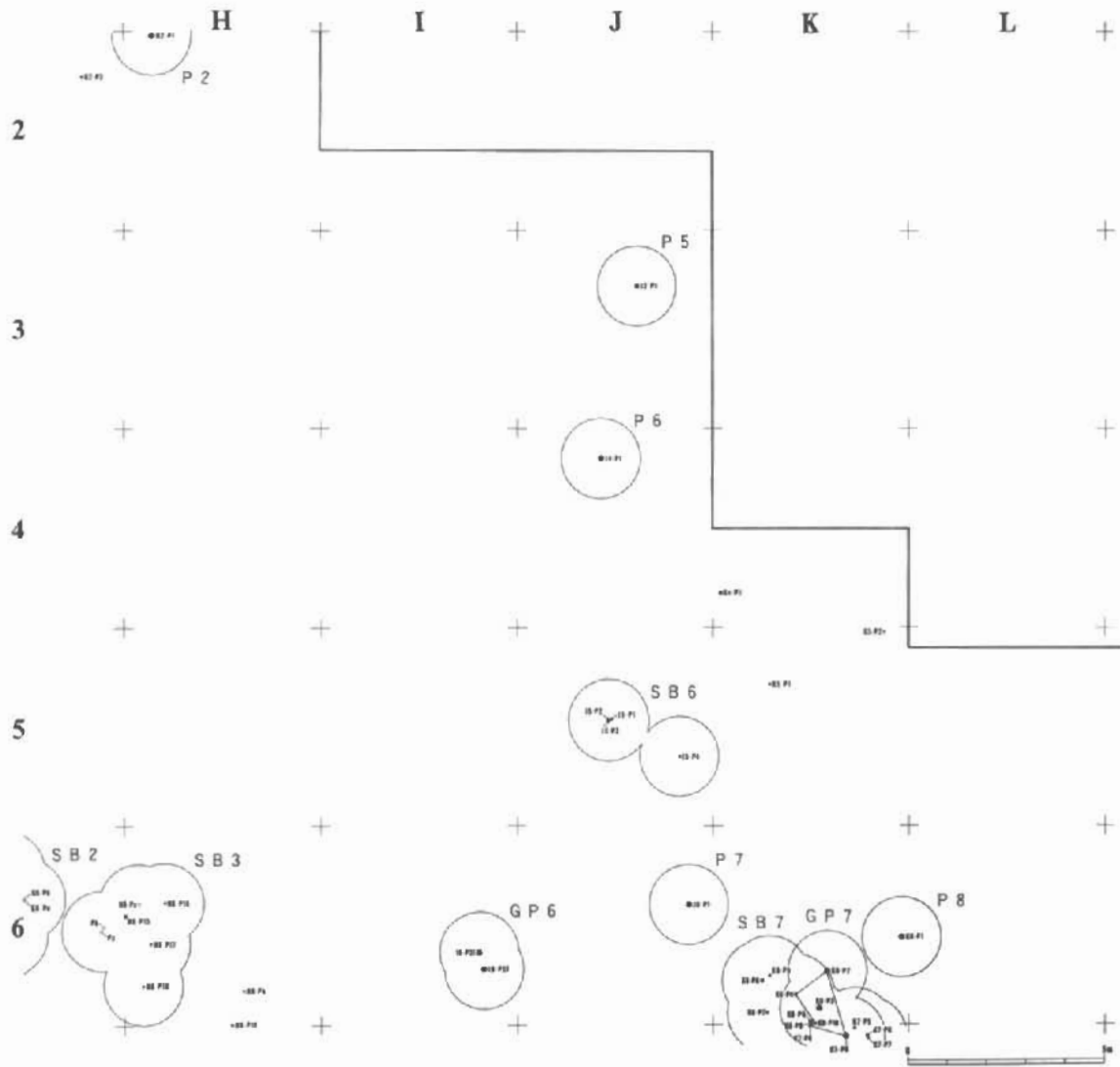
#### ブロックG (第306図・第307図)

G H I J列の6・7・8・9区に南北17m、東西19mの範囲に疎らな石器類分布を見せる。ブロック最高所の標高は211.05m、最低所の標高は209.8mである。F・E b・H・J a・J bの各石器類ブロックに取り囲まれる散漫分布部で、いずれの石器類ブロックからも等距離で統合できなかった部分からなる。島状の集中部も認められない。本ブロックの面積は、175㎡であるが、他の石器類ブロックと同等には扱にくい。内部には、遺構として配石群6の1群がある。また配石7が石器ブロックHとの中間に位置する。散漫な分布のため境界は判然としないが、便宜的にG1・G2・G3の3小ブロックに細分する。石器類は、ナイフ形石器1点、搔器1点、削器2点、加工痕有剥片3点、使用痕有剥片12点、剥片56点、碎片17点、石核4点、原石破碎片1点の合計97点が出土している。石材の内訳は、サヌカイト81点、チャート11点、鉄石英2点、泥岩3点である。小ブロックでは、G1で23点、G2で39点、G3で35点がある。

#### ブロックH (第308図・第309図)

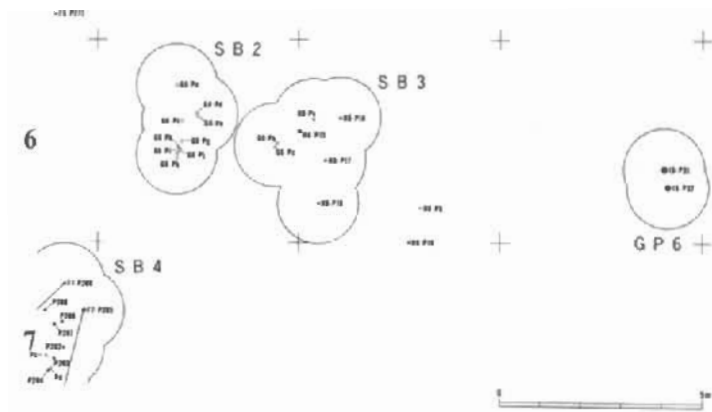
J K L列の6・7・8区に南北12m、東西11mの範囲に石器類分布を見せる。ブロック最高所の標高は

第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布

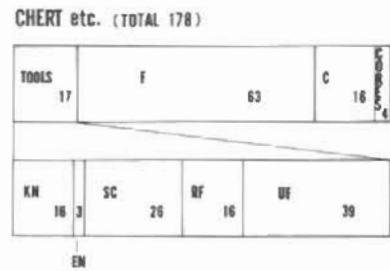
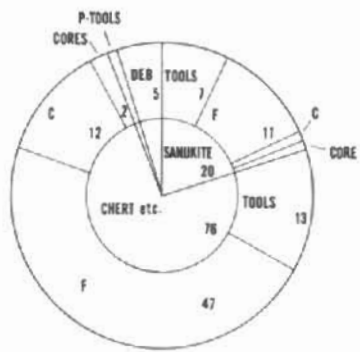
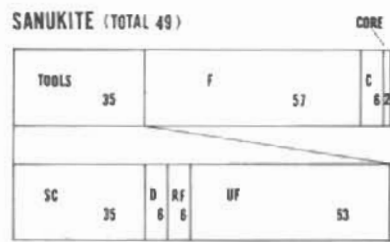
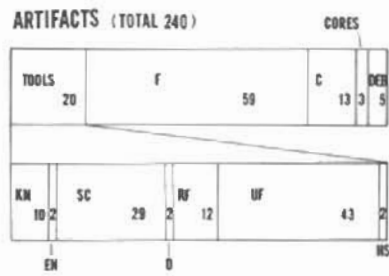


第301図 Eブロック礎出土状況

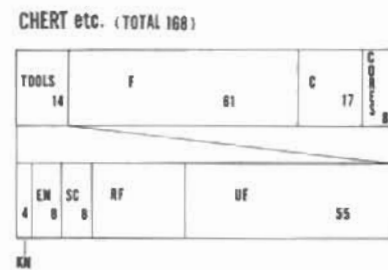
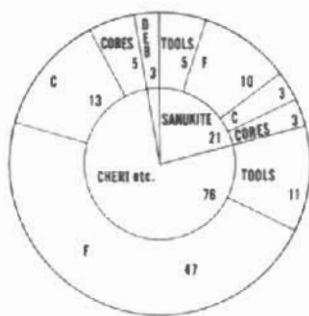
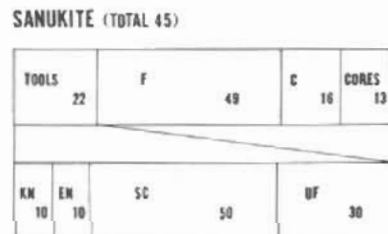
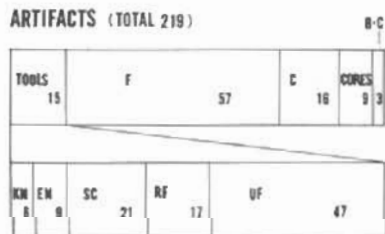
G H I



第302図 Fブロック礎出土状況

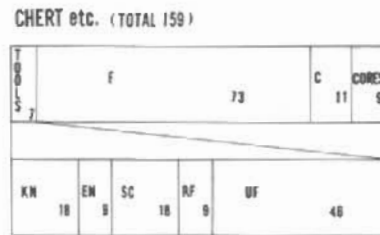
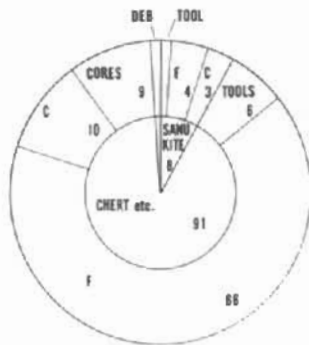
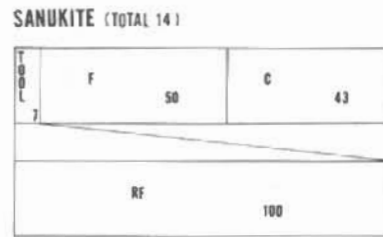
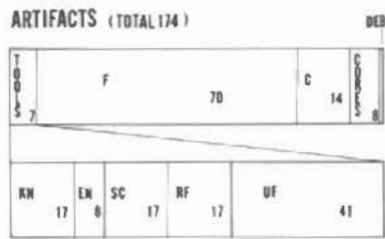


第303図 E aブロック石器類組成グラフ (%)

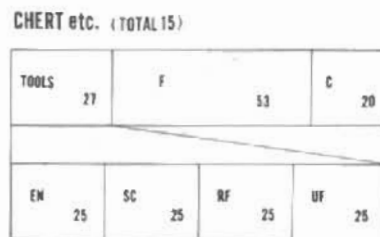
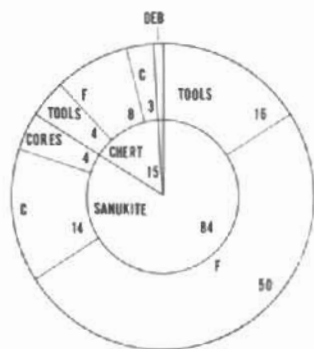
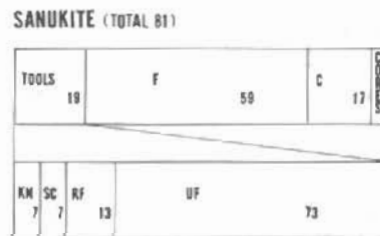
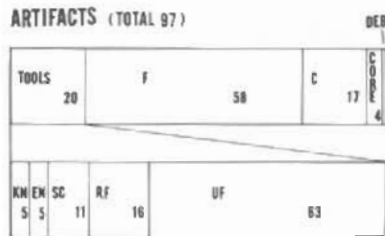


第304図 E bブロック石器類組成グラフ (%)

第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布

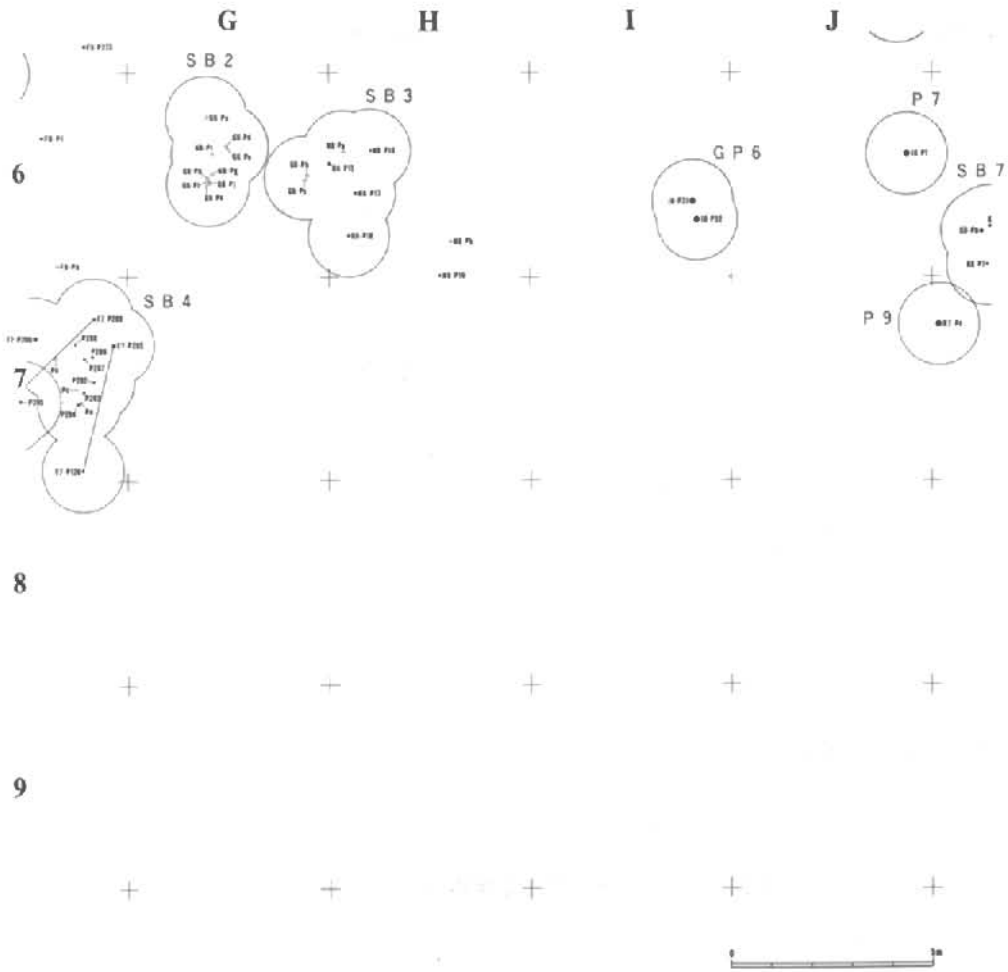


第305図 Fブロック石器類組成グラフ (%)

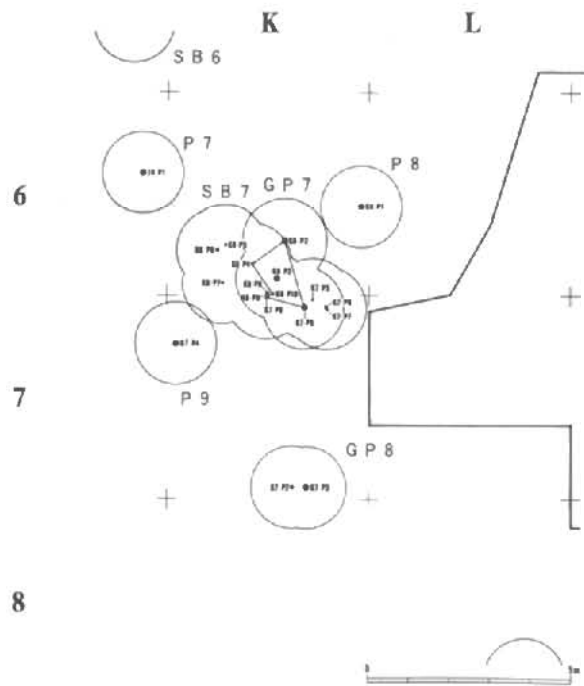


第306図 Gブロック石器類組成グラフ (%)

第IV章 下位文化層の調査



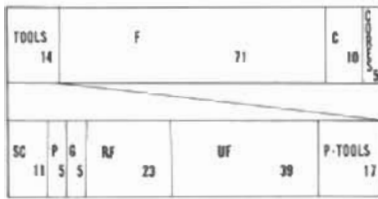
第307図 Gブロック礫出土状況



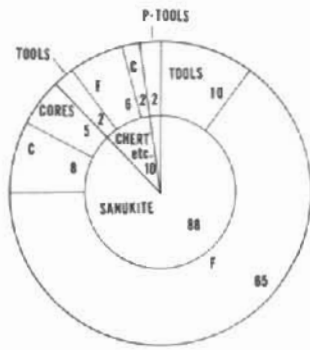
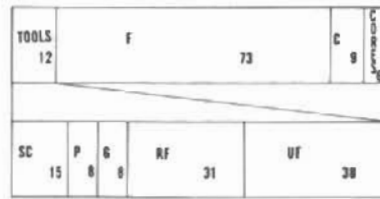
第308図 Hブロック礫出土状況

第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布

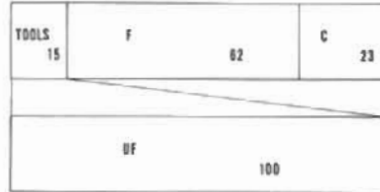
ARTIFACTS (TOTAL 129)



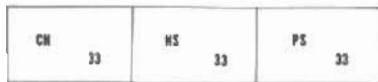
SANUKITE (TOTAL 113)



CHERT etc. (TOTAL 13)

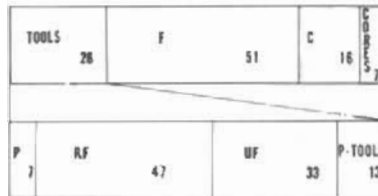


PEBBLE TOOLS (TOTAL 3)

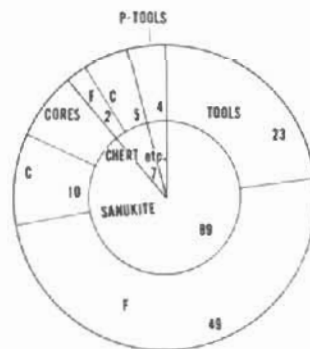
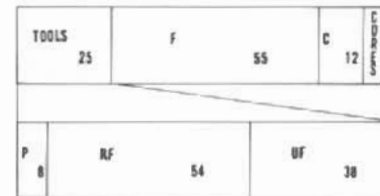


第309図 Hブロック石器類組成グラフ (%)

ARTIFACTS (TOTAL 57)



SANUKITE (TOTAL 51)



CHERT etc. (TOTAL 4)



PEBBLE TOOLS (TOTAL 2)



第310図 Iブロック石器類組成グラフ (%)

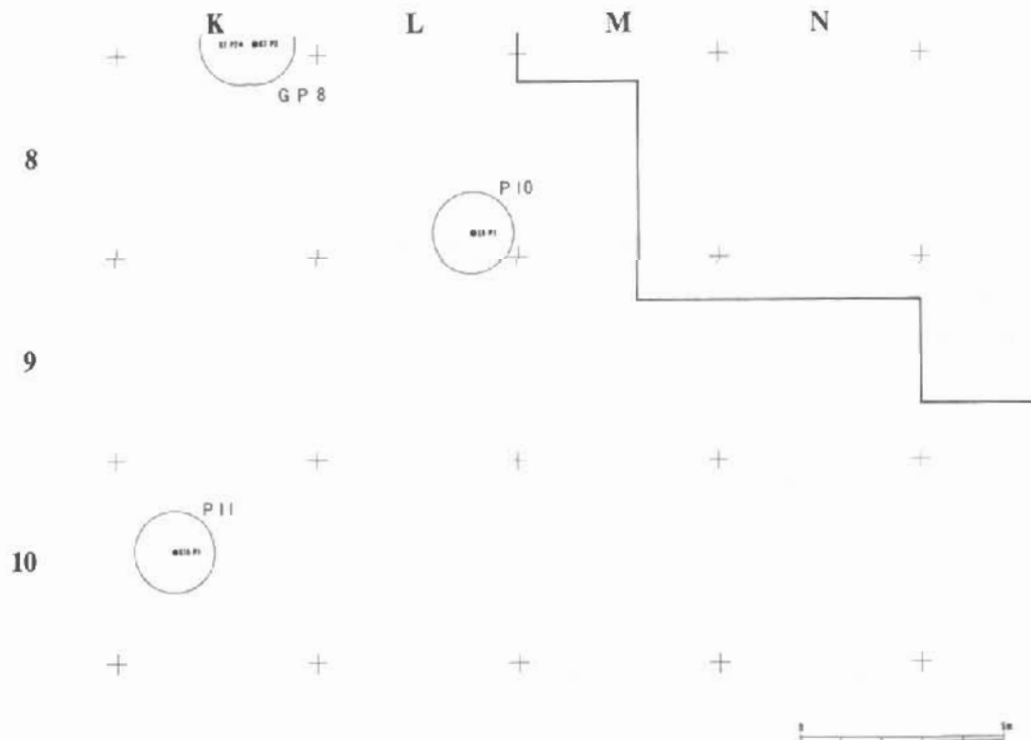
210.8m、最低所の標高は209.5mである。本ブロックの東は未発掘部分があり、東の泥炭面までの間の陸地部に分布が伸延する可能性もある。2群の弱い求心性を示す小ブロックが中心としてある。発掘された遺物分布範囲の面積は約78㎡である。H1・H2・H2 outの3小ブロックよりなる。内部には、遺構として配石8・9の2基、配石群7・8の2群、礫ブロック7の1群がある。配石7は石器類ブロックGとの中間に位置する。石器類は、削器2点、楔形石器1点、彫器1点、礫器1点、敲石1点、磨石1点、加工痕有剥片4点、使用痕有剥片7点、剥片91点、碎片13点、石核7点の129点がある。石材の内訳は、サヌカイト113点、チャート13点、凝灰岩1点、砂岩2点である。小ブロックでは、H1で61点、H2で65点、H2 outで3点である。

**ブロックI (第301図・第311図)**

KLMNO列の8・9・10区に南北13m、東西21mの範囲に帯状の石器類分布を見せる。ブロック最高所の標高は210m、最低所の標高は208.4mである。石器類ブロックHと石器類ブロックJ aの間隙にある島状小ブロック群である。遺物分布範囲の面積は約123㎡である。I1・I2・I3の3小ブロックに細分される。内部には、遺構として配石10の1基が石器類ブロックJ aとの中間に位置するのみである。石器類は、楔形石器1点、加工痕有剥片7点、使用痕有剥片5点、礫器2点、剥片29点、碎片9点、石核4点の合計57点が出土している。石材の内訳は、サヌカイト51点、チャート3点、泥岩2点、凝灰岩1点である。小ブロックでは、I1で26点、I2で19点、I3で12点がある。

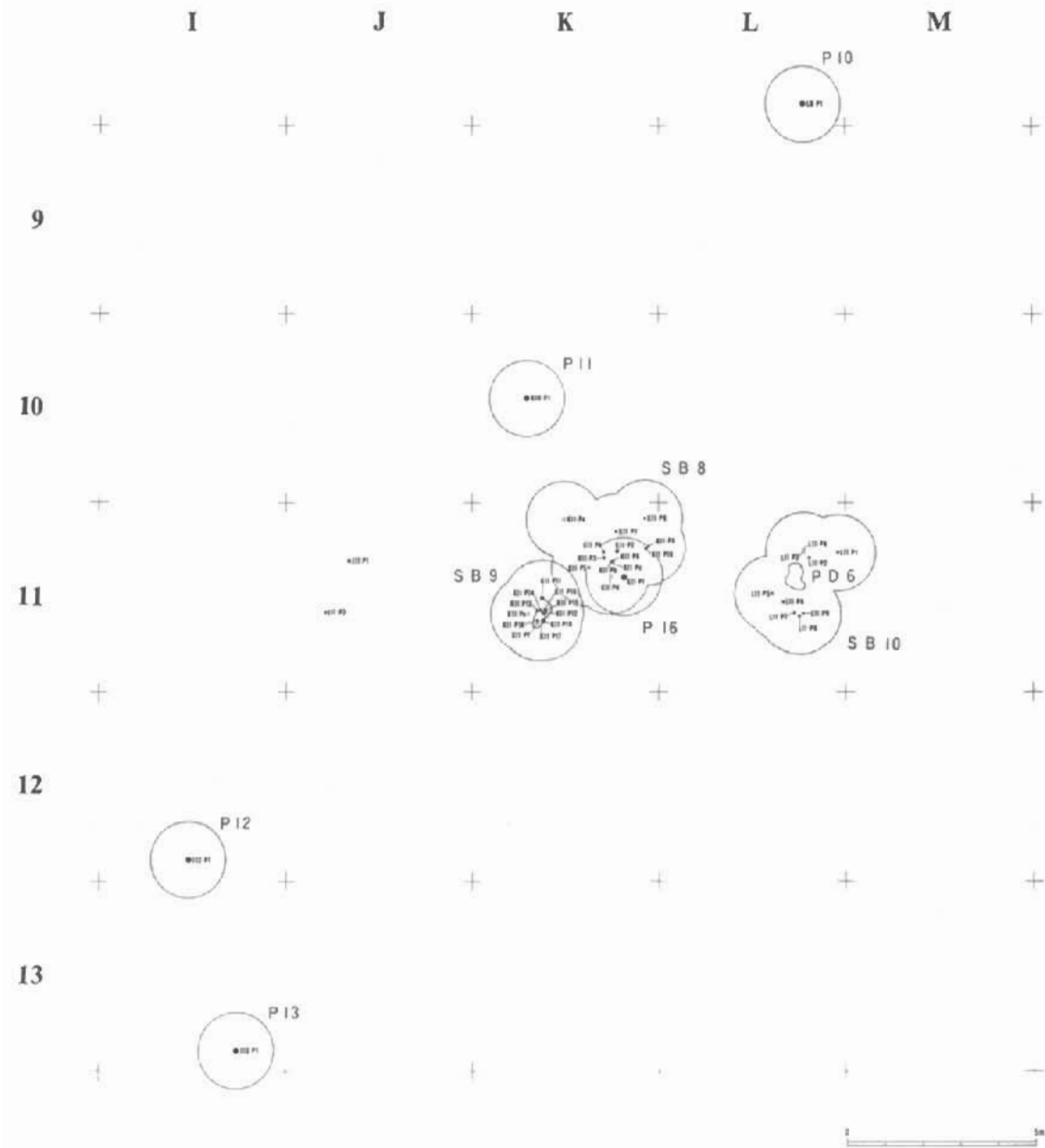
**ブロックJ (第312図・第313図・第314図)**

IJKLM列の9・10・11・12・13区に南北25m、東西24mの範囲に石器類分布を見せる。「群島」状の遺物分布を示す。ブロック最高所の標高は210m、最低所の標高は208mである。遺物分布範囲の面積は、J全体で345㎡に及ぶ。J全体では、他の石器類ブロックと比較して広面積であり、全体を一括してブロックの性格の評価・把握が可能か判断に苦しむ。ブロックJは、合計7小ブロックで構成され、小



第311図 Iブロック礫出土状況

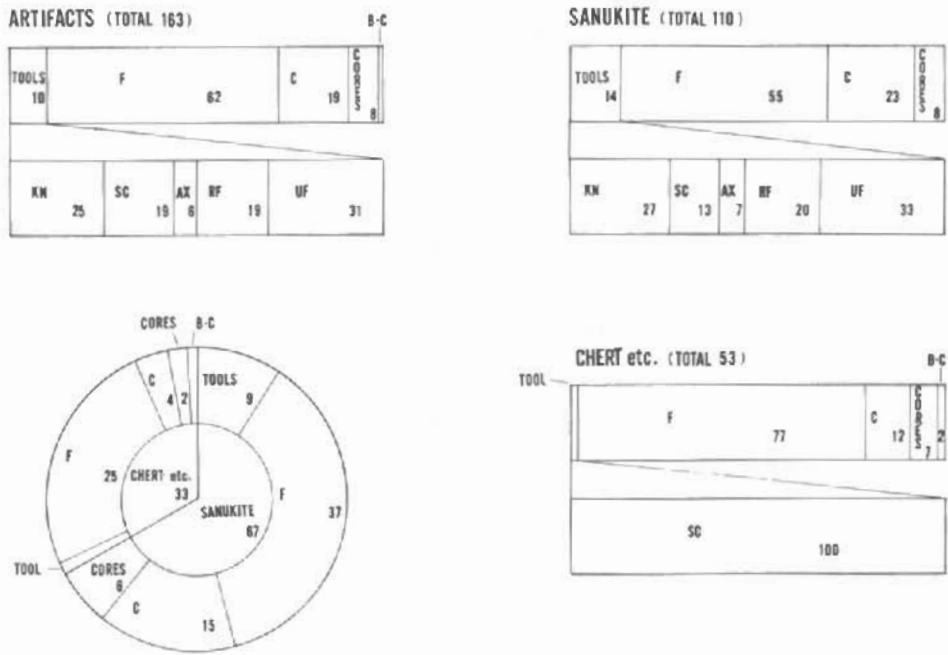
第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布



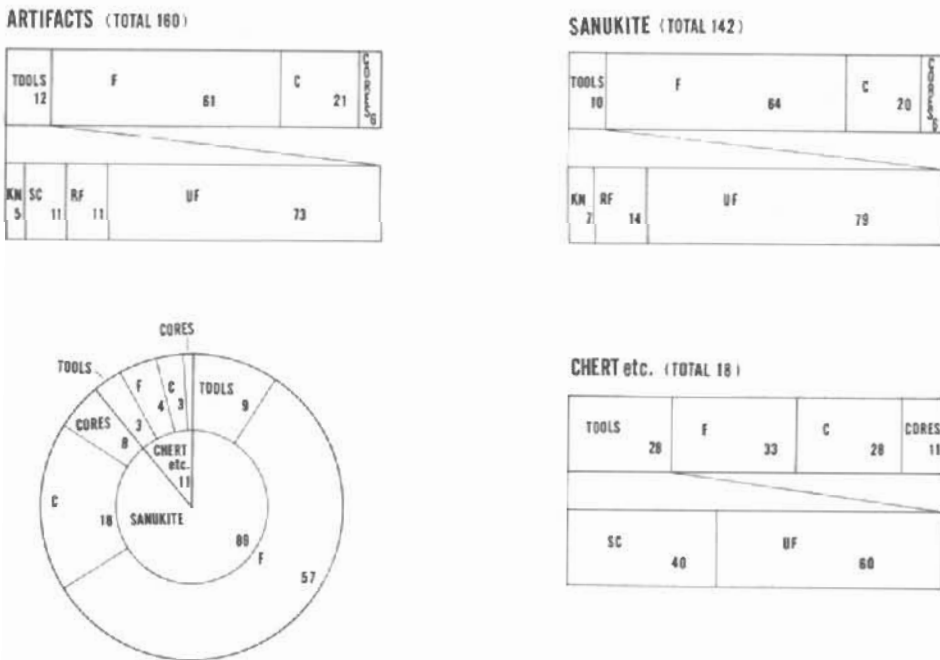
第312図 Jブロック出土状況

ブロック数も他と比べて多い。分析目的によっては、K10区に認められる遺物分布の間隙を境として南北に分離して検討する場合がある。北をJ a、南をJ bとする。北にはJ a 1・J a 2・J a 3・J a 3 outの4小ブロック、南にはJ b 1・J b 2・J b 2 outの3小ブロックにより構成される。内部には、遺構として北のJ aに第6土壌の1基、礫ブロック10の1群がある。また配石10の1基が石器類ブロックIとの中間に位置する。南のJ bに配石11・16の2基、礫ブロック8・9の2群がある。J aの石器類には、ナイフ形石器4点、削器3点、斧形石器1点、加工痕有剥片3点、使用痕有剥片5点、剥片101点、碎片31点、石核14点、石核素材1点の合計163点がある。石材の内訳は、サヌカイトが110点、チャートが53点である。小ブロックでは、J a 1で42点、J a 2で72点、J a 3で42点、Ja 3 outで7点である。J bの石器類には、ナイフ形石器1点、削器2点、加工痕有剥片2点、使用痕有剥片14点、剥片97点、碎片34点、石核10点の合計160点がある。石材の内訳は、サヌカイトが142点、チャートが18点である。小ブロックでは、J b 1が73点、J b 2が77点、J b 2 outが10点である。





第313図 J aブロック石器類組成グラフ (%)



第314図 J bブロック石器類組成グラフ (%)

ブロックK (第315図・第316図)

H I列の12・13・14区に南北10m、東西9mの範囲に石器類分布を見せる。ブロック最高所の標高は209.17m、最低所の標高は208.6mである。僅かな石器類が散在するのみで、他の石器類ブロックと同等に扱うには躊躇がある。遺物分布範囲の面積は、76㎡である。石器類ブロックKの内部・周辺には、遺構として配石12・13・14・15の4基がある。石器類には、加工痕有剥片1点、使用痕有剥片4点、剥片7点、石核1点の合計13点がある。石材の内訳は、チャート11点、凝灰岩1点、黒水晶1点である。

ブロックL

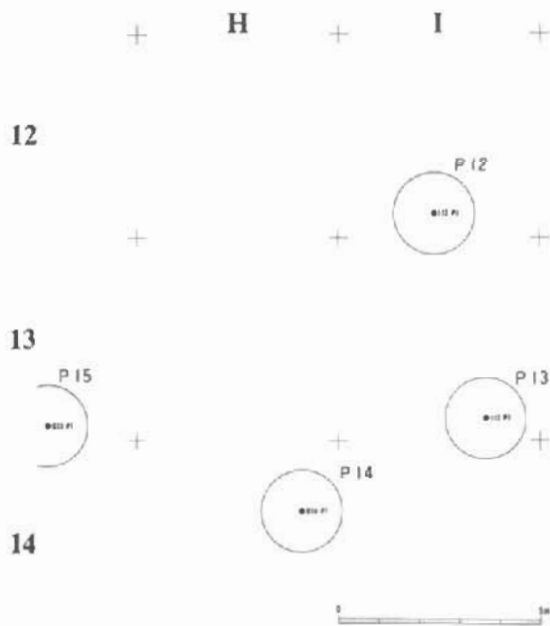
ブロックLは、わずか2点の石器類が出土したに留まり、西側の未発掘部にその分布が広がるであろう事から、十分な内容評価には困難がある。サヌカイトの剥片1点、チャートの使用痕有剥片1点が出土している。

ブロックB+C 2・3とブロックD+C 1・1 outの区分

ブロックBとC北半間の分離が曖昧であるので、ブロックBとC 2・C 3小ブロックを合併した石器組成を示す。また、残ったC 1・C 1 outをブロックDと合併する。

ブロックB+C 2・3 (第317図)

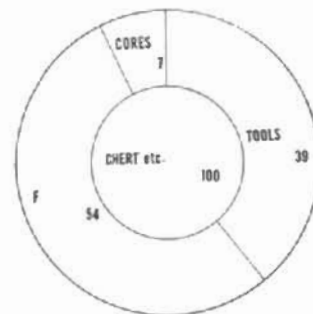
DEFG列の3・4・5・6区に南北16m、東西18mの範囲に石器類分布を示す。ブロック最高所の標高は231.2mで、最低所は211.5mである。遺物分布範囲の面積は、約260㎡である。石器類ブロック内部には、遺構として、第1～4土壌の4基、配石3・4の2基、配石群5の1群があり、また礫ブロック2の1群がブロックFとの間にある。石器類には、ナイフ形石器4点、極器11点、削器14点、錐状石器3点、加工痕有剥片16点、使用痕有剥片27点、礫器2点、台石1点、剥片232点、碎片57点、石核30点、石核素材2点、原石破碎片3点の合計402点がある。石材の内訳は、サヌカイト86点、チャート303点、凝灰岩4点、流紋岩1点、鉄石英4点、頁岩1点、砂岩3点である。



第315図 Kブロック礫出土状況

ARTIFACTS (TOTAL 13)

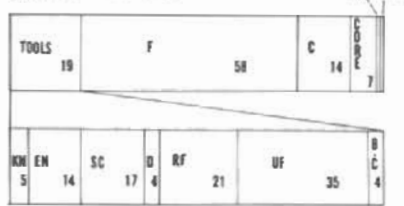
TOOLS	36	F	54	C	7
RF	20	UF	80		



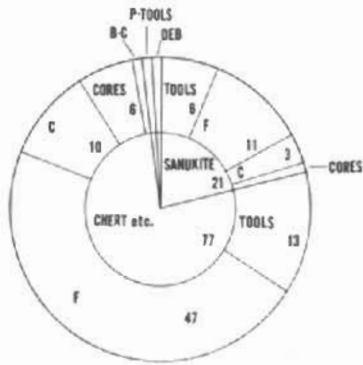
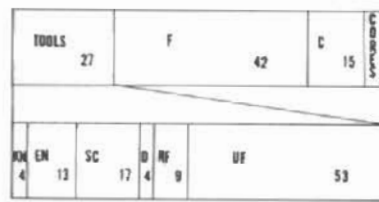
第316図 Kブロック石器類組成グラフ (%)

第IV章 下位文化層の調査

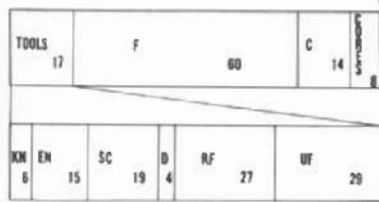
ARTIFACTS (TOTAL 402)



SANUKITE (TOTAL 86)



CHERT etc. (TOTAL 310)

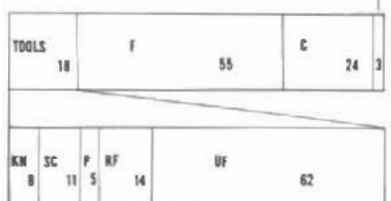


PEBBLE TOOLS (TOTAL 3)

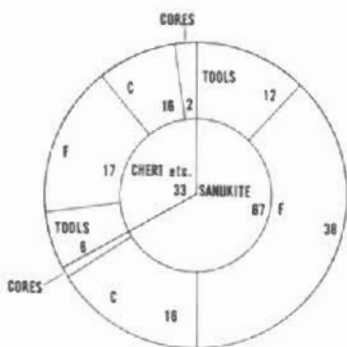
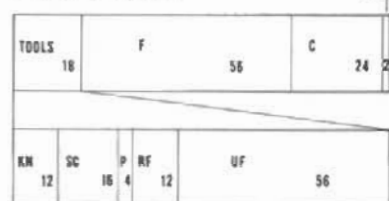


第317図 B+C 2・3ブロック石器類組成グラフ (%)

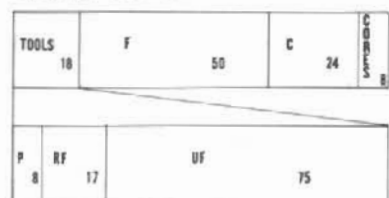
ARTIFACTS (TOTAL 202)



SANUKITE (TOTAL 136)



CHERT etc. (TOTAL 66)



第318図 D+C 1・1 outブロック石器類組成グラフ (%)

## ブロックD+C1・1 out (第318図)

D E F列の7・8・9区の南北12m、東西14mの範囲に石器類分布範囲を示す。ブロックの最高所は標高212.1m、最低所は210.3mである。遺物分布範囲の面積は約140㎡である。石器類ブロック内には、遺構として礫ブロック4・5の2群がある。石器類には、ナイフ形石器2点、削器4点、楔形石器2点、加工痕有剥片5点、使用痕有剥片23点、剥片110点、碎片48点、石核8点の合計202点である。石材の内訳はサヌカイトが136点、チャートが65点、流紋岩が1点である。

## 石器類ブロックの遺物集積度と中心座標

板井寺ヶ谷遺跡下位文化層の石器類の分布は、すでに検討したように漫然と分布しているわけではなく、一定の範囲で集中し、場合によっては求心的集中状況を示す。散漫分布と島状分布、求心的集中の度合は、その石器類ブロックの石器類総数・ブロック面積等によって多様化しているものと推定できる。ここでは、一定の面積内にどれだけ石器類があるかを計算し、石器類ブロックの遺物集積度を明らかにする。

まず、遺跡全域を0.25平方mに区分し、石器類が1点でもある升目ごとに石器類が何点あるかを勘定する。石器類1点に対しての他石器類点数を石器ブロック全体で合計して平均化すると、石器1点当たり他石器類と共伴している平均個数が求められる。ブロック内の石器類の分布する升目すべてを合算して石器総数で割り平均値を求めるのである。この平均個数を遺跡全体での一般平均個数を1とした検定値と比較することによって、集積度の強弱を把握する。

計算方法としては、以下のようになる。

分布している遺物の総数をa個、0.25平方m単位で石器類に近接している他の石器類の数をXとすると、平均共伴個数Yは、

$$(X_1 + X_2 + X_3 + \dots + X_a) \div a = Y$$

の式で計算できる。この数値を、遺跡全体の総遺物数で計算した数値で割ると、集積度の指標が得られる。

第20表にこのような方法で求めた石器類ブロック別遺物集積度と共伴平均個数を、全石器類と、チャート等製石器類とサヌカイト製石器類を分けて計算したものの3つについて掲げる。

遺跡全体での平均は、0.25平方mの1升目当たり2.40個であった。共伴平均個数は1.40である。サヌカイトに限定した平均は1.64個で、共伴一般平均個数は0.64となる。チャートなどの石材では平均が2.26個、共伴一般平均個数は1.26個であった。全石器類の共伴平均個数とサヌカイトの共伴平均個数の比率は1:0.45、チャートなどとの比率は1:0.90となる。全石器類の共伴平均個数がサヌカイト・チャート等のいずれの共伴平均個数も上回ったということは、下位文化層でのサヌカイト製石器類とチャートなど製石器類の両者が一定の範囲で積極的な共伴関係を持っていることを示す。仮に両石材の共伴平均個数を全石器類共伴平均個数が下回った場合、両石材が避けあった消極的共伴関係を示すものとして評価できよう。

ブロック別の遺物集積度を比較すると、遺跡一般平均を越えた石器類ブロックとしてブロックA・E aがあり、ブロックB・D・Fは、平均に僅かに及ばない。ブロックC・H・J aは集積度0.80前後に、ブロックE b・J bは0.50前後に固まる。ブロックG・Iは0.20前後、K・Lは0.00ときわめて低い。

平均を越えたのがAとE aの2ブロックで、他のブロックは平均以下であるので、越えた2ブロックの集中の度合と遺物量がきわめて大きいものであると理解されよう。また、G・I・K・Lの4ブロッ

クは、ほとんど遺物が単独で散漫に分布していることが読み取れよう。前の節で検討したブロック設定では、G・Iの遺物分布が他の石器類集中部とは異なった基準で認定したが、この遺物集積度が他の石器類ブロックと比べてきわめて低い点にも相違点があることが明らかになった。

広範囲石器類ブロックの問題を検討しよう。2分して観察することにしたEの集積度は0.83であるが、aの1.11とbの0.52には大きな差異が認められ、E全体を一括すると局地的な状況が曖昧になってしまう。Jでも、集積度は0.67であるが、aの0.80とbの0.53には開きがある。全石器類の集積度を見る限

第20表 石器類ブロック別遺物集積度（共伴平均個数）一覧表

	全石器類	チャート等製	サヌカイト製	C-S	S-C
全遺跡	1.00(1.40)	1.00(1.26)	1.00(0.64)	1.00(0.34)	1.00(0.48)
A total	1.84(2.58)	1.41(1.98)	1.07(0.69)	2.08(0.71)	3.45(1.66)
B total	0.99(1.39)	0.96(1.21)	0.90(0.58)	0.61(0.21)	1.97(0.95)
C total	0.85(1.20)	0.49(0.62)	1.37(0.88)	1.50(0.51)	0.81(0.39)
D total	0.92(1.30)	0.53(0.68)	1.85(1.19)	1.14(0.39)	0.50(0.24)
Ea total	1.11(1.56)	1.13(1.43)	0.50(0.32)	0.70(0.24)	1.83(0.88)
Eb total	0.52(0.73)	0.53(0.68)	0.34(0.22)	0.29(0.10)	0.75(0.36)
E total	0.83(1.17)	0.84(1.07)	0.42(0.27)	0.47(0.16)	1.31(0.63)
F total	0.93(1.31)	1.04(1.32)	0.00(0.00)	0.14(0.05)	1.18(0.57)
G total	0.20(0.28)	0.09(0.12)	0.29(0.19)	0.97(0.33)	0.12(0.06)
H total	0.85(1.19)	0.29(0.37)	1.81(1.16)	1.82(0.62)	0.14(0.07)
I total	0.22(0.31)	0.00(0.00)	0.48(0.31)	0.73(0.25)	0.04(0.02)
Ja total	0.80(1.12)	0.98(1.24)	0.90(0.58)	1.50(0.51)	0.52(0.25)
Jb total	0.53(0.75)	0.08(0.11)	1.04(0.67)	1.79(0.61)	0.16(0.08)
J total	0.67(0.94)	0.75(0.95)	0.98(0.63)	1.58(0.54)	0.31(0.15)
K total	0.00(0.00)	0.00(0.00)	-----	-----	-----
L total	0.00(0.00)	0.00(0.00)	0.00(0.00)	0.00(0.00)	0.00(0.00)
A1	2.55(3.57)	2.15(2.71)	2.50(1.06)	2.58(0.88)	5.14(2.47)
A1out	0.39(0.55)	0.59(0.75)	-----	-----	-----
A2	1.58(2.22)	1.19(1.50)	0.84(0.54)	2.88(0.98)	2.79(1.34)
A2out	0.00(0.00)	0.00(0.00)	-----	-----	-----
A3	1.18(1.66)	1.23(1.56)	0.51(0.33)	0.50(0.17)	1.91(0.92)
A4	0.23(0.33)	0.10(0.14)	0.00(0.00)	0.61(0.21)	0.62(0.30)
B1	1.08(1.54)	1.22(1.54)	0.00(0.00)	0.38(0.13)	1.62(0.78)
B1out	0.10(0.14)	0.12(0.16)	0.00(0.00)	0.00(0.00)	0.00(0.00)
B2	1.22(1.72)	1.13(1.43)	0.48(0.31)	0.91(0.31)	2.75(1.32)
B2out	0.28(0.40)	0.00(0.00)	0.00(0.00)	0.73(0.25)	2.08(1.00)
B3	0.84(1.18)	0.79(0.68)	1.09(0.70)	1.00(0.34)	1.83(0.88)
C1	1.25(1.75)	0.67(0.85)	1.84(1.18)	3.35(1.14)	0.95(0.46)
C1out	0.00(0.00)	-----	0.00(0.00)	-----	-----
C2	0.52(0.73)	0.46(0.58)	0.25(0.16)	0.52(0.18)	1.04(0.50)
C3	0.33(0.47)	0.26(0.33)	0.57(0.37)	0.32(0.11)	0.27(0.13)
D1	1.20(1.68)	0.84(1.07)	2.26(1.45)	2.26(0.77)	0.41(0.20)
D1out	0.00(0.00)	0.00(0.00)	0.00(0.00)	0.00(0.00)	0.00(0.00)
D2	0.48(0.68)	0.39(0.50)	0.00(0.00)	0.61(0.21)	1.31(0.63)
Ea1	1.16(1.63)	1.26(1.60)	0.40(0.26)	0.52(0.18)	1.52(0.73)
Ea1out	0.00(0.00)	0.00(0.00)	0.00(0.00)	0.00(0.00)	0.00(0.00)
Ea2	1.33(1.87)	1.33(1.68)	0.54(0.35)	0.91(0.31)	2.31(1.11)
Ea3	0.34(0.48)	0.30(0.38)	0.78(0.50)	0.14(0.05)	0.52(0.25)
Eb1	0.39(0.55)	0.48(0.61)	0.00(0.00)	0.11(0.04)	0.31(0.15)
Eb2	0.57(0.81)	0.63(0.80)	0.43(0.28)	0.20(0.07)	0.60(0.29)
Eb3	0.60(0.84)	0.41(0.52)	0.56(0.36)	0.70(0.24)	1.52(0.73)
F1	1.07(1.50)	1.18(1.49)	0.00(0.00)	0.17(0.06)	1.83(0.88)
F1out	0.00(0.00)	-----	0.00(0.00)	-----	-----
F2	0.65(0.91)	0.72(0.91)	0.00(0.00)	0.05(0.02)	1.04(0.50)
G1	0.12(0.17)	0.00(0.00)	0.31(0.20)	0.00(0.00)	0.00(0.00)
G2	0.14(0.20)	0.00(0.00)	0.17(0.11)	1.17(0.40)	0.12(0.06)
G3	0.32(0.45)	0.19(0.25)	0.45(0.29)	1.11(0.38)	0.22(0.11)
H1	0.72(1.01)	0.47(0.60)	1.21(0.78)	2.35(0.80)	0.33(0.16)
H2	1.00(1.41)	0.00(0.00)	2.39(1.53)	0.00(0.00)	0.00(0.00)
H2out	0.00(0.00)	0.00(0.00)	0.00(0.00)	0.00(0.00)	0.00(0.00)
I1	0.16(0.23)	0.00(0.00)	0.39(0.25)	0.00(0.00)	0.00(0.00)
I2	0.37(0.52)	0.00(0.00)	0.78(0.50)	0.97(0.33)	0.12(0.06)
I3	0.11(0.16)	0.00(0.00)	0.28(0.18)	0.00(0.00)	0.00(0.00)
Ja1	0.64(0.90)	0.00(0.00)	1.35(0.87)	1.97(0.67)	0.10(0.05)
Ja2	0.67(0.94)	1.19(1.51)	0.50(0.32)	0.50(0.17)	0.25(0.12)
Ja3	1.32(1.85)	0.82(1.04)	1.18(0.76)	2.79(0.95)	1.97(0.95)
Ja3out	0.00(0.00)	-----	0.00(0.00)	-----	-----
Jb1	0.30(0.43)	0.19(0.25)	0.51(0.33)	1.47(0.50)	0.12(0.06)
Jb2	0.79(1.11)	0.00(0.00)	1.67(1.07)	2.05(0.70)	0.20(0.10)
Jb2out	0.14(0.20)	-----	0.31(0.20)	-----	-----

り、E・J両石器類ブロックを南北に2分する事は、支持されよう。

次に、サヌカイト・チャート等別に遺物集中度を観察してみよう。

チャート等製石器群の集積度が遺跡一般平均を上回ったのは、ブロックA・E a・Fの3石器類ブロックである。ブロックB・J aの2石器類ブロックは平均に僅かに及ばない。ブロックC・D・E bの3石器類ブロックは0.50前後の集積度である。G・H・I・J b・K・Lの6石器類ブロックは集積度が0.30未満である。E全体では集積度0.84であるが、aは1.13、bは0.53と開きがある。Jでも、全体では0.75、aでは0.98、bでは0.08と大きな差異があり、ここでもE・Jの一括評価には不安が残る。

サヌカイト製石器群の集積度が遺跡一般値を上回ったのは、ブロックA・C・D・H・J bの5石器類ブロックである。ブロックB・J aの2石器類ブロックは平均を僅かに下回る。E a・Iの2ブロックは集積度が0.50前後で、E b・Gの2石器類ブロックは集積度0.30前後である。ブロックF・Lは0.00、Kにはサヌカイト製石器類は存在しない。E全体では集積度0.42、aの0.50、bの0.34と大きな差異はない。Jでも、全体の集積度0.98、aの0.90、bの1.04と一致しているので、サヌカイト製石器類の集積度ではE・Jの評価に違いはない。

チャート等製・サヌカイト製の両者が一般値を上回ったブロックAで、チャート等製1.41、サヌカイト製1.07に対し全石器類で1.84と、個々の石材の数値を上回ったことは、両石材の石器群が積極的に共伴していることを示している。他の石器類ブロックで、全石器類の集積度が両石材の数値を上回り積極的共伴の認められるものはないので、ブロックAの特異性は強調されなければならない。逆に、両石材の集積度を全石器類の集積度が下回ったのは、ブロックJ aである。J aでは、チャート等0.98、サヌカイト0.90であったのに対して、全石器類では0.80となる。両石材ごとの集積度は高いが、両者の分布はお互いに避けあった消極的な共伴関係を見ることができよう。

石器類小ブロックの石器類集積度の観察に移ろう。

各石器類ブロックの中で、全石器類の集積度が一般平均値を超えた小ブロックを1つでも有するのは、A・B・C・D・E a・F・H・J aであり、いずれの小ブロックも下回ったのはE b・G・I・J b・K・Lである。上回ったブロックで、小ブロック単位で集積度が高い部分は、1～3小石器類ブロックが認められる。下回ったブロックは、ブロック単位での観察結果で集積度が低かったものに一致する。

サヌカイトとチャート等の2つの石材ごとに観察しよう。サヌカイト製石器類が、一般平均を上回って集積した小ブロックを含む石器類ブロックは、A・B・C・D・H・J a・J bである。チャート等製石器類が一般平均を上回って集積した小ブロックを含む石器類ブロックは、A・B・E a・F・J aである。A・B・J aの3石器類ブロックには、両石材が一般平均を上回った小ブロックが含まれるが、同一小ブロックでサヌカイト・チャート等が一般平均を上回ったのは石器類ブロックAのA1小ブロックのみで、他の石器類ブロックではサヌカイトとチャート等両方の集積度が高い小ブロックは存在しない。

全体として、サヌカイト製石器群とチャート等製石器群は、集積度の高い石器類ブロックを違えているが、ブロックAでは極めて積極的に両者が集積する。個々の小ブロックなどでも、A1小ブロックで両者の集積度が高い。ブロックAの特異性が明かとなった。またブロックが、どちらの石材が中心かは別として、集積度の高いもの、低いものが認められた。このような違いが、石器類ブロックのどの様な機能・性格を反映しているか、問題となろう。

次に、各石器類ブロックの位置を明示しておきたい。ブロック毎の記述の際に、遺物分布の外郭線で

第21表 石器類ブロックの遺物平均座標 (単位cm、N=A0区北西角から南へ、W=東への距離)

	全石器類		チャート等		サヌカイト	
	N	W	N	W	N	W
全遺跡	2,992.9	3,730.2	2,514.1	3,488.0	3,667.5	4,071.4
A	1,169.1	2,693.5	1,173.3	2,705.4	1,159.1	2,665.4
B	2,378.2	2,615.4	2,367.9	2,611.0	2,425.0	2,635.8
C	3,509.3	2,659.4	3,372.1	2,684.1	3,617.0	2,640.1
D	3,993.1	1,947.7	3,868.8	1,864.4	4,069.3	1,998.7
Ea	1,960.7	4,269.1	1,968.7	4,267.0	1,960.7	4,269.1
Eb	2,741.0	4,881.6	2,733.5	4,852.6	2,770.0	4,993.7
E	2,333.2	4,561.3	2,333.3	4,547.2	2,331.9	4,616.2
F	3,287.3	3,719.3	3,280.6	3,702.4	3,363.4	3,912.3
G	4,213.8	4,114.7	4,163.8	3,892.4	4,223.7	4,158.6
H	3,676.1	5,242.2	3,600.0	5,278.6	3,686.9	5,237.0
I	4,572.4	5,897.9	4,414.0	6,003.8	4,591.0	5,885.4
Ja	5,218.6	5,513.9	5,323.9	5,636.3	5,167.8	5,455.0
Jb	5,665.0	4,947.1	5,693.7	4,950.7	5,661.3	4,946.7
J	5,439.7	5,233.2	5,417.7	5,462.5	5,445.9	5,168.6
K	6,634.5	4,115.7	6,634.5	4,115.7		
L	2,299.0	6,101.5	2,645.0	6,085.0	1,953.0	6,118.0
A1	1,006.5	2,726.8	1,010.4	2,729.4	995.8	2,719.6
A1out	360.4	2,467.0	331.3	2,463.1	438.0	2,477.3
A2	1,306.0	2,488.6	1,295.7	2,494.9	1,320.4	2,479.9
A2out	1,138.8	2,182.5	1,138.8	2,182.5		
A3	1,573.0	2,862.2	1,566.1	2,875.8	1,573.0	2,862.2
A4	876.5	3,324.8	898.4	3,307.8	845.9	3,348.7
B1	2,278.4	2,702.8	2,291.4	2,697.8	2,198.6	2,733.1
B1out	2,085.6	3,173.6	2,085.2	3,164.6	2,089.3	3,248.7
B2	2,355.7	2,250.1	2,347.7	2,244.7	2,389.8	2,273.3
B2out	2,399.0	1,771.6	2,497.0	1,706.8	2,007.0	2,031.0
B3	2,757.2	2,844.0	2,745.4	2,835.8	2,787.8	2,865.4
C1	3,716.1	2,680.3	3,689.4	2,673.4	3,726.9	2,683.1
C1out	4,442.0	2,743.6			4,442.0	2,743.6
C2	3,217.7	2,847.8	3,215.6	2,867.8	3,223.4	2,791.4
C3	3,177.0	2,332.8	3,173.8	2,353.8	3,180.5	2,309.1
D1	4,105.5	2,003.4	4,128.4	1,903.2	4,099.6	2,028.9
D1out	4,576.0	1,924.3	4,603.0	1,730.0	4,567.0	1,989.0
D2	3,695.5	1,839.5	3,697.6	1,849.0	3,689.4	1,809.9
Ea1	1,673.8	4,122.1	1,678.1	4,128.7	1,659.5	4,095.3
Ea1out	1,871.9	3,556.5	1,943.4	3,564.8	1,550.0	3,519.0
Ea2	2,122.9	4,301.2	2,130.5	4,293.9	2,095.8	4,327.3
Ea3	2,041.6	4,865.0	2,053.6	4,859.0	1,978.5	4,893.8
Eb1	2,666.0	4,216.1	2,636.2	4,197.0	2,792.4	4,296.8
Eb2	2,687.9	4,961.8	2,695.3	4,941.9	2,658.2	5,042.4
Eb3	2,979.4	5,698.4	2,986.6	5,690.0	2,957.1	5,724.4
F1	3,226.9	3,833.9	3,226.4	3,234.0	3,234.0	3,963.0
F1out	3,627.5	4,029.0			3,627.0	4,029.0
F2	3,412.3	3,402.1	3,414.9	3,398.9	3,353.0	3,416.0
G1	3,692.2	4,663.3	3,624.0	4,613.3	3,702.3	4,670.0
G2	4,529.9	4,324.1	4,521.4	4,386.2	4,531.2	4,315.0
G3	4,204.4	3,520.9	4,142.5	3,313.4	4,222.8	3,582.3
H1	3,466.4	5,325.2	3,369.5	5,249.3	3,485.4	5,340.1
H2	3,863.1	5,140.1	3,980.4	5,205.8	3,353.3	5,134.6
H2out	3,890.0	5,766.7	4,004.0	5,936.0	3,833.0	5,682.0
I1	4,474.9	5,398.0	4,226.5	5,409.0	4,495.6	5,397.1
I2	4,516.4	6,032.3	4,348.7	6,045.7	4,547.9	6,029.8
I3	4,872.3	6,768.2	4,985.0	7,068.0	4,862.1	6,740.9
Ja1	4,782.4	4,895.0	4,626.7	4,986.0	4,794.3	4,888.8
Ja2	5,215.3	5,554.3	5,215.0	5,502.6	5,215.6	5,589.1
Ja3	5,574.7	5,936.2	5,574.0	5,913.9	5,575.3	5,958.6
Ja3out	5,733.3	6,278.9			5,733.3	6,278.9
Jb1	5,534.3	4,595.9	5,608.5	4,569.1	5,525.2	4,599.2
Jb2	5,705.8	5,233.3	5,761.9	5,256.0	5,697.4	5,229.9

ブロックの範囲を示したが、ここでは出土した遺物の座標を素にする。A0区北西隅を0ポイントとして、すべての遺物の座標の平均を計算した。各石器類ブロックの中心座標として扱うことが可能であろう。その結果が、第21表である。

石器類ブロックD、H、Lは、ブロックの遺物分布範囲が完掘されたが確認されていないので、遺物平均座標には若干の変動する余地がある。

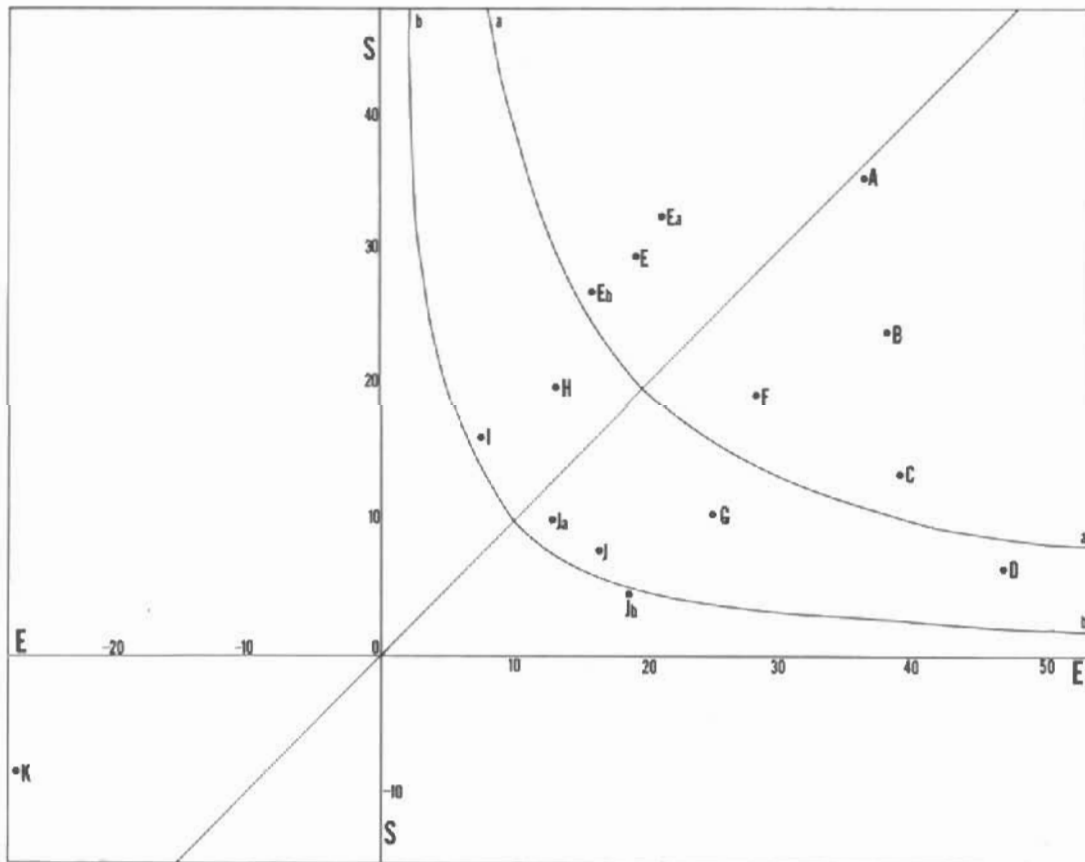
遺跡内での石器類ブロックの位置関係を、この座標を使って観察してみよう。下位文化層は、泥炭面と陸地面の2つの環境を有しているので、泥炭面からの距離を比較してみたい。始良Tn火山灰直下の泥炭面は、陸地面の南と東に取り囲むように分布しているので、それぞれの石器類ブロックの平均座標から南と東への泥炭面までの最短距離を測定した。それをグラフにしたのが、第319図である。

石器類ブロックAは、東の泥炭面まで36.40m、南は35.70mで、最も泥炭面まで遠い。また、両泥炭面までの距離がほぼ等しい点も注目される。Ea・Eb・H・Iは、東側の泥炭面に近く、南には遠い。B・C・D・F・G・Ja・Jbは南側の泥炭面に近く、東に遠い。Kは、泥炭面中に位置する。

東の泥炭面までの距離Eと南側の泥炭面までの距離Sの乗数が200を越える分岐線(a)の外側には、A・B・C・Ea・Eb・Fがある。内側にはD・G・H・I・Ja・Jbがある。Jbは、乗数100の分岐線(b)の内側にある。乗数200の分岐線(a)の外側は、言い替えると泥炭面から遠い部分と評価でき、その内側にある石器類ブロックと選地の上で、差異があると認められよう。

**ブロック別の石器組成**

ここでは、石器類ブロック毎の石器組成を比較し、それぞれの特徴を明らかにしたい。



第319図 ブロック別離水距離グラフ



まず、ブロック毎の石器類総数を観察してみよう(第337図)。最も点数の多いのは、石器類ブロックAで、476点である。最も少ないのは、ブロックLの2点であるが、Lには未発掘部分があり、全体が明らかではない。ブロックKは、13点で、ブロックAの2.7%に過ぎず、Iの55点も11.5%に留まるなど、石器類の数量は一定しない。このような違いを有するものを一括して同列に扱えるかどうか問題を残す。石器類点数の多いブロックは、求心的集中が認められたものが多く、点数の少ないブロックは、「群島」状の遺物分布を示すものが多い。ブロックが単一の機能空間のみで構成される場合はいいが、重複している場合、石器類ブロックを更に小ブロックに細分し、機能的な検討を行なう必要がある。ブロックと小ブロックの両段階での、「場」の機能の検討を試みなければいけない。

各石器類ブロック別の石器類組成を、付随的生産石器類と、意図的生産石器類に区別して観察してみる(第24表)。ナイフ形石器・搔器・削器・錐状石器・楔形石器・彫器などの定型的石器や礫石器類と、加工痕有剥片・使用痕有剥片を一括し、剥片・碎片・石核等と区別して、2群に分類する。ブロック毎のこの2群の占める比率を観察すれば、意図的生産石器類の比率が大きいのは、石器類ブロックKの38.5%、Iの26.3%、E aの20.4%で、小さいのはFの6.9%、J aの9.8%、J bの11.9%となる。他の石器類ブロックは、15%前後に集まっている。B・C・Dは、それぞれ18.6%、18.7%、21.0%となる。B+C 2・3とD+C 1・1 outでは、19.4%、18.3%である。L・PDは、量的・位置的問題から検討外とする。

意図的生産石器類と付随的生産石器類の多い少ないは、ブロックの機能が「居住的」・「工作的」空間としての特徴がいずれに傾いているかを表すものとして図式化できるものであろうが、遺物量のために比率として明瞭化できない可能性も考えられる。比率を見る限り、ブロック間での差異は意外に少なく、ブロックの性格が類似している様に考えられる。最大38.5%、最小6.9%、20~15%の意図的生産物の占有比率が、本来どの様な空間的機能のもとに形成されたかは、後で検討したい。

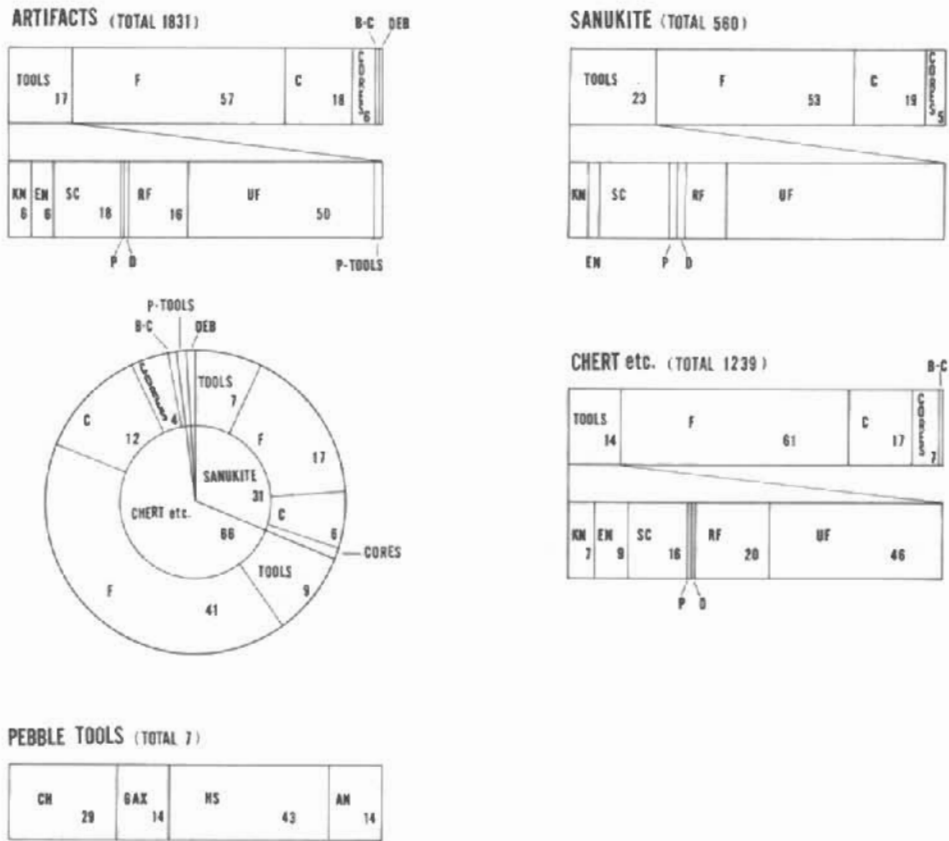
定型的な石器に加工痕・使用痕有剥片、礫石器類を加えた石器組成をブロック毎に観察しよう。第323図に、各石器類ブロックの組成比率を累積グラフ1として図示した。累積グラフは、器種の配列順序を替えると様相が一変する場合があるので注意が必要であるが、前半に加工度の高いもの、後半に加工度の低いものをまとめるよう配列する。

累積グラフを観察すると、大きく2つのグループが観察できる。第1群はB、B+C 2・3、E a、E b、F、J aの5石器類ブロックで、第2群はA、C、D、D+C 1・1 out、G、H、I、J bの6~7石器類ブロックである。B・C・Dは、ブロック区分を変更した場合に変動がある。2つのグループを分けたのはナイフ形石器・搔器・削器と、加工痕・使用痕有剥片の比率で、前者の組成比率が高いと第1群、後者の比率が高いと第2群となる。Kは、点数が少ないため、2つのブロック群には含まれない。

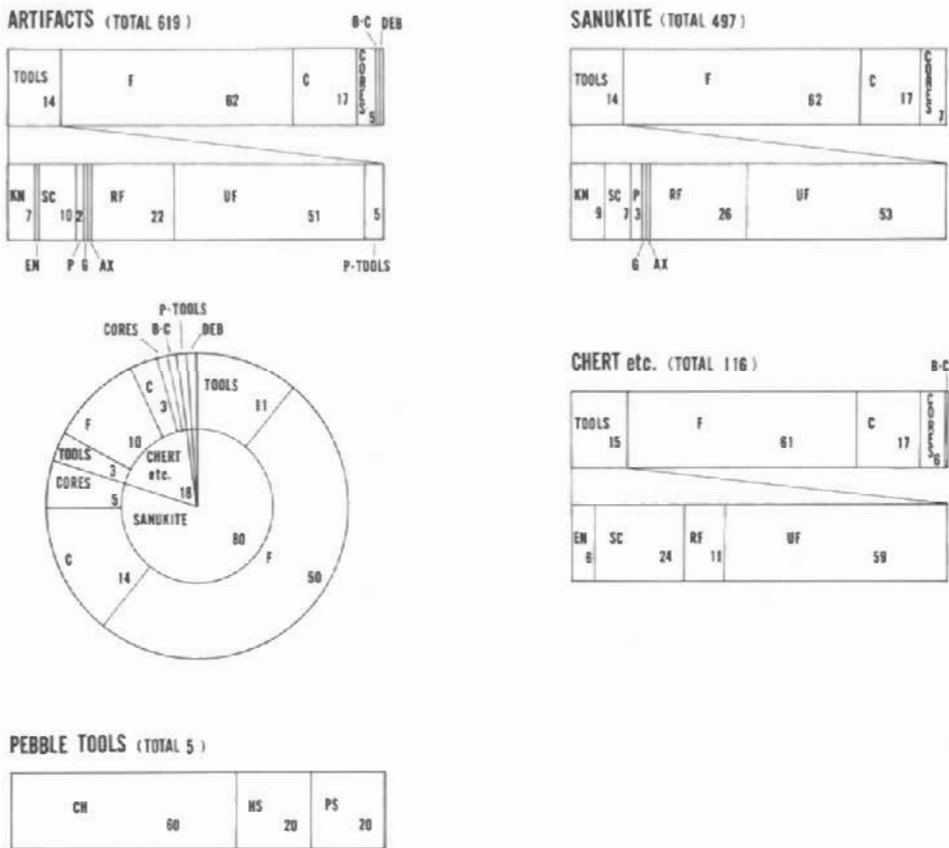
第1群は、J aが斧形石器・ナイフ形石器・削器で占有率50%を占める。その他の石器類ブロックも占有率37%を上回る。第2群では、ナイフ形石器・搔器・削器の占有率は27%以下で、加工痕・使用痕有剥片の比率が圧倒的に高い。石器類ブロックIは、ナイフ形石器・搔器・削器を組成せず、楔形石器・加工痕・使用痕有剥片で組成される。

石器類ブロックCは、約27%の占有率で、Dは約18%である。一方、石器類ブロックBは約46%である。これをブロック区分を変更して再編成すると、B+C 2・3は約35%、D+C 1・1 outは約24%となる。ブロックCを2つに分割した結果、Bと統合した占有率が元のCの占有率を上回った。Cの南北ではそれぞれの組成比率に大きな差異があり、一括して組成比を出すと特徴が失われてしまう。B・C

第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布



第320図 北群石器類組成グラフ



第321図 南群石器類組成グラフ

・Dを統廃合して2群に分けることが支持されよう。

第322図は、累積グラフ1の石器類ブロックを、下位文化層全体、北群・南群・A+B+C 2・3 + E + F、D+C 1・1 outに編成したものである。下位文化層全体でのナイフ形石器・搔器・削器等の比率が約29%程を示し、その数値が先の2つのブロック群の境になっていることが知れる。サヌカイトとチャート材の遺物分布の視覚的な認識による南北ブロック群が、石器組成上の群とはほぼ一致する事が判明する。第1群の石器類ブロックは北群に、第2群の石器類ブロックは南群に対応するのである。注目されるのは、下位文化層で南群に属する石器類ブロックJ aが第1群に、北群に属するAが第2群に、逆転して出現した点である。両石器類ブロックの組成比率の背景については、後で検討したい。

サヌカイトとチャート等の2つの石材群の平面的分布状況は、顕著な偏りを見せている。この偏りが、各石器類ブロックの石器類組成に影響を与えていることが考慮される。次に、石材を搬入材のサヌカイトと在地のチャート等の2つの石材群に区分し、石器類ブロック毎の、定型石器と加工痕・使用痕有剥片、剥片、砕片、石核と礫石器類その他の累積グラフ2bを作成した(第325図)。

累積グラフ第325図を観察すると、明瞭に3群を識別することができる。第1群は、G、H、I、J bの4石器類ブロックで、第2群はC、D、D+C 1・1 out、J aの3～4ブロック、第3群はA、B、B+C 2・3、E a、E b、Fである。第1群と第2群はサヌカイトの組成比率が50%を越えるブロック群で、第3群は組成比率が33%を下回る群である。B、C、Dを再区分すると、D+C 1・1 outはサヌカイトの占有比率が約67%、B+C 2・3が約21%、Bが約20%、Cが約56%、Dが約62%となる。Cの南北組成比が大きな差異を有することから、Cを2分してB・Dに統合することが妥当であることを示唆する。石器類ブロックKは点数が少なく、これらには組み込みにくい。

第324図は、下位文化層全体、南北2群、D+C 1・1 out、A・B・C 2・3・E・Fに統合した累積グラフである。南群とD+C 1・1 outでのサヌカイト組成比率が高いことが判断される。D+C 1・1 outは、第2群にある。C、D、Gが第1群・第2群に含まれるが、第3群は、下位文化層の北群にはほぼ対応する。第1群と第2群のJ aは、南群に対応する。

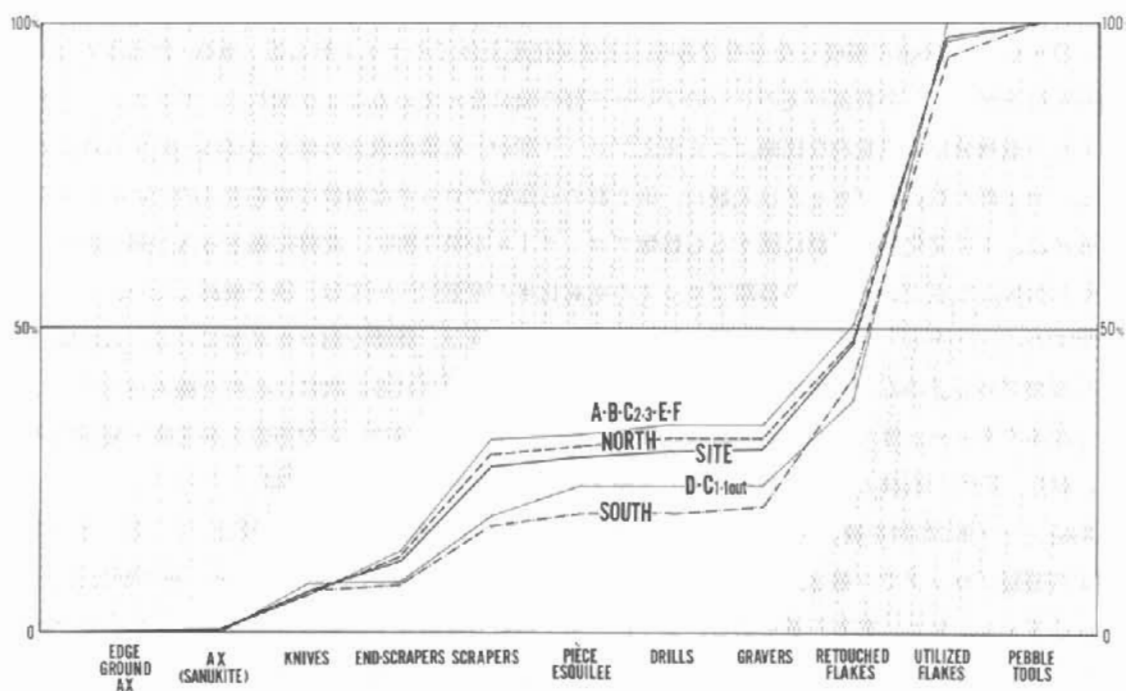
更に、定型的石器、加工痕・使用痕有剥片をサヌカイトとチャート等の2つの石材群に分け、礫石器類を加えて石器の石材別累積グラフ3bを作成した(第327図)。累積グラフを観察すると、A、B、B+C 2・3、E a、E bが階段状の軌跡を見せる。これらは、石材に関わらず豊富な器種をほぼまんべんなく装備していることが読み取れよう。サヌカイト製石器の組成比率は約35%以下である。C、D、D+C 1・1 out、G、H、I、J a、J bは、サヌカイト製加工痕・使用痕有剥片の組成比が目立ち、他の器種の装備はまちまちである。J aのサヌカイト製定型的石器比率が高いことが注目される。いずれの石器類ブロックもサヌカイトの組成比率が50%を越える。

第326図は、下位文化層全体、南北2群、D+C 1・1 out、A・B・C 2・3・E・Fに統合した累積グラフ3aである。D+C 1・1 outが50%より上に位置するほか、下回った石器類ブロックは北群に一致する。上回った石器類ブロックは南群に相当する。

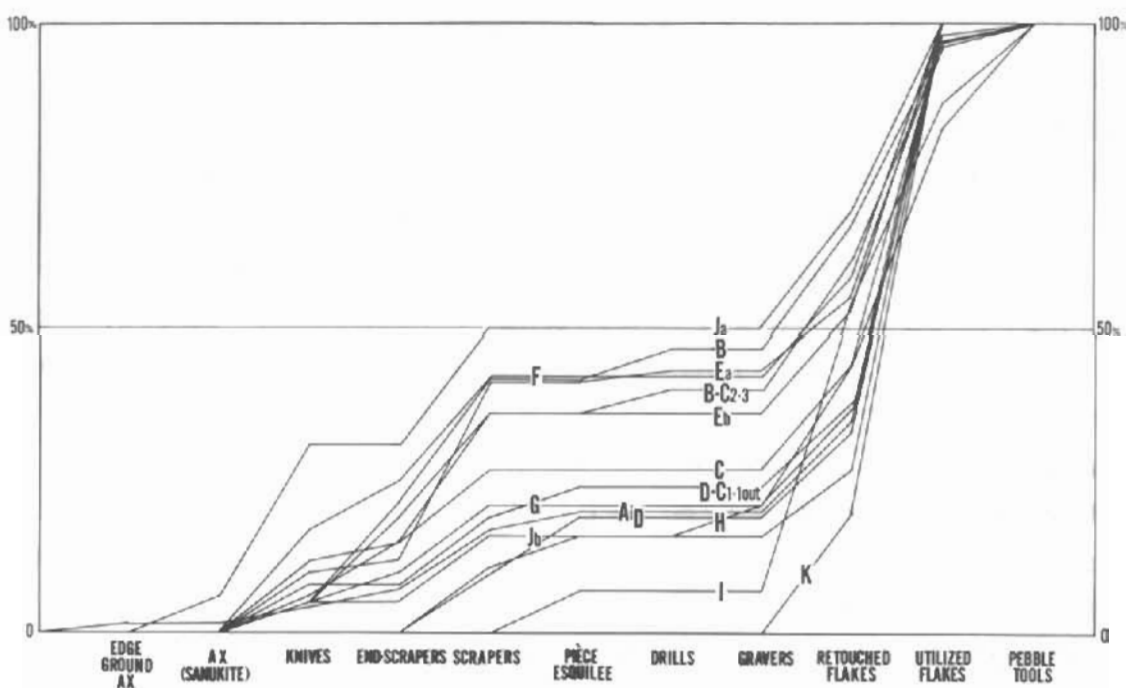
下位文化層の石器類ブロックの石器・石器類・石材組成を観察した結果を総合してみよう(第22表)。

下位文化層の遺物分布を視覚的に区別した南・北群区分は、石器類ブロックの石器・石器類・石材組成比率によく対応する(第323図・第325図)が、石材比率などではB・C・Dの再区分問題を含めて問題を残している。南北と累積グラフ1・2・3の判断結果を総合すると、A、B+C 2・3、E a・E b・Fの石器類ブロック群、D+C 1・1 outの石器類ブロック、G・H・I・J a・J bの石器類プロ

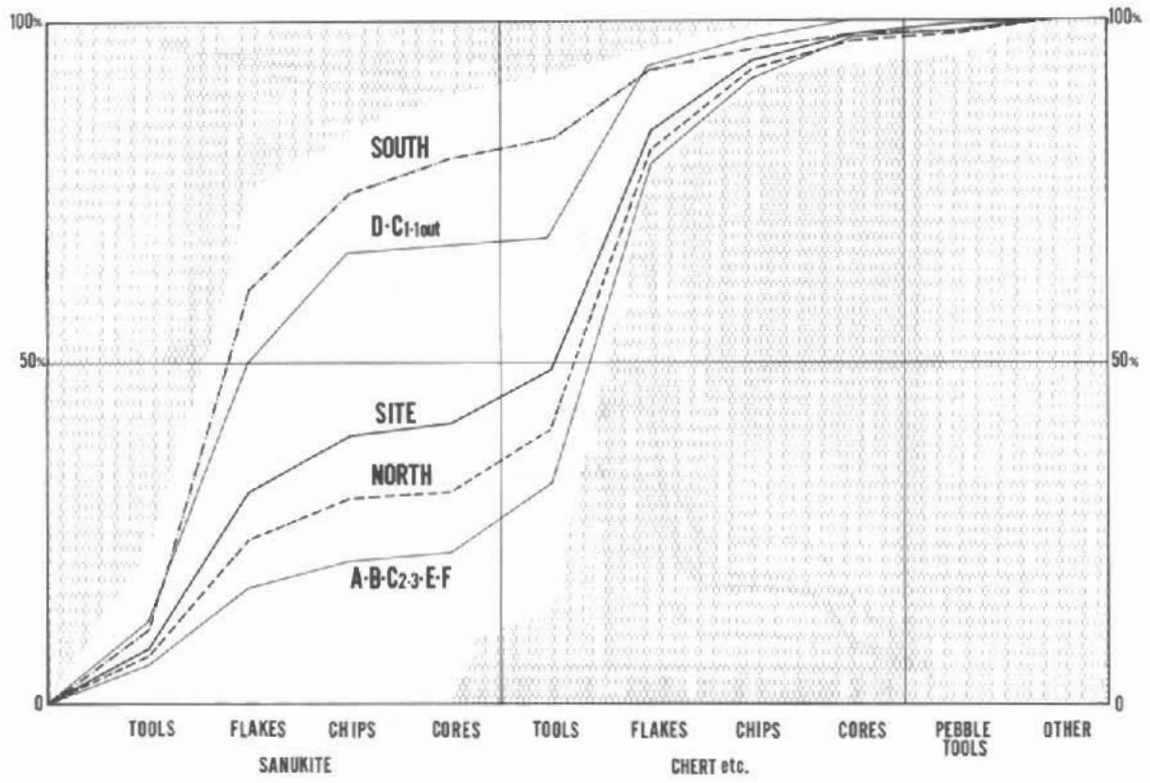
第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布



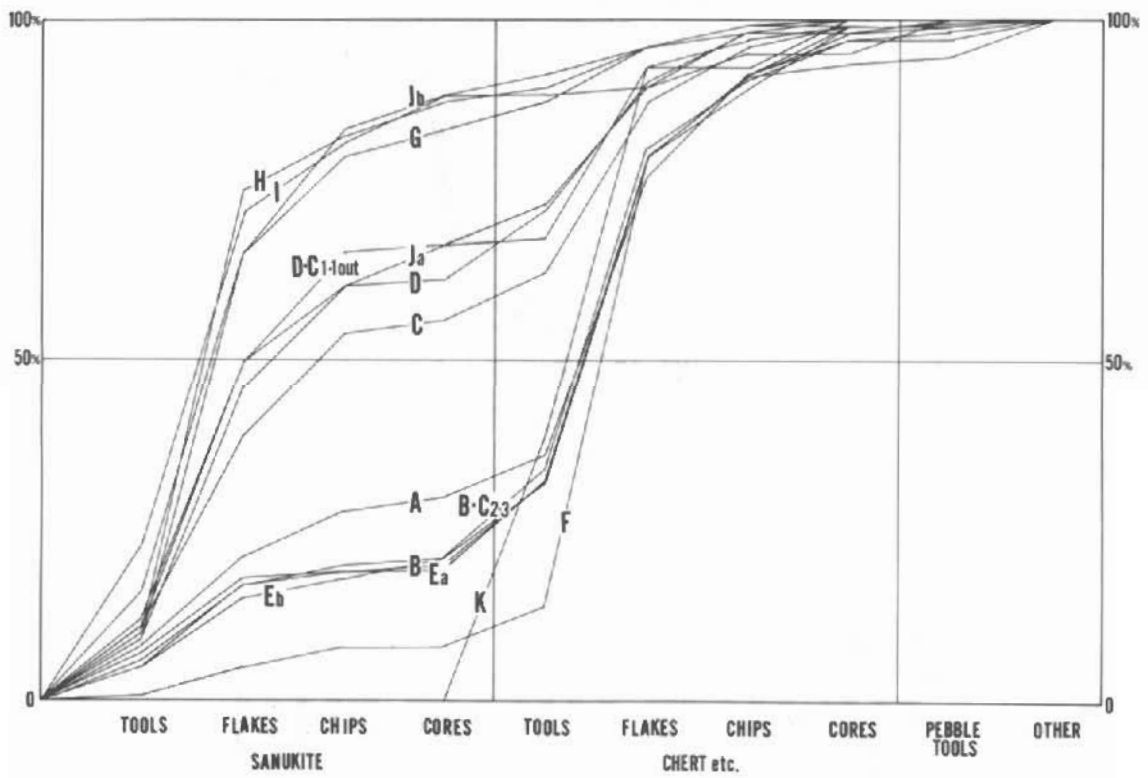
第322図 石器累積グラフ 1a



第323図 石器累積グラフ 1b

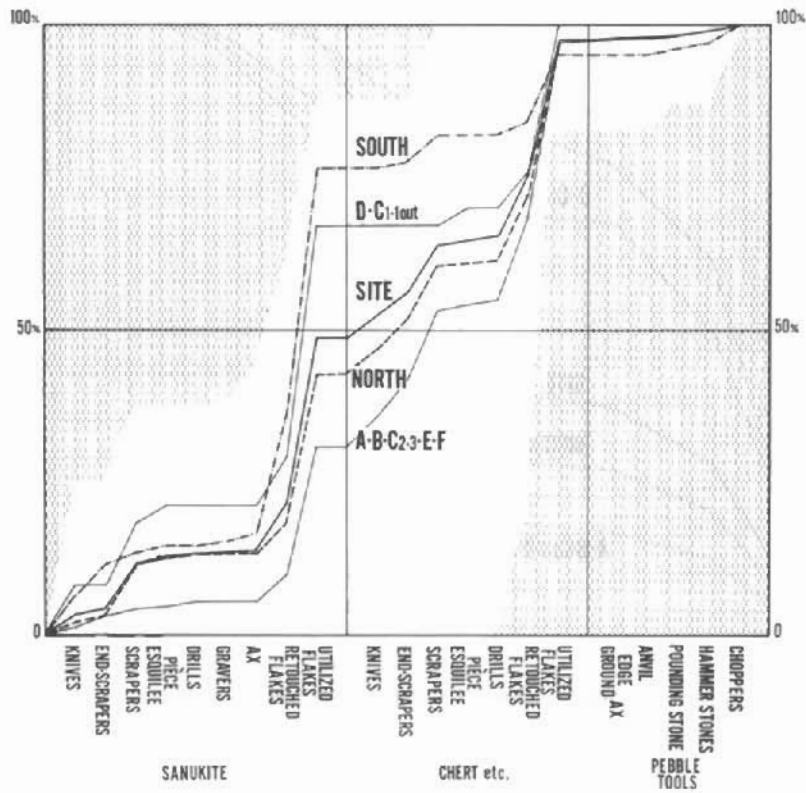


第324図 石器累積グラフ 2a

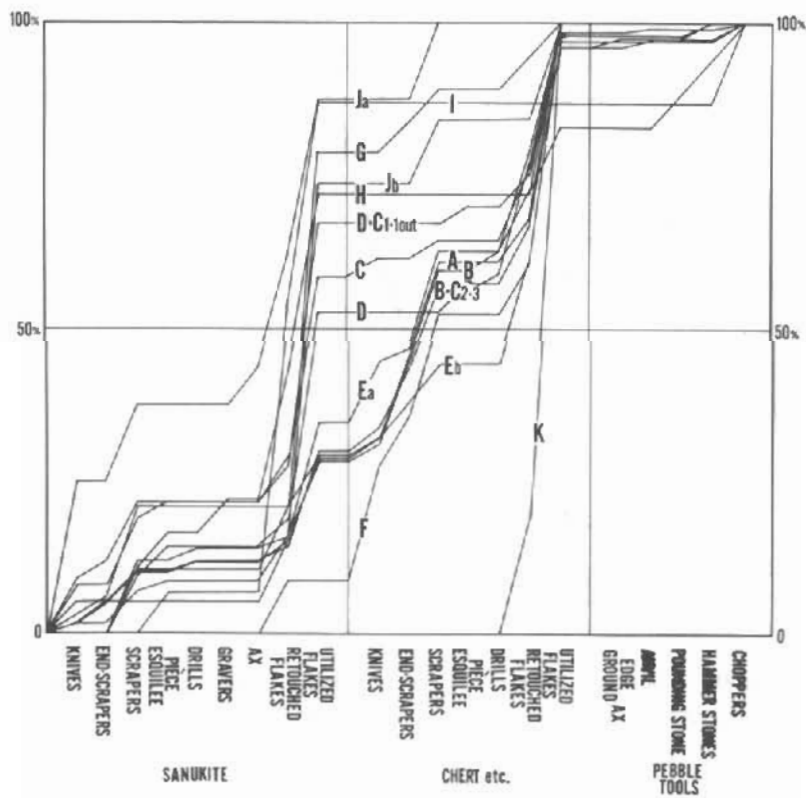


第325図 石器累積グラフ 2b

第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布



第326図 石器累積グラフ 3a



第327図 石器累積グラフ 3b

第22表 石器類ブロックの石器・石器類・石材組成

	南 北	累積グラフ1	累積グラフ2	累積グラフ3
A	北	第2群	第3群	第2群
B	北	第1群	第3群	第2群
B+C2・3	北	第1群	第3群	第2群
C	北	第2群	第2群	第1群
D	北	第2群	第2群	第1群
D+C1・1out	北	第2群	第2群	第1群
Ea	北	第1群	第3群	第2群
Eb	北	第1群	第3群	第2群
F	北	第1群	第3群	第2群
G	南 北	第2群	第1群	第1群
H	南	第2群	第1群	第1群
I	南	第2群	第1群	第1群
Ja	南	第1群	第2群	第1群
Jb	南	第2群	第1群	第1群
K	南	---	---	---

ック群の3群に大別できるように思われる。AとJaの2ブロックは、石器組成比率の点で、やや異なる部分を有する。個々の石器類ブロックの性格・機能については、後に総合的に判断したい。

#### 遺構と石器類ブロックの位置関係

石器類ブロックは、石器製作による副次生産物と石器類の使用・遺棄・廃棄によって形成される。一方、遺構はそれぞれ意図を持って構築されたものである。遺構個々は、それ自体で固有の機能を有するが、その配置は空間的機能と無関係に、いわば野放図に行われるものではなかろう。石器類ブロックと遺構は、その成立において異なった活動の結果であるという背景と、相互に関係した行為の連続である部分とを共有していると見られる。まとまりを示す一定の範囲に残された石器類ブロックと遺構の構築者は、同一であると推測するのが妥当であろう。ここでは、遺構と石器類ブロックの位置関係を見てみたい。

配石・配石群・礫ブロックは、礫石によって構築されたものであり、石器類と同等に風化・消滅することはなく、全てが遺存している。まず礫石と石器類ブロックの関係を観察しよう。単独配石は、石器類ブロックAの周辺に2基、B+C2・3の南半に2基、Eaの東部に2基、Hに3基、Iに1基、Jbに2基、Kに4基がある。配石群は、Aに4基、B+C2・3に1基、Ebに1基、Gに1基、Hに2基である。礫ブロックは、Aに1基、B+C2・3とFの間に1基、D+C1・1outに2基、Fに1基、Hに1基、Jaに1基、Jbに2基である。遺跡全体を見渡して観察すると、散漫に分布している礫石を含める場合、石器類点数の多いブロック周辺にややまとまって分布していることが知れよう。特に、石器類ブロックAやB+C2・3、D+C1・1out、F、H、Ja、Jb、Kにまとまる傾向が認められる。逆に、Ea、EbやG、Iでは僅かに配置されるのみである。

土壌は構築度の高い遺構ではあるが、浅い小型の土壌の残存は埋没状況に左右される。板井寺ヶ谷遺跡での土壌の遺存は、土壌形成作用の不活発さも相まって、遺構の埋没までの保存状態が遺跡全体で等しかったとは言い切れない。土壌が認められたのは石器類ブロックAに1基、B+C2・3に4基、Jaに1基である。特にB+C2・3の集中は顕著であるが、本来ほかの石器類ブロックに土壌が無かったとは言えない。土壌は、石器類ブロックの中に配置されることが知れる。

炭化物密集部は、炭化物密集部5がJaにある以外、石器類ブロックの内部には出現していない。湿地部周辺で発見され、この様な風水的作用を受けやすい遺構が遺存していたのは希な事例であろう。湿地部に残されて急速に泥炭に覆われた場合はともかく、陸地部で長期間露頭していた場合、その遺存は

第23表 下位文化層全石器類ブロックの組成

	TOTAL TOOLS	KN	EN	SC	P	DR	GR	AX	RF	UF	CH EG AX	HS	PS	AN	F	C CORES	BC	DEB	
WHOLE-SITE	2353	376	24	19	58	6	4	1	66	185	5	1	4	1	1376	412	160	4	25
NORTH-AREA (A,B,C,D,E,F,G,L,P)	1831	303	19	19	51	4	4	0	49	150	2	1	3	0	1051	325	124	3	25
SOUTH-AREA (G,H,I,J,K)	619	92	6	1	9	2	0	1	20	47	3	0	1	0	381	104	40	1	1
A	481	72	2	7	7	2	0	0	11	45	0	1	2	0	261	107	39	0	2
B	322	60	3	10	12	0	3	0	12	18	1	0	0	0	187	45	25	2	3
C	182	34	4	1	4	0	0	0	6	18	1	0	0	0	96	42	10	0	0
D	100	21	0	0	2	0	0	0	3	14	0	0	0	0	58	18	3	0	0
Ea	240	49	5	1	14	0	1	0	6	21	0	0	1	0	140	31	8	0	12
Eb	219	34	2	3	7	0	0	0	6	16	0	0	0	0	124	36	19	0	6
F	174	12	2	1	2	0	0	0	2	5	0	0	0	0	122	24	15	0	1
G	97	19	1	1	2	0	0	0	3	12	0	0	0	0	56	17	4	0	1
H	129	18	0	0	2	1	0	1	4	7	1	0	1	0	91	13	7	0	0
I	57	15	0	0	1	0	0	0	7	5	2	0	0	0	29	9	4	0	0
Ja	163	16	4	0	3	0	0	1	3	5	0	0	0	0	101	31	14	1	0
Jb	160	19	1	0	2	0	0	0	2	14	0	0	0	0	97	34	10	0	0
K	13	5	0	0	0	0	0	0	1	4	0	0	0	0	7	0	1	0	0
L	2	1	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0
PD	14	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	5	1	1	0
B+C2-3	402	78	4	11	14	0	3	0	16	27	2	0	0	0	232	57	30	2	3
D+C1-1out	202	37	3	0	4	2	0	0	5	23	0	0	0	0	109	48	8	0	0

第24表 下位文化層全石器類ブロックの組成比率

	TOTAL TOOLS	KN	EN	SC	P	DR	GR	AX	RF	UF	CH EG AX	HS	PS	AN	F	C CORES	BC	DEB	
WHOLE-SITE	2353	16.0%	1.0%	.8%	2.5%	.3%	.2%	.0%	2.8%	7.9%	.2%	.0%	.2%	.0%	58.5%	17.5%	6.8%	.2%	1.1%
NORTH-AREA (A,B,C,D,E,F,G,L,P)	1831	16.5%	1.0%	1.0%	2.8%	.2%	.2%	.0%	2.7%	8.2%	.1%	-.1%	.2%	.0%	57.4%	17.7%	6.8%	.2%	1.4%
SOUTH-AREA (G,H,I,J,K)	619	14.9%	1.0%	.2%	1.5%	.3%	.0%	.2%	3.2%	7.6%	.5%	.0%	.2%	.0%	61.6%	16.8%	6.5%	.2%	.2%
A	481	15.0%	.4%	.4%	1.5%	.4%	.0%	.0%	2.3%	9.4%	.0%	.2%	.4%	.0%	54.3%	22.2%	8.1%	.0%	.4%
B	322	18.6%	.9%	3.1%	3.7%	.0%	.0%	.0%	3.7%	5.6%	.3%	.0%	.0%	.3%	58.1%	14.0%	7.8%	.6%	.9%
C	182	18.7%	2.2%	.5%	2.2%	.0%	.0%	.0%	3.3%	9.8%	.5%	.0%	.0%	.0%	52.7%	23.1%	5.5%	.0%	.0%
D	100	21.0%	.0%	.0%	2.0%	.0%	.0%	.0%	3.0%	14.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	58.0%	18.0%	3.0%	.0%	.0%
Ea	240	20.4%	2.1%	.4%	5.8%	.0%	.4%	.0%	2.5%	8.8%	.0%	.4%	.0%	.0%	58.3%	12.9%	3.3%	.0%	5.0%
Eb	219	15.5%	.9%	1.4%	3.2%	.0%	.0%	.0%	2.7%	7.3%	.0%	.0%	.0%	.0%	56.6%	16.4%	8.7%	.0%	2.7%
F	174	6.9%	1.1%	.6%	1.1%	.0%	.0%	.0%	1.1%	2.9%	.0%	.0%	.0%	.0%	70.1%	13.8%	8.6%	.0%	.6%
G	97	19.6%	1.0%	1.0%	2.1%	.0%	.0%	.0%	3.1%	12.4%	.0%	.0%	.8%	.0%	57.7%	17.5%	4.1%	.0%	1.0%
H	129	14.0%	.0%	.0%	1.6%	.8%	.0%	.0%	3.1%	5.4%	.8%	.0%	.0%	.0%	70.5%	10.1%	5.4%	.0%	.0%
I	57	26.3%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	12.3%	8.8%	.35%	.0%	.0%	.0%	50.9%	15.8%	7.0%	.0%	.0%
Ja	163	9.8%	2.5%	.0%	1.8%	.0%	.0%	.0%	1.8%	3.1%	.0%	.0%	.0%	.0%	62.0%	19.0%	8.6%	.6%	.0%
Jb	160	11.9%	.5%	.0%	1.3%	.0%	.0%	.0%	1.3%	8.8%	.0%	.0%	.0%	.0%	60.6%	21.3%	6.3%	.0%	.0%
K	13	38.5%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	7.7%	30.8%	.0%	.0%	.0%	.0%	53.8%	.0%	.0%	.0%	.0%
L	2	50.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	50.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	50.0%	.0%	.0%	.0%	.0%
PD	14	7.1%	.0%	.0%	7.1%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	42.9%	35.7%	7.1%	.0%	.0%
B+C2-3	402	19.4%	1.0%	2.7%	3.5%	.0%	.7%	.0%	4.0%	6.7%	.5%	.0%	.0%	.2%	57.7%	14.2%	7.5%	.5%	.7%
D+C1-1out	202	18.3%	1.5%	.0%	2.0%	1.0%	.0%	.0%	2.5%	11.4%	.0%	.0%	.0%	.0%	54.0%	23.8%	4.0%	.0%	.0%



第25表 下位文化層サヌカイト製石器類ブロックの組成

	TOTAL TOOLS	KN	EN	SC	P	DR	GR	AX	RF	UF	CH EG-AX	HS	PS	AN	F	C CORES	BC	DEB	
WHOLE-SITE	976	183	12	4	28	4	2	1	1	31	100	0	0	0	558	179	56	0	0
NORTH-AREA (ABCDEFGLPD)	560	128	7	4	24	2	2	0	0	15	74	0	0	0	296	109	27	0	0
SOUTH-AREA (G.H.I.J.K)	497	70	6	0	5	2	0	1	1	18	37	0	0	0	310	84	33	0	0
A	143	37	1	0	4	1	0	0	0	6	25	0	0	0	64	34	8	0	0
B	58	17	1	2	3	0	1	0	0	2	8	0	0	0	32	6	3	0	0
C	102	20	3	1	3	0	0	0	0	2	11	0	0	0	50	28	4	0	0
D	62	11	0	2	2	1	0	0	0	1	7	0	0	0	39	11	1	0	0
Ea	49	17	0	6	0	1	0	0	1	9	0	0	0	0	28	3	1	0	0
Eb	45	10	1	1	5	0	0	0	0	3	0	0	0	0	22	7	6	0	0
F	14	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	7	6	0	0	0
G	81	15	1	0	1	0	0	0	0	2	11	0	0	0	48	14	4	0	0
H	113	13	0	2	1	0	1	0	0	4	5	0	0	0	83	10	7	0	0
I	51	13	0	0	0	1	0	0	0	7	5	0	0	0	28	6	4	0	0
Ja	110	15	4	0	2	0	0	1	3	5	0	0	0	0	25	10	0	0	0
Jb	142	14	1	0	0	0	0	0	2	11	0	0	0	0	91	29	8	0	0
K	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
L	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
PD	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	50	0	0	0	0
B+C2+3	86	23	1	3	4	0	1	0	0	2	12	0	0	0	45	13	5	0	0
D+C1+1out	136	25	3	0	4	1	0	0	3	14	0	0	0	0	76	32	3	0	0

第26表 下位文化層サヌカイト製石器類ブロックの組成比率

	TOTAL TOOLS	KN	EN	SC	P	DR	GR	AX	RF	UF	CH EG-AX	HS	PS	AN	F	C CORES	BC	DEB	
WHOLE-SITE	976	18.8%	1.2%	0.4%	2.9%	4%	2%	0.1%	3.2%	10.2%	0%	0%	0%	0%	57.2%	18.3%	5.7%	0%	0%
NORTH-AREA (ABCDEFGLPD)	560	22.9%	1.3%	0.7%	4.3%	4%	4%	0%	2.7%	13.2%	0%	0%	0%	0%	52.9%	19.5%	4.8%	0%	0%
SOUTH-AREA (G.H.I.J.K)	497	14.1%	1.2%	0%	1.0%	4%	0%	2%	3.6%	7.4%	0%	0%	0%	0%	62.4%	16.9%	6.6%	0%	0%
A	143	25.9%	0.7%	0%	2.8%	0.7%	0%	0%	4.2%	17.5%	0%	0%	0%	0%	44.8%	23.8%	5.6%	0%	0%
B	58	29.3%	1.7%	3.4%	5.2%	0%	1.7%	0%	3.4%	13.8%	0%	0%	0%	0%	55.2%	10.3%	5.2%	0%	0%
C	102	19.6%	2.9%	1.0%	2.9%	0%	0%	0%	2.0%	10.8%	0%	0%	0%	0%	49.0%	27.5%	3.9%	0%	0%
D	62	17.7%	0%	0%	3.2%	1.6%	0%	0%	1.6%	11.3%	0%	0%	0%	0%	62.9%	17.7%	1.6%	0%	0%
Ea	49	34.7%	0%	0%	12.2%	0%	2.0%	0%	2.0%	18.4%	0%	0%	0%	0%	57.1%	6.1%	2.0%	0%	0%
Eb	45	22.2%	2.2%	2.2%	11.1%	0%	0%	0%	0%	6.7%	0%	0%	0%	0%	48.9%	15.6%	13.3%	0%	0%
F	14	7.1%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	7.1%	0%	0%	0%	0%	0%	50.0%	42.9%	0%	0%	0%
G	81	18.5%	1.2%	0%	1.2%	0%	0%	0%	2.5%	13.6%	0%	0%	0%	0%	59.3%	17.3%	4.9%	0%	0%
H	113	11.5%	0%	0%	1.8%	0%	9%	0%	3.5%	4.4%	0%	0%	0%	0%	73.5%	8.8%	6.2%	0%	0%
I	51	25.5%	0%	0%	0%	2.0%	0%	0%	13.7%	9.8%	0%	0%	0%	0%	54.9%	11.8%	7.8%	0%	0%
Ja	110	13.6%	3.6%	0%	1.8%	0%	0%	9%	2.7%	4.5%	0%	0%	0%	0%	54.5%	22.7%	9.1%	0%	0%
Jb	142	9.9%	0.7%	0%	0%	0%	0%	0%	1.4%	7.7%	0%	0%	0%	0%	64.1%	20.4%	5.6%	0%	0%
K	0	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	100.0%	0%	0%	0%	0%
L	1	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	100.0%	0%	0%	0%	0%
PD	5	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	100.0%	0%	0%	0%	0%
B+C2+3	86	26.7%	1.2%	3.5%	4.7%	0%	1.2%	0%	2.3%	14.0%	0%	0%	0%	0%	52.3%	15.1%	5.8%	0%	0%
D+C1+1out	136	18.4%	2.2%	0%	2.9%	7%	0%	0%	2.2%	10.3%	0%	0%	0%	0%	55.9%	23.5%	2.2%	0%	0%

第27表 下位文化層チャート等製石器類ブロックの組成

	TOTAL TOOLS	KN	EN	SC	P	DR	GR	AX	RF	UF	CH EG-AX	HS	PS	AN	F	C CORES	BC	DEB	
WHOLE-SITE	1340	181	15	30	2	2	0	0	35	85	0	0	0	0	818	233	104	4	0
NORTH-AREA (A,B,C,D,E,F,G,L,P,D)	1239	168	15	27	2	2	0	0	34	76	0	0	0	0	755	216	97	3	0
SOUTH-AREA (G,H,I,J,K)	116	17	1	4	0	0	0	0	2	10	0	0	0	0	71	20	7	1	0
A	333	32	1	3	1	0	0	0	5	20	0	0	0	0	197	73	31	0	0
B	259	41	2	8	9	0	0	0	10	10	0	0	0	0	155	39	22	2	0
C	79	13	1	1	0	0	0	0	4	7	0	0	0	0	46	14	6	0	0
D	38	10	0	1	0	0	0	0	2	7	0	0	0	0	19	7	2	0	0
Ea	178	31	5	8	0	0	0	0	5	12	0	0	0	0	112	28	7	0	0
Eb	168	24	1	2	0	0	0	0	6	13	0	0	0	0	102	29	13	0	0
F	159	11	2	1	2	0	0	0	1	5	0	0	0	0	115	18	15	0	0
G	15	4	0	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	8	3	0	0	0
H	13	2	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	8	3	0	0	0
I	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	0	0	0
Ja	53	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	41	6	4	1	0
Jb	18	5	0	2	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	6	5	2	0	0
K	13	5	0	0	0	0	0	0	1	4	0	0	0	0	7	0	1	0	0
L	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
PD	9	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	5	1	1	0
B+C2-3	310	52	3	8	10	0	2	0	14	15	0	0	0	0	187	44	25	2	0
D+C1-4out	66	12	0	0	1	0	0	0	2	9	0	0	0	0	33	16	5	0	0

第28表 下位文化層チャート等製石器類ブロックの組成比率

	TOTAL TOOLS	KN	EN	SC	P	DR	GR	AX	RF	UF	CH EG-AX	HS	PS	AN	F	C CORES	BC	DEB	
WHOLE-SITE	1340	13.5%	9%	1.1%	2.2%	0.1%	0%	0%	2.6%	6.3%	0%	0%	0%	0%	61.0%	17.4%	7.8%	0.3%	0%
NORTH-AREA (A,B,C,D,E,F,G,L,P,D)	1239	13.6%	1.0%	1.2%	2.2%	0.2%	0%	0%	2.7%	6.1%	0%	0%	0%	0%	60.9%	17.4%	7.8%	0.2%	0%
SOUTH-AREA (G,H,I,J,K)	116	14.7%	0%	0.9%	3.4%	0%	0%	0%	1.7%	8.6%	0%	0%	0%	0%	61.2%	17.2%	6.9%	0.9%	0%
A	333	9.6%	3%	0.9%	0.9%	0.3%	0%	0%	1.5%	6.0%	0%	0%	0%	0%	59.2%	21.9%	9.3%	0%	0%
B	259	15.8%	8%	3.1%	3.5%	0%	0%	0%	3.9%	3.9%	0%	0%	0%	0%	59.8%	15.1%	8.5%	0.8%	0%
C	79	16.5%	1.3%	0%	1.3%	0%	0%	0%	5.1%	8.9%	0%	0%	0%	0%	58.2%	17.7%	7.6%	0%	0%
D	38	26.3%	0%	0%	0%	2.6%	0%	0%	5.3%	18.4%	0%	0%	0%	0%	50.0%	18.4%	5.3%	0%	0%
Ea	178	17.4%	2.8%	0.6%	4.5%	0%	0%	0%	2.8%	6.7%	0%	0%	0%	0%	62.9%	15.7%	3.9%	0%	0%
Eb	168	14.3%	6%	1.2%	1.2%	0%	0%	0%	3.6%	7.7%	0%	0%	0%	0%	60.7%	17.3%	7.7%	0%	0%
F	159	6.9%	1.3%	0.6%	1.3%	0%	0%	0%	6%	3.1%	0%	0%	0%	0%	72.3%	11.3%	9.4%	0%	0%
G	15	26.7%	0%	6.7%	6.7%	0%	0%	0%	6.7%	6.7%	0%	0%	0%	0%	53.3%	20.0%	0%	0%	0%
H	13	15.4%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	15.4%	0%	0%	0%	0%	61.5%	23.1%	0%	0%	0%
I	4	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	25.0%	75.0%	0%	0%	0%
Ja	53	1.9%	0%	0%	1.9%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	77.4%	11.3%	7.5%	1.9%	0%
Jb	18	27.8%	0%	0%	11.1%	0%	0%	0%	0%	16.7%	0%	0%	0%	0%	33.3%	27.8%	11.1%	0%	0%
K	13	38.5%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	7.7%	30.8%	0%	0%	0%	0%	53.8%	0%	7.7%	0%	0%
L	1	100.0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	100.0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
PD	9	11.1%	0%	11.1%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	11.1%	55.6%	11.1%	11.1%	0%
B+C2-3	310	16.8%	1.0%	2.6%	3.2%	0%	0%	0%	4.5%	4.8%	0%	0%	0%	0%	60.3%	14.2%	8.1%	6%	0%
D+C1-4out	66	18.2%	0%	0%	0%	1.5%	0%	0%	3.0%	13.6%	0%	0%	0%	0%	50.0%	24.2%	7.6%	0%	0%

第IV章 下位文化層の調査

第29表 下位文化層石器類 (B資料) ブロックの組成

	TOTAL TOOLS	KN	EN	SC	DR	GR	RF	UF	F	C	CORES	
WHOLE-SITE	279	63	4	4	6	1	1	12	33	184	26	8
A	11	1	0	0	0	0	0	1	8	0	2	
B	79	14	0	2	1	0	0	4	7	56	7	2
B-C	4	1	0	0	0	0	0	1	2	1	0	
C	26	4	0	1	0	0	0	3	19	2	1	
C-D	4	1	0	0	0	0	1	0	1	2	0	
D	2	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	
A-E	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	
Ea	2	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	
Eb	9	2	0	0	1	0	0	1	6	0	1	
C-F	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	
Eb-F	2	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	
F	93	18	3	0	1	0	1	6	7	62	11	2
G	8	6	0	1	2	0	0	1	2	1	1	0
H	2	2	0	0	0	0	0	0	2	0	0	
I	7	3	0	0	0	0	0	3	3	1	0	
Ja	9	2	0	0	1	0	0	1	7	0	0	
Jb	17	5	0	0	0	1	0	4	11	1	0	
K	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	
E-L	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	

第30表 下位文化層サヌカイト製石器類 (B資料) ブロックの組成

	TOTAL TOOLS	KN	SC	DR	P	RF	UF	AX	F	C	CORES	
WHOLE-SITE	37	14	1	2	1	0	1	9	0	20	2	1
A	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
B	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	
C	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	
C-D	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	
D	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	
A-E	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	
Eb	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	
G	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	
I	6	3	0	0	0	0	3	0	2	1	0	
Ja	7	2	0	1	0	0	1	0	5	0	0	
Jb	16	5	0	0	1	0	4	0	10	1	0	

第31表 下位文化層チャート等製石器類 (B資料) ブロックの組成

	TOTAL TOOLS	KN	EN	SC	GR	RF	UF	AX	F	C	CORES	
WHOLE-SITE	242	49	3	4	4	1	11	24	0	164	24	7
A	10	1	0	0	0	0	1	0	8	0	1	
B	78	14	0	2	1	0	4	7	0	55	7	2
B-C	4	1	0	0	0	0	1	0	2	1	0	
C	25	3	0	1	0	0	2	0	19	2	1	
C-D	3	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	
D	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	
Ea	2	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	
Eb	8	1	0	0	0	0	1	0	6	0	1	
C-F	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	
Eb-F	2	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	
F	93	18	3	0	1	1	6	7	0	62	11	2
G	7	6	0	1	2	0	1	2	0	1	0	
H	2	2	0	0	0	0	0	0	2	0	0	
I	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	
Ja	2	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	
Jb	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	
K	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	
E-L	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	

第32表 下位文化層全石器類小ブロックの組成

	TOTAL	TOOLS	KN	EN	SC	P	D	GR	AX	RF	UF	CH EG-AX	HS	PS	AN	F	C CORES	B.C	DEB
A1	220	30	1	0	3	0	0	0	0	8	16	0	1	2	0	120	57	12	0
A1out	11	5	1	0	1	1	0	0	0	0	2	0	0	0	0	4	2	0	0
A2	141	19	0	0	1	1	0	0	0	0	15	0	0	0	0	76	29	16	0
A2out	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	1	0	1
A3	77	11	0	0	1	0	0	0	0	1	9	0	0	0	0	47	9	10	0
A4	24	6	0	2	1	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	8	9	1	0
B1	128	18	0	1	2	0	0	0	0	6	8	1	0	0	0	85	18	7	0
B1out	28	4	1	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	13	5	5	0	
B2	100	27	1	6	8	0	3	0	0	4	5	0	0	0	52	11	8	0	
B2out	5	2	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2	0	1	0	
B3	61	9	1	1	1	0	0	0	0	2	3	0	0	0	1	36	11	6	0
C1	97	15	3	0	1	0	0	0	0	2	9	0	0	0	1	48	30	4	0
C1out	5	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	1	0	
C2	46	12	0	1	2	0	0	0	0	3	5	1	0	0	0	23	8	3	0
C3	34	6	1	0	0	0	0	0	0	1	4	0	0	0	0	22	4	2	0
D1	64	15	0	0	2	1	0	0	0	2	10	0	0	0	0	37	10	2	0
D1out	4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	3	0	0	0
D2	32	5	0	0	0	1	0	0	0	1	3	0	0	0	0	18	8	1	0
Ea1	76	14	1	0	5	0	0	0	0	1	7	0	0	0	0	46	12	1	0
Ea1out	11	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	8	2	0	0
Ea2	128	29	4	1	7	0	1	0	0	4	11	0	0	0	0	71	16	6	0
Ea3	5	0	0	0	2	0	0	0	0	1	2	0	0	0	0	15	1	1	0
Eb1	68	10	1	1	1	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	46	9	3	0
Eb2	106	14	0	2	5	0	0	0	0	1	6	0	0	0	0	55	22	10	0
Eb3	45	10	1	0	1	0	0	0	0	1	7	0	0	0	0	23	5	6	0
F1	122	8	2	1	1	0	0	0	0	1	3	0	0	0	0	82	20	12	0
F1out	4	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	3	0	0	0
F2	48	3	0	0	1	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	37	4	3	0
G1	23	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	18	1	2	0
G2	39	8	0	0	1	0	0	0	0	2	5	0	0	0	0	20	9	2	0
G3	35	11	0	1	1	0	0	0	0	1	7	0	0	0	0	18	7	0	0
H1	61	8	0	0	1	1	0	0	0	2	2	0	1	1	0	43	6	4	0
H2	65	10	0	0	1	0	0	1	0	2	5	1	0	0	0	45	7	3	0
H2out	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0
I1	26	4	0	0	0	0	0	0	0	1	2	1	0	0	0	15	6	1	0
I2	19	5	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	3	2	0
I3	12	6	0	0	0	0	0	0	0	2	3	1	0	0	0	5	0	1	0
Ja1	42	3	1	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	30	7	2	0
Ja2	72	8	3	0	2	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	39	15	10	0
Ja3	42	2	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	30	9	1	0
Ja3out	7	3	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	2	0	2	0
Jb1	73	9	1	0	1	0	0	0	0	0	7	0	0	0	0	40	21	3	0
Jb2	77	8	0	0	1	0	0	0	0	2	5	0	0	0	0	50	13	6	0
Jb2out	10	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	7	0	1	0
K	13	5	0	0	0	0	0	0	0	1	4	0	0	0	0	7	0	1	0
L	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0
PD	14	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	5	1	1	0

第33表 下位文化層サヌカイト製石器類小ブロックの組成

	TOTAL	TOOLS	KN	EN	SC	P	D	GR	AX	RF	UF	CH EG-AX	HS	PS	AN	F	C	CORES	B, C	DEB
A1	59	15	0	0	2	0	0	0	0	5	8	0	0	0	0	30	12	2	0	0
A1out	3	3	1	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
A2	59	14	0	0	1	1	0	0	0	0	12	0	0	0	0	26	13	6	0	0
A2out	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
A3	12	5	0	0	1	0	0	0	0	1	3	0	0	0	0	4	3	0	0	0
A4	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	6	0	0	0
B1	18	4	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	11	2	1	0	0
B1out	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0
B2	19	8	0	2	2	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	9	1	1	0	0
B2out	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
B3	17	5	1	0	1	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	10	2	0	0	0
C1	69	13	3	0	1	0	0	0	0	2	7	0	0	0	0	34	21	1	0	0
C1out	5	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	1	0	0
C2	12	3	0	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	5	4	0	0	0
C3	16	3	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	8	3	2	0	0
D1	51	9	0	0	2	1	0	0	0	1	5	0	0	0	0	31	10	1	0	0
D1out	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0
D2	8	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	6	1	0	0	0
Ea1	15	5	0	0	2	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	9	1	0	0	0
Ea1out	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0
Ea2	28	10	0	0	4	0	1	0	0	1	4	0	0	0	0	15	2	1	0	0
Ea3	4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	3	0	0	0	0
Eb1	13	3	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	3	1	0	0
Eb2	21	5	0	0	3	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	10	4	2	0	0
Eb3	11	2	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	6	0	3	0	0
F1	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	6	0	0	0
F1out	4	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0
F2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0
G1	20	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	16	1	2	0	0
G2	34	7	0	0	0	0	0	0	0	2	5	0	0	0	0	17	8	2	0	0
G3	27	7	0	0	1	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0	15	5	0	0	0
H1	51	6	0	0	1	1	0	0	0	2	2	0	0	0	0	37	4	4	0	0
H2	60	7	0	0	1	0	0	1	0	2	3	0	0	0	0	44	6	3	0	0
H2out	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0
I1	24	3	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0	0	0	15	5	1	0	0
I2	16	5	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	8	1	2	0	0
I3	11	5	0	0	0	0	0	0	0	2	3	0	0	0	0	5	1	0	0	0
Ja1	39	3	1	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	27	7	2	0	0
Ja2	43	7	3	0	1	0	0	0	0	1	3	0	0	0	0	21	10	5	0	0
Ja3	21	2	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	10	8	1	0	0
Ja3out	7	3	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	2	0	2	0	0
Jb1	65	7	1	0	0	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0	37	20	1	0	0
Jb2	67	5	0	0	0	0	0	0	0	2	3	0	0	0	0	47	9	6	0	0
Jb2out	10	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	7	0	1	0	0
K	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
L	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
PD	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	0	0	0

第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布

第34表 下位文化層チャート等製石器類小ブロックの組成

	TOTAL	TOOLS	KN	EN	SC	P	D	GR	AX	RF	UF	CH EG-AX	HS	PS	AN	F	C	CORES	B.C	DEB
A1	159	14	1	0	1	0	0	0	0	0	8	0	0	0	0	90	45	10	0	0
A1out		2	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	2	0	0	0
A2	81	5	0	0	0	0	0	0	0	2	3	0	0	0	0	50	16	10	0	0
A2out	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	1	0	0	0
A3	65	6	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0	43	6	10	0	0
A4	14	6	0	2	1	0	0	0	0	0	3	0	0	0	1	4	3	1	0	0
B1	109	13	0	1	2	0	0	0	0	4	6	0	0	0	0	74	16	5	1	0
B1out	24	4	1	1	1	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	12	4	0	0	0
B2	79	19	1	4	6	0	2	0	0	4	1	0	0	0	0	43	10	7	0	0
B2out	4	2	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	1	0	0
B3	43	3	0	1	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	25	9	6	0	0	0
C1	28	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	14	9	3	0	0
C1out	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
C2	33	8	0	0	1	1	1	1	1	3	4	0	0	0	0	18	4	3	0	0
C3	18	3	1	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	14	1	0	0	0
D1	13	6	0	0	0	0	0	0	0	1	5	0	0	0	0	6	0	1	0	0
D1out	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
D2	24	4	0	0	1	0	0	0	0	1	2	0	0	0	0	12	7	1	0	0
Ea1	58	9	1	0	3	0	0	0	0	1	4	0	0	0	0	37	11	1	0	0
Ea1out	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	2	0	0	0
Ea2	93	18	4	1	3	0	0	0	0	3	7	0	0	0	0	56	14	5	0	0
Ea3	18	4	0	0	2	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	12	1	1	0	0
Eb1	55	7	0	0	2	0	0	0	0	4	3	0	0	0	0	40	6	2	0	0
Eb2	80	9	0	2	2	0	0	0	0	1	4	0	0	0	0	45	18	8	0	0
Eb3	34	8	1	0	0	0	0	0	0	1	6	0	0	0	0	17	5	3	0	0
F1	114	8	2	1	1	0	0	0	0	1	3	0	0	0	0	80	14	12	0	0
F1out	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
F2	45	3	0	0	1	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	35	4	3	0	0
G1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0
G2	5	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	0	0	0
G3	8	3	0	1	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	3	2	0	0	0
H1	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	2	0	0	0
H2	4	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	1	1	0	0	0
H2out	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
I1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
I2	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0	0
I3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ja1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0
Ja2	29	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	18	5	4	1	0
Ja3	21	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20	1	0	0	0
Ja3out	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Jb1	8	2	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	3	1	2	0	0
Jb2	10	3	0	0	3	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	3	4	0	0	0
Jb2out	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
K	13	5	0	0	0	0	0	0	0	1	4	0	0	0	0	7	0	1	0	0
L	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
PD	9	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	5	1	1	0

期待できまい。もともと広範囲で、この種の遺構が存在していた可能性もある。このような遺構は、この遺構のみで人為的な遺構であることが明かではない。自然発火の山火事による場合や失火延焼の痕跡である場合なども考慮され、人間の構築性を積極的に示してはいない。しかし、放射性炭素年代測定結果は接近し、何より当時の居住域周辺に認められた現象であることから、その背景に旧石器時代の人間活動との関連を推測していけない理由はない。湿地部での火処としての機能、周辺灌木の野焼きの可能性などを考慮したい。

(山口)

### c. 遺物の分布

#### 石器・石器類の種類別分布

石器・石器類の種類別分布を観察する際、石器類ごとの石器類ブロック・小ブロックでどれだけ出土しているか、を記載し、どこに多いかを明らかにした。また、同一の器種がどこで集中しているかを明らかにするために、個々の石器の周辺に2m半径の円を描いて、内部に入った石器の数を数え、その円に入った同種類石器の共件数合計とその平均を算定し、集中場所と集中の度合を示した。計算方法と2mの半径を採用した意図については、第IV章第3節第3項の記述を参照されたい。

##### 1) ナイフ形石器

ナイフ形石器の総数は24点、チャート製その他12点、サヌカイト製12点である。大ブロック単位の分布状況については第328図に示す。小ブロック毎のナイフ形石器の点数は、A1ブロックにチャート製その他1点、A1outにサヌカイト製1点、B1outにチャート製1点、B2にチャート製1点、B3にサヌカイト製1点、C1にサヌカイト製3点、C3にチャート製その他1点、Ea1にチャート製その他1点、Ea2にチャート製その他4点、Eb1にサヌカイト製1点、Eb3にチャート製その他1点、F1にチャート2点、G1にサヌカイト製1点、Ja1にサヌカイト製1点、Ja2にサヌカイト製3点、Jb1にサヌカイト製1点である。

次に小ブロック内での遺物集中の顕著な部分を検討してみよう。ナイフ形石器24点の遺跡全体での2m圏内出現頻度合計は10で、平均値は約0.4である。この値を基準に比較検討をしたい。特に密集している小ブロックはEa2ブロックとJa2ブロックの2ヶ所で、Ea2ブロックでは2m圏内出現頻度合計が8、平均値約2、遺跡平均の約5倍、Ja2ブロックでは2m圏内出現頻度合計2、平均値約0.7で遺跡平均の約1.8倍である。その他のブロックについては2m圏内出現頻度合計は全て0であり、他のブロックでは特に局地集中している部分は無いことが知れる。この2ヶ所で、総数の3分の1である8点が出土し、他の小ブロックでのあり方と相違していることが知れよう。

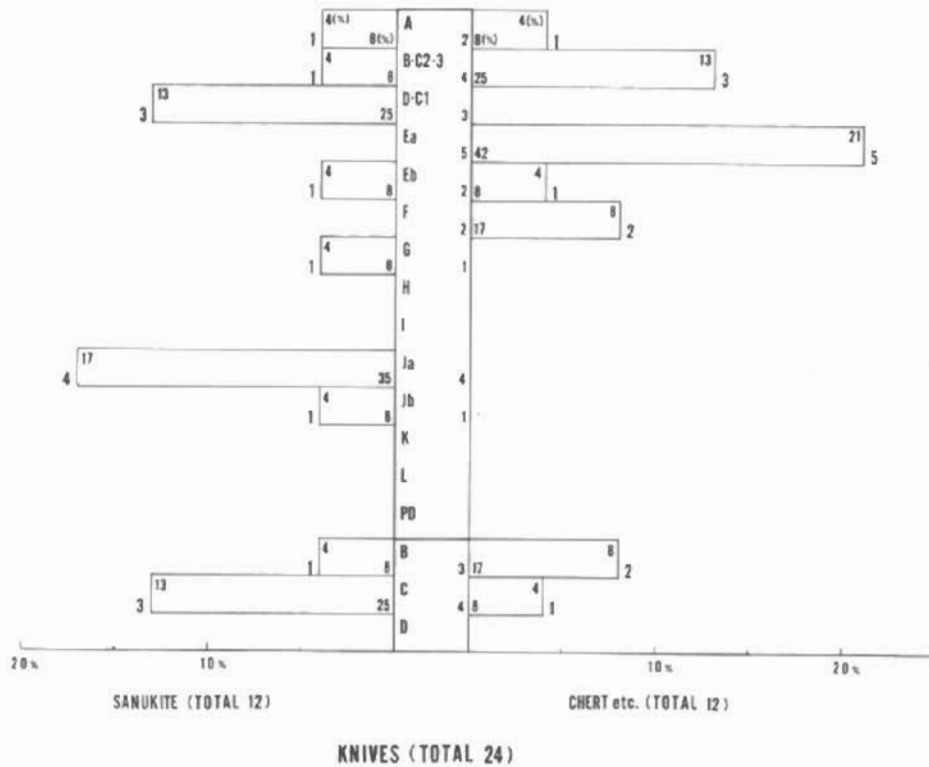
大ブロック単位で観察すれば、小ブロックでの分析からEブロック、Jブロック以外ではブロック内にナイフ形石器が存在してもその分布状況は、まばらであると言える。

##### 2) 掻器

掻器の総数は、19点で、そのうちチャート製その他15点、サヌカイト製4点である。大ブロック単位の分布状況については第329図に示す。小ブロック毎の掻器の点数は、A4ブロックでチャート製その他2点、B1ブロックにチャート製その他1点、B1outにチャート製その他1点、B2にチャート製その他4点、サヌカイト製2点、B2outにチャート製その他1点、B3にチャート製その他1点、C2にサヌカイト製1点、G3にチャート製その他1点、Ea2にチャート製その他1点、Eb1にサヌカイト製1点、Eb2にチャート製その他2点、F1にチャート製その他1点である。

掻器19点の遺跡全体での2m圏内出現頻度合計は38で、平均値は2.0である。特に集中しているのは1

第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布



第328図 ナイフ形石器ブロック間分布グラフ

カ所で、B 2ブロックである。ここでは2 m圏内出現頻度が15、平均値は2.5で、遺跡平均の約1.3倍である。その他の小ブロックでは特に集中は見られず、第3土壌のあるB 2ブロックにおいて挿器が際だって集中しているといえる。

大ブロック単位で観察すると、Bブロックでは計10点の挿器が分布するがB 2ブロック以外の小ブロックでは特に集中がみられず、B 2ブロックにのみ集中する傾向を示している。

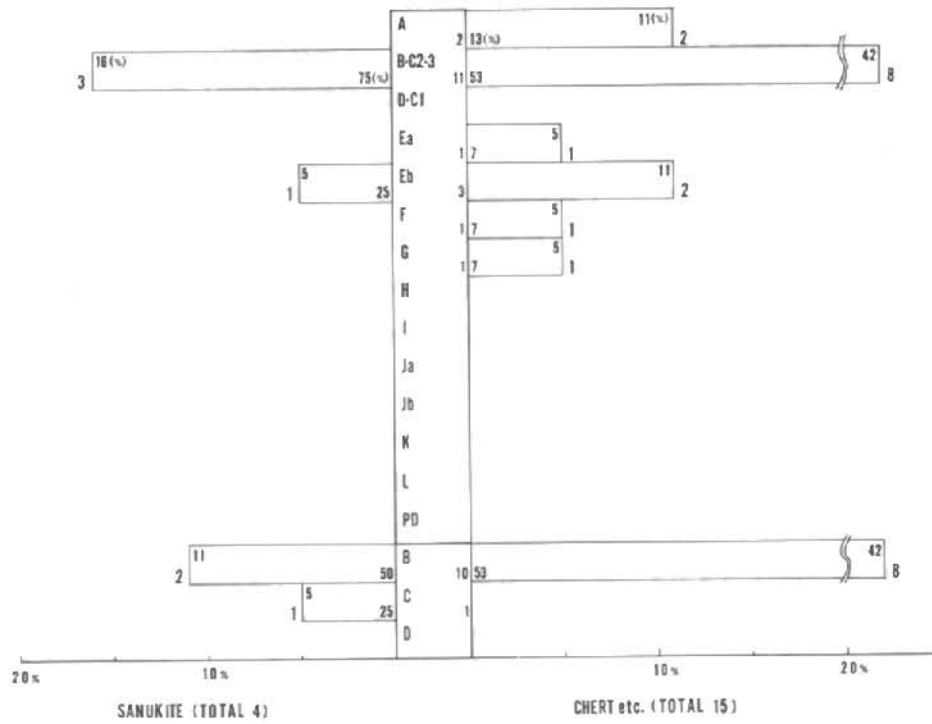
3) 削器

削器の総数は、58点、チャート製その他28点、サヌカイト製30点である。大ブロック毎の分布状況については第330図に示す。小ブロック毎の削器の点数はA 1ブロックにチャート製その他1点、サヌカイト製2点、A 1 outにチャート製1点、A 2にサヌカイト製1点、A 3にサヌカイト製1点、A 4にチャート製その他1点、B 1にチャート製その他2点、B 1 outにチャート製その他1点、B 2にチャート製その他6点、サヌカイト製2点、B 3にサヌカイト製1点、C 1にサヌカイト製1点、C 1 outにサヌカイト製1点、C 2にチャート製その他1点、サヌカイト製1点、D 1にサヌカイト製2点、E a 1にチャート製その他3点、サヌカイト製2点、E a 2にチャート製その他3点、サヌカイト製4点、E a 3にチャート製その他1点、E b 1にサヌカイト製1点、E b 2にサヌカイト製3点、E b 3にサヌカイト製1点、F 1にチャート製その他1点、F 2にチャート製その他1点、G 2にチャート製その他1点、G 3にサヌカイト製1点、H 1にサヌカイト製1点、H 2にサヌカイト製1点、J a 2にチャート製その他1点、サヌカイト製1点、J b 1にチャート製その他1点、J b 2にチャート製その他2点、J a 3にサヌカイト製1点、J b 3にサヌカイト製1点、PD1点である。

次に遺物集中の顕著な例を検討したい。削器58点の遺跡全体での2 m圏内出現頻度合計は60で、平均値は約1.0である。特に集中している小ブロックは3カ所で、B 2ブロックで2 m圏内出現頻度合計が24、平均値は約3.0で遺跡平均の約3.0倍、E a 1ブロックでは2 m圏内出現頻度合計が10、平均値は約2.0で

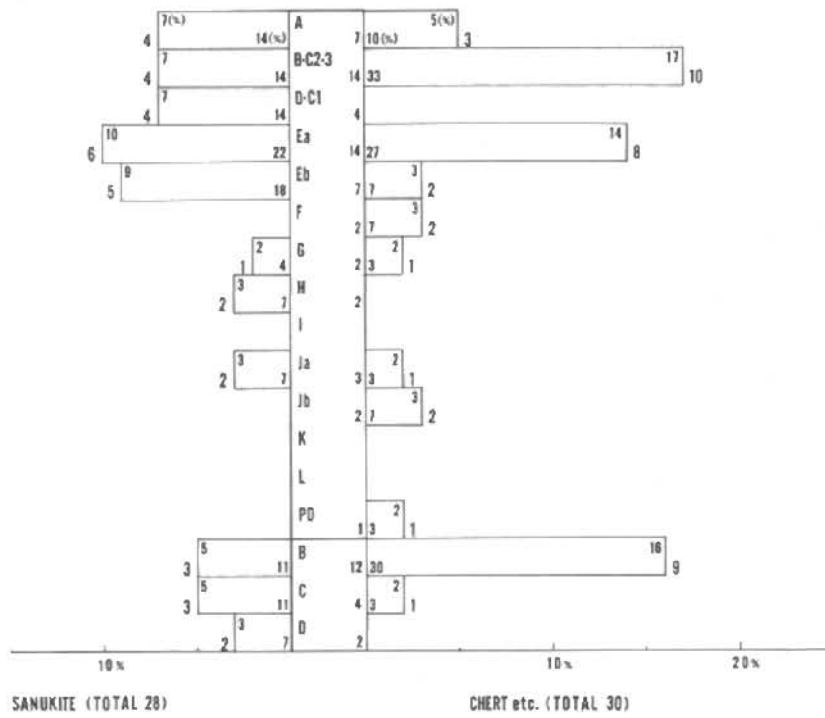


第IV章 下位文化層の調査



END-SCRAPERS (TOTAL 19)

第329図 掻器ブロック間分布グラフ



SCRAPERS (TOTAL 58)

第330図 削器ブロック間分布グラフ

遺跡平均の約2.0倍、E a 2ブロックでは2m出現頻度合計が13、平均値は約1.9で遺跡平均の約1.9倍である。その他のブロックに付いては2m圏内出現頻度合計は0または1であり、この3カ所以外に削器が特に集中している部分はないといえる。大ブロック単位についてはBブロック、Eブロックに分布は多いが、大ブロック内でも集中箇所が限定されており、その他の場所では分散して分布している。

#### 4) 加工痕有剥片

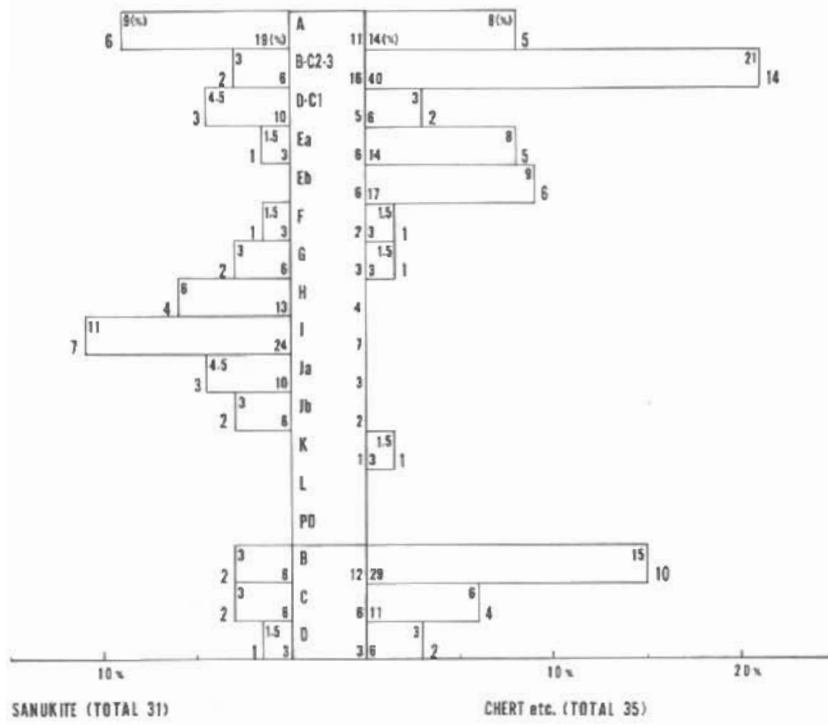
加工痕有剥片の総数は66点で、チャート製その他35点、サヌカイト製31点である。大ブロック毎の分布状況は第331図に示す。小ブロック毎の加工痕有剥片の点数はA1ブロックにチャート製その他3点、サヌカイト製5点、A2にチャート製その他2点、A3ブロックにサヌカイト製1点、B1にチャート製その他4点、サヌカイト製2点、B2にチャート製その他4点、B3ブロックにチャート製その他2点、C1にサヌカイト製2点、C2にチャート製その他3点、C3にチャート製その他1点、D1にチャート製その他1点、サヌカイト製1点、D2にチャート製その他1点、E a 1にチャート製その他1点、E a 2にチャート製その他3点、サヌカイト製1点、E a 3にチャート製その他1点、E b 1にチャート製その他4点、E b 2にチャート製その他1点、E b 3にチャート製その他1点、F1にチャート製その他1点、F1outにサヌカイト製1点、G3にチャート製その他1点、G2にサヌカイト製2点、H1にサヌカイト製2点、H2にサヌカイト製2点、I1にサヌカイト製1点、I2にサヌカイト製4点、I3にサヌカイト製2点、J a 1にサヌカイト製1点、J a 3にサヌカイト製1点、J a 3outにサヌカイト製1点、J b 2にサヌカイト製2点、Kにチャート製その他1点である。

加工痕有剥片の66点の遺跡全体での2m圏内出現頻度数合計は82で、平均値は1.24である。小ブロック毎に観察すると、特に集中しているのはA1ブロック、E b 1ブロック、I2ブロックの3ヶ所である。A1ブロックでの2m圏内出現頻度合計は30、平均値は3.8で遺跡平均の約3.0倍、E b 1ブロックでの2m圏内出現頻度合計は12、平均値は3.0で遺跡平均の約2.4倍、I2ブロックで2m圏内出現頻度合計は16、平均値3.0、遺跡平均の2.4倍であり、加工痕有剥片は、この3ヶ所で特に集中しているとわかる。大ブロック単位で観察するとAブロック内に分布する11点の加工痕有剥片のうち、8点はA1ブロックに分布する。小ブロックの分析と併せて考えるとブロック内で加工痕有剥片はA1ブロックで集中し、その他の場所ではまばらに分布していると言える。

#### 5) 使用痕有剥片

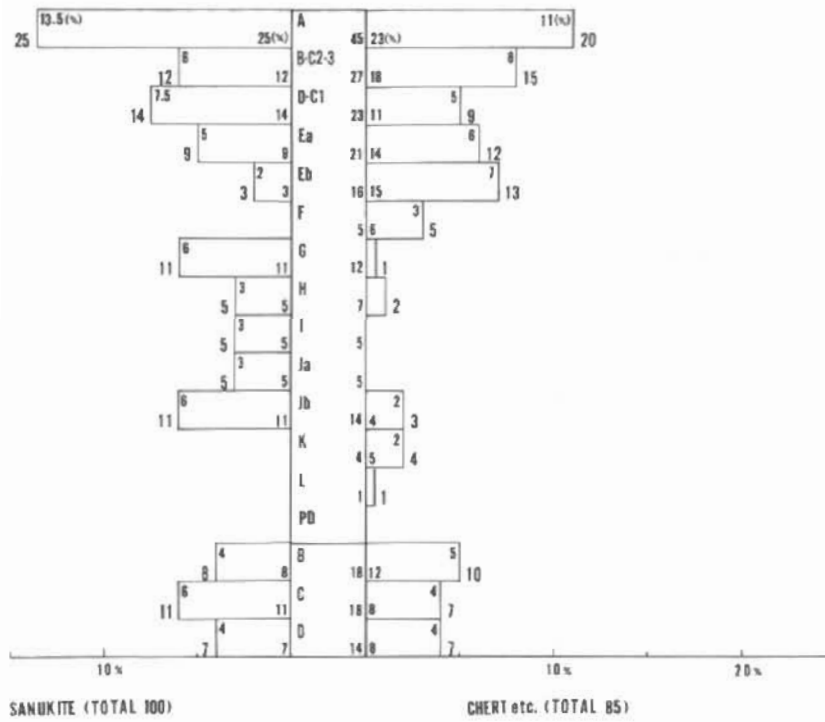
使用痕有剥片の総数は、185点で、チャート製その他が85点、サヌカイト製が100点である。大ブロック毎の分布状況は第332図に示す。A1ブロックにチャート製その他8点、サヌカイト製8点、A1outにサヌカイト製2点、A2にチャート製その他3点、サヌカイト製12点、A3にチャート製その他6点、サヌカイト製3点、A4にチャート製その他3点、B1にチャート製その他6点、サヌカイト製2点、B1outにチャート製その他1点、B2にチャート製その他2点、サヌカイト製3点、B2outにチャート製その他1点、B3にサヌカイト製3点、C1にチャート製その他2点、サヌカイト製7点、C2にチャート製その他4点、サヌカイト製1点、C3にチャート製その他1点、サヌカイト製3点、D1にチャート製その他5点、サヌカイト製5点、D1outサヌカイト製1点、D2にチャート製その他2点、サヌカイト製1点、E a 1にチャート製その他4点、サヌカイト製3点、E a 1outにサヌカイト製1点、E a 2にチャート製その他7点、サヌカイト製4点、E a 3にチャート製その他1点、サヌカイト製1点、E b 1にチャート製その他3点、E b 2にチャート製その他4点、サヌカイト製2点、E b 3

第IV章 下位文化層の調査



RETOUCHED FLAKES (TOTAL 66)

第331図 加工痕有剥片ブロック間分布グラフ



UTILISED FLAKES (TOTAL 185)

第332図 使用痕有剥片ブロック間分布グラフ

にチャート製その他6点、サヌカイト製1点、F1にチャート製その他3点、F2にチャート製その他2点、G2にサヌカイト製5点、G3にチャート製その他1点、サヌカイト製6点、H1にサヌカイト製2点、H2にチャート製その他2点、サヌカイト製3点、I1にサヌカイト製2点、I3にサヌカイト製3点、J a 1にサヌカイト製1点、J a 2にサヌカイト製3点、J a 3 outにサヌカイト製1点、J b 1にチャート製その他1点、サヌカイト製6点、J b 2にチャート製その他2点、サヌカイト製3点、J b 2 outにサヌカイト製2点、Kにチャート製その他4点、Lにチャート製その他1点である。

次に遺物集中の検討を2m圏内出現頻度によって示したい。使用痕有剥片の遺跡全体での2m圏内出現頻度合計は523で平均は約2.83である。小ブロックの中で特に分布が集中しているのはA1、A2、B1、D1で、A1ブロックで2m圏内出現頻度が110、平均は6.87、遺跡平均の約2.43倍、A2ブロックは2m圏内出現頻度が117、平均が7.8、遺跡平均の約2.8倍、D1で2m圏内出現頻度が55、平均6.1、遺跡平均の約2.2倍である。この3ヶ所以外でも使用痕有剥片は集中傾向を示している。

#### 6) 錐状石器

錐状石器の総数は、チャート製その他が2点、サヌカイト製が2点の計4点である。小ブロック単位で観察するとB2ブロックに3点、E a 2ブロックに1点分布している。錐状石器の遺跡全体での2m圏内出現頻度合計は6で平均は約1.5である。

遺物集中はやはりB2ブロックに観察できる。B2ブロックの2m圏内出現頻度は6で、平均は2.0、遺跡平均の1.3倍である。

#### 7) 楔形石器

楔形石器の総数は6点で、チャート製その他が2点、サヌカイト製が4点である。小ブロック単位で観察するとA1 outに、チャート製その他1点、サヌカイト製1点、A2に、サヌカイト製1点、D2に、チャート製その他1点、H1にサヌカイト製1点、I2にサヌカイト製1点である。

2m圏内出現頻度は、全ての小ブロックにおいて0であり、楔形石器は互いに相関関係を持たずにばらばらに分布しているといえよう。

#### 8) 彫器

彫器は1点が、原位置を保って出土し、チャート製である。H2ブロックに出土している。

#### 9) 局部磨製石斧、斧形石器

局部磨製石斧は1点で、A1ブロックで出土している。サヌカイト製斧形石器は1点で、J a 3外に出土している。

#### 10) 礫石器類（敲石、礫器、台石、磨石）

敲石は4点で、A1ブロックに2点、E a 2に1点、H1に1点である。

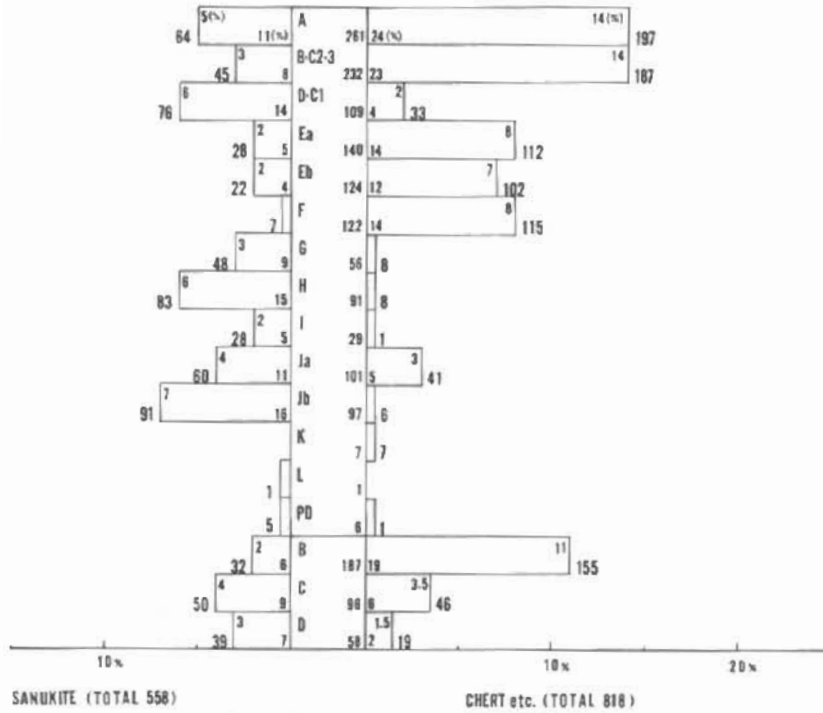
礫器はB1ブロックに1点、C2ブロックに1点、H2ブロックに1点、I1ブロックに1点、I2ブロックに1点分布している。

台石は1点で、B3ブロックに出土している。磨石は、1点で、H1ブロックに出土している。

#### 11) 剥片

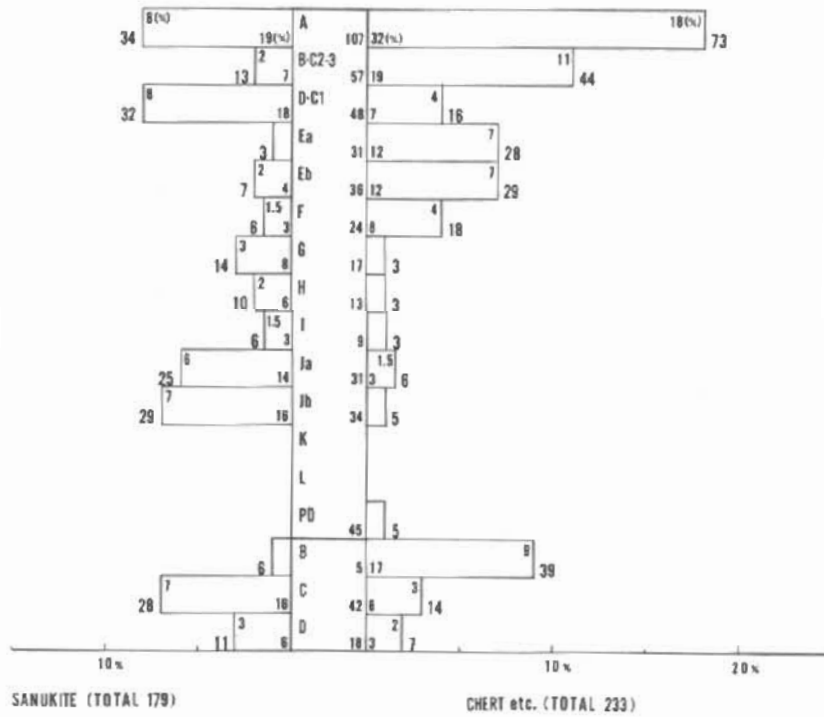
剥片の総数は1,376点で、チャート製その他818点、サヌカイト製558点である。第333図に大ブロック毎の分布状況を示す。小ブロック毎の剥片の点数は、A1ブロックにチャート製その他90点、サヌカイト製30点、A1 outにチャート製その他4点、A2にチャート製その他50点、サヌカイト製26点、A2 outにチャート製その他6点、A3にチャート製その他43点、サヌカイト製4点、A4にチャート製その他

第IV章 下位文化層の調査



FLAKES (TOTAL 1376)

第333図 剥片ブロック間分布グラフ



CHIPS (TOTAL 412)

第334図 碎片ブロック間分布グラフ

4点、サヌカイト製4点、B1にチャート製その他74点、サヌカイト製11点、B1 outにチャート製その他12点、サヌカイト製1点、B2にチャート製その他43点、サヌカイト製9点、B2 outにチャート製その他1点、サヌカイト製1点、B3にチャート製その他25点、サヌカイト製10点、C1にチャート製その他14点、サヌカイト製34点、C1 outにサヌカイト製3点、C2にチャート製その他18点、サヌカイト製5点、C3にチャート製その他14点、サヌカイト製8点、D1にチャート製その他6点、サヌカイト製31点、D1 outにチャート製その他1点、サヌカイト製2点、D2にチャート製その他12点、サヌカイト製6点、E a 1にチャート製その他37点、サヌカイト製9点、E a 1 outにチャート製その他7点、サヌカイト製1点、E a 2にチャート製その他56点、サヌカイト製15点、E a 3にチャート製その他12点、サヌカイト製3点、E b 1にチャート製その他40点、サヌカイト製6点、E b 2にチャート製その他45点、サヌカイト製10点、E b 3にチャート製その他17点、サヌカイト製6点、F1にチャート製その他80点、サヌカイト製2点、F1 outにサヌカイト製3点、F2にチャート製その他35点、サヌカイト製2点、G1にチャート製その他2点、サヌカイト製16点、G2にチャート製その他3点、サヌカイト製17点、G3にチャート製その他3点、サヌカイト製15点、H1にチャート製その他6点、サヌカイト製37点、H2にチャート製その他1点、サヌカイト製44点、H2 outにチャート製その他1点、サヌカイト製2点、I1にサヌカイト製15点、I2にチャート製その他1点、サヌカイト製8点、I3にサヌカイト製5点、J a 1にチャート製その他3点、サヌカイト製27点、J a 2にチャート製その他18点、サヌカイト製21点、J a 3にチャート製その他20点、サヌカイト製10点、J a 3 outにサヌカイト製2点、J b 1にチャート製その他3点、サヌカイト製37点、J b 2にチャート製その他3点、サヌカイト製47点、J b 2 outにサヌカイト製7点、Kにチャート製その他7点、Lにサヌカイト製1点、PDにサヌカイト製5点である。

## 12) 碎片

碎片の総数は412点で、そのうちチャート製その他233点、サヌカイト製179点である。

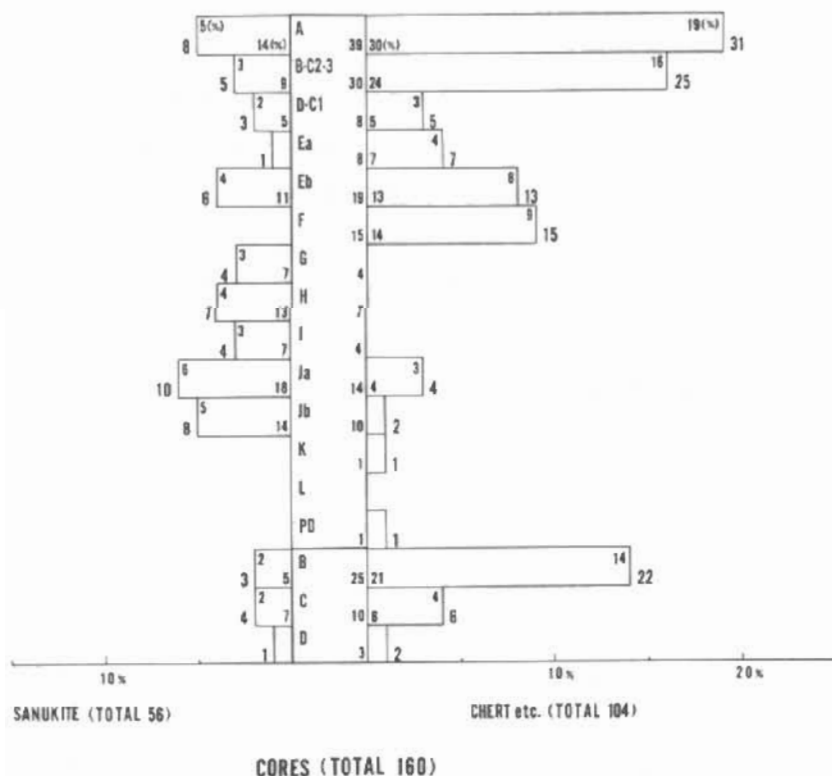
小ブロック毎の碎片の点数はA1ブロックにチャート製その他45点、サヌカイト製12点、A1 outにチャート製その他2点、A2にチャート製その他16点、サヌカイト製13点、A2 outにチャート製その他1点、A3にチャート製その他6点、サヌカイト製3点、A4にチャート製その他3点、サヌカイト製6点、B1にチャート製その他16点、サヌカイト製2点、B1 outにチャート製その他4点、サヌカイト製1点、B2にチャート製その他10点、サヌカイト製1点、B3にチャート製その他9点、サヌカイト製2点、C1にチャート製その他9点、サヌカイト製21点、C2にチャート製その他4点、サヌカイト製4点、C3にチャート製その他1点、サヌカイト製3点、D1にサヌカイト製10点、D2にチャート製その他7点、サヌカイト製1点、E a 1にチャート製その他11点、サヌカイト製1点、E a 1 outにチャート製その他2点、E a 2にチャート製その他14点、サヌカイト製2点、E a 3にチャート製その他1点、E b 1にチャート製その他6点、サヌカイト製3点、E b 2にチャート製その他18点、サヌカイト製4点、E b 3にチャート製その他5点、F1にチャート製その他14点、サヌカイト製6点、F2にチャート製その他4点、G1にサヌカイト製1点、G2にチャート製その他1点、サヌカイト製8点、G3にチャート製その他2点、サヌカイト製5点、H1にチャート製その他2点、サヌカイト製4点、H2にチャート製その他1点、サヌカイト製6点、I1にチャート製その他1点、サヌカイト製5点、I2にチャート製その他2点、サヌカイト製1点、J a 1にサヌカイト製7点、J a 2にチャート製その他5点、サヌカイト製10点、J a 3にチャート製その他1点、サヌカイト製8点、J b 1にチャート製その他1点、サヌカイト製20点、J b 2にチャート製その他4点、サヌカイト製9点である。

13) 石核

石核の総数は160点で、チャート製その他104点、サヌカイト製56点である。

小ブロック毎の石核の点数はA 1ブロックにチャート製その他10点、サヌカイト製2点、A 2にチャート製その他10点、サヌカイト製6点、A 3にチャート製その他10点、A 4にチャート製その他1点、B 1にチャート製その他5点、サヌカイト製1点、B 1 outにチャート製その他4点、サヌカイト製1点、B 2にチャート製その他6点、サヌカイト製1点、B 2 outにチャート製その他1点、B 3にチャート製その他6点、C 1にチャート製その他3点、サヌカイト製1点、C 1 outにサヌカイト製1点、C 2にチャート製その他3点、C 3にサヌカイト製2点、D 1にチャート製その他1点、サヌカイト製1点、D 2にチャート製その他1点、E a 1にチャート製その他1点、E a 2にチャート製その他5点、サヌカイト製1点、E a 3にチャート製その他1点、E b 1にチャート製その他2点、サヌカイト製1点、E b 2にチャート製その他8点、サヌカイト製2点、E b 3にチャート製その他3点、サヌカイト製3点、F 1にチャート製その他12点、F 2にチャート製その他3点、G 1にサヌカイト製2点、G 2にサヌカイト製2点、H 1にサヌカイト製4点、H 2にサヌカイト製3点、I 1にサヌカイト製1点、I 2にサヌカイト製2点、I 3にサヌカイト製1点、J a 1にサヌカイト製2点、J a 2にチャート製その他4点、サヌカイト製5点、J a 3にサヌカイト製1点、J a 3 outにサヌカイト製2点、J b 1にチャート製2点、サヌカイト製1点、J b 2にサヌカイト製6点、J b 2 outにサヌカイト製1点、Kにチャート製その他1点、PD1点である。

(渡辺)



第335図 石核ブロック間分布グラフ

### 石器類のブロック間分布状況

下位文化層の石器類は、総点数2353点が原位置を保ったと思われる状況で発掘された。ここでは、石器類全体のブロック間分布だけでなく、石器類別・器種別・石材別のブロック間分布状況について観察し、それら相互の関連性や相違性について検討したい。

別添第11図の全石器類分布等量線図を観察して設定された石器類ブロックには、ナイフ形石器・搔器・削器・彫器・錐状石器等の定型的石器、加工痕・使用痕有剥片、剥片、碎片、石核や礫石器類が組成される。また、石器類はサヌカイト・チャート等の石材から製作されている。ブロックは、視覚的に任意に設定されたため、所属する石器類の類別・種類、石材、総量と言った点で、まちまちである。

まず、石器類全体の総量的分布を観察しよう。第336図下段のATRIFACTSのグラフを見ると、石器類ブロックAの占有比20%を最大として、B+C 2・3の17%、E aの10%、D+C 1・1 outとE bの9%と続き、最小比率のIが2%、K・Lは僅かとなる。点数的均一性は、ブロック間には認められない。次に、石材について注目しよう。チャート等の占有比率(第336図CHERT etc.)が全石器類のブロック間占有比率を上回ったのは、A・B+C 2・3・E a・E b・Fであり、他は大きく下回る。一方、サヌカイトのブロック間占有比率(第336図SANUKITE)が全石器の占有比率を上回ったのは、D+C 1・1 out・G・H・I・J a・J bであり、他のブロックでは下回る。サヌカイトとチャート等の石材は、どちらか一方が主となるように分布している傾向が窺える。第337図にサヌカイトとチャート等製に2分した全遺物のブロック間分布状況を示す。一般に、どちらかの石材が多いブロックでは、もう一方の石材量は少ない傾向があるが、AとB+C 2・3の2ブロックでは多量のチャート等の石材と併せてサヌカイトもかなり出土している。

定型的石器に加工痕・使用痕有剥片を加えたもの(TOOLS)、剥片(FLAKES)、碎片(CHIPS)、石核(CORES)、各器種のブロック間分布占有比率をグラフで示す(第338図)。

石器の分布状況を第328図～第335図を参考に考えてみると、点数の少ない器種を除けば、ほとどの器種も各ブロックから出土している。一般には、石器の保有量に合わせた量の石器器種をブロック毎に有することになるだろうが、ただ、子細に観察すると他と比較して偏った分布を示す搔器と削器がある。搔器は、点数的に問題があるが、B+C 2・3ブロックに58%が集中する。削器もB+C 2・3とE aブロックに25%づつ分布し、他石器類ブロックと比較して突出した感がある。搔器と削器がB+C 2・3ブロックで共に多いことは、なんらかの背景を考えざるをえない。この問題は別に場所を設定して検討する(第IV章第3節第3項)。(山口)

### 石器類ブロックのゾーン別石器組成

#### ① 視点と方法

人間が活動を行なう時には、空間をそれぞれ機能する場として使い分けられていると考えられる。石器類ブロックもまた、漠然と石器が置かれているだけの存在ではなく、なんらかの活動の跡であるのではないか。その機能を読みとるための一つの方法として、ここでは石器個々の器種が石器類ブロックの中でどのような場に位置するのか、中心部か、あるいは外部かを検討してみたい。

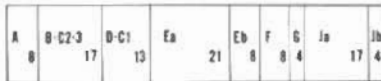
この問題については、既に野沢遺跡の報文中で、磨製石斧・敲石類についての分析が行なわれている(黒坪・山尾、82)。ここでは、野沢遺跡の分析でとられた分析方法を基とし、若干の修正を加えた。

ブロック内の全ての遺物の座標軸の平均値(重心)を算出(第21表)し、その座標をブロックの中心点として設定した。中心点を基準としてより近い遺物からゾーン内に組み入れていく。中心点の周囲、



第IV章 下位文化層の調査

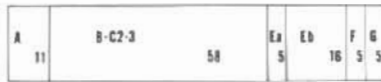
KNIVES (TOTAL 24)



GRAVER (TOTAL 1)



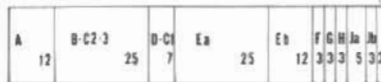
END-SCRAPERS (TOTAL 19)



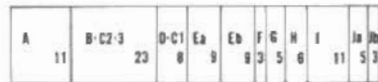
AX(SANU) (TOTAL 1)



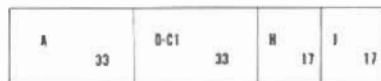
SCRAPERS (TOTAL 58)



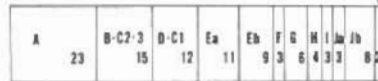
RETOUCHED FLAKES (TOTAL 66)



PIÈCE ESQUILÉE (TOTAL 6)



UTILISED FLAKES (TOTAL 185)



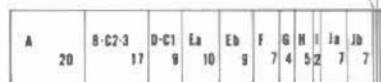
DRILLS (TOTAL 4)



PEBBLE TOOLS (TOTAL 12)



ARTIFACTS (TOTAL 2353)



TOOLS (TOTAL 384)

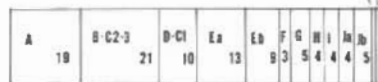
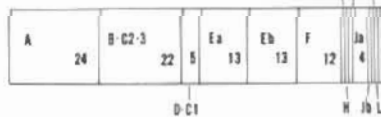
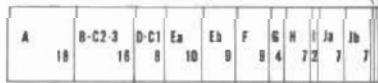


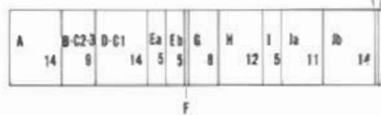
CHART etc. (TOTAL 1340)



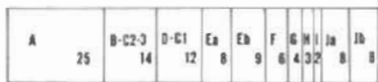
FLAKES (TOTAL 1376)



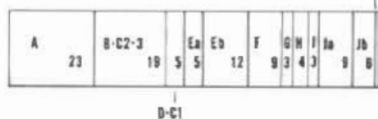
SANUKAIT (TOTAL 976)



CHIPS (TOTAL 412)

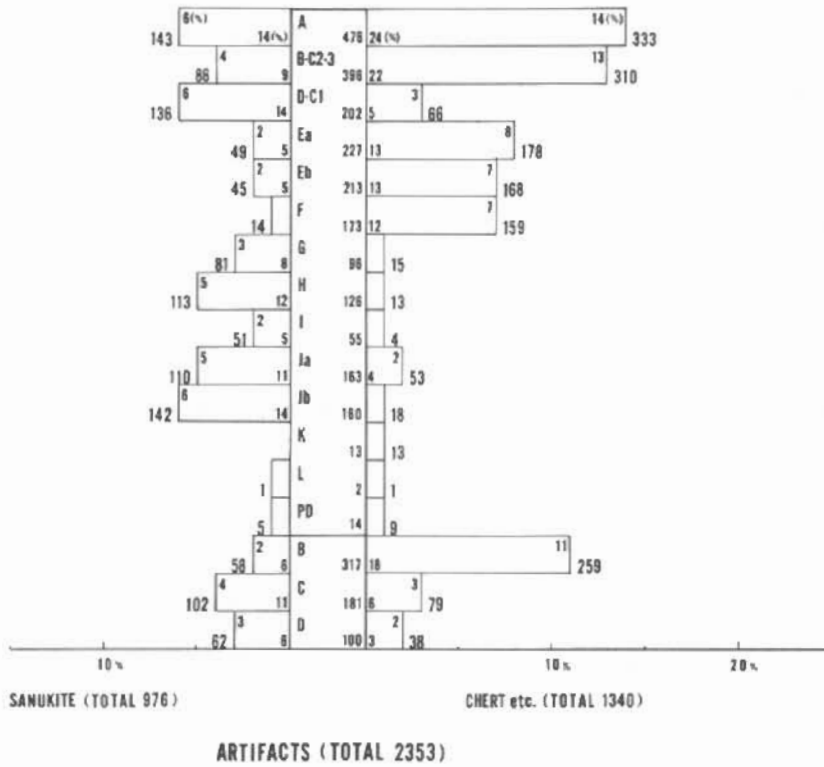


CORES (TOTAL 160)

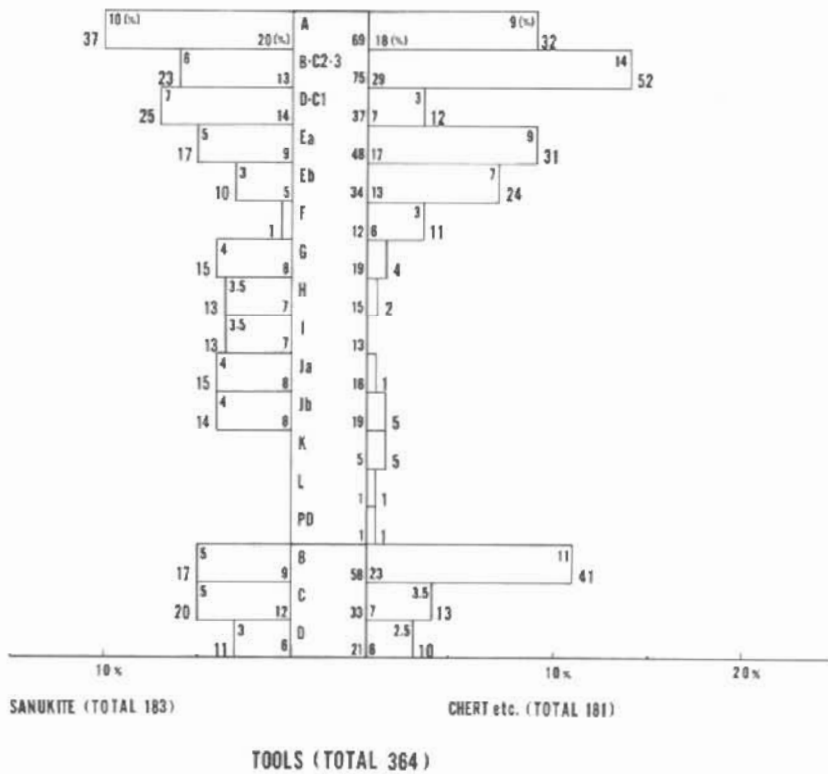


第336図 石器類器種別分布グラフ

第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布



第337図 全石器類ブロック間分布グラフ



第338図 石器（加工痕、使用痕有剥片含む）ブロック間分布グラフ

第35表 下位文化層全石器種類別ブロック間分布表(%)

	TOTAL	A	B	C	D	Ea	Eb	F	G	H	I	Ja	Jb	K	L	PD	B+C2.3	D+C1.lout
ARTIFACTS	2353	20.4%	13.7%	7.7%	4.2%	10.2%	9.3%	7.4%	4.1%	5.5%	2.4%	6.9%	6.8%	.6%	.1%	.6%	17.1%	8.6%
TOOLS	376	19.1%	16.0%	9.0%	5.6%	13.0%	9.0%	3.2%	5.1%	4.8%	4.0%	4.3%	5.1%	1.3%	3%	.3%	20.7%	9.8%
KN	24	8.3%	12.5%	16.7%	.0%	20.8%	8.3%	8.3%	4.2%	.0%	.0%	16.7%	4.2%	0%	.0%	.0%	16.7%	12.5%
EN	19	10.5%	52.6%	5.3%	.0%	5.3%	15.8%	5.3%	5.3%	.0%	.0%	.0%	.0%	0%	.0%	.0%	57.9%	.0%
SC	58	12.1%	20.7%	6.9%	3.4%	24.1%	12.1%	3.4%	3.4%	3.4%	.0%	5.2%	3.4%	0%	.0%	1.7%	24.1%	6.9%
P	6	33.3%	.0%	.0%	33.3%	.0%	.0%	.0%	.0%	16.7%	16.7%	.0%	.0%	0%	.0%	.0%	.0%	33.3%
D	4	.0%	75.0%	.0%	.0%	25.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	0%	.0%	.0%	75.0%	.0%
GR	1	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	100.0%	.0%	.0%	.0%	0%	.0%	.0%	.0%	.0%
AX(SANU)	1	1.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	100.0%	.0%	0%	.0%	.0%	.0%	.0%
RF	66	16.7%	18.2%	9.1%	4.5%	9.1%	9.1%	3.0%	4.5%	6.1%	10.6%	4.5%	3.0%	1.5%	.0%	.0%	24.2%	7.6%
UF	185	24.3%	9.7%	9.7%	7.6%	11.4%	8.6%	2.7%	6.5%	3.8%	2.7%	2.7%	7.6%	2.2%	.5%	.0%	14.6%	12.4%
CH	5	.0%	20.0%	20.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	20.0%	40.0%	.0%	.0%	0%	.0%	.0%	40.0%	.0%
EG-AX	1	100.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	0%	.0%	.0%	.0%	.0%
HS	4	50.0%	.0%	.0%	.0%	25.0%	.0%	.0%	.0%	25.0%	.0%	.0%	.0%	0%	.0%	.0%	.0%	.0%
PS	1	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	100.0%	.0%	.0%	.0%	0%	.0%	.0%	.0%	.0%
AN	1	.0%	100.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	0%	.0%	.0%	100.0%	.0%
F	1376	19.0%	13.6%	7.0%	4.2%	10.2%	9.0%	8.9%	4.1%	6.6%	2.1%	7.3%	7.0%	.5%	.1%	.4%	16.9%	7.9%
C	412	26.0%	10.9%	23.3%	14.1%	34.0%	30.1%	29.6%	13.6%	22.1%	7.0%	24.5%	23.5%	1.7%	2%	1.5%	56.3%	26.5%
CORES	160	24.4%	15.6%	6.3%	1.9%	5.0%	11.9%	9.4%	2.5%	4.4%	2.5%	8.8%	6.3%	.6%	.0%	.6%	18.8%	5.0%
B.C	4	.0%	50.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	25.0%	.0%	.0%	.0%	25.0%	50.0%	.0%
DEB	25	8.0%	12.0%	.0%	.0%	48.0%	24.0%	4.0%	4.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	12.0%	.0%

第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布

第36表 下位文化層サヌカイト製石器種類別ブロック間分布表(%)

	TOTAL	A	B	C	D	Ea	Eb	F	G	H	I	Ja	Jb	K	L	PD	B+C2.3	D+Cl1out
ARTIFACTS	976	14.7%	5.9%	10.5%	6.4%	5.0%	4.6%	1.4%	8.3%	11.6%	5.2%	11.3%	14.5%	.0%	.1%	.5%	8.8%	13.9%
TOOLS	183	20.2%	9.3%	10.9%	6.0%	9.3%	5.5%	.5%	8.2%	7.1%	7.1%	8.2%	7.7%	.0%	.0%	.0%	12.6%	13.7%
KN	12	8.3%	8.3%	25.0%	.0%	.0%	8.3%	.0%	8.3%	.0%	.0%	33.3%	8.3%	.0%	.0%	.0%	8.3%	5.0%
EN	4	.0%	50.0%	25.0%	.0%	.0%	25.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	75.0%	.0%
SC	28	14.3%	10.7%	10.7%	7.1%	21.4%	17.9%	.0%	3.6%	7.1%	.0%	7.1%	.0%	.0%	.0%	.0%	14.3%	14.3%
P	4	25.0%	.0%	.0%	25.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	25.0%	25.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	25.0%
D	2	.0%	50.0%	.0%	.0%	50.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	50.0%	.0%
GR	1	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	100.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%
AX(SANU)	1	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	100.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%
RF	31	19.4%	6.5%	6.5%	3.2%	3.2%	.0%	3.2%	6.5%	12.9%	22.6%	9.7%	6.5%	.0%	.0%	.0%	6.5%	9.7%
UF	100	25.0%	8.0%	11.0%	7.0%	9.0%	3.0%	.0%	11.0%	5.0%	5.0%	5.0%	11.0%	.0%	.0%	.0%	12.0%	14.0%
CH	0	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%
EG-AX	0	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%
HS	0	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%
PS	0	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%
AN	0	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%
F	558	11.5%	5.7%	9.0%	7.0%	5.0%	3.9%	1.3%	8.6%	14.9%	5.0%	10.8%	16.3%	.0%	.2%	9.0%	8.1%	13.6%
C	179	19.0%	3.4%	27.9%	21.8%	15.6%	12.3%	3.9%	26.8%	46.4%	15.6%	33.5%	50.8%	.0%	.6%	27.9%	25.1%	42.5%
CORES	56	14.3%	5.4%	7.1%	1.8%	1.8%	10.7%	.0%	7.1%	12.5%	7.1%	17.9%	14.3%	.0%	.0%	.0%	8.9%	5.4%
B.C	0	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%
DEB	0	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%

第IV章 下位文化層の調査

第37表 下位文化層チャート等製石器種類別ブロック間分布表(%)

	TOTAL	A	B	C	D	Ea	Eb	F	G	H	I	Ja	Jb	K	L	PD	B+C2.3	D+C1.1out
ARTIFACTS	1340	24.9%	19.3%	5.9%	2.8%	13.3%	12.5%	11.9%	1.1%	1.0%	3%	4.0%	1.3%	1.0%	.1%	.7%	23.1%	4.9%
TOOLS	181	17.7%	22.7%	7.2%	5.5%	17.1%	13.3%	6.1%	2.2%	1.1%	.0%	.6%	2.8%	2.8%	.6%	.6%	28.7%	6.6%
KN	12	8.3%	16.7%	8.3%	.0%	41.7%	8.3%	16.7%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	25.0%	.0%
EN	15	13.3%	53.3%	.0%	.0%	6.7%	13.3%	6.7%	1.7%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	53.3%	.0%
SC	30	10.0%	30.0%	3.3%	.0%	26.7%	6.7%	6.7%	3.3%	.0%	.0%	3.3%	6.7%	.0%	.0%	3.3%	33.3%	.0%
P	2	50.0%	.0%	.0%	50.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	50.0%
D	2	.0%	100.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	100.0%	.0%
GR	0	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%
AX (SANU)	0	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%
RF	35	14.3%	28.6%	11.4%	5.7%	14.3%	17.1%	2.9%	2.9%	.0%	.0%	.0%	.0%	2.9%	.0%	.0%	40.0%	5.7%
UF	85	23.5%	11.8%	8.2%	8.2%	14.1%	15.3%	5.9%	1.2%	2.4%	.0%	.0%	3.5%	4.7%	1.2%	.0%	17.6%	10.6%
CH	0	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%
EG-AX	0	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%
HS	0	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%
PS	0	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%
AN	0	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%
F	818	24.1%	18.9%	5.6%	2.3%	13.7%	12.5%	14.1%	1.0%	1.0%	.1%	5.0%	.7%	.9%	.0%	.1%	22.9%	4.0%
C	233	31.3%	16.7%	19.7%	8.2%	48.1%	43.8%	49.4%	3.4%	3.4%	.4%	17.6%	2.6%	3.0%	.0%	.4%	80.3%	14.2%
CORES	104	29.8%	21.2%	5.8%	1.9%	6.7%	12.5%	14.4%	.0%	.0%	.0%	3.8%	1.9%	1.0%	.0%	1.0%	24.0%	4.8%
B.C	4	.0%	50.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	25.0%	.0%	.0%	.0%	25.0%	50.0%	.0%
DEB	0	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%

ブロック全体の60%の遺物を第Iゾーンに属するものとする。以下同様にその外25%の遺物を第IIゾーン、第IIIゾーン(10%)、第IVゾーン(5%)とし、石器類ブロック毎、小ブロック毎に設定した(別添第32図・別添第33図)。

ゾーンを設定した上で、器種別に統計をとった。

## ② 石器類の分布

### a. ナイフ形石器の分布傾向

ナイフ形石器でブロック出土ゾーンを検討できる例は、チャート等12点、サヌカイト12点の計24点(小ブロック区分の場合はチャート12点、サヌカイト11点の計23点)である。A、B+C2・3、E a、E b、F、G、J a、J bに分布する。

ブロックによる区分の場合、各ゾーンに占める比率は、合計では第Iゾーン54.2%(13点)、第IIゾーン20.8%(5点)、第IIIゾーン16.7%(4点)、第IVゾーン8.3%(2点)で、第IIIゾーンの比率が幾分高い。石材別では、チャート等は第Iゾーン58.3%(7点)、第IIゾーン25.0%(3点)、第IIIゾーン16.7%(2点)、第IVゾーン0%(0点)で、第IIIゾーンの比率が高い。サヌカイトは第Iゾーン50.0%(6点)、第IIゾーン16.7%(2点)、第IIIゾーン16.7%(2点)、第IVゾーン16.7%(2点)で、第III・IVゾーンの比率が高く、第I・IIゾーンの比率が低い。

個々のブロック別に各ゾーンの比率をみると、点数の少ないナイフ形石器をブロック別に観察する場合、十分な数量的保証は確保できないが、何らかの傾向を把握することを期待する。Fは第Iゾーン、J bは第IIゾーン、Gは第IIIゾーンに100%集中する。E bは第I・IIゾーンに50.0%ずつ、E aは第Iゾーン80.0%、第IIIゾーン20.0%の比率で、Aは第II・IVゾーンに50.0%ずつの比率で分布する。B+C2・3、J aは第Iゾーン50.0%、第IIゾーン25.0%、第IIIゾーン25.0%、D+C1・1 outは第I・III・IVゾーンにそれぞれ33.3%の比率で分布する。石材別では、チャート等はFが第Iゾーン、A、E bが第IIゾーンに100%集中する。E aは第Iゾーン80.0%、第IIゾーン20.0%となる。B+C2・3は第I・II・IIIゾーンにそれぞれ33.3%の比率で分布する。サヌカイトはB+C2・3、E bが第Iゾーン、J bが第IIゾーン、Gが第IIIゾーン、Aが第IVゾーンに100%集中する。J aは第Iゾーン50.0%、第IIゾーン25.0%、第IIIゾーン25.0%、D+C1・1 outは第I・III・IVゾーンにそれぞれ33.3%の比率で分布する。

小ブロックによる区分の合計では、第Iゾーン47.9%(11点)、第IIゾーン21.7%(5点)、第IIIゾーン13.0%(3点)、第IVゾーン17.4%(4点)で、第Iゾーンにおける比率が低く、第IVゾーンの比率が高い。石材別では、チャート等は第Iゾーン58.3%(7点)、第IIゾーン16.7%(2点)、第IIIゾーン0%(0点)、第IVゾーン25.0%(3点)で、第IVゾーンにおける比率が特に高いことが注目される。サヌカイトは、第Iゾーン36.5%(4点)、第IIゾーン27.2%(3点)、第IIIゾーン27.2%(3点)、第IVゾーン9.1%(1点)で、第Iゾーンにおける比率が低く、どのゾーンにも比較的まんべんなく分布していると言える。

### b. 掻器の分布傾向

掻器でブロック出土ゾーンを検討できる例は、チャート等15点、サヌカイト4点の計19点である(小ブロック区分の場合はチャート等14点、サヌカイト4点の計18点)。A、B+C2・3、E a、E b、F、Gに分布し、北群とした部分に偏っている。

ブロックによる区分の場合、各ゾーンに占める比率は合計では第Iゾーン63.2%(12点)、第IIゾーン15.8%(3点)、第IIIゾーン15.8%(3点)、第IVゾーン5.2%(1点)となる。第IIゾーンに少なく、第

IIIゾーンの比率が幾分高い。石材別では、チャート等は第Iゾーン60.0% (9点)、第IIゾーン13.3% (2点)、第IIIゾーン20.0% (3点)、第IVゾーン6.7% (1点)で、第IIIゾーンの比率が高く、第IIゾーンの比率が低い。サヌカイトは第Iゾーン75.0% (3点)、第IIゾーン25.0% (1点)である。III・IVゾーンには分布しない。4点のみの分布であるのでこれをもって傾向を断定できるとは言い難いが、第I・IIゾーンといったブロック中央部に分布していることが理解できる。

個々のブロック別に各ゾーンの分布比率をみると、点数の少ない掘器をブロック別に観察する場合、十分な数量的保証は確保できないが、何らかの傾向を把握することを期待する。C・E a・E b・Fは第Iゾーン、Gは第IIゾーン、Aは第IIIゾーンに100%集中する。Bは第Iゾーン50%、第IIゾーン30%、第III・IVゾーンにそれぞれ10%の比率で分布する。Bを除いた全てのブロックでは、第I・II・IIIいずれかのゾーン1ヶ所のみみられるが、特に第Iゾーンに多く集中することは注目される。Bのみが例外で、全てのゾーンに分布する。石材別にみた場合、チャート等はE a・E b・Fが第Iゾーン、Gが第IIゾーン、Aが第IIIゾーンにそれぞれ100%、Bが第Iゾーン50%、第IIゾーン25%、第III・IVゾーンに12.5%ずつの比率で分布する。全体の傾向同様Bでは全てのゾーンに分布し、それ以外はI・II・IIIいずれか一つのゾーンのみみられるのが特徴である。サヌカイトではE b・Cが第Iゾーンに100%、Bが第Iゾーン50%、第IIゾーン50%の比率で分布する。点数が少ないのでこれをもって傾向と断定するまでには至らないが、やはりブロック中央部に分布することが理解できる。

小ブロックによる区分の合計でみるとどうか。第Iゾーン61.1% (11点)、第IIゾーン22.2% (4点)、第IIIゾーン16.7% (3点)、第IVゾーン0% (0点)となる。第IVゾーンに分布しない分、第IIIゾーンの比率が幾分高い。石材別では、チャート等は第Iゾーン64.3% (9点)、第IIゾーン28.6% (4点)、第IIIゾーン7.1% (1点)、第IVゾーン0% (0点)である。サヌカイトは、第Iゾーン50.0% (2点)、第IIIゾーン50.0% (2点)となる。

#### c. 削器の分布傾向

削器でブロック出土ゾーンを検討できる例は、チャート等30点、サヌカイト28点の計58点 (小ブロック区分の場合は、チャート等29点、サヌカイト27点の計56点)である。I、Kを除いた全てのブロックに分布する。

ブロックによる区分の場合、各ゾーンに占める削器の比率は、合計では第Iゾーン60.4% (35点)、第IIゾーン24.1% (14点)、第IIIゾーン12.1% (7点)、第IVゾーン3.4% (2点)となり、ほぼ期待値と一致する。石材別では、チャート等は第Iゾーン63.3% (19点)、第IIゾーン20.0% (6点)、第IIIゾーン10.0% (3点)、第IVゾーン6.7% (2点)となるが、ここでも注目すべき点はない。サヌカイトで、第Iゾーン57.1% (16点)、第IIゾーン28.6% (8点)、第IIIゾーン14.3% (4点)、第IVゾーン0% (0点)である。第IIIゾーンの比率が若干高い。

個々のブロック別の各ゾーンの分布比率をみると、F、Gは第Iゾーンに100%集中する。D+C 1・1 out、J aは第Iゾーン66.7%、第IIゾーン33.3%の比率で、Gは第I・IIIゾーン、J bでは第II・IVゾーンにそれぞれ50.0%ずつの比率で分布する。B+C 2・3、E a、E bは、第I・II・IIIの3つのゾーンに分布するが、ほぼ期待値と一致する。Aは全てのゾーンに分布し、その比率は第Iゾーン28.5%、第IIゾーン42.5%、第IIIゾーン14.3%、第IVゾーン14.3%である。第Iゾーンの比率が期待値のほぼ半分なのに対し、第IIゾーンでは大幅に増加している。石材別では、チャート等はE b、F、G、J aが第Iゾーンに100%集中する。J bは第II・IVゾーンにそれぞれ50%の比率で分布する。B+C 2・3、E a

は第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの三つのゾーンに分布する。B+C2・3では72.7%、18.2%、9.1%の比率で、第Ⅰゾーンの比率が高いことが注目される。E aでは50.0%、37.5%、12.5%であるが、第Ⅰゾーンの比率が低く、第Ⅱゾーンの比率が高い。Aで第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲゾーンに33.3%ずつの比率で分布する。サヌカイトは、Hが第Ⅰゾーン、Gが第Ⅲゾーンに100%集中する。A、J a、D+C1・1 out、E aは第Ⅰ・Ⅱ二つのゾーンに分布する。Aは25.0%、75.0%、J aはそれぞれ50.0%、D+C1・1 outは66.7%、33.3%、E aは83.3%、16.7%となる。B+C2・3、E bでは第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの三つのゾーンに分布する。B+C2・3は50.0%、25.0%、25.0%、E bは60.0%、20.0%、20.0%の比率である。

小ブロックによる区分の合計で見るとどうか。第Ⅰゾーン57.1% (32点)、第Ⅱゾーン28.6% (16点)、第Ⅲゾーン8.9% (5点)、第Ⅳゾーン5.4% (3点) となり、ほぼ期待値と一致する。石材別では、チャート等は第Ⅰゾーン62.1% (18点)、第Ⅱゾーン27.6% (8点)、第Ⅲゾーン3.4% (1点)、第Ⅳゾーン6.9% (2点) となる。第Ⅲゾーンの比率が若干低い。サヌカイトは、第Ⅰゾーン51.9% (14点)、第Ⅱゾーン29.6% (8点)、第Ⅲゾーン14.8% (4点)、第Ⅳゾーン3.7% (1点) である。第Ⅰゾーンの比率が幾分低く、第Ⅱ・Ⅲゾーンの比率が高い。

#### d. 加工痕有剥片の分布傾向

加工痕有剥片でブロック出土ゾーンを検討できる例は、チャート等35点、サヌカイト30点の計65点(小ブロック区分の場合はチャート等35点、サヌカイト29点の計64点) で、全てのブロックに分布する。

ブロックによる区分の場合、各ゾーンに占める比率は、合計では第Ⅰゾーン60.0%(39点)、第Ⅱゾーン30.8% (20点)、第Ⅲゾーン6.2% (4点)、第Ⅳゾーン3.0% (2点) となり、期待値とほぼ一致する。石材別では、チャート等は第Ⅰゾーン62.9% (22点)、第Ⅱゾーン31.4% (11点)、第Ⅲゾーン5.7% (2点)、第Ⅳゾーン0% (0点) である。第Ⅲ・Ⅳゾーンの比率が低く、ブロック中心部にあたる第Ⅰ・Ⅱゾーンへ偏って分布している。サヌカイトは、第Ⅰゾーン56.6% (17点)、第Ⅱゾーン30.0% (9点)、第Ⅲゾーン6.7% (2点)、第Ⅳゾーン6.7% (2点) である。特別な傾向はみられない。

小ブロックによる区分の合計でみるとどうか。第Ⅰゾーン56.3% (36点)、第Ⅱゾーン28.1% (18点)、第Ⅲゾーン14.3% (5点)、第Ⅳゾーン4.7% (3点) で、期待値とほぼ一致する。石材別では、チャート等は第Ⅰゾーン57.1% (20点)、第Ⅱゾーン22.9% (8点)、第Ⅲゾーン10.9% (7点)、第Ⅳゾーン5.7% (2点) で、特別な傾向はみられない。サヌカイトは、第Ⅰゾーン55.2% (16点)、第Ⅱゾーン34.5% (10点)、第Ⅲゾーン6.9% (2点)、第Ⅳゾーン3.4% (1点)。第Ⅱゾーンの比率が幾分高い。

#### e. 使用痕有剥片の分布傾向

使用痕有剥片でブロック出土ゾーンを検討できる例は、チャート等84点、サヌカイト96点の計180点(小ブロック区分の場合はチャート等83点、サヌカイト93点の計176点) であり、全てのブロックに分布する。

ブロックによる区分の場合、各ゾーンに占める比率は、合計では第Ⅰゾーン56.1% (101点)、第Ⅱゾーン27.2% (49点)、第Ⅲゾーン10.0% (18点)、第Ⅳゾーン6.7% (12点) となり、期待値とほぼ一致する。石材別では、チャート等は第Ⅰゾーン51.2% (43点)、第Ⅱゾーン29.8% (25点)、第Ⅲゾーン13.1% (11点)、第Ⅳゾーン5.9% (5点) となる。第Ⅰゾーンの割合が幾分低い。サヌカイトは、第Ⅰゾーン60.4% (58点)、第Ⅱゾーン25.0% (24点)、第Ⅲゾーン7.3% (7点)、第Ⅳゾーン7.3% (7点) である。特別な傾向はみられない。

小ブロックによる区分の合計では、第Ⅰゾーン58.0% (102点)、第Ⅱゾーン23.3% (41点)、第Ⅲゾーン13.1% (23点)、第Ⅳゾーン5.6% (10点) である。石材別では、チャート等は第Ⅰゾーン54.2% (45



点)、第IIゾーン24.1% (20点)、第IIIゾーン16.9% (14点)、第IVゾーン4.8% (4点)となる。サヌカイトは第Iゾーン61.3% (57点)、第IIゾーン22.6% (21点)、第IIIゾーン9.7% (9点)、第IVゾーン6.4% (6点)である。全体、石材別ともにはほぼ期待値と一致する。

#### f. 錐状石器の分布傾向

錐状石器でブロック出土ゾーンを検討できる例は、チャート等2点、サヌカイト2点の計4点である。B+C2・3、E aに分布する。

ブロックによる区分の場合、各ゾーンに占める比率は、合計では第Iゾーンに100% (4点)、石材別でもチャート等、サヌカイトいずれも第Iゾーンに100% (2点)となる。

小ブロックによる区分の合計では、第Iゾーン75.0% (3点)、第IIゾーン25.0% (1点)の比率で分布する。石材別ではチャート等は第Iゾーン100% (2点)で、サヌカイトは第Iゾーン50.0% (1点)、第IIゾーン50.0% (1点)である。

#### g. 楔形石器の分布傾向

楔形石器でブロック出土ゾーンを検討できる例は、チャート等2点、サヌカイト4点の計6点である。A、D+C1・1 out、H、Jに分布する。

ブロックによる区分の場合、各ゾーンに占める比率は、合計では第Iゾーン33.3% (2点)、第IIゾーン33.3% (2点)、第IVゾーン33.3% (2点)である。石材別ではチャート等は第Iゾーン50.0% (1点)、第IVゾーン50.0% (1点)となる。サヌカイトは第Iゾーン25.0% (1点)、第IIゾーン50.0% (2点)、第IVゾーン25.0% (1点)となる。

小ブロックによる区分の合計でみるとどうか。第Iゾーン40.0% (2点)、第IIゾーン40.0% (2点)、第IVゾーン20.0% (1点)の比率で分布する。石材別ではチャート等は第Iゾーン100% (1点)で、サヌカイトは第Iゾーン25.0% (1点)、第IIゾーン50.0% (2点)、第IVゾーン25.0% (1点)である。

#### h. 彫器の分布傾向

彫器でブロック出土ゾーンを検討できる例は、サヌカイト1点のみであり、Hより出土する。ブロック、小ブロックいずれの区分でも第Iゾーン100%となる。

#### i. 局部磨製石斧の分布傾向

局部磨製石斧でブロック出土ゾーンを検討できる例は、チャート等1点のみであり、Aより出土する。ブロックによる区分の場合は第IIゾーン100%、小ブロックによる区分の場合は第IIIゾーン100%となる。

#### j. サヌカイト製斧形石器の分布傾向

斧形石器はブロック区分の対象外の位置から出土している。

#### k. 礫石器類の分布傾向

礫石器類でブロック出土ゾーンを検討できる例は11点である。A、B+C2・3、E a、H、Iに分布する。敲石、磨石、礫器、台石を含む。

ブロックによる区分の場合、各ゾーンに占める比率は、第Iゾーン54.5% (6点)、第IIゾーン36.4% (4点)、第IIIゾーン9.1% (1点)、第IVゾーン0% (0点)で、第IIゾーンの比率が高い。

小ブロックによる区分の合計では、第Iゾーン45.6% (5点)、第IIゾーン27.2% (3点)、第IIIゾーン27.2% (3点)、第IVゾーン0% (0点)で、第Iゾーンの比率が低く、第IIIゾーンの比率が高い。

敲石はA、E a、Hより計4点出土する。ブロックによる区分では第Iゾーン75.0% (3点)、第IIゾーン25.0% (1点)の比率である。小ブロックによる区分では第Iゾーン50.0% (2点)、第IIゾーン50.0%

% (2点) となる。

磨石は1点のみでありHより出土する。ブロック、小ブロックいずれによる区分でも第IIゾーン100%となる。

礫器はB+C2・3、H、Iより計5点出土する。ブロック、小ブロックいずれによる区分でも第Iゾーン40.0% (2点)、第IIゾーン40.0% (2点)、第IIIゾーン20.0% (1点)、第IVゾーン0% (0点)の比率である。

台石は1点のみでありB+C2・3より出土する。ブロック、小ブロックいずれによる区分でも第Iゾーン100%となる。

#### 1. 石核の分布傾向

石核でブロック出土ゾーンを検討できる例は、チャート等104点、サヌカイト53点の計157点(小ブロック区分の場合はチャート等103点、サヌカイト52点の計155点)であり、全てのブロックに分布する。

ブロックによる区分の場合、各ゾーンに占める比率は、合計では第Iゾーン54.1%(85点)、第IIゾーン28.7% (45点)、第IIIゾーン11.5% (18点)、第IVゾーン5.7% (9点)となり、期待値とはほぼ一致する。石材別では、チャート等は第Iゾーン54.8% (57点)、第IIゾーン29.8% (31点)、第IIIゾーン10.6% (11点)、第IVゾーン4.8% (5点)となる。サヌカイトは第Iゾーン52.9% (28点)、第IIゾーン26.4% (14点)、第IIIゾーン13.2% (7点)、第IVゾーン7.5% (4点)である。石材別でも特別な傾向はみられない。

小ブロックによる区分の合計は、第Iゾーン56.1% (87点)、第IIゾーン29.7% (46点)、第IIIゾーン9.7% (15点)、第IVゾーン4.5% (7点)の比率で分布する。石材別では、チャート等は第Iゾーン56.3% (58点)、第IIゾーン28.2% (29点)、第IIIゾーン11.7% (12点)、第IVゾーン3.8% (4点)となる。サヌカイトは第Iゾーン55.9% (29点)、第IIゾーン32.7% (17点)、第IIIゾーン5.7% (3点)、第IVゾーン5.7% (3点)である。全体、石材別ともにはほぼ期待値と一致する。

#### ③ まとめ

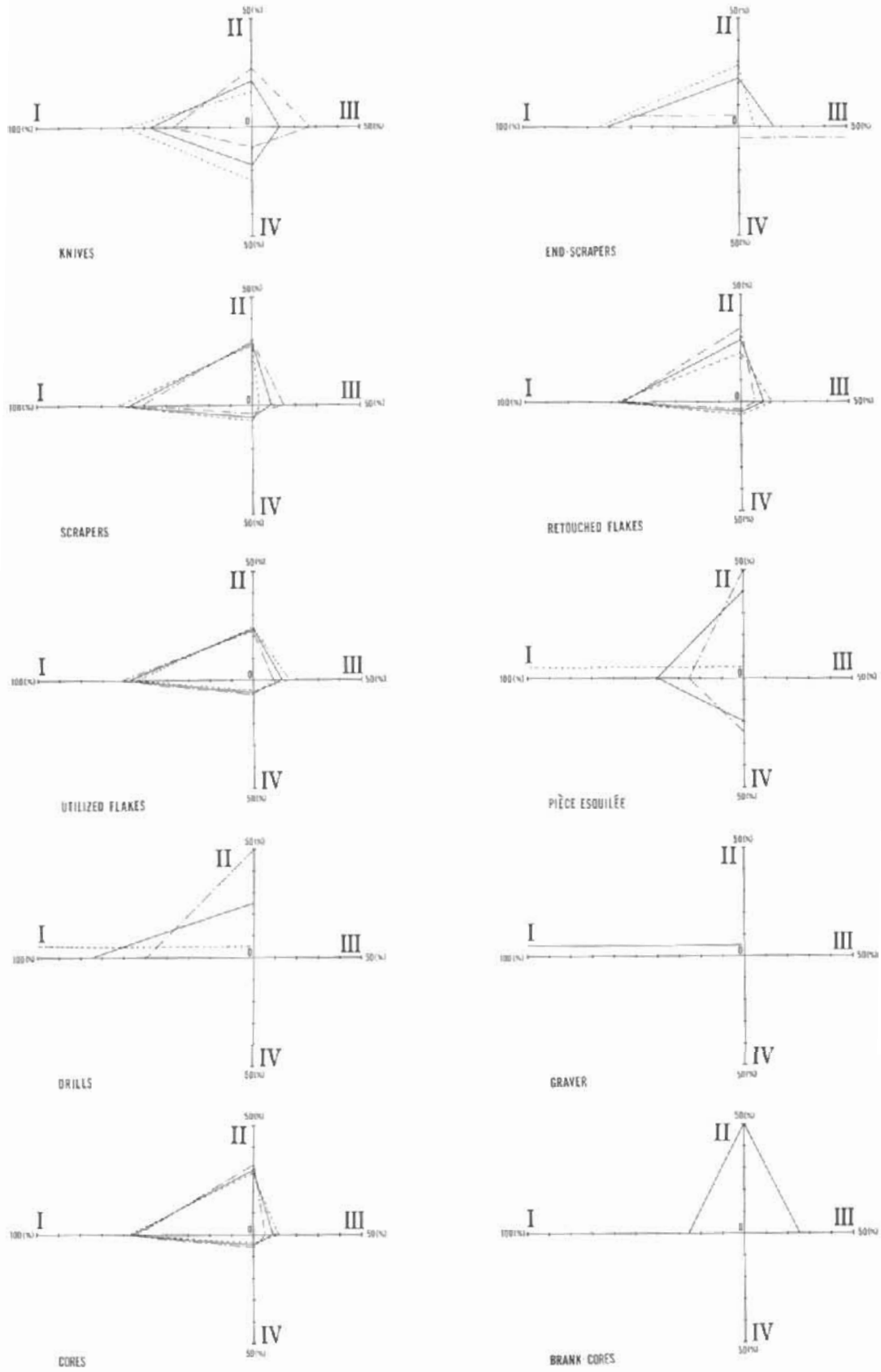
石器類ブロックの中心部から外縁部への4つのゾーンでの各器種の出現状況は、ほぼ全ての器種で、そのゾーンに割り振った石器類の点数比率に比例し、全体として特に特徴がないことが明らかになった。この傾向は、点数の多い削器・加工痕有剥片・使用痕有剥片・石核に明瞭である。また、石器類ブロック単位、小ブロック単位いずれの分析でも同様の傾向が示されたことは、注目に値する。

この結果、石器類ブロック内での中心部と外縁部での使用・廃棄・遺棄石器の種類には、偏在傾向は少ないことになり、石器類ブロック内で、ブロック中央と外縁部の石器に関わる使い分けの証拠には乏しいと判断されることになる。

点数の少ない器種については、局地的な分布が統計結果を支配するため、傾向として積極的に判断するには躊躇を覚える。先の分析結果のみを表示して、積極的な解釈は事例の増加をみた後に委ねたい。

点数の少ない器種の中で、ナイフ形石器と搔器については、その分布のあり方にある程度の斉一性が窺えることから、ここで若干の検討を加えておきたい。

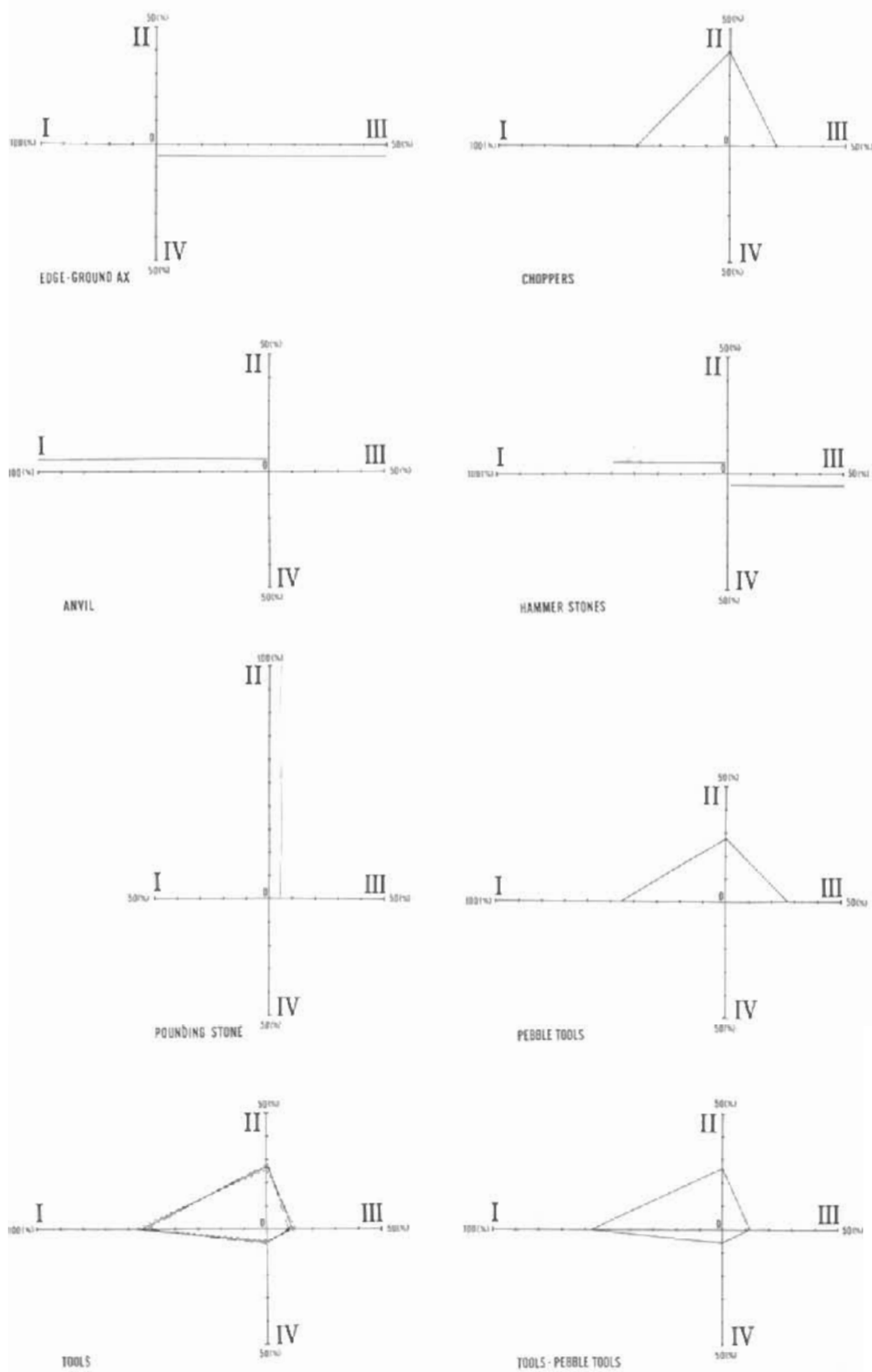
ナイフ形石器は、石器類ブロックでは第IIIゾーンにやや多く中心部に少なく、小ブロックでも、第IVゾーンに多く中央部に少ない傾向が現われた。石材別では、チャート等製とサヌカイト製の二者でやや異なった傾向があり、サヌカイトで中央部を避けつつも散在傾向が強く、チャート等では特定のゾーンに集中傾向が認められた。石材差が分布傾向の違いと重層している可能性が高い器種である。



第339図 ゾーン別占有率相関グラフ 1

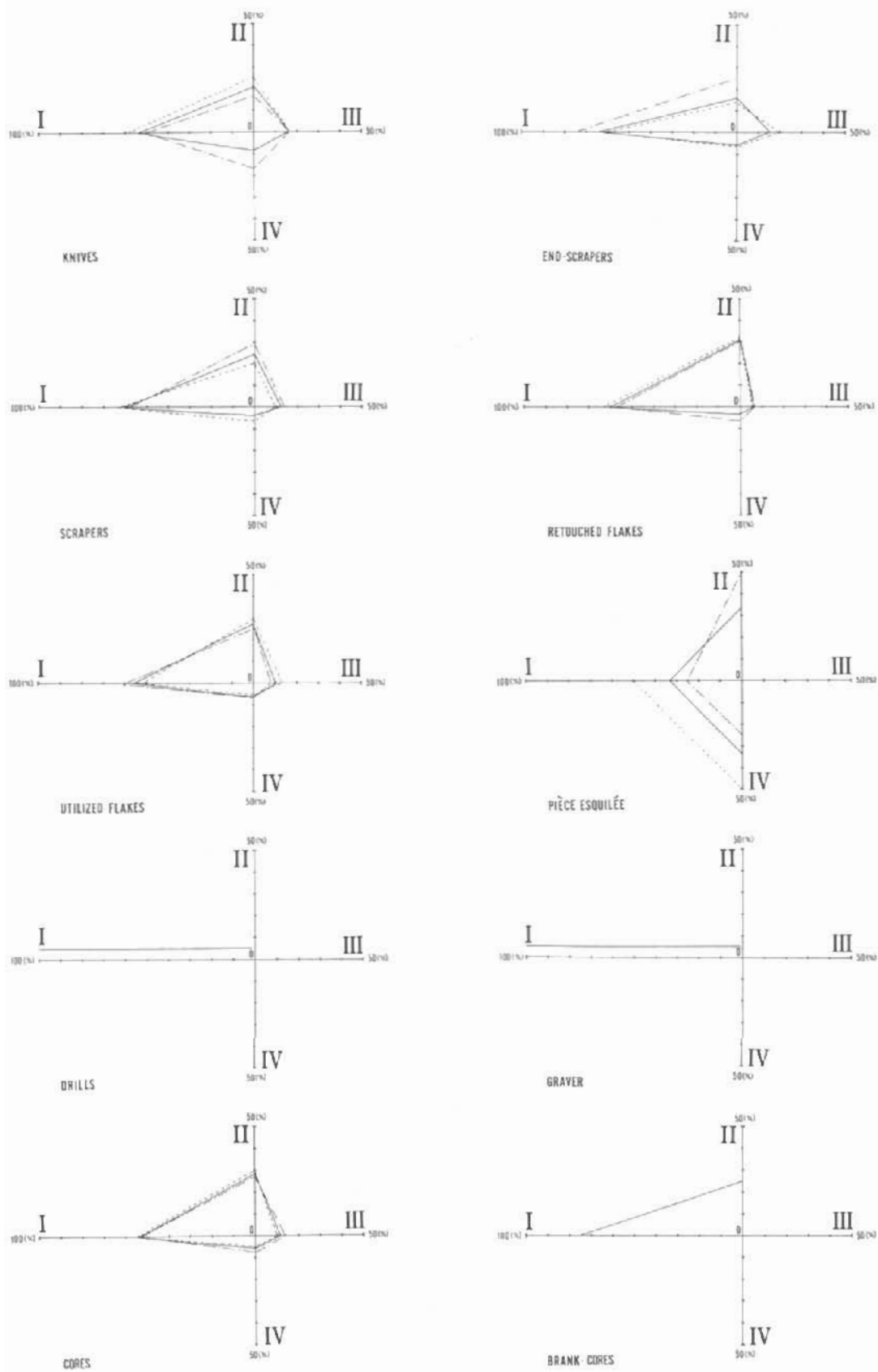
(—全石器 - - -サヌカイト .....チャート等)

第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布



第340図 ゾーン別占有率相関グラフ 2

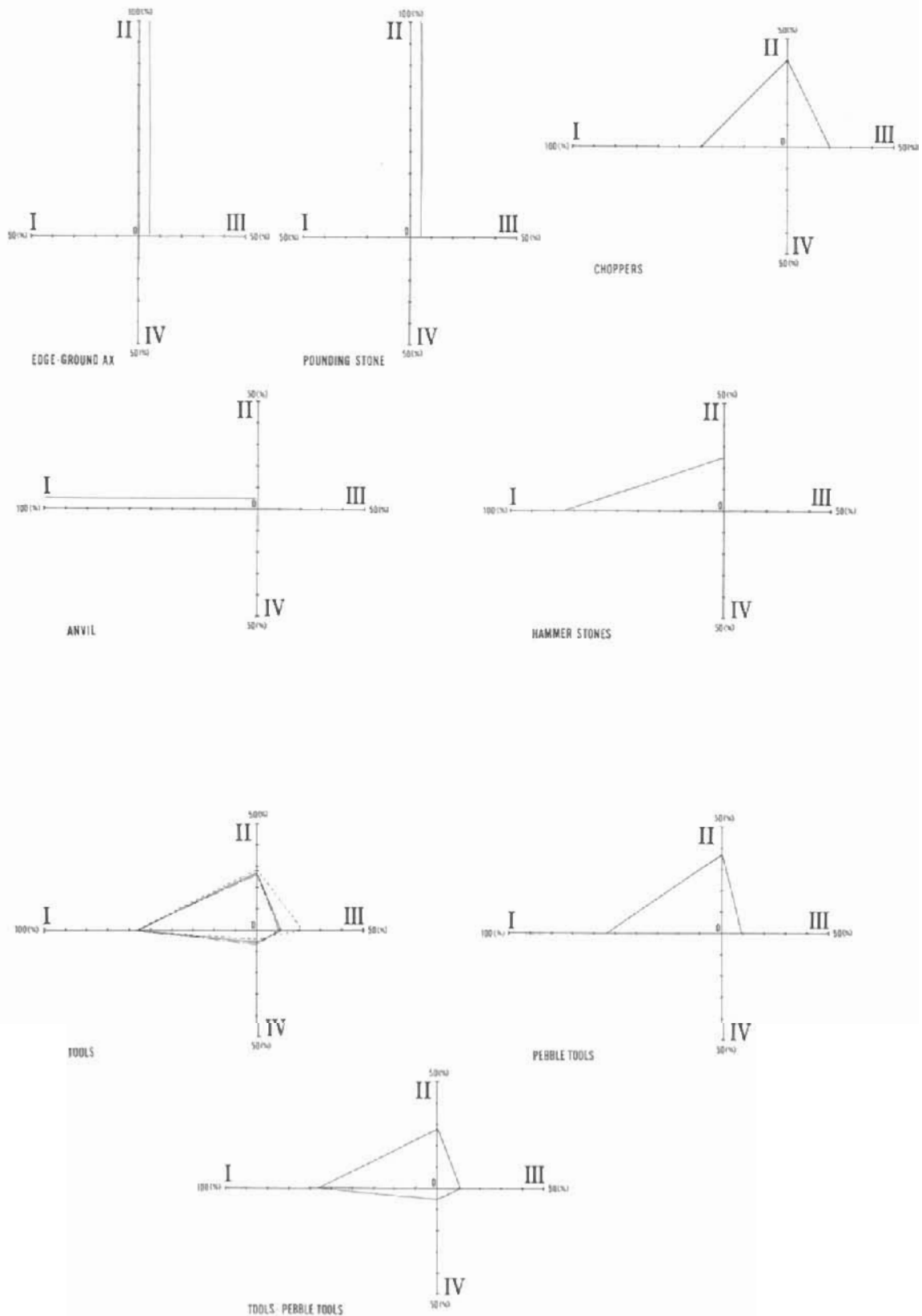
(——全石器 —・—・サヌカイト ……チャート等)



第341図 小ブロック ソーン別占有率相関グラフ1

(—全石器 - - -サヌカイト .....チャート等)

第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布



第342図 小ブロックゾーン別占有率相関グラフ2

(—全石器 - - -サヌカイト .....チャート等)

搔器では、ほぼ分布傾向は点数比率に従うが、石材を区別した場合、石器類ブロック単位の観察で大きな違いが認められる。サヌカイトでは第I・IIゾーンにのみ分布し、チャート等では第IIIゾーンにやや多いもの一般傾向にしたがう。ナイフ形石器と同様の偏在傾向が、石材を分けて出現している。サヌカイト製搔器が、石器類ブロックの中央部に集中することは、興味深い。

ナイフ形石器と搔器の、この僅かながらではあるが、偏在傾向が認められたことは、統計的方法の誤差の範囲であるのか、一定の意味があるのか、にわかに決めつけることはできないが、この両器種のゾーン別出現は、本報告書で行なう他の分析結果とも関連付けて解釈する必要があると考える。第IV章第3節第3項を参照されたい。

本稿のこの分析は、野沢遺跡での黒坪・山尾両氏の分析方法を、板井寺ヶ谷遺跡下位文化層の各器種に試みたものであり、この結果のみでいますぐ石器の使用・遺棄・廃棄に関わる石器類ブロック内での位置について、十分な解釈が可能になるわけではない。今後、石器類ブロック内での石器各器種の位置関係について、十分な配慮が必要となってくると考える。(河田)

#### 石器類ブロックのゾーン別礫石出土状況

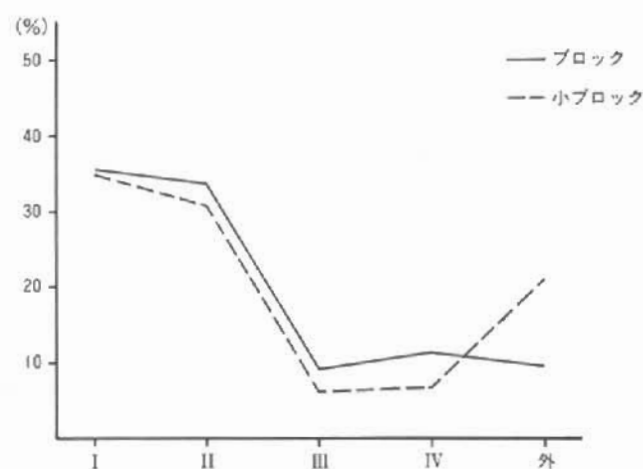
前項では、石器類ブロックの中心から外側へ4つのゾーンを設定して、ゾーンごとの石器包有状況を観察した。ここでは同じ手順で、下位文化層から出土した礫石類のブロックゾーンについて観察したい。石器類の分布量を、ブロック中心から60%、25%、10%、5%の順に区別したゾーンは、礫石類の分布を基準とする訳ではないが、石器類ブロックと礫石類の位置的関係を示すことができよう。

礫石類は、単独配石・配石群・礫ブロック・礫として下位文化層に分布し、総計で140点ある。分析は、受熱、大きさ・破砕度に注目し、石器類ブロック単位、小ブロック単位に、受熱礫合計26個、非受熱礫合計114個、大型礫(1kg以上の配石相当)合計38個、中型礫合計22個、小型礫合計80個、破砕度Aの礫合計41個、Bの礫合計34個、Cの礫合計37個、Dの礫合計28個を分けて行なった。礫の分類基準は、第IV章第1節第2項aの分析結果に従っている。量的な問題があり、個々の石器類ブロック、小ブロック毎の観察結果の記述は行なわない。遺構単位での礫石類の状況は第1節第2項bを、石器類ブロック別の礫石類の出土状況は、第IV章第3節第2項bのブロックの設定の部分を参照されたい。

まず、石器類ブロック単位の観察を始めよう(第344図)。

受熱した礫石類は、石器類ブロックのゾーンIIとゾーンIVに多く、非受熱礫石類はゾーンIとIIに多く観察されるが、ブロックゾーン外の礫石類がすべて非受熱である以外は、両者とも石器類ブロック内ではほぼ同様の分布状況を見せる。強いて観察すると、受熱礫石類の出土頻度が石器類のそれを下回ったのがゾーンI、上回ったのがゾーンIIで、受熱礫石類は石器類ブロックの中心部から少し外れたところに多いということもできるかも知れない。

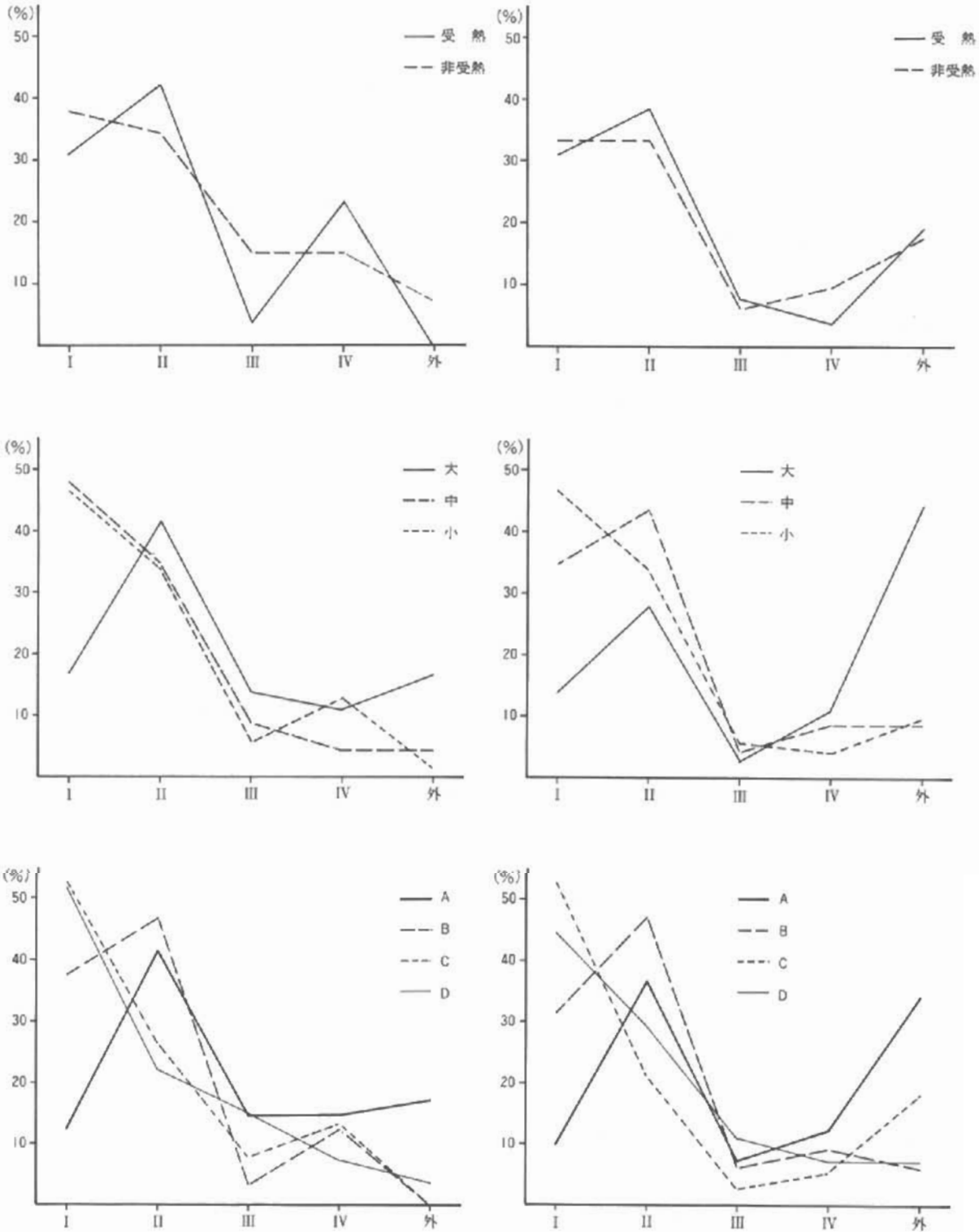
礫石類の大きさについては、大型の礫はゾーンIにきわめて少なく、ブロックゾーン外に多い傾向が、中型・小型の礫はゾーンIに多くて、ブロックゾーン外に少ない傾向が認められる。大型礫と中・小型礫のブロックゾ



第343図 ゾーン別礫占有率

第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布

ーン分布には、大きな違いがあり、大型礫は石器類ブロック中心部を避けて石器類ブロックの外にも多く分布するが、中・小型礫は、石器類ブロック中心部に集中する事になる。大型礫は配石・配石群構成



第344図 ソーン別礫占有率 (ブロックゾーン)

第345図 ソーン別礫占有率 (小ブロックゾーン)



礫中の1kg以上のものに、中・小型礫は礫ブロック構成礫や散漫に分布する礫に相当することから、両者には分布上の違いも存在することになる。

礫の破碎度では、完形礫石のAから破碎礫片のDまでの4段階で観察すると、明らかに破碎度と分布状況に関係があることが知れた。Aは、ゾーンIに極めて少なく、ゾーンIII・IV・外に多く、C・Dは、ゾーンIに集中し、ゾーンIII・IV・外に少ないという反対の傾向がある。Bは、ゾーンIIに多いが、AとC・Dの中間的様相が認められる。

全体として、礫石類の大中小と破碎度には強い関係がある。礫石が小さくて破碎度のひどいほど石器類ブロックの中心部に、礫石類が大きくて完形に近いほど石器類ブロック外縁部に分布する傾向がある。受熱・非受熱では顕著な特徴は認められないが、ゾーンIIあたりに受熱礫が多い傾向がみられよう。

石器類ブロックの小ブロック単位での観察を行なう(第345図)。

受熱・非受熱では、特に顕著な特徴はないが、ゾーンIIにやや多く受熱礫石類が出土しているようだ。大中小では、大型礫石はゾーンIに少なく、ゾーンIV・外に多い。特に外に分布する。逆に、小型礫は概ねゾーンIに集中する。破碎度では、完形礫石AはゾーンIに少なく、ゾーンIV・外に多く、破碎度が高いほどゾーンI・IIに集中する傾向がある。

基本的には、石器類ブロック単位、小ブロック単位を問わず、大型の礫石類は中・小型礫状態に破碎されるが外縁部ではその形状を保ち、結果として中央部に中小礫石が多くなる。受熱礫石類は、全くの石器集中部中央ではなく、やや離れた場所に分布する傾向がある。(河田・山口)

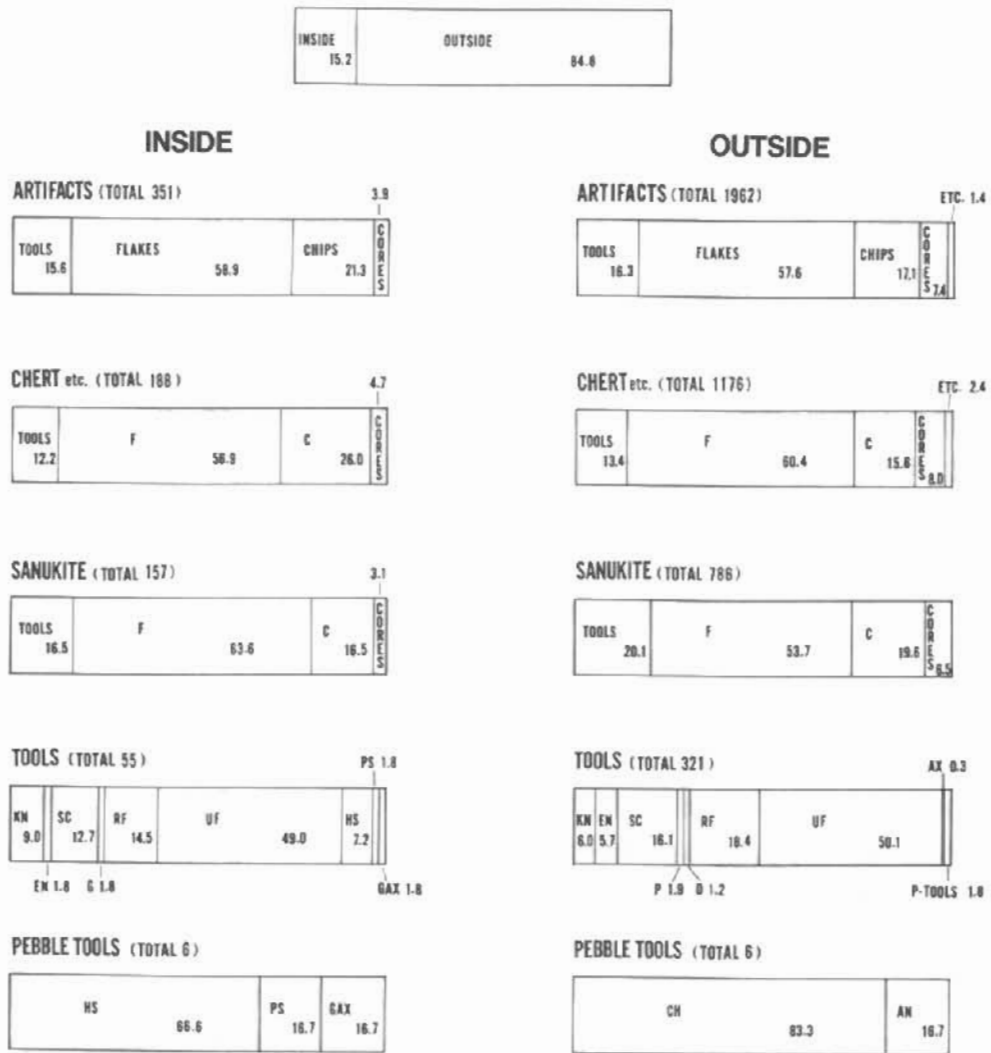
#### 配石・配石群・礫ブロック周辺の石器類組成

石器類ブロックは、石器生産や使用・廃棄に関連して残された空間である。一方、礫石が下位文化層中に分布し、石器類と礫石の分布と重なりあう部分があることが観察された。逆に各石器類ブロック中に配石・配石群・礫ブロックなどを抱える例は多い。ここでは、礫石の周辺に分布する石器類と離れた石器類では、どの様な石器組成を示すかを検討し、礫石周辺での空間的機能を明らかにしたい。配石・配石群・礫ブロックの礫石を中心として半径1mの範囲を囲いこみ、遺跡全体を礫石周辺空間と外空間の2つに区別し、この中に入った石器類組成と入らなかった組成を比較した(第346図)。

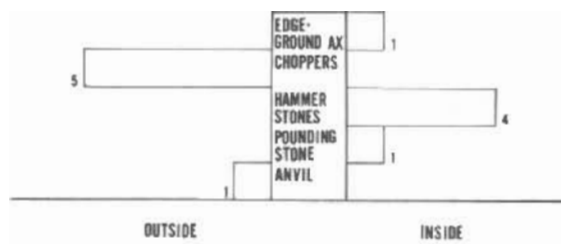
全石器類2,353点のうち、礫石周辺から出土したのは15.2%、合計351点、外空間から出土したのは84.8%、合計1,962点である。定型的石器、加工痕・使用痕有剥片と剥片、碎片、石核の組成比率は、両者ともほぼ遺跡全体での組成と同じで、内と外でほとんど差異はない。チャート等とサヌカイトに石材を区別して観察してみると、チャート等材の組成は内外一致するが、サヌカイト材の組成は内で剥片が多く石器が少なく、外では逆の傾向がある。定型的石器と加工痕・使用痕有剥片での組成を観察してみると、内でナイフ形石器がやや多く、搔器・削器が少ない傾向がある。他の石器類は点数が少ないため、遍在する。礫石器類のみを観察してみると、内に入ったのは敲石、磨石、局部磨製石斧であり、外では、礫器、台石が出土した。

ここでも、点数の多い器種ほど普遍傾向が窺え、礫石周辺と外と比べた結果は、多少の違いはあっても有意であるとの判断は難しく、また、ほとんどの器種で大差無いものであった。サヌカイトとチャート等に石材区分した結果も同様である。下位文化層全体での礫石周辺空間は、石器組成からみる限り、特別な機能を有する空間とは見なし難いことになる。ただ、この分析は遺跡全体での礫石周辺空間とその外に2分して観察した結果であって、局地的な配石・配石群・礫ブロックでの特異性が曖昧になっている可能性も考慮されよう。

第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布



第346図 配石・配石群・礫ブロックと石器分布  
(左、配石・配石群・礫ブロック周辺出土 右、周辺外出土)

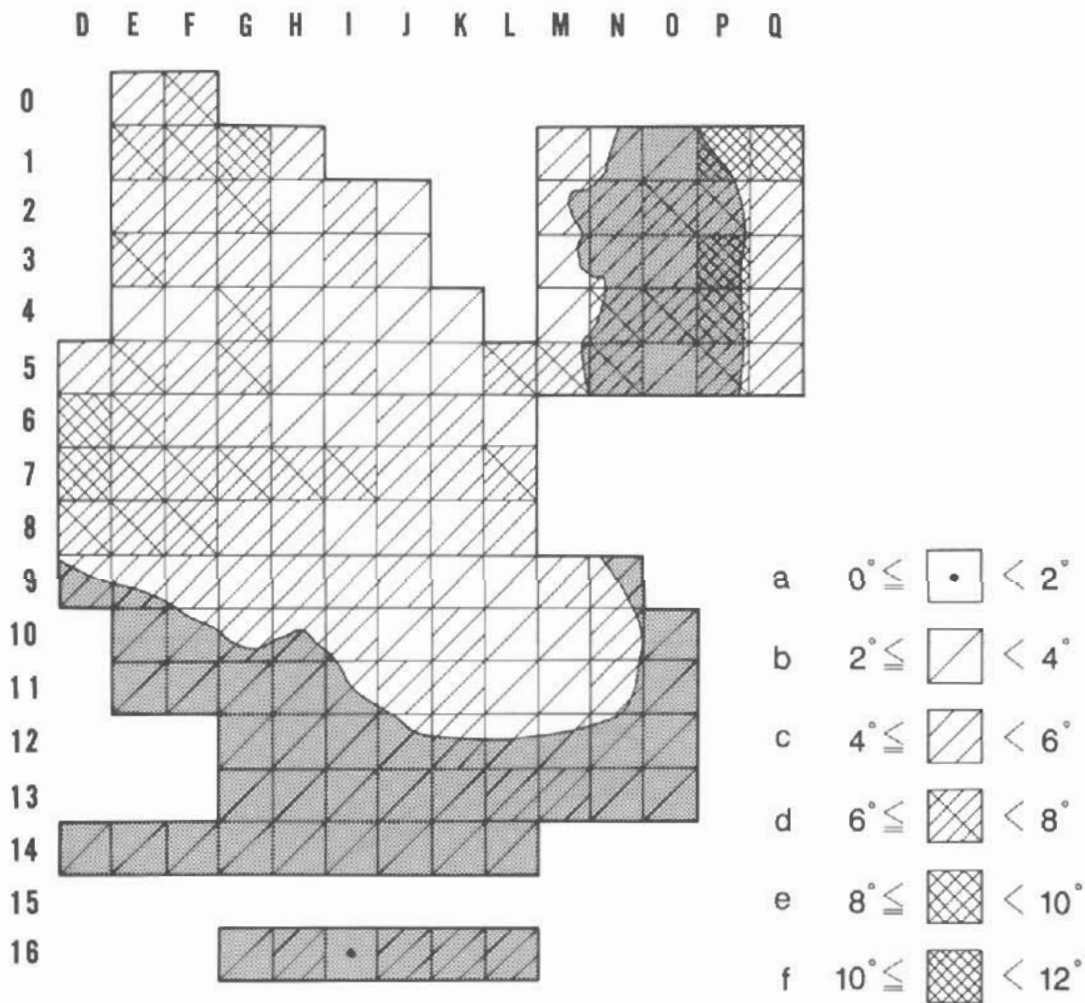


第347図 配石・配石群・礫ブロックと礫石器類分布

唯一有意である可能性のある違いが識別された礫石器類は、敲石と磨石、局部磨製石斧が内から、礫器・台石が外から発見された（第347図）。これらの出土位置が、礫石との関係で決定されたのかどうか、両者の機能的関係はどうかといった点については、簡単に断定はできない。ここでは、この事実のみを指摘するにとどめたい。（山口）

地形の傾きと遺構・遺物の分布

人間は、限られた条件のなかで、より良好な生活の場を選ぼうとする。例えば、住居を設営する時や個別作業を進める時には、なるべく平坦な場所を選ぶのが自然であろう。旧石器人の場合、彼らの経験的な知識からより良好な場所を選んでいたと考えられる。考古学的事実として把握される遺物の分布は、行為の集積であるとともに、当時の地表面の状態によっても大きく制約されていたと推測できる。地表面の状態とは、地表の傾き、湿度の高さ、樹木の繁茂等であり、これらは人間活動の展開に、程度の差はあれ制約を加えた要因であったことは間違いない。例えば、居住地の中央に伐採が不可能なほどの巨木があった場合、遺物分布は環状を呈する可能性があるが、これは人間活動の主体的な意図とは異なった形であろう。植物の繁茂や地表面の湿度は、現時点で推測することは困難な点が多いが、遺構・遺物の分布状況を解釈する上で、考慮すべき点ではあろう。板井寺ヶ谷遺跡下位文化層期の遺跡周辺の植生



第348図 地形の傾き

状況は、本報告書第VII章第3節で検討されているので、参照されたい。

青木和哉氏は、三田市溝口遺跡の遺物分布と遺跡内傾斜面の関係から、旧石器人の選地の基準を明らかにした(青木、85)。そこでは、溝口遺跡内での居住は、最も緩い傾斜の部分を選択して行なわれたことを明らかにしている。

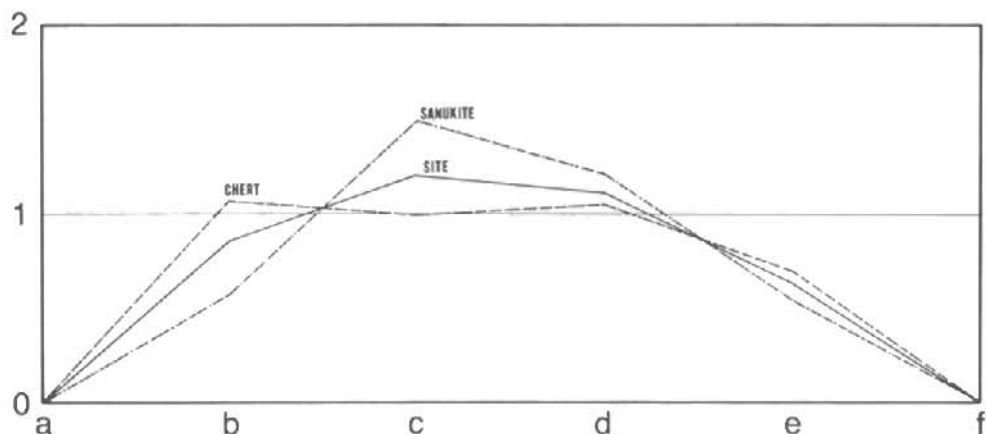
板井寺ヶ谷遺跡下位文化層では、地表面の傾斜角度が0～12度までの、緩やかな傾斜地が調査区内に広がっている。調査区内全域にまんべんなく石器類が分布しているわけではなく、集中するところとまったく存在しないところが認められた。これは、当時の人間が意図的に土地を使い分けていた様子を示しているものと考えられる。その生活の場として地表面をどの様に使い分けていたかを考えてみたい。ここでは、青木氏の方法に準じ、遺跡内の傾斜面と石器類の分布の関係から、当時の人間がどの傾斜面を生活の場としていたのかを明らかにしたい。

発掘調査範囲全域の152区画の傾斜角度0～12度までを2度毎にまとめ、0～2度未満をa、2～4度未満をb、4～6度未満をc、6～8度未満をd、8～10度未満をe、10～12度未満をfとする。これらの傾斜面は調査区内にaが0.6%、bが41.5%、cが36.2%、dが17.1%、eが3.3%、fが1.3%となり、傾斜角度2～8度がほとんどであることが知れる。それぞれの傾斜角度での調査区画毎の平均出土石器類数は、aで0点、bで13.1点、cで18.2点、dで17.0点、eで9.6点、fで0点である。

第349図は、各傾斜角度の調査区画全てから均等に出土した場合を1として、その傾斜角度での出土石器類数平均が多かったか、少なかったかを表したものである。石器類はc・dが遺跡平均を越えており、cに最も集中している。全石器類の分布は、総体として傾斜角度4～8度未満にやや偏って分布していると考えられよう。

ところで、遺跡内には1つ見逃せない条件がある。東と南に、湿地帯が存在することであり、ここからは石器類がほとんど出土しなかった。次に、湿地帯は生活の場として適当ではなかったとして除外して検討した。

発掘調査範囲から湿地帯を除いた98区画は、傾斜角度aが0%、bが29.6%、cが43.9%、dが20.4%、eが4.1%、fが2.0%の比率となる。それぞれの傾斜角度の区画の石器類出土数平均は、bが27.8点、cが23.0点、dが22.1点、eが12.0点、fが0点である。第350図に全傾斜角度での平均点数を1として比較すると、石器類が傾斜角度bに集中し、傾斜角度が急になるにしたがって点数が減少するという傾向を示した。



第349図 石器類の石材別分布状況(調査区全体)

下位文化層にサヌカイト製石器群とチャート等製石器群の2つの石器群が存在し、使用する石器群の異なった2つの集団が見出せる。次にこの2つの集団が、各傾斜面にどの様なあり方を示すのかを検討してみよう。サヌカイト製石器類の各傾斜角度からの平均出土数は、bが7.5点、cが11.7点、dが9.9点、eが4.3点、fが0点であり、チャート等製石器群では、bが20.3点、cが11.4点、dが12.2点、eが1.5点、fが0点である。それぞれの石器群を、それぞれの区画平均点数を1として比較してみると、サヌカイトはc・dで平均値を上回って、傾斜角度cに石器類が最も集中する。チャート等製石器群はbの傾斜角度に最も多く集中した。

これまでに湿地部を除外した部分での検討結果は、遺跡内に存在する最も緩やかな面、2～4度未満の傾斜面で主に生活していたことが窺える。また、サヌカイト製とチャート等製石器群では、チャート等製が緩やかな傾斜面、2～4度未満を主な生活の場とし、サヌカイト製石器群が次に緩やかな傾斜面、4～6度未満を主な生活面としていた状況が浮かび上がった。

次に、調査区域内の12の石器類ブロックは、どの様に傾斜面を使用していたのかを考察する。

まず、各石器類ブロックの各傾斜角度から出土した石器類の量的百分率をグラフに表した(第351図)。石器類ブロックは、3つの群に分けることができる。まず1つは、傾斜角度bから石器類を多く出土させている1群である。これには、石器類ブロックB+C 2・3、E a、E b、F、J a、Kで、傾斜角度が急になるほど石器類が減少している。次は、傾斜角度cから石器類が多く出土している1群である。石器類ブロックA、G、H、I、J bが該当する。石器類ブロックAは、傾斜角度bの領域がなく、GとH緩は、傾斜角度bが10%以下であり、ゆるやかな角度から急角度になるにしたがって点数が減少するのは、前群と同様の傾向である。特徴的なのは、石器類ブロックIとJ bで、傾斜角度bとcのほぼ50%を占めるが、石器類ブロックHは傾斜角度cから多く出土している。最後は、傾斜角度dから石器類が多く出土する石器類ブロックD+C 1・1 outが相当する。石器類ブロックD+C 1・1 outは、面積比で傾斜角度cが40%、dが50%、eが10%存在するが、石器類は傾斜角度dに84%が集中する。なお、各ブロックでサヌカイトを多くするブロックは、D+C 1・1 out、G、H、I、J a、J bで、チャート等を70%以上組成するブロックはA、B+C 2・3、E a、E b、F、Kである。

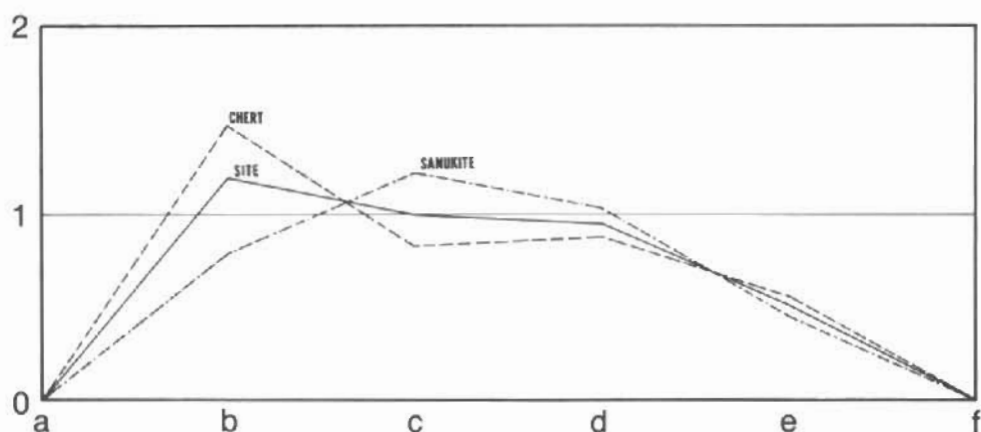
12の石器類ブロックを検討した結果、石器類ブロックA、B+C 2・3、E a、E b、F、G、H、J a、K内で存在する最も緩やかな傾斜面、2～4度未満または4～6度未満を生活の場としていたことが明らかになった。また、サヌカイトを多く組成する石器類ブロックI、J b、D+C 1・1 outは、さらに緩やかな傾斜角度が存在するにも関わらず、その面を避けてより急角度の傾斜面を生活の場としていた点が知られ、石器石材の差が、選地にも関係していた可能性がある。この石器類ブロック毎の選地の差は、その石器類ブロックの性格を考える上で、重要な側面であろう。第VI章第3節で、他の問題と併せて再論したい。

続いて、配石・配石群・礫ブロックなどを構成する礫石についても、遺物として考え、石器類と同じように傾斜角度との関係で検討してみよう(第352図)。

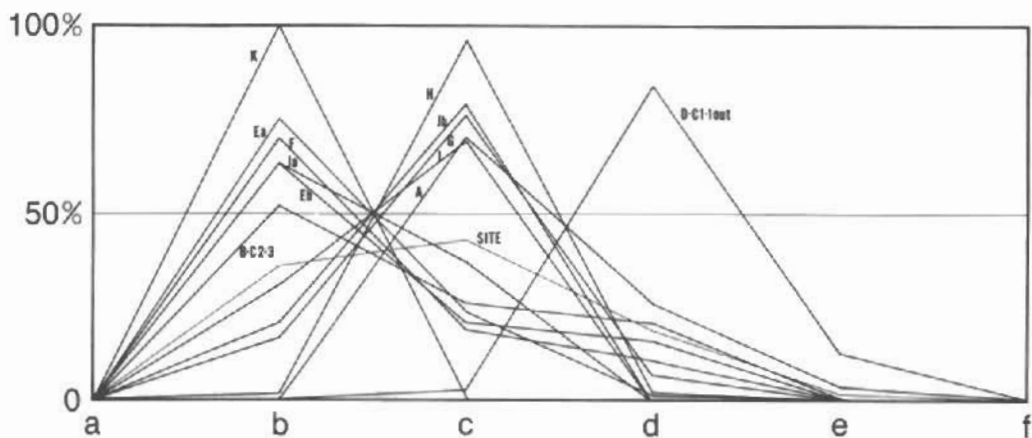
配石は、合計で16点あるが、傾斜角度b・cから44%づつ出土し、このうち傾斜角度bの半数が泥炭面中からの出土であるので、陸地部での配石は、傾斜角度cが主体であることが知れる。配石群を構成する礫石は、合計31点あるが、このうち67%が傾斜角度dから出土し、次いでc・b・eの順となる。礫ブロックの構成礫石合計65点は、傾斜角度cから60%が出土し、次いでb・dの順となる。

以上から、配石・礫ブロックは4～6度未満、配石群は、6～8度未満の傾斜面に主として存在し、

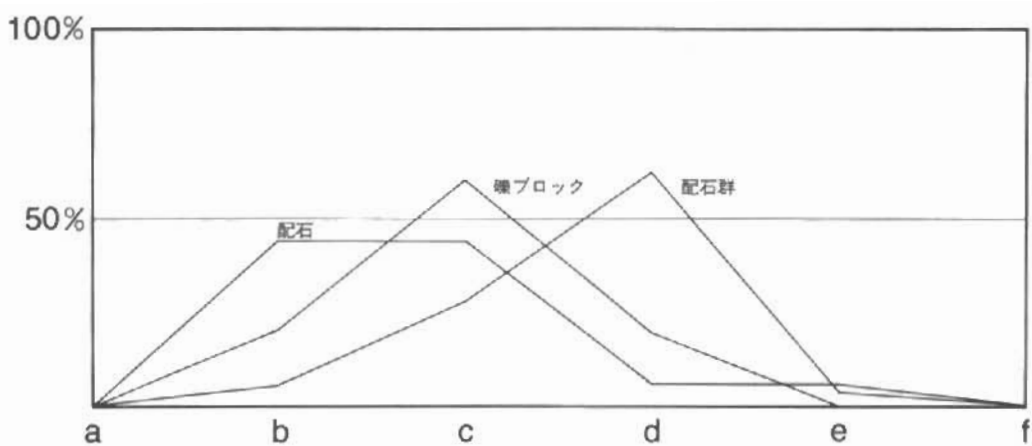
第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布



第350図 石器類の石材別分布状況（主分布域）



第351図 石器類のブロック別分布状況



第352図 礫石の分布状況

比較的急な斜面に配置されていることが理解された。

板井寺ヶ谷遺跡下位文化層は、生活の場として不適当な泥炭面を除けば、2～10度未満の非常に起伏の乏しい傾斜地に位置している。しかし、各傾斜角度と石器類・礫石類の出土状況から考察すると、予想外に明瞭な差異が存在することが明らかになった。

まず、石器類を使用する生活の場としては、遺跡内の僅かな起伏のなかで、全体としてできるだけ緩い傾斜角度を選択する。サヌカイト製とチャート等製の2群に分けた場合、チャート等製石器群は、比較的急な傾斜角度の多い北半に分布の中心があるにも関わらず、2～4度未満を中心とする。一方、サヌカイト製石器群は、傾斜の緩やかな南半に多いにも関わらず、4～6度未満に多く認められた。この両石材の状況には、各石器類ブロック内での状況が反映しているものと考えられる。南のサヌカイト製石器群主体のIとJbブロックでは、傾斜角度aよりもbに生活の場が選ばれている。また、石器類ブロックD+C 1・1 outには急傾斜が多く、生活の場としては遺跡内で最も条件の悪い石器類ブロックである。ここでも、より急な傾斜角度の場所を生活の場を選択している。北半のチャート等製石器群主体の部分で出土するサヌカイト製石器類も、やや急傾斜の場所を選択する傾向がある。サヌカイト製が南半に、チャート等製石器群が北半に集中するという大局的傾向に併せて、個々の石器類ブロックでの石材別の傾向が、遺跡全体での両石器群の分布傾向を決定していると考えられる。この様な石材別の相違点は、それ自体を直接意図して選地した結果であるのか、または別の要因によって選択を強いられたのかを決するのは、考古学的操作のみでは困難がある。ここでは、両石材の選地の違いがあることのみを明らかにしておく。

配石・配石群・礫ブロックについては、石器類の分布よりも急な傾斜角度、4～6度未満あるいは6～8度未満を中心として配置されている。特に配石群は、石器類ブロックの中心部からはなれ、日常的な生活の場である傾斜角度2～4度未満、4～6度未満よりも急な傾斜面を選択している様子を顕在化させており、石器類を多用する日常的な生活の場とは異なった、礫石のみを使用する非日常的な生活の場としての機能を有していた可能性も考えられようが、空間的機能の解釈は、機会を改めて検討したい。

以上、板井寺ヶ谷遺跡下位文化層では、限られた空間のなかで、僅かの傾斜角度の変化に敏感に反応し、より緩やかな傾斜面で石器類を多用する生活空間を配し、礫石の分布と異なった傾向を示させたのは、興味深い事実である。石材別の2つの石器群での空間利用の差異と共に、空間機能の意識的配置の一端を明らかにするものであろう。

(細川)

#### 受熱石器の分布

下位文化層で出土した石器類の内、僅かではあるが受熱した可能性のあるものが存在する。下位文化層には、炭化物密集部を除けば明瞭な遺構として「火処」は検出できなかったが、受熱剥片の分布や存在が、「火処」の存在を間接的に証明する可能性が、山下によって指摘されている(山下, 88)。ここでは、受熱した石器類の内容と分布の状況について記述を行ないたい。

山下によれば、サヌカイト製石器は、本来の状況では非常に均質で、個々の特徴に乏しい。受熱した際には、細かいひび割れが石材に生じ、埋没後の風化進展によって、このひび割れが健在化するとされている。チャート等では、一般に変化は乏しいとされるが、表面に濁りやくすみ、火はね状の破壊が起こるとされている。受熱・非受熱の判別基準は、この特徴を認めるものを抽出することとし、砕片を除くすべての石器類に対して行なった。

第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布

下位文化層からは、受熱したと考えられる石器類が原位置を保って47点出土した。総点数が2,353点であるので、約2%となる。他に6点が遊離した状態で発掘されている。現実には、小さすぎる碎片は受熱・非受熱の観察が十分に行えていないので、本来の点数はもう少し多いと考えてよい。

全体の組成は、削器2点、4.2%、加工痕有剥片1点、2.1%、使用痕有剥片1点、2.1%、剥片36点、76.6%、石核7点、14.8%となる。サヌカイト製は、削器2点、加工痕有剥片1点、剥片15点、石核2点の合計20点からなる。チャート等製では、使用痕有剥片1点、剥片21点、石核5点の合計27点がある。別に、チャート等製の使用痕有剥片1点、剥片5点が遊離して発掘されている。全体として、受熱石器類には剥片が多く、定型的石器・加工痕・使用痕有剥片に乏しいといえよう。

受熱石器類の出土した石器類ブロックを観察していこう（第38表）。

石器類ブロックAでは、A1から4点、A2から2点、A3から3点の合計9点、B+C2・3では、B1から5点、B2から3点、C3から1点の合計9点、D+C1・1outからはD1から1点、C1から1点の合計2点、Eaでは、Ea1から3点、Ea2から1点の合計4点、Ebでは、Eb2から4点、Eb3から2点の合計6点、Fでは、F1から4点、F2から2点の合計6点、Gでは、G1から1点、G3から1点の合計2点、Hでは、H1から3点、Iでは、I2から1点、Jaでは、Ja2から1点、Ja3から2点の合計3点、Jbでは、Jb1から1点、Jb2から1点の合計2点が出土している。Kからは受熱石器類は発見されていない。

量的な問題を別にすれば、どの石器類ブロックからも受熱石器類が出土している。受熱石器の内容は剥片主体で定型的石器を欠く。剥片剥離の際の調整剥片など、受熱石器類の主体である剥片が残された後に、人為的に移動する可能性は定型的石器よりも少ないと考えられるので、石器類は、各石器類ブロック毎に一定の可能性で、受熱する機会があったと考えられよう。受熱の機会の存在は、各ブロックでの「火」の使用の存在を示している。

各石器類ブロック毎の火処が、どの様に設定されていたかは分からないが、基本的には、まとまった点数の受熱石器類が複数の小ブロックに認められる場合、単独の小ブロックに限定されて分布する場合があることから、ブロックによっては単独の火処、複数の火処が設営されたと考えておきたい。

(山口)

第38表 受熱石器類一覧表

小ブロック	チャート等	サヌカイト
A1	F1.89(F)F2.176(F)F1.16(F)	F1.32(SC)
A2	F2.146(F)	E2.26(F)
A3	F3.9(F)F3.14(F)F3.26(CORE)	
B1	E4.103(F)F4.127(F)F4.49(F)	F4.40(F)F4.75(F)
B2	E4.96(F)E5.10(CORE)	E4.26(F)
C1		F7.96(F)
C3		E6.32(F)
D1		E8.20(F)
Ea1	I3.38(F)	I3.23(SC)I3.31(F)
Ea2		H4.3(F)
Eb2	J5.55(F)J4.3(F)K5.16(CORE)	J5.25(CORE)
Eb3	L6.25(UF)	L6.4(CORE)
F1	H6.93(CORE)H6.97(F)H6.159(F)	
F2	H6.202(F)	
G1	G6.48(CORE)G6.30(F)	
G3		J7.17(F)
H1	H9.5(F)	
I2		H6.53(F)K7.45(F)K7.75(F)
Ja2	L10.29(F)	L8.6(RF)
Ja3	L11.25(F)M11.16(F)	
Jb1		I11.12(F)
Jb2		K11.67(F)



## d, 石器類の重量組成と分布

礫石器類を除いた石器類は、下位文化層から合計2,316点が発見されている。その数量組成・分布の状況は、さきに検討した。ここでは、遺物の基本的な属性で有りながらも十分な検討のなされることの無い重量に着目して、検討を進めたい。

下位文化層の石器類は合計2,316点が出土した。総重量は18,038.5gである(第39表)。石器類を石器・剥片・碎片・石核に類別した点数百分率は石器19%、剥片58%、碎片18%、石核6%である。重量百分率(第286図・第287図)は、石器約20%、剥片35%、碎片わずか、石核45%となる。点数百分率では、剥片と碎片的点数比率が高く、石核比率が低かったことを考えると、石核の平均重量がきわめて重く、碎片が軽いことが窺えよう。石核の重量比率は、点数比率の7.5倍にもなっており、他器種と比べて石核が大きいことの証明となる。

総点数2,316点、全石材の重量18,038.5gを、下位文化層の主要な石材であるサヌカイトとチャート等に2分すると、サヌカイトが点数で976点、42%、重量で3,687.74g、20%、チャート等が点数で1,340点、58%、重量で14,350.76g、80%となる。サヌカイトとチャート等の石材とを比較した場合、点数の上では2:3と拮抗した形になるが、重量では1:4となり、重量差では大きいものがあることが知れる。サヌカイトの1点当たりの平均重量は、チャート等の約3分の1である。

サヌカイトでの石器・剥片・碎片・石核の重量百分率は、石器が36%、剥片40%、碎片1%以下、石核23%となる。チャート等では、石器16%、剥片34%、碎片1%以下、石核49%となる。サヌカイトでは、石器の重量比率が高く、石核の比率が低いが、チャート等では、逆に石器の重量比率が低く、石核の比率が高いことが知れる。剥片は、40%に対し34%で、大差はない。

石器の点数比率と重量比率を見てみると、総点数364点、総重量3,557.1gのうち、サヌカイトが点数で50%、重量で37%、チャート等が点数で50%、重量で63%となる。サヌカイトとチャート等の2つの石材は、点数の上では50%と拮抗するが、1点当たりの重量ではチャート等が約1.5倍の重量を有する。サヌカイトがチャート等の石器群と比べて軽量であるという表現も可能であろう。

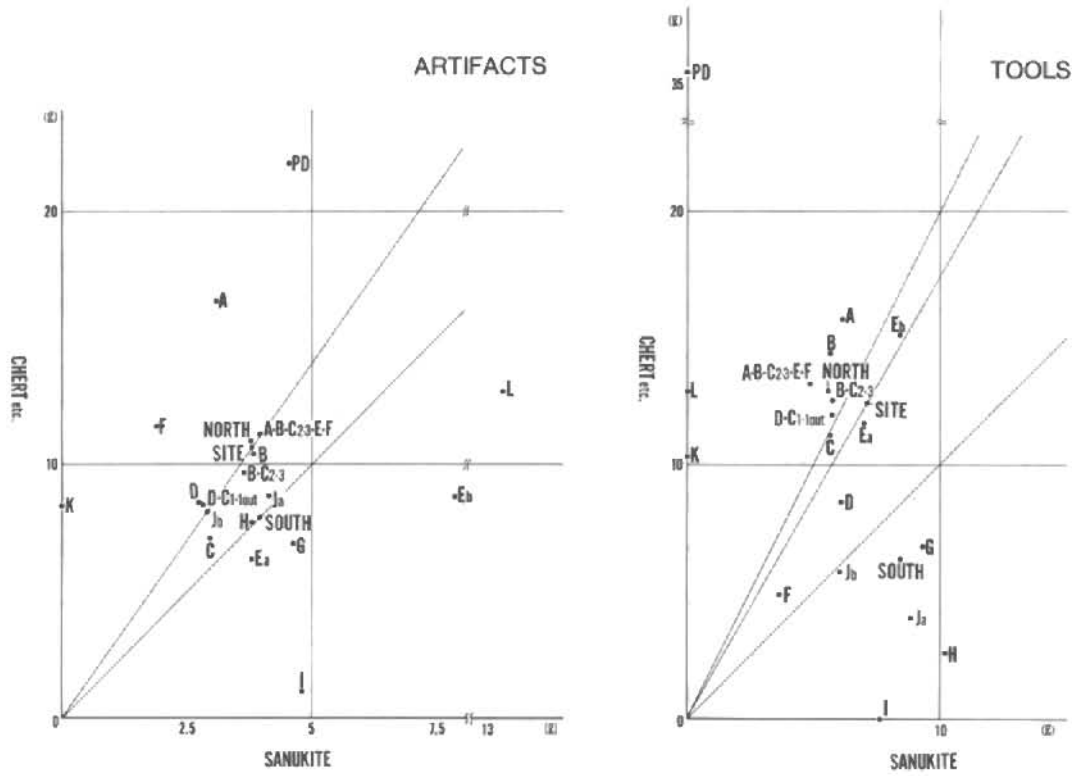
剥片の点数比率と重量比率を見てみると、総点数1,376点、総重量6,282.1gのうち、サヌカイトが点数で40%、重量で23%、チャート等が点数で60%、重量で77%となる。サヌカイトとチャート等の石材は、点数と重量比で遺跡全体での石材組成に近い比率を示す。最も点数的に多い器種であり、遺跡一般の比率に近いのも当然である。1点当たりの重量ではチャート等が約2倍の重量を有する。

碎片には特徴・差別化する根拠に乏しいため、省略する。

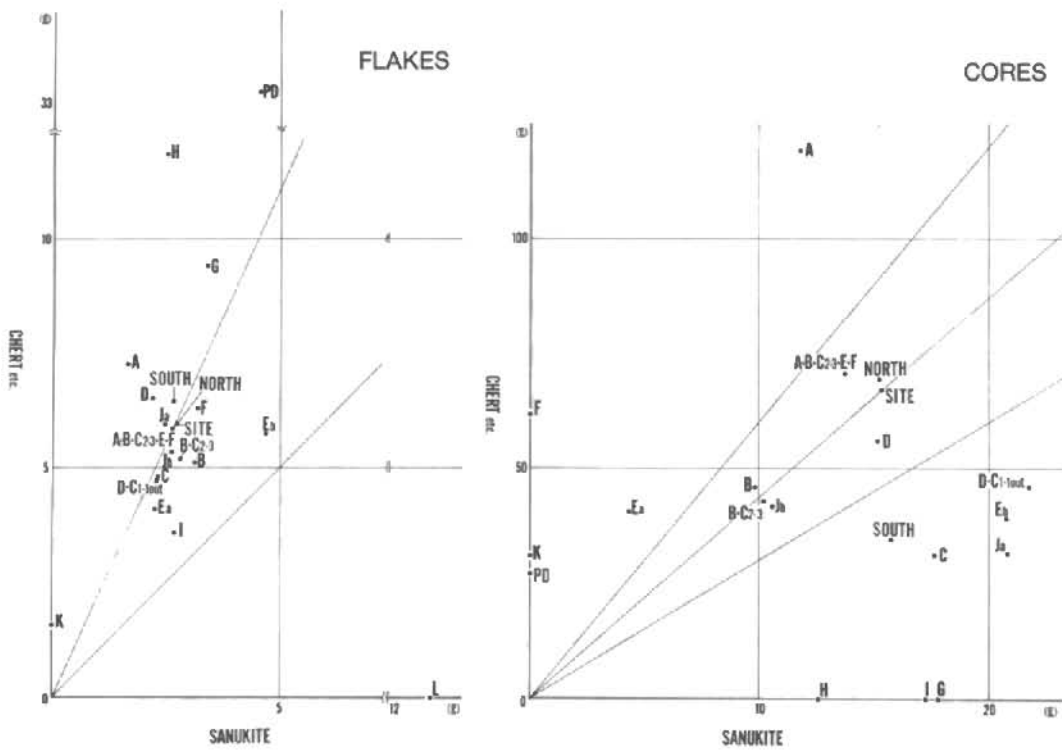
石核の点数比率と重量比率を見てみると、総点数160点、総重量7,948.3gのうち、サヌカイトが点数で35%、重量で11%、チャート等が点数で65%、重量で89%となる。サヌカイトとチャート等の石材は、サヌカイトの点数が全石器類組成よりもやや減少しているだけだったのに対し、重量比では僅かに11%と、約3分の1に減少する。1点当たりの重量ではチャート等が約4.4倍の重量を有する。逆に表現すれば、サヌカイト製石核がきわめて軽いということになろう。

サヌカイト製石器群とチャート等製石器群は、点数の上では2:3の割合で組成している。ところが、いったん重量に目を転じると両者の組成比は1:4となる。1点当たりの平均重量では、チャート等がサヌカイトの約3倍の平均重量を持つ。両石材の石器群がどのような背景を持っているかという問題と密接に関わっている部分であり、慎重に解釈しなければいけないが、ここには、サヌカイトとチャート等の供給状況が反映しているように考えることができよう。

第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布



第353図 ブロック別出土石器類重量平均グラフ 1



第354図 ブロック別出土石器類重量平均グラフ 2

第IV章第1節で記述したように、サヌカイトは、瀬戸内地域の原石産地からの搬入石材であるのに対し、チャート等の石材のほとんどが遺跡のある丹波産地内で在地石材として入手可能と考えられる。チャート等の石材が大量に出土するのは、入手の容易な在地石材であったからと考えるのが妥当である。個体別資料の内容、剥片剥離技術工程の遺存状況は、すべての工程を含み、活発な石器生産が行なわれたことを示している。石核の重量比、1点当たりの平均重量は、搬入された石材の多さと大きさを示す。対してサヌカイトは、遠距離の搬入材であり、どの様な過程を経たかが問題であるが、量的に小数に留まる背景は、入手に困難があった結果であると想定することは難しくない。石器類の組成や剥片剥離技術工程の遺存状況を観察すれば、遺跡内での一貫した石器生産を想定するには、欠落した部分が認められ、無理がある。

サヌカイトとチャート等の2つの石器群は、供給源が異なり、石材の消費状況も大きく異なることが判明した。特に顕著なのが石核と剥片の量と大きさであり、下位文化層全体としてのチャート等製石核は、大型のまま放棄されるのに対し、サヌカイト石核はきわめて縮小するまで使用されるか、もともとの石核が小さいという傾向が知れる。サヌカイトの剥片は、1点当たりの平均重量で石核との差異に乏しいものが含まれる。このような状況でありながら、石器の点数が50%で拮抗するのは、道具として使用される石器に不足をきたす訳にはいかなかったからであり、またたとえチャート等と比べて個々の石器が軽量化しても数量確保を意図していたからであろう。

全体として、チャート等の石材の石器生産は、サヌカイトと比べて石材の「浪費」的様相が感じられるのに対し、サヌカイトの石器生産は、チャート等と比較して僅かの石材で必要な石器を賄うという「儉約」的様相がある。ただ、チャート等の石材のこの対比は、板井寺ヶ谷遺跡下位文化層の石器群の観察に限定して認められる。一般的に旧石器時代遺跡の石器類組成・石器生産工程の遺存状況と比較するならば、チャート等の石材は在地のものであり、この様相は当然である。むしろ、サヌカイト側の石器生産工程や石器類組成の欠落の方が特異であり、この点は、板井寺ヶ谷遺跡内での情報のみで解釈するべきではなく、原石産地から遺跡内に搬入される経緯を考慮し、広い範囲で考察することが必要である。

サヌカイトとチャート等の石材と石器生産との関係については、第VI章第3節で、再度検討したい。次に、ブロック毎の石器類重量百分率を見てみよう（第354図・第356図）。

全石器類の重量分布は、石器類ブロックAに32%が集中し、ずば抜けて多い。以下、B+C 2・3の18%、E b、Fの10%となり、E aの7%、D+C 1・1 out・J aの5%、G、H、J bの3%、Iの1%以下となる。K・Lは点数・重量がきわめて僅かである。点数比率と比較すれば、Aの重量比率が点数に比べ増大したほか、大差はないことが読み取れよう。

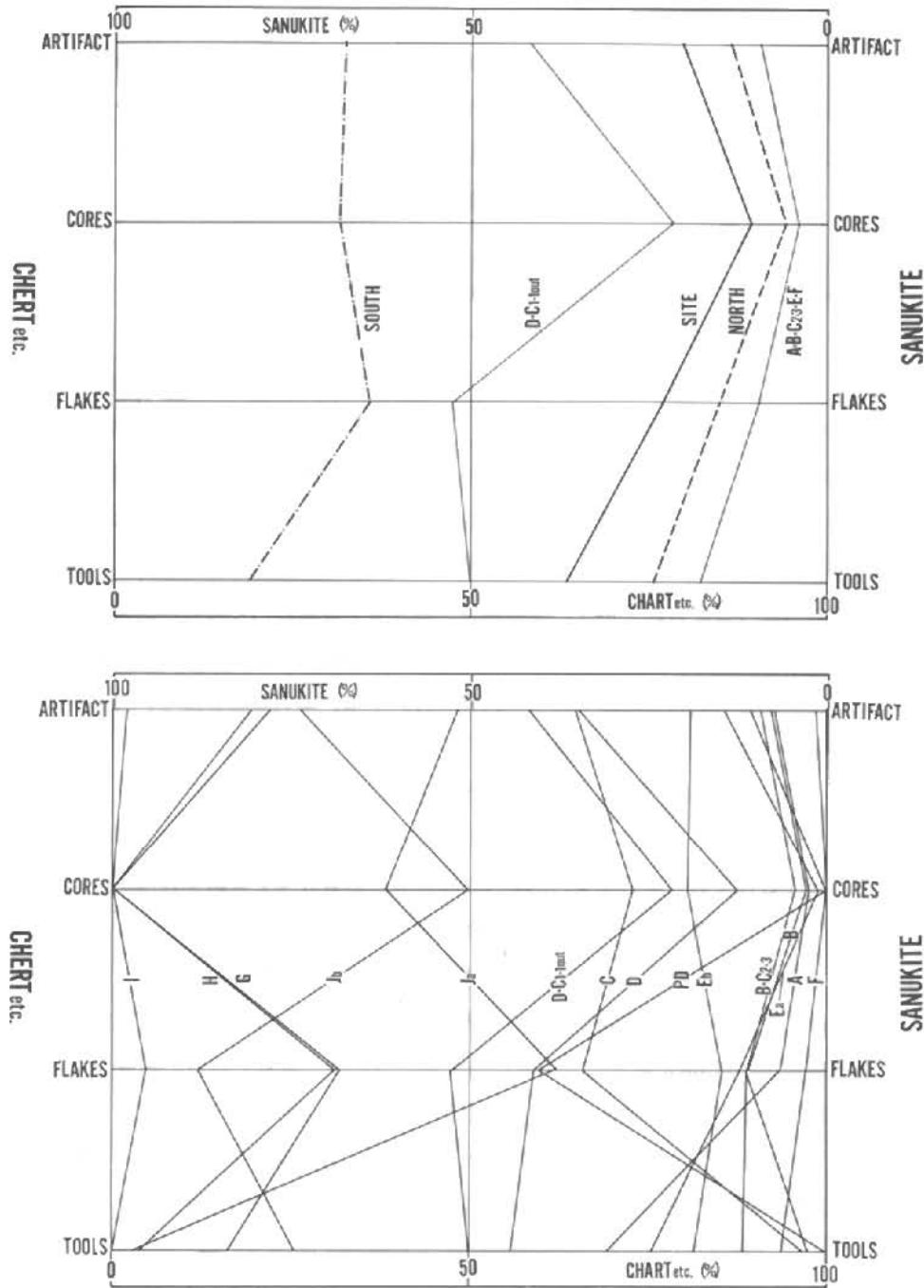
チャート等とサヌカイトに石材を2分して観察してみると、チャート等ではG、H、I、J bの重量組成比率が減少する一方、やはり石器類ブロックAの重量比率が高く38%を占める。点数比率と比較すると、Aの点数比率24%が1.5倍に拡大していることが知れるほか、重量と点数の組成比率には大差ない。サヌカイトでは、逆に重量比率でAとFが減少したのに対しD+C 1・1 out、G、H、I、J a、J bで増加している。石器類の多いチャート等の石材によって大勢が決められていることが知れる。第353図左は、各石材毎の石器類ブロック組成比率を縦軸にチャート等、横軸にサヌカイトを割り付けたものである。

第353図右・第354図に、ブロック毎に全石器類・石器・剥片・石核のサヌカイトとチャート等石材重量占有率をグラフ化する。基本的には、先のグラフの様に、サヌカイトの比率が約50%を境にして、I、

第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布

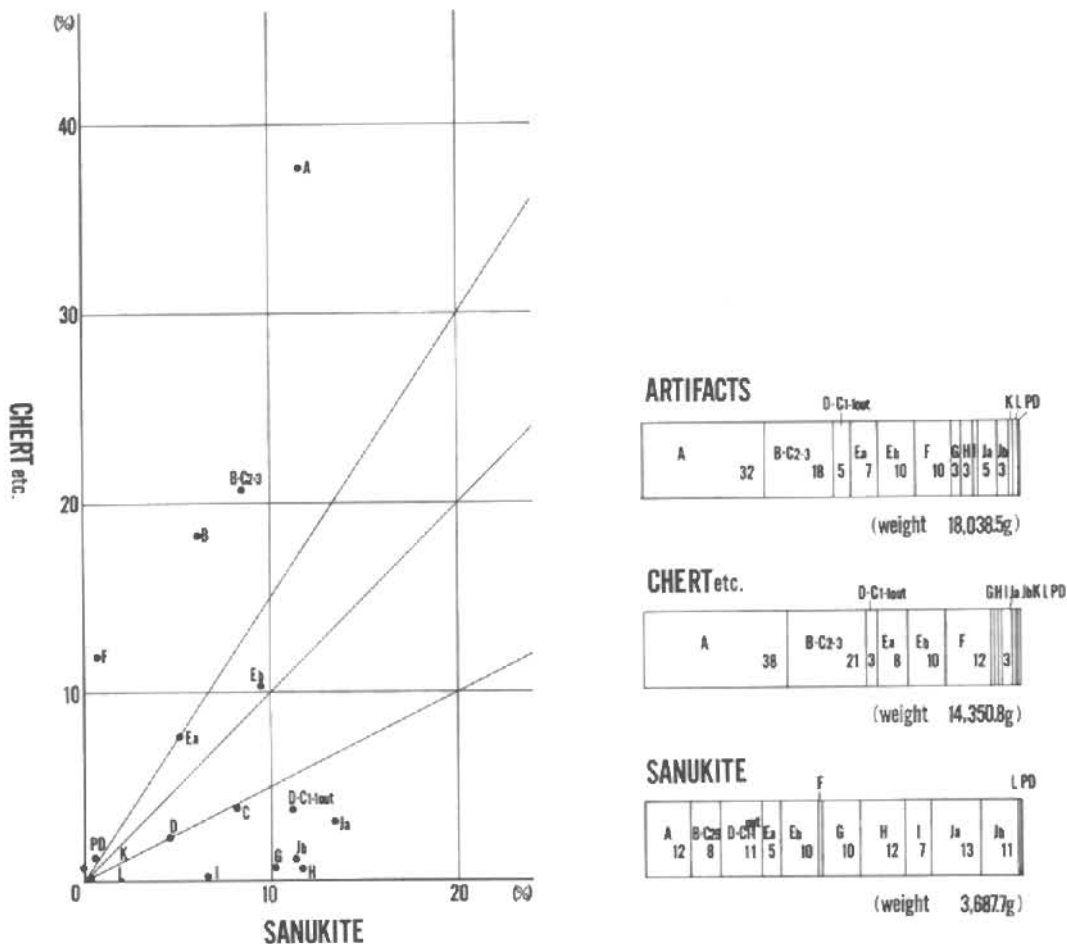
H、G、Jb、JaとF、A、Ea、B、B+C2・3、Eb、D、C、D+C1・1 outの2群に分離される。ここでは、DとD+C1・1 outがチャート側に近いサヌカイト重量比35%前後を示す。下位文化層の全石器群、南北、A、B+C2・3、E、F、D+C1・1 outで観察すると、サヌカイトの重量比は20%が標準値であることが知れよう。石材重量の上では、下位文化層全体を、南群、D+C1・1 out、A・B・C2・3・E・Fの3つに区別することが容易であろう。

石器群全体の傾向と比較して、個々の器種はブロック毎にどのような重量分布を示すのだろうか(第355図)。サヌカイトとチャート等で、重量比の大きな差を持つ石核は、全組成と比べて久しくチャート等石



第355図 石器類器種石材別重量占有率グラフ

材側が突出する。このような特徴を示すものとしては、F、A、E a、B、B+C 2・3、D、C、D+C 1・1 out・J bがある。I、H、G、J a、E bは逆にサヌカイト製石核が突出する。石器類は、一般に全組成傾向よりもサヌカイト製が多い重量比を占める。遺跡全体として窺えた石材の供給・消費の違いが現われているといえよう。(山口)



第356図 ブロック別石器類重量占有率グラフ

第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布

第39表 下位文化層石器類重量分布表

全石器類のブロック間重量分布																		
SITE	A	B	C	D	Ea	Eb	F	G	H	I	Ja	Jb	K	L	PD	B+C+3D+Cl+out		
WEIGHT(g)	18038.5	5842.12	2858.94	860.25	494.3	1300.95	1823.35	1735.2	478.56	530.2	249.33	955.15	556.5	109.2	26.2	214.75	3291.56	925.53
/100	100.0%	32.4%	15.8%	4.8%	2.7%	7.2%	10.1%	9.6%	2.7%	2.9%	1.4%	5.3%	3.1%	.6%	.1%	1.2%	18.2%	5.1%
サヌカイト製石器類のブロック間重量分布																		
SITE	A	B	C	D	Ea	Eb	F	G	H	I	Ja	Jb	K	L	PD	B+C+3D+Cl+out		
WEIGHT(g)	3687.74	433.36	224.51	302.73	171.25	187	352.3	26.6	375.16	429.1	244.93	493.75	411.15	0	13.3	22.6	310.52	387.97
/100	100.0%	11.8%	6.1%	8.2%	4.6%	5.1%	9.6%	.7%	10.2%	11.6%	6.6%	13.4%	11.1%	.0%	.4%	.6%	8.4%	10.5%
チャート等製石器類のブロック間重量分布																		
SITE	A	B	C	D	Ea	Eb	F	G	H	I	Ja	Jb	K	L	PD	B+C+3D+Cl+out		
WEIGHT(g)	14350.8	5408.76	2634.43	557.52	323.05	1113.95	1471.05	1708.6	103.4	101.1	4.3	461.4	145.35	109.2	12.9	192.15	2981.04	537.56
/100	100.0%	37.7%	18.4%	3.9%	2.3%	7.8%	10.3%	11.9%	.7%	.7%	.0%	3.2%	1.0%	.8%	.1%	1.3%	20.8%	3.7%
全石器のブロック間重量分布																		
SITE	A	B	C	D	Ea	Eb	F	G	H	I	Ja	Jb	K	L	PD	B+C+3D+Cl+out		
WEIGHT(g)	3557.1	732.5	687.4	258.2	152.3	478.7	446	57.7	167	137.9	99.6	136.3	113.5	51.6	12.9	35.5	786.5	287.5
/100	100.0%	20.6%	19.3%	7.3%	4.3%	13.5%	12.5%	1.6%	4.7%	3.9%	2.8%	3.8%	3.2%	1.5%	.4%	1.0%	22.1%	8.1%
サヌカイト製石器のブロック間重量分布																		
SITE	A	B	C	D	Ea	Eb	F	G	H	I	Ja	Jb	K	L	PD	B+C+3D+Cl+out		
WEIGHT(g)	1299.1	227.4	95.7	113.2	67.2	119	84.1	3.7	139.8	132.6	99.6	132.3	84.5	0	0	0	132.3	143.8
/100	100.0%	17.5%	7.4%	8.7%	5.2%	9.2%	6.5%	.3%	10.8%	10.2%	7.7%	10.2%	6.5%	.0%	.0%	.0%	10.2%	11.1%
チャート等製石器のブロック間重量分布																		
SITE	A	B	C	D	Ea	Eb	F	G	H	I	Ja	Jb	K	L	PD	B+C+3D+Cl+out		
WEIGHT(g)	2258	505.1	591.7	145	85.1	359.7	361.9	54	27.2	5.3	0	4	29	51.6	12.9	35.5	654.2	143.7
/100	100.0%	22.4%	26.2%	6.4%	3.8%	15.9%	16.0%	2.4%	1.2%	.2%	.0%	.2%	1.3%	2.3%	.6%	1.6%	29.0%	6.4%
全切片のブロック間重量分布																		
SITE	A	B	C	D	Ea	Eb	F	G	H	I	Ja	Jb	K	L	PD	B+C+3D+Cl+out		
WEIGHT(g)	6282.1	1526.3	889.2	336.7	209.9	524.1	690.1	747	237.6	302.1	79.1	389.6	270.3	11	13.3	55.8	1104.6	331.2
/100	100.0%	24.3%	14.2%	5.4%	3.3%	8.3%	11.0%	11.9%	3.8%	4.8%	1.3%	6.2%	4.3%	.2%	.2%	.9%	17.6%	5.3%
サヌカイト製切片のブロック間重量分布																		
SITE	A	B	C	D	Ea	Eb	F	G	H	I	Ja	Jb	K	L	PD	B+C+3D+Cl+out		
WEIGHT(g)	1459.2	104.3	98.5	115	86.1	63.1	103.4	22.3	162.2	207.3	75.5	147.4	238.2	0	13.3	22.6	125.4	174.2
/100	100.0%	7.1%	6.8%	7.9%	5.9%	4.3%	7.1%	1.5%	11.1%	14.2%	5.2%	10.1%	16.3%	.0%	.9%	1.5%	8.6%	11.9%
チャート等製切片のブロック間重量分布																		
SITE	A	B	C	D	Ea	Eb	F	G	H	I	Ja	Jb	K	L	PD	B+C+3D+Cl+out		
WEIGHT(g)	4822.9	1422	790.7	221.7	123.8	461	586.7	724.7	75.4	94.8	3.6	242.2	32.1	11	0	33.2	979.2	157
/100	100.0%	29.5%	16.4%	4.6%	2.6%	9.6%	12.2%	15.0%	1.6%	2.0%	.1%	5.0%	.7%	2%	0%	.7%	20.3%	3.3%
全石核のブロック間重量分布																		
SITE	A	B	C	D	Ea	Eb	F	G	H	I	Ja	Jb	K	L	PD	B+C+3D+Cl+out		
WEIGHT(g)	7848.3	3784.4	1039.4	258.2	127.6	287.6	634.9	926.3	71.1	87.8	69	336.7	167.4	30.6	0	27	1128	297.2
/100	100.0%	48.2%	13.2%	3.3%	1.6%	3.7%	8.1%	11.8%	.9%	1.1%	.9%	4.3%	2.1%	.4%	.0%	.3%	14.4%	3.8%
サヌカイト製石核のブロック間重量分布																		
SITE	A	B	C	D	Ea	Eb	F	G	H	I	Ja	Jb	K	L	PD	B+C+3D+Cl+out		
WEIGHT(g)	859.8	94.9	29.5	70.6	15.6	4.3	124.7	0	71.1	87.8	69	208.1	84.2	0	0	0	50.9	64.8
/100	100.0%	11.0%	3.4%	8.2%	1.8%	.5%	14.5%	.0%	8.3%	10.2%	8.0%	24.2%	9.8%	.0%	.0%	.0%	5.9%	7.5%
チャート等製石核のブロック間重量分布																		
SITE	A	B	C	D	Ea	Eb	F	G	H	I	Ja	Jb	K	L	PD	B+C+3D+Cl+out		
WEIGHT(g)	6988.5	3689.5	1009.9	187.6	112	283.6	510.2	926.3	0	0	0	128.6	83.2	30.6	0	27	1077.1	232.4
/100	100.0%	52.8%	14.5%	2.7%	1.6%	4.1%	7.3%	13.3%	.0%	.0%	.0%	1.8%	1.2%	.4%	0%	.4%	15.4%	3.3%

## 3. 石器分布における器種間分布関係

## a. 分析の目的

板井寺ヶ谷遺跡下位文化層のナイフ形石器・搔器・削器等の定型的石器、加工痕・使用痕有剥片石器の分布は、先に見てきたようにそれぞれ異なった分布状況を示す。この石器の位置は、製作された場所、使用された場所、保管された場所、廃棄された場所などのうちのいくつかを経てたどり着いた最終的な、または途中の場所であると考えることができる。寿命を貫徹した石器は廃棄の状態で遺跡に残されるし、使用中途で忘れられた石器は使用した状況のまま遺棄されて残される。このような個々の石器の色々な状況が複合して、下位文化層の石器群の出土位置が形成されたのであろう。つまり石器の出土位置を、その石器の製作から遺棄・廃棄にいたるサイクルの中に位置付ける作業が必要となってくる。また、石器類がどの様な状況で、その機能を発揮したのかを検討しなければならない。

この問題に対して、使用痕分析や石器の破砕実験などで迫ろうとする動きがある(阿子島、89他)。また、ブロック単位での石器の組成や接合関係に含まれる石器を比較検討するのは、旧石器時代遺跡の調査の一般的な一つの方法となっている。

板井寺ヶ谷遺跡下位文化層の分析では、石器個々の機能の問題について、特に使用痕分析など有効な手段を持つことができなかった。ただ、石器の位置がその果たした機能を反映するかも知れないという仮説のもとに、個々の石器が他の石器とどの様な位置関係で出土するかを検討し、定型的石器と加工痕・使用痕有剥片が、遺跡内空間でどの様な分布構造を持つかを明らかにする作業を行なった。

石器は、遺跡内に配置された個々の作業空間でそれぞれの機能に応じた使用がなされたと考えられる。一つの作業空間では、一つの作業が行なわれる際にいくつかの石器器種が必要になり、使用される。このような場合を言い替えると、複数の石器が同じ場所で、一連の作業を仲介として使用されたことになる。また、同一の個体から複数器種の石器が生産されたまま、その場所に残されても、石器生産者の意識として石器をつくり分けようとした際には、それらの石器を使っての一連の作業が考えられていたかも知れない。同一場所に廃棄される場合は、同時に同一の場所で使用されていたり、同一の保持者の所産である可能性が考えられよう。発見される位置関係の近い石器は、なんらかの機能的関係があったと推定することができる。

近くから発見される石器ほど関係があるという仮説から、どの器種とどの器種がどれだけ近い関係にあるのかを示す統計学的方法を設定として、板井寺ヶ谷遺跡下位文化層の定型的石器・加工痕有剥片・使用痕有剥片・礫石器類のすべての位置関係を分析し、その近遠関係を示すことにした。

近年、欧米では、旧石器時代の石器類分布などの分布状況の分析手段として、統計学的方法が多用されるようになってきている。遺物の遠近関係を示す手段として、既に2・3の方法が日本にも紹介されている。多種類の遺物の分布構造を数値化する方法は、オルトンによって紹介されている。オルトンの行なった方法は、一つの器種の周辺に一定の半径の円を描き、その中に入った他の器種の合計点数を求め、その器種間での共伴確率と本来あるべき確率とを比較するというものである。この方法は、簡単に応用範囲も広いので、ここでは、基本的方法をオルトンに従い、この手順に多少の改変を行ないつつ分析を進める。(Orton, 85)

まず、分析の方法を記述し、統計学的手法を明らかにする。その後下位文化層全体での全石器の分布構造を検討し、下位文化層での石器分布の一般的構造を提示する。続いて、下位文化層の2つの石材群、サヌカイトとチャート等を分離して、石器石材ごとの分布構造を検討する。さらに、ブロック

群が南北に分かれるので、遺跡を南北に2分して、南北での分布構造差を検討する。次に、下位文化層全体でのサヌカイト製・チャート等製石器の両者の分布関係を検討する。

本項の目的は、大きく2つある。一つは下位文化層がどのような石器群の複合によって成り立っているか、または単一の石器群かという問題であり、もう一つは当時の石器を介在とした諸活動の実態が考古学的にどのような様に見えるか、具体的にはどの器種同志が組合せて使用・製作・廃棄・遺棄される場合が多かったかという問題である。この分析をもとに、この2つの問題を中心に考えてみたい。(山口)

#### b. 操作対象の資料について

操作対象である石器は、原位置のはっきりしているものだけを採用し、石材別(チャート等製とサヌカイト製)、遺跡の南北両域の全石器、遺跡の南北両域のサヌカイト製、石材を区別しない全石器、という7項目に分けて操作を行なった。ナイフ形石器・搔器・削器・錐状石器など定型的石器、加工痕有剥片・使用痕有剥片、礫器、局部磨製石斧など、総点数2,353点のうちサヌカイト976点、チャート等1,340点、礫石器類12点が分析対象となる。遺跡を南群・北群に区別した場合は、A・B・C・D・E・F・Gを北群とし、G・H・I・J・Kを南群とする。北群1,831点、南群619点である。サヌカイトは、北群で560点、南群で497点がある。チャート等は、北群で1,239点、南群で116点がある。(渡辺)

#### c. 操作手順

石器分布の位置の近い・遠い程度によって、石器間の関係の強弱を示そうとする場合、すべての石器間の距離を計算して行なうことは煩雑となるし、實際上無関係と見なせる遠距離の石器間を計測することは無意味であろう。ここでは、まず人間2人が手を伸ばしあって石器を交換し得る距離として半径2mを想定し、2m圏内に入った石器を数え、その出現頻度によって石器間の関係を示すことにする。2m圏内出現頻度を他と比較可能な意味のある数値にするため行なった数値処理の過程は次の通りである。

H平方mの発掘範囲に遺物Aと遺物Bがa個とb個ずつ分布している場合を考えてみよう(第357図)。まず、遺物Aの周りに半径2mの円を描いて、円内に入った遺物Bの数を合計する。A1にはB1・B2の2点が、A2にはB2・B3・B4の3点が、A3には0点、といったように、個別の観察値を合算する。この合計が遺物Aの観察値合計(Xab)である。

$$2(1) + 3(2) + 0(3) + \dots + b(a) = X_{ab}$$

次に、Aのa個の2m直径の総面積に対するBの分布密度を求める。

$$X_{ab} \div (2 \times 2 \times 3.14 \times a) = F_{ab}$$

この密度が、遺物Bの遺物Aに対する観察値F<sub>ab</sub>である。

遺物Bは、遺跡総面積Hに対してb個が分布しており、本来の分布密度は

$$b \div H \text{ として示される。この密度を遺物Bの期待値 } F_{hb} \text{ とする。}$$

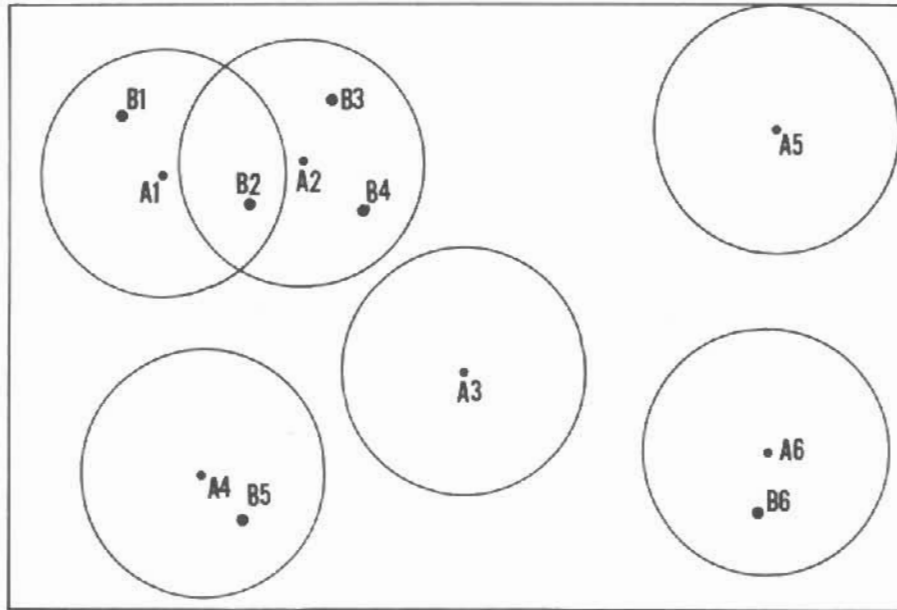
遺物Aの周りでの遺物Bの分布密度観察値を、遺跡での遺物Bの分布期待値と比較すると、遺物Aと遺物Bとの共伴関係強度の指数が求められる。

$$X_{ab} \div F_{hb} = \text{共伴強度指数}$$

さらに、逆に遺物Bから遺物Aを行ない、観察値X<sub>ba</sub>、期待値F<sub>ha</sub>、その共伴強度指数をもとめ、両者の指数を幾何平均して、遺物AとBの相互共伴強度とする。

こうして求めた値が、遺物Aと遺物Bの共伴関係を表す強度となるわけであるが、このままでは、個々の関係により示されるだけで、すべての石器を相対的に比較検討が出来ないので、(遺跡一般値)という比較基準の導入によってそれを可能にしたい。遺跡一般値とは石材も器種も区別しないすべての分析対





第357図 石器分布模式図

遺物A・Bが各6個分布する。遺物Aに対するBの分布密度は

$$\frac{2 + 3 + 0 + 1 + 0 + 1 = 6}{(2 \times 2 \times 3.14 \times 6)} = 0.08 \text{ となる}$$

第40表 下位文化層石器分布密度一覧表

	CHERT		SANUKITE				
	点数	密度	点数	密度			
KNIVES	24	.06544	12	.00327			
END-SCRAPERS	19	.00518	15	.00409			
SCRAPERS	58	.01581	30	.00817			
piece-esquilees	6	.00164	2	.00055			
DRILLS	4	.00109	2	.00055			
GRAVERS	1	.00027	0	—			
RETOUCHED FLAKES	66	.01799	35	.00954			
UTILIZED FLAKES	185	.05044	85	.02318			
AX	1	.00027	1	.00027			
EDGE GROUND AX	1	.00027	1	.00027			
CHOPPERS	5	.00136	5	.00136			
HAMMARS	4	.00109	4	.00109			
POUNDING STONE	1	.00027	1	.00027			
ANVIL	1	.00027	1	.00027			
FLAKES	1378	.37816	819	.2233			
CHIPS	412	.11233	233	.06353			
CORES	159	.04335	103	.02808			
BLANKS OF CORE	4		4	.00109			
DEBRIS	25		25	.00682			
TOOLS	376	.103	195	.053			
	定型石器・加工痕有剥片・使用痕有剥片・礫石器類						
	点数	面積合計	対象点数	観察値合計	観密値	期待値	共伴強度
CHERT + SANUKITE	376	4722.56	376	2223	.471	.103	4.573
CHERT	195	2449.2	195	1208	.493	.103	4.786
SANUKITE	195	2449.2	195	1099	.449	.103	4.359
SOUTH	81	1017.36	81	194	.191	.103	1.854
NORTH	309	3881.04	309	2070	.533	.103	5.175

第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布

象石器全体の相関関係を(石器の総個体数)÷(遺跡の総面積)で求めたものである。この遺跡一般値と個々の相対共伴強度との比を石器の器種間共伴関係を示す強度指数として採用する。(渡辺)

d, 分析

最初に述べたように石材別(チャート等製とサヌカイト製)、遺跡の南北両域の全石器、遺跡の南北両域のサヌカイト製、石材を区別しない全石器という7項目にわたって操作を行なった。7項目で得られた共伴数と相互強度の結果は下記の表に示すとおりである。

第41表 下位文化層全石器器種間共伴数

	TOTAL	KN	EN	SC	P	D	G	RF	UF	AX	GAX	CH	HS	PS	AN
KNIVES	24	10	9	23	1	4	0	16	48	0	0	1	0	0	1
END-SCRAPERS	19	9	20	7	0	13	0	25	43	0	0	6	0	0	0
SCRAPERS	58	23	37	60	4	15	1	62	148	0	0	7	7	1	0
piece-esquilees	6	1	4	0	0	0	4	17	0	0	0	1	0	0	0
DRILLS	4	4	13	15	0	6	0	10	12	0	0	2	0	0	0
GRAVERS	1	0	0	1	0	0	0	1	3	0	0	0	0	0	0
RETOUCHED FLAKES	65	16	25	62	4	10	1	80	189	0	0	5	8	1	0
UTILIZED FLAKES	185	48	43	148	17	12	3	189	523	0	4	11	17	1	2
AX (SANU)	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
EDGE GROUND AX	1	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	1	0	0
CHOPPERS	5	1	6	7	0	2	0	5	11	0	0	0	0	0	0
HAMMARRS	4	0	0	7	1	0	0	8	17	0	1	0	0	1	0
POUNDING STONES	1	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0	0	1	0	0
ANVILS	1	1	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0

第42表 下位文化層チャート等製石器器種間共伴数

	TOTAL	KN	EN	SC	P	D	G	RF	UF	AX	GAX	CH	HS	PS	AN
KNIVES	12	8	6	12	0	2	---	10	16	0	0	1	0	0	0
END-SCRAPERS	15	6	12	22	0	7	---	12	22	0	0	4	0	0	0
SCRAPERS	30	12	22	20	0	8	---	29	41	0	0	5	3	0	0
piece-esquilees	2	0	0	0	0	0	---	0	2	0	0	0	0	0	0
DRILLS	2	2	7	8	0	2	---	6	3	0	0	1	0	0	0
GRAVERS	0	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
RETOUCHED FLAKES	35	10	12	29	0	6	---	26	44	0	0	3	3	0	0
UTILIZED FLAKES	85	16	22	41	2	3	---	44	98	0	2	8	8	0	0
AX (SANU)	0	0	0	0	0	0	---	0	0	0	0	0	0	0	0
EDGE GROUND AX	1	0	0	0	0	0	---	0	2	0	0	0	1	0	0
CHOPPERS	5	1	4	5	0	1	---	3	8	0	0	0	0	0	0
HAMMARRS	4	0	0	3	0	0	---	3	8	0	1	0	0	1	0
POUNDING STONE	1	0	0	0	0	0	---	0	0	0	0	0	1	0	0
ANVIL	1	0	0	0	0	0	---	0	0	0	0	0	0	0	0

第43表 下位文化層サヌカイト製石器器種間共伴数

	TOTAL	KN	EN	SC	P	D	G	RF	UF	AX	GAX	CH	HS	PS	AN
KNIVES	12	0	0	1	0	0	0	2	10	0	0	0	0	0	1
END-SCRAPERS	4	0	0	1	0	1	0	1	3	0	0	2	0	0	0
SCRAPERS	28	1	1	7	4	1	1	13	40	0	0	2	4	1	0
piece-esquilees	4	0	0	4	0	0	0	3	6	0	0	0	1	0	0
DRILLS	2	0	1	1	0	0	0	0	3	0	0	1	0	0	0
GRAVERS	1	0	0	1	0	0	0	1	3	0	0	0	0	0	0
RETOUCHED FLAKES	31	2	1	13	3	0	1	32	59	0	0	2	5	1	0
UTILIZED FLAKES	100	10	3	40	6	3	3	59	199	0	2	3	9	1	2
AX (SANU)	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
EDGE GROUND AX	1	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	1	0	0
CHOPPERS	5	0	2	2	0	1	0	2	3	0	0	0	0	0	0
HAMMARRS	4	0	0	4	1	0	0	5	9	0	1	0	0	1	0
POUNDING STONE	1	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0	0	1	0	0
ANVIL	1	1	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0

第44表 下位文化層全石器器種間相互強度

	TOTAL	KN	EN	SC	P	D	G	RF	UF	AX	GAX	CH	HS	PS	AN
ANVIL	1	2.73	0	0	0	0	0	0	.7	0	0	0	0	0	0
POUNDING STONES	1	0	0	1.11	0	0	0	.97	.35	0	0	0	16.05	0	0
HAMMARS	4	0	0	1.93	2.66	0	0	1.94	1.47	0	16.05	0	0	0	0
CHOPPERS	5	.54	4.04	1.55	0	6.4	0	.97	.76	0	0	0	0	0	0
EDGE-GROUND AX	1	0	0	0	0	0	0	0	1.39	0	0	0	0	0	0
AX(SANU)	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
UTILIZED FLAKES	185	.71	.78	.88	.98	1.04	1.04	1.98							
RETOUCHED FLAKES	65	.66	1.27	1.04	.64	2.42	.97	1.17							
GRAVERS	1	0	0	1.11	0	0	0								
DRILLS	4	2.72	10.93	4.13	0	23.96									
piece-esquilees	6	.45	0	.73	0										
SCRAPERS	58	1.08	2.14	1.11											
END-SCRAPERS	19	1.29	3.54												
KNIVES	24	1.16													

第45表 下位文化層チャート等製石器器種間相互強度

	TOTAL	KN	EN	SC	P	D	G	RF	UF	AX	GAX	CH	HS	PS	AN
ANVIL	1	0	0	0	0	0	---	0	0	0	0	0	0	0	0
POUNDING STONES	1	0	0	0	0	0	---	0	0	0	0	0	16.05	0	0
HAMMARS	4	0	0	1.6	0	0	---	1.34	1.5	0	16.05	0	0	0	0
CHOPPERS	5	0	3.41	2.13	0	6.54	---	1.16	1.2	0	0	0	0	0	0
EDGE-GROUND AX	1	1.06	0	0	0	0	---	0	1.51	0	0	0	0	0	0
AX(SANU)	1	0	0	0	0	0	---	0	0	0	0	0	0	0	0
UTILIZED FLAKES	85	1	1.1	1.03	.75	1.14	---	.94	.87						
RETOUCHED FLAKES	35	1.52	1.46	1.76	0	5.45	---	1.36							
GRAVERS	0	---	---	---	---	---	---								
DRILLS	2	5.3	14.86	8.48	0	31.66									
piece-esquilees	2	0	0	0	0										
SCRAPERS	30	2.13	3.19	1.42											
END-SCRAPERS	15	2.13	3.41												
KNIVES	12	3.55													

第46表 下位文化層サヌカイト製石器器種間相互強度

	TOTAL	KN	EN	SC	P	D	G	RF	UF	AX	GAX	CH	HS	PS	AN
ANVIL	1	5.35	0	0	0	0	0	0	1.28	0	0	0	0	0	0
POUNDING STONES	1	0	0	2.21	0	0	0	2.07	.64	0	0	0	16.05	0	0
HAMMARS	4	0	0	2.2	3.99	0	0	2.58	1.44	0	16.05	0	0	0	0
CHOPPERS	5	0	6.4	.91	0	6.37	0	.83	.39	0	0	0	0	0	0
EDGE-GROUND AX	1	0	0	0	0	0	0	0	1.27	0	0	0	0	0	0
AX (SANU)	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
UTILIZED FLAKES	100	.53	.48	.91	.96	.95	1.93	1.22	1.27	0	0	0	0	0	0
RETOUCHED FLAKES	31	.34	.52	.92	1.54	0	2.07	2.13	0	0	0	0	0	0	0
GRAVERS	1	0	0	2.29	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
DRILLS	2	0	7.95	1.1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
piece-esquilees	4	0	0	2.2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SCRAPERS	28	.19	.55	.53	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
END-SCRAPERS	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
KNIVES	12	.89	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

第47表 下位文化層石材別石器器種間共伴数

	TOTAL	KN(C)	EN(C)	SC(C)	P(C)	DC	G(C)	RF(C)	UF(C)	AX(P)	GAX(P)	CH(P)	HSP	PSP	AN(P)	KN(S)	EN(S)	SC(S)	P(S)	D(S)	G(S)	RF(S)	UF(S)	
KNIVES (C)	12	8	6	12	0	2	---	10	16	0	0	0	1	0	0	0	2	9	0	0	0	2	19	
END-SCRAPER (C)	15	6	12	22	0	7	---	12	22	0	0	4	4	0	0	0	1	4	8	0	3	10	4	12
SCRAPERS (C)	30	12	22	26	0	8	---	29	41	0	0	5	3	0	0	1	6	17	0	4	0	7	25	
piece-esquilees (C)	2	0	0	0	0	0	---	0	2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	
DRILLS (C)	2	2	7	8	0	2	---	6	3	0	0	1	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	4	
GRAVERS (C)	0	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	
RETOUCHED FLAKES (C)	35	10	12	25	0	6	---	26	44	0	0	3	3	0	0	2	12	13	1	4	0	11	48	
UTILIZED FLAKES (C)	85	16	22	41	2	3	---	44	96	0	2	8	8	0	0	3	6	42	7	0	0	38	113	
AX (S)	1	0	0	0	0	0	---	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
EDGE GROUND AX (P)	1	0	0	0	0	0	---	0	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
CHOPPERS (P)	5	1	4	5	0	1	---	3	8	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0	1	0	2	3	
HAMMARS (P)	4	0	0	3	0	0	---	3	8	0	0	0	0	1	0	0	0	4	1	0	0	5	9	
POUNDIGN STONE (P)	1	0	0	0	0	0	---	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1	
ANVIL (P)	1	0	0	0	0	0	---	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	
KNIVES (S)	12	0	1	1	1	0	---	2	3	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	2	10	
END-SCRAPERS (S)	4	2	4	6	0	2	---	12	6	0	0	2	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	3	
SCRAPERS (S)	28	9	8	17	0	2	---	13	42	0	2	4	1	0	1	1	7	4	1	1	1	13	40	
piece-esquilees (S)	4	0	0	0	0	0	---	1	7	0	0	0	1	0	0	0	0	4	0	0	0	3	6	
DRILLS (S)	2	2	3	4	0	0	---	4	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	3	
GRAVERS (S)	1	0	0	0	0	0	---	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	
RETOUCHED (S)	31	2	4	7	0	0	---	11	38	0	2	5	1	0	2	1	13	3	0	1	32	59		
UTILIZED FLAKES (S)	100	19	12	25	2	4	---	48	113	0	2	3	9	1	2	10	3	40	6	3	3	59	199	

第48表 下位文化層石材別石器器種間相互強度

	TOTAL	KN(C)	EN(C)	SC(C)	PC(C)	DI(C)	GI(C)	RF(C)	UF(C)	AX(P)	GAX(P)	CH(P)	HS(P)	PS(P)	AN(P)	KN(S)	EN(S)	SC(S)	P(S)	D(S)	G(S)	RF(S)	UF(S)	
UTILIZED FLAKES(S)	100	1.02	.51	.53	.64	1.27	---	.88	.85	0	1.27	.39	1.44	.64	1.28	.53	.48	.91	.96	.95	1.93	1.22	1.27	
RETouched FLAKES(S)	31	.34	.55	.48	0	0	---	.65	.92	0	0	.83	2.58	2.07	0	.34	.52	.92	1.54	0	2.07	1.22	2.13	
GRAVERS(S)	1	0	0	0	0	0	---	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2.29	0	0	0	0	0	
DRILLS(S)	2	5.3	6.36	4.24	0	31.66	---	3.63	.75	0	0	6.37	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
piece-esquillees(S)	4	0	0	0	0	0	---	.46	1.32	0	0	0	3.99	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
SCRAPERS(S)	28	1.71	1.21	1.21	0	2.19	---	.82	1.13	0	0	.91	2.2	2.21	0	.19	.55	.53	0	0	0	0	0	
END-SCRAPERS(S)	4	2.66	4.26	3.2	0	15.9	---	3.65	1.13	0	0	6.4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
KNIVES(S)	12	0	.36	.18	2.77	0	---	.3	.19	0	0	0	0	0	0	5.35	.89	0	0	0	0	0	0	
ANVIL(P)	1	0	0	0	0	0	---	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
FOUNDING STONE(P)	1	0	0	0	0	0	---	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
HAMMARS(P)	4	0	0	1.6	0	0	---	1.34	1.5	0	0	16.05	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
CHOPPERS(P)	5	0	3.41	2.13	0	6.54	---	1.16	1.2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
EDGE-GROUND AX(P)	1	1.06	0	0	0	0	---	0	1.51	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
AX(S)	1	0	0	0	0	0	---	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
UTILIZED FLAKES(C)	85	1	1.1	1.03	.75	1.14	---	.94	.87	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
RETouched FLAKES(C)	35	1.52	1.46	1.76	0	5.45	---	1.36	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
GRAVERS(C)	0	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
DRILLS(C)	2	5.3	14.86	8.48	0	0	---	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
piece-esquillees(C)	2	0	0	0	0	0	---	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
SCRAPERS(C)	30	2.13	3.19	1.42																				
END SCRAPERS(C)	15	2.13	3.41																					
KNIVES(C)	12	3.55																						

第49表 下位文化層北群全石器器種間相互強度

	TOTAL	KN	EN	SC	P	D	G	RF	UF	AX	GAX	CH	HS	PS	AN
ANVIL	1	3.01	0	0	0	0	0	0	.76	0	0	0	0	0	0
FOUNDING STONES	0	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
HAMMARS	3	0	0	2.03	0	0	0	2.25	1.63	0	18.53	0	0	0	0
CHOPPERS	2	.95	6.38	2.23	0	10.11	0	1.4	.58	0	0	0	0	0	0
EDGE-GROUND AX	1	0	0	0	0	0	0	0	1.51	0	0	0	0	0	0
AX (SANU)	0	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
UTILIZED FLAKES	155	.74	.85	.99	1.23	1.13	0	1.1	1.12	0	0	0	0	0	0
RETouched FLAKES	50	.75	1.46	1.21	.45	2.28	0	1.55	0	0	0	0	0	0	0
GRAVERS	0	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
DRILLS	4	2.99	10.33	4.4	0	23.96	0	0	0	0	0	0	0	0	0
piece-esquillees	4	.61	0	.72	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SCRAPERS	51	1.12	2.32	1.25											
END-SCRAPERS	19	1.42	3.54												
KNIVES	19	1.12													

第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布

第50表 下位文化層北群全石器器種間共伴数

	TOTAL	KN	EN	SC	P	D	G	RF	UF	AX	GAX	CH	HS	PS	AN
KNIVES	19	8	9	20	1	4	---	14	43	---	0	0	0	---	1
END-SCRAPERS	19	9	20	37	0	13	---	25	43	---	0	6	0	---	0
SCRAPERS	51	20	37	58	3	15	---	59	143	---	0	6	6	---	0
piece-esquilees	4	1	0	3	0	0	---	2	15	---	0	0	0	---	0
DRILLS	4	4	13	15	0	6	---	10	12	---	0	2	0	---	0
GRAVERS	0	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
RETOUCHED FLAKES	50	14	25	59	2	10	---	80	167	---	0	4	7	---	0
UTILIZED FLAKES	155	43	43	143	15	12	---	167	504	---	4	8	15	---	2
AX (SANU)	0	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
EDGE GROUND AX	1	0	0	0	0	0	---	0	4	---	0	0	1	---	0
CHOPPERS	2	0	6	6	0	2	---	4	8	---	0	0	0	---	0
HAMMARS	3	0	0	6	0	0	---	7	15	---	1	0	0	---	0
POUNDING STONE	0	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
ANVIL	1	1	0	0	0	0	---	0	2	---	0	0	0	---	0

第51 下位文化層南群全石器器種間共伴数

	TOTAL	KN	EN	SC	P	D	G	RF	UF	AX	GAX	CH	HS	PS	AN
KNIVES	6	2	0	2	0	---	0	2	5	0	---	0	0	0	---
END-SCRAPPERS	1	0	0	0	0	---	0	1	0	0	---	0	0	0	---
SCRAPERS	9	2	0	2	1	---	1	3	6	0	---	1	1	1	---
piece-esquilees	2	0	0	1	0	---	0	2	2	0	---	0	1	0	---
DRILLS	0	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
GRAERS	1	0	0	1	0	---	0	1	3	0	---	0	0	0	---
RETOUCHED FALAKE	18	2	1	3	2	---	1	2	27	0	---	1	1	1	---
UTILIZED FLAKES	38	5	0	6	2	---	3	27	43	0	---	8	2	1	---
AX (SANU)	1	0	0	0	0	---	0	0	0	0	---	0	0	0	---
EDGE GROUND AX	0	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
CHOPPERS	3	0	0	1	0	---	0	1	8	0	---	0	0	0	---
HAMMARS	1	0	0	1	1	---	0	1	2	0	---	0	0	1	---
POUNDING STONE	1	0	0	1	0	---	0	1	1	0	---	0	1	0	---
ANVIL	0	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

第52表 下位文化層北群サヌカイト製石器器種間共伴数

	TOTAL	KN	EN	SC	P	D	G	RF	UF	AX	GAX	CH	HS	PS	AN
KNIVES	7	0	0	0	0	0	---	0	5	---	0	0	0	---	1
END-SCRAPERS	4	0	0	1	0	1	---	1	3	---	0	0	0	---	0
SCRAPERS	24	0	1	6	3	1	---	10	36	---	0	1	3	---	0
piece-esquilees	2	0	0	3	0	0	---	1	4	---	0	0	0	---	0
DRILLS	2	0	1	1	0	0	---	0	3	---	0	0	0	---	0
GRAVERS	0	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
RETOUCHED FLAKES	15	0	1	10	1	0	---	14	41	---	0	1	4	---	0
UTILIZED FLAKES	74	5	3	36	4	3	---	41	175	---	2	0	7	---	2
AX (SANU)	0	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
EDGE GROUND AX	1	0	0	0	0	0	---	0	2	---	0	0	0	---	0
CHOPPERS	2	0	0	1	0	0	---	1	0	---	0	0	0	---	0
HAMMARS	3	0	0	3	0	0	---	4	7	---	0	0	0	---	0
POUNDING STONES	0	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
ANVIL	1	1	0	0	0	0	---	0	2	---	0	0	0	---	0

第53表 下位文化層南群サヌカイト製石器器種間共伴数

	TOTAL	KN	EN	SC	P	D	G	RF	UF	AX	GAX	CH	HS	PS	AN
KNIVES	6	2	---	1	0	---	0	2	5	0	0	0	---	0	0
END-SCRAPERS	0	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
SCRAPERS	5	1	---	0	1	---	1	3	5	0	0	1	---	1	0
piece-esquilees	2	0	---	1	0	---	0	2	2	0	0	0	---	0	0
DRILLS	0	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
GRAVERS	1	0	---	1	0	---	0	1	3	0	0	0	---	0	0
RETOUCHED FLAKES	17	2	---	3	2	---	1	18	23	0	0	1	---	1	0
UTILIZED FLAKES	37	5	---	5	2	---	3	23	38	0	0	0	---	1	0
AX (SANU)	1	0	---	0	0	---	0	0	0	0	0	0	---	0	0
EDGE GROUND AX	1	0	---	0	0	---	0	0	0	0	0	0	---	0	0
CHOPPERS	3	0	---	1	0	---	0	1	0	0	0	0	---	0	0
HAMMARS	1	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
POUNDING STONES	1	0	---	1	0	---	0	1	1	0	0	0	---	0	0
ANVIL	0	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

第54表 下位文化層南群全石器器種間相互強度

	TOTAL	KN	EN	SC	P	D	G	RF	UF	AX	GAX	CH	HS	PS	AN
ANVIL	0	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
POUNDING STONES	1	0	0	2.81	0	0	0	1.86	.76	0	0	0	32.1	0	0
HAMMARS	1	0	0	1.4	9.21	0	0	.93	.54	0	0	0	0	0	0
CHOPPERS	3	0	0	.72	0	0	0	.48	.96	0	0	0	0	0	0
EDGE-GROUND AX	0	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
AX (SANU)	1	0	0	---	0	0	0	---	0	0	0	0	---	---	---
UTILIZED FLAKES	38	.32	0	.2	.44	0	2.3	.6	.39	---	---	---	---	---	---
RETOUCHED FLAKES	18	.22	.42	.24	1.07	0	1.86	.11	---	---	---	---	---	---	---
GRAVERS	1	0	0	2.81	0	0	---	---	---	---	---	---	---	---	---
DRILLS	0	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
piece-esquilees	2	0	0	.81	0	0	---	---	---	---	---	---	---	---	---
SCRAPERS	9	1.49	0	.24	0	0	---	---	---	---	---	---	---	---	---
END-SCRAPERS	1	0	0	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
KNIVES	6	.89	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

第55表 下位文化層北群サヌカイト製石器器種間相互強度

	TOTAL	KN	EN	SC	P	D	G	RF	UF	AX	GAX	CH	HS	PS	AN
ANVIL	1	7.00	0	0	0	0	---	0	1.49	---	0	0	0	---	0
POUNDING STONES	0	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
HAMMARS	3	0	0	2.13	0	0	---	3.42	1.5	---	18.53	0	0	---	---
CHOPPERS	2	0	0	.78	0	0	---	.94	0	---	0	0	0	---	---
EDGE-GROUND AX	1	0	0	0	0	0	---	0	1.49	---	0	0	0	---	---
AX (SANU)	0	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
UTILIZED FLAKES	74	.41	.56	1.04	1.05	1.1	---	1.41	1.51	---	---	---	---	---	---
RETOUCHED FLAKES	15	0	.74	1.14	1.05	---	1.92	1.12	---	---	---	---	---	---	---
GRAVERS	0	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
DRILLS	2	0	7.95	1.23	0	0	---	---	---	---	---	---	---	---	---
piece-esquilees	2	0	0	2.62	0	0	---	---	---	---	---	---	---	---	---
SCRAPERS	24	0	.62	.57	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
END-SCRAPERS	4	0	0	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
KNIVES	7	0	0	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

第56表 下位文化層南群サヌカイト製石器器種間相互強度

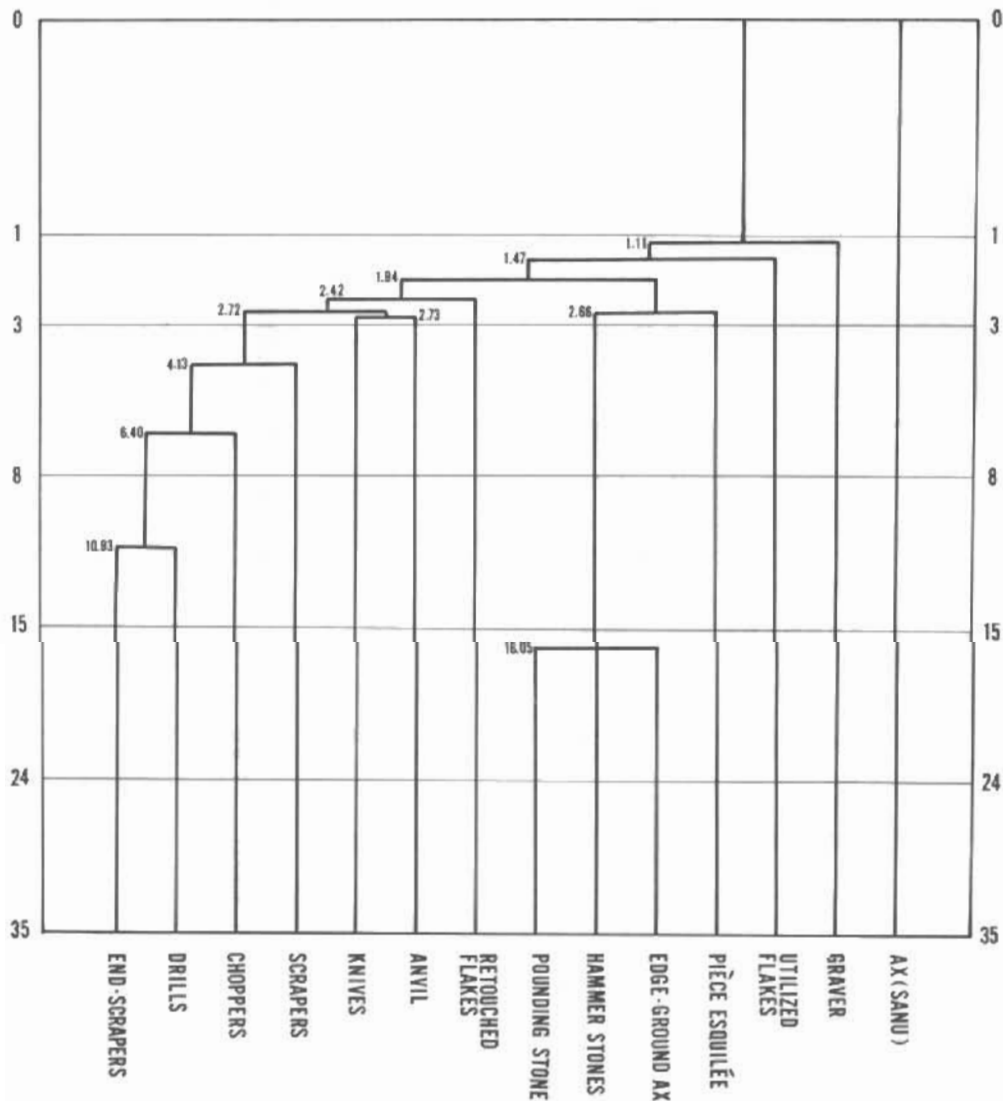
	TOTAL	KN	EN	SC	P	D	G	RF	UF	AX	GAX	CH	HS	PS	AN
ANVIL	0	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
POUNDING STONES	1	0	0	5.41	0	0	0	2.79	1.06	0	---	0	32.1	0	0
HAMMARS	1	0	0	2.69	11.32	0	0	1.39	1.05	0	---	0	0	0	0
CHOPPERS	3	0	0	1.39	0	0	0	.72	0	0	---	0	0	0	0
EDGE-GROUND AX	0	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
AX (SANU)	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	---	0	---	---	---
UTILIZED FLAKES	37	.62	---	.29	.74	---	3.17	1.05	.66	---	---	---	---	---	---
RETOUCHED FLAKES	17	.66	---	.7	1.97	---	2.79	2.18	---	---	---	---	---	---	---
GRAVERS	1	0	0	5.41	0	0	---	---	---	---	---	---	---	---	---
DRILLS	0	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
piece-esquilees	2	0	0	1.91	0	0	---	---	---	---	---	---	---	---	---
SCRAPERS	5	.84	---	0	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
END-SCRAPERS	0	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
KNIVES	6	1.78	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

上記の結果からそれぞれの項目別に石器の器種間の相互関係を考察するのだが、その作業をさらに行いやすくするため、求めた結果をもとに樹状図とネット図を作成した。ネット図作成にあたって各石器の配置関係は、全ての項目について（遺跡全体における全石器）の樹状図によって得たものを適用している。以下、樹状図からクラスターとしてまとめて相関関係が読み取れる石器のグループを抽出したい。その際、器種間の相関関係を示す強度が3以上であれば、安定したクラスターとして意味を持つものとして取り上げ、場合によっては、相対的に判断して2程度の強度を示すものも、おおよそ普遍的にクラスターとしてまとまりを持つものであるという判断基準を取り入れている。

さらにネット図を利用して個々の器種について相関関係を観察し、クラスターとしてまとまっても偶然そうなった可能性のあるものについての示唆も行い、樹状図だけでは読み取れないクラスターの内部構造をより鮮明なものとして捉えたい。

①遺跡全体における全石器（第358図・第359図）

樹状図から大きく分けて2つのクラスターが読み取れる。搔器、錐状石器、磙器、削器、ナイフ形石器、台石、加工痕有剥片の一群と局部磨製石斧・敲石・磨石の一群である。



第358図 石器器種間相互強度樹状図



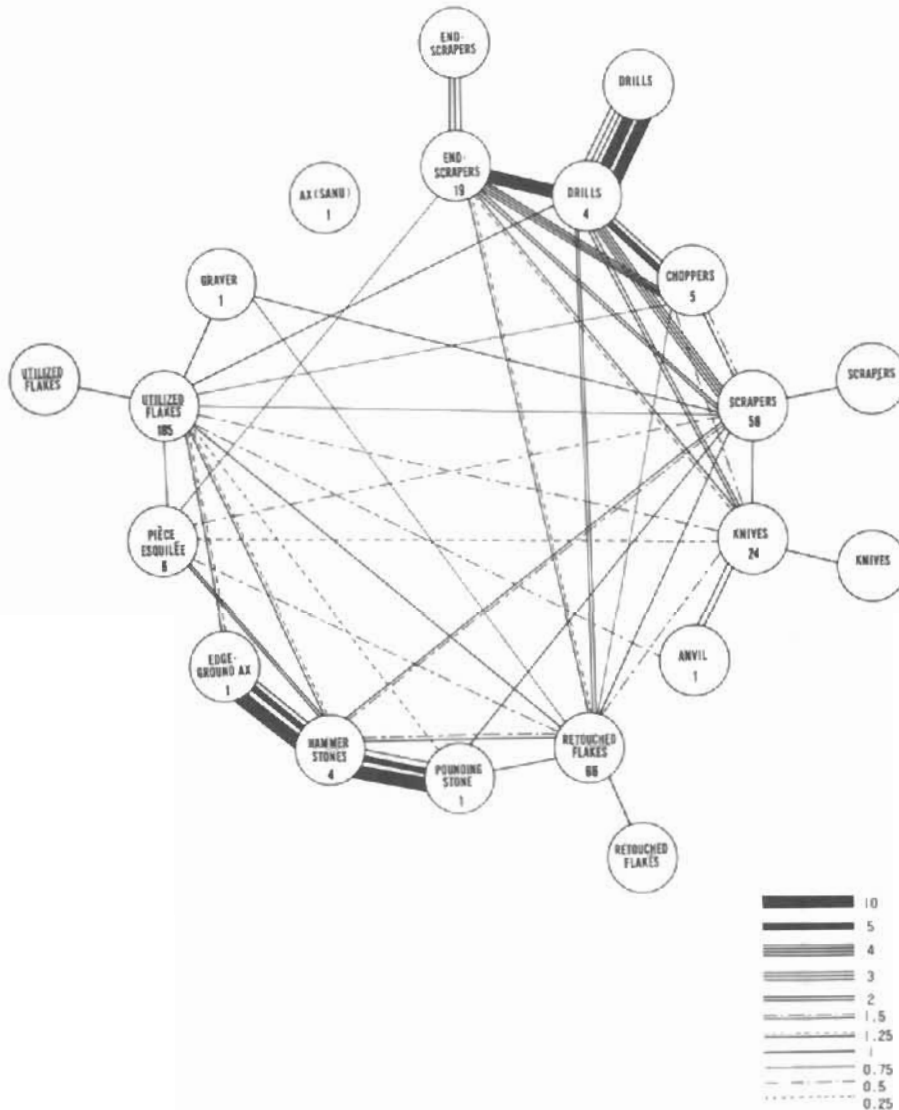
斧形石器は他のどの石器とも相関関係を持たない。

さてネット図を用いて樹状図から読みとったクラスター内の個々の器種間相関関係を観察したい。

搔器、錐状石器、礮器、削器、ナイフ形石器、加工痕有剥片は強度に差があるとは言え、それぞれに例外なく相関関係が存在することを示し、これらが1つのクラスターとしてまとまりを持つことの裏付けとなっている。しかし樹状図から読み取れるクラスターには台石が含まれているのだが、ネット図で観察すると台石はクラスター内でナイフ形石器としか相関関係を持っていない。台石は個数も1なのでクラスターの構成要素として普遍的であるという、確定的な事は言えない。

このクラスター内で特に強い相関関係を持つのは錐状石器と搔器、錐状石器と礮器である。錐状石器と搔器は同器種同志の相関関係においても特に強い強度で関係を示し、一箇所に集中して分布する傾向が有ることを示している。

もう一つのクラスターについては敲石は局部磨製石斧、磨石、楔形石器それぞれに相関関係を持っているが 局部磨製石斧、磨石、楔形石器はクラスター内で、敲石以外には他の石器と相関関係を持たない



第359図 石器器種間相互強度図

い。敲石と磨石、敲石と局部磨製石斧の相関関係はともに、10以上という非常に強い強度で表われているが、敲石、磨石、局部磨製石斧の個数が非常に少なく、今回の観察結果を持って普遍的な組合せであるクラスターとして、まとめてしまうことには不安が残り、今後の分析結果を待ちたい。

加工痕有剥片については前者のクラスターにまとめられるとしたが、後者のクラスターに含まれる石器やクラスターにはまとめられない彫器ともまんべんなく関係を示している。

どの石器ともまんべんなく相関関係を示しているというのは使用痕有剥片にも言えることである。

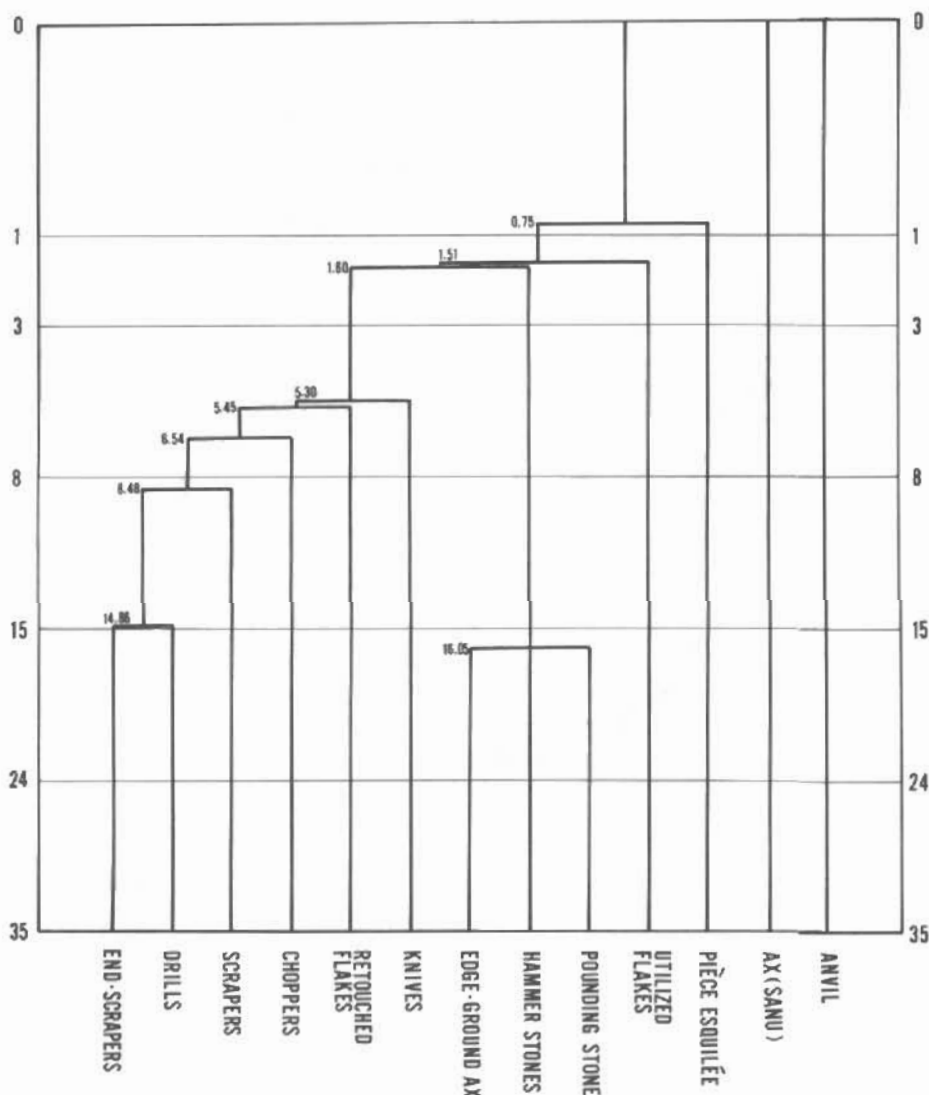
②遺跡全体におけるチャート製その他の石器 (第360図・第361図)

①において読み取れる特徴と大きな違いは見られず、樹状図からはナイフ形石器、搔器、錐状石器、削器、礫器、加工痕有剥片を含むクラスターと、敲石、局部磨製石斧、磨石を含むクラスターの二つが観察できる。ここで前者のクラスターに台石が含まれないのは①と比較して注目しておきたい。

他のどの石器とも相関関係を示さないのは、斧形石器、台石である。

次に樹状図での観察を詳しくネット図で検証してみたい。

ナイフ形石器、搔器、錐状石器、削器、礫器、加工痕有剥片を含むクラスターについてはそれぞれの



第360図 チャート等製石器器種間相互強度樹状図

石器はまんべんなくクラスター内の他の石器と強い相関関係を示している。この5器種の石器の組合せによる安定性を裏付けているといえよう。

敲石、局部磨製石斧、磨石のクラスターについては樹状図では3器種とも同じ強度の相関関係を持っていると観察できたのみであったが、ネット図からは実際に相関関係を持つのは敲石と局部磨製石斧、敲石と磨石であり、局部磨製石斧と磨石は互いに相関関係を持たないことがわかる。①において述べたのと同じ理由から、このクラスターの不安定性が示唆できる。

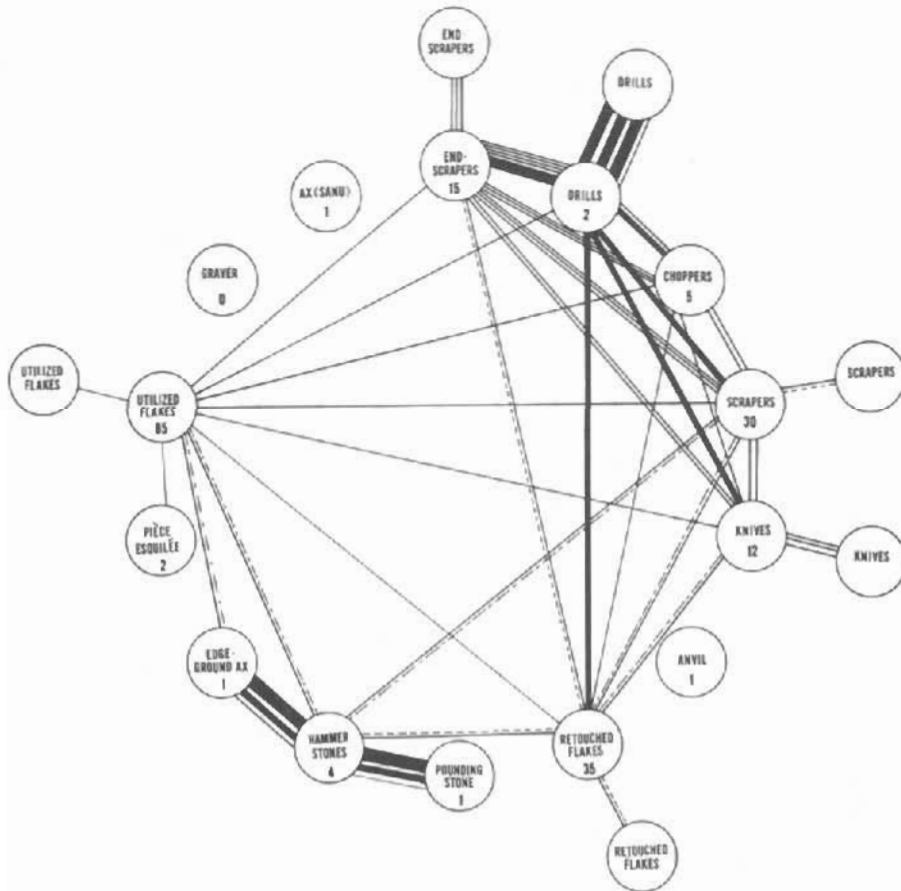
ネット図から観察できる同器種の相関関係では錐状石器が同器種間で特に強い相関関係を示し一箇所集中の傾向が顕著である。搔器とナイフ形石器も同器種のものが比較的まとまって分布していることが分かる。

③遺跡全体におけるサヌカイト製の石器（第362図・第363図）

樹状図からは局部磨製石斧、敲石、楔形石器、加工痕有剥片、削器、彫器、磨石を含んだクラスターと、搔器、錐状石器、礫器を含んだクラスターの二つが読み取れる。

他のどの石器とも相関関係が見られないのは斧形石器である。

ネット図に目を転じたい。局部磨製石斧、敲石、楔形石器、加工痕有剥片、削器、彫器、磨石を含んだクラスター内で、個別の器種毎に相関関係を観察すると削器と加工痕有剥片はクラスター内のどの石器とはほぼまんべんなく相関関係を持っている。敲石は彫器を除いたクラスター内の全器種と相関関係を持っている。磨石は削器、加工痕有剥片、敲石以外と強い相関関係が無い。彫器は削器、使用痕有剥片



第361図 チャート等製石器器種間相互強度図

としか相関関係が無い。彫器が削器としか相関関係を持たず、クラスターの構成要素としての安定性を欠いているが、その他の石器の組合せについては安定したものであると、みなせるだろう。

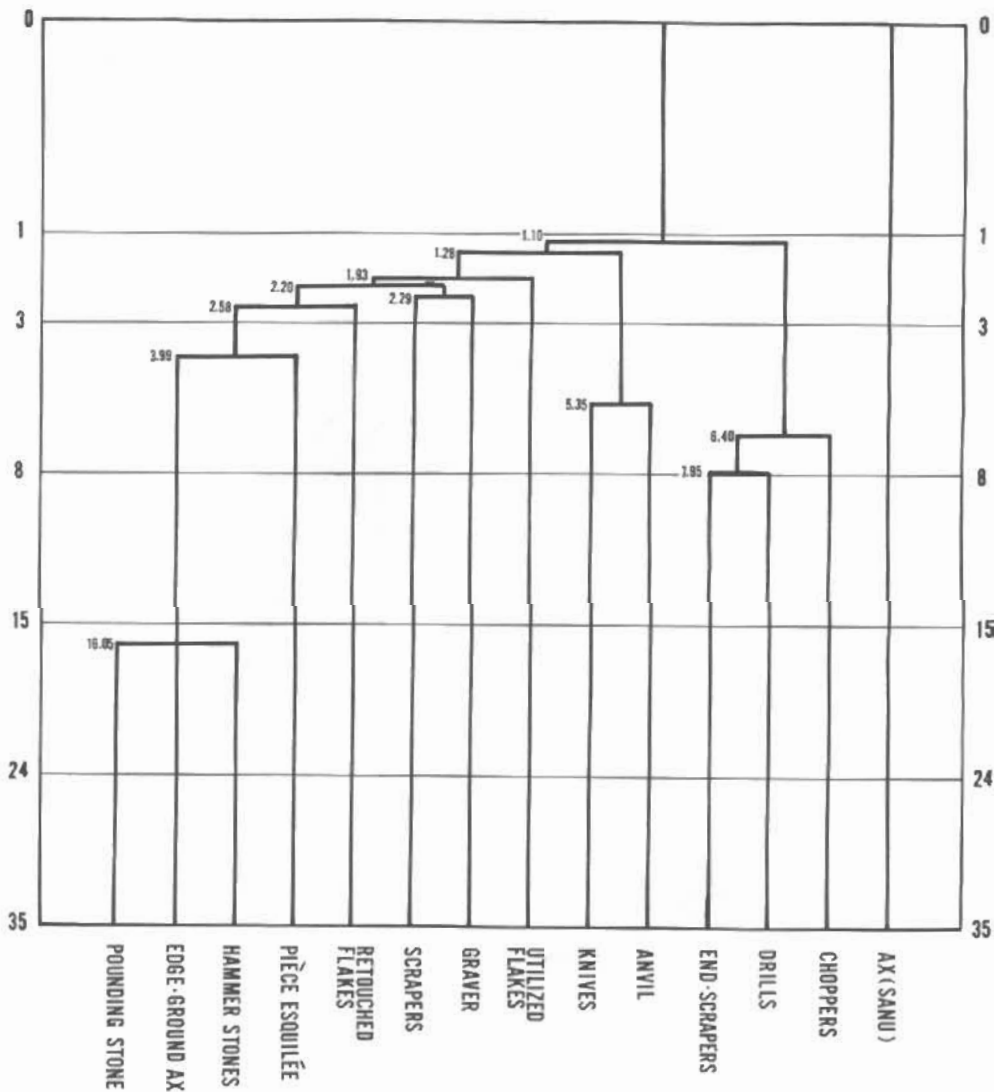
搔器、錐状石器、礫器のクラスターでは3器種が互いに強い強度で結びついており、この3器種の組合せの安定性を裏付けている。

同器種の相関関係の観察については特筆すべきものは無い。

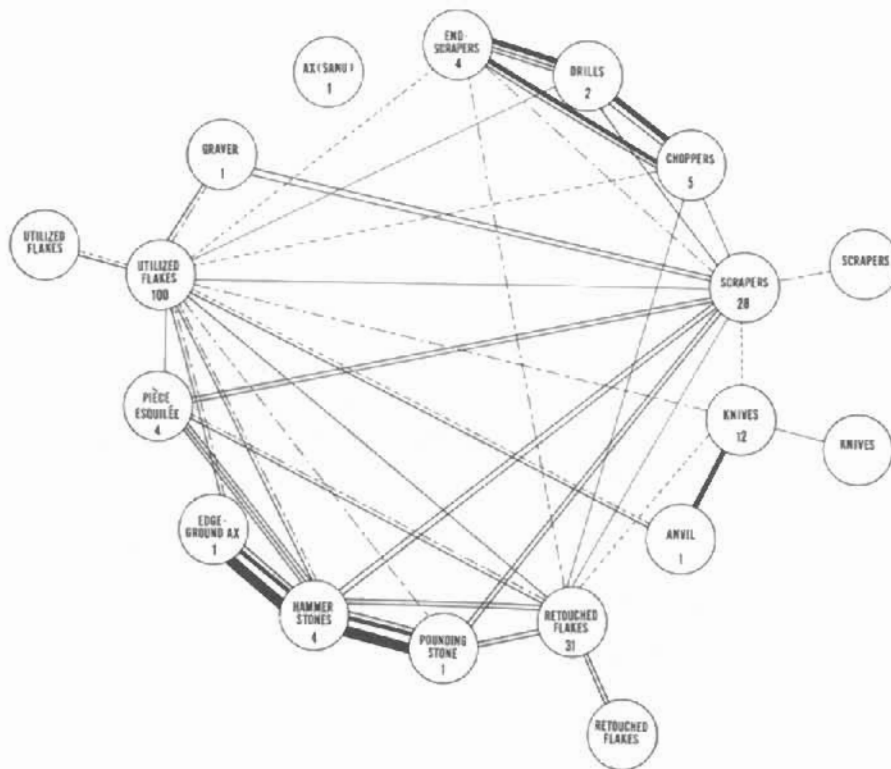
④遺跡全体における石材を区別した全石器（第364図・第365図）

樹状図からはチャート製その他の錐状石器、サヌカイト製の錐状石器、チャート製その他の搔器、サヌカイト製の搔器、チャート製その他の削器、礫器、チャート製その他の加工痕有剥片、チャート製その他のナイフ形石器を一つのまとまりとする第1のクラスター、次に局部磨製石斧、敲石、磨石、サヌカイト製の楔形石器、サヌカイト製の加工痕有剥片、サヌカイト製の削器、サヌカイト製の彫器を一つのまとまりとする第2のクラスター、最後にサヌカイト製のナイフ形石器、台石、チャート製の楔形石器を一つのまとまりとする第3のクラスターの3つのクラスターを確認できる。

他のどの器種とも相関関係を示さないのは斧形石器である。



第362図 サヌカイト製石器器種間相互強度樹状図



第363図 サヌカイト製石器器種間相互強度図

さて、ネット図を用いて樹状図から抽出した個々の石器の器種間相関関係を詳しく観察してみたい。

まず、第1のクラスターを構成する石器の器種についてそれぞれ詳述を試みたい。

チャート製の錐状石器については第1のクラスターとしてまとめた他の石器類と、安定して3以上の強い相関関係を示している。サヌカイト製の錐状石器についても同じ事が言える。

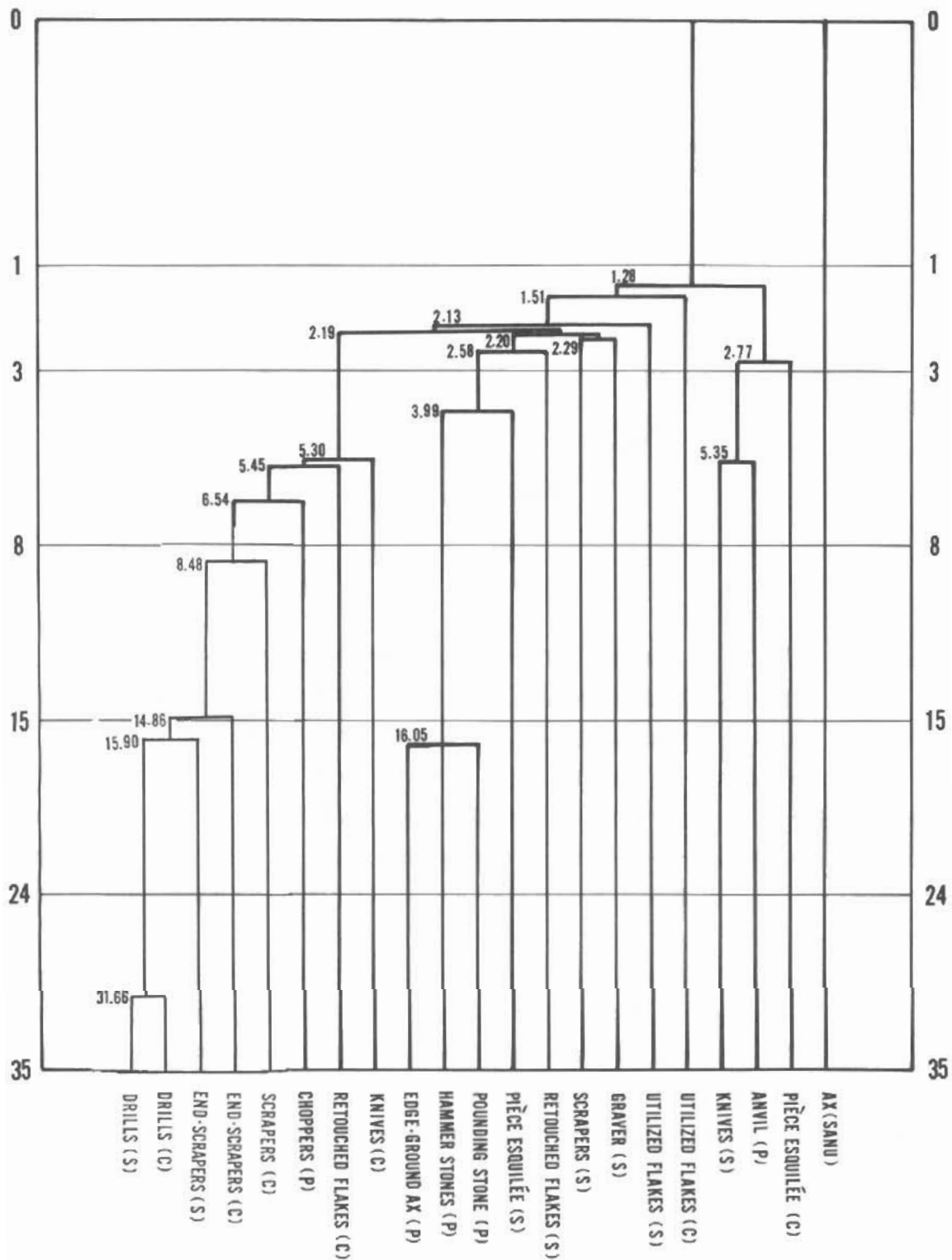
サヌカイト製の搔器とはチャート製その他のナイフ形石器を除く第一クラスターに含まれる石器類全てが安定して3以上の強い相関関係を示している。ナイフ形石器とは1以上3未満で、やや希薄な相関関係だと言える。

チャート製その他の削器について、第1クラスター内で3以上の強い相関関係を示している石器類はチャート製その他の錐状石器、サヌカイト製の錐状石器、チャート製その他の搔器、サヌカイト製の搔器、である。チャート製その他のナイフ形石器、チャート製その他の加工痕有剥片と使用痕有剥片は1以上3未満の相関関係を示し、やや希薄な関係である。

礫器は第1クラスター内の石器類とは、チャート製その他の錐状石器、チャート製その他の搔器、サヌカイト製の錐状石器、サヌカイト製の搔器と3以上の強い相関関係を示している。チャート製その他のナイフ形石器、チャート製その他の加工痕有剥片とは、1以上3未満で相関関係は若干希薄であるといえる。

チャート製その他の加工痕有剥片について、第1クラスター内の石器類で3以上の強い相関関係を示しているのはチャート製その他の錐状石器、サヌカイト製の錐状石器、サヌカイト製の搔器である。チャート製その他の削器、礫器、チャート製その他のナイフ形石器とは遺跡一般値1よりも強い相関関係を持っているが、チャート製のナイフ形石器について、第1クラスター内の石器類で強い相関関係が観

第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布

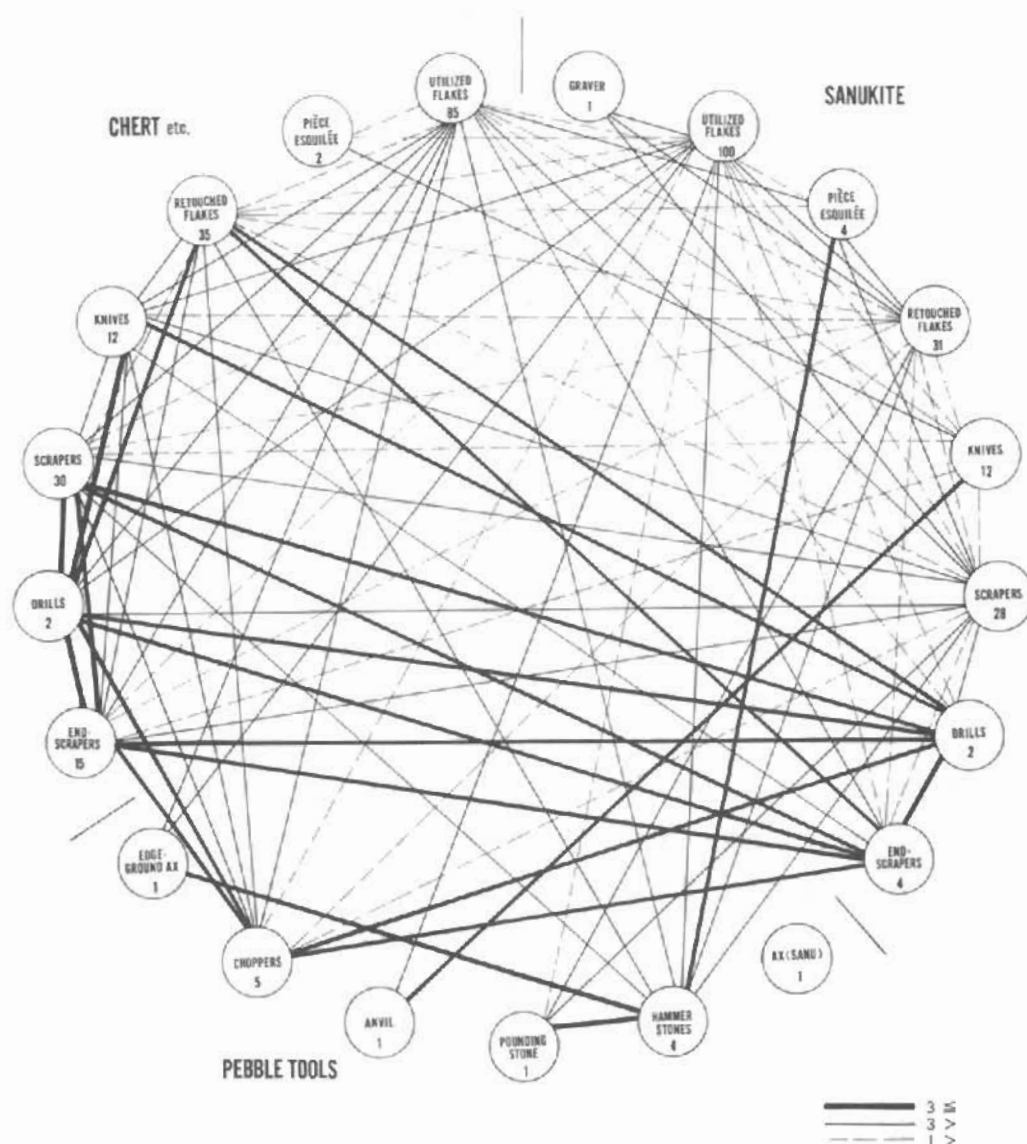


第364図 石材別石器器種間相互強度樹状図

第1群：錐状石器 (S・C)・搔器 (S・C)・削器 (C)・礮器・加工痕有剥片 (C)・ナイフ形石器 (C)

第2群：局部磨製石斧・敲石・磨石 第3群：楔形石器 (S)・加工痕有剥片 (S)・削器 (S)・彫器 (S)

第4群：使用痕有剥片 (S・C) 第5群：ナイフ形石器 (S)・台石・楔形石器 (C) 第6群：斧形石器 (S)



第365図 石材別石器器種間相互強度図

察できるのはチャート等製・サヌカイト製の錐状石器である。第1クラスター内の他の石器類に付いてはすべて遺跡一般値1よりも強い相関関係を示しているものの、幾分弱い関係であると理解できる。

樹状図において第1クラスターとしてまとめた石器類に限定してその枠内で観察を行なったが、結果としては第1クラスター内の石器類で第1クラスター外の石器類と強い相関関係を示すものは見あたらない。

次に、第2のクラスターを構成する石器類の個々の相関関係に付いて詳述を試みたい。

局部磨製石斧については、3以上の強い相関関係を持つのは第2クラスターに含まれている敲石だけである。そのほかは、第2クラスター以外でもサヌカイト製、チャート製その他の使用痕有剥片と、1以上3未満の相関関係を示す他は、他のどんな石器とも相関関係を示さない。

磨石は第2クラスター内では敲石と強い相関関係を示している。第2クラスター内ではサヌカイト製の加工痕有剥片と1以上3未満の相関関係を示す以外は他の石器類と相関関係を持たない。第2クラスター以外ではサヌカイト製削器と1以上3未満、サヌカイト製の使用痕有剥片とは1以下の相関関係を示す。他はどの石器類とも全く関係を持たない。

図・第367図)。

絶対個数が違うため相関関係を示す数値には若干の差異が生じるが、傾向を読みとるのには有効な手段になり得ると考えられる。

#### ナイフ形石器

ナイフ形石器については、石材差による相関関係の傾向の違いが随所に観察できる。

チャート製その他のナイフ形石器がチャート製その他及びサヌカイト製の錐状石器、チャート製その他及びサヌカイト製の搔器、チャート製の削器という第1クラスターを構成する石器類と強い相関関係を示す一方で、サヌカイト製のナイフ形石器はこれらの石器類とは全く相関関係を示さないか、もしくはあっても非常に希薄な相関関係しか持っていない。また第2クラスターを構成する石器類である局部磨製石斧、サヌカイト製の削器とチャート製その他のナイフ形石器は一定の相関関係を示しているが、サヌカイト製のナイフ形石器はこれらの石器類とは全く相関関係を示さないか、もしくはあっても非常に希薄な相関関係しか持っていない。第2クラスターの磨石、敲石、サヌカイト製の楔形石器、サヌカイト製の加工痕有剥片、サヌカイト製の彫器についてはこの限りではない。第3クラスターを構成している台石、チャート製その他の楔形石器とサヌカイト製のナイフ形石器は強い相関関係を示しているが、チャート製のナイフ形石器はこれらの石器類と全く関係を示さない。

#### 搔器

搔器については石材差による器種間相関関係の違いがあまり見られない。

ただ、同器種である搔器同志の相関関係については、異なる様相が観察できる。つまり、チャート製その他の搔器とチャート製その他の搔器、チャート製その他の搔器とサヌカイト製の搔器の組合せではそれぞれ強い相関関係を示すが、サヌカイト製の搔器とサヌカイト製の搔器という組合せでは全く相関関係を持っていない。

#### 削器

削器については、多くの他器種との相関関係において、石材差による傾向の違いを観察することができる。以下、列記したい。

チャート製その他の削器とチャート製その他の錐状石器は非常に強い相関関係を示している。チャート製その他の削器とサヌカイト製の錐状石器も同じである。それに対して、サヌカイト製の削器とサヌカイト製の削器は1以下の弱い相関関係しか示さないし、また、サヌカイト製の削器とチャート製その他の錐状石器はお互いに全く相関関係を持たない。

サヌカイト製の削器と磨石は比較的強い相関関係を示しているが、チャート製の削器と磨石は全く相関関係を持たない。

同じように、サヌカイト製の削器とサヌカイト製彫器は比較的強い相関関係を持っているがチャート製その他の削器とサヌカイト製彫器は全く相関関係を持っていない。

#### 加工痕有剥片

加工痕有剥片において、石材別の器種間相関関係が、異なる傾向を示しているのは、搔器、磨石、彫器である。

チャート製その他の加工痕有剥片はサヌカイト製の搔器とかなり強い相関関係を示すのに対して、サヌカイト製の加工痕有剥片はサヌカイト製の搔器と1以下の弱い相関関係しか持っていない。

サヌカイト製の加工痕有剥片は磨石と比較的強い相関関係を持っているのに対し、チャート製その他



敲石については第2クラスター内では局部磨製石斧、磨石、サヌカイト製楔形石器と3以上の強い相関関係を示している。他の第2クラスターを構成する石器類については、サヌカイト製の削器と1以上3未満の相関関係を示している。第2クラスター以外の石器類についてはチャート製の加工痕有剥片、チャート製の削器、サヌカイト・チャート製の使用痕有剥片と1以上3未満の相関関係を示している。

サヌカイト製の楔形石器については第2クラスター内で3以上の強い相関関係を持つのは敲石だけである。その他の石器類については第2クラスター内のサヌカイト製の削器、サヌカイト製の加工痕有剥片、クラスター外のチャート製の使用痕有剥片と1以上3未満、第1クラスターのチャート製加工痕有剥片と1以下の相関関係を示している。

サヌカイト製の加工痕有剥片については第2クラスター内でもクラスター外でも3以上の強い相関関係を示すものはないが、第2クラスターを構成するサヌカイト製の楔形石器、サヌカイト製の使用痕有剥片、サヌカイト製の彫器、磨石、敲石と1以上3未満の相関関係を示している。その他の石器類とはチャート製その他の使用痕有剥片、チャート製その他のナイフ形石器、チャート製その他の削器、チャート製その他の搔器、礫器、サヌカイト製ナイフ形石器、サヌカイト製の搔器、サヌカイト製の削器と1未満の相関関係を示している。絶対数が多いので大きな差となつては現われないものの、1以上3未満の第2クラスターの構成要素として安定した存在であることが観察できる。

サヌカイト製の削器についてはサヌカイト製の楔形石器、サヌカイト製の彫器、チャート製削器、チャート製の使用痕有剥片、チャート製のナイフ形石器、チャート製の錐状石器、チャート製の搔器、磨石、敲石と1以上3未満の相関関係が観察できる。サヌカイト製の使用痕有剥片、チャート製の加工痕有剥片、礫器と1未満の相関関係が観察できる。これを見る限り第2クラスターの構成要素として安定して組合せを持った石器類であるとは言い難く、今後の検討が必要であろう。

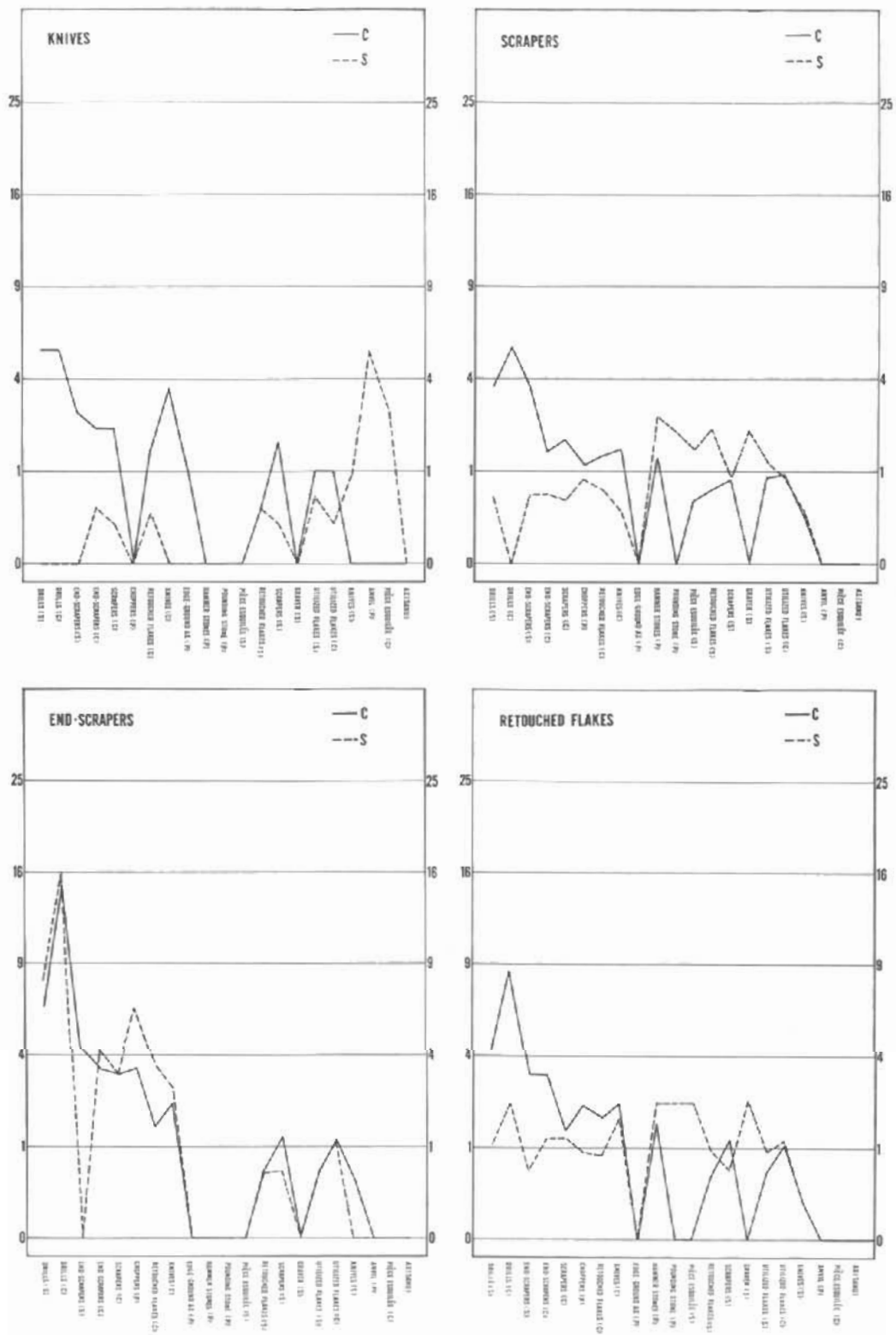
サヌカイト製の彫器については第2クラスターの構成要素である、サヌカイト製の加工痕有剥片、サヌカイト製の削器、クラスター外のサヌカイト製の使用痕有剥片と1以上3未満の相関関係を示している。その他の石器類とはクラスター内、クラスター外とも相関関係が全く見られない。

最後にサヌカイト製ナイフ形石器、チャート製楔形石器、台石の組合せを安定したものとする第3のクラスターについて考察してみたい。サヌカイト製のナイフ形石器と3以上の強い相関関係を持っているのは台石である。第3クラスターの構成要素であるチャート製楔形石器とは1以上3未満の相関関係を持っている。第3クラスター外では1以上の相関関係を示すものもなく、サヌカイト製加工痕有剥片、サヌカイト製使用痕有剥片、チャート製その他の使用痕有剥片、チャート製その他の削器、チャート製の搔器と1未満の相関関係を示している。チャート製の楔形石器についてはサヌカイト製ナイフ形石器と1以上3未満の相関関係を示しているが台石とは全く相関関係が見られない。第3クラスター以外の石器類とはチャート製その他の使用痕有剥片、サヌカイト製の使用痕有剥片と1未満の希薄な関係を示すだけである。

台石については第3クラスターの構成要素であるサヌカイト製のナイフ形石器と3以上の強い相関関係があることが観察できるがチャート製の楔形石器とは全く相関関係を示さない。その他の石器類とはサヌカイト製の使用痕有剥片と1以上3未満の相関関係を示すのみである。

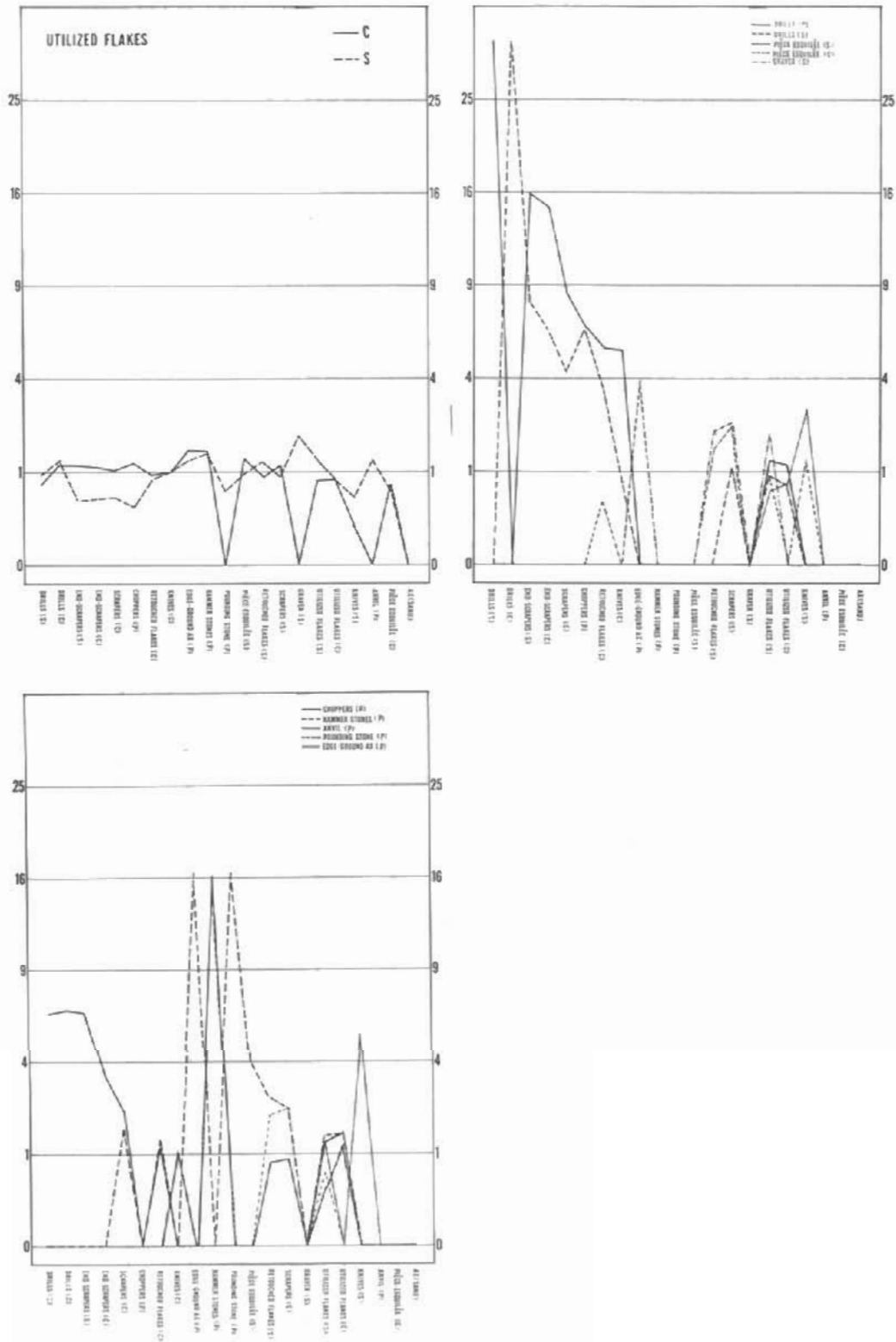
以上、樹状図とネット図を用いて石材別に個々の器種の相関関係を総合的に観察してきた。同器種で石材が違ふと他の器種との相関関係が違った様相を示すことも示唆できた。さらに、同器種において石材差がもたらす器種間相関関係の相違を観察するために器種毎に石材別相関関係をグラフにした(第366

第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布



第366図 石器器種間強度図 1

第IV章 下位文化層の調査



第367図 石器器種間強度図 2

の加工痕有剥片は磨石とは全く相関関係を示していない。サヌカイト製の加工痕有剥片はサヌカイト製の楔形石器と比較的強い相関関係を示しているのに対し、チャート製その他の加工痕有剥片はサヌカイト製の楔形石器とは全く相関関係を持たない。

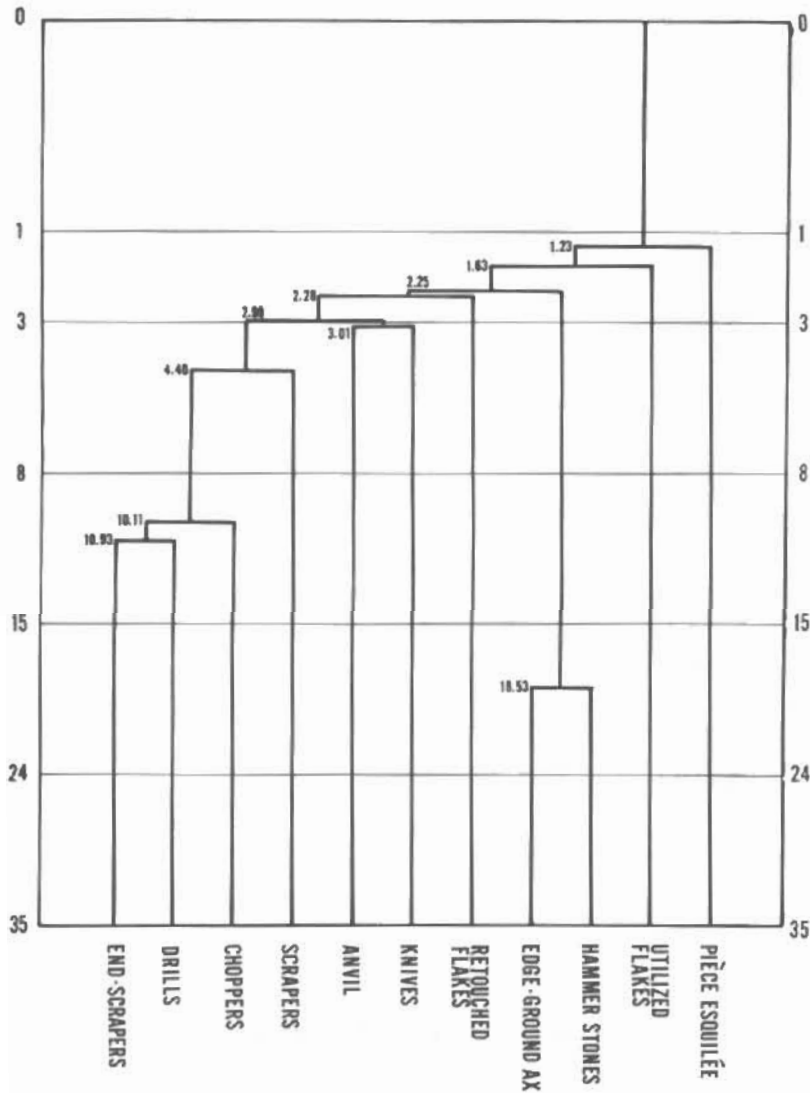
サヌカイト製の加工痕有剥片は彫器とは比較的強い相関関係を持っているが、チャート製その他の加工痕有剥片は彫器とは全く相関関係を持っていない。

**使用痕有剥片**

使用痕有剥片の石材別の器種間相関関係において、全く違う傾向を示しているのは磨石と台石である。

サヌカイト製の使用痕有剥片と彫器は比較的強い相関関係を示しているのに対し、チャートの使用痕有剥片は彫器とは全く相関関係を持っていない。

サヌカイト製の使用痕有剥片は台石とは比較的強い相関関係を示しているのに対し、チャート製その他の使用痕有剥片は台石とは全く相関関係を持っていない。他の器種とは相関関係を示す数値に若干の差異があるとはいえ、傾向としては大差の無いものとして判断できるだろう。



第368図 北群石器器種間相互強度樹状図

錐状石器

錐状石器の石材別の器種間相関関係において、傾向の違いを示しているのはチャート製その他の錐状石器、サヌカイト製の錐状石器、チャート製その他のナイフ形石器、サヌカイト製の削器についてである。

チャート製その他の錐状石器はサヌカイト製の錐状石器と非常に強い相関関係を示しているが、サヌカイト製の錐状石器はサヌカイト製の錐状石器と全く相関関係を持っていない。また、チャート製その他の錐状石器は、チャート製その他の錐状石器と全く相関関係を持っていない。

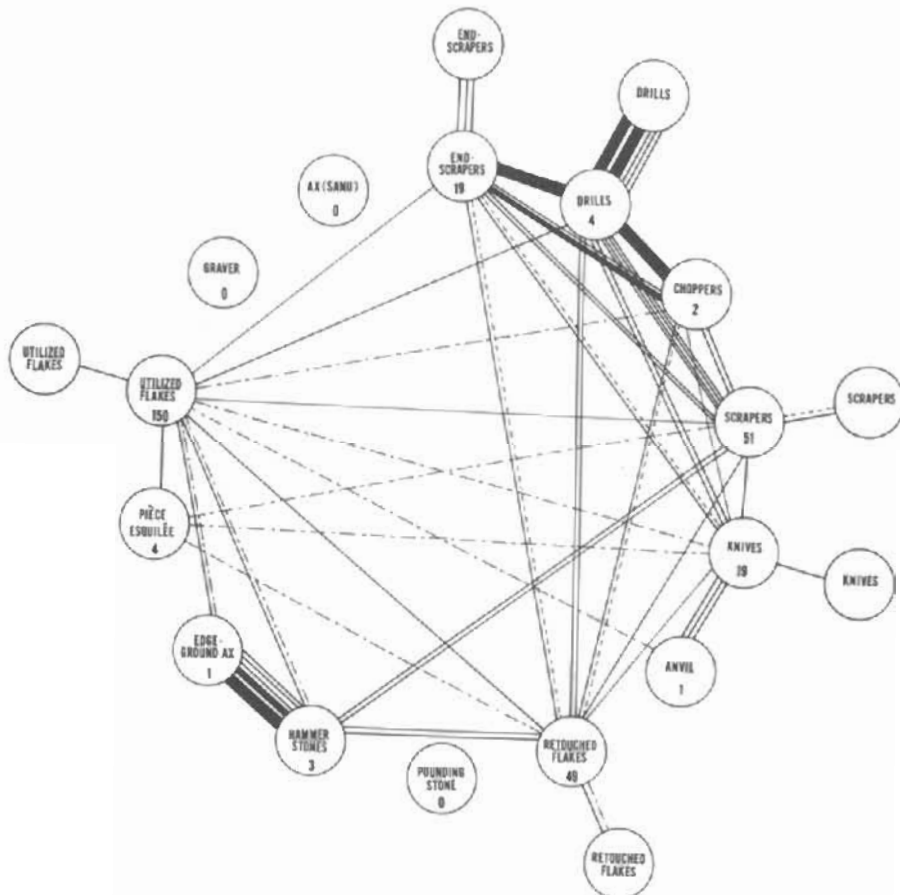
⑤遺跡の北群における全石器（第368図・第369図）

樹状図から読み取れるのは搔器、錐状石器、礫器、削器、台石、ナイフ形石器を含むクラスター、局部磨製石斧と敲石のクラスターである。

他のどの石器とも相関関係を持たないのは彫器・斧形石器・磨石で、北群にない器種である。

ネット図に目を転じクラスター内の個別の器種毎の相関関係を明らかにしたい。搔器、錐状石器、礫器、削器、台石、ナイフ形石器を含むクラスターの中で特に強い相関関係を示しているのは錐状石器、礫器、搔器である。

搔器と錐状石器、搔器と礫器、錐状石器と礫器は、すべての組合せで5以上とう強い強度の相関関係を示している。削器も錐状石器、礫器、搔器と2以上の相関関係を持ちクラスターの構成要素としての安定性を見ることができる。ナイフ形石器もクラスター内の石器とある程度まんべんなく相関関係を示



第369図 北群石器器種間相互強度図

している。ただ、台石についてはクラスター内の器種のうちナイフ形石器としか相関関係を持たない。1つしかない台石がナイフ形石器の近くに偶然存在した結果、高い数値としてあらわれたとも考えられる。すなわち、台石をこのクラスターの安定した構成要素と考えるには今後の比較検討を待たねばならないであろう。

ネット図から同器種の相関関係について考察したい。同器種の相関関係において特に強い相関関係を示しているのは錐状石器であり、集中して分布する傾向を顕著に示している。搔器もまた、同器種同志で強い相関関係を示し一箇所に集中する傾向を示している。

⑥遺跡の南群における全石器（第370図・第371図）

樹状図からクラスターとしてまとめられる可能性を示すのは敲石、磨石、楔形石器である。

他の器種と全く相関関係を示さないのは斧形石器である。

ネット図に目を転じ樹状図から読みとったクラスターを検証したい。

敲石と磨石は非常に強い相関関係を示している。敲石と楔形石器も強い相関関係を示している。その一方で楔形石器と磨石は全く相関関係を持っていない。これにより、このクラスターが普遍的な意味を持つてるといふ裏付けには不十分であるだろう。

同器種同志の石器はどの石器も特に強い関係を示しておらず、一箇所に集中する傾向が見られないことを示している。

⑦遺跡の北群におけるサヌカイト製の石器（第372図・第373図）

樹状図からクラスターとしてまとめられるのは、加工痕有剥片・局部磨製石斧・敲石・削器・楔形石器と、ナイフ形石器・台石、搔器・錐状石器である。

北群に分布するサヌカイト製石器で他の石器と全く相関関係を持たないものは無い。

さて、ネット図を用いて考察を進めたい。

樹状図から読みとった加工痕有剥片・局部磨製石斧・敲石・削器・楔形石器とナイフ形石器・台石、搔器・錐状石器のクラスターであるがネット図においては全体に散漫に分布している様子を示し、特にクラスターとしてまとめられるような強い関係は認められないように思える。その中で個々に強い相関関係を示しているのは、搔器と錐状石器、ナイフ形石器と台石、敲石と局部磨製石斧・加工痕有剥片・削器と楔形石器である。

同器種同志の石器については特に顕著に強い相関関係を示すものが見あらず、同器種の石器の一箇所に集中の無いことを示している。

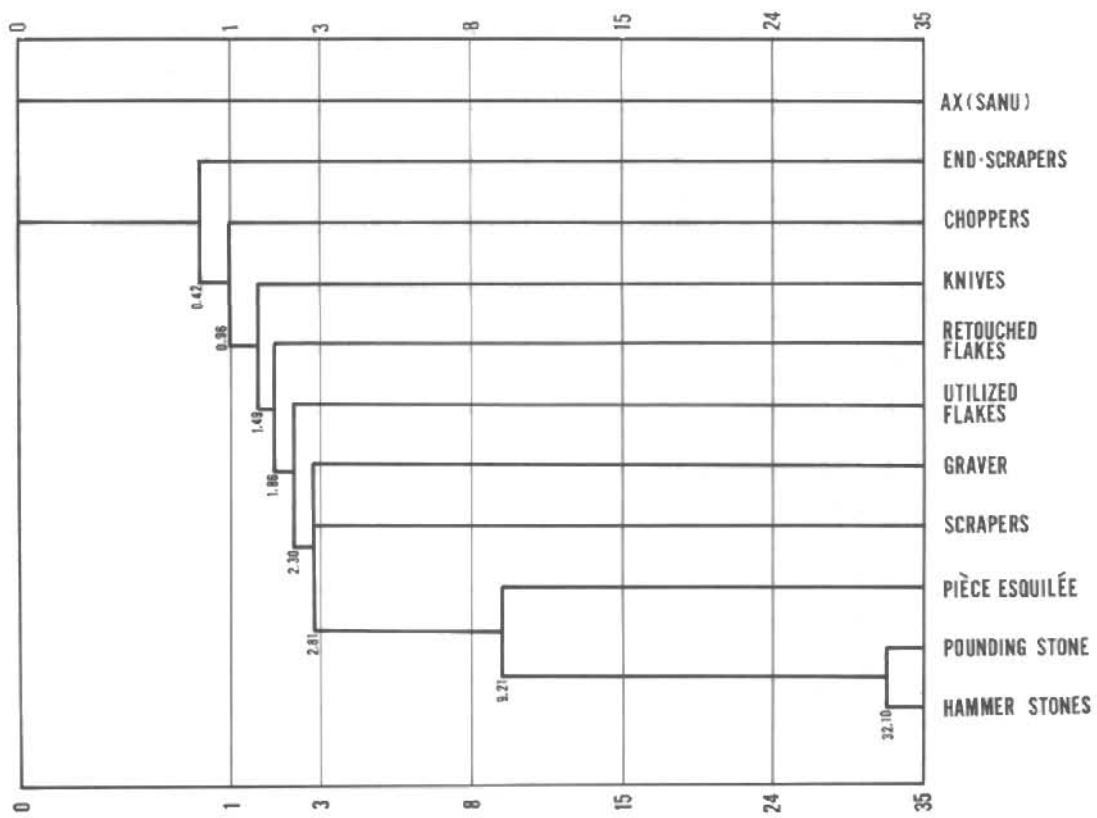
⑧遺跡の南群におけるサヌカイト製の石器（第374図・第375図）

樹状図からは削器・彫器・使用痕有剥片・加工痕有剥片を含むクラスターが読み取れる。敲石・磨石・楔形石器も強い相関関係を示している。礫器とナイフ形石器の関係は弱い。

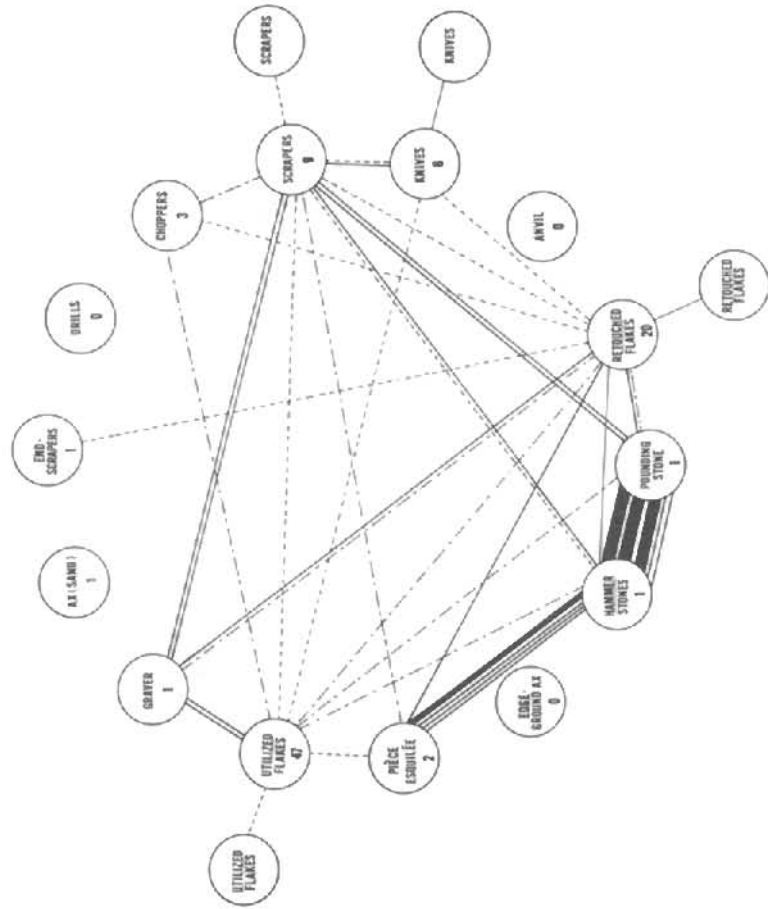
一方、他のどの石器とも相関関係を持たないのは斧形石器である。

さて、ネット図を用いてクラスターの検証を行い、また樹状図からは読み取れない個々の石器の相関関係を考察したい。

樹状図を用いての観察では削器・彫器・使用痕有剥片・加工痕有剥片をまとめて一つのクラスターとし、敲石と磨石・楔形石器を別扱いにした。しかし、ネット図で見てみると、敲石・磨石と楔形石器は、ともに削器と一定以上の関係を持ち、その他のクラスター内の石器ともまんべんなく相関関係が有ることがわかる。このことから削器・彫器・磨石・使用痕有剥片・加工痕有剥片のクラスターに敲石と、楔

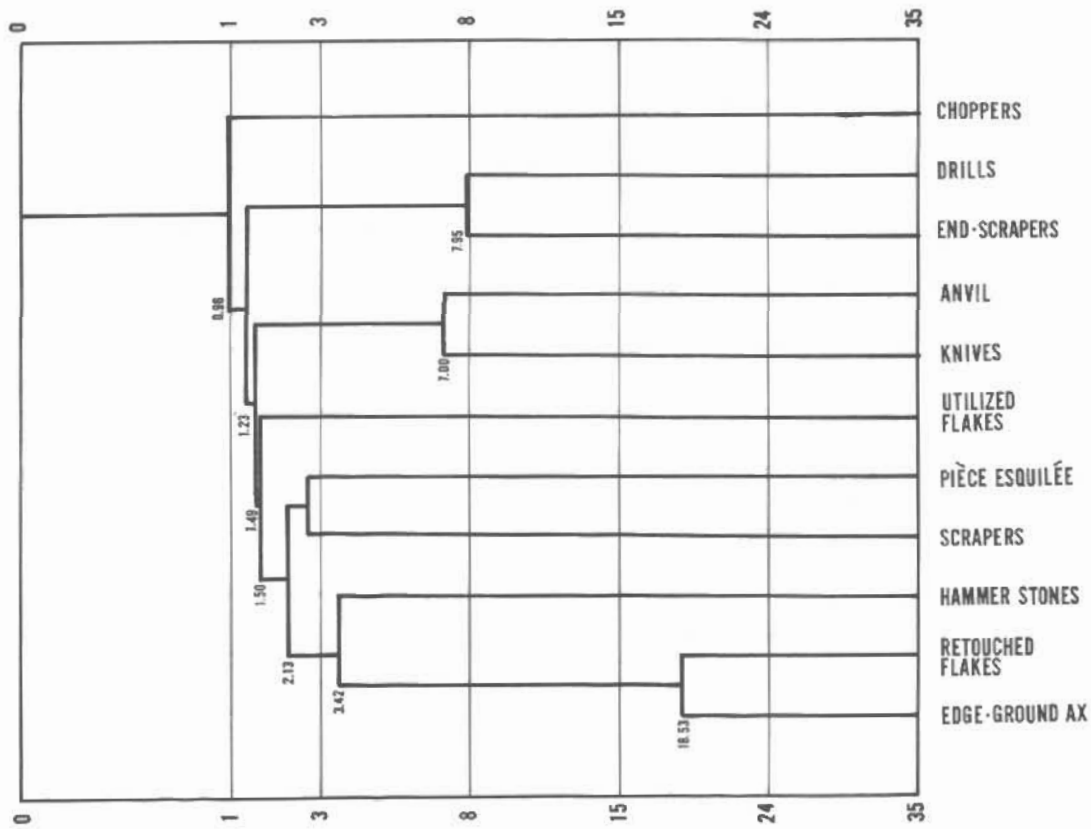


第370図 南群石器器種間相互強度樹状図

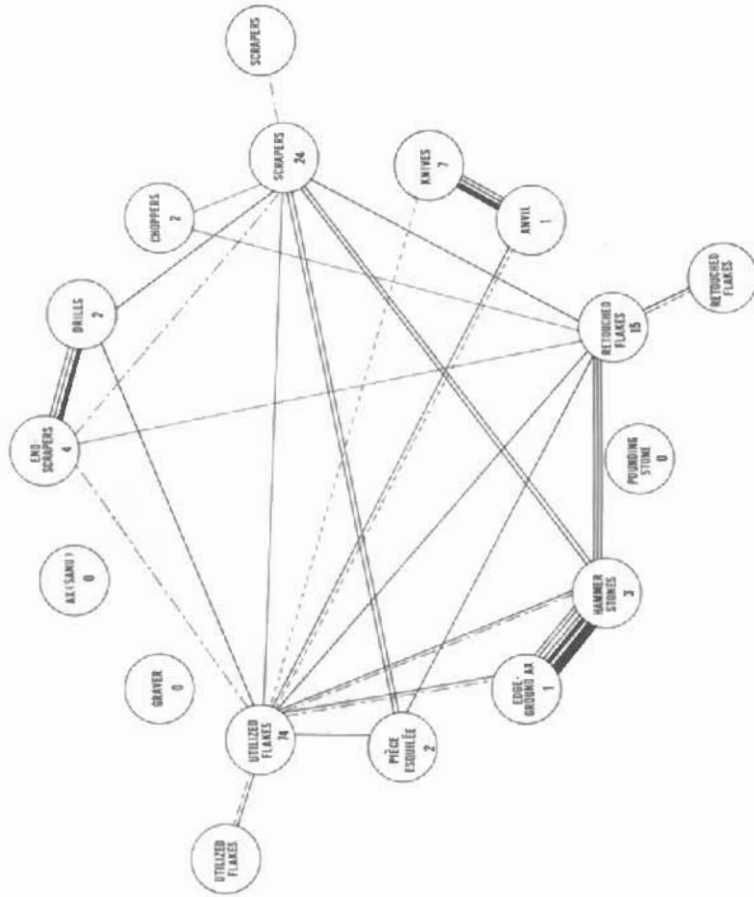


第371図 南群石器器種間相互強度図

第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布

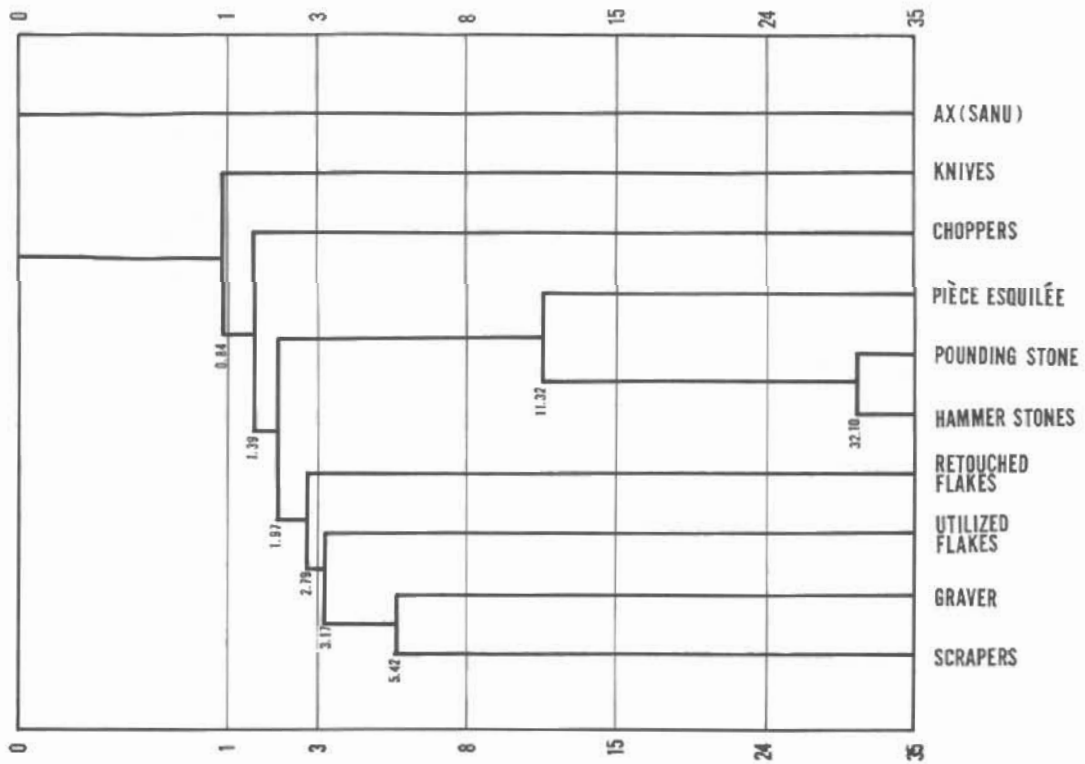


第372図 北群サヌカイト製石器器種間相互強度樹状図

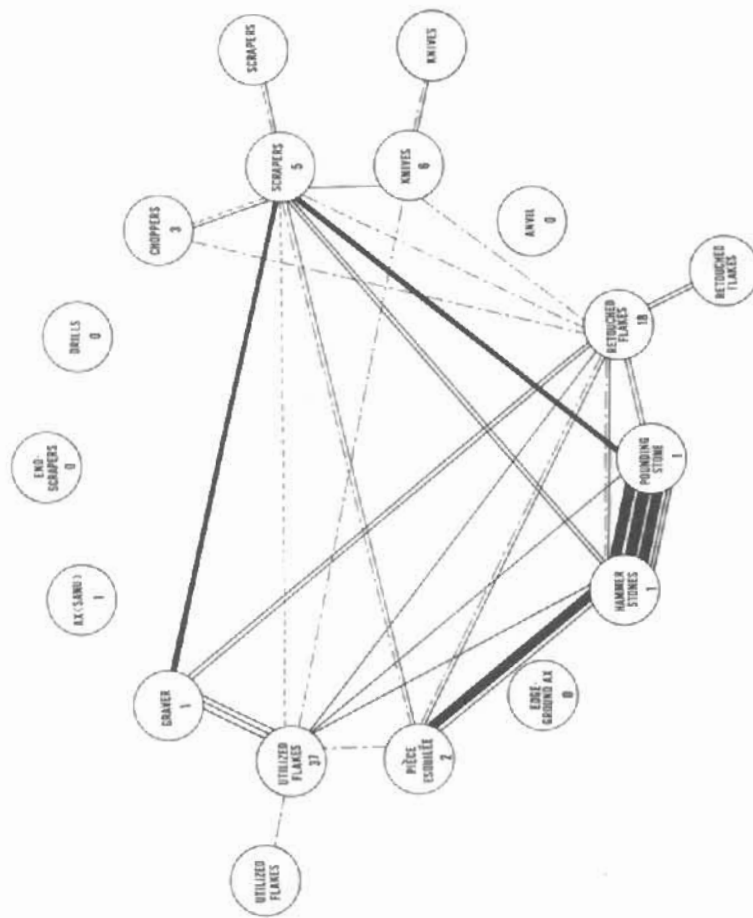


第373図 北群サヌカイト製石器器種間相互強度図





第374図 南群サヌカイト製石器器種間相互強度樹状図



第375図 南群サヌカイト製石器器種間相互強度図

形石器を加えて考えるのが適当だろう。

個々の石器の相関関係については 削器と彫器、削器と磨石、及び、楔形石器と敲石、敲石と磨石が特に強い相関関係を示している。

同器種同志の石器相関関係については特に顕著な事例を認めない。従って同器種同志で一箇所に集中して分布する傾向は見られないと考える。 (渡辺)

#### e, 考察

##### 石器の分布と遺跡の構造

板井寺ヶ谷遺跡下位文化層から出土した石器群は、第IV章第1節の検討で、大きく分けてサヌカイト製とチャート等製の2つが、それぞれ異なった剥片剥離技術体系と石器組成を有していることが指摘できた。ところで、発掘調査時に得た印象では、遺跡内で両石材の石器群がまんべんなく出土するわけではなく、北半にチャート等製、南半にサヌカイト製の石器類が集中するように感じられた。両者が同一石器群の石材の使い分けを示すのか、異なった石器群の共存を示すのかが注目される問題であろう。本項では、石器分布の相関関係を多岐に渡り検討してきた。ここでは、この分析を受けて石器分布の状況から遺跡の構造がどう把握できるかを考えてみよう。

まず、板井寺ヶ谷遺跡全体を、単一の遺跡構造と見なし、すべての石器が同一の背景をもって分布しているという前提の基に分析したのが、分析①である。サヌカイト製とチャート等製石器を区別せずに石器間の関係の強弱を検討した。この分析結果が、板井寺ヶ谷遺跡の一般的分布構造であると仮定できよう。サヌカイト製とチャート等製石器群が、同じ集団に保持され同様の石器組成を持ち、かつその使い分けが行なわれないなら、両石材の個別分布関係の樹状図とネット図によって表される構造は、この一般的分布構造に一致するはずである。両石器群が自立的な分布をするのなら、樹状図とネット図上の食い違いが現われるものと期待できる。まず、この①の分析結果を比較検討の基準としよう。

石材を分けて観察した結果と比較してみると、分析②のチャート等製石器群単独の分布構造は、分析①の全石器類の分布構造よりも搔器・錐状石器・削器・ナイフ形石器等の関係強度が強まり、白石が無関係になった等の変化があるが、ほぼ一致した傾向を見せる。分析③のサヌカイト製石器群単独の分布構造は、分析①の結果と異なる部分が認められ、全体として器種間の関係強度がはるかに弱くなり、搔器と錐状石器の強い強度関係を除いてクラスター構造も一変している。チャート等製石器群は数量的に優位であるので、下位文化層全体での傾向を支配し、ほぼ全石器での傾向と一致したと考えられる。サヌカイト製石器群は、本来的にチャート等製石器群よりもはるかに石器組成が貧弱であるが、さらに同石材石器間での分布構造も異なっている事が知れよう。

両石材石器群の分布構造が一致するなら、両石材の同器種は同じクラスターの近い位置にまとまるはずである。分析④で、石材を区別してサヌカイト製石器群とチャート等製石器群相互の器種間の分布関係を検討してみる。結果は、錐状石器と搔器の両石材石器が非常に強い関係でクラスターを形成したが、両石材の他の器種は関係強度2.19で分けられる大きな二つのクラスターに分かたれることとなった。チャート等製石器群は、関係強度5.30以上のはっきりしたクラスターを作る。サヌカイト製石器群のほとんどは、関係強度2.20程の緩やかなクラスターを形成する。両石材の使用痕有剥片はさらに弱い関係強度で隣あった位置に出現したが、実質の関係強度は弱く、強度のクラスターを作るとは言えない。サヌカイト製ナイフ形石器と斧形石器は、両石材の他器種とほとんど無関係に分布している。

以上の分析から、サヌカイト製石器群とチャート等製石器群のほとんどは、異なった分布構造を有し

ていると考えられる。石材別の器種間に関係強度が強く、同器種間に関係強度より優先していることは明かである。両石材の石器群は、異なった石器群であると考えたほうがよい。

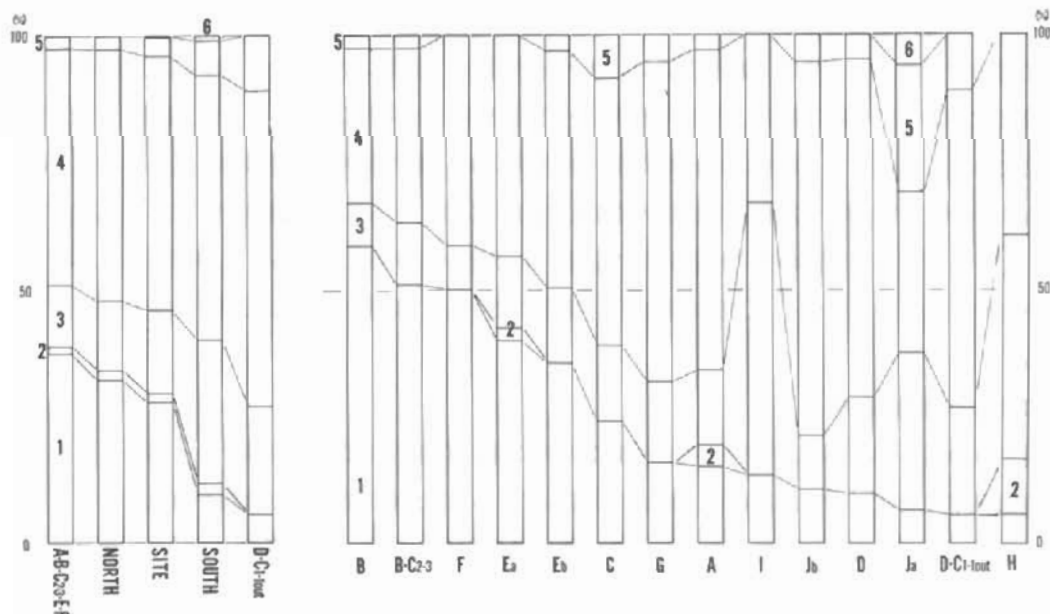
ところが、サヌカイト製石器の内の一部の器種は、チャート等製石器群のクラスターに含まれ、チャート等製同器種石器と同じ分布状況を示すものもある。搔器と錐状石器は、チャート等製同器種と非常に強い関係で結ばれ、サヌカイト製の他器種とは疎遠で、同石器群に組み込まれて分布していると考えられる。この点は、板井寺ヶ谷遺跡下位文化層を、単純に石材で2つの石器群に分離できないことを示している。

両石材は、発掘調査時の印象から、南北に主分布域を分けて分布していると観察されているので、続いてその主分布域での石器器種間分布関係強度の構造を検討した。両石材を合わせた全石器の検討を行なう。北群を石器類ブロックA、B+C 2・3、D+C 1・1 out、E a、E b、F、G、南群をG、H、I、J a、J b、Kとする。Gは境界域として両群に含めた。

分析⑤の北群では、多少の器種の位置が移動し、南群にしかない器種が脱落しただけで、やはり分析①とはほぼ同様の分布構造が認められる。チャート等製石器群のみの分布構造②とも大差はない。搔器・錐状石器・礫器・削器が強い関係を示す。点数の少ない礫石器類は移動が激しい。分析⑥の南群では、北群にしかない錐状石器などの器種が脱落し、さらに分析①とは一変して、どちらかというとなヌカイト製石器群の分析③とはほぼ一致する結果となった。南群は、サヌカイト製石器が主体として分布し、チャート等製石器群は僅かである点が強く反映している。

はたして結果は、南北での石器分布構造が、大きく異なることが知れた。北群での石器分布構造は、チャート等製石器群の分布構造と一致し、それが支配的石器群であることを示す。また、南群での石器分布構造は、サヌカイト製石器群の分布構造から北群に含まれるものを排除したものにほぼ一致し、それが支配的石器群であることを示した。南北で、石器器種間の分布関係構造を支配する石器群が異なっていることが理解されよう。

ところで、サヌカイト製石器群は、搔器のほとんどと錐状石器が北群にまとまり、南群には組成しない。またそれらはチャート等製石器群の分布構造に含まれることが知られている。既に、サヌカイト製



第376図 石器クラスター別組成（群構成器種は第364図による）

石器群の分布構造が南北で一部異なることが明らかになっている。そこでさらに、南北で異なった分布構造を有するサヌカイト製石器を南北に分けてその分布構造を検討する事にした。

分析⑦の北群のサヌカイト製石器群の分布構造は、既に明らかなように搔器と錐状石器の強固なクラスターに特徴がある。ところが、その他の器種は、点数の少ない器種同志以外、相互に強い関係を持たず、全体として関係強度1.50程度の散漫な分布構造が認められるようである。この状態は、分析⑤の北群の強固に構造的な石器分布構造とは全く異なる。一方の分析⑧の南群のサヌカイト製石器群の分布構造は、分析⑥の南群の石器分布構造とはほぼ完全に一致する。サヌカイト製石器群は、南群では南群の石器分布構造と一体化するが、北群では、一部の器種を除き、北群の石器分布構造と全く異なった様相を示すのである。チャート等製石器群は、北群にはほとんどが集中し、南群にはほとんど分布しない事から、南北に分けて分析することは行なわなかったが、北群のチャート等製石器群の分布構造が北群の石器分布構造の大勢を決し、南群の分布構造は、点数が僅かなせいもあって、南群の石器分布構造とは大きく異なった、散漫なものにならざるをえないであろう事は明かである。北群の搔器・錐状石器を除いたサヌカイト製石器群と南群のチャート等製石器群それぞれは、本来の主体域での分布構造を採り得ず、その場での主体石器群の分布構造に従属した立場に甘んじているといえよう。そのような中で、北群のサヌカイト製搔器と錐状石器は、主体石器群であるチャート等製石器群の一部に組み込まれた存在と化し、南群のサヌカイト製他器種と違った地位を得ていると見られる。

両石材の石器群は、南北で主・客の立場を入れ換えているように見える。

以上、分析①から⑦までの分析の結果を総合的に判断すると、以下のような分布実態を指摘する事ができる。

1. 下位文化層は、単一の石器群から構成されるのではなく、サヌカイト製石器群とチャート等製石器群の2者で構成され、両者は異なった分布構造を持つ。
2. サヌカイト製石器群とチャート等製石器群は、前者が南群に、後者が北群に、分布構造を決定する支配石材として、いわば「主体性」を持って分布する。
3. 石材が同じであっても南北で分布構造は異なり、一方の主体域では他方は自身の主体域での分布構造とは異なった様相を示し、従属的な器種となる。
4. 北群のサヌカイト製搔器と錐状石器は、チャート等製石器群の分布構造に同等に組み込まれる。

下位文化層の2つの石器群は、それぞれ異なった分布構造を示すことから、一見無関係に分布するように見える。ところが、それぞれは南北に主体域を持つが、遺跡全体に粗密はあっても分布し、混在関係にあり、一方の主体域では他方は従属的立場に相互になり、さらに、北群のサヌカイト製石器群の一部は、チャート等製石器群の分布構造に組み込まれた状態を呈するのである。この状態は、両石材の石器群が自律的分布をしながらも、同時共存し、両者間で一定の関係が持たれた事を示唆していると考えられる。

#### 石器の分布と機能的関係

分析対象の石器の数量が、分析精度を十分なものに保証できるほどの点数はなく、結果として、板井寺ヶ谷遺跡下位文化層全体、石材別、南北の合計4群といった細別単位での分析が可能になったのみである。個々の場所の空間的機能を明らかにする事はできなかったが、石器類の使用時の組合せについては、重要な示唆を得ることができた。ここでは、チャート等製石器群とサヌカイト製石器群の2つの石器群の分布構造を支えた個々の器種の組合せ、機能的関係について検討しよう。

石器群の分布構造で、強い関係を示して注目されるのが、北群の搔器と錐状石器の組合せである。下位文化層のチャート等製とサヌカイト製の搔器と錐状石器は、同器種で集中し、さらに相互に強い関係を持つ。両者が緊密な位置関係にあるということは、機能を発揮する場合、両者に共通する要素があるのではないかと考えられる。個々の器種としての機能は異なっても、一つの目的のための一連の作業で段階を分けて使用される器種構成を示している可能性が期待されるのである。

一般的に、搔器は「皮なめし具」、錐状石器は「穿孔用具」としての機能を有するものと使用痕分析などの結果から推測されているので、搔器と錐状石器の両者に共通して可能性がある作業として皮革の加工が考慮できる。下位文化層北群で、両器種の位置関係に強い関係が認められたことは、この組合せが皮革加工の作業分担を仲介として成り立ったものである可能性を強く示唆する。この位置関係が認められたのは、石器類ブロックB+C2・3のB2小ブロックの一角、第3土壌上で、遺構的には住居空間である可能性が示唆され(第IV章第3節第6項e)、遺跡内でも特異な定型石器の集中が見られた場所である。土壌と特定の作業とが重複した事実は、土壌の機能云々は別にして、空間の機能上の明瞭な使い分けが行なわれた証拠であると考えられる。遺跡内には、ここほど顕著に複数器種が複数点数の集中を示すような場所はなく、特定の器種間の非常に局地的な現象である。

チャート製石器群の石器器種分布関係の構造では、ナイフ形石器、削器や加工痕有剥片などは搔器・錐状石器と共に強い関係を示している。これらの定型石器が集中傾向にあるのは、本来点数が少なく、一部の共伴が関係強度数値を引き上げるといった統計的傾向と共に、本来の性格として、定型石器が本来特定機能を付与された器種であり、使用される局面が固定的であるからであろう。チャート等製石器群の定型石器の器種間相互の分布関係強度は強く、定型石器は他器種と組み合わせられる場合が多かったと見なせよう。使用痕有剥片は、クラスター中には含まれず、同石材の他器種とはほとんど無関係に分布しているようである。楔形石器の関係も遠いものがある。

一方のサヌカイト製石器群の分布構造は、特異な傾向を示す搔器と錐状石器、緩やかな関係を結ぶ楔形石器・加工痕有剥片・削器と、ほとんど離れて散在するナイフ形石器に分けられる。サヌカイト製石器群では、特定の器種が強固に関係する現象は認められず、緩やかな構造となっている。定型石器を複数特定の場所で集中使用するような状況は認められない。

サヌカイト製とチャート等製の使用痕有剥片が石材差を越えて、同様の分布傾向を示したことは、共通の機能と性格が付与されているからであろう。同石材の他器種と極めて緩やかな関係しか持たないのは、点数がきわめて多く、統計的に拡散状態にあるせいでもあろうが、一方でその事実は、限定的な機能に特化していない、いわば万能石器としての性格を示すからではなかろうか。日常的に、また単独で、どこでも使用される石器であったと考えられよう。

点数の少ない礫石器類や局部磨製石斧・斧形石器、楔形石器・彫器などが関係を有する場合、本分析での統計的方法では、非常に強い関係強度として数値化される。近い位置的関係にあることは事実であるが、偶然を排除できるほどの数量的保証がないため、積極的な解釈には躊躇を覚える場合があるのは事実である。下位文化層での分布構造で、個々の石器を組み合わせるには不安があるので、今後の分析例増加を待って検討したい。

ところで、搔器と錐状石器は、北群に集中して分布し、南群のサヌカイト分布域に小数が散在するのみであったことから、事実上チャート等製石器群の中に固有に抱有され、サヌカイト製石器群の組成では希な器種であると考えられる。サヌカイト製搔器と錐状石器は、サヌカイト製他器種よりもチャート

等製搔器・削器、その他と強い分布関係を持つことが知れた。サヌカイト製搔器と削器は、石材差にも関わらず、チャート等製石器群の分布構造とその機能的使命の発現に連動しているものと見なせよう。

サヌカイト製石器群は、搔器と錐状石器の問題はあるものの、その石材と技術的背景から、瀬戸内系石器群と考えてよい。土壌条件の劣悪さから、瀬戸内系旧石器の編年作業は進展せず、板井寺ヶ谷遺跡下位文化層と対応できる遺跡は知られていないが、一般に瀬戸内系旧石器は、単純な石器組成を有するに留まることが知られている。瀬戸内東部、近畿中央部でのほとんどの瀬戸内系旧石器を出土した遺跡の石器組成は、サヌカイト製のナイフ形石器に少数の削器があるに留まり、それに多量の加工痕・使用痕有剥片が伴うというものである。搔器・楔形石器・錐状石器・彫器などの器種はきわめて希である。

一方のチャート等製石器群は、その石材利用と技術的背景から在地の石器群と見なせるであろう。これを中国山地系石器群と捉え、始良T<sub>0</sub>火山灰降灰前後から石器組成が豊富化していく流れを内包しているものと理解するなら、ナイフ形石器・削器・楔形石器等に、搔器・錐状石器等が加わり、定型石器の組成が豊富化していく流れがあることが知られている。加工痕・使用痕有剥片は、多量に伴う。

板井寺ヶ谷遺跡下位文化層の搔器と錐状石器を除外したサヌカイト製とチャート等製の両石器群の分布構造は、石器組成・石器製作技術の相違と併せて、個々の点で大きく相違している。現状で、この相違がどの様な原因でもたらされたのか十分な検討を行なうには、余りに情報の蓄積がないが、いくつかの推測は可能である。

瀬戸内地域東部・近畿地方中央部でサヌカイト製石器群を出した遺跡、中国山地系石器群を出した遺跡の分布構造は、板井寺ヶ谷遺跡のサヌカイト製とチャート製の両石器群同様に違いがあると考えた方がよい。瀬戸内系旧石器を保持する集団はサヌカイト製石器群の貧弱な石器組成で、チャート製石器群を保持する集団はチャート等製の豊富な石器組成で、それぞれ賄える生業活動を行っていた。旧石器時代において、両者の生活・生業活動の内容に大きな隔たりがあったとは考えにくい。何段階かの工程のある作業が、サヌカイト製石器群では汎用的単一器種で、チャート等製石器群では機能特化した器種を複数で、行なわれなければならなかったのだろうか。両石器群には道具の利用方法に大きな差異があったことになる。汎用的石器で代用できる作業内容については問題なからうが、例えば穿孔用具としての錐状石器などは、代用が不可能とも考えられる。このような場合、両者には皮革加工の頻度に大きな差があったのだろうか。代用置換が可能な石器器種と、不可能な固有の機能を持つ器種の多寡の問題は、生活・生業活動との関係で、石器個々の機能の解明と、石器群の組成を考察することが必要である。

後期旧石器時代社会の生業技術は、考古学的には石器組成の内容に反映すると一般に考えられているが、石器分布の構造にも、石器使用時の空間利用や組合せによって反映した部分があると考えて良いであろう。サヌカイト製搔器と錐状石器は、以上の状況から考えると、サヌカイト製石器群とチャート等製石器群の両者が下位文化層で接触し、単純な石器組成のサヌカイト製石器群がチャート等製石器群に触発され、協業的行動を取ろうとしたがために新たに生産されたものである可能性も、可能な解釈の一つとして考慮されるであろう。

さて、下位文化層で確認された搔器と錐状石器の関係は、非常に局所的な現象であった。この組合せが、皮革の加工に関わりがあり、その場所で皮革加工が行なわれたことを示すなら、逆に考えると、遺跡内の他の場所では全く皮革加工が行なわれなかったことを示すのであろうか。搔器と錐状石器は、両器種での強固な関係はないものの、石器類ブロックB以外にも散在し、搔器と錐状石器を使用する工程が個々に行なわれたならば、皮革加工は有り得たであろうと思われる。そもそも、両器種が連続して使

用される作業があったとしても、作業終了時に石器がその場所から持ち出されれば、考古学的な事実としての器種間の関係は見いだせなくなるのである。

定型石器固有の寿命は、一所でなされる作業の必要時間より長く、その機能を発現する個々の局面で寿命を終えて残される場合は少ないと考えられる。ほとんどの場合は次の場所での利用のために持ち運ばれていく。しかし、遺跡内での定型石器の分布構造がまったく無関係になるほど解体されるとは考えられず、総体としての関係は保たれると考えてよい。事実、本分析の結果ではその他の部分で強固な関係を指摘することができた。一方、使用痕有剥片は、その場限りの使用が多かった可能性が大きい。本稿では分析しなかったが、調整剥片や碎片、石核などは、定型石器と比較して、持ち運ばれる可能性は極めて低い。器種毎の分布位置の背景を考慮する必要があるだろう。検証すべき考古学的事実が失われた「場の機能」や、本来の生活・生業活動という考古学的事実を結びつける情報が失われた考古学的事実が集積したのが、ほとんどの遺跡の構造なのである。

石器類の分布は、その遺跡から他へと移動が行なわれる直前の状況が遺されると考えられる。生活状態のまま廃絶する場合は、構成員が急激に死滅した場合や大規模天災の場合など、希であるのかも知れない。意図的に解体されたりして失われたり、状況として考古学的に曖昧になっている「場の機能」の復元を行なっていく必要があるだろう。

以上、本項で分析・考察した結果は、2つの石器群の関係、石器器種の使用時の組合せなど、多岐の成果を含んでいる。このような内容を、数値を視覚化した樹状図とネット図によって提示し、客観的に判断できるようにしたのは、旧石器時代遺跡の石器分布を表示する新しい試みであるといえよう。旧石器時代の遺跡には、集団差、活動内容、季節など、多くの変化をよびおこす条件が推測できる。今後は統計学的方法を洗練することに併せ、分析事例の蓄積を行なうとともに、遺跡個々の置かれている状況を石器群の解釈に織り込んでいくことが求められると考える。(山口・渡辺)

#### 4. 接合資料・個体別資料の分布

下位文化層の合計2,353点の石器類は、礫石器類を除けば、チャート等の特徴に富む石材と、個体差の乏しいサヌカイトに2分される。チャート等は、個体差の明瞭な石材特性に助けられて、個体識別・接合作業とも十分に行なうことができた。チャート等の合計1,340点の内個体識別されたのは合計1,053点、78.5%、接合されたものは合計327点、24.5%に及ぶ。一方のサヌカイトは、個体識別が事実上不可能であり、また接合作業を行なう上でも多大な困難があった。サヌカイト合計976点の内、接合したのは合計116点、11.8%に留まる。

近年、個体別資料分析は遺跡構造の検討に重要な役割を果たしつつある。遺跡研究の最も重要な位置を占める個体別資料作業を、全石器類の約40%を占めるサヌカイトに行えなかったことは、遺跡構造の理解の上で、大きな影響があろう。特に、サヌカイトとチャート等の石材を分けて観察したとき、遺跡内での分布領域に大きな偏りが観察されており、両者を比較しようとした場合、サヌカイト側の情報量がきわめて不足する。両石材群に、最も重要な分析方法を共有し得ない点は残念である。個体別資料の分析によって検討できるのは、チャート等の分布領域に限定される。

接合資料は、サヌカイト製石器群でも、チャート等ほど大量ではないにしても、個体識別の不可能な均質な石材特徴にも関わらずかなりの点数を見出すことができた。個体識別の容易であったチャート等と同等に扱うには、接合率の点で不安があるが、遺跡全域をカバーし、また、石材すべてを検討の内に入れようとするとき、接合資料が最も良好な検討資料であろう。

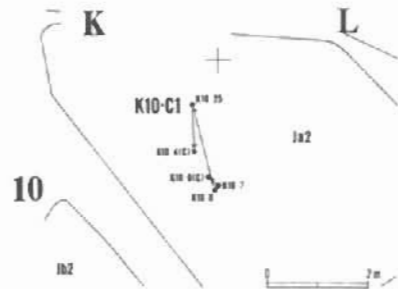
ここでは、第IV章第2節第2項で記述したチャート等の個別別資料の内、剥片剥離工程の追える接合資料を含むような良好な遺存状況の個体について、接合資料を中心に分布状況を検討する。また続いて、第2項で記述された内の多数接合資料を中心に、サヌカイトの接合資料の分布状況を検討する。剥片剥離工程に付いての記述は、第IV章第1節を参照されたい。

a, チャート等製個別別資料

個別別資料No.1 (第377図)

総資料は6点で、すべてが接合する。剥片4点、石核2点からなる。5点がJa2ブロックから出土し、あとの1点は上層に遊離している。

小亜円礫を2分割し、若干の剥片を剥離した個体であるが、有効性には疑問がある。最初期から最終末まで、すべての工程が一括して残されている。一個所で集中的に消費された個体であろう。

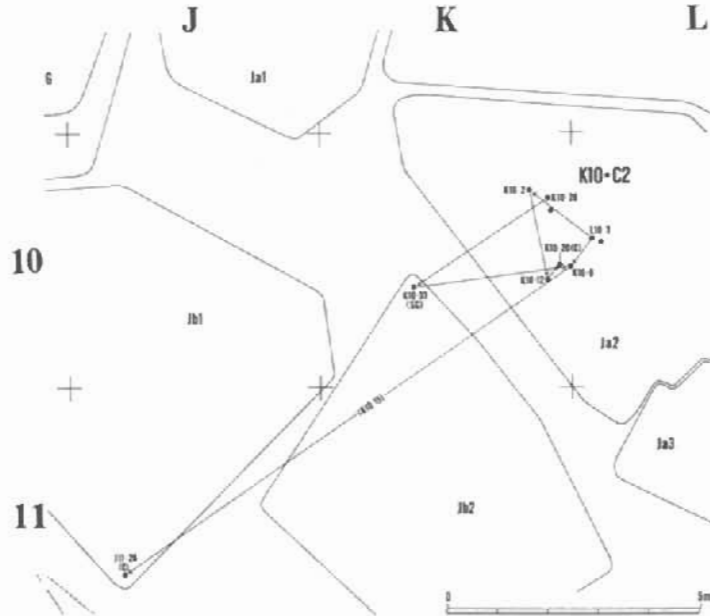


第377図 個別別資料No.1 分布図

個別別資料No.2 (第378図)

総資料は11点で、このうち9点が接合、2点が非接合である。内訳は削器1点、剥片8点、石核2点である。1点が上層に遊離している。Ja2に剥片8点、Jb2に削器1点、Jb1に石核1点がある。

亜円礫を2つに分割し、それぞれから石器生産を行なった個体で、節理面での破砕が多く、石器としては削器1点があるのみである。Ja2には剥片類すべてが残されていることから考えると、ここで剥片剥離作業が進行し、削器K10



第378図 個別別資料No.2 分布図

.33 (SC Jb2) はJb2に、石核J11.26 (CORE Jb1) はJb1に搬出されたのであろう。Ja2の剥片剥離作業の行なわれた場所から削器 K10.33 (SC Jb2) までは約3m、石核 J11.26 (CORE Jb1) までは約11mである。

個別別資料No.3 (第379図)

総資料は12点で、接合資料1群7点と非接合資料5点からなる。内訳は、剥片12点である。すべての資料がJa3に集中する。

拳大の円礫を素材とし、帽子状剥片はないものの最初期から剥片を行なった個体。石材消費量は素材の約3分の1ぐら



第379図 個別別資料No.3 分布図



いか。接合資料中には不定型剥片が多いが、非接合資料中には石材良質部から剥離された良好な形状の剥片がある。石核は未発見である。すべての資料がJ a 3内で完結して分布するが、石核は遺跡外に搬出されている。

**個別別資料No.23 (第380図)**

総資料は28点で、接合資料4群9点、非接合資料19点からなる。内訳は、使用痕有剥片3点、剥片21点、碎片2点、石核2点である。このうち6点が原位置を失っている。B 1に剥片7点、B 2に剥片1点、B 3に石核1点、C 2に使用痕有剥片2点、剥片1点、碎片1点、C 3に剥片3点、E b 1に剥片1点、F 1に剥片4点、石核1点がある。

同一の母岩を2～3群に分割し、個別に消費されたものと考えられる個体群である。B 1とF 1にやや集中して分布するが、まとまった接合資料はなく、全体として複数の石核が遺跡内に搬入されたあと若干の剥片剥離を行い、また持ち出されたものと考えられよう。やや幅広ではあるが、目的剥片と思われる非接合資料がある。2点の石核は、分割された個体群の内、剥片剥離作業が終了した後、遺跡外へ搬出されなかったものである。

**個別別資料No.24 (第381図)**

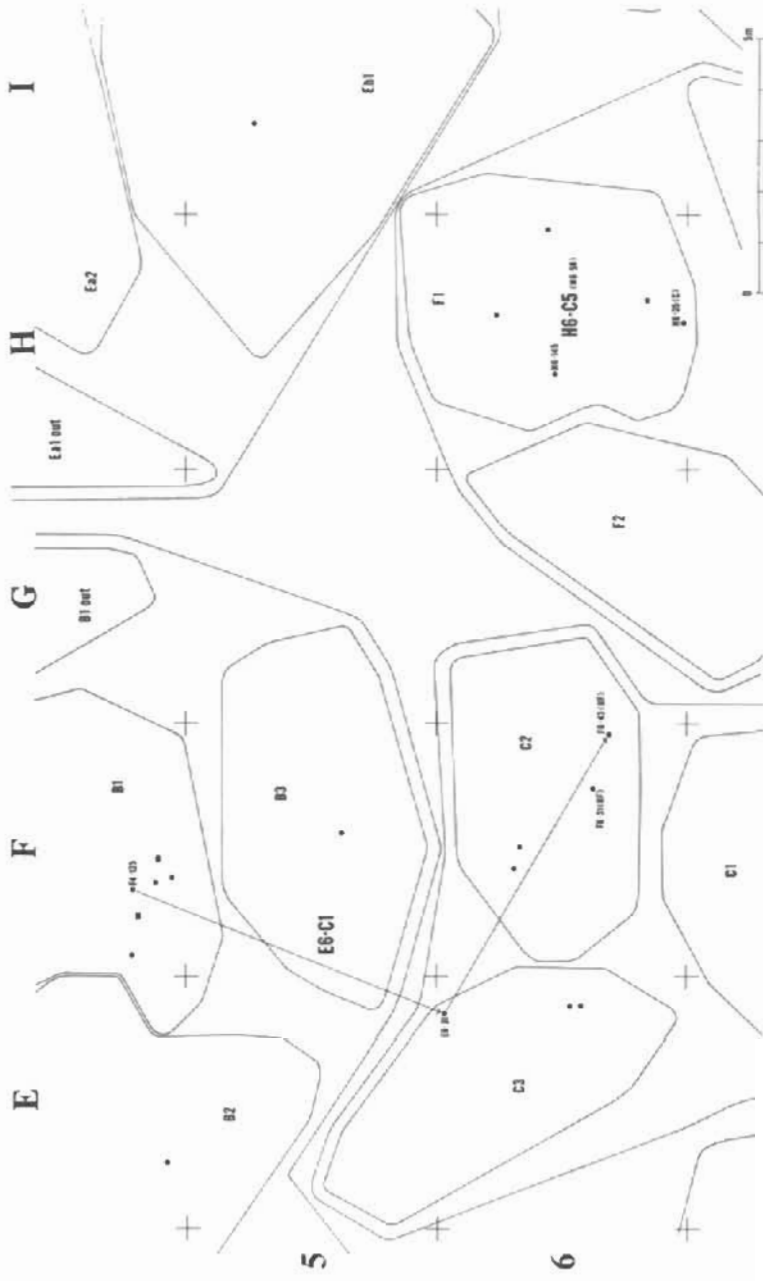
総点数40点で、接合資料3群23点、非接合資料17点からなる。内訳は、使用痕有剥片2点、剥片32点、碎片4点、石核2点からなる。このうち、8点が原位置を失っており、C 3から剥片1点、E b 1から剥片2点、碎片1点、E b 2から剥片1点、F 1からは使用痕有剥片1点、剥片17点、碎片3点、石核2点、F 2から使用痕有剥片1点、剥片3点が出土している。

最初期の工程は不明であるが、厚い板状材の側面を左右に移動しながら剥片を剥離する個体である。F 1にほとんどの接合資料が集中し、剥片剥離作業がF 1で行なわれたことが知れる。接合資料の内、単独で12m離れたJ4.1(F Eb2)は、剥離されたその他の剥片と比べて大型の貝殻状剥片である。とくに使用痕などは認められないが、剥片剥離の行なわれたF 1ブロックから持ち出されたのであろう。非接合資料で周辺に散らばるものは、F 1の剥片剥離が行なわれたところからほぼ5m以内に限定して分布する。剥片剥離が進行する過程で、大型剥片を石核に転用しながら作業が進行し、大型剥片素材石核はF 1内に残されるが、本来の中心石核はかなり大型のまま、遺跡外へ搬出されている。

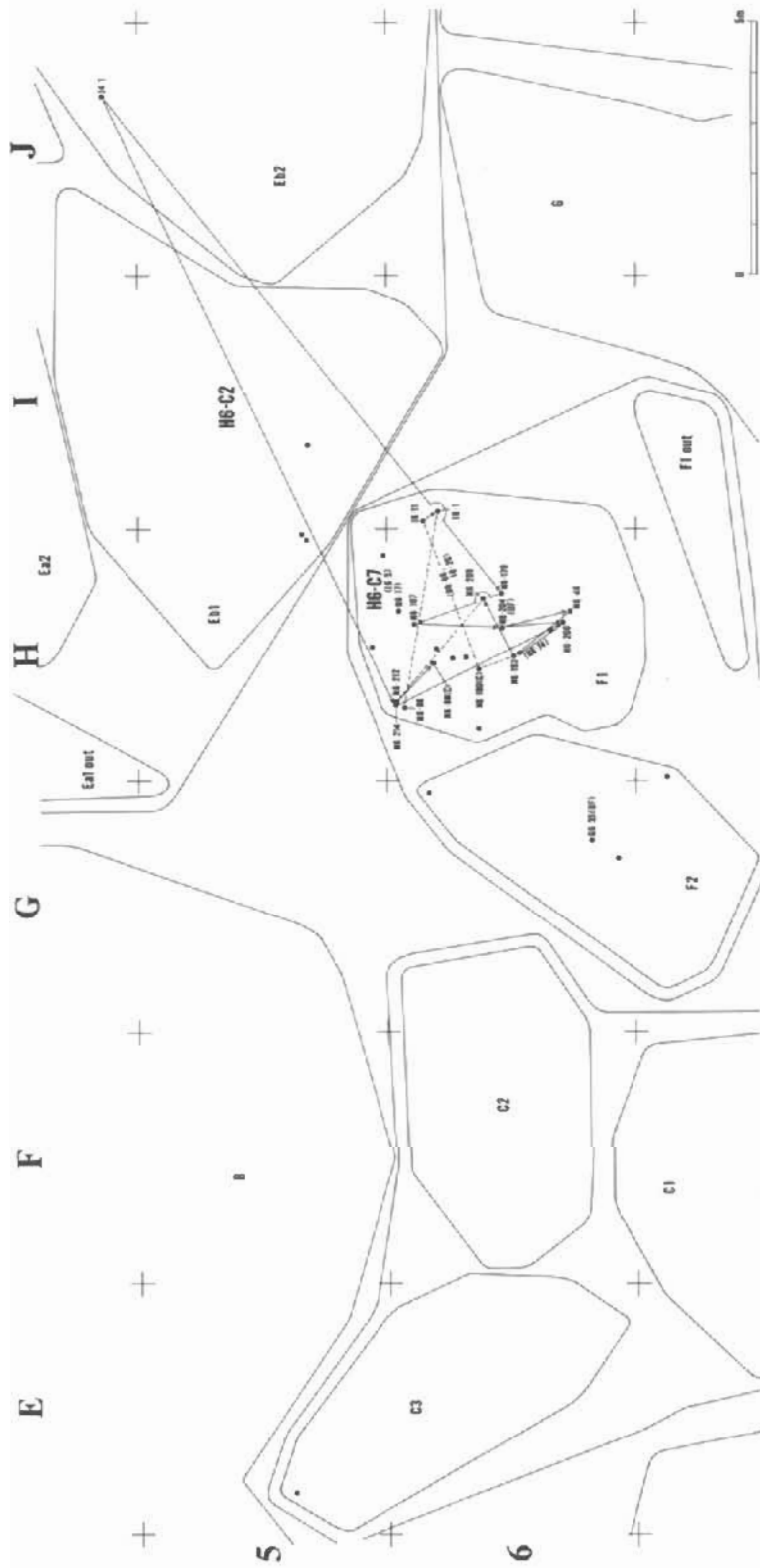
**個別別資料No.45 (第382図)**

総点数70点で、接合資料9群28点、非接合資料は43点である。内訳は、使用痕有剥片2点、剥片54点、碎片12点、石核2点である。個別別資料中、最大点数を誇る。A 1には使用痕有剥片1点、剥片16点、碎片9点、A 2は使用痕有剥片1点、剥片17点、碎片2点、石核2点、A 2 outには剥片1点、A 3には剥片12点、碎片1点、E a 1には剥片3点、E a 2には剥片3点、E b 2には剥片2点、遊離資料1点が出上した。

多数の接合群と非接合資料が含まれ、一つの母岩から作られた個体群と考えた方がよい。2～3cm厚の板状の母岩を複数に分割したもので、それから剥片剥離が行なわれている。工程は、節理が発達し、大型の剥片を生産しにくい石材であることから、分割から剥片生産まで整ったものではなく、剥片も整った形状に乏しい。接合群はA 1・A 2・A 3に集中し、剥片剥離作業が石器類ブロックAの内部に限定して展開したことを示す。分割ごとに剥片剥離作業が進行するが、残された残核の点数は2点に留まり、その他の石核が遺跡外に搬出されたか、節理などで破碎したか、判断は付きにくい。



第380図 個体別資料No.23分布図



第381図 個体別資料No.24分布図

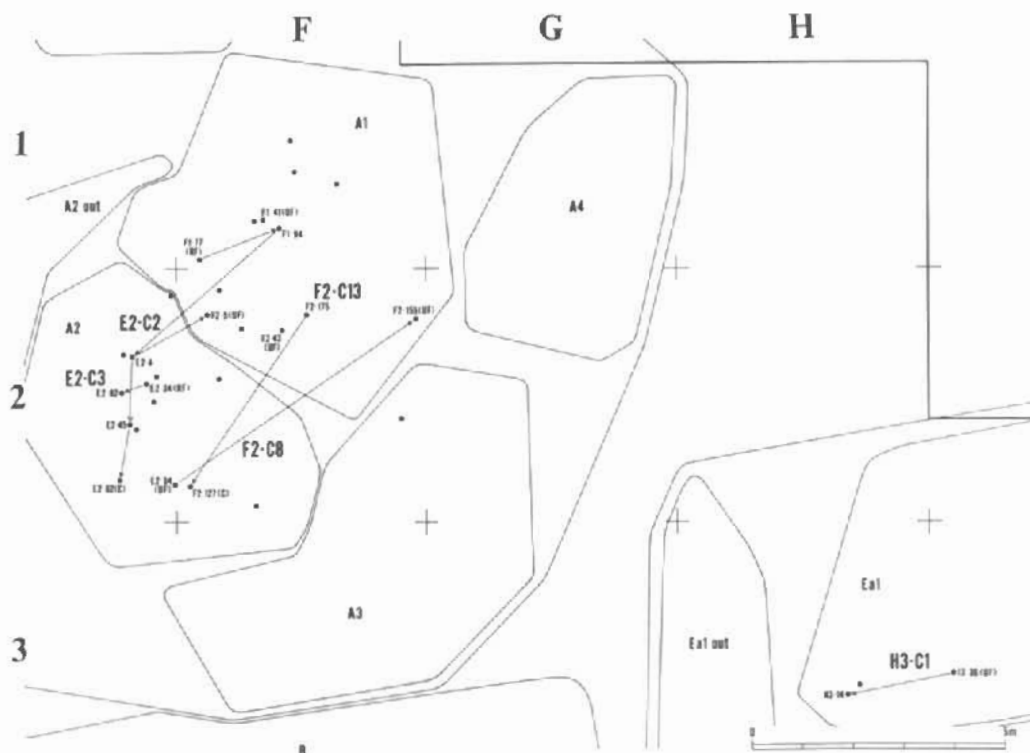


第382図 個別別資料No.45分布図

個別別資料No.59 (第383図)

総点数31点で、接合資料5群14点、非接合資料17点がある。内訳は、加工痕有剥片2点、使用痕有剥片6点、剥片17点、碎片4点、石核2点である。A1から加工痕有剥片1点、使用痕有剥片4点、剥片6点、碎片3点、A2から、加工痕有剥片1点、使用痕有剥片1点、剥片8点、碎片1点、石核2点、A3から剥片1点、E a 1から使用痕有剥片1点、剥片2点が出土している。

拳大の亜円礫を分割し、個々に剥片剥離作業を展開したもので、少なくとも3群ほどの単位で剥片剥離作業が進行したものと考えられる。A1とA2に残された接合資料・非接合資料からみれば、ここで剥片剥離作業が行なわれたと考えられるが、接合群が母岩のどの位置か推定するのに困難があるほど、



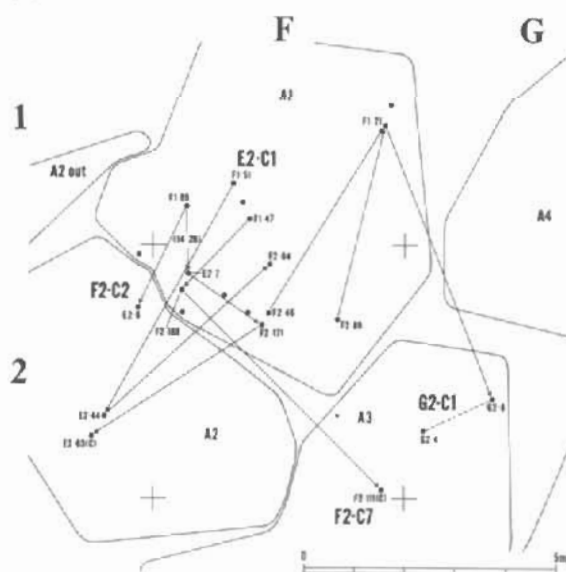
第383図 個別別資料No.59分布図

持ち出された資料が多い。ただ、一部の群は、石核として遺跡外に搬出されたであろうが、剥片の持ち出しが主であったと考えられる。E a 1の接合資料には自然面が付着し、石核調整段階の資料である可能性もある。

個別別資料No.61 (第384図)

総点数で23点、接合資料4群17点、非接合資料6点がある。内訳は、剥片16点、碎片5点、石核2点である。1点が上層から原位置を失って発掘され、A1で剥片11点、碎片5点、A2で剥片2点、石核1点、A3で剥片2点、石核1点が出土している。

おそらく直径10cm程の亜円礫をいくつかに分



第384図 個別別資料No.61分布図



第385図 個別別資料No.62分布図

割して、剥片剥離を行なった個体である。A1での点数が多く、接合資料もここを起点にすることから、主にA1で剥片剥離作業が行なわれたと考えられる。A2・A3からは、接合資料中の残核状態の石核2点や剥片が出土したが、これらA2・A3で剥片剥離作業が行なわれたと考えるよりも、廃棄された状態を示すものとも考えることができる。A1の剥片剥離作業が行なわれた場所から両石核までの距離が、4m・5mで、剥片剥離作業場所周辺に散らばる非接合資料よりも遠い位置にある。

個体別資料No.62 (第385図)

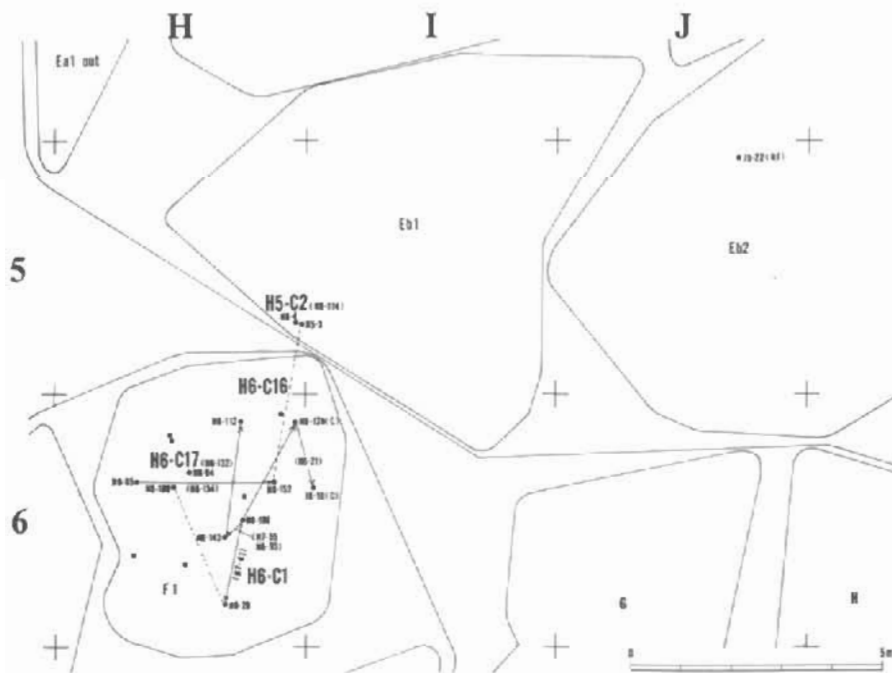
総点数25点で、接合資料2群8点、非接合資料17点からなる。内訳は、使用痕有剥片2点、剥片18点、碎片4点、石核1点である。3点は上層から出土し、A1で剥片1点、碎片3点、A2で剥片8点、石核1点、A2 outで剥片2点、A3で使用痕有剥片2点、剥片1点、碎片1点、E a 1で剥片2点、E b 2で剥片1点が出土している。

小円礫を素材とし、さいころ状にすべての面で剥片剥離が進行した個体。接合資料F2C6は剥片剥離作業中期～終末の段階である。接合資料F2C6はA2に集中し、ここで剥片剥離作業が行なわれたものと考えられる。使用痕有剥片F3.27(UF A3)は、A2からA3へと持ち出されたものと考えられよう。Eに散布する石器類には使用痕など観察されないが、I3.16(F Ea1)のように石器素材となり得るものがある。

個体別資料No.88 (第386図)

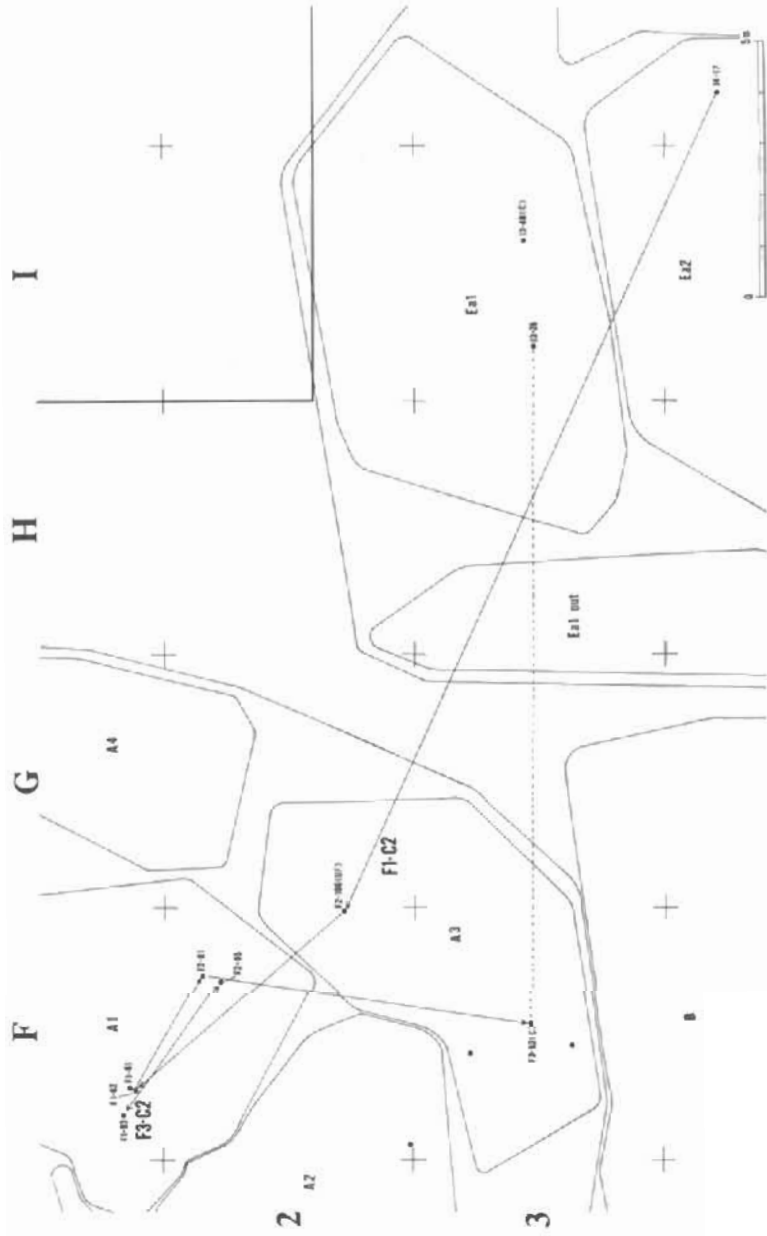
総点数33点で、接合資料4群23点、非接合資料10点からなる。内訳は加工痕有剥片1点、剥片30点、石核2点である。13点が遊離して上層から出土した。E b 1で剥片2点、E b 2で加工痕有剥片1点、F 1で剥片15点、石核2点が出土している。

板状材の分割から、打面転移を激しく行いながら剥片剥離を行なうもので、早い時期に少なくともH6 C1とH6 C16に代表される2つの群に分割されているようだが、遺跡内で分割が行なわれたのかどうか分からない。接合資料は、ほとんどがF 1内に完結し、剥片剥離作業がここで行なわれたことが分かる。E b 2へ加工痕有剥片J5.22(RF Eb2)が持ち出されている。



第386図 個体別資料No.88分布図

第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布



第387図 個別別資料No.89分布図



個体別資料No.89 (第387図)

総点数14点で、接合資料3群12点、非接合資料2点からなる。内訳は、使用痕有剥片1点、剥片9点、石核4点である。位置不明の1点と、A1で剥片5点、A2で石核1点、A3で使用痕有剥片1点、剥片1点、石核2点、Ea1で剥片1点、石核1点、Ea2で剥片1点が出土している。

接合資料F1C2は直径7cm程の垂円礫を素材としており、母岩分割の有無は分からないが、全体として最初期の剥片が剥離されたあと、すべての工程が認められる。接合資料はA1に集中し、剥片剥離作業がここで行なわれたことが知れる。A3でF1C2の石核F3.52(CORE A3)と使用痕有剥片F2.106(UF A3)が出土した。また、剥片J4.17(F Ea2)がEa2から出土している。

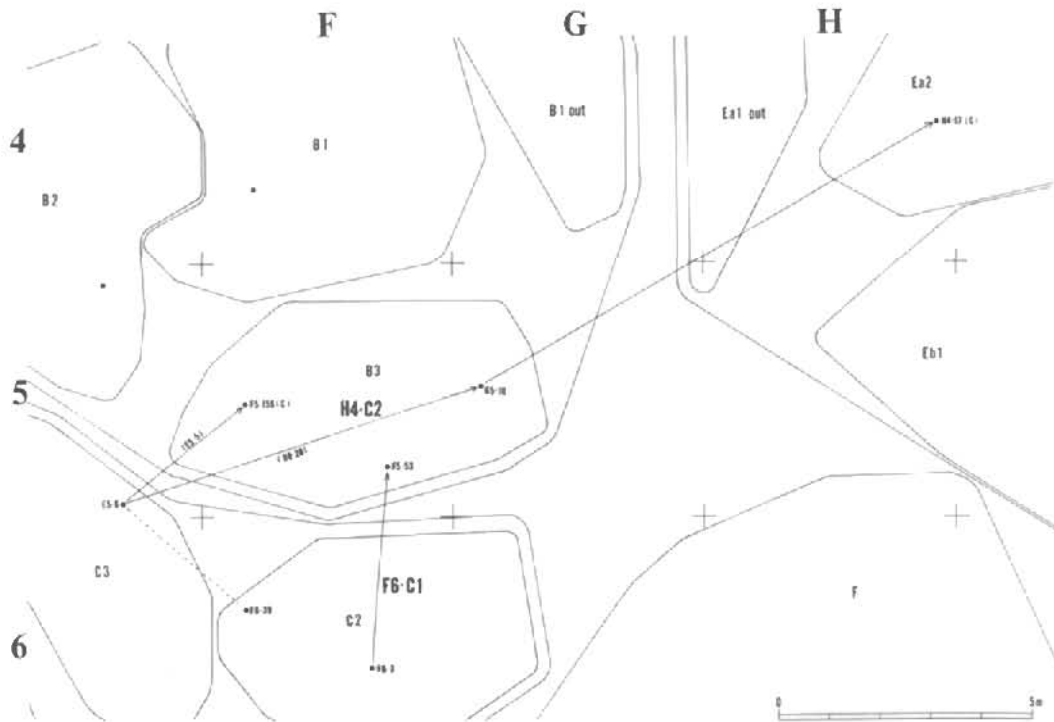
個体別資料No.97 (第388図)

総点数15点で、接合資料2群9点、非接合資料6点からなる。内訳は、使用痕有剥片1点、剥片11点、石核3点である。このうち、6点が原位置を失っており、B1で剥片1点、B2で剥片1点、B3で剥片2点、石核1点、C2で剥片2点、C3で剥片1点、Ea2で石核1点が出土している。

石材の分割面に作業面を設定して打面転移をしながら剥片剥離を続けた個体である。B3を中心に散漫に分布する。接合資料は個体の剥片剥離作業終末段階を示すが、剥片剥離作業の中心位置を特定することは困難であり、所属資料のブロック間の搬入搬出が激しかったことが窺える。石材が比較的良好なものにも関わらず、定型石器が認められない点は、遺跡外への搬出を推測させる。

個体別資料No.100 (第389図)

総点数35点で、接合資料5群11点、非接合資料24点からなっている。内訳は、ナイフ形石器1点、搔器3点、削器4点、加工痕有剥片2点、使用痕有剥片1点、剥片17点、碎片3点、石核4点である。11点が遊離して位置を失い、A3で碎片1点、B1で加工痕有剥片1点、B1 outで削器1点、剥片2点、石核2点、B2で剥片1点、C2で削器1点、D2で加工痕有剥片1点、剥片1点、Ea1で剥片1点、

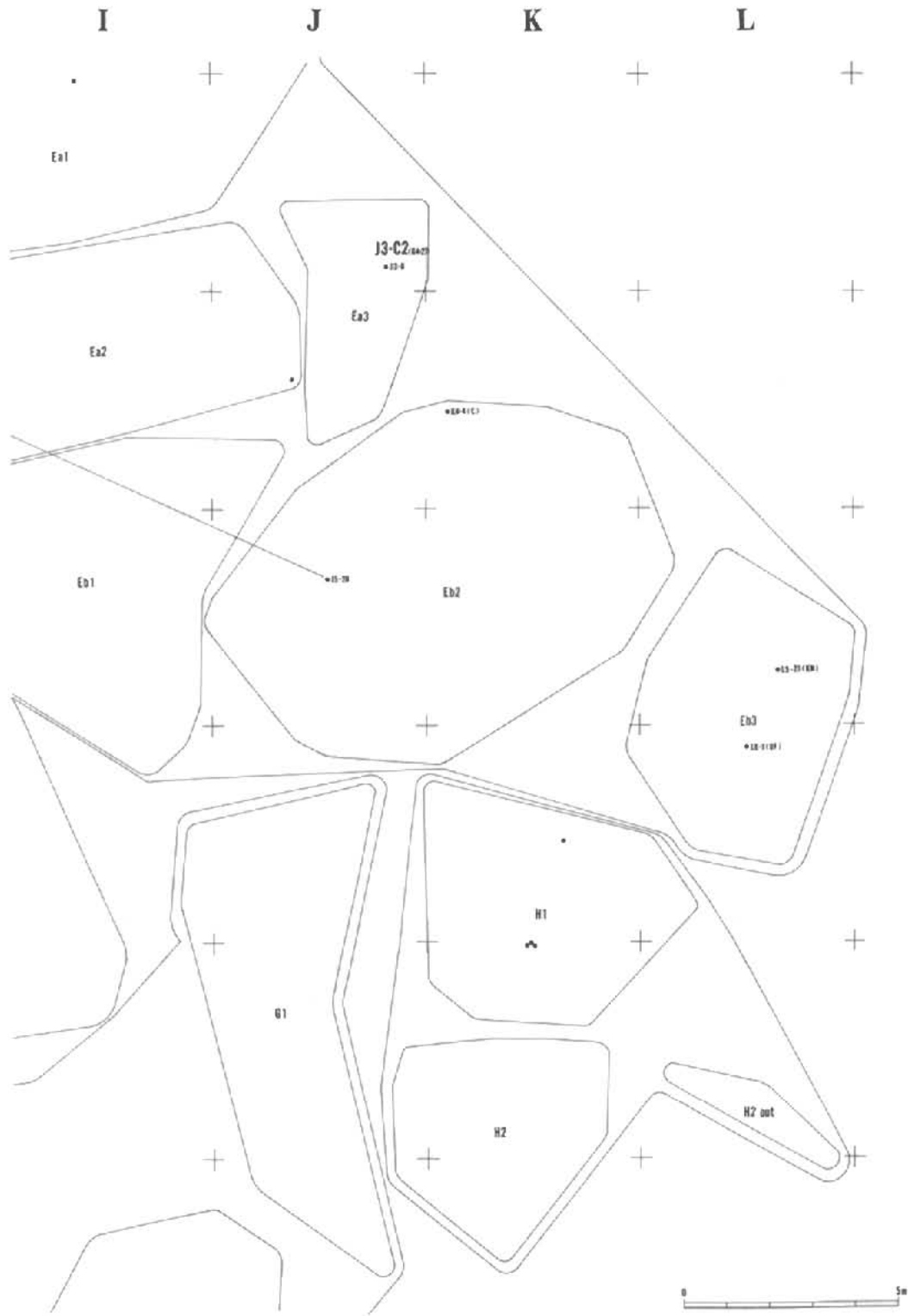


第388図 個体別資料No.97分布図

第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布



第389図 個体別



資料No.100分布図

E a 1 outで剥片1点、E a 2で剥片1点、E a 3で剥片1点、E b 2で剥片1点、石核1点、E b 3でナイフ形石器1点、使用痕有剥片1点、G 3で搔器1点、H 1で剥片3点、碎片1点が出土している。

本個体は、きわめて良質な石材で、定型石器も多い。接合資料は少なく、母岩中での位置関係も不明であることから、早期に分割されて個々に剥片剥離作業が進行したものと考えられるが、分割がどこで行なわれたかは分からない。分割材の他に剥片や製品段階での遺跡内搬入があった可能性も考えられる個体である。搔器と石核を含む接合資料H7C1は、すべてが遊離資料である。接合資料H8C1は、削器H8.9(SC (G))と碎片H8.54(C (G))の接合であるが、これも遊離して出土した。

B 1 outに若干が集まる以外に、全体的には定型石器、石核等が広範囲に散在する。良質石材の石器が頻繁なブロック間移動をしていたことを示していると考えられよう。

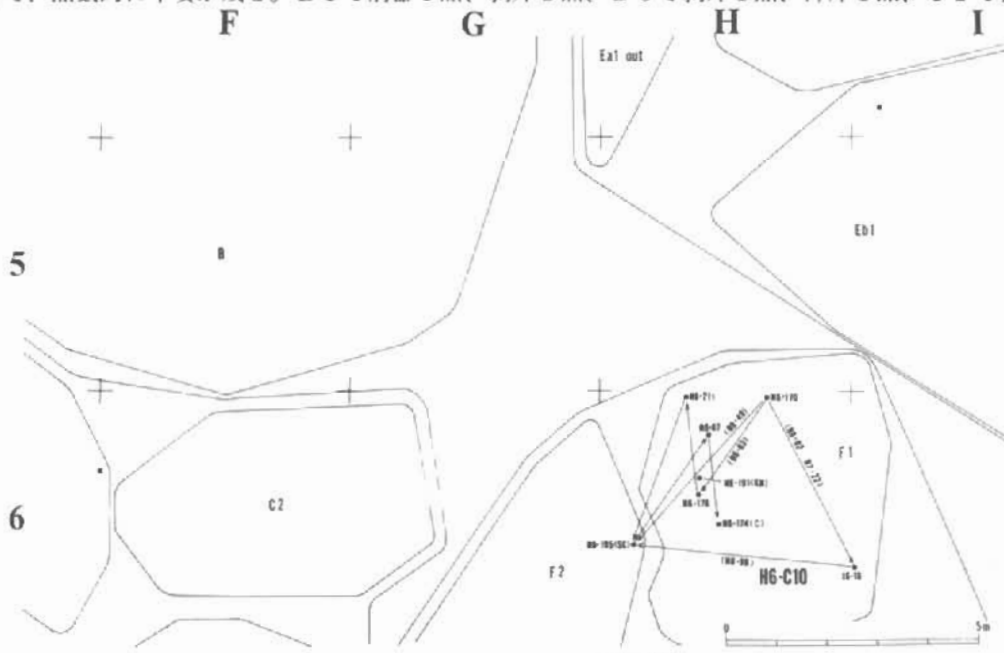
**個体別資料No.106 (第390図)**

総計26点で、接合資料4群19点、非接合資料7点がある。内訳は、ナイフ形石器3点、削器1点、加工痕有剥片3点、剥片16点、碎片2点、石核1点である。12点が遊離して出土し、C 3で剥片1点、E a 2で剥片1点、E b 1で碎片1点、E b 2で剥片1点、碎片1点、F 1でナイフ形石器1点、加工痕有剥片1点、剥片5点、石核1点、F 2で削器1点がある。

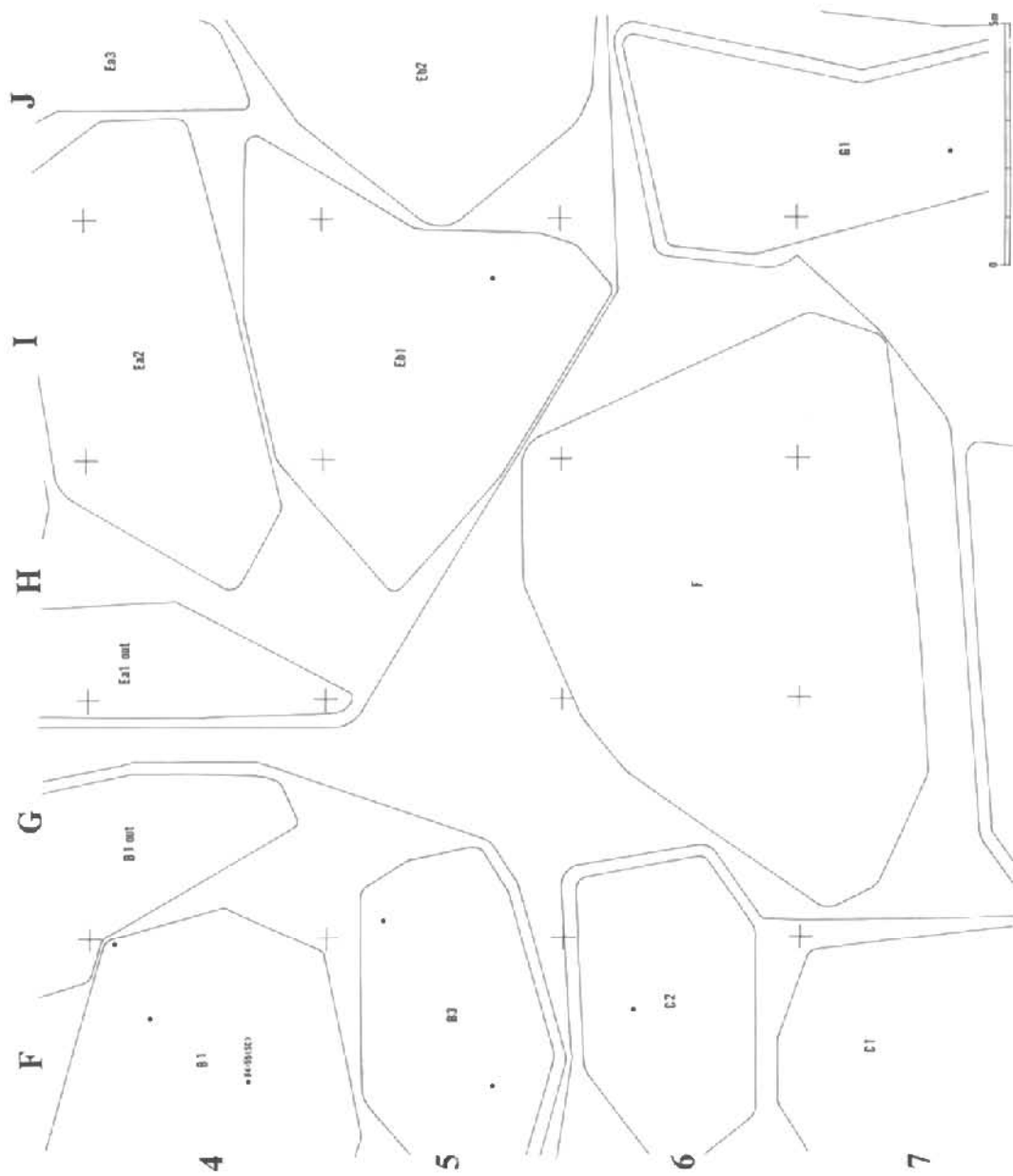
きわめて良質の石材で、5～6 cm厚の板状材を立方体に分割したものを個体とし、打面転移激しく剥片剥離を続ける。主要な接合資料H6C10は、ほとんどがF 1に集中し、ここで剥片剥離作業が行なわれ、最終末段階まで進行したことが知れる。削器H6.195(SC F2)はF 2から出土したが、2 mほどしか離れていない。また、加工痕有剥片なども接合資料中に含まれる。初期の剥片は見あたらないが、接合資料H6C18にナイフ形石器H6.SE(KN(F))が含まれ、製品化された剥片は遺跡外へ搬出されたことも考えられる。

**個体別資料No.110 (第391図)**

総点数41点で、接合資料3群6点と非接合資料35点からなる。内訳は、搔器2点、削器2点、加工痕有剥片1点、使用痕有剥片2点、剥片29点、碎片5点である。32点が上層から出土し、下層の9点と比較して、点数的に不安が残る。B 1で削器1点、剥片2点、B 3で剥片1点、碎片1点、C 2で剥片1



第390図 個体別資料No.106分布図



第391図 個別別資料No.110分布図

点、E b 1で使用痕有剥片1点、剥片1点、G 1で剥片1点が出土している。点数が他の個別別資料と比べて多いにも関わらず接合資料が少ないこともあり、「他人のそら似」を含む可能性に注意しておきたい。

そう良質とは思えない石材であるが、広範囲に散漫に散らばる個体で、剥片剥離作業の中心ブロックを判断することはできない。大型剥片・剥片・碎片があり、個々の石器類や接合資料を工程的に位置づけて評価するのは困難であるが、中期段階の剥片剥離作業の行なわれた痕跡があるに留まる。石核などは認められない。

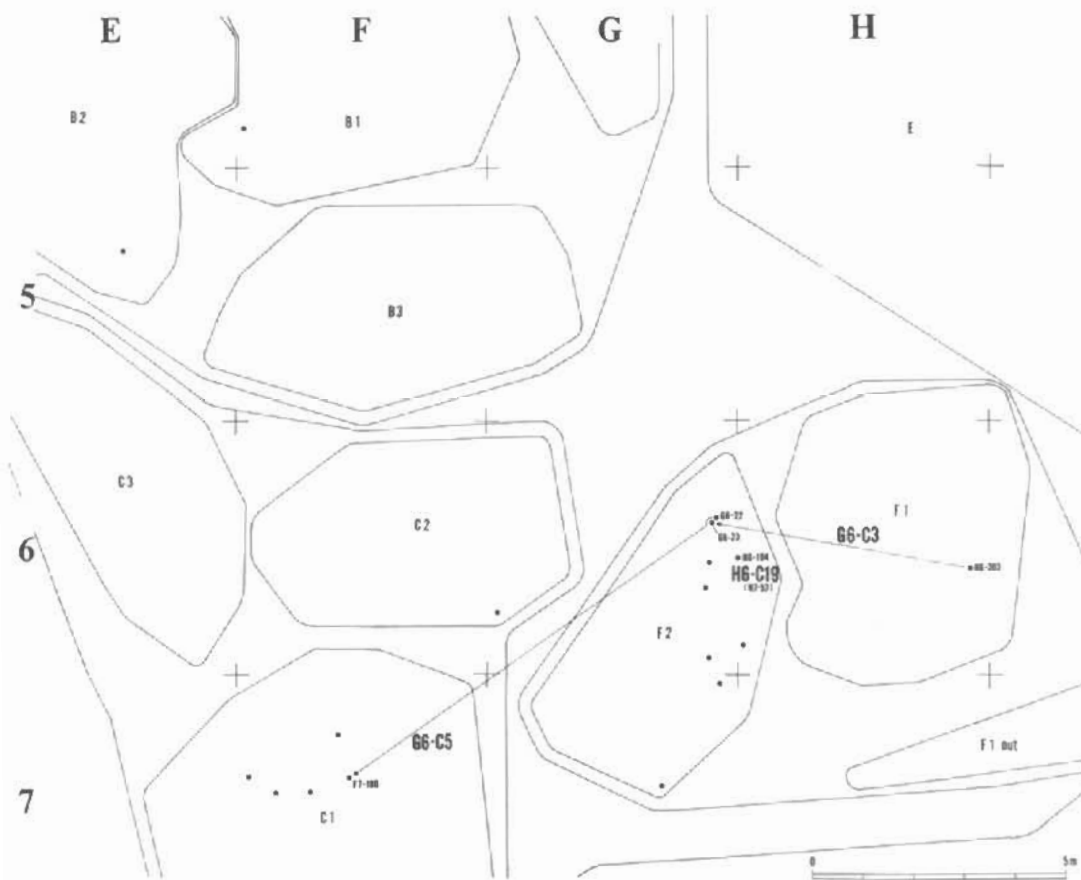
**個別別資料No.111 (第392図)**

総点数20点で、接合資料4群8点と非接合資料12点からなる。内訳は、使用痕有剥片1点、剥片19点である。原位置を遊離して2点が出土し、B 1で剥片1点、B 2で剥片1点、C 1で剥片5点、C 2で剥片1点、F 1で剥片1点、F 2で剥片9点が出土している。

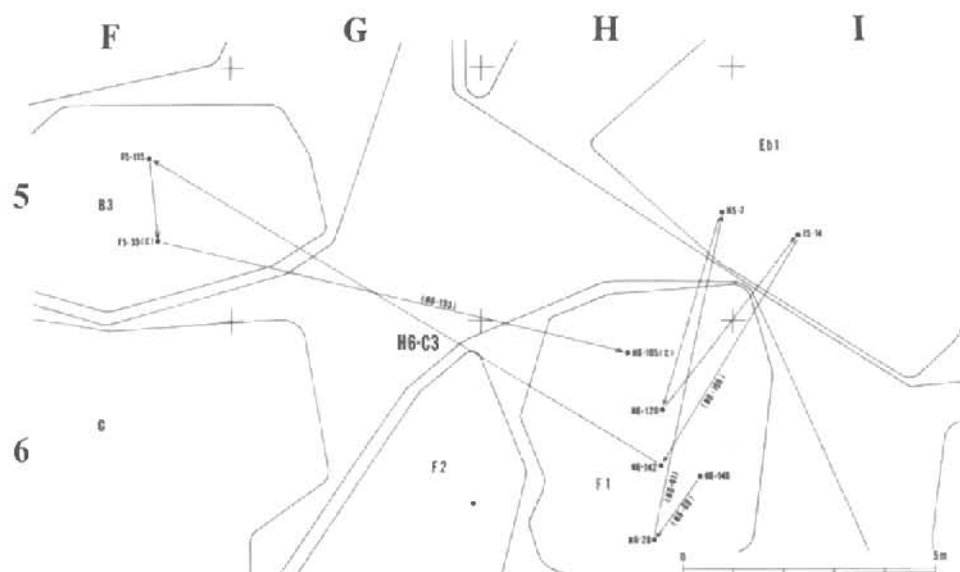
剥片類のみで構成され、石核などはともなわない個体であり、C 1とF 2に集中する。接合資料を含むことから、剥片剥離作業が展開したのは明かであるが、内容は明かでない。中期段階の工程が、C 1とF 2の2個所で、場所を替えながら進行したのであろうか。定型的な石器は認められない。

**個別別資料No.131 (第393図)**

総点数15点で、接合資料1群14点と非接合資料1点からなる。内訳は、剥片13点、石核2点である。5点が遊離して出土し、B 3で剥片1点、石核1点、E b 1で剥片2点、F 1で剥片4点、石核1点、F 2で剥片1点が出土している。



第392図 個別別資料No.111分布図



第393図 個体別資料No.131分布図

板状材を素材とし、初期から終末期までの剥片剥離工程を残す。ほとんどの作業がF1で進行したらしく、石核や剥片類の大半がF1に集中する。接合資料中の石核1点と剥片1点がB3から、剥片2点がE b1から出土した。B3の石核F5.33(CORE B3)と剥片F5.115(F B3)は接合順序で連続する点を注目すれば、F1である程度剥片剥離作業が進行し、途中の生産剥片H5.7(F Eb1)とI5.14(F Eb1)がE b1に持ち出された後、個体ごと約12m離れたB3に再び持ち出されている。剥片F5.115(F B3)を剥離し、個体から石核F5.33(CORE B3)の素材を分割、F5.33(CORE B3)で剥片剥離が行なわれたと考える事ができる。

個体別資料No.132 (第394図)

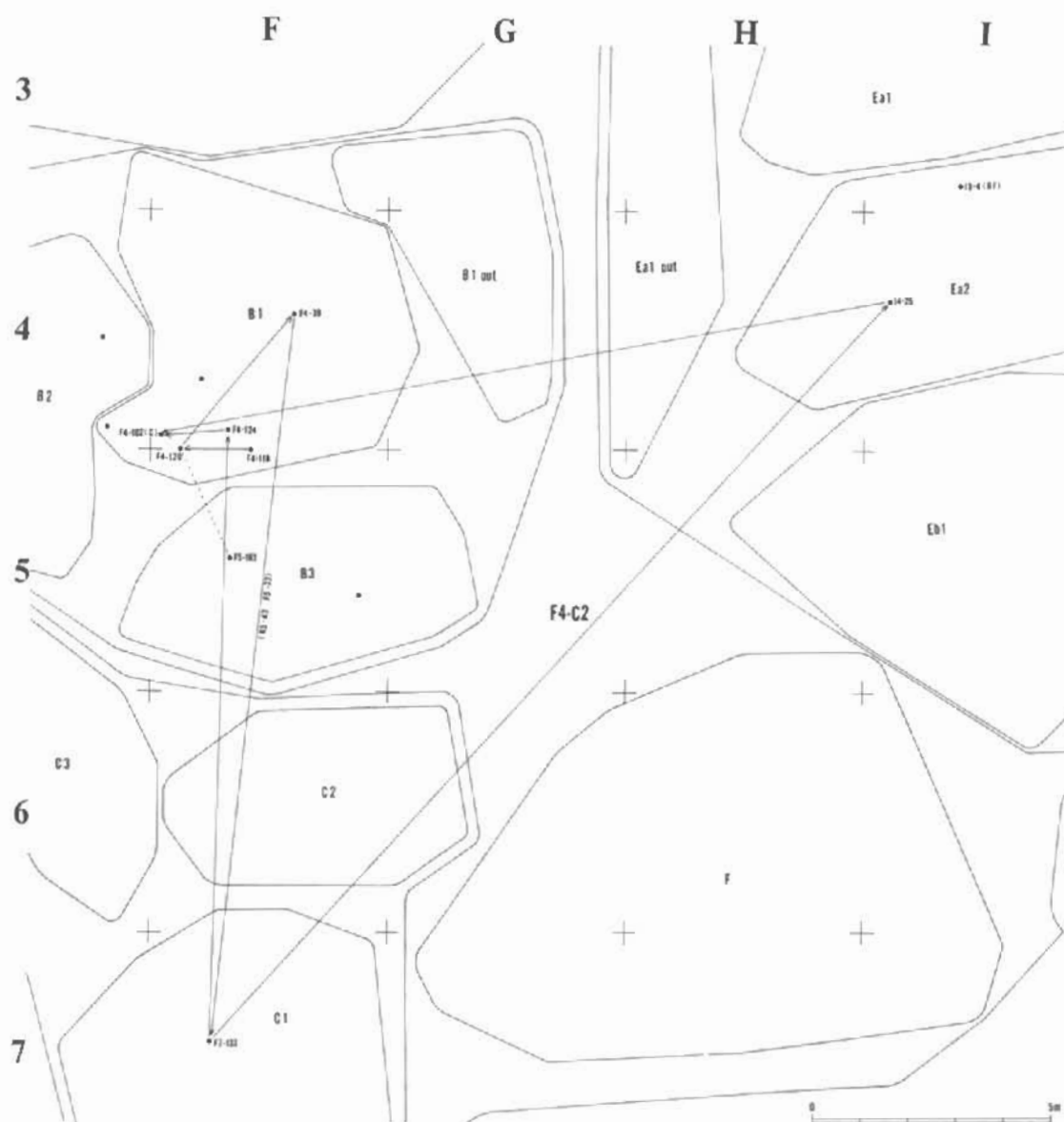
総点数19点で、接合資料1群10点と非接合資料9点からなる。内訳は、加工痕有剥片1点、使用痕有剥片1点、剥片15点、碎片1点、石核1点からなる。6点が遊離して出土し、B1で剥片6点、石核1点、B2で剥片1点、B3で剥片2点、C1で剥片1点、E a2で加工痕有剥片1点、剥片1点が出土した。

個体中の接合資料は、初期の工程こそ存在しないものの、中期から終末期までの剥片剥離工程を残すものである。個体別資料の分布は、B1に集中することから、剥片剥離作業の行なわれた場所はB1であると考えられる。使用痕有剥片K5.43(UF (Eb))が遊離した状態であったが約25m離れたE bから、剥片F7.133(F C1)は約13m離れたC1から、I4.25(F Ea2)が約15m離れたE a2から出土したが、これらはいずれも形態的に良好な剥片が選ばれており、B1からの持ち出しであろう。

個体別資料No.133 (第395図)

総点数23点で、接合資料2群10点と非接合資料13点からなる。内訳は、削器1点、加工痕有剥片1点、使用痕有剥片1点、剥片18点、碎片1点、石核1点である。3点が遊離して出土し、B1で加工痕有剥片1点、剥片11点、碎片1点、B1 outで剥片1点、E a2で削器1点、剥片1点、E b1で使用痕有剥片1点、剥片3点が出土している。

個体中の接合資料F5C4は、中期から終末期までの剥片剥離工程を残す。個体全体として、最初期の工



第394図 個体別資料No.132分布図

程は認められない。2群の接合資料はB 1に集中し、ここで剥片剝離作業が行なわれたものと考えられよう。E a 1に削器J3.14(SC E a1)、E b 1に使用痕有剥片I4.17(UF E b1)があり、剥片類がE a・E bにいくらか分布するが、B 1以外で剥片剝離作業が行なわれた痕跡は乏しい。

**b, サヌカイト製接合資料**

**接合資料E 2 S 1 (第396図)**

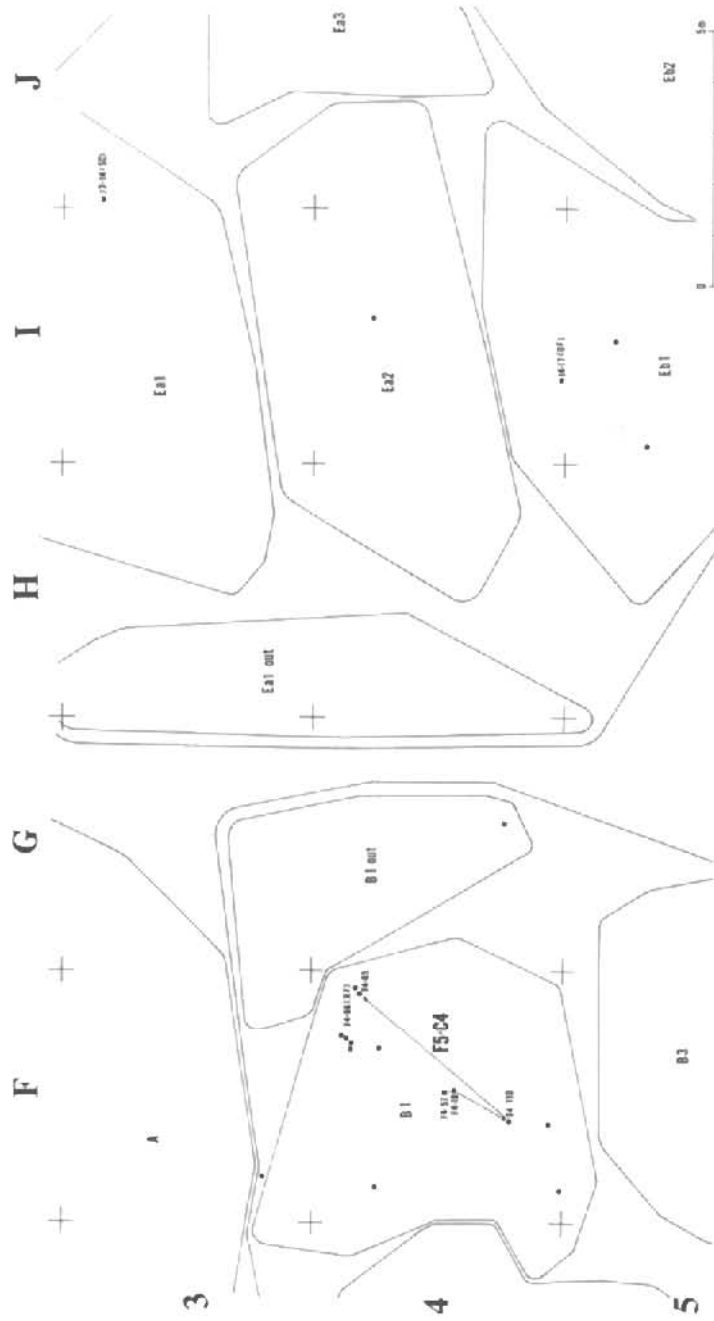
接合資料は、剥片2点と石核1点からなる。A 2から剥片1点、石核1点、A 3から剥片1点が出土している。

接合資料は、打面と作業面の転移の激しい横長剥片剝離技術を示すもので、A 2での剥片剝離作業の展開が考えられる。横長剥片剝離技術の第2段階の終末である。

**接合資料F 2 S 1 (第396図)**

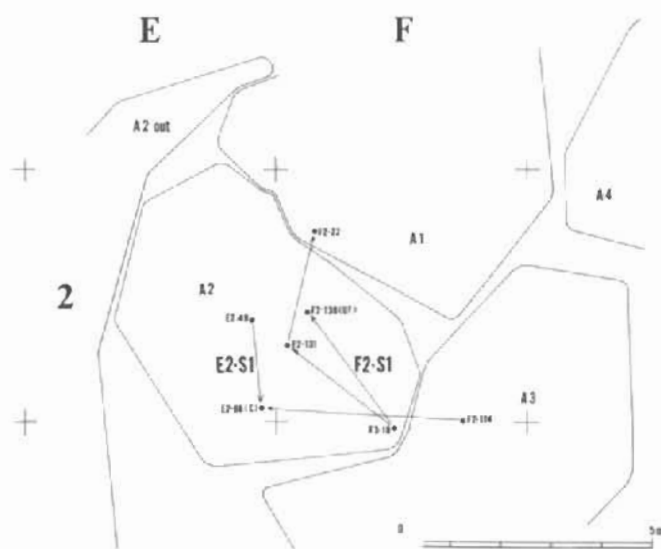
接合資料は、使用痕有剥片1点、剥片3点、石核1点からなる。石核1点が原位置を失って発掘され、



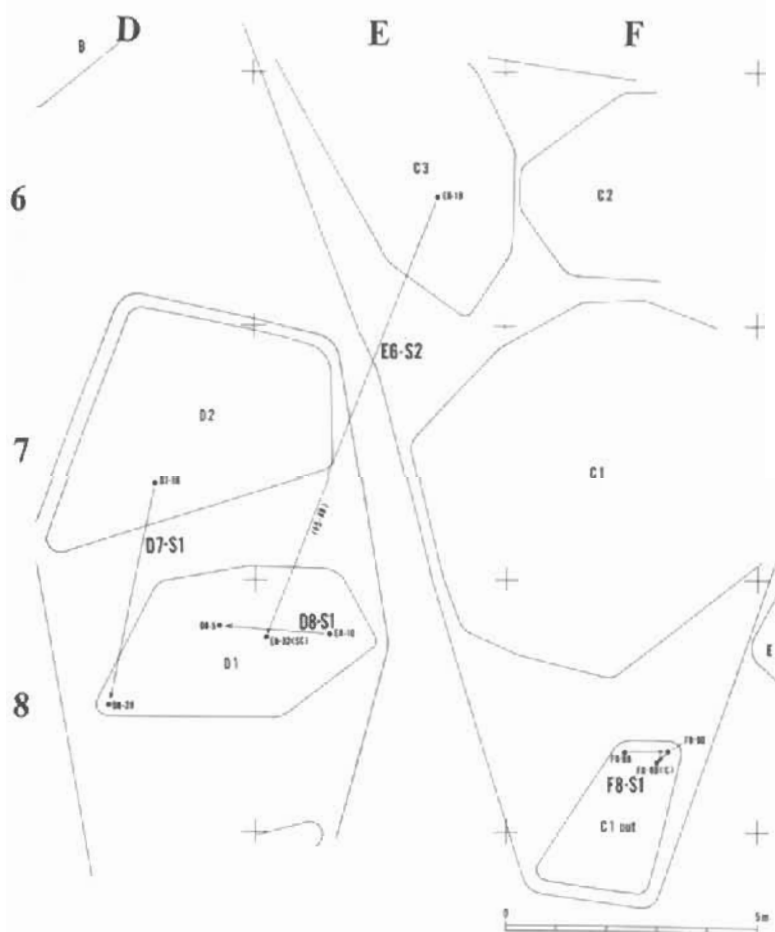


第395図 個体別資料No.133分布図

第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布



第396図 サヌカイト製接合資料分布図1



第397図 サヌカイト製接合資料分布図2

A 1 から剥片 1 点、A 2 から使用痕有剥片 1 点、剥片 2 点が出土している。

接合資料は、剥片剥離作業の展開を示すのか、石器整形作業を示すのか判然としない。A 2 での作業展開が認められよう。

**接合資料 D7 S1 (第397図)**

接合資料は、加工痕有剥片 1 点、剥片 2 点からなる。加工痕有剥片 1 点は原位置を失って発掘され、D 1 と D 2 で剥片が 1 点ずつ発掘された。この接合資料には、接合資料別の記述と石器類実測図はない。

接合資料は、やや寸詰まりな縦長剥片など 3 点の接合によるもので、縦長剥片剥離技術類似の工程を認める。剥片剥離作業の展開場所に付いては、資料数が少なすぎて特定できない。あるいは、3 点とも搬入品であるかも知れない。

**接合資料 D8 S1 (第397図)**

接合資料は、加工痕有剥片 1 点、剥片 2 点からなる。加工痕有剥片 1 点は遊離して発掘され、D 1 から剥片 2 点が出土している。

縦長剥片など 3 点が接合し、縦長剥片剥離技術の工程を認めることができる。サヌカイト礫面が表面に付着するが、この特徴が E6 S2 にきわめてよく似ていることから、両接合資料は同一母岩である可能性がある。D 1 での剥片剥離作業の展開が考えられる。

**接合資料 E6 S2 (第397図)**

接合資料は、削器 1 点、剥片 2 点からなる。剥片 1 点が遊離して出土し、C 3 から剥片 1 点が、D 1 から削器 1 点が出土した。

D8 S1 と類似した礫面を有する接合資料で、縦長の剥片など 3 点が接合し、縦長剥片剥離技術の工程を認めることができる。B と C 3、D 1 の 3 箇所に分かれて分布し、10m 程の接合距離を有することから、剥離後に剥片が持ち運ばれたと考えられる。

**接合資料 F8 S1 (第397図)**

接合資料は、剥片 2 点、石核 1 点からなる。すべて C 1 out から出土している。

打面と作業面の転移の激しい横長剥片剥離技術を示す接合資料で、剥片剥離作業第 2 段階の後半のものである。接合資料すべてが C 1 out に集中することから、ここで剥片剥離作業が行なわれたのだろう。接合資料に「抜け」があることから、遺跡外への持ち出しも考えられる。

**接合資料 J7 S2 (第398図)**

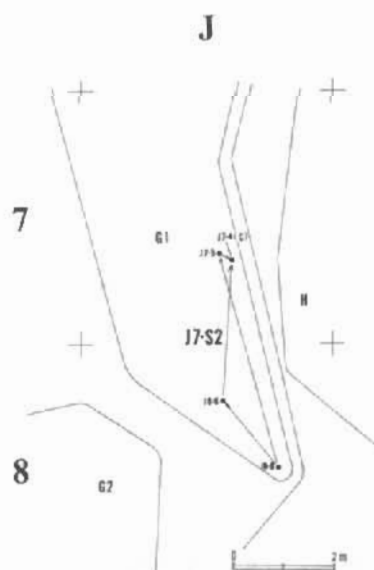
接合資料は、剥片 3 点、石核 1 点からなる。すべてが G 1 から出土している。

接合資料は、横長剥片剥離技術の工程終末を示す。すべての接合資料が G 1 に集中することから、ここで剥片剥離作業が行なわれたと考えられる。

**接合資料 K6 S1 (第399図)**

接合資料は、剥片 3 点、石核 1 点からなる。すべてが H 1 から出土している。

接合資料は、底面の付いた横長剥片が剥離されているが、最後に石核の小口部から縦長剥片が剥離されており、整然とした



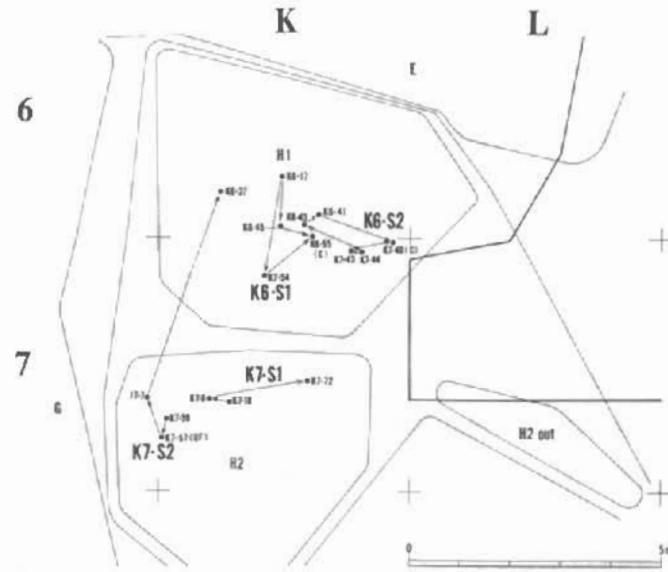
第398図 サヌカイト製接合資料分布図 3

横長剥片剥離技術ではない。接合資料すべてがH1に集中することから、剥片剥離作業はここで行なわれたのであろう。剥片剥離作業の第2段階後半のものである。

**接合資料K6S2 (第399図)**

接合資料は、剥片3点、碎片1点、石核1点からなる。すべてがH1から出土している。

接合資料は、横長剥片剥離技術の範疇に含まれるが、生産された剥片類は極めて矮小化している点で、注意される。接合資料すべてがH1に集中することから、剥片剥離作業はここで行なわれたものと考えられる。剥片剥離作業第2段階後半が認められる。



第399図 サヌカイト製接合資料分布図4

**接合資料K7S1 (第399図)**

接合資料は、剥片3点からなる。すべてがH2から出土している。

接合資料は、底面を有さない剥片3点の接合からなり、特に剥片剥離技術の特徴に乏しい。すべてがH2に集中し、ここで剥離されたものと考えられよう。

**接合資料K7S2 (第399図)**

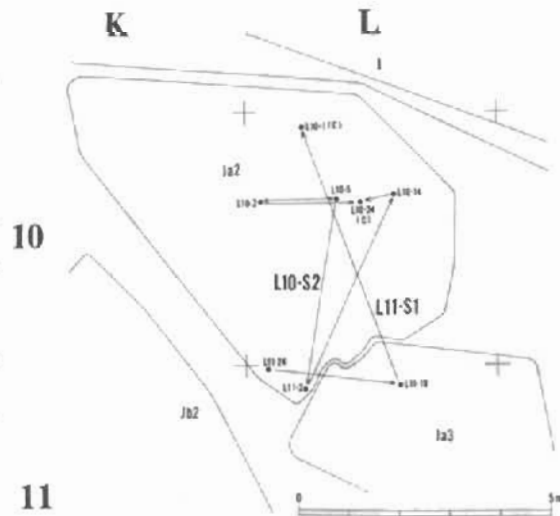
接合資料は、使用痕有剥片1点、剥片3点からなる。H2から3点、H1から剥片1点が出土している。

接合資料は、横長剥片剥離技術の展開を示し、その目的的な横長剥片など4枚の接合よりなっている。4枚は、主剥離作業面から連続して剥離されたものであるが、同時に打面側から剥離された剥片類は、発見されていない。一応状況から、H2で剥片剥離されたものと考えられようが、調整剥片が持ち出され目的剥片が残されるのは不自然で、注意される。剥片K6.37(F H1)が約4m離れたH1から出土している。

**接合資料L10S2 (第400図)**

接合資料は、剥片3点、碎片1点、石核1点からなる。剥片1点が遊離しており、残りすべてがJ a 2で出土している。

接合資料は、横長剥片剥離技術の範疇に含まれるものであるが、剥離される剥片がきわめて矮小化しており、注意されよう。接合資料すべてがJ a 2から出土したことから、ここで剥片剥離作業が行なわれたものと考えられる。第2段階後半の資料である。



第400図 サヌカイト製接合資料分布図5

**接合資料L11S1 (第400図)**

接合資料は、剥片2点、石核1点からなる。J a

2から剥片1点、石核1点、J a 3から剥片1点が出土した。

接合資料は、横長剥片剥離技術を示し、第2段階終末を残している。石核L10.1(CORE Ja2)がJ a 2、剥片L11.19(F Ja3)が約5m離れてJ a 3、もう1点の剥片L11.24(F Ja2)が石核から5m離れて出土した。剥片剥離作業は、おそらくJ a 2で行なわれたと考えられるが、未発掘の剥片類も併せて剥片類の移動が認められよう。

#### c. チャート製の石器と接合資料の分布

チャート製石器類の個体別資料の分布は、剥片剥離作業上の位置や工程分離などの動きがよく反映されるが、全体として観察すると個々の石器生産と成品の移動については、明確にはしがたい。ここでは、定型的石器を含むチャート製接合資料の石器整形作業の場所の問題について整理しておきたい。定型的石器のうちで、特に注目された接合例を記述する。

##### 接合資料F4C3 (別添第37図・第189図)

F4.42(SC B1)+F4.23(F B1)

接合資料(個体別資料No20)は、削器機能部に調整剥片が接合する。いずれもB1で出土し、ここで削器調整が行なわれたことになる。

##### 接合資料I5C1 (別添第38図・第200図)

I5.16(RF Eb1)+I5.22(RF Eb1)+I5.36(RF Eb1)

接合資料(個体別資料No39)は、台形様石器としての認定の可能な一つの加工痕有剥片が、先端部を欠損、右側縁を加工して(I5.36(RF Eb1))、再利用を試みるが、真ん中で破損した、というものである。3点ともEb1で出土したことから、再加工はここで行なわれたと考えられる。

##### 接合資料E4C4 (別添第37図・第201図)

E4.60(SC B2)+L6.27(UF Eb3)

接合資料(個体別資料No40)は、大型剥片を分割して、一方を削器E4.60(SC B2)、一方は使用痕有剥片L6.27(UF Eb3)として残されたもの。削器はB2、使用痕有剥片はEb3で出土し、接合距離は36mになる。分割場所は分からない。

##### 接合資料I4C3 (第224図)

E4.51(F (B))+I4.12(SC Ea2)

接合資料(個体別資料No92)は、完成された削器の作業面に、再調整剥片E4.51(F (B))が接合する。作業面は再生されて、削器I4.12(SC Ea2)となる。調整剥片はBから、削器はE a 2から出土し、接合距離は18mとなる。調整剥片が出土した石器類ブロックBで削器作業面の再調整が行なわれ、その後で削器がE a 2に持ち出されたのであろう。

##### 接合資料H8C1 (第233図)

H8.9(SC (G))+H8.54(C (G))

接合資料(個体別資料No100)は、削器H8.9(SC (G))に調整碎片H8.54(C (G))が接合する。両方も原位置を失っているが、ブロックG周辺で出土し、このあたりでの削器調整が考えられる。

##### 接合資料H6C24 (別添第37図・第236図)

H6.26(SC F1)+H6.182(EN F1)

接合資料(個体別資料No103)は、削器H6.26(SC F1)と搔器H6.182(EN F1)が接合する。本来、大

型の削器であったものを分割し、一方を搔器に再加工したもの。いずれもF1で出土したことから、再加工はここで行なわれたとみられる。

#### 接合資料H6C10 (第390図・第239図)

H6.82(F (F))+H7.22(RF (F))

接合資料(個別別資料No106)は、剥片剥離作業中の多数接合であるが、この中に1つの剥片を折断し、一方を剥片H6.82(F (F))、もう一方を加工痕有剥片H7.22(RF (F))にする例がみられる。加工痕有剥片は台形様石器として評価できるかも知れない。両方とも原位置を失っているが、石器類ブロックF周辺から出土したことから、剥片剥離に続いて同じ場所での器種調整加工が行なわれたと考えられる。

#### 接合資料E4C6 (別添第37図・第245図)

E4.20(EN B2)+F4.50(C B1)

接合資料(個別別資料No117)は、搔器E4.20(EN B2)に機能部調整碎片F4.50(C B1)が接合する。搔器はB2、碎片はB1から出土した。搔器調整はB1周辺で行なわれたのであろう。

#### d. 個別別資料のブロック間共有関係

チャート等製石器類から識別された個別別資料合計136個体の分布の傾向に付いて、概略を記述しておく(第11表)。個別別資料の分布は、別添第39図・第40図・第41図に示したように、石器類ブロックに一致して分布するものと、ブロック間を跨ぐように分布するものの2者が認められる。

まず、剥片剥離作業が行なわれた個体の場合を考えてみよう。個別別資料の分布範囲が石器類ブロックに一致する場合、すべての個体所属の石器類が剥片剥離作業・石器整形・使用・廃棄・遺棄までが一貫して行なわれ、生産物や石核などの持ち出しも、遺跡内の他の石器類ブロックへではなく、遺跡外の地点へと行なわれたことになる。石器類ブロックが、小ブロック単位で完結している場合には、更にせまい範囲で個体の消費が行なわれたのであろう。一方、個別別資料がブロック間を跨ぐように分布する場合は、多様な可能性が推定できよう。第1は、剥片剥離作業が複数の石器類ブロックで場所を替えながら行なわれた場合。第2は、剥片剥離作業は1つの石器類ブロックで行なわれるが、生産された剥片や石器が他の石器類ブロックに持ち出される場合である。

各個別別資料が、この類型に一致するかを観察してみよう。

剥片剥離作業の認められた個別別資料91個体のうち、広域に分布するのは、合計61個体、1つの石器類ブロックで完結するのは合計30個体である。広域に分布するものとして分類された個体にも、剥片剥離作業が複数の石器類ブロック間を移動して活発に行なわれた個体は認められない。一部に、複数石器類ブロックに調整剥片や碎片を少量ずつ分布させながら、接合資料を含まず、分布中心ブロックの無い個体がある。この場合、それぞれのブロックでの剥片剥離作業を考えても良からうが、接合資料によって剥片剥離工程をブロック間で追求できるものはない。同一の母岩が複数に分割され、それぞれで剥片剥離作業が展開したのものもあるが、剥片剥離作業自体はそれぞれの場所で一貫して行なわれている。同一の石器類ブロックの小ブロック間で資料数を分け合い、同一石器ブロック内で剥片剥離作業を行なう位置(小ブロック)を替えた個体は、多数が認められる。また、1つの小ブロック内にすべての資料が集中する個体として、合計12個体である。広域に分布する個別別資料のうちまとまった接合資料を持つものはすべて、剥片剥離作業が1つの石器類ブロックで行なわれ、一部の石器や剥片などが、他のブロックへと持ち出されてきたものであることが知れた。

剥片剥離作業に関わる個体のあり方は、1つの石器類ブロック内で完結した剥片剥離工程が行なわれ、調整剥片・碎片・残核などはブロック内に残される。広域資料として認定されたのは、石器や剥片、放棄された残核などがブロック間を移動して認められた個体である。ブロック内で分布が完結する個体と広域分布個体は、剥片剥離作業の展開の仕方では、特に差異が無いということになる。当然、剥片剥離技術の工程の遺存状況による差異も、石核の有無を除き明確には観察されない。

そもそも石器類ブロックは、そこに多くの石器類が集中しているという視覚的認識で識別されたものであり、剥片剥離作業が行なわれることによって調整剥片や碎片が多量に残されて形成されたのである。個別別資料中心分布域が石器類ブロックと一致するのは、石器類ブロックとそれぞれの個別別資料の剥片剥離作業の行なわれる場所が、対応関係を有していることを示していると考えられる。剥片剥離作業の固定性と異なり、石器や剥片が移動するのは、石器の加工・使用・遺棄・廃棄が、石器素材剥片製作と比較して流動的であった証拠であろう。

石器や剥片のみの個体が遺跡内に搬入される場合は、剥片剥離作業のある個体とは異なった動きが想定できよう。遺跡内の1つのブロックに石器・剥片等が持ち込まれ、その中で加工・使用・遺棄・廃棄される場合、最初1つのブロックに遺跡外から持ち込まれた石器・剥片などが、その一部を途中で他のブロックにも持ち出される場合、最初から複数ブロックに持ち込まれる場合などが考えられよう。これらは、基本的には単独資料個体の由来と同じと見なせる。

次に、ブロック間での個体の分布を、ブロックを主体として観察しよう。

剥片剥離作業の行なわれた合計91個体の個別別資料が、各石器類ブロックでどれだけの数が認められるかを観察しよう。石器類ブロックAでは23個体、25%、Bでは42個体、45%、Cでは18個体、19%、Dでは6個体、6%、E aでは34個体、37%、E bでは35個体、38%、Fでは25個体、27%、Gでは5個体、5%、Hでは4個体、4%、Iでは0個体、0%、J aでは7個体、7%、J bでは3個体、3%、Kでは1個体、1%、B+C 2・3では46個体、50%、D+C 1・1 outが11個体、12%が認められた。個別別資料の石器類ブロック出現率は、 $203 \div 91$ で求められ、2.2が示された。各個体は、平均すると2.2石器類ブロックに分布していることになる。

91個体の剥片剥離作業の行なわれた個別別資料のうち、1つの石器類ブロック内で完結するものが30個体あるので、広域分布の61個体での石器類ブロック出現率は、3.3となる。所属資料に動きのある個体は、石器製品・剥片のレベルで、きわめて活発な搬入・搬出関係をブロック間で持っていた事が理解されよう。

#### e. 単独個体石器の組成と分布

チャート等製などの個体識別が行えた石器群で、同一の個体から生産された石器類が認められない単独個体石器は、総点数で合計68点ある。第12表がその内訳である。内訳は、ナイフ形石器1点、1.4%、搔器3点、4.4%、削器10点、14.7%の、定型的石器が合計14点、20.5%、加工痕有剥片1点、1.4%、使用痕有剥片12点、17.6%、定型的石器と加工痕・使用痕有剥片を合わせた点数が合計27点、39.7%、剥片27点、39.7%、石核12点、17.6%、石核素材2点、2.9%となる。遺跡全体での石器類組成(第3表)と比べて、削器と使用痕有剥片、石核の点数比率が高いことが分かった。また、明らかに定型的石器、定型的石器と加工痕・使用痕有剥片を合わせた場合の比率が増大している。

定型的石器と加工痕・使用痕有剥片の組成比率を観察してみよう。ナイフ形石器は3.7%、搔器11.1

%、削器37.0%、定型的石器が51.8%、加工痕有剥片3.7%、使用痕有剥片44.4%となる。やはり定型的石器が大きな比率を占める。特に削器の占有率増加が顕著である。

チャート等製石器類の石材は、板井寺ヶ谷遺跡周辺では特に日常的に入手が容易な石材が選択されていると考えられる。単独個体石器は、遺跡外での製作が推定される個体であり、遺跡内への搬入品と考えられる資料である。搬入される石器類は、搬入先で「役に立つ」石器類が選ばれたはずであり、定型的石器や加工痕・使用痕有剥片・石核が遺跡の組成比率を大きく上回るのは、搬入され石器が選ばれたものであり、調整剥片や碎片は、遺跡間での搬入・搬出の対象にはなりにくい事を示している。石器は、搬入先で使用するため、石核や石核素材は搬入先で剥片剥離作業を継続したり、開始したりするために運ばれたのであろう。チャート等の石材は遠距離を運ばれるサヌカイトと異なり、石材がありふれたものであるだけに、その継続的な利用・使用という側面が重視されよう。

単独個体石器が下位文化層にいつの時点で持ち込まれたのか分からない。仮に板井寺ヶ谷遺跡を遷地した際に持ち込まれたと仮定できるなら、単独個体石器の定型的石器、加工痕・使用痕有剥片の組成比率が、前の居住遺跡から板井寺ヶ谷遺跡への移動時に装備していた石器組成を示すとも考えられよう。単独個体石器はチャート等製石器群から抽出されているので、チャート等製石器群の一時の基本的石器組成を示しているのかも知れない。また仮に、日常的に随時板井寺ヶ谷遺跡に搬入されたのなら、近くにこのような石器類を製作し、使う遺跡が存在したことになる。

次に、単独個体石器類のブロック別分布を観察してみよう。68点の内、原位置を保った67点は、石器類ブロックAから削器3点、使用痕有剥片3点、剥片5点、石核2点の合計13点、19.4%、B+C 2・3からはナイフ形石器1点、搔器1点、削器2点、加工痕有剥片1点、使用痕有剥片2点、剥片4点、石核5点、石核素材2点の合計18点、26.8%、D+C 1・1 outからは使用痕有剥片1点、剥片1点の合計2点、2.9%、E aからは搔器1点、削器2点、使用痕有剥片2点、剥片3点、石核1点の合計9点、13.43%、E bからは搔器1点、削器1点、使用痕有剥片1点、剥片3点、石核2点の合計8点、11.9%、Fからは剥片1点、石核2点の合計3点、4.4%、Gからは剥片3点、4.4%、Hからは剥片2点、2.9%、Iからは剥片1点、1.4%、J aからは削器1点、剥片1点の合計2点、2.9%、J bからは剥片1点、1.4%、Kからは使用痕有剥片2点、剥片2点の合計4点、5.9%、Lからは使用痕有剥片1点、1.4%が出土している。

北半のA・B・C・D・E・F・G・Lと南半のG・H・I・Jで分けてみると、北群ではナイフ形石器1点、搔器3点、削器8点、加工痕有剥片1点、使用痕有剥片10点、剥片20点、石核12点、石核素材2点の合計57点、85.0%、南群では、削器1点、使用痕有剥片2点、剥片10点の合計13点、19.4%となり、北群主体で分布していることが知れる。基本的には、各石器類ブロックから出土しているが、石器類ブロックAとB+C 2・3の点数が多い。D+C 1・1 outとGからは単独個体石器は少量しか認められなかった。全体として北群の単独個体石器の器種組成は、組成比として剥片の比率が少ないことが注目される。チャート等製単独個体石器の出自が先の居住地における石器群であると考えると、妥当な結果である。チャート等製石器群から単独個体石器を抽出したのであり、サヌカイトの主体となる南半に少ないのは、当然であろう。定型的石器としては、石器類ブロックJ aの削器1点に留まり、剥片の比率が高くなっているのが注目される。石器類ブロックKは、チャート等製石器のみの石器類ブロックであり、サヌカイト製石器群主体のブロック群には含められないので、サヌカイト製石器群主体のブロックのみに注目すれば、さらに単独個体石器の搬入量は少ないことになろう。(山口)



## 5. ブロック間の接合資料・個体別資料の共有関係

前節までに、石器類ブロックの様相に付いて、石器類組成・石器組成・重量・遺物集積度・石器類ブロックの座標など、多様な検討を重ねてきた。次第に各石器類ブロックの特徴が明らかになってきたであろう。ここでは、石器類ブロック群を統廃合し、一定の機能のある空間に再編成を試みたい。視覚的な遺物のまとまりである「ブロック」を、機能的意義付けを伴う「ユニット」に再編成する。

作業として、まず接合資料と個体別資料の石器類ブロック・小ブロック間の共有関係を検討し、定型的石器や石器類の組成が接合資料・個体別資料とどのように関わっているかを検討したい。この分析について、先鞭をつけた山下は、野沢遺跡の報告書で、ブロック間の接合資料や個体別資料の共有関係から、ブロック間相互の関係強度を求め、ブロックをユニットに再編成する有力な根拠として試みている(山下、1982)。板井寺ヶ谷遺跡下位文化層の分析の手続き、方法は、この山下の作業にしたがうことにする。

ここでは、まずブロック間・小ブロック間の個体別資料・接合資料の共有関係を提示し、山下が行なった手順を踏襲してブロック間相互の関係強度を求め、板井寺ヶ谷遺跡下位文化層でのユニットの設定を試みたい。ブロック間の相互関係強度を求めるための手続き、計算方法などは、山下とまったく同じく行なったので、ここに掲載しない。野沢遺跡の報告書を参照していただきたい。

板井寺ヶ谷遺跡下位文化層では、サヌカイト製とチャート等製の2つの石器群が認められる。この2つの石器群の主要分布域は、南北に分かれるように観察されている。個々のユニットの設定の次には、それぞれの石器群の分布域での構造が検討されなければいけない。石材別、南北別の分析を試みよう。

## a. 接合資料からみた石器類ブロック間の関係

同一個体であることが確実な接合資料が、石器類ブロック間にどの様に分布しているかを検討する。個体別資料の中には、複数の接合資料群を有するものがあるが、それらは個別に集計すると、127例の接合資料になる(第16表・第17表)。サヌカイトとチャート等の2つの石材群を合わせて検討しよう。チャート等の石材とサヌカイトとでは、接合資料の数に差がある。

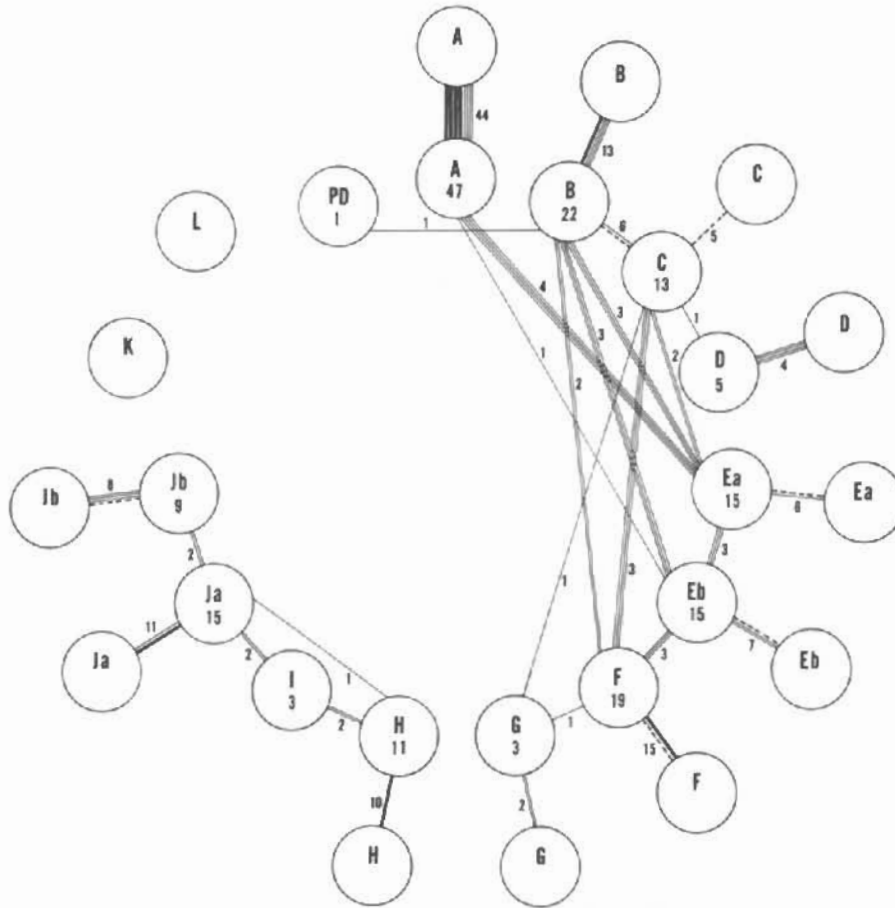
## 石器類ブロック間の関係

遺跡全体の全石器群の個々の接合資料について、B・C・D石器類ブロックの境界を変更しない段階で共有関係にある石器類ブロック間の分布を集計したのが第57表、線で結んだのが第401図である。この図では、頻繁・多量に移動する接合例も、1点の石器が移動する接合例も、同じ1本の線で表現されている。

図を見ると、ブロック間での共有関係には、一定のまとまりのあることが知れる。ブロック間の共有関係を持つのが、A・B・C・D・E a・E b・F・Gと、H・I・J a・J bの2群であり、K・Lはいずれにも含まれない。PDは石器類ブロックのBに含まれる。前者の1群は、遺跡内の北半に位置する石器類ブロック群であり、後者は南半に位置する石器類ブロック群である。接合資料の上から、下位文化層の石器類分布が南北に2分される可能性が指摘できよう。

南北それぞれの群を子細に観察すると、北群では、石器類ブロックAはE aと4例、E bとは1例の関係を持つ。ブロックBは、Cと6例、E aと3例、E bと3例、Fと2例の関係を持つ。ブロックCは、Bと6例、Dと1例、E aと2例、Fと3例、Gと1例を持つ。ブロックDは、Cと1例のみの関係を持つ。ブロックE aはAと4例、Bと3例、Cと2例、E bと3例の関係を持つ。ブロックE bは、Aと1例、Bと3例、E aと3例、Fと3例の関係を持つ。ブロックFはBと2例、Cと3例、E bと

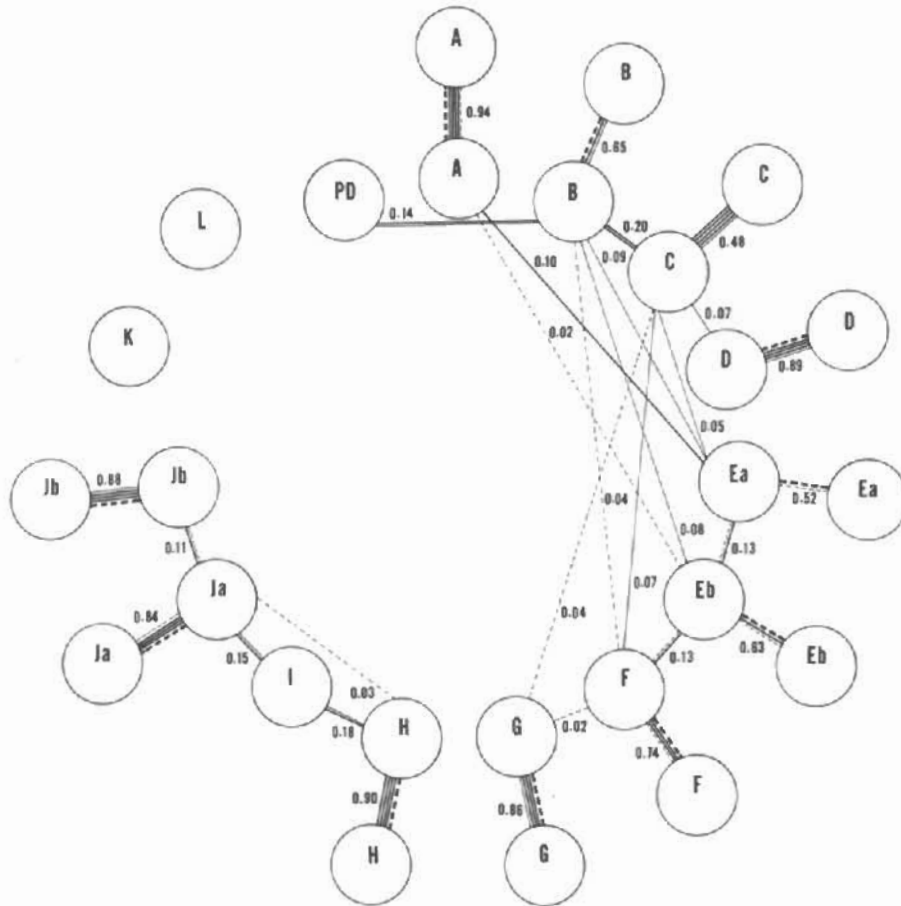
第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布



第401図 ブロック間接合資料共有関係図（修正前）

第57表 下位文化層ブロック間（修正前）接合資料による共有関係（全石器類）

	A	B	C	D	Ea	Eb	F	G	H	I	Ja	Jb	K	L	PD
所属個数	47	22	13	5	15	15	19	3	12	4	15	9	0	0	1
収束個数	42	10	3	4	5	6	12	2	9	0	10	7	0	0	0
A	44	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B	0	13	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
C	0	6	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
D	0	0	1	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ea	4	3	2	0	6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Eb	1	3	0	0	3	7	-	-	-	-	-	-	-	-	-
F	0	2	3	0	0	3	15	-	-	-	-	-	-	-	-
G	0	0	1	0	0	0	1	2	-	-	-	-	-	-	-
H	0	0	0	0	0	0	0	0	10	-	-	-	-	-	-
I	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	-	-	-	-	-
Ja	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	11	-	-	-	-
Jb	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	8	-	-	-
K	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-
L	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-
PD	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0



第402図 ブロック間接合資料相互強度図 (修正前)

第58表 下位文化層ブロック間 (修正前) 接合資料による相互強度 (全石器類)

	A	B	C	D	Ea	Eb	F	G	H	I	Ja	Jb	K	L	PD
A	0.943	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
B		0.652	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
C		0.195	0.483	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
D			0.074	0.889	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
Ea		0.097	0.088	0.053	0.524	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
Eb		0.018	0.079		0.131	0.627	---	---	---	---	---	---	---	---	---
F		0.040	0.072			0.131	0.744	---	---	---	---	---	---	---	---
G			0.042				0.024	0.857	---	---	---	---	---	---	---
H									0.903	---	---	---	---	---	---
I									0.180	---	---	---	---	---	---
Ja									0.027	0.153	0.837	---	---	---	---
Jb											0.105	0.882	---	---	---
k													---	---	---
L														---	---
PD		0.148													---

3例、Gと1例の関係を持つ。ブロックGは、Cと1例、Fと1例の関係を持つ。南群では、ブロックHが、Iと2例、J aと1例の関係を持つ。ブロックIは、Hと2例、J aと2例の関係を持つ。ブロックJ aは、Hと1例、Iと2例、J bと2例の関係を持つ。ブロックJ bは、J aと2例のみ関係を持つ。

次に観察するのは、ブロック内接合数である。石器類ブロックA・D・F・G・H・J a・J b内での接合例数の多さが注目される。石器類ブロックAでは、47例の接合があるが、ブロック内部で接合しないものが3例に留まっている。残りの44例は、他のブロックとの接合関係があるなしに関わらず、ブロックA内に複数の接合資料を有する。Dでは、5例の接合資料の内1例が外部とのみ接合し、あとの4例が内部で接合する。Fは、19例の接合の内4例が外部とのみ接合し、あとの15例が内部で接合する。Hでは、11例の接合資料の内、1例が外部とのみ接合し、10例が内部で接合する。J aでは、15例の接合資料の内、4例が外部とのみ接合し、11例が内部で接合する。J bでは、9例の内1例が外部とのみ接合し、8例が内部で接合する。

全体として、ブロック間の接合資料共有数よりも、ブロック内部での接合資料数の方が数量的に圧倒しており、むしろブロック間を移動する接合例が小数に留まることが知れよう。個々の接合資料が、剥片剥離作業の有無、作業段階の貧弱さ・豊富さなど個々の例の違いについて考慮しなければいけない点もあるが、一般的な大勢として、接合資料は、1つのブロックで一貫して消費されたものがほとんどで、僅かの例でブロック間共有関係があると考えられる事ができよう。

以上の共有関係を、富山県野沢遺跡で試みられた方法(山下、1982)を用いてブロック間の相互関係強度に計算したのが第58表、共有関係の図と体裁を一致させて図示したのが第402図である。先の共有関係図では、ブロックの所属点数の多さを無視して、1つの共有関係は、すべて等価の1として図示した。この図では、点数の多いブロックでの1つの共有関係は弱く、少ないブロックでの1つの共有関係は強く考え、その幾何平均によって、相互関係強度が求められている。

第402図を見ると、基本的には先の共有関係図と差異はない傾向を示しているが、細部では異なっている。石器類ブロックがさきに述べた2群に分類されるのは同様である。各石器類ブロックでの内部接合比をブロック間相互の強度として見ると最大が0.94から0.48で、一方のブロック間相互関係強度はいずれも0.20～0.02までの範囲となる。ブロック内の接合強度がブロック間接合強度と比較して、圧倒的に強いことが読み取れよう。ブロック内接合強度は、最大0.94～0.74までの群と、0.65～0.48までの群、接合強度0のブロック内接合関係のない1群の3群に分けることができる。ブロック内接合強度が高い石器類ブロックでは、その石器類ブロックに所属する接合資料の量に比較して、内部での活発な剥片剥離作業の存在が推定できる。所属点数の多い石器類ブロックでの接合強度は、1例・2例の持ち出しでは動かないが、所属点数の少ないブロックでの1例は、強度関係を見かけ上大きく変えてしまうが、A・D・F・G・H・J a・J bでのブロック内接合相互強度の高さは、これらのブロックでの剥片剥離作業の内部完結性を示すものとして考えられるだろう。そのほかのブロックでは、ブロック間の移動を行なった接合例がかなり認められる。B・C・E a・E b等でのブロック間の共有関係は、豊富である。この背景には、そのブロックでの生産物が他ブロックに持ち出されたり、持ち込まれたりした接合資料が相互にかなり大量にあることを示している。これらのブロックは、お互いに関係を持ちあっている。石器類ブロックCは、内部での接合強度が0.48と低く、内部での剥片剥離作業の痕跡に乏しい。一方、Bとは0.20の強度を有し、ブロック間接合強度が他のブロックの関係より強い関係を有しており、ブロック

Cの石器類にはBからの持ち込みによるものがかなりあることを示唆している。

視覚的にとらえられた遺物のまとまりとしてのブロック間の接合資料共有関係・そのブロック間相互強度の観察の結果、石器類ブロックは、南北2群に分けられること、ブロック内での接合資料数の方がブロック間接合をするものより多いこと、チャート等の石材が全体での傾向を決定していること、等が判明した。

ところで、ブロックB・C・Dは、その石器組成によって統廃合され、B+C 2・3とD+C 1・1 outの2ブロックに再編成できる可能性が示唆されている。

先のブロック間の接合資料共有関係の分析には、B・C・Dのまま分析を進めたが、この点の検討を接合資料を通じて行なう必要がある。B・C・Dの統廃合問題は、石器類小ブロック間の接合資料共有関係分析の結果をまけて結論を出したい。

#### 石器類小ブロック間の関係

全石器類の石器類ブロック間接合資料共有関係の分析の結果、下位文化層の石器類ブロックは南北の2群に分割することができた。ここでは、南北の2つに分割して小ブロック間の接合資料共有関係を観察したい。またこの中で、先のB・C・Dの統廃合問題についても解決を計りたい。

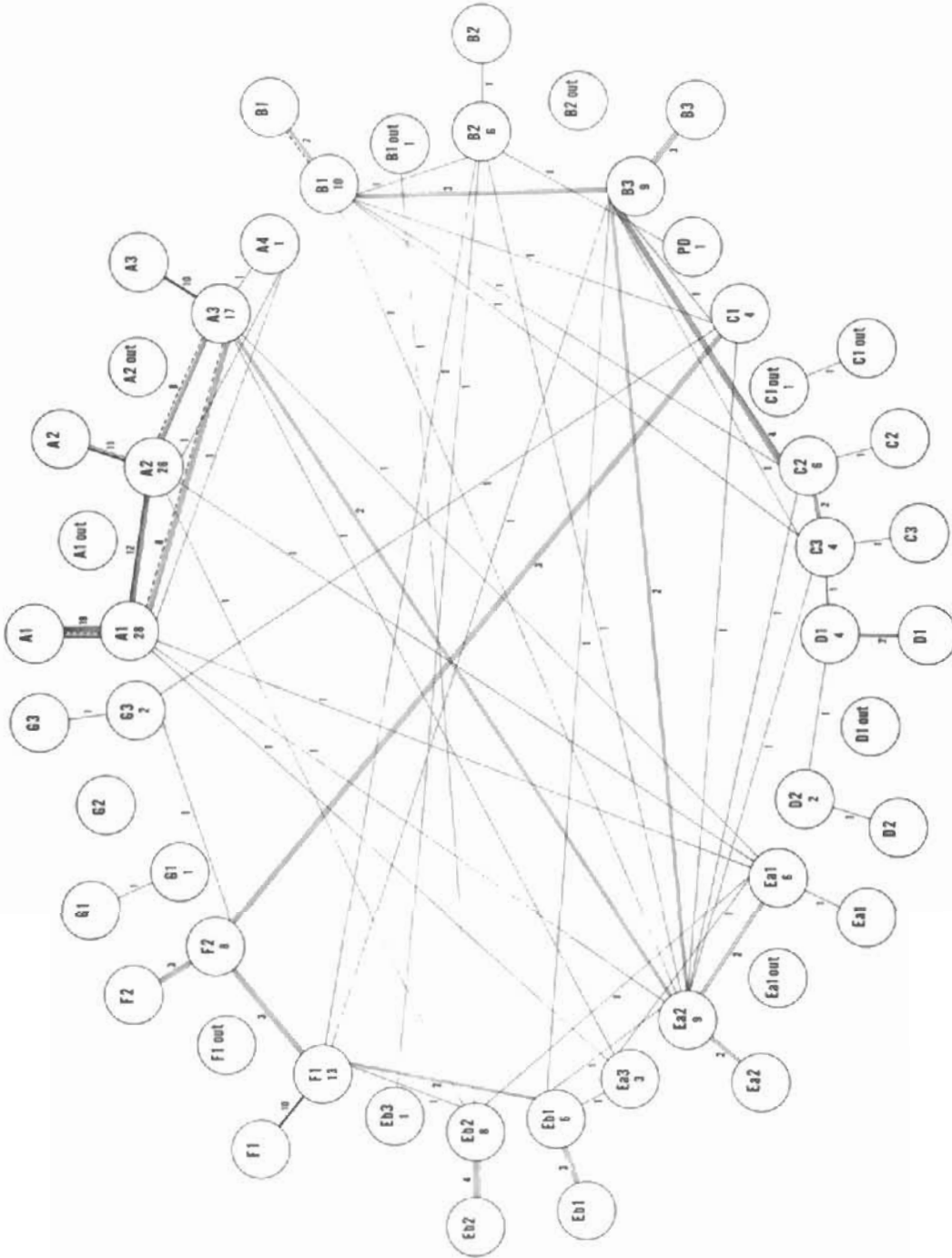
全石器類の北群小ブロック間接合資料共有関係は、全石器類の共有関係を第59表、図示が第403図、サヌカイト製の共有関係が第60表、図示が第404図、チャート等製の共有関係が第61表、図示が第405図である。全石器類の相互関係強度は、第62表、図示が第406図、サヌカイト製の相互関係強度は第63表、図示が第407図、チャート等製の相互関係強度は第64表、図示が第408図である。

小ブロックは、大規模な求心的集中を示す石器類ブロックの細分である場合、島状分布の群島としてのブロックの一単位の島状分布の場合など、必ずしも一定しない基準で設定されている。石器類ブロックほどではないにせよ、点数的開きも大きい。ただ、一定の空間の石器群が、どこの石器群と関係を持っているか、どの様な組成を示す空間であるのかを判断することには、一定の意義があろう。

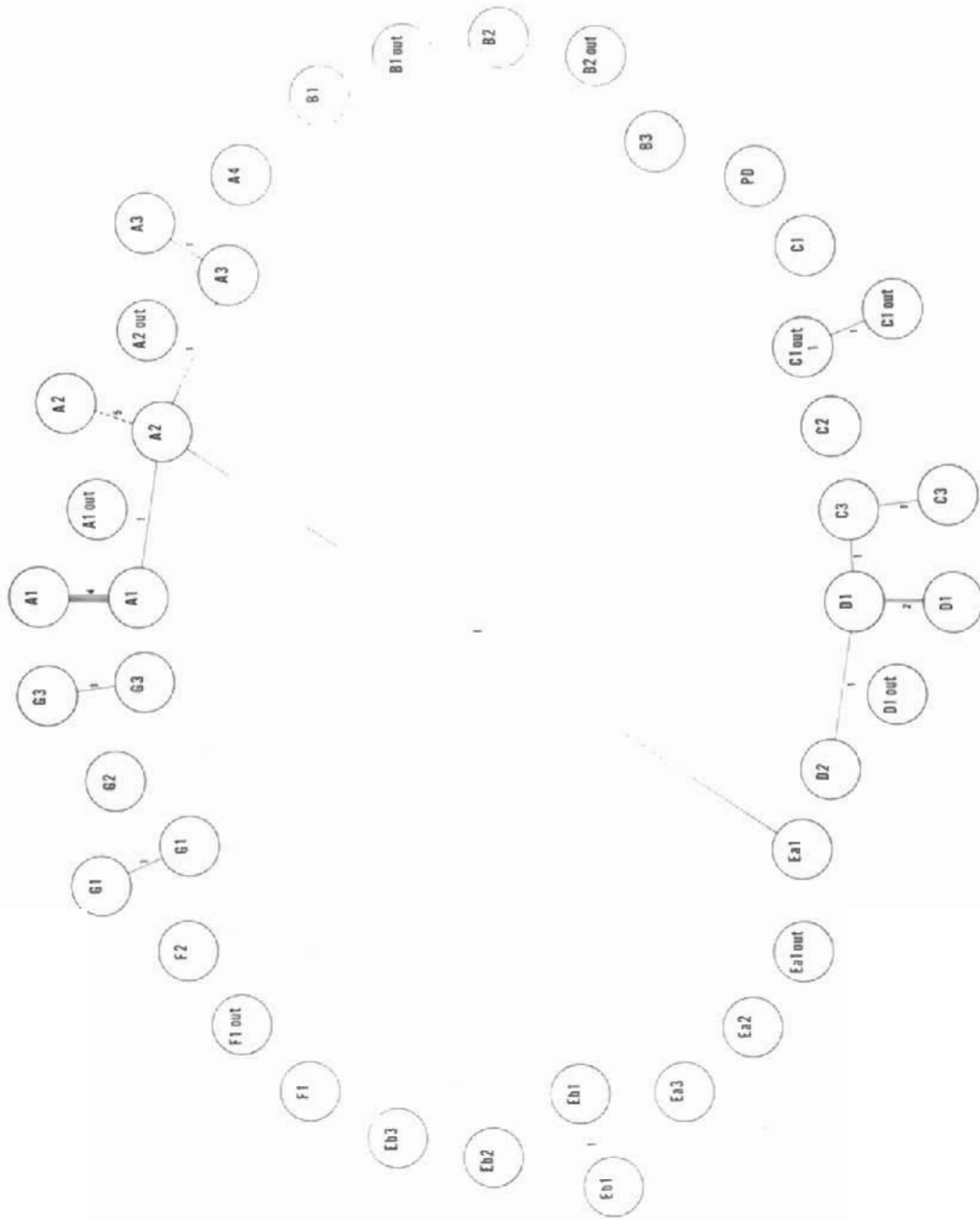
まず、全石器類の共有関係・相互関係強度を観察してみよう。小ブロック間で強い関係が認められるのは、A 1・A 2・A 3の1群、B 1 outとE b 2、B 2とE b 3、B 2とPD、B 3とC 2、D 1とD 2、E a 1とE a 3である。これらは、小ブロック間に最大0.38から0.20の相互関係強度が認められる。小ブロック間において、強度に大きな差はない。

石器類ブロック内部の小ブロック間の結びつきはどうであろうか。石器類ブロックAは、小ブロックに細分した結果も構造的にしっかりした共有関係が認められる。ブロックBは、B 1とB 3の間に緩い相互関係強度が認められるほかは、小ブロック間の構造的な結びつきに乏しい。特に、B 2はE b 3と、B 1 outは、E b 2と強い関係を持っている。ブロックCは、C 2とC 3の間に緩い相互関係強度が認められるほか、小ブロックの構造的な結びつきに乏しい。ブロックDは、D 1とD 2が強い関係を有する。ブロックE aでは、E a 1とE a 2、E a 1とE a 3の間には関係があるが、E a 2とE a 3の間にはない。ブロックE bでは、E b 1・2・3の小ブロック間には、関係がなく、小ブロックの個性が高いと考えられる。ブロックFでは、F 1とF 2には緩い関係がある。ブロックGでは、小ブロック間には相互関係がなく、個性が強いと考えられる。

同一小ブロック内での接合強度の高いのは、A 1・A 2・B 1・C 1 out・C 2・C 3・D 1・D 2・E b 1・E b 2・F 1・F 2・G 1・G 3がある。相互関係強度は、最大1.00から0.40までの間に分布する。これらでは、接合資料数の多寡の問題はあるが、剥片剥離作業が行なわれたことが推測できる。



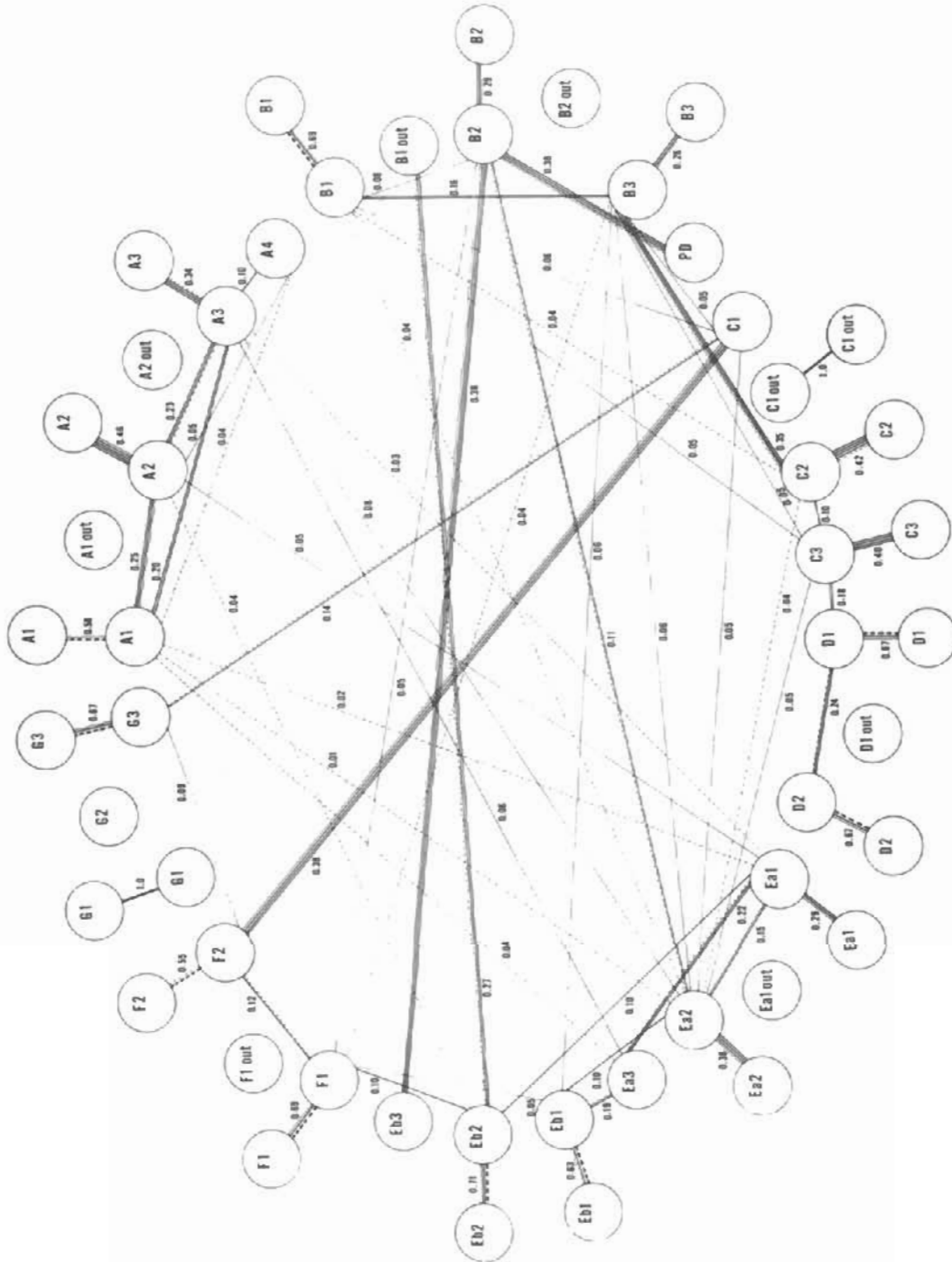
第403図 北群小ブロック間接合資料共有関係図



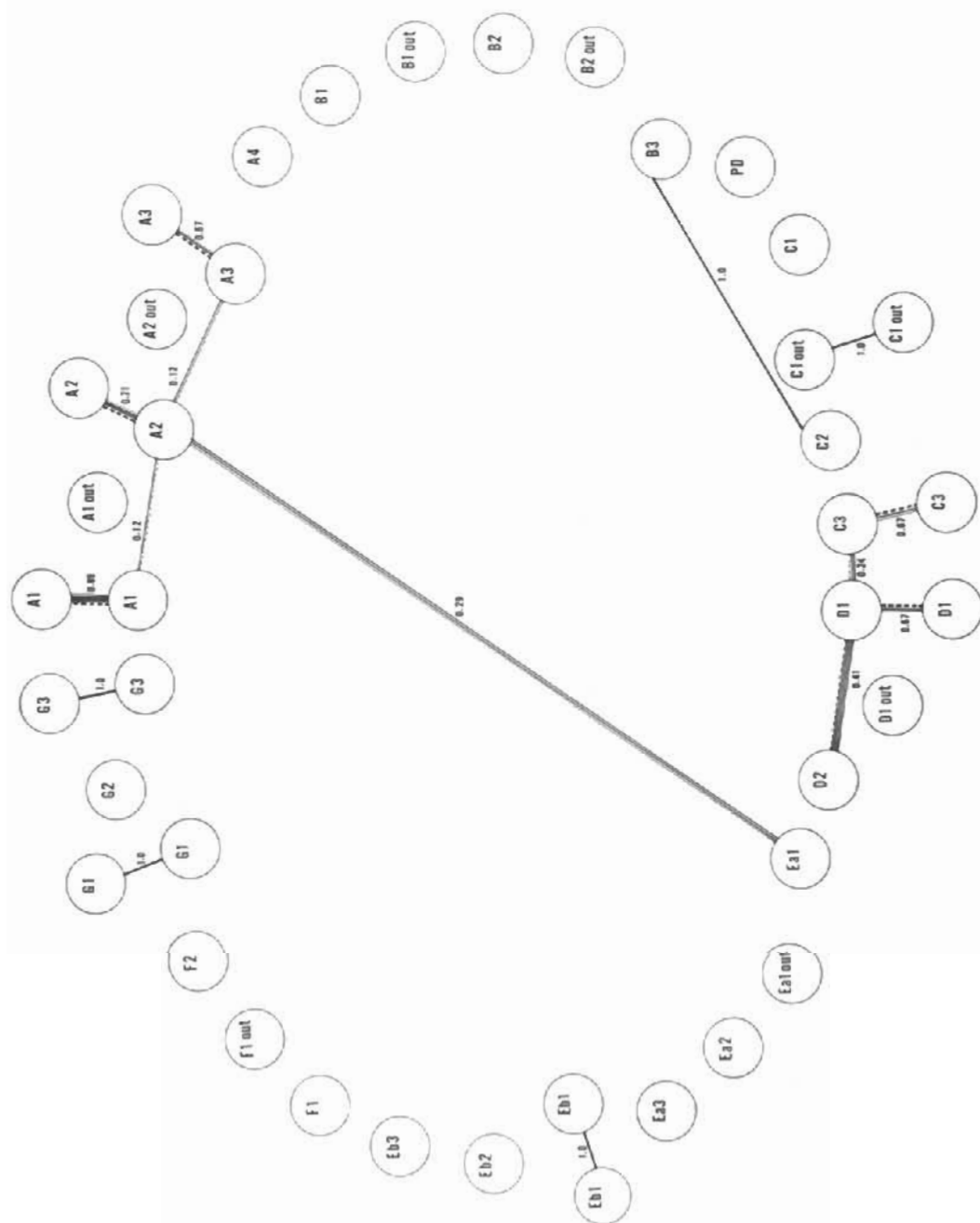
第404図 北群サヌカイト小ブロック間接合資料共有関係図



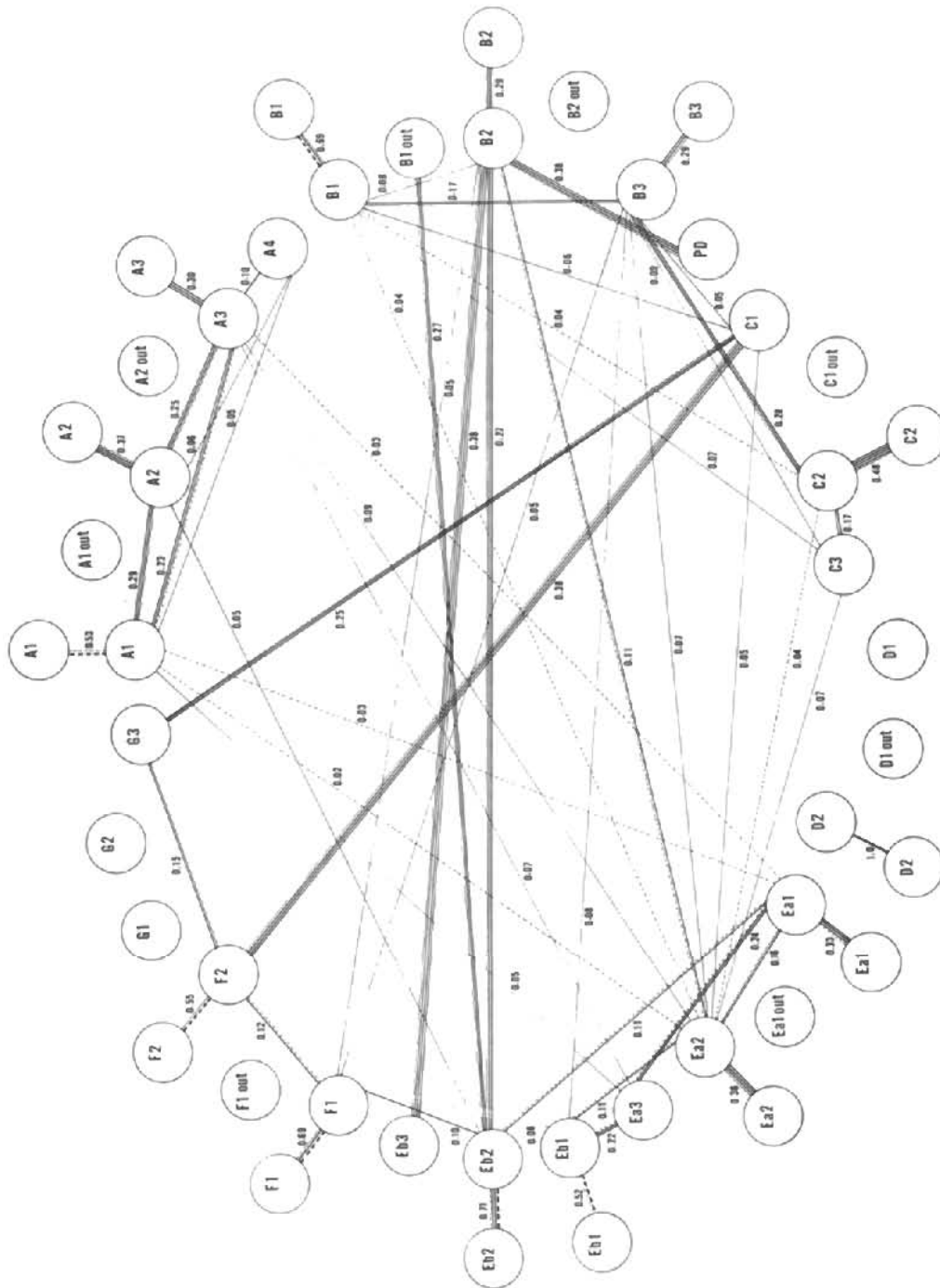




第406図 北群小ブロック間接合資料相互強度図



第407図 北群サヌカイト小ブロック間接合資料相互強度図



第408図 北群チャート等小ブロック間接合資料相互強度図

第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布

第59表 下位文化層北群小ブロック間接合資料による共有関係（全石器類）

	A1	A1out	A2	A2out	A3	A4	B1	B1out	B2	B2out	B3	PD	C1	C1out	C2	C3
所属個数	28	0	26	0	17	1	10	1	6	0	9	1	4	1	6	4
集束個数	10	0	6	0	3	0	5	0	1	0	1	0	0	1	1	1
A1	19	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A1out	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A2	12	0	11	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A2out	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A3	8	0	8	0	10	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A4	1	0	1	0	1	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B1	0	0	0	0	0	0	7	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B1out	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-
B2	0	0	0	0	0	0	1	0	1	-	-	-	-	-	-	-
B2out	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-
B3	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	3	-	-	-	-	-
PD	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	-	-	-	-
C1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	-	-	-
C1out	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	-	-
C2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	4	0	0	0	1	-
C3	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	2	1
D1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
D1out	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
D2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ea1	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ea1out	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ea2	1	0	0	0	2	0	1	0	1	0	2	0	1	0	1	1
Ea3	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Eb1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
Eb2	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
Eb3	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
F1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0
F1out	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
F2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0
G1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
G2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
G3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0

	D1	D1out	D2	Ea1	Ea1out	Ea2	Ea3	Eb1	Eb2	Eb3	F1	F1out	F2	G1	G2	G3
所属個数	4	0	2	6	0	9	3	6	8	1	13	0	8	1	0	2
集束個数	2	0	1	1	0	2	0	2	4	0	7	0	3	1	0	1
A1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A1out	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A2out	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B1out	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B2out	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
PD	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
C1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
C1out	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
C2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
C3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
D1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
D1out	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
D2	1	0	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ea1	0	0	0	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ea1out	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ea2	0	0	0	2	0	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ea3	0	0	0	1	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Eb1	0	0	0	0	0	1	1	3	-	-	-	-	-	-	-	-
Eb2	0	0	0	1	0	0	0	4	-	-	-	-	-	-	-	-
Eb3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-
F1	0	0	0	0	0	0	0	2	1	0	10	-	-	-	-	-
F1out	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-
F2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	3	-	-	-
G1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	-	-
G2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-
G3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1

第IV章 下位文化層の調査

第60表 下位文化層北群小ブロック間接合資料による共有関係（サヌカイト製石器類）

	A1	A1out	A2	A2out	A3	A4	B1	B1out	B2	B2out	B3	PD	C1	C1out	C2	C3
所属個数	5	0	6	0	2	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	0
収束個数	4	0	3	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
A1	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A1out	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A2	1	0	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A2out	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A3	0	0	1	0	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A4	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B1	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B1out	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-
B2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-
B2out	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-
B3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-
PD	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-
C1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-
C1out	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	-	-
C2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	-
C3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
D1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
D1out	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
D2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ea1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ea1out	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ea2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ea3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Eb1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Eb2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Eb3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
F1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
F1out	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
F2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
G1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
G2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
G3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

	D1	D1out	D2	Ea1	Ea1out	Ea2	Ea3	Eb1	Eb2	Eb3	F1	F1out	F2	G1	G2	G3
所属個数	4	0	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1
収束個数	2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1
A1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A1out	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A2out	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B1out	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B2out	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
PD	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
C1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
C1out	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
C2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
C3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
D1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
D1out	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
D2	1	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ea1	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ea1out	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ea2	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ea3	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Eb1	0	0	0	0	0	0	0	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Eb2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-
Eb3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-
F1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-
F1out	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-
F2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-
G1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	-	-
G2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-
G3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1

第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布

第61表 下位文化層北群小ブロック間接合資料による共有関係（チャート等製石器類）

	A1	A1out	A2	A2out	A3	A4	B1	B1out	B2	B2out	B3	PD	C1	C1out	C2	C3
所属個数	23	0	20	0	15	1	10	1	6	0	8	1	4	0	5	0
収束個数	6	0	3	0	2	0	5	0	1	0	1	0	0	0	1	0
A1	15	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A1out	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A2	11	0	6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A2out	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A3	8	0	7	0	9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A4	1	0	1	0	1	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B1	0	0	0	0	0	0	7	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B1out	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-
B2	0	0	0	0	0	0	1	0	1	-	-	-	-	-	-	-
B2out	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-
B3	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	3	-	-	-	-	-
PD	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	-	-	-	-
C1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	-	-	-
C1out	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-
C2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	3	0	0	0	1	-
C3	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	2	0
D1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
D1out	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
D2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ea1	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ea1out	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ea2	1	0	0	0	2	0	1	0	1	0	2	0	1	0	1	1
Ea3	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Eb1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
Eb2	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
Eb3	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
F1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0
F1out	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
F2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0
G1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
G2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
G3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0

	D1	D1out	D2	Ea1	Ea1out	Ea2	Ea3	Eb1	Eb2	Eb3	F1	F1out	F2	G1	G2	G3
所属個数	4	0	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1
収束個数	2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1
A1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A1out	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A2out	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B1out	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B2out	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
PD	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
C1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
C1out	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
C2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
C3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
D1	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
D1out	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
D2	0	0	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ea1	0	0	0	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ea1out	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ea2	0	0	0	2	0	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ea3	0	0	0	1	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Eb1	0	0	0	0	0	1	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-
Eb2	0	0	0	1	0	0	0	0	4	-	-	-	-	-	-	-
Eb3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-
F1	0	0	0	0	0	0	0	2	1	0	10	-	-	-	-	-
F1out	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-
F2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	3	-	-	-
G1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-
G2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-
G3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0

第62表 下位文化層北群小ブロック間接合資料による相互強度（全石器類）

1	A1	A1out	A2	A2out	A3	A4	B1	B1out	B2	B2out	B3	PD	C1	C1out	C2	C3
A1	0.583	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
A1out	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
A2	0.250	---	0.464	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
A2out	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
A3	0.204	---	0.229	---	0.342	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
A4	0.041	---	0.052	---	0.095	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
B1	---	---	---	---	---	---	0.690	---	---	---	---	---	---	---	---	---
B1out	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
B2	---	---	---	---	---	---	0.076	---	0.286	---	---	---	---	---	---	---
B2out	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
B3	---	---	---	---	---	---	0.159	---	---	---	0.264	---	---	---	---	---
PD	---	---	---	---	---	---	---	---	0.378	---	---	---	---	---	---	---
C1	---	---	---	---	---	---	0.064	---	---	---	0.048	---	---	---	---	---
C1out	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	1.000	---	---
C2	---	---	---	---	---	---	0.035	---	---	---	0.349	---	---	---	0.416	---
C3	---	---	---	---	---	---	0.045	---	---	---	0.053	---	---	---	0.103	0.400
D1	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	0.183
D1out	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
D2	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
Ea1	0.024	---	0.059	---	0.029	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
Ea1out	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
Ea2	0.019	---	---	---	0.081	---	0.039	---	0.114	---	0.065	---	0.050	---	0.035	0.045
Ea3	0.043	---	---	---	0.063	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
Eb1	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	0.064	---	---	---	---	---
Eb2	---	---	0.041	---	---	---	---	0.266	---	---	---	---	---	---	---	---
Eb3	---	---	---	---	---	---	---	---	0.378	---	---	---	---	---	---	---
F1	---	---	---	---	---	---	---	---	0.053	---	0.044	---	---	---	---	---
F1out	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
F2	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	0.377	---	---	---
G1	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
G2	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
G3	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	0.144	---	---	---
	D1	D1out	D2	Ea1	Ea1out	Ea2	Ea3	Eb1	Eb2	Eb3	F1	F1out	F2	G1	G2	G3
A1	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
A1out	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
A2	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
A2out	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
A3	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
A4	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
B1	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
B1out	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
B2	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
B2out	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
B3	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
PD	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
C1	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
C1out	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
C2	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
C3	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
D1	0.667	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
D1out	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
D2	0.236	---	0.667	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
Ea1	---	---	---	0.286	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
Ea1out	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
Ea2	---	---	---	0.152	---	0.364	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
Ea3	---	---	---	0.218	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
Eb1	---	---	---	---	---	0.101	0.192	0.630	---	---	---	---	---	---	---	---
Eb2	---	---	0.101	---	---	---	---	---	0.714	---	---	---	---	---	---	---
Eb3	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
F1	---	---	---	---	---	---	---	0.050	0.101	---	0.687	---	---	---	---	---
F1out	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
F2	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	0.122	---	0.545	---	---	---
G1	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	1.000	---	---
G2	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
G3	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	0.087	---	---	0.667

第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布

第63表 下位文化層北群小ブロック間接合資料による相互強度（サヌカイト製石器類）

	A1	A1out	A2	A2out	A3	A4	B1	B1out	B2	B2out	B3	PD	C1	C1out	C2	C3
A1	0.889	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
A1out	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
A2	0.118	---	0.708	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
A2out	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
A3	---	---	0.166	---	0.667	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
A4	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
B1	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
B1out	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
B2	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
B2out	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
B3	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
PD	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
C1	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
C1out	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	1.000	---	---
C2	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	1.000	---	---	---	---	---
C3	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
D1	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	0.667
D1out	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	0.236
D2	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
Ea1	---	---	0.288	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
Ea1out	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
Ea2	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
Ea3	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
Eb1	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
Eb2	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
Eb3	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
F1	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
F1out	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
F2	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
G1	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
G2	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
G3	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
	D1	D1out	D2	Ea1	Ea1out	Ea2	Ea3	Eb1	Eb2	Eb3	F1	F1out	F2	G1	G2	G3
A1	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
A1out	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
A2	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
A2out	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
A3	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
A4	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
B1	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
B1out	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
B2	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
B2out	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
B3	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
PD	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
C1	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
C1out	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
C2	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
C3	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
D1	0.667	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
D1out	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
D2	0.409	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
Ea1	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
Ea1out	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
Ea2	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
Ea3	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
Eb1	---	---	---	---	---	---	---	1.000	---	---	---	---	---	---	---	---
Eb2	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
Eb3	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
F1	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
F1out	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
F2	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
G1	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	1.000	---	---
G2	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
G3	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	1.000



第IV章 下位文化層の調査

第64表 下位文化層北群小ブロック間接合資料による相互強度 (チャート等製石器類)

	A1	A1out	A2	A2out	A3	A4	B1	B1out	B2	B2out	B3	PD	C1	C1out	C2	C3
A1	0.530	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
A1out																
A2	0.287		0.367	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
A2out																
A3	0.234		0.250		0.303	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
A4	0.045		0.061		0.100											
B1							0.690	---	---	---	---	---	---	---	---	---
B1out																
B2							0.076		0.286	---	---	---	---	---	---	---
B2out																
B3							0.166				0.288	---	---	---	---	---
PD									0.378							
C1							0.064				0.050					
C1out																
C2							0.038				0.275				0.476	---
C3							0.071				0.087				0.172	
D1																
D1out																
D2																
Ea1	0.028				0.033											
Ea1out																
Ea2	0.020				0.085		0.038		0.114		0.068		0.050		0.038	0.071
Ea3	0.047				0.067											
Eb1											0.076					
Eb2			0.048					0.266								
Eb3									0.378							
F1									0.053		0.046					
F1out																
F2													0.377			
G1																
G2																
G3													0.250			
	D1	D1out	D2	Ea1	Ea1out	Ea2	Ea3	Eb1	Eb2	Eb3	F1	F1out	F2	G1	G2	G3
A1	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
A1out	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
A2	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
A2out	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
A3	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
A4	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
B1	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
B1out	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
B2	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
B2out	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
B3	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
PD	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
C1	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
C1out	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
C2	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
C3	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
D1	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
D1out	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
D2			1.000	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
Ea1				0.333	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
Ea1out					---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
Ea2				0.164		0.364	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
Ea3				0.236			---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
Eb1						0.114	0.218	0.524	---	---	---	---	---	---	---	---
Eb2									0.714	---	---	---	---	---	---	---
Eb3										---	---	---	---	---	---	---
F1								0.057	0.101		0.687	---	---	---	---	---
F1out												---	---	---	---	---
F2											0.122		0.545	---	---	---
G1																---
G2																---
G3													0.150			---

次に、北群小ブロックでのサヌカイト製石器類の接合相互関係強度を観察しよう。接合資料数が少ないため、関係線の数が激減している。AとDのブロック内に接合関係があり、サヌカイトの剥片剥離作業がこの2つの石器類ブロックで行なわれたことが知れる。B3とC2、C3とD1間にも接合関係がある。Eb1とG1にも接合資料がある。

北群小ブロックでのチャート等製石器類の接合相互関係強度を観察しよう。量的に多いため、全体の傾向は全石器類の結果と大差はない。サヌカイト製石器類の接合線が除かれるため、変化した点は、ブロックAの内部完結性、B1outとEb2、B2とEa2・Eb2・3のブロック間接合関係、B3とC2のブロック間接合関係、C1とF2・G3のブロック間接合関係、Ea1とEa2・Ea3・Eb2、Ea3とEb1の接合関係等が鮮明化した点であり、ブロックDの接合関係は消滅している。

以上の観察結果から、ブロックB・C・Dの問題を考えてみよう。チャート等の小ブロック間接合資料相互強度図では、ブロックBに小ブロック間の相互関係が薄く、ブロック間関係が強いことが認められる。B3は、C2と強い関係を有する。ブロックCは、C1とC2・C3が接合関係で分かたれる。ブロックDには接合資料はない。サヌカイトの小ブロック間接合資料相互強度図では、B3とC2に強い関係があり、C3とD1の間にも認められる。全体として、B3とC2の関係を認めてよいであろう。第3節第2項の石器組成の分析でも、ブロックBとC2・C3小ブロックの組成が類似したが、ここでも接合資料の共有関係が認められた。ブロックBとブロックD内接合関係の少ない点が気かりではあるが、石器類ブロックB・C・Dは、B+C2・3とD+C1・1outに再編成できる可能性が高いと考えられよう。このように考える場合、C3とD1間のサヌカイト製接合資料は、ブロック間接合例として評価したい。

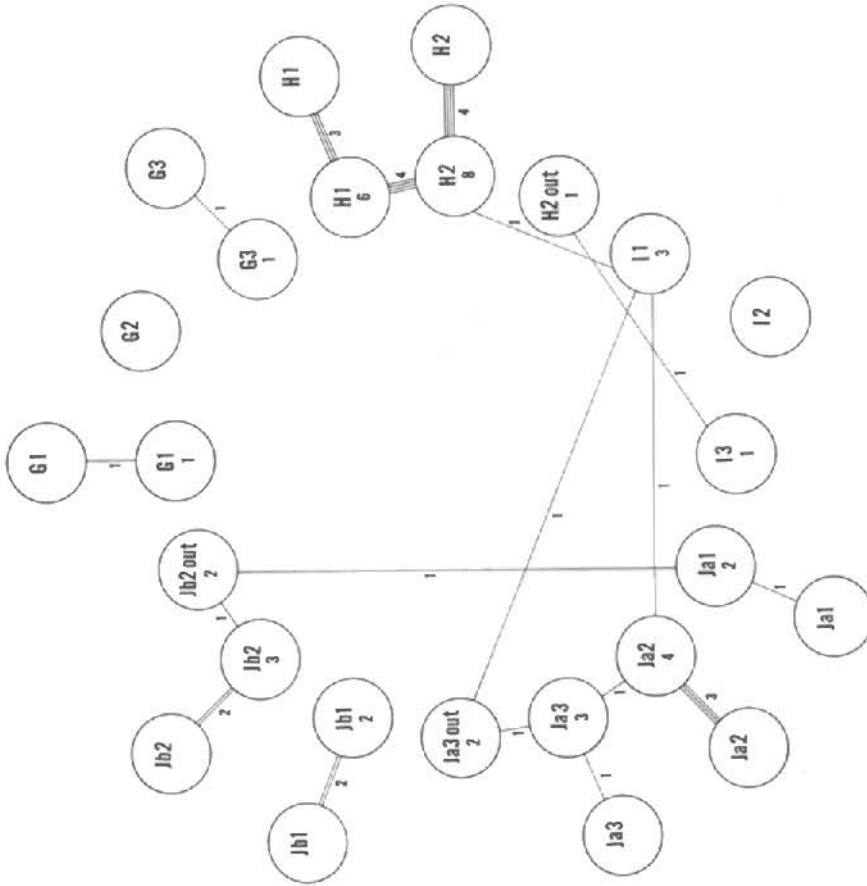
全石器類の南群小ブロック間接合資料共有関係は、全石器類の共有関係を第65表、図示が第409図、サヌカイト製の共有関係が第66表、図示が第410図、チャート等製の共有関係が第67表、図示が第411図である。全石器類の相互関係強度は、第68表、図示が第412図、サヌカイト製の相互関係強度は第69表、図示が第413図、チャート等製の相互関係強度は第70表、図示が第414図である。

南群の小ブロックは、ほとんどの部分で島状の遺物分布を示し、石器類ブロックが求心的分布を示すことはない。小ブロック単位での視覚的な分布の独立性は高い。また、サヌカイトが量的に過半を占めるため、接合資料に乏しい。

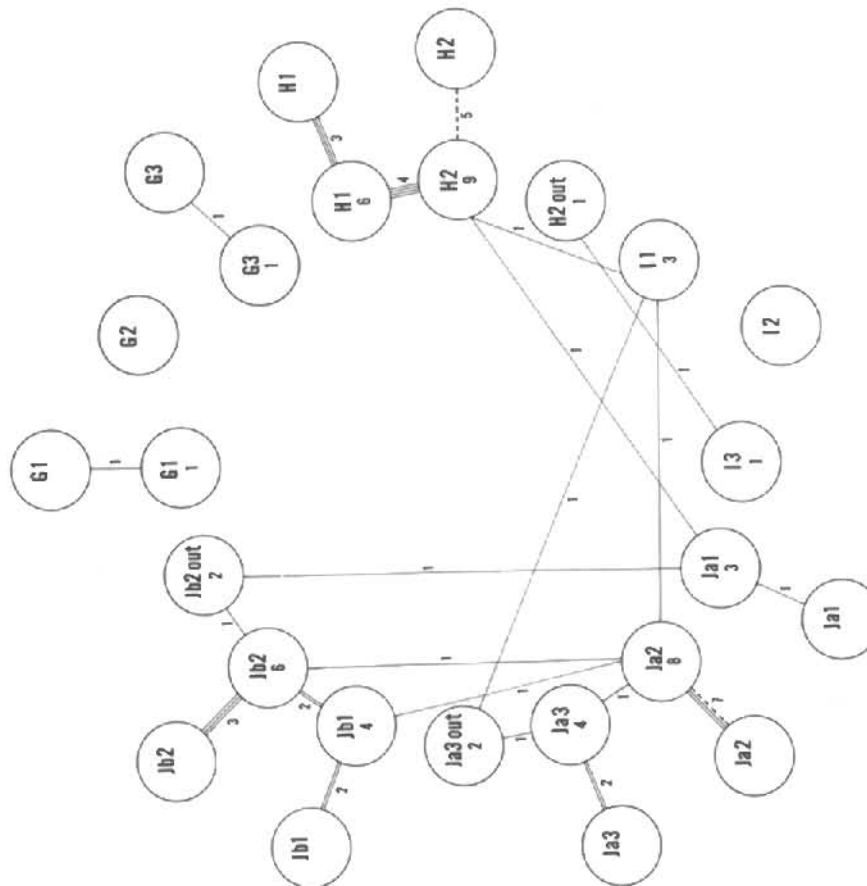
接合資料数の多いのはH1、H2、Ja2・Ja3・Jb1・Jb2で、接合資料4-9を有している。石器類ブロック内接合関係の強いのは、ブロックH、ブロックJbである。Ja1は、Ja内部での接合関係を持たず、Jb2outとの接合関係があることから、ブロックJaとJbは、Ja2とJa3、Ja3out、I1のまとまりとJa1とJbの2群とすることができるかも知れない。サヌカイト製接合資料の分布状況を検討すると、石器類ブロックHの完結性、Ja2・Ja3・Ja3outとI1、Ja1・Jb2・Jb2outの2群がある。チャート等製接合資料の分布状況では、Ja2とJb1・Jb2の関係が認められる。ただ、J全体での有機的な関係は認めて良いであろうが、全体として接合資料数と内容が貧弱であり、積極的な関係を考察することはできない。分析基準は、特に統廃合を行なう事なく、最初に視覚的に設定した石器類ブロックの段階にとどめておく方が無難であろう。

#### 境界を改変した石器類ブロック間の関係

小ブロック間の接合資料の共有関係・相互強度の観察の結果、B・C・DをB+C2・3とD+C1・1outに統廃合した石器類ブロック間接合資料は、全石器類の共有関係を第71表、図示が第415図、サヌ

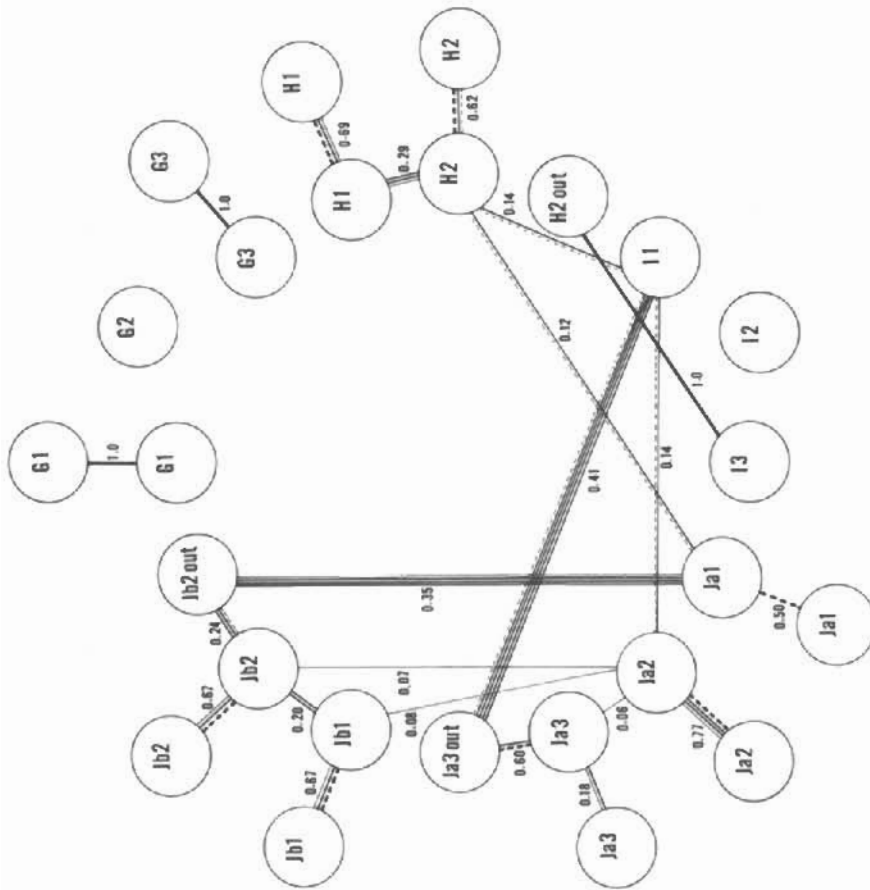


第410図 南群サヌカイト小ブロック間接合資料共有関係図

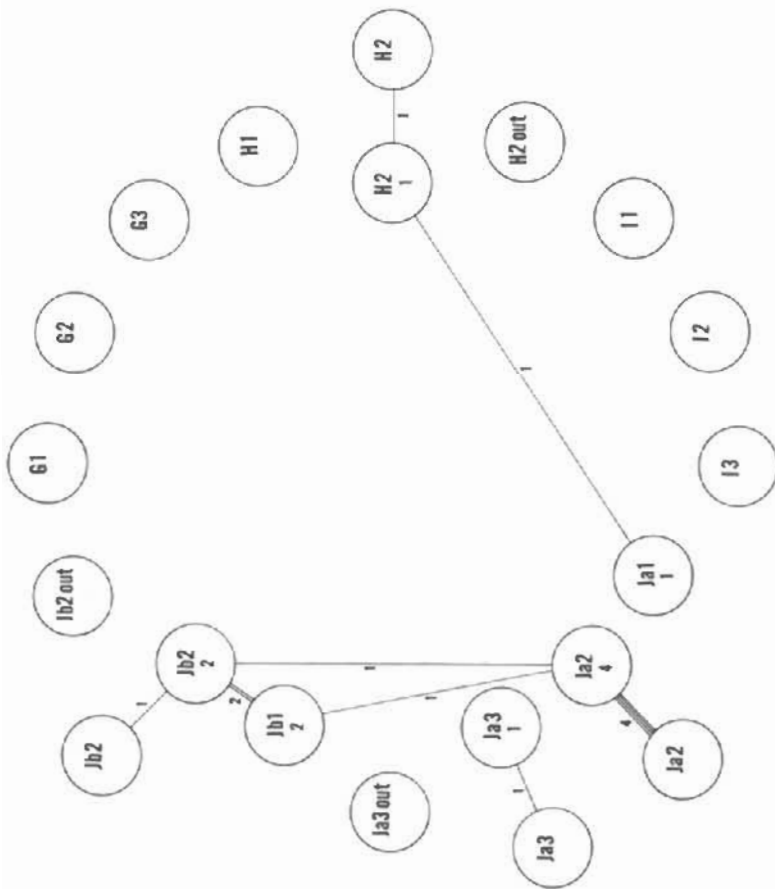


第409図 南群小ブロック間接合資料共有関係図

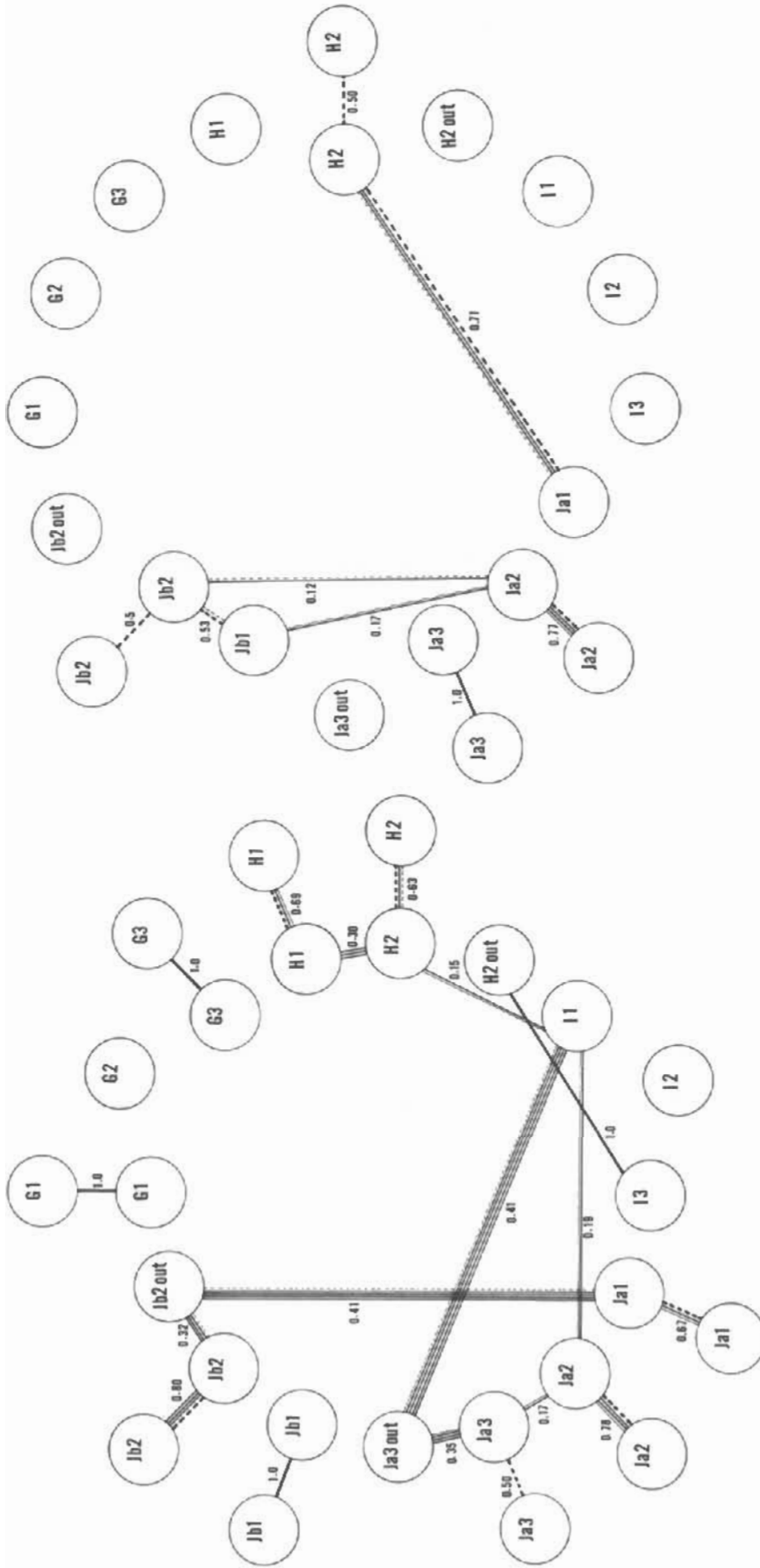
第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布



第412図 南群小ブロック間接合資料相互強度図



第411図 南群チャート等小ブロック間接合資料共有関係図



第413図 南群サヌカイト小ブロック間接合資料相互強度図

第414図 南群チャート等小ブロック間接合資料相互強度図

第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布

第65表 下位文化層南群小ブロック間接合資料による共有関係（全石器類）

	G1	G2	G3	H1	H2	H2out	I1	I2	I3	Ja1	Ja2	Ja3	Ja3out	Jb1	Jb2	Jb2out
所属個数	1	0	1	6	9	1	3	0	1	3	8	4	2	4	6	2
収束個数	1	0	1	2	3	0	0	0	0	1	5	2	0	2	3	0
G1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
G2	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
G3	0	0	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
H1	0	0	0	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
H2	0	0	0	4	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
H2out	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
I1	0	0	0	0	1	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
I2	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-
I3	0	0	0	0	0	1	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-
Ja1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	-	-	-	-	-	-
Ja2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	7	-	-	-	-	-
Ja3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	-	-	-	-
Ja3out	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	-	-	-
Jb1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	2	-	-
Jb2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	2	3	-
Jb2out	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0

第66表 下位文化層南群小ブロック間接合資料による共有関係（サマカイト製石器類）

	G1	G2	G3	H1	H2	H2out	I1	I2	I3	Ja1	Ja2	Ja3	Ja3out	Jb1	Jb2	Jb2out
所属個数	1	0	1	6	8	1	3	0	1	2	4	3	2	2	3	2
収束個数	1	0	1	2	3	0	0	0	0	1	2	1	0	2	2	0
G1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
G2	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
G3	0	0	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
H1	0	0	0	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
H2	0	0	0	4	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
H2out	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
I1	0	0	0	0	1	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
I2	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-
I3	0	0	0	0	0	1	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-
Ja1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	-	-	-	-	-	-
Ja2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	3	-	-	-	-	-
Ja3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	-	-	-	-
Ja3out	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	-	-	-
Jb1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	-	-
Jb2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	-
Jb2out	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0

第67表 下位文化層南群小ブロック間接合資料による共有関係（チャート等製石器類）

	G1	G2	G3	H1	H2	H2out	I1	I2	I3	Ja1	Ja2	Ja3	Ja3out	Jb1	Jb2	Jb2out
所属個数	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	4	1	0	2	3	0
収束個数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	0	0	1	0
G1	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
G2	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
G3	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
H1	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
H2	0	0	0	0	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
H2out	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
I1	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
I2	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-
I3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-
Ja1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-
Ja2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	-	-	-	-	-
Ja3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	-	-	-	-
Ja3out	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-
Jb1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	-	-
Jb2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	2	1	-
Jb2out	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

第IV章 下位文化層の調査

第68表 下位文化層南群小ブロック間接合資料による相互強度（全石器類）

	G1	G2	G3	H1	H2	H2out	I1	I2	I3	Ja1	Ja2	Ja3	Ja3out	Jb1	Jb2	Jb2out
G1	1.000	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
G2			---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
G3			1.000	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
H1				0.692	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
H2				0.286	0.618	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
H2out							---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
I1					0.140		---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
I2							---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
I3						1.000	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
Ja1					0.121					0.500	---	---	---	---	---	---
Ja2							0.112				0.769	---	---	---	---	---
Ja3											0.059	0.182	---	---	---	---
Ja3out							0.408					0.603	---	---	---	---
Jb1											0.080			0.667	---	---
Jb2											0.066			0.204	0.667	---
Jb2out										0.354						0.236

第69表 下位文化層南群小ブロック間接合資料による相互強度（サヌカイト製石器類）

	G1	G2	G3	H1	H2	H2out	I1	I2	I3	Ja1	Ja2	Ja3	Ja3out	Jb1	Jb2	Jb2out
G1	1.000	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
G2			---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
G3			1.000	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
H1				0.692	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
H2				0.304	0.633	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
H2out							---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
I1					0.149		---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
I2							---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
I3						1.000	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
Ja1										0.667	---	---	---	---	---	---
Ja2							0.192				0.778	---	---	---	---	---
Ja3											0.167	0.500	---	---	---	---
Ja3out							0.408					0.354	---	---	---	---
Jb1														1.000	---	---
Jb2															0.800	---
Jb2out										0.408						0.316

第70表 下位文化層南群小ブロック間接合資料による相互強度（チャート等製石器類）

	G1	G2	G3	H1	H2	H2out	I1	I2	I3	Ja1	Ja2	Ja3	Ja3out	Jb1	Jb2	Jb2out
G1		---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
G2			---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
G3				---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
H1					---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
H2					0.500	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
H2out							---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
I1							---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
I2								---	---	---	---	---	---	---	---	---
I3									---	---	---	---	---	---	---	---
Ja1					0.707					---	---	---	---	---	---	---
Ja2											0.765	---	---	---	---	---
Ja3												1.000	---	---	---	---
Ja3out													---	---	---	---
Jb1											0.171			---	---	---
Jb2											0.121			0.530	0.500	---
Jb2out																---

カイト製の共有関係が第72表、図示が第416図、チャート等製の共有関係が第73表、図示が第417図である。全石器類の相互関係強度は、第74表、図示が第418図、サヌカイト製の相互関係強度は第75表、図示が第419図、チャート等製の相互関係強度は第76表、図示が第420図である。

全石器類のブロック間接合資料数は、全体として統廃合前の結果と大差はない。南北に2分されるのも同様である。北群にはブロックAとブロックB+C 2・3、D+C 1・1 out、E a、E b、F、Gがまとまり、南群にはH、I、J a、J bがまとまる。KとLは独立的で点数が少ないため、接合資料は見いだせない。

石器類ブロック間での接合は、ブロックAとE aが4例、E bとが1例、ブロックB+C 2・3とD+C 1・1 outが2例、E aとが3例、E bとが3例、Fとが2例、ブロックD+C 1・1 outがB+C 2・3と2例、E aとが1例、Fとが3例、Gとが1例、ブロックE aとAが4例、B+C 2・3とが3例、D+C 1・1 outとが1例、E bとが3例、ブロックE bとブロックAが1例、B+C 2・3とが3例、E aとが3例、Fとが3例、ブロックFはB+C 2・3と2例、ブロックD+C 1・1 outと3例、E bとが3例、Gとが1例、ブロックGはD+C 1・1 outとが1例、Fとが1例である。以上が北群を形成する。南群では、ブロックHはIと2例、J aと1例、ブロックIは、Hと2例、J aと2例、ブロックJ aは、Hと1例、Iと2例、J bと2例、ブロックJ bは、J aと2例がある。

ブロック内での接合資料例の多いのは、ブロックAの44例、ブロックB+C 2・3の20例、ブロックFの15例、E aの6例、E bの7例、J aの11例などがある。ブロック内接合の多い石器類ブロックは、剥片剥離作業の行なわれた場所であろう。

第74表と第418図の、接合資料のブロック間相互関係強度を続けてみてみよう。

基本的には、共有関係図の観察と大差はないが、一見して気づかれるのは、ブロック内接合強度とブロック間接合強度の差が鮮明に表現されている点である。ブロックAのブロック内接合強度0.94を最高として、以下、Hの0.90、J bの0.88、Gの0.86、J aの0.84が続く。ブロックB+C 2・3の0.77とFの0.74、ブロックD+C 1・1 outの0.69とE bの0.63、E aの0.52は、内部完結度が低下した部分をブロック間の接合資料の共有関係によって補っている。これらブロック内接合強度の低いブロックでは、石器類のブロック間移動が激しかったことを示すのであろう。

続いて、サヌカイト製石器類の接合資料について検討しよう。

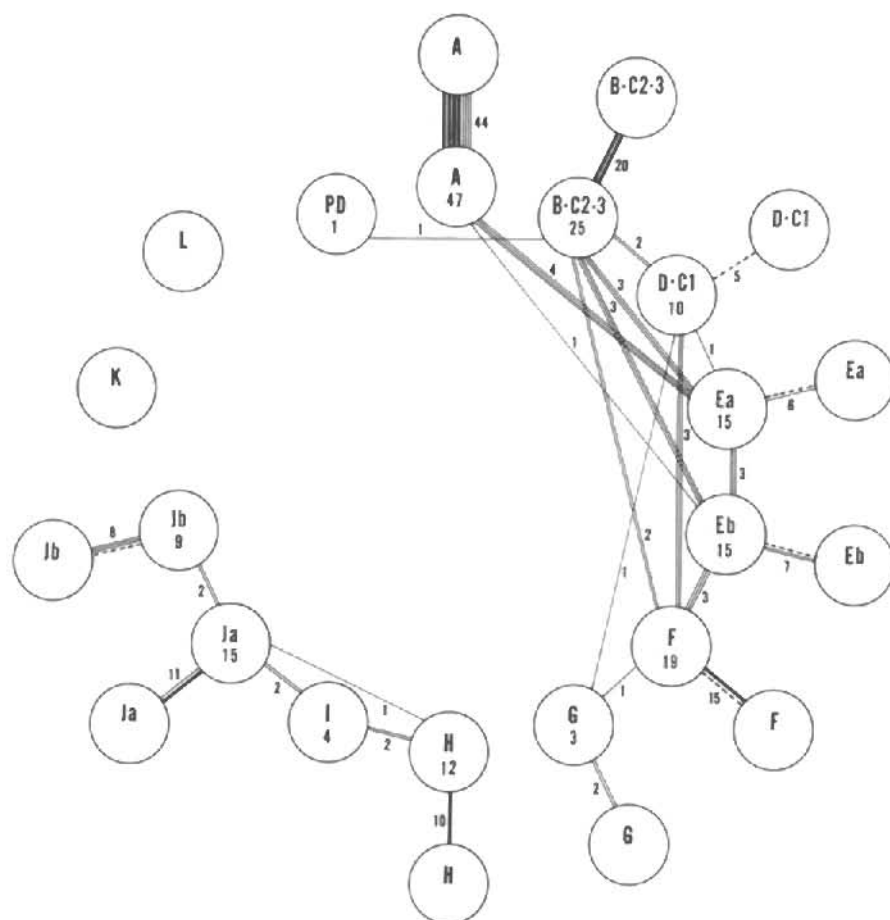
サヌカイト製接合資料は、例数が少なく、チャート等の石材と併せて行なった先の様な鮮明な傾向を見いだしにくい。サヌカイト製接合資料の石器類ブロック間共有関係を整理したのが第72表、図示したのが第416図である。

図を見ると、サヌカイト製接合資料の量的貧弱さから、先の接合関係によるブロック群が曖昧になる。接合関係を有する石器類ブロック間は、石器類ブロックAが、E aと1例、ブロックB+C 2・3がD+C 1・1 outと1例、ブロックD+C 1・1 outがB+C 2・3と1例、ブロックE aがAと1例、ブロックHがIと2例、ブロックIがHと2例、J aと2例、J aがIと2例、J bと1例、J bがJ aと1例となっている。

石器類ブロック内で、多数の接合例を有するのは、Aの外部だけの接合例1例を含んで11例、Hの外部だけとの接合例1例を含んで11例、J aでの外部接合のみの3例を含んで9例がある。これらは、内部での接合量が多く、このブロック内での剥片剥離作業の展開が考慮されよう。

B+C 2・3、D+C 1・1 outとA・E aの2群は南北区分の北群に対応し、H・I・J a・J bの



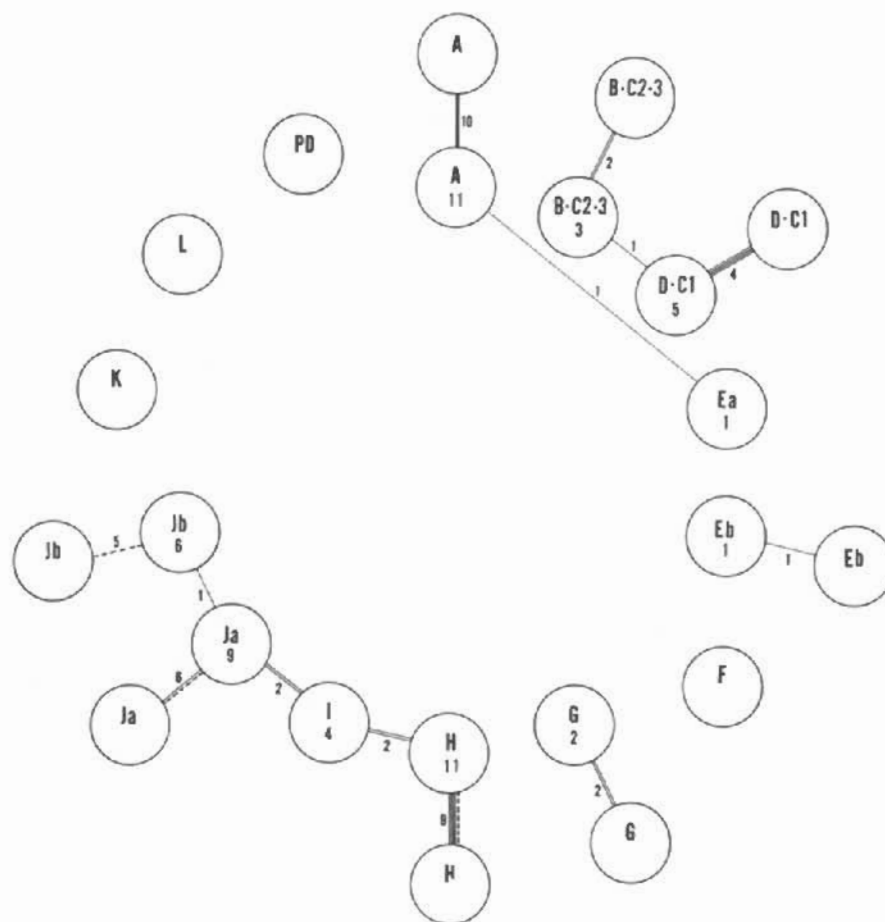


第415図 ブロック間接合資料共有関係図（修正後）

第71表 下位文化層ブロック間（B・C・D修正後）接合資料による共有関係（全石器類）

	A	B+C2.3	D+C1.lout	Ea	Eb	F	G	H	I	Ja	Jb	K	L	PD
所属個数	47	25	10	15	15	19	3	12	4	15	9	0	0	1
収束個数	42	16	5	5	6	12	2	9	0	10	7	0	0	0
A	44	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B+C2.3	0	20	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
D+C1.lout	0	2	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ea	4	3	1	6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Eb	1	3	0	3	7	-	-	-	-	-	-	-	-	-
F	0	2	3	0	3	15	-	-	-	-	-	-	-	-
G	0	0	1	0	0	1	2	-	-	-	-	-	-	-
H	0	0	0	0	0	0	0	10	-	-	-	-	-	-
I	0	0	0	0	0	0	0	2	0	-	-	-	-	-
Ja	0	0	0	0	0	0	0	1	2	11	-	-	-	-
Jb	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	8	-	-	-
K	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-
L	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-
PD	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

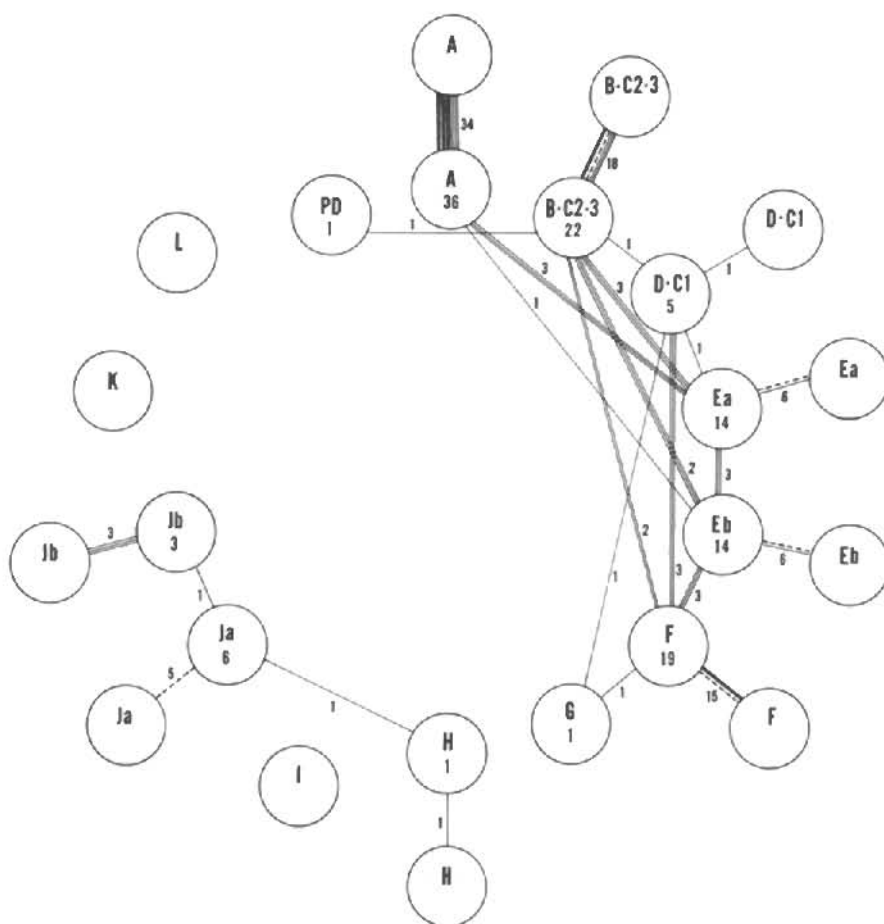
第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布



第416図 ブロック間サヌカイト接合資料共有関係図（修正後）

第72表 下位文化層ブロック間（B・C・D修正後）接合資料による共有関係（サヌカイト製石器類）

	A	B+C2.3	D+C1.lout	Ea	Eb	F	G	H	I	Ja	Jb	K	L	PD
所属個数	11	3	5	1	1	0	2	11	4	9	6	0	0	0
収束個数	10	2	4	0	1	0	2	9	0	6	5	0	0	0
A	10	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B+C2.3	0	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
D+C1.lout	0	1	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ea	1	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Eb	0	0	0	0	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
F	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-
G	0	0	0	0	0	0	2	-	-	-	-	-	-	-
H	0	0	0	0	0	0	0	9	-	-	-	-	-	-
I	0	0	0	0	0	0	0	2	0	-	-	-	-	-
Ja	0	0	0	0	0	0	0	0	2	6	-	-	-	-
Jb	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	5	-	-	-
K	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-
L	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-
PD	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

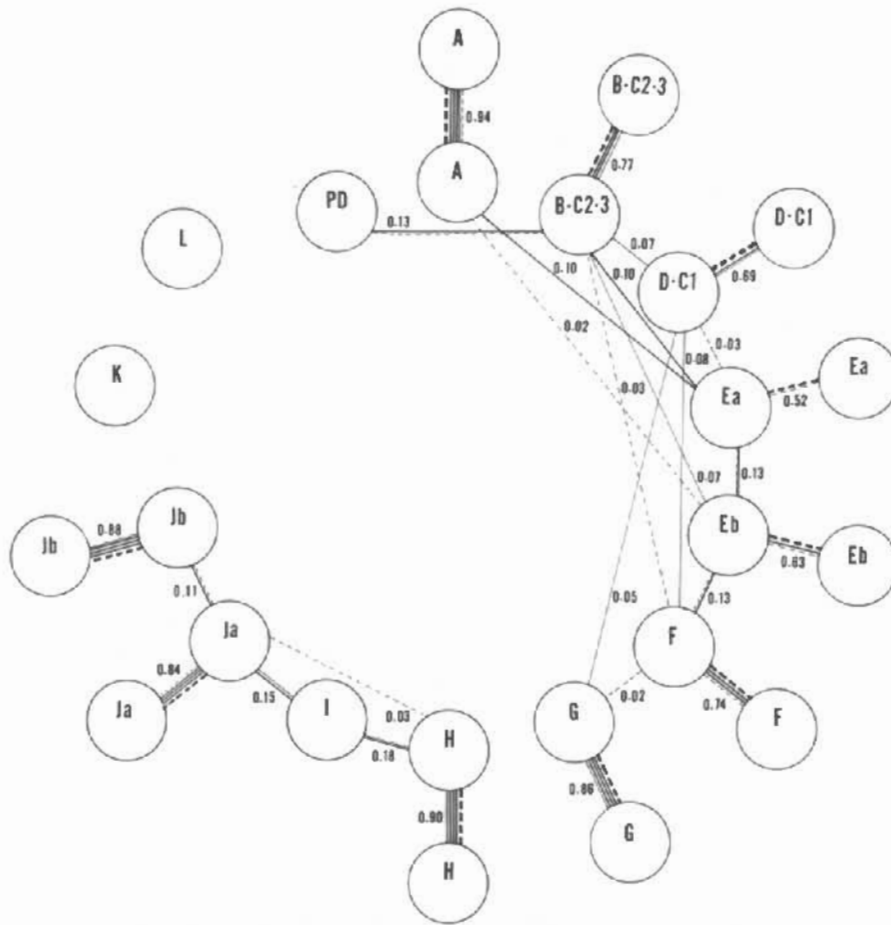


第417図 ブロック間チャート等接合資料共有図（修正後）

第73表 下位文化層ブロック間（B・C・D修正後）接合資料による共有関係（チャート等製石器類）

	A	B+C2.3	D+C1.lout	Ea	Eb	F	G	H	I	Ja	Jb	K	L	PD
所属個数	36	22	5	14	14	19	1	1	0	6	3	0	0	1
収束個数	32	14	1	5	5	12	0	0	0	4	2	0	0	0
A	34	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B+C2.3	0	18	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
D+C1.lout	0	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ea	3	3	1	6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Eb	1	3	0	3	6	-	-	-	-	-	-	-	-	-
F	0	2	3	0	3	15	-	-	-	-	-	-	-	-
G	0	0	1	0	0	1	0	-	-	-	-	-	-	-
H	0	0	0	0	0	0	0	1	-	-	-	-	-	-
I	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-
Ja	0	0	0	0	0	0	0	1	0	5	-	-	-	-
Jb	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	-	-	-
K	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-
L	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-
PD	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布

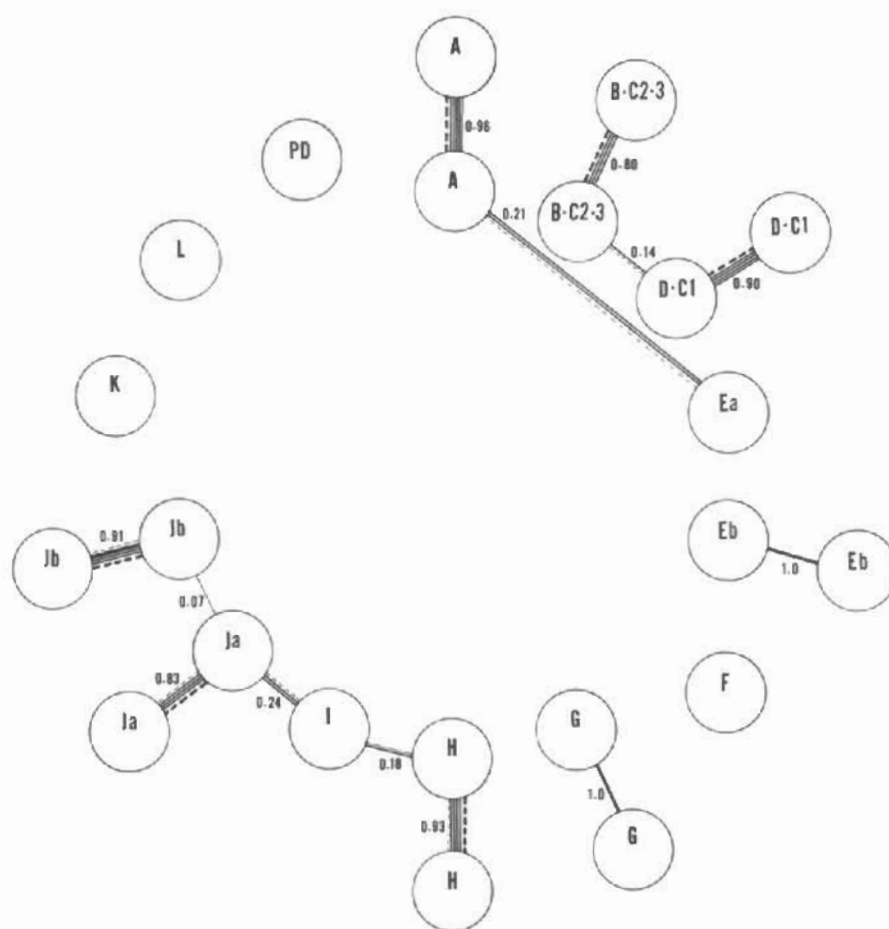


第418図 ブロック間接合資料相互強度図（修正後）

第74表 下位文化層ブロック間（B・C・D修正後）接合資料による相互強度（全石器類）

	A	B+C2.3	D+C1.lout	Ea	Eb	F	G	H	I	Ja	Jb	K	L	PD
A	0.943	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
B+C2.3		0.770	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
D+C1.lout			0.688	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
Ea	0.097	0.101	0.027	0.524	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
Eb	0.018	0.070		0.131	0.627	---	---	---	---	---	---	---	---	---
F		0.036	0.081		0.131	0.744	---	---	---	---	---	---	---	---
G			0.047			0.024	0.857	---	---	---	---	---	---	---
H								0.903	---	---	---	---	---	---
I								0.180	---	---	---	---	---	---
Ja							0.027	0.153	0.837	---	---	---	---	---
Jb									0.105	0.882	---	---	---	---
k												---	---	---
L													---	---
PD		0.130												---

第IV章 下位文化層の調査

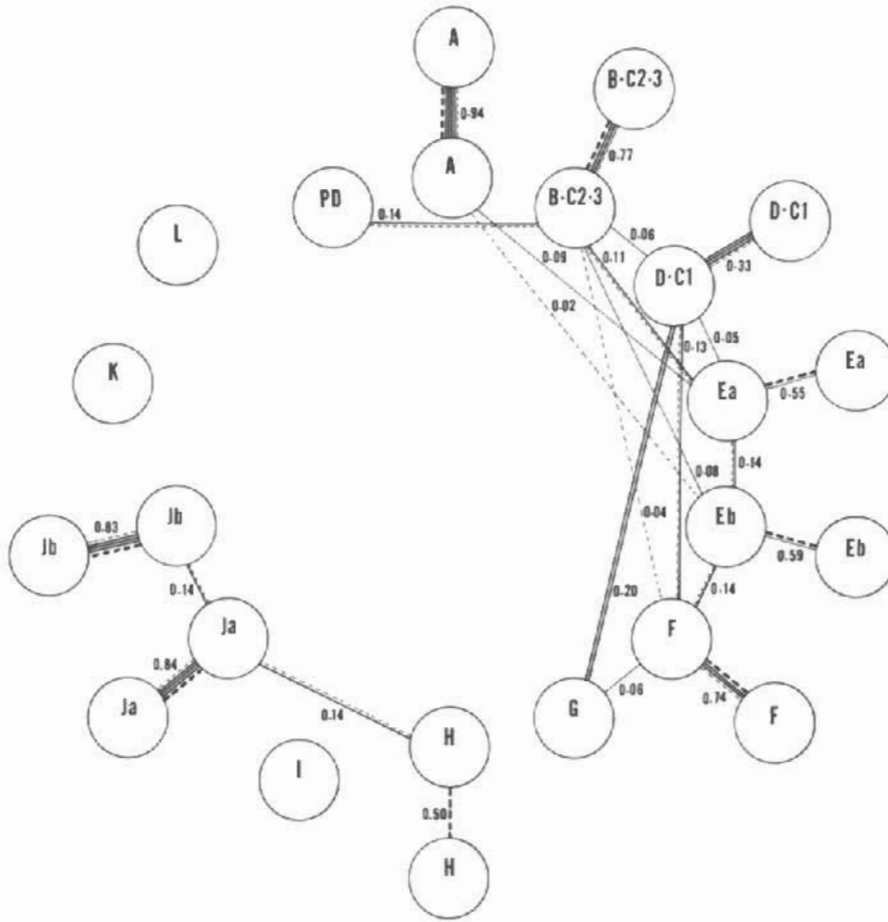


第419図 ブロック間サヌカイト接合資料相互強度図（修正後）

第75表 下位文化層ブロック間（B・C・D修正後）接合資料による相互強度（サヌカイト製石器類）

	A	B+C2.3	D+C1.1out	Ea	Eb	F	G	H	I	Ja	Jb	K	L	PD
A	0.958	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
B+C2.3		0.800	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
D+C1.1out		0.141	0.900	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
Ea	0.205				---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
Eb					1.000	---	---	---	---	---	---	---	---	---
F							---	---	---	---	---	---	---	---
G							1.000	---	---	---	---	---	---	---
H								0.931	---	---	---	---	---	---
I								0.186		---	---	---	---	---
Ja									0.236	0.833	---	---	---	---
Jb										0.071	0.909	---	---	---
k												---	---	---
L													---	---
PD														---

第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布



第420図 ブロック間チャート等接合資料相互強度図（修正後）

第76表 下位文化層ブロック間（B・C・D修正後）接合資料による相互強度（チャート等製石器類）

	A	B+C2.3	D+C1.1out	Ea	Eb	F	G	H	I	Ja	Jb	K	L	PD
A	0.939	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
B+C2.3		0.767	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
D+C1.1out		0.056	0.333	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
Ea	0.087	0.108	0.046	0.550	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
Eb	0.020	0.076		0.140	0.594	---	---	---	---	---	---	---	---	---
F		0.037	0.132		0.137	0.744	---	---	---	---	---	---	---	---
G			0.204			0.063	---	---	---	---	---	---	---	---
H								0.500	---	---	---	---	---	---
I									---	---	---	---	---	---
Ja									0.141	0.840	---	---	---	---
Jb										0.142	0.833	---	---	---
k												---	---	---
L													---	---
PD		0.138												---

ブロック群は、南群の一部に対応するが、有機的な一体構造としては抽出しがたい。

第75表と第419図は、サヌカイト製接合資料のブロック間相互関係強度である。

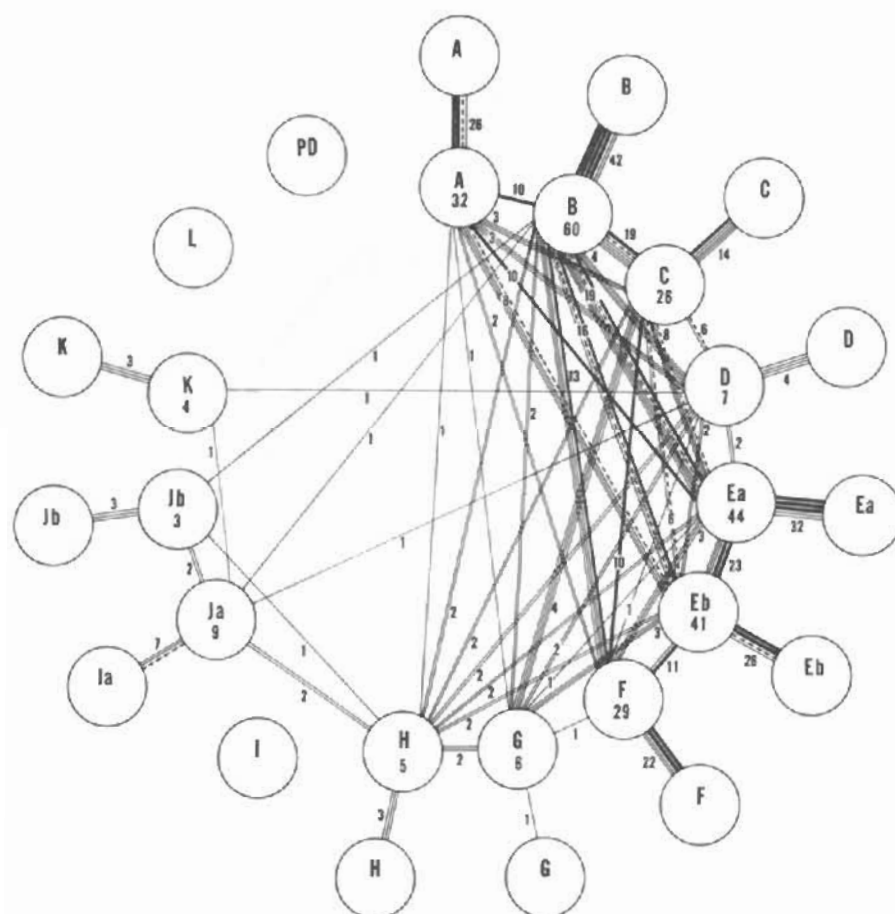
基本的には、共有関係図の観察と大差はないが、一見して気づかれるのは、全石器の図と異なってブロック内接合強度とブロック間接合強度の差が縮小している点である。サヌカイトにあっては、接合資料の分析だけに限定した結果ではあるが、全石器の場合と比べて石器類のブロック間移動が激しかったことを示すのであろう。

続いて、チャート等製接合資料の観察を行なう。

接合資料のブロック間共有関係をまとめたものが第73表、図示したのが第417図である。基本的には、全石器類での数値・図の様相と大差はない。量的にも充実したチャート等の石材の接合資料が、全体の様相の大局を決定していたからであろう。ただ、細部には、異なった点も見られる。

石器類ブロックが、南北の2群に分けられるのは同様である。北群では、サヌカイトの接合資料の例数が減っただけで大差はない。南群では、H・J a・J bが群をなし、Iがはずれる。南群では、サヌカイトの接合例が多く、その分の群構造が曖昧になったからであろう。

相互関係強度では、第76表・第420図を見ても、共有関係の結果と同様である。ただ、石器類ブロックD+C 1・1 outの内部接合強度が0.33にまで減少し、ブロック間のFとGとが0.13、Gとが0.20と接近する。ブロックD+C 1・1 out内での剥片剥離作業の不活発さが、チャート等の石材の剥片剥離作業の低迷の結果であることが読み取れる。接合資料の段階での話ではあるが、FとGからD+C 1・1 outにた



第421図 ブロック間個別別資料共有関係図（修正前）

いしての石器類の持込みの可能性が強く示唆されよう。

**b, 個別別資料からみた石器類ブロック間の関係**

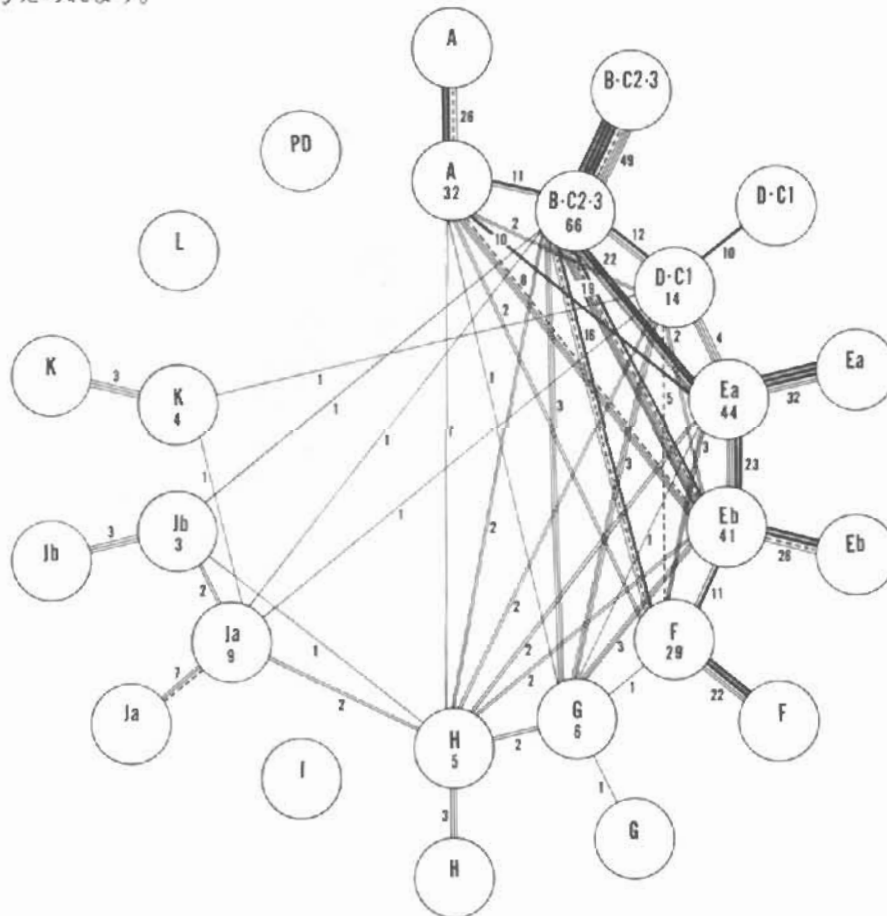
次に、個別別資料の石器類ブロック間の共有関係について観察したい（第421図・第422図、第77表・第78表）。個別別資料の識別は、チャート等の石材に限定して行い、サヌカイトでは行えなかったため、これらの石材の分布が北半に偏ることと併せて、全石器群の全体評価にはなっていない点が注意されなければならない。

個別別資料のブロック間分布状況は、基本的には接合資料の分布状況と大差はないが、資料数が増えただけ関係図の線の数が増大している。また、接合資料ではなかったブロック間の共有関係も出現する。全体としては、先の南北構造のうち北群が維持されて存在するが、新しくブロックHも含まれる。

南群のH・J a・J b・Kは、僅かの個体ではあるが、個別別資料の共有関係を北群の石器類ブロックと有する。他人のそら似という問題を払拭することは難しいが、南北での個体の共有は、両群が同時存在であるという有力な証拠であり、石器のブロック間搬入搬出関係が南群北群間であったことも示している。

ブロック毎の個体数を見てみると、ブロックB+C 2・3は66個体、E aが44個体、E bが41個体、Aが32個体、Fが29個体で、接合関係では圧倒的であったブロックAが地盤沈下している。ブロックAでは、個体のほとんどが剥片剥離作業に供されたのに対し、ブロックB+C 2・3やE a・E bの個体数が多く、接合資料数の少ないブロックでは、ブロック間の石器の活発な搬入搬出があったことを示していると考えられよう。

(山口)



第422図 ブロック間個別別資料共有関係図（修正後）



第IV章 下位文化層の調査

第77表 下位文化層ブロック間個別別資料による共有関係 (チャート等製石器類)

	A	B+C2.3	D+C1.lout	Ea	Eb	F	G	H	I	Ja	Jb	K	L	PD
所属個数	32	66	14	44	41	29	6	5	0	9	3	4	0	1
収束個数	12	14	0	4	4	6	1	0	0	5	1	3	0	0
A	26	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B+C2.3	11	49	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
D+C1.lout	2	12	10	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ea	10	22	4	32	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Eb	8	19	2	23	26	-	-	-	-	-	-	-	-	-
F	2	16	5	3	11	22	-	-	-	-	-	-	-	-
G	1	4	3	1	3	1	1	-	-	-	-	-	-	-
H	1	3	2	2	2	0	2	3	-	-	--	--	-	-
I	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-
Ja	0	1	1	0	0	0	0	2	0	7	-	-	-	-
Jb	0	1	0	0	0	0	0	1	0	2	3	-	-	-
K	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	3	-	-
L	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-
PD	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

第78表 下位文化層小ブロック間個別別資料による共有関係 (チャート等製石器類)

	A1	A1out	A2	A2out	A3	A4	B1	B1out	B2	B2out	B3	PD	C1	C1out	C2	C3
所属個数	22	3	15	2	18	6	34	13	33	3	19	0	9	0	16	10
収束個数	4	1	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0
A1	18	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A1out	0	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A2	14	1	10	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A2out	2	0	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A3	12	0	11	2	11	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A4	4	0	3	0	3	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B1	3	0	2	0	4	0	15	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B1out	1	0	1	0	3	0	5	3	-	-	-	-	-	-	-	-
B2	2	2	3	0	4	1	16	4	10	-	-	-	-	-	-	-
B2out	0	0	0	0	0	0	1	0	2	0	-	-	-	-	-	-
B3	0	0	0	0	1	0	11	3	7	1	6	-	-	-	-	-
PD	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	-	-	-	-
C1	0	1	0	0	0	0	4	0	6	0	3	0	5	-	-	-
C1out	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-
C2	0	1	0	0	1	0	7	4	5	0	8	0	4	0	5	-
C3	0	0	0	0	1	0	3	1	4	1	3	0	0	0	5	2
D1	0	1	0	0	0	0	0	1	1	0	1	0	1	0	3	2
D1out	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
D2	0	1	0	0	1	0	1	2	1	0	3	0	2	0	6	2
Ea1	6	0	5	2	8	0	8	5	5	0	2	0	1	0	1	1
Ea1out	1	0	0	0	2	0	3	2	1	0	2	0	0	0	1	0
Ea2	4	0	3	1	7	1	12	4	8	0	4	0	1	0	4	4
Ea3	1	0	0	0	3	0	5	2	3	0	1	0	1	0	1	0
Eb1	2	0	1	0	2	1	7	2	2	0	4	0	0	0	2	3
Eb2	3	0	2	2	3	0	4	4	5	0	2	0	0	0	2	3
Eb3	1	0	1	0	2	0	2	2	3	0	2	0	0	0	1	0
F1	1	0	0	0	0	1	5	2	5	1	5	0	2	0	3	3
F1out	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
F2	1	0	0	0	0	0	2	0	4	0	4	0	5	0	3	3
G1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0
G2	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0
G3	0	0	0	0	1	0	1	1	0	0	1	0	1	0	2	0
H1	0	0	0	0	1	0	1	1	0	0	1	0	0	0	2	0
H2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
H2out	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0
I1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
I2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
I3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ja1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0
Ja2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ja3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ja3out	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Jb1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Jb2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0
Jb2out	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
K	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
L	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布

第78表 下位文化層小ブロック間個別別資料による共有関係 (チャート等製石器類) 続き

	D1	D1out	D2	Ea1	Ea1out	Ea2	Ea3	Eb1	Eb2	Eb3	F1	F1out	F2	G1	G2	G3
所属個数	4	1	6	24	7	34	13	21	26	11	24	0	15	1	2	4
収束個数	0	0	0	0	0	2	0	0	2	1	4	0	0	0	0	0
A1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A1out	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A2out	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B1out	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B2out	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
PD	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
C1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
C1out	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
C2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
C3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
D1	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
D1out	1	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
D2	3	1	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ea1	0	0	1	8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ea1out	0	0	1	3	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ea2	1	1	2	19	4	17	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ea3	0	0	1	8	2	9	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Eb1	0	0	0	7	1	11	5	11	-	-	-	-	-	-	-	-
Eb2	1	1	2	11	1	12	9	9	13	-	-	-	-	-	-	-
Eb3	0	0	1	5	1	6	5	4	7	5	-	-	-	-	-	-
F1	0	0	0	1	1	1	0	8	6	0	17	-	-	-	-	-
F1out	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-
F2	0	0	1	0	0	1	0	6	4	0	10	0	10	-	-	-
G1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	-	-
G2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	-
G3	0	0	2	1	1	1	1	1	1	1	0	0	1	0	1	0
H1	0	0	2	2	1	2	2	1	2	2	0	0	0	0	0	2
H2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
H2out	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
I1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
I2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
I3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ja1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ja2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ja3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ja3out	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Jb1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Jb2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Jb2out	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
K	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
L	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	H1	H2	H2out	I1	I2	I3	Ja1	Ja2	Ja3	Ja3out	Jb1	Jb2	Jb2out	K	L	
所属個数	3	1	1	0	0	0	2	5	3	0	2	3	0	4	0	
収束個数	2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	
A1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A1out	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A2out	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B1out	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B2out	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
PD	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
C1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
C1out	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
C2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
C3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
D1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
D1out	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
D2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ea1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ea1out	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ea2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ea3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Eb1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Eb2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Eb3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
F1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
F1out	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
F2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
G1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
G2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
G3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
H1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
H2	0	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
H2out	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
I1	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
I2	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
I3	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ja1	0	0	1	1	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ja2	0	0	0	0	0	0	0	5	-	-	-	-	-	-	-	-
Ja3	0	0	0	0	0	0	0	1	3	-	-	-	-	-	-	-
Ja3out	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-
Jb1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	-	-	-	-	-
Jb2	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0	1	1	-	-	-	-
Jb2out	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-
K	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	3	-
L	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

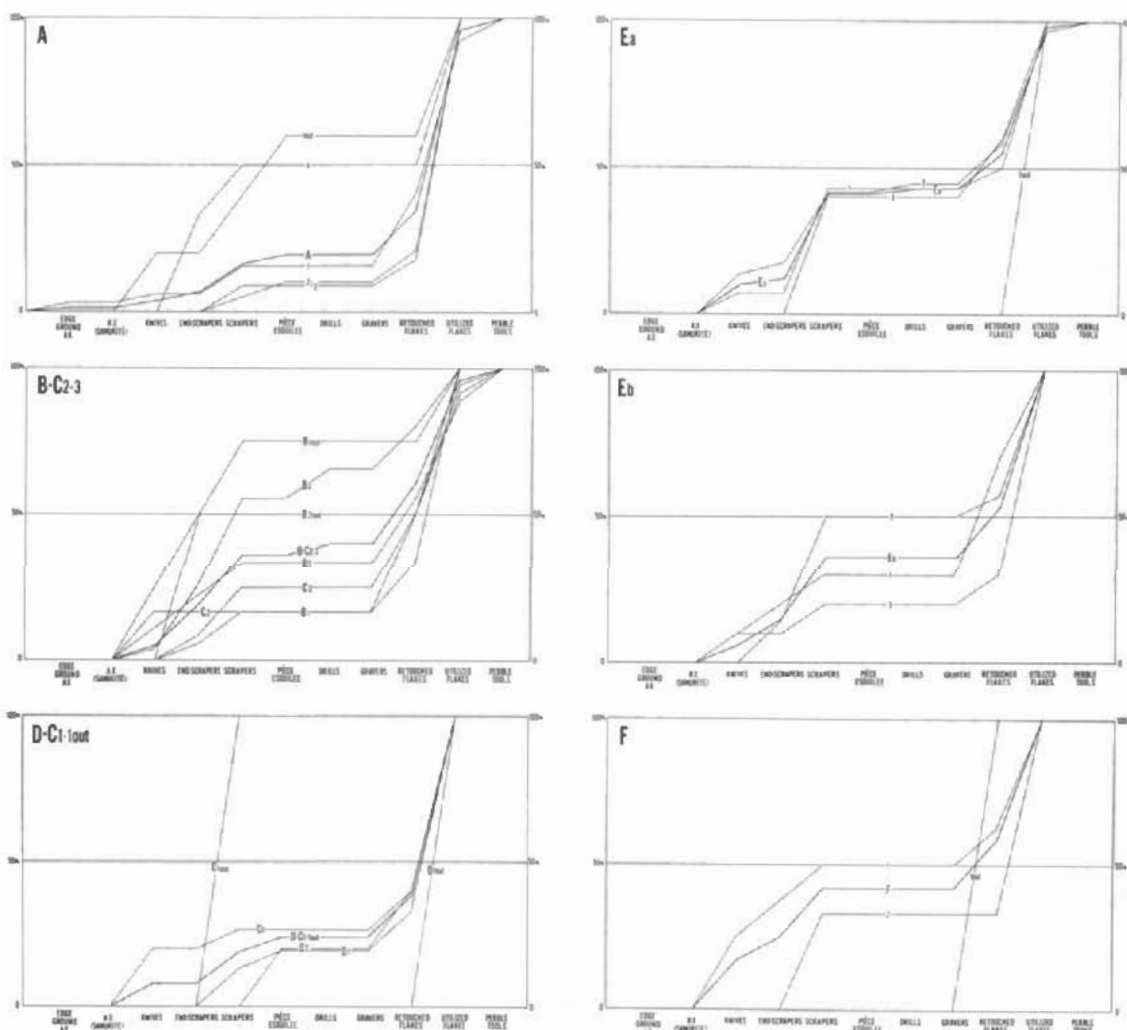
6, ブロック群の評価とユニットの設定

第3節での石器類や接合資料の分布状況、第1節での遺構の分析など、いままで、長きに渡って多様な分析を行ってきた。これまでに、多様な特徴が抽出され、それらは整合的であったり、相矛盾する結果であったりした。ここでは、先の多様な分析を受けて各ブロックの評価を行い、機能的なまとまりとしてのユニットに総合化を計りたい。石器類ブロックとユニットの関係は、鈴木忠司氏らによって既に整理されているので(鈴木・山下・保坂, 80)、この概念に従って作業を進める。礫石類は、本報告書中で示したように、先例とは異なった区分を行なっている。さらに、石器類ブロック・礫石類・遺構等をユニットに総合化した段階で、ユニット間相互の関係についても言及したい。

a, 各石器類ブロックを構成する小ブロックの石器組成

既に、ブロック毎の石器組成についての検討を行なったので、ブロック群の評価に移る前に、ブロックを構成する小ブロックの石器組成について、検討しておきたい。

石器類ブロック間での石器組成を比較するために、既に第323図を提示して検討した。この図と同様に各石器類ブロック毎の小ブロックの石器組成を揭示し、各石器類ブロックを構成する個々の小ブロック



第423図 小ブロック別石器累積グラフ1





第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布

の「場」の機能を検討し、どの様な空間構成から石器類ブロックがなっているかを考察する（第423図・第424図）。

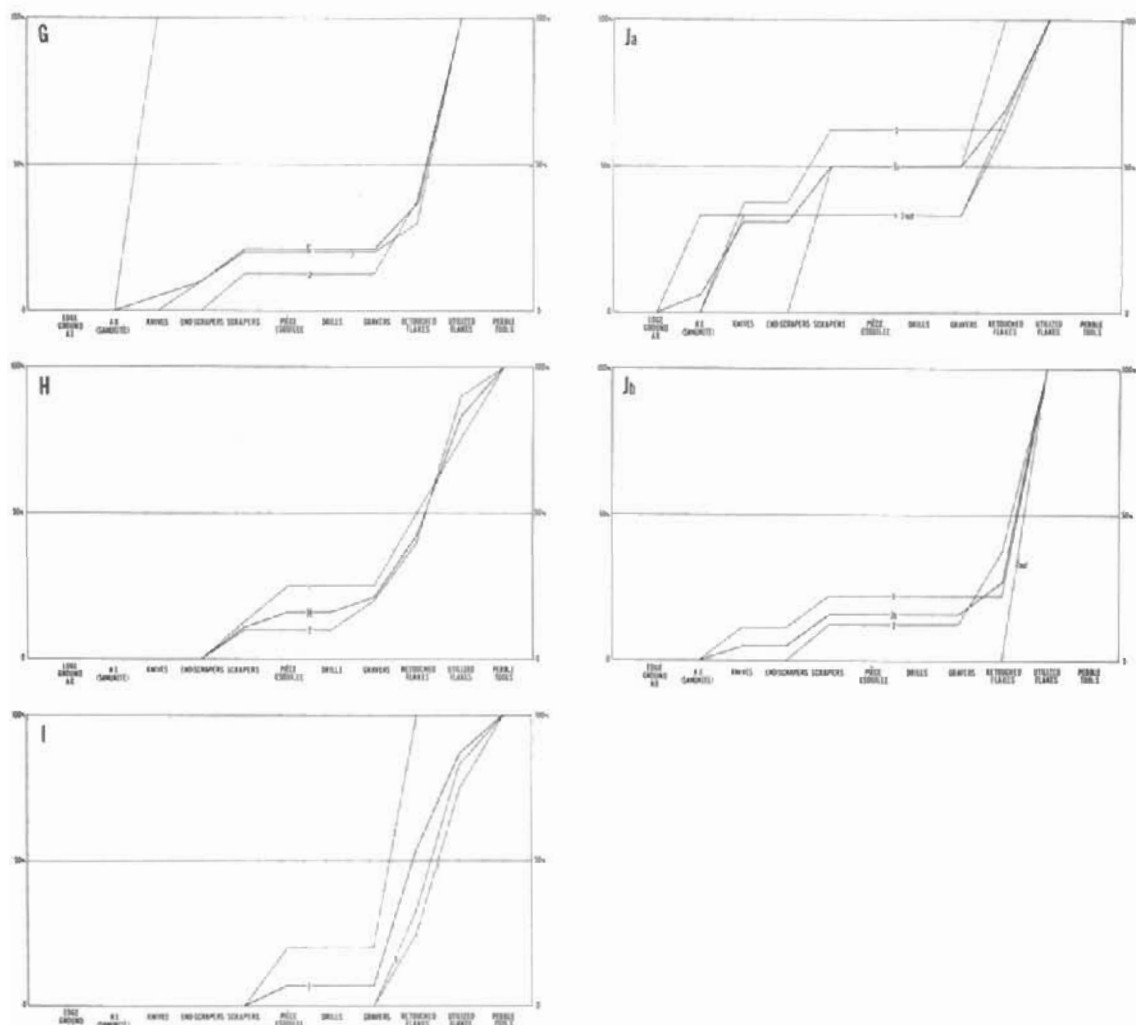
石器類ブロックAの小ブロックは、2つのクラスターに分かたれる。A1・A2・A3とA1out・A4の2つである。前者でのナイフ形石器・搔器・削器・楔形石器・錐状石器の組成比率が20%以下であるのに対し、後者では50%を越える。逆に、加工痕有剥片・使用痕有剥片の組成比率では、両者で逆転した状況が認められる。

石器類ブロックB+C2・3でも、石器組成比から小ブロックを2群に分けることが可能である。定型的石器の組成比率が50%を上回ったB1out・B2・B2outと、30%以下のB1・B3・C2・C3の2群である。

石器類ブロックD+C1・1outでは、どの小ブロックも定型的石器の組成比率が僅かに25%程度に留まる。定型的石器の貧弱な組成的に斉一性が高い。C1outとD1outは点数が少なすぎる。

石器類ブロックEaでは、定型的石器の組成比率が40%前後に小ブロックすべてが集中する。全体として、定型的石器の組成比率の高い特定の作業的な様相の小ブロックが集中していることになる。Ea1outは、点数が少なすぎる。

石器類ブロックEbでは、定型的石器の組成比率が50%のEb2と30%のEb1・Eb3の2つに分



第424図 小ブロック別石器累積グラフ2

けられる。

石器類ブロックFでは、定型的石器組成比率が50%のF 1と30%のF 2に一応は2分できる。F 1 outは点数が少なすぎる。

石器類ブロックGでは、定型的石器の組成が20%前後の貧弱な組成比にG 2・3とも集中する。G 1は、点数が少なすぎる。

石器類ブロックHでは、定型的石器の組成が25%以下の貧弱な組成比にH 1・H 2ともまとまる。

石器類ブロックIでは、定型的な石器に乏しく、I 1・I 2・I 3とも20%以下の組成比に留まる。

石器類ブロックJ aでは、定型的な石器の組成比率が50%以上のJ a 2・J a 3と、35%程のJ a 1・J a 3 outに2分できるが、いずれも30%を越えている。

石器類ブロックJ bでは、定型的な石器の組成比率が20%前後にJ b 1・J b 2が集中する。J b 2 outは点数が少なすぎる。

石器類ブロックKとLは、点数が少なすぎ、グラフ化は行なわない。

石器類ブロックの小ブロック毎の石器組成を観察すると、ほぼ30%を境として、小ブロックの定型的石器の組成比率に2群があることが認められる。ナイフ形石器・搔器・削器などの定型的石器と加工痕・使用痕有剥片の2つの組合せは、先の石器器種間の分布関係（第3節第3項）での分析のクラスターと一致する。板井寺ヶ谷遺跡下位文化層での加工痕・使用痕有剥片は、加工度の低い石器であって、遺跡全域にまんべんなく分布する。その他は、定型的な石器であって一定の条件でまとまって使用されたり、廃棄・遺棄されたりする器種であることが明らかになっている。この両者の比率は、その小ブロックが特定の作業を行なった空間であるのか、違うのかを判断できる基準となろう。加工痕・使用痕有剥片は、定型的石器と異なって、その場の必要に応じて適時使用されたものと推定しておきたい。ただ、剥片・碎片・石核を含めた石器類の視覚的分布状況から設定された小ブロックと実際の行為の「場」がずれる場合は、鮮明な認識は困難となろう。また、サヌカイト製石器の多い南半においては、石器組成がそもそも貧弱で、搔器・錐状石器などの器種を欠く点には、注意する必要がある。

このような視点で、まず石器類ブロックAの小ブロックの2群を観察してみると、A 1 outとA 4の2小ブロックは特定の作業的な様相の強い小ブロック群、A 1・A 2・A 3は、空間機能の特定化しない小ブロック群であることになる。特定の作業的な様相を構成した行為者の活動は、定型的な石器類を多用するものであり、加工痕・使用痕有剥片を使用するよりも、高度かつ複雑なものであったと考えられ、このような小ブロックが認められるのは、行為者によって「場」の使い分けが行なわれた結果であることを示している。各石器類ブロックでの定型的石器組成比の2群は、これと同様に考えて大過なかならう。

さて、ブロック毎の小ブロックの構成はどうであろうか。結果としていくつかの類型が認められた。まず、石器類ブロックAとB+C 2・3、E bの3石器類ブロックは、定型的石器組成の高い小ブロックと低い小ブロックの両者で構成されている。石器類ブロックE aとF、J aの3石器類ブロックは、定型的石器の組成比率が高い小ブロックのみで構成されている。E aの3小ブロックが極めて類似する組成を示すことは注目される。石器類ブロックD+C 1・1 outとG、H、I、J bの5石器類ブロックは、定型的石器の組成比率が低い小ブロックのみで構成されている。定型的石器の組成比の高低両方の小ブロックからなるもの、高い小ブロックからなるもの、低い小ブロックからなるものに分られる。

この3つの石器類ブロックの小ブロック構成を、下位文化層の石器類ブロック配置に置き換えてみると、低いものがほぼ南群に相当し、高低両者構成の石器類ブロックと高い小ブロック構成の石器類プロ

ックのほとんどが北群に相当する。位置付けの変わっているのが、石器類ブロックD+C1・1outとJaである。D+C1・1outは、定型的石器の組成比率の低い小ブロックのみで構成され、南群所属の石器類ブロック群に含まれている。Jaは、定型的石器の組成比率の高い小ブロックのみで構成され、北群所属の石器類ブロック群に含まれている。

石器類の分布状況からは、北群がチャート等製石器群がおもに分布する領域であり、石器組成も豊富であることから、北群の石器類ブロックで、定型的石器類の組成比率が高く、南群ではサヌカイト製石器群がおもに分布する領域であり、石器組成が貧弱であることから、南群の石器類ブロックで、定型的石器の組成比率が低いことは語ける。ここで注目すべき点は、石器類ブロックD+C1・1outとJaを除かなければいけないが、北群石器類ブロックでは小ブロックの石器組成比にばらつきがあるものと、定型的石器組成比が高い形で一定しているものの2者があり、南群では、定型的石器組成比が低い形で一定している点である。

D+C1・1outを除いた北群の石器類ブロックでは、特定の作業を定型的石器を使って行なわれる小ブロックと特殊化の少ない作業の行なわれる小ブロックを組み合わせた石器類ブロックと特定の作業を定型的石器を使って行なった小ブロックだけで構成される石器類ブロックの2者があると理解できよう。石器類ブロックの見かけの石器組成による分類とは異なった結果となった。当然、この2者には、小ブロック構成が違って来る原因となった石器類ブロック内での行動の差異があることになろう。

Jaを除いた南群の石器類ブロックでは、いずれも石器組成が貧弱で、定型的石器に頼った特定の作業のみが行なわれた小ブロックを含む石器類ブロックを認めない。南群全体として、定型的石器に頼る比率の低いブロック内行動があったことになる。

石器類ブロックD+C1・1outは、位置こそ北群に含まれるが、サヌカイトとチャート等の組成比は、サヌカイトが主体であり、石器組成もサヌカイト製石器群が多い。この小ブロックの組成比組合せは、D+C1・1outが、性格的に南群またはサヌカイト製石器群と類似したものであることを示している。また、石器類ブロックJaは、南群中にありながら豊富な定型的石器を有しており、周辺の石器類ブロックと比べて異色である。この2つの石器類ブロックの問題については、後で石器類ブロック、ユニット間の関係について検討するときに再び考えてみたい。

#### b. 下位文化層の南北構造と同時性

石器群の形態・技術的観察から、サヌカイト製とチャート等製の2者では、大きな違いが存在し、技術伝統上の背景が異なることが思案された。サヌカイト製石器群は瀬戸内系、チャート等製石器群は中国山地系と考えられた。さらに、下位文化層において、南北での石器類ブロックのあり方が、大きく異なっていることが判明した。板井寺ヶ谷遺跡下位文化層は、いわば縦横に4つに分けられ得るのである。既に個々の様相についての検討を行なってきたが、ここでは、いままで行なった分析結果を総合的に再検討し、下位文化層の南北構造と2つの石器群の関係についての総轄を行なっておきたい。

技術的・形態的に異なった共伴する石器群2つの数量が極端にアンバランスで、一方が僅かであれば、異系統の石器群が搬入されたと解釈されるのが一般である。1つの遺跡で両者が拮抗するほどの数量を有して発見された場合、解釈としては3通りが取り得る。1つは、両者が考古学的には判断できない程度の時間差をおいて1つの遺跡を利用した結果であるとするものであり、もう1つは2つの異なった石器群を保持する集団が同時に1つの遺跡で共存したとすることである。さらに、1つの集団が遺跡内で



技術的・形態的に異なった2つの石器群を残したとも考えうる。板井寺ヶ谷遺跡下位文化層の状況について、この問題を考えてみたい。

下位文化層の石器群の分布を大まかに観察すると、サヌカイト製石器群は調査区南半に多く分布し、北半でもかなりの数量が出土した。チャート等製石器群は、調査区北半に集中し、南半には僅かしか出土していない。石材別の分布図を見る限り、両石材はお互いの中心分布域を避けあっているように観察される。特に、チャート等製石器類が南半から締め出され、北半に追い上げられているように見える。

まず、単一の集団が2つの石器群を使い分けたという仮説について、検討してみよう。1つの石器群が単独で板井寺ヶ谷遺跡の様な地形を利用する場合、居住域のいい中央を占拠するであろう。同一の集団によって2つの石器群が保持され、その両者が使い分けられた場合、両者は完全に入り交じって出土すると考えられるが、そのような状況ではなかった。また、両石器群は、前節での検討結果のごとく、全く石器製作技術上の基盤を異にし、石材の供給先も在地と遠隔地に隔たっている。まず、単一の集団が両石器群を適時製作し、使い分けたという解釈は、一般的に考えて可能性が低く、仮説として採用することはできない。サヌカイト製石器群を瀬戸内系、チャート製石器群を在地または中国山地系と判断し、その石器文化伝統に対応する2つの集団を認めることができ、この2つの集団によって板井寺ヶ谷遺跡下位文化層が残されたと解釈するのが妥当であろう。

サヌカイト製石器群とチャート等製石器群が時間的に隔たって単独で選地する場合、地形のよい発掘区中央に分布の中心があつて良いはずである。両石器群がお互いの存在を意識せずに居住したなら、石器類の分布は結果として、もっと重なつたはずである。特に、チャート製石器群が単独で居住しようとする場合、板井寺ヶ谷遺跡の位置からして湿地面へのアクセスを意図する場合が考えられるが、山側の北半に集中して南半にほとんど分布しないのは不自然である。チャート製石器群の南半での分布の境界は、きわめて意図的なものと思えない。両者が避け合うように遺跡の南北に広がるのは、同時に、お互いの存在を認識しつつ、共存したことを示していると考えた方が、蓋然性が高いといえる。チャート等製石器群は山側へ、サヌカイト製石器群は湿地側へ、両者とも遺跡の中央からやや距離を置いたところに分布の中心をスライドさせて、お互いの領域を確保したものである。お互いの存在を認識し合つたという意味で、同時存在と考えられよう。

下位文化層の石器類分布の細部を観察してみると、各石器類ブロック、小ブロックのレベルでは、サヌカイト・チャート両者が量の多寡のばらつきはあるが、ほぼすべてで共存して発見されている。南群の石器類ブロックではサヌカイト製石器が主体でありながらも、小数のチャート製石器が含まれる。逆に北群の石器類ブロックではチャート等製石器群が主体でありながらも、サヌカイト製石器が共伴している。遺跡全体でのおおまかな分布では南北に分離しながらも、石器類ブロックなどの細部での技術的基盤と石材の由来の異なるサヌカイト製とチャート等製石器群の共伴は、石器類ブロック単位では両者の関係が持たれた事を示すのであろう。第IV章第3節第2項bの分析では、多くの石器類ブロック・小ブロックでサヌカイトとチャート等の積極的共伴関係が認められている。

下位文化層の石器群の分布状況の分析結果から、サヌカイト製石器群を保持する集団とチャート等製石器群を保持する集団の2つが、お互いの存在を認識しつつ分拠したという解釈が導き出されたが、ここからさらに仮説を分かつことができる。全く瞬間的にも同時に共存した場合と、お互いの存在を認識しつつも微妙な時間差を有する場合である。後者は、まずどちらかが占拠して生活痕を残して立ち去つた直後の遺跡に、もう一方が直前に居住した集団があつた事を承知しつつ、先住者の居住空間に立ち入ら

ずに再占拠した場合等が想定できる。住居などの視覚的に認識できる施設などが残っていた場合、このような事態となり得るであろう。この場合、両者の接触は無くとも、考古学的見かけ上一種の棲み分けがなされることになる。石器類ブロック単位でのサヌカイト製石器群とチャート製石器群の混在の問題は、特に北群で顕著であるが、北群のサヌカイト製石器類を北群を占拠した集団が最初から保持していた搬入石器と考え、サヌカイト製石器類のみを保持する集団とチャート等製石器群主体でサヌカイト製石器類も保持した集団が時間的にすれ違ったと解釈することも可能である。

しかし、この2つの解釈の内の後者は、仮定をいくつも積み重ねることによって設定できるのであり、前者の蓋然性と比べて劣っているといわざるをえない。問題のある点は、まず、南北のサヌカイト製石器群には、搔器と錐状石器が北群の1つの石器類ブロックに集中する以外、石器組成の偏りや技術的・形態的な差異が認められない。北半を占拠したチャート等製石器群を保持する集団が入手したサヌカイト製石器類は、本来から遠隔地石材であり、交易石材と考えるには多すぎる。再占拠が行なわれたとするなら、チャート等製石器群が山側に追い上げられていることから、サヌカイト製石器群がききに到着した可能性が高いが、チャート等製石器群が湿地部へのアクセスを行なわなかったはずがなく、不自然である点などが挙げられよう。

板井寺ヶ谷遺跡下位文化層の石器群の分布状況について、サヌカイト製石器群を保持した集団と、チャート等製石器群を保持した集団の2つが、お互いの存在を認識しつつ、同時に、同じ遺跡で共存した、という解釈が最も妥当と考える。

ただ、このように解釈していくなら、個々の石器類ブロック内でのサヌカイト製石器群とチャート等製石器群の共存の背景がどの様に考えられるかが、次に問題となってくる。石器類ブロックをA、B+C 2・3、E a、E b、FとG、H、I、J a、J b、K、さらにD+C 1・1 outの3つに分けた場合、サヌカイト製石器類は点数的に南北ではほぼ同量が出土し、碎片・石核までが北群にも組成比に応じて分布し、さらに、サヌカイト製石器でありながら北群にしか認められない器種がある一方、チャート製石器群は北に集中すること。さらにこの事が、チャート材のサヌカイト製石器群への受容が非積極的であるのに対し、サヌカイト材のチャート等製石器群への受容が、製品のみでなく、剥片・碎片・石核までを組成して行なわれていることから、剥片剥離作業のある程度の展開をも推測させるほど極めて構造的であったというアンバランスなものであることを指摘しうるのである。

現在とり得る解釈として、サヌカイト材がチャート等製石器群側にとって新奇であったために積極的に受け入れられ、チャート材はサヌカイト製石器群にとって珍しくなかったからほとんど受け入れられなかった、と考えることができるが、この点については、第VI章第3節で再論したい。

### c. 石器類ブロックの性格とユニットの設定

石器類ブロックのいろいろな側面について、前項まで検討を重ねてきた。ここでは、それらを総合して石器類ブロックの性格についての検討を行ないたい。

まず最初に、石器類ブロックを、各分析結果をもとに分類してみよう。石器類ブロックの特徴には、位置・遺構・遺物の分布状況・石器組成・剥片剥離作業の展開の有無・接合資料と個体別資料の分布状況等がある。これらを当事者としての「世帯」を軸に再構成を試みると、これらの内、下位文化層の活動主であった世帯を示すと考えられる特徴は、鈴木・山下らの成果(山下・南他, 86)を参考にすると、

- 1) 世帯を支え得る石器(道具)を確保していること

- 2) 施設（住居や炉、配石群・礫ブロックなど）が認められ、世帯として十分な空間を有すること
- 3) 石器類の接合資料・個体別資料分布の完結性があり、主体的な剥片剥離作業、石器生産が認められること
- 4) 占有空間での「場」の使い分けが認められること
- 5) 石器類ブロック相互の位置関係が独立的であること

などが挙げられるであろう。この問題を解明するためには、本来、その居住期間・世帯の構成人数、活動の類等の条件が解釈上の変数として働いていると推測でき、下位文化層の解釈にあっては、これらの点についての検討が行なわれている必要がある。しかし、まず集落構成の基本的な単位としての世帯を識別することを限定した目標にするなら、1から順に重要度を認め、個々の石器類ブロックについての判断を進めていくことが可能であろう。

さて、既に見たように、下位文化層での遺物分布は、南群と北群、サヌカイト製石器群とチャート等製石器群、という形に分解することも可能である。それらは考古学的には同時存在と考えられるので、その相互の関係について考慮しながら検討を進めなければいけない。この2分・4分した構造には、大きな差異がある。下位文化層全体を一律の基準で判別するなら、この構造差を曖昧にするとともに、世帯に保持されたユニットの特徴を抽出できない可能性がある。場合によっては、2分・4分した単位での基準を提示し、世帯の抽出を行なう。

1) 世帯を支え得る石器（道具）を確保していること、という問題は、第3節第2項と第3項の分析の結果を受けて、サヌカイト製石器群主体とチャート等製石器群主体の2群に分けて判断せざるをえない。A、B+C 2・3、E a、E b、F、Kの1群とD+C 1・1 out、G、H、I、J a、J bの1群である。

前者には基本的に豊富な石器類を有し、ほとんどの石器類ブロックにナイフ形石器・搔器・削器・加工痕有剥片・使用痕有剥片といった石器を組成する。比率的には、石器類ブロックAの定型的石器占有比率は低いが、十分な石器類組成が保証されており、点数的には十分である。石器類ブロックKを除き、チャート等製石器群の一般的な石器組成をほぼ均質的に認め得る。礫石器類・局部磨製石斧などは、いくつかの石器類ブロックに分かれて分布する。

後者は定型的石器の貧弱な組成で、サヌカイト製石器群の代表的なナイフ形石器や削器の定型的石器が認められたのは、D+C 1・1 outとG、H、J a、J bである。D+C 1・1 outとGは、前者に接し、チャート等製石器の分布が及んでいる。石器類が貧弱で、いずれも特徴に乏しいが、乏しいままで均質化していると評価することも可能であろう。

2) 施設（住居や炉、配石群・礫ブロックなど）が認められ、世帯として十分な空間を有すること、という問題は、礫石以外で遺存する遺構が僅かであることから、一律には評価できない。

住居の可能性のある遺構として、石器類ブロックB+C 2・3の第3土壌がある。また、集石土壌第1・第2土壌の2基がある。石器類ブロックAの第5土壌と石器類ブロックJ aの第6土壌がある（第1節第3項）。これらの遺構が、調理や居住と言った空間的機能と密接な関係があるなら、世帯としての認定の重要な指標となり得る。逆に、遺構としての遺存が難しいものだけに、これらが組成されないからといって、世帯として認定できないわけではないことも事実である。

炉は、土壌中に炭化物碎片が含まれたものがあること、受熱礫があること、受熱石器類が各石器類ブロックに認められたことを考えると、ほぼすべての石器類ブロックに「炉」の存在を認めることができ

るであろう。泥炭面中には、人為かどうかに問題を残すものの、炭化物密集部4箇所が認められ、石器類や礫石の分布範囲以外での「炉」の存在の可能性も残す（第3節第2項c）。

配石・配石群・礫ブロックは、ほぼ、石器類ブロックの内部または周辺に認められる。石器類ブロックの内部では、破碎された中・小型礫が多いことが注目され、石器類ブロック中央では、礫石を破碎するような行為が行なわれていたことが知れた（第1節第2項）。豊富な礫石が出土したのは、石器類ブロックA、B+C2・3、H、J aである。

世帯としての十分な空間を確保しているか、という問題は、各石器類ブロックが求心的な集中を見せる場合、島状分布の集まりである場合、隣接する石器類ブロックとの境界が曖昧である場合など違いはあるが、基本的には、どの石器類ブロックにも十分な空間を有する。

3) 石器類の接合資料・個体別資料分布の完結性があり、主体的な剥片剥離作業、石器生産が認められること、という問題は、石器類ブロックA、B+C2・3、D+C1・1out、F、H、J a、J bが条件を満たしている。接合資料分布が多く、チャート等製石器の個体別資料分布範囲も、この石器類ブロックに中心分布を持つ個体が多いことから、これらで剥片剥離作業が行なわれたことを示している。これらの内、A、B+C2・3、Fは、チャート等主体の石器生産が認められる。H、J a、J bは、接合資料の数は少ないが、サヌカイト製石器が石器類ブロック内に多く組成し、サヌカイト製石器中心の石器製作があったと考えられるが、遠隔地からの石材であり、チャート等製と比較すると活発ではない。D+C1・1outは、石器類の素材がサヌカイトとチャート等が半ばする。

4) 占有空間での「場」の使い分けが認められること、という問題は、各石器類ブロックを構成する小ブロック毎の石器組成が多様であると置き換えて考えるなら、石器類ブロックA、B+C2・3、E bには場の使い分けが認められ、E a、F、J aには定型的石器の集中する均質な「場」が設定されている。D+C1・1outとG、H、I、J bは、サヌカイト主体の石器群が分布する石器類ブロックで、定型的石器に乏しく、「場」の機能に対応した石器組成の偏りを判別することには困難がある。

5) 石器類ブロック相互の位置関係が独立的であること、という問題については、Kを除いて、すべての石器類ブロックが陸地部に分布し、北半はA、B+C2・3、E a、E b、Fが環状に配置され、南半ではD+C1・1out、G、H、J a、J bが南に開く弧状に配置される。北半の求心的遺物集中のあるブロックでは、独立性の判断は容易である。南半の島状分布の集合状態は、その独立性や帰属で問題を残し、境界の設定には困難がある。

南半と北半では、石器類ブロックのあり方に大きな違いがある。両者が、サヌカイト製石器群主体、チャート等製石器群主体に対応し、両者に背景の違いの存在が推測されることから、世帯に保持されたユニットの抽出には異なった基準が必要である。

北半では、さきに挙げた判断基準をよく満たす石器類ブロックがいくつか存在する。石器類ブロックA、B+C2・3、Fは、これらの条件にはほぼ合致する。石器類ブロックFの小ブロック別石器組成は一律で占有面積も小さいが、剥片剥離作業と石器製作が活発である。E aとE bは、小ブロック単位での石器組成が均一で、ブロック内での剥片剥離作業が低調であったり、ブロック内での施設に乏しいことが観察され、世帯として独立した単位のユニットと見なすには困難がある。定型的石器は十分な点数がありながら、破碎石器類が多く剥片剥離作業が低調であることから、かりに特定の作業が行なわれたユニットと考えておきたい。

D+C1・1outと南半の石器類ブロック群では、一般に石器組成が貧弱で、小ブロックでの石器組成

の差にも乏しい。石器類ブロックの範囲も明確にはしがたい。このような状況で、北半の世帯ユニット設定と同様の水準での判断を行なうと、南半には世帯に対応する石器類ブロックを認められないことになりかねない。サヌカイト製石器群は、個体識別・接合作業が困難で、本来の分布域である瀬戸内中央部でも貧弱な石器組成を持たないことから、チャート等製石器群と同様に判断することは正しくない。先の条件の内、南半の石器類ブロックの属性として、世帯を示す根拠として推測できたのが、3の石器生産、剥片剥離作業の展開の痕跡である。この点で判断すれば、D+C 1・1 out、H、J a、J bがあげられる。D+C 1・1 outとJ aには、チャート等製の石器類の組成比が高い。G・Iは、剥片剥離作業がほとんど認められず、石器類の組成も貧弱である。隣接して境界の曖昧な石器類ブロックがあることから、作業ユニットまたは世帯ユニット間の帰属の曖昧な部分と評価することができよう。

石器類ブロックKは、湿地部にあり、石器類の組成が貧弱で、剥片剥離作業も認められないことから、湿地部での作業ユニットと考えることができる。

以上の結果、北群のチャート等製石器群主体石器類ブロックの内、AとB+C 2・3、Fの3石器類ブロックが「世帯」に保持されたユニット、E a、E bの2石器類ブロックはなんらかの作業が行なわれたユニットであると考えられる。Gは、南北両方に算入したが、南群とした方が整合性が高い。南群のサヌカイト製石器群主体の石器ブロックは、特に「世帯」と対応して抽出する根拠に乏しいが、剥片剥離作業の展開があるHとJ a、J bの3石器類ブロックが「世帯」に保持されたユニット、G、Iは「世帯」ユニット周辺のなんらかの作業が行なわれた統廃合できない空間と考えられる。

D+C 1・1 outは、北群の一部に位置するが、その性格はサヌカイト製石器群とチャート等製石器群の折衷的な「世帯」に保持されたユニットである。Kは、南群に含めたが、チャート等製石器群で構成され、いわばチャート等製石器群の南半での作業ユニットとして考えられよう。

A、B+C 2・3、E a、E b、F、Kをチャート等製石器群を保有するユニット群、G、H、I、J a、J bをサヌカイト製石器群を保有するユニット群、D+C 1・1 outは、両群に挟まれた中間的な性格のユニットと定義でき、これらが南北に一部で錯綜しながら、分布しているといえよう。

#### d、ユニット間の関係

ここでは、今までの分析を総合し、ユニットの性格と結びつけて検討したい。

両群の石器類ブロックの内、「世帯」に直接保持されるユニットは、A、B+C 2・3、D+C 1・1 out、F、H、J a、J bの7箇所である。H、J a、J bの3箇所は、そのユニットの範囲に曖昧な部分が残る。E aとE b、G、I、K、Lは、作業的なユニットであったり、複数の世帯的なユニットの間において帰属関係が明らかでなかったような空間である。まず、南北でのユニット間関係から観察しよう。ユニット間の関係を最もよく把握できるものとして、石器類の個体別資料と接合資料の共有関係がある。特に、A、B+C 2・3、E a、E b、F、KとD+C 1・1 out、Gのユニット群、D+C 1・1 out、G、H、I、J a、J bのユニット群の2群に分けて、使用されるために製作場所から搬出・搬入された定型的石器と加工痕・使用痕有剥片、接合資料の位置関係から、再度検討してみよう（第415図）。

A、B+C 2・3、E a、E b、F、KとD+C 1・1 out、Gのユニット群は、Kを除いて接合資料の共有関係にある。A、B+C 2・3、E a、E b、F、Gはユニットが環状に配置されて、中央に東西約5m、南北約10m程の石器類分布の空白部を有している。D+C 1・1 outはB+C 2・3の西南に

接してある。接合資料の分布は、この空白部を越えて向かい合った位置のユニットと結ばれる場合、隣接するユニットへ広がる場合が認められる。

ユニットAは、空白部を横断してE aとE bの間にのみ接合資料を有する。E aとの関係が強い。興味深いのは、南に隣接するユニットB+C 2・3との間に接合資料を有しない点であり、また他のユニットを跨ぐ必要のあるD+C 1・1 outとF、Gとも接合資料を有していない。ユニットB+C 2・3は、隣接するユニットAと関係を持たないものの、南に接するD+C 1・1 outとF、空白部を横断してE aとE bに接合資料を有する。興味深いのは、隣接するD+C 1・1 outとFとの接合資料数よりも空白部を跨ぐE aとE bとの接合資料数の方が多い点である。ユニットD+C 1・1 outは、隣接するB+C 2・3、F、Gと接合資料を有する。ユニットB+C 2・3と空白部を跨ぐE aとの間に接合資料を有することは注意される。ユニットE aは、注目されるのは空白部を越えてユニットA、ユニットB+C 2・3、との間に接合資料を有する点で、また空白部とB+C 1・1 outを越えたD+C 1・1 outとの間にも接合資料がある。隣接するE bとの間にも接合資料を持つ。ユニットE bは、隣接するE aとFとの間に接合資料を有する。空白部を跨いだB+C 2・3とAとの間にも接合資料を有する。D+C 1・1 outとGとの間には接合資料はない。ユニットFは、隣接するB+C 2・3、D+C 1・1 out、E b、Gと接合資料を有する。ユニットGは、隣接するD+C 1・1 outとFとの間に1例ずつ接合資料を有する。ユニットKは、南半に離れて位置し、接合資料はないが、個別別資料の共有関係がユニットD+C 1・1 outとの間に1個体が認められている（第422図）。

D+C 1・1 out、G、H、I、J a、J bのユニット群は、見方によってはD+C 1・1 out、G、H、J a、J bの順に、南西方向に開く弧状を呈する様に見える。接合資料の共有関係は貧弱で、D+C 1・1 outとGの間、H・I・J a・J bの間の2群に分かれて認められる。いずれも隣接するユニット間で、他のユニットを跨いだり空白部を飛び越えたりする接合資料は認められない。

ユニットD+C 1・1 outは、1例ではあるが隣接するGとの間に接合資料を有する。ユニットGは、D+C 1・1 outと接合関係を有するが、他の隣接するユニットH・J aとの間には接合関係を持たない。ユニットHは、Gとの間には接合資料を有さないが、他の隣接ユニットIとJ aとには量は少ないものの接合資料を認める。ユニットIは、隣接するHとJ aとの間に接合資料がある。ユニットJ aは、隣接するH、I、J bとの間に接合資料を有する。ユニットJ bは、隣接するJ aと接合関係を有する。

個別別資料の共有関係は、接合資料よりも複雑化するが、基本的には大勢に変化がない。ただ、ユニットAとB+C 2・3間に共有関係が僅かではあるが認められ、他のユニットを跨ぐ共有関係も出現する。ユニット間の共有個体数も接合資料に比べて増大する。しかし、量的な部分で観察すれば、接合資料の分布と変化はない。個別別資料の分布は、下位文化層の北半にほとんどが限定して分布するため、結果として南半の様相が不鮮明となる。

下位文化層を一定の基準で見渡すことの可能な接合資料の共有関係は、剥片剥離作業場所の移動と範囲、石器の調整と使用、遺棄と廃棄など、多様な実態の現れである。また、個別別資料の動きも同様な背景を有する。石核が剥片剥離作業の途中で移動する場合と定型的石器が移動する場合では、内容に大きな差があるが、この共有関係を、ユニット間の関係強度と見なしたい。

以上の関係を、個々のユニットの機能と性格を絡めて記述してみよう。

全体として、下位文化層の世帯ユニットは南北の2群に分かつことが可能である。北半には世帯ユニットA、B+C 2・3、D+C 1・1 out、F、南半にはH、J a、J bがある。南北で世帯ユニット間

には接合資料の共有というレベルでの関係を有している。

北半の世帯ユニット間を見てみよう。世帯ユニットAは、他の世帯ユニットと直接の関係を持たない点で特異と言える。他の世帯ユニットとの関係は、間接的に作業ユニットE aを介してB+C 2・3との間で持っている。世帯ユニットB+C 2・3とFは、お互いに直接交渉を有するとともに、間接的にE a、E bを介しても関係を持つ。直接・間接の強度に特に差はない。作業ユニットE aとE bは、AとB+C 2・3、Fといった北半の各ユニット間の仲介としての機能を有する。世帯ユニットD+C 1・1 outは、その位置関係が影響するのか世帯ユニットB+C 2・3とFとの間以外、関係は希薄である。

南半の世帯ユニットの関係を見てみよう。世帯ユニットHは、世帯ユニットJ aとの間と作業ユニットIとの間に関係がある。作業ユニットGと関係はない。作業ユニットIは世帯ユニットJ aとの間にも関係があり、HとJ aは直接・間接的に関係がある世帯ユニットである。世帯ユニットJ aとJ bは、関係がある。全体として、南群の世帯間の関係は、接合資料数が少ないことから、曖昧であるが、世帯ユニットHとJ a、J aとJ bの間の関係を認めてよい。

このように南北2群の世帯ユニット間でみられた関係は、下位文化層を一つの集落として考えた場合、まさに世帯間関係を示すものと考えられる。前節から多岐に渡って検討してきたように、南北の構造は、同時存在する2つの世帯群、言い替えると、2つの異なった文化的・社会的背景を有する集団の構造的存在を示すと考えられる。下位文化層の集落としての構造・景観は、第VI章第3節で総合的に考察してみたい。

#### e. 世帯ユニット内での空間配置

前項で、石器類ブロックに、「世帯」に保持されたユニットと特定の作業に対応したユニットを設定した。ここでは、「世帯」に保持されたユニットの内、内容が豊かで、検討すべき属性の多い世帯ユニットAとB+C 2・3の2箇所について、その機能空間配置を検討してみたい。小ブロック毎の石器組成によつての機能分析は既に果たしているのので、ここでは遺物の距離的・近遠関係を基に、小ユニット単位では不鮮明になる空間配置を検討する。遺物が1または2m以内で近接する場合、遺物間に実線を描き、近接することを示す。遺物がどこにまとまるかを示すために、遺物周辺に1m半径の円や実線を描く場合もある。

ユニット全体での遺物、ナイフ形石器・搔器・削器などの定型的石器、加工痕・使用痕有剥片、石核、接合資料すべて、配石・配石群・礫ブロックなどの礫石の分布状況について図示しつつ、最後に各世帯ユニットでの空間配置概念図を示したい。

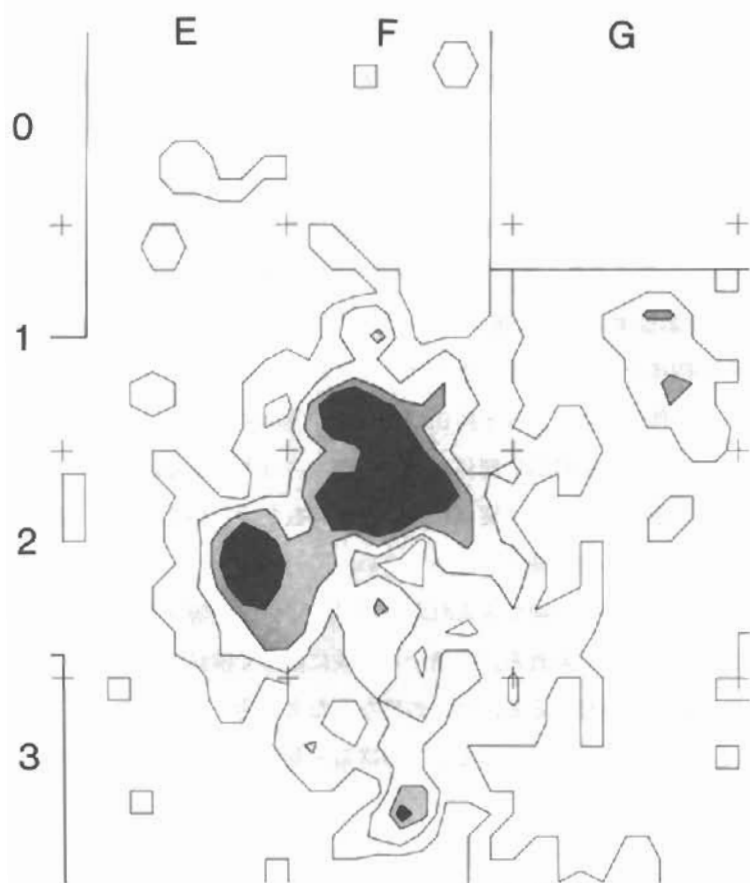
#### 世帯ユニットA

世帯ユニットは、調査区の北端にあり、遺跡内での最高所を占める。典型的な求心的遺物集中を示している(第425図)。石器類の総点数は481点である。

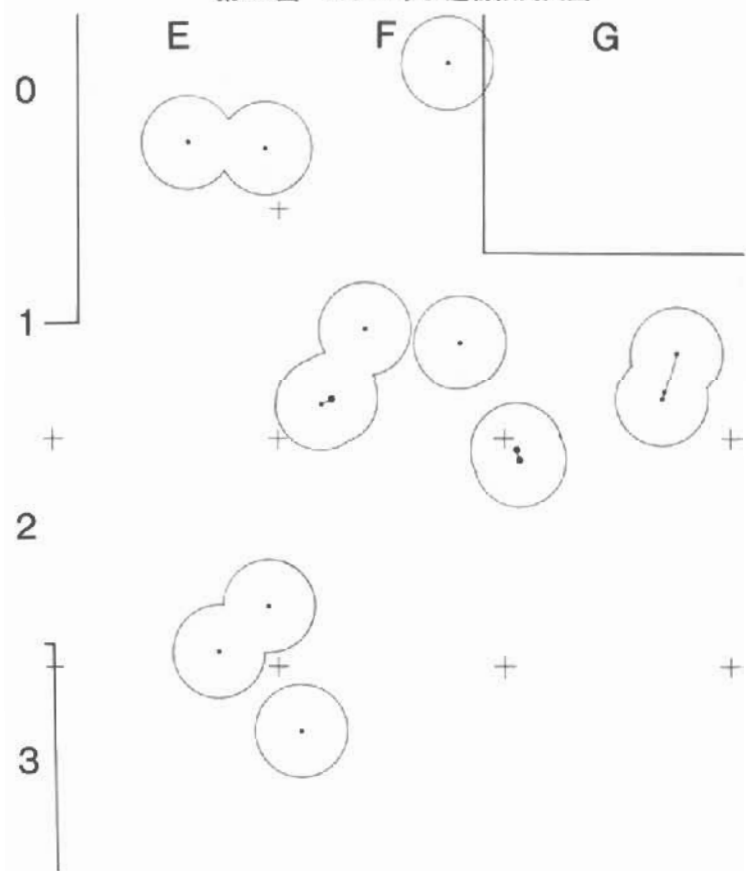
まず、ナイフ形石器・搔器・削器などの定型的石器の分布状況を観察する。ユニットAでの定型的石器合計16点の分布状況(第426図)は、ユニットの中心部・周辺に関わらず散在するが、どちらかというとなら半に多く分布する。必ずしも他の石器類の分布状況に対応せず、これらの定型的石器は、その機能的側面によって自立的に分布していると考えられる。

加工痕・使用痕有剥片合計56点の分布状況(第427図)は、ユニットの中心部に多く、周辺で少なくなるように分布し、副次生産的石器類と同様の分布状況を示す。特に専有空間をもって、分布する器種で

第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布

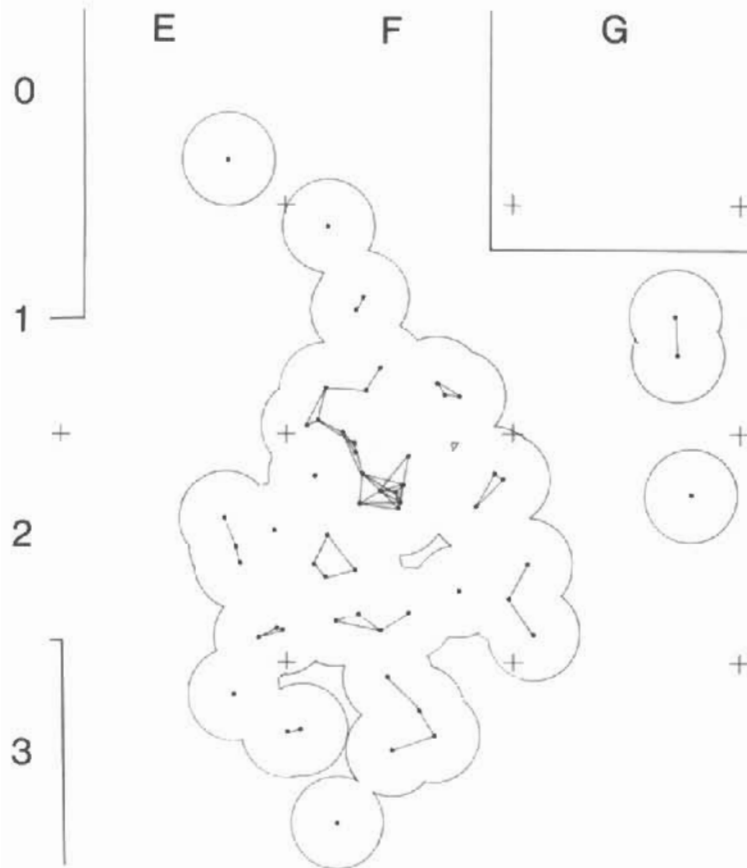


第425図 Aブロック遺物傾向面図

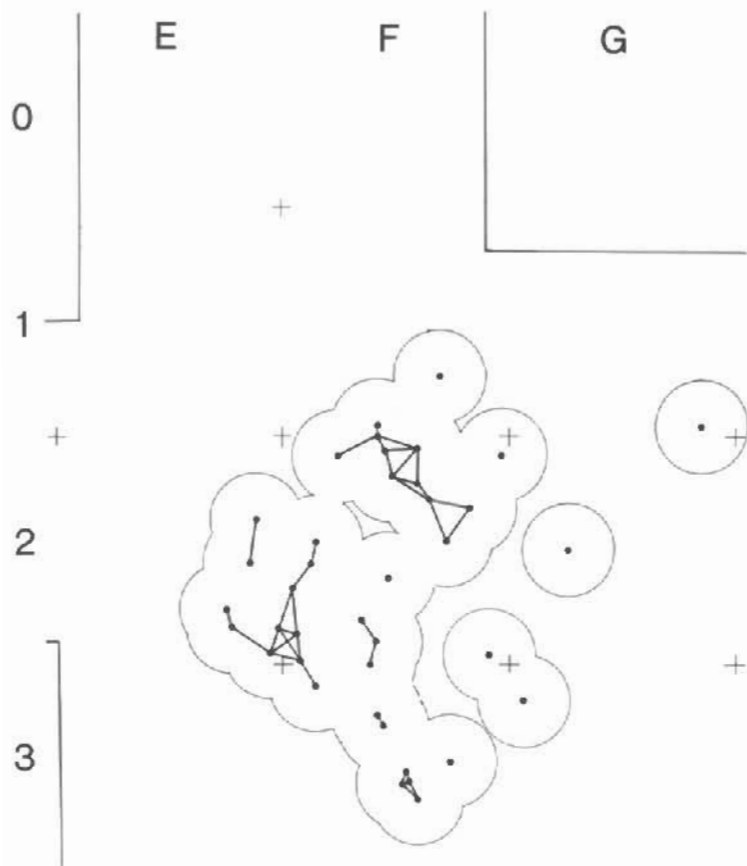


第426図 Aブロック定型的石器分布図



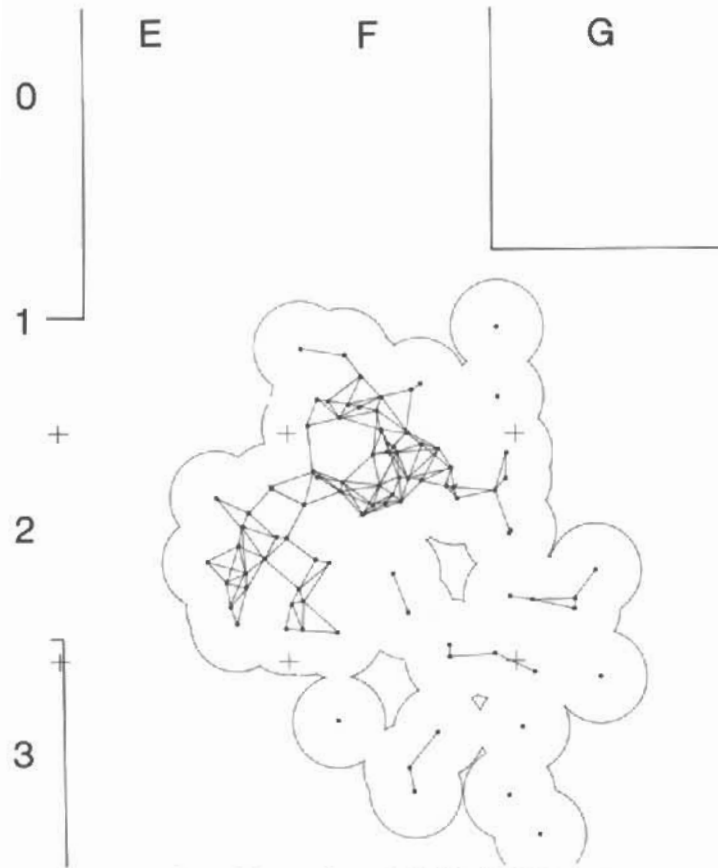


第427図 Aブロック加工痕・使用痕有剥片分布図

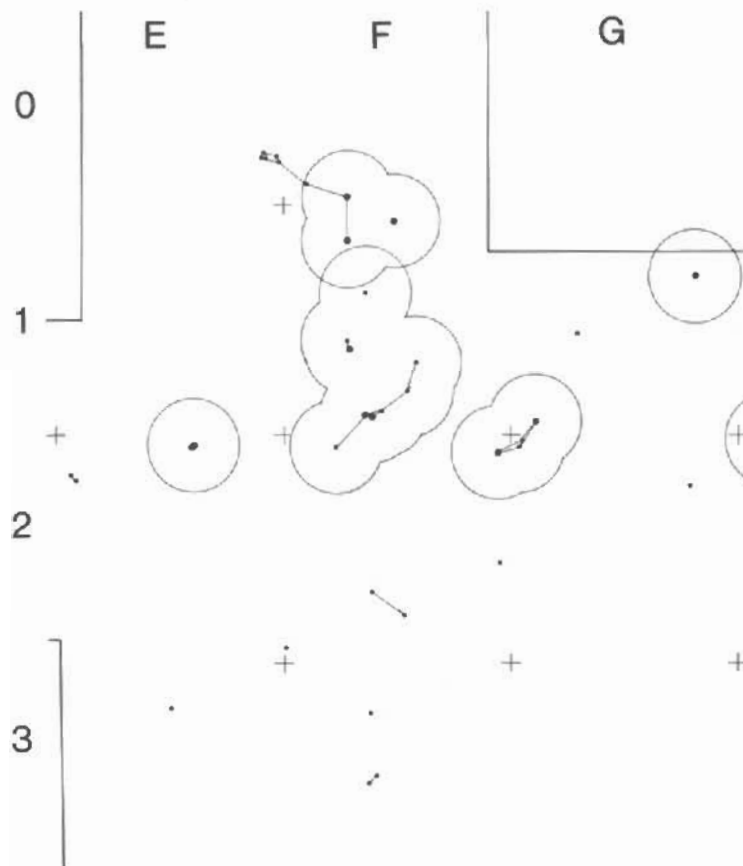


第428図 Aブロック石核分布図

第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布



第429図 Aブロック接合資料分布図



第430図 Aブロック配石・礫分布図

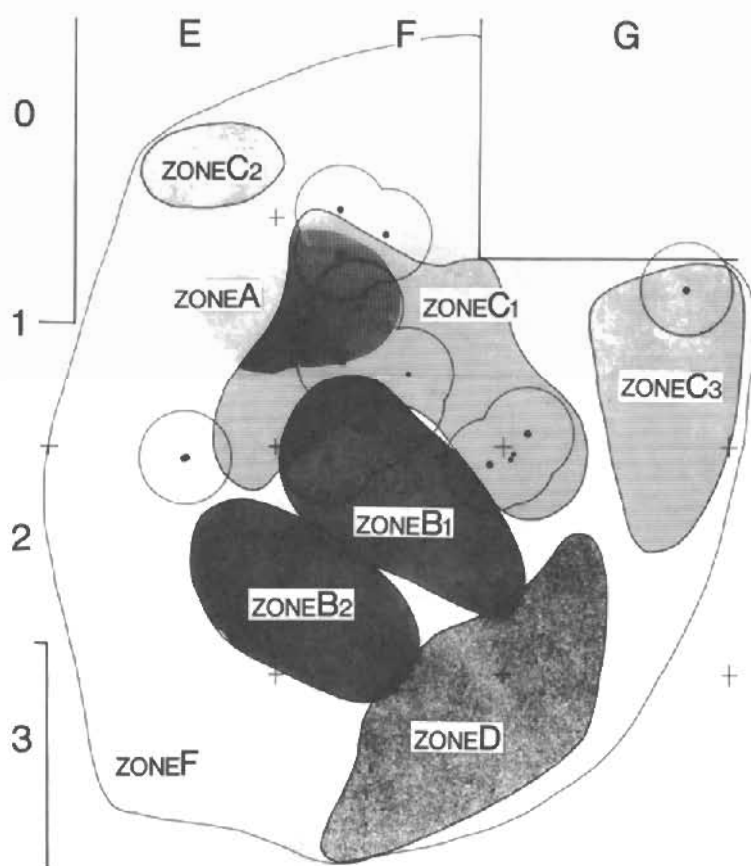
はないことが知れる。

石核合計39点の分布状況（第428図）は、ユニットの中心部に多く、周辺部で少なくなるように分布し、副次生産的石器類の分布とはほぼ重なるが、北西方向でやや後退している。石核は、剥片剥離途中のもの、残核状態、石核素材に近いもの等が認められるが、副次的生産物である石器類の分布と重なることから、剥片剥離作業の行なわれた場所に残されたと考えられよう。

ユニットAの石器類の中で接合資料に組み込まれたすべての石器類合計82点の分布状況（第429図）は、ユニットの石器類の分布傾向に重なるように認められる。接合資料が石核の分布とともに、ユニットの石器類分布に重なることは、ユニットの形成が石器生産・剥片剥離作業と強い関係があることを示している。

ユニットA内の配石・配石群・礫ブロック・礫石の分布状況（第430図）は、配石・配石群・礫ブロックがユニットの北半に集中し、南半には中・小型の礫石が散漫に分布するに留まっている。礫石はユニットの中央部で破砕されたらしく、接合するものが多い。

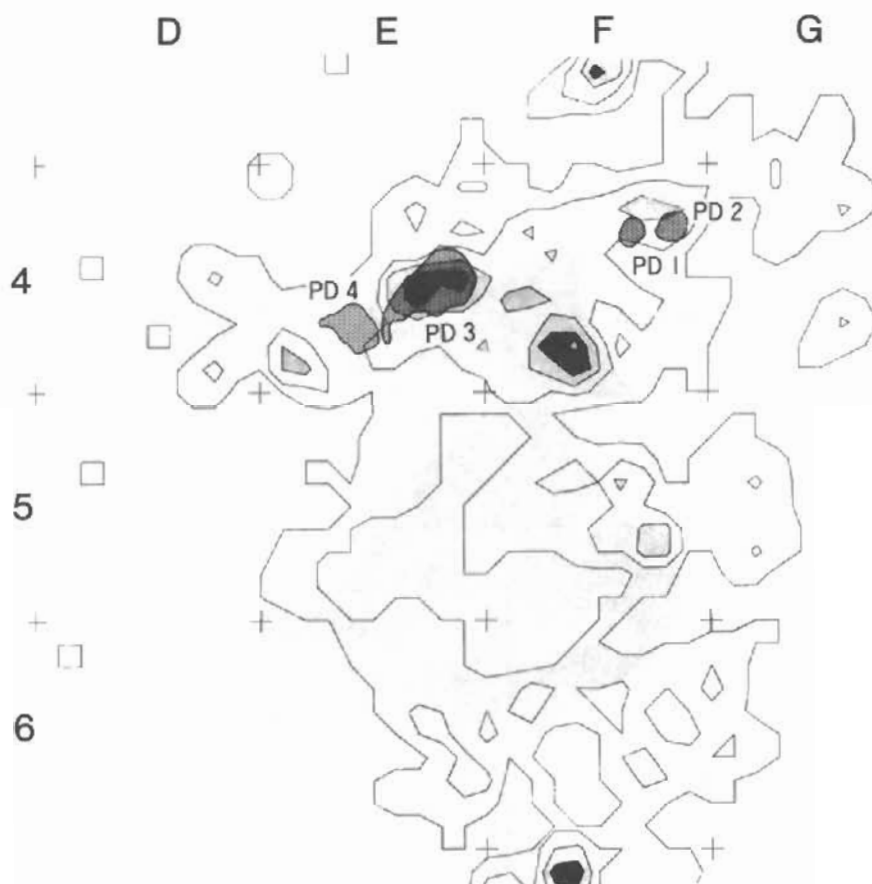
以上の遺物の分布状況から、総合的にユニットAでの空間配置を検討してみよう。石核と接合資料の分布状況から考えて剥片剥離作業が行なわれた（ZONE B）のはユニットの中央部で、小ブロックではA1とA2に対応する。A1の北西部分には石核や接合資料の及ばない部分があるが、この両小ブロックの石器類の量的優位が剥片剥離作業による副次生産物による事は間違いない。A3ユニットでは、石核と接合資料の分布が僅かで、遺物分布の集中度も低い。ここでは、剥片剥離作業の展開というより、その副次生産物が廃棄された場所（ZONE D）であると考えたい。加工痕・使用痕有剥片は、剥片剥離



第431図 Aブロック空間配置概念図

作業の途中で適時生産・使用されたと考えられ、剥片剥離作業の場とほぼ重なっている。両器種は、特定の場所で特別な作業を行なうための定型的石器とは異なった扱いを受けていることが理解される。配石・配石群・礫ブロックなど礫石の分布は、作業台・ハンマー、居住施設などの存在を示唆すると考えられる。定型的石器の分布がどちらかというとユニットの北半に集中したのは、定型的石器を多用するような行動がユニットの北半で行なわれたことを示すと思われるが、この定型的石器の分布域と配石・配石群・礫ブロックの分布域が重なることは、興味深い。特定の作業に必要な定型的石器と配石・配石群・礫ブロックは作業的空間 (ZONE C) の存在を示し、この分布範囲は小ブロック A 4 と A 1 out、A 1 の北半に対応する。ユニット A は、周辺の散漫な分布範囲も含めると、直径15~18mの占有範囲を有する。この遺物分布の認められない部分では、石器と関係のない活動が行なわれた (ZONE F) 可能性が高い (第431図)。

最後に、居住空間 (ZONE A)、具体的には住居の位置をどこに求めるのが妥当であるかを考えてみよう。ユニット A では、住居と考えられる遺構は認められなかったので、遺物の分布状況の検討から推定するに留まる。ユニットの北半には、定型的石器と配石・配石群・礫ブロック等の施設がまとまることから、作業的な空間が配置されている可能性が考えられた。そもそもユニット A は、最も高い位置を占める世帯ユニットである。一般に斜面地に住居を設営する場合、住居の入口は低い方へ向かって設定されるであろうことは、想像に難くない。また、作業空間や廃棄場所が住居よりも高い位置に配されるとは考えにくい。受熱石器は、僅かであるが石器類分布の集中部で認められ、火処の存在を知らせる。住居は、剥片剥離作業の場や廃棄の場所よりも高い位置、作業空間と重なるか僅かにシフトした位置に



第432図 B+C2・3ブロック遺物傾向面図

想定するのが妥当であろう。ここでは、小ブロックA1の北西部分を想定したい。ユニットAは、その石器類ブロック全体の特徴が、前項で検討したように、世帯ユニットとしての属性を最もよく備えたものである。本来、Aの内部での遺存状況が良ければ、住居遺構が検出されたであろう。現状では、最も蓋然性の高い空間に推定しておきたい。

#### 世帯ユニットB+C2・3

世帯ユニットB+C2・3は、ユニットAの南に接して位置する。北半は求心的遺物集中を示して、分布の独立性が認められるが、南半は島状の小ブロックからなり、石器類ブロックCとの間で境界が曖昧であった(第432図)。世帯ユニットB+C2・3で注目されるのは、土壌が4基認められたことで、この内の2基は礫土壌、2基が浅い皿状土壌である。皿状土壌の内、1基が住居跡の可能性が考えられた(第3土壌)。ここでは、この土壌が住居として考え得るかどうかについても検討する。

ナイフ形石器・搔器・削器・錐状石器などの定型的石器合計30点の分布状況(第433図)は、第3土壌上と周辺にきわめて集中し、そのほかの部分では散在傾向がある。ユニットの南半には少ない。第3土壌は、小ブロックB2に位置し、ブロック単位での石器組成の検討の際認められた搔器・削器・錐状石器などの集中が、この土壌上での現象であったことが知れる。

加工痕・使用痕有剥片合計30点の分布状況(第434図)は、定型石器と異なった分布傾向を示す。第3土壌上の集中は縮小し、東の礫土壌周辺の小ブロックB1に対応する場所に散漫であるが集中が認められる。小ブロックC2・3の周辺にも弧状の分布がある。

石核合計25点の分布状況(第435図)は、ユニットの北半の小ブロックB1・B2・B3に対応する部分に集中する。第3土壌上には1点があるに留まる。まとまった領域を作るのは小ブロックB3である。

接合資料すべて合計32点の分布状況(第436図)は、小ブロックB1・B3に集中して領域を作ることが認められる。B2・C2・C3にも分布するが、僅かである。

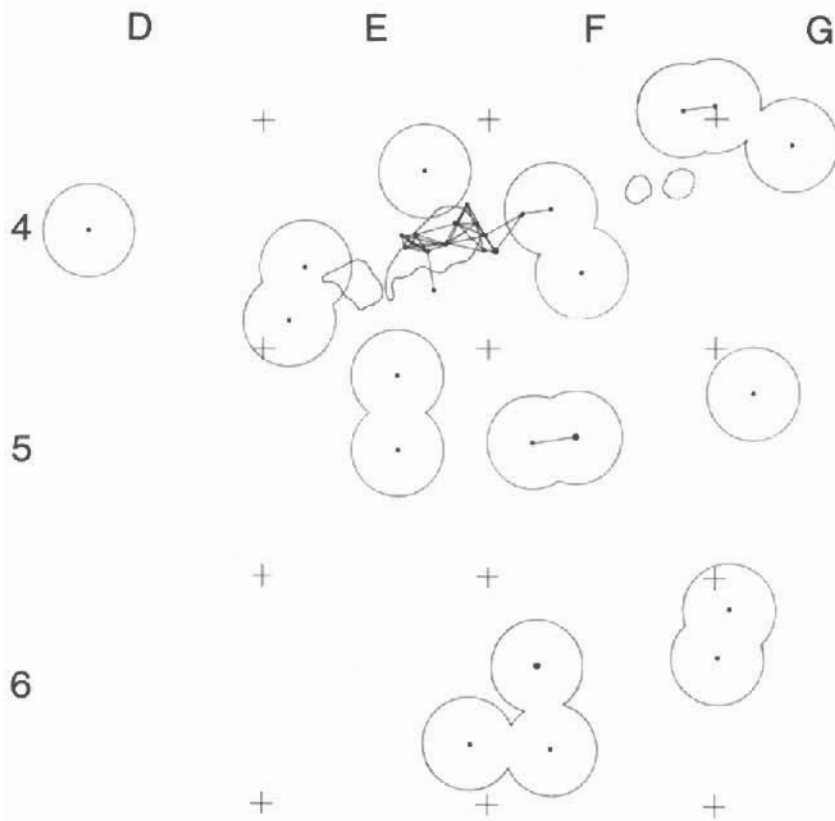
配石・配石群・礫ブロック等の礫石の分布状況(第437図)は、ユニット北半には僅かで、南半に認められる。南半のB3からC2・C3小ブロックに多い傾向がある。

以上の遺物の分布状況から、世帯ユニットB+C2・3での空間配置を総合的に検討してみよう。石核と接合資料が集中した小ブロックB1南半からB3にかけては、剥片剥離作業の空間(ZONE B)と考えてよい。定型的石器の集中した第3土壌の上は、小ブロック石器組成の判断では、特定の作業空間として考慮した場所で、ユニットAの場合も同様の判断に立った場所である。加工痕・使用痕有剥片のまとまった小ブロックB1とC2・C3は、加工痕・使用痕有剥片の使用される特殊化しない適時利用される作業空間であると考えられる。ユニットAや小ブロック石器組成の作業的と判断されたような石器組成を背景にしているわけではない。B1・C2・C3は、第3土壌上の空間をどう解釈するかにも関わっているが、一応、作業空間(ZONE C)と評価しておこう。配石・配石群等の礫石は、小ブロックB3とC2・C3に位置することから、石器製作または、加工痕・使用痕有剥片を使用する作業に関係する可能性がある。接合資料や石核等が散漫に分布し、顕著な剥片剥離作業や特定の石器の集中のないB1outやB2西部からB2outにかけては、廃棄の場(ZONE D)と推定しておこう。

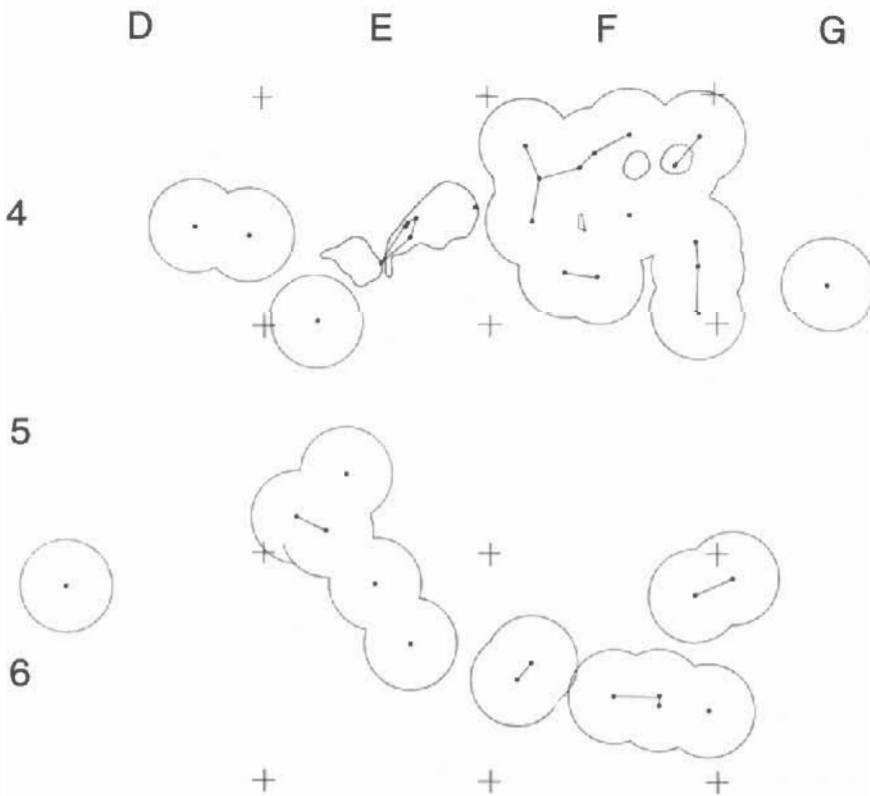
ユニットB+C2・3での居住空間を第3土壌と仮定すると、住居と定型的石器の使用される場所とが一致することになる。第3土壌は、斜面地に位置するために約半分が未検出であるが、円形を呈するものとして範囲を復元し、内部に入った石器類の組成を示すと、第80表のようになる。

第3土壌上の石器組成は、小ブロック単位で検討したときの特定作業的な小ブロックの組成よりも定

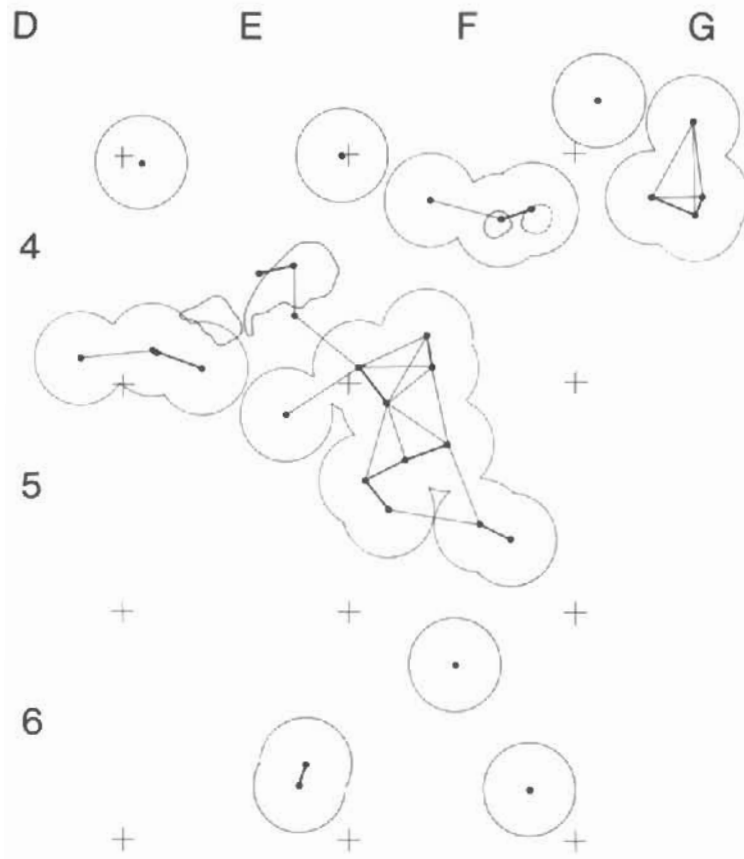
第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布



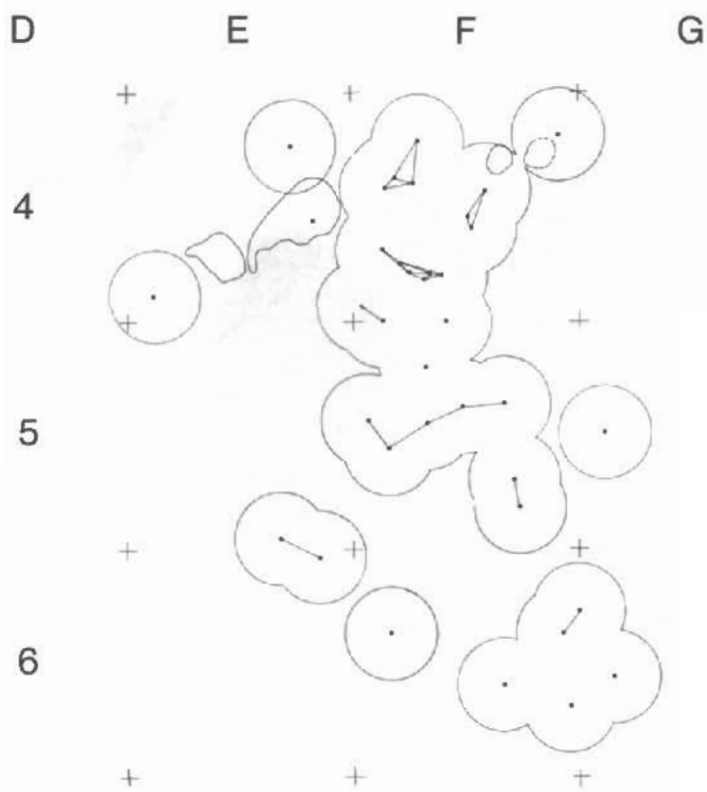
第433図 B+C2・3ブロック定型的石器分布図



第434図 B+C2・3ブロック加工痕・使用痕有剥片分布図

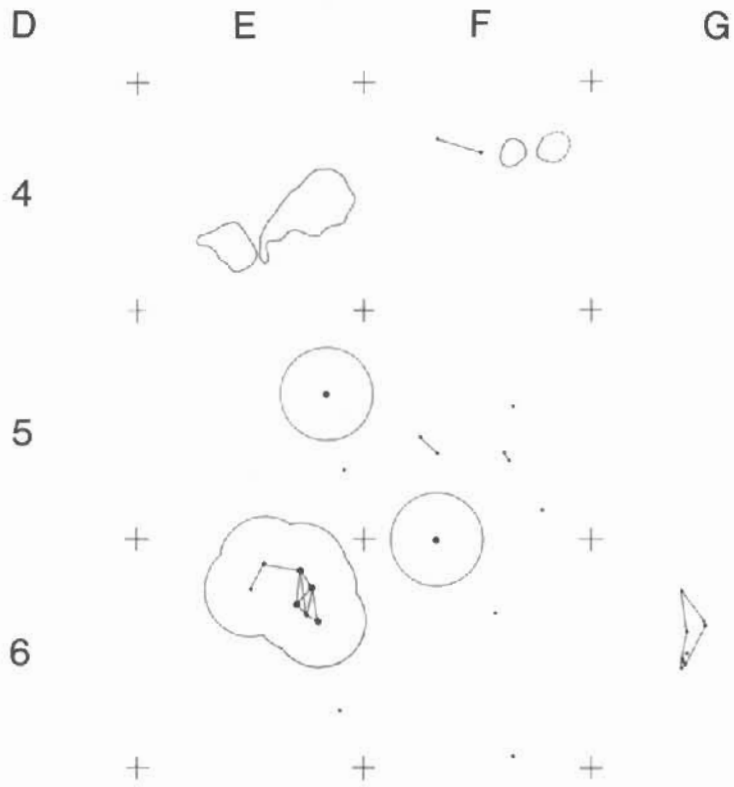


第435図 B+C2・3ブロック石核分布図

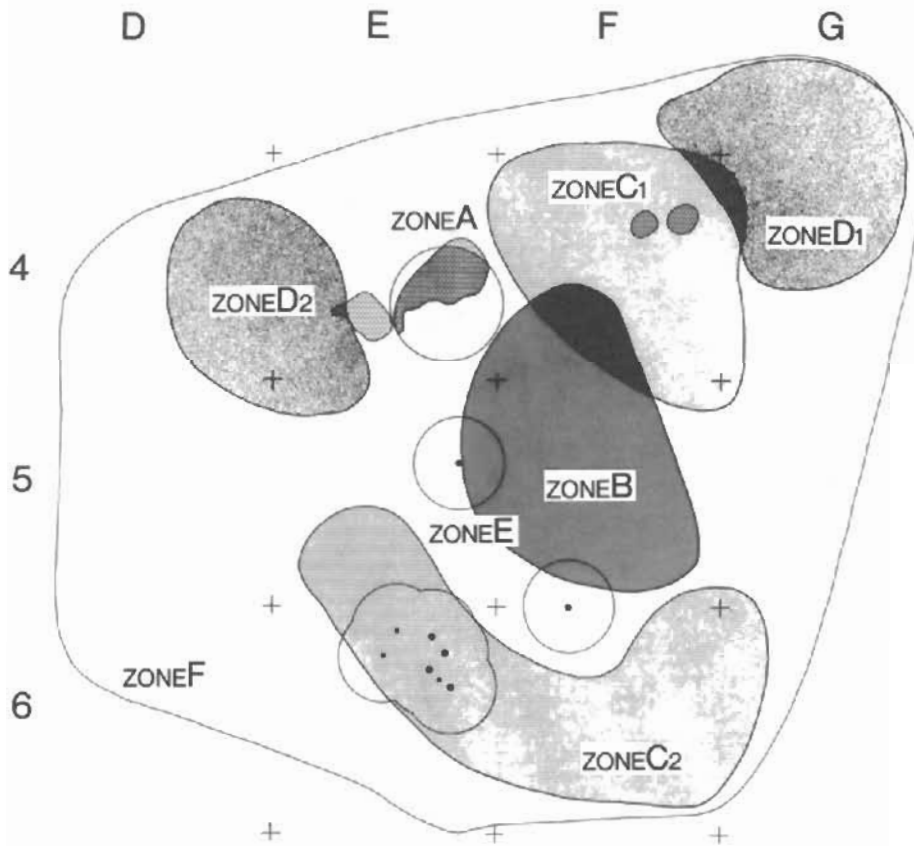


第436図 B+C2・3ブロック接合資料分布図

第3節 下位文化層の遺構と遺物の分布



第437図 B+C2・3ブロック配石・礫分布図



第438図 B+C2・3ブロック空間配置概念図



第80表 第3土壌上の石器組成 (推定範囲も含む)

	ナイフ形石器	掻器	削器	錐状石器	定型的石器	加工痕有剥片	使用痕有剥片	合計
点数	1	4	4	3	12	2	3	17
%	5.8	23.5	23.5	17.6	70.5	11.7	17.6	
	石器	剥片	砕片	石核	合計			
点数	17	14	7	3	41			
%	41.4	34.1	17.0	7.3				

型的石器の集中度が高く、量も多い。組成的に類似したとしても、別の理由を求めた方が妥当であろう。

第3土壌が住居かどうかを判断する前に、世帯ユニットB+C2・3全体を見回しておこう。場の機能を有するゾーンは、石器製作の場、作業の場、廃棄の場の存在が認められた。これらが直径15m程の占有空間上に配置される。石器製作の場 (ZONE B) は、その他のゾーン (ZONE C・D) に取り囲まれている。剥片剥離作業の場は、ここでは独立して確保されている。作業空間 (ZONE C1) は、内部に礫土壌2基を抱え、ユニット内で最も高い位置にある。作業空間 (ZONE C2) は、逆に最も低い位置にあり、配石群を有する。廃棄の場は、4基の土壌の左右に隣接して形成されている。4基の土壌は、第3土壌が住居かどうか、2基の礫土壌が「調理」か「祭祀」と関係するか、ということをも別にしても、きわめて居住行為に隣接した機能を有していたと考えられる。B+C2・3は、先の分析で検討したように、世帯によって直接保持されたユニットとしての属性をよく保持しているし、このようにユニット内での「場」の機能の配置も行なわれている。

世帯ユニットAで、住居空間の位置を推定する際、住居は入口を低い方に開口させ、剥片剥離の場よりも高いところに配される場合を考えた。ここでも、そのように仮定してみよう。剥片剥離作業の行なわれた場所より高いところには、礫土壌2基を含む作業空間 (ZONE C1) と廃棄空間 (ZONE D2) があり、間に第3・第4土壌がある。作業空間 (ZONE C1) には礫土壌があり、これを含んで居住空間を推定することはできない。できるとすれば、礫土壌を避けた西部分である。廃棄空間 (ZONE D2) では、剥片剥離作業空間まで離れすぎるし、廃棄空間は居住的不是である。第3・第4土壌の周辺ではどうだろうか。第3土壌上を仮定すると、低位な方向に隣接して剥片剥離作業空間が配され、東には礫土壌2基を含む作業空間、西には廃棄空間があることになる。空間配置として、第3土壌上に居住空間を仮定すると、きわめて合理的な配置となることが理解されるであろう。遺構としての土壌は、南半分が破壊された状態で検出されたが、石器類がやや砂層上に浮いて出土したこと、きわめて定型的石器が多いという組成上の問題をうまく説明できれば、住居として考えることに否定的なものではない。遺構の埋没状況と石器組成を、第3土壌が住居であると仮定して解釈することも、逆に可能である。

発掘調査の情報に決定的な決め手に欠く場合、居住空間の位置はユニットAと同様に蓋然性の高い解釈を選択して推定することになる。この上で、第3土壌の存在は、ユニットAでの遺物の分布状況からの類推を一步踏み込み得る証拠となると私案する。第3土壌を住居と判断し、第3土壌上での定型的石器の集中、床面までの間に間層があることについては、住居内での「行為・活動」または、その「廃絶」との絡みで、第VI章第3節にて解釈してみたい。

世帯ユニットAと世帯ユニットB+C2・3の空間配置は、両者とも世帯に直接保持されたユニットである属性をよく備えている。一方でそのユニット内の空間配置には、異なった部分が認められる。特に、定型的石器と加工痕・使用痕有剥片の分布のあり方は、AとB+C2・3とで逆の様相が認められる。また、空間の位置関係は、作業空間や廃棄空間をどこに配するかといった点など、異なる点が多かった。

世帯ユニットの抽出の際には、どの世帯も同様の属性を示すものとして、斉一的な特徴の抽出を大きな根拠としたが、ここでの多様性は、個々の世帯における活動のあり方の多様性を示したものになった。すべての世帯を一つの基準のみで抽出することには困難があることを鮮明にしたのである。しかし、わずか2世帯の空間配置を検討しただけではあるが、共通した特徴も認められた。まず、①剥片剥離作業の場がユニットのほぼ中央に配され、②居住空間はそれよりも高い場所に配され、③居住空間に接した作業空間を有する、等である。南半のサヌカイト製石器群の分布域では、世帯ユニットの空間配置の検討は、事実上不可能であった。住居遺構の発見される場合の少ない旧石器時代の石器類ブロックを、世帯ユニットに統廃合していくうえで、ユニット内部での空間配置の実相把握は重要な検討課題であろう。

考古学的方法での世帯の実相に迫る方法の発見が求められよう。

(山口)

## 7. 小結

下位文化層の遺物分布は、その視覚的区分によって全部で13の石器類ブロックに分ける事ができた。サヌカイト製石器群とチャート等製石器群の2つが共存し、サヌカイト製石器群はほぼ遺跡全域に分布するが、どちらかというとな半に多く、チャート等製石器群は北半に集中する。これら石器群は、石器の形態・石器製作技術上から構造的に異なっていることが明かで、サヌカイト製石器群が瀬戸内系、チャート等製石器群が中国山地系と、石器文化伝統の相違として理解された。南北に分布が分かれる傾向があるが、両者は石器類ブロック単位では積極的な共存が認められ、同時存在であると考えられた。第3項で行なった石器分布における器種間分布関係の分析は、このような2つの石器群の混在状態での分布構造の把握に成果を挙げた。個別別資料・接合資料の分布の検討からは、南北の石器類ブロック間におけるサヌカイト製・チャート等製石器群の共有関係から、サヌカイト製石器群の南半での石器類ブロック間の関係・チャート等製石器群の北半での石器類ブロック間の関係が明かとなった。このような多くの分析を経て、石器組成や遺構の分布などの状況も併せて、石器類ブロックの統廃合を行い、世帯に保持された空間ユニットや作業的な空間ユニットに再構成した。

本節では、このように多岐に渡って下位文化層の遺構・遺物の分布状況の記述を行なってきた。個々の分析結果は、必ずしも斉一的ではなく、あるものは1つの解釈に整合的で、あるものは相互に矛盾した結果を生じたようである。本節で、それぞれいくつかの仮説を提示し、一つの解釈を導いたが、すべてが予定調和するわけではあるまい。それらのより高次な、遺跡をとりまく自然的・社会的・技術的な環境との脈絡という、より総合的な解釈と展望は、最終章である第VI章に託することとする。

(山口)

## 第V章 上位文化層の調査

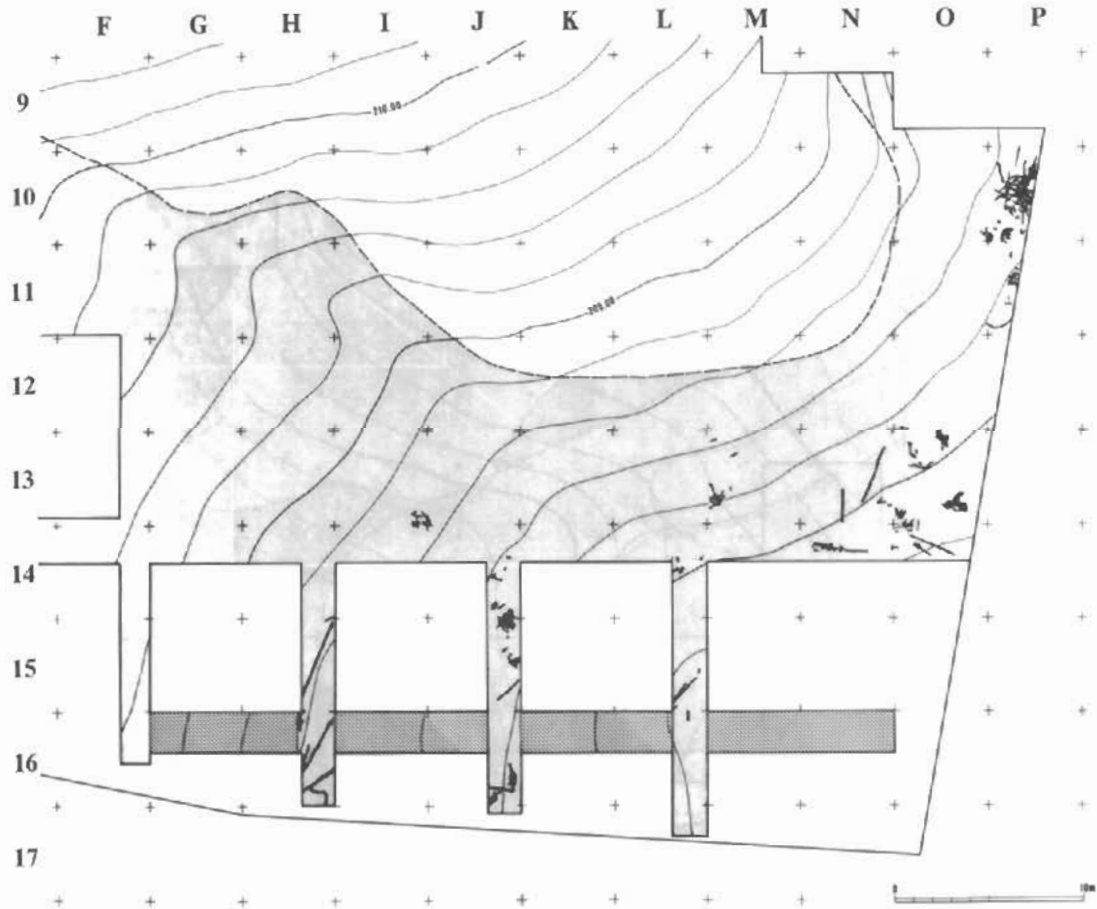
### 第1節 上位文化層の遺構

#### 1. 上層の層位と微地形・遺構の分布

##### a. 層位と微地形

上位文化層は、陸地部の暗灰色火山灰中にある。暗灰色火山灰の分布範囲は、遺跡中央部にほぼ限定され、北東部は削平されている。南部と北部では次第に層厚を減じ、始良Tn火山灰純粹層のみへと変移する。泥炭の発達する部分では、全く認められない。暗灰色火山灰は、始良Tn火山灰の風化・土壌化した部分で、始良Tn火山灰降灰後に地表面に長く露出した部分がそうになったものと考えられる。暗灰色火山灰の範囲と上位文化層の遺構・遺物の分布範囲は、ほぼ対応する。遺物の垂直投影図を作成してみると、遺物包含の水準はほぼ均一で、土層中に地形傾斜に沿って包含されていることが知れる（第19図）。遺構の検出・包含位置は、遺物包含層の下部に一定していることから、遺構と遺物は同時期のものと理解できよう。

上位文化層相当期の埋没微地形は、北半の始良Tn火山灰と南半の泥炭II下部および上部の面で把握し

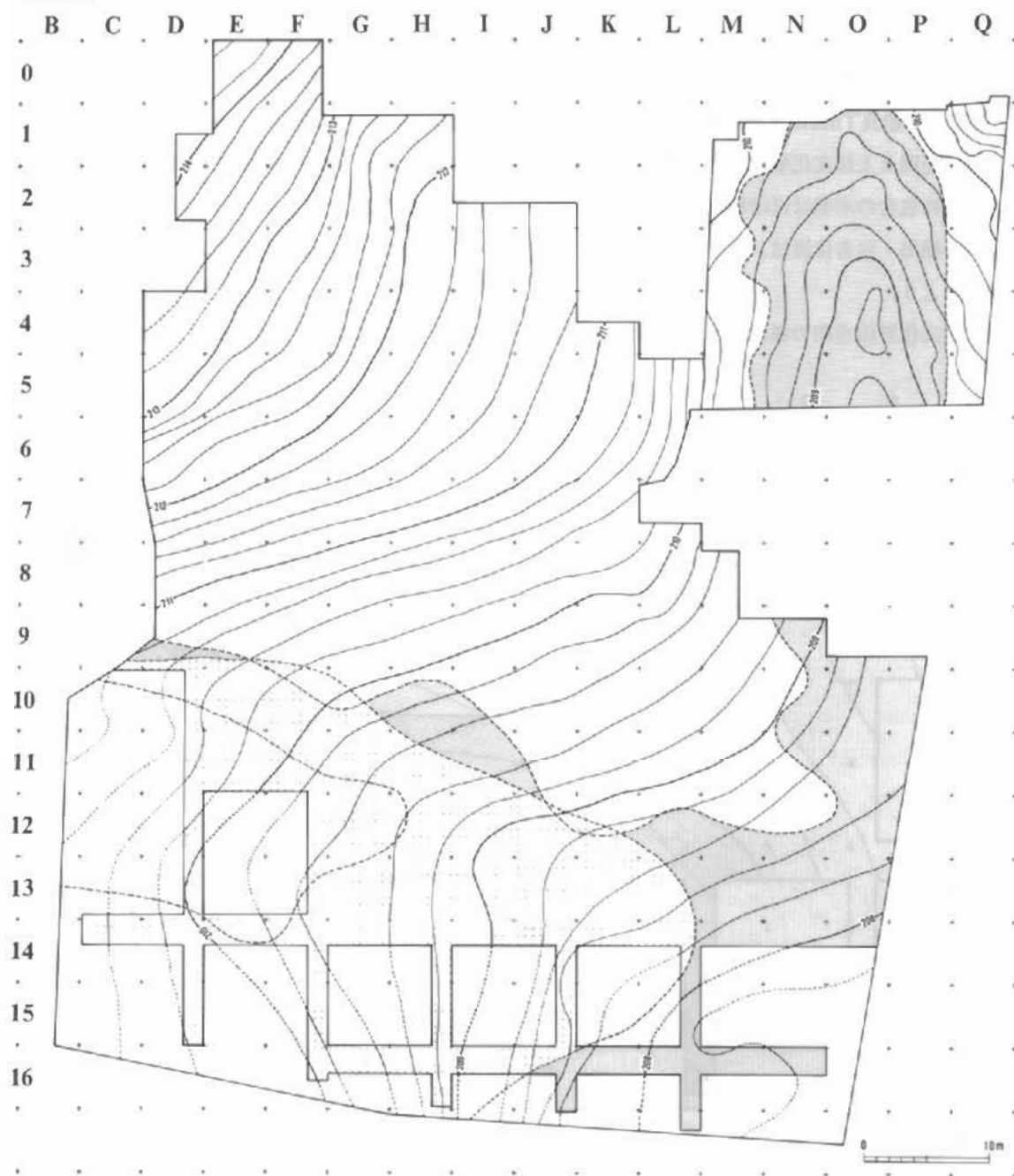


第439図 泥炭II下部分布範囲

た(第439図)。

上位文化層相当期の発掘区内微地形は、最高所は発掘区北西隅で標高214.50m、最低所は南東隅で標高207.70mである。ほぼ北西から南東に向かって緩やかに傾斜するが、調査区東部と南部には浅い谷があり、舌状の高まりとなっている。調査区南部には泥炭の発達が認められ、南西部では標高210.80m、南東では標高208.50m、北東では209.80m以下の部分に堆積している。泥炭面の上面は水平ではなく、すべてが安定した水面の存在下に堆積したものとは考えられない。谷部においては、泥炭面の遡上が認められることから、水流の存在があったものと考えられる。

調査区南半の泥炭層中には、西部から東に向かって突出する舌状に多量の砂礫の堆積が認められる(第440図)。

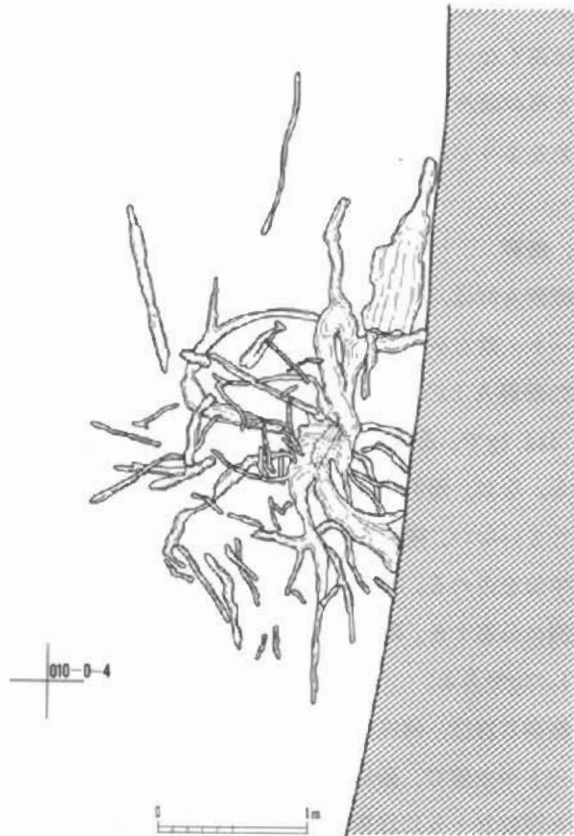


第440図 泥炭Ⅱ上部・相当面等高線図

砂礫の堆積は、泥炭Ⅱ下部を覆うように堆積し、一部では陸地部に覆いかぶさる。H14区の砂礫層上面からチャート製剥片が出土し、当該期の範囲が、泥炭面中に出現した砂礫による陸地まで広がっていた可能性が高い。

**b, 遺構の分布**

上位文化層の遺構は、礫群と土壌があるに留まる。いずれも発掘区中央に集まって存在する。北東部が削平されて、もう少し拡大した可能性もあるが、発掘区E5区からL8区までの南北20m、東西40mの範囲である。H16区までを含めて考えると約60mの南北距離となるが、とりあえずは別の地点として考えておきたい。



第441図 泥炭Ⅱ下部出土埋木実測図

**2, 礫群**

**a, 礫の分布と礫群**

上位文化層からは、合計1,406個、総重量41,885.7gの礫石が出土した。礫は大まかにみてE5区からJ8区までの南北20m、東西25mの範囲に分布している。必ずしも礫石はまんべんなく分布するわけではなく、一定の範囲で集中する場所や、逆に疎らな場所も認められる。まず、ここでは礫石を一定の分布上のまとまりに区別し、礫群を設定しよう。

礫石の分布を視覚的にみて、集中が明かな部分は、大きくみると3群が認められる。第1にE5・F5・6区の部分、第2にF7・8区の部分、第3にH6・7・8・I6・7・8・J8区の部分である。それぞれの集中部の分布範囲の大きさと密度、含まれた礫石の個数には差異がある。第1の集中部をA群、第2の集中部をB群、第3の集中部をC群とし、観察する。

A群は、分布範囲南北6m、東西7.5mの範囲で、合計340個、総重量12,649.1gの礫石が分布する。全体にまんべんなく分布するというわけではなく、いくつかの集中が見られ、さらに3つに細分することが可能である。A1～3とする。このうちのA1に集中の中心がある。

B群は、分布範囲南北6.5m、東西5mの範囲で、合計584個、総重量10,073.1gの礫石が分布する。やはり集中部と疎らな部分があり、さらに2つに分割する事ができる。B1・2とする。B1には強い集中が、B2には疎らな分布が認められた。B1は、B1aとB1bの2つに細分できる。

C群は、分布範囲南北8m、東西11mの範囲で群間で最大の面積と点数を有する。合計482個、総重量19,163.5gの礫石が分布する。やはり集中部と疎らな部分があり、さらに5つに分割する事ができる。C1～5とする。このうち、C1が点数的には最大で、近くにC2を従える。

以上、各群の礫石集中を観察し、それらをさらに細分した。その結果、大きく3群、細分すると10～12群の集中部があることが知れる。最小単位の集中を「礫群」として把握し、それぞれにA～Cの群番号

と1～5の細別番号を付す。礫群として呼称を決定したが、一般的に礫群と呼ばれるものほど礫の集積度は高くない。少なくとも折り重なるように集積された状況は認められず、一定の範囲に集中して分布する事が読み取れる範囲を呼称しているに過ぎない。また、構成礫の形状にも従来のものと大きな差異があるようである。

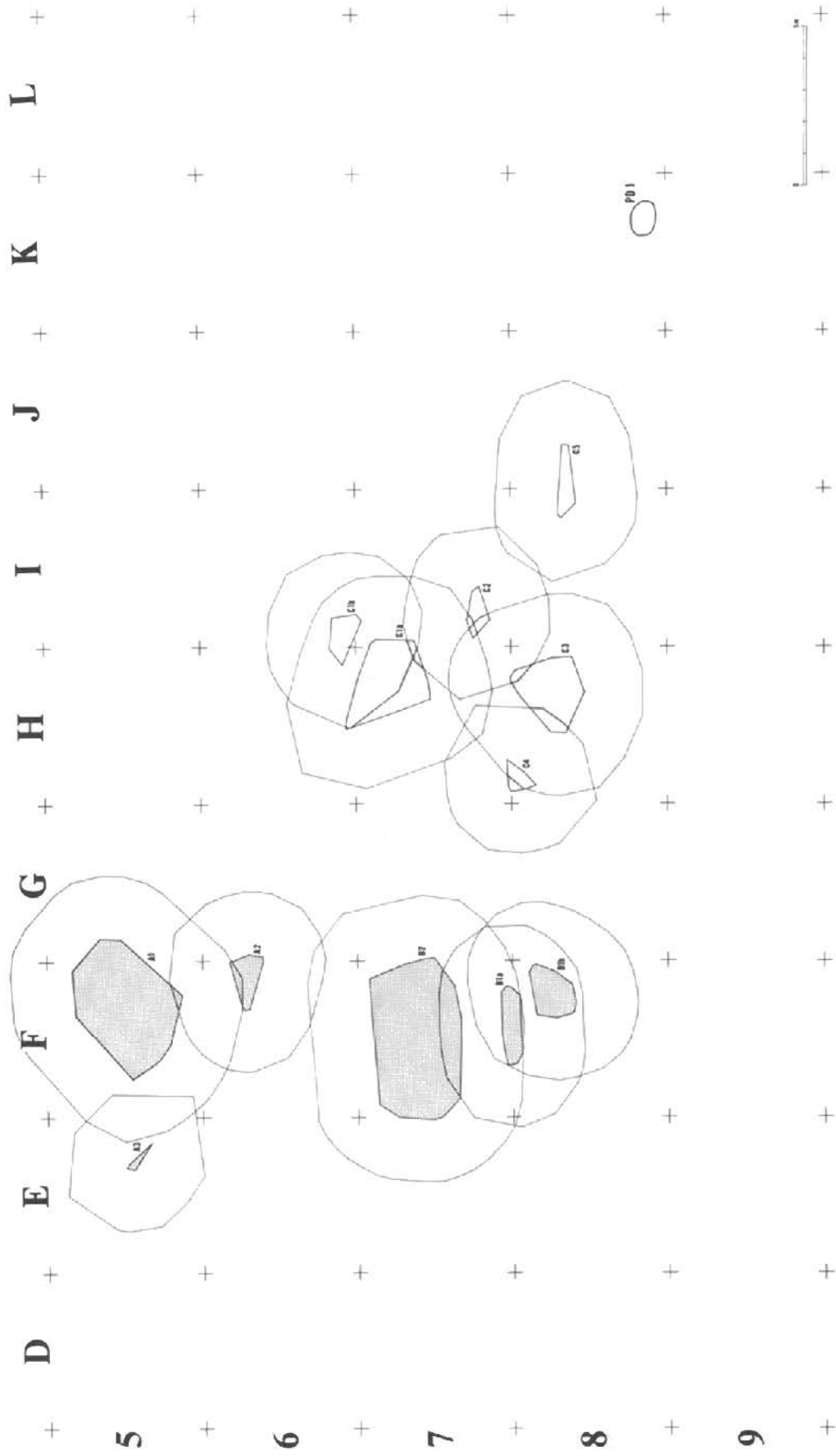
#### b. 礫群

礫群A群は、構成礫340個、総重量12,649.1gで、ほとんどが破碎・受熱礫で構成される。石材ではチャート・砂岩が主で、花崗岩・石英・凝灰岩などがある。分布のまとまりによって3群に区分され、中心的礫群A1の周辺の散漫分布がA2・3に振り分けられている。礫群A1は、構成礫280個、重量10,444.1gで、直径4.5mの範囲に集中する。構成礫は全体の傾向にほぼ従う。礫の平均重量は37.30gである。なお、礫群中には微細な炭化物片が礫石周辺に認められたが、時間的制約から分布図の作成を行っていない。礫群A2は、構成礫56個、重量1,758.0gで、直径1.5mの範囲に集中する。構成礫は砂岩が半分を占める。礫の平均重量は31.39gである。礫群A3は、構成礫4個、重量447.0gで、直径0.5mの範囲に分布する。礫群A1の西2.5mの外縁部に当たる。構成礫は砂岩と凝灰岩である。礫の平均重量は111.75gである。

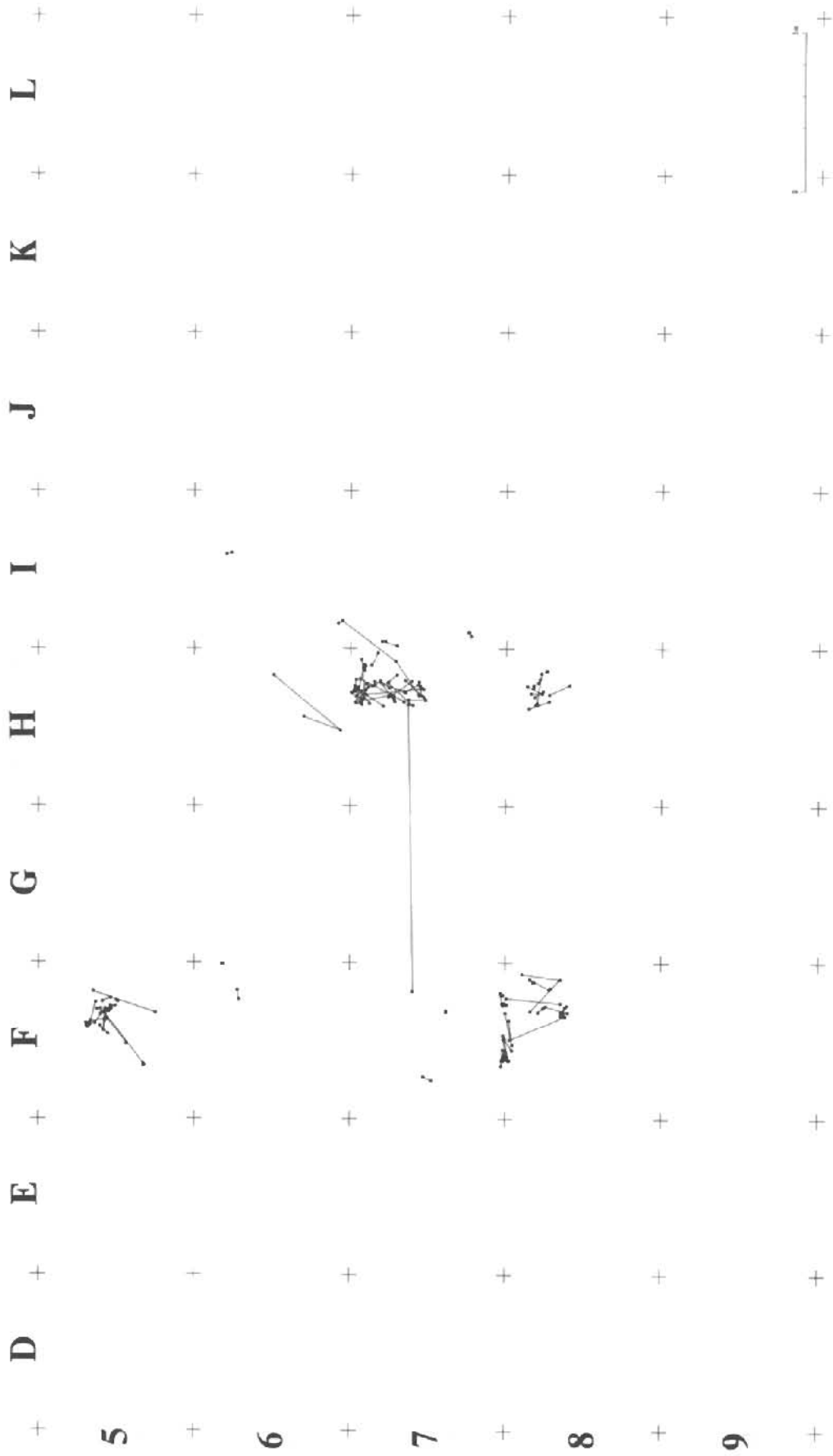
礫群B群は、構成礫584個、総重量10,073.1gで、ほとんどが破碎・受熱礫で構成される。石材ではチャートが主体で、砂岩と僅かに花崗岩・泥岩・石英等が伴う。分布によって3つに区分され、礫群B1aと礫群B1bには集中度の高い分布が、礫群B2には散漫な分布が認められる。礫群B1aは、構成礫383点、重量4,791.5gで、長さ2m、幅1mの範囲に集中する。構成礫は全体の傾向にほぼ従う。礫の平均重量は12.51gと軽い。礫群B1bは、構成礫138点、重量2,793.0gで、直径1.5mの範囲に集中するが、B1aとの間は発掘時の取り上げの混乱から、破壊された部分があり、本来は、連続していた可能性もある。礫群B1aとB1bの構成礫には類似した点が多い。礫の平均重量は20.24gである。礫群B2は、構成礫62個、総重量2,148.5gで、直径4mの範囲で散漫に分布する。構成礫は全体の傾向にほぼ従う。礫の平均重量は34.65gである。礫群B群には、あと1点の砂岩礫が単独で分布し、重量340gを測る。この礫群には、多量の微細炭化物が伴ったが、流水のため分布図の作図ができていない。

礫群C群は、構成礫482個、総重量19,163.5gで、ほとんどが破碎・受熱礫で構成される。石材では、チャート・砂岩が主で、花崗岩と僅かの石英・泥岩等がある。分布によって5つに区別され、礫群C1とC3は集中度が高く、C2はC1の外縁部的分布となっている。礫群C1は、構成礫300個、重量7,363.5gで、直径4mの範囲に集中する。点数及び分布規模は最大である。構成礫は、全体の傾向にほぼ従う。礫の平均重量は24.54gである。礫群中には、微細炭化物が伴った。礫群C2は、構成礫21個、重量864.4gで、直径1mの範囲に分布する。構成礫は全体の傾向にほぼ従う。礫の平均重量は41.16gである。礫群C3は、構成礫95個、重量3,805.4gで、直径2mの範囲に分布する。構成礫はほぼ全体の傾向に従う。礫の平均重量は40.06gである。礫群C4は、構成礫23個、重量1,425.8gで、直径0.7mの範囲に分布する。構成礫は、砂岩がほぼ半分を占める。礫の平均重量は61.99gである。礫群C5は、構成礫9個、重量1,062.5gで、直径1.5mの範囲に分布する。構成礫は、ほぼ全体の傾向に従うがチャートの比率が増加している。礫の平均重量は118.06gである。

ほかに、単独に分布する礫34個、重量4,641.9gがあり、チャート・砂岩と僅かな花崗岩・石英よりなっている。



第442図 壕群配置図



第443図 壕溝合状況図



## c. 礫群の構成礫

上位文化層の礫群を構成する礫石は、チャートと砂岩が主体で、あと僅かな花崗岩・凝灰岩・泥岩・石英などからなっている。チャートと砂岩を合わせた比率は94%を越える。上位文化層の礫石のうち、チャート・砂岩等は丹波山地の中・古生層の岩脈に普遍的に観察されるもので、礫群構成礫は基本的に遺跡近傍で採集可能な在地石材を使用しているものとみられる。板井寺ヶ谷遺跡後背の山裾にも露頭があり、また近傍の河床面では垂角礫が採集できる。

礫石の重量は、最大800gで、平均は29.8gである。ほとんどが20g以下の小礫石である。多くは破碎しており、完形のもの(A)、半割したもの(B)、8分の1程度のもの(C)、本来の形状が不明なほど破碎したもの(D)の4類に分類してみると、ほとんどがD類の本来の石材の形状が不明なほど破碎の進行したものであることが知れた(第81表)。また、礫石のほとんどが受熱赤化している事実もある(第82表)。板井寺ヶ谷遺跡の礫石は、赤色系統のチャートや鉄分の多い砂岩であり、赤化の判断には困難があるものが多いので、火はね状の破碎や劣化が認められるものを受熱礫と判断した。礫石の破碎度の高さは、礫石が礫群として機能した際に受熱して破碎が進行したことと併せて、礫石の採集時に岩脈から板状に採取されたものが、使用に先だって破碎された可能性をも考慮できよう。

赤化・受熱礫は、上位文化層の礫石のほとんどを占める。非赤化・非受熱礫との重量分布を比較してみると(第456上図)、両者はほぼ同様の傾向を示している。量的に多いのが30g以下、500g以上が希なのも同様である。相違する点としては、重量120g以上の礫には非赤化・非受熱礫が多い点である。

破碎度別の重量分布を比較してみると(第456下図)、破碎度と重量の間には強い相関があることが知れる。A類は、10gに多いが、100~300gのあたりにも集中する。B類は、各段階にまんべんなく分布する。C類は、30g以下の部分が以外に少なく、60g周辺に強い集中を示す。150g以上は極めて少ない。D類は、5~10gに集中し、50g以上は極めて少ない。一般に、破碎度が進むほど、礫石の平均重量が減少して行くことが理解できよう。

次に、各群毎に礫石の特徴を見てみよう。受熱・赤化礫は、各礫群のほとんどの構成礫に認められ、基本的に、すべてが受熱する環境にあったと考えられる。礫石の平均重量では、遺跡全体では29.8gに対してA群が37.2g、B群が17.2g、C群が39.8gとなり、B群が他の群の平均値の半分以下であることが注意される。B群での礫石の破碎度がさらに進行していると考えられよう。

礫群単位でみると、礫石の平均重量が重い礫群は、構成礫数が少なく、平均重量の軽い礫群は、構成礫数が多い傾向が認められる。平均重量の最も軽いのは、礫群B1aで383個、12.5g、B1bの138個、20.2g、C1の300個、24.5gとなる。重いのは、点数の少ない礫群で、総じて30g以上となっている。点数が多い礫群では、礫石を使用した活動の結果、破碎が進行し、礫石の点数が増大するとともに平均重量が低下したのであろう。点数の少ない礫群では、使用の頻度と破碎の進行がそれほどではなかったことになる。礫群の形成には、受熱・赤化、破碎が同時に起こるような活動が行なわれた結果であると推定することができよう。

礫群の機能として、従来から、火を使用して礫石を焼き、調理に使用した遺構であると説明されるこ

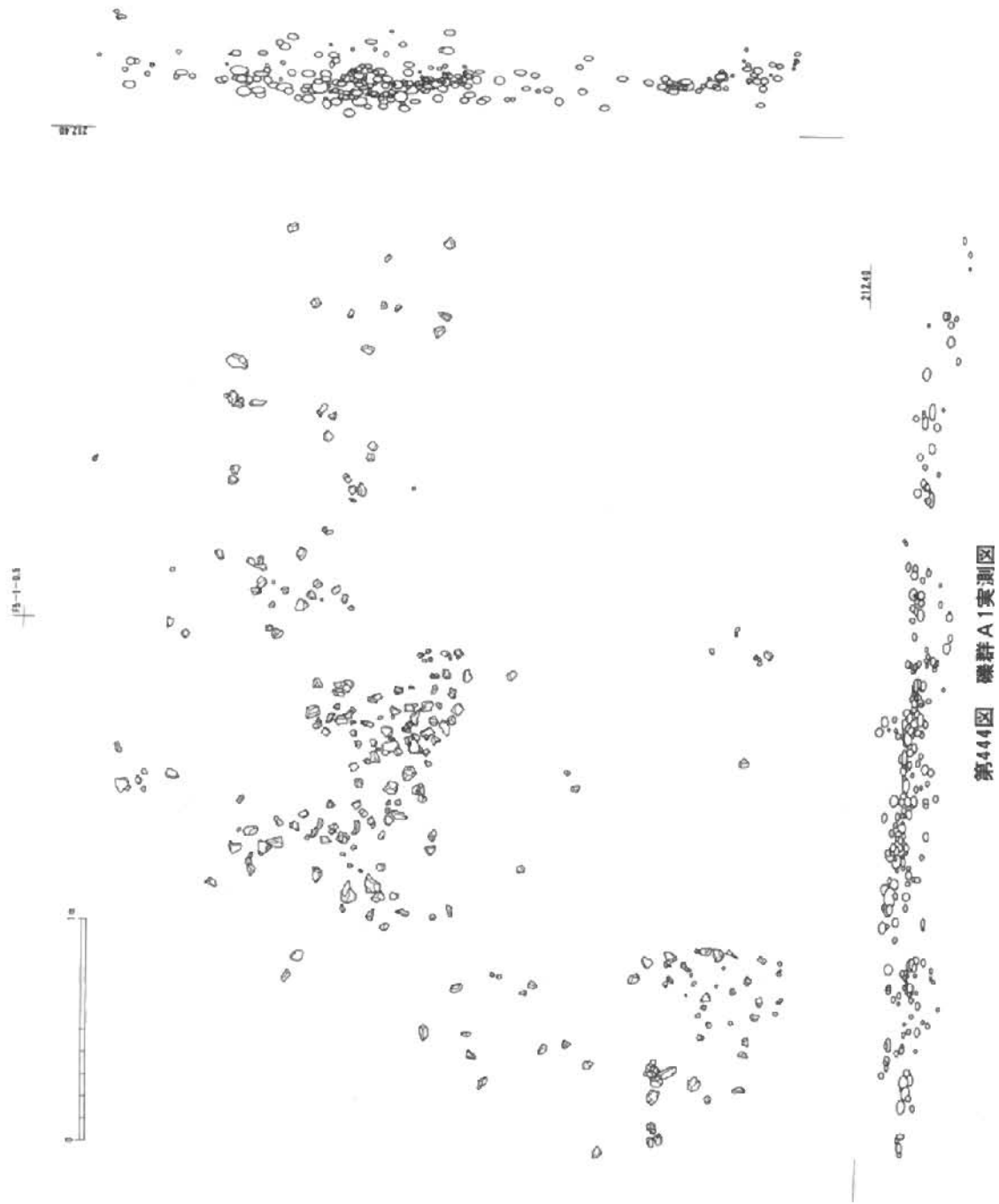
第81表 上位文化層礫石の完形度

	A類	B類	C類	D類
1404個	59個	88個	198個	1059個
	4.2%	6.3%	14.1%	75.4%

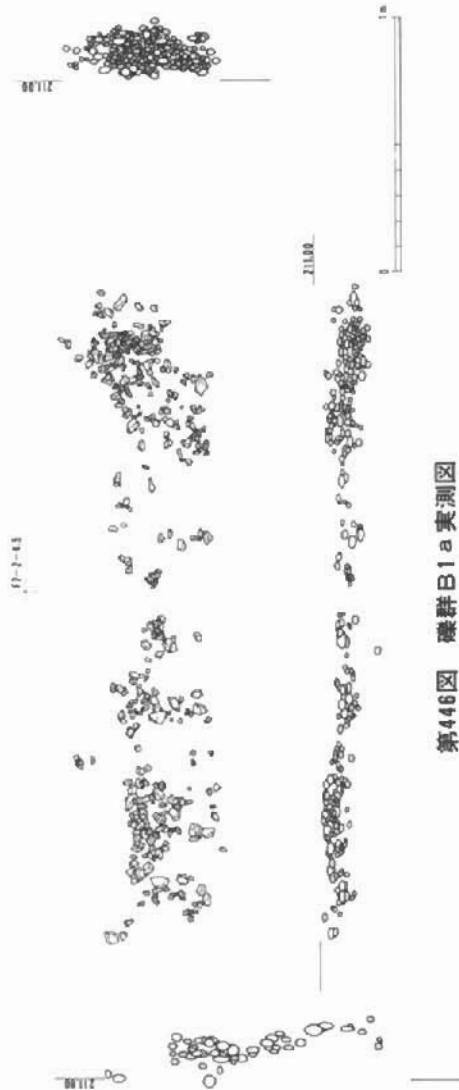
第82表 上位文化層礫石の受熱・赤化

	受熱・赤化	非受熱・非赤化
1394個	1223個	171個
	87.7%	12.3%

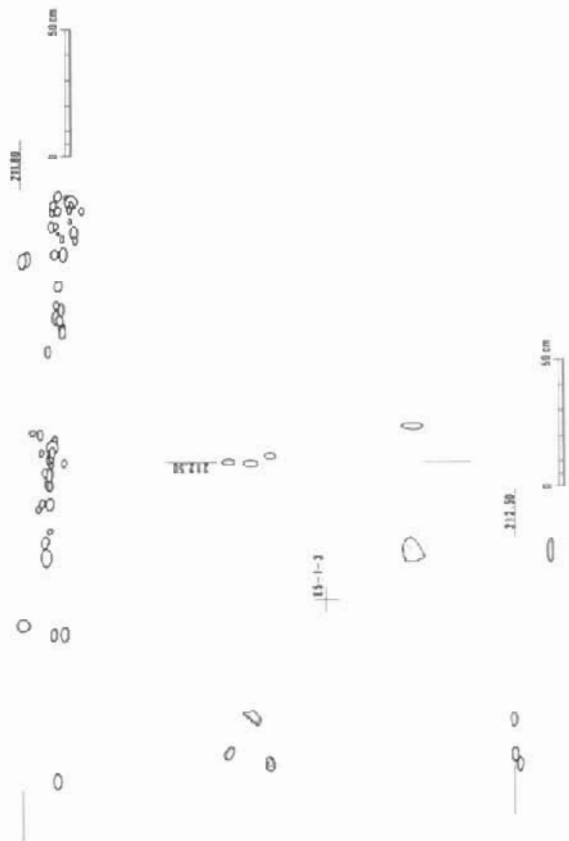
第1節 上位文化層の遺構



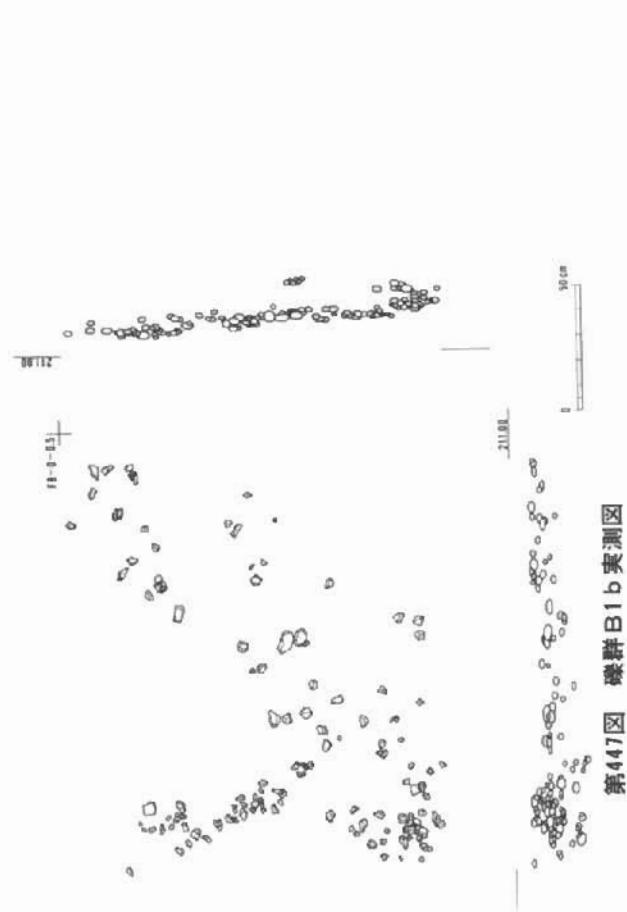
第444図 壕群A1実測図



第446図 磁群B1a実測図

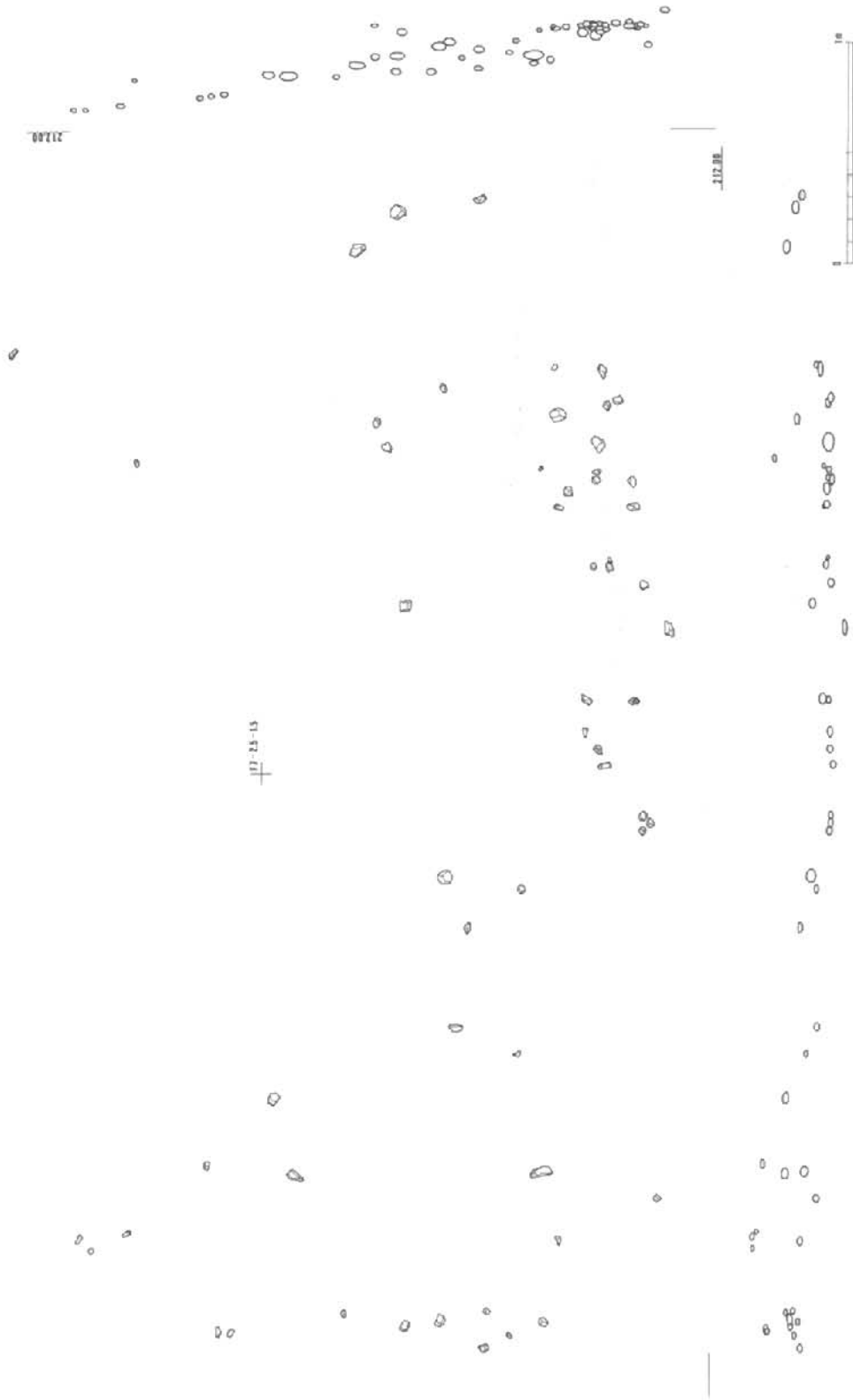


第445図 磁群A2・A3実測図



第447図 磁群B1b実測図

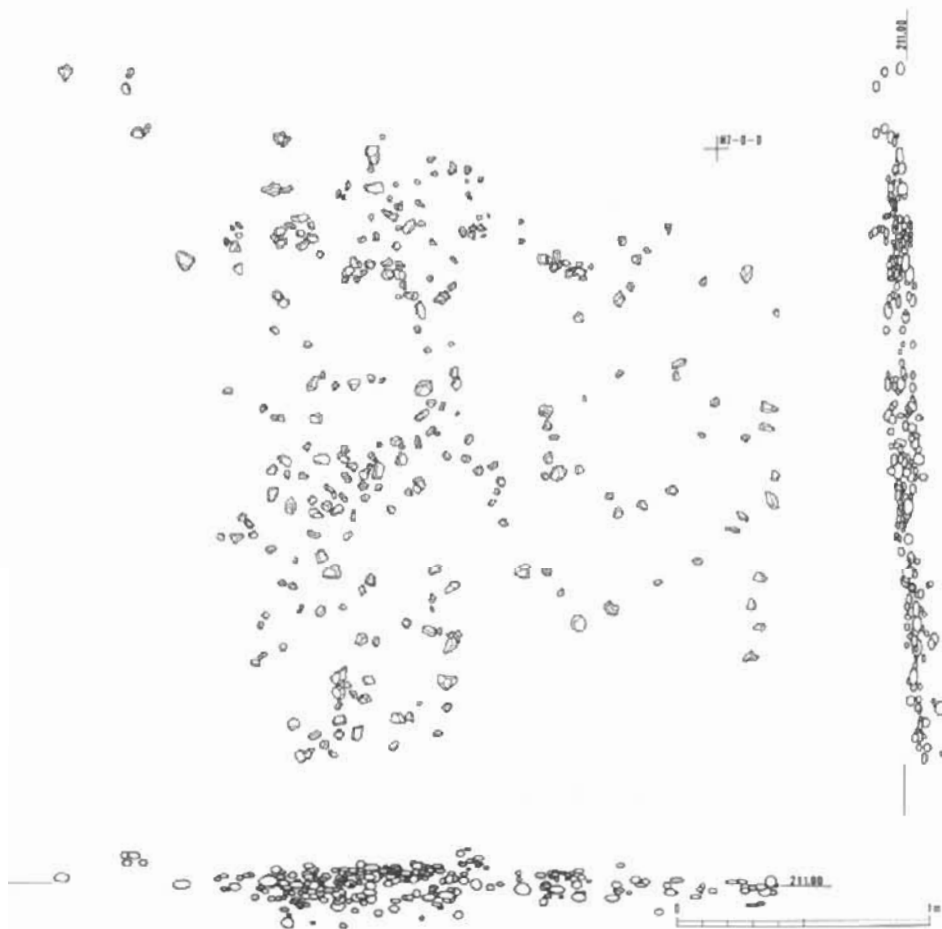
第1節 上位文化層の遺構



第448図 雑群日2実測図

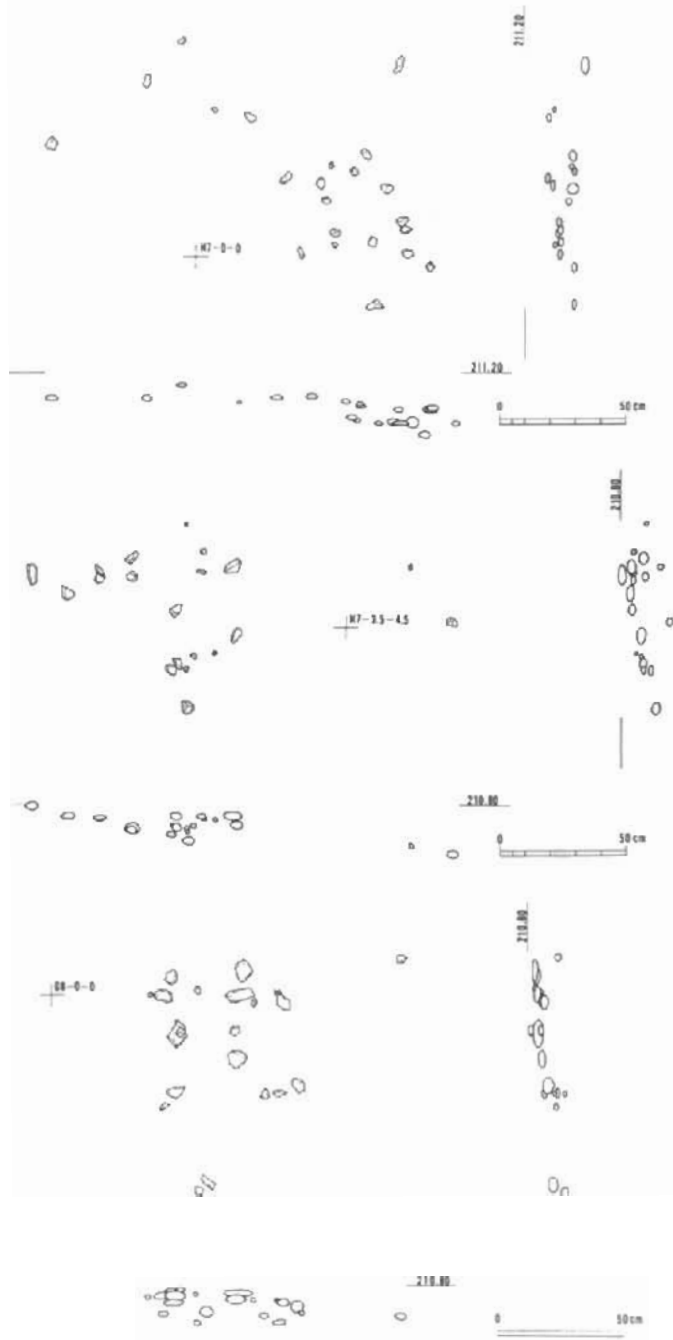
とが一般化している。板井寺ヶ谷遺跡上位文化層の礫群は、一般に想起される拳大の礫石が折り重なって集積された南関東などで見られる礫群とは大きく異なっていることは明かである。しかし、一方では、礫石のほとんどが受熱・赤化していること、使用に際して破碎する場合があること、集積度は低いものの、一定の範囲で集中して使用されたものであることなど、共通する特徴が見いだせる。また、炭化物片が礫石周辺に認められた礫群もある。機能が完全に南関東型の礫群と一致するかどうかは、今後検討する余地があろうが、一般的な機能として、礫石を焼いて一定の作業の行なわれた施設であることは認められるであろう。もっとも可能性のある場の機能として考慮できるのは、やはり調理施設であろう。

(山口)

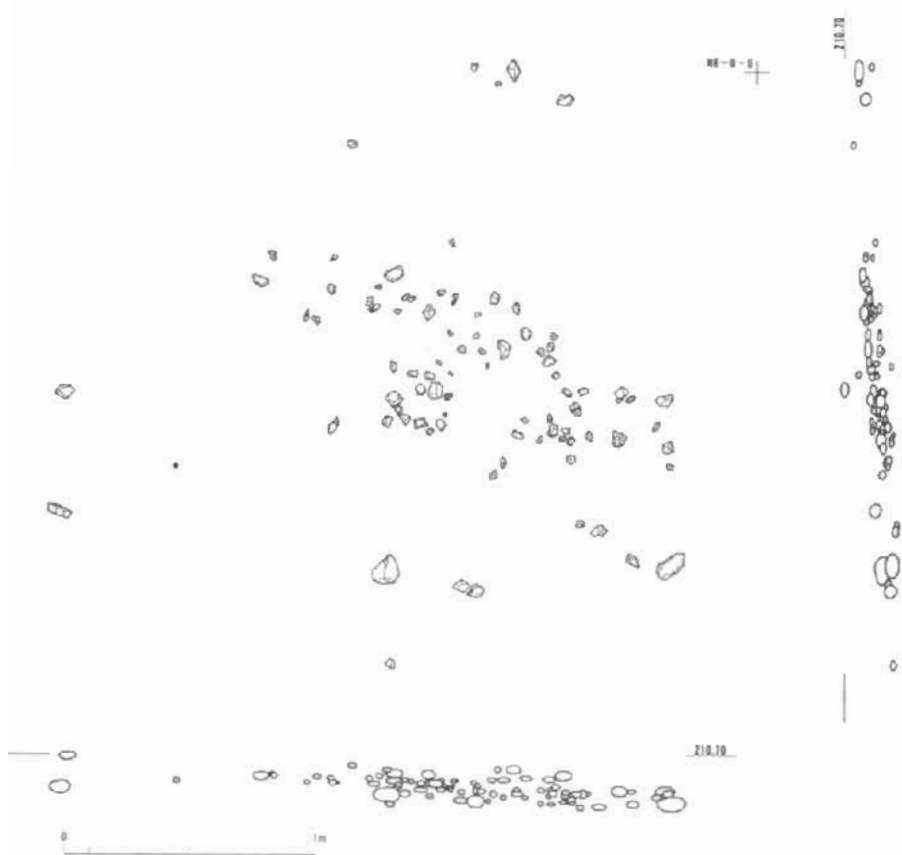


第449図 礫群C1a実測図

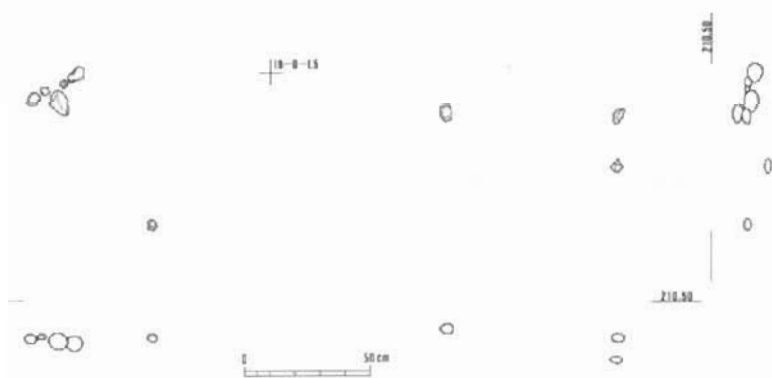
第1節 上位文化層の遺構



第450図 礫群C1b・C2・C4実測図

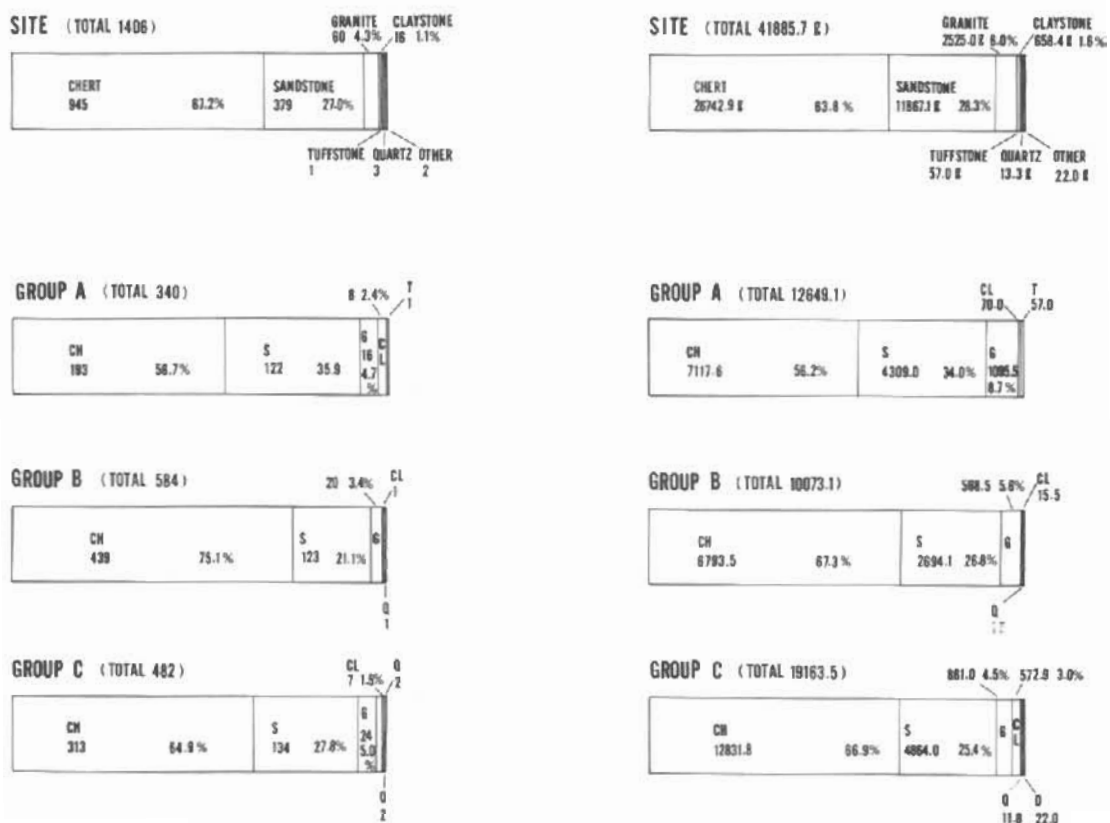


第451図 礫群C3実測図



第452図 礫群C5実測図

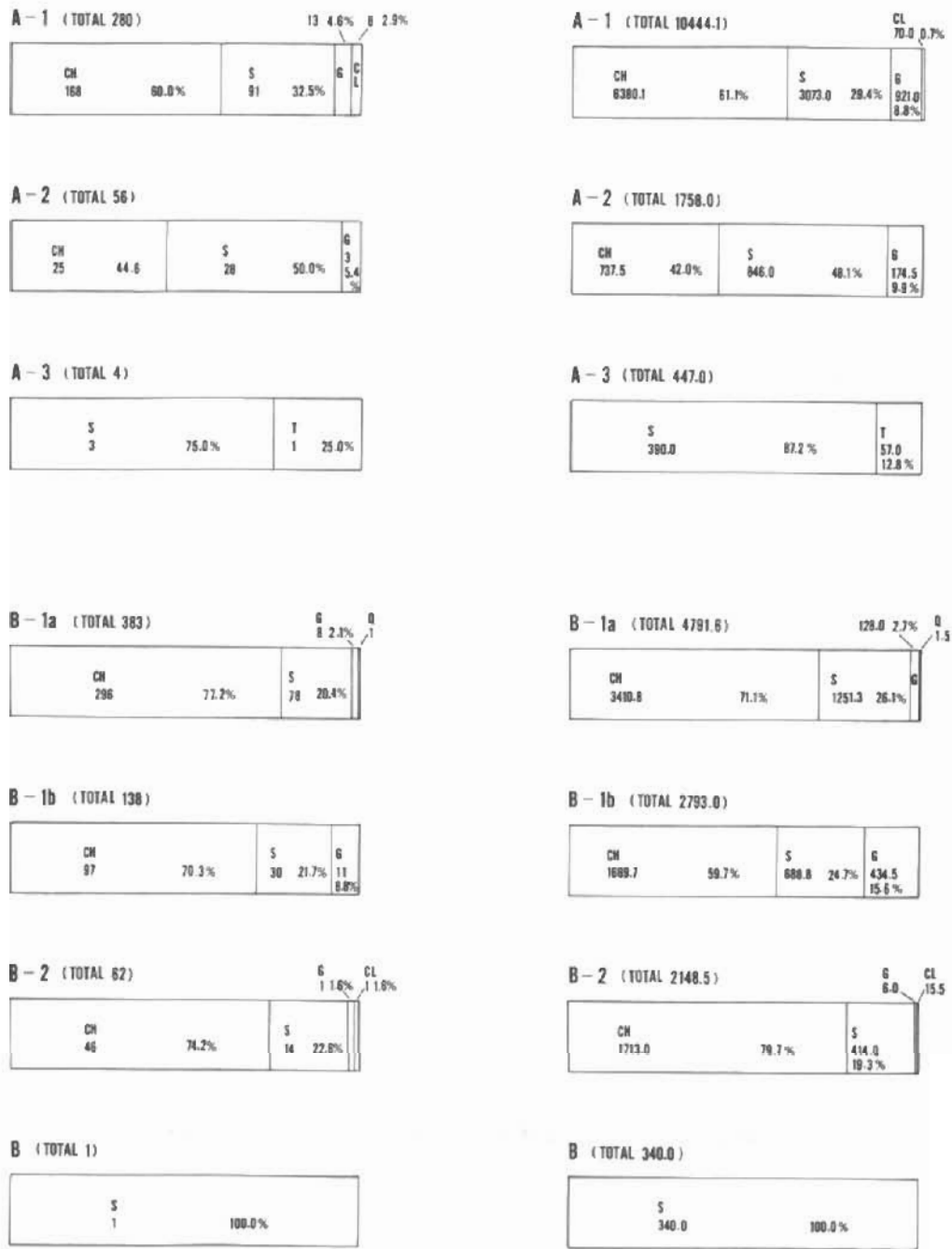
第1節 上位文化層の遺構



第453図 上位文化層層群別石材組成 (左、数量 右、重量)

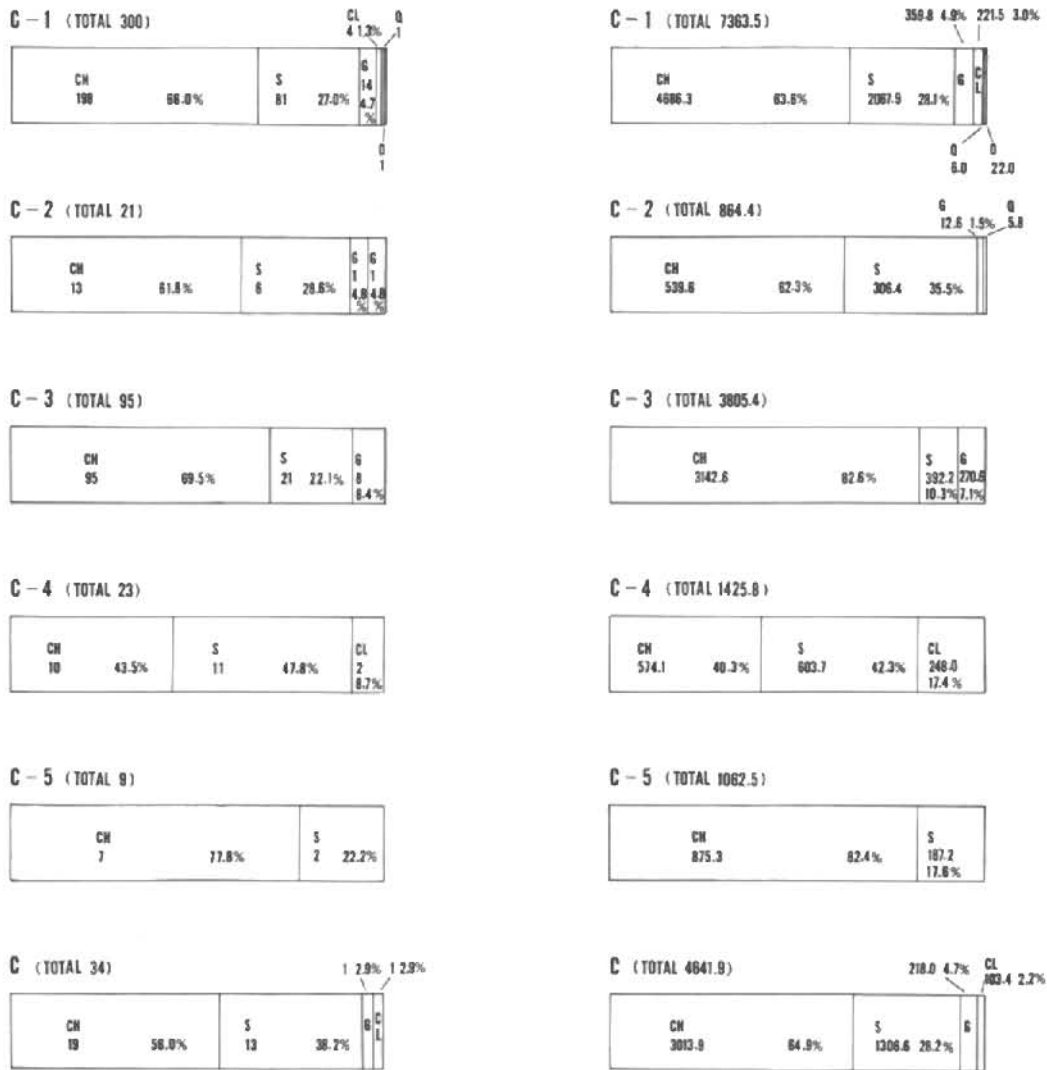


第V章 上位文化層の調査



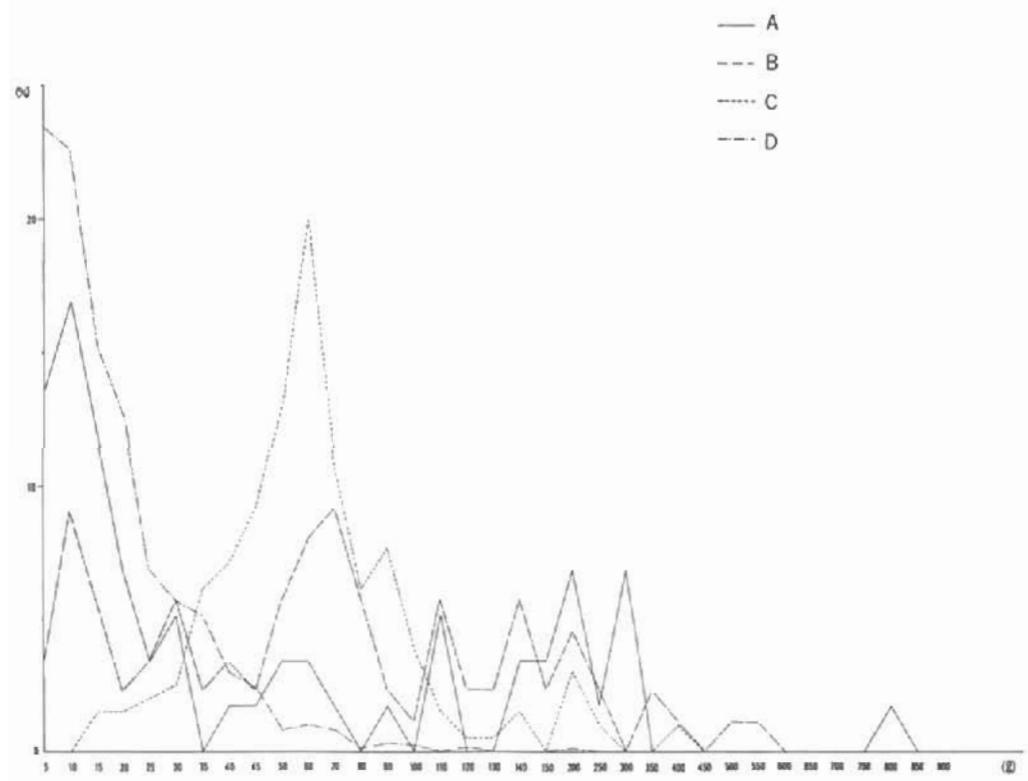
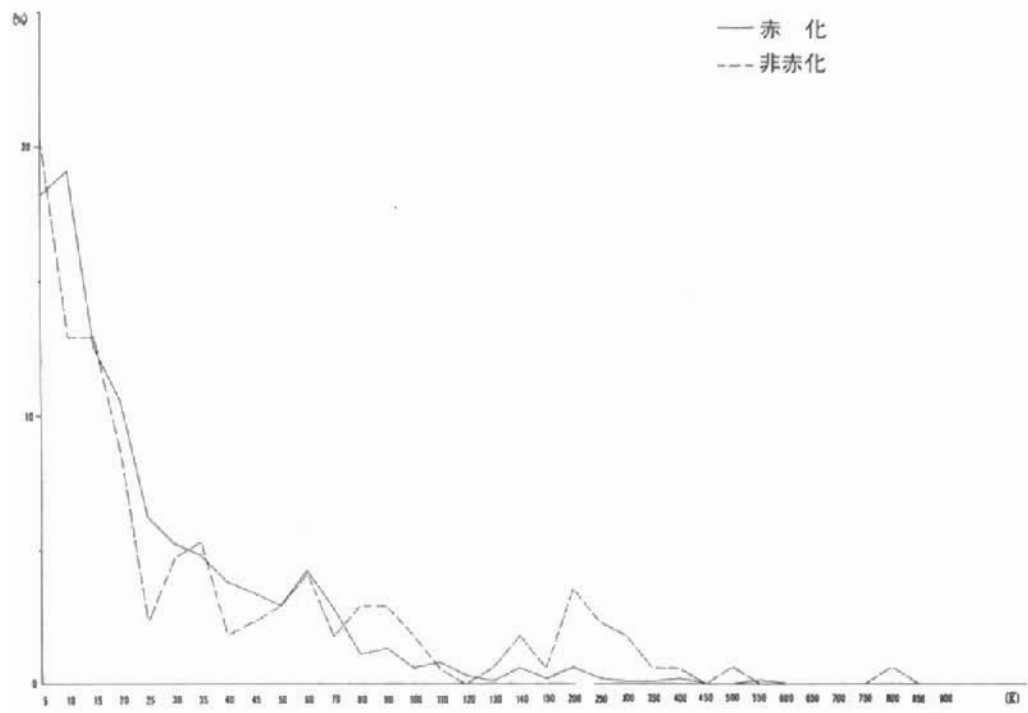
第454図 上位文化層礫群石材組成1 (左、数量 右、重量)

第1節 上位文化層の遺構



第455図 上位文化層礫群石材組成 2 (左、数量 右、重量)

第V章 上位文化層の調査



第456図 上位文化層礫赤化・破碎度重量分布（上、赤化・非赤化 下、破碎度）

### 3. 土 壙

土壙1基がK8区で検出された。石器類分布の東南辺縁にあたる。

検出された土壙は、長径115cm、短径83cm、深さ10cmの小判形を呈する。土壙の検出面は、始良Tn火山灰を除去した直後の黄色粘土上面であったが、土壙中の埋土は、火山灰の土壌化したものと考えられる灰色粘土一層からなっていて、暗灰色火山灰層中から掘り込まれたものと考えられる。掘り込み面が高いことから、本来はもう少し深かったものと考えられよう。出土遺物は、土壙北側縁部でサヌカイト製剥片1点が出土した。埋土すべてを水洗篩掛作業したが、碎片4点を検出したのみである。



第457図 土壙実測図

発掘調査時に得られた情報だけでは特に土壙の性格を特定することはできない。旧石器時代の土壙の性格として想定される可能性を考えると、「墓」または「貯蔵穴」のうち、深さと形状、埋土や遺物の出土状況を考え合わせると、貯蔵穴とは考えにくいように思われる。(水島)

### 4. 小 結

上位文化層は、調査区の中央付近にまとまり、遺構として検出されたものは、礫群と土壙があるに留まる。発掘区南端のH14・16区でも相当層から角錐状石器・剥片が出土していることから、南部の泥炭面上の砂礫堆上にも活動域が広がっている可能性が高いが、南端での遺構検出はない。

礫群は、チャート・砂岩などの小受熱破碎礫からなり、数百点が集中するものから数点が散在するものまでを、分布上のまとまりから設定したもので、通常意識される南関東に認められるような集積度の高いものとは相違している。ただ、受熱破碎したものがほとんどで、火との関係が考えられる点については、同様である。

礫群は、大まかに3群が認められ、その間には接合関係も認められることから、基本的には考古学的に同時期の形成で、破砕片の共有関係から礫の移動状況が知れよう。礫群3群の存在は、3箇所での連続した礫群形成があったことを示し、間接的には火処の存在をも示している。瀬戸内東部・近畿地方中央部での遺跡で、礫群や土壙など、遺構が発見された遺跡は必ずしも多くない。郡家今城C地点遺跡や郡家川西遺跡では、受熱・破碎されたチャート・砂岩片で構成される散漫な礫群が知られるに留まる。この礫群の散漫さは、1つの地域的特色である可能性が高い。火処と礫群の関係、礫群の機能との関係を考慮しなければなるまい。

土壙は、1基のみが礫群の東南方向で検出された。浅い皿状を呈する。土壙の機能は、墓または貯蔵穴、またそれ以外の機能などに、特定することはできないが、礫群以外の施設が配置されていることは、上位文化層での居住形態がある程度時間的に安定していたことを示すと考えられる。

礫群と土壙の空間的位置関係は、上位文化層全体での石器類分布と、個々の遺構の機能的側面の両面から検討する必要がある。(山口)

## 第2節 上位文化層の遺物

### 1. 石 器

上位文化層の石器類には、原位置を保って発掘された石器類、合計524点がある。この他に、本来下位文化層の所属でありながら上層に遊離していたものが合計279点、あげ土中などで採集された、本来の土層は推定できるものの位置の確認できないものが約20点がある。内訳は、角錐状石器 (kaku、同末製品 kaku-i)・ナイフ形石器・搔器・削器・楔形石器などの定型石器、加工痕有剥片・使用痕有剥片、礫器、剥片、碎片、石核などからなっている。第83表に原位置を保って発掘された石器類の内訳を提示する。個々の石器器種の記載に入る前に、資料の扱いについて基準を決めておきたい。石器類の形態・剥片剥離技術などを記述する資料として、この原位置を保ったものを扱い、表採・遊離品については、図示するに止める。なお、遺物の分布構造を検討する資料としては、上層で原位置を保った合計524点の資料のみをもとに分析を進めたい。

板井寺ヶ谷遺跡上位文化層の石器類は、チャート・サヌカイト・鉄石英・凝灰岩・頁岩・黒水晶などの石材が使用されている。量的にはチャートとサヌカイトが圧倒的である。点数比率では、ほぼサヌカイト8：チャート2となっている。チャートは堆積岩でサヌカイトは火山岩であり、産出条件が大きく異なる。後で順次検討して行くが、サヌカイトとチャートなど他の石材を分けて観察した場合、岩石学的相違に止まらず、考古学的にも大きな違いが存在する。記述と論点を鮮明にするために、個々の石器器種を記述する場合、両石材製の石器を分離して記載する場合があることを断わっておきたい。なお、サヌカイトの産出地は、第七章第8節の藁科・東村の分析結果にあるように、約90%が二上山産、約10%が岩屋産であるとされているが、岩屋産は下位文化層に所属する可能性が高い。(山口)

#### a. 角錐状石器 (第458・459・460図)

角錐状石器は、未製品と考えられるもの2点を含めて合計12点が出土しており、うち2点については整形時の剥片・碎片が接合する資料である。石材はすべてサヌカイトを使用している。

各資料の記述については、舟底形石器としてすでに汎西日本的視野から論じられている(松藤、81)ことから、型式分類にあたってはこれを基盤とするが、ここではあらたに甲板面加工を施す2類型を追加した6類型を次のとおり設定し、それぞれの分析をおこなう。

- I a類 背面側の整形および調整は、甲板面の両側縁からおこなわれ、さらに背面中央を縦に走る稜部からも器身を薄くするための頻繁な調整剥離(稜上調整)が施される。
- I b類 背面側の整形・調整は甲板面の両側縁からおこなわれ、原則として稜上調整を施さない。
- II a類 背面側の中央に石核上で形成されたとみられる第一次剥離面(大剥離面)あるいは素材剥離時の主要剥離面が残存するもので、整形・調整は甲板面の両側縁からおこなわれる。身部中央の断面形が台形状を呈することが多い。
- II b類 背面に原礫面をもつ剥片を素材とし、その両側縁部に限って整形剥離を甲板面から施したもので、横断面が偏平な台形を呈する例が多い。

第83表 上位文化層石器類組成表(点数)

	TOTAL	サヌカイト製石器類											チャート等製石器類						礫石器類 CHOPPER	
		kaku	kaku-i	KN	piece	EN	SC	RF	UF	F	C	CORES	KN	EN	SC	UF	F	C		CORES
SITE	524	9	3	1	1	3	7	20	25	144	209	14	1	2	3	10	28	38	5	1

Ⅲ a 類 背・甲板面に整形および調整がおこなわれ、背面の整形・調整は甲板面側から、甲板面の整形・調整は背面側の両側縁からそれぞれ施される。

Ⅲ b 類 背・甲板面に整形・調整剥離がおこなわれるが、背面に石核上で形成された第一次剥離面（大剥離面）あるいは素材剥片剥離時の主要剥離面を残している。また、甲板面の整形・調整は一端のみで基部を意識させる。

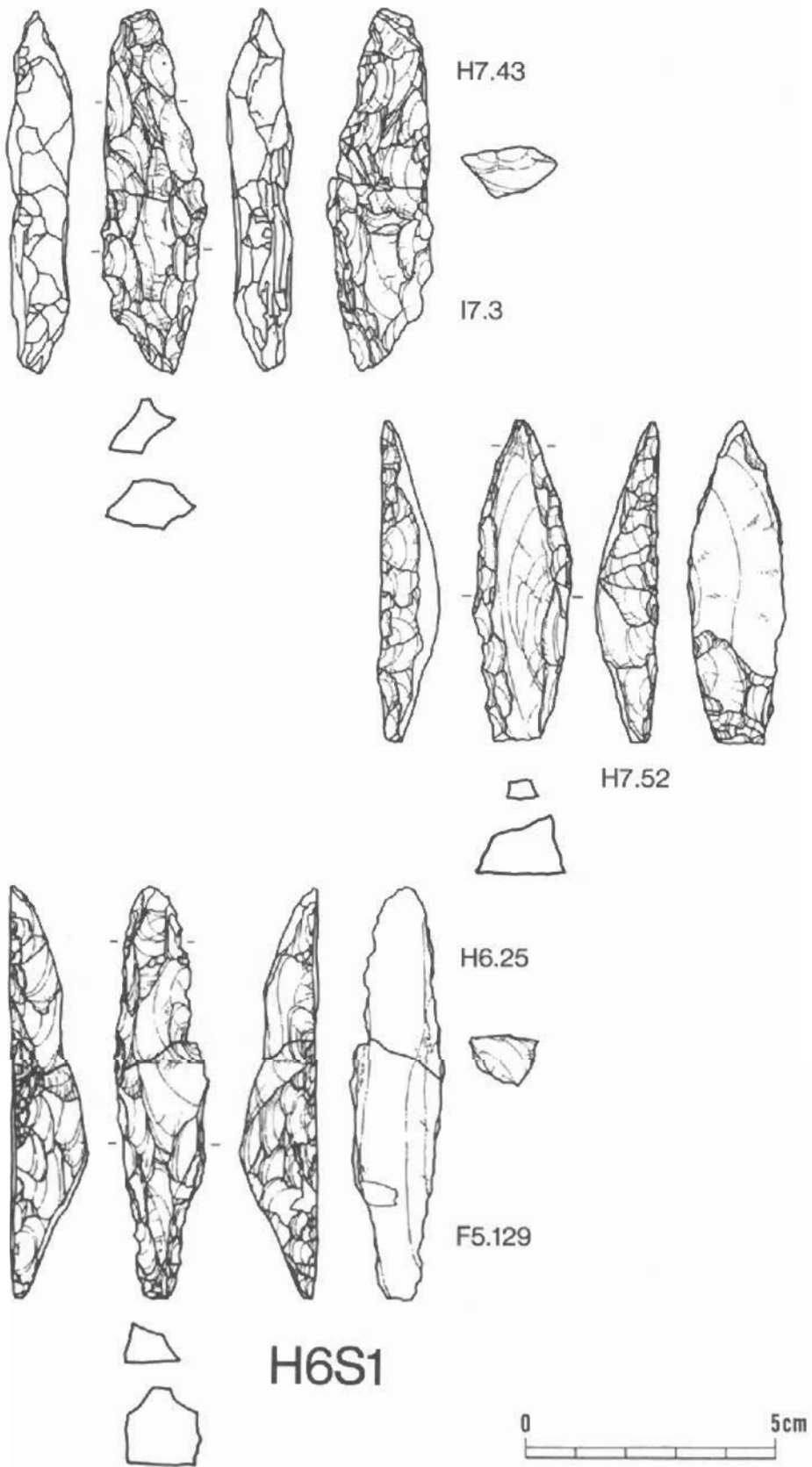
ここでは、I b、II a、Ⅲ a、Ⅲ b 類の 4 類が出土しており、以下に説明を加える。

なお、側縁調整角度（左・右）は最大値、先端・末端断面角度は甲板面と背面のなす角度、先・末端平面角度は両側縁のなす角度を示し、長・幅・厚は単位をmm、重量はgである。

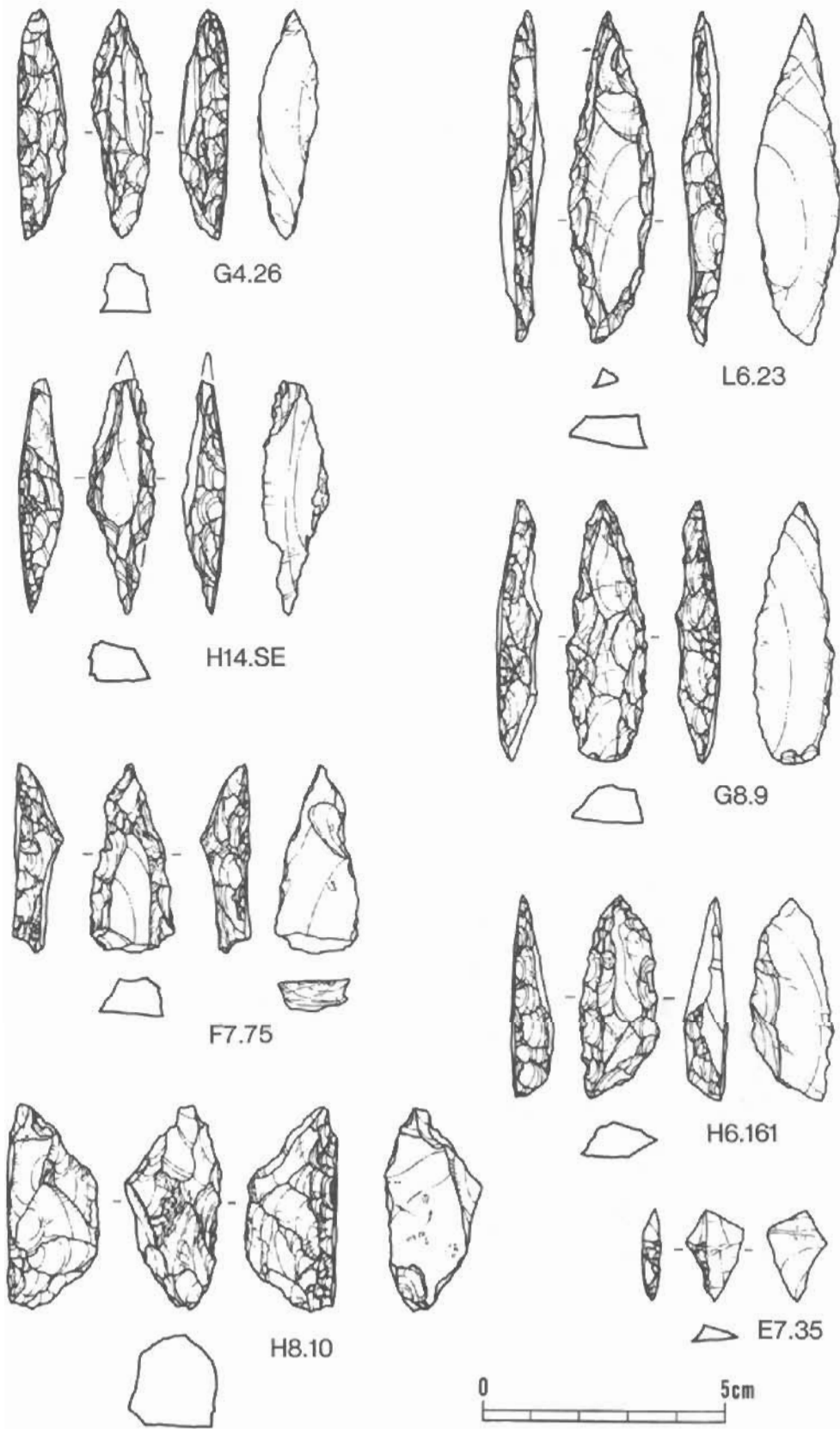
I b 類には、F5.129+H6.25、H8.10の 2 点がある。F5.129+H6.25は、背面全面に粗い調整がおこなわれ第一次剥離面は残存しないが器厚を薄くするための整形ではない。周縁部に細かな調整がおこなわれ、末端方で細さを呈している。側縁調整角度91度と103度を測り、横断面は器身中央部で五角形、先端部で台形を呈し、縦断面は山形となる。長82mm、幅18mm、厚15mm、重量19.5g。H8.10は、素材剥片の旧状を判定し得ないが、背面左側縁に器形調整に先立つ素材調整がおこなわれている。背面調整は粗いものの、右側縁には細かな調整がおこなわれる。側面調整角度107度と99度を測り、断面形は五角形となる。先端部に槌状剥離がおこなわれる。長42mm、幅20mm、厚19mm、重量16.9g。

II a 類には、G4.26、L6.23、H14.SE、G8.9、F7.75、H6.161の 6 点がある。素材剥片は全て横長であったと考えられる。背面には素材剥片剥離以前の第一次剥離面を有しており、その剥離方向は素材とはほぼ同一の方向を示すもののG4.26あるいはG8.9のように複数から構成される場合においては、必ずしも全ての面が同一とは限らないようである。

G4.26は、背面に第一次剥離面と思われる 2 面を残し、調整は甲板面側から99度と107度を測る角度をもってなされており、末端部に顕著である。このため横断面は五角形状となり、また先端に近い位置に最大幅12mmをおくため平面形は尻すぼまりの舟形を呈している。縦断面は半月状となっている。先・末端平面角43度と80度、先・末端断面角38度と59度を測る。長47mm、幅12mm、厚9mm、重量5.9g。L6.23は、背面に甲板面と同一方向からの加撃による 3 枚の剥離面を残しているもので、甲板面の剥離方向角は器長軸に直交する軸から5度振れる。背面調整は全周に施すが先端部は細かく、器身部では器形を整える粗い調整となる。調整角度は73度と85度を示す。平面形は、器中央のやや下方に最大幅17mmをもち、先・末端ともに尖りをみせ平面角33度と75度、断面角29度と15度を測る。厚さ6mmと薄く、偏平な台形の断面を呈する。長66mm、重量8.8g。H14.SEは、先端を欠損しており、現長48mm、幅14mm、厚9mmを測る。平面形状は左側縁が直線的な2側縁よりなり、右側縁は緩く外湾し、先・末端とも鋭く尖る細身の菱形を呈する。先・末端平面角はともに32度になろう。側縁調整は先端方と比較して末端方がより入念で、左側縁にノッチ様の調整がある。横断面は末端方で三角形となる。重量5.2g。G8.9は、背面に残る 3 枚の第一次剥離のうち中央面が素材剥離とは逆方向からの加撃による。平面形は左・右側縁がともに緩く外湾し、末端部が平坦でシメトリーとなる。先端平面角64度。側縁調整は全体に粗く、末端に調整はない。調整角度88度と89度。長さ53mm、幅16mm、厚9mm、重量8.2g。F7.75は、半分以上を折損する。背面の第一次剥離面は素材と同方向からの加撃による。側縁調整は先端方に細かい。もとはL6.23様の形状を呈していたのであろう。長(39mm)、幅17mm、厚7mm、重量5.7g。H6.161は、背面に素材剥離と同一方からの加撃による第一次剥離面を残す。側縁調整は右側縁の一部には施されないが、背面からの大きな剥離がある。このためか横断面は菱形様となる。長41mm、幅17mm、厚9mm、重量5.7g。

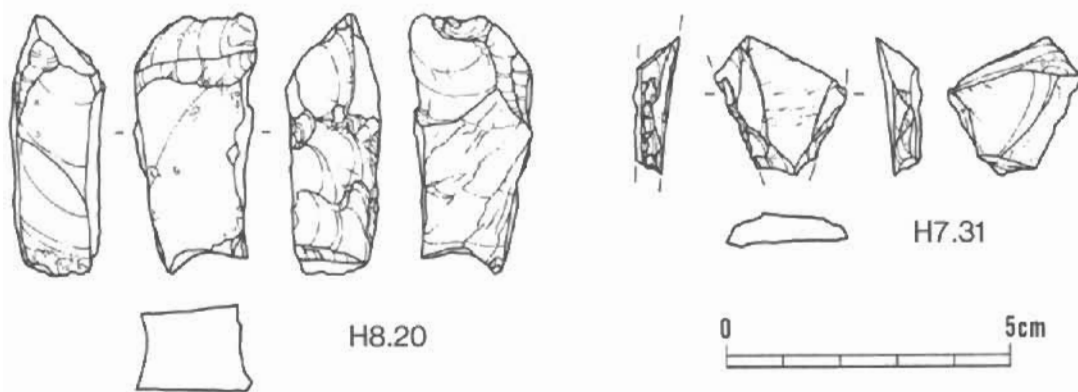


第458図 上位文化層角錐状石器実測図

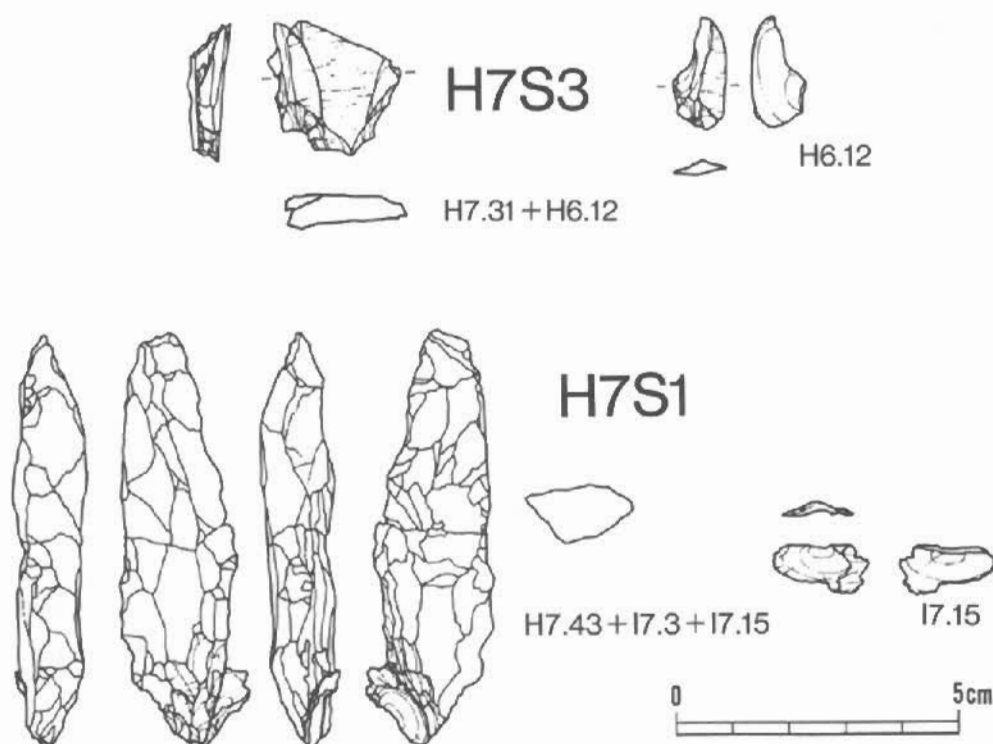


第459図 上位文化層角錐状石器・ナイフ形石器実測図





第460図 上位文化層角錐状石器未製品実測図



第461図 上位文化層角錐状石器・未製品接合図

III a 類はI7.43+I7.3の1点のみ認められる。両面の側縁にいたって粗雑な調整が施されるが、左平面図に現われている平坦面が甲板面。右平面図の器右に残る複数の面が第一次剝離面（背面）と理解できる。側縁調整は背面右縁に顕著でなく、他縁においても諸類型と比して粗雑で、緩やかな角度となる。最大角度は93度と92度を示す。端部の尖りは器幅の中心からはずれ、先端では二角のため末端の方が鋭いように感じられるが、測定値は先端50度、末端100度を測る。長75mm、幅22mm、厚12mm、重量19.3g。

III b 類はH7.52の1点のみ認められる。背面に素材剝離時に生じた主要剝離面を有する例で、調整は甲板面側から末端部を除く周縁に施されている。側縁調整角度は左右それぞれ90度と78度を測り、横断面は台形を呈する。先・末端断面はそれぞれ23度と97度で、器面中央を最高点とする。山形の縦断面形を呈する。甲板面側末端部には側縁からの調整があり基部の作出を意図していることが窺われる。長64mm、幅20mm、厚10mm、重量14.7g。

未製品 (第460図)

未製品と考えられるものには、H8.20とH7.31の2点がある。

H8.20は、横長剥片を素材とし、側面に3枚の大きな整形剥離をおこない、上端にも側面方からの細長い2枚の剥離痕を残している。現状での横断面は方形、縦断面は台形を呈する。整形初期に近い段階と推察するが、完成形態は、H8.20はI b類を呈することになろう。H7.31は、完成することなく破損したもので、残存率も少ないようである。厚5mmと比して薄いが、背面側縁辺には極細な調整がおこなわれる。また、整形剥片が接合する。完成形はII a類を呈することになろう。

接合資料 (第461図)

H7.43+I7.3に整形剥片 (I7.15) が接合する。この剥離とこれに続く剥離作業で器身は薄く細なり、末端部に尖りを生じる。

計測値 (第462図)

次に各資料から得られた計測値をグラフ化し、説明を行なう。●-I b類、▲-II a類、■-III a類、□-III b類を示す。

(素材)

H8.10 (I b類) を除くすべてが横長剥片素材または素材剥片を横長方向に使用している。

(長幅・幅厚関係)

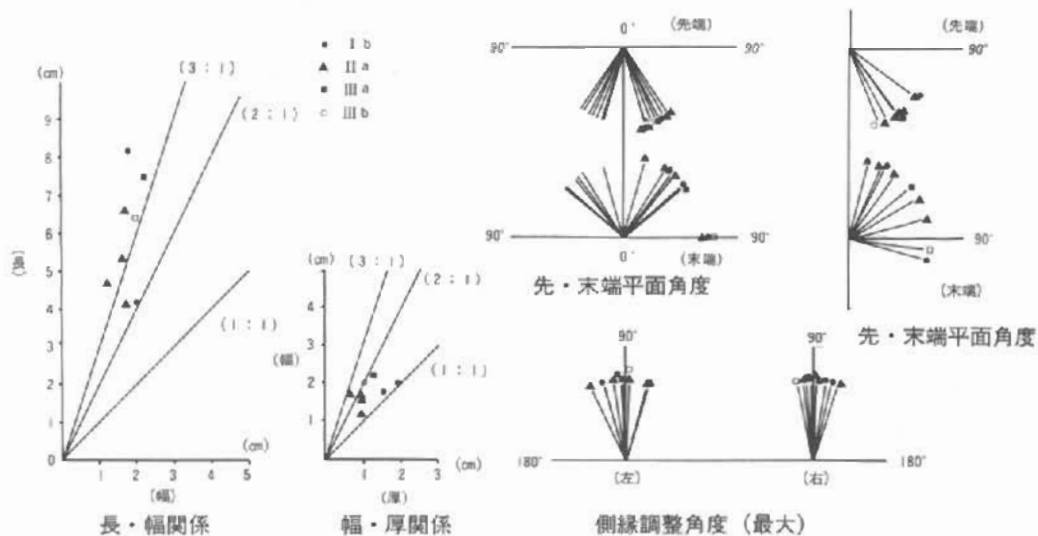
長82~41mm、幅22~12mmを計り、2:1~4:1の比を示している。特に3:1~4:1の範囲に収まる傾向にある。幅厚関係では、幅22~12mm、厚19~6mmを測り、1:1~3:1を示し、特に1:1~2:1に集中している。II a類は他類あるいは長・幅に関係なく比して薄く、10mm以下を示している。

(側縁調整最大角度)

左縁73度~116度、右縁78度~107度を測る。各類型とも左右対称的で、両側縁の調整角度には大きな差異はなく、側縁が鈍角のものは他側縁も鈍角、鋭角のものは鋭角となる。

(先・末端平面角度)

先端33度~70度、末端36度~100度を測る。II a類の一例を除いて、一般的に先端が鋭く末端が鈍い角度になり、先端部の方が比較的まとまりを示す傾向にある。また、I b・II a・III b類に、末端



第462図 上位文化層角錐状石器計測値

が平坦を呈するものがそれぞれ1点ずつある。

(先・末端断面角度)

先端23度～55度、末端15度～105度を測る。先端は末端と比して緩やかでまとまった状況を示しており、55度・37度・38度には各2点ある。末端部は幅広い範囲内に均等なバラツキを示しており、I b・III b類には90度を超えオーバーハングするものがある。(國井)

#### b, ナイフ形石器 (第459図)

ナイフ形石器は、2点のみ認められた。E7.35は、サヌカイト製の小型剥片を素材とし、その打面部を表面からの加工によって除去するように背潰加工を施す。重量0.5g。もう1点、D5.3は、鉄石英製の縦長剥片素材でその1側縁全部と反対の側縁の打面部周辺に刃潰し加工を施すが、素材剥片の打面部を残す。技術的・形態的に下位文化層の浮き上がりと考えられ、上位文化層の組成とは考えにくい。

素材の形状・調整方法などで、下位文化層のナイフ形石器群、特にサヌカイト製のものと技術的に大きく異なる。上位文化層では、ナイフ形石器はこの2点のみであり、主体となる器種でないこと、技術的・形態的に従来のナイフ形石器と隔絶した感強い点も注意されよう。(山口)

#### c, 搔器 (第463図)

5点出土している。3点はサヌカイト製、残る2点はチャート製である。

素材剥片は、長幅比からそれぞれ縦長、横長、中間を設定しているが、縦長の素材は使用されない。打面は複剥離が2点、単剥離(原礫面)、欠がそれぞれ1点ずつである。ネガ面にはいずれにも素材剥離以前の剥離痕が認められる。H8.32は横長剥片石核から剥離された可能性が想定でき、またF8.23の場合、中間剥片剥離を意図したサイコロ状の石核から求められたもので、比較的剥片剥離初期に近い段階で剥離されたものであろうことが考えられる。

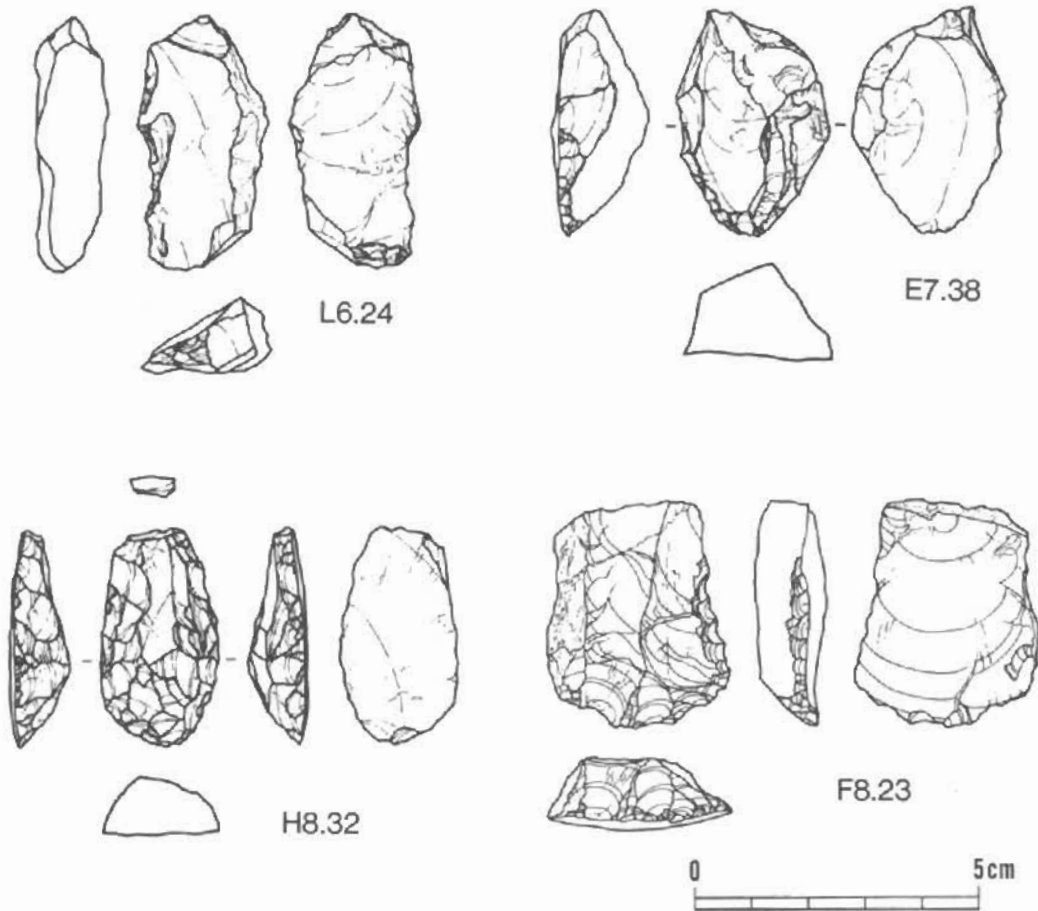
加工部位はE7.38、H8.32のように横長剥片を素材とするとき、末端縁辺と側辺および打面に器形調整を兼ねた加工が施されており、両辺が接するコーナーを刃部として機能させている。中間剥片を素材とした場合、末端縁辺に搔器としての主要な加工を行ない、側辺には連続する小剥離を施して削器としての機能を付加させている。加工は、どちらもポジ面から行なわれる。

器形および大きさを観察すると、刃部を下にして、この長軸を器長、これに直行する軸を器幅とした場合、法量としては器長が38mmから45mmの7mmの差内に収まり、また器幅では21mmから32mmの範囲で収まるようである。厚さについては、器長あるいは器幅の垂線の最大値を器厚としたとき、6mmから15mmの数値を得るが、これは長・幅との対比関係においては分厚であることを意味し、形態的にみると、平面観は“こちんまり”した縦長を呈するものの、立体観としては“ずんぐり”した感がある。また横長素材の場合、刃部平面観はV・Uを呈し、底面との刃部角は59度、68度。一方、中間素材ではUを呈し、70度、55度である。

以下に、図示した4点について説明する。

L6.24は中間剥片を素材とし、末端部にポジ面側からの調整によって刃部を作出している。刃部角は70度とかなり急である。左側辺には、ネガ・ポジ両方向からの調整によって刃部を作出し、刃部角は40度以内に収まる薄い刃縁を形成する。削器としての機能を指摘できる。サヌカイト製。

E7.38は横長剥片を素材とし、剥離主軸末端縁辺と右側辺にポジ面からの調整によって刃部を作出している。末端の調整は左部が大まかな器形調整に留まり、右部とこれに続く側辺には微調整剥離が施され刃部をなす。刃部平面観はV字を呈し、器裏面との刃部角59度を測る。サヌカイト製。



第463図 上位文化層擲器実測図

H8.32は横長剥片を素材としポジ面、ネガ面の一部と欠損部を除く全周・面に器形調整を施しており、刃部はこの外湾短辺に微調整剥離を加えることによって作出している。刃部角68度を測る。形態的には断面形も台形を呈することから角錐状石器としての類似性を指摘できるが、この場合明瞭な先端(尖端)が見出せず、また側辺の調整剥離角度も比して緩やかであり、刃部に観察できる微細加工は、角錐状石器には見られないものである。平面観からしてこれを基部として捉えようとしてもこのような入念な加工を行なう角錐状石器は、少なからずこの遺跡では類例を求められない。サヌカイト製。

F8.23は原礫面を打面として剥離された中間剥片を素材とするが、ネガ面に素材と同一方向の剥離痕を2枚遺し、また左側部にも原礫面を有することなどから、サイコロ状の石核から剥片剥離初期の段階で得られたことが判る。素材の末端縁辺に、ポジ面側からの粗い加工を施した後、再び刃縁に微細加工を行なって刃部を完成させている。刃部角は比較的緩やかで、55度を測る。右側辺には、ポジ面側からの安定した連続する小剥離によって刃部を形成し、削器としての機能を付加している。チャート製。

(國井)

## d, 削器 (第465図・第466図)

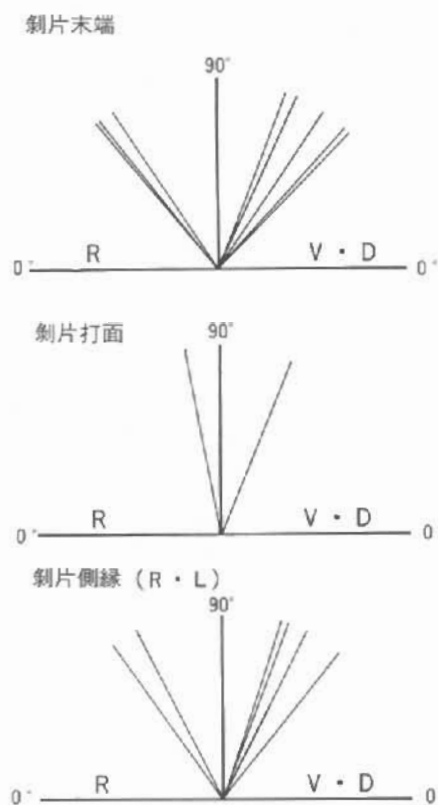
上位文化層の石器群を窺い見ると、石器出土総数の中でも加工痕有剥片や使用痕有剥片などの不定型石器を除いたなかでは、角錐状石器と共に主要石器としての位置を占めている。しかし、その総数10点という数は石器組成の2パーセントにも満たないもので、またその抽出にあっても、素材の側辺や打面あるいは端部にほぼ完全に調整を行なったものを認定したことなどから、削器として取り扱うには不確実なものや、搔器あるいはこれを兼ね備えた機能をもつものが含まれる可能性も考えねばならない。ここで削器として取り上げたものを観察すると、形態分類は資料数の関係から明確化させることは困難を極めるといふしかなく、あえて危険な作業を行なうことよりも、個々の要素に注目しその事実関係のなかにおいて比較検討を行なう。ちなみに、K6.29、F8.30はチャート製、残る8点はサヌカイト製である。

まず素材剥片であるが、長幅比において1.5:1を縦長、1:1.5を横長、そして両者間にはさまれるものをいまかりに中間とした場合、K6.29が縦長、K6.28とI7.7が横長としてあてはめられ、残る7点については中間とされる。これら素材剥片剥離にあつては、ネガ面の剥離痕や打面の形状また剥離痕から、あらたまって石核上での剥離作業面や打面の調整は行なわれなかったものと考えられる。

次に加工部位とその剥離方向では、素材の打面部を上、またネガ面を表にしたとき、右・左側辺と末端に加工を行なうH8.7、K6.29があり、側辺の加工は前者では表裏両面加工である。左右側辺と末端部に加工を行なうものにはK6.28、I7.7、F5.4の3点が挙げられ、I7.7の場合、左側辺から末端部にかけて両面から加工が行なわれ、右側辺には裏面から加工を行なう。残る2点については、すべて裏面からによるものである。末端部のみに加工を行なうD5.1、I8.6では、横長剥片石核を転じたI8.6のみが表面から調整が加えられている。打面部のみに加工を行なうF8.30は表裏両方向からの加工である。末端部と打面に加工を行なうG8.30では、表面から末端部縁辺の全てに加工が行なわれている。

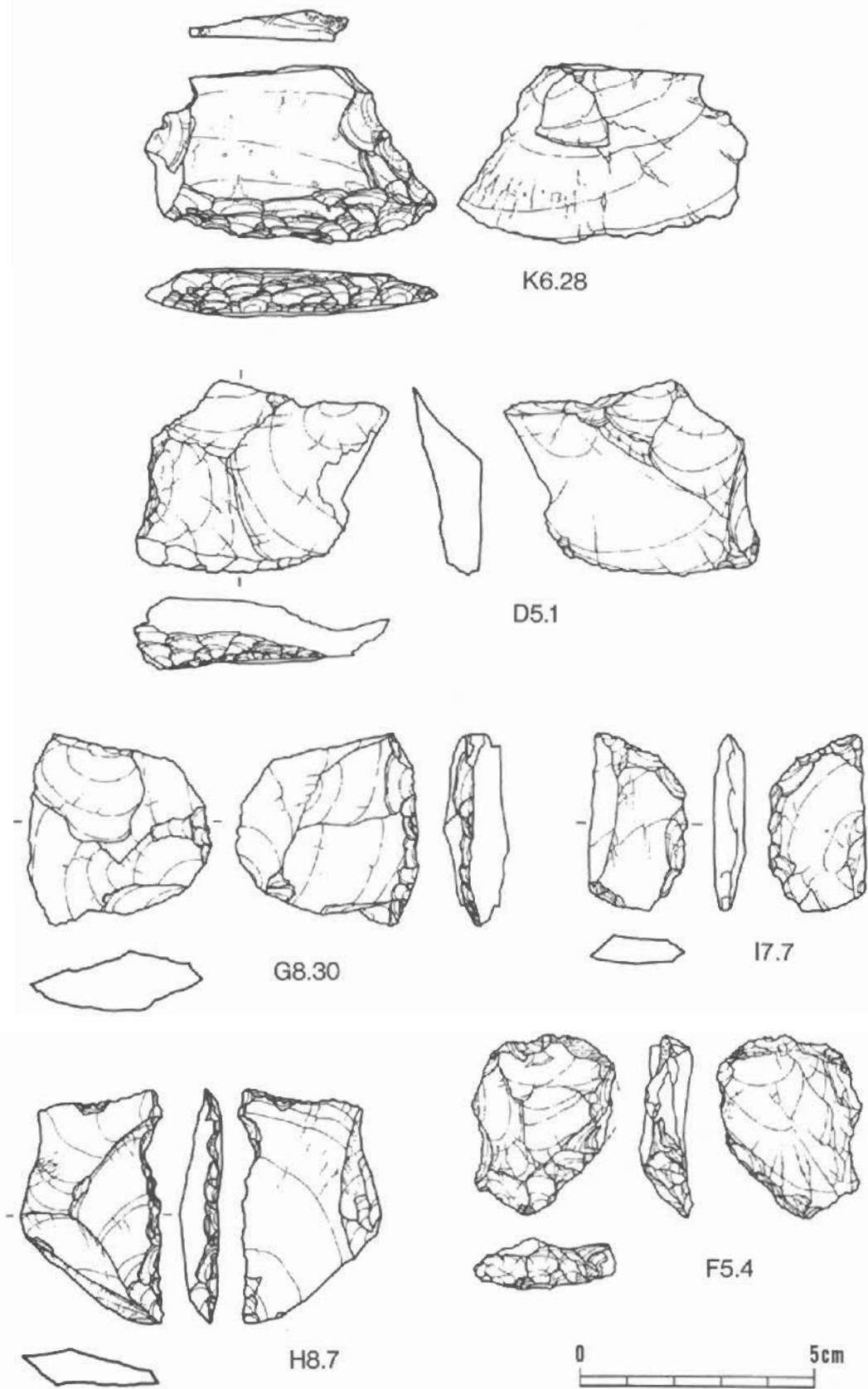
各加工部位の刃部角をみると、総数19ヶ所のうち最も加工数の多い末端部では、表あるいは裏からのみの場合、69度を最大としての最小の46度までの比較的狭いなか収まる。両面からの場合もこの範囲に収まり、特に緩やかな部分によつては、側辺では、88度から51度と範囲が広がり鈍角になる傾向が窺える。この場合、両面から加工を行なったものについても末端部と比べて鈍角になるようである。打面では、両方の場合についていずれも鈍角になるようである。資料数に限りがあるため絶対的な傾向とはならないが、末端縁辺の角度が緩やかであるのに対し、打面方向に向かうにつれて徐々に急くなる傾向にある。このことは、一定の安定した刃部を求めるといふ行為がはたらいしているものとは理解しがたい。加工の結果を素直に受け入れた格好のようであることが考えられるが、逆に使用対象物の違いによる加工部位や加工法の選択ともとれるが、この場合使用痕の詳細な観察や分析を通じて考えねばならないであろう。

以下に、図示したもののうち6点について説明を行なう。

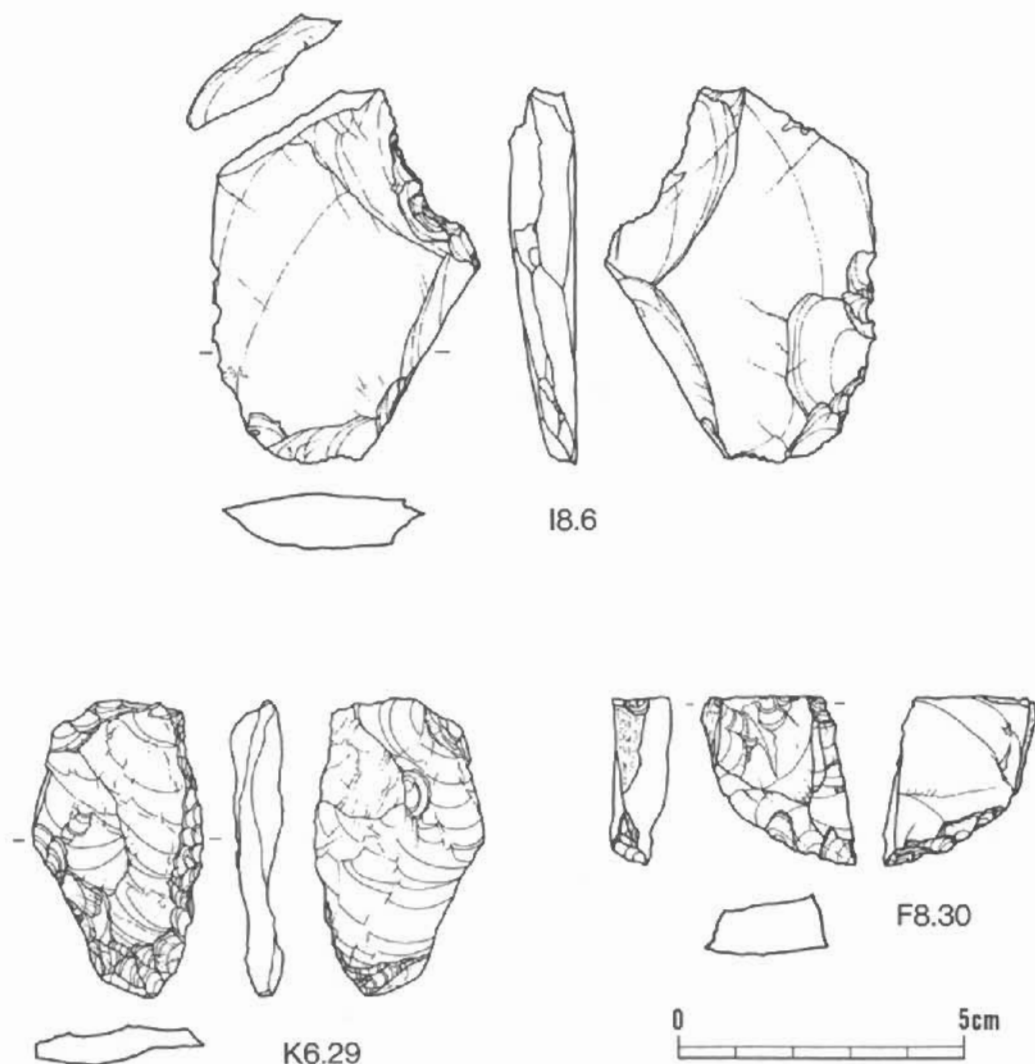


第464図 上位文化層削器加工部位別刃部角

第2節 上位文化層の遺物



第465図 上位文化層石器実測図1



第466図 上位文化層削器実測図2

K6.28は横長剥片を素材に用い、素材の剥離主軸の末端縁辺と左側辺にポジ面側からの調整によって刃部を作りだしている。このため器背面の右側辺端部は、錐状の尖りを呈している。複合石器としての機能を有する可能性が指摘できよう。

D5.1は中間剥片を素材に用い、素材の剥離主軸の末端縁辺にポジ面側からの調整によって、刃部を作りだしている。刃部角は69度とかなり急激であり、また微細剥離痕の存在から、刃部再生が行なわれたことが窺える。素材の打面部には大きな複数の剥離痕が認められるが、ネガティブバルブは除去されており、素材剥離のために用意されたものでないことが判る。器背面には、剥離方向を異にするネガ面が3枚認められる。

G8.30は中間剥片を素材に用い、素材の剥離主軸の末端縁辺にはネガ面側から、打面にはポジ面側からの調整によって刃部を作りだしている。器整形が行なわれたらしく、器腹面には大きな剥離面が認められ、素材剥片のポジ面には残らない。

F5.4は中間剥片を素材に用い、素材の剥離主軸の末端縁辺と両側辺にポジ面から刃部を作りだしている。掻器の機能が考えられる。素材の剥離に際しては、打面調整を行なっている。

K6.29は縦長剥片を素材に用い、左右両縁辺に連続する細かい調整剥離を行ない刃部を形成する。左刃

第84表 上位文化層の削器素材剥片の打面

	単剥離	複剥離	点	原礫
合計6点	1	3	1	1
%	17	50	17	17

第85表 上位文化層の削器加工部位

	左または右側縁	左と右側縁	末端	打面	打面と末端
合計10点	2	3	3	1	1
%	20	30	30	10	10

第86表 上位文化層の削器加工部位別調整剥離方向

	左側縁・右側縁	末端	打面
腹面→背面	6	4	1
背面→腹面	0	2	0
両面	2	3	1

部にあつてはこの調整によって内湾する。器腹面末端部には、左方向からの縦長剥離痕が認められ、またその上方にみられる微細剥離痕と合わせ、使用によって生じたものと考えられる。素材剥片剥離後、打面部にポジ面側から整形剥離が行なわれている。

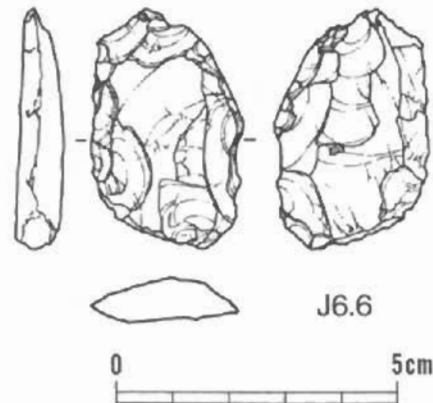
F8.30は中間剥片を素材に用い、打面方向部にネガ・ポジ両面から刃部作出の調整を行なっている。

(國井)

#### e, 楔形石器 (第467図)

楔形石器は、1点が出土している。J6.6は、サヌカイト製縦長の剥片素材の周囲を加工し、その両小口部に機能面を配し、上下両方向からの加撃を行なったもので、上部裏面には薄い破砕面が形成されている。下部小口部には、やや平坦となり、加撃痕が認められる。

(山口)



第467図 上位文化層楔形石器実測図

#### f, 加工痕有剥片 (第468図・第469図)

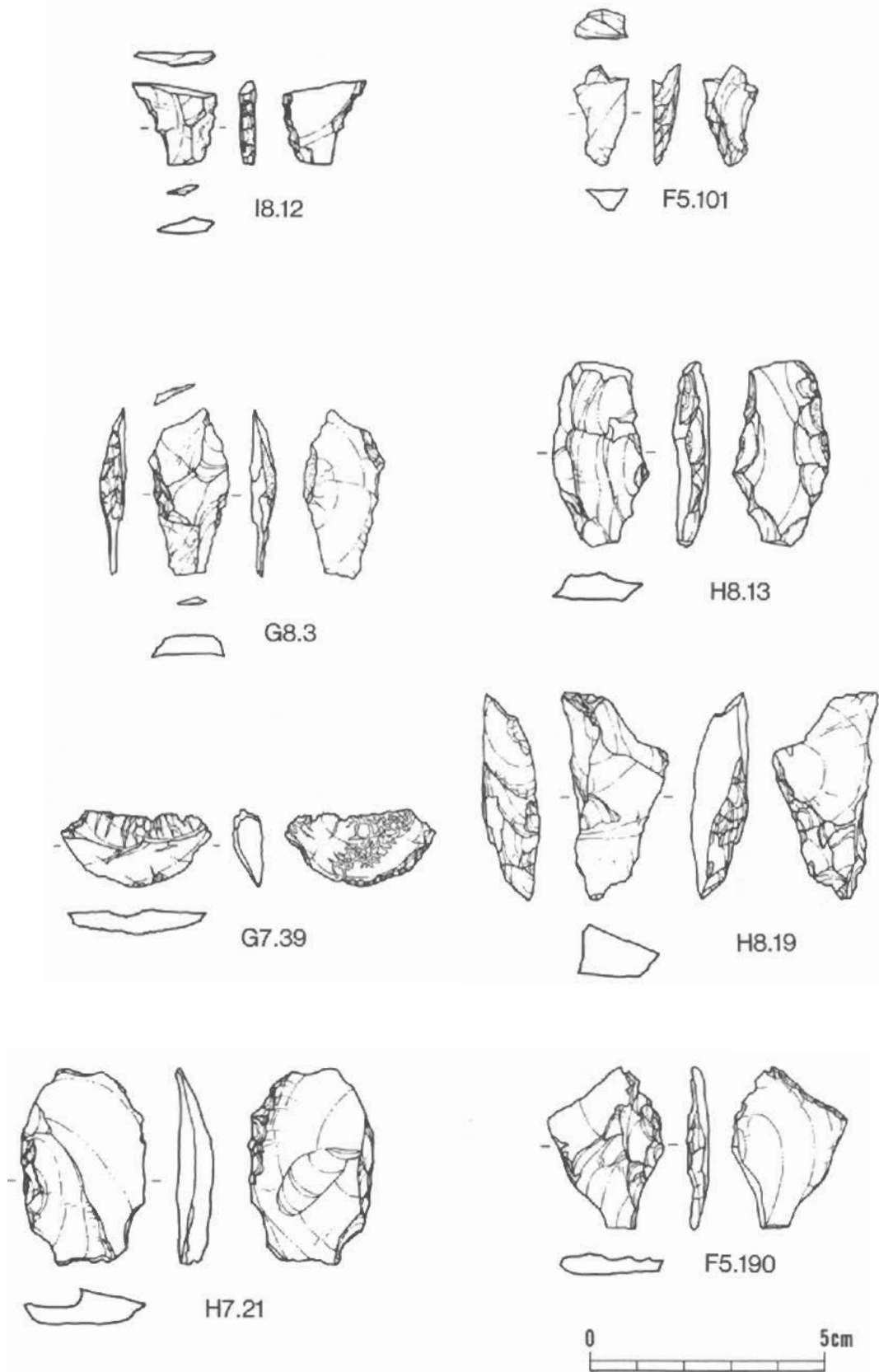
サヌカイト製が20点出土したが、チャート製は出土しなかった。本器種の認定方法は『寺谷遺跡』(鈴木編

80)、『広野北遺跡』(山下編 85)に準拠している。ここでは20点中15点を図示した。

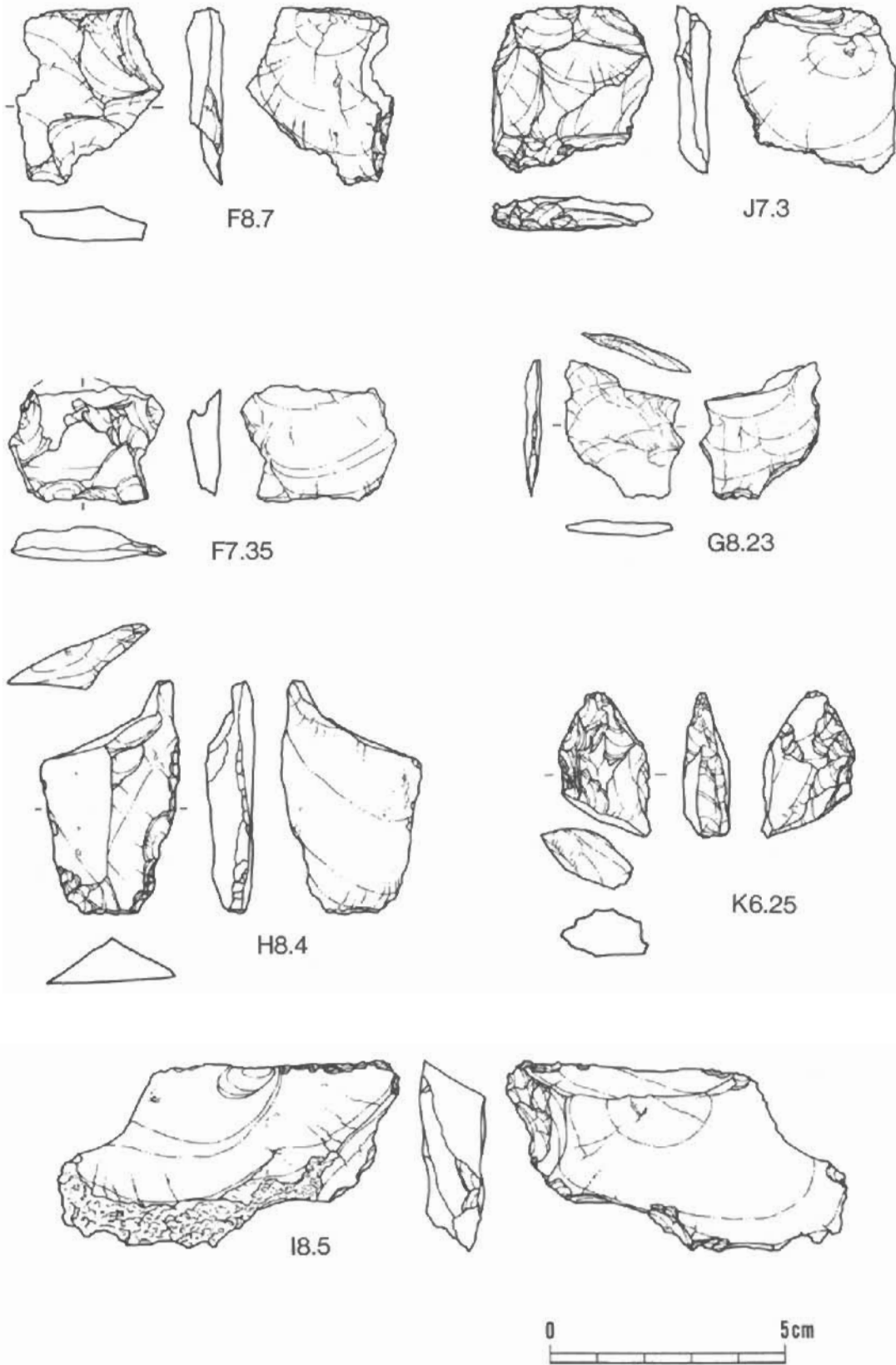
I8.12、F5.101は背面から、G8.3は背腹両面から調整を施す。これらはナイフ形石器に近いものである。H8.13は横長剥片の打面を除去し、腹面の末端部にも平坦な剥離を行なう。本来、形態は尖頭状を呈していたと考えられる。G7.39は背腹両面とも受熱して、あばた状を呈す。末端縁に微細な剥離痕を残すが、使用痕の可能性はある。H8.19は厚めの剥片の大部分を主に背面から調整している。H7.21は蝶番状の末端部の腹面側に二次加工を施す。F5.190は末端から側縁にかけて細かな加工痕を留める。F8.7は腹面の側縁に、J7.3、F7.35はともに背面の末端に二次加工を施すもので、削器・搔器に近い。G8.23は折り取りを中心とした調整を行なっている。H8.4は縦長剥片の原礫面を残す末端よりの左右両側縁に調整を施す。K6.25は形態が尖頭状を呈し、意図的に尖頭部が作出された可能性をもつ。I8.5は大型の横長剥片の側縁に調整を行なう。

以上、個々の石器の特徴を述べた。これらの石器は全体として形態的・技術的斉一性に欠けるが、個





第468図 上位文化層加工痕有剥片実測図1



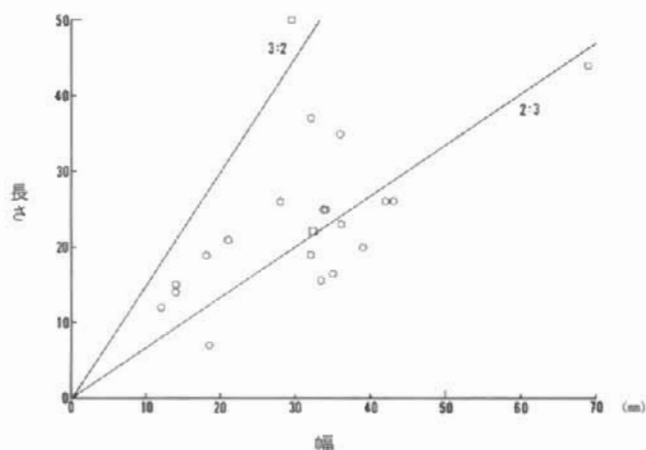
第469図 上位文化層加工痕有剥片実測図2

別的にはナイフ形石器・搔器・削器などに近いものである。長幅関係の分布(第470図)については、二次加工痕有剥片が技術形態学的にも機能形態学的にも、定義され得ない曖昧な器種であるため、その有効性に疑問が残るが、一応掲載しておいた。

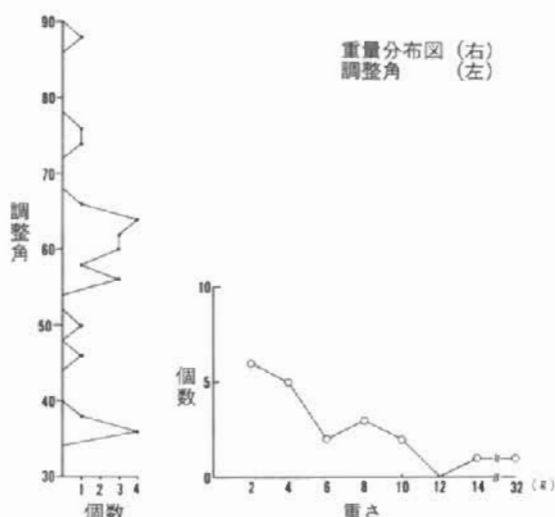
調整角の分布(第471図左)をみると、35~38度、55~66度の2か所にピークが存在しており、これが調整部位の機能の違いを反映しているのかもしれない。35~38度の方はその範囲に、ナイフ形石器・搔器・削器に近い石器の調整角が分布しないことから、使用痕の剝離角の可能性がある。

次に重量の分布(第471図右)であるが、2g未満が最も多く、2g以上4g未満がそれにつぐ。18.5が31.6gと最も重い。平均重量は5.7gである。

既に述べたように、加工痕有剥片は形態的・技術的斉一性に欠け、機能を断定できない。しかし、ナイフ形石器・搔器・削器に近いものは、それぞれの器種と同じような機能をもっていたと思われる。ただし、厳密な意味で加工痕有剥片の一点一点が、定型的な石器のどの器種に対応するかは、顕微鏡による使用痕分析のようなマイクロな分析で検証される必要がある。(久保・佐田)



第470図 加工痕有剥片長幅比(サヌカイト) □=平均値



第471図 加工痕有剥片計測グラフ

g, 使用痕有剥片(第472図・第473図・第475図・第476図)

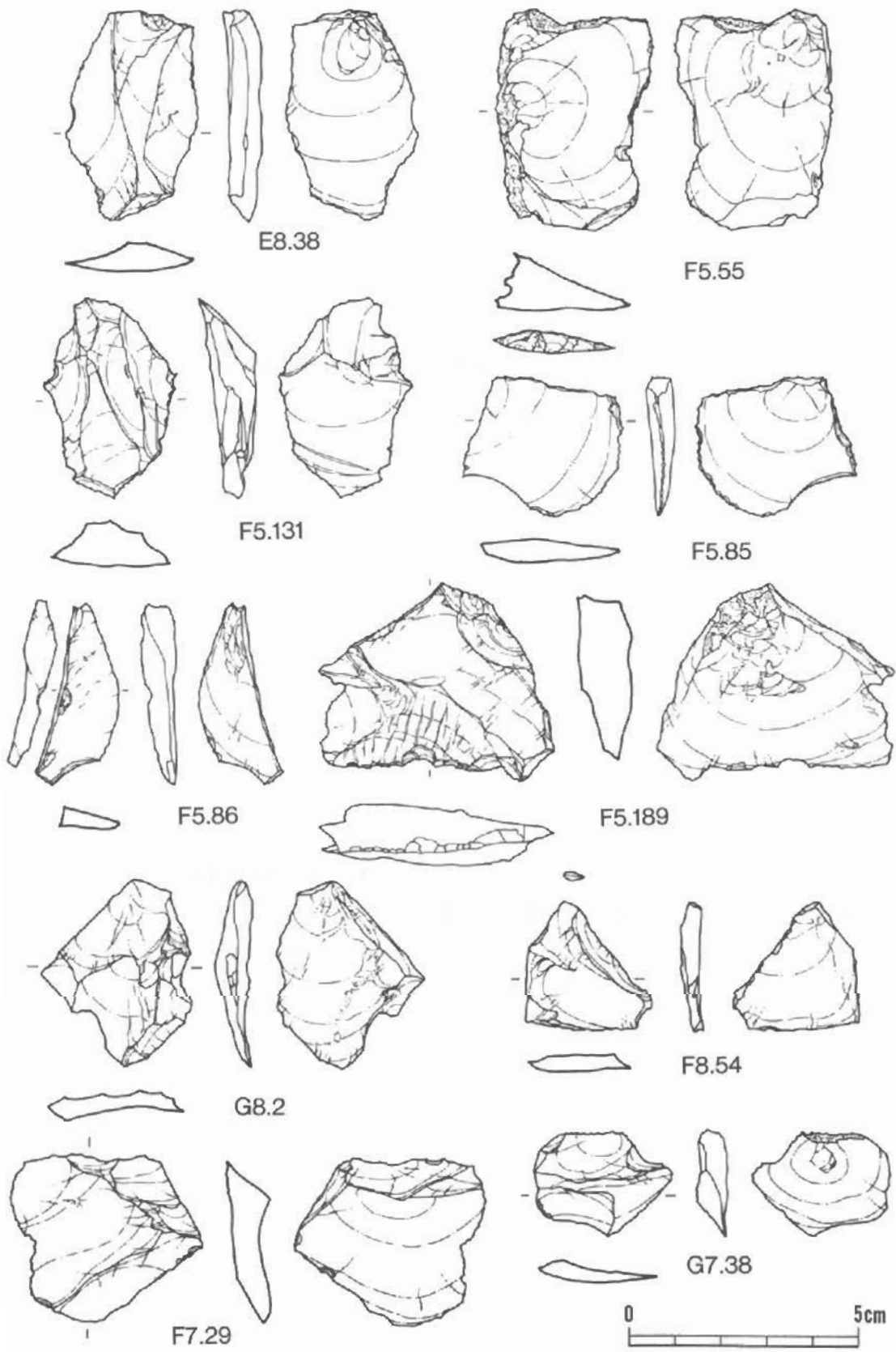
サヌカイト製が25点、チャート製が10点あわせて35点が出土した。出土点数が少ないため、分析結果の当否に不安を残す。分析・検討については、下層の使用痕有剥片の項を参照していただきたい。

サヌカイト製は縦長剥片1点、横長剥片9点、これらの中間的な形態を呈するもの(以下、中間剥片と称す)14点、判定不能な剥片1点である。一方、チャート製は中間剥片9点、横長剥片1点となる。剥片の各形態の認定基準は、原則として現存値の長幅比に基づいている。縦長剥片は長幅比1.5以上、横長剥片は長幅比0.67以下で、中間剥片は長幅比0.68以上1.5未満のものである。ただし、折れ部を推定復元できるものについては、剥片の原形を想定して分類している。よって、長幅比で中間剥片であっても、折れ部を推定復元することで縦長剥片に分類することもあるわけである。

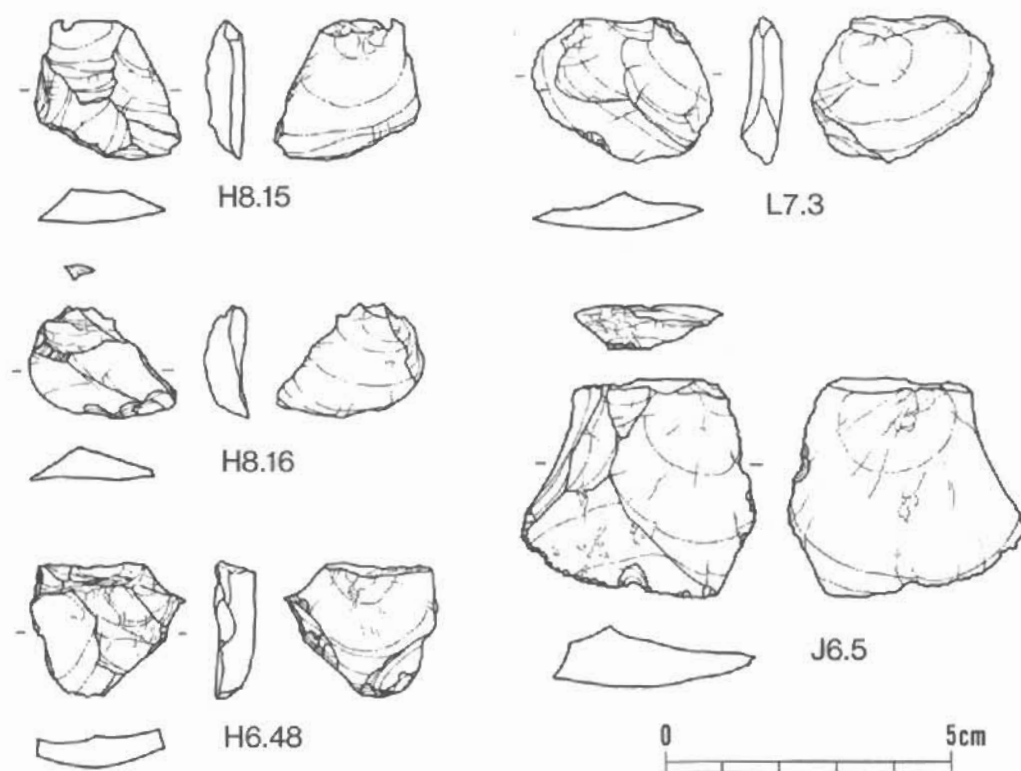
ここで主な使用痕有剥片について若干の記述をしておきたい。L7.3、J6.5(第473図)はともに背面の下方にポジティブな剝離面をもつ。F8.9(第475図)は背面の大部分がポジティブな剝離面で占められ、打面縁には細かな調整が施されている。打撃点から半分に折れている。このような、背面にポジティブな剝離面をもつ剥片の検討は、下位文化層出土の使用痕有剥片の項で行なっている。

長幅関係(第474図)をみると、サヌカイト製はチャート製に比べて、剥片の大きさの斉一性に乏しい。

第2節 上位文化層の遺物



第472図 上位文化層使用痕有剥片実測図1



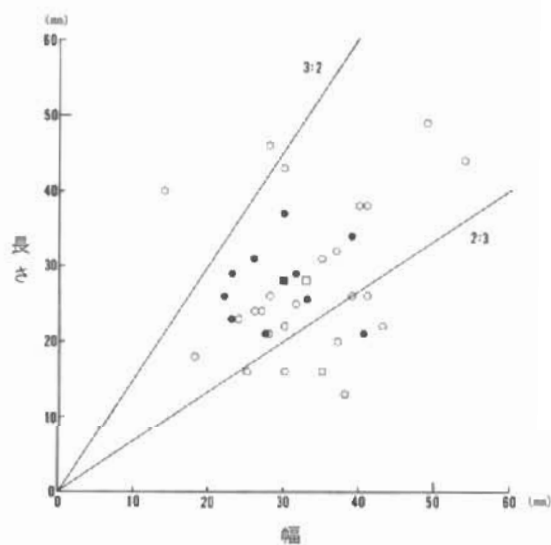
第473図 上位文化層使用痕有剥片実測図 2

長さ・幅の平均値は、サヌカイト製で長さ28.0mm、幅33.2mm、チャート製は長さ・幅とも20~40mmの範囲におさまり、平均値が長さ27.7mm、幅29.7mmである。サヌカイト製については、下層出土の使用痕有剥片とはほぼ同じ数値を示す。

重量の分布に関して2g単位でグラフ化した(第477図左)。サヌカイト製は下層出土の使用痕有剥片同様に、2g以上4g未満が最も多い。また、10g以上のものも比較的多く存在する。平均重量は6.4gである。チャート製は4g以上6g未満にピークがある。サヌカイト製とは異なり10g以上のものは存在しない。平均重量は5.3gと、下層出土の使用痕有剥片のそれと比べてかなり軽い。

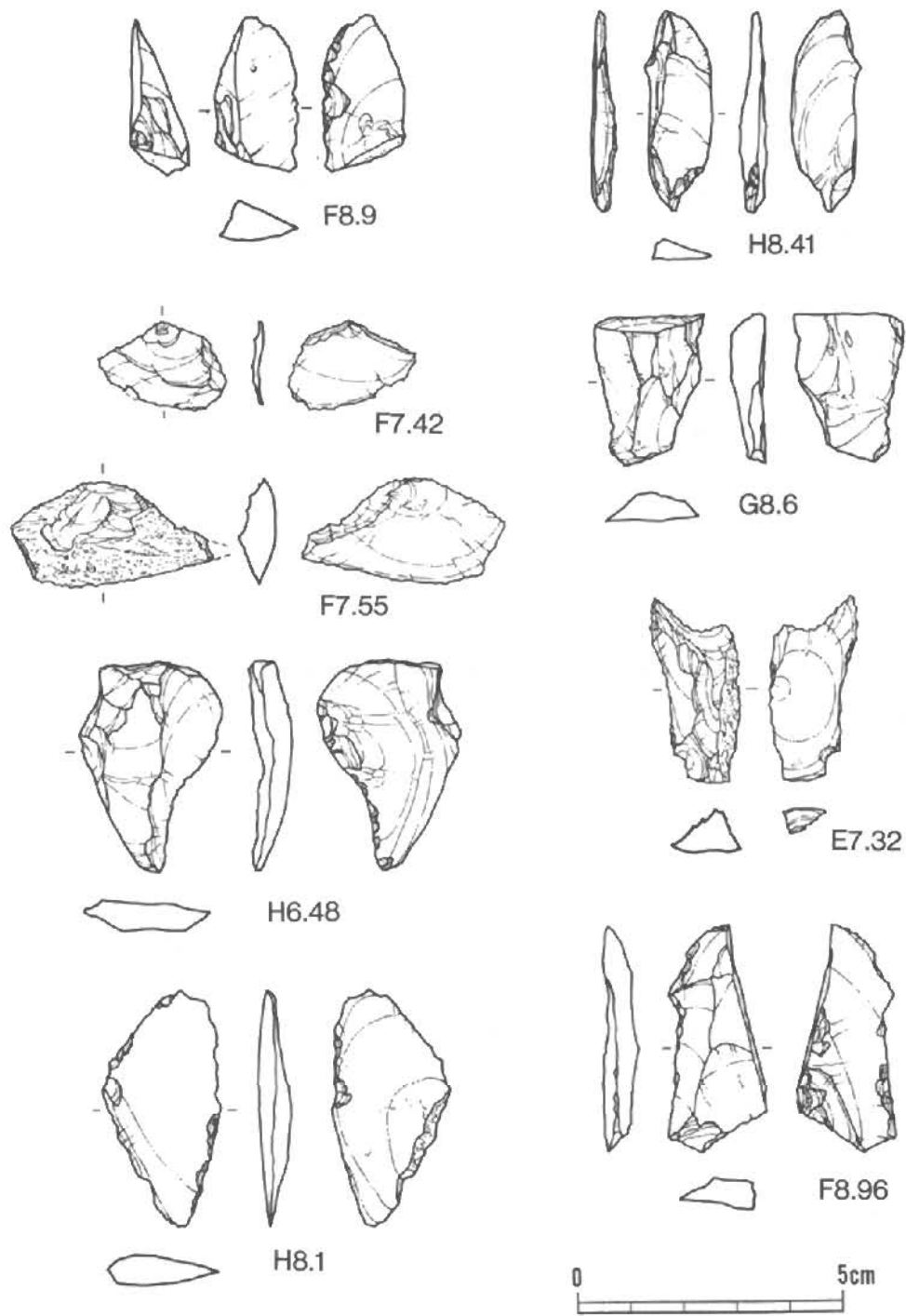
サヌカイト製の打面を残置する16点を対象として、形態別に剥離角を1度単位で計測し、2度単位でグラフ化した(第477図中)。縦長剥片1点が99度、中間剥片12点が平均値117.1度、中間値118.5度、横長剥片3点が平均値117.3度、中間値115度で全体の平均値は116度となった。中間剥片を例にとれば、剥離角は一定の範囲に集中分布することなく、広範囲に平たく分布する。また、図にはないがチャート製の7点についても計測を行なった。中間剥片6点が平均値107.7度、中間値112度、横長剥片1点が118度という結果である。

第477図右は使用痕を留める部位の刃部角の分布を2度単位で表したものである。部位は末端縁・左右

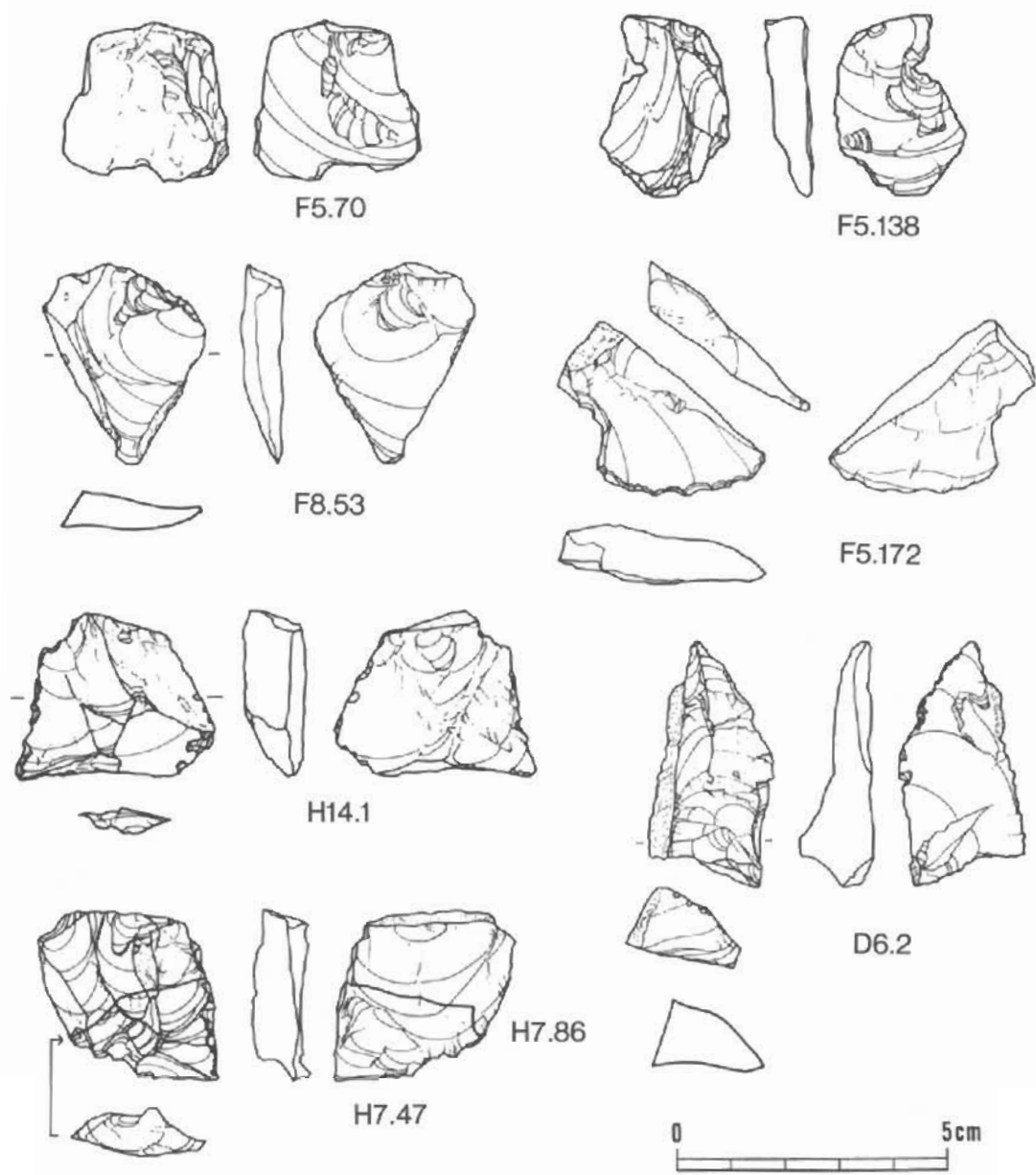


第474図 使用痕有剥片長幅比

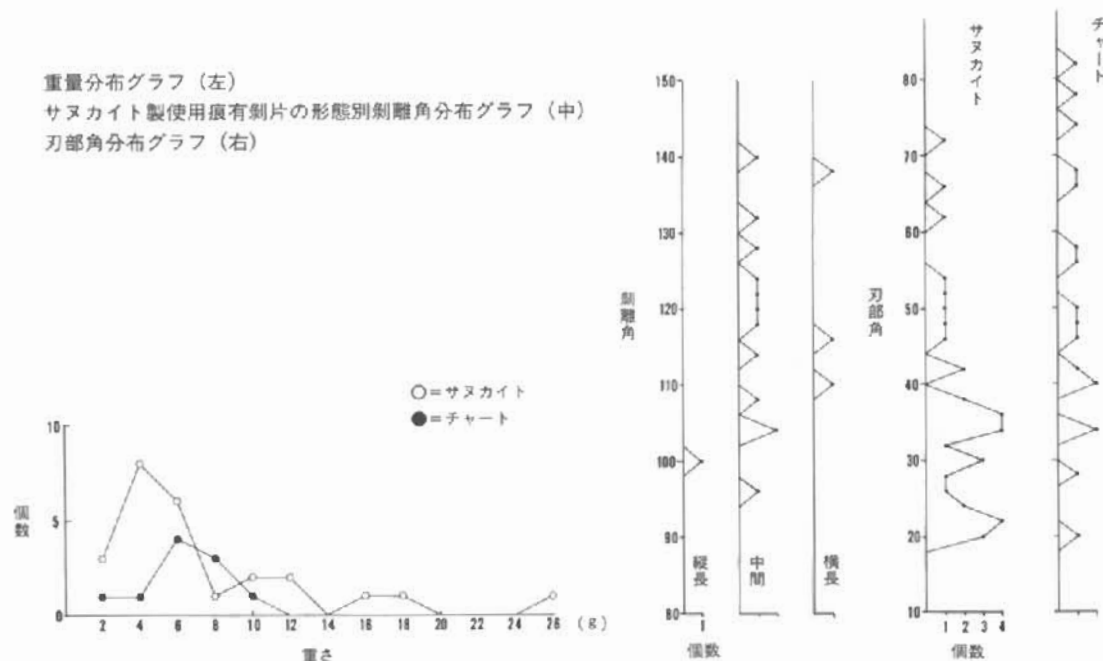
○=サヌカイト(□=平均値)、  
●=チャート(■=平均値)



第475図 上位文化層使用痕有剥片実測図3



第476図 上位文化層使用痕有剥片実測図4



第477図 使用痕有剥片計測グラフ

両側縁・「その他」の3つに分けて平均値・中間値を出した。「その他」とは打面縁や打面側の折れ面縁を示す。図は3つの部位の刃部角をあわせて作成した。サヌカイト製では計35辺に使用痕がみられた。刃部角は概ね20～40度にまとまる傾向がある。末端縁に使用痕を残すのは11辺で、平均値37.4度、中間値36度、左右両側縁は21辺で平均値31.7度、中間値30度、「その他」は3辺で平均値56.3度、中間値50度であった。そして全体の平均値は35.6度である。チャート製では使用痕が計17辺にみられる。刃部角は概ね20～80度の広範囲に平たく分布する。末端縁に使用痕を留めるのは計5辺で、平均値50.4度、中間値42度、左右両側縁は11辺で平均値47.4度、中間値47度、「その他」は1辺で82度となり、全体の平均値は50.3度である。また、「その他」を除外しても平均値は48.3度と高い。

サヌカイト製とチャート製のあいだには、刃部角の平均値において約15度の開きがある。これは異質な石材を用いて展開される剥離技術が双方で異なるため、生産される剥片の刃部角も必然的に違ってきたものと思われる。

(久保・佐田)

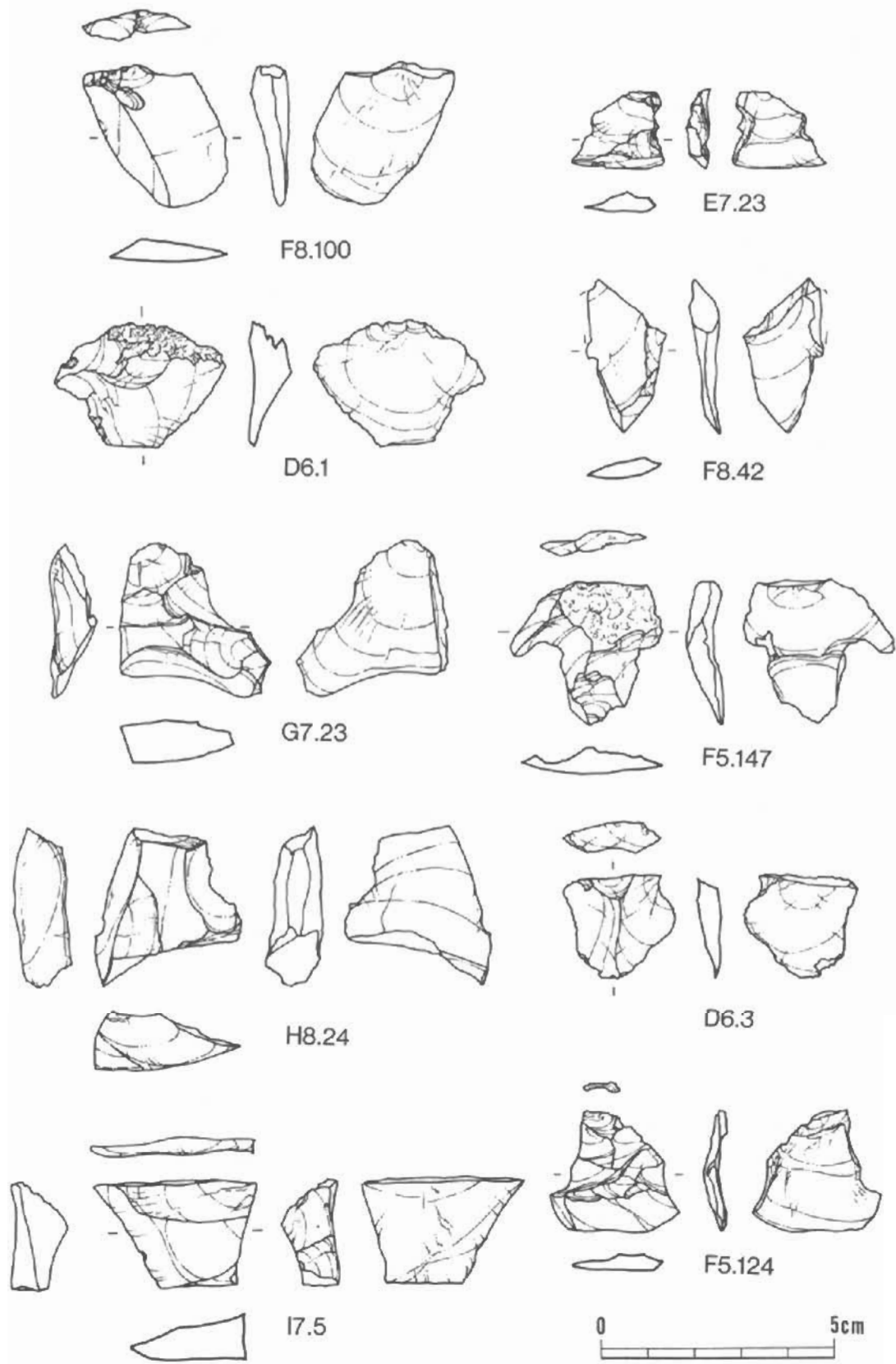
h. 剥片 (第478図～第483図)

剥片は、合計で172点が出土している。内訳は、サヌカイト製が144点、チャート等製が28点となっている。それぞれの石材の剥片は、その形状から、縦長のもの、貝殻状を含む不定型のもの、横長のもの、の3種類に分けることができる。

縦長のものには、サヌカイト製のものでF7.31、F8.42、F8.100、I9.1等わずかと、チャート等製のものでE6.8、E7.3、F5.6、F8.25などがある。横長のものには、サヌカイト製のものでF5.153、F5.161、F5.174、F7.15、F7.32、F8.17、F8.58、G7.42、G8.5、H6.157、H7.53、H8.8、H8.22、I6.9、J6.2、K7.11、L6.5など多量のもの、チャート等製のものでF8.24などわずかがある。貝殻状を含む不定型のものは、以上を除いたもので、サヌカイト製のものでチャート等製のものそれぞれ認められる。

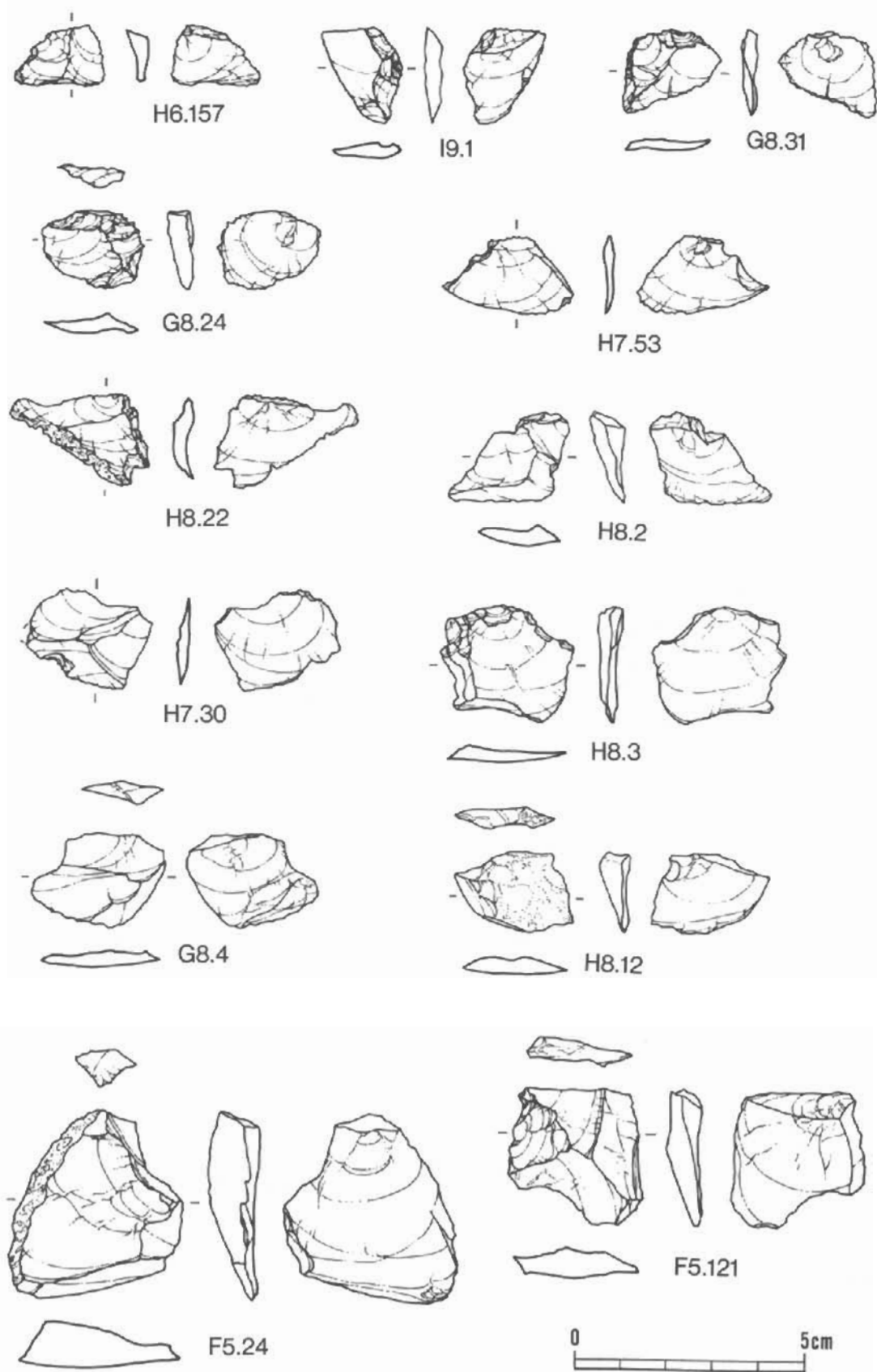
サヌカイト製剥片は、縦長・横長の点数比率がほぼ1:10で、横長が圧倒的であるが、下位文化層のような瀬戸内系と見なし得る横長剥片石核から剥離されるような剥片はほとんど認められない。剥片の一



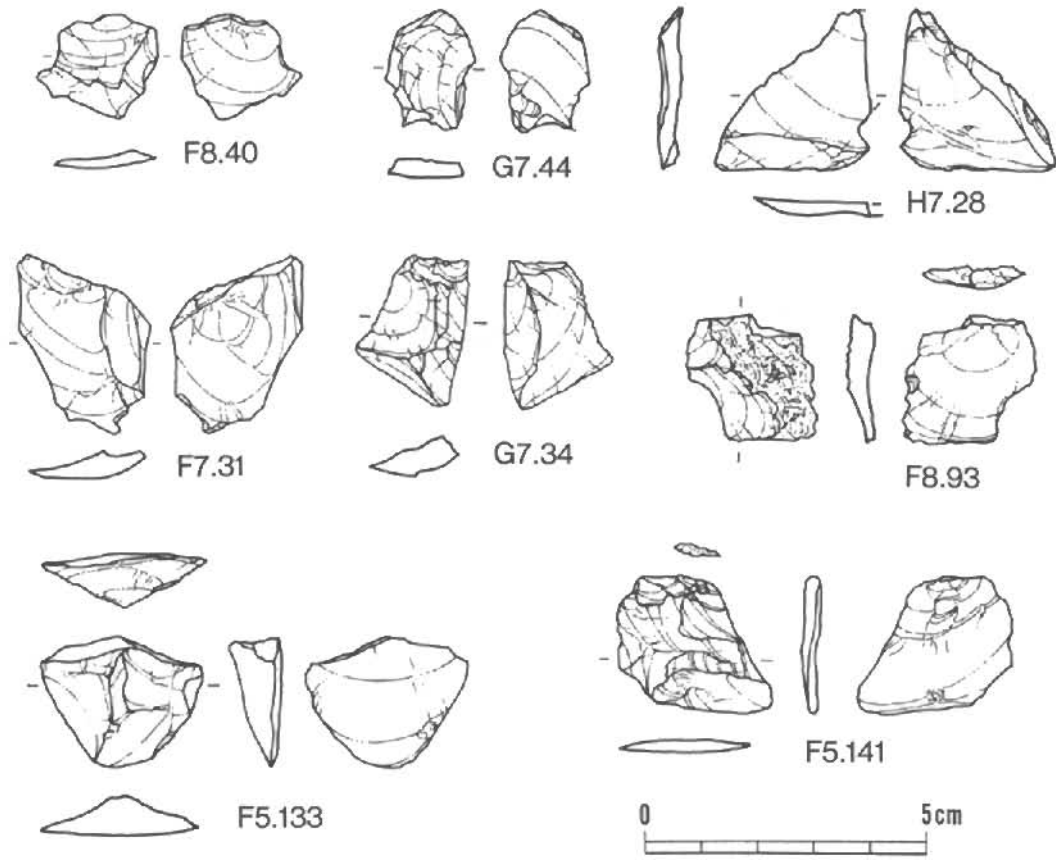


第478図 上位文化層剥片実測図1

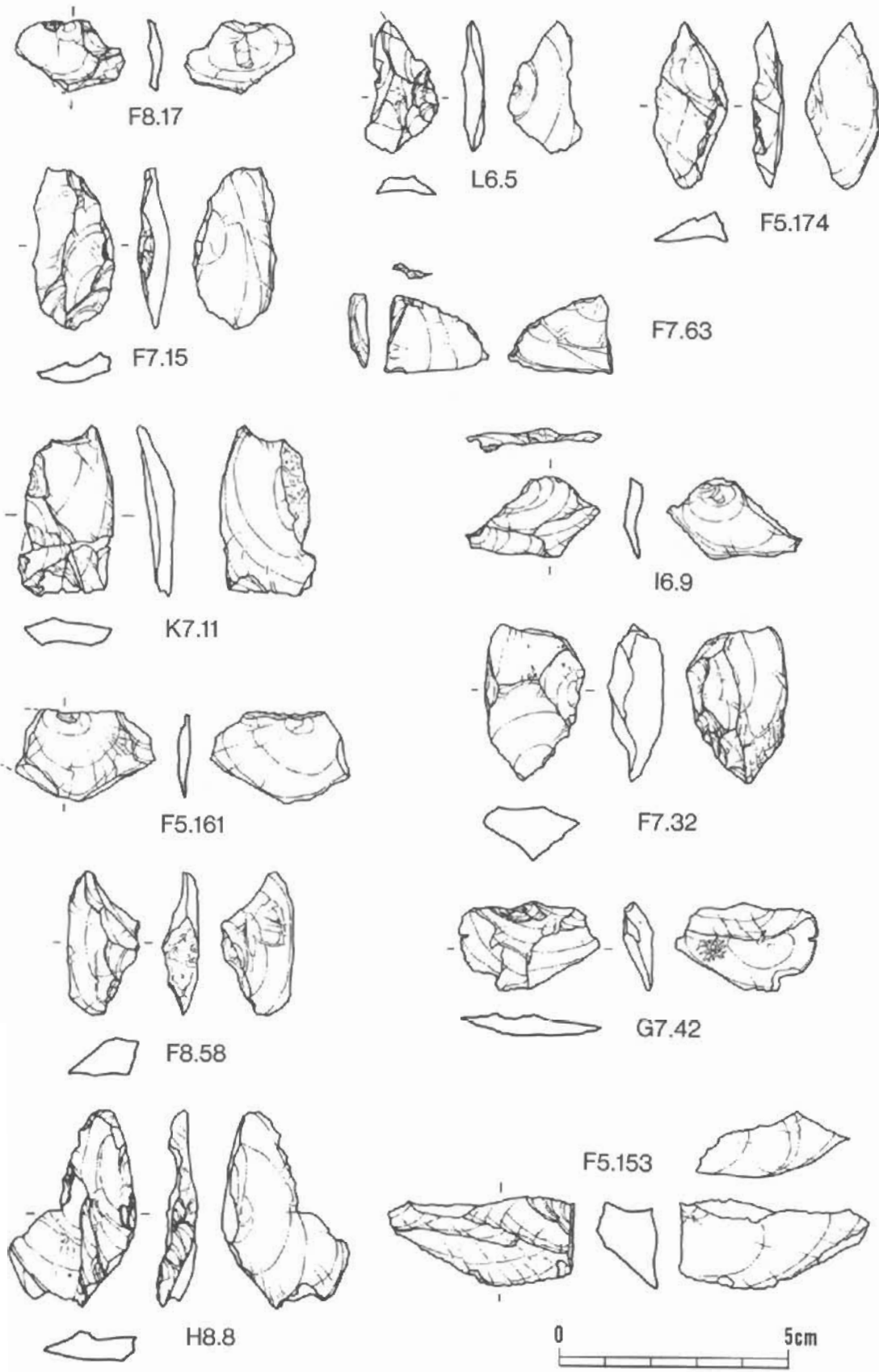
第2節 上位文化層の遺物



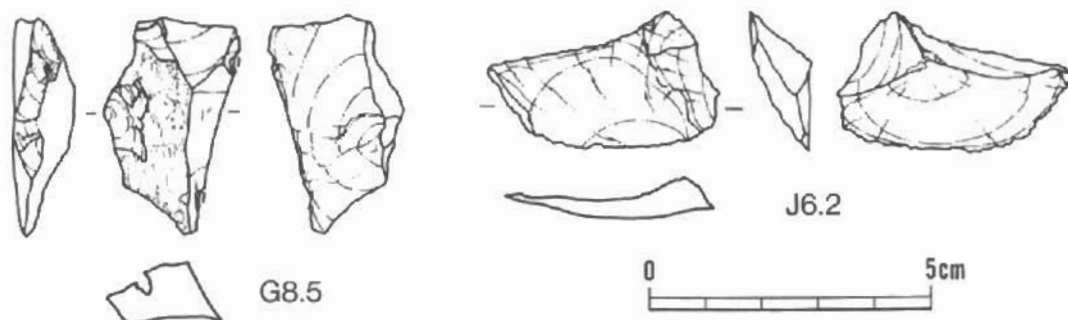
第479図 上位文化層剥片実測図2



第480図 上位文化層剥片実測図3



第481図 上位文化層剥片実測図4



第482図 上位文化層剥片実測図5

部は、角錐状石器などの調整剥片を含んでいる可能性がある。(佐田)

i, 碎片

碎片は、合計247点が出土している。内訳は、サヌカイト製が209点、チャート等製が38点である。下位文化層の「浮き上がり」と考えられる資料が散見されるが、サヌカイト製は個体識別作業が不可能であり、チャート等製でも単独個体資料は排除できない。

サヌカイト製の碎片には、角錐状石器の調整時の所産と考えられるものが多く含まれる。1点は角錐状石器に、1点は角錐状石器未製品に接合し、上位文化層で角錐状石器の整形作業が行なわれたことを示している。チャート製のものは僅かである。

なお、碎片は図示しない。(山口)

j, 石核 (第484図～第486図)

石核は、合計19点が出土している。内訳は、サヌカイト製が14点、チャート等製が5点ある。

サヌカイト製の石核は、すべて剥片素材である。下位文化層の分類を当てはめれば、量的問題を別にして、A1類、A2類、B1類、B2類、C類、D類等がすべて認められ、技術的には大差のないことが知れる。ただ、上層中には下位文化層からの「浮き上がり」資料が認められ、サヌカイトは個体識別による検討が難しいことから、石核の組成、技術的背景の検討には問題を残す。

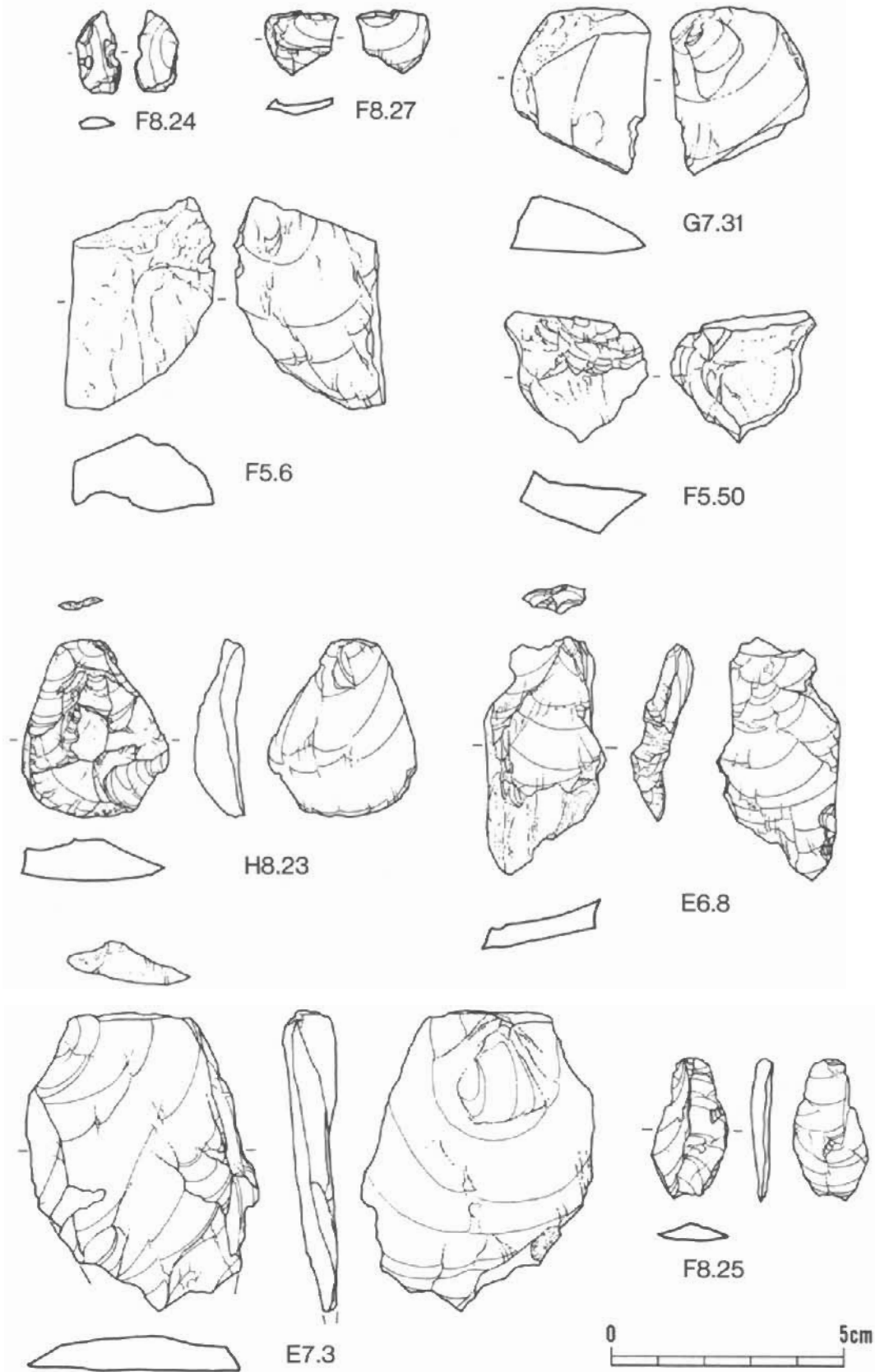
I7.8とF5.98は、厚手の剥片素材の石核として、ここに分類したが、形状から考えると、角錐状石器の素材である可能性もある。

チャート等製の石核は、すべて塊状材を素材としている。多くが、貝殻状の不定型剥片を剥離した打面と作業面の移動の激しい石核である。ここでは、このうち3点を図示しておくに留める。(佐田)

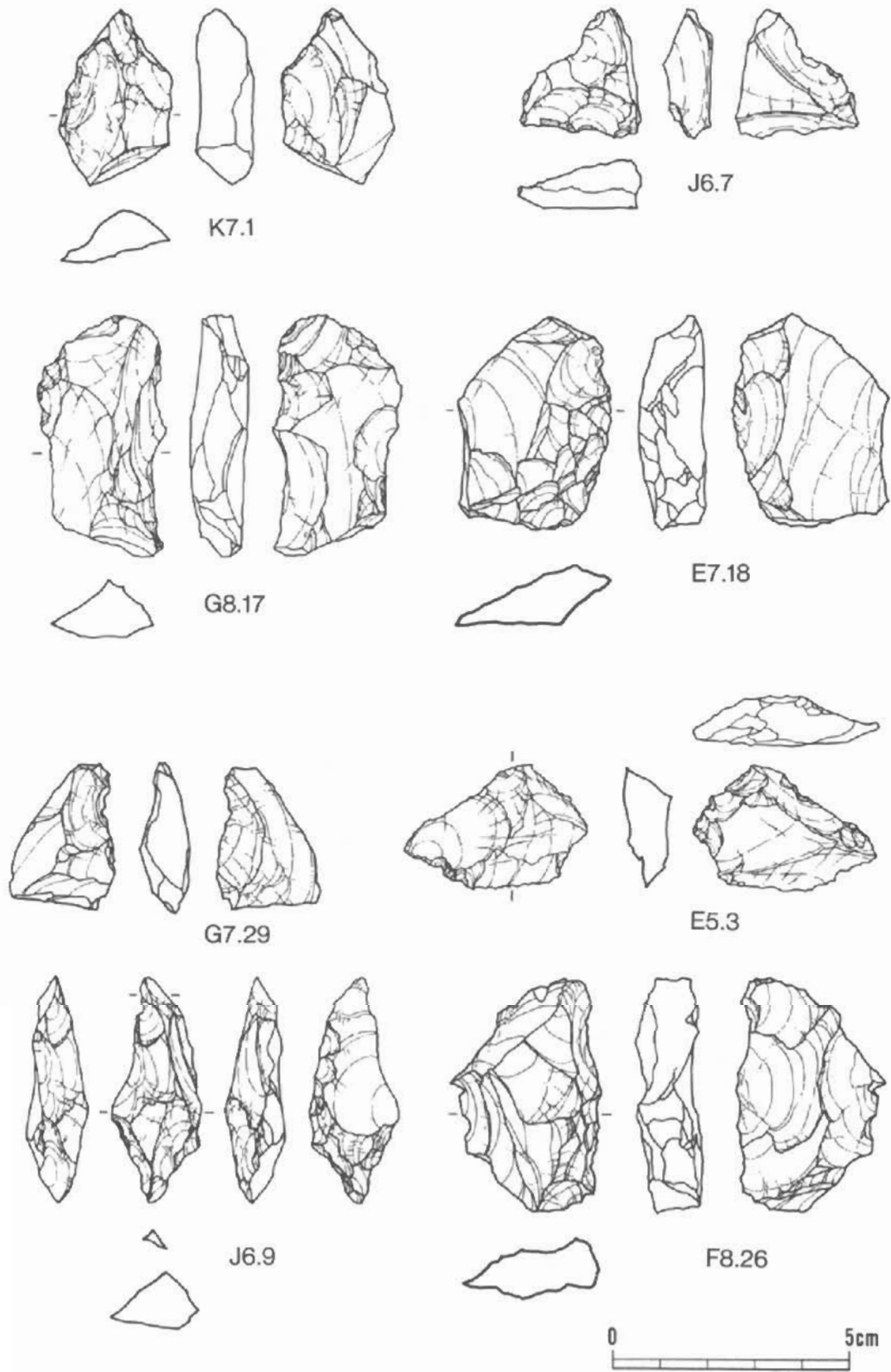
k, 礫器 (第487図)

礫器は、1点のみ出土している。F5.165は、泥板岩製の礫器で、厚さ1.5cm程の板状材を素材とし、その1端の表裏を加工している。加工部には、加工が素材を折るように行なわれたための、階段状折断面が形成され、特に使用痕らしきものは観察できない。(山口)

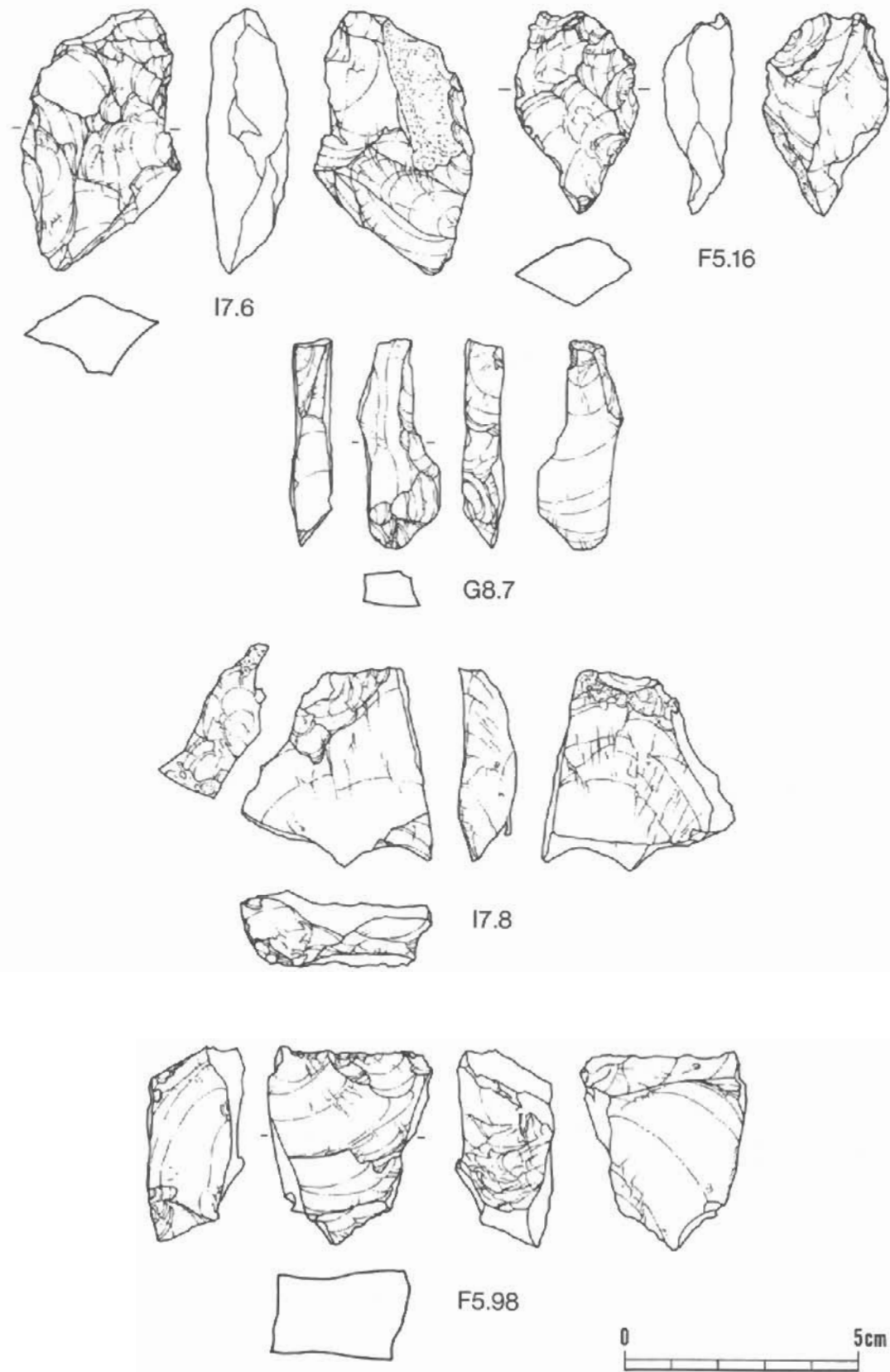
第2節 上位文化層の遺物



第483図 上位文化層剥片実測図6



第484図 上位文化層石核実測図1

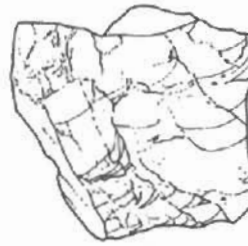
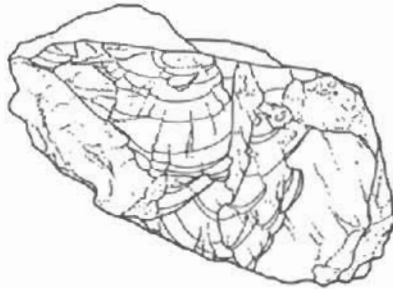
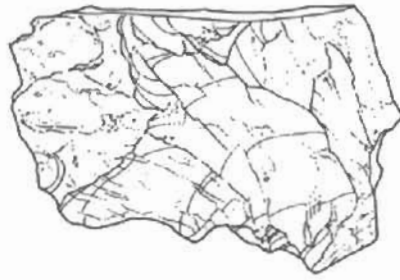


第485図 上位文化層石核実測図2

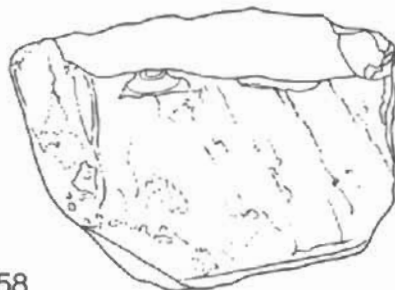
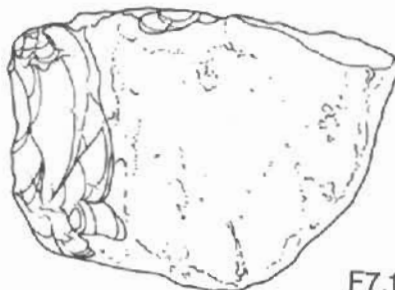




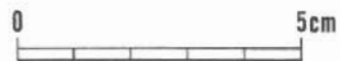
F8.33



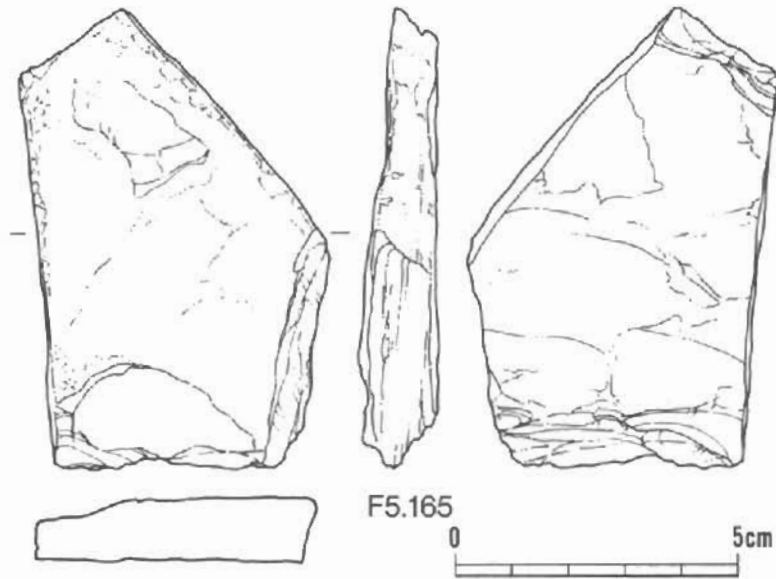
F5.120



F7.158



第486図 上位文化層石核実測図3



第487図 上位文化層礫器実測図

## 2. 剥片剥離技術

上位文化層所属の総数524点の石器類は、サヌカイト製436点、チャート等製87点、礫器1点であった。この点数は、上層中から出土した石器類の中から下位文化層からの「浮き上がり」と考えられるものを除いた数である。チャート等製の個別別分類作業の可能なものは、容易に排除できたが、個別別分類作業の不可能なサヌカイト製石器類中には、「浮き上がり」資料を排除し切れていない可能性がある。ここでは、問題がある資料を排除し、上層中で分布が完結した石器類や個別別資料と接合資料を観察し、上位文化層の剥片剥離技術と石器製作の状況を検討しよう。

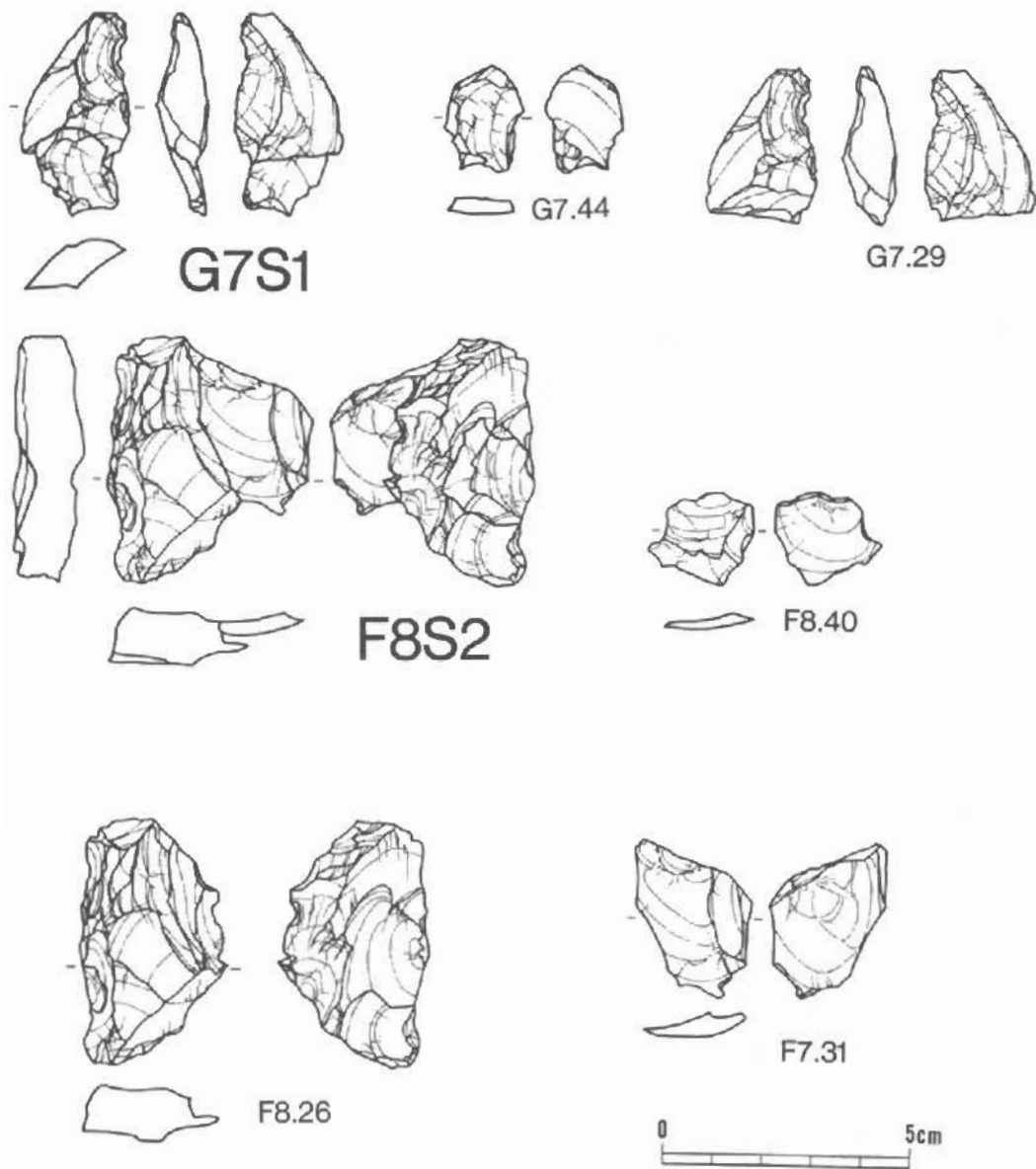
### a. サヌカイト製接合資料と剥片剥離技術・石器製作（第488図）

上位文化層のサヌカイト製接合資料は、きわめて僅かである。

角錐状石器(H7.43+I7.3)と碎片(I7.15)が接合した接合資料H7S1と、角錐状石器未製品破片(H7.31)と碎片(H6.12)が接合した接合資料H7S3、石核と剥片1点が接合した接合資料G7S1、石核と剥片2点が接合した接合資料F8S2などがあるに留まる。

接合資料G7S1は、石核G7.29と剥片G7.44が接合する。剥片素材の石核で、素材剥片の打面部に剥離作業面を設定するが、その石核底面を加撃して左半石核上面から剥片G7.44を剥離する。石核側面調整の機能を有するのであろうか。石核は、瀬戸内技法による翼状剥片石核と類似するが、きわめて小型で、作業面からの剥片剥離も1～2枚に留まるとみられ、偶然の類似と考えたい。石核側面の調整は、織笠による「殿山技法」(織笠、88)の手順の一部に類似するが、この接合資料から剥離された剥片の石器素材としての有効性には疑問があり、上位文化層中での技法的存在には保留をつけるべきであろう。剥片剥離作業の終末段階の資料である。

接合資料F8S2は、石核F8.26と剥片F8.40・F7.31の3点が接合する。もともとの形状は不明であるが、かなり大型の板状材または大型剥片と考えられる。既に側面を打面として表裏両面の周辺から剥片剥離作業が進行している。石核側縁の加撃で剥片F7.31が剥離され、その側縁の裏面を作業面として剥片剥離がさらに進行し、反対側の側縁からは剥片F8.40が剥離される。石核左側縁には、角錐状石器の側縁



第488図 上位文化層接合資料実測図1

調整に似た打面部が形成されている。剥片剥離作業の中期から終末期の工程である。

上位文化層中のサヌカイト製石器群の剥片剥離技術は、接合資料が少なく、石核や剥片も、下位文化層からの混入の問題もあって、十分な検討が可能ではない。上層の接合資料の1つは、横長剥片剥離技術の調整段階のもので、その他にも横長剥片石核や横長剥片も認められることから、瀬戸内系横長剥片剥離技術を認め得る可能性は高いが、上層で分布の完結する横長の目的剥片を含んだ接合資料が見いだせなかったことについて、不安が残る。あとの接合資料1例は、不定型剥片を剥離するものである。

定型的石器の製作に関しても、角錐状石器の調整工程の接合資料2例が認められるにすぎない。両者とも、角錐状石器の器形整形時の碎片が接合するものである。また別に、角錐状石器が器形整形時に中央から破損したものが2例あるに留まる。主要石器である角錐状石器の素材剥片と剥片剥離技術の関係も、不明である。そのほかの定型的石器も、接合資料は認められない。

## b, チャート等製個体別資料・接合資料と剥片剥離技術・石器製作 (第489図・第490図)

上位文化層のチャート等製個体別資料・接合資料は、きわめて僅かである。

個体別資料は、接合資料を含む4個体と非接合資料のみの1個体が判別された。このうち、個体別資料No.2とNo.5の2個体の石核と剥片2点が接合した接合資料を図示する。また、上層から出土した下層にも同一個体資料のない単独個体資料は、上位文化層の所属と考えられるものが多いが、合計17点が存在している。

個体別資料No.1は、使用痕有剥片2点からなるB種接合資料である。F5.70とF5.138が接合する。

個体別資料No.2は、光沢のある良質な黒色チャート材で、接合資料1群と非接合資料3点からなり、石核F8.33と剥片F8.24・F8.37が接合する。非接合資料には、削器(F8.30)と使用痕有剥片(F8.66)、碎片(F8.61)の各1点がある。接合資料は、節理面で分割された石核素材の節理面上に打面と作業面を適時配置し、不定型剥片を剥離したもので、既に4～5枚の剥片剥離が行なわれている。その1端から剥片2枚が連続して剥離されたもので、幅広の剥片となっている。下位文化層の分類で判別するとC2類となる。

個体別資料No.3は、使用痕有剥片2点からなるB種接合資料である。H7.47とH7.86が接合する。

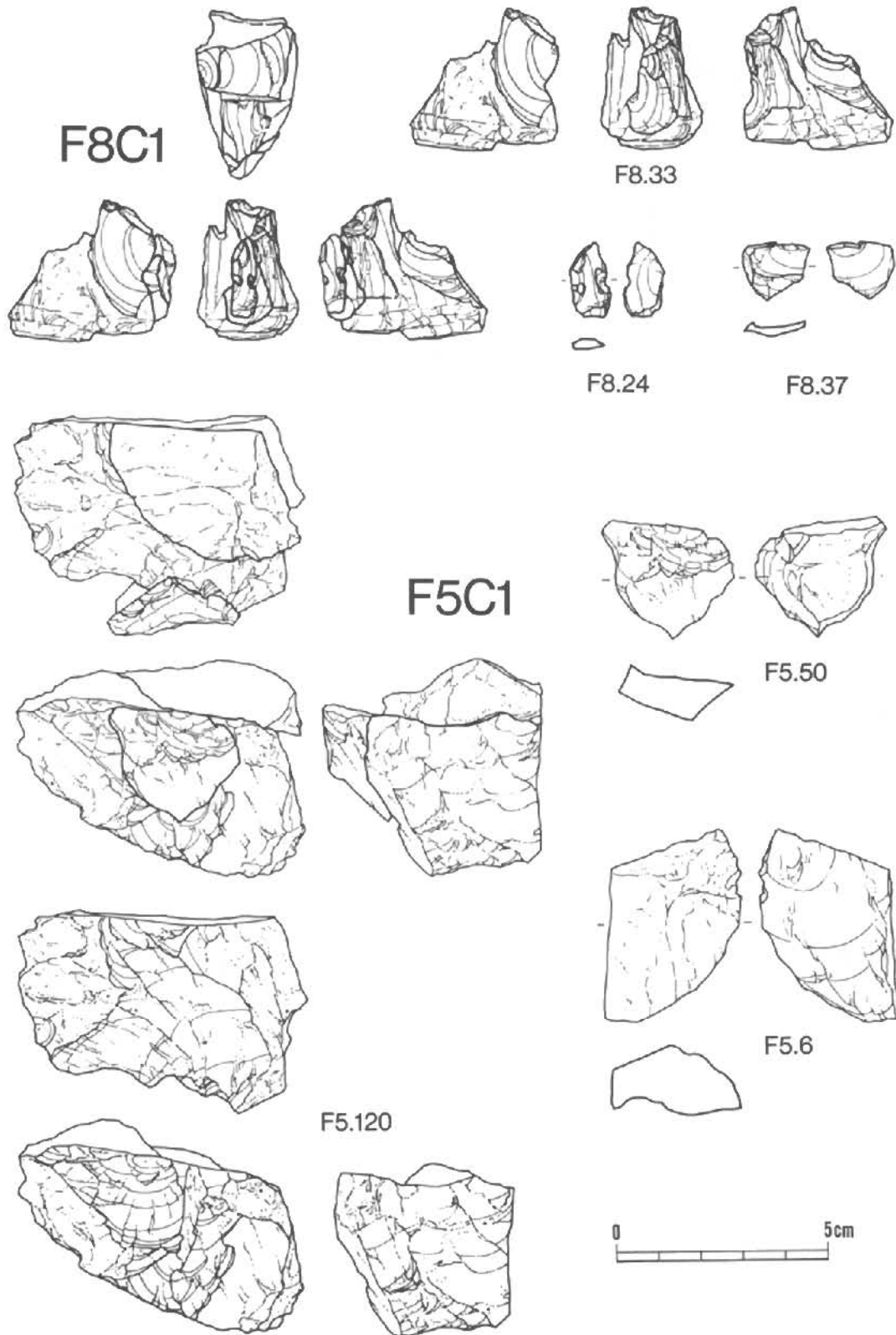
個体別資料No.4は、非接合資料4点からなる。剥片3点と碎片1点である。

個体別資料No.5は、荒い素質の灰色チャート材で、接合資料1群と非接合資料1点からなる。石核F5.120と剥片F5.6・F5.50の合計3点が接合する。非接合資料は、剥片1点である。接合資料は、荒く分割された塊状分割材の節理面を剥離作業面・打面として、その周辺から2枚の剥片を剥離したものであるが、剥片の形状は厚くいびつで、有為な剥片生産が行なわれたとは考えにくい。

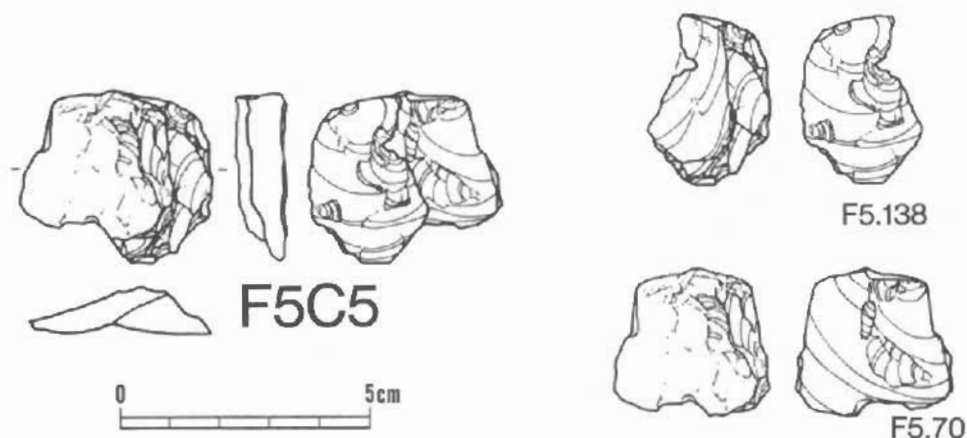
単独個体資料は、ナイフ形石器1点、搔器1点、削器2点、使用痕有剥片4点、剥片6点、碎片1点、石核1点、礫器1点の合計17点である。定型的石器と使用痕有剥片の比率が高くなっている。単独個体資料の素材剥片の形状は、量的に不安はあるが、個体別資料中の剥片類・定型的石器と大差ない。単独個体石器が、下位文化層からの浮き上がりを含む可能性が高いので、評価は難しい。

## c, 剥片剥離・石器製作作業遺存状況

サヌカイト製石器群の剥片剥離・石器製作作業の遺存状況は、きわめて貧弱であることが判明した。サヌカイト製石器類合計436点の内、石核は14点で、わずか3.2%に留まる。数量的に多いのは碎片209点47.9%と剥片144点33.0%であり、これらは遺跡内で剥片剥離されたと考えられる数量比率を越えている。剥片剥離作業が行なわれた後、石核が遺跡外へと搬出されたと仮定することも可能であろうが、本遺跡内で剥片剥離作業が開始された最初期の工程が認められないこと、剥片同志の接合資料も僅かであることなどから、蓋然性に乏しい。基本的に上位文化層での剥片剥離作業は低調であったと理解することができる。定型的石器や加工痕・使用痕有剥片のほとんどの素材は、上位文化層への遺跡外からの搬入品であろう。角錐状石器は、遺跡内で器形整形作業が行なわれた痕跡を示すが、この角錐状石器の素材剥片は板井寺ヶ谷遺跡に至る以前の地点で準備され、移動中も保持されて、必要に応じて生産されたことになる。板井寺ヶ谷遺跡上位文化層のサヌカイトは、原石産地から離れた遠隔地例であり、直接・間接どの様な方法で入手されたかは別にしても、在地石材と比較して貴重な石材であったと推定できる。上位文化層での石器群保持システムは、おそらく原石の入手地に近いいずれかの地点で剥片剥離作業を行い、石器素材を大量に入手した後、移動毎に製品製作を行い、保持した石器素材剥片を消費していく形となるのではなかろうか。



第489図 上位文化層接合資料実測図2



第490図 上位文化層接合資料実測図3

チャート等製石器群の剥片剥離・石器製作作業の遺存状況は、ほとんど有効な剥片剥離作業を認めることができず、きわめて貧弱であった。組成比率を観察すると、全資料数88点のうち石核は5点5.7%に留まり、接合資料を含む個別別資料も僅かで、下位文化層での活発な剥片剥離作業を考慮すると、在地石材としての性格の反映に乏しいといわざるを得ない。また、多量の単独個体石器があることも、注目される特徴である。チャート等製石器群も、板井寺ヶ谷遺跡以前の遺跡に剥片剥離作業を遺存していることが推定できる。

板井寺ヶ谷遺跡上位文化層全体での剥片剥離作業・石器製作作業は、全体として、別の遺跡で剥片剥離された剥片類に依存的であることが明かとなった。既に製品となったか、素材剥片の状態板井寺ヶ谷遺跡上位文化層中に搬入され、さらに製品整形されたり、使用されたり、遺棄・廃棄されたものと考えられる。おそらく、残された石器よりも多くがさらに別の遺跡に搬出されたのであろう。

板井寺ヶ谷遺跡上位文化層の剥片剥離作業・石器製作作業は、角錐状石器の整形作業が選択的に行なわれたことが特徴であろう。(山口)

### 3. 小結

#### 上位文化層の石器群

上位文化層の遺物は、合計524点あり、角錐状石器・同未製品・ナイフ形石器・搔器・削器・楔形石器といった定型石器、礫器、加工痕有剥片・使用痕有剥片、剥片、碎片、石核からなる。下位文化層からの浮き上がりのために、本来の組成の回復には難があるが、サヌカイト製角錐状石器に代表される石器群である。ほとんどがサヌカイト製であることは重要な特徴である。

角錐状石器は、点数は豊富ではないが多様な形態を含んでいる。基本的には、先端を尖らせたものが多数を占め、それに厚手寸詰まりなものが組み合わされる。前者には、基本的には大・中2群があり、調整が全面または部分的に甲板面に施されたものが含まれる。角錐状石器の表面は調整によって覆われず、素材剥片の背面・腹面を遺す。寸詰まりな角錐状石器の先端には、数条の樋状剥離が認められ、彫器または刺突具的な用法を推測させる。角錐状石器の素材剥片は、厚手の横長剥片、厚手剥片の分割材等が考えられる。

角錐状石器や未製品に接合資料を見いだせたことにより、その製作作業の一端も、明らかになった。ナイフ形石器は、サヌカイト製の極小型のものが1点のみ存在した。その形状は、従来から知られてい

る瀬戸内系ナイフ形石器とは差異があるようである。上位文化層での主体的な器種としての地位を有するものではない。

搔器は、点数的に多くない器種であるが、サヌカイト製のものが目立つが、1点を除いて加工度は低い。1点は、甲板面から全側縁を調整した角錐状石器と同等の加工部位を有するが、調整角度が浅いため、搔器として分類した。チャート製搔器は単独個体資料である。

削器は、加工部の明瞭なものを抽出したが、上位文化層での主要器種であることは明かである。大型剥片の末端に急角度の調整を施したものが注目される。素材剥片は多様であるが、横長剥片石核の転用も認められる。

加工痕有剥片は、いわば型式分類上の吹き溜まりであるが、加工部位や程度等、定型石器として分類に躊躇されたものがすべて含まれている。一部には、ナイフ形石器・台形様石器・搔器に類したものが散見される。

使用痕有剥片は、多種の剥片の一部に微細剥離痕が認められたものを一括した。素材剥片の形状は多様である。剥片・碎片・石核は、むしろ剥片剥離技術との関係で、問題となる。石核には、いわゆる櫃石島技法的な所産のものが認められる。

以上、上位文化層での基本的な石器組成として、角錐状石器・搔器・削器があり、加工痕・使用痕有剥片が加わったものが考えられる。ナイフ形石器・楔形石器・礫器などは、小数が組成されるに留まる。

上位文化層で行なわれた剥片剥離作業は、接合資料の内容からみる限り、非常に貧弱である。接合資料に認められた剥片生産は、不定形な中小型剥片を生産するものであり、特に大型・厚手の剥片を多用する角錐状石器の素材剥片の供給が遺跡内で行なわれた可能性は少ない。角錐状石器の素材剥片は、剥片の状態で板井寺ヶ谷遺跡に搬入されたと考えてよからう。角錐状石器・同未製品に碎片が接合した例、角錐状石器の破碎片の存在、多数の碎片の共伴は、角錐状石器の器形整形作業のみが活発であったことを示している。

接合資料や剥片・石核には、石核の側縁の表裏から剥片剥離が行なわれた瀬戸内系横長剥片剥離技術の流れを組む可能性のあるものが僅かに認められるが、十分な評価は困難である。 (山口)

#### 角錐状石器の編年的・系統的位置

上位文化層は、陸地部の暗灰色火山灰層中に包含されているので、始良Tn火山灰降灰直後の所産であると考えられる。泥炭層・火山灰降灰層準、放射性炭素年代測定結果との関係によって、ほぼ23000年から20000年前までのどこかに位置付けられることが明らかになっている。表現として適切かどうかは判らないが、始良Tn火山灰降灰直後と呼び得る時期の所産であると見なしてよいだろう。

上位文化層の石器群で最も主要な器種は、角錐状石器である。また、他の器種では編年的・系統的位位置を検討するのに困難がある。角錐状石器は、今までに舟底形石器、舟底様石器、尖頭器、尖頭状石器、三稜尖頭器、ゴロゴロ石器などの名称が与えられ、九州・中国または備讃瀬戸地方においては特に、三稜尖頭器、舟底形石器として呼ばれる場合が多い。近時、特にこの種の石器が九州南部から東北地方にかけて、日本列島に広く分布することが確認され、また、広域あるいは地域における示準火山灰の絶対年代の判明により、各石器群の編年作業上の鍵のひとつとして認識されつつある。

日本列島内での角錐状石器のあり方を概観してみよう。

九州地方では、ほぼ全域に分布し、鹿児島県加栗山(青崎, 81)・加治屋園(埋蔵文化財研究会, 87)・

小牧3A (埋蔵文化財研究会, 87)・木場A2 (午ノ浜, 82)・成岡 (午ノ浜・宮田, 85) 石橋 (旭・宮田, 87)、熊本県下城 (緒方・田中, 79・緒方、古森, 80)・狸谷 (木崎, 87)・大丸 (木崎, 86)・藤ノ迫 (木崎, 86)・伊野 (江本, 86)・石飛東 (江本, 86)・石飛分校 (肥後考古学会, 85)・西原A (肥後考古学会, 85)・西原B (肥後考古学会, 85)・牧原B (肥後考古学会, 85)・湯舟坂 (肥後考古学会, 85)・上の原 (肥後考古学会, 85)・国見 (肥後考古学会, 85)・茂川カントリークラブ (肥後考古学会, 85)・五目木 (肥後考古学会)、宮崎県船野 (橋, 75)、大分県岩戸C地区 (芹沢・柳田, 78、坂田, 80、清水・高橋・柳田, 80・86)・百枝C地点 (清水・栗田, 85)・津留 (橋・清水・高橋, 82)・駒方C (坂本, 84)、長崎県松山A (安楽, 89)、佐賀県老松山 (松尾, 89)、福岡県峠山 (橋・牧尾・村上, 73) などからまとまった点数の出土がある。

鹿児島県石橋遺跡では、VII層サツマ (に対比) とIX層阿多溶結凝灰岩に挟まれた暗茶褐色粘質土層から、ナイフ形石器2点、台形石器1点、彫器2点などと共に三稜尖頭器4点、角錐状石器1点が出土している。石材は黒曜石・玉髄を使用する。三稜尖頭器は、いずれも横長剥片を素材とし、甲板面に素材の主剝離面を残す。稜上調整が認められ、断面が三角形となるI a・I b類がある。角錐状石器は、未製品のであるが、先端部に粗い整形剝離が行われ、末端部、甲板面に自然面を認める。熊本県下城遺跡では、試掘調査で三稜尖頭器が11点出土しているが、このうち角錐状石器は9点ある。安山岩1点と黒曜石製8点からなっており、多くが横長剥片製である。本調査では尖頭器45点が出土したが、多くが角錐状石器A1の一部、A2に該当する角錐状石器である。A1類に分類されたものは三面加工品であるが、横長剥片を素材として甲板面を完全には調整していないもの(III a)も含まれている。宮崎県船野遺跡では、尖頭器15点が出土し、3類に分類されたが、うち2類型はその特徴から、はじめて「剥片尖頭器」、「三稜尖頭器」の呼称がなされた。このうち角錐状石器として取り上げ可能なものは、a2類9点中4点、b類2点中1点と思われる。a2類は、断面三角形を呈し全般的に厚みのある作りで、稜上調整を行うものもあるが、整形・調整は粗雑である。素材には、縦・横長の剥片を使用する。b類は、縦長の剥片を素材とする断面台形の薄作りで、背面に横長の第一次剝離面を残す。側面の整形は甲板面からのみ行われ、また、甲板面には両側縁からの調整が行われる。大分県岩戸遺跡では、これまでに3次にわたる調査が実施され、AT直上層の岩戸第I文化層(第1次)、岩戸D文化層(第2次)、6層下部(第3次)から計16点が出土している。岩戸第I文化層では、断面三角形のA類(三稜尖頭器)と断面台形のB類に分類され、A類は調整のありかたからA1類(三面加工)、A2類(二面加工・稜上調整有)、A3類(二面加工)に細分される。AT直上層の岩戸第I文化層では、断面三角形のA類2点、A2類2点、A3類5点、B類4点が出土している。第2次調査の岩戸D文化層では、A3類が1点、また剥片尖頭器3点が存在し、第3次調査の6層下部からは、A2類2点が出土している。百枝遺跡C地区では、第I・II・III文化層からそれぞれ1・11・5点が出土している。分類は、岩戸第I文化層に従うが、B類についてはさらに細分され、また周辺加工尖頭器とも呼称している。第I文化層はA類のみ、第II文化層はAとB類がほぼ半数づつ、第III文化層はB類で占められていることから、B類→A2類→A1類への推移がなされている。津留遺跡では、一万点を越える石器類が出土しており、三稜尖頭器はIII～IV層中にナイフ形石器・剥片尖頭器と共に出土する。素材は縦長剥片主体で、形態・調整・整形はそれぞれ異なり、背面加工では稜上調整を行うもの、甲板面に部分加工を施すもの、あるいはIII a類に相当する加工を施すものがある。また未成品と思われるものの中には、背面に甲板面からの粗い整形後、甲板面の整形を行ったものがある。福岡県峠山遺跡では、AとC地点で三稜尖頭器とされるものがあり、1



点は縦長の厚みのある剥片を素材とし、断面三角形で整形は甲板面側からのみ認められる。佐賀県老松山遺跡では、未製品を含め約600点もの出土が報告されている。報告書によると、82点が平面形・側面形・断面形・調整剝離形態を分類基準として16分類された。全体として縦長・横長剥片、棒状礫を素材とし、整形・調整は主として甲板面からの粗加工の後、細かな二、三次加工が施されるが、大部分に稜上調整が施される。また、半数に粗い甲板面調整が施されるが、全体面に及ぶ場合と一部に留まる場合がある。形態としては、平面形が柳葉・木葉のものが95%あり、全体的に大型で、5 cm以下のものはなく、10 cmを越えるものが半数を占める。長幅比は1:2~1:3.5に集中しているが、中には「断面三角形で裏面から稜へ向けての調整が一側辺しか施されない、一側辺の調整を省略した」とされるものも含まれる。長崎県では、百花台遺跡などの出土例があるが、新たに東彼杵町の松山A遺跡で2点が出土している。いずれも表土層からの出土で、サヌカイトを使用する。1点は下部欠損するが、厚みのある剥片を素材として、先端が細く鋭利に加工される。三面加工であるが、甲板面側の調整は粗く、大きな剝離面が数枚見られる(IIa類)。1点は甲板・背面に側縁から粗い整形・調整が行われる(IIIa類)。

九州地方の角錐状石器を出土した遺跡の、始良Tn火山灰との関係を考えてみる。層位状況の良好な遺跡では、百枝遺跡C地区の第III文化層を除けば全てが始良Tn火山灰降灰層順よりも上位に含まれている。百枝遺跡第III文化層は、始良Tn火山灰降灰層準と同等か直下とされるらしい。百枝遺跡では、角錐状石器・三稜尖頭器の型式的変遷が把握されたことは重要である。

中国地方西部の冠高原(梅田・三枝, 83, 妹尾, 89)では、B・C・Dの各地点からまとまった角錐状石器の出土がある。いずれも、始良Tn火山灰よりも上位の出土例である。B地点では、21点の角錐状石器があり、厚みのある横長剥片を素材とするものが多く、76%を占めている。形態的には大まかに、断面三角形で細身で器高の高いもの、断面三角形で幅広で大型の器高の低いもの、断面台形で幅広の大型で器高の低いもの、に分けられる。稜上調整や甲板面調整の頻度は低い。C地点では、舟底形石器と三面加工石器がある。舟底形石器は横長剥片素材で甲板面の両側縁からの調整と稜上調整によって断面三角形を呈している。D地点では、III層から9点が出土している。小型が多いものの、丁寧な調整・整形が行われ、稜上調整を施すもの、甲板面調整を施すもの、両方を行うものがある。素材はすべて横長剥片を使用している。

中国・瀬戸内地方中央部の備讃瀬戸・讃岐平野地域では、多くの遺跡で角錐状石器が出土しているが、層位的に安定して発掘された例は認められない。多くの遺跡は花崗岩の風化土中にあり、火山灰層の存在が確認された遺跡もない。讃岐平野のサヌカイト原石噴出源周辺と備讃瀬戸の島々とはあり方が違う(竹岡, 88)。

原石産地である国分台・朱雀台周辺では、香川県国分台Loc 4、5 a、6 a、10、朱雀台Loc 1などで多量の角錐状石器が採集されている。これらの遺跡では、角錐状石器が大型で粗い作りのものが目だつが、発掘資料に乏しいため、十分な内容を把握できない。備讃瀬戸の島々では、本四架橋による発掘で香川県与島西方、北浦、羽佐島、花見山などの遺跡から多量の角錐状石器が出土している。岡山県側では宮田山、鷲羽山などがある。多くの遺跡では、層位的悪条件からナイフ形石器などと混在して存在し、一括資料として把握できない。角錐状石器の形態は、多様で、I a・b、II類を主体とする。III類は希である。

近畿地方中央部での角錐状石器を出土した遺跡は、板井寺ヶ谷遺跡を除けば近畿地方中央部に限定されて位置する。発掘調査で角錐状石器をまとめて出土させた遺跡として、大阪府国府遺跡第6地点(一

瀬他, 91)、郡家川西遺跡(森田, 81)などがあるが、いずれも火山灰層は認められていない。また、南花田遺跡(安里, 87)などでも角錐状石器の出土が知られる。

国府遺跡第6地点と郡家川西遺跡では、角錐状石器主体でナイフ形石器を組成しない石器群が発掘され、板井寺ヶ谷遺跡上位文化層の状況と酷似する。I a・b類が認められる。国府遺跡第6地点では、角錐状石器の未成品や大型盤状の剥片なども出土し、遺跡内での角錐状石器の製作が知られる。南花田遺跡では、小型の角錐状石器が中・小型ナイフ形石器を主体とする石器群に伴って出土している。層位的には良くないが、このような状況は、国府遺跡第6地点、郡家川西遺跡などと異なり、近畿地方の角錐状石器を伴う石器群には、時期差を認めることができると考える根拠を与えている。

東海・関東以東では、武蔵野台地のIV中段階に多くの出土例が知られる。東海地方では、岐阜県日野遺跡・寺田遺跡(吉田, 87)で国府型ナイフ形石器や在地石器群と共に角錐状石器が出土している。チャート製や下呂石、頁岩製と合わせ、一部に二上山産サヌカイト製のものが認められる点は、近畿地方との関係を伺わせる。南関東地方では、角錐状石器が在地のナイフ形石器主体の石器群と混在して出土する。角錐状石器は、小型化したいわゆる「ゴロゴロ石器」となり、形態的に近畿地方以西のものとは相違した点が見受けられる。

山形県越中山K地点(加藤, 75)では、頁岩製国府型ナイフ形石器や瀬戸内技法関連の石器群等に共伴して小型で厚い角錐状石器が伴っている。国府型ナイフ形石器と角錐状石器の共伴は、両者の分布が東北地方にまで及ぶこと、両者が時期的に並行して存在することを示している。角錐状石器の分布の北限は山形県越中山K地点遺跡である。東海・関東以東の角錐状石器群は、この角錐状石器群の東進以後、角錐状石器が在地の石器群に受容されて行ったことの現れであろう。形態的に近畿以西の初期の角錐状石器とは相違した部分が現れつつある。

以上、長々と角錐状石器とその石器群について西から東に列島内を観察した。板井寺ヶ谷遺跡の角錐状石器を、この中に位置づけてみよう。

始良Tn火山灰との関係では、大分県百枝遺跡第III文化層を最古として、西から東へ時代が新しい遺跡が多くなる傾向が看取された。始良Tn火山灰降灰直後とされる遺跡として、大分県百枝遺跡・岩戸遺跡と板井寺ヶ谷遺跡も挙げることができる。始良Tn火山灰降灰後、そう時間をおかない時期に角錐状石器群が近畿地方にまで及んでいたことが明かとなった。百枝遺跡の層位的出土例から、角錐状石器の形態変遷が知れるが、稜上調整と甲板面の全面平坦調整を伴う三稜尖頭器は、やや時間差をおいて出現することが知られており、中国・近畿地方でこの種の三稜尖頭器が全く認められないことから、板井寺ヶ谷遺跡の第III類は、その初期段階での波及であると考えられる。板井寺ヶ谷遺跡の甲板面全面に調整を施した第III類の資料は、形態的に九州地方に分布する三稜尖頭器との関連を想定させる。板井寺ヶ谷遺跡の角錐状石器には九州から中国地方・備讃瀬戸まで多く認められる稜上調整は認められない点で大きく異なるものの、両面加工の尖頭器状を呈する点で、共通する面がある。このような資料は板井寺ヶ谷遺跡が東限であり、角錐状石器と両面加工尖頭器の出自の問題について、ひとつの資料を提供した。

九州地方北東部の地域を頁岩地帯を除けば、九州北西部中国地方西部から近畿地方まで、角錐状石器はサヌカイトを素材としている場合が多いが、角錐状石器の東進は、大規模な始良Tn火山灰降灰とサヌカイトへの石材適応という二つの要因が関係しているかもしれない。近畿地方において、国府遺跡第6地点、郡家川西遺跡、板井寺ヶ谷遺跡上位文化層の角錐状石器はすべてサヌカイト製で、板井寺ヶ谷遺跡上位文化層のサヌカイト産地分析や他遺跡での肉眼的観察から、これらのほとんどは二上山産である

ことが知られている。新来の石器群が初期からサヌカイトという固有の石材を選択したのは、極めて説明しにくい現象である。時間的・編年的問題に留まらず、従来から近畿地方中央部に分布するナイフ形石器主体の石器群との関係において、その石材供給に関する社会的構造を、今後注意して問題とする必要がある。

近畿地方中央部では角錐状石器主体でナイフ形石器を伴わない国府遺跡第6地点や郡家川西遺跡などが存在する。板井寺ヶ谷遺跡上位文化層も同様であった。板井寺ヶ谷遺跡上位文化層が始良Tn火山灰降灰直後であることを考え合わせるならば、近畿地方初期の段階の角錐状石器群の本来のあり方は、ナイフ形石器を組成しないという特徴があるのではなかろうか。九州地方の北西部と北東部ではやや状況が異なるものの、九州地方や東海・関東地方において始良Tn火山灰降灰からしばらく時間を置いて在地石器群に組み込まれるように角錐状石器が出土するようになるのは、各地域で角錐状石器がナイフ形石器など先行の石器群との融合を果たす結果であろうか。南花田遺跡など、小型ナイフ形石器と角錐状石器が混在して出土する遺跡は、近畿地方でもこのような段階が存在したことを示していると考えられる。角錐状石器の出自と列島内での分布の拡大、在地石器群のその受容は、近畿地方中央部でのサヌカイト石材への展開に端を発し、その範囲を広げていったのかも知れない。この問題の追求には、より精密な時間的・空間的位置づけが必要であろう。

板井寺ヶ谷遺跡上位文化層の角錐状石器とその石器群は、以上のように多くの問題に関係し、それを解決する有力な鍵となる資料であることが理解される。板井寺ヶ谷遺跡の角錐状石器は、今後より広い視野で評価することが必要である。

(國井・山口)

## 第3節 上位文化層の遺構と遺物の分布

## 1. 遺構・遺物の分布と同時性

上位文化層は、石器類合計524点、礫石合計1406点、土壙1基で構成される。

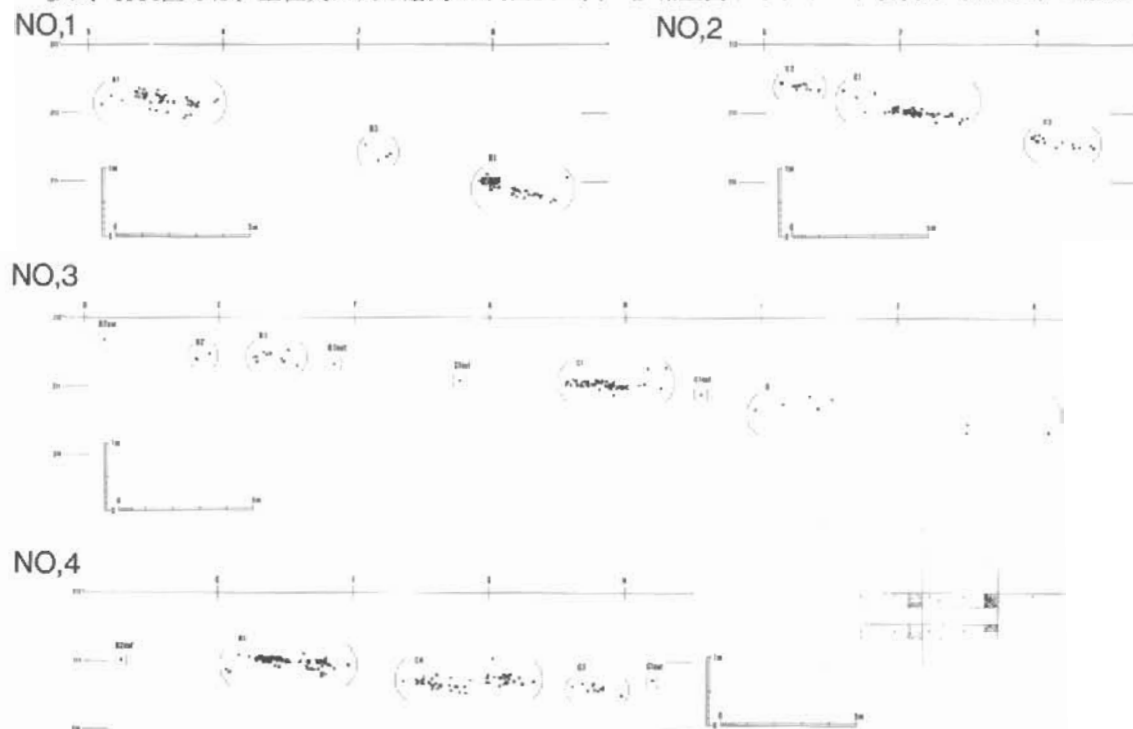
石器類の包含は、暗灰色火山灰中の全帯域で認められたが、その上半に多く認められたことから、一部の「浮き上がり」の資料を除けば、考古学的には同時期と判断されよう。さきに明らかにしたように、上層中には下位文化層所属と考えられる石器類多数が「浮き上がり」と考えられる状態で含まれ、これを個体識別や接合作業によって排除した。チャート等製石器は、個体識別や接合が容易で、単独個体資料を除いて、その上下文化層の帰属を検討することができたが、サヌカイト製石器類はこの限りではなく、帰属に不安のあるものもある。

遺構では、いずれも始良Tn火山灰純粋層上の暗灰色火山灰中に包含され、特に礫石の検出下底面が暗灰色火山灰下部で揃うことから、瞬間的にはともかく、考古学的同時期の所産であると考えられる。土壙は、検出が黄色粘土上面でなされたが、埋土の質から、礫群下底面からの掘込みと確認できた。

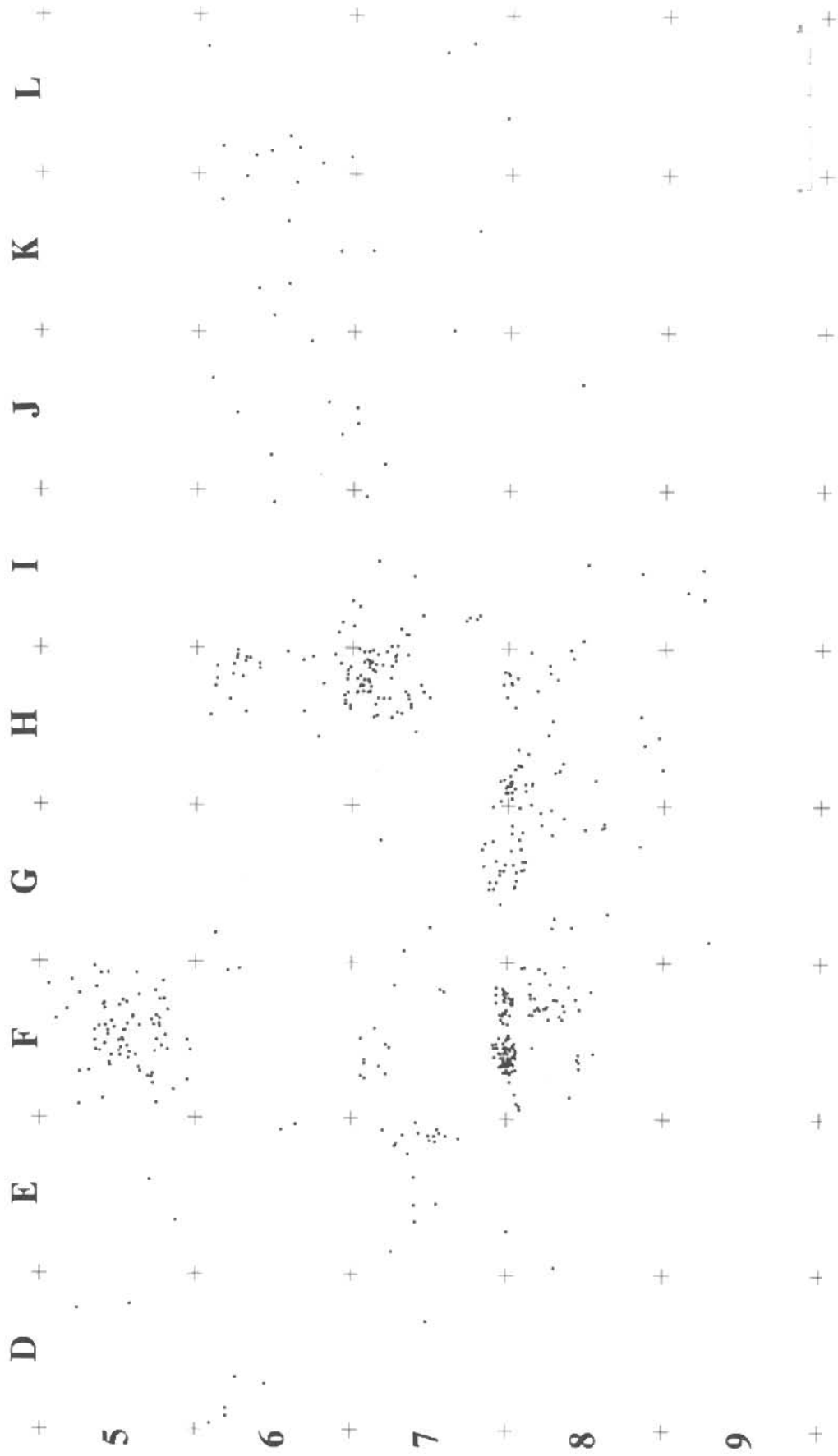
石器類の分布は、基本的には暗灰色火山灰の存在する範囲に限定して認められた。調査区の北東部は中世期の居館によって削平され、また泥炭面や陸地部南半には存在していない。ほぼ調査区の中央に遺存する。ほぼ南北20m、東西40mの範囲に限定される。北半は削平され、本来の分布範囲は不明であるが、南半は次第に分布が疎らになっていく。泥炭面真近の部分には分布が及ばない。

第491図は、暗灰色火山灰中の上位文化層所属石器群の垂直投影図である。投影範囲中の石器類の集中部毎にかたまりながら、地形にそって北から南、西から東へと流れている。ほぼ層厚20cmのばらつきに納まり、局地的な落込みなどは認められない。

なお、H14区では、上位火山灰と始良Tn火山灰の間の砂礫上面からチャート製剥片(H14.1)1点が



第491図 上層遺物垂直投影図



第492図 上位文化層遺物分布図（下位文化層日資料を除く）

出土し、またH15区は角錐状石器(H15.SE)1点が採集された。どちらも主分布域とは地形的に泥炭面で隔てられ、距離も約40mほど離れる。正確な土層の連続の確認ができていないので、確実に同時期であるとはいえないが、角錐状石器があることを重視すれば、上位文化層の活動域がここまで広がる可能性が考えられる。

## 2. 石器類ブロックの設定

石器類の分布の細部を検討してみよう。H15区の採集された角錐状石器1点、H14区のチャート製剥片(H14.I)1点を除けば、上位文化層の石器類の分布は、南北約20m、東西40mの範囲に限定される。分布域内には、点数の濃淡があって、石器類の比較的集中した部分と散漫な部分とからなっている。

発掘調査時に認識した石器類の集中は、顕著な求心的集中ではないが、F5区、7・8区、G7・8区、H6・7・8区などに集中箇所が認められ、その間や周辺、J・K・L6区には散漫な分布域が広がっているという所感を得たが、第492図の石器類分布状況は、それに一致する。東西にH・I列の境で集中の認められる範囲と散漫分布で構成される範囲に2分して捉えることができよう(第492図)。

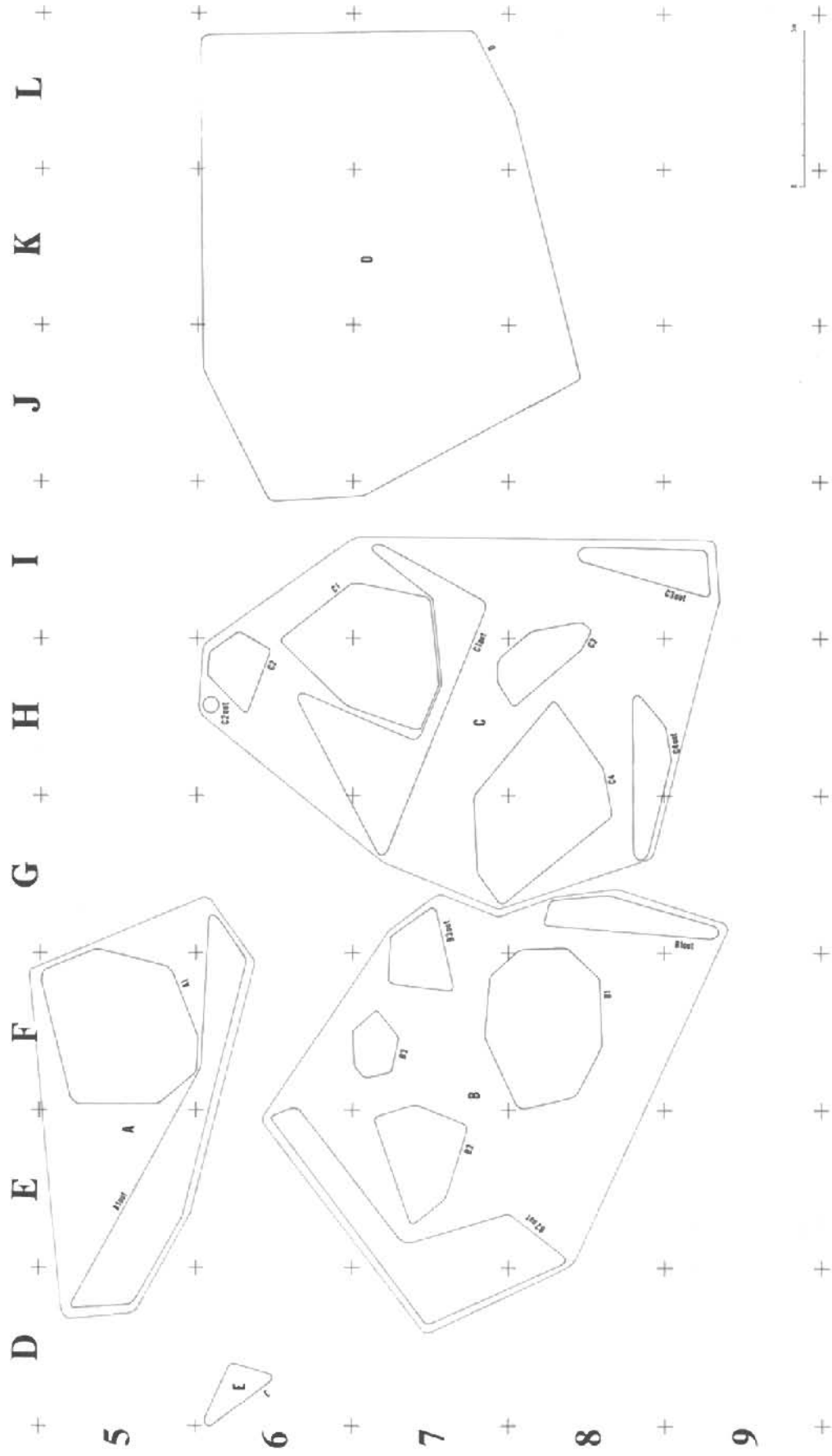
石器類の分布状況を、各発掘区を50cm四角に区切り、升目毎に石器類の点数を数えて、石器類点数の等量線図を作図した。これによって石器類の分布範囲が融合して、集中分布範囲が判別される(図示せず)。

集中箇所と判別できるのは、当然ではあるが、視覚的に把握した発掘調査時での感触と一致するので、その単位を認定の核とし、周辺の散漫分布を統合して、石器類ブロックを設定する。曖昧な散漫分布域は、距離や地形の傾きを参考にしていずれかの集中部に帰属させた。F5区を中心とした集中部と西の散漫分布部に石器類ブロックA、F7・8区を中心とした集中部と西の散漫分布部に石器類ブロックB、H6・7区を中心とした集中部と南の散漫分布部に石器類ブロックCを設定する。石器類ブロックA・B・Cの東には、広い散漫分布域が広がるが、ここには核となる集中が認められず、J・K6区にやや多い傾向が認められるに過ぎない。ここも先の石器類ブロックと同等には扱えないだろうが、石器類ブロックDとし、合計4石器類ブロックを設定する。D6区には僅かな石器類の分布があるので、ここにも石器類ブロックEの名称を付すが、西に未発掘区があるため、ブロックの完結性に問題があり、十分な検討の対象にはしがたい。

さきに述べたように、石器類ブロックは集中部と散漫分布部を等量線図の視覚的観察から統合したもので、いくつかの分布空間からなっているため、集中域と散漫分布域の性格を明らかにするためにも、個々の分布域を小ブロックとして固有番号を付した。

以上、石器類の分布の状況から、機械的な作業に基づいて石器類ブロックを設定した(第493図)。以下に石器類ブロックの特徴を記述しておこう。

**石器類ブロックA**は、南北約7m、東西約13mの範囲で、F5区に集中部を有する。集中部に重なるように、礫群A1がある。また、礫小分布A2は南の石器類散漫分布域、A3は西にある。石器類ブロックは、集中部と南、西の散漫分布部に分けられ、前者を小ブロックA1、後者を小ブロックA1 outとする。石器類ブロックAからは、合計86点の石器類が出土し、内訳は、角錐状石器1点、ナイフ形石器1点、搔器1点、削器2点、加工痕有剥片2点、使用痕有剥片8点、剥片29点、碎片36点、石核5点、礫器1点である。サヌカイト製は、合計61点、チャート製24点、礫石器1点となっている。ナイフ形石器は、単独個体石器であるが、下位文化層からの浮き上がりの可能性が高い。A1からは合計79点、A1 outからは7点が出土している。



第493図 上位文化層ブロック範囲図

石器類ブロックBは、南北約14m、東西14mの範囲で、F8区の北半あたりに集中部を有するが、E7・F7区あたりに散漫分布を有する。集中部に重なるように、礫群B1a、B1bがあり、F7区には散漫な礫群B2がある。石器類ブロックは、小ブロックB1、B1out、B2、B2out、B3、B3outに6分できる。小ブロックB1とB2は、発掘区中央を東西に横断する排水路によって隔てられている。排水路による破壊は、小ブロック区分には影響しないが、B1ブロックの北半が破壊されている可能性が高い。石器類ブロックBからは、合計181点の石器類が出土し、内訳は、角錐状石器1点、ナイフ形石器1点、搔器2点、削器1点、加工痕有剥片3点、使用痕有剥片11点、剥片56点、碎片100点、石核6点である。サヌカイト製は、合計157点、チャート製は、24点となっている。B1からは135点、B1outからは5点、B2からは19点、B2outからは6点、B3からは11点、B3outからは5点が出土している。

石器類ブロックCは、南北約16m、東西約12mの範囲で、H6・7とI6・7の交点周辺とH8区の2箇所にも集中部がある。集中部に重なるように、礫群C1a、C1b、C2、C3、C4、C5がある。石器類ブロックは、小ブロックC1、C1out、C2、C2out、C3、C3out、C4、C4outに8分できるが、このうち、C1～C2outとC3～C4outは、排水路によって隔てられ、石器類の分布に影響している可能性が考えられる。小ブロックC4の北半は破壊されているかも知れない。石器類ブロックCからは、合計214点の石器類が出土し、内訳は、角錐状石器6点、角錐状石器未製品3点、搔器1点、削器4点、加工痕有剥片13点、使用痕有剥片11点、剥片71点、碎片101点、石核4点である。サヌカイト製は合計188点、チャート製は合計26点となっている。小ブロック単位での点数はC1から84点、C1outからは9点、C2からは16点、C2outからは1点、C3からは18点、C3outからは6点、C4からは75点、C4outからは5点が出土している。

石器類ブロックDは、南北約12m、東西15mの範囲で、散漫に石器類が分布するが、K・L6区周辺にやや集中する。礫群などは発見されていないが、土壌1基がブロック南にはずれて発見されている。石器類ブロックDからは、合計34点が出土し、内訳は、角錐状石器1点、楔形石器1点、搔器1点、削器3点、加工痕有剥片2点、使用痕有剥片4点、剥片14点、碎片4点、石核4点である。サヌカイト製は27点、チャート製は7点となっている。なお、土壌中からは、フルイによって碎片4点が出土した。

石器類ブロックEは、合計5点があり、内訳はサヌカイト製使用痕有剥片1点、剥片2点と、チャート製碎片2点がある。

### 3. 石器類の種類別分布

上位文化層の石器類の器種別分布を観察してみよう。主要な器種の分布を観察するために、個々の石器の周辺に半径2mの円弧を描き、近接したものと離れたものを視覚的に区別することにより、その重なり具合で集中箇所を判断する。点数の多い剥片・碎片などは、ドットの視覚的観察で判断する。

#### 角錐状石器の分布（第495図）

角錐状石器と角錐状石器未製品は、それぞれ9点と3点が原位置を保って出土している。石器類ブロック毎では、Aで角錐状石器1点、Bで角錐状石器1点、Cで角錐状石器6点、未製品3点、Dで角錐状石器1点が出土している。角錐状石器と未製品を合わせた12点での石器類ブロック間占有率では、Aが8.3%、Bが8.3%、Cが75.0%、Dが0.83%となり、石器類ブロックCの優越が明かとなる。G4区とH15区で原位置を失って採集された角錐状石器各1点も、分布域を広げる。小ブロックでの点数は、A1に角錐状石器1点、B1に角錐状石器1点、C1に角錐状石器3点と未製品2点の合計5点、C3



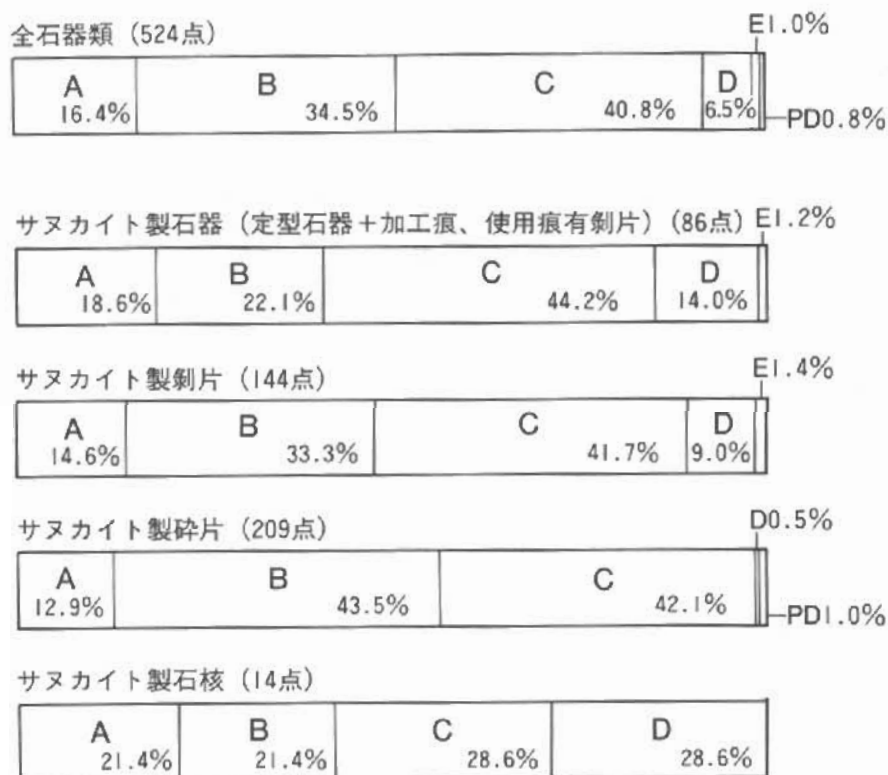
に未製品1点、C4に角錐状石器3点、Dに角錐状石器1点となる。ここでも、小ブロックC1とC4の2箇所に集中し、遍在傾向が顕著に認められる。石器類ブロックC内の角錐状石器・未製品には、1つの角錐状石器が折断したものや、碎片が接合するものがある。石器類ブロックC内の角錐状石器・未製品の点数の多さの背景は、角錐状石器の整形加工が石器類ブロックC内でおこなわれた結果であると考えられる。

**ナイフ形石器の分布（第495図）**

ナイフ形石器は、サヌカイト製・チャート製とも1点ずつ出土している。サヌカイト製ナイフ形石器は、石器類ブロックBの小ブロックB2で出土した。チャート製ナイフ形石器は、石器類ブロックAの小ブロックA1outで出土した。チャート製ナイフ形石器は、単独個体石器であるが、その形態から、下位文化層からの「浮き上がり」である可能性が高い。

**搔器の分布（第496図）**

搔器は、サヌカイト製が3点、チャート製が2点の合計5点が出土している。石器類ブロックAでチャート製搔器が1点、石器類ブロックBでサヌカイト製搔器が1点、チャート製搔器が1点の合計2点、石器類ブロックCでサヌカイト製搔器が1点、石器類ブロックDでサヌカイト製搔器2点が出土している。各石器類ブロックに少量ずつ伴うことが知れよう。



第494図 上位文化層石器類別石器類ブロック間分布比

**削器の分布 (第496図)**

削器は、合計10点が出土している。サヌカイト製が7点、チャート製が3点である。石器類ブロックAでサヌカイト製2点、石器類ブロックBでチャート製1点、石器類ブロックCでサヌカイト製3点、チャート製1点の合計4点がある。石器類ブロックDでは、サヌカイト製2点、チャート製1点の合計3点が出土している。点数の多寡はあるが、どの石器類ブロックでも出土しているといえる。

**楔形石器の分布 (第495図)**

楔形石器は、サヌカイト製が1点のみ出土している。石器類ブロックDから出土した。

**礫器の分布 (第495図)**

礫器は、1点のみ石器類ブロックAから出土した。

**加工痕有剥片の分布 (第497図)**

加工痕有剥片は、サヌカイト製のみ20点が出土した。石器類ブロックAは2点、石器類ブロックBでは3点、石器類ブロックCでは13点、石器類ブロックDでは2点がある。石器類ブロック間の占有率では、Aが10%、Bが15%、Cが65%、Dが10%となり、石器類ブロックCの集中が明らかである。小ブロック単位でみると、A 1に2点、B 1に2点、B 2 outに1点、C 1に3点、C 3に1点、C 3 outに2点、C 4に6点、C 4 outに1点、Dに2点である。石器類ブロック単位では、すべての石器類ブロックに認められ、C 4での集中が目立つ。

**使用痕有剥片の分布 (第498図)**

使用痕有剥片は、合計35点、サヌカイト製25点、チャート製10点が出土した。石器類ブロックAではサヌカイト製5点、チャート製3点の合計8点があり、石器類ブロックBでは、サヌカイト製9点、チャート製2点の合計11点がある。石器類ブロックCではサヌカイト製10点、チャート製2点の合計12点、石器類ブロックDではサヌカイト製2点、チャート製2点の合計4点がある。特に石器類ブロック間の遍在は認められない。小ブロックでは、A 1にサヌカイト製5点、チャート製3点の合計8点、B 1にサヌカイト製5点、チャート製2点の合計7点、B 2にサヌカイト製1点、B 2 outにサヌカイト製1点、B 3にサヌカイト製2点、C 1にサヌカイト製2点、チャート製2点の合計4点、C 1 outにサヌカイト製1点、C 3にサヌカイト製2点、C 4にサヌカイト製5点、Dにサヌカイト製2点、チャート製2点の合計4点となる。

**剥片の分布 (第499図)**

剥片は、合計172点、サヌカイト製144点、チャート製28点が出土している。石器類ブロックAではサヌカイト製21点、チャート製8点の合計29点、石器類ブロックBではサヌカイト製48点、チャート製11点の合計59点、石器類ブロックCではサヌカイト製60点、チャート製11点の合計71点、石器類ブロックDではサヌカイト製13点、チャート製1点の合計14点、石器類ブロックEではサヌカイト製剥片2点がある。本来、点数の多い器種であるが、小ブロック単位でも、特に遍在傾向は認められない。

**碎片の分布 (第500図)**

碎片は、合計247点、サヌカイト製209点、チャート製38点が出土した。石器類ブロックAではサヌカイト製27点、チャート製9点の合計36点、石器類ブロックBではサヌカイト製91点、チャート製9点の合計100点、石器類ブロックCではサヌカイト製88点、チャート製13点の合計101点、石器類ブロックDではサヌカイト製1点、チャート製3点の合計4点、石器類ブロックEではチャート製2点がある。石器類分布の一般傾向を決定するほど点数の多い器種で、特に遍在傾向は認められない。角錐状石器の調

整碎片と考えられるものが小ブロックA1・B1・C1・C4に認められる。

#### 石核の分布 (第501図)

石核は、合計19点、サヌカイト製14点、チャート製5点が出土した。石器類ブロックAではサヌカイト製3点、チャート製2点の合計5点、石器類ブロックBではサヌカイト製3点、チャート製3点の合計6点、石器類ブロックCではサヌカイト製4点、石器類ブロックDではサヌカイト製4点がある。小ブロックでは、A1にサヌカイト製2点、チャート製2点の合計4点、A1outにサヌカイト製1点、B1にサヌカイト製1点、チャート製1点の合計2点、B1outにサヌカイト製1点、チャート製1点の合計2点、B2にサヌカイト製1点、B3outにチャート製1点、C1にサヌカイト製1点、C1outにサヌカイト製1点、C4にサヌカイト製2点、Dにサヌカイト製4点となる。

#### 4. 接合資料の分布

上位文化層の接合資料は、個体識別・接合作業の困難さによって、サヌカイト・チャート共、貧弱である。サヌカイト製接合資料は、合計で7群が認められたに過ぎない(第505図)。チャート製接合資料は、合計で4群があるに留まる(第506図)。

**接合資料F8S2**は、石核1点と剥片2点の合計3点からなる接合資料である。すべてが小ブロックB1に集まっている。

**F8S2** F8.26(CORE B1)+F8.40(F B1)+F7.31(F B1)

**接合資料G7S1**は、石核1点と剥片1点の合計2点からなる接合資料である。いずれも小ブロックC4にある。

**G7S1** G7.29(CORE C4)+G7.44(F C4)

**接合資料G7S2**は、剥片1点と碎片1点の合計2点からなる接合資料である。小ブロックC4から出土している。

**G7S2** G7.33(C C4)+G7.34(F C4)

**接合資料H6S1**は、角錐状石器1点と角錐状石器1点の合計2点からなる接合資料である。石器類ブロックAの小ブロックA1と石器類ブロックCのC1に分かれて存在し、おそらくC1で製作されていた角錐状石器が折断し、その基部側を石器類ブロックAに持ち出したのであろう。

**H6S1** F5.29(Kaku A1)+H6.25(Kaku-I C1)

**接合資料H7S1**は、角錐状石器2点と碎片1点の合計3点からなる接合資料である。いずれも石器類ブロックCのC1とC1outの隣接する小ブロックから出土した。

**H7S1** H7.43(Kaku C1)+I7.3(Kaku C1)+I7.15(C C1out)

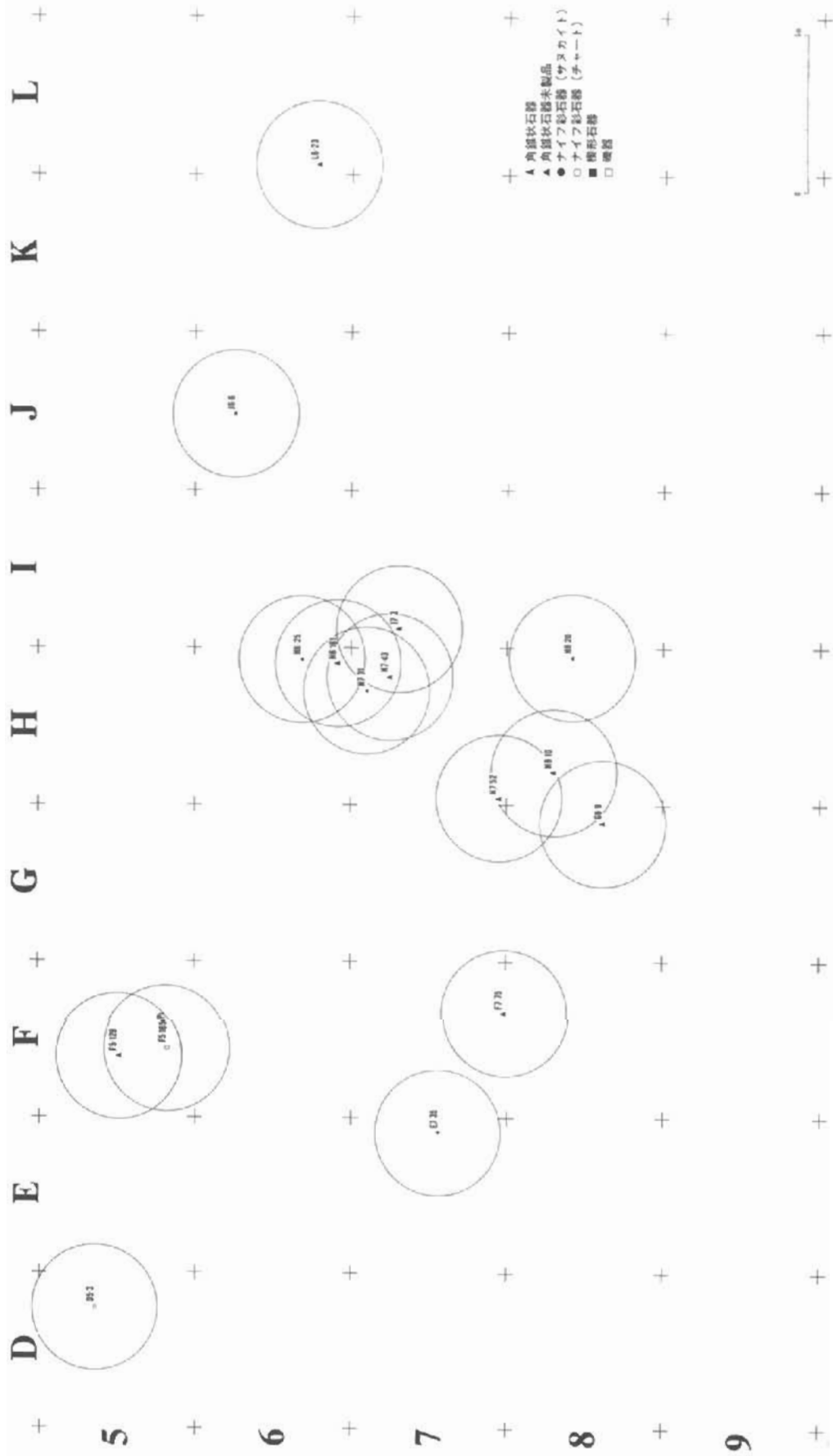
**接合資料H7S3**は、角錐状石器未製品1点と碎片1点の合計2点からなる接合資料である。石器類ブロックCの小ブロックC1とC1outから出土した。

**H7S3** H7.31(Kaku-I C1)+H6.12(C C2)

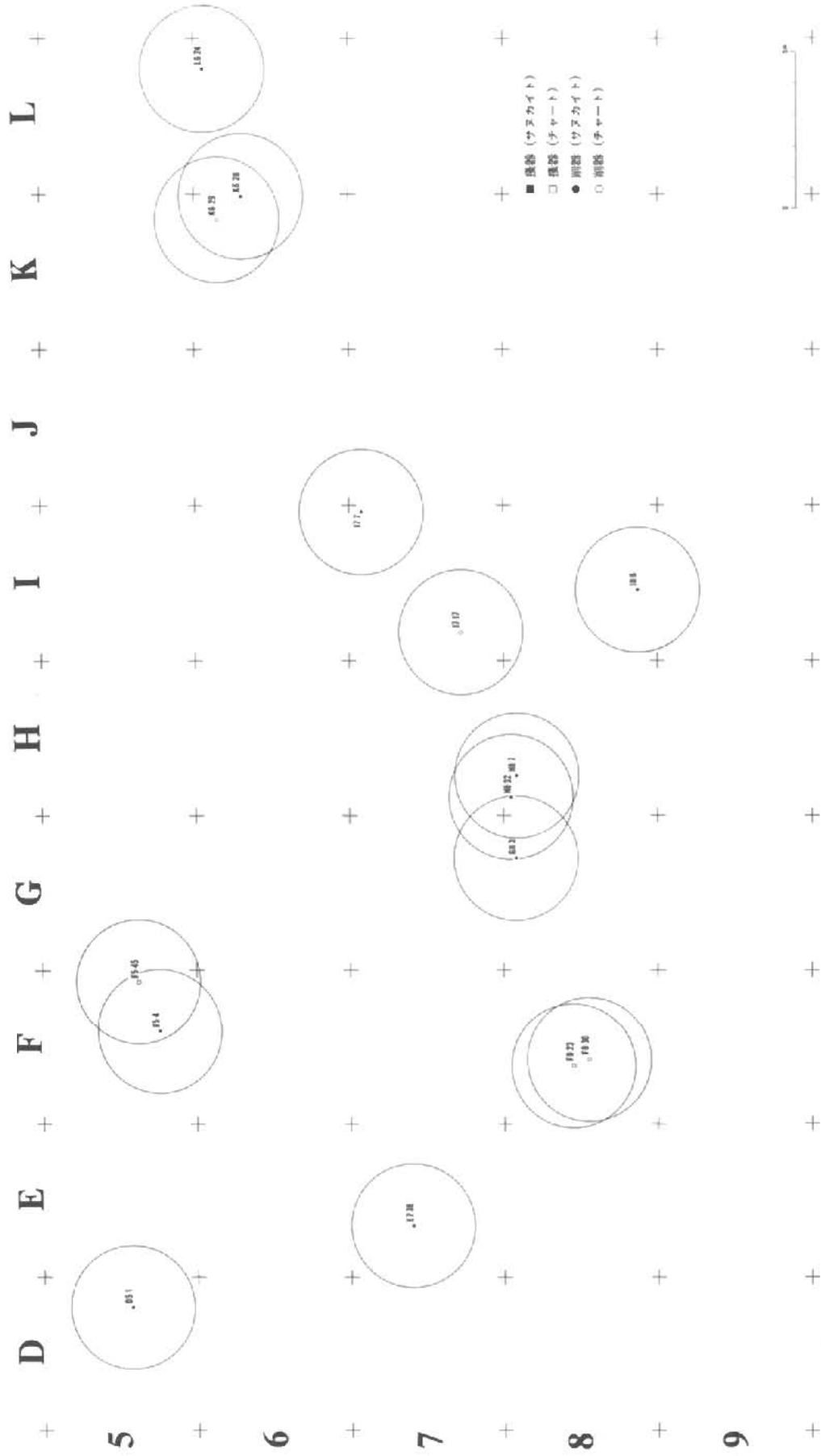
**接合資料H8S1**は、碎片2点からなる接合資料である。いずれも石器類ブロックCのC4小ブロックから出土した。

**H8S1** H8.5(C C4)+H8.6(C C4)

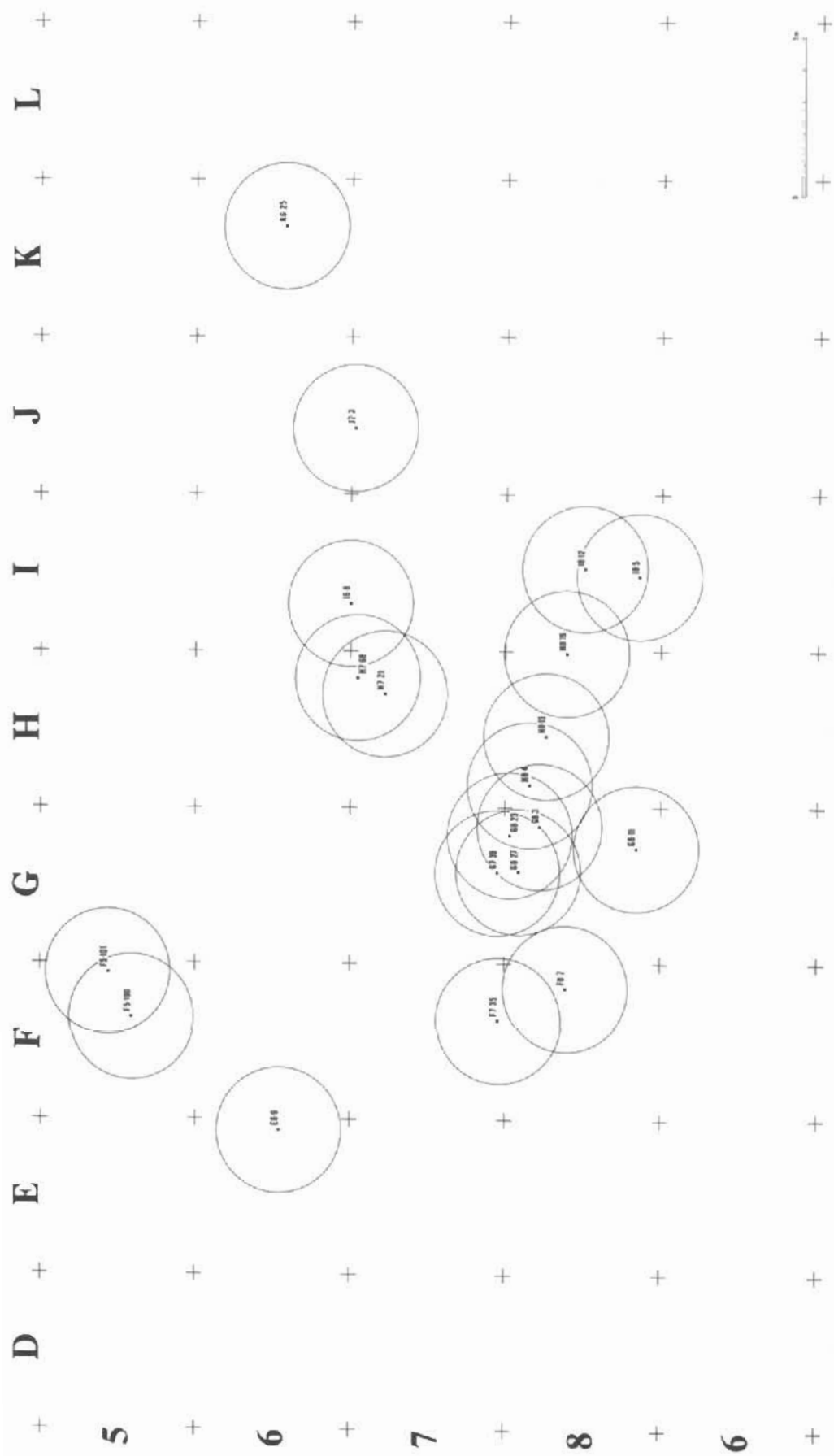
**接合資料F5C1**は、石核1点と剥片2点の合計3点からなる接合資料である。いずれも石器類ブロックAの小ブロックA1から出土した。



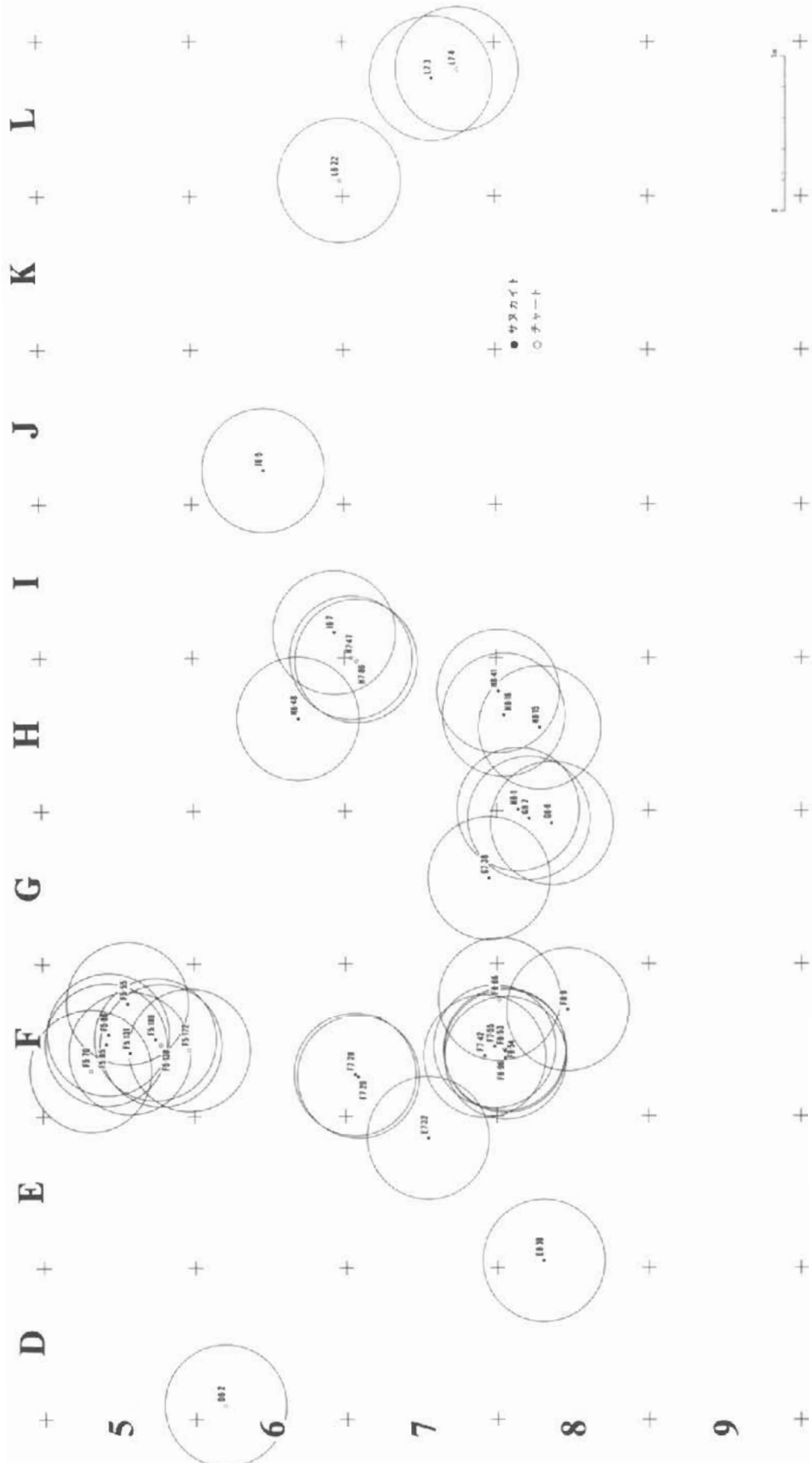
第495図 角錐状石器・ナイフ形石器・楕円形石器・礫器分布図



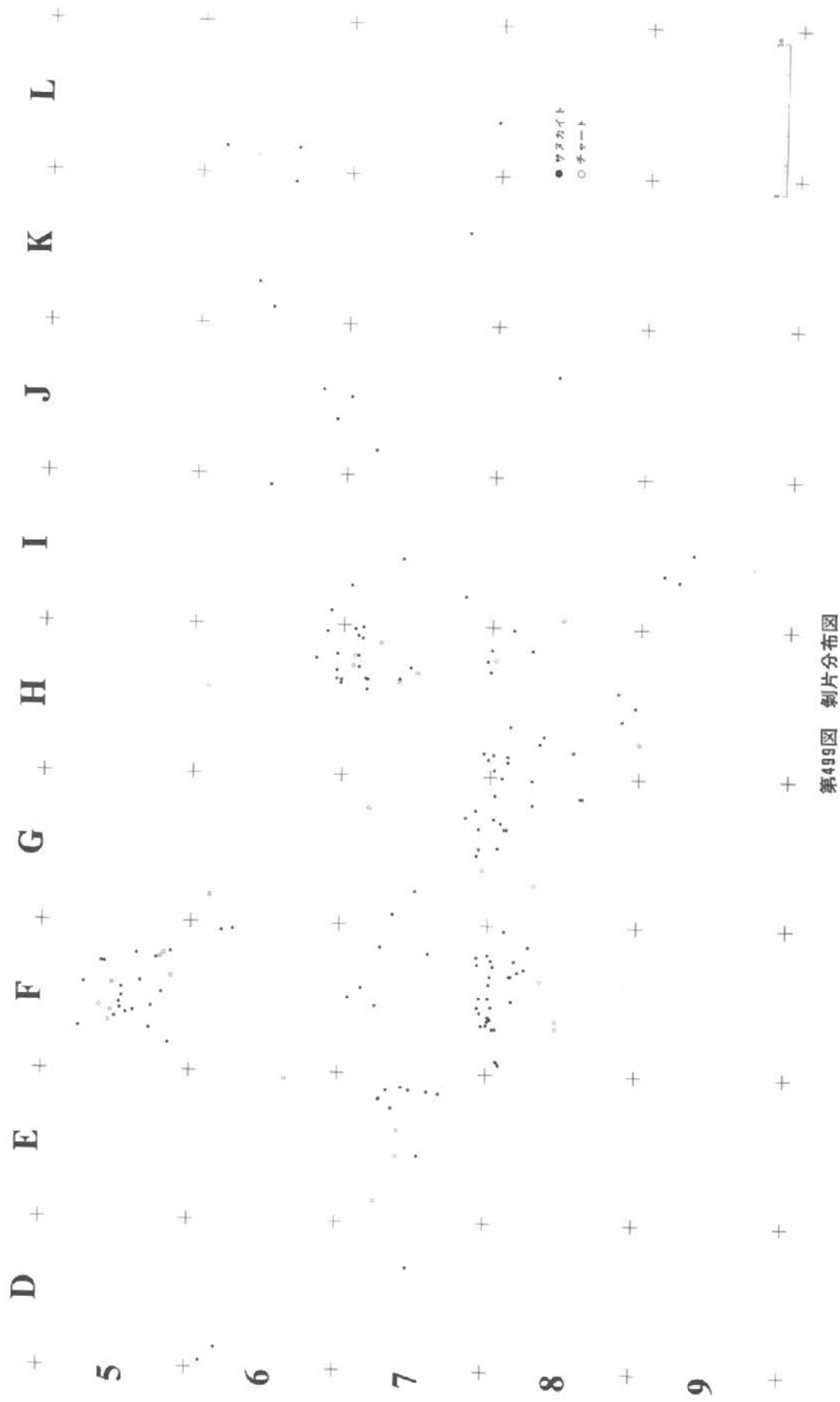
第496図 攪器・削器分布図



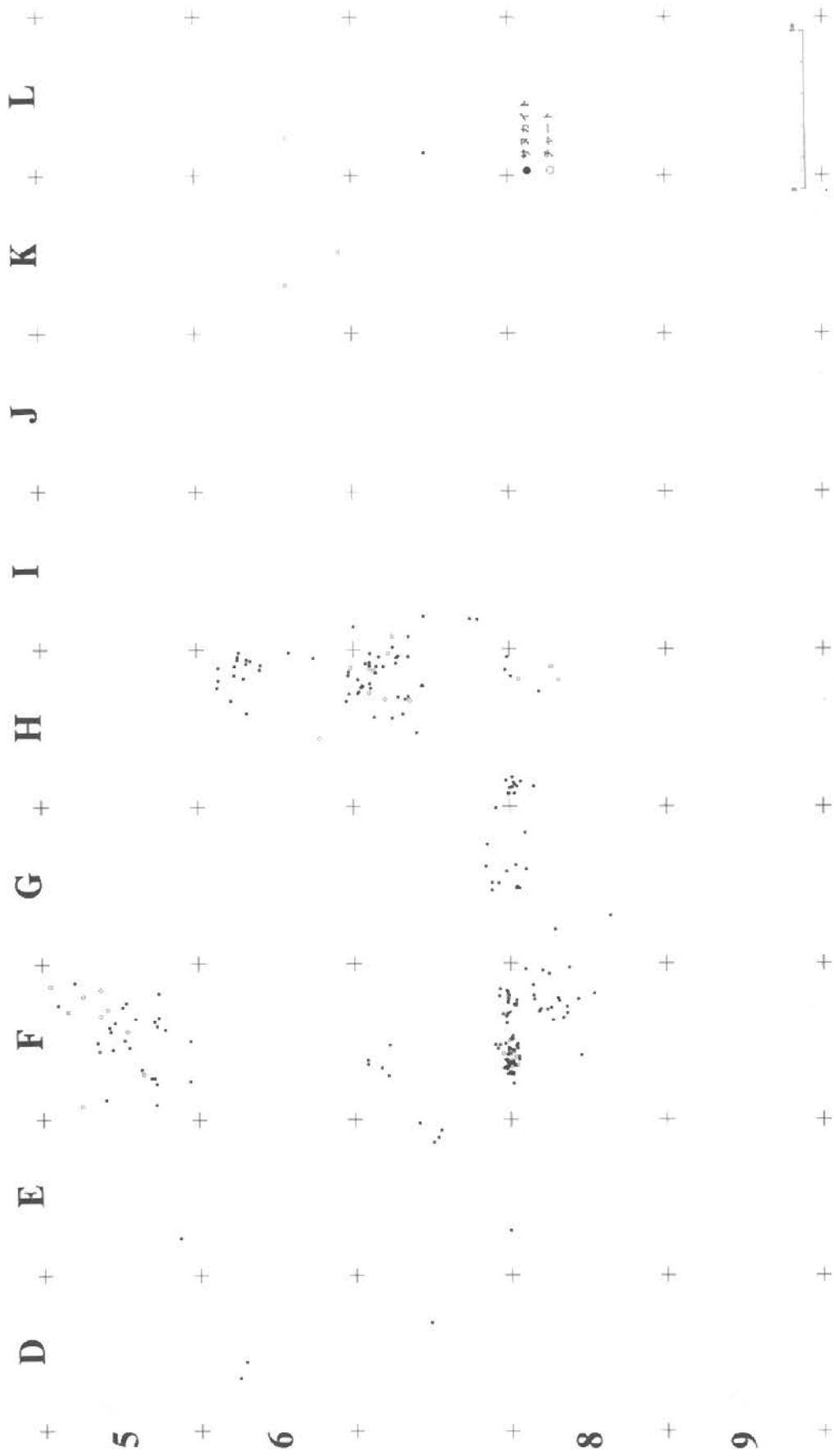
第497図 加工痕有剥片分布図

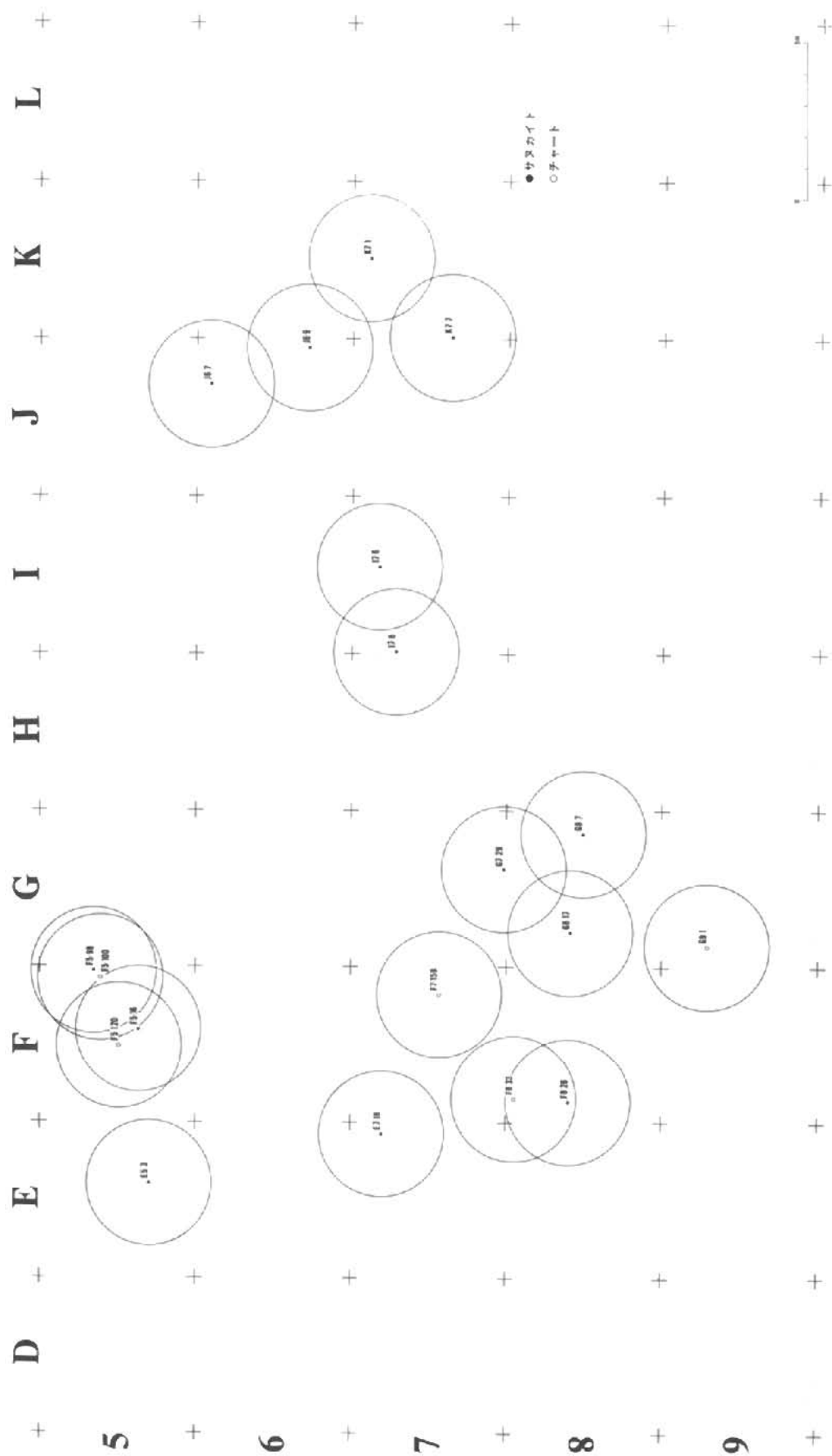


第498図 使用痕有剥片分布図

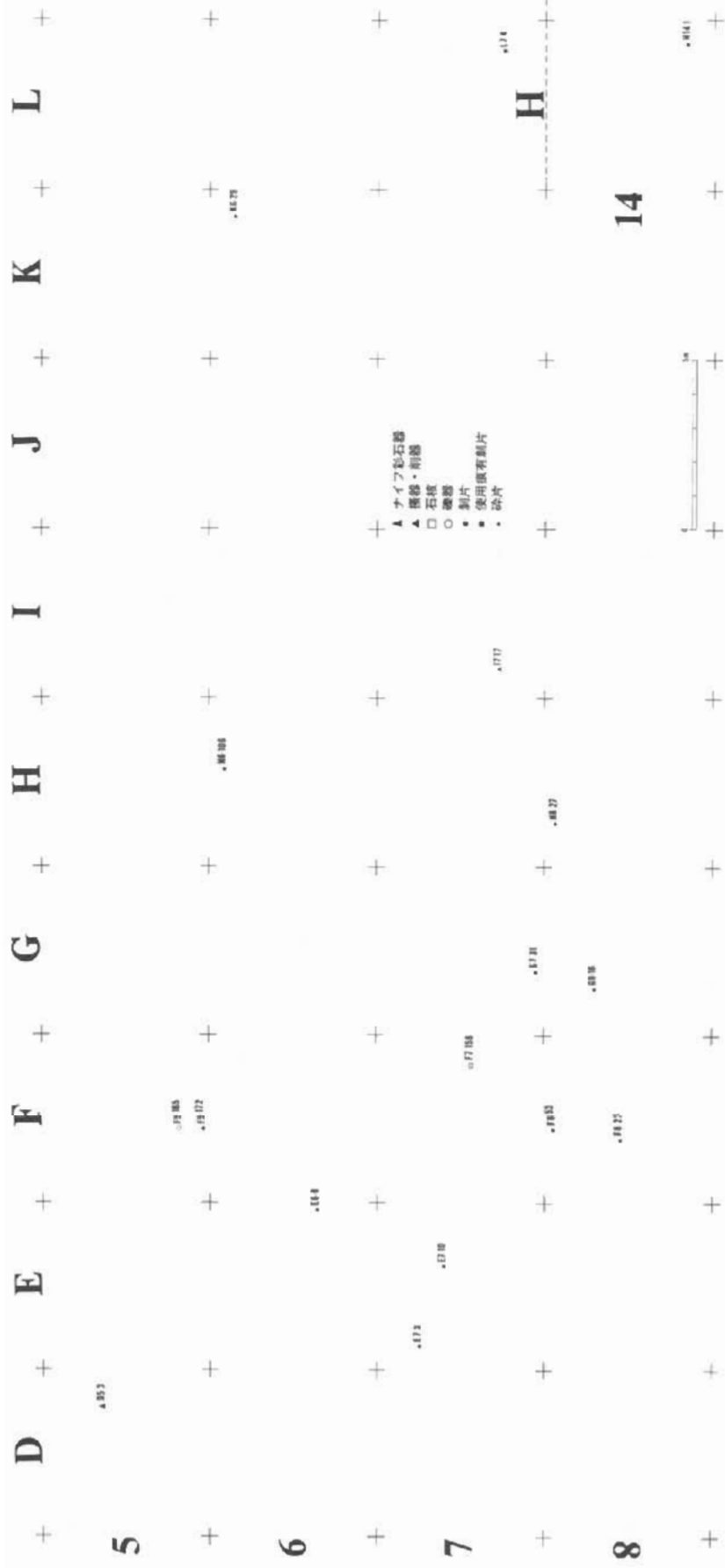








第501図 石核分布図



第502図 チャート等製単独石器分布図

F5C1 F5.6(F A1)+F5.50(F A1)+F5.120(CORE A1)

接合資料F5C5は、使用痕有剥片2点からなるB種接合資料である。いずれも石器類ブロックAの小ブロックA1から出土した。

F5C5 F5.70(UF A1)+F5.138(UF A1)

接合資料F8C1は、石核1点と剥片2点からなる接合資料である。いずれも石器類ブロックBの小ブロックB1から出土した。

F8C1 F8.24(F B1)+F8.33(CORE B1)+F8.37(F B1)

接合資料H7C1は、使用痕有剥片2点からなるB種接合資料である。いずれも石器類ブロックCの小ブロックC1から出土している。

H7C1 H7.47(UF C1)+H7.86(UF C1)

サヌカイト製接合資料7群中には、角錐状石器のB種接合例が2例あり、この内の1例には碎片が接合する。いずれも中央から折損しており、角錐状石器の器形整形時の失敗による破損例であろうと思われる。角錐状石器未製品や加工痕有剥片と碎片の接合例は、角錐状石器の調整段階の破損品であろう。碎片どうしの接合例は、角錐状石器の調整碎片である可能性が高い。石核と剥片の接合したのは2例のみで、サヌカイト製接合資料から窺えるのは、剥片剥離作業の低調さと角錐状石器の整形作業の存在である。

角錐状石器の整形作業は、各石器類ブロックで行なわれたものと考えられるが、石器類ブロックCのC1・C4あたりに集中する傾向が窺える。これらの小ブロックでは碎片の点数・組成比率が高い。剥片剥離作業は、石器類ブロックB周辺で僅かに認められるに留まる。基本的には、同一の石器類ブロック中で分布は完結しているため、整形作業・剥片剥離作業とも固定的な場所で行なわれていた可能性が高い。

石器類の接合関係によって石器類ブロック間の関係を検討しよう。石器類ブロック間の接合例は僅かで、ほとんどが同一石器類ブロック内に留まっている。石器類ブロック間の接合例は、僅かに1例、角錐状石器とその未製品の折断接合で、石器類ブロックAとCの間で認められた。接合資料の共有は、両ブロックの時間的共存を示すが、その相互の関係を示すには不十分である。

チャート製接合資料は、僅かに4例しか存在しない。この内の2群はB種接合で、2群が剥片剥離作業段階のものである。剥片剥離作業段階の接合資料は、石器類ブロックA・Bにあり、小規模ではあるが剥片剥離作業が行なわれている。

### 5. 石器類ブロック別の石器・石器類組成

上位文化層から出土した合計524点の石器類・石器の石器類ブロック別の組成を検討してみよう。第89表に石器類の組成を、第87表に石器の組成を示す。

石器類ブロック毎の総点数は、石器類ブロックAが合計86点、Bが合計181点、Cが合計214点、Dが合計34点、あとEに5点、PDに4点がある。ブロック間占有率は16.4%、34.5%、40.8%、6.5%、1.0%、0.8%となり、石器類ブロックC、B、Aの順で量的に充実している。この3石器類ブロックは、分布的にも完結性が高く、分析の基本単位と見なせるであろう。数量の多い剥片と碎片は、ほぼこの比率通りに分布するが、石器類ブロックBでの碎片の比率が高いことが注目される。石核は、サヌカイト製がまんべんなく各ブロックで出土している。

定型的石器の石器類ブロック間分布状況は、角錐状石器が石器類ブロックA、B、C、Dで出土したが、Cに3分の2が集中する。サヌカイト製・チャート製の定型的石器各器種は、AからDまでの各石器類ブロックに散在する。サヌカイト製加工痕有剥片は石器類ブロックCに集中する傾向がある。使用痕有剥片は一般的な傾向にしたがう。チャート製石器類は、点数が少なく、傾向を読みとることに困難がある。石器全体では、合計86点のうち石器類ブロックAに16点、Bに19点、Cに38点、Dに12点の分布し、占有率では19%、22%、44%、14%となる。

全体として、角錐状石器の分布がやや偏在し、また角錐状石器などの調整碎片も同様の傾向を認めるものの、どの石器類ブロックもほぼ均質な石器組成であると認めることができる。どの石器類ブロックでも剥片剥離作業は活発とはいえない。上位文化層での石器類を巡る作業は、偏在が激しいといえよう。

サヌカイト製石器類の組成比では、定型的石器と加工痕・使用痕有剥片を含めた石器、剥片、碎片、石核の占有率を比較してみると、剥片と石核の比率が対応せず、石核が久しく少ないことに気がつく。剥片の遺跡内での生産が不活発で、サヌカイト製剥片のほとんどが搬入されているものと考えられよう。角錐状石器の素材剥片は、従来の瀬戸内系横長剥片剥離技術の所産とは考えられない厚手の板状剥片が多用されており、この生産地は板井寺ヶ谷遺跡外に求めなければいけない。石核の素材は、角錐状石器の素材の形状から考えて、かなり大型とならざるを得ないが、遺跡内には存在しない。

板井寺ヶ谷遺跡で出土した上位文化層のサヌカイトは、二上山産が約9割を占めることが判明してい



第503図 上位文化層石器類ブロック石器組成比

る(藁科・東村、本書第VII章第8節)。一方、チャートは在地石材であり、板井寺ヶ谷遺跡下位文化層の主要石材となっていたものだが、上位文化層での組成比率は低い状態に留まっている。本来大量に使用されて当然のチャート材が僅かなことから、上位文化層石器群の出自を予測することが可能かも知れない。

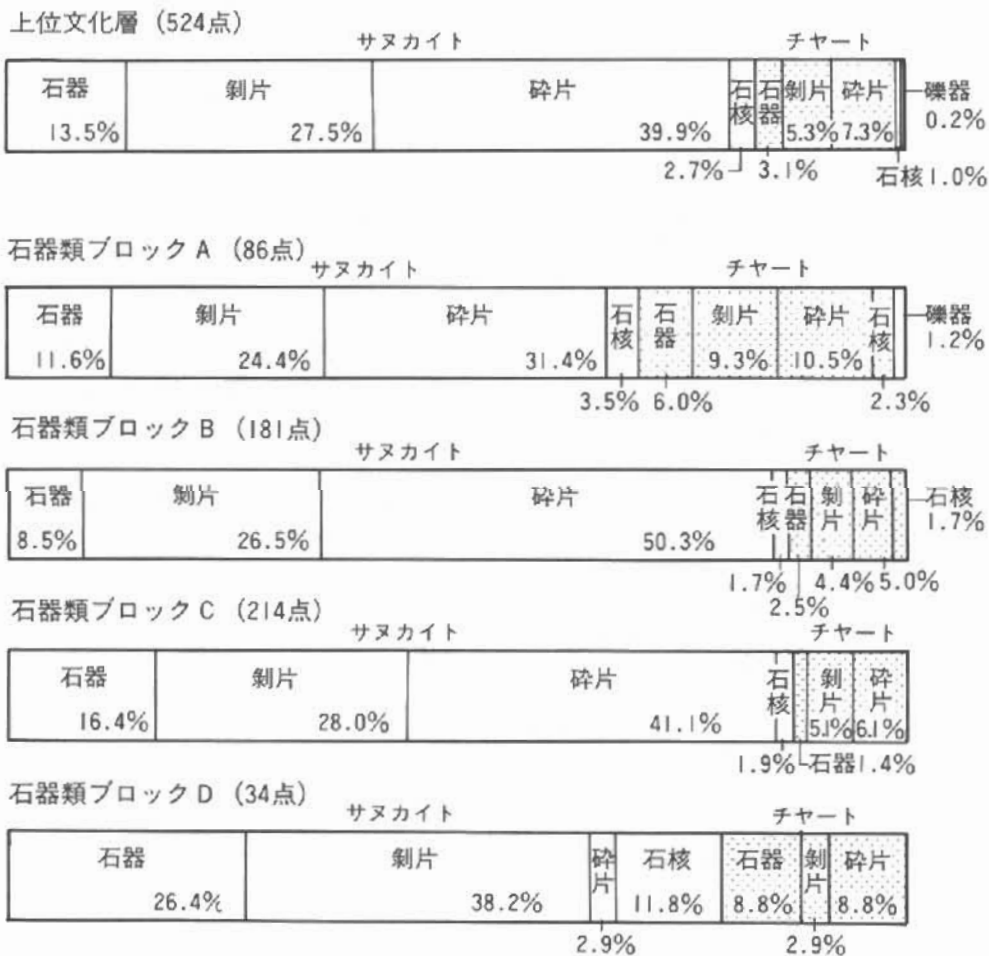
6. ユニットの設定

上位文化層では、分布域の一部が既に削平されていること、下位文化層の石器群が「浮き上がり」をしていることから、十分な検討が果たせたとはいえない。前節までの上位文化層での石器類と遺構の分布状況の分析を経て、その成果を再構成しつつ、ここではユニットの設定を行ないたい。

石器類の分布

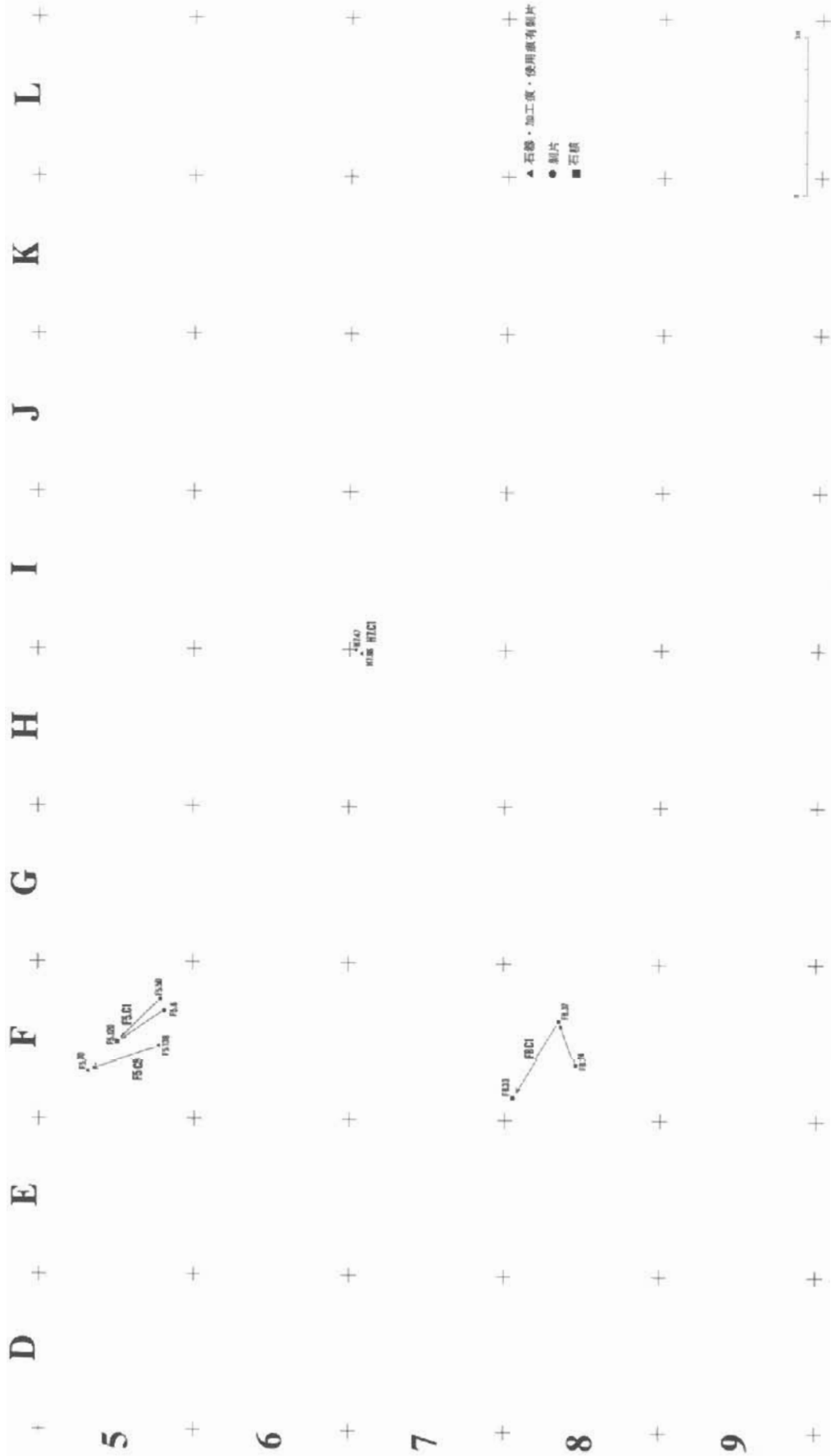
上位文化層の石器類分布は、大まかに石器類ブロックAからDの4つの石器類ブロックに分けることができる。あと石器類ブロックEがあるが、西に未掘部を抱え十分な評価が不可能である。また、遺跡の北東部で上位文化層相当層が削平されていることから、遺跡北半が失われている可能性もあり、この石器類ブロックの設定は、現状の石器類分布の視覚的判断によっておこなったものである。

各石器類ブロックの分布範囲の大きさは、中心的な集中部と散漫分布部分を含めて、いずれも直径10m以上となる。石器類ブロック間には数mの空白部が存在することから、石器類ブロックの視覚的分布上



第504図 上位文化層石器類ブロック石器類組成比





第506図 チャート等製接合資料分布図



第87表 上位文化層ブロック別石器組成表 (点数)

	SANUKITE										CHERT etc				PEBBLE		
	kaku	kaku-i	KN	piece-	EN	SC	RF	UF	KN	EN	SC	UF	KN	EN	SC	UF	CHOPPER
A1	14	0	0	0	0	1	2	5	0	1	0	3	0	1	0	0	1
A1out	2	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
A(TOTAL)	16	0	0	0	0	2	2	5	1	1	0	3	1	1	0	0	1
B1	12	1	0	0	0	0	2	5	0	1	1	2	0	1	1	2	0
B1out	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
B2	3	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
B2out	2	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
B3	2	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
B3out	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
B(TOTAL)	19	1	0	1	0	0	3	9	0	1	1	2	0	1	1	2	0
C1	11	3	2	0	0	0	3	1	0	0	0	2	0	0	0	0	0
C1out	2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0
C2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
C2out	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
C3	4	0	1	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
C3out	3	0	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
C4	17	3	0	0	1	2	6	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0
C4out	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
C(TOTAL)	38	6	3	0	1	3	13	9	0	0	1	2	0	0	1	2	0
D	12	1	0	0	1	1	2	2	0	0	0	1	0	0	1	2	0
E	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SITE	86	9	3	1	1	3	7	20	25	1	2	3	10	2	3	10	1

第88表 上位文化層ブロック別石器類組成表 (%)

	SANUKITE										CHERT etc				PEBBLE		
	kaku	kaku-i	KN	piece-	EN	SC	RF	UF	KN	EN	SC	UF	KN	EN	SC	UF	CHOPPER
A(TOTAL)	16	6.3%	.0%	.0%	0%	12.5%	12.5%	33.3%	6.3%	6.3%	.0%	18.3%	0%	6.3%	.0%	6.3%	6.3%
B(TOTAL)	19	5.3%	.0%	5.3%	.0%	5.3%	15.8%	47.4%	.0%	5.3%	5.3%	10.5%	5.3%	.0%	10.5%	.0%	.0%
C(TOTAL)	38	15.8%	7.9%	.0%	2.6%	7.9%	34.2%	23.7%	.0%	.0%	2.6%	5.3%	.0%	.0%	5.3%	.0%	.0%
D	12	8.3%	.0%	8.3%	8.3%	16.7%	16.7%	16.7%	.0%	.0%	8.3%	16.7%	.0%	.0%	16.7%	.0%	.0%
E	1	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	100.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%
SITE	86	10.5%	3.5%	1.2%	1.2%	8.2%	23.5%	29.4%	1.2%	2.4%	3.5%	11.8%	1.2%	2.4%	3.5%	11.8%	1.2%



の単位性は明らかである。

石器類ブロック間には構成石器類の点数差があり、石器類ブロックCが大きく、あとの石器類ブロックはB・A・Dの順となる。石器類の集中のあり方は、石器類ブロックA・B・Cには求心的集中状況が認められるが、石器類ブロックDは散漫な分布のみで構成されている。石器類ブロック内での剥片剥離作業はいずれも低調で、僅かに石器類ブロックBでチャート製・サヌカイト製接合資料の存在によって、剥片剥離作業の存在が認められたに留まる。石器類ブロックA・B・Cでは、剥片剥離作業の展開は低調であるが、いずれも大量の碎片を伴い、石器類の調整が行なわれた可能性が高い。角錐状石器が石器類ブロックA～Dで検出され、角錐状石器の碎片との接合資料や角錐状石器未製品と碎片の接合資料が石器類ブロックCに認められることから、角錐状石器の調整作業が行なわれた可能性が高い。角錐状石器は石器類ブロックCに多く出土し、同石器類ブロックCが石器類の総点数も最大である。礫石器は、石器類ブロックAで1点が出土したに留まる。その他の搔器・削器・加工痕有剥片・使用痕有剥片は、点数も少ないため傾向を読みとるのに困難があるが、強いてみれば、石器類ブロックA～Dに組成石器類点数に比例するように分布している。

単位性の明らかな石器類ブロックA・B・Cの3つには、石器類ブロックの大きさ、分布状況、組成、剥片剥離・石器調整作業の内容に共通した様相が認められるが、石器類ブロックDは異なることが明らかとなった。

#### 礫群と土壌の配置

上位文化層の遺構の配置と石器類ブロックの関係を見てみよう。上位文化層の遺構としては、礫群と土壌がある。

上位文化層の礫群は、大きく観察して3群に分けることが可能である。礫群A 1～3、礫群B 1～3、礫群C 1 a・b～5の3群である。各礫群周辺に2mの円弧を描いた場合、お互いに円弧を重ねる距離関係にあることから群分類が可能であった。集中間には、数mの空白帯が形成されている。各礫群集中の中心範囲は、直径5～10mである。この3群は、石器類ブロックとはほぼ重なる位置に配置されている。礫群A群は石器類ブロックAと、礫群B群は石器類ブロックBと、礫群C群は石器類ブロックCと重なった位置にあることから、両者の形成には共通した背景を有するであろう事が考えられる。礫群の構成礫は、受熱赤化した破砕礫がほとんどで、炉の位置は確認できなかったが、火の使用とは強い結びつきがある。石器類ブロックA・B・Cでは、それぞれで火の使用があったことを示す。礫群の機能は、焼け礫を利用した調理作業にあるとされているが、それぞれの石器類ブロックに礫群があることは、各石器類ブロックでの調理空間の存在を示していると考えられる。

土壌は、これら礫群とは位置を異にし、礫群や石器類ブロックの中心をはずれた石器類ブロックDの南にはずれて配置されている。土壌内には碎片以外の遺物はなく、周辺からも石器類はほとんど出土していないことから、礫群や石器を使用する機能とは異なるのかも知れない。調査時の所見では土壌の機能を特定できなかったが、通常、土壌は墓または貯蔵穴として推定されよう。土壌の浅い長楕円の形状から推測すれば、貯蔵穴よりも墓穴の可能性が考えられるかも知れない。石器類ブロックDと土壌の組合せは、他の礫群を伴う石器類ブロックとの間に、違いがあると考えられ、その相違点は調理空間を持たず、墓ともおぼしき土壌を有する点である。

#### ユニットの数と機能

世帯に保持された可能性の高いユニットの条件は、世帯にふさわしい独立した空間が確保できること、

火処を保持すること、十分な石器組成を有すること、剥片剥離作業が認められること、などが考慮できる。今までの分析結果で、これらの条件をどこまで満たしたかという点で、石器類ブロックA～Dを見直し、石器類ブロックに機能と性格を明らかにしたユニットに構成しなおしてみよう。

石器類ブロックは、すべて直径10m以上であり、空間的独立性もあることから、居住空間として十分な広さが確保されている。火処の位置は不明であるが、火の使用と関係のある礫群は、石器類ブロックA・B・Cに伴い、礫群が調理施設であれば、いずれも複数回の調理作業が行なわれたことになる。上位文化層の石器組成は単純で、角錐状石器に僅かの搔器・削器、加工痕・使用痕有剥片があるに過ぎない。角錐状石器は、石器類ブロックA～Dのすべてで出土し、その他の石器類も分散する。角錐状石器の調整作業が石器類ブロックA～Cで行なわれたらしい。剥片剥離作業はすべての石器類ブロックで低調である。各ブロックで、調理作業の存在を明示できるものはない。剥片剥離や石器調整作業以外の作業を示すものとして、礫器1点が石器類ブロックAから出土している。また、他と趣を異にする石器類ブロックDの南にはずれて土壌1基がある。

前節までの分析結果から、上位文化層の基本的な遺構と石器類分布の有機的な構造としての世帯に保持されたユニットは、石器類ブロックA・B・Cに認める事ができる。石器類ブロックDは、前3者と異なった性格のユニットと考えたい。上位文化層では、ユニットA～Cに3世帯の居住を認める事ができよう。ユニットDは、世帯に保持されない空間で、散漫に石器類が分布する。一応、特定の世帯に保持されない、共同作業空間として性格を与えるが、他のユニットにない土壌が近くにあることから、墓や共同祭祀などの空間であったという可能性もあると考えられよう。

## 7. 小 結

上位文化層には、遺構として明示的なものは、礫群と土壌があった。礫群は、3群にまとめられ、やや離れて土壌が配置される。礫群は、小受熱破碎礫で構成され、火との関係が強い遺構である。調理施設の可能性が示唆されよう。土壌は、機能特定に至らないが、より構築性の高い遺構として、重要である。

遺物の分布状況は、礫群に重なるように3群に分けられる部分と、散漫な東部の分布部分の4つから構成されている。礫群と重なる3群は、角錐状石器とその調整碎片が多数集中し、角錐状石器の調整作業が行なわれた可能性が高い。

遺物分布と遺構の配置から、一定の空間を占有し、角錐状石器など一定の石器組成を保持し、石器調整作業を行なったような均質さの認められる3群が抽出された。これらは、その内容から、世帯により保持された単位を示すものと推定される。また、東部の散漫分布部では、石器の調整作業は認められず、少しはなれて土壌があり、礫群もないことから、世帯ではなく、なんらかの特殊な作業の行なわれた空間であると考えられた。

分析上多数の制約があったものの、遺構と遺物の分布状況の構造的な分析から、3つの世帯ユニットと1つの作業ユニットの存在を明らかにすることができた。 (山口)

## 第VI章 板井寺ヶ谷遺跡をめぐる諸問題

### 第1節 板井寺ヶ谷遺跡の石器群

#### 1. 板井寺ヶ谷遺跡の2時期の石器群

西南日本の、特に近畿地方中央部や東部瀬戸内で、石器群が層位的に検出された事例は極めて少ない。従来、編年作業をおこなう根拠を石器群の形態差や剥片剥離技術の属性の組合せに求めてきたが、板井寺ヶ谷遺跡や七日市遺跡のような良好な材料を基に、編年網の再構築が可能となると期待できよう。

板井寺ヶ谷遺跡では、始良Tn火山灰は厚いところでは約20cm、薄いところでは約5～3cmの層厚で存在するが、この上下から石器群が出土し、始良Tn火山灰上の暗灰色火山灰層中のものを上位文化層、下の黄色粘土層中のものを下位文化層とした。

板井寺ヶ谷遺跡は、地形要素の境界域にあり、土層堆積環境にきわめて好運な状況を提供している。まず、始良Tn火山灰など数枚の火山灰が調査区の全域で遺存していたこと、南半には泥炭層が発達し、放射性炭素年代測定が行えたことなどにより、遺跡内の旧石器時代相当期の土層の前後関係を確定するとともに、絶対年代を与えることができた。上位文化層の放射性炭素年代測定結果は、23,000～20,000年前の間、下位文化層は約25,500年前と推定される。ちなみに、板井寺ヶ谷遺跡での始良Tn火山灰降灰年代の測定結果は、ほぼ23,500年前となった。

上位文化層は、始良Tn火山灰の風化・土壌化の始まった部分である暗灰色火山灰層中に含まれ、始良Tn火山灰降灰後、別の供給源からの土壌供給が始まる前に、火山灰層表面に遺された遺物が巻き込まれるように埋没したものと考えられる。上位文化層の分布範囲で、始良Tn火山灰純粹層と暗灰色火山灰層の両方を合わせて本来の始良Tn火山灰降灰厚である層厚約20cmとなる。このような状況は、始良Tn火山灰降灰後、そう時間をおかない時期を想定する根拠となった。

下位文化層は、始良Tn火山灰下の、灰色粘土上部が風化した黄色粘土層中に包含され、また泥炭IIIと灰色粘土の層理面上にもあることから、始良Tn火山灰降灰よりもかなり以前であることが知れ、この時間内で黄色粘土層中に埋没したものと考えられた。

両文化層の分離は、間に約5cm前後の始良Tn火山灰純粹層があることが確実な判断基準となった。層質が暗灰色火山灰層・始良Tn火山灰層と黄色粘土層では、土質が異なり、両文化層の分離は発掘時に行い得る。

ところが、上位文化層中には、特にチャート等製石器類中に多数の下位文化層と同一個体のものが認められ、下位文化層からの浮き上がりがあることが知れた。この浮き上がり現象は、黄色粘土上に遺された下位文化層の遺物のうち、埋没せずに露頭していた一部が、始良Tn火山灰降灰時に火山灰層中に巻き込まれたものと考えられた。逆に、土質の関係から上位文化層のものが下位文化層に沈下する現象は認めにくい。個体識別作業を行なった結果、チャート等製のものを中心に、上層に紛れた下位文化層所属の石器類をかなり捕捉できたので、これらは上位文化層の石器類組成から排除する事ができたが、個体識別の困難なサヌカイト製のものについては、問題を残している。

分析資料の取扱は、原位置を保って出土した資料をA資料、上層に遊離した資料をB資料、表採品をC資料とし、それぞれの信頼性に鑑みて、分析を進めた。下位文化層の分布論的検討にはA資料のみを、

石器の技術論的検討にはA・B資料に層位の明確なC資料を併せて、分析対象とした。上位文化層の分布論的検討は、下層からの浮き上がりを排除した残りのA資料のみを、石器の技術論的検討はA資料と層位の明らかなC資料を併せて、分析対象とした。

## 2. 下位文化層の石器群

### a. 石器群の組成

下位文化層の石器群の組成は、原位置を保ったものの総点数で2353点におよぶ。ナイフ形石器・搔器・削器・楔形石器・錐状石器・彫器・加工痕有剥片・使用痕有剥片・斧形石器・局部磨製石斧・礫器・敲石・磨石・台石・剥片・碎片・石核・石核素材・原石破碎片がある。これらは、大まかに定型石器と加工痕・使用痕有剥片、剥片剥離作業・石器調整作業における付随生産物、礫石器類に区別することができる。

定型石器類のなかで数量的に多いのは削器であり、ナイフ形石器と搔器がこれに続く。その他の定型石器の点数は、数点ずつ組成されるに留まる。加工痕有剥片は、石器を技術形態学的に分類する際に、素材の形状や加工の度合、加工部位などに曖昧・不十分な点があり、いずれとも決せなかったものが一括して含まれる。使用痕有剥片は、定型石器と加工痕・使用痕有剥片を合わせた石器点数のほぼ半数を占める。ナイフ形石器や削器・加工痕有剥片等の中にも含まれた台形様石器とも比定できる一群は、形態的にも技術的にも斉一性が乏しいため、分離して一器種とはしなかったが、本石器群の位置づけのためには、重要な側面を代表している。付随生産物である剥片・碎片と石核は、全石器類の約82%を占める。礫器・敲石・磨石、台石といった礫石器類は、礫器と敲石が数点ずつ組成され、磨石と台石は僅かである。

剥片石器類の素材として、チャートとサヌカイトが主体を占め、僅かに鉄石英・頁岩・流紋岩・凝灰岩・砂岩がある。サヌカイトは、丹波山地中にある板井寺ヶ谷遺跡周辺に産出地が知られていない。チャートや他の石材は、基本的に堆積岩が多く、板井寺ヶ谷遺跡周辺の河床や中・古生層の露頭岩脈で認められるものである。遠距離からもたらされたサヌカイト材と、在地のチャート等の石材からなっていることが知れた。

剥片石器類の個別器種の観察を進めるなかで、個々の器種に含まれたサヌカイト製のものとチャート等製のものの間に、ほぼ全器種に渡って技術形態学的に差異があることが看取された。サヌカイト製定型石器や剥片が横長剥片を主体とし、チャート等製定型石器や剥片などが縦長剥片に主体があることなどは、下位文化層が、異なった石材による技術的背景を分けた2つの石器群で構成されるのではないかと、強く示唆した。

サヌカイト製石器群の組成は、ナイフ形石器・搔器・削器・楔形石器・錐状石器・彫器・斧形石器・加工痕有剥片・使用痕有剥片・剥片・碎片・石核がある。

サヌカイト製ナイフ形石器は、小型・極小型のものと中型のものに区別できる。国府型としての属性を完備したナイフ形石器はない。搔器は、いずれも調査区北半で出土し、やや異質な器種となっている。削器は、定型石器のなかで最大点数を誇る。斧形石器は、形態的にも特異な存在である。加工痕有剥片・使用痕有剥片は、横長剥片素材のものが主体であるが、この中の大型のものは、ナイフ形石器や定型石器よりも明らかに大型の石核から剥離されたものを素材としている。加工痕有剥片中の台形様石器とも見れる石器は、技術形態学的に斉一性に乏しい。使用痕有剥片は、サヌカイト製石器のほぼ55%を占める。

チャート等製石器群の組成は、ナイフ形石器・搔器・削器・楔形石器・錐状石器・加工痕有剥片・使用痕有剥片と剥片・碎片・石核・石核素材、さらに礫石器分類に含めた局部磨製石斧が挙げられよう。

チャート等製石器群のナイフ形石器は、縦長剥片素材の中型のものが主体である。搔器と削器は、点数的にナイフ形石器を上回る。その他の定型石器は、僅かな組成に留まる。使用痕有剥片は、チャート等製石器のはば47%を占める。

両石器群は、量的に一部アンバランスさはあるものの、いずれも後期旧石器時代の普遍的な石器を網羅した組成を有したものとなっている。技術形態学的な差異は大きいものの、機能的な石器組成自体には共通点が多い。搔器・削器の組成上の卓越は、両石器群に認められる現象である。この相違点と類似点の共存という現象に対する背景が検討されねばならないだろう。

#### b, 剥片剥離技術

下位文化層の石器・剥片・碎片・石核と接合資料・個別別資料の分析から明らかにされた剥片剥離技術は、大きく2つに分けることができる。一つは横長剥片を目的とした剥離技術であり、サヌカイト製石器群に認められた。もう一つは縦長または不定形・貝殻状剥片を目的とした剥離技術で、チャート製石器群を主体とし、サヌカイト製石器群の一部にも認められた。

接合資料・個別別資料の観察から復元された剥片剥離技術の工程を、再度順を追って説明しておく。

サヌカイト製接合資料によって把握された横長剥片剥離技術は以下ようになる。まず、石核素材となった大型剥片の剥離作業が行なわれた接合資料・石核が存在しないので、この第1段階の工程の内容は不明であるが、大型剥片を石核素材とする。石核素材剥片の側縁に剥離作業面を配するが、多くは素材剥片打面部に主剥離作業面を選択し、さらに剥離作業面上を左右、表裏逆転するもの、石核の側縁や末端にも剥離作業面を配するものがある。打面調整は希であるが、打面縁の調整は散見される。確認された接合資料中の目的剥片は総じて小型で、ナイフ形石器の小型・極小型に対応する。

サヌカイト製石器群の横長剥片剥離技術は、石核素材の生産工程S4類の内容が不明であるなど、全てが明らかでないが、以後の工程の進行の仕方、技術的属性の組合せからみて、瀬戸内系旧石器に特有の「瀬戸内系横長剥片剥離技術伝統」の範疇にあることは明らかである。従来知られている剥片剥離技術の対比を考えると、瀬戸内技法の範疇に含められる属性の組合せをみせ翼状を呈する剥片の接合する資料を含むS1a類、いわゆる「櫃石島技法」と同様の技術的属性をみせるS1c類、「殿山技法」類似のものまで、多様な横長剥片剥離技術が認められる。

サヌカイト製石器群の縦長剥片剥離技術S2類は、接合資料が断片的で、また石核も未検出であることなどから、工程すべてを追えるほど内容が明らかではない。サヌカイト円礫を母岩として、一つの打面から打面や石核側面の顕著な調整は施さず、縦長剥片を剥離するもので、打面の更新がしばしば行なわれるものようであるが、細部は不明である。

チャート等製接合資料によって把握された縦長・不定形剥片剥離技術は、以下のようにまとめることができる。直径5～20cmの垂角礫または板状材か、その塊状の分割材を保ったものを石核素材とする。打面の意図的な作出は最初の1面に限られ、その後は打面と剥離作業面の機能的区別が不鮮なままである。また打面調整・石核側面調整などもほとんど認められない。剥片剥離は、石核の作業面高が、目的剥片剥離に十分な間は同一打面を後退しつつ進行するが、打面転移が行なわれる場合、転移の法則性は認められない。一般に、チャート等製石器群の剥片剥離技術C1～C3類は、個別の剥片剥離技術と考えるより、個々の段階での技術に共通性が多く、一連の剥片生産の、個々の様相と考えた方がよい。

生産される目的剥片は、不定形剥片が多く、縦長剥片も含まれる。ナイフ形石器には縦長剥片が選択的に採用されており、目的別の剥片剥離が行なわれているといえるかも知れないが、剥片剥離技術が明瞭に分離できるほどの技術属性を顕在化させるには至っていない。

注目すべきは、横長剥片を目的とした剥離技術と縦長・不定形剥片を目的とした剥片剥離技術の2つの剥片剥離技術が、サヌカイトとチャート等という2つの石材によって分離された石器群にそれぞれ対応し、中間的な技術が幾らか両者に認められるものの、横長剥片剥離技術がサヌカイト製石器群に、縦長剥片剥離技術がチャート等製石器群に主として認められたことである。両石器群には、石器類の形態記述で問題にされたように、石材と技術形態学的特徴、剥片剥離技術が密接に関連していると考えられた。

#### c. 下位文化層の2つの石器群

サヌカイト製石器群とチャート等製石器群の両者には、石材・剥片剥離技術・石器形態などの各段階で大きく相違し、構造的に区別できる。ここで問題となるのは、両者の関係であろう。この2つの石器群が板井寺ヶ谷遺跡下位文化層で認められたことは、どの様に考えることができるであろうか。具体的には、両石器群を保持したものが、何者であったかという問題として検討しなければならないだろう。

2つの石器群は、石器類総数で4対6、石器総数では1対1と数量的には拮抗する。また、定型的石器は両石器群に共通のものがほとんどで、石材によって特定の器種を作り分けたと見られるような現象は顕著ではない。いずれも剥片剥離作業の展開があり、どちらかが従の存在で、搬入品としての位置に甘んじていると考えることもできないだろう。

ナイフ形石器と剥片剥離技術の技術形態学的属性によって、サヌカイト製石器群が瀬戸内地域東部・近畿地方中央部にある瀬戸内系石器群と、チャート等製石器群が中国山地にある石器群と共通する特徴が明らかとなったことなど、石器類の技術形態学的な相違と剥片剥離技術の隔絶と合わさった石器群の構造的な違いは明瞭であろう。このような状況は、両石器群の保持が個別の集団によって行なわれたと考えるに十分な根拠となっていると思案する。

板井寺ヶ谷遺跡下位文化層の石器群は、石材という基準によって大きく2群に分けることができ、サヌカイト製石器群とチャート等製石器群の2つは、異なった集団によって保持された独立した構造の2つの石器群を示すと考えられるのである。

#### d. 石器生産技術体系と石材

サヌカイト製石器群とチャート等製石器群には、遺跡内での石器生産工程の遺存状況に大きな差異があることが知れた。

サヌカイト製石器群は、遺跡内で展開した横長剥片剥離技術が、その石器素材剥片をすべて供給するに足るものではなく、小型・極小型の横長剥片を主に剥離した気配が濃厚で、対応する定型石器は、小型・極小型のナイフ形石器があるに留まる。大型・中型の横長剥片は、遺跡外からの搬入である可能性が高い。石器の整形作業も、必ずしも活発ではないようで、石器の状態でかなりの量の搬入があったことを示唆する。遺跡内で横長剥片石核の素材である大型剥片を原石から生産する第1段階の工程が存在しないことを併せて考えると、下位文化層のサヌカイト製石器群の剥片剥離作業の前半段階の作業と剥片生産のかなりの部分は、別の地点で行なわれていると考えられた。下位文化層への石材供給は、石器と既に剥離された大・中型剥片、小・極小型剥片剥離のための横長剥片石核・同素材の状態で行なわれ、大・中型剥片剥離のための石核や同素材、石核素材剥片剥離のための石核（盤状剥片石核）・原石は認め



られなかった。工程の前半がないことに併せて、サヌカイト製石器群においては、新たに作られる石器や剥片剥離を開始する石核の数よりも、遺棄される石器の数と剥片剥離の終了する石核の数が多く、本来保持している石器群の消費が進行しても十分には補充されない、いわば「縮小再生産」または「長期消耗」状態といえる状況を示していることも明らかとなった。

チャート等製石器群は、遺跡内で活発な剥片剥離作業が行なわれ、ほぼ全ての石器素材を供給するに足る剥片生産が行なわれている。規格性には欠けるものの、多様な剥片が供給されており、ナイフ形石器・搔器・削器などの定型石器の素材が確保されている。原石から剥片剥離作業・石器整形段階まで、一貫した作業が行なわれている。発掘調査範囲ではそれを証明するに足る、ほぼ全ての工程の資料が残されている。チャート等製石器群においては、石器の生産と消費・剥片生産作業の進行にともなう石材の消費に見合う、十分な個体の補充と石器の生産が行なわれ、総量の維持が計られている。

この2つの石器群には、石材と石器群の技術形態学的特徴、剥片剥離技術の構造的相違に合わせて、剥片剥離作業の遺跡内完結度、石器群の保持の仕方にも大きな差があることが判明した。サヌカイト製石器群の石器製作作業の地点間分業は、地点毎の石器群の様相が大きく相違する場合が有り得ることを示唆している。この違いは、編年や石器群の技術的背景のみの検討からは説明できない相違であると考えられる。

両者の背景には、サヌカイトが原石産地から遠くはなれた石材であり、チャート等が在地の入手容易な石材であることが反映しているが、先に考察したように両石器群を保持したのが異なった集団であると考えた場合、さらにその意味を考えておく必要があるであろう。ただ単に、石器群の技術形態学的属性を抽出し、その石器群の指標として従来の編年や技術系統との比較の根拠とするのは、遺跡のおかれている状況から切り放した議論を行なうことになりかねないのである。

#### e, 下位文化層の編年的・系統的位置

下位文化層は、泥炭層と炭化物密集箇所放射性炭素年代測定結果が、ほぼ25,000年前を前後したことから、一応25,000年前前後の絶対年代を推定して良さそうである。始良Tn火山灰上の泥炭層が $21,500 \pm 230$ 、下が $23,600 \pm 200$ 年であるので、始良Tn火山灰の板井寺ヶ谷遺跡での推定年代は23,500年前後ということになるが、この結果は、板井寺ヶ谷遺跡周辺での放射性炭素年代測定結果（松本、85）とほとんど差はない。下位文化層が残されて、始良Tn火山灰降灰まで、ほぼ2,000年程の時間差があったことになる。

板井寺ヶ谷遺跡で、文化層2枚の前後関係、放射性炭素による絶対年代が付与できた事実は、西南日本での旧石器編年作業に大きな足がかりを与えるものである。特に、下位文化層のサヌカイト製石器群とチャート等製石器群の両者は、考古学的に同時存在と考えられ、瀬戸内系と中国山地内に在する石器群の2つの異系統石器群の並行関係を明らかにしたことは重要である。

板井寺ヶ谷遺跡のサヌカイト製石器群とチャート等製石器群は、それぞれ瀬戸内系と中国山地系を代表し、両者が始良Tn火山灰降灰以前の一時期に共存するという、編年作業上、重要な材料を提供した。従来は、瀬戸内地方東部・近畿地方中央部の瀬戸内系旧石器、中国山地及び隣接地域の石器群といった各系統の石器群単位で編年を行なった後、段階的な整合性が検討される場合が多かったが、板井寺ヶ谷遺跡の事例は、その地域間編年作業に1つの絶対的な指標を与えたのである。両地域の編年は、技術形態学的比較や層位編年という異なった方法に主眼がおかれ、統一的な方法は見出されていない。現状では、チャート等製石器群を瀬戸内系石器群との対比において評価し、仮に「中国山地系旧石器群」と呼

称する。今後、板井寺ヶ谷遺跡について、さらに良好な条件の遺跡の検出があるならば、より精密な地域間編年が可能になるとともに、全国的な旧石器編年・系統の中に位置付けが可能になってくると考えられる。

板井寺ヶ谷遺跡下位文化層のサヌカイト製石器群と関係を考慮すべき瀬戸内地域東部・近畿地方中央部の瀬戸内系の石器群は、層位的出土例に恵まれず、従来、その技術形態学的特徴を根拠とした編年が行なわれていた。ナイフ形石器の形態と素材剥片の剥離技術の属性変化を、時間的変遷の根拠としてきたのである。ところが近年、瀬戸内・近畿地方周辺、北陸・九州といった地域での層位的出土例の増加が進み、国府型ナイフ形石器と瀬戸内技法を最古と考える従来の編年観にそぐわない事例が相次いで見出されている。板井寺ヶ谷遺跡下位文化層のサヌカイト製石器群も、その1つの例である。まず、サヌカイト製石器群の編年の位置について検討しよう。

瀬戸内系旧石器を出土した遺跡で、下位文化層と層位的に対比できる条件を備えた遺跡は多くない。近畿地方では、奈良県桜ヶ丘遺跡第1地点（松藤・佐藤、84）の第III層が始良Tn火山灰下の層準であるとされ、翼状剥片・同石核などを出土させ、広島県冠遺跡群D地点（妹尾他、89）では、サヌカイト原石産地近傍で始良Tn火山灰層下からサヌカイト製石器群が出土し、台形様石器・錐状石器・搔器・削器、横長剥片などが出土し、郡家今城遺跡C地点の国府型ナイフ形石器を組成する石器群が始良Tn火山灰以前である可能性が示唆（石田他、84）されているに留まる。いずれも、遺跡間での相対年代、絶対年代とも明らかではなく、始良Tn火山灰降灰以前の遺跡の前後関係は不明であるので、板井寺ヶ谷遺跡との比較も従来と同様の方法に頼らざるをえない。

板井寺ヶ谷遺跡下位文化層のサヌカイト製石器群は、国府型ナイフ形石器が組成せず、瀬戸内技法の存在に関しても、翼状剥片や翼状剥片石核が認められるものの、瀬戸内地方東部・近畿地方中央部で典型的とされるようなものの存在は明確ではない。近畿地方中央部で国府型ナイフ形石器を出土させた他遺跡とは石器群の内容が異なっていることは明らかである。この違いを、通常行なわれてきたように時期差として考慮するならば、国府型ナイフ形石器の盛行期が始良Tn火山灰降灰以後にあることから、下位文化層のサヌカイト製石器群が近畿地方中央部での2遺跡に先行すると推測できる。この場合、板井寺ヶ谷遺跡の小型・極小型のナイフ形石器・櫃石島技法の属性を備える剥片剥離技術などが国府型ナイフ形石器・瀬戸内技法に先行すると考えることとなる。

下位文化層のナイフ形石器と石器類を観察して気付かれたのは、ナイフ形石器の素材剥片の形状と搬入品である中・大型剥片の差である。多量の剥片が搬入されているのに、それらがナイフ形石器に加工されず、遺跡内で剥離された可能性の高い小型・極小型剥片を主に加工するという点は、より制約がなく行なわれたであろう原石産地周辺の地点での横長剥片剥離技術がナイフ形石器の製作と結びついていないことを示すのではないかと、という危惧を与える。国府型ナイフ形石器の成立は、規則的な段階を踏んでいく瀬戸内技法による翼状剥片をナイフ形石器に加工することによって成立し、翼状剥片が他器種の素材となることは希であるが、板井寺ヶ谷遺跡の状況では、ナイフ形石器と横長剥片との結びつきが強固ではない。横長剥片剥離技術は、横長の「刃器」を生産することに主眼があったようである。このようなナイフ形石器と剥片剥離技術の様相は、瀬戸内系ナイフ形石器文化発生期の様相として理解できるかも知れないが、瀬戸内系旧石器本来の分布域で同様の石器群が発見されるのを待って判断すべきであろう。現時点での資料検討のみで、下位文化層並行期に、瀬戸内系旧石器分布域中央で国府型ナイフ形石器と瀬戸内技法が存在しないと断言できない。

冠遺跡群D地点の石器群は、台形様石器がありながらナイフ形石器を欠くことに特徴がある。台形様石器の位置付けについては、佐藤宏之氏の指摘（佐藤、88）があるように、後期旧石器の代表的な主導的生産用具であるナイフ形石器と次第に主導的器種の地位が置き換えられていった可能性の高い器種であったと考える。板井寺ヶ谷遺跡では、台形様石器とも見なせる削器・加工痕有剥片がナイフ形石器と共存し、その調整技術に折断と平坦剥離調整が認められる点は、佐藤の台形様石器の型式変遷観に照らすと、台形様石器終末の様相として位置付けられる。ナイフ形石器の有無、その様相などを根拠として、前後関係を与えるなら、冠遺跡群D地点が板井寺ヶ谷遺跡に先行すると考えられるであろう。

冠遺跡群D地点での台形様石器の素材剥片は、かならず底面を付着させるような横長剥片剥離技術によるものとは考えられない。塊状の石核から剥離した不定形な剥片の側縁に折断加工を施して大まかな器形整形を行い、平坦剥離で器厚を調整したと考えられるものがある。瀬戸内系横長剥片剥離技術伝統の中にあるかは、疑問がある。板井寺ヶ谷遺跡では、台形様石器の素材剥片が不定形剥片と共に横長剥片製のものも認められることから、素材剥片の選択の幅は一般のナイフ形石器と素材剥片剥離技術との関係のような個有のものは存在せず、一部瀬戸内系横長剥片剥離技術伝統に依存していると見られる。この点は、板井寺ヶ谷遺跡のサヌカイト製小型・極小型ナイフ形石器と中・大型横長剥片の剥離技術との関係と機を一にする。板井寺ヶ谷遺跡でのナイフ形石器と台形様石器と見なせる石器の共存は、その主客が逆転し、次第にナイフ形石器主体に変化しつつある移行期の石器群の様相を示すと考えることもできる。初期に曖昧であったナイフ形石器と横長剥片剥離技術の対応は、ナイフ形石器が主要な器種に移行するなかで完成されたのかもしれない。

定型石器として板井寺ヶ谷遺跡で組成した搔器と削器・錐状石器等は、従来の瀬戸内系石器群には希な器種である。近畿地方中央部での始良Tn火山灰前後の遺跡に組成される量は少ない。郡家今城遺跡C地点では、サヌカイト製搔器に合わせて頁岩製のものなどが発見されているが、桜ヶ丘遺跡第1地点など多くでは発見されていない。一方、冠遺跡群D地点遺跡では、台形様石器に合わせて搔器・削器・錐状石器が組成し、板井寺ヶ谷遺跡と近い関係にあることを示唆している。板井寺ヶ谷遺跡では、共伴したチャート等製石器群には多量の搔器・削器と錐状石器などが含まれるので、瀬戸内系旧石器の本来の組成からやや逸脱して見える豊富な石器組成は、下位文化層につけ加えられた他の石器群からの影響である可能性を考慮したい。サヌカイト製斧形石器は、板井寺ヶ谷遺跡で初めて認められ、従来の瀬戸内系旧石器中には存在していない。むしろ中国山地系石器群との関係を考慮すべき器種かもしれない。

下位文化層のサヌカイト製石器群の占める位置は、それに絶対年代が与えられたことにより、始良Tn火山灰下の最古の瀬戸内系ナイフ形石器と横長剥片剥離技術に保持された石器群の1つとしての位置を占めることとなった。瀬戸内地方東部・近畿地方中央部で、台形様石器を主体としたサヌカイト製石器群が、ナイフ形石器を主体とした石器群に先行するかどうか、台形様石器群を瀬戸内系伝統のなかに含み得るかについては、現状では即断できないが、台形様石器の出自が、後期旧石器に先行する石器群に関係があるであろうことは、十分考慮に値する。冠遺跡群D地点の台形様石器主体の石器群は、サヌカイト製であるからといって、すぐに瀬戸内系ナイフ形石器と横長剥片剥離技術の伝統に結びつけず、例えば中国山地帯内の石器群または西南日本の先行する石器文化の中に出自を求めてもよいとも考えられる。十分な事例の蓄積と、母胎となる石器製作技術体系の構造的比較が必要なのはいうまでもないことである。

続いてチャート等製石器群の編年的・系統的位位置について考えてみよう。

中国山地帯内には、始良Tn火山灰下の石器群を多数見いだすことができる。

近傍の遺跡では、兵庫県下の氷上郡七日市遺跡（久保・藤田他、90）で始良Tn火山灰下からナイフ形石器・台形様石器を主体とした石器群が出土している。また、温泉町畑ヶ平遺跡、三田市溝口遺跡（山下他、86）では、技術形態学的に始良Tn火山灰以前と考えられる石器群が発見されている。七日市遺跡では、始良Tn火山灰下に少なくとも3枚の石器群包含層準があり、上層には極小型の台形様石器・細部調整石器等が、中・下層にはナイフ形石器・台形様石器と削器等が組成するチャート等製石器群が出土している。畑ヶ平遺跡では、黒曜石・碧玉・頁岩・安山岩など多様な石材を素材とした台形様石器・ナイフ形石器・削器・局部磨製石斧等が組成する石器群、溝口遺跡では鉄石英・チャート等を素材としたナイフ形石器・削器などに石斧が伴った組成をする石器群がある。

中国山地帯内の石器群では、岡山県野原高原早風A地点遺跡（平井、79）、恩原第1地点遺跡（稲田、86）、蒜山高原戸谷第5地点遺跡（鎌木・小林、86）、広島県地宗寺遺跡（三枝、82）などがある。また、広島県西ガガラ遺跡では、始良Tn火山灰降灰以前と考えられる石器群が出土している。早風A地点遺跡では、始良Tn火山灰下に2枚の文化層があり、上層から小型の台形様石器・細部加工石器、その下層からナイフ形石器・削器・局部磨製石斧に代表される組成の石器群が出土している。恩原遺跡では、切り出し型の茂呂型的な縦長剥片素材のナイフ形石器を主体とする石器群が出土している。戸谷第5地点遺跡では、その第X層から縦長剥片素材のナイフ形石器・削器・局部磨製石斧等を組成する石器群が出土している。地宗寺遺跡では、調査面積の狭さのためか、削器以外の定型石器に乏しい。西ガガラ遺跡では、ナイフ形石器・削器・局部磨製石斧等が出土している。

以上の遺跡は、石器類の組成・剥片剥離技術の特徴によって、大きく3分することができる。第1には、不定形剥片剥離技術を基盤とし、台形様石器・細部調整石器・ナイフ形石器・削器・斧形石器などが僅かに組成する石器群で、七日市遺跡上位文化層・早風A地点遺跡上層・地宗寺遺跡・溝口遺跡などが該当する。第2には、縦長剥片剥離技術・不定形剥片剥離技術の両者を技術基盤とし、ナイフ形石器・台形様石器・搔器・削器・局部磨製石斧などを組成する石器群で、七日市遺跡中位文化層・早風A地点遺跡下層・戸谷第5地点遺跡第X層・西ガガラ遺跡などが該当する。第3には、完備した縦長剥片剥離技術を有し、いわゆる茂呂型類似のナイフ形石器を組成する石器群で、恩原第1地点遺跡下層がある。中国山地帯内石器群の変遷は、地域内ではほぼ一貫して追えるが、佐藤氏の言うように汎日本的な流れの中にある。

第1と第2は、基本的にナイフ形石器・局部磨製石斧を主な組成とする石器群で、ナイフ形石器の素材剥片に縦長志向が認められ、その形状も打面部を残して、一側縁をほぼ完全に整形するものが目立つなど、共通する特徴が認められる。台形様石器は、両者に組成されるが、どちらかというとなら第1の遺跡に主体があるようである。剥片剥離技術は、第2の遺跡で縦長傾向が強まるが、個々の剥片剥離技術の属性は両者に認められる。

板井寺ヶ谷遺跡は、この第2の石器群に近い内容を持っているが、これらと比べると搔器や削器の組成が優越し、豊富な石器組成は趣を異にする。第2の石器群と比較して、やや新しい時期を占めると評価することも可能と考えるが、遺跡の「場」の機能や季節性の相違の可能性を考慮する必要があるだろう。

第1・第2の石器群の先後関係は、相違的關係・絶対年代測定結果によって、両者とも始良Tn火山灰降灰以前、約25,000年前前後の絶対年代が考慮できる。現状では、その先後を決定することはできない

が、南関東の状況を参考にすれば、第VII・IX層の石器群との対比が可能であろう。台形様石器の多寡と形態変遷を考慮すれば、第1・第2の石器群の内の台形様石器は、先行する石器群の残存と考えられる。次第に第2・第3の石器群へと移行しつつある一段階に第1と第2の石器群が並行する時期があったと考え、その最後の時期が約25,000年前であったと考えられるのではなかろうか。

始良Tn火山灰降灰直前に、第3の石器群が出現し、完成した縦長剥片剥離技術を基盤としたナイフ形石器を主体とする石器群へと変移していったと考えられるであろう。

板井寺ヶ谷遺跡のチャート等製石器群は、中国山地帯内の台形様石器を主体組成する石器群が、次第にナイフ形石器主体に移行していく過渡期の最終末段階と位置付ける事ができるのではなかろうか。中国山地帯内の始良Tn火山灰降灰以前の石器群は、日本列島の後期旧石器がいまだ十分に地域性を発現するに至っていない時期に相当し、汎列島の様相を帯びたものと考えられる。

瀬戸内系・中国山地系といったナイフ形石器文化と、台形様石器を有する石器文化の関係について、考えておきたい。通常、瀬戸内系旧石器という場合、瀬戸内系横長剥片剥離技術を基盤としたナイフ形石器を主体とした石器群(山口、83)を示す。この組成には普通、台形様石器は含まれない。板井寺ヶ谷遺跡では、削器・加工痕有剥片として分類した台形様石器と見なし得る石器が組成し、瀬戸内系旧石器初期の様相の一端を明らかにした。一方のチャート等製石器群にも台形様石器と見なし得る石器が組成し、また、中国山地内、近隣地域、西南日本では、同様の石器群に台形様石器が多寡の違いはあれ、組成されている。瀬戸内系旧石器の中にも、西南日本全体での動向と期を一にした台形様石器主体からナイフ形石器主体への移行があった可能性が高いと考えられよう。板井寺ヶ谷遺跡のこの様相は、台形様石器主体の石器群がナイフ形石器主体に移行する過渡期の様相を示していると考えたのである。1つ注意されるのは、この移行の完了に先行して、既に瀬戸内系と中国山地系といった地域毎のナイフ形石器文化が出現している点である。サヌカイト製石器群にあっては、横長剥片剥離技術とナイフ形石器という器種が未だ密接な対応を持つに至っておらず、また国府型ナイフ形石器や典型的瀬戸内技法も認められなかったが、既にサヌカイトに固執した横長剥片素材の石器生産が行なわれている。チャート等製石器群は、既にナイフ形石器主体の石器群として成立し、台形様石器と見なし得る石器の点数は多くない。板井寺ヶ谷遺跡の台形様石器に類した石器は、サヌカイトとチャートという石材ごとに相違があり、両者はすでに別個の石器群に組み込まれた存在となっている可能性が高い。後期旧石器時代と先行する石器文化の画期が、ナイフ形石器の普及と地域的適応の結果の地域性の成立にあると考えるなら、板井寺ヶ谷遺跡の台形様石器群に石材との技術的・伝統的關係が認められるかは、重要な問題となろう。当然、先行する石器群においては、石材に対する特殊な適応は早かった可能性が高いと考えられよう。

さて、板井寺ヶ谷遺跡下位文化層の石器群を見た場合、重要な特徴の1つにサヌカイトが遠距離の石材で、チャート等が在地の石材であったことである。両者には、遺跡内での石器生産の工程の完結性に大きな隔たりがあった。この状態を、それぞれの系統の各遺跡での石器群の様相と関連付けることは、系統論・編年論的に重要な視点であると考えられる。

それぞれの石器群の変化をもたらすものとして、視点を従来の時間軸以外のものをもとめる場合、距離的關係、すなわち原石産地までの遠近の問題がすぐ想起できる。板井寺ヶ谷遺跡の位置が、瀬戸内系サヌカイト製石器群の中心分布限界と考えられる範囲の外にあることから、原石産地近くの遺跡との間に、石器製作上の分業がもたれ、石器群の組成・顔つきが変わっている可能性(山口、88)は、十分検討に値する問題である。時間軸と空間軸が、縦と横の關係で、石器群の様相が基盤目状に変移している

可能性も考慮の範囲にあるといえよう。一方、チャート等製石器群は、中国山地帯内での在石器群であり、原石供給に困難はないため、瀬戸内系サヌカイト製石器群とは異なった石器群の変異があるのではなからうか。石材供給と集団移動・回帰運動といった古民族学的動態と関連した分析・解釈が必要な側面であろう。

板井寺ヶ谷遺跡には典型的な瀬戸内技法・国府型ナイフ形石器は認められないが、形状のよい翼状剥片を伴うこと、そもそも遺跡内での目的剥片剥離が活発でなく、多くの石器素材剥片・大型剥片を他からの搬入に依存していることは、遺跡内での石器製作技術で当該期の技術的背景を代表しきれぬかには大きな不安があるといえよう。この問題については、第IV章で石器類の組成や器種別重量構成の検討を行ってきたが、本章第3節で再論したい。

### 3. 上位文化層の石器群

上位文化層の石器組成は、合計524点あり、角錐状石器・同未成品・ナイフ形石器・搔器・削器・楔形石器などの定型石器、礫器、加工痕有剥片・使用痕有剥片、剥片・碎片、石核からなる。サヌカイト製が主体で、少量のチャート製が伴う。下位文化層からの浮き上がりがあるので、組成的にやや不安がある。サヌカイトは、下位文化層からの浮き上がり混入を考慮すると、ほとんどが二上山産と考えられる。

角錐状石器は、上位文化層の主要定型石器であり、多様な形態を含んでいる。基本的には先端を尖らせたものが多数を占めるが、一部には厚手で寸詰まり・槌状剥離を有するものも認められる事から、全てが刺突具的なものとは限らない。大型のものには甲板面の一部や全面に調整を施したものがある。ナイフ形石器は、下位文化層からの浮き上がりなどを除外すると、わずか1点が出土したに留まる。サヌカイト製であるが、瀬戸内系のものとは決められない。搔器は、点数的には多くはない。削器は、上位文化層の主要器種の1つで、大型剥片素材の末端に急角度の調整を施したものが目立つ。加工痕有剥片は、定型石器として分類できなかった調整の施された石器を一括したものであり、一種の型式学的分類上の「吹き溜まり」的な分類である。一部にはナイフ形石器・台形様石器・搔器に類したものも含まれている。使用痕有剥片は、定型石器以外の微細な刃こぼれ状剥離を認めたものを一括した。サヌカイト製剥片には、不定形剥片・横長剥片に合わせ、角錐状石器の素材剥片になり得る大型厚手の板状剥片がある。碎片はサヌカイト製のものがほとんどだが、その形状から考えて角錐状石器の調整碎片が含まれる。サヌカイト製石核には、瀬戸内系横長剥片剥離技法に含まれ得るものもある。

板井寺ヶ谷遺跡の石器生産・剥片剥離技術は、接合資料・個別別資料の貧困さから、全体像の把握が困難である。サヌカイト製石器群では、角錐状石器の整形作業が行われたものの、その素材剥片の生産は認められない。石核類は使用痕有剥片などになり得る不定形な剥片を生産したに留まる。また、出土した定型石器、加工痕・使用痕有剥片、大型剥片に見合う量と形状の石核・接合資料は見つかっていない。さらに、サヌカイト製石核のほとんどは剥片素材の石核であるが、この素材剥片生産作業が遺跡内で行われた接合資料・原石・石核は認められない。少量出土したチャート製石核は、垂角礫などを素材とする。

板井寺ヶ谷遺跡上位文化層に残された石器群は、石材が二上山産サヌカイト主体であることから、近畿地方中央部との結びつきが考慮される。板井寺ヶ谷遺跡のサヌカイト製石器群では石器整形工程を中心に行っており、石器・石核の素材剥片生産が別の遺跡で行われた可能性が高いが、サヌカイト石材産地から遠い位置にあるという背景を反映しているのであろう。石材産地との遠近関係によって、石器の

製作工程を異所で行っている可能性が高い。

上位文化層の時期は、板井寺ヶ谷遺跡の泥炭層と火山灰の関係、放射性炭素年代測定結果によって、絶対年代を伴って定まった近畿地方ではじめての層位的出土例である。始良Tn火山灰降灰直後といい得る年代が与えられる。九州地方では、角錐状石器の出現が始良Tn火山灰降灰直後にある事が判明している。近畿地方中央部も板井寺ヶ谷遺跡と同様に角錐状石器主体の石器群が存在しており、近畿地方での角錐状石器の出現の時期が九州地方と大差ない時期にある事が判明した。角錐状石器が九州地方から広がった器種だとすれば、板井寺ヶ谷遺跡ですでにサヌカイトという近畿地方固有の石材を素材としているという、“石材の地域化”をどう考えるかは問題であろう。

始良Tn火山灰の降灰は、西南日本の自然環境に多大の影響を与えた。板井寺ヶ谷遺跡でも、始良Tn火山灰の降灰が遺跡周辺の植生に大きな被害を与えた事は確かである。この様な被害は植生のみならず、それを食料とする動物相の減少・産地樹木の被害による土壌流出、排水の悪化など、降灰直後の短期に顕著な環境変化をもたらす。また、長期的にも植物相から動物相、地理的環境までを改変し得る影響をもたらしたであろう。上位文化層と始良Tn火山灰降灰との時間的間隔がどの程度かは明示出来ないが、近畿地方にあった先行する旧石器社会が始良Tn火山灰降灰によって一時的にせよ混乱を来たしているなら、角錐状石器石器群を保持する集団の近畿地方での出現と始良Tn火山灰の降灰の自然破壊の関係を考慮する事ができるかもしれない。今後は、角錐状石器石器群の出自の追求と、九州・中国・近畿といった地域ごとの石器群の精密な実態解明が必要となろう。(山口)

## 第2節 板井寺ヶ谷遺跡の自然環境

### 1. 古地理学的背景

板井寺ヶ谷遺跡の営まれた時期は、竹村・檀原の火山灰・土壌分析の結果把握された火山灰の同定と降灰層準(竹村・檀原、第七章第1節)、山田の行なった泥炭層中の泥炭及び炭化物密集箇所炭化物の放射性炭素年代測定結果によって(山田、第七章第2節)、上位文化層が約20,000年前、下位文化層が約25,000年前という絶対年代が与えられた。両文化層の間には始良Tn火山灰が狭叉されており、始良Tn火山灰降灰前後のほぼ5,000年の時間差が存在することになる。

古気候的には、この時期はウルム氷期後半にあたり、やや寒冷な時期から厳寒期を経るまでに相当するという(那須、85)。厳寒期を絶対年代でいつにするかは、意見のばらつきはあるが、板井寺ヶ谷遺跡の旧石器相当期は、ウルム氷期後半でも特に寒冷な時期にほぼ該当することは明らかである。

遺跡周辺の地形形成を、田中と野村の分析(田中、第七章第7節)(野村、第七章第6節)からみていくと、板井寺ヶ谷遺跡のある篠山盆地は、標高400～500m前後の山に囲まれた標高200m前後の盆地底を有し、篠山川によって川代溪谷をへて加古川に排水しているが、ウルム氷期後半には最初、盆地内の排水は武庫川へ行なわれていたという。そして、ウルム氷期厳寒期に起こった山麓での岩層生産によって、古市周辺で武庫川方向への排水が遮断され、水位が上昇し、篠山盆地底の南半は湛水状態となったという。また、盆地の排水不良は始良Tn火山灰降灰前後に最悪となり、盆地底に「弁天黒土」と称される泥炭層の形成が行なわれる。この間、加古川の上流部からの侵食が進行し、川代溪谷が開析され、厳寒期以降のある時期に盆地内に侵食が到達し、武庫川方面に流下していた篠山川が加古川流域に河川争奪されたのだという。この地形形成の段階を旧石器文化層に対応すれば、篠山盆地が湛水し、泥炭の形成が始まった初期から、湛水面が最大に達した前後までのどこかに対応すると考えられた。

板井寺ヶ谷遺跡の標高210m、篠山盆地中央部での盆地底標高200m前後から考えて、篠山盆地中央の湛水面が、遺跡周辺まで同一の水面を有したとは考えられない。板井寺ヶ谷遺跡周辺の泥炭層の堆積状況は、篠山盆地中央の川代露頭地の泥炭層の放射性炭素年代測定の結果と珪藻分析（佐藤、第七章第4節）の結果、観察される層相・堆積と大差ないことを示すことから、極端な水深差があったとは考えられないのである。

この時期には岩屑の生産が活発で、篠山盆地からの排水が古市周辺で遮断されたように、盆地内の古篠山川や宮田川でも局地的な排水不良が発生していた可能性が高いと思われる。板井寺ヶ谷遺跡の調査区内では、始良Tn火山灰降灰前後に多量の砂礫や岩屑の堆積が認められた。また、板井寺ヶ谷遺跡の土層堆積と微地形の形成過程を分析した青木（青木、第七章第5節）は、板井寺ヶ谷遺跡周辺の泥炭層の形成が宮田川周辺に堆積した砂礫堆の後背湿地形成のためであることを示唆した。事実、板井寺ヶ谷遺跡の湿地部の泥炭層中には、西方から供給された砂礫のラミナ状態堆積が認められ、同様の事が宮田川右岸でも発生していた可能性は高い。遺跡周辺の低地が砂礫堆の形成によって排水不良になり、後背湿地を形成、西と北からの砂礫供給によって埋められていく過程が復元されている。

板井寺ヶ谷遺跡の泥炭層中の珪藻分析を行なった佐藤は、泥炭層中の珪藻化石が始良Tn火山灰上から増え、最初は流水性種主体であったものが、泥炭Ⅰの時期には浮遊種が出現することから、泥炭Ⅲの形成は表面水で行なわれ、泥炭Ⅱで流水面積が増大、泥炭Ⅰの最初には一時水位が上昇し、湛水状態となったとした。泥炭Ⅱ・Ⅰに出現する珪藻化石には寒冷種があり、流水・湛水とも冷たかったことを示唆した。

板井寺ヶ谷遺跡周辺の環境は、第七章での成果をもとに考えると、下位文化層相当期の地形は、周辺に砂礫堆の形成が進行中で、山地からの流水と併せて南半が湿潤化したが、砂礫堆は調査区内には及んでいない。泥炭層の堆積が開始された初期の段階にあたり、舌状の微地形がその中に乾燥した陸地として突出していた。泥炭層は、調査区西からの流水によって遡上し、その上面の標高差が極端で、また珪藻の生息もないことから、ウルム氷期後半の寒冷気候下で表面水下の泥炭形成が考えられた。始良Tn火山灰直下の泥炭Ⅲ上面には、多数の根株を持った埋もれ木が存在し、樹木の生育を阻害するほどの水深でなかったことが知れた。

上位文化層相当期の地形は、始良Tn火山灰降灰以後、周辺の山地から供給される砂礫が、西から調査区南半の泥炭面中に堆積し、新たな陸地部を形成する。古宮田川の砂礫堆が発達し、後背湿地化した部分の水位が次第に上昇し、厚い泥炭層が形成された事が知れた。

このような環境は、両文化層相当期に篠山盆地で、おそらく広い範囲で観察されたと思われる。篠山盆地中央の川代露頭地の観察でも、始良Tn火山灰を挟む泥炭層が認められ、珪藻化石の分析からは、始良Tn火山灰上での水位の上昇が示唆されている。篠山盆地西北部にある板井寺ヶ谷遺跡から南1,500mの西木之部遺跡、南600mの内場山遺跡でも、泥炭層の形成範囲の高度はまちまちで、同一の原因かどうかは不明であるものの、始良Tn火山灰降灰期前後のこのような立地が発掘調査によって面的に確認されている。

篠山盆地の中小河川周辺の浅谷部には、砂堆形成によって後背湿地と化したり、谷からの流水によって、泥炭の形成がそこそこに見られる。その湿地部に向かって山裾から派生した低位な尾根や扇状地がこの中に舌状に突出した地形が、普遍的に存在し、板井寺ヶ谷遺跡上位・下位文化層は、そのような環境の1つを選択した立地であったのであろう。



板井寺ヶ谷遺跡周辺の地形要素は、盆地にあるという環境から、視覚的に山地と盆地底に分けられる。盆地底には湛水時に水没した部分と、泥炭層が発達したものの湿原地に留まった部分、自然堤防など微高地状の乾地であった部分があったと考えられる。また山地は、低位な部分と高位な部分に分けられよう。下位文化層相当期は、盆地中央部や遺跡周辺での泥炭層形成が開始されたころにはほぼ相当し、山地は乾燥、低地は湿地に二分された環境であった事が知れよう。

上位文化層相当期には、全体として湛水部の水位が上昇し、篠山盆地中央に湖水面が存在した時期(佐藤、第七章第4節)にはほぼ相当する。下位文化層では盆地中央での湛水部の範囲がやや狭いかも知れないが、全体としてはほぼ同様の地形要素から成り立っていたと思われる。

## 2, 古 植 生

板井寺ヶ谷遺跡の泥炭層中の植物遺体・花粉分析を行なった大井らは、遺跡周辺の植生を以下のように描き出した(大井・南木・能城、第七章第3節)。遺跡周辺の山地・低地に分けて立体的に復元された植生の変遷は、泥炭層の植物・花粉化石をもとに、5つの時期に分けられた。

下位文化層はIの時期、上位文化層はIII~IVの時期に相当すると考えられる。泥炭III下部に相当するIの時期は、泥炭堆積初期にあたる。低地に草本類はまだ少なくハンノキ属の湿地林が優先し、山地ではマツ属・ツガ属等の針葉樹とコナラ亜属・ニレ属などの広葉樹の混交林となっていた。

泥炭III上部に相当するIIの時期には、気候の寒冷乾燥化が進行し、低地に泥炭の堆積が促進される。低地はカヤツリグサ科・イネ科・ワレモコウ属・セリ科・キク科等の草本類の草原で、ハンノキ属・シラカンバ属・トウヒ属の林が出現する。湿地にはハンノキ属ハンノキ節、陸地にカバノキ属、山寄りにトウヒ属が多くすみ分けた。水流のある部分ではミズバショウが生育する。山地ではスギと広葉樹が減少し、モミ属・マツ属単維管束亜属が増加し、針広混交林となる。

始良Tn火山灰降灰直後のIIIの時期、降灰の結果植生に大きな被害があった。ハンノキ属と草本類のミズバショウ属・カヤツリグサ科を除き、そのほかの植物は大きく減少した。

泥炭IIに相当するIVの時期には低地の草原や湿地林はすぐに回復したが、山地での回復は遅れた。低地では湿地にハンノキ属・カバノキ属・ヤナギ属・ナナカマド属が混在し、山地よりにトウヒ属が生育していた。

泥炭Iに相当するVの時期には、始良Tn火山灰降灰の被害から回復が進むが、以前とはやや異なった植生となった。低地ではイネ科・ワレモコウ属・ヨモギ属などが増え、カヤツリグサ科・ミズバショウ属が減少する。山地では、コナラ亜属を主とする落葉広葉樹が減少し、モミ属・トウヒ属・マツ属単維管束亜属などの針葉樹が優先する。

始良Tn火山灰の降灰は、当時の植生に多大の被害を与え、植生の回復に長い時間がかかったという。始良Tn火山灰降灰の被害が具体的に把握されたことは、重要な成果である。始良Tn火山灰降灰により山地の森林に大きな被害があり、土壌の荒廃・流出が生じた事も明らかとなった。

板井寺ヶ谷遺跡調査中に採取した川北露頭地と丹南町大山上天内の花粉分析結果では、篠山盆地中央と西北谷の合流部淀みという局地環境の板井寺ヶ谷遺跡旧石器相当期の植生が明らかになった。盆地中央の川北ではマツ属単維管束亜属とツガ属が多く、川北が盆地中心部にあって山地から遠く花粉の散布能力の高い針葉樹比率が高く出現したと考えられた。川北は、盆地中央の湿地帯にあり、周辺に木本の有力な花粉供給源のない環境であったと考えられた。板井寺ヶ谷遺跡と大山上ではおなじように落葉広

葉樹が多いが、相違も見受けられる。板井寺ヶ谷遺跡ではコナラ属が落葉広葉樹の中で優占するのに対し、大山上ではクマシテ属・アサダ属・ニレ属・ケヤキ属の比率がコナラ属と同じように組成する。尾根端の板井寺ヶ谷遺跡と谷部淀みの大山上という地形の違い等に起因する近辺の植生の違いが反映したと考えられた。

草本類や湿地性樹木では、川北でヤチヤナギ属、板井寺ヶ谷遺跡にミズバショウ属、大山上でハンノキ属が多い。このような泥炭上で生育する分類群の違いも、水流の有無、水温、日照時間など、微妙な環境の違いを反映していると示唆された。

### 3. 遺跡の立地点

以上、多角的に自然環境を観察した。続いて視点を遺跡に移し、遺跡から周辺環境の記述を行いたい。板井寺ヶ谷遺跡の周辺環境を、遺跡を中心に同心円状の環境として観察してみよう。

板井寺ヶ谷遺跡は、篠山盆地西北端の山地と平野部の地形変換点にあり、山裾が現水田面に埋もれ込んだ部分に位置する。遺跡は、緩やかに南東に張り出す微尾根上に立地し、南が平坦な水田面、北がすぐ山地となっている。遺跡が南にひらける谷奥にある事から、南方向の視界は篠山盆地中央部まで見渡し得るが、東西は左右の尾根に遮られて視界は延びない。北はすぐ山となり、尾根上に出来ない限り有効な視界確保は出来ない。この現在の眺望は、古地理的に考えて、侵食や堆積作用などを考慮しても、旧石器時代相当期と大差ないと考えられる。

板井寺ヶ谷遺跡南半は、発掘調査当時水田であったが、泥炭層の存在から当時低地が湿地であったことが判明し、堆積作用の結果が大きい事が知れた。また、篠山盆地中央の篠山川川岸の段丘は、新しいものであった。旧石器相当期、遺跡南部の湿地と篠山盆地中央部の冠水面との連続性は確認できないが、盆地底や緩傾斜部には扇状地堆積物や砂堆で形成された後背湿地や谷部の泥炭面遡上が広く存在すると考えられる。

板井寺ヶ谷遺跡内や川北露頭地・大山下の植物花粉・材・遺体の分析の結果、篠山盆地の植生は、山地と低地・湿地部では大きく異なっていた事が明らかになった。また、周辺の地勢や水流の有無等によって、局地的な様相が認められた。下位文化層と上位文化層の間に始良Tn火山灰が降灰して植生に大きな被害があった事、上位文化層相当期はウルム氷期厳寒期に相当する事から、両文化層の植生には一部相違がある。

篠山盆地北西端にある板井寺ヶ谷遺跡の立地は、眺望的に南が開き、周辺は低地と山地に二分されること、低地には、砂堆や扇状地・湿地・冠水面があったことが知られた。植生的には、山地と低地・湿地の状況、両者の距離的關係によって、局地的に相違も見られた。これら環境要素が相互に関係しながら構成した“総合環境”が、板井寺ヶ谷遺跡の自然的立地環境である。

第507図は、旧石器時代相当期の板井寺ヶ谷遺跡周辺の地形環境を把握するため、現在の地形図上のいくつかの等高線を選んで製作した地形ゾーン図である。傾斜角度が大きく変化したり、泥炭層が発達したりするような地形・地質の変換点に対応しそうな等高線を選んである。高山地を標高400m以上、低山地を標高220m以上、盆地底平面を標高200m以上、現在でも排水不良の湿潤であったり、侵食によって段丘化したような場所を含め、盆地底を標高200m未満として、それぞれにアミをかぶせた。

作図作業は地図上の現在の地形を基におこなったため、盆地底の平面には板井寺ヶ谷遺跡周辺のように後背湿地や谷部の泥炭面の遡上があり、全てが乾燥した陸地であった訳ではなく、また盆地底の標高



第507図 周辺地形ゾーン図

第90表 板井寺ヶ谷遺跡周辺の地形要素比率

	200m以下	200m～220m	220m～400m	400m以上	面積合計
1 km圏	0.03k㎡ 1%	1.57k㎡ 50%	1.54k㎡ 49%	0.00k㎡ 0%	3.14k㎡
2 km圏	0.38k㎡ 3%	4.41k㎡ 33%	7.79k㎡ 62%	0.25k㎡ 2%	12.56k㎡
4 km圏	5.53k㎡ 11%	9.55k㎡ 19%	26.63k㎡ 53%	8.54k㎡ 17%	50.24k㎡
8 km圏	10.05k㎡ 5%	26.12k㎡ 13%	120.58k㎡ 60%	44.21k㎡ 22%	200.96k㎡

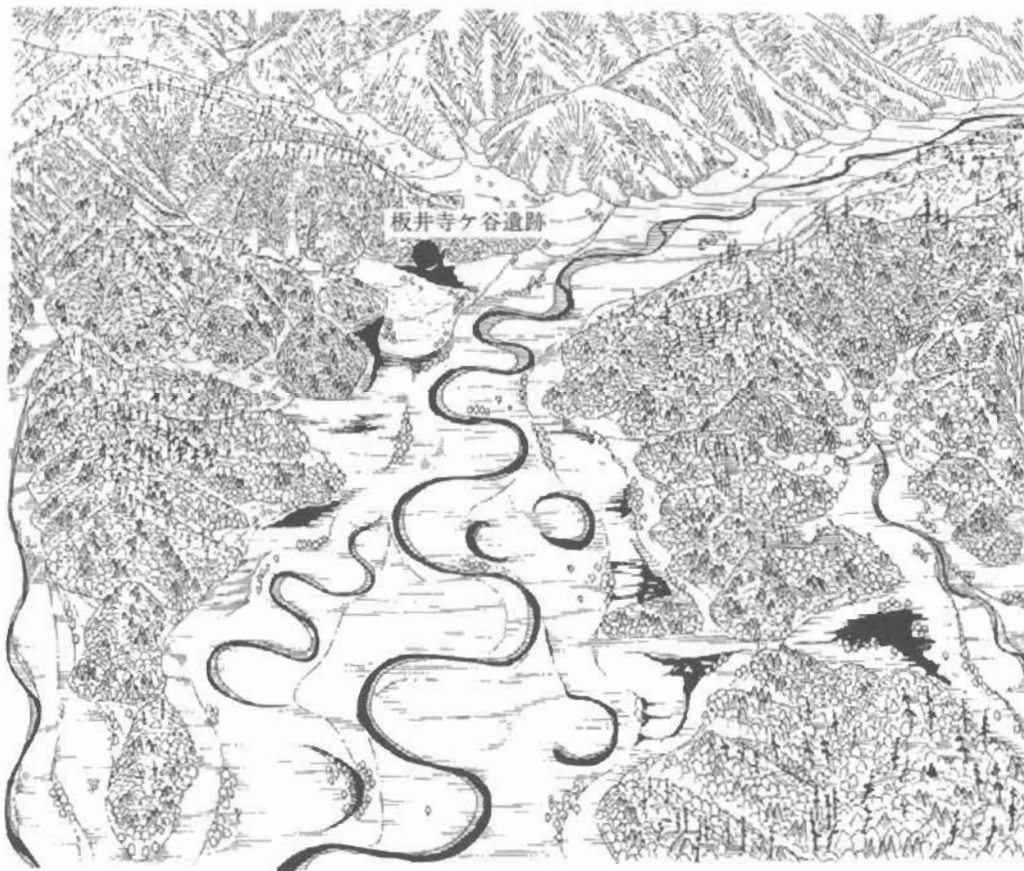
## 第1節 板井寺ヶ谷遺跡の石器群

200m未満の部分全てが湛水されていたとは考えられないなど、旧石器文化層相当期の地形とは多々隔たりがあるが、これによって篠山盆地の大まかな地勢を把握することは可能である。板井寺ヶ谷遺跡から1 km以内、2 km以内、4 km以内、8 km以内の範囲に分けて地形構成比率を観察した結果を第90表に示す。

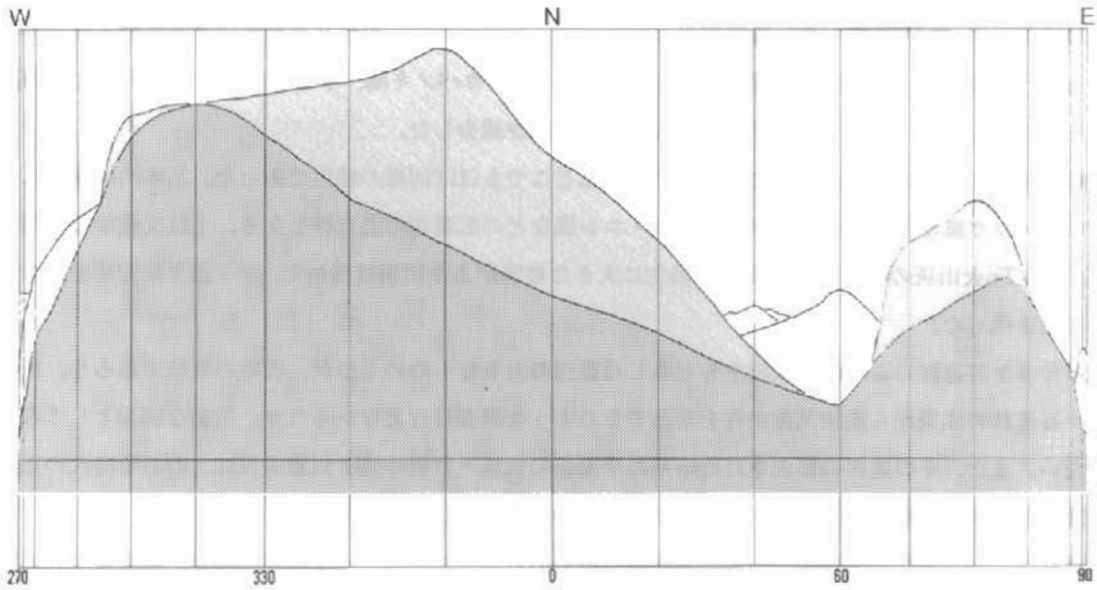
1 km圏では、盆地底の標高200~220mの部分と220~400mの部分が相半ばし、低地と山地がほぼ同面積となっている事がわかる。2 km圏では、山地の部分が増大する。低地は南方向に開きながら北へ縦貫し、篠山川支流の宮田川流域に該当する。山地は南方向を除いて遺跡周辺を遠巻きに広がる。4 km圏では、低地の比率が30%と2 km圏とほぼ同様であるが、200m以下の部分が11%出現し、200~220mの部分が減少する。低地は、篠山盆地北西の谷部にほぼ該当し、板井寺ヶ谷遺跡以南に扇型に広がり、篠山盆地底部にまで及ぶ。山地は70%と増大し、17%が400m以上となり、後背山地の主尾根が取り込まれ、左右には有力な支尾根がある。8 km圏では、南に篠山盆地ほぼ全域を包有して盆地南側の山塊に及び、北は多紀連山の主尾根を越えて氷上低地にまで及ぶ。低地は、北に取り込まれてきた氷上低地を含めて18%で、篠山盆地の200m以下の部分全てを取り込み、比率で5%となっている。山地は、地形の82%に及ぶが、400m以上の部分が22%で、異なった水系・山塊を取り込んでいる。特に北の氷上低地・由良川水系は、約35%と大きい比率を占める。

板井寺ヶ谷遺跡を中心とした自然環境を、多紀連山の主尾根以南・川代溪谷以東の領域を想定し、この圏別地形要素に、植物の花粉・材・遺体化石の分析から立体的・広範囲に復元された植生を乗せて、記述する。

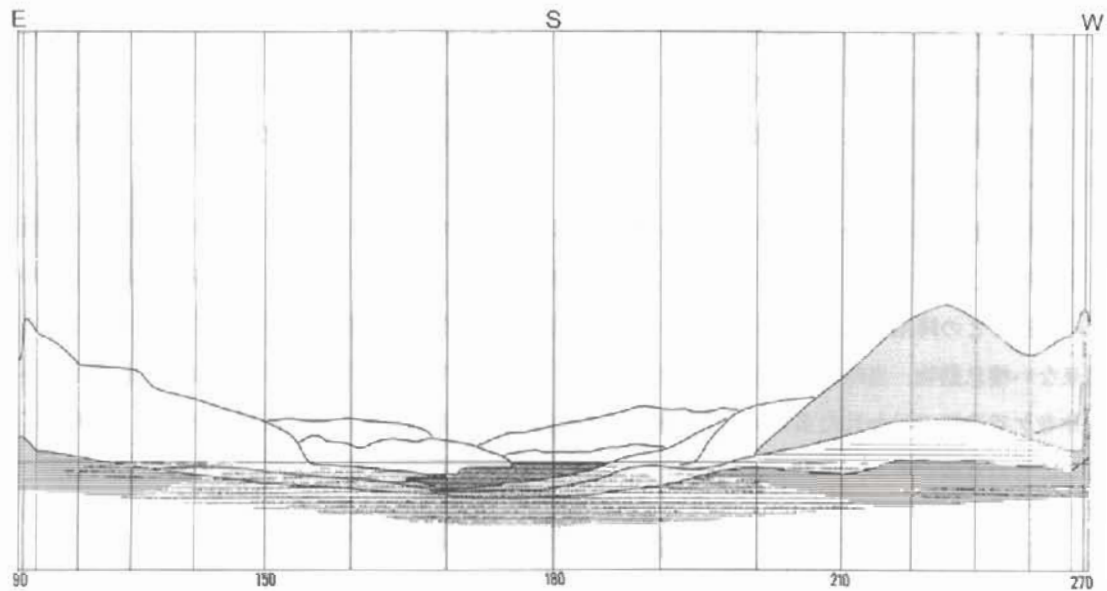
下位文化層相当期、氷期厳寒期に向かいつつあった段階に相当し、年間の寒暖の差は今よりもはるか



第508図 周辺環境推定図



第509図 遺跡北方の視界と景観



第510図 遺跡南方の視界と景観

に大きかった。丹波山塊・篠山盆地では内陸山地の寒冷さが加わり、近畿地方中央部・瀬戸内の盆地底とはかなりの差があったと考えられる。遺跡周辺では、気候の乾燥・寒冷化から山地に岩屑生産、低地に泥炭層の形成が始まっていた。扇状地堆積物の供給は活発ではなく、寒冷地流水を好む珪藻化石が認められることから、せき止められた静水面はなく、東と南の水流は低温であったと考えられた。低地には草本が少なくハンノキ属主体の湿地林となっていたが、次第にカヤツリグサ科などの草本類が増加して草原湿地になっていった。遺跡周辺の低地は、泥炭の形成されるような湿地や山裾の微高地・扇状地や河川堆積物の上などの乾燥地といった地表の状況、静水面・水流の有無とその温度、日照時間等によって、多様な小環境に分割されていた。この小環境は、植生の上に反映されていたと考えられる。近くの大きな谷中央の淀みの周辺などにはクマシテ属-アサダ属・ニレ属-ケヤキ属などがコナラ属と共に繁茂していた。篠山盆地中央部の低地では、湿地性樹木ではヤチヤナギ属が多い。

上位文化層相当期の遺跡周辺の低地は、篠山盆地中央の湛水面拡大を受け、扇状地堆積物や河川供給物の後背湿地が拡大していた。遺跡南半の泥炭面は、西の谷部からの扇状地形成によって埋められつつあった。始良Tn火山灰降灰の結果、木本ではハンノキ属・カバノキ属、草本ではイネ科・ワレモコウ属・ヨモギ科が増加し、カヤツリグサ科・ミズバショウ属が減少した。

篠山盆地周辺の山地は、下位文化層相当期にはどこでもほぼ同様の植生であった。基本的植生として、マツ属・ツガ属などの針葉樹とコナラ亜属・ニレ属などの広葉樹の混交林となる。上位文化層相当期では、始良Tn火山灰の降灰の結果山地の植生に大きな被害があり回復は遅れた。マツ属単維管束亜属を中心に生き残った。

板井寺ヶ谷遺跡にこの様な環境をもたらした要因の大きなものの1つが、当時の気候であろう。板井寺ヶ谷遺跡の成果から直接気象条件を言及できるような調査は行えなかったが、重要な側面として考慮したい。また、その遺跡の形成された時期の季節毎の気温・日照時間・気象条件は、旧石器時代の集落立地戦略の重要判断材料であった事は、間違いないであろう。

板井寺ヶ谷遺跡周辺の環境から考えられる当時の旧石器人が利用可能な可食植物を、泥炭層中の植物化石の分析結果から明らかになった植生の中から選んでみると、予想外に乏しいことに驚かされる。春にはベリー類、秋には松実類がまとまって認められるに過ぎない。植物質食料はその場で適時採集活動が行われるものであり、一ヶ所で全てをまかなう必要はないが、よほど広範囲の採集活動が行われない限り、板井寺ヶ谷遺跡周辺で確保できる植物質食料で全ての食料を維持することは困難であったろう。板井寺ヶ谷遺跡周辺に生息した動物相については、遺跡内・周辺での当該期化石の出土事例は認められず、まったく知り得なかった。

板井寺ヶ谷遺跡の立地は、低地と山地・乾地と湿地の二つの環境帯の境界域にあり、両環境が等距離に遺跡を中心とした同心円を上下に二分して取り巻いている。この様な古地理と植生は、さらにその地での季節ごとの降雨や気温、日照時間といった基礎的環境、さらに板井寺ヶ谷遺跡では直接的な検討の出来ない棲息動物、当時の人間社会まで合わさって、はじめて総合的な遺跡環境となりうると考える。板井寺ヶ谷遺跡で行われた多角的な自然科学の調査は、遺跡を取り巻く自然的環境を初めて立体的に明らかにした意義がある。

(山口)

## 第3節 集落としての板井寺ヶ谷遺跡

### 1, 下位文化層の遺跡構造

#### a, 遺物・遺構の分布

##### 始良Tn火山灰直下の微地形

板井寺ヶ谷遺跡下位文化層の発掘では、約3670㎡を発掘した。始良Tn火山灰層直下の黄色粘土と泥炭IIIの下部から遺物が出土している。始良Tn火山灰直下の埋没微地形は、北西が高く南東が低い標高214.20mから207.50mまでのなだらかな斜面となっている(第IV章第3節1)。

調査範囲には、当時の湿地と陸地の2つの異なる領域を検出した。湿地部は、西端で標高210.60m、北で210.80m、南で207.50mで、1,388㎡を発掘した。周辺地形から考えて湿地部は南東へ広がっているが、標高差が大きくて篠山盆地南部にあったと考えられている湖水面(野村、第VII章第6節)には連続しない。草本を主体とする腐植質で形成された泥炭が豊富に堆積し、根株の残る埋もれ木が豊富に発掘された(大井・南木・能城、第VII章第3節)。泥炭中の珪藻分析では、遺跡内の泥炭は安定水面下でな

く、表面水流によるものであることが指摘されている（佐藤、第VII章第4節）。

陸地部は、北で標高214.20m、南で208.40mで、2,280㎡を発掘した。陸地部は湿地部に東南方向に舌状を呈して突出している。陸地部の黄色粘土中には、自然の礫包含はない。

#### 石器の分布とブロックの設定

遺物分布は、原位置を確認して取り上げた合計2,353点で構成される。遺物のほとんどが陸地部の範囲全域で発掘された。東側の谷部には遺物分布は延びない。南の湿地部には陸地部南端から近いところに若干の遺物分布がある（第IV章第3節2 a）。遺物は、黄色粘土層と泥炭III下部・灰色粘土層理面上から出土した。

遺物分布は、まんべんなく散布しているわけではなく、視覚的にいくつかの集中に分けることができる。大きく観察するなら直径10数mの範囲で区切ることができ、細分すれば2~3mの範囲で境界を引くことができる。大きい単位で観察すると、求心性のある集中部と求心性に乏しく小さな島状分布の集合部が認められた。統廃合しながら区分した遺物集中は、石器類ブロックA~Lとなる。あまりに大きい石器類ブロックは、2分して検討する場合がある。さらに、群島状集合部は島ごとに、求心的集中部分は粗密の判断によって、小ブロックに細分を行った。下位文化層出土の石器は、いずれかの石器類ブロック・小ブロックに所属することになる。また、視覚的判断によって設定された各石器類ブロックは、検討を進める中で統廃合される（第IV章第3節2 b）。石器類ブロックB、C、Dは、境界が鮮明ではなく、後にB+C 2・3、D+1・1 outに整理された。

下位文化層では、ナイフ形石器・搔器・削器・彫器・楔形石器・斧形石器といった定型石器と加工痕有剥片・使用痕有剥片、剥片・砕片・石核などの剥片石器生産による付随生産物、局部磨製石斧・礫器・磨石・敲石等の礫器類が組成するが、発掘調査中より、剥片石器がチャートとサヌカイトを主な石材としていることが気付かれた。両石材の石器群は遺跡内の分布状況に差があり、サヌカイトはほぼ全域から発掘されるが、チャートは北部に集中した。先の石器群の検討で明らかにしたように、サヌカイト製とチャート等製の石器群は、それぞれ瀬戸内と中国山地とに系譜が求められ得る石器群である。両石材石器群の、遺跡内での分布状況を明らかにする必要があるので、両石材の石器類の分布状況は、全石器群の検討と併せて、できるだけ分けて検討した。

設定された石器類ブロックAからLまでを観察しよう。A、BまたはB+C 2・3、E a、E b、F、Hの6集中部は、遺物の集中度が高く、分布に途切れが無い。これらの集中度の高いブロックでは分布の粗密によつ小ブロックに細分される。CとDまたはD+C 1・1 out、G、I、J a、J b、Kの6または7集中部はいくつかの小集中部が集まってできていて、隣接したり共通した内容を持つものを統廃合したものである。小集中部はそのまま小ブロックとしても取り扱った。Lは、未発掘部が大きく評価できない。いずれのブロックも直径10m以上の面積を持つ。

石器ブロックの分布中心を、石器類の取り上げ座標を平均する事によって求めた。各ブロックの泥炭面からの距離によって、ブロックの離水度を示す（第319図）。ブロックAは、泥炭面からいちばん遠く舌状の中軸線上に位置する。A・B・C・E a・E b・Fが遠く、D・G・H・I・J a・J bが泥炭面に近い。Kは、泥炭面中にある。

下位文化層の石器群は、系統が異なるサヌカイトとチャートの両石器群があるので、次に石材別に分布状況を観察しよう。サヌカイト製石器群の分布は、各集中部に広がるが、特にA、D+C 1・1 out、G、H、I、J a、J bに豊富である。どちらかという陸地部南部に多いように観察する。チャート

製石器群の分布は、陸地部北部に集中する。集中個所ではA、B+C 2・3、D+C 1・1 out、E a、E b、Fに極めて集中する。これらは、中央に空白部を持ちながら環状に分布している。南部のJ a、J bとKにも疎らに分布する。全石器群の分布から視覚的に設定した石器類ブロックは、大きくみると石器類ブロックGを重複領域として、南北に二分できる。

石器類ブロックの分布の状況を、求心的・散漫・島状などといった視覚的・漠然とした表現でなく、数値として遺物分布のあり方を把握するため、50cm四角での両石材製石器類の点数を数え、その共伴平均個数を求めた(第20表)。その結果、A・E aが平均値を越えて集積度が高く、B・D・Fがほぼ平均値、その他のブロックは平均値を下回った。特にG・Iでは遺物が散在している事が判明した。結果は、ほぼ視覚的な判断の妥当性を裏付けた。

全石器群・サヌカイト製・チャート等製石器群の平均共伴個数から考えると、サヌカイト製石器群とチャート等製石器群は、それぞれの観察値よりも全石器群の共伴個数が高くなる事から、一見、南北に両者が分離して分布しているように見えるが、両者は積極的とまでは言いがたいが、関係を持って分布している事が理解される。

#### 石器類ブロックの石器組成

石器類ブロックごとの石器組成について検討してみよう。石器類の点数の多いのはブロックAで478点、少ないのはブロックKの13点、Iの55点で、石器類の数量は一定しない(第337図)。極端な石器類の量的多寡の存在は、それらの石器類ブロック形成の背景が、必ずしも同じではない事を伺わせる。石器類点数の多いのは求心的分布の認められたブロックで、少ないのは「群島状」を呈したブロックである。石器類点数で400点を越えたのは石器類ブロックA、B+C 2・3、多くが100から250点で、100点を下回ったのは石器類ブロックG、I、K、Lである。ブロックが単一の機能空間で構成される場合、複数の機能空間が重複して構成される場合など、小ブロックに細分して検討する必要がある。

サヌカイトとチャートの2群の石器類の石器類ブロック内での点数的比率を求めてみる(第325図)。サヌカイト製石器類が、80%前後の高率を占めるG、H、I、J bの4集中部、60%前後のD+C 1・1 out、J aの2集中部に多く、主体となっている。サヌカイト石器群占有率が20%前後のA、B+C 2・3、E a、E b、F、Kの6集中部ではチャート製石器群の方が主体であり、Aがサヌカイトをやや多く含み、FとKが少ない。サヌカイト石材占有比率では、遺物集中部を3群に区別できよう。遺跡内の空間配置に照らしてみると、サヌカイト占有率によって陸地部南部と西部、北部の3つの領域に区分できる。

定型石器と加工痕有剥片・使用痕有剥片の組成比率を石材を区別せずブロック毎に観察してみると(第323図)、大きく2つのグループに分ける事ができる。ナイフ形石器・搔器・削器が多いB、B+C 2・3、E a、E b、F、J aの一群と、加工痕有剥片・使用痕有剥片の多いA、C、D、D+C 1・1 out、H、I、J bの群である。

各遺物集中部とも一通りの石器を保有するが、チャート等製石器群主体のA、B+C 2・3、E a、E b、Fでナイフ形石器・搔器・削器など全ての器種が豊富で、サヌカイト製石器群主体のD+C 1・1 out、H、I、J a、J bでは、サヌカイト製加工痕・使用痕有剥片が優越する。チャート等製石器群主体の遺物集中部の石材別石器組成は極めて似ている。一方のサヌカイト製石器群主体の遺物集中部はばらつきが大きい。

サヌカイト製石器とチャート等製石器を分けて、どちらが多いかを検討してみると(第327図)、A、



B、B+C 2・3、E a、E b、Kがチャート等製石器主体で、まんべんない石器組成を有している。C、D、D+C 1・1 out、G、H、I、J a、J bがサヌカイト主体で、ばらつきの大きい石器組成をしている。J aでは定型石器が多い事が注目される。

各遺物集中部での道具箱について検討しよう。それぞれの石器類ブロックは、遺物の点数では大きな差があるが、石器類ブロックG・I・K・Lなど特に石器類点数の少ないブロックを除くと、石器組成としては一応、基本的な石器器種を有している。南北に分割して比較した場合、南群・北群とも内部ではほぼ等しい石器組成となる。剥片・碎片・石核等の付随生産物に合わせて、北群ではナイフ形石器・搔器・削器・錐状石器・加工痕有剥片・使用痕有剥片などの豊富な石器組成、南群ではナイフ形石器・削器・加工痕有剥片・使用痕有剥片などが出土している。石器組成として、南北にそれぞれほぼ等質な石器類ブロック群がある事がわかる。

石器類ブロックを、小ブロックに細分し、その組成傾向を観察してみる(第423・424図)。ナイフ形石器・搔器・削器・錐状石器・楔形石器などの定型石器を多く組成する小ブロックと、加工痕有剥片・使用痕有剥片の組成が多い小ブロックがあり、これが組合わさって、石器類ブロックを形成する。定型石器の多い小ブロックと少ない小ブロックが組み合わされたのはA、B+C 2・3、E bの3石器類ブロック、多い小ブロックのみのはE a、F、J aの3ブロック、少ないのはD+C 1・1 out、G、H、I、J bの5ブロックである。石器類の組成が豊富なのは北群に、貧弱なのは南群に多く存在する。

#### 接合資料・個別別資料の分布

接合資料と個別別資料の分布状況を観察しよう。接合資料・個別別資料の分布は、石器の製作、移動と使用・廃棄の状況を示していると考えられる。接合資料・個別別資料の発見は、石材の個性を認め易いチャートは容易で、特徴に乏しいサヌカイトは極めて困難である。個体の識別は、チャート等製の石器類に限定される。接合資料の発見率も両者には大きな差があり、チャート製石器類の接合率約24.5%、サヌカイト製石器類の接合率は約11.8%である。

サヌカイト製接合資料の分布(第416図)は、サヌカイトの多く分布するA、D+C 1・1 out、H、J a、J b周辺に限られる。剥片生産段階の多くが欠落するサヌカイト製石器群の場合、点数の多い場所で石器製作・調整や使用が行われ、使用後遺棄または破損廃棄にいたったと考えることができる。多くが石器類ブロック内での接合である。石器類ブロック間に認められたサヌカイト製接合資料には、石器の破損接合が多く認められている。

チャート等製接合資料の分布(第417図)は、チャート等製石器群の集中して分布する北半に偏っている。剥片生産工程が遺跡内で一貫して行なわれたチャート等製石器群に含まれる接合資料は、圧倒的に剥片生産段階のものが多く、A、B+C 2・3、Fの遺物集中部に多い。接合資料分布はほとんどが1つの集中部内で完結しているものの、環状分布の空白部を跨いで動く接合個体もあり、これら移動する資料は石器や剥片である場合が多い。石核が石器類ブロックを移動して剥片剥離を続けた個体はほとんど認められない。石器類ブロックA、J aでは、ほとんどの接合資料がブロック内で完結する。ブロックB+C 2・3、F、E a、E b、D+C 1・1 outは、相互に接合資料を共有する。近接するAとB+C 2・3間には接合資料は認められない。E a、E b内部では接合率は低く、ほとんどが石器または剥片の破損接合である。AとE a間には、僅かの接合資料がある。

本報告では、接合資料の分布状況を石器類ブロック、小ブロック間で観察した。計量的方法として、野沢遺跡(鈴木、82)で試みられたブロック間接合資料共有の相互強度を、山下秀樹氏(山下、82)の

方法に従って求めた。計算方法は紙幅の関係で載せえなかったので原典を参照されたい。分布上の見かけではなく、関係の強度を客観的に数値化でき、比較が容易となる利点がある。

個別別資料はチャート等製石器群にのみ認められた。個別別資料の分布（第422図）は、北半に集中し、僅かに南部に散在する。泥炭面にある石器類ブロックKやサヌカイトを主体とするブロックJ aにある個体の一部は、北群に同一個体を持つ。

#### 石器の機能と場の機能

遺跡全体の石材別石器器種間の相関関係を観察するために、器種分布位置関係でどれだけ隣接確率が高いかを統計学的に求めた。石器分布の位置関係の中に制作・使用・廃棄等の何らかの関係があれば共伴確率が増減して、一般値を上下する度合いでその相互の関係強度が示される。検定基準として2m以内を採用した。1が遺跡の一般値であり、数字が1より大きいほど関係が強く、少ないほど弱い。この結果をもとに樹状図（第365図）を作成した。サヌカイト・チャート両製搔器、サヌカイト・チャート両製錐状石器、チャート製削器、礫器、チャート製加工痕有剥片が1つのクラスターを標準値の5倍以上で作る。局部磨製石斧と槌石、磨石もクラスターを作る。サヌカイト製楔形石器とサヌカイト製加工痕有剥片、サヌカイト製削器、サヌカイト製彫器も2.3倍程度の緩いクラスターを作る。サヌカイトとチャート両製の使用痕有剥片は、他の器種と結びつかず疎らに分布するらしく、クラスター内に組み込まれない。サヌカイト製ナイフ形石器と台石、チャート製楔形石器が1つのクラスターになる。サヌカイト製斧形石器は、単独で位置する。

石材別器種間分布の相互関係強度は、サヌカイト製とチャート製の両石器群の分布が2つのクラスターを作り、2つの異なった石器群の構造を示す。サヌカイト製石器群の中で特異な存在であった搔器が、チャート製石器群のクラスター中に含まれたことは、サヌカイト製搔器がサヌカイト製石器群ではなくチャート製石器群に組み込まれたものであることを暗示する。チャート製クラスターが強くてなのは、北半に集中するからであろう。同時並存ながら、サヌカイト製とチャート製の両石器群は異系統の異なる分布パターンを持つものとして分離できる。

#### 遺構と石器類ブロック

板井寺ヶ谷遺跡下位文化層で発掘された遺構としては、配石・配石群・礫ブロック、土壇、炭化物密集部がある。

配石・配石群・礫ブロックは、礫石を単独もしくは複数配置したものである。礫石は、腐敗・風化を受けず、全てが遺存していると考えられる。配石・配石群・礫ブロックの分布は、石器点数の多い石器類ブロックに重なって認められる。配石群は、チャート製石器類の多い北群やブロックH、Kにあり、南群には乏しい。下位文化層の微地形の中では、傾斜のややきつい部分でブロック周縁に配石が多く、緩やかな部分のブロック中心に配石群・礫ブロックが配される事が多い（第352図）。礫ブロックの構成礫は、受熱したものが含まれ、多くが小さく破砕している事から、火に近く、打撃を受けうる様な使用が一定の空間で行われたと考え得る。配石・配石群は、大型礫で、受熱が認められず、多くが完形を保つ事から、石器製作や調理、居住との関係が考慮される。

土壇は、Aに土壇1基、B+C 2・3に土壇4基、J aに土壇1基で、このうち1基は住居の可能性がある。ブロックB+C 2・3の土壇4基は、ブロックの北半に集中する。土壇の数は多くなく、埋没するまでの年月で破壊された可能性があるが、石器類ブロックに付随して出現する遺構と見なし得る。土壇の性格としては、墓、貯蔵施設、廃棄施設、住居等が推測されようが、必ずしも特定に至らない場

合が多い。第1・2土壌は、礫石が充填された小型のもので、調理施設、石器が内部から出土したことから祭祀施設のいずれかの可能性が有力と考えられる。第3・4土壌は浅い皿状の大型のもので、大型の第3土壌検出時に上面で定型石器が集中した事、復元推定した土壌の形状が直径2.5mの円形になることから、住居である可能性が考えられた。この場合、第4土壌は住居の一部か付属施設と考えられる。第5・6土壌は小型不定形のもので、必ずしも人為とは決めかねる。第5土壌内部には配石群構成配石1個が認められ、土壌と配石群の形成が同時であることが知れる。第6土壌では微細炭化物多数が埋土に含まれ、近傍に火処のあった事が知れる。

炭化物密集部は、泥炭面で4ヶ所が認められた。南地区2ヶ所、東地区2ヶ所で認められ、あたかも陸地部を囲むように配される。陸地部に認められたものはないが、第6土壌の内部に多量の微細炭化物を含む埋土が認められた事から、陸地上でも同種の炭化物の集中が全く無かったとは言えない。石器類ブロックとの関係は薄いと考えられる。炭化物密集部が泥炭面中に発見されたことから、世帯の火処とは考えにくく、作業用のものか、失火、山火事の延焼とも考えられる。また、自然状態での遺跡周辺が森林環境であることから、集落選地の為の野焼き行為の存在を暗示するのかもしれない。

下位文化層のいずれの石器類ブロックの大きさも、直径10~15m前後の空間を有し、いくらかの刺突具、調理・加工用具が伴う。人間集団が一定日数居住した空間に本来必ず残されるべき遺構として、住居・火処がある。

板井寺ヶ谷遺跡下位文化層において、住居の可能性のある遺構として、石器類ブロックB+C2・3の第3土壌があるに留まる。その他のブロックには、住居施設と考えられる遺構は検出されていない。下位文化層において住居施設は、掘り込みや柱穴などを伴わない、構築性の低いもので、本来的に考古学的検出が困難だったり、すでに自然破壊されたと考えた方がよい。

火処は、泥炭面にある炭化物密集部と第6土壌内の炭化物、受熱した石器類の存在から窺える。炭化物密集部は、石器類ブロック外の湿地部に存在し、居住空間外と考えられる。第6土壌は石器類ブロックJ aにある。土壌自体が火処とは考えられないが、炭化物の集中は近くでの火処の存在を推測させる。微細炭化物の分布状況について、十分な調査は出来なかったが、陸地部分で火処の形成による炭化物の生産があっても、風水の影響によって失われている可能性が高い。受熱石器類は、数量的多少はあるものの、石器類ブロック全てで検出され、石器類の一部がしばしば受熱する状況があったことを示唆する(山下、88)。明瞭な火処や炭化物密集部は認められないが、本来、全ての石器類ブロックに火処があったと考え得るであろう。

## b. 集落構造

### 下位文化層の空間分析

旧石器時代遺跡の遺跡構造把握のため、遺物分布分析の基礎的単位として、ブロックまたはユニットという単位が用いられる。第IV章第3節での分析を受け、板井寺ヶ谷遺跡の旧石器時代集落復元を目指そうとする場合、この設定に付いて整理しておくことが必要である。旧石器時代遺跡の集落景観復元に意欲的に取り組む鈴木忠司氏は、ブロックとユニットの定義を以下のように整理している(鈴木、80)。

「ブロックは、純粹に遺物の分布上の視覚的な、まとまりに対して用い、分布上のまとまりということ他に意味をもたない事とする。」「ユニットは、ブロックにおける見かけ上の単位を越えた、・・・機能的あるいは行動型に裏打ちされた意味づけをなして、これを用いる。」「・・・単一のブロックとして認めた中に、分析者の視点にそって、複数のユニットを設定しても良い。また逆に複数のブロックを

統合してユニットを設けてもよい。」

鈴木氏等は、寺谷遺跡（鈴木他、80）・野沢遺跡（鈴木他、82）・溝口遺跡（山下・南、86）の調査を通して、旧石器時代遺跡を集落として捉え、それを構成する基本的単位として世帯の存在を考えている。集落景観とその構成単位の把握のため、一世帯によって集中的に残されたと考えられる遺構・遺物群に対し、複合構造体として世帯ユニットと呼称している。

板井寺ヶ谷遺跡では、ブロック・ユニットの概念を、鈴木氏らの成果に準じて使用する事とした。一方、第IV章第3節で分析したように複数の段階のまとまりを問題としてきたという、板井寺ヶ谷遺跡独自の状況もある。まず、下位文化層全体、南北の構造、サヌカイト製・チャート等製石器群の分布、石器類ブロック、小ブロックなどであり、配石・配石群・礫ブロック、土壌、炭化物密集部などの遺構のまとまりである。全てが視覚的なまとまりとして把握され、いくつかの分析を経て、統廃合される。第IV章第3節で多くの段階について検討したのは、集落全体の景観、瀬戸内系・中国山地系の集団間関係、集団毎の世帯関係、世帯内の場の機能の重層的構造を明らかにしたいが為であった。このため、一部の資料操作は鈴木氏らと必ずしも一致するものとなっていない。

下位文化層における南北構造、瀬戸内系・中国山地系石器群の関係は、異系統の石器群が直接接触をした状況を示し、従来知られていなかった地域集団間の動態を示した希有の例であると考えられるので、重点的に検討する事となった。この場合の分析単位は、石器類ブロックの南北両群、サヌカイト製・チャート等製石器群である。総体としての集落は、南北構造にも関わらず、基本的居住単位としての世帯により構成される。しかし、南北両者の間に構造的相違がある事から、構成世帯の出自は瀬戸内系・中国山地系のいずれかに求められ、世帯の抽出は両石器群毎に行う必要があり、全集落を1つの基準で判断する事には困難があると考えられる。

筆者は板井寺ヶ谷遺跡下位文化層の状況から、ユニットという分析用語を世帯に保持または世帯間の関係によって形成されたと考えられる遺構と遺物の集まりに適用する事にした。世帯に対応する考古学的情報のまとまりが、世帯ユニットとなる。世帯ユニットは、複数が構造的関係を持って、南北両群のまとまりを形成するとともに、総体としての集落を形成する。一方、集落としての段階から考える場合、それを構成する基本的単位として下位文化層全体の段階と、南北構造を個別の集落と考える段階の2つがある。この段階は、この様な南北構造を有する板井寺ヶ谷遺跡特有のものである。そこで、世帯に保持される遺構と遺物のまとまりの把握作業に合わせ、南北両群の内容把握にも心がけた。

下位文化層の集落構造の追求は、第IV章第3節で行ってきたように、個別の検討課題の結果の当否はともかく、解釈的要素が強くなる。当然、導かれる結論も仮説的である。しかしながら、異なった系統の石器群の共存という、希有の考古学的事例であり、積極的に可能性を探る意義は大きいと私案する。

#### 南北構造

サヌカイト・チャート等製両石器群は、石器類の技術形態学的特徴、復元された剥片剥離技術、石材によって、異なった石器文化伝統の石器群である事が判明した。サヌカイト製石器群は、瀬戸内系旧石器群としての形態的・技術的特徴を備えている。チャート等製石器群は、縦長剥片剥離中心の剥片剥離技術を母胎とし、中国山地帯に広がった旧石器群と共通性がある特徴を備える。サヌカイトは瀬戸内・近畿地方中央部からの遠距離石材であり、チャート等は板井寺ヶ谷遺跡周辺で普遍的な在地石材である。

両石器群の判別は、技術形態学的に曖昧なものがあるが、石材で区別するのが分かりやすいので、サヌカイト製石器群＝瀬戸内系石器群、チャート等製石器群＝中国山地系石器群と考え、遺構と遺物の分

布状況を解釈する。

板井寺ヶ谷遺跡下位文化層のように、異なった技術形態学的特徴を持つ石器群が2つ同時に発掘された場合、可能性ある解釈は以下のように大きくまとめて3つある。

- 1、一見同時のように見えるが、両者に時間差がある場合。
- 2、1つの集団が2つの石材と技術を使い分ける場合。
- 3、同時に2つの集団が、それぞれの石材と技術を使用した場合。

両石器群の同時性は、チャート等とサヌカイトが主体石材がいずれかに関わらず、どの遺物集中部でも共伴することで証明される。集中部の中心が一致する場合が多い。下位文化層全体での両石器群の積極的共伴関係が認められる。また、石器類の組成には、サヌカイト製搔器や斧形石器など、チャート等製石器群からの影響とも思える器種があるので、両石器群は全くの同時期と考えてよい。視覚的には、チャート等製石器群の分布が北半に偏るのは、南半に立ち入りにくい存在があった事の証明である。考古学的に考えて同時性を認め得る事から、仮説1の可能性は低い。仮説2はどうだろうか。下位文化層全体として両石器群は積極的共伴関係にあるが、主分布域は南北に偏る。この場合、石材と技術を使い分けようとするとき、大きく場所を替えて行った事になるが、チャート等を山側で使用すべき理由がない事、もともとサヌカイト製石器群は瀬戸内系、チャート等製石器群は中国山地系石器群である事が明らかで、仮説2も難しい。結局残るのは、仮説3である。

板井寺ヶ谷遺跡下位文化層でのチャート等製・サヌカイト製の2つの石器群は、石器組成内容と石器制作技術、遺物分布の偏り、器種間の分布相関関係強度による遠近、石器接合資料の分布関係から、

- 1、瀬戸内系と中国山地系の2つの旧石器時代集団が、
- 2、それぞれの存在を意識しながら瞬間的同時期に1つの遺跡に共存し、
- 3、中国山地系集団は北半に、瀬戸内系集団は主に南半に居住した。
- 4、両者の石器群が混じることから、何らかの共同が行われた。

ことが導き出せる。

両石器群の分布は、下位文化層全体であるが、とくに石器類ブロックA、B+C 2・3、E a、E b、F、K、Lにチャート等製石器群=中国山地系石器群の分布主体域があり、G、H、I、J a、J bにサヌカイト製石器群=瀬戸内系石器群の分布主体域がある。両石器群を保持した集団として、それぞれに中国山地系居住集団、瀬戸内系居住集団が相当するだろう。両居住集団の実態解明は、世帯に保持された遺構と遺物のまとまりである世帯ユニットの検討を待たねばならない。

#### 住居と世帯の認定について

世帯に保持されたと考えられる遺構と遺物のまとまりをどの様に把握するかは、旧石器時代集落研究に留まらず、先史考古学一般にかかわる、大きな問題である。集落研究にとって、それを構成する世帯と住居の数と内容把握は、欠くべからざる要素である。ところが、旧石器時代において明らかな住居遺構の検出が希なため、縄文時代以降のように検出した住居遺構をもって世帯と見なす事は出来ない。

現在、旧石器時代集落の「世帯」認定は、住居遺構の欠落によって、遺構と遺物のまとまりから行おうとする事が、一般的動向となっている。また、遺構や自然遺物に乏しく、石器・礫石以外の出土物の希な日本では、視覚的に判断する事は困難で、石器・礫の接合関係も含め徹底的な分布の検討作業が必要となっている。

この様な状況から、1970年代に入って、砂川遺跡で個体識別・接合作業の成果とブロックの分析を結

び付ける試みが行われ(戸沢、68)、野川遺跡では、石器類の分布のまとまりと組成の違いを、ユニットとして把握しようとした(小林他、71)。また、先に述べたように寺谷遺跡、野沢遺跡、溝口遺跡、広野遺跡では、鈴木忠司・山下秀樹・保坂康夫氏らによって、各種・各段階のブロックをユニットに統廃合し、世帯存在を明らかにすることが試みられている。

埼玉県砂川遺跡では今まで多くの論考が発表されたが、A、Fの2地点、合計6ブロックに対し、ブロックごとに6世帯を認める解釈、周辺に未発掘の世帯がある大集落と考える解釈、1～3世帯のF→A地点への回帰を考える解釈、A・F両地点を同時存在の2世帯とする解釈があり、結論をみるに至っていない。

遺構・遺物の分布の中で、世帯をどの様に認定するかは、多様な解釈が行われている。この様に、世帯の認定を積極的に行おうとした場合でも、個々の場合、必ずしも判断基準の一致を見ているわけではない。特に、最も精緻な情報の公開が行われた砂川遺跡では、世帯の認定・同時性の判定でたくさんの解釈がある。たとえ、自然遺物などの遺存状況がどんなに良くても、視覚的に住居遺構が認められない場合、解釈が分かれることも知られている(Binford、83)。遺構・遺物のまとまりと世帯の行動を同時に観察することの出来ない旧石器時代にあつて、住居遺構がない限り、世帯としての決定的考古学的証拠を手にする事は、まずないと考えるべきである。現状において、世帯の認定は、民族考古学の成果や外国の事例を援用したとしても、考古学上の解釈的・仮説的な検討段階に留まっているといえよう。逆に考えると、集落の検討には、解釈的・仮説的な部分が必然であることになる。結果として、考古学的に検出される数々の顕在・潜在構造の複合の、一定の組み合わせをもって世帯存在と見なすことになろう。

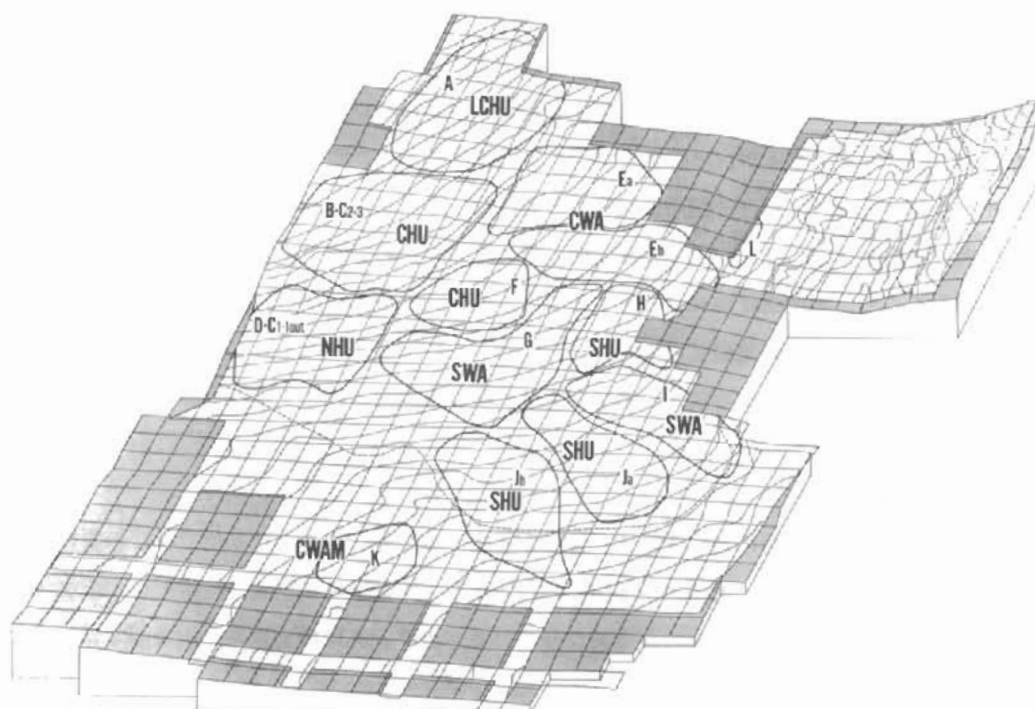
以上のような状況と寺谷・野沢などの研究例を前提として、板井寺ヶ谷遺跡の分析にあたって、遺構と遺物の潜在的・顕在的分布構造の組み合わせから、世帯の認定の条件を以下のように考慮した。

- 1、世帯を支え得る石器(道具)を確保していること
- 2、施設(住居や炉、配石群・礫ブロックなど)が認められ、世帯として十分な空間を有すること
- 3、石器類の接合資料・個体別資料分布の集中性があり、主体的な剥片剥離作業、石器生産が認められること
- 4、占有空間での「場」の使い分けが認められること
- 5、石器類ブロック相互の位置関係が独立的事であること

必ずしも、これら全ての要件が満足されなければ世帯を認定してはいけないわけではない。また、必要な要件の欠落があるとも考えられ、全てを満たしても世帯の存在を実証するわけでもない。遺構・遺物の分布の中で、考古学的に仮想される世帯と実際の世帯存在の間に、差異があることは、容易に予測されよう。しかし、実際の世帯と近似した考古学的仮想世帯は、集落の実態解明に一步近づける唯一の手段である。世帯存在の仮想という考古学的仮説の当否は、今後個々の事例を重ねることによって、明らかとなる。同時に、考古学的仮想世帯を、より実際の世帯に近似させ得るようになると考える。ここでは、従来の解釈では抜け落ちる場合が多かった世帯の占有空間の広さに注意を払い、板井寺ヶ谷遺跡下位文化層の遺構と遺物分布を残した行為者の実像を解明する手段として、検討を進めることに専念する。

#### 南北両群とユニットの設定

先にあげた世帯存在を認定する要件は、下位文化層に瀬戸内系と中国山地系の2つの集団があり、それぞれの石器類ブロックの石器類組成や、分布上の石器器種間関係も大きく異なることが、すでに明ら



第511図 下位文化層ユニット配置俯瞰図

( CHU：中国山地系世帯ユニット SHU：瀬戸内系世帯ユニット NHU：中間的世帯ユニット )  
 ( LCHU：中国山地系有力世帯ユニット CWA：中国山地系作業空間 SWA：瀬戸内系作業空間 )  
 ( CWAM：湿地内中国山地系作業空間 )

らかとなった。南北両群で、異なった基準によって世帯ユニットの設定が必要となる。特に、定型石器の組成比率がチャート等製石器群で高く、サヌカイト製石器群で低い点は、両石器群それぞれの道具箱が異なっていることを示唆した。サヌカイト製石器群の分布する南群では、チャート等製石器群の分布する北群よりも定型石器が少なくても世帯ユニットを認めることが妥当であろう。接合資料についても同様の傾向があるので、剥片剥離・石器製作作業の活発さの判断も、これに準じよう。判定した結果は、以下ようになる。

チャート等製石器群が集中する北群では、石器類ブロックA、B+C 2・3、D+C 1・1 out、Fがこの要件をほぼ満たしている。石器類ブロックE a、E b、Gでは、石器組成が貧弱であったり、剥片剥離作業が存在しない、場の使い分けが認められないなど、要件の一部または全てに欠けている。北群では、世帯に保持されたと考えられる遺構と遺物のまとまり、世帯ユニットをA、B+C 2・3、D+C 1・1 out、Fの4個所に認めることにする。石器類ブロックD+C 1・1 outは、世帯ユニットとしての要件をほぼ満たすが、石材組成と剥片剥離作業の不活発さの点で、他の世帯ユニットと異なっている。このD+C 1・1 outは、サヌカイトの石器類組成比率がチャート等を上回っている点で、北群と南群の中間的様相をした世帯ユニット的である。E a、E b、Gは、特定の世帯として特定できない空間であるが、石器の移動が周辺の世帯ユニットから認められることから、世帯間の共有的空間と見なした。これは、具体的な遺物の動きの分析から、作業や廃棄の為の空間と仮定できよう。石器類ブロックGは、南北の境界領域ではあるが、サヌカイト製石器類組成比率がチャート等製石器類よりも高く、むしろ南群に親和性がある。

サヌカイト製石器群が集中する南群では、サヌカイト製石器類が分布主体であり、石器組成や遺物の

分布に特徴が乏しいため、世帯ユニットの設定の根拠を見いだすのは容易ではない。石器類ブロックHは、石器組成が十分ではないものの、ほぼ要件を満たす。石器類ブロックJは、単一の世帯とするとやや範囲が広すぎるし、J a、J bの両方とすると両者の内容に違いがありすぎ、ブロックJに世帯ユニットを認めるのは肯首できるが、その数と実態には問題を残した。南群では世帯ユニットを、H、JまたはJ a、J bの、合計2から3個所に設定できる。G、I、Kは、石器の分布、接合資料の希さから、世帯間の共有空間と見なした。作業や廃棄空間と考えておく。石器類ブロックKは、石器類全てがチャート等製であること、泥炭面に離れて位置すること、個体の共有関係から、南群のサヌカイト製石器群には含め得ず、北群の突出的発現と考えた。

下位文化層では、系統の異なる二つの集団が南北に接して同時に存在する。この空間配置を俯瞰図にして示す(第511図)。

#### 世帯ユニットの構造

板井寺ヶ谷遺跡下位文化層の南北両群で、世帯を設定する場合、異なった基準で世帯の要件を満たしたかを判断する必要があった。瀬戸内系集団における世帯と中国山地系集団の世帯では、考古学的事実として仮想される世帯存在は、多くの点で異なっている。当然、実際の世帯も、両集団では違ったことは間違いない。

それでは、同一集団内の世帯のあり方はどうだろうか。AとB+C 2・3は、チャート等製石器群の主に分布する北群において、最も石器類の出土した世帯ユニットである。そこでは、石器類の他に配石や配石群・礫ブロック、土壌などの遺構も存在し、石器類ブロックの範囲も明瞭である。第IV章第3節6eで、特に北群のAとB+C 2・3の世帯ユニット内空間配置を検討することにした。南群の世帯ユニットでは、その仮想世帯存在の内容に不安があって、断念した。

この2つの世帯ユニットを、定型石器、加工痕有剥片・使用痕有剥片、剥片、石核、接合石器類、遺構がどの部分に分布するかを観察し、空間機能の配置を検討した。同じ意図で小ブロック石器組成の比較を行っているが、小ブロックの設定が石器類の量的集中度によって行われたので、機能と空間がうまく対応しない場合が考えられたのである。

世帯ユニットAは、遺跡内最高所に位置し、直径15~18mほどの、最も石器類の点数の多いユニットである。剥片剥離作業が行われたのはユニット中央部で、北半には廃棄空間・作業空間が大きく重なるように広がったと考えた。居住空間は、特に遺構としての検出はなかったが、剥片剥離作業の行われた空間より高い位置に、南の低位な方向に向かって開口するように想定した。剥片剥離作業のほとんどは、ユニット内で分布が完結し、ユニット外への持ち出しは石器や剥片状態で行われている。

世帯ユニットB+C 2・3には、土壌4基があり、このうち第3土壌が住居遺構とも考え得るものである。ユニット中央から南半に広がって剥片剥離空間が認められる。定型石器が集中するのは第3土壌上に限定され、機能的に特化した作業空間と考えられた。剥片剥離作業空間の周辺には、加工痕有剥片や使用痕有剥片の多い作業空間が配される。北の東西には廃棄的な空間が考えられた。居住区間は、第3土壌の形状と上面での石器の集中を根拠に、ここに想定した。南の剥片剥離空間に向かって開口する住居施設を復元できよう。世帯B+C 2・3の住居施設と考えられる第3土壌上では、搔器・削器・錐状石器などが集中して出土している。復元想定した土壌の形は浅い皿状掘り込みを呈し、住居施設の一部に類似する。土壌底部には薄い砂層が存在し、多くの石器がその上部で出土したことから、土壌の埋没と石器の分布に時間差があると考えられる点は、消極的証拠であるが、ここを住居と考えると、世帯



ユニット内の空間配置をうまく説明できる点は極めて重要であろう。空間配置との整合性を積極的に評価できるなら、旧石器時代での確実な類例は知られないが、逆に砂層を住居の「張り床」的機能を持った意図的なものと考えてもよい。ここだけに状況として住居と考えられる遺構が残り得たのだから、板井寺ヶ谷遺跡下位文化層の他の世帯すべての住居施設の構築性が低かったとは、言い切れまい。第3土壌上面の石器は、遺跡内でも特異な集中を示す。搔器と錐状石器、削器の集中は極端である（第365図）。板井寺ヶ谷遺跡において使用痕分析は実施していないが、一般的に搔器と錐状石器は、皮革製品の加工としての機能を含んで想定されていることを当てはめたい。この両者が第3土壌上で集中したことは、そこで皮革製品の加工が行われたと推測される状況であることになる。この様に際だった特定器種の集中と遺構の空間的重複は他に認められないが、第3土壌では、遺構と遺物の分布とに空間的関連があることを認め得ると考える。具体的には、住居内部での皮革の鞣しと穿孔作業である。東には接するように礫土壌2基がある。第3土壌が住居として考え得るかかどうかは、旧石器時代の住居施設のあり方を考えると、考古学的な遺構そのものの検討のみで断を下すことは出来そうもない。周辺の遺構と遺物の中で、住居と考えた場合の空間的機能をどこまで満たしているかを、問う必要があると考える。

世帯ユニットの内部は、以上のように世帯ユニットを認定するための要件を満たしたものの中でも、相違することもあることが判明した。特に、剥片剥離作業空間と作業空間・廃棄空間が避け合ったり、重複したりする場合があります。区間の機能を曖昧としている。また、小ブロック単位での空間機能設定は、石器類の量的問題があって、十分に検討することが出来ないのでは、という疑問を生じさせた。

遺構と遺物の分布という考古学的事実によって、世帯の機能的空間利用を明らかにすることは、世帯存在として仮想する遺構・遺物のまとまりを世帯ユニットと見なしたことの当否から、多くの検討すべき問題を残している。今後、多様な試みが必要とされている。

#### c. 集落と古民族学的動態

##### 集落景観と構造

今まで、下位文化層の遺構と遺物の分布構造の検討結果を整理し、集落構造についてまとめた。最後に、今までの操作・検討の成果をもとに、集落景観の復元を行う。さらに、下位文化層で共存した両集団間・世帯間・世帯内に認められる「古民族学的」動態について、解釈的・仮説的領域に大きく踏み出す部分があることは自明であるが、あえて言及してみたい。

最初に、世帯間の関係を描くことによって、集落の景観を復元したい。考古学的に検討できる世帯間の関係は、石器類や礫石の接合関係、個別別資料の共有関係によって検討できるに留まる。石器の使用や廃棄、製作上の動きしか問題に出来ない。実際の世帯間の関係は、社会的・文化的・経済的に、重層的で複雑なものであったろうこと、そして、それら考古学的に検証できない次元のほうが比重が大きいであろうことを、念頭に置いておきたい。

板井寺ヶ谷遺跡下位文化層は、チャート等製石器群を主体に保持した北群3世帯、サヌカイト製石器群主体の南群2～3世帯、中間的な1世帯の存在が明らかになった。合計で6～7世帯となる。両群は、中国山地系・瀬戸内系集団の世帯群である。また、D+C1・1outの世帯は、他の北群世帯よりも南群に近い性格を有し、両者の中間的世帯といい得るであろうか。大きく分けると2つ、北群でユニットD+C1・1outを分離すると3つの集団が、同時に居住していたことになる。

下位文化層での遺構と遺物の分布を決定した要因は、この集団と世帯であるが、その決定の背景には、考古学的事実としての検討は難しい場合が多いが、地形の傾きや地表の乾湿、樹木・下草の繁茂の状況

が影響していたと考える。巨木等の物理的障害物があれば、空間的に避けざるを得なくなる。また、集団内での住居位置の決定の優先度は、世帯間の優劣という社会的脈絡から決定されるのであろう。

中国山地系の集団は、活発な石器製作の行われた石器類ブロックA、B+C2・3、Fの計3個所に世帯が居住する。遺物分布の空白となっている広場を隔てているブロックEa、Ebは、廃棄または共同作業の場となる。3世帯と作業空間・廃棄空間が広場を囲んで、あたかも環状の集落景観が出現する。また、南の湿地には、チャート等製石器群の石器類ブロックKが単独で存在する。

遺跡内最高所を占める世帯ユニットAは、遺構・遺物分布の平面形がほぼ正円で、眺望のよい場所にやや離れて位置している。剥片剥離作業は活発ではあるが、ほかの世帯ユニットと個体や石器生産段階レベルの交換という直接交渉をもたない。作業・廃棄空間であるユニットEaを介して他の世帯と間接的に関係する。唯一局部磨製石斧を組成する。

世帯ユニットB+C2・3は、ユニットAに次ぐ高い位置にあり、規模もユニットAに等しいが、ややまとまりに欠く空間配置を呈する。石器製作・剥片剥離作業は、必ずしも世帯内で完結せず、ユニットAを除く周辺の世帯や作業ユニットと個体別資料・接合資料の交換がある。局部磨製石斧はないが、大型の礫器を有する。

世帯ユニットFは、A、B+C2・3よりも低位な位置にあり、規模も小さくて、活発な剥片剥離作業・石器生産のみが認められ、石器組成も貧弱である。周辺世帯や作業ユニットと個体別資料・接合資料の交換がある。

ユニットEaとEbは、内部での剥片剥離作業が不活発であること、遺物分布が散漫で場の機能の区別が乏しいことから、世帯ユニットとは見なさなかった。ユニットEaの石器・剥片の一部はユニットA、B+C2・3、Fと、ユニットEbの石器・剥片の一部はユニットB+C2・3、F、D+C1・1outと、個体別資料・接合資料の共有関係があり、そこから持ち込まれたと考えられる。石器・剥片の持ち込み・廃棄が多いことが知れる。EaとEbとでは、Eaに定型石器の組成率が高い。

世帯Aと世帯B+C2・3、Fの間は、集落の中でどのような関係であったろうか。また、ユニットEa、Ebを集落の中に組み込む関係を考える必要がある。世帯ユニットAは、局部磨製石斧を有し、遺物量が多く、やや離れてゆったりとした空間配置で、他の世帯を見おろす位置にある。他の世帯に優越した、集団のリーダーを含む世帯である可能性も考えられよう。B+C2・3、Fの2世帯には、接合資料の共有関係が認められ、位置関係も接していることから、両者に親密な関係が認められる。個体別資料・接合資料の一部、石器、剥片・石核を交換しているが、世帯を移動して活発に剥片剥離作業を行った例はない。また、礫ブロックの位置が両世帯の間にまたがったものがある。両世帯間には、石器生産上の独立性と、石器の使用・生活上の融合性があると考えられる。これらの世帯は、世帯Aと比べて選地・分布の平面形・石器類の量などが劣ることから、世帯Aの優位性を受け入れた世帯群、一般構成員からなる世帯と考えよう。ユニットEa、Ebは、それぞれの世帯ユニットから持ち込み・廃棄された石器・剥片が認められ、それらを使用した何らかの作業空間と考えた。石器組成の違いがあることから、EaとEbとでは、作業内容に相違がある可能性がある。

石器類の個体別資料・接合資料で見る限り、世帯A、B+C2・3、Fの3世帯は、世帯間を直接的に、作業ユニットEa、Ebを介して間接的に、関係を持っている。世帯Aは、他の世帯と直接の関係を持たず、Eaを介して世帯B+C2・3と関係を持つ。世帯B+C2・3は、世帯Fと直接に、Ebを介して間接に関係を持つが、北に隣接する世帯AとはEaを介した間接的關係に留まる。世帯Fは、

世帯B+C2・3と直接、Ea、Ebを介して間接にも関係を持つが、世帯AとはEaを介した間接的関係に留まる。世帯間の直接的関係は、世帯Aと世帯B+C2・3、F間がお互いの接合資料を共有し合わない「並行」的世帯間関係、世帯B+C2・3と世帯F間が共有し合う「交叉」的世帯間関係とも表現できよう。鈴木氏は、集落の世帯間関係がこの二者の様相を示すとき「並行型集落」・「交叉型集落」と呼称した(鈴木他、82)。板井寺ヶ谷遺跡の様相は、世帯間の直接的関係に限れば、両者が出現していることになる。この関係を重視すれば、中国山地系集団は二分され得ることにもなる。しかし、Ea、Ebといった作業ユニットを介した部分を強調すれば、下位文化層全体として「有機」的世帯間関係と言い得る状況であろう。世帯B+C2・3と世帯F間の接合資料の共有は、剥片生産が複数個所で行われ石器製作の共有が進行したものではなく、多くが石器や剥片の搬入出の結果であるとするなら、世帯の独立を損なうほどの世帯「融合」が進んでいると見なすべきではない。一方、接合資料上認められる世帯Aの「孤立性」は、Eaを介しての間接的関係が背景にある。この世帯間関係の断層の存在は、下位文化層中国山地系集団3世帯間の社会的関係の反映である段階に留まっていると考える。

中国山地系と瀬戸内系の分布境界には、石器類ブロックD+C1・1outとブロックGがある。石器類ブロックD+C1・1outには、中国山地・瀬戸内両集団の中間的な性格の世帯ユニットが想定できる。チャート等とサヌカイトの石材比率が近い。位置は、中国山地系の南、瀬戸内系の西に隣接する。石材組成が単純に世帯の構成員組成比を示すなら、この世帯は両集団の構成員が融合した新しい世帯であるのかも知れない。道具箱はサヌカイトにやや偏っている。ブロックGは、北にある中国山地系集団からの石器類の分布が一部及んでいるが、本来は瀬戸内系集団の領域に属することが明らかである。

瀬戸内系集団は、接合資料のまとまった石器類ブロックHとJまたはJa・Jb両方に認める場合の計2～3世帯が推定できる。石器類ブロックG、Iは世帯ユニット間に統廃合の出来ない部分、何らかの作業の行われた空間と考える。世帯D+C1・1outとユニットGを加えて眺めてみると、世帯Hを頂点とする湿地部に開いた逆U字形の集落景観を呈する。

世帯Hは、ややまとまった石器組成と接合資料を有しているので、世帯としたが、ユニットG、Iの一部との所属範囲が不明確である。ユニットJは、小さな島状分布のまとまりで、まとまった石器組成と接合資料を有しているが、1つの世帯とするにはやや大きすぎる領域を有し、JaとJbに分割して2世帯を設定し得る可能性がある。島状分布の集まりであるので、ユニットG、Iの南半との所属範囲が不明である。世帯H、Ja、Jbは、ほぼ同様の面積と石器組成を有し、瀬戸内系集団の均質な世帯の様相を示す。ただ、世帯Jaは、定型石器とチャート等製石器類の組成率がやや高い。一応世帯の性格を考えると、世帯JまたはJaは、石器組成がやや優れることから、中国山地系集団の有力世帯Aの存在との対比で考えるなら、ここを瀬戸内系集団の有力構成員を含む世帯とも見なせよう。世帯Hと世帯Jbは、一般構成員からなる世帯と考える。作業空間と考えたユニットG、Iは、実は石器組成は世帯ユニットと大差なく、剥片剥離作業の存在を示す接合資料の存在に乏しい。

瀬戸内系集団の世帯間の関係は、この様に2～3世帯が想定されるものの、サヌカイト石材の背景と性状のため、個体識別が出来ず、ユニット間を跨ぐ接合資料も乏しいため、中国山地系集団ほど十分明らかに出来なかった。しかし、元々サヌカイト製石器群は、剥片剥離作業・石器整形作業の異所製作を行うことに特徴があり、本来的に接合資料は生じにくいことが明らかになっている。よって、接合資料を見出し得ないからといって、石器・剥片の搬入出段階で、まったく世帯間に関係が持たれなかったという証拠にはならない。考古学的には検証できないということになる。

石器類ブロックKは、湿地部で何らかの活動が行われた作業空間であろう。接合資料はないが、個体別資料の共有関係から、中国山地系集団に含まれることが明らかになった。

瀬戸内系集団と中国山地系集団は、それぞれ陸地部の南北に世帯を配置する。両者は、同時にお互いを認識して存在したと考えられる。北の中国山地系集団は環状の集落配置、南の瀬戸内系集団は逆U字形の集落配置を呈する。舌状の陸地部最高所には、中国山地系集団の有力世帯A、舌状陸地部先端には、瀬戸内系集団の有力世帯J、J aがあり、その間に一般世帯B+C 2・3、F、H、D+C 1・1 outがある。瀬戸内系集団の集落構造は泥炭面に面しているため環状にはなっていないが、両者の集落配置は南北に対照しているように見えよう。両者の違いは、標高差が明らかで眺望に違いがあること、おそらく当時かなりの乾湿があったであろうことが想起され、住環境に優劣があると考えられるが、水辺への接近の容易さの点では、まぎわに居住するのと他集団の間を通らなければいけないのでは、逆の状況が生まれよう。現時点での情報では、両集団の優劣を決することは出来ない。ほぼ同面積を占拠し複数世帯を配置していることから、中国山地系集団と瀬戸内系集団は、対等に集落展開を行っていると考えよう。

世帯D+C 1・1 outは、位置が中国山地系集団に北接、瀬戸内系に東接し、石材組成はサヌカイトが多いがチャート等製がほぼ等しく組成する事から、瀬戸内系と見なせるものの、中国山地系との中間的な性格が強いと考えた。南北、サヌカイト・チャート等、瀬戸内系・中国山地系の二元論的解釈では割り切れない世帯であると考えられる。世帯の位置が両者に挟まれるようにあり社会的な緊張が必至であること、調査範囲内で最も傾斜の激しい場所にあり、流水が近くて湿土面であろうことを考えると、最も条件の悪い場所に居住させられていると考えられよう。

#### 集団間関係

板井寺ヶ谷遺跡下位文化層で認められた瀬戸内系集団と中国山地系集団の同時共存は、今までの旧石器時代遺跡調査では認められていなかった、直接的な集団間関係を示している。両集団の接触が行われ、露营地を分かって居住したと考えられることは、積極的に相手の集団を認知し、何らかの共同が行われたと見なし得る状況を示している。少なくとも、この集団間関係が敵対的、消極的なものではなかったことを示唆すると考える。両集団の関係を示すものとして、両集団が同時に居住したという事実は、両者の関係が「友好的」であったことの象徴であるが、さらに、両集団の合同集落の内部を律したであろう瀬戸内系・中国山地系の両集団間の関係を問題にする必要がある。

両集団の世帯数は、性格の中間的な世帯D+C 1・1 outを除けば、それぞれ3ないし2世帯となり、ほぼ同数となる。遺跡全体で出土した両集団の主要石材であるサヌカイト製・チャート等製石器の数量もほぼ同数であり、残された両石材製石器の数量が当初両集団が保持していた石器の数量を示していると考えられる。両集団を構成する要素を観察すると、特に大きな相違はなく、ほぼ同規模の集団があったことが知れよう。この様な場合、集団間の関係は「対等」「友好的」と呼び得るものであった可能性が高くなる。板井寺ヶ谷遺跡での、両集団の具体的な「振る舞い」を検討しなければならない。

サヌカイトとチャートという2つの主要石材は、それぞれの集団の石器製作に供されるが、一部の石器類は集団の違いを越えて出土している。中国山地系集団で出土したサヌカイト、瀬戸内系集団で出土したチャート等、それぞれの主要石材の供給環境を観察し、その集団的背景を考えてみよう。異なった石材を対象とすること、サヌカイトが個体識別が出来ず接合資料にも乏しいこと、チャート等の分布が北半に偏っていることから、精密な議論の対象にはしがたいが、大きく二分構造の対比を行いつつ、両

集団の性格を検討しよう。先にサヌカイト製石器が南北でほぼ同数出土し、チャート等製石器と合せると北に偏って分布することを指摘したが、このことは、石器の量が構成員の数に比例すると考えるなら、北群の集団が南群の集団の約2.5倍の構成員数を抱えていたと考えることも可能となる。石器群の構成からではなく、南北両群に集団を認める場合、「対等」の関係とはいえない面も出来る。南北とサヌカイト・チャート、瀬戸内系・中国山地系、3重化した二分構造を分析する中で、解釈していこう。

サヌカイトは北群全域で出土したが、特に世帯A、D+C 1・1 outで多く出土し、世帯B+C 2・3、Fや作業ユニットE a、E bでは多くない。驚くべきことに、北群で出土したサヌカイトの量は、南群とほぼ同量である(第320・321図)。南北両群間を結ぶサヌカイト製接合資料はなく、移動の過程を復元することは出来ないが、石材の由来や石器類の技術形態学的特徴から考えて、中国山地系集団がもと多量にサヌカイトを保持していたとは考え難い。サヌカイト製石器や横長剥片などは、両集団がここに居住している間に瀬戸内系集団の構成員が北群に立ち入って石器を使用・廃棄したりする場合があったことを示すのだろう。また、かなりの量が中国山地系集団に贈与・交換された可能性も高い。北群において、石器や大型の剥片、石核以外に不定形剥片や碎片が多量に出土するのは、北群でサヌカイト製石器の製作が行われたことを示すと共に、碎片や不定形剥片でも贈与・交換の対象になったことを示す可能性がある。約80km以上を運ばれたサヌカイトは、中国山地系の集団にとって珍しい石材であったのだろう。中国山地系集団は、在地の豊富な石材をもとに活発な石器生産活動を行い、さらにサヌカイトまでも使用する。他の世帯と比べて有力な世帯Aは、中国山地系集団の中で最も多量にサヌカイトを入手し、多くの接合資料を生じるような剥片剥離まで行っている。中国山地系集団の石材に対する食欲が表れる。D+C 1・1 outは、その中間的性格にも関わらず、世帯Aにサヌカイト保有量が及ばない。

一方、中国山地系の主要石材であるチャートは、北群全体にまんべんなく分布し、各世帯で多量に使用されるが、特に世帯Aの重量集中は激しい(第353図)。

今度は、瀬戸内系集団の南群でのチャートの出土状況を見てみよう。チャートは、泥炭面上のユニットK、世帯JまたはJ aにわずかに存在するのみで、南群にほとんど分布しない。その他のユニットから出土するチャート等製石器類は、ほんの数点に留まり、偶然に北群から南群に移動した可能性を排除しきれない。状況として、瀬戸内系集団は、チャート等の石材での石器生産をほとんど受け入れなかったことを示している。世帯JまたはJ aでややまとまった量の出土があり、接合資料が認められることから、ある程度の剥片生産が行われたことが知れるが、有効な石器生産ではない。瀬戸内系集団は、携帯するサヌカイトの制約から慎重な石器制作を進め、サヌカイトに固執している保守性が認められる。

瀬戸内系集団の主要石材であるサヌカイトは、南群各世帯ユニットや作業ユニットからほぼまんべんなく出土し、特に遍在傾向は認められない。小規模な小ユニット単位に観察すると、さらに均質化が進行する。

瀬戸内系集団の世帯JまたはJ aと中国山地系集団の世帯Aは、それぞれ大型の分布領域と多くの石器類を持つ有力な世帯である。そこでは、異集団の保持した石材がある程度まとまって出土し、接合資料も見出される。この2世帯が、舌状の陸地部の両端に位置することは興味深い。有力世帯が異なった石材を多く保持するのは、両集団がここで接触したとき有力世帯がそれぞれの集団で石材の交換を管理した証拠であるとも考えられる。有力世帯内でのみ接合資料が認められるのは、儀礼的な石材の交換と試し割り、石器製作の存在を暗示している可能性も否定できない。

全体として、中国山地系集団はサヌカイト製石器類を多量に受け入れるのに対し、瀬戸内系集団はチャート等製石器類をほとんど受け入れていない。両集団は、同時に同じ場所に居住し、存在を認識しあっていたと考えられる隣あった集団でありながら、それぞれの石材・石器を受け入れるか、受け入れないかで、全く異なった選択をしていることが理解されよう。石材・石器類の受け入れに関する限り、中国山地系集団は「開放的」であり、瀬戸内系集団は「閉鎖的」と表現できよう。

この点では、遺物の分布状況から受ける印象とは、やや異なっている。中国山地系集団に保持されたチャート等製石器類は、北部に集中し南部に乏しい。瀬戸内系集団のサヌカイト製石器類は、ほぼ全体から出土しているように見える。石器類の分布と集団・世帯の間に差があることを認めないなら、逆にチャート等製石器類の分布が閉鎖的で、サヌカイト製石器類の分布が開放的であるとも表現できよう。

石材・石器類の受け入れの反対側の立場、送り出しを考えてみよう。本来、瀬戸内系集団が保持していたサヌカイト製石器類の量の半分が中国山地系集団に送り出されている。瀬戸内系集団の保持した石材の量は、結果として半減したことになる。集団が遺跡内で残した石器類とは別に、保持したまま次の地点に持ち出した石器類・石材の存在を考慮しても、板井寺ヶ谷遺跡周辺でのサヌカイト材の直接入手が不可能なことを考えれば、保有石材の激減は明らかであろう。瀬戸内系集団は、チャート材での石器製作を嫌っており、ここでの新たな石材の獲得が無い以上、驚くべき量のサヌカイト石器類・石材の送り出しは、「飢餓輸出」以外の何物でもない。一方の中国山地系集団はチャート等の在地石材を多量に保持しているが、ほとんど瀬戸内系集団に送り出していない。このため全く石材保有に影響はない。また、受け入れたサヌカイト製石器類・石材も、点数はともかく重量的にみると些細な量（第353・354図）である。

石器類・石材の受け入れ、送り出しの状況、分布から考えられる両集団の性格は、やや混乱した印象を強める。サヌカイトの受け入れ送り出しをめぐるのは中国山地系集団が開放的（食欲）なのか瀬戸内系が一方的飢餓輸出（自己保全出来ないほどの利他行為）をしているのか、チャートの受け入れ送り出しをめぐるのは瀬戸内系が閉鎖的なのか中国山地系が利己的保全を優先したのか、を決するのは難しい。異なった石材製の石器類の受け入れという考古学的現象は、仮説的にいくつかの説明が考えられる。第1に異集団から完成した石器類を入手した場合、第2に異集団から石材を入手し、自ら石器製作に供した場合、第3に集団中に異集団構成員が加わり、持ってきた石材で石器製作を行った場合、第4にこれらの混合した場合、などである。個々の石器類の来歴を検証するには徹底的な個体識別と接合作業・技術分析が必要とされるが、板井寺ヶ谷遺跡の石材の性状の制限から、北群のサヌカイト製石器群、南群のチャート製石器群全体への言及にとどめたい。

瀬戸内系と中国山地系集団を、ほぼ同規模の対等な集団と考えた場合、考古学的現象としてサヌカイト製石器類が一方的に北群へ持ち出されることは、大きな矛盾点とも成り得ることが理解される。南群と北群に分かれて出土したサヌカイト製石器類が誰のものであったかが、問われなければいけない。

北群のサヌカイト製石器類は、その技術形態学的特徴から瀬戸内系集団の所産であることが明らかな石器・剥片・石核が多い。搔器は、中国山地系集団に影響されて出現した器種と考えられるが、素材は瀬戸内系と考えても良いものが含まれる。また、世帯AやD+C 1・1 outでは瀬戸内系の石核や剥片の接合資料が認められる。石器や剥片に二次的な加工が施される場合を除けば、北群のサヌカイト製石器類大半の第一次製作者は瀬戸内系集団であるといえよう。第2の場合である可能性は少ないといえる。一方、南群のチャート製石器類は、世帯JまたはJ a、ユニットKを除けば、北群からの偶然の移動の

可能性を排除できない点数に留まる。世帯JまたはJ aでは接合資料が存在するが、有効な石器製作を行った痕跡が乏しく技術的特徴が明瞭でなく、瀬戸内系集団でもチャートを割れないわけではないことから、行為者が誰か特定できない。南群では、チャート等製石器類・石材は僅かである。石器製作が行われた場合の行為者の特定は難しいが、世帯JまたはJ aの行為者は、瀬戸内系集団構成員である可能性も残る。

考古学的現象として、チャート等製石器類の豊富な譲渡も、中国山地系集団構成員の南群への立ち入りも認め難い。北群のサヌカイト製石器類・石材は、瀬戸内系集団の手になるものであるが、そのまま中国山地系集団に受け入れられたか、人に保持されて動いたかが問題となる。北群から出土したサヌカイト製石器類は、南群に存在するのとはほぼ同量出土した。定型石器、加工痕・使用痕有剥片、目的剥片・石核というような、それ自体で機能をはたし得る石器類のみならず、調整剥片、碎片までが出土している点でも、南群と異なっていない。大きく異なっているのは、サヌカイト製搔器が北群に集中している点と北群で接合資料の存在するのは世帯AとD+C 1・1 outに限定される点である。このことから、北群では石器調整加工が活発に行われたことが明らかであるが、剥片生産が不活発であったことが理解される。世帯Aで認められた僅かの剥片剥離作業は、瀬戸内系横長剥片剥離技術によるものであろう。

この様な状況は、不活発なものであったにせよ、北群で瀬戸内系集団構成員による石器調整加工・剥片剥離作業が行われたことを示している。瀬戸内系集団構成員が石器類を携帯したまま一時的に中国山地系集団の中へ入り石器類を残した場合もあったのではないかと、この疑いを抱かせよう。石器の北群での多量・活発な混在は、人の動きも伴っていると考えた方が良からう。この様に考えると、北群のサヌカイト製石器類には、1、瀬戸内系集団から中国山地系集団へ、南群から北群へ渡された場合、2、北群に入った瀬戸内系集団構成員がサヌカイト製石器類を携えてきた場合、の両者が混じっていることになる。個々の石器類の来歴を、個別別資料や接合資料の検討を通じて十分には明らかに出来ないことは残念である。

さて、先にサヌカイト製石器が南北ではほぼ同数出土することを指摘したが、このことは、定型石器の量が構成員の数に比例すると考えるなら、北群の集団が南群の集団の約2.5倍の構成員数を抱えていたことになり、「対等」な集団間関係という解釈に疑問を呈する事になり得る。しかし、この考えは、北群のサヌカイト製石器類・石材が全て中国山地系集団に譲渡され、彼らの石器組成に組み込まれたとの前提に立っている。しかし、北群のサヌカイト製石器類の多くが、一時的に北群に立ち入った南群の瀬戸内系集団構成員によって持ち込まれ、使用や石器製作に供された後、そのまま遺棄・放棄されたものとする事もできるのである。下位文化層北群のサヌカイト製石器類の実態は、おそらく両者の入り交じったものと考えられるであろう。サヌカイト製搔器の存在は中国山地系石器組成に取り込まれたサヌカイト製石器生産があったことを示す一方、瀬戸内系集団による石器製作と使用が明らかなのである。

北群の多数の横長のナイフ形石器や横長剥片、横長剥片石核と接合資料の存在によって、南群の石器と共に北群のサヌカイト製石器類の保持者は、瀬戸内系集団が主体であったと見なし得ることになる。瀬戸内系集団が中国山地系集団と共同し、北群中で何らかの作業を行ったと考えることができる。この場合、北の多くと南のサヌカイト製石器類を合わせたものが、瀬戸内系集団の保持した石器類となる。南北の石器数のアンバランスをもって、社会的・文化的集団である瀬戸内系・中国山地系両集団の保持石器の量と構成員数の多少を直接考えることはできない。見かけほど石器類の保有バランスを崩してい

た訳ではないことになり、副次的にサヌカイト製石器類の集団間譲渡があったとしても、両集団の構成員数には大きな差のない「対等」な集団を想定しうるであろう。板井寺ヶ谷遺跡における石器類の受け入れ・送り出しは、人の動きに伴ってもあったと考えられる。瀬戸内系・中国山地系集団を、石器類と共に人の動きとしても評価する必要がある。

すなわち、中国山地系集団では、多くの瀬戸内系集団構成員を領域内に一時的に受け入れ、共同で何らかの作業を行う。瀬戸内系集団との接触を主導した有力世帯Aの占有領域中央では、一番多くサヌカイト製石器類を残し、瀬戸内系集団構成員によって剥片剥離作業まで行われる。瀬戸内系集団の活動は、作業ユニットEa、Ebに留まらず世帯A、B+C 2・3でも行われる。この中で、瀬戸内系集団の保持するサヌカイト製石器類が中国山地系集団に譲渡され、新たに搔器などの製作に供される。場合によっては、調整剥片や碎片なども譲渡の対象になった可能性がある。一方、瀬戸内系集団では、チャート製譲渡石器が多くはなく、中国山地系集団構成員を領域内に一時的に受け入れた痕跡にも乏しい。中国山地系集団と瀬戸内系集団の共同作業空間は南群には形成されず、泥炭面中に中国山地系単独でユニットKとして表れる。瀬戸内系集団の有力世帯JまたはJaでは、チャート材が石器製作に供されるが、どちらの構成員が行ったかを定めることは出来ない。有力世帯JまたはJaを除けば、各作業ユニット・世帯ユニットともチャート等製石器類の点数は僅かである。

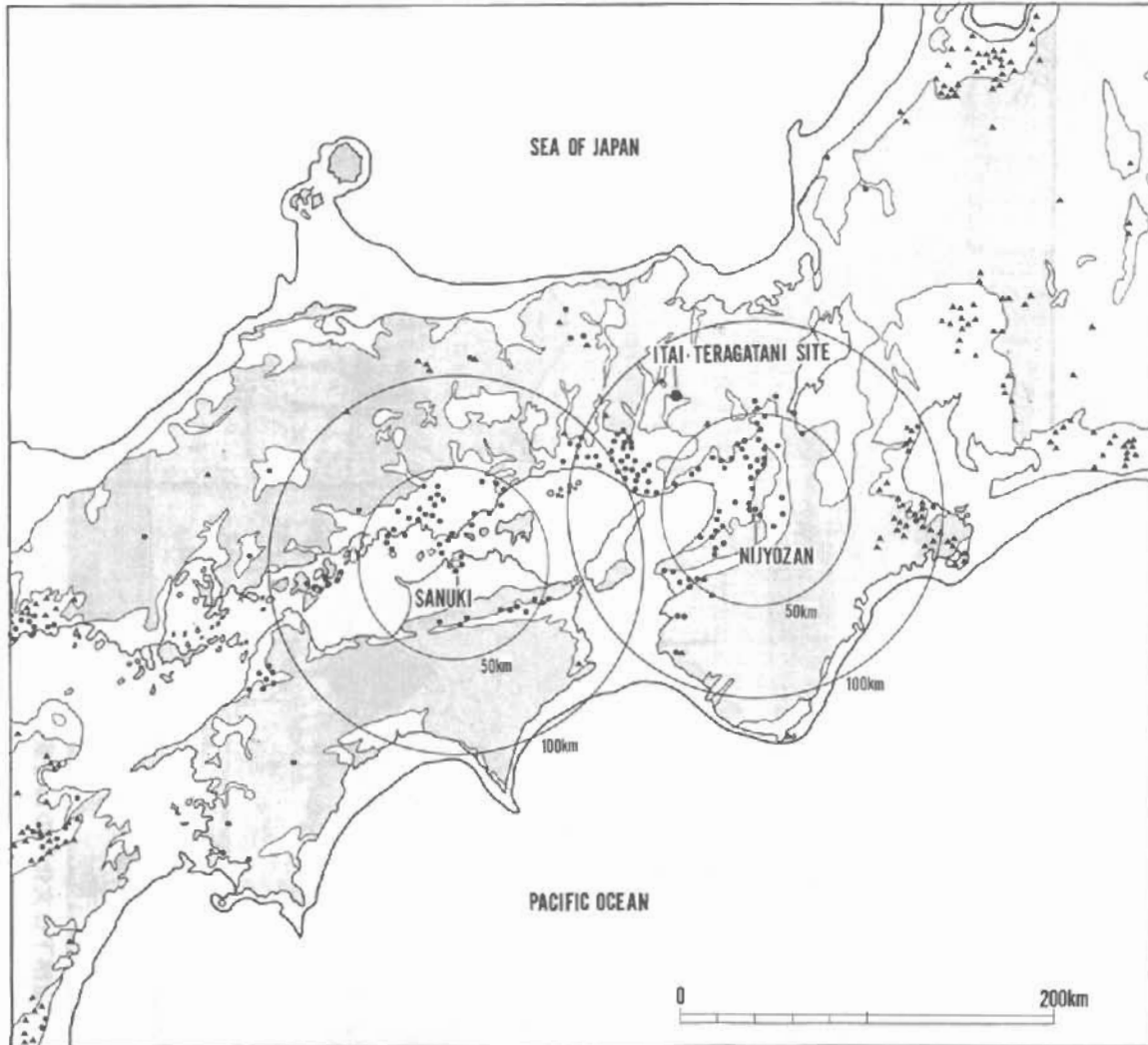
中国山地系集団と瀬戸内系集団は、「対等」な「友好的」集団間関係にも関わらず、その集団の「振る舞い」には大きな差があることが明らかになった。中国山地系集団は他集団に対し「開放的」、瀬戸内系集団には「閉鎖的」な居住領域形成が認められる。石器類や構成員の相手側への移動では、中国山地系集団は「消極的」で、瀬戸内系集団は「積極的」に見える。一方、他集団の石材に対する摂取のあり方は、中国山地系集団は「摂取的」、瀬戸内系集団は「拒絶的」といえよう。

#### 生業・石材戦略と地域的・社会的集団

チャートは瀬戸内・近畿中央部でも容易に入手可能な堆積岩であり、瀬戸内系集団は本来の領域で日常的に手にすることが出来る石材であると考えられる。南群の瀬戸内系集団は、携帯してきたサヌカイトに固執し、チャート材での石器製作をほとんど受け入れないことは特に特異な現象ではなく、瀬戸内系集団が本来の領域で行っている石材選択を続けた結果であると考えることが出来る（山口、88）。

原産地の限られるサヌカイトに頼った瀬戸内系集団の剥片生産技術には、2段階の工程がある。板井寺ヶ谷遺跡等の遠隔地では前半の段階を行わず、国府遺跡（石神、80）の様な原産地に近い場所で生産した石器や剥片、石核を搬入するにとどめるなど、携帯重量の軽減が計られている可能性（山口、83）がある。板井寺ヶ谷遺跡のサヌカイトの多くが二上山産で、一部に岩屋産と考えられるものがあることがサヌカイト産地分析の結果判明している。瀬戸内系集団のサヌカイト石材の補給は、瀬戸内中央部に回帰した時に集中して行なわれた可能性が高い。瀬戸内系旧石器の顕著な技術形態学的特徴は、原産地周辺の遺跡と遠隔地の遺跡が補完関係を持つ石材供給と剥片生産技術が1つのシステムとして長期間機能して、形成されたと推測する。始良Tn火山灰降灰以前の板井寺ヶ谷遺跡下位文化層相当期に、瀬戸内系集団は、すでに地域的伝統を発現している。瀬戸内系旧石器は編年的座標が定まった遺跡に乏しいがほぼ全ての時期に渡って、近畿地方中央部においては圧倒的にサヌカイト石材を使用し、チャートや他地域からの搬入石材は希であると言えそうである。この石材選択によって遠隔地での石器生産が低調になり、結果として考古学的に検証できる集落構造が不明確となっているといえるのは、郡家今城遺跡でも同様であろう（富成・大船、78）。





第512図 西南日本の遺跡分布とサヌカイト原石産地

一方の中国山地系集団は、在地のチャート等の石材を臨機採集し、石器生産に供する。一ヶ所での消費的な剥片剥離作業の展開が基本で、顕著な異所製作的石材戦略も認められない。この時期、中国山地系集団は、地域性を十分には発現せず、始良Tn火山灰降灰以前の汎日本的な石器群の一部として存在する。地域的に分断されない石材戦略の特殊化の進んでいない石器群であった。

板井寺ヶ谷遺跡で接触・共同した2集団は、石器石材の供給の点で異なるシステムを有している。遠隔地産のサヌカイトに固執し、保守的・貧弱な道具箱を持つ瀬戸内系と在地石材を大量に使いながら解放的かつ豊富な道具箱を持つ中国山地系の間には、石器群の内容レベルを越えて文化的・社会的な構造の違いがあることを推測させる。板井寺ヶ谷遺跡下位文化層における両石器群の集落合同に際しての対応は、この本来の領域で広範に見られる性格が明瞭に発現したものと考えられよう。瀬戸内系集団の石器群は、早くからサヌカイト石材と石器生産技術の特化を進め、強固な地域性を発現することになるのに対し、中国山地系の石器群の地域性が顕著になる時期は極めて遅れる。地域性の発現は、その領域への生態的適応活動の結果であると共に、地域集団の確立でもあったと考えるべきであろう。地域集団としての確立の早い瀬戸内系と、あいまいなままの中国山地系では、集団の個性・排他性に大きな差があったのであろう。このような2者によって接触が持たれたことは、旧石器時代後期の社会の平和的な性格を示していると考えられる。



第513図 板井寺ヶ谷遺跡下位文化層の集落景観推定図

石器類・石材では、この様に明らかな考古学的現象が存在するが、ここで想起すべきは、考古学的資料として残り得ない交換材の存在である。ほぼ均等な集団間で、物質的・経済的・社会的・精神的に一方的な屈服・譲渡が行われたとは考えにくい。当然何らかの反対給付が行われたと考えた方がよいと思われる。

南北に分かれての同時居住と北群での瀬戸内系石器群の混在から考えられる様に、何らかの共同作業の存在があったと考えなければ、このような異系統集団の合同という状況を説明することはできないであろう。まず、両者の合同集落の形成に対する積極的な経済的意味を考える必要がある。当然、想起される状況は、生業活動上の共同であると私案する。両集団の生業活動が直接共同したという証拠は、まず北群での瀬戸内系サヌカイト製石器類の混在があげられる。さらに、第1次的な生業活動ではないものの、継続的な日常作業の存在を示すかも知れないものとして、特に北群にあるサヌカイト製搔器の存在は注目されよう。中国山地系集団に対する瀬戸内系集団構成員の直接的な協力があったと言えるかも知れない。しかし、生業上の共同だけという段階であれば、一方の構成員が他方集落に向くか、どこか別の所に共同作業の場を新たに設定した方が自然であるとも言える。瀬戸内系集団に対し、何らかの反対給付があったとするだけでは説得力に乏しいであろう。異系統の集団であればこそ、集団間に全く緊張関係が無かったとは言い切れないのである。

板井寺ヶ谷遺跡下位文化層の場合、さらに生業・日常的活動での共同という以上の社会的結びつきがあったとしても不自然でない。生業上の戦略から集落合同が行われたとしても、その期間が長期に渡ったとすれば、より高次元の社会的関係が持たれたとしても不思議はない。ほとんどの社会的高次元の関係は、考古学的に検証することは困難であるが、中国山地系・瀬戸内系両集団がこの集落合同を促した「利益」が直接的な生業上の共同以上のものであったとすると、社会的・精神的な面で追求された可能性も考慮され得る範囲であるだろう。特に、瀬戸内系集団の利他行為の背景には、社会的・精神的動機を寸度したい思いをかられる。方法的にかろうじて考古学的検証が及び得る分野として人の動きが考えられる。たとえば嫁取り・婿入りによる世帯の新設、「離れ」行動、集団の分離・分割による世帯や構成員の集団間移動であろう。この分野から考えると、板井寺ヶ谷遺跡の遺構・遺物の分布の検討から明らかになった状況の中で仮に可能性がある現象をあげれば、石器や石材の保有率を世帯構成員の出身集団出自比率、両集団の領域に挟まれた世帯位置を根拠として、両石材を保持するD+C 1・1 outが両集団の婚姻により創設された新世帯であると仮定することも、解釈として許されよう。このような世帯の新設は、それぞれの集団内の構成員に生じた過不足を調節し、集団内の安定に寄与するであろう。両集団にとっても大きな社会的・集団的「利益」であったと見なされたのではなかろうか。この新設世帯の帰属がどちらの集団になったか、にわかに決することは出来ないが、サヌカイト製石器類が優越する事から、石器類の保持者を男性の世帯構成員と考え、瀬戸内系の男性狩猟者世帯を考えることもできる。このような社会的に高次元の集団間交流は、ただ単なる生業上の経済的利益のみで、集落合同を説明するより説得力を持つであろう。生業上の経済的利益を越えた社会的・精神的動機が存在を、両集団の集落合同の背景に想定しておきたい。

両集団は、板井寺ヶ谷遺跡からそれぞれの領域へ回帰したであろうが、それぞれの道具箱には接触時の交換品や石材がつけ加えられたに違いない。板井寺ヶ谷遺跡の周辺でも、七日市遺跡（久保・藤田他、90）、溝口遺跡（山下・南、86）でチャート等製石器群主体の中に、サヌカイト製石器類が相伴している。それぞれの領域の遺跡でしばしば発見される異系統石器類は、このような接触の産物であったこと

になろう。定型石器以外に、不定形剥片や石核・破片が伴うような場合が知られる。もし、世帯の新設や構成員の集団間交換が行われたとすれば、この様な考古学的現象の背景に、人の動きがあったことになるであろう。

旧石器時代集団の移動は、限られた資源を最大に活用し労働効率を最適化するために必然である。季節ごとに巡回して居住地を替え、集落周辺の資源を活用する。多くは季節的に移動したり結実・可食化する動植物を追求することになる。瀬戸内系、中国山地系の2つの石器文化伝統は、本来の生活領域が異なり、環境帯としても性格が異なる立地をしていることから、古瀬戸盆地周辺の低地・丘陵に主に分布する瀬戸内系と中国山地山間部に分布する中国山地系とは一種の住み分けがなされているといえる。このような中での板井寺ヶ谷遺跡での接触は、両者がお互いの存在を認識していた証拠であろう。おそらく季節移動の機会に何らかの合同が行われたものと考えて良いであろう。

旧石器時代社会の集団移動は、夏から冬の2シーズン間に北～南または高～低、寒冷地～温暖地間や異なった環境帯間の移動が想定できる。冬から夏へは逆方向の移動となる。巡回移動となることが多いと考えられる。瀬戸内系では丘陵部から低地、乾燥した高地から湿地へ、中国山地系では山間高原から谷部・盆地底へとといった季節的移動が予測できよう。板井寺ヶ谷遺跡の位置は、瀬戸内系旧石器集団にとって、本来の領域から北にやや離れたより寒冷な山間部にある。本来、瀬戸内海・大阪湾に望む丘陵部・河岸段丘上を主分布域とする瀬戸内系集団の移動としては、異例の行為であると考えられよう。板井寺ヶ谷遺跡への瀬戸内系集団の移動は、おそらく武庫川に沿って行われ、四季の内、寒冷期ではなく温暖な時期に行われたと推定できよう。中国山地系集団は、本来的に篠山盆地周辺を移動領域に含めていると考えたい。周辺の七日市遺跡、溝口遺跡などは、中国山地系の遺跡と認めて良い内容を持つ。板井寺ヶ谷遺跡へ到着が瀬戸内系、中国山地系のいずれが早かったかよくわからないが、中国山地系が山側に追い上げられていることから、瀬戸内系が早かった可能性もある。温暖な季節に持たれた合同は、在地集団である中国山地系集団側ではなく、遠距離を移動してきた瀬戸内系集団側の動機によって解体される。保持したサヌカイト石材の枯渇であり、本来の領域とは異なった環境、特により厳しい寒さによって近畿地方中央部、瀬戸内への回帰が促されたのであろう。

春～夏・初秋といった温暖な季節での食料事情を見てみよう。板井寺ヶ谷遺跡では動物化石の残存はなく、周辺での当該期の化石出土は知られていない。地域相に合わせた動物相の復元は出来ない。結局、植物相から動物生態学的にある程度一般的な氷期動物群の存在を期待するに留まり、直接的な狩猟活動の内容を知ることは出来ない。採集活動についても、明らかに食料として確保された植物化石は検出できなかった。植物化石から窺うことのできる温暖期の可食植物としてあげられるものは、僅かにベリー類があるに留まる。秋以降では松の実類が確保できよう。板井寺ヶ谷遺跡周辺で入手可能な植物質食料は、意外に乏しく、生業活動はいきおい広範囲なものとならざるをえなかったと考えられよう。

板井寺ヶ谷遺跡の瀬戸内系集団は、温暖な季節に本来の領域を突出して、山間部に移動したのであり、これには生業活動が関わっていたと考えるのが妥当であろうが、本来の領域を逸脱する行為が日常的であったとは考えにくい。板井寺ヶ谷遺跡周辺の沼沢地の存在は、当時の生業活動の環境を提供したのである。泥炭層からは、自然科学的分析を多分野にわたり行った結果、多くの成果をあげたが、直接自然環境と人間集団を結び付ける情報が求められなかったことは残念であった。しかし、彼らの経済的基盤が、狩猟と採集にあり、最も社会構造に影響を与えたといわれるのが大形動物狩猟活動(春成、76)であることを考慮すれば、たとえば洪積世後半期まで日本列島で生存を続けていた大形動物の季節移動に

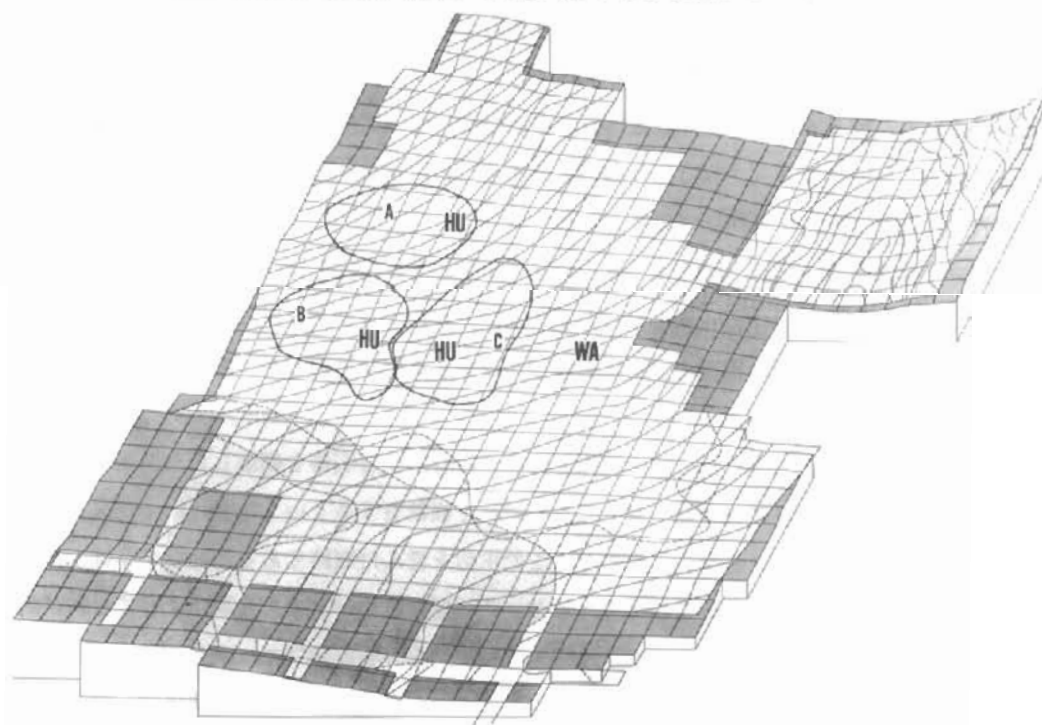
随伴した可能性も想起されよう。このような大形動物の共同狩猟こそ、旧石器時代社会の連帯の機会ではなかったろうか。この様な機会には、集団の相違を乗り越え、集落合同や共同作業がしばしば行われたのであろう。また、婚姻や集団の分割・分離、構成員の移動の機会でもあったと考える。このような社会的結び付きは、特にすでに地域性を鮮明にしている瀬戸内系地域集団にとっては、本来の領域の同一地域集団内で通常行われるものであったに違いない。異集団間では、普通相互の存在認知の段階に留まっており、この様な場合は希であったと推測しておきたい。篠山盆地での湖・沼沢地存在は、近畿地方中央部・瀬戸内の大盆地地形ほどではないにせよ、動物の回帰・棲息する環境であり、狩猟の場をも与えるとともに、この様な社会的交流の場を与えた可能性があると考えられる。(山口)

## 2. 上位文化層の遺跡構造

上位文化層の遺構・遺物の分布は、北東部分が中世の居館によって削平され、また下位文化層からの浮き上がりもあり、全ての要件の分析が可能であった訳ではないが、遺構・遺物の分布が遺跡中央に集中することから、一応の検討が可能であった。

上位文化層の遺構は、礫群と土壌があるに留まる。いずれも発掘調査範囲のほぼ中央、南北20m、東西40mの範囲に分布する。全てが暗灰色火山灰中に基底または掘り込み面がある。

礫群は、大小10数群があるが、その配置の近遠関係によって大まかに3つに群化が認められる。これを、礫群A群・B群・C群とした。礫群の構成礫は、遺跡周辺で容易に入手できる礫石を使用している。個々の礫群の構成礫数はまちまちで斉一性はないが、各礫群の構成礫のほとんどは、受熱・赤化しており、礫群の機能の一部には火の使用が不可分であったことを示している。礫群の集積度は低く、南関東から東海にかけて分布する礫群とは異なっている。このような礫群は、近畿地方中央部で国府型ナイフ形石器を出土した郡家今城遺跡C地点(富成・大船、78)、角錐状石器を主体とした郡家川西遺跡(森



第514図 上位文化層ユニット配置俯瞰図

HU：世帯ユニット WA：作業空間

田、81) などで見られ、近畿地方中央部にも認められる。また、中国山地帯の遺跡にもこのような礫群が伴う場合があるようで、近畿・中国地方の礫群の地域的なあり方の1つであろうか。南関東・東海型の礫群と比較して、礫の大きさ、構成礫数、破碎度などに、多くの点で相違するが、いずれも火との関係が強い施設である。なお、礫群周辺には、礫を加熱した「火処」の存在が考慮できるが、遺構として検出できていない。このような礫を構成した施設が3群に分けて残されたことは、礫を加熱して行なう作業が、数回づつそれぞれで繰り返されたことを示している。このような繰り返される活動は、通常推測されてきたように、火または余熱を利用し、日常的に行なわれる「調理」活動に伴うものであった可能性(辻本、87)が高いと考えられる。

土壌は、上位文化層の遺構・遺物の分布範囲の東南縁辺にある。掘り込み面を復元したとしても、浅い長楕円形の土壌で、内部には碎片以外遺物は見られない。土壌の形状から機能を推定することは困難であるが、一般に「墓」「貯蔵穴」が想定されるが、皿状の浅い土壌であること、位置が主分布域の外縁であることから、どちらかという日常生活に関係した施設とは考えにくい。

上位文化層の石器類の主な分布は、北部が中世期の削平によって失われている可能性があるが、発掘調査範囲のほぼ中央部にあり、南北約20m、東西40mの範囲に散漫に分布する。発掘調査区南半のH14区からチャート製剥片1点が出土しているが同時性の確認は難しい。上位文化層の遺構・遺物は発掘調査区中央に集中して分布しているといえる。

石器類の分布は遺跡中央に集中して認められる。東部の散漫分布部と中央から西の粗密の認められる部分に分けられ、先の礫群は中西部に分布している。中西部の石器類の分布は、その分布のまとまりから5群に分けられ、これを石器類ブロックとした。石器類ブロックA・B・Cは中央部の分布の密な部分で、ブロックEは西端に発掘限界を有した散漫分布である。東部の散漫分布をブロックDとした。遺物集中の顕著なブロックA・B・Cには、上位文化層の主要器種である角錐状石器や削器・加工痕有剥片・使用痕有剥片などが組成し、上位文化層での基本的な器種を網羅している。いずれのブロックも多少の多寡はあるものの、石器組成が類似する事は、この3ブロックの形成された背景を有する事を推測させる。いずれも、サヌカイトの剥片剥離作業は不活発で、特にブロックCでは盛んに角錐状石器の調整を行っている。散漫なブロックDは、分布密度が低く、剥片剥離作業は行われず、各器種の点数でも及ばないので、前3ブロックと同様には考えられない。

石器類ブロックA・B・Cは、礫群A・B・C群の分布範囲と一致する。石器類ブロックAには礫群A群、ブロックBにはB群、ブロックCにはC群である。またブロックDには土壌がある。石器類ブロックは、それぞれ直径10数mの範囲の空間に石器類が分布する空間であるが、礫群も同じ空間の中にまとまって発見される。

下位文化層の検討で示したように、ほぼ同様の区間を占有、主要石器を網羅した石器組成を保持、石器類の製作が行われ、内部に調理空間と考えられる礫群を複数有するという特徴は、上位文化層を残した旧石器時代集団の存在を考える場合、世帯がそこで生活を営んだ痕跡であるとみなす事は、あながち無理な事とは言えまい。これらを総合して考えると、この様な属性が重複する事によって考古学的に示される世帯に保持されたと考えられる空間「世帯ユニット」を、石器類ブロックA・B・Cと礫群A群・B群・C群が重なった範囲に、合計3つを想定することができる。世帯間の相互関係は、サヌカイトに接合資料が乏しかった事により、よくわからない。ブロックDは、土壌の存在も併せて考えると、何らかの作業空間、おそらく世帯間の共同的な作業の行われた空間と考える事も出来よう。(山口)

Archaeological Reports of Hyogo Prefecture, No.96-1

# ITAI TERAGATANI SITE

A Research of The Palaeolithic Campsite  
at Tanba District, Hyogo Prefecture

1991

Board of Education, Hyogo Prefecture, KOBE, JAPAN

## 1. INTRODUCTION

The Itai-Teragatani site in Hyogo Prefecture on the mainland of Japan was excavated from 1984 to 1985.

The site is located on that part of a flat area used for paddy fields that rises to a mountain, on the western side of a small river that flows down from among the mountains north of the Sasayama Basin and joins the Sasayama River.

It is about 210 meters above sea level, and is situated at longitude 135°10'30" east and latitude 35°5'50" north. (figure 1)

It was found that a Late Paleolithic camp-

site had existed on a marsh near an ancient lake and that an abundance of environmental information remained in the peat. Two paleolithic cultural layers, about 20,000 years old and about 25,000 years old, were discovered. Analysis of the distribution of the remains in the lower cultural layer indicated contact between two regional paleolithic groups with different techno-traditions. With many natural scientists participating, the natural environment at that point in time was reconstructed.

## 2. ENVIRONMENT

### a. Geographic Background

There is an inland sea called the Setouchi between the southwestern part of the Japanese archipelago and the island of Shikoku.

The Sasayama basin has a flat bottom, about 200 meters above sea level, which is dotted with small independent hills. The flat lowland is a paddy area, in the central to southern part of which there are still many paddies with poor drainage. The hilly districts around the basin have been turned into afforestation zones up to 500 meters or so above sea level. The mountains around the basin are formed of paleozoic rock. Exposures of chert dikes can be seen on the cliffs of the northern part of the basin.

### b. Paleogeographic Background

It has been assumed that in the Sasayama Basin, where the Itai-Teragatani site is located, many lakes and marshes were formed due to poor drainage after the last glacial period (Nomura, '84). The Sasayama River, which

now runs from east to west through the basin, originally flowed into the Muko River. The many mounds of fragments and pebbles deposited during the colder part of the last glacial period eventually blocked the outlet of the Muko River from the basin, forming a dam and causing the river to submerge the southern part of the basin. Over time, a thick layer of peat formed in the southern part. The water level at that time is estimated to have been as high as the present height of about 190 meters above sea level. Radiocarbon dating shows that the peat layer was continuous from about 26,000 to about 20,000 years ago (Yamada, Chapter VII-2), and this indicates that the formation of the peat corresponds to the glacial maximum.

### c. Paleovegetation

The fossils of vegetation and pollen found in the peat layer deposited in the marshy part of the site indicate changes in vegetation at the site and in the area around it over the period of time from about 26,000 to 20,000 years before the

present (Minaki et al., '85). This period almost corresponds to the maximum of the Wurm Glacial Stage, and the site was found to be in a vegetation zone colder than at the present time.

To draw a basic picture of the vegetation in the Sasayama Basin 25,000 to 20,000 years ago: there were trees of the subgenus *Haploxylon* of the genus *Pinus*, of the subgenus *Lepidobalanus* of the genus *Quercus*, and of the genus *Tsuga*, thickly covering the surrounding mountains. Trees of the genus *Picea* intermingling with the above kinds of tree at the borders with the

lowland; trees of the genus *Picea* in the relatively dry part of the lowland; trees of the genera *Alnus*, *Acer*, *Salix*, and *Betula* formed scattered groups in the dry to humid areas, in addition to growths of grasses of the families *Cyperaceae* and *Graminae*, and the family *Lysichiton*.

The vegetation corresponds to the present boreal conifer forest. Vegetation corresponding to the terrestrial features of the area around the site can be restored.

### 3. STRATIGRAPHY AND DATING OF CULTURAL LAYERS

#### a. Stratigraphy

The Paleolithic cultural layer of the Itai-Teragatani site, which was near a marsh during the last glacial period, needs to be roughly divided into two categories, dry land and marshy portions, for explanatory purposes (Figure 7).

The vertical relationship among the layers in the site as a whole was made clear with the two kinds of volcanic ash as the key layers; Aira-Tanzawa volcanic ash present in both the surface and marshy portions, and Daisen-Houki volcanic ash contained in the lower part of the gravel layer in the dry land portion (Takemura, '85).

The layers were found to change, from the top down, as follows; (Table of p.20).

Paleolithic horizons and artifacts were found to be as follows. The upper cultural layer is in the dark gray volcanic ash layer in the dry land portion, and the lower cultural layer is in the yellow clay layer on the surface portion and in the interface between the lower part of the peat III layer and the gray clay layer on the marshy portion. Aira-Tanzawa volcanic

ash is sandwiched between the upper and lower cultural layers, providing ample separation of the cultural layers.

#### b. Dating of Cultural Layers

Radiocarbon dating of the peat and carbon in charcoal clusters from the lower cultural layer of the Itai-Teragatani site indicated that the carbon, and the peat in the marshy portion, were formed about 26,000 to 20,000 years ago (Yamada, Chapter VII-2).

The upper cultural layer seems to have been laid down not so long after the fall of AT volcanic ash.

The lower cultural layer, although below the AT volcanic ash and older than the AT layer, cannot be uniquely dated stratigraphically. The measurements by carbon-14 dating of the lower cultural layer stay within the range of approximately about 25,000 years ago. The upper cultural layer can be dated somewhere between 22,700 and 20,400 years ago, and the lower cultural layer about 25,000 years ago.

### 4. LITHIC INDUSTRIES

#### a. Industry of Upper Cultural Layer

The assemblage of artifacts in the upper cultural layer totaled 524 pieces (Table 83), consisting of lithic tools, such as Kacusui points, piece-esquillee, drills, scrapers, and endscrapers; retouched and utilized flakes; flakes; chips; cores; and chopping tools. Most of the lithic artifacts were of a kind of andesite called sanukite and only a very few were of chert.

The assemblage of sanukite lithic artifacts was characterized by a small number of cores and a large number of chips. The small number of refitting materials found indicates that there was not much flake fabrication at the site. It seems that many of the sanukite flakes were brought in from outside the site but that the shaping of Kacusui points was done at the site.

Kacusui points are a typical tool that seem



to have appeared suddenly in southwestern Japan at around the time of the formation of the AT volcanic ash layer.

There were few backed knives, another typical tool of the late Paleolithic in southwestern Japan.

This is also true of other sites in the Osaka area containing Kakusui points; No backed knives of wide flakes are known from the Setouchi region.

The author thinks that there is a strong possibility that groups of people bringing the Kakusui points with them moved into southwestern Japan.

#### b. Industry of Lower Cultural Layer

##### 1) Artifacts of Lower Cultural Layer

The assemblage of artifacts in the lower cultural layer comprised a total of 2,353 pieces excavated in situ (Table 3), and about 200 pieces excavated after being moved. Among these 2,353 pieces, there was a combined total of 364 lithic tools, including backed knives, end scrapers, scrapers, drills, graters, piece-esquillee, and axes; retouched and utilized flakes; and flakes, chips, cores, edge-ground axes, choppers, hammer-stones, pounding stones, and anvils.

Of these lithic artifacts, 976 were sanukite, accounting for 41%, and 1,340, or 58%, were chert; the remainder were tuff, sandstone, iron-quartz, or rock crystal. There were 37 other artifacts, such as edge ground axes, choppers, pounding stones, hammerstones, and anvils. Thus, common kinds of tools in Japan's Paleolithic were included.

Sanukite, a kind of andesite occurring around volcanoes, is a stone material found mainly in the Sanuki region near the center of the Seto Inland Sea area (about 120 km from the Itai-Teragatani site) and on Nijozan Mountain, about 80 km to the southeast. None is found in the mountains near the site. On the other hand, sedimentary rock, such as chert, is easily found around the site as boulder stones in cliff dikes and river beds.

The backed knives can be divided into two categories: very small and of medium size. Their shape suggests that they were mounted on the ends of shafts. Many of the sanukite backed knives were very small and only a small number were of medium size. They were all of wide flakes with a length-to-width ratio lower than 1:1.5, and the striking platform side was

always shaped. Some were trapezoidal.

Many chert backed knives were of medium size and only a few were very small. Almost all were of long flakes with a length-to-width ratio higher than 1.5:1, or of somewhat longer conchoidal flakes, with the edge shaped. The backed knives made by shaping the striking platform side of wide flakes were retouched with the same procedure as that for sanukite knives made of wide flakes.

Sanukite end scrapers can be divided into two categories: round end scrapers and wide flake cores reformed into end scrapers. Chert end scrapers exhibited a variety of forms, including single end, round, and double end. Some chert drills were combinations with scrapers.

Sanukite graters were divided flakes with two burin blows.

Sanukite axes were flakes whose periphery was retouched to shallow depths. Edge-ground axes were long flakes of tuff whose edge was finely shaped before the cutting edge was ground.

Sanukite scrapers were either wide flakes with a bottom face, or conchoidal flakes. Chert scrapers had an arch-shaped, straight, concave, or other cutting edge.

Sanukite end scrapers, piece-esquillee, and drills were formed of various flakes. Many chert end scrapers, scrapers, piece-esquillee, drills, graters, retouched and utilized flakes were formed of either long flakes or slightly long conchoidal flakes.

Many sanukite retouched and utilized flakes were of wide flakes with a length-to-width ratio lower than 1:1.5, although some were of long flakes. Their sizes were approximately comparable to those of medium-sized sanukite backed knives. Chert retouched and utilized flakes were made of various forms of flakes.

Other flakes of sanukite include wide flakes with a length-to-width ratio lower than 1:1.5, small and fine flakes of almost equal length and width, core preparation flakes, and large flakes.

Other flakes of chert were large flakes into which raw stones were broken up, and various kinds of preparation flakes, and flakes of irregular shape.

There were 56 sanukite cores, all of which were used to produce wide flakes from raw flake cores. Chert cores numbered 104, almost all of which were of round gravel or block

material.

## 2) Fabrication Process of Tools and Flakes in the Lower Cultural Layer

The lithic assemblages in the lower cultural layer contained the products of two categories of fabrication technique: wide flakes and long conchoidal flakes.

### Technique of Wide Flake Fabrication.

Signs of the technique for wide flake fabrication were seen in the sanukite lithic artifacts only.

The basics of the technique for fabricating wide flakes that can be inferred from the refitting materials in the Itai-Teragatani site are:

1. Large plate or discoidal flakes were used for core material.
2. The core striking platform was set on the dorsal surface of the raw core, and the flaking face was set on an edge of the raw core.
3. Flaking was done so that flaking occurred to the ventral face of the raw flake core.
4. As the flaking work advanced, the flaking face and the platform might be interchanged, or the flaking face moved to the other edge.
5. The flakes produced were wide, with core bottom face.

Because non-refitted cores were also small, the flakes produced at the site with this technique, considering their size and technotypologic features, seem to correspond to very small sanukite backed knives.

There was no evidence of the initial process of breaking sanukite raw materials into large flakes to produce raw flakes for wide flake cores, indicating that all large flakes considered as raw materials for wide flake cores were brought to the site from outside. Also, the later process of producing raw flakes for lithic tools was limited to producing very small flakes only, indicating that many raw materials for medium-sized lithic tools were brought to the site from outside to supplement those found there. However, there was ample evidence of the final step: making raw flakes into final products.

### Technique of Long and Conchoidal Flake Fabrication

The technique of long and conchoidal flake fabrication is the basic technique for making chert lithic tools. Evidence of this technique was also found among the sanukite lithic tools, but far less frequently.

Every step in producing long and conchoidal flakes, from raw materials through tool fabrica-

tion, was performed at the site.

Examination of refitting materials from which the technique of fabricating raw flakes for lithic tools can be inferred has shown that a large number of flake fabrication techniques with the following features were present.

1. Except for very small raw materials, raw materials were gathered as large breccia or thick plate materials, then broken up into blocks for use as cores,
2. A bifacial flaking technique was used to make long or conchoidal flakes. Many cores were polyhedrons, such as cubes. Processing on a striking platform was rare.
3. Flakes produced were scarce in features that classify them into objective and processing flakes, and any flakes that proved to meet the purpose of use were employed as products.
4. Raw flakes for typical tools, such as backed knives, end scrapers, scrapers, lacked shape planning, but showed a high degree of processing and retouching.

## 3) Two Lithic Groups in the Lower Cultural Layer

The lithic groups in the lower cultural layer exhibited a marked difference between the shapes of raw materials between sanukite and chert lithic tools. The sanukite lithic tools were frequently made of wide flakes with core bottom face, while the chert tools were mainly of long or slightly long conchoidal flakes. There is another marked difference in that the wide flakes for the sanukite lithic group depended on outside locations for the initial flake fabrication steps, while the fabrication production steps for the long or conchoidal flakes for the chert lithic group were performed at the site. This indicates that the fabrication technique that was developed depended on the available material.

The composition of the sanukite and chert groups was very similar, although the quantity of end scrapers differed.

The two lithic groups in the lower cultural layer differed in (1) the raw materials used (from remote locations vs. local), (2) the fabrication technique used (wide flakes vs. long and conchoidal flakes), (3) the flake fabrication steps at the site (lack of the initial process vs. integrated fabrication), (4) the shape of the raw flakes (wide vs. long and conchoidal), and (5) the composition of the lithic tools. Because of these many differences, the groups can be struc-

turally divided into two categories. It is difficult to think that the two lithic groups of different structures resulted from a single paleolithic tribe using different raw materials and fabrication techniques to suit the occasion.

#### c. Chronology and Techno-traditional Lineage

The inhabitants of different areas in western Japan in the Late Paleolithic shared one attribute: the use of backed knives. However, marked local traditions had already been formed.

One well-known peculiar lithic tradition is the Setouchi technique for fabricating wide flakes.

The Setouchi paleolithic industries is limited to use with sanukite as the raw material. For this reason, and because of their technotypologic features, lithic tools produced by this technique are easy to identify and easy to distinguish from other lithic tools. There are many sites at which the fabrication of wide sanukite flakes was the mainstream concentrated within a 50-km radius of both Sanuki and Nijozan, the major sources of sanukite (Figure 512).

Wide flakes produced from raw flake cores were used as raw material for backed knives. The Existence of the Setouchi technique and Kou-type backed knives in the tradition is a sign of the most developed stage of the Setouchi paleolithic tradition. Kou typed backed knives started to spread to various parts of southwestern Japan a short while after the fall of the AT volcanic ash, but it is thought to have already existed somewhat earlier in the original areas of distribution. After the stage of the Setouchi paleolithic tradition represented by Kou type backed knives, the Setouchi technique declined. Non-wing-shaped, somewhat irregular wide flakes started to be produced, and backed knives became smaller.

Exactly when the Setouchi technique and Kou type backed knives first appeared cannot be postulated, but it seems that an original technique for making wide flakes existed early in the Late Paleolithic. Tool kits in the Setouchi region were invariably simple throughout the time; the typical tools were limited to backed knives and a small number of scrapers. Immediately after the fall of the AT volcanic ash, assemblages consisting mainly of drills appeared temporarily.

Regional paleolithic artifacts incorporating a blade technique in which local sedimentary

rock was frequently used, and a technique for fabricating long flakes are distributed in the mountains in the area around the Seto Inland Sea, and in a majority of areas in central Japan and the island of Kyushu. Sites of such paleolithic artifacts also exist in the Setouchi areas where Setouchi paleolithic artifacts are distributed, as if to enclose such areas.

Paleolithic artifacts in the Chugoku mountains underwent almost the same change as occurred in southwestern Japan. In the beginning of the Late Paleolithic, artifacts characterized by backed knives appeared. The basic technique was that of producing somewhat long flakes of irregular shape from polyhedral cores. The tool kit was simple, and limited to backed knives and some scrapers. With the development of the blade technique a little before the fall of the AT volcanic ash, raw materials for backed knives were narrowed down to blades and long flakes. The tool kit gradually became rich in kind, and end scrapers appeared. After the fall of the AT volcanic ash, the basic techniques behind the assemblages become confused.

In some instances, drills and wide flake backed knives were included. Thereafter, the blade technique was perfected, and geometric styles of backed knives of blade became a feature. Viewing southwestern Japan as a whole, there are regional differences, but no marked features, such as the different base techniques seen in the Setouchi paleolithic artifacts, is recognized, and it is difficult to make a distinction between each areas.

The sanukite lithic group in the lower cultural layer of the Itai-Teragatani site may be regarded as being Setouchi artifacts when judged by the shapes and techno-typologic features of the lithic artifacts of wide flakes and the refitting materials. Because it can be dated about 25,000 years BP by carbon-14 dating, it is the oldest among the Setouchi paleolithic groups.

Because the site is lacking evidence of a major part of the process of wide flake fabrication, and it is impossible to know about the actual process as a whole, it is not clear whether the Setouchi technique existed in the Setouchi region at that time. The tool kit differs from the simple one in the sites in the center of the Setouchi region in that end scrapers were included.

The artifacts in the upper cultural layer of

the site are the same as the Setouchi artifacts that occurred immediately after the fall of the AT volcanic ash in that they consist mainly of Kakusui points.

The chert lithic group in the lower cultural layer of the site has techno-typologic features of backed knives of long flakes and refitting materials that are almost entirely common with those of southwestern Japan lithic artifacts, and hence can be regarded as being part of the latter.

Although its technical features are those of the first half of the Paleolithic, the group can be

regarded as belonging to the late stage of the first half of the Late Paleolithic because it has an abundance of end scrapers. Radiocarbon dating supports that position.

Thus, the groups in the lower cultural layer of the site can be divided into two categories; Setouchi paleolithic for the sanukite lithic group, and Chugoku mountains and southwestern Japan paleolithic for the chert lithic group.

## 5. SITE STRUCTURE OF THE LOWER CULTURAL LAYER AND PALEO-ETHNOGRAPHIC CONTEXT

### a. Buried Microtopography of the Lower Cultural Layer and Distribution of Artifacts

About 3,670 m<sup>2</sup> of the lower cultural layer was excavated. Remains were excavated from the yellow clay and peat III directly beneath the AT volcanic ash layer.

Two different kinds of ancient land surfaces, marshy surface and dry surface, were discovered within the area under investigation. The excavated marshy ground covers an area of 1,388 m<sup>2</sup>. The topography of the adjacent areas indicates that the marshy ground extended in a southeastern direction, but it was not connected with a lake considered to have existed in the southern part of the Sasayama Basin (Nomura, '84). An abundant accumulation of moist peat consisting mainly of herbs was seen, and many buried trees with roots were excavated. An analysis of the diatomaceous content in the peat indicated that the peat in the site did not exist under a stable water surface, but was attributable to surface flows (Sato, '85).

The excavated dry surface portion extends in a tongue shape, in a southeastern direction into the marshy portion (Additional Plate (A.P) 17). No natural gravel inclusion was present in the yellow clay in the dry surface portion.

The lithic remains consisted of a total of 2,353 pieces excavated in situ (A.P 18).

Almost all the remains excavated were scattered over the entire area of the dry surface portion.

No remains were distributed in a valley on the east side. Some remains were distributed in the part of the marshy ground on the south near the southern end of the dry surface portion.

The distribution of remains can be divided

into a number of clusters. For coarse observation, the distribution can be divided into circles 10-odd meters in diameter. For finer observation, it can be divided into circles 2 to 3 meters in diameter.

After unifying some circles and discarding others, clusters of artifacts A through L were obtained (A.P 19).

Of paleolithic features, there 1 pit in A, 4 pits in B+C2-3, and 1 pit in Ja. Of them, one (A.P 19-P3) may be that of a dwelling. The number of paleolithic features is not large, but there is the possibility of destruction over the years due to burial. There are 4 charcoal clusters in the marshy ground.

As the lithic groups in the lower cultural layer include sanukite and chert groups belonging to different systems, observations are made below for each raw lithic material. The distribution of the sanukite lithic group (A.P 20) shows that lithic tools, though seen in each concentration, are abundant in A, D+C1-10UT, H, Ja, and Jb in particular. There are more seen in the southern part of the dry surface portion. The distribution of the chert lithic group (A.P 21) is concentrated in the northern part of the dry surface portion. Concentrations of a high degree are A, B+C2-3, D+C1-10UT, Ea, and Eb. They form a ring with a blank area at the center. Some are sporadically distributed in Ja, Jb, and K in the southern part of the dry surface portion as well.

The tool kit for each concentration of lithic remains is given in Table 23 · 25 · 27.

### b. Substructure of the Lower Cultural Layer

The simultaneity of the sanukite lithic group and the chert lithic group can be demon-

strated by the fact that both occur in every cluster of lithic remains no matter whether chert or sanukite tools prevail there. The centers of the concentrations agree in many cases. Both lithic groups may be considered to have occurred exactly at the same archaeological time.

It is interesting to note that the chert lithic tools are distributed mainly over the northern half, in contrast to the sanukite tools which are distributed over almost the whole area.

If either lithic group had been alone, it would be natural to occupy the center of the tongue-shaped area of dry surface portion. It is reasonable to think that the reason for the uneven distribution of the chert lithic group was to avoid the sanukite lithic group on the south.

Next, how typical tools, and retouched and utilized flakes are distributed, is considered. In order to find the correlation between each kind of lithic tool for each lithic material, the probability of one kind of lithic tool being adjacent to another was statistically found (Table 40). If the spatial distribution of each kind has anything to do with the other in terms of fabrication, use or disposal, the probability will accordingly increase or decrease, and how much the probability is above or below the general value for the site will indicate the degree of relationship between each kind. The value of the test for being adjacent adopted is within 2 meters. The general value for the site is 1, and the degree of relationship increases as the difference from 1 increases. A dendrogram was constructed based on the statistical results (Figure 364).

The degree of relationship between each kind shows a structure of two different lithic groups. The fact that sanukite end scrapers, which should belong to the sanukite lithic group, are included in chert lithic group clusters shows that the scrapers are included in the chert rather than the sanukite group, implying that they should not be included in the assemblage of the sanukite tool kit.

The reason the clusters of sanukite lithic group are more marked is that they are concentrated in the northern half. The sanukite and chert lithic groups, though occurring at the same time, can be separated into those belonging to different systems with different distribution patterns.

The component ratio of the tool kit of each concentration of remains is examined in Figure 325.

Next, let us observe the distribution of the refitting materials. The distribution of refitting materials is considered an indication of the fabrication, transfer, utilization, and discarding of lithic tools. It was easy to discover refitting materials for the chert tools, in which it is easy to see the characteristics of their lithic material, whereas it was difficult with the sanukite tools, which are far less characteristic. There was a large difference between the two kinds of lithic material in the ratio of refitting materials discovered: that for the chert lithic group was about 30%, and that for the sanukite group, about 15%.

The sharing of sanukite and chert refitting materials among clusters is summarized in Figure 415. There are two groups of concentrations, A through G, and H, Ja and Jb, in each of which refitting materials are shared. This indicates a north/south structure to the movement of lithic assemblages.

#### c. Paleo-ethnographic Context of the Site

Based on the assemblages of the two (chert and Sanukite) lithic groups in the lower cultural layer, the fabrication process involved, the uneven distribution of the remains, the proximity between each tool kind found from the correlation of distribution between each tool kind, and the distribution of the refitting materials, the following can be surmised:

- (1) Two distinct paleolithic groups, one from the Setouchi region and one from the Chugoku Mountain region,
- (2) coexisted in exactly the same settlement, fully aware of the other's existence.
- (3) The Chugoku Mountain group lived in the northern half of the settlement, and the Setouchi group lived in the southern half.
- (4) Some kind of collaboration occurred because the tools of both groups were found mixed together.

Based on the above surmise, a landscape of the settlement represented by the lower cultural layer of the Itai-Teragatani site is outlined below.

Any concentration of remains occupies a space of 10 to 15 meters in diameter, and some spears, and shaping and retouching tools are available.

Because the conditions of the remains in the site are poor, it is difficult to identify the position of any specific dwelling or fireplace, but a concentration where there is a certain space and a

tool kit available is likely to be a spatial unit corresponding to a household.

In the case of the Chugoku mountains group, households can be considered to have lived in a total of three concentrations of remains A, B+C2-3, and F, where tool fabrication was prolific. Concentrations Ea and Eb, separated by a blank zone where no remains were distributed, were dumping places or joint-operation stations. The landscape was that of a ring-shaped village. The household unit at concentration A was located at the highest point in the site, somewhat away from the other households, but commanding a fine view. It did not associate with the other household units to the extent that refitting materials were exchanged, but did collaborate with them at the working and discarding spaces Ea and Eb. Household unit A, of such a higher standing, may have been that of the leader of the group. The other two household units associated on equal terms. Compared to A, they were inferior in location, and based on the plan view of the distribution of tools and the quantity of lithic remains, they were household units consisting of general members of the group.

In the case of the Setouchi group, the distribution of remains is not concentrated, and the contents of the tool kits were poor, and the correlation between each tool kind low. Thus, it is difficult to estimate the number of household units. Two concentrations, H and Ja-Jb, may have been unified to form one household unit, or they may have formed a total of two or three units. The information available is too scarce to reconstruct an organic relationship between the three concentrations.

There may have been one household unit in concentration D+C1-10UT. The ratios of chert and sanukite materials are similar, and the location is adjacent to that of the Chugoku Mountain group.

If the sanukite and chert assemblage indicated the component ratio of members from different groups, the household unit would have been a new one consisting of a mixture of members from the two groups. The tool kit contained somewhat more sanukite tools than chert tools.

Concentration K is evidence of some subsistence activity by the Chugoku mountains group in marshy portion.

There is a high possibility that sanukite end scrapers, and sanukite lithic materials, such as wide flakes, in six concentrations: A, B+C2-3, Ea, Eb, F, and K were presented to the Chugoku mountains group, who retouched them. This present of sanukite tools and materials, manuported over 80 kilometers, must have been rare lithic raw materials for the group. The Chugoku mountains group briskly produced lithic tools from an abundance of local raw lithic materials. It even made use of sanukite raw materials. Superior household unit A had the largest quantity of sanukite tools among the members of the Chugoku mountains group.

Chert was an easily available sedimentary rock, even in the center of the Setouchi region. The Setouchi group stuck to the sanukite materials they brought with them to the site, and scarcely accepted the fabrication of lithic tools of chert.

The group was cautious and conservative in sanukite lithic fabrication because of the limited supply of materials they had.

There were no remains of animal or vegetable food in the lower cultural layer of the site, and details of their subsistence activities are unknown. The remains of lithic implements are not *adequate enough for them to have lived* there for an extended period of time.

## 7. CLOSING

A landscape of the Itai-Teragatani site in the lower cultural layer period is shown in Figure 513 based on a reconstruction of the vegetation and the structure of the village.

After a general description of the environment of the Itai-Teragatani site, the author examined the contents of the lithic groups and the distribution of remains in the lower cultural

layer, while raising certain questions about life in those days.

The author believes that the picture of the site drawn after the interpretation that the correspondence between lithic materials and the fabrication techniques as representing the specific group using them, and the demonstration that the two groups coexisted, is representative

of one aspect of Paleolithic society. However, the Itai-Teragatani site is a basic site for the study of the Paleolithic in Japan and the picture drawn by the author is not meant to reject a variety of interpretations that may appear in the future. The author looks forward to lively discussion about the site.

With the superintendence of Mr. Tomio MIZUGUCHI, Mr. Shigeki ICHIHASHI, Mr. Kazuhiro KISHIMOTO and Archaeological Research Center of Hyogo Prefecture, this report of excavation at Itai-Teragatani was edited and mainly written by Mr. Takuya YAMAGUCHI. Contributors of archaeological part are the following: Mr. Tomio MIZUGUCHI, Mr. Sigeki ICHIHASHI, Mr. Kazuhiro KISHIMOTO, Mr. Takuya YAMAGUCHI, Mr. Toshiyuki KUDO, Mr. Sinji MIZUSHIMA, Mr.

Kazuya KUNII, Miss Michiko HOSOKAWA, Miss Hiroko WATANABE, Miss Ariko KAWATA, Miss Kiwako SHINDO, Mr. Katsuhiro KUBO, Miss Shiori SADA, Miss Tomoko TAKIGAWA. Contributors of natural scientific part: Mr. Shingo TANAKA, Mr. Osamu YAMADA, Mr. Ryotaro NOMURA, Mr. Tetsuo WARASHINA, Mr. Takenobu HIGARHIMURA, Mr. Mutsuhiko MINAKI, Mr. Nobuo OHI, Mr. Syuichi NOSHIRO, Mr. Keizo TAKEMURA, Mr. Toru DANHARA, Mr. Tetsuya AOKI.

This report will be distributed by department of publishing, Archaeological Research Center of Hyogo Prefecture; 2 Aratacyo, Hyogoku, KOBE 653 JAPAN.

(Takuya YAMAGUCHI)

## 引用・参考文献

- 青崎和憲他 1981 「加栗山遺跡」〔九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書V〕
- 阿子島香 1990 「石器の使用痕」
- 安里進 1987 「南花田遺跡の火山灰分析による層序の検討」〔火山灰と考古学をめぐる諸問題〕
- 旭慶男・宮田栄二 1987 「石橋遺跡」〔横建遺跡ほか7遺跡〕
- 安斎正人 1986 「先史学の方法と理論（1）」〔旧石器考古学〕第33号
- 安斎正人 1986 「先史学の方法と理論（2）」〔旧石器考古学〕第34号
- 安斎正人 1987 「先史学の方法と理論（3）」〔旧石器考古学〕第35号
- 安斎正人 1987 「先史学の方法と理論（4）」〔旧石器考古学〕第36号
- 安斎正人 1990 「無文字社会の考古学」
- 安森政雄 1986 「先土器時代の石器と地域」〔岩波講座 日本考古学〕第5巻
- 石田志郎・笹嶋貞雄・横山卓雄・竹村恵二 1984 「近畿・中国地方の遺跡に関連する火山灰層」〔古文  
化財の自然科学的研究〕
- 一瀬和夫他 1991 「南河内における旧石器時代の調査」
- 稲田孝司 1977 「旧石器時代の小集団について」〔考古学研究〕第24巻第2号
- 稲田孝司 1984 「旧石器時代武蔵野台地における石器石材の選択と入手過程」〔考古学研究〕第30巻第4号
- 稲田孝司 1986 「恩原遺跡」〔岡山県史〕第18巻
- 稲田孝司 1986 「中国地方旧石器文化の諸問題」〔岡山大学文学部紀要〕
- 稲田孝司他 1988 「恩原遺跡」
- 妹尾周三他 1989 「冠遺跡群—D地点の調査—」
- 岩崎泰一他 1986 「下触牛伏遺跡」
- 磐田市教育委員会編 1989 「匂坂上4遺跡発掘調査報告II」
- 牛ノ浜修 1982 「木場A—2遺跡」〔九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書VII〕
- 牛ノ浜修・宮田栄二 1985 「成岡遺跡II」
- 梅本健治・三枝健二 1983 「冠遺跡」〔中国自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告4〕
- 江本直編 1986 「伊野遺跡」〔熊本県旧石器時代調査報告書〕
- 江本直編 1986 「石飛東遺跡」〔熊本県旧石器時代調査報告書〕
- 岡本勇 1986 「先土器・縄文時代の食料生産」〔岩波講座日本考古学〕
- 緒方勉・古森政次 1980 「下城遺跡II」
- 緒方勉・田中寿夫 1979 「下城遺跡I」
- 奥村吉信 1987 「東日本のベン先形ナイフ形石器を伴う石器群」〔旧石器考古学〕第35巻
- 小野昭 1976 「後期旧石器時代の集団関係」〔考古学研究〕第23巻第1号
- 織笠昭 1987 「殿山技法と国府型ナイフ形石器」〔考古学雑誌〕第72巻第4号



## 引用・参考文献

- 加藤晋平 1970 「先土器時代の歴史性と地域性」『郷土史研究と考古学』
- 加藤稔 1975 「越中山遺跡」『日本の旧石器文化 2』
- 梶原 洋 1981 「第2、第3、第4遺物集中地点の石器群の使用痕分析」『座散乱木遺跡発掘調査報告書II』
- 鎌木義昌 1957 「香川県井島遺跡」『石器時代』第4号
- 鎌木義昌・小林博昭 1986 「戸谷遺跡」『岡山県史』第18巻
- 木崎康弘他 1987 「狸谷遺跡」
- 木崎康弘他 1986 「大丸・藤ノ迫遺跡」
- 吉備町教育委員会他 1985 「土生池第二次発掘調査概報」
- 久保弘幸・藤田淳他 1990 「七日市遺跡」
- 久保弘幸・藤田淳・山口卓也 1987 「兵庫県における最近の旧石器時代遺跡調査の動向」『日本考古学協会1987年度大会発表要旨』
- 栗島義章 1983 「ブロックの構成と機能」『多聞寺前遺跡II』
- 栗島義章 1986 「先土器時代遺跡の構造的な研究序説」『土曜考古』第11号
- 栗島義章 1987 「先土器時代における移動と遺跡形成に関する一考察」『古代文化』第39巻第4号
- 栗島義章 1987 「先土器時代遺跡の研究」『考古学研究』第34巻第3号
- 栗島義章 1990 「遺跡分布から見る遺跡の構成」『石器文化研究』2
- 栗島義章 1989 「旧石器時代住居と遺物分布に就いて」『土曜考古』第14号
- 黒坪一樹 1983・84 「日本先土器時代における敲石類の研究」『古代文化』第35巻第12号・第36巻第1号
- 黒坪一樹・山尾典子 1981 「敲石類・磨製石斧をめぐる分布論」『野沢遺跡』
- 小林達雄・小田静夫・羽島謙三・鈴木正男 1971 「野川先土器時代遺跡の研究」『第四紀研究』第10巻第4号
- 近藤義郎 1976 「先土器時代の集団構成」『考古学研究』第22巻第4号
- 三枝健二他 1982 「地宗寺遺跡発掘調査報告」
- 坂田邦洋他 1980 「大分県岩戸遺跡」
- 坂本嘉弘他 1989 「松山A遺跡」『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書VI』
- 佐藤達夫 1969 「ナイフ形石器の編年的一考察」『日本の先史文化』
- 佐藤宏之 1988 「台形様石器研究序論」『考古学雑誌』第73巻第3号
- 佐藤良二 1980 「志方町・加西市および周辺の旧石器」『旧石器考古学』第21号
- 清水宗昭・高橋信武・柳田俊雄他 1980 「岩戸遺跡発掘調査概報」
- 清水宗昭・高橋信武・柳田俊雄他 1986 「岩戸遺跡」
- 清水宗昭・栗田勝弘他 1985 「百枝遺跡C地区」
- 鈴木忠司 1980 「ブロックとユニット」『寺谷遺跡』

## 引用・参考文献

- 鈴木忠司 1981 「先土器時代遺跡の構造」『報告・野辺山シンポジウム』
- 鈴木忠司 1983 「旧石器人のイエとムラ」『季刊 考古学』第4号
- 鈴木忠司他 1980 「寺谷遺跡」
- 鈴木忠司他 1982 「野沢遺跡」
- 鈴木忠司 1984 「先土器時代の知識」
- 鈴木忠司 1988 「素描・日本先土器時代の食料と生業」『朱雀』第1集
- 石器文化研究会編 1989 「石器文化研究」1
- 石器文化研究会編 1990 「石器文化研究」2
- 石器文化研究会編 1991 「石器文化研究」3
- 芹沢長介・柳田俊雄 1978 「岩戸一考古学資料集2」
- 高松龍暉・山口卓也 1985 「但馬地方における旧石器について(1)」『兵庫考古』第13号
- 高松龍暉・山口卓也 1987 「但馬地方における旧石器について(2)」『兵庫考古』第21号
- 竹岡俊樹 1988 「香川県史」考古学資料編
- 橋昌信 1975 「宮崎県船野遺跡における細石器文化」『考古学論叢3』
- 橋昌信・清水宗昭・高橋信武 1982 「津留遺跡発掘調査概報」
- 橋昌信・牧尾義則・村上佳典 1983 「峠山遺跡」
- 田村隆 1989 「二項的モードの推移と巡回」『先史考古学研究』2
- 辻本崇夫 1987 「礫群の形成過程復原とその意味」『古代文化』第39巻第7号
- 戸沢充則 1968 「埼玉県砂川遺跡の石器文化」『考古学集刊』第4巻第1号
- 戸沢充則・安藤政雄 1975 「砂川遺跡」『日本の旧石器文化』第2巻
- 戸沢充則・安藤政雄 1974 「砂川先土器時代遺跡」
- 富成哲也・大船孝弘他 1978 「郡家今城遺跡発掘調査報告書」
- 同志社大学旧石器文化談話会 1975 「ふたがみ」
- 那須孝悌 1985 「先土器時代の環境」『岩波講座 日本考古学』第2巻
- 西住欣一郎他 1988 「鼓ヶ峰遺跡」
- 埋蔵文化財研究会鹿児島集會実行委員会編 1987 「加治屋園遺跡」『火山灰と考古学をめぐる諸問題』
- 春成秀爾 1976 「先土器・縄文時代の画期について(1)」『考古学研究』第22巻第4号
- 春成秀爾 1980 「明石市西脇遺跡の旧石器」『旧石器考古学』第21号
- 肥後考古学会 1985 「特集：熊本の旧石器文化」『肥後考古』第5号
- 平口哲夫・松井政信・樫田誠 1984 「福井県三国町西下向遺跡の横剥技法」『旧石器考古学』第28号
- 兵庫県教育委員会編 1985 「旧石器時代の人間と自然」
- 平井勝 1979 「野原遺跡群早風A地点」
- 藤野次史 1980 「使用痕有剥片」『寺谷遺跡』
- 藤野次史 1986 「ガガラ山西南麓地区の子備調査」『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報V』
- 藤野次史 1988 「西ガガラ遺跡第1地点」「西ガガラ遺跡第2地点」『広島大学統合移転地

## 引用・参考文献

- 埋蔵文化財調査年報VI]
- 藤野次史 1989 「鴻ノ巣遺跡」『広島大学統合移転地埋蔵文化財調査年報VII』
- 保坂康夫 1986 「先土器時代の礫群の分布とその背景」『山梨考古学論集I』
- 堀川純 1985 「小林河原遺跡採集の台形様石器」『岡山理科大学蒜山研究所研究報告』第11号
- 前田保夫 1985 「六甲アイランドの最終氷期相当層の花粉分析」『月刊地球』1985-6
- 間壁茂子 1968 「香川県坂出市櫃石島採集の石器」『倉敷考古館研究集報』第4号
- 麻柄一志 1982 「井島I型ナイフと立野ヶ原ナイフ」『旧石器考古』第24号
- 麻柄一志 1985 「局部磨製石斧を伴う石器群について」『旧石器考古学』第31号
- 麻柄一志 1986 「いわゆる立野ヶ原ナイフ形石器の基礎的整理」『旧石器考古学』第33号
- 町田洋・新井房夫 1976 「広域に分布する火山灰-始良Tn火山灰の発見とその意義」『科学』第46巻第6号
- 松尾吉高 1989 「老松山遺跡」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書10』
- 松沢重生・佐川正敏 1989 「平城宮出土の旧石器」『日本考古学協会第55回総会』
- 松藤和人 1985 「旧石器時代の石材移動をめぐって」『考古学と移住・移動』
- 松藤和人 1987 「西日本におけるAT下位の石器群」『国立歴史民族博物館研究報告』第13号
- 松藤和人・佐藤良二 1984 「香芝町桜ヶ丘第一地点第4次発掘調査概報」
- 松本英二 1985 「放射性炭素における年代測定」『シンポジウム旧石器時代の人間と自然』
- 森田克行 1981 「郡家川西遺跡 64-B・F地区の調査」『二上山シンポジウム-旧石器遺跡をめぐる諸問題』
- 安田喜恵 1980 「環境考古学事始」
- 矢島国雄 1977 「先土器時代遺跡の構造と遺跡群についての予察」『考古学研究』第23巻第4号
- 山口卓也 1983 「旧石器時代における移動について」『ヒストリア』第99号
- 山口卓也 1988 「旧石器時代集落の周辺I」『網干善教先生華甲記念考古学論集』
- 山口卓也 1990 「遺跡の景観と視界」『阡陵』
- 山口卓也 1991 「近畿地方における旧石器時代遺跡の立地」『関西大学考古学等資料室紀要』
- 山口卓也・久保弘幸・藤田淳 1989 「丹波地方西部における旧石器時代集落」『第四紀研究』第27巻第4号
- 山下秀樹 1982 「第IX章 第5節ユニットの設定」(鈴木忠司編)『野沢遺跡』
- 山下秀樹他 1985 「広野北遺跡」
- 山下秀樹 1988 「日本先土器時代遺跡における受熱石器の分布」『朱雀』第1集
- 山下秀樹・南博史他 1986 「溝口遺跡」
- 横山卓雄・壇原徹・山下透 1986 「温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定」『第四

引用・参考文献

紀研究』第25巻第1号

- 吉田英敏他 1987 『寺田・日野1』
- Binford, L. R 1983 :In Pursuit of the Past
- Boshinski, Gerhard 1979 :DER MAGDALENIEN-FUNDPLATZ GONNERSDORF Bd3;
- Gamble, Clive 1984 :The Palaeolithic Settlement of the Europe
- Leroi-Gourhan, A & M. Brezillon 1972 :Fouilles de Pincevent
- Orton, Clive 1980 :Mathematics in Archaeology;クライブ・オルトン著 小沢一雄・及川昭  
文訳 1987 『数理考古学入門』
- Hodder, Ian and Orton, Clive 1976 :Spatial Analysis in Archaeology;イアン・ホッターとクライ  
ブ・オルトン著 深沢百合子訳 『考古学における空間分析』
- Vita-Finzi, C & E. S. Higgs 1970 :Prehistoric economy in the Mount Carmel area of Palestine ;  
Site-catchment analysis. "Proceeding of the Prehistoric Society"

兵庫県文化財調査報告書 第96-1冊

## 板井寺ヶ谷遺跡

—旧石器時代の調査—

近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書XIV-1

### 考古学編

平成3年3月31日発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所  
神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5  
〒652 TEL (078) 531-7011

発行 兵庫県教育委員会  
神戸市中央区下山手通5丁目10-1  
〒650 TEL (078) 341-7711

印刷 光印刷株式会社  
神戸市中央区下山手通2丁目16-12  
〒650 TEL (078) 321-1551(代)